

佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書 1

—佐倉市御塚山・大林・大堀・西野・芋窪遺跡—

本 文

1 9 8 9

住宅・都市整備公団 首都圏都市開発本部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

佐倉市は印旛沼と、それに注ぐ大小の河川に育まれた沃野と、緑なす台地を背景とした「歴史の町」であります。その恵まれた自然環境に抱かれたこの地には、数万年もの昔から、様々な人々の生活のあとが残されております。

近年、佐倉市を含めた千葉県北西部は、京葉臨海工業地帯や新東京国際空港を背後に控え、また急速な交通網の整備も進められ、首都圏の新たな外郭部を形成する地域として、俄に注目を集めるようになりました。

住宅・都市整備公団では、このような趨勢にいち早く対応するため、長期的見通しをたて、県内各地での開発計画を推進してきました。この一環として、佐倉市南志津地区に土地区画整備事業が企画されることになりました。

千葉県教育委員会では、区画整理事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、昭和50年以降、住宅・都市整備公団をはじめ、関係諸機関との、慎重な協議を重ねてまいりましたが、遺跡の一部を公園、緑地に取り込み、現状保存を計る一方、それが困難な部分に関しては、やむをえず記録保存の措置を講じることになりました。

発掘調査は、千葉県教育委員会から指定を受け、財団法人千葉県文化財センターが、昭和57年度に着手し、昭和62年度までに大半の調査を終了いたしました。6年間にも及ぶ長期の調査になりましたが、この度、ようやく整理作業も終了し、御塚山遺跡他4遺跡の調査報告書を刊行する運びとなりました。

調査された諸遺跡からは、先土器時代の多量の石器や、縄文土器が出土しました。とくに、大林遺跡の細石器文化の石器群は注目されることと思われれます。また、近世の塚や、佐倉藩関係の土塁などもあり、台地に刻まれた悠久な時の流れを感じます。

本書が学術資料として、いささかの寄与をなしうると共に、市民の精神的な支えとして文化財保護思想の涵養に役立てば幸いです。

終わりにあたり、発掘調査から報告書の刊行まで、さまざまな御指導をいただいた、千葉県教育委員会をはじめ、住宅・都市整備公団、地元関係機関各位に、御協力のお礼を申し上げます。さらに、調査員と行を共にされた調査補助員の皆様にも心からの謝意を表したいとおもいます。

昭和63年9月

財団法人千葉県文化財センター

理事長 岩瀬良三

例 言

1. 本報告書は、住宅・都市整備公団による南志津土地区画整理事業に伴う、佐倉市御塚山(センターコード 221-013)、大林(221-014)、大堀(221-015)、西野(221-016)、芋窪(221-017)遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から本報告書作成に至る業務は、住宅・都市整備公団の委託を受け、千葉県教育庁文化課の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 発掘調査及び整理作業は下記のとおり実施された。

昭和57年度	調査部長	白石 竹雄	部長補佐	天野 努	班長	西山 太郎
	調査研究員	野口 行雄		岸本 雅人		
昭和58年度	調査部長	白石 竹雄	部長補佐	根本 弘	班長	西山 太郎
	調査研究員	野口 行雄		宮城 孝之		
昭和59年度	調査部長	鈴木道之助	部長補佐	岡川 宏道	班長	矢戸 三男
	調査研究員	野口 行雄		横山 仁		
昭和60年度	調査部長	鈴木道之助	部長補佐	岡川 宏道	班長	矢戸 三男
	主任調査研究員	野口 行雄		調査研究員	大野 康男	
昭和61年度	調査部長	鈴木道之助	部長補佐	岡川 宏道	班長	矢戸 三男
	主任調査研究員	野口 行雄				
昭和62年度	調査部長	堀部 昭夫	部長補佐	岡川 宏道	班長	大原 正義
	主任調査研究員	田村 隆				
昭和63年度	調査部長	堀部 昭夫	部長補佐	岡川 宏道	班長	西山 太郎
	班長代理	田村 隆				
4. 原稿執筆は、野口行雄、田村隆、大野康男、上守秀明が共同して行った。最終的な文責は各文末に示した。編集は田村隆が担当した。
5. 第1図地形図には、国土地理院著作発行、2万5千分の1「習志野」と「佐倉」を合成使用した。
6. 本文中の石器属性表の見方は第16表(116頁)末尾に凡例を付した。
7. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁文化課をはじめ、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部、同千葉北部開発事務所、佐倉市教育委員会、地元関係諸機関各位の御指導、御協力をいただきました。

本文目次

序文	
例言	
序章 調査の経緯と概観	1
A. 調査の経緯	1
B. 地理的環境	4
C. 調査の方法	6
第1章 御塚山遺跡	8
第1節 調査の概要	8
第2節 先土器時代	10
A. 第I文化層	10
B. 第II文化層	52
C. 第III文化層	63
D. 第I文化層の問題点	63
第3節 縄文時代	79
A. 陥し穴	80
B. 縄文時代の遺物	81
第4節 近世の遺構	81
第2章 大林遺跡	82
第1節 調査の概要	82
第2節 先土器時代	99
A. 第I文化層	99
B. 第II文化層 a	202
C. 第II文化層 b	215
D. 第III文化層	228
E. 第IV文化層	262
F. 第V文化層	325
G. 第VI文化層	328
H. 第VII文化層	417
I. 表面採集の遺物	419
第3節 縄文時代	423

A. 草創期初頭の石器群	423
B. 第6地点遺物包含層の調査	427
C. 各地点採集の石器	460
D. 第20地点の縄文土器	470
E. 土坑	473
第4節 歴史時代	483
A. 塚	483
B. 土手	486
C. 土坑と溝	489
第3章 大堀遺跡	490
第1節 先土器時代	490
A. 概要	490
B. 遺構と遺物	490
第2節 縄文時代	506
第4章 西野遺跡	508
第5章 芋窪遺跡	512
第1節 先土器時代	512
A. 概要	512
B. ブロックとその遺物	524
第2節 縄文時代以降の遺構と遺物	551
A. 縄文時代	551
B. 平安時代	552
C. 近世	552
小 結	552
付 節 主要石器解説	555
第6章 収束	568

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置(1)	2
第 2 図	遺跡の位置(2)	3
第 3 図	南志津地区全体図	5
第 4 図	グリッドの分割と呼称	7
御塚山遺跡		
第 5 図	御塚山遺跡の基本層序	8
第 6 図	御塚山遺跡全体図	9
第 7 図	第 1 ブロック遺物出土状況	11
第 8 図	第 1 ブロックの遺物垂直分布	12
第 9 図	第 1 ブロック石器実測図(1)	13
第 10 図	第 1 ブロック石器実測図(2)	14
第 11 図	第 2 ブロック遺物出土状況	17
第 12 図	第 2 ブロック石器実測図(1)	18
第 13 図	第 2 ブロック石器実測図(2)	19
第 14 図	第 3 ブロック遺物出土状況	23
第 15 図	第 3 ブロック石器実測図	24
第 16 図	第 3 ブロックの黒曜石製折断剝片	25
第 17 図	第 3 ブロックの黒曜石製剝片の長・幅分布	27
第 18 図	第 4 ブロック遺物出土状況	29
第 19 図	第 4 ブロック石器実測図(1)	30
第 20 図	第 4 ブロック石器実測図(2)	31
第 21 図	第 4 ブロック石器実測図(3)	32
第 22 図	第 4 ブロックの黒曜石製折断剝片	33
第 23 図	削器の折損と再生	34
第 24 図	第 5 ブロック遺物出土状況	35
第 25 図	第 5 ブロック石器実測図	36
第 26 図	第 6 ブロック遺物出土状況	38
第 27 図	第 6 ブロック石器実測図	39
第 28 図	第 6 ブロックの黒曜石製折断剝片	40
第 29 図	第 7 ブロック遺物出土状況	42

第30 図	第7ブロック石器実測図	43
第31 図	第8ブロック遺物出土状況	44
第32 図	第8ブロック石器実測図(1)	45
第33 図	第8ブロック石器実測図(2)	46
第34 図	第9・第10ブロック遺物出土状況	49
第35 図	第9ブロック石器実測図(1)	50
第36 図	第9ブロック石器実測図(2)	51
第37 図	第10ブロック石器実測図(1)	53
第38 図	第10ブロック石器実測図(2)	54
第39 図	第10ブロック石器実測図(3)	55
第40 図	第11ブロック遺物出土状況	57
第41 図	炉址・炭化物片・石器の分布	58
第42 図	第12ブロック遺物出土状況	60
第43 図	第12ブロック石器実測図	61
第44 図	第4地点単独出土の石器	61
第45 図	第13ブロック遺物出土状況	62
第46 図	第13ブロック石器実測図	63
第47 図	御塚山I _a 期の特徴器種一覧	64
第48 図	第1～第7ブロックの母岩別資料分布状況(1)	67
第49 図	第2～第7ブロックの母岩別資料分布状況(2)	68
第50 図	第2～第7ブロックの母岩別資料分布状況(3)	69
第51 図	第2～第7ブロックの母岩別資料分布状況(4)	70
第52 図	珪質頁岩8の接合状況	71
第53 図	安山岩4の接合状況	72
第54 図	御塚山遺跡第2地点の変遷	73
第55 図	復山谷遺跡W区III層の石器	76
第56 図	下総台地における小型石槍の変遷	77
第57 図	陥し穴	79
第58 図	縄文時代の遺物(土器)	80
第59 図	縄文時代の遺物(石器)	81
第60 図	土坑	81

大林遺跡

第61 図	大林遺跡の調査区とその呼称	82
-------	---------------	----

第 62 図	大林遺跡全体図	83
第 63 図	大林遺跡第 1 地点の概要	84
第 64 図	大林遺跡第 2 地点の概要	85
第 65 図	大林遺跡第 3 地点の概要	86
第 66 図	大林遺跡第 4 地点の概要	87
第 67 図	大林遺跡第 5 地点の概要	88
第 68 図	大林遺跡第 6 地点の概要	89
第 69 図	大林遺跡第 7 地点の概要	90
第 70 図	大林遺跡第 8 地点の概要	90
第 71 図	大林遺跡第 9 地点の概要	91
第 72 図	大林遺跡第 10 地点の概要	92
第 73 図	大林遺跡第 11 地点の概要	93
第 74 図	大林遺跡第 12 地点の概要	93
第 75 図	大林遺跡第 13 地点の概要	94
第 76 図	大林遺跡第 14 地点の概要	94
第 77 図	大林遺跡第 15 地点の概要	95
第 78 図	大林遺跡第 16 地点の概要	96
第 79 図	大林遺跡第 17 地点の概要	96
第 80 図	大林遺跡第 18 地点の概要	97
第 81 図	大林遺跡第 19 地点の概要	98
第 82 図	大林遺跡第 20 地点の概要	98
第 83 図	大林遺跡の基本層序	99
第 84 図	第 I 文化層細石核の分類	101
第 85 図	第 I 文化層の細石刃	102
第 86 図	第 1 ブロック細石刃の長・幅、幅・厚分布図	103
第 87 図	第 I 文化層細石核の母型	104
第 88 図	第 I 文化層構成 1 の剥片石器	104
第 89 図	第 I 文化層構成 2 の石核	105
第 90 図	第 I 文化層構成 2 の剥片石器	106
第 91 図	第 1 文化層構成 3 の石器組成	107
第 92 図	第 I 文化層の構造	108
第 93 図	大林遺跡第 1 ブロック遺物垂直分布	109
第 94 図	第 1 ブロック遺物出土状況	111

第95図	第1ブロック石器実測図(チャート6)	113
第96図	第1ブロック遺物の分布密度	114
第97図	第1ブロック母岩別遺物出土状況(1)	115
第98図	第1ブロック石器実測図(チャート7)	117
第99図	第1ブロック石器実測図(チャート8)	119
第100図	第1ブロック石器実測図(チャート9)	120
第101図	第1ブロック母岩別遺物出土状況(2)	121
第102図	第1ブロック石器実測図(チャート10)	122
第103図	第1ブロック石器実測図(チャート11)	122
第104図	第1ブロック石器実測図(チャート12)	122
第105図	第1ブロック石器実測図(チャート13)	122
第106図	第1ブロック母岩別遺物出土状況(3)	124
第107図	第1ブロック石器実測図(チャート14)	125
第108図	第1ブロック石器実測図(チャート15)	126
第109図	第1ブロック石器実測図(チャート16)	127
第110図	第1ブロック石器実測図(珪質頁岩21)	128
第111図	第1ブロック母岩別遺物出土状況(4)	129
第112図	第1ブロック石器実測図(珪質頁岩22)	130
第113図	第1ブロック石器実測図(珪質頁岩23)	130
第114図	第1ブロック石器実測図(珪質頁岩24)	130
第115図	第1ブロック石器実測図(珪質頁岩25)	131
第116図	第1ブロック石器実測図(珪質頁岩26)	131
第117図	第1ブロック石器実測図(珪質頁岩27)	131
第118図	第1ブロック母岩別遺物出土状況(5)	132
第119図	第1ブロック石器実測図(珪質頁岩28)	133
第120図	第1ブロック石器実測図(凝灰岩5)	134
第121図	第1ブロック石器実測図(凝灰岩6)	134
第122図	第1ブロック母岩別遺物出土状況(6)	135
第123図	第1ブロック石器実測図(凝灰岩7)	136
第124図	第1ブロック石器実測図(凝灰岩8)	136
第125図	第1ブロック石器実測図(凝灰岩9)	137
第126図	第1ブロック石器実測図(凝灰岩10)	137
第127図	第1ブロック母岩別遺物出土状況(7)	138

第128図	第1ブロック石器実測図(凝灰岩11)	139
第129図	第1ブロック石器実測図(凝灰岩12)	140
第130図	第1ブロック石器実測図(凝灰岩13)	141
第131図	第1ブロック母岩別遺物出土状況(8).....	142
第132図	第1ブロック石器実測図(凝灰岩14)	143
第133図	第1ブロック石器実測図(珪質粘板岩2)	143
第134図	第1ブロック石器実測図(珪質粘板岩3)	144
第135図	第1ブロック石器実測図(泥岩1)	144
第136図	第1ブロック石器実測図(安山岩18)	144
第137図	第1ブロック石器実測図(安山岩19)	145
第138図	第1ブロック安山岩製石器の重量別分布図.....	148
第139図	第1ブロック母岩別遺物出土状況(9-A)	146
第140図	第1ブロック母岩別遺物出土状況(9-B)	147
第141図	第1ブロック石器実測図(安山岩20-1)	150
第142図	第1ブロック石器実測図(安山岩20-2)	151
第143図	第1ブロック石器実測図(安山岩20-3)	152
第144図	安山岩20の長・幅、幅・厚分布.....	152
第145図	第1ブロック石器実測図(安山岩21-1)	153
第146図	第1ブロック石器実測図(安山岩21-2)	154
第147図	安山岩21の長・幅、幅・厚分布.....	157
第148図	第1ブロック石器実測図(安山岩22)	158
第149図	安山岩22の長・幅、幅・厚分布.....	159
第150図	第1ブロック石器実測図(安山岩23-1)	161
第151図	第1ブロック石器実測図(安山岩23-2)	162
第152図	安山岩23の長・幅、幅・厚分布.....	163
第153図	第1ブロック母岩別遺物出土状況(10).....	164
第154図	第1ブロック石器実測図(安山岩24)	165
第155図	第1ブロック石器実測図(安山岩25)	167
第156図	第1ブロック石器実測図(砂岩8)	167
第157図	第1ブロック石器実測図(砂岩9-1)	168
第158図	第1ブロック石器実測図(砂岩9-2)	171
第159図	砂岩9の長・幅、幅・厚分布.....	171
第160図	第1ブロック母岩別遺物出土状況(11).....	172

第161図	第1ブロック石器実測図(砂岩11)	173
第162図	第1ブロック石器実測図(砂岩20)	174
第163図	ホルンフェルス4の長・幅・幅・厚分布	175
第164図	第1ブロック母岩別遺物出土状況(12-A)	176
第165図	第1ブロック母岩別遺物出土状況(12-B)	177
第166図	第1ブロック石器実測図(ホルンフェルス4)	179
第167図	第1ブロック石器実測図(ホルンフェルス5)	181
第168図	ホルンフェルス5の長・幅・幅・厚分布	182
第169図	第1ブロック石器実測図(結晶片岩1)	183
第170図	第2ブロック遺物出土状況	189
第171図	第2ブロック石器実測図	190
第172図	第3ブロック遺物出土状況	191
第173図	第3ブロック石器実測図(1)	194
第174図	第3ブロック石器実測図(2)	195
第175図	第3ブロック石器実測図(3)	175
第176図	第4ブロック遺物出土状況	200
第177図	第4ブロック石器実測図	201
第178図	第5ブロック遺物出土状況	203
第179図	第5ブロック石器実測図	204
第180図	第6ブロック石器実測図	206
第181図	第6ブロック遺物出土状況	207
第182図	第7ブロック遺物出土状況	209
第183図	第7ブロック石器実測図(1)	211
第184図	第7ブロック石器実測図(2)	212
第185図	第8ブロック遺物出土状況	214
第186図	第8ブロック石器実測図	215
第187図	第7地点石器実測図	216
第188図	第9ブロック遺物出土状況	217
第189図	大林遺跡第9地点遺物石器垂直分布	218
第190図	第9ブロック石器実測図	219
第191図	第10ブロック遺物出土状況	221
第192図	第10ブロック石器実測図	223
第193図	第11ブロック遺物出土状況	225

第194図	石器垂直分布	226
第195図	第11ブロック石器実測図(1)	227
第196図	第11ブロック石器実測図(2)	228
第197図	第12ブロック遺物出土状況	229
第198図	第12ブロック石器実測図	230
第199図	第13ブロック遺物出土状況	232
第200図	第13ブロック石器実測図	232
第201図	第14ブロック遺物出土状況	234
第202図	第14ブロック石器実測図(1)	235
第203図	第14ブロック石器実測図(2)	236
第204図	第15ブロック遺物出土状況	237
第205図	第15ブロック石器実測図(1)	238
第206図	第15ブロック石器実測図(2)	239
第207図	第16ブロック遺物出土状況	242
第208図	第16ブロック石器実測図	243
第209図	第17ブロック遺物出土状況	244
第210図	第17ブロック石器実測図	245
第211図	第18ブロック遺物出土状況	247
第212図	第18ブロック石器実測図(1)	248
第213図	第18ブロック石器実測図(2)	249
第214図	第18ブロック石器実測図(3)	250
第215図	第14地点石器実測図	252
第216図	第19ブロック遺物出土状況	253
第217図	第19ブロック石器実測図	254
第218図	第20ブロック遺物出土状況	255
第219図	石器垂直分布	255
第220図	第20ブロック石器実測図(1)	257
第221図	第20ブロック石器実測図(2)	258
第222図	第9地点石器実測図	261
第223図	第23～第32ブロックの分布状況	265
第224図	第21ブロック遺物出土状況	263
第225図	第21ブロック石器実測図(1)	266
第226図	第21ブロック石器実測図(2)	267

第227図	第21ブロック石器実測図(3).....	268
第228図	第21ブロック石器実測図(4).....	269
第229図	第22ブロック遺物出土状況.....	271
第230図	第22ブロック石器実測図(1).....	272
第231図	第22ブロック石器実測図(2).....	273
第232図	第23ブロック遺物出土状況.....	274
第233図	第23ブロック石器実測図.....	275
第234図	大林遺跡第23～26・28ブロック遺物垂直分布.....	276
第235図	第24ブロック遺物出土状況.....	277
第236図	第24ブロック石器実測図.....	278
第237図	第25ブロック遺物出土状況.....	280
第238図	第25ブロック石器実測図(1).....	280
第239図	第25ブロック石器実測図(2).....	281
第240図	第26ブロック遺物出土状況.....	283
第241図	第26ブロック石器実測図.....	284
第242図	第26・第30ブロック石器実測図(メノウ7-1).....	285
第243図	第26・第30ブロック石器実測図(メノウ7-2).....	286
第244図	第27ブロック遺物出土状況.....	289
第245図	第27ブロック石器実測図.....	290
第246図	第28ブロック遺物出土状況.....	292
第247図	第28ブロック石器実測図(1).....	293
第248図	第28ブロック石器実測図(2).....	294
第249図	第28ブロック石器実測図(3).....	295
第250図	第5地点石器実測図.....	296
第251図	第29ブロック遺物出土状況.....	297
第252図	第29ブロック石器実測図.....	298
第253図	第30ブロック遺物出土状況.....	300
第254図	大林遺跡第30・32ブロック遺物垂直分布.....	301
第255図	第30ブロック石器実測図.....	301
第256図	第31ブロック遺物出土状況.....	303
第257図	第31ブロック石器実測図(1).....	304
第258図	第31ブロック石器実測図(2).....	307
第259図	第32ブロック遺物出土状況.....	306

第260図	第32ブロック石器実測図(1)……………	310
第261図	第32ブロック石器実測図(2)……………	311
第262図	第6地点石器実測図……………	312
第263図	第33ブロック遺物出土状況……………	313
第264図	第33ブロック石器実測図……………	314
第265図	第34ブロック遺物出土状況……………	315
第266図	第35ブロック遺物出土状況……………	317
第267図	第35ブロック石器実測図……………	318
第268図	第36ブロック遺物出土状況……………	320
第269図	第36ブロック石器実測図……………	321
第270図	第37ブロック遺物出土状況……………	322
第271図	大林遺跡第37ブロック遺物垂直分布……………	322
第272図	第37ブロック石器実測図……………	323
第273図	第38ブロック遺物出土状況……………	326
第274図	第38ブロック石器実測図……………	327
第275図	第39ブロック遺物出土状況……………	329
第276図	第39ブロック石器実測図……………	330
第277図	第40ブロック遺物出土状況……………	331
第278図	第40ブロック石器実測図……………	332
第279図	第41ブロック全体図……………	333
第280図	大林遺跡第41ブロック遺物垂直分布(1)……………	334
第281図	大林遺跡第41ブロック遺物垂直分布(2)……………	335
第282図	第41ブロック遺物出土状況(クラスターa)……………	335
第283図	第41ブロッククラスターaの石器実測図……………	336
第284図	第41ブロック遺物出土状況(クラスターb・c・e)……………	337
第285図	第41ブロッククラスターbの石器実測図……………	338
第286図	第41ブロッククラスターcの石器実測図……………	339
第287図	第41ブロッククラスターeの石器実測図……………	287
第288図	第41ブロック遺物出土状況(クラスターd・h・i)……………	341
第289図	第41ブロッククラスターdの石器実測図……………	339
第290図	第41ブロッククラスターhの石器実測図……………	345
第291図	第41ブロッククラスターiの石器実測図……………	346
第292図	第41ブロック遺物出土状況(クラスターf)……………	342

第293図	第41ブロッククラスター f の石器実測図	343
第294図	第41ブロック遺物出土状況 (クラスター g)	344
第295図	第41ブロッククラスター g の石器実測図	343
第296図	第41ブロック遺物出土状況 (クラスター j)	347
第297図	第41ブロッククラスター j の石器実測図	348
第298図	第41ブロック遺物出土状況 (クラスター k)	349
第299図	第41ブロッククラスター k の石器実測図	350
第300図	第41ブロック遺物出土状況 (クラスター l・p)	351
第301図	第41ブロッククラスター l の石器実測図	352
第302図	第41ブロッククラスター p の石器実測図	358
第303図	第41ブロック遺物出土状況 (クラスター m・n)	353
第304図	第41ブロッククラスター m の石器実測図	352
第305図	第41ブロッククラスター n の石器実測図	355
第306図	第41ブロック遺物出土状況 (クラスター o)	356
第307図	第41ブロッククラスター o の石器実測図	357
第308図	安山岩91における母岩消費システム	359
第309図	第41ブロック楔形石器の長・幅、幅・厚分布	360
第310図	第41ブロック石核構成	363
第311図	第41ブロックの器種構成	364
第312図	第41ブロックの石器実測図 (泥岩25)	368
第313図	第41ブロックの石器実測図 (珩質粘板岩5)	369
第314図	第41ブロックの石器実測図 (珩質頁岩99)	369
第315図	第41ブロックの石器実測図 (珩質頁岩103)	370
第316図	第41ブロックの石器実測図 (珩質頁岩104)	371
第317図	第41ブロックの石器実測図 (珩質頁岩105)	371
第318図	第41ブロック石器実測図 (珩質頁岩106)	372
第319図	第41ブロック石器実測図 (珩質頁岩107)	372
第320図	第41ブロック石器実測図 (珩質頁岩108)	372
第321図	第41ブロック石器実測図 (珩質頁岩111)	373
第322図	第41ブロック石器実測図 (珩質頁岩115)	374
第323図	第41ブロック石器実測図 (珩質頁岩116)	874
第324図	第41ブロック石器実測図 (珩質頁岩119)	375
第325図	第41ブロック石器実測図 (珩質頁岩120)	376

第326図	第41ブロック石器実測図 (珪質頁岩121)	377
第327図	第41ブロック石器実測図 (チャート45)	377
第328図	第41ブロック石器実測図 (珪化木1)	378
第329図	第41ブロック石器実測図 (安山岩90)	379
第330図	第41ブロック石器実測図 (安山岩91-1)	380
第331図	第41ブロック石器実測図 (安山岩91-2)	381
第332図	安山岩91の長・幅、幅・厚分布	382
第333図	第41ブロック石器実測図 (安山岩92)	384
第334図	第41ブロック石器実測図 (安山岩93)	385
第335図	安山岩93の長・幅、幅・厚分布	387
第336図	第41ブロック石器実測図 (安山岩94)	387
第337図	第41ブロック石器実測図 (安山岩96)	388
第338図	第41ブロック石器実測図 (安山岩98)	389
第339図	第41ブロック石器実測図 (安山岩99)	389
第340図	安山岩99の長・幅、幅・厚分布	390
第341図	第41ブロック石器実測図 (安山岩100)	391
第342図	安山岩100の長・幅、幅・厚分布	390
第343図	第41ブロック石器実測図 (安山岩104)	394
第344図	第41ブロック石器実測図 (安山岩107)	395
第345図	第41ブロック石器実測図 (安山岩109)	396
第346図	第41ブロック石器実測図 (安山岩110)	396
第347図	第41ブロック石器実測図 (安山岩111)	397
第348図	第41ブロック石器実測図 (流紋岩質凝灰岩2)	399
第349図	第41ブロック石器実測図 (流紋岩質凝灰岩3)	399
第350図	第41ブロック石器実測図 (流紋岩質凝灰岩4)	400
第351図	第41ブロック石器実測図 (流紋岩質凝灰岩5)	400
第352図	第41ブロック石器実測図 (流紋岩質凝灰岩8)	401
第353図	第41ブロック石器実測図 (流紋岩質凝灰岩9)	402
第354図	第41ブロック石器実測図 (流紋岩質凝灰岩10)	402
第355図	第41ブロック石器実測図 (流紋岩質凝灰岩12)	403
第356図	第41ブロック石器実測図 (流紋岩質凝灰岩13)	403
第357図	第41ブロック石器実測図 (流紋岩質凝灰岩14)	404
第358図	第41ブロック石器実測図 (流紋岩質凝灰岩16)	405

第359図	第41ブロック石器実測図（流紋岩質凝灰岩17）	406
第360図	第41ブロック石器実測図（流紋岩質凝灰岩18）	407
第361図	第41ブロック石器実測図（流紋岩質凝灰岩19）	407
第362図	第41ブロック石器実測図（流紋岩質凝灰岩20）	408
第363図	第41ブロック石器実測図（流紋岩質凝灰岩22）	409
第364図	第41ブロック石器実測図（流紋岩質凝灰岩23）	410
第365図	第41ブロック石器実測図（流紋岩質凝灰岩24）	410
第366図	第41ブロック石器実測図（流紋岩質凝灰岩25）	410
第367図	第41ブロック石器実測図（ホルンフェルス11）	412
第368図	第41ブロック石器実測図（ホルンフェルス12）	412
第369図	第41ブロックの主要母岩の分布状況	415
第370図	第42ブロック遺物出土状況	416
第371図	第42ブロック石器実測図	418
第372図	佐倉市向山谷津遺跡X層の石器群	419
第373図	単独出土の石器実測図(1)	421
第374図	単独出土の石器実測図(2)	422
第375図	縄文草創期の遺物分布状況	424
第376図	第6地点縄文草創期の石器(1)	425
第377図	第6地点縄文草創期の石器(2)	426
第378図	第6地点包含層の遺物（土器－1）	429
第379図	第6地点包含層の遺物（土器－2）	430
第380図	第6地点包含層の遺物（土器－3）	433
第381図	第6地点包含層の遺物（土器－4）	434
第382図	第6地点包含層の遺物（土器－5）	435
第383図	第6地点包含層の遺物（土器－6）	436
第384図	第6地点包含層の遺物（土器－7）	437
第385図	第6地点包含層の遺物（土器－8）	440
第386図	第6地点包含層の遺物（土器－9）	441
第387図	第6地点包含層の遺物（土器－10）	442
第388図	第6地点包含層の遺物（土器－11）	443
第389図	第6地点包含層の遺物（土器－12）	444
第390図	第6地点包含層の遺物（土器－13）	446
第391図	第6地点包含層の遺物（土器－14）	448

第392図	第6地点包含層の遺物（土器-15）	449
第393図	第6地点包含層の遺物（土器-16）	450
第394図	第6地点包含層遺物分布図（主要遺物-1）	451
第395図	第6地点包含層遺物分布図（主要遺物-2）	452
第396図	第6地点包含層遺物分布図（縄文土器-1）	453
第397図	第6地点包含層遺物分布図（縄文土器-2）	454
第398図	第6地点包含層遺物分布図（縄文土器-3）	455
第399図	第6地点包含層遺物分布図（縄文土器-4）	456
第400図	第6地点包含層遺物分布図（石器・礫）	458
第401図	第6地点包含層の遺物（石器-1）	461
第402図	第6地点包含層の遺物（石器-2）	462
第403図	第6地点包含層の遺物（石器-3）	463
第404図	第6地点包含層の遺物（石器-4）	464
第405図	第6地点包含層の遺物（石器-5）	465
第406図	第6地点包含層の遺物（石器-6）	466
第407図	第6地点包含層の遺物（石器-7）	467
第408図	第6地点包含層の遺物（土器-8）	468
第409図	大林遺跡各地点採集の石器	469
第410図	第20地点の縄文土器	471
第411図	陥し穴の長・幅・深さの分布状況	474
第412図	陥し穴の長幅分布	474
第413図	陥し穴(1)	478
第414図	陥し穴(2)	479
第415図	陥し穴(3)	480
第416図	陥し穴(4)	481
第417図	陥し穴(5)	482
第418図	1号塚の平・断面図	484
第419図	2号塚の平・断面図	485
第420図	大林遺跡の歴史時代	488
第421図	土坑	489
大堀遺跡		
第422図	大堀遺跡地形図	491
第423図	大堀遺跡試掘坑配置図・遺構配置図	492

第424図	大堀遺跡の基本層序	492
第425図	第1地点遺物分布図(A、B)	493
第426図	第1地点遺物分布図(A ₁ 、A ₂)	494
第427図	第1地点Aブロックの石器(1)	495
第428図	第1地点Aブロックの石器(2)	496
第429図	第1地点遺物分布図(B)	497
第430図	第1地点Bブロックの石器	497
第431図	第2地点遺物分布図	498
第432図	第2地点の石器(1)	502
第433図	第2地点の石器(2)	503
第434図	第2地点の石器(3)	504
第435図	陥し穴(1、2)	505
第436図	縄文土器	506

西野遺跡

第437図	西野遺跡地形図	508
第438図	西野遺跡の基本層序	509
第439図	西野遺跡試掘配置図・溝状遺構1、2セクション図・出土遺物	510

芋窪遺跡

第440図	芋窪遺跡地形図	513
第441図	芋窪遺跡試掘配置図・遺構配置図	514
第442図	芋窪遺跡の基本層序	515
第443図	器種別遺物分布図	516
第444図	石質別分布図	517
第445図	Aブロック遺物分布図	518
第446図	Aブロックの石器(1)	519
第447図	Aブロックの石器(2)	520
第448図	Aブロックの石器(3)	521
第449図	Aブロックの石器(4)	522
第450図	Aブロックの石器(5)	523
第451図	Bブロック遺物分布図	526
第452図	Bブロックの石器(1)	527
第453図	Bブロックの石器(2)	528
第454図	Bブロックの石器(3)	529

第455図	Cブロック遺物分布図	531
第456図	Cブロックの石器(1)	532
第457図	Cブロックの石器(2)	533
第458図	Cブロックの石器(3)	534
第459図	Dブロック遺物分布図	537
第460図	Dブロックの石器	538
第461図	E ₁ ブロック遺物分布図	541
第462図	E ₂ ブロック遺物分布図	542
第463図	Eブロックの石器(1)	543
第464図	Eブロックの石器(2)	544
第465図	Eブロックの石器(3)	545
第466図	Eブロックの石器(4)	546
第467図	Eブロックの石器(5)	547
第468図	Eブロックの石器(6)	548
第469図	地点外の遺物	551
第470図	土坑・縄文土器・縄文時代石器	551
第471図	1号住居跡・カマド・土器実測図	553
第472図	近世以降の遺物	554
第473図	A ₁ ブロック石器実測図(1)	560
第474図	A ₂ ブロック石器実測図	561
第475図	B ₁ ブロック石器実測図	562
第476図	Cブロック石器実測図	563
第477図	D ₁ ブロック石器実測図(1)	564
第478図	D ₂ ブロック石器実測図(2)	565
第479図	E ₁ ブロック石器実測図(1)	566
第480図	E ₂ ブロック石器実測図(2)	567

収 束

第481図	南志津地区先土器時代ブロックの時期別分布状況	569
第482図	南志津地区各遺跡先土器時代石器群の変遷	571
第483図	芋窪遺跡の楔形石器(右)とOEF(左)の長幅分布	570
第484図	遠山天ノ作遺跡における楔形石器の製作過程	573
第485図	南関東細石器石器群の構成とその変換	578

表 目 次

御塚山遺跡

第 1 表	第 1 ブロック遺物集計表	14
第 2 表	第 2 ブロック遺物集計表	20
第 3 表	第 3 ブロック遺物集計表	27
第 4 表	第 4 ブロック遺物集計表	34
第 5 表	第 5 ブロック遺物集計表	36
第 6 表	第 6 ブロック遺物集計表	37
第 7 表	第 7 ブロック遺物集計表	41
第 8 表	第 8 ブロック遺物集計表	47
第 9 表	第 9 ブロック遺物集計表	48
第 10 表	第 10 ブロック遺物集計表	55
第 11 表	第 11 ブロック遺物集計表	56
第 12 表	第 12 ブロック遺物集計表	59
第 13 表	第 13 ブロック遺物集計表	63
第 14 表	御塚山 I a 期の石器組成表	64

大林遺跡

第 15 表	第 1 ブロック遺物集計表	111
第 16 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 6)	116
第 17 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 7)	116
第 18 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 8)	118
第 19 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 9)	118
第 20 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 10)	119
第 21 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 11)	121
第 22 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 12)	123
第 23 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 13)	123
第 24 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 14)	125
第 25 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 15)	125
第 26 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 16)	127
第 27 表	第 1 ブロック遺物属性表 (珪質頁岩 21)	128
第 28 表	第 1 ブロック遺物属性表 (珪質頁岩 22)	130

第 29 表	第 1 ブロック遺物属性表 (珪質頁岩23)	130
第 30 表	第 1 ブロック遺物属性表 (珪質頁岩24)	130
第 31 表	第 1 ブロック遺物属性表 (珪質頁岩25)	131
第 32 表	第 1 ブロック遺物属性表 (珪質頁岩26)	131
第 33 表	第 1 ブロック遺物属性表 (珪質頁岩27)	131
第 34 表	第 1 ブロック遺物属性表 (珪質頁岩28)	133
第 35 表	第 1 ブロック遺物属性表 (凝灰岩 5)	134
第 36 表	第 1 ブロック遺物属性表 (凝灰岩 6)	136
第 37 表	第 1 ブロック遺物属性表 (凝灰岩 7)	136
第 38 表	第 1 ブロック遺物属性表 (凝灰岩 8)	137
第 39 表	第 1 ブロック遺物属性表 (凝灰岩 9)	137
第 40 表	第 1 ブロック遺物属性表 (凝灰岩10)	139
第 41 表	第 1 ブロック遺物属性表 (凝灰岩11)	140
第 42 表	第 1 ブロック遺物属性表 (凝灰岩12)	141
第 43 表	第 1 ブロック遺物属性表 (凝灰岩13)	141
第 44 表	第 1 ブロック遺物属性表 (凝灰岩14)	143
第 45 表	第 1 ブロック遺物属性表 (珪質粘板岩 2)	143
第 46 表	第 1 ブロック遺物属性表 (珪質粘板岩 3)	143
第 47 表	第 1 ブロック遺物属性表 (泥岩 1)	144
第 48 表	第 1 ブロック遺物属性表 (安山岩18)	145
第 49 表	第 1 ブロック遺物属性表 (安山岩19)	145
第 50 表	第 1 ブロック遺物属性表 (安山岩20)	149
第 51 表	第 1 ブロック遺物属性表 (安山岩21)	155
第 52 表	第 1 ブロック遺物属性表 (安山岩22)	157
第 53 表	第 1 ブロック遺物属性表 (安山岩23)	160
第 54 表	第 1 ブロック遺物属性表 (安山岩24)	166
第 55 表	第 1 ブロック遺物属性表 (安山岩25)	167
第 56 表	第 1 ブロック遺物属性表 (砂岩 8)	168
第 57 表	第 1 ブロック遺物属性表 (砂岩 9)	169
第 58 表	第 1 ブロック遺物属性表 (砂岩11)	170
第 59 表	第 1 ブロック遺物属性表 (砂岩20)	174
第 60 表	第 1 ブロック遺物属性表 (砂岩50)	174
第 61 表	第 1 ブロック遺物属性表 (ホルンフェルス 4)	175

第 62 表	第 1 ブロック遺物属性表 (ホルンフェルス 5)	181
第 63 表	第 1 ブロック遺物属性表 (結晶片岩 1)	183
第 64 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 17)	183
第 65 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 18)	183
第 66 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 19)	183
第 67 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 20)	184
第 68 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 21)	184
第 69 表	第 1 ブロック遺物属性表 (チャート 22)	184
第 70 表	第 1 ブロック遺物属性表 (砂岩 13)	184
第 71 表	第 1 ブロック遺物属性表 (砂岩 14)	185
第 72 表	第 1 ブロック遺物属性表 (砂岩 15)	185
第 73 表	第 1 ブロック遺物属性表 (砂岩 16)	185
第 74 表	第 1 ブロック遺物属性表 (砂岩 17)	185
第 75 表	第 1 ブロック遺物属性表 (砂岩 18)	186
第 76 表	第 1 ブロック遺物属性表 (砂岩 19)	186
第 77 表	第 1 ブロック遺物属性表 (粘板岩 2)	186
第 78 表	第 1 ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩 26)	186
第 79 表	第 1 ブロック遺物属性表 (粗粒安山岩 2)	187
第 80 表	第 1 ブロック遺物属性表 (粗粒安山岩 4)	187
第 81 表	第 1 ブロック遺物属性表 (粗粒安山岩 5)	187
第 82 表	第 1 ブロック遺物属性表 (流紋岩 2)	187
第 83 表	第 1 ブロック遺物属性表 (流紋岩 3)	187
第 84 表	第 1 ブロック遺物属性表 (流紋岩 4)	188
第 85 表	第 1 ブロック遺物属性表 (流紋岩 5)	188
第 86 表	第 1 ブロック遺物属性表 (流紋岩 22)	188
第 87 表	第 1 ブロック遺物属性表 (流紋岩 26)	188
第 88 表	第 2 ブロック遺物集計表	189
第 89 表	第 2 ブロック遺物属性表	190
第 90 表	第 3 ブロック遺物集計表	192
第 91 表	第 3 ブロック遺物属性表	197
第 92 表	第 4 ブロック遺物集計表	199
第 93 表	第 4 ブロック遺物属性表 (砂岩 9)	200
第 94 表	第 4 ブロック遺物属性表 (ホルンフェルス 4)	202

第95表	第4ブロック遺物属性表（ホルンフェルス5）	202
第96表	第5ブロック遺物集計表	205
第97表	第6ブロック遺物集計表	206
第98表	第7ブロック遺物集計表	208
第99表	第8ブロック遺物集計表	213
第100表	第9ブロック遺物集計表	216
第101表	第10ブロック遺物集計表	222
第102表	第11ブロック遺物集計表	226
第103表	第12ブロック遺物集計表	230
第104表	第13ブロック遺物集計表	231
第105表	第14ブロック遺物集計表	233
第106表	第15ブロック遺物集計表	239
第107表	第16ブロック遺物集計表	241
第108表	第17ブロック遺物集計表	246
第109表	第18ブロック遺物集計表	251
第110表	第19ブロック遺物集計表	253
第111表	第20ブロック遺物集計表	256
第112表	第21ブロック遺物集計表	262
第113表	第22ブロック遺物集計表	270
第114表	第23ブロック遺物集計表	275
第115表	第24ブロック遺物集計表	279
第116表	第25ブロック遺物集計表	282
第117表	第26ブロック遺物集計表	287
第118表	第27ブロック遺物集計表	288
第119表	第28ブロック遺物集計表	291
第120表	第29ブロック遺物集計表	298
第121表	第30ブロック遺物集計表	299
第122表	第31ブロック遺物集計表	302
第123表	第32ブロック遺物集計表	305
第124表	第33ブロック遺物集計表	313
第125表	第34ブロック遺物集計表	316
第126表	第35ブロック遺物集計表	316
第127表	第36ブロック遺物集計表	319

第128表	第37ブロック遺物集計表	324
第129表	第38ブロック遺物集計表	325
第130表	第39ブロック遺物集計表	330
第131表	第40ブロック遺物集計表	332
第132表	第41ブロック遺物集計表	336
第133表	クラスター a 遺物集計表	337
第134表	クラスター b 遺物集計表	338
第135表	クラスター c 遺物集計表	339
第136表	クラスター d 遺物集計表	340
第137表	クラスター e 遺物集計表	340
第138表	クラスター f 遺物集計表	342
第139表	クラスター g 遺物集計表	343
第140表	クラスター h 遺物集計表	345
第141表	クラスター i 遺物集計表	346
第142表	クラスター j 遺物集計表	348
第143表	クラスター k 遺物集計表	350
第144表	クラスター l 遺物集計表	350
第145表	クラスター m 遺物集計表	354
第146表	クラスター n 遺物集計表	355
第147表	クラスター o 遺物集計表	357
第148表	クラスター p 遺物集計表	358
第149表	第41ブロック母岩別遺物集計表	365
第150表	第41ブロック遺物属性表 (砂岩49)	367
第151表	第41ブロック遺物属性表 (砂岩56)	367
第152表	第41ブロック遺物属性表 (砂岩57)	362
第153表	第41ブロック遺物属性表 (砂岩58)	368
第154表	第41ブロック遺物属性表 (泥岩22)	368
第155表	第41ブロック遺物属性表 (泥岩23)	368
第156表	第41ブロック遺物属性表 (泥岩24)	368
第157表	第41ブロック遺物属性表 (泥岩25)	369
第158表	第41ブロック遺物属性表 (泥岩26)	369
第159表	第41ブロック遺物属性表 (珪質粘板岩5)	369
第160表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩99)	370

第161表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩101)	370
第162表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩102)	370
第163表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩103)	370
第164表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩104)	371
第165表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩105)	371
第166表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩106)	371
第167表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩107)	372
第168表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩108)	372
第169表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩109)	373
第170表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩110)	373
第171表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩111)	373
第172表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩112)	373
第173表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩113)	373
第174表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩114)	374
第175表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩115)	374
第176表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩116)	375
第177表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩117)	375
第178表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩119)	376
第179表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩120)	376
第180表	第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩121)	376
第181表	第41ブロック遺物属性表 (チャート45)	377
第182表	第41ブロック遺物属性表 (珪化木1)	378
第183表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩90)	379
第184表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩91)	382
第185表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩92)	384
第186表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩93)	386
第187表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩94)	387
第188表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩96)	388
第189表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩97)	388
第190表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩98)	388
第191表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩99)	389
第192表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩100)	392
第193表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩104)	394

第194表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩105)	395
第195表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩107)	395
第196表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩108)	395
第197表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩109)	396
第198表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩110)	396
第199表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩111)	396
第200表	第41ブロック遺物属性表 (安山岩不明)	397
第201表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩 1)	399
第202表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩 2)	399
第203表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩 3)	400
第204表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩 4)	400
第205表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩 5)	400
第206表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩 6)	401
第207表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩 7)	401
第208表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩 8)	401
第209表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩 9)	401
第210表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩10)	402
第211表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩11)	402
第212表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩12)	403
第213表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩13)	403
第214表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩14)	404
第215表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩15)	404
第216表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩16)	404
第217表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩17)	405
第218表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩18)	407
第219表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩19)	408
第220表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩20)	408
第221表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩21)	408
第222表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩22)	409
第223表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩23)	409
第224表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩24)	410
第225表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩25)	411
第226表	第41ブロック遺物属性表 (流紋岩15)	411

第227表	第41ブロック遺物属性表（流紋岩16）	411
第228表	第41ブロック遺物属性表（流紋岩17）	411
第229表	第41ブロック遺物属性表（流紋岩18）	411
第230表	第41ブロック遺物属性表（ホルンフェルス11）	412
第231表	第41ブロック遺物属性表（ホルンフェルス12）	412
第232表	第42ブロック遺物集計表	420
第233表	10D-33区周辺縄文草創期遺物集計表	423

大堀遺跡

第234表	第1地点Aブロック石器組成表	493
第235表	第1地点Aブロック石器計測表	499
第236表	第1地点Bブロック石器組成表	499
第237表	第1地点Bブロック石器計測表	500
第238表	第2地点石器組成表	500
第239表	第2地点石器計測表	501

芋窪遺跡

第240表	Aブロック石器組成表	519
第241表	Aブロック石器計測表	524
第242表	Bブロック石器組成表	525
第243表	Bブロック石器計測表	530
第244表	Cブロック石器組成表	535
第245表	Cブロック石器計測表	536
第246表	Dブロック石器組成表	539
第247表	Dブロック石器計測表	539
第248表	Eブロック石器組成表	540
第249表	Eブロック石器計測表	549

図版目次

- 図版 1 南志津地区空中写真
図版 2 御塚山遺跡空中写真
図版 3 御塚山遺跡 遺跡の景観(1) 遺跡の景観(2) 近世の溝
図版 4 御塚山遺跡 土坑 1 (1) 土坑 1 (2) 陥し穴 1
図版 5 御塚山遺跡 陥し穴 2 陥し穴 3
図版 6 御塚山遺跡 土層断面(1) 土層断面(2) 第 1 地点
図版 7 御塚山遺跡 第 2 地点(1) 第 2 地点(2) 第 3 地点
図版 8 御塚山遺跡 第 4 地点(1) 第 4 地点(2) 第 5 地点
図版 9 御塚山遺跡 第 1 ブロックの石器 第 2 ブロックの石器
図版 10 御塚山遺跡 第 3 ブロックの石器 第 4 ブロックの石器
図版 11 御塚山遺跡 第 5 ブロックの石器 第 6 ブロックの石器
図版 12 御塚山遺跡 第 7 ブロック・第 8 ブロックの石器 第 4 地点の石器
図版 13 大林遺跡空中写真
図版 14 大林遺跡 遺跡の景観(1) 遺跡の景観(2) 第 3 地点
図版 15 大林遺跡 第 4 地点 第 6 地点(1) 第 6 地点(2)
図版 16 大林遺跡 第 6 地点(3) 第 6 地点(4) 第 6 地点(5)
図版 17 大林遺跡 第 10 地点 第 11 地点 2 号塚の周溝 第 11 地点 2 号塚周溝の土層断面
図版 18 大林遺跡 第 14 地点 第 16 地点(1) 第 16 地点(2)
図版 19 大林遺跡 大塚 1 号塚
図版 20 大林遺跡 第 1 地点 陥し穴群全景 陥し穴 1 陥し穴 2
図版 21 大林遺跡 陥し穴 3 陥し穴 4 陥し穴 5
図版 22 大林遺跡 陥し穴 6 陥し穴 7 陥し穴 8
図版 23 大林遺跡 陥し穴 9 陥し穴 10 第 3 地点 陥し穴 土坑群全景
図版 24 大林遺跡 陥し穴 11 土坑 1 土坑 2
図版 25 大林遺跡 陥し穴 12(1) 陥し穴 12(2) 陥し穴 14
図版 26 大林遺跡 陥し穴 15 陥し穴 16 陥し穴 17
図版 27 大林遺跡 陥し穴 18 陥し穴 19 陥し穴 20
図版 28 大林遺跡 第 2 地点 第 3 地点 第 II 文化層(1) 第 3 地点 第 II 文化層(2)
図版 29 大林遺跡 第 4 地点(1) 第 4 地点(2) 第 5 地点
図版 30 第 3 地点 第 VI・第 VII 文化層 第 3 地点 第 VII 文化層 貝の出土状況
図版 31 大林遺跡 第 6 地点(1) 第 6 地点(2) 第 6 地点(3)
図版 32 大林遺跡 第 8 地点 第 9 地点 (西側) 第 9 地点 (東側)

- 図版33 大林遺跡 第12地点 第14地点 第16地点(1)
- 図版34 大林遺跡 第16地点(2) 第16地点(3) 第17地点
- 図版35 大林遺跡 第18地点(1) 第18地点(2) 第18地点(3)・(4)
- 図版36 大林遺跡 第18地点(5) 第18地点(6) 第18地点(7)・(8)
- 図版37 大林遺跡 縄文土器
- 図版38 大林遺跡 縄文土器
- 図版39 大林遺跡 縄文土器
- 図版40 大林遺跡 縄文土器
- 図版41 大林遺跡 縄文土器
- 図版42 大林遺跡 縄文土器
- 図版43 大林遺跡 縄文土器
- 図版44 大林遺跡 縄文土器
- 図版45 大林遺跡 縄文土器
- 図版46 大林遺跡 縄文土器
- 図版47 大林遺跡 縄文土器
- 図版48 大林遺跡 縄文土器
- 図版49 大林遺跡 縄文土器
- 図版50 大林遺跡 縄文土器
- 図版51 大林遺跡 縄文土器
- 図版52 大林遺跡 縄文土器 第6地点縄文草創期の石器
- 図版53 大林遺跡 縄文時代の石器
- 図版54 大林遺跡 第1ブロックの石器(1)・(2)
- 図版55 大林遺跡 第1ブロックの石器(3)・(4)
- 図版56 大林遺跡 第1ブロックの石器(5)・(6)
- 図版57 大林遺跡 第1ブロックの石器(7)・(8)
- 図版58 大林遺跡 第1ブロックの石器(9)・(10)
- 図版59 大林遺跡 第1ブロックの石器(11)
- 図版60 大林遺跡 第1ブロックの石器(12)
- 図版61 大林遺跡 第1ブロックの石器(13) 第2ブロックの石器 第4ブロックの石器
- 図版62 大林遺跡 第3ブロックの石器 第5ブロックの石器
- 図版63 大林遺跡 第7ブロックの石器 第9ブロックの石器
- 図版64 大林遺跡 第8ブロックの石器 第10ブロックの石器 第11ブロックの石器
- 図版65 大林遺跡 第11・第18ブロックの石器 単独出土の石器
- 図版66 大林遺跡 第12ブロックの石器 第14ブロックの石器 第15ブロックの石器
- 図版67 大林遺跡 第16ブロックの石器 第9地点の石器 第17ブロックの石器 第18ブロックの石器
- 図版68 大林遺跡 第21ブロックの石器 第22ブロックの石器 第19ブロックの石器 第20ブロックの石器
- 図版69 大林遺跡 第30ブロックの石器 第29ブロックの石器 第31ブロックの石器(1)
- 図版70 大林遺跡 第31ブロックの石器(2)
- 図版71 大林遺跡 第32ブロックの石器 第33ブロックの石器 第35ブロックの石器 第36ブロックの石器 第37ブ

ロックの石器

ブロックの石器(3)

図版72 大林遺跡 第41ブロックの石器(1)・
(2)

図版89 芋窪遺跡 接合資料(1)

図版73 大林遺跡 第41ブロックの石器(3)・
(4)

図版90 芋窪遺跡 接合資料(2)

図版91 芋窪遺跡 接合資料(3)

図版74 大林遺跡 第41ブロックの石器(5)・
(6)

図版75 大林遺跡 第41ブロックの石器(7)
第38ブロックの石器 第40ブロック
の石器 第39ブロックの石器

図版76 大林遺跡 遺跡の景観 1号陥し穴
状土坑(1) 1号陥し穴状土坑(2)

図版77 大堀遺跡 2号陥し穴状遺構 第1
地点先土器時代遺物出土状況(1) 第
1地点先土器時代遺物出土状況(2)
第2地点先土器時代遺物出土状況

図版78 大堀遺跡 第1地点Aブロック 第
1地点Bブロック

図版79 大堀遺跡 第1地点Aブロック 第
2地点 第2地点接合資料

図版80 大堀遺跡 第2地点接合資料

図版81 西野遺跡 遺跡の景観 土層断面溝
状遺構

図版82 芋窪遺跡 遺跡の景観 調査状況
住居跡

図版83 芋窪遺跡 陥し穴状の土坑 先土器
時代遺物出土状況(1)・(2)

図版84 芋窪遺跡 Aブロックの石器(1)・(2)

図版85 芋窪遺跡 Bブロックの石器(1)・(2)

図版86 芋窪遺跡 Cブロックの石器(1)・(2)

図版87 芋窪遺跡 Dブロックの石器 Eブ
ロックの石器(1)

図版88 芋窪遺跡 Eブロックの石器(2) E

本 文

序章 調査の経緯と概観

A. 調査の経緯

確認調査

佐倉市南志津地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査は、上志津西野遺跡、井野町大林遺跡、上志津御塚山遺跡、上志津大堀遺跡、上志津芋窪遺跡の5遺跡の遺構・遺物の分布範囲把握のため昭和57年5月より昭和58年3月にかけて5遺跡の確認調査を実施した。さらに、遺構・遺物の分布範囲が、調査対象地外へ広がる可能性がある場合、文化課の指導を受け調査対象地をさらに拡張した。

a. 上志津西野遺跡

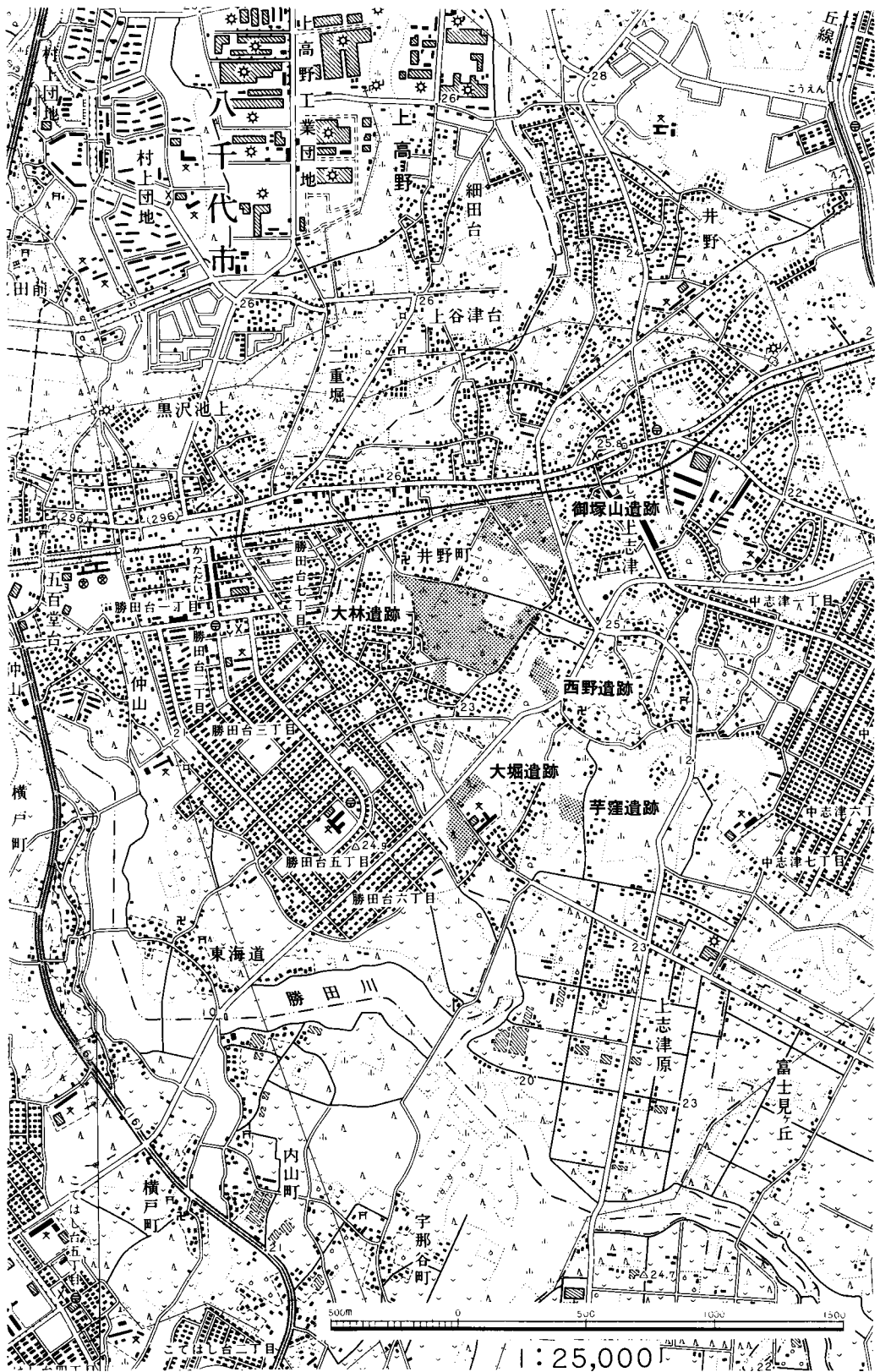
本遺跡は、佐倉市上志津西野1,573-1他に所在する。確認調査は昭和57年5月から同年6月にかけて、対象面積10,000㎡のうち上層については5%にあたる500㎡を実施し、下層については対象面積の2%にあたる200㎡を実施した。その結果、調査地区の西側地区より2条の溝状遺構が検出された。遺物は、2条の溝状遺構覆土内より縄文時代後期の土器片、須恵器片、陶磁器片が数点検出されたのみであり、その他の遺物としては、15Nグリッド周辺より天保通宝が1点表採されたのみであった。このために本調査へは移行せずに溝状遺構部の試掘坑拡張を行いセクション等の実測を実施して上志津西野遺跡の全ての調査を終了した。

b. 上志津御塚山遺跡

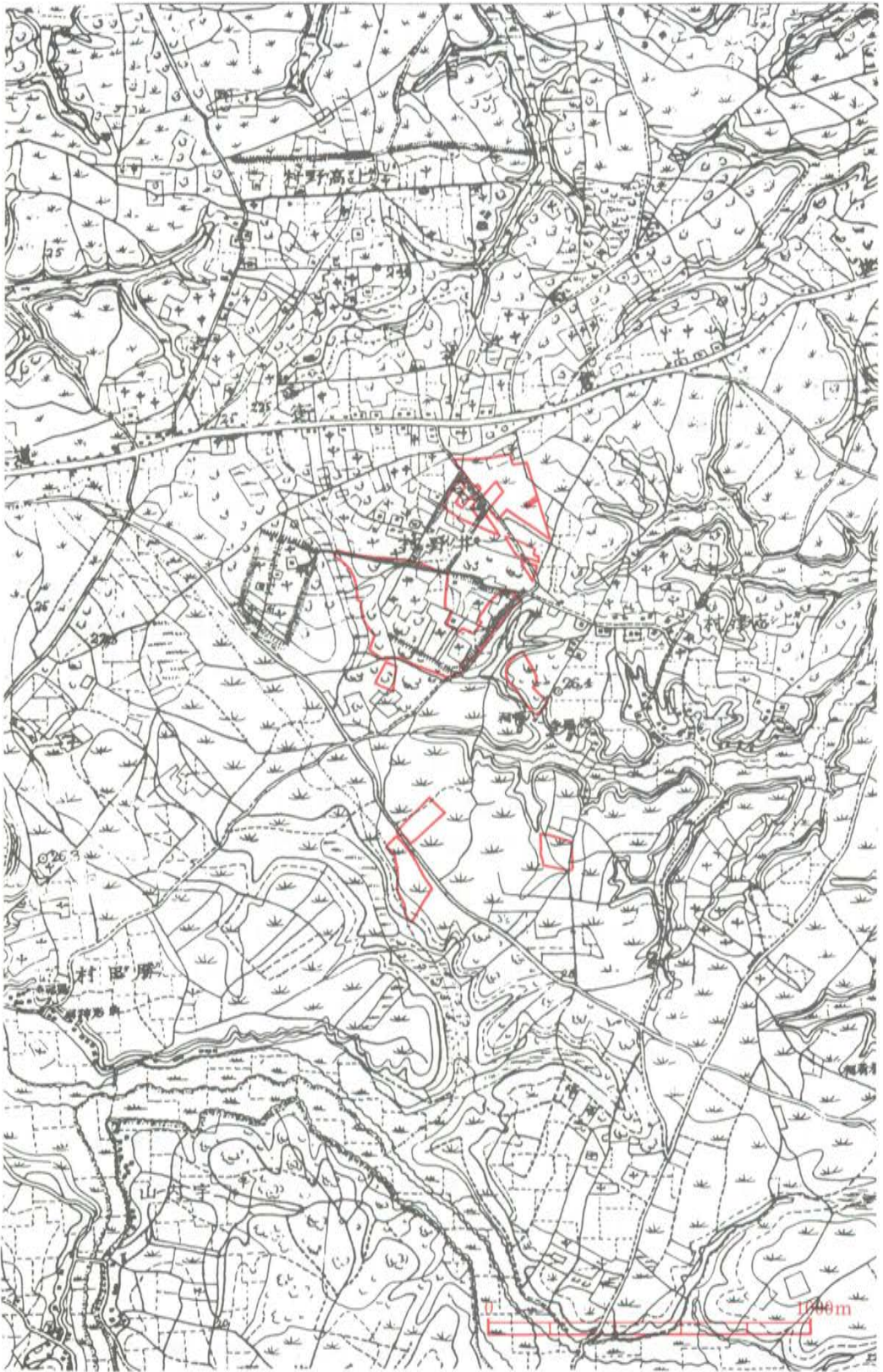
本遺跡は、佐倉市上志津御塚山1,606-1他に所在する。確認調査は、昭和57年6月から同年9月にかけて、対象面積51,207㎡のうち上層については、10%にあたる5,120.7㎡、下層については、対象面積の4%にあたる2,050㎡を実施した。その結果、先土器時代では、第Ⅲ～Ⅶ層中より5ヶ所の石器群が検出された。そのうち1ヶ所（第Ⅵ層）からは焼土跡と炭化材片の分布が見られ周辺から石器類も検出された。縄文時代の遺構は検出されなかったが、中期（阿玉台期）の土器片や石鏃などの石器類が検出された。なお先土器時代の石器群の分布が調査区東側より入り込む浅い谷を囲むような状況を呈しており、今回の調査対象地よりさらに西側に延びると思われたため、西側の隣接地10,000㎡を確認調査対象地として追加し昭和58年度以降に調査を実施した。その結果先土器時代の石器群1ヶ所、縄文時代の陥し穴状土壌2基、近世の土壌1基が検出された。

c. 井野町大林遺跡

本遺跡は、佐倉市井野町大林9-2-1他に所在する。確認調査は、昭和57年9月から昭和58年2月にかけて、対象面積96,000㎡のうち上層については10%にあたる9,600㎡、下層については対象面積の4%にあたる3,840㎡を実施した。その結果、先土器時代石器群（第Ⅲ層～Ⅷ層）17ヶ



第1図 遺跡の位置(1) (国土地理院1:25,000地形図習志野・佐倉を合成)



第2図 遺跡の位置(2) (明治13年陸地測量部第一師管地方迅速測図2万分の1尺)

所、縄文時代では、陥し穴状土坑 2 基、撚糸文系土器包蔵地 1 ヶ所、そして近世の土塁、塚の周溝部等が検出された。先土器時代石器群は、調査対象地の北側と南側にも分布が広がる可能性があるため、両地区合わせて8,000㎡の調査対象地を拡張し、58年度以降に調査を実施した。

d. 上志津大堀遺跡

本遺跡は、佐倉市上志津大堀759他に所在する。確認調査は、昭和58年2月から同年3月にかけて対象面積26,000㎡のうち上層については10%にあたる2,600㎡、下層については対象面積の4%にあたる1,040㎡を実施した。調査区は道路により東西2つに分けられ、確認調査の結果、西側調査区より先土器時代石器群（VII層）2ヶ所、縄文時代の陥し穴状土坑1基、土坑1基、後期の土器包蔵地1ヶ所が検出された。

e. 上志津芋窪遺跡

本遺跡は佐倉市上志津芋窪802-1他に所在する。確認調査は、昭和58年3月に対象面積9,000㎡のうち上層については5%にあたる450㎡を、下層については対象面積の4%にあたる180㎡を実施した。その結果、調査区の南側より先土器時代石器群（第VI層）1ヶ所、縄文時代の陥し穴状土坑1基、平安時代の住居跡1軒が検出された。これらの遺構・遺物はさらに調査区外南側に延びる可能性が考えられたため、対象面積450㎡を拡張し、昭和59年4月に確認調査を実施したがナイフ形石器が単独でソフトローム層中より検出されたのみであった。

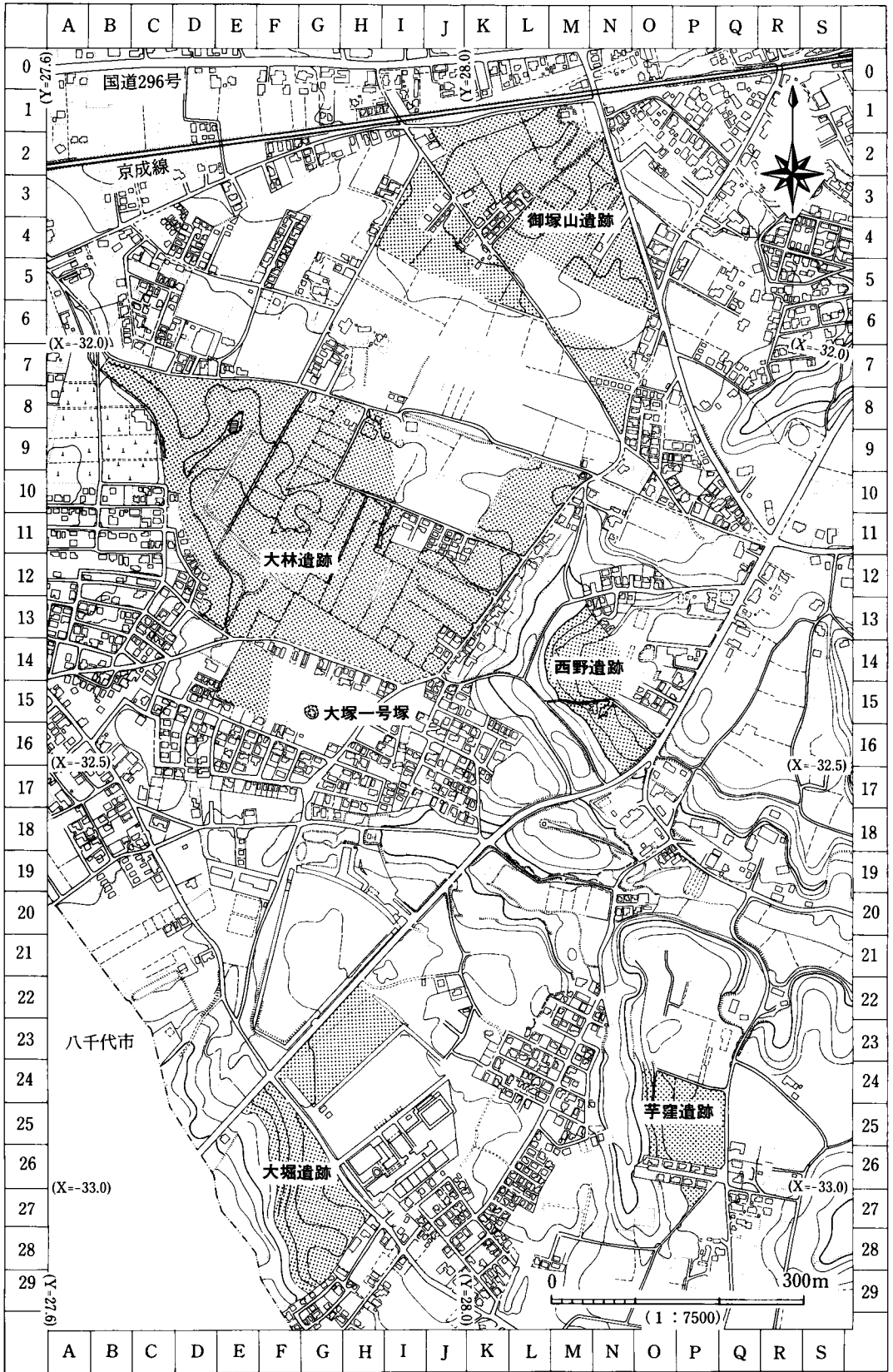
B. 地理的環境

南志津地区は、千葉県佐倉市上志津字御塚山1321-1他に所在する。

御塚山、大林、大堀、西野、芋窪の5遺跡がある南志津地区は、千葉県に広大に広がる下総台地の北部に当る北総台地のほぼ中央部に位置する印旛沼の南西部に所在する。南志津地区の東方には、四街道市栗山地区に水源をもち、佐倉市臼井地区を通して印旛沼に注ぎ込む手繰川、西方には、四街道市鹿放ヶ丘地区より勝田台地区を通り、かつては平戸川と称され、現在では開さく工事により新川と称されている印旛沼疏水路に合流する勝田川の2つの主要な河川が流れている。南志津地区は、この2つの主要水系の分水嶺部に位置している。そして、2つの河川に延びる支流により開析された支谷は、南志津地区周囲においては、いずれも浅く、幅の狭い規模の小さいものである。標高20mから30mの低平な台地が広く続いている。

南志津地区の5つの遺跡のうち、手繰川水系にあるものは、御塚山遺跡、西野遺跡である。勝田川水系にあるものは大堀遺跡であり、大林遺跡では、西方は勝田川水系に接し、東方は、手繰川水系に接している。昭和30年代からこの地域は東京のベッドタウンとして大規模な開発が行われてきており、現在の南志津地区周辺は、住宅街が密集している状況であり、当時の自然環境の面影はほとんど残されていない状況である。

御塚山遺跡 手繰川の支流の末端の浅い支谷が本遺跡を西方より東西に横断するように入り込んでいるが、ほとんど起伏のない平坦な地形を呈している。現況では京成電鉄の線路や住宅



第3図 南志津地区全体図

が建ち並んでいるため、かつての地形はほとんど残されていない。

大林遺跡 本遺跡も現況では、ほとんど起伏のない平坦な地形を呈している。この遺跡の西側は、手繰川の支流の末端の支谷に接し、また東側は勝田川の支流の支谷と接し、両水系の分水嶺部分となっている。また本遺跡は、江戸時代末期に武家屋敷の敷地であったため、その時代より人為的な地形の改変が行なわれていたと思われる。

大堀遺跡 勝田川の支流の末端の支谷と接している。この支谷はこの地区では現在見られるものの中では比較的深い谷となっている。しかし隣接地の勝田台地区は大住宅街と化しているため、この谷は現在では下水道として利用されるようになっている。

西野遺跡 手繰川の支流が本遺跡の東側に入り込んでおり、舌状の台地の先端近くに本遺跡は位置している。

芋窪遺跡 手繰川の支流の末端の支谷が西側に入り込んでいる。本遺跡はこの地区内においては比較的昔の面影がよく残された地区であり、かなり広い舌状台地の西側の傾斜部の一端に位置している。

C. 調査の方法

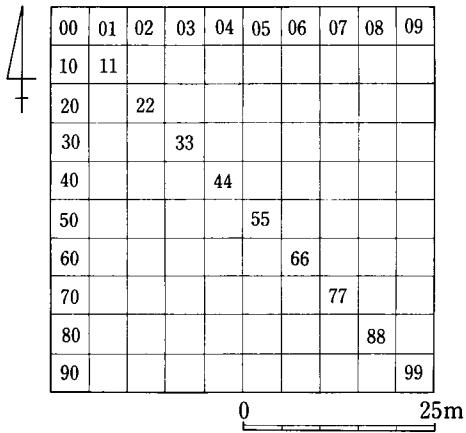
調査は、まず公共座標に基づいて50m×50mの大グリッドを5遺跡の調査対象区域を包括するように設定した。

50m×50mの大グリッドの名称は、西から東へAからSまで、北から南へ0から29までの記号を付して組み合わせる方法をとった。この大グリッドはさらに5m方眼の小グリッドにより100分割して、その名称は、最北列の西から東へ00から90まで、最北列の北から南へ00から09までの記号を付し、大グリッドと小グリッドの名称を組み合わせ、1A-00のようにグリッドを呼称した。

確認調査は、小グリッドに合わせて、2×4mの規模の試掘坑を基準として、調査範囲の全域に均等に配し、遺構・遺物が検出された試掘坑については、その性格や範囲の詳細をおさえるために拡張等を実施した部分もある。

確認調査により本調査に移行した地点については、遺構の調査区には、発掘調査区域全面を機械により遺構検出面（第II層下位）まで表土を除去し、ジョレン掛けによって遺構の検出を行った。検出された遺構については、発見順に遺構の新旧に関係なく遺構番号を付した。発見された遺構は、陥し穴状遺構、住居跡、土坑、土塁、塚等があり、また、先土器時代の石器群、縄文時代遺物包含層の調査については、先に述べたグリッド毎に遺物を分けて取り上げた。

住居跡等と遺構調査は、まず土層観察用のベルトを残して掘り下げ、出土した遺物、遺構の平面測量等は、平板測量、遣り方測量により1/20の縮尺を基準として実施し、遺物台帳に記録した。なお遺物番号については、遺構の共伴遺物については遺構番号の後に0001から取り上げ



第4図 グリッドの分割と呼称

る順に四桁の番号を付し、例えば001号に遺物については001-0001とし、グリッドの遺物(先土器時代の遺物等)については、グリッド番号の後に、1 D01-0001といったように0001から順に付し、取り上げを行った。また同時に写真撮影による記録も並行して行った。(野口)

第1章 御塚山遺跡

第1節 調査の概要

御塚山遺跡は調査対象地域の北端にあたり、手繰川の一支部の谷頭部分となるが、現在の支谷と台地上との比高差は最大でも2m以下であり、ほぼ平坦な景観を呈していた。確認調査の結果、6地点の先土器時代関係の本調査が実施されたが、陥し穴3基と、近世の土坑1基も合わせて調査された。これらの遺構はいずれも、支谷南西部の緩斜面部に位置していた。

遺跡の基本層序を第5図に示した。この図は支谷の西側か東側にかけて横断的に4本の柱状図を並べたものであるが、各地点共に基本的には同一の層序を示している。

I層 表土層で耕作が及んでいる。

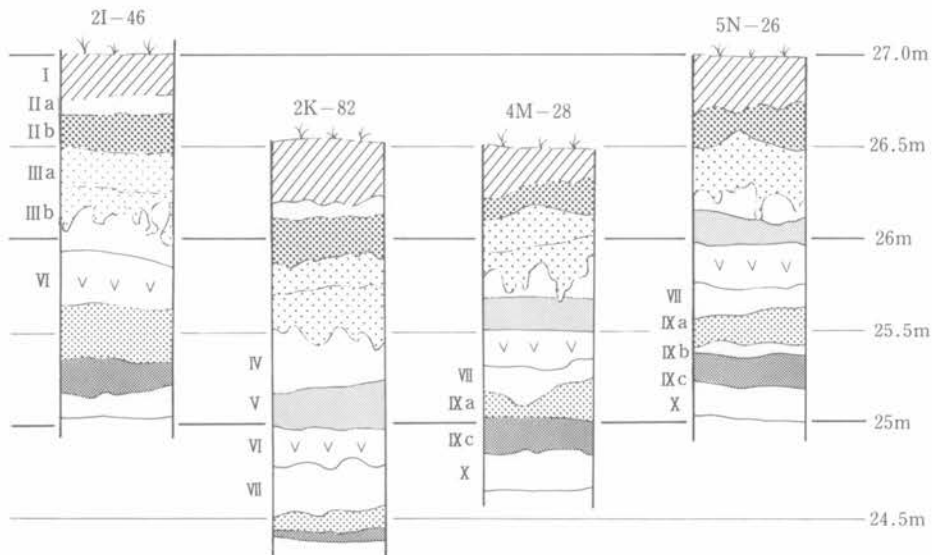
II層 暗褐色土層で、所謂新期富士テフラ層（II a層）と、ローム漸移層（II b層）とに分層される場合もある。II b層からは縄文時代の土器や石器が掘り出される。

III層 ソフトローム層で、上部が明黄褐色を呈し、下部は暗黄褐色をしている。これが明瞭な場合には、前者をIII a層、後者をIII b層などと呼んでいる。層厚は0.3m位。

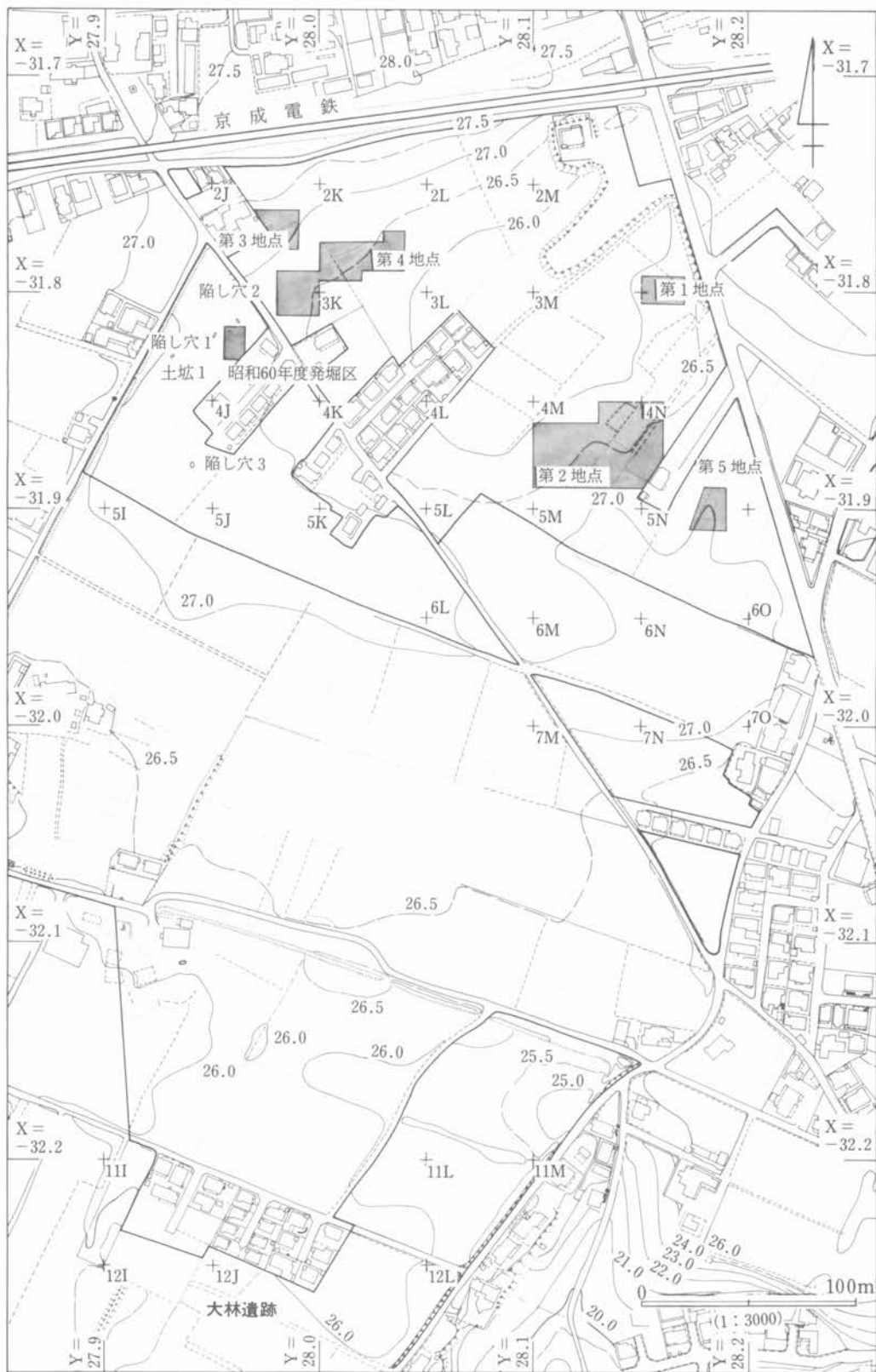
IV層 黄褐色のハードローム層で、遺存の良好な部分では層厚0.2m位ある。

V層 第1黒色帯である。スコリア質の褐色硬質のローム層で、IV層よりも若干厚い場合が多いが、2I-46区ではIV層とV層との区別が困難であった。

VI層 明黄褐色硬質ローム層で、ATをブロック状に介在している。層厚は0.2m位ある。A



第5図 御塚山遺跡の基本層序



第6図 御塚山遺跡全体図

Tは肉眼でも容易に識別できた。

VII層 明褐色ローム層で、第2黒色帯上部に相当する。大堀遺跡や芋窪遺跡でVI'層と呼ばれている土層と同一のものと見られるが、成層学的に、VI'層という呼称は適切ではあるまい。更に、「ATをわずかに含む」という指摘もあるが、ATの降下はVI'層の形成期にもあったのであろうか。この表現は、ATの断続的降下を前提とした場合は適切であろうが、2次的に上下に拡散したATに対して使うと不正確な表現になるので、むしろ、ATを含むVI層が、VII層中に乱れた状態で嵌入している、とでも表現されようか。

IX層 第2黒色帯下部の暗色部をIX層とした。大堀遺跡や芋窪遺跡におけるVII層がこれに相当する。IX層の細分は井戸向遺跡で提起したが(田村 1986)、本遺跡においては、5N-26区の柱状図に明瞭に示されているように、褐色ローム層(IX a層)、明褐色あるいは黄褐色ローム層(IX b層)、暗褐色ローム層(IX c層)と分層することができる。この分層は、下総台地西縁部でのみ確認されていたが、最近、袖ヶ浦町の露頭でも同様の堆積状態を観察した。あるいは、東京湾に沿い広域に亘って同様の堆積状態を示しているのかもしれない。本層に関する問題点は、彦八山遺跡の報告書(田村 1987)でも触れたので、これ以上の言及は差し控えたい。

X層 立川ローム層の最下層で、風化した粘質のローム層に乗るように堆積している。本遺跡では細分されていないが、2～3層に分けられる場合もある。

以上の層序区分は、調査時に御塚山遺跡でも認定された分層結果に、隣接する大林遺跡における、昭和62年度調査区の所見を加えたものであり、調査担当者の見解とは必ずしも一致していない。また、大堀遺跡や芋窪遺跡における土層番号とも、一部で異なる結果となったことは前記のとおりであるが、執筆担当者の見解を尊重して、あえて不統一のまま掲載した。ただし、御塚山遺跡と大林遺跡とは同一の用語法に従っている。

第2節 先土器時代

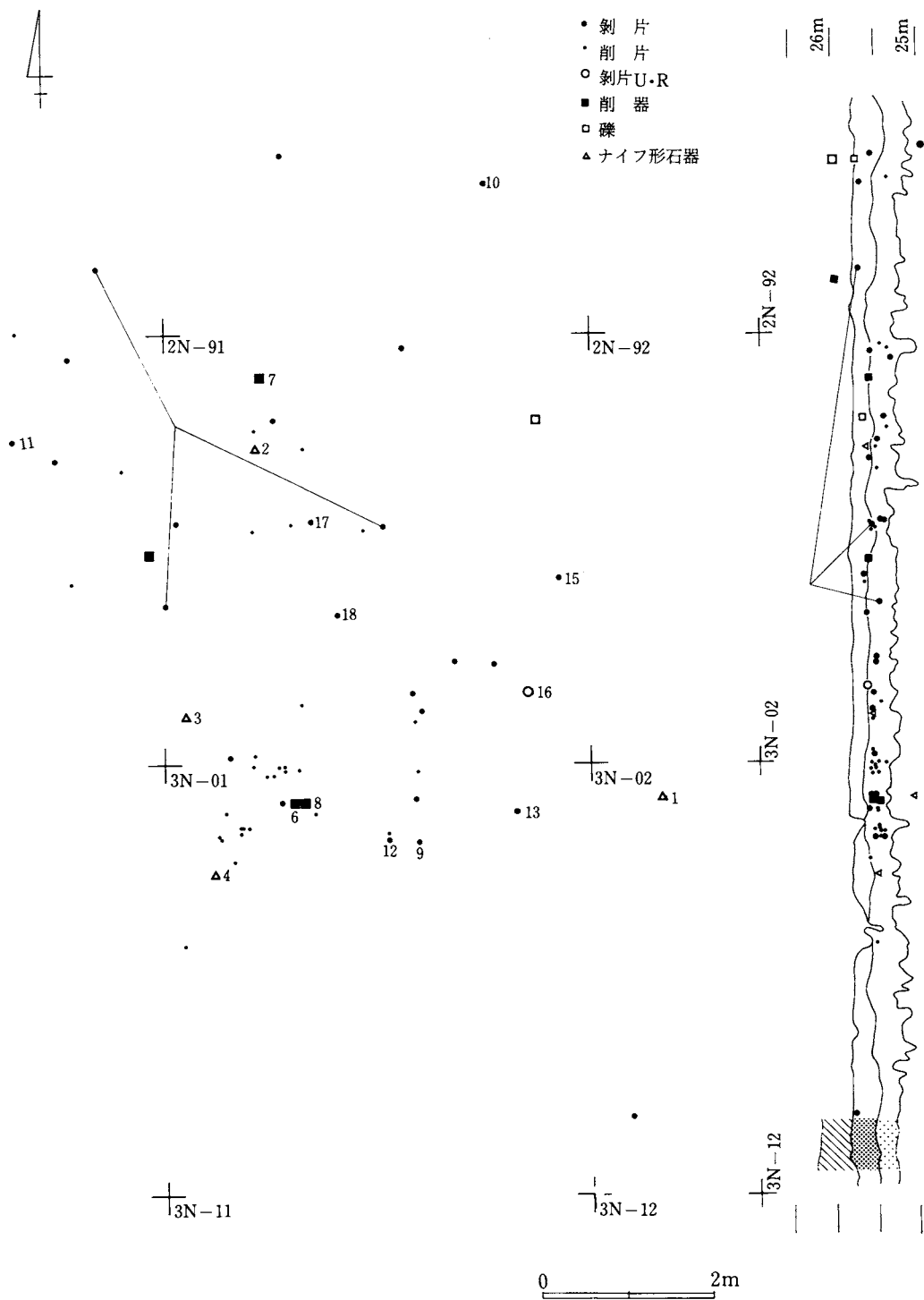
御塚山遺跡の先土器時代遺物集中部は14地点あり、産出層準はソフトローム層を主体に、ハードローム層上部、第2黒色帯下部と、大きく3枚に分かつことができる。これらのブロックは、遺跡中央から北東に向って開口する、浅い埋積谷の谷頭部を中心とする馬蹄形の分布を示している。ただし、谷頭部付近にはなお未調査区が残り、最終的な分布状況に関しては、最終的な調査結果に俟ちたい。各ブロックの文化層別の帰属は以下のとおりである。

第I文化層 第1～第9ブロック

第II文化層 第10～第12ブロック

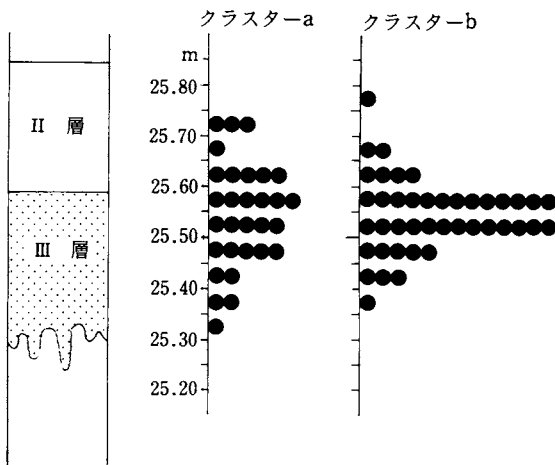
第III文化層 第13ブロック

A. 第I文化層 第I文化層は9箇所のブロックから構成されている。特に第2地点には



第7図 第1ブロック遺物出土状況

6ブロックが集中し、第1地点(第1ブロック)と共に良好な資料を得ることができた。第3、第4地点にはそれぞれ1箇所ずつブロックが存在する。この石器群の様相は、前記のブロック



第8図 第1ブロックの遺物垂直分布

と若干異なり、その間には若干の時間差が指摘されるのかもしれないが、あまり細かいことに拘泥しないこととして、便宜的に一文化層にまとめた。

第1ブロック(第7～第9図、図版9)

a) 分布状況 3N-91区を中心に、約8m×3.5mの範囲に石器類の散布が認められる。分布図に見られるとおり、遺物はこの範囲内に一様に分散するのではなく、2N-91ポイント南側の一群と、3N-01ポイント東側の一群とに2分される

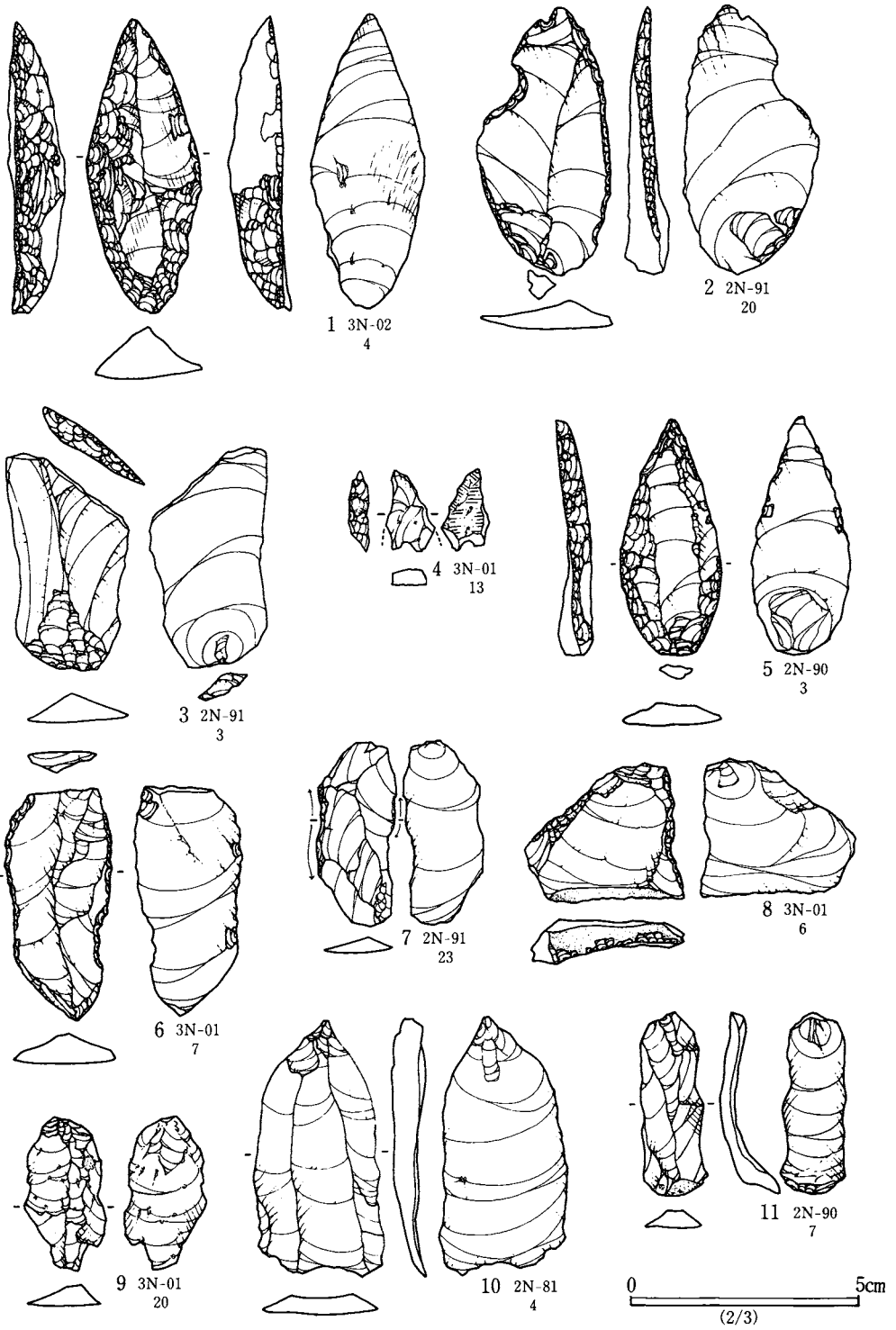
状況を呈している。前者をクラスターa、後者をクラスターbとし、分布状況を観察したい。

クラスターaは相対的にまばらな分布を見せるが、ナイフ形石器や削器を含み、比較的大き目の剥片も多い。小型の剥片(削片)は少なく、各器種は偏在することなく散布している。一方、クラスターbは3N-01ポイントのすぐ東側に削片の集中する部分があり、このさらに東側が、ナイフ形石器、削器、剥片等の散布域となっている。ただし、ナイフ形石器の検出地点はクラスター外縁部東端であり、帰属関係に問題を残している。

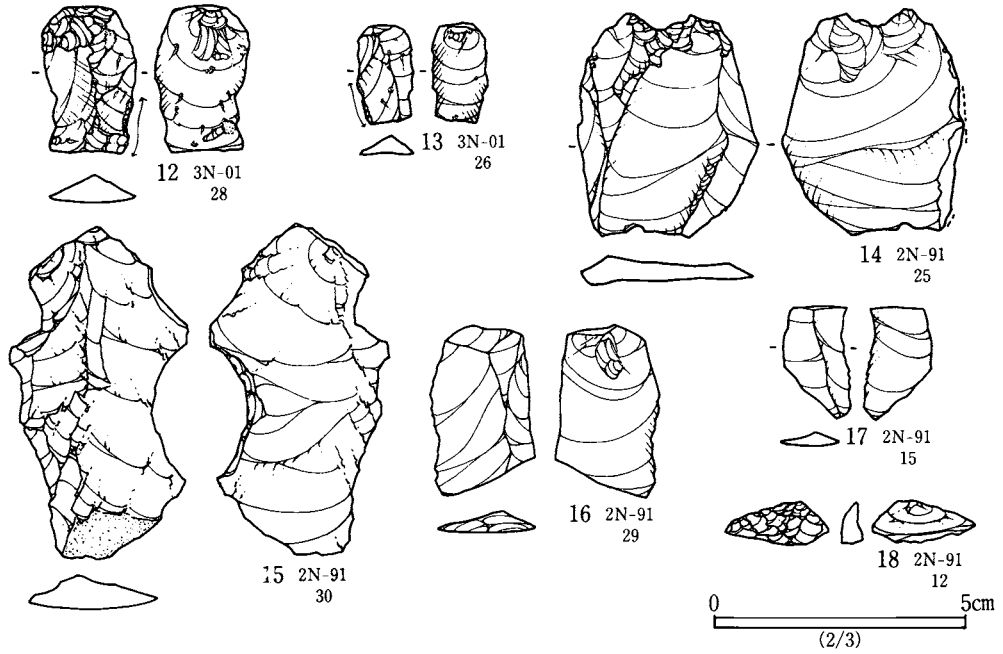
遺物の産出層準はII層であるローム漸移層下部からソフトローム層中位に及んでいる。正確な層準の確定のために、両クラスター別に産出水準の頻度を求めた(第8図)。投影図を一瞥すると、クラスターbがクラスターaよりも下位に位置しているようにも見えるが、水準頻度を参照する限り両クラスターに殆んど差異を認めることはできず、両者共にソフトローム層の最上部をその産出層準としていることが分る。また、第9図1のナイフ形石器に関して、平面分布上、クラスターbへの帰属性に疑点のあることを指摘したが、垂直分布においても、明らかに水準差をもち、さらに、調査時の所見によっても、ハードローム層中からの検出と記録されているので、本ブロックの遺物ではないと判定しておきたい。後に述べるように、この石器と同一母岩に属する資料も存在しない。

b) 出土遺物 第1ブロック石器は総数68点あるが、このうちには前項で指摘した下層の石器が1点数えられているので、67点を最終的な資料数としたい。石器組成はナイフ形石器3点、削器4、剥離痕のある剥片1点、剥片25点、削片32点細礫片2点となっている。以下、図に従って個々の石器を観察したい。

1は下層から単独で検出されたナイフ形石器である。一見すると東内野型尖頭器のように見える。灰黒色をした非常に良質の黒曜石から作られている。腹面は長軸に沿って軽く内彎するほぼ平坦な面で、加工痕は全く認められない。背面は大きく3種に分かれる剥離面によって構



第9図 第1ブロック石器実測図(1)



第10図 第1ブロック石器実測図(2)

成されている。(1)器体の中央部には長軸に沿って細長い剝離面があり、素材の剝片の背面を構成していたものと見られる。2面あり、その剝離方向はいずれも腹面の剝離方向と一致している。(2)次に、これを切る細かい剝離面が、左側縁から基部を経て右側縁基部寄りの部分まで連続的に認められる。これらの剝離面は、腹面と55°から67°の角度で交っており、ちょうどナイフ

第1表 第1ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	削器	剝片U 剝片R	剝片	削片	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 1	0	1	0	0	0	0	1	1.5	4.75	1.9
珪質頁岩 2	0	1	0	0	0	0	1	1.5	2.12	0.9
珪質頁岩 3	0	1	0	0	0	0	1	1.5	7.98	3.3
珪質頁岩 4	2	0	0	12	3	0	17	25.3	47.00	19.1
珪質頁岩 5	0	0	1	0	0	0	1	1.5	3.20	1.3
黒曜石 1	0	0	0	2	2	0	4	6.0	3.92	1.6
黒曜石 2	1	0	0	5	25	0	31	46.3	33.90	13.8
ホルンフェルス 1	0	0	0	2	1	0	3	4.5	11.73	4.8
砂岩 1	0	0	0	1	1	0	2	3.0	5.14	2.1
チャート 1	0	0	0	0	0	1	1	1.5	25.25	10.3
ハンレイ岩 1	0	0	0	0	0	1	1	1.5	74.30	30.3
珪質凝灰岩 1	0	1	0	0	0	0	1	1.5	6.35	2.6
細粒凝灰岩 1	0	0	0	3	0	0	3	4.5	19.41	7.9
総数	3	4	1	25	32	2	67	100.0	245.05	100.0
組成比 (%)	4.5	6.0	1.5	37.3	47.8	3.0				

形石器に見られるブランディングと石槍の調整剝離に一般的な浅い角度の剝離との中間的な様相と言えよう。(3)問題は、背面右側に尖頭部方向から加えられた一枚の剝離面である。この面は明らかに(1)の面を切るが、(2)の面に接する部分でも、尖頭部寄り、右側縁中位共に(2)に切られている。尖頭部寄りの部分での切り合いは非常に分りにくいが、(2)の剝離痕は連続して、微細な、そして末端が Step となる剝離痕が2枚あり、切り合い関係を決定的なものにしている。この面と腹面とのなす角度は37°前後で、(2)と比較すると浅い。

以上の観察による限り、この石器を東内野型尖頭器に分類することは不可能であり、ナイフ形石器の一種と考えなければならない。もうひとつ注意されるのは、この石器の右側縁部の縁辺に沿って刃こぼれが連続的に看取されることで、使用痕と見做される。

2は珪質頁岩製のナイフ形石器。楕円形状の縦長剝片を斜めに載ち落すように2次加工が加えられている。基部に平坦な打面を僅かに残している。背面左側縁基部側にも細かい2次加工があり、更に、腹面右側にも基部加工が認められる。刃部には古い欠損があり、不規則な凹凸あるプロフィールを呈しているが、本来は直線的な刃部であったと考えられる。丸味のある基部形態と、やや幅広の形状に注目したい。

3は2と同一母岩の截頂石刃であるが、慣例に従ってナイフ形石器としておこう。縦長の石刃状剝片を斜断しているが、調整技術はしっかりしたブランディングであり、ナイフ形石器の一種に分類される所以ともなっているが、本質的に別器種に分類するのが妥当ではあるまいか。腹面右側縁に微細剝離痕がある。打面部側はいじられておらず、素材剝片本来の打面を残している。その打面は複剝離打面である。また、打面部より背面中央に縦長の細かい剝離痕が並列している。頭部調整とも見られよう。

4は細片化しているが、ナイフ形石器に特有のブランディングがあり、その種の石器の一部と考えられる。

5は石槍とも考えられるが、尖頭削器の仲間と分類したい。大き目の打瘤をもつ石刃状剝片を素材としている。背面に2本の背稜が並走し、本来は整った2稜形の石刃であった可能性が高い。基部に平坦打面(7mm×2.5mm)を残す。2次加工は背面右側縁の一部を残し両側縁に加えられている。背面左側縁尖頭部付近の剝離は腹面とほぼ直角に交叉し、ブランディングそのものであるが、その他の部位は30°前後の角度で交っており、浅深両様の交角を作り出す調整技術が同一個体内に共存していることになる。急角度の部分は石刃尾部の折断に由来しよう。背面右側縁の未加工部にも微細な剝離痕が連続的に看取されるが、これは使用過程における損傷であろう。腹面には全く2次剝離は存在しない。

6～8には側削器を集めた。縦長の剝片を用いる6、7と、不定形剝片を素材とする8との別があるが、いずれも2次加工は細かく、かつ素材側縁の形状に沿うように直線的に施されている。端削器と見られるものが存在しないことに注意したい。

9～17には比較的大き目の剥片を選択して図示しているが、残りの剥片類の殆んどは小型不整形のものである。14を除く大半のものは石刃と見られるが、生産技術を復原し得る資料は残されていない。18はブランディングチップである。

c) **石器石材** 本ブロックの石材構成は、珪質頁岩と黒曜石を中心としている。これらの他にホルンフェルス、砂岩、チャート、珪質凝灰岩(オパール)、細粒凝灰岩、ハンレイ岩など各種の石材が含まれているが、その数はいずれも3点以下である。

珪質頁岩には5種あるが、いずれも珪化度の高い良質のものであり、女川期の珪質頁岩に特有の特性を示している。北関東以北より搬入されたものにちがいない。このうち、珪質頁岩4とした赤味の濃いチョコレート色の頁岩が17点あり、珪質頁岩全体の8割を占めている。図の2、3、10、14、17、18などが本母岩の資料で、基本的に石刃と石刃素材の石器とから構成されている。クラスターaに集中分布することも重要な特徴であろう。その他の母岩はいずれも単独資料であるが、8が珪質頁岩1、7が同2、6が同6と削器によって占められている。

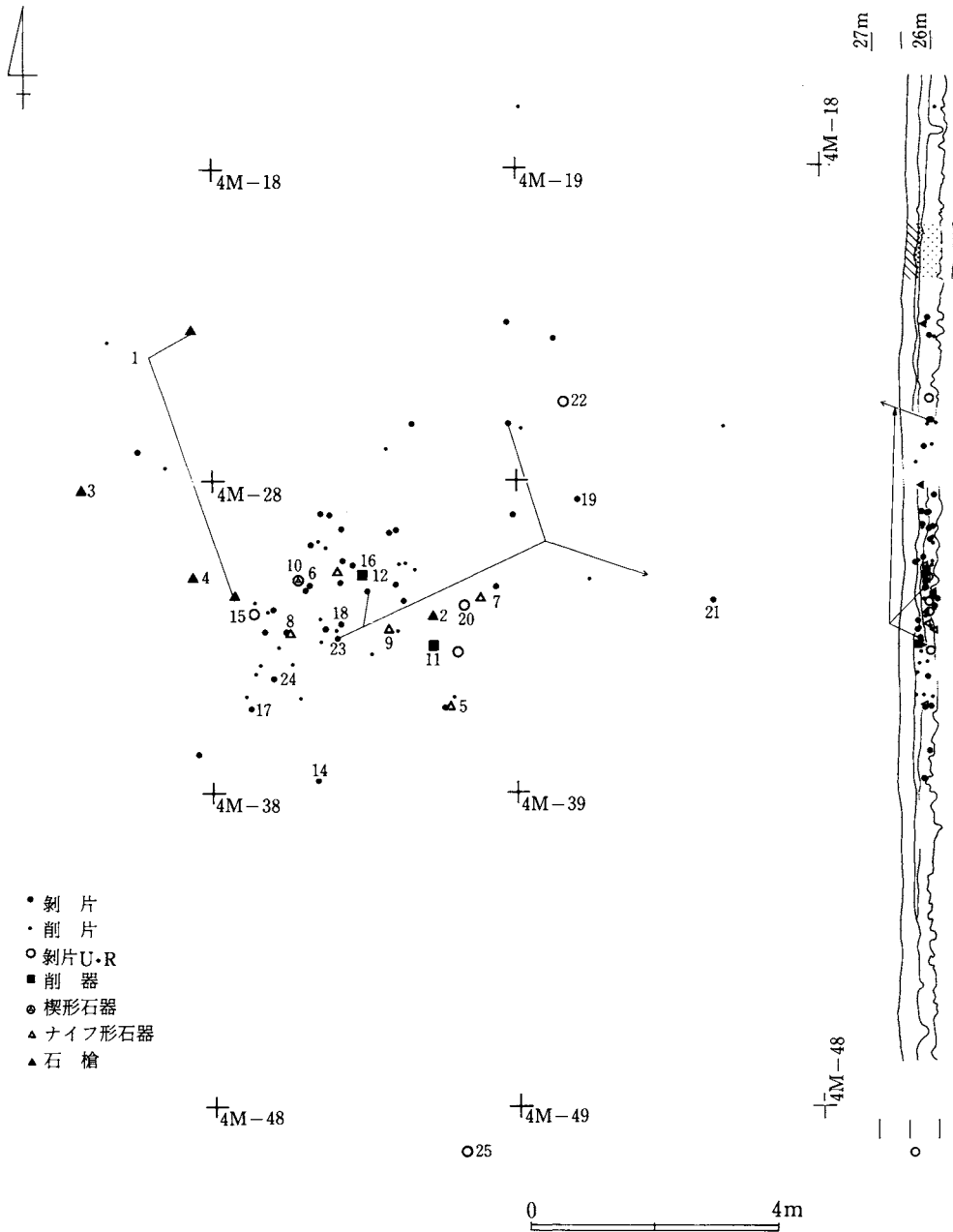
黒曜石は2種類に分けられた。黒曜石1は4点あるにすぎないが、黒曜石2は31点もあり、圧倒的に多い。この黒曜石2はクラスターbの集中部分を構成し、特に削片類の集中度は高い。7は黒曜石1の剥片であるが、9、12、13は黒曜石2に分類されたものである。

これら以外では、5が珪質凝灰岩(オパール)1、15が細粒凝灰岩1を素材としている。特に、ここで珪質凝灰岩とした石材は、貝殻状断口が発達し、珪化度の高い、かつ粘りのある特殊な石材である。管見による限り、この種の石材は、下総台地ではソフトローム層上部を産出層準とする石器群のうち、ある特定の石器群に限定されるように出現する傾向が指摘される。更に、この石材は、大体良質の珪質頁岩を伴っているため、両者間には、例えば、その原産地が近接しているといったような、何らかの関連性があるものと考えている。

d) **小結** 本ブロックは2つのクラスターから構成されているが、このうち一方は黒曜石の剥片剥離地点であった可能性が高い。石器組成は、ナイフ形石器と削器を中心とし、やや幅広で丸い基部形態を有するナイフ形石器と截頂石刃、尖頭削器の組み合わせは、この石器群の編年的位置をよく表現しているものと見られる。そして、この種の石器群が本地域においては、ソフトローム層最上部に位置することが明らかになったことも重要な成果であった。

第2ブロック(第10～第13図、図版7・9)

a) **分布状況** 第I文化層に属する6箇所のブロックが集中的に検出された第2地点内に位置している。石器の平面的な分布状況を見ると、4M-28区を中心に径約4m程の集中度の特に高い部分があり、その外側にも石器類の飛散が認められる。この集中部分は主に黒曜石5と分類した母岩の剥片・削片の集中箇所であり、これと一部重複するように、また、より広範囲に2次加工の著明な石器類が分布する傾向が窺える。遺物の垂直分布はII層からIV層上面に及ん

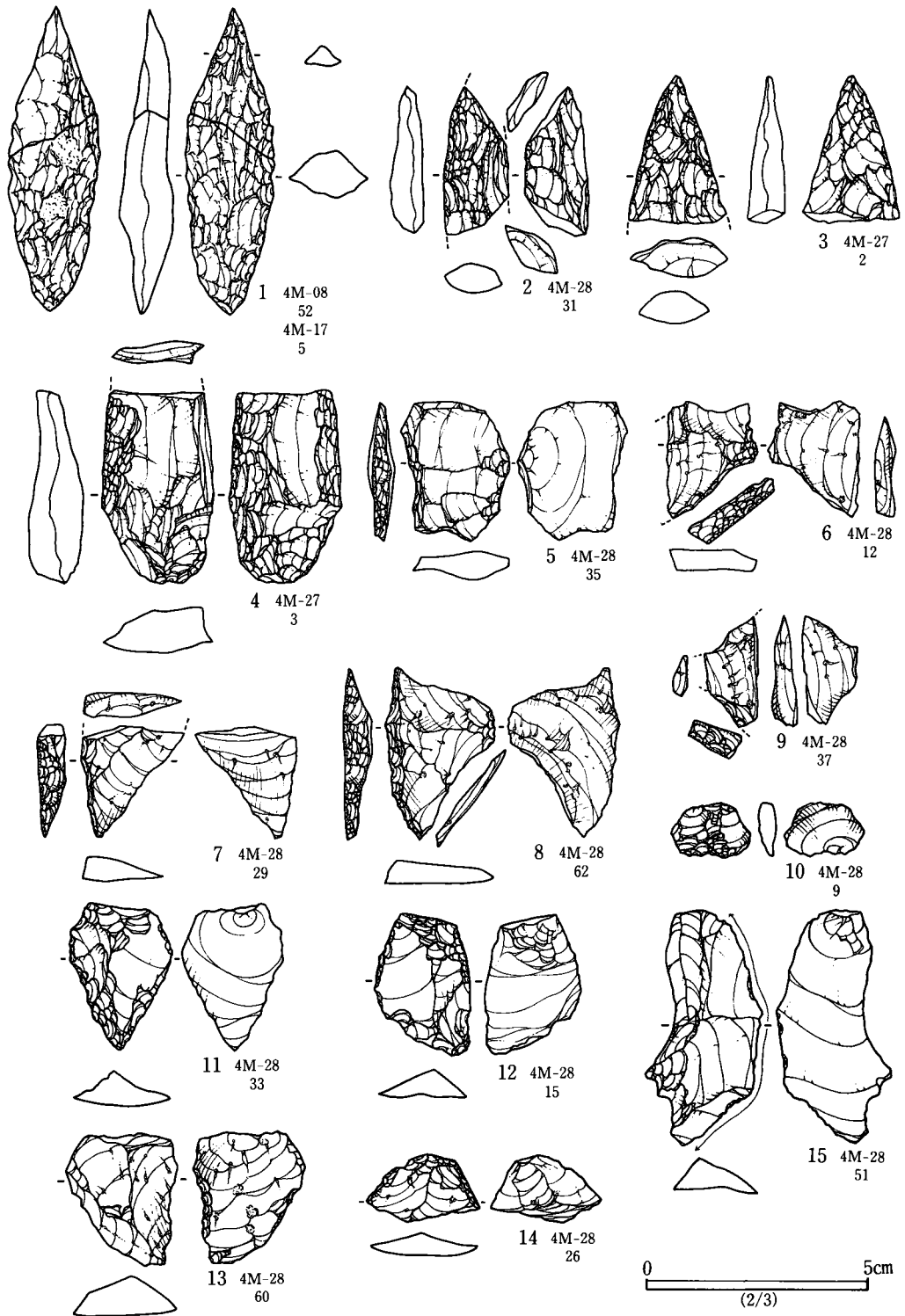


第11図 第2ブロック遺物出土状況

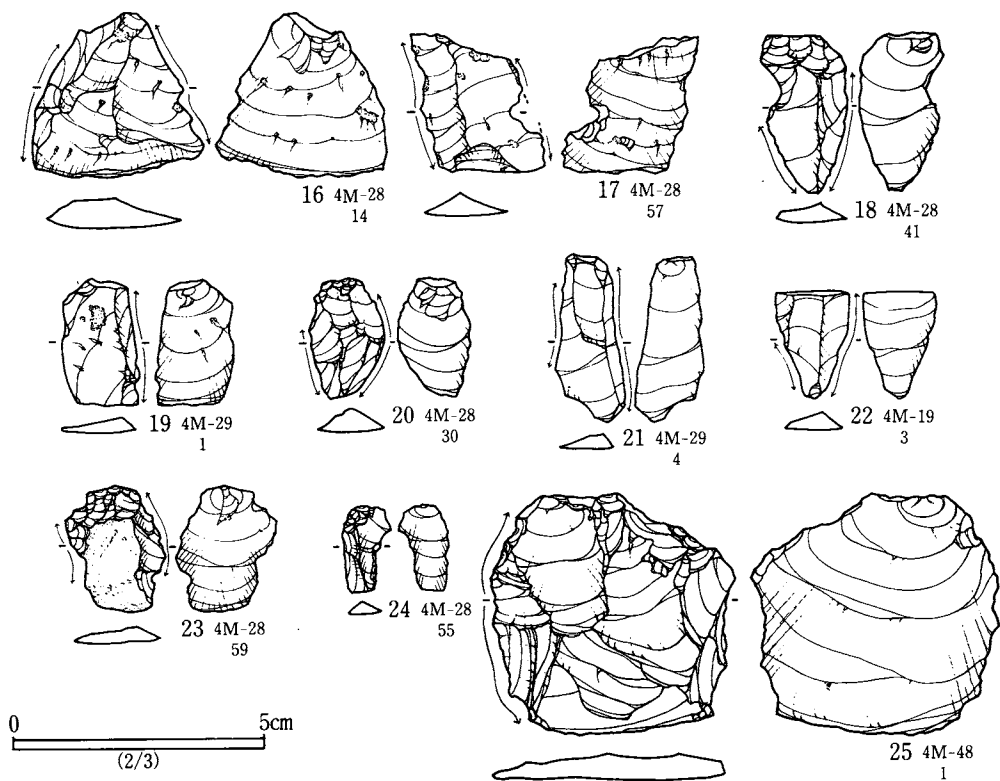
ているが、明らかにソフトローム層上部に出土量のピークが存在する。従って、第1ブロックとほぼ同一の層準から検出されたと、考えてよいであろう。

b) 出土遺物 遺物総数は80点。このうちには、ナイフ形石器5点、小型石槍5点4個体、削器2点、楔形石器1点が含まれ、たいへん充実した器種構成を見せている。

小型石槍は5点発見されたが、このうち2点が接合関係を持ち、合計して4個体分の資料が



第12図 第2ブロック石器実測図(1)



第13図 第2ブロック石器実測図(2)

得られた。これらのうち、接合した1個体が安山岩製であるが、他の3点は珪質粘板岩の同一母岩から作られている。1は接合して完形となった安山岩製のもの。一端が錐状に特に尖鋭に作出された、やや細身の槍である。左右対称の外形を示している。図の左側の面の尖頭部寄りに未加工の平坦面が残り、素材剥片のポジ面と考えられる。横断面を見ると器体下半が紡錘形であるが、尖頭部側は、素材の形態的規制を受け平凸形を呈している。調整剥離はラフな直接加撃によるもので、所謂押圧剥離技術は採用されていない。剥離面の末端はしばしば step に終わっている。

2～3は同一母岩であるが、槍としては別個体に属するものと考えられる。いずれも破片であり、本来の形態を知ることはできない。2は細身の胴部破片。全面を剥離面に被覆されている。調整剥離はソフトハンマーによる直接加撃であり、1と同一の手法が採られているようである。縁辺部からの細調整剥離痕の多くが末端 step となっている。3は尖端部破片。均整のとれた形態を示している。横断面は紡錘形状で、入念な調整剥離が加えられている。4は、2や3と較べると粗雑なもので、あるいは加工の途中で折損したものであるかもしれない。表裏に素材剥片の剥離面を残しているが、図の左側がポジ面、右側がネガ面である。ポジ面とネガ面の剥離方向は一致しており、末端 hinge の横打剥片を素材としていることは明らかである。調

第2表 第2ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	石槍	削器	楔形石器	剥片U 剥片R	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 7	0	0	0	0	0	0	1	1	1.3	0.57	0.4
珪質頁岩 8	0	0	0	0	1	1	1	3	3.8	3.88	2.5
珪質頁岩 9	1	0	0	0	0	2	6	9	11.3	8.07	5.2
珪質頁岩 10	0	0	2	0	1	1	0	4	5.0	32.49	20.9
珪質頁岩 11	0	0	0	0	0	1	0	1	1.3	1.43	1.0
珪質頁岩 23	0	0	0	0	1	0	0	1	1.3	6.67	4.3
珪質凝灰岩 2	0	0	0	0	0	1	0	1	1.3	0.90	0.6
珪質凝灰岩 3	0	0	0	0	2	0	1	3	3.8	2.80	1.8
珪質凝灰岩 4	0	0	0	0	0	2	0	2	2.5	2.52	1.6
黒曜石 4	0	0	0	0	0	5	2	7	8.8	4.21	2.7
黒曜石 5	4	0	0	1	1	19	14	39	48.8	50.91	32.7
安山岩 1	0	2	0	0	0	0	4	6	7.5	18.60	12.0
珪質粘板岩 1	0	3	0	0	0	0	0	3	3.8	22.72	14.6
総数	5	5	2	1	6	32	29	80	100.0	155.77	100.0
組成比 (%)	6.3	6.3	2.5	1.3	7.5	40	36.3				

整剥離の殆んどもその末端が step/hinge となっている。折れ面の状態は、1が両端共に snap、2も snap、3は hinge である。

5～9にナイフ形石器を集めたが、5が珪質頁岩である他は、全て黒曜石5を素材としている。黒曜石製のものは破損品ばかりであり、またブロック内に同種の母岩の剥片・削片の集中箇所が存在するところから、本ブロック内でナイフ形石器の製作が行なわれた蓋然性が高い。

5は複剥離打面をもつ横長剥片の尾部側を中心に2次加工が加えられている。台形石器と分類する方が適切であるが、便宜的にナイフ形石器としておこう。まず素材の状況を観察する。打面は19.5mm×3.5mmあり、4面の剥離面から構成されている。これらのうちネガティブバルブをもつものが1枚あり、背面のネガ面の一部を切っている。背面には6枚の大き目の剥離痕が並存するが、これらのうち5面は打面部からの剥離によるものであるが、1面のみ尾部側からのものがある。両者の切り合いは、打面側からの最終剥離面を尾部側からの剥離面が切り、打面が上→下→上と転位している状況を窺うことができる。現在の打面部側からの剥離面長は25mmを超えないと見られるので、背の低い両設打面石核の存在を想定することもできるが、この剥片が、石刃を目的的に生産する石核の打面修整に関与した可能性も否定できないので、最終的な判断は保留せざるを得ない。2次加工は通常のブランディングで、剥片の尾部、背面右側縁に加えられている、ややコンケイヴする状態となるように連続的に剥離が進行している、尾部の一部と背面左側縁が未加工の縁辺を保持している。

6は縦長剥片の一側縁に2次加工があるが、折損している。折れ面は hinge。7も折損品で、加工の状態は6に等しい。折れ面は hinge。8も折損しているが、5と同様の形態を予定してい

たものと考えられる。ただし、ブランディングの加えられている部分はコンヴェクスで、5とは逆になる。折れ面はやはり hinge となっている。9は細片化していて詳細は不明。折れ面は step/hinge である。ところで、この種のナイフ形石器の素材を提供した石核はどのようなものであったのだろうか。第2ブロックに遺存する同一母岩資料は39点あるが、それらはナイフ形石器を除くと、13、14、16、17、19などの剥片類によって占められており、石核を欠いている。ところが、同一母岩と見られる石核が第4ブロックに存在する(36、37)。第7ブロックにも1点ある(13)が、これは表面採集資料なので確実に第7ブロックのものなのかどうか分からない。

以上の資料を通観すると、原礫はいくつかに分割され、最低3個体の石核を生じている。剥片剥離は、打面を固定して石核を半周するように縦長の剥片を連続的に作出するもの(36、37)と、打面を固定せず求心的に剥離がすすめられる例(13)とがある。後者の場合には幅広の剥片が得られるが、前者にあっては斉一性に欠けるところがあるが、企画性のある石刃状の剥片が作出されているようである。本ブロックのナイフ形石器が、いずれの石核から得られた剥片を素材としているのかは決め手に欠けるが、作出された剥片のうち厚味のある大型のものを選択していることは明らかである。例えば、第2ブロック16のような剥片が素材として好適な条件を具備しているのではないかと見られる。

10は小型の楔形石器。横長の小剥片の尾部に潰痕様の小剥離痕がある。剥離痕は背面側にのみ観察される。黒曜石10を素材としている。

11、12は珪質頁岩の同一母岩に属する削器である。11は尖頭部を保有する収斂型削器の例で、第1ブロックの例(5)と比較することができる。基部に打面を僅かに残している。12も同趣の資料であるが、尖頭部は片側に偏している、しかし2次加工は両側縁から1点に収斂し、尖頭削器の仲間であることは明らかであろう。同種の削器は第2地点の別ブロックにも複数あり、特徴器種と認定する必要がある。

13以下に剥片を示す。剥片のうち頁岩、珪化した凝灰岩系のもの(15：珪質頁岩23、18・21：珪質凝灰岩4、20・22：珪質凝灰岩3、25：珪質凝灰岩10)に石刃状のものが多く、あまり整ったものはない。25は打面の修整を企図した剥片である。側縁の一部に旧作業面を留めている。

c) 石器石材 珪質頁岩、珪質凝灰岩、黒曜石の3種が複数の母岩を含み、本ブロックの石材組成の基盤を形成している。他に、珪質粘板岩と安山岩とが、それぞれ1母岩ずつあるが、それらは小型石槍の素材として用いられていることに注意したい。すなわち、今後検討を加える第2地点の諸ブロックに共通する、珪質頁岩、珪質凝灰岩、黒曜石という3者が強く結びついた母岩構成を示しており、それ以外の石材を素材とする石器は、言はば一種の異族である。このことは、また、ナイフ形石器を基調とする石器種構成に、小型石槍という別種の尖頭器が集合する様相に集約的に表出されていると見ることもできるかもしれない。

珪質頁岩は6母岩に分類した。これらはいずれも10点未満の資料数しかなく、1点～数点ずつ搬入されたものと考えられるが、珪質頁岩9のみ、ナイフ形石器(5)の他に、剥片2点、削片6点から構成され、簡単な工作が行なわれた形跡を留めている。これらの資料の分布は、ほぼ黒曜石5の分布範囲と重複している。また、6母岩のうち、2母岩が第3ブロックと、4母岩が第4ブロックと共通するが、一方から他方へといった石器の流れを指摘することはできない。

珪質凝灰岩は3母岩に分かれるが、そのあり方は珪質頁岩と良く似ている。3母岩とも第4ブロックに共通母岩を持つ。このうち特に注意しなければならないのは、珪質凝灰岩3で、第4ブロックに石核1点を含む13点の資料があり、一方、第2ブロックには使用痕がある剥片が2点、削片1点があるのみであり、第2ブロックから第4ブロックへの石核の移動、若しくは、第4ブロックから第2ブロックの剥片の供給を想定する向きもあろう。

黒曜石には2種あり、両母岩共に第3、第4ブロックと共有関係を持っている。このうち、黒曜石4は、第2ブロックに7点、第3ブロックに20点の資料が含まれ、第4ブロックにも2点ある。一方、黒曜石5は、第2ブロックに39点あり、この一部がナイフ形石器の製作に関与したことは既に触れたとおりであるが、第2地点に存在する残りの5ブロックの全てに同一母岩が存在している。しかし、第3、第5ブロックには、それぞれ2点、3点と少なく、第4ブロックと、第6、第7ブロックにまとまっている。

これら以外の2母岩に関しては既に論及したので、ここでは割愛する。

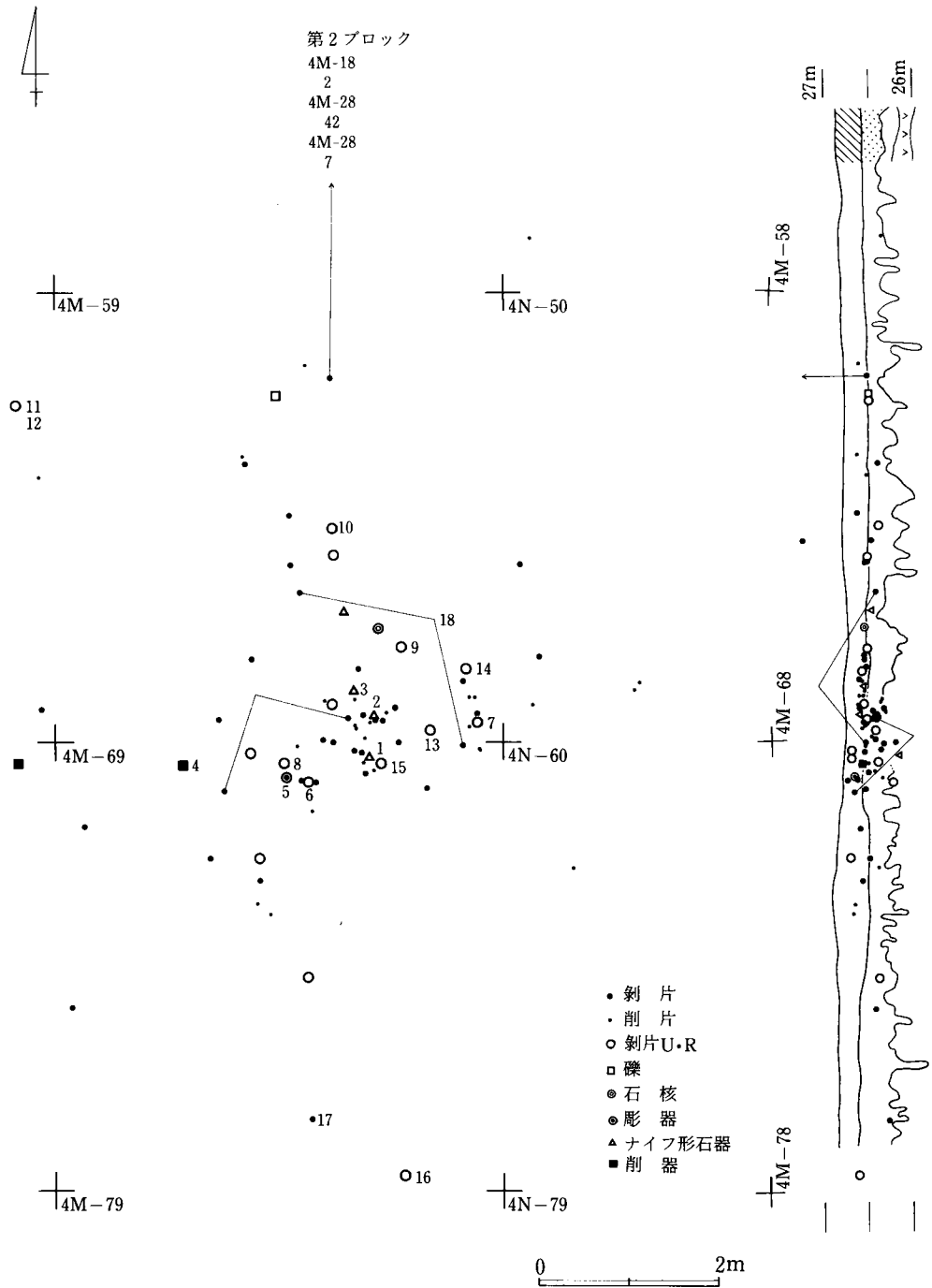
d) 小結 ブロックの規模としては、広がり、資料数共に平均的なものであるが、石器組成は比較的充実している。特に、両面打製の石槍が台形石器状の剥片ナイフと共存もする事実を確認し得たのは大きな収穫であった。現在では、ナイフ形石器と小型石槍の共存を疑う人は居ないが、その共存はどのように理解し得るであろう。本ブロックのあり方は、この問題を考える糸口を与えるものである。

第3ブロック (第14～第17図、図版7・10)

a) 分布状況 第2ブロックの南東約10mにあり、南東端に一部未調査区が残されているが、主要部分は掘り尽している。4M-59、69両区を中心に石器類の散布が確認されたが、4N-60ポイントの西側に径約3m程度の分布密度の高い部分があり、主要な石器類もこれに重複するように検出されている。この集中部分は、黒曜石の剥片、削片の高密度に散る部分であり、剥片剥離、あるいは石器加工の場であるとも考えることも可能であろう。

遺物はII層とソフトローム層との境界付近から多く産出し、第2ブロックと垂直分布の上で差異を指摘することは困難である。

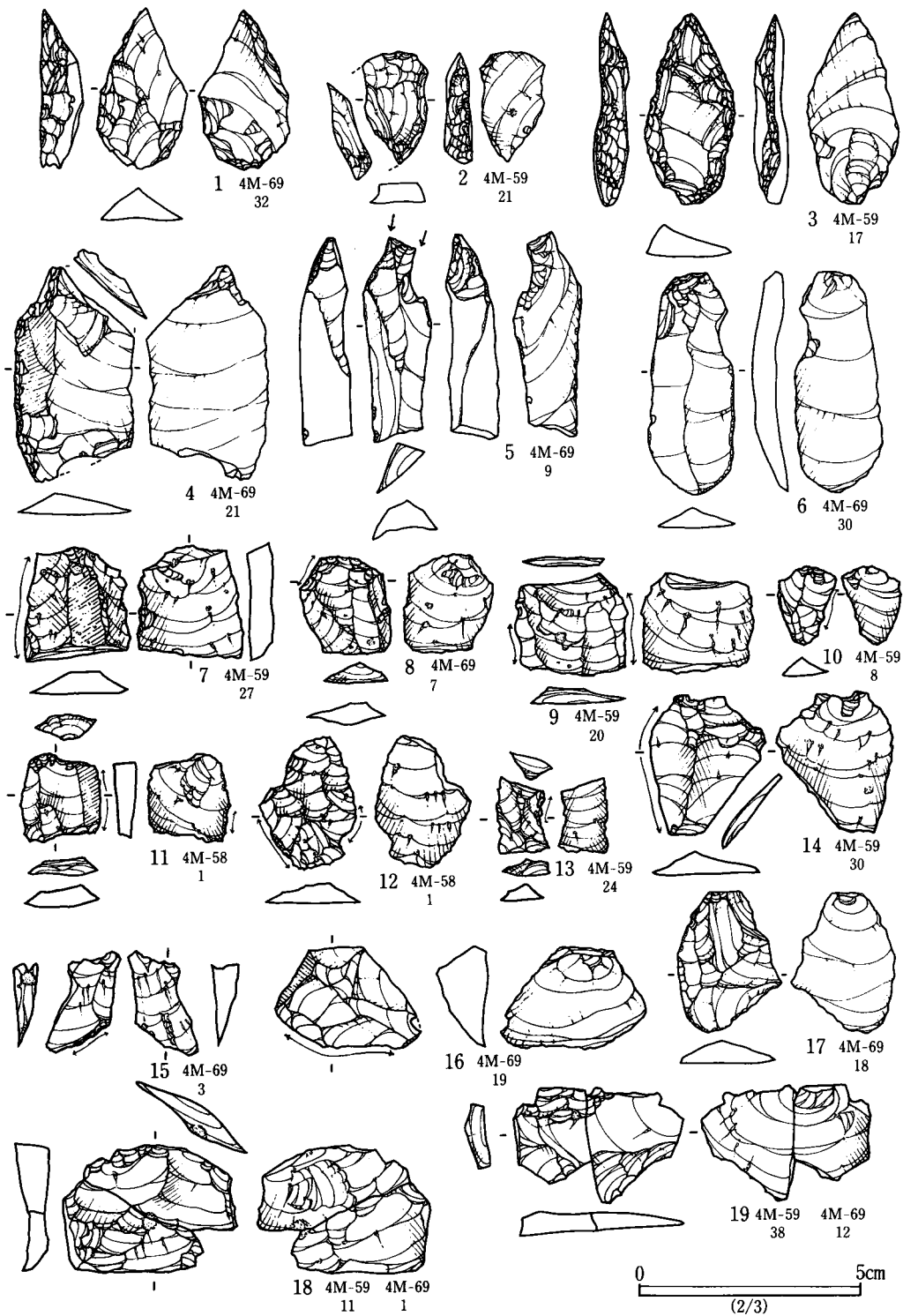
b) 出土遺物 第3ブロックからは87点の遺物が検出された。石器組成はナイフ形石器4点(うち台形石器1点)、彫器1点、削器1点、石核1点、他は剥片類で、そのなかには刃こぼれの認



第14図 第3ブロック遺物出土状況

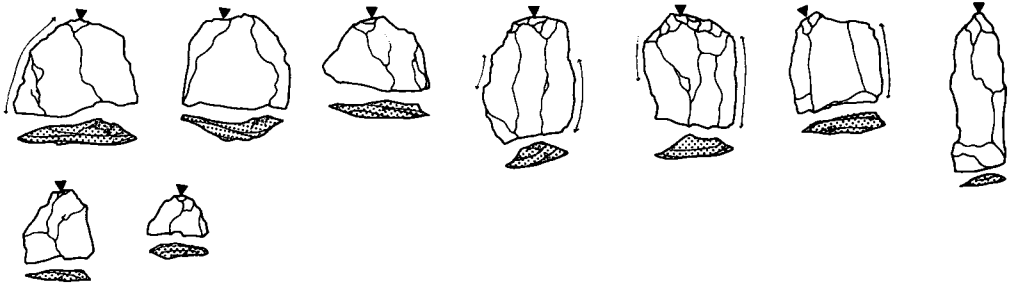
めらる剥片が11点ある。流紋岩の小礫が1点あるが、このブロックに伴う遺物かどうか良く分らない。

ナイフ形石器（1・2）は3点あるが、いずれも剥片素材のものであり、石刃素材の例品は

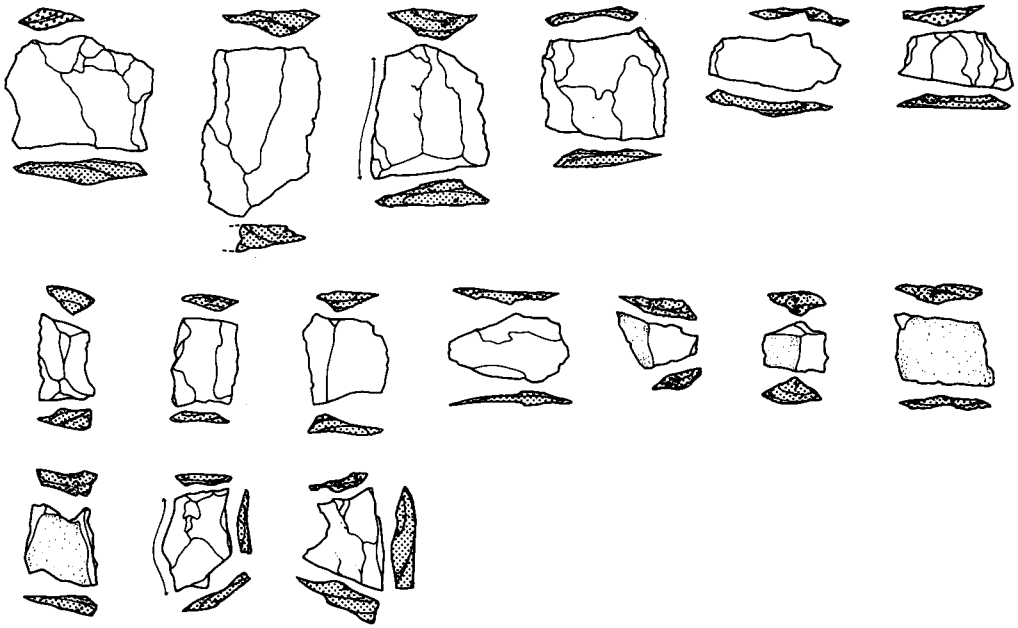


第15図 第3ブロック石器実測図

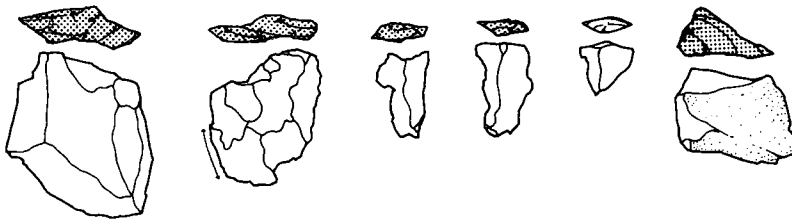
頭部



胴部



尾部



第16図 第3ブロックの黒曜石製折断剝片(2/3)

ない。1は厚味のある縦長の剝片を斜断するようにプランティングを施している。プランティングは尖頭部付近では背面から腹面に、基部寄りでは腹面から背面に向って加えられている。尖頭部側の剝離は直角に近い急斜なものであるのに対して、基部側では浅くなっている(38°~40°)。基部の一部に損傷を受けているが、平坦な打面が残置されている。背面の右側縁基部側にも2

面の調整剥離痕がある。この剥離も比較的浅い(45°)。また、腹面の打瘤部分には主に左側縁から浅い腹面剥離が行なわれ、バルブ隆起部を低平化するとともに、丸味のある基部形態を形成している。黒曜石製。

2は半欠品であるが、遺存部分から判定すると、第2ブロックで製作されていた台形状のナイフ形石器と近似した形態をとっていたのであろう。横長の剥片を素材とし、横長剥片特有の長い尾部縁辺を潰して、一側縁を未加工のまま保持する台形状に仕上げられたものと見られる。素材は本ブロックからまとまって検出されている黒曜石7であり、ブロック内若しくは、その近傍での製作段階で破損、廃棄された可能性が高い。

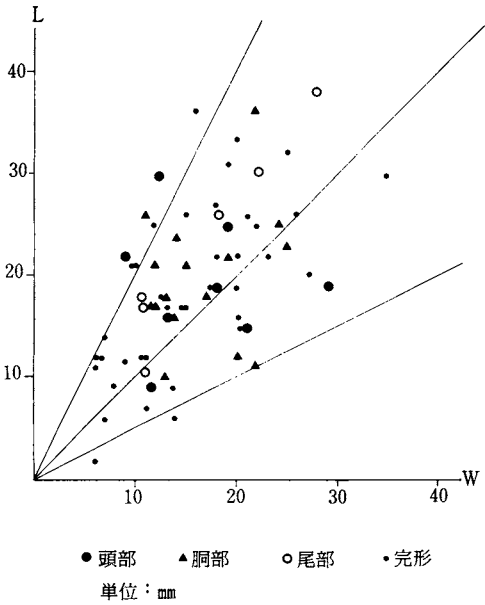
3は珪質頁岩製の削器である。素材は縦長ではあるが、やや幅の広い剥片で、これを縦に截ち切るようなプランティングが看取される。背面左側縁の2次加工面がこれで、ほぼ直角に近い。右側縁にも全縁に亘り浅目の剥離痕が連続的に観察されるが、それは43°~45°の角度を測るもので、通常のプランティングとは異質であり、スクレイパーエッジを作出する剥離であると考えられる。基部には打面が残されているが、一部損傷を受けている。全体的に第1ブロック5の石器に近い。

4は珪質頁岩製の側削器。頭部を欠損する縦長剥片の一側縁部に打調が認められる。背稜上からは左右に向う小剥離が加えられている。背面左側に節理面が残されているので、石核の側面調整に起因する剥離である可能性が高い。

5は彫器とした。珪質頁岩の断面3角形をした石刃状の剥片を素材としている。尾部を欠くが、折れ面はhingeである。刻打は打面部の両端から、左右両側縁に平行するように2打加えられている。側縁には、ほぼ全周に亘って微細な剥離痕が観察されるが、特に、背面左側の刻打による槌状剥離面の縁辺に著しい。

6~19には各種の剥片を示した。7~15は黒曜石7の同一母岩に属する。明らかに縦長の石刃状のものを企図して製作されている。素材である黒曜石が必ずしも良質ではないので、剥離に難渋した状況が推察されるが、長幅比が1から2の間に大半の剥片が分布している。

剥片、特に黒曜石製の剥片のなかには相当量の折損したものが含まれている。黒曜石の剥片は43点あるが、そのうち31点が折損している。剥片のうちから、18、19のような不整な調整剥片の仲間を差し引くと、残る全てが折損していると言ってもよい。第16図にこれらの全てを模式的に示した。遺存部位は、頭部9点、胴部16点、尾部6点であり、胴部の遺存が際立って高い。また、折れ面間に接合関係をもつ例はない。この結果から、最低でも78点に上る折断剥片が存在したことになり、非折損資料が12点しかないことを考慮するならば、剥片剥離時以降の偶然的折損としては極めて異常な遺存状況と考えねばならない。折れ面の大半はstep/hingeで、加圧方向を見ると、背面側と腹面側との両者がある。ところが、胴部破片を観察すると、16点中11点において、尾部側、頭部側の加圧が同一方向にそろうという事実が確認される。更に、



第17図 第3ブロックの黒曜石製剥片の長・幅分布

第2、第4ブロックと、また、珪質頁岩8が第2ブロックと母岩の共有関係があり、特に後者は接合関係を持っている。

第□図にこの状況を示した。石刃2個体、4点から構成されるが、2点の石刃のうち、2回目の剥離によって得られたものの頭部側のみが第3ブロックに存在する。尾部側及び、先行する剥離によって得られ、やはり2分されている石刃は第2ブロック内にある。なお、2枚目の石刃剥離に先行して精細な打面調整を受けている。

黒曜石の4個体は、剥片・削片を多く含む2母岩（黒曜石4、7）と、共に2点の剥片類か

使用痕かと考えられる微小剥離列は7例に認められた。以上の状況から、黒曜石製の剥片を対象とする企図的な折断過程の存在を指摘しておきたい。

c)石器石材 第3ブロックの石器石材は、帰属性に問題のある流紋岩の小礫を別にすれば、珪質頁岩5個体と黒曜石4個体の大別2種からなる。珪質凝灰岩を欠いている。

珪質頁岩は、ナイフ形石器や削器、比較的大き目の剥片などから構成され、石核、削片を欠いている。また、各母岩は4点以下の資料しか保有しておらず、いずれも別地点からの搬入時の状態を留めていると判断される。これらのうち、珪質頁岩7が、

第3表 第3ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	削器	彫器	剥片U 剥片R	石核	剥片	削片	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 5	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.1	3.82	2.0
珪質頁岩 7	0	0	1	1	0	0	0	0	2	2.3	6.58	3.4
珪質頁岩 8	0	0	0	0	0	4	0	0	4	4.6	9.57	5.0
珪質頁岩 12	0	2	0	0	0	0	0	0	2	2.3	13.05	6.8
珪質頁岩 13	0	0	0	1	0	2	0	0	3	3.4	10.60	5.5
黒曜石 4	2	0	0	0	0	12	6	0	20	23.0	34.93	18.1
黒曜石 5	0	0	0	0	0	2	0	0	2	2.3	7.95	4.1
黒曜石 6	0	0	0	0	0	2	0	0	2	2.3	1.02	0.5
黒曜石 7	1	0	0	12	1	18	18	0	50	57.5	83.81	43.4
流紋岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.1	21.61	11.2
総数	3	2	1	15	1	40	24	1	87	100.0	192.94	100.0
組成比 (%)	3.4	2.3	1.1	17.2	1.1	46.0	27.6	1.1				

らなる2母岩(黒曜石5、6)とから構成されている。興味深いことに、前者が他のブロック内に殆んど同一の母岩を保有していないのに対し、後者は別ブロックに多くの母岩別資料を持っている。そして、資料数の多い2母岩が、ブロック内での密度の濃い分布域を形成するとともに、多数の折断剝片を保有することから、特定の作業に偏向したブロック構成が指摘されるであろう。珪質凝灰岩の欠如を特に指摘しておく。

d) **小結** ソフトローム層上部に位置するブロックである。ナイフ形石器、削器、彫器など一応の器種を網羅しているが、黒曜石製の折断剝片を多く含む点にひとつの特徴を求めることができる。また、隣接する各ブロックと接合関係や母岩の共有関係があるので、全体的な脈絡の中でその位置づけも考えなければならない。

第4ブロック(第18～第23図、図版7・10)

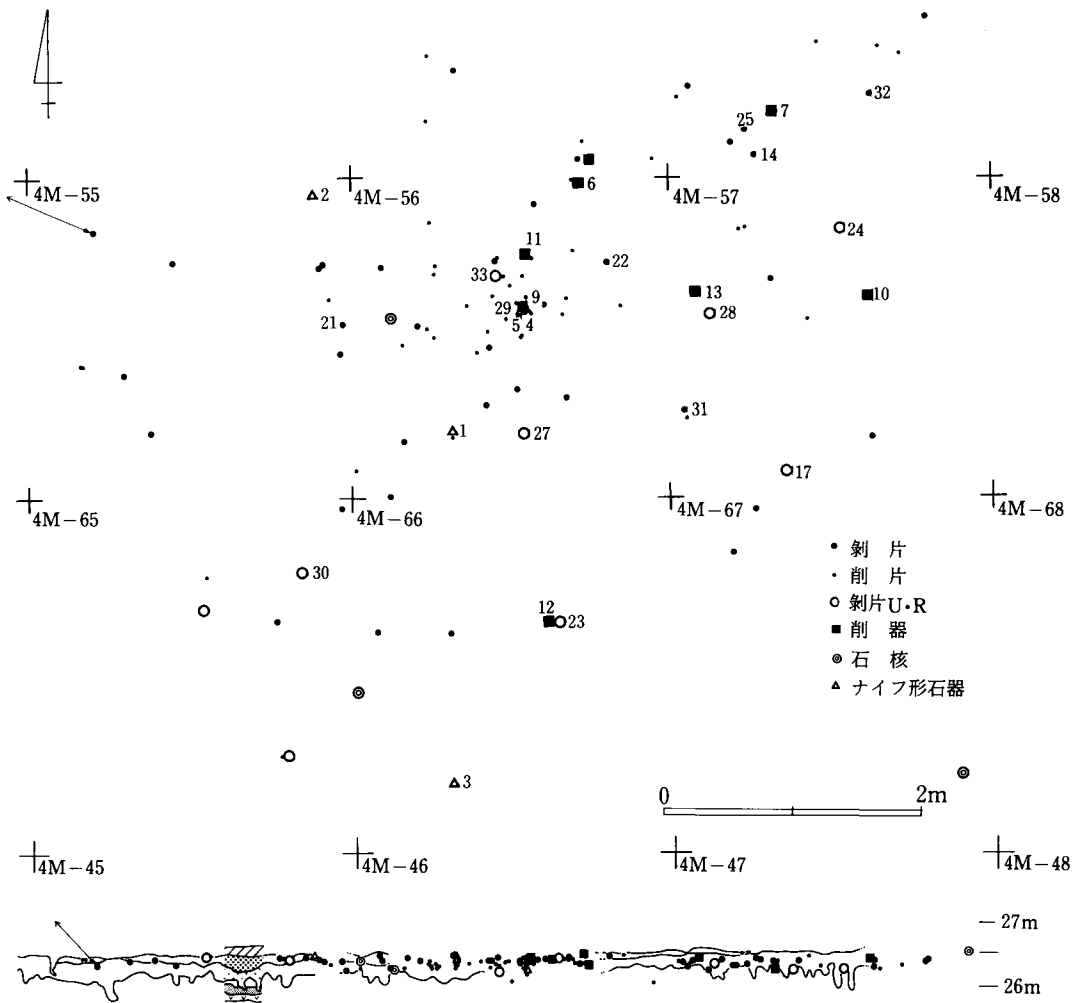
a) **分布状況** 第2、第3ブロックの西側にある。両ブロックとは数メートルの無遺物帯を境として隣接関係にある。4M-56区のほぼ中央に剝片を主とする剝片類の比較的集中する部分があり、その周辺部にも広く遺物が散布している。大凡のひろがりは、長軸10m、短軸6mの楕円形を呈しているが、この長軸は、第2、第4、第6ブロックというブロック群の並び方と一致している。そして、この並存状況はコンターラインと並行関係にあることも指摘しておきたい。

器種別の分布状況としては、特に偏在的な散布状況の認められるものはないが、珪質凝灰岩製の削器類がブロック北側に散在している。なお、産出層準はソフトローム層の上部であり、既出の3ブロックと差はない。

b) **出土遺物** 122点と、比較的まとまった量の遺物が得られた。石器組成は、器種分類の難しい石器もあり、将来若干の変動が予測される。一応、ナイフ形石器3点、削器8点、使用痕のある剝片11点を主体とし、以下、石核3点、剝片45点、削片52点という構成になるが、削器類の多い点が著しい特徴と考えられる。

1はナイフ形石器である。基部端を欠損し、全形を知ることはできない。あるいは2のように打面を残していたかもしれない。素材は珪質頁岩の石刃であるが、珪化度はやや弱く、泥岩と分類する方が適切な石材である。2次加工は、(1)背面右側縁尖頭部寄りのプランティング(腹面との交角は65°前後)、(2)それに接する基部寄りの部分、及び背面左側縁基部側の浅目の調整剝離(同33°前後)の2種を使い分けており、素材の斜断など、剝片形状の大きな変形を伴う場合は(1)を、そうではなく、僅少な整形剝離には(2)を用いることを原則としている。

2は完形のナイフ形石器。基部に素材剝片の打面を大きく残す、背稜の乱れた縦長剝片を素材にしている。2次加工部位は、1と同様に2側縁に亘るが、左刃と右刃の差がある。2次加工は微細な刃潰しで、前例の(2)に近い。



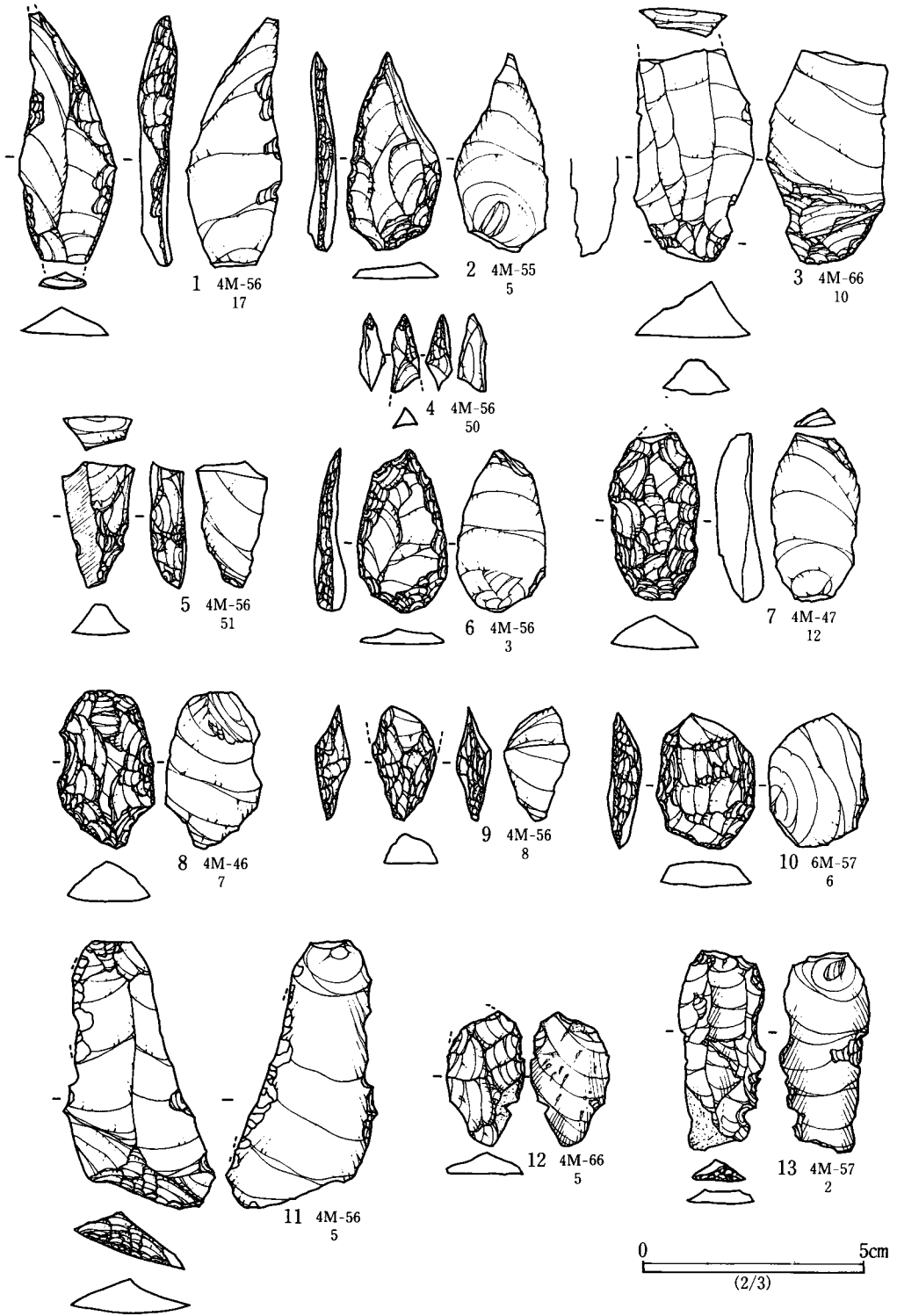
第18図 第4ブロック遺物出土状況

3は腹面剥離の認められる石器。stepの折れ面をもつ石刃尾部の破片で、尾端に粗雑な階段状剥離がある。ナイフ形石器ではあるまい。

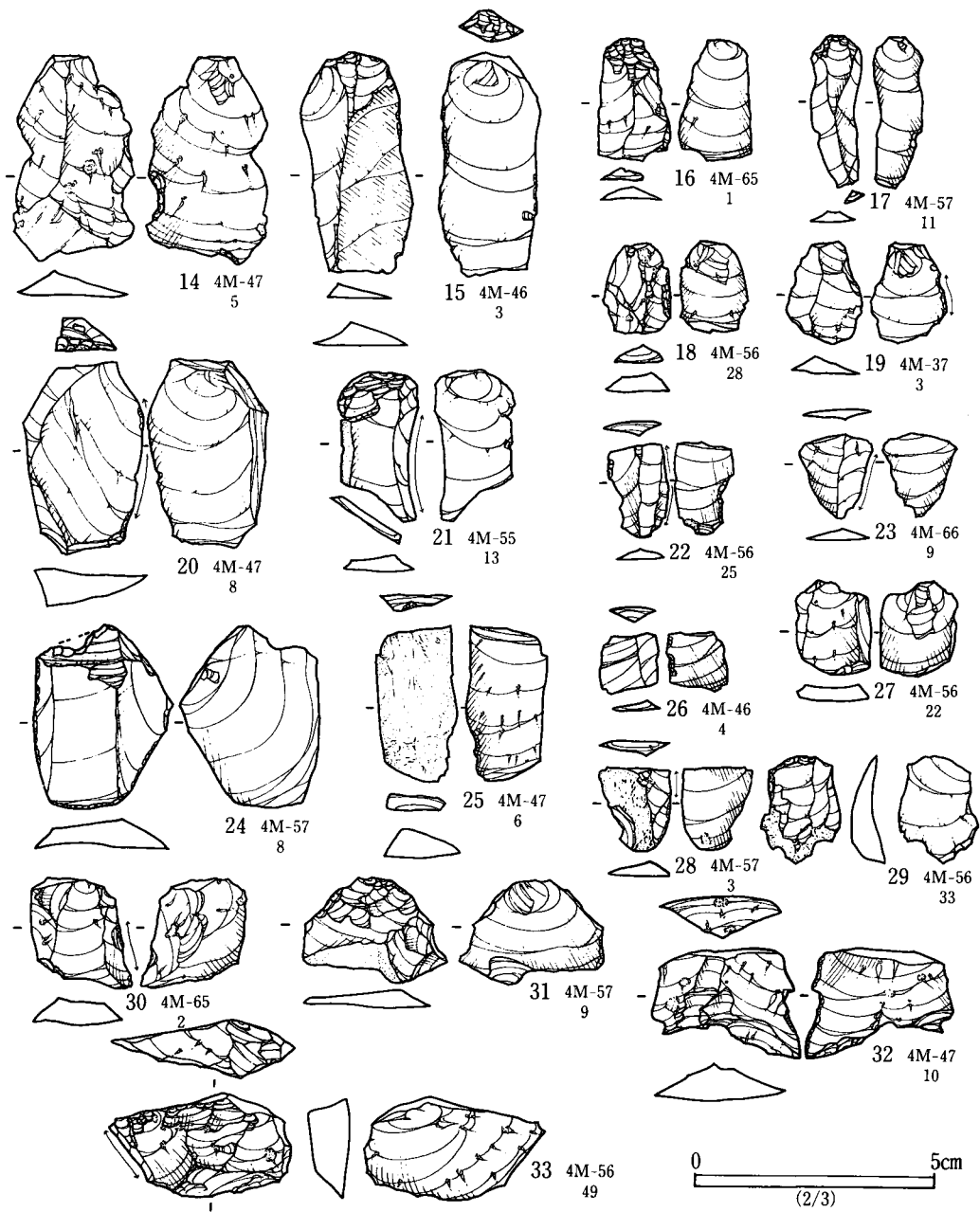
4は所謂ブランディングチップ。同種の母岩から作られたナイフ形石器は存在しない。

5はナイフ形石器、おそらくその尖端部の破片である。断面三角形の縦長剥片を素材とするナイフ形石器と見られるが、小破片であるため全体の様子は分らない。

6～10に珪質凝灰岩3の同一母岩からなる削器を集めた。縦長の剥片の打面部を除き全周に加工の及ぶ石槍状のもの（6～9）と、横長剥片の打面部と尾部側に2次加工を集中するもの（10）とがある。8と9とは本来同一個体に属するが、折損し、基部側のみ再調整されたものと見られる。本来の形態を図上復原した(第23図)。これを見ると、片面打製の細身の木葉形をした石槍と言ってもよいであろう。2次加工は、縁辺部に細かい剥離を重ねる場合(6)もあるが、



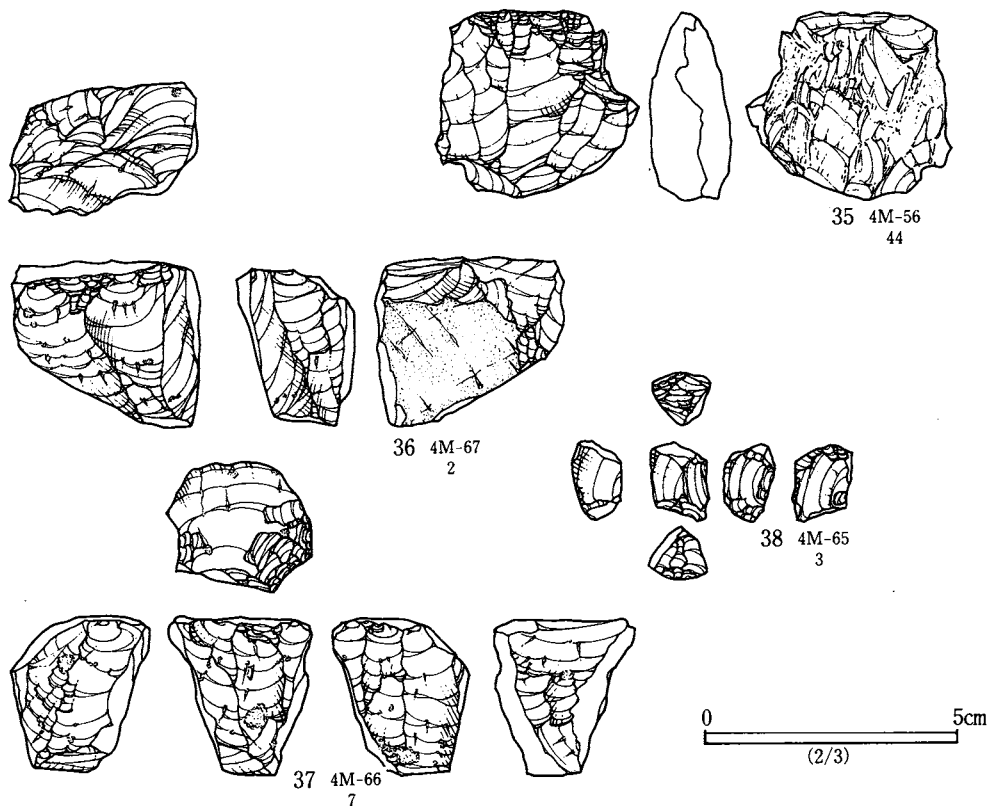
第19図 第4ブロック石器実測図(1)



第20図 第4ブロック石器実測図(2)

角度の浅い面的な剥離を行うのが一般的である(7~10)。しかし、その場合でも、背面が完全に剥離痕に被覆されることは無く、背面中央に古い剥離面を残すという特徴が認められる。

この他に削器と分類し得るものが3例ある。11は両設打面から落された石刃状の剥片の尾部に直線的な2次加工の認められるもので、端削器であろう。刃角は57°の前後で、端削器としてはやや緩斜な作業角である。12、13は側削器としたが、2次加工は顕著でない。13は複剥離打



第21図 第4ブロック石器実測図(3)

面をもつ石刃を素材としている。尾部の剝離はアクシデントによるものかもしれない。

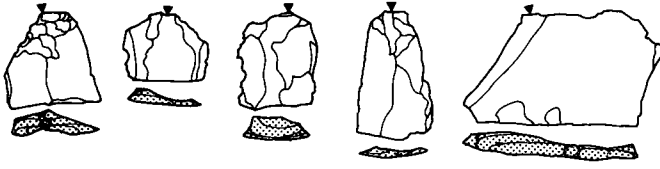
14～33に各種の剝片をまとめた。石刃状の縦長のものが大勢を占める。珪質頁岩製のもの(15、20、21、24)の中には精細な打面の調整痕を留めるものがあるが、石刃として定型的なものを組織的に生産した様子は認められない。黒曜石には60点の剝片、削片が存在するが、そのうち19点に折損が観察される(第22図)。折損指数は32で、第3ブロックのそれが72であったから、相対的に低率であるにせよ、3分の1の剝片が折損していることになる。しかし、60点のうち半分は削片・碎片なので、大き目の剝片の相当量が折損を受けている事実は指摘しておいてよいであろう。

石核は35～37の3点があり、35が珪質凝灰岩3、36、37は黒曜石5の同一母岩である。

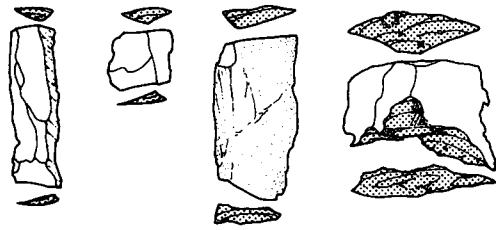
35は背部に原礫面を留める偏平な石核で、細長い平坦打面が認められる。剝片の剝離はこの打面長軸に平行して連続的に行なわれている。作出された剝片は比較的幅広であるが、縦に長いものと考えられる。6～10の削器の素材も本石核から得られた剝片である。

36、37は同一母岩の分割により生じた2個体の石核。36は非調整の複剝離打面をもつもので、35と同様に打面長軸に平行する剝片剝離痕がある。最終剝離による剝片は *outrépassé* となり、

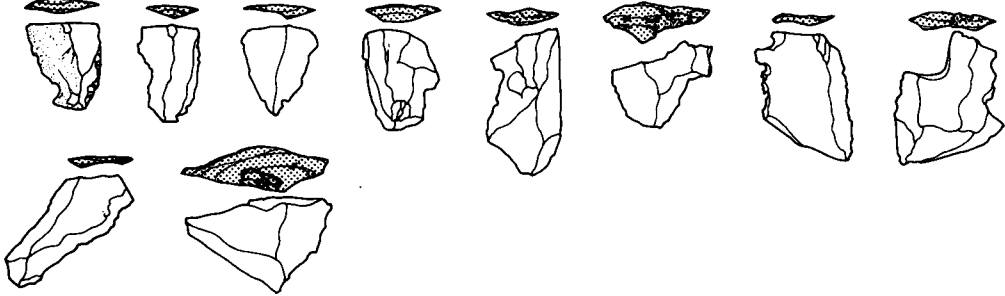
頭部



胴部



尾部



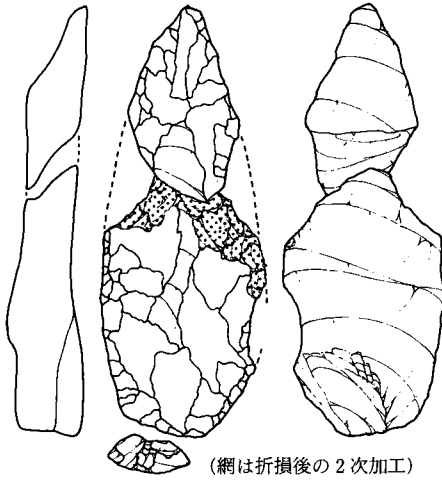
第22図 第4ブロックの黒曜石製折断剝片(2/3)

角礫面である石核背面を切り取っている。一方、37は、やはり背面に角礫面を一部残置するが、剝片剝離は打面を半周し、更に、打面の一部には明らかに打面細調整が施されると共に、豎縞状剝離面に近い作業面を保有するなど、企画性のある石刃状縦長剝片の生産を窺うことが可能である。

38はメノウの直方体に近い剝片の稜線上に細かい潰痕の看取される石器である。この種の石器はいろいろな遺跡から時々採集されることがあり、しかも、決った様に白色のメノウや石英を素材にしている。未だ十分な吟味のなされたことはないが、稜線の潰れ具合から、一種のパンチあるいは楔として使用されたものではないかと考えられる。類例は先土器時代以降の各時代にあるようである。今後の検討を俟ちたい。

c) 石器石材 本ブロックの石器石材は第I文化層の典型的な状況を示している。すなわち、珪質頁岩、黒曜石、珪質凝灰岩の3者を基本構成として、これに異種石材、例えば本ブロックに於いては、凝灰岩、メノウ、安山岩が付加される。

珪質頁岩には8種類の母岩が存在する。各母岩共に少量の資料しか含んでいない。8種の母



第23図 削器の折損と再生 (1/1)

岩のうち、半数が別ブロックに同一母岩が存在する。特に第2ブロックとは緊密な関係があったらしく、この4種の全てを共有し合っている。各母岩はブロック内にまばらに散布し、接合するものもない。

黒曜石は4母岩を分離した。黒曜石4は第3ブロックに集中する母岩で、本ブロックには削片が2点あるのみである。黒曜石は第2地点の6ブロック間に万遍のない分布を見せているが、第3、第5ブロックに稀薄で、第2、第4ブロックに特に集中している。黒曜石6は第4、第6ブロックに集中し、黒曜石8も同様の状況を示している。このことから、第4ブロックは、第2、第6の両ブロックと特に関係が深いよう

第4表 第4ブロック遺物集計表

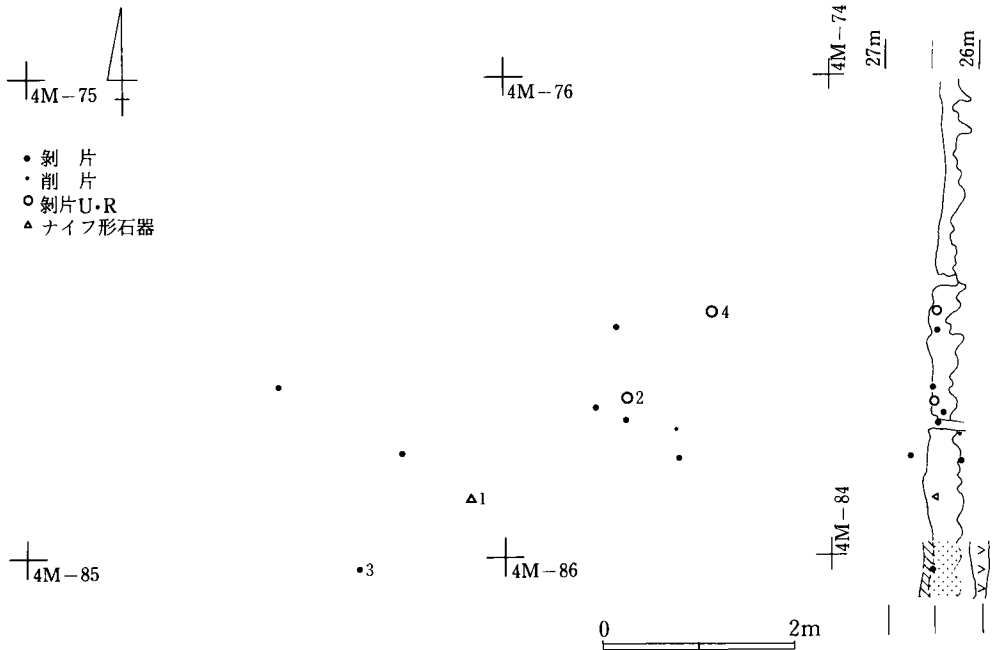
母岩番号	ナイフ形石器	削器	削片U 削片R	石核	削片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 6	1	0	0	0	2	2	5	4.1	11.62	4.1
珪質頁岩 7	0	0	1	0	3	2	6	4.9	18.90	6.7
珪質頁岩 9	0	0	1	0	2	2	5	4.1	10.16	3.6
珪質頁岩 10	0	0	0	0	0	1	1	0.8	1.91	0.7
珪質頁岩 11	0	0	0	0	2	0	2	1.6	6.95	2.5
珪質頁岩 14	1	0	0	0	0	0	1	0.8	17.15	6.1
珪質頁岩 15	0	1	0	0	0	0	1	0.8	11.18	4.0
珪質頁岩 16	0	0	0	0	1	0	1	0.8	0.63	0.2
黒曜石 4	0	0	0	0	0	2	2	1.6	0.17	0.1
黒曜石 5	0	1	4	2	17	20	44	36.1	90.37	32.0
黒曜石 6	0	1	3	0	8	7	19	15.6	25.42	9.0
黒曜石 8	0	0	0	0	4	0	4	3.3	3.40	1.2
黒曜石不明	0	0	0	0	0	1	1	0.8	0.12	0.1
珪質凝灰岩 2	0	0	0	0	1	0	1	0.8	1.09	0.4
珪質凝灰岩 3	0	5	0	1	2	5	13	10.7	54.64	19.4
珪質凝灰岩 4	0	0	1	0	0	7	8	6.6	8.03	2.8
珪質凝灰岩 5	1	0	0	0	0	2	3	2.5	15.46	5.5
凝灰岩 1	0	0	0	0	1	0	1	0.8	0.10	0.1
メノウ 1	0	0	1	0	1	1	3	2.5	2.82	1.0
安山岩 4	0	0	0	0	1	0	1	0.8	2.19	1.0
総数	3	8	11	3	45	52	122	100.0	282.31	100.0
組成比 (%)	2.6	6.6	9.0	2.5	36.9	42.6				

である。黒曜石のうち特に資料数が多い黒曜石5と黒曜石6について、その分布状況を観察してみると、前者がブロック中央に高い密度で集中分布しているのに対して、後者はそれよりも若干東側に比較的まばらな分布となっており、黒曜石6→黒曜石5という順で作業が展開した過程を想定することができるかもしれない。

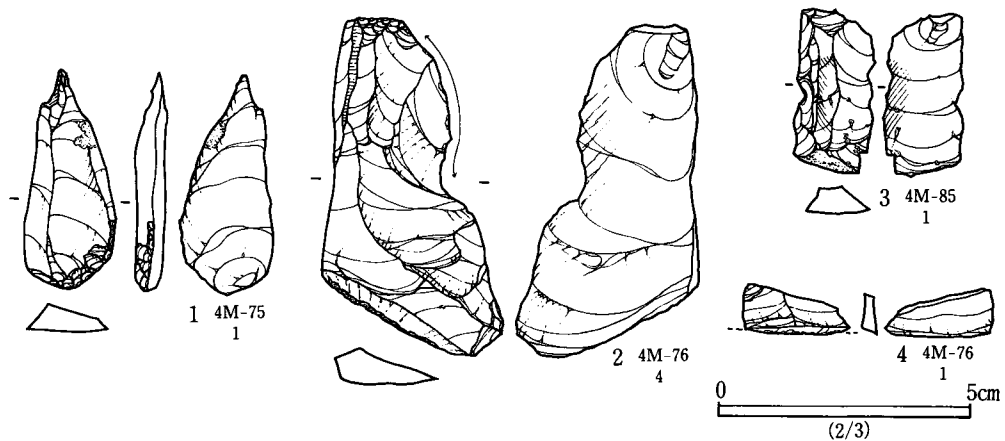
珪質凝灰岩の4種の母岩に就いても、第2ブロックとの強い関連を示唆するものとなっている。第4ブロックの珪質凝灰岩には4種あるが、このうち珪質凝灰岩2・3・4の3母岩が第2ブロックと連鎖している。そして、各母岩の保有個体数の割合も両者間で一致することは興味深い。珪質凝灰岩3は、第4ブロックに石核を含む13点の資料が集中している。第2ブロックの同種母岩の存在をどのように理解したらよいであろう。他の3者に関しては積極的に需給関係を想定することは困難である。各母岩の分布状況を見ると、各母岩共にブロック中央に分布する傾向が強く、これは黒曜石5の分布域とよく重なり合っている。

d) 小結 第4ブロックは第2地点では最も散布範囲が広く、かつ遺物量も多いブロックである。この背景に関しては後で触れることにする。石器組成としては、ナイフ形石器3点、削器8点、使用痕ある剥片11点など、切削具が卓越している。しかし、第3ブロックと同様に、黒曜石製の折断剥片も多くあり、これらの機能が未知であるため、形態論的な組成は議論し得るのであるが、場の機能を考察するための手懸りの一環を欠いている。

第5ブロック (第24・第25図、図版7・11)



第24図 第5ブロック遺物出土状況



第25図 第5ブロック石器実測図

a) 分布状況 第4ブロックの南側に小範囲のまとまりがあり、これを第5ブロックとしたが、僅かに11点の資料しか含んでいない。遺物は4M-75区から76区にかけ、東西約5mに亘ってまばらに散布していた。産出層準はソフトローム層上部である。

b) 出土遺物 11点の遺物の内訳は、ナイフ形石器1、使用痕のある剥片2、剥片7、削片1となり、削片数が少ないことが特徴と言えるかもしれない。

1は珪質凝灰岩製のナイフ形石器である。平坦打面をもち先細りの縦長剥片の背面基部右側縁に細かな2次加工が加えられている。簡素ではあるが、本文化層の通例のとおり、ナイフ形石器の基部を丸く整える加工である。

2は1と同一の母岩から剥離された剥片である。縦長の石刃状をしている、打面は1と同様に1枚の剥離面からなる平坦打面で、これに接して細かい剥離が背面頭部に繰り返されている。剥離は浅いstepで、頭部調整の一種とも見られよう。尾部側には逆位の剥離面が2枚あるが、これは打面側からの剥離面に切られている。背面右側縁、尾部側左側縁に微細な刃こぼれが著明である。キーリーの分類に従えば、右側縁のものはsmall shallow scalar (SS)であるが、尾部側はsmall stepped (SStep)であり、異った様相を見せている。

第5表 第5ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	剥片U 剥片R	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質凝灰岩 2	0	0	3	1	4	36.4	1.91	5.8
珪質凝灰岩 6	1	2	0	0	3	27.3	22.40	67.9
黒曜石 5	0	0	3	0	3	27.3	7.56	22.9
泥岩 1	0	0	1	0	1	9.1	1.10	3.3
総数	1	2	7	1	11	100.0	32.97	100.0
組成比 (%)	9.1	18.2	63.6	9.1				

3、4は剥片、若しくはその破片である。4には微細の刃こぼれ（SS）が認められる。珪質凝灰岩2の剥片はいずれも貝殻状の小型のもの、黒曜石のものは縦長の石刃状のものが2点含まれ、別に折断剥片が1点ある。

c) 石器石材 珪質凝灰岩2種、黒曜石1種、泥岩（若干珪質）1種から構成される。ナイフ形石器や使用痕のある剥片など利器のみからなる珪質凝灰岩6と石刃状の剥片の断片である泥岩1以外の2母岩は隣接するブロック間に母岩の共有関係がある。

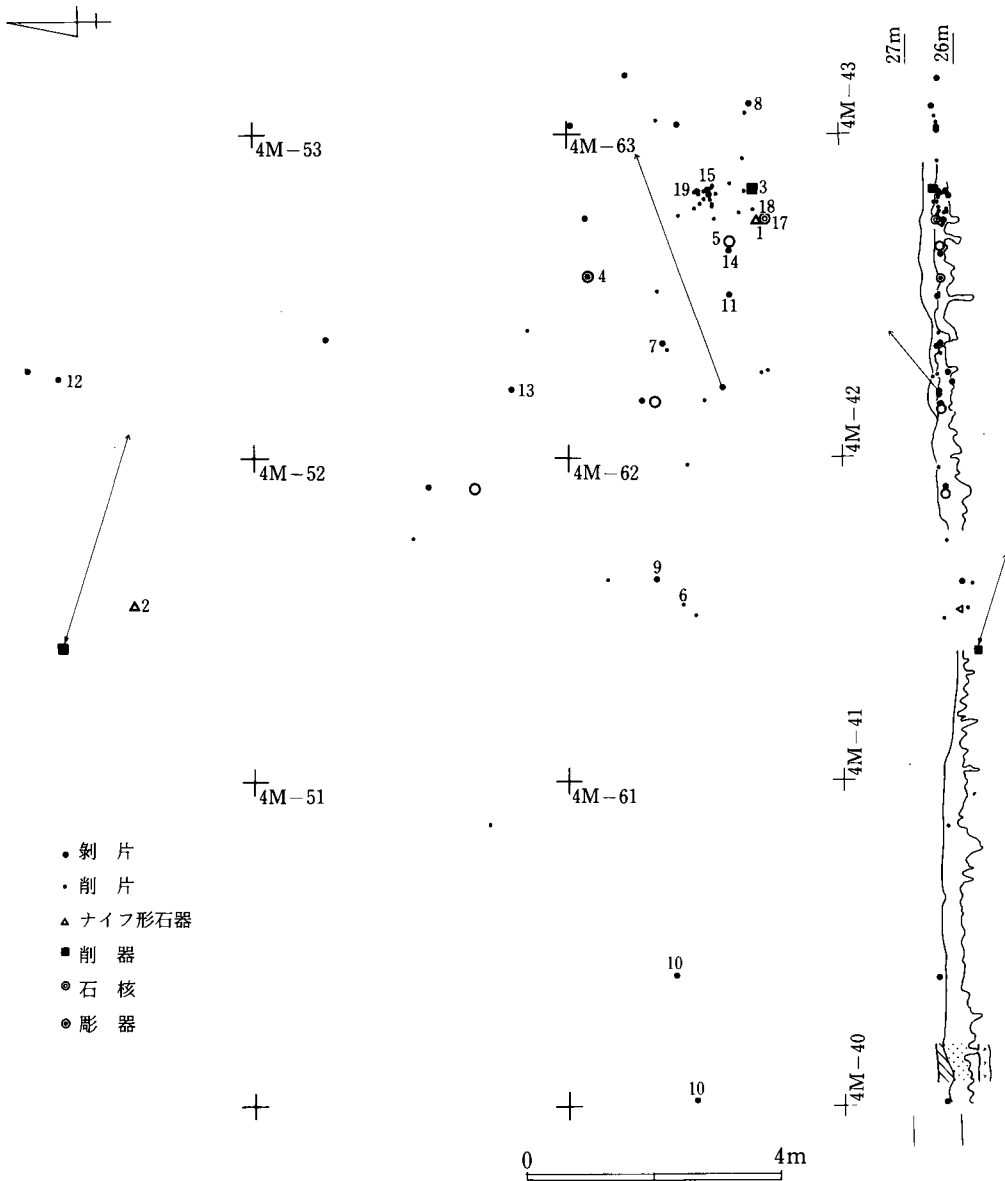
d) 小結 石器や剥片の生産過程を含まぬ小ブロックであるが、このブロックにしか存在しない石材があり、しかも、それらが石器として機能していた、あるいは機能すことを企図されていたという点で、独自の位相をもつものと評価される。

第6ブロック（第26～28、図版7・11）

a) 分布状況 第4ブロックに西接する。石器類の分布は6グリッドにまたがっているが、4M-63区に剥片と削片とが特に集中する部分があり、その北西側にも散漫に分布している。この北西側へのひろがり、ブロック周辺の土層の緩傾斜に従うものと見られる。なお、4M-63区の集中部の資料の大半は黒曜石製の剥片類で、削器やナイフ形石器を伴っている。産出層準はソフトローム層の上部である。

第6表 第6ブロック遺物集計表

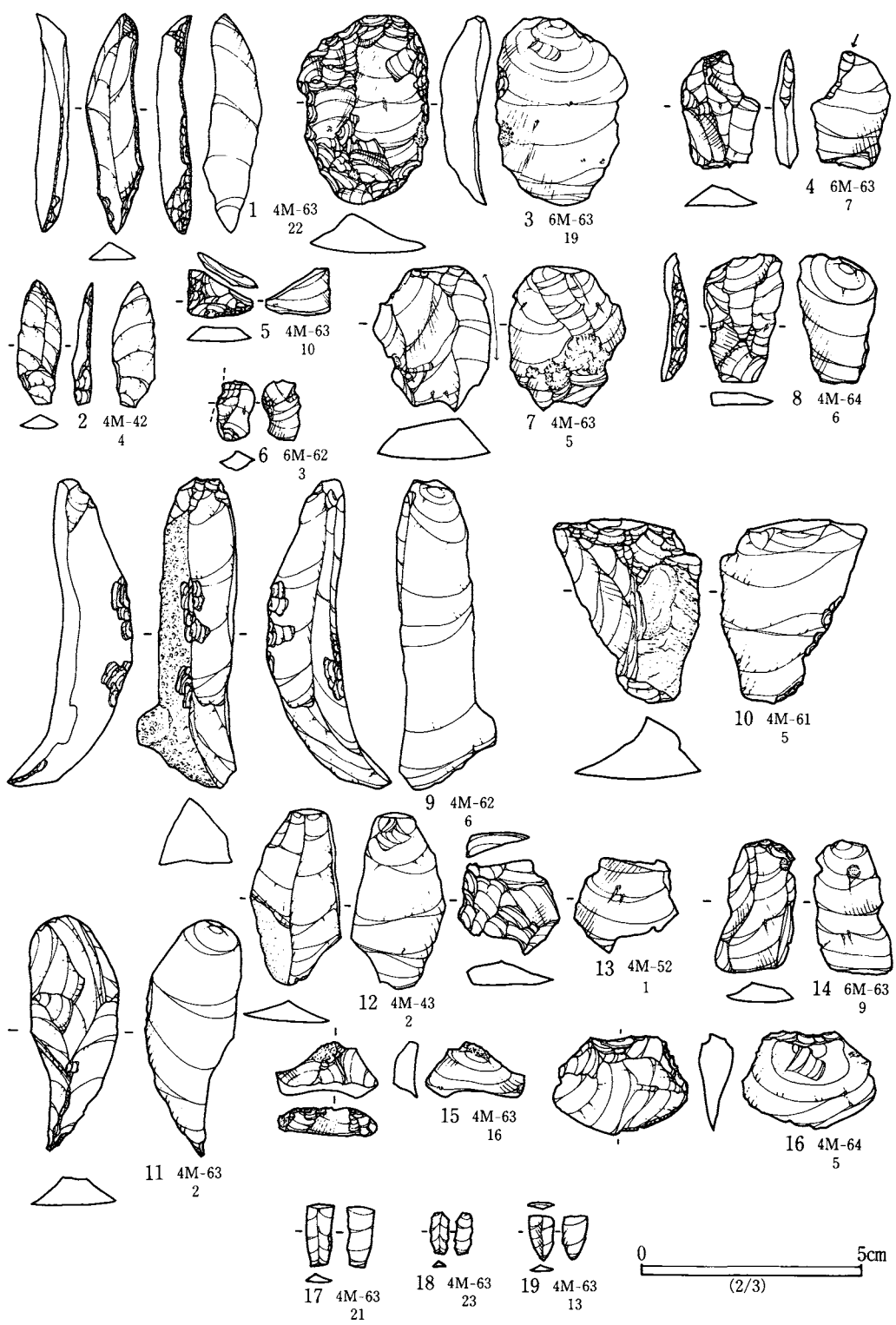
母岩番号	ナイフ形石器	削器	彫器	剥片U 剥片R	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 11	0	0	0	0	3	1	4	6.2	40.44	27.1
珪質頁岩 12	1	0	0	0	0	0	1	1.5	2.63	1.8
珪質頁岩 13	0	0	0	0	0	1	1	1.5	0.25	0.2
珪質頁岩 17	0	0	0	0	0	1	1	1.5	0.32	0.2
黒曜石 4	0	0	0	0	1	1	2	3.1	5.15	3.4
黒曜石 5	0	0	1	1	6	8	16	24.6	29.24	19.6
黒曜石 6	0	1	0	1	6	6	14	21.5	32.65	21.8
黒曜石 8	0	0	0	0	2	0	2	3.1	1.42	0.9
黒曜石 9	0	0	0	0	0	3	3	4.6	0.83	0.6
黒曜石 15	0	0	0	0	0	1	1	1.5	0.94	0.6
黒曜石 不明	0	0	0	0	1	13	14	21.5	1.48	0.1
珪質凝灰岩 7	0	0	0	0	1	0	1	1.5	3.49	2.3
珪質凝灰岩 8	0	0	0	0	1	0	1	1.5	1.83	1.2
メノウ 2	0	0	0	0	1	0	1	1.5	3.78	2.5
安山岩 3	0	0	0	0	1	0	1	1.5	15.45	10.3
安山岩 4	0	1	0	0	0	0	1	1.5	8.80	5.9
細粒凝灰岩 1	1	0	0	0	0	0	1	1.5	0.79	0.5
総数	2	2	1	2	23	35	65	100.0	149.49	100.0
組成比 (%)	3.1	3.1	1.5	3.1	35.4	53.8				



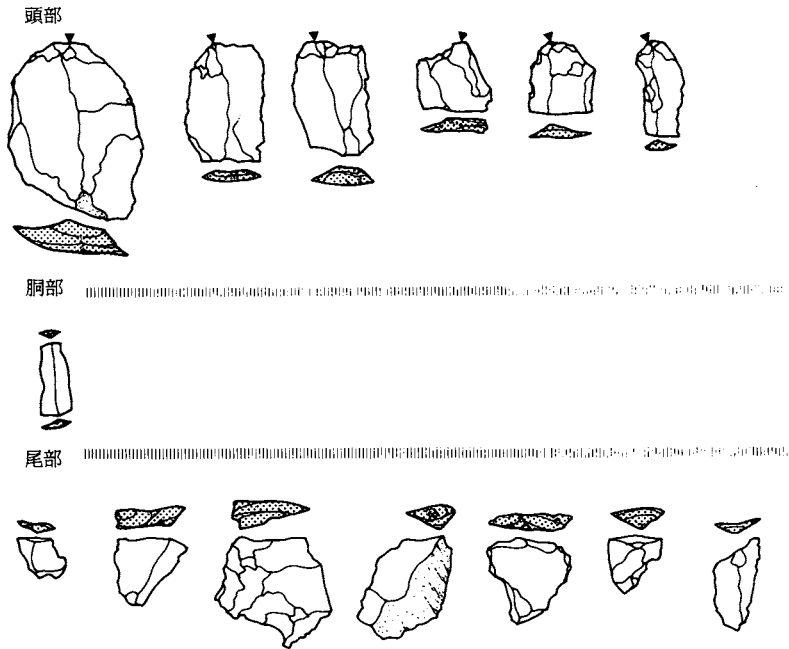
第26図 第6ブロック遺物出土状況

b) 出土遺物 総数65点の石器がある。ナイフ形石器2点、削器2点、類彫器1点、刃こぼれ、あるいは簡略な調整のある剥片2点、石核1点、剥片23点、削片35点をその内訳としている。

1は珪質凝灰岩製のナイフ形石器。石刃状の縦長剥片を素材としている。2次加工は、(1)打面部を斜めに切り取る急斜なブランディングと、(2)背面右側縁の基部側を除く全周、左側縁基部側に認められる角度の浅い細調整の2種からなる。ナイフ形石器としては特異な形態をしているので、もしかすると、例えば、錐のような別の器種に属するのかもしれない。



第27図 第6ブロック石器実測図



第28図 第6ブロックの黒曜石製折断剝片(2/3)

2もナイフ形石器であるが、たいへん粗略な作りをしている。細粒の緑色凝灰岩の縦長剝片を素材としている。2次加工は微細な小剝離で、右側縁と左側縁尖頭部寄りの部位に観察される。

3は側削器。黒曜石の楕円形をした剝片の背面右側縁に2次剝離が加えられている。刃部は軽く外彎する弧状を呈し、68°前後の刃部角をしている。

4は類彫器。尾部を折損する黒曜石の縦長剝片の打面部を打ち落すように刻打が認められる。刻打は腹面から振れるように側面へ抜けている。この刻打の打点部に接して、背面側に微少剝離痕が集中しており、この部位が作業縁であることを示唆している。

剝片類は不定な縦長のものが多い。黒曜石の剝片類は49点あり、剝片の主体を占めているが、このうち、折断剝片は14点存在する(折断指数29)。

c) 石器石材 第1文化層の特徴である珪質頁岩、黒曜石、珪質凝灰岩の3者を保有し、他に少量ずつ別種石材(安山岩、メノウ、細粒凝灰岩)を含んでいる。ただし、珪質凝灰岩は剝片が2点あるにすぎず、珪質頁岩も4母岩あるものの、総数では7点にしからず、数量的にはやはり黒曜石が卓越している。黒曜石は5種の母岩に分類した。このうち、黒曜石5・6の2母岩が比較的多くの資料を含んでいる。これら両者は第4ブロックにやはりまとまった量の母岩が分布している。また、両母岩の平面分布状況を見ると、黒曜石5が特に集中的に分布しているのに対して、黒曜石6は散漫である。従って、ここでもまた、第4ブロックと同様に、黒曜石6→黒曜石5という剝離順位が想定されるかもしれない。

これら以外の母岩で若干の注意を要するのは安山岩4である。この母岩は第4ブロックと第6ブロックに1点ずつあり、両者は接合する。第53図に接合状況を示したが、第4ブロックの剥片と、第6ブロックの側削器とが接合している。ただし、両資料共にブロック外縁部に単独で存在していたもので、ブロック間の関係を示唆するという性格の資料ではない。

d) **小結** ナイフ形石器、削器、類彫器及び剥片などを含んだブロックである。各器種を少量ずつ含む。母岩構成は多岐に亘っているが、それらの中で集中的に分布し、ある程度のブロック内における剝離作業の存在を指定し得るのは、黒曜石の2母岩にすぎない。隣接ブロックとはいろいろの共有母岩が認められるが、特にすぐ東隣りにある第4ブロックとの関係が深いようである。

第7ブロック (第29・第30図、図版12)

a) **分布状況** 第2地点西端部のブロックである。第6ブロックの南に接して、径約9mの範囲にまばらに遺物が分布している。分布に疎閑で、特にフォーカスというべき部分はない。II層下部～ソフトローム層にかけて石器の包含が確認されたが、II層中のものが目立った。

b) **出土遺物** ナイフ形石器1点の他は2次加工の顕著なものはない。石核2点、使用痕あるいは調整痕のある剥片8点、剥片10点、削片1点の合計22点の遺物から構成されている。

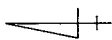
ナイフ形石器(1)は石刃製のもので、一端の破片である。図とは逆に、おそらく尖端部の破片であろう。一側縁部に急角度のプランティングが看取される。剥片には珪質頁岩製の石刃、若しくは石刃状の縦長剥片(4、8、10など)と、黒曜石素材の縦長不整形のものがある。15点の剥片のうち8点が折損している(折断指数53)。5は背面右側縁に2次加工がある。

石核は2点あるが、いずれも消耗した段階にあり、2、3、5、6、11、12、14などの寸づまりの矩形の剥片が作出されている。

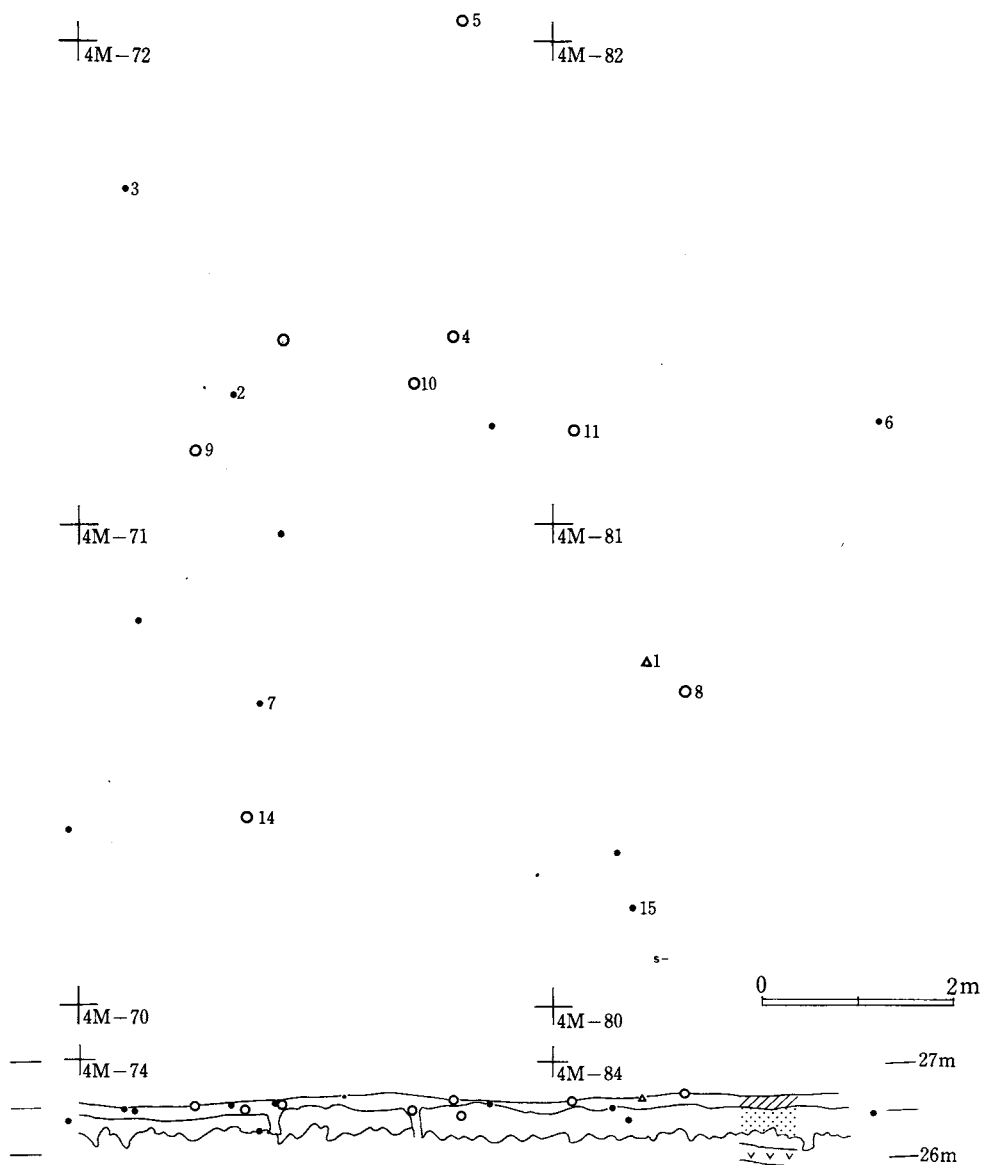
c) **石器石材** 本ブロックには、珪質頁岩4種と黒曜石4種の合計8種の個別別資料が含まれ

第7表 第7ブロック遺物集計表

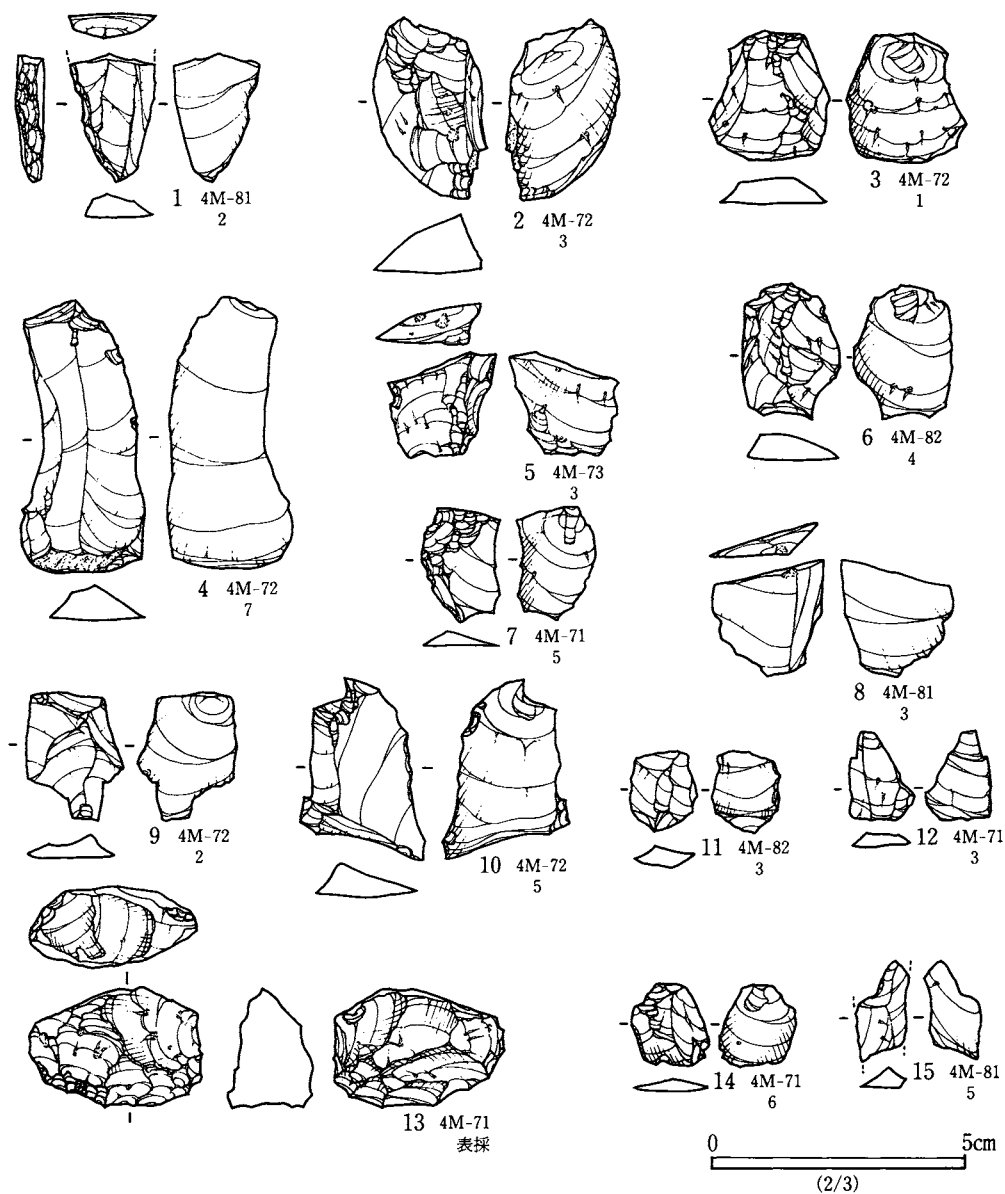
母岩番号	ナイフ形石器	石核	剥片U 剥片R	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 9	1	0	0	0	0	1	4.5	1.99	2.3
珪質頁岩 10	0	0	1	0	0	1	4.5	4.58	5.2
珪質頁岩 11	0	0	3	0	0	3	13.6	12.04	13.8
珪質頁岩 18	0	0	1	0	0	1	4.5	1.74	2.0
黒曜石 4	0	0	1	4	0	5	22.7	5.94	6.8
黒曜石 5	0	2	2	4	1	9	40.9	54.98	62.9
黒曜石 6	0	0	0	1	0	1	4.5	4.99	5.7
黒曜石 8	0	0	0	1	0	1	4.5	1.12	1.3
総数	1	2	8	10	1	22	100.0	87.38	100.0
組成比 (%)	4.5	9.1	36.4	45.5	4.5				



- 剥片
- 削片
- △ ナイフ形石器
- 剥片U・R



第29図 第7ブロック遺物出土状況



第30図 第7ブロック石器実測図

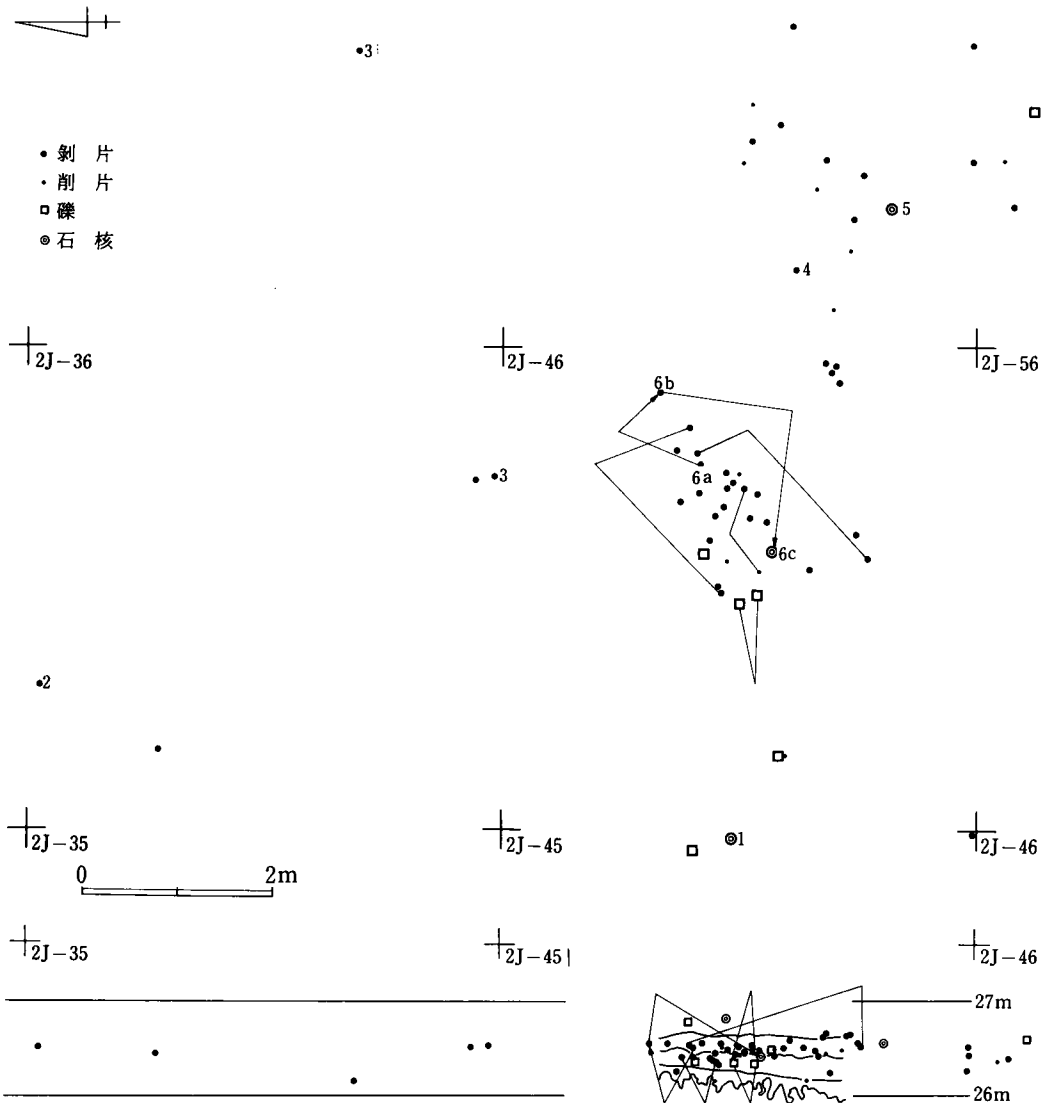
ている。このうち、黒曜石5に9点が集中するものの、他はいずれも極く少量の資料を含んでいるにすぎない。黒曜石との関係では、やはり最も近接する第6ブロックとの親密度が高く、本来同一のブロックとして処理した方が良いのかもしれない。

d) 小結 剥片類を主体とし、散漫な分布状況を示すブロックである。単純な石器組成、少量の遺物量などを特徴として指摘することもできよう。

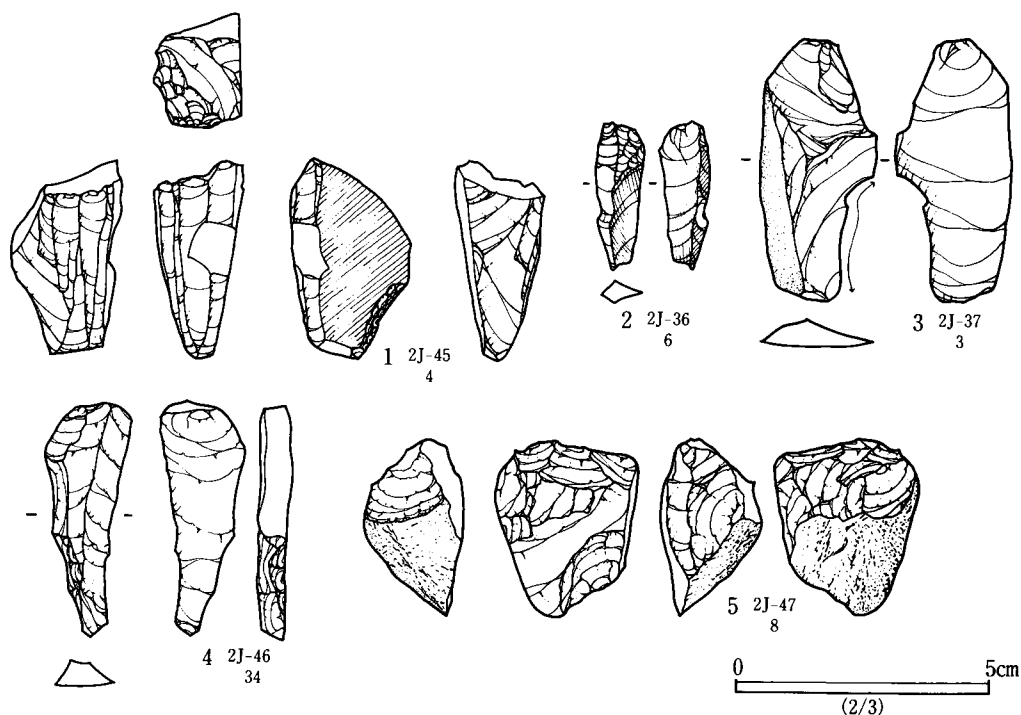
第8ブロック (第31～第33図、図版7・12)

a) 分布状況 第2地点とは埋積谷を距てた対岸にある。調査時には第3地点と呼称した地点に相当する。遺物は2J-46、47区から多く検出されているが、明らかに2J-46区を中心とするまとまりと、2J-47区を中心とするまとまりとに区分することができる。前者をクラスターa、後者をクラスターbとする。

クラスターaは安山岩の石核、剥片の集中部分を中心に、11種にのぼる各種の母岩を少量ずつ含んでいる。また、7点の礫のうち5点が帰属する。安山岩製の石器のうち、石核に剥片が2点接合するものがあり、かつ、同種石材が狭い範囲にまとまっていることから、剥片の製作



第31図 第8ブロック遺物出土状況



第32図 第8ブロック石器実測図(1)

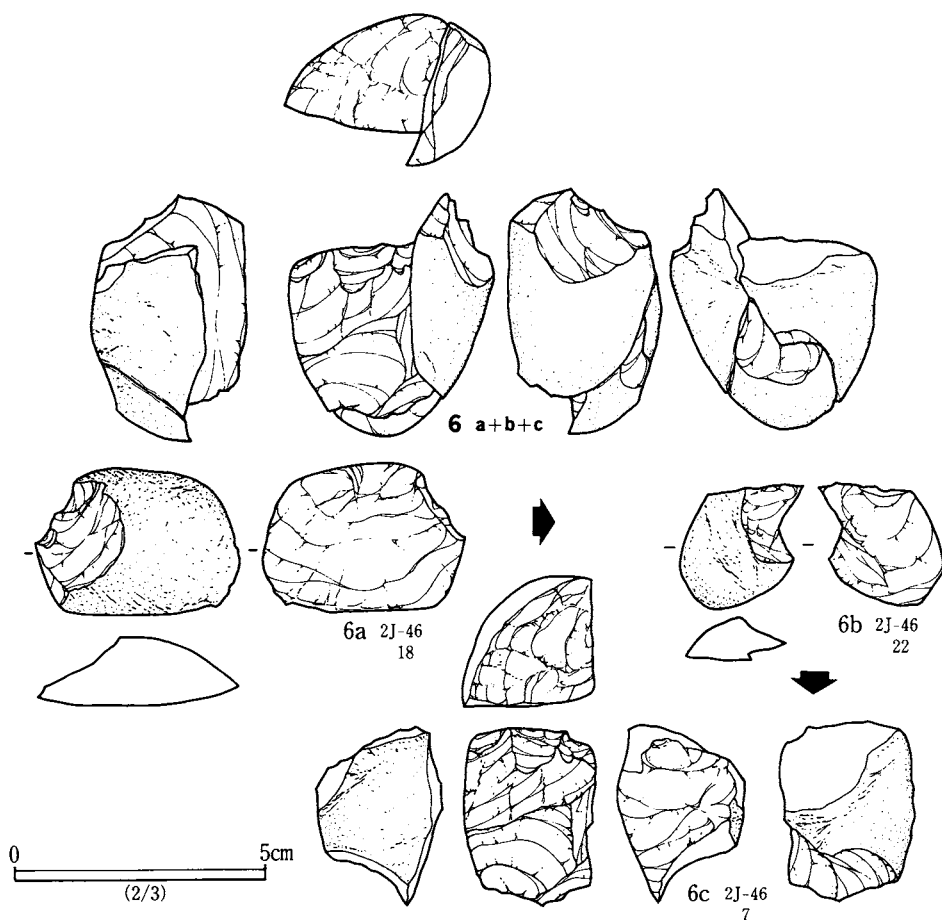
を想定することができる。

一方、クラスターbは、クラスターaほどの集中度はないものの、3m×4mぐらいの範囲内に剥片類を主体とするまとまりがあり、石核1点をもあわせもっている。興味深いことに、この集中を構成している剥片や石核の石材の一部はクラスターaに集中していた石材と同種のものであり、両クラスターは類似した背景のもとに形成されたものとも見られるが、クラスターbには接合資料が欠落するばかりか、小型で不整な剥片類が卓越している。

次に石器の産出層準を検討すると、第31図土層断面図によく窺われるように、II層中に多く、ソフトローム層の上部に及んでいる。第1～第7ブロックとの層準の対比は困難である。また、細石核の産出層準は表土中であり、本ブロックとの直接的な関連性を指摘することはできないようである。調査時に、本ブロックの周辺ではソフトローム層(III層)を上下に2分し、III a層、III b層と細分されているが、基準が明記されておらず、これ以上言及することが困難であるが、第1節の分層と対応しようか。

b) 出土遺物 本ブロックの遺物の大半は剥片類であり、2次加工の明瞭な石器を含んでいない。他に石核が2点、礫が7点ある。

1は珪質頁岩製の細石核。前記の如く混入品である可能性が高いが、確定的とは言えない。コアブランクは節理面で分割された楔形の剥片であり、あまり顕著な整形剥離は認められないが、後縁端に細かい剥離痕が存在する。打面は分割面に大き目の剥離を加え、さらに、作業面



第33図 第8ブロック石器実測図(2)

と接する打面端にも細かな打面調整剥離が重ねられている。この調整剥離は作業面を全て切り、この石核が機能を失っていなかったことを物語っている。細石刃の剥離は打面長軸と直交しており、石核打面を約半周する。型式学的には野辺山型の範疇に属するものと考えられる。

2～4に縦長の整った剥片を選んで示した。2は良質の黒曜石、3は珪質頁岩、4は凝灰岩と石材の変化に富んでいる。安山岩製の剥片は、横長の不定形なものである。5がその石核、6は石核に2枚の剥片の接合する状況を示している。

縦長剥片の生産技術については良く分らないところが多いが、調整打面をもつものが多く、4では石核の側面調整痕があるなど、比較的組織的な石刃状の縦長剥片の生産過程が予測される。一方、6に典型的の安山岩の剥片剥離は、分割礫を用いた打面一作業面置換型の手法を多用し、両者の差異は際立っている。

c) 石器石材 珪質頁岩1種(細石核は除外)、砂岩6種、凝灰岩3種、黒曜石、チャート、流紋岩、泥岩各1種、安山岩6種を含み、合計すると20種にも達する多種の石材が供用されている。しかも、安山岩5を除くといずれも5点以下の資料しか持っていない。

これらのクラスター別の分布を見ると、意外なことに共通するものは3種あるにすぎず、安山岩5を除くと、殆んど母岩を共有していないという状況である。

礫は砂岩5が比較的大き目である他は小型のものが多く、3点の完形品を含んでいる。いずれも赤変、黒色付着物等の受熱の状況を呈していない。一部に後世の混入品があるかもしれない。いずれにせよ、礫群、配石などの遺構を形成しているのではない。

d) 小結 2箇所のクラスターから構成されたブロックである。2次加工のある石器がないので不明なところが多い。石刃に近い縦長の剥片と、横長の剥片を生産する相補的な2種の剥片剥離技術に立脚している。両クラスターの関連性は良く分らない。ほぼ同数ずつ資料を共有する母岩があるが、必ずしも両クラスター同時存在の決め手にはならない。むしろ、資料の遺存状況は、両クラスター間に僅かの時間差のあることを示唆しているようにも思われ、仮に時間差を前提とすれば、クラスターb→クラスターaという順番になると考えられる。これは、同一集団の回帰的行動を反映するものと理解されるが、この推論自体に格別の証拠がある訳では勿論ない。

第8表 第8ブロック遺物集計表

母岩番号	石核	細石核	剥片	削片	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
安山岩 5	2	0	18	5	0	25	40.3	105.57	14.6
安山岩 6	0	0	1	0	0	1	1.6	20.18	2.8
安山岩 7	0	0	1	0	0	1	1.6	17.13	2.4
安山岩 8	0	0	1	0	0	1	1.6	5.44	0.8
安山岩 9	0	0	4	0	0	4	6.5	43.24	6.0
安山岩 10	0	0	1	1	0	2	3.2	10.95	1.5
安山岩 不明	0	0	0	2	0	2	3.2	0.60	0.1
砂岩 2	0	0	3	0	0	3	4.8	5.22	0.7
砂岩 3	0	0	2	1	0	3	4.8	8.32	1.1
砂岩 4	0	0	0	0	1	1	1.6	256.60	35.4
砂岩 5	0	0	0	0	2	2	3.2	24.86	3.4
砂岩 6	0	0	1	0	0	1	1.6	1.90	0.3
砂岩 7	0	0	0	0	1	1	1.6	98.80	13.6
凝灰岩 3	0	0	2	0	0	2	3.2	5.58	0.8
凝灰岩 4	0	0	4	1	0	5	8.1	11.64	1.6
凝灰岩 5	0	0	0	1	0	1	1.6	0.07	0.01
珪質頁岩 19	0	1	0	0	0	1	1.6	13.69	1.9
珪質頁岩 20	0	0	1	0	0	1	1.6	5.34	0.7
黒曜石 10	0	0	1	0	0	1	1.6	1.19	0.2
チャート 3	0	0	0	0	1	1	1.6	14.49	2.0
流紋岩 2	0	0	0	0	2	2	3.2	48.37	6.7
泥岩 2	0	0	1	0	0	1	1.6	25.01	3.5
総数	2	1	41	11	7	62	100.0	724.19	100.0
組成比 (%)	3.2	1.6	66.1	17.7	11.3				

第9ブロック (第34～第36図、図版8・12)

a) 分布状況 第4地点にある。この地点には3箇所のブロックが存在するが、産出層準の差異により、上下2枚の文化層に分離された。第9ブロックはこのうち上位のブロックである。他の2ブロックはより下層にあり、第II文化層に含まれている。

ブロックは2K-61区を中心に検出された。2K-61区中央東側に、径1.5m位の剥片を主体とする遺物集中地点があり、この北～東側にまばらに遺物が散布している。南側には4m程の無遺物の空間を介して、4点の石核類が点在している。

産出層準はソフトローム層中であることは確実なのだが、十分な記録が残されていないため、ソフトローム層内での詳細な層準の設定は困難である。しかし、第1、第2地点では、II層中へ浮上していた石器類が相当量存在していたのに対して、本ブロックの場合、そのような遺存状況を示すものが殆んど知られていないので、あるいは、若干なりとも相対的に下層に位置づけ得るのかも知れない。

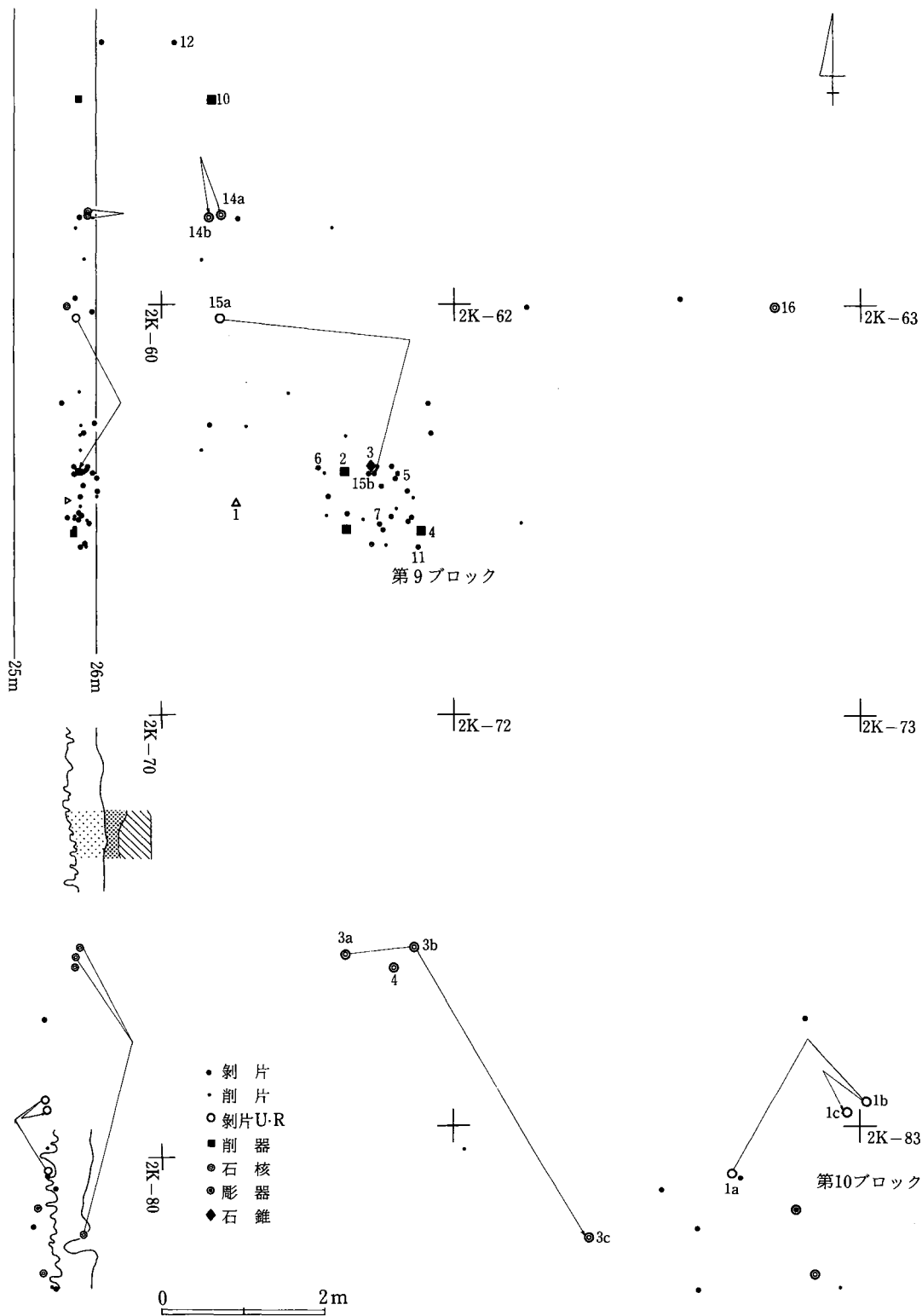
b) 出土遺物 総数53点の石器が検出された。石器組成は石核や剥片類が多く、剥片剥離に偏ったものであるが、少量のナイフ形石器や削器を伴っている。

1はナイフ形石器に分類した。横打剥片の打面部を折り取るように簡単な2次加工痕がある。2は腹面剥離のある剥片で、削器か石核か判然としない。3は石錐。4、10は石刃であるが、側縁部に2次加工が認められる。削器としよう。

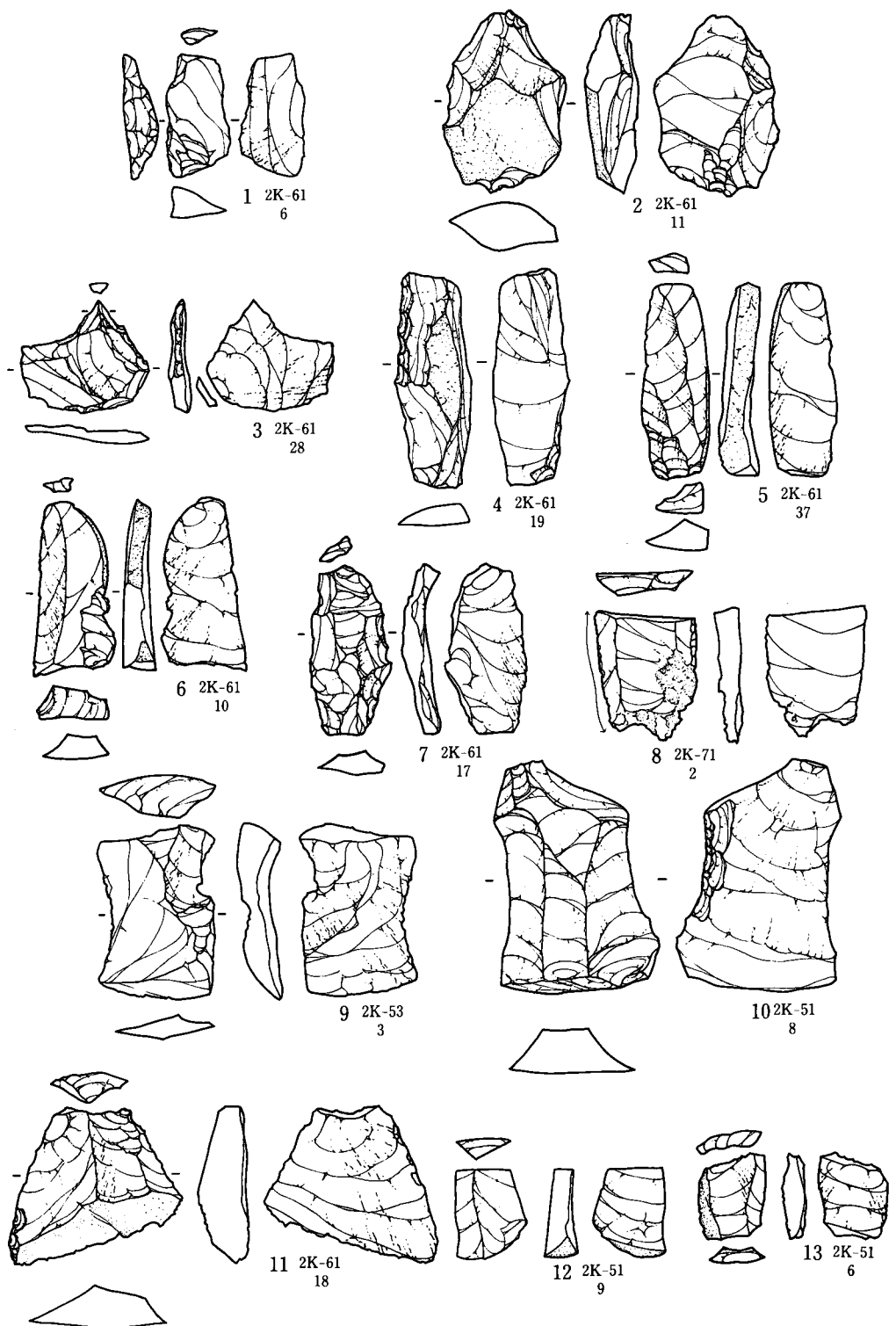
剥片には比較的整った石刃状のものが目立つ。打面は平坦な単剥離打面で、頭部調整も存在しない。しかし、5、6、8、10などの諸例を見ると、背面には稜線が並走しており、連続性を持った石刃状剥片の生産が行なわれていたことは疑うことができない。また、5、6、10などでは石核の底面が切り取られたように尾部末端に残され、更に、その面からの剥離痕を留め

第9表 第9ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	石錐	削器	剥片U 剥片R	石核	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
安山岩 12	0	0	0	0	0	1	0	1	1.9	1.94	0.3
安山岩 13	0	0	0	0	2	3	0	5	9.4	45.47	7.2
安山岩 14	0	0	1	0	3	2	0	6	11.3	127.09	20.2
安山岩 15	0	0	1	0	0	1	0	2	3.8	32.84	5.2
安山岩 16	0	0	0	0	0	1	0	1	1.9	11.09	1.8
安山岩 17	1	1	1	1	0	18	9	31	58.5	108.84	17.3
安山岩 不明	0	0	0	0	0	0	3	3	5.7	0.30	0.05
珉質凝灰岩 9	0	0	0	1	0	0	0	1	1.9	4.58	0.73
砂岩 9	0	0	0	0	1	0	0	1	1.9	106.90	17.0
砂岩 10	0	0	0	0	1	0	0	1	1.9	190.30	30.2
砂岩 18	0	0	0	0	0	0	1	1	1.9	0.11	0.02
総数	1	1	3	2	7	26	13	53	100.0	629.46	100.0
組成比 (%)	1.9	1.9	5.7	3.8	13.2	49.0	24.5				

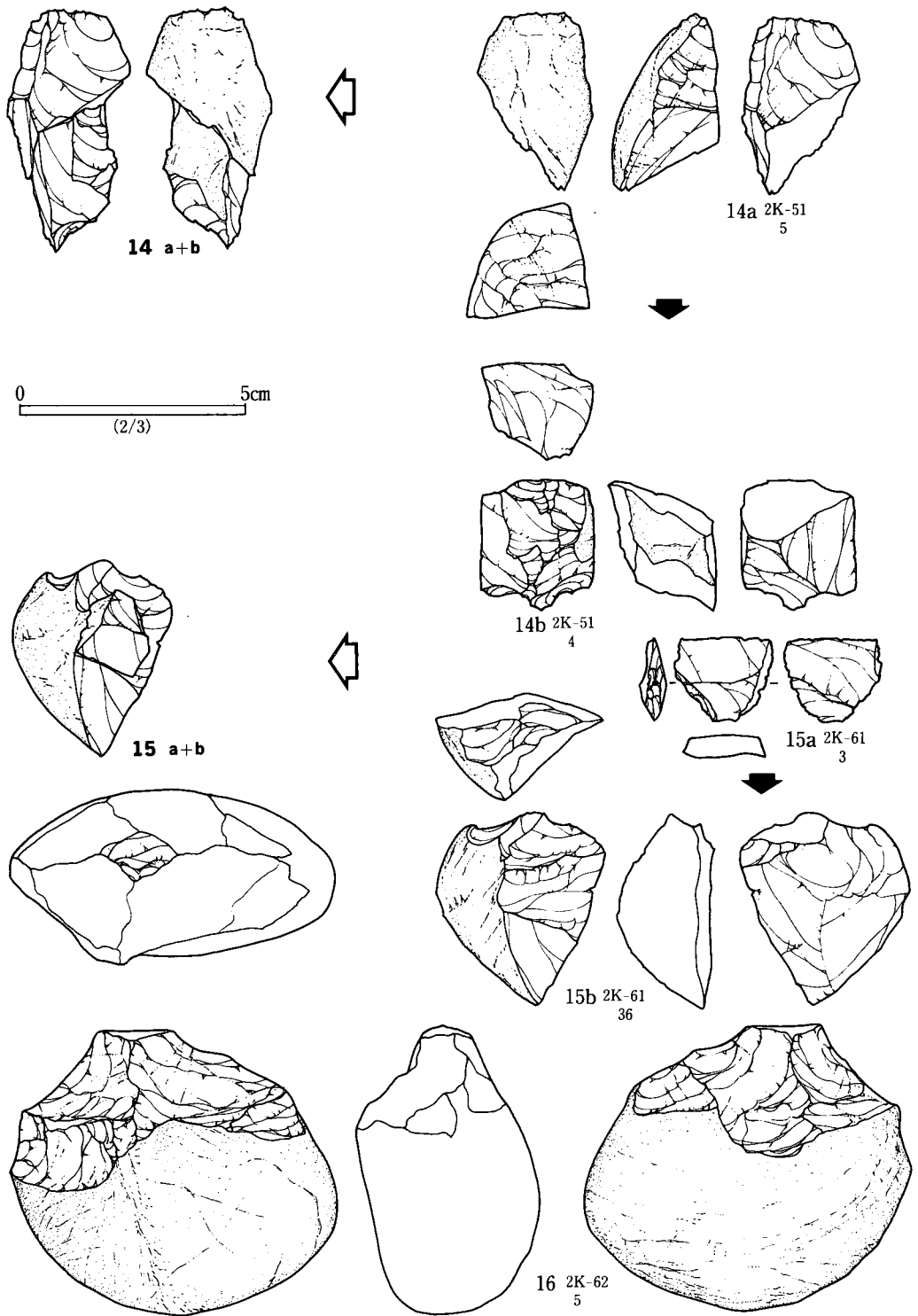


第34図 第9・第10ブロック遺物出土状況



0 5cm
(2/3)

第35図 第9ブロック石器実測図(1)



第36図 第9ブロック石器実測図(2)

ているので、比較的背の低い両設打面石核の存在が予想される。4、7では、背面に横位の剥離痕が看取されるが、それらはいずれも横長の剥離面であり、あるいは、石刃状剥片の剥離に先行する石核の側面調整を示唆するものかもしれない。1や3の素材剥片や、11などはこの段階の調整剥片であるかもしれない。

14は厚手の剥片を分断して石核を生じている例である。石刃状の剥片とは別個体の安山岩で、小型の剥片を剥離している。15は、比較的多くの石刃状剥片を含む安山岩17の接合資料である。剥片と2次加工痕のある剥片2点が接合している。15bには礫面が多く残り、ラフな剥離が重ねられているので、打面準備の過程に生産された可能性が高い。15aは剥片尾部の破片で、一側縁にプランティング様の2次加工が認められる。ナイフ形石器の一種とも考えられよう。

16、18は同種の石核で、チョッピングツール状のもの。この石核から剥離された剥片は存在しない。また2例共にブロック外縁に位置している。素材は両例共に砂岩である。

17はブロック南端に分布した資料の接合状況である。小型の安山岩の円礫が分割され、石核2点とコアブランク1点を生じている。17a、17bが賽子状の石核、17はそのコアブランクと見られる。18の打割器状の石核の共存した。おそらく、この4点の石器は、本来はまとめて一箇所に保管されていたものと考えられる。

以上の如く、本ブロックの剥片剥離技術には、大別して2者の別があることになる。ひとつは計画的な割り方で、石刃状の剥片を企图的に量産している。もうひとつは恣意的な割り方で、横長不整な剥片を打ち落して、その中から適宜選別が実施される。両者は一集団の石器製作技術の内部で相互補完的な関係を保持している。

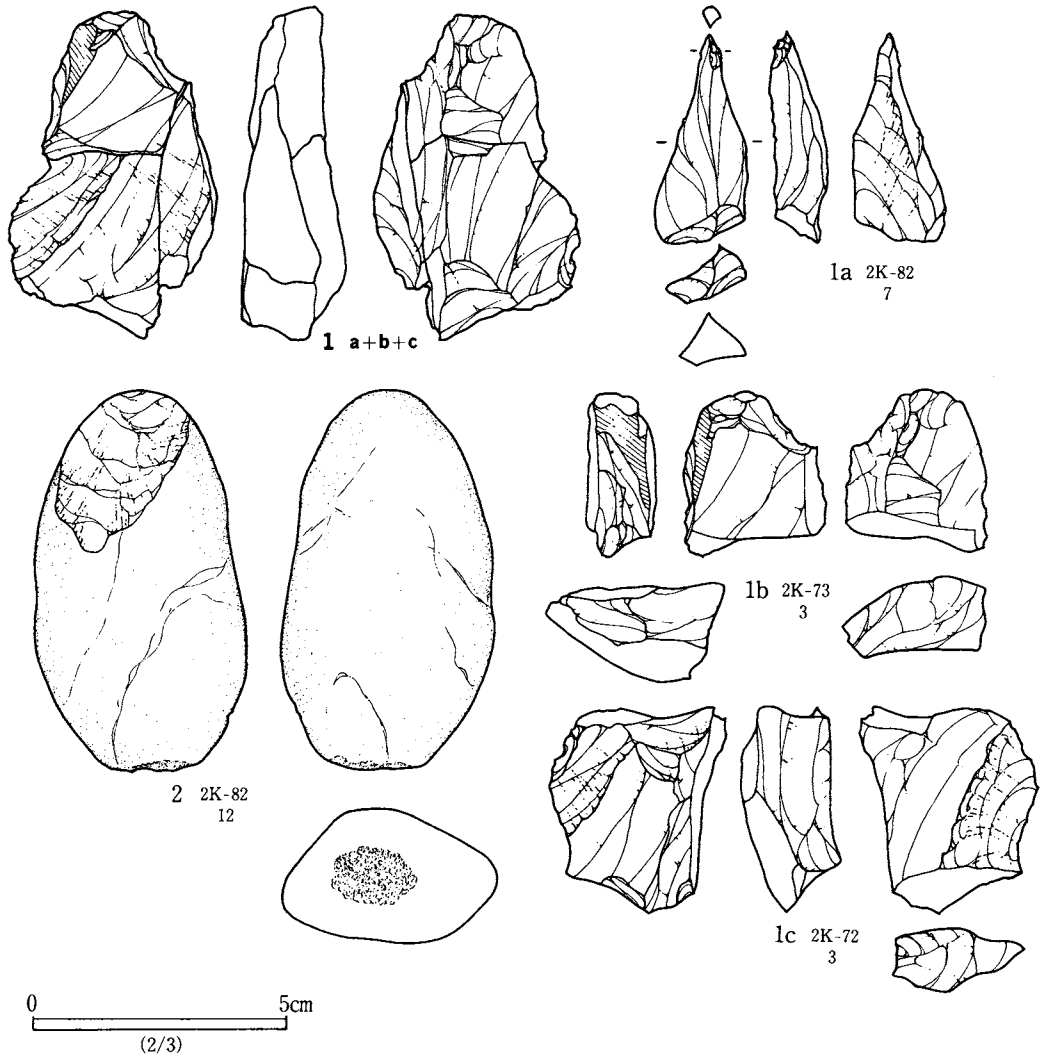
B 第II文化層 第II文化層に帰属するのは、第4地点の2ブロックと、第6地点の1ブロック、合計3ブロックがあるにすぎない。各ブロック共に規模が小さく、遺物量も少ないものの、第4地点からは炉と考えられる焼土遺構が、炭化物片集中を伴って検出され、ブロックのあり方を考察する上で重要な手懸りを与えることになった。

第10ブロック（第37～第39図、図版8・12）

a) 分布状況 第4地点にあり、第I文化層第9ブロック南端の遺物集中部と一部が重複しているが、産出層準に明瞭な差があり、かつ構成母岩も全く異っているところから、両者の弁別は容易である。

分布は2K-82区に集中しているが遺物の総数が少ないので散漫の印象を受ける。産出層準はハードローム層上部である。

b) 出土遺物 総数でも15点の遺物があるにすぎない。石核1点、石槌1点の他は剥片類によって占められている。1は剥片3点が接合した状況を示している。1aは1bと1cの分離に

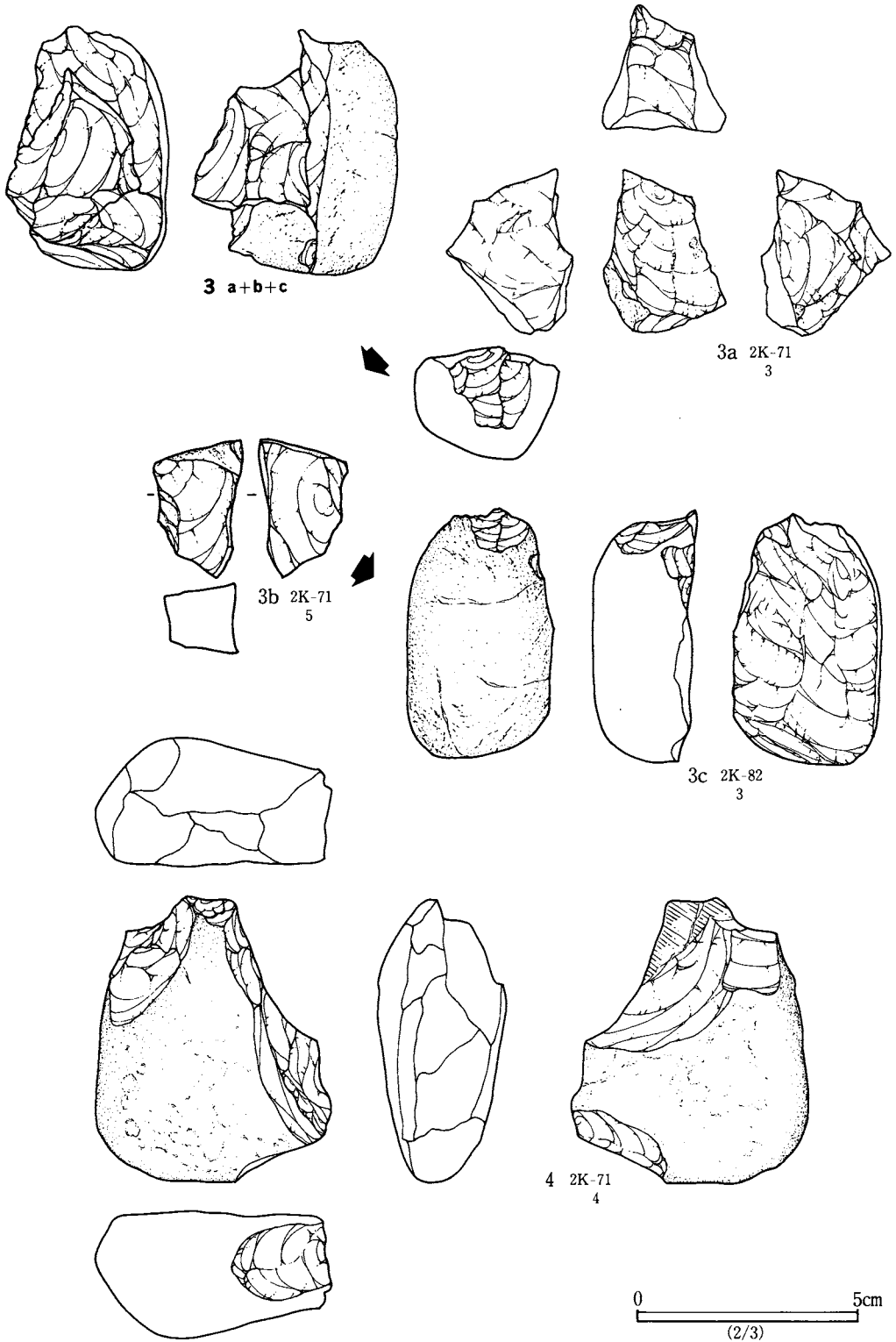


第37図 第10ブロック石器実測図(1)

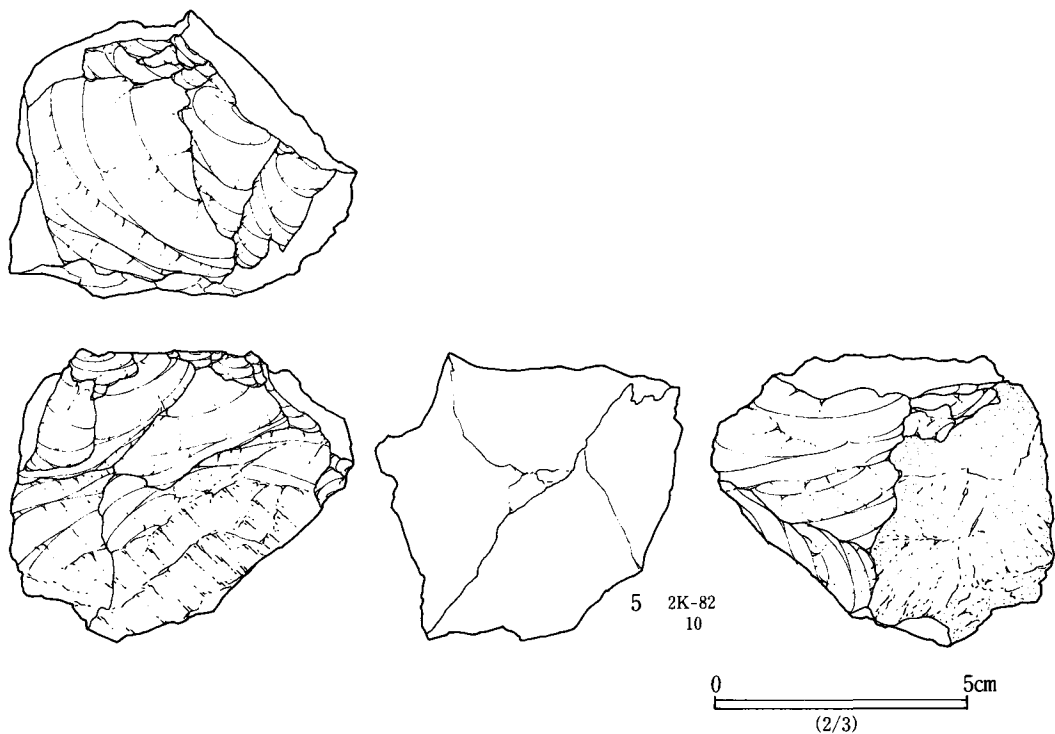
先行して、それから剥離されているので、1 b + 1 c は石核の一種と見るべきかもしれない。1 a 先端部には細かい2次加工があり、錐状の形態になっている。1 b と 1 c とは折断しているが、両者にも2次加工と考えられる小剥離が加えられている。1 b は石核として、1 c は削器として再生されたものとも見られよう。2 は砂岩製の石槌、3 はやはり砂岩製の石核で、賽子状の打面の転移が観察される。この石核から作出された剥片は存在しない。第I文化層第9ブロックの石核と比較されよう。

c) 石器石材 黒曜石、凝灰岩、チャート、砂岩等の石材が使用されているが、砂岩が6種あり、砂岩主体の石材組成をとっている。特に剥片やその石核にも砂岩が多用されており、極めて稀な事例であると言えよう。礫は1個体あるが、細片であり、詳しい状況が分らない。

d) 小結 零細なブロックで特筆すべきことはない。遺跡内に直接関連しそうなブロックはな



第38図 第10ブロック石器実測図(2)



第39図 第10ブロック石器実測図(3)

いが、近接する第11ブロックとの関連はないとは言えない。特に site furniture 的な性格の濃い石槌が遺存しているので、本地点周辺が数次に亘って利用されたことは十分に想定し得るところであり、遺物量の寡多からブロックの性格を規定することは忌避しなければなるまい。

第10表 第10ブロック遺物集計表

母岩番号	剥片U 剥片R	敲石	石核	剥片	削片	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
黒曜石 13	0	0	0	1	0	0	1	6.7	0.92	0.3
凝灰岩 6	0	0	0	1	0	0	1	6.7	9.12	3.2
凝灰岩 7	0	0	0	1	0	0	1	6.7	13.25	4.6
チャート 4	0	0	0	1	0	0	1	6.7	0.38	0.1
砂岩 8	0	0	0	2	2	0	4	26.7	7.50	2.6
砂岩 11	3	0	0	0	0	0	3	20.0	43.76	15.3
砂岩 14	0	0	0	1	0	0	1	6.7	7.42	2.6
砂岩 15	0	0	1	0	0	0	1	6.7	184.20	64.4
砂岩 16	0	1	0	0	0	0	1	6.7	11.73	4.1
砂岩 17	0	0	0	0	0	1	1	6.7	7.82	2.7
総数	3	1	1	7	2	1	15	100.0	286.1	100.0
組成比 (%)	20.0	6.7	6.7	46.7	13.3	6.7				

第11ブロック (第40、第41図、図版8)

a) 分布状況 第10ブロックと同様に第4地点にある。石器類が散布するのは、2K-65、66、67ポイントに沿う東西12.8m、南北4.5mの細長い空間内で、2K-55区に比較的遺物のまとまる部分があるが、それ以外は稀薄な散布状況を呈している。

2K-66区では、ハードローム層上部で、長軸1m、短軸0.6mぐらいの焼土の集中する部分が検出された。焼土の周囲には南北約6mに亘って炭化物片の散布域がひろがっていた。炭化物片は焼土から遠くなるに従ってその散布密度を薄くするが、最終的には、南北6m、東西5m程度のひろがり確認された。石器類が分布するのは、炭化物片の分布の薄い部分から分布域外にかけての空間であり、焼土の西側と東側と2箇所に分かれて分布しているように見える。焼土の南側には石器は分布していない。

図の炭化物片分布範囲はハードローム層上面で記録したものであるが、内側の分布の濃い部分は焼土の検出面であったハードローム層下-0.2mで記録している。遺物の検出はハードローム層の上面付近に特に多く、焼土の検出面よりも幾分か高いものが多い点に注意したい。なお、遺存した焼土の厚さは中心部で0.1mあり、基底はVI層の上面に接している。

b) 出土遺物 31点の遺物があるが、1点の礫を除外すると小型の剥片類のみによって占められている。

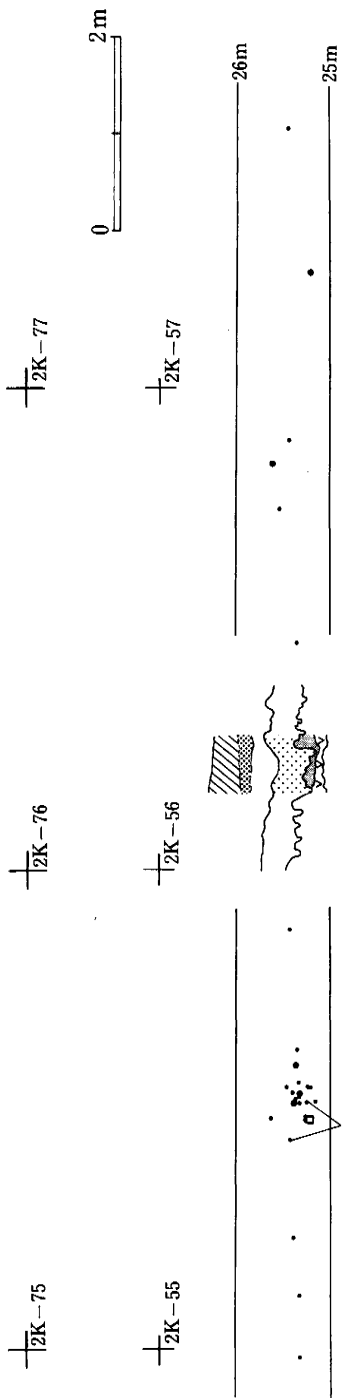
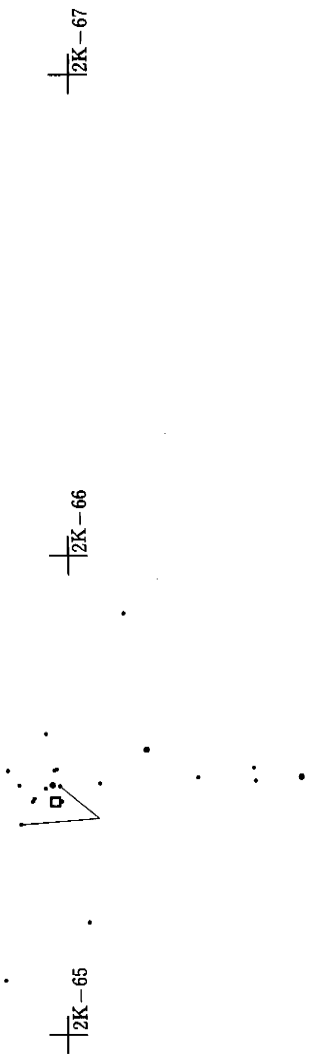
c) 石器石材 黒曜石2種、珪質頁岩2種、砂岩3種、安山岩1種、合計して8種の母岩から構成されている。このうち、黒曜石14が約半数を占め、残りはいずれも少数の個別別資料しか保有していない。砂岩は礫片1点を含むが、他に2点の剥片がある。

焼土の西側の集中箇所には、黒曜石14、珪質頁岩21が主に分布しているが、東側の集中部は、黒曜石11、安山岩11、砂岩12のみによって構成され、両者間の構成母岩に大きな差異の存在す

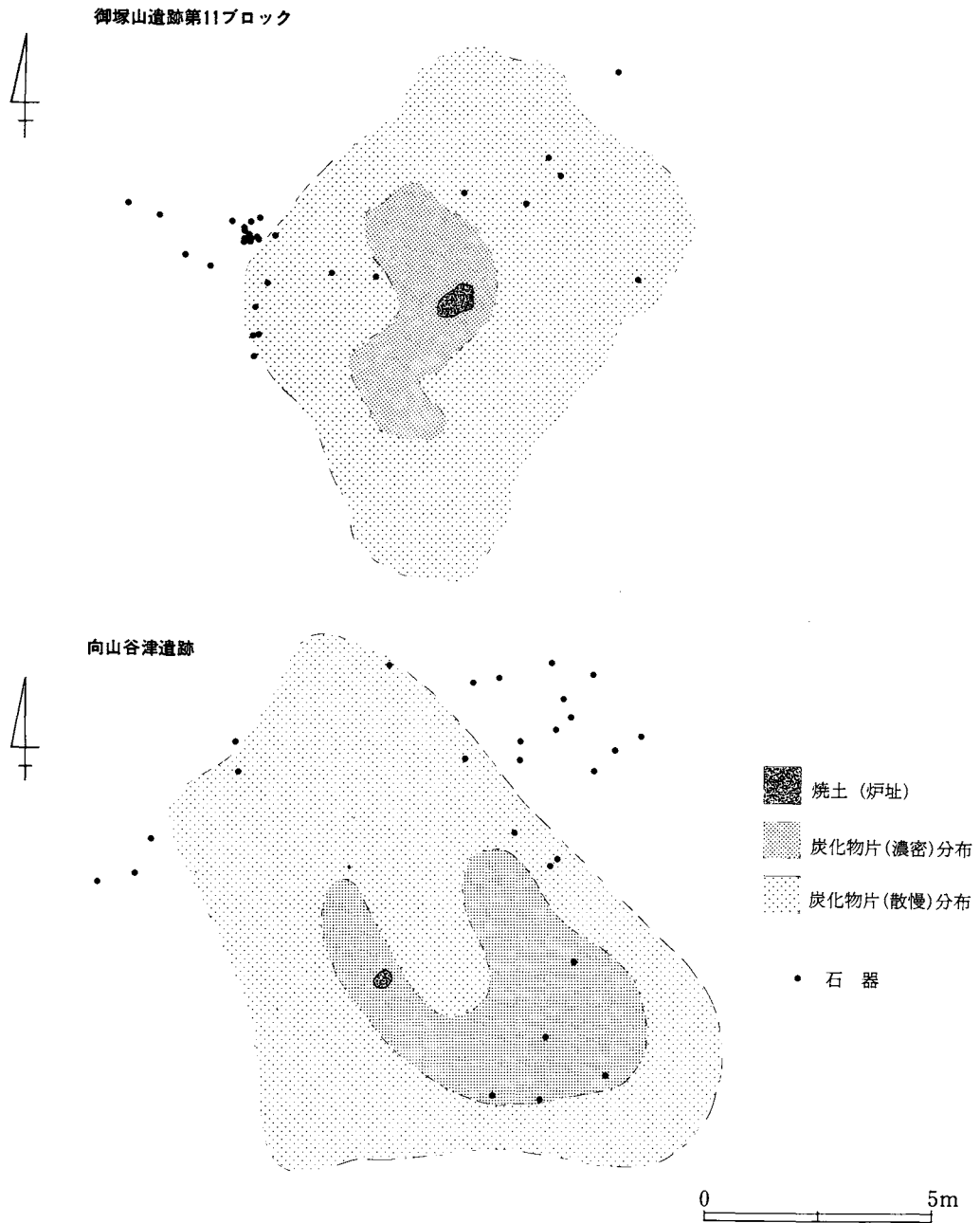
第11表 第11ブロック遺物集計表

母岩番号	剥片	削片	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
黒曜石 11	0	5	0	5	16.1	0.94	0.4
黒曜石 14	5	9	0	14	45.2	16.53	6.7
黒曜石 不明	0	2	0	2	6.5	0.98	0.4
珪質頁岩 21	0	5	0	5	16.1	2.27	0.9
珪質頁岩 22	0	1	0	1	3.2	0.31	0.1
砂岩 12	1	0	0	1	3.2	2.82	1.1
砂岩 13	0	0	1	1	3.2	218.8	88.2
砂岩 19	0	1	0	1	3.2	0.05	<0.1
安山岩11	1	0	0	1	3.2	5.35	2.2
総数	7	23	1	31	100.0	248.05	100.0
組成比 (%)	22.6	74.2	3.2				

4



第40図 第11ブロック遺物出土状況



第41図 炉址・炭化物片・石器の分布

ることが注意される。

d) 小結 焼土に炭化物片の集中が伴い、更に近接して石器類が検出された。石器の大半が小剥片であり、その数も少なかったが、焼土の東西に2群に分れて分布している。各々が別個の母岩構成を示していることから、別個のブロックと評価したいが、焼土を地床炉とすれば、その反覆使用が短期間内に行なわれたことを示唆するものであろう。

本ブロックと同様の遺存状況を示す確実な例として、佐倉市向山谷津遺跡X層（部 1987）のブロックがある。第41図に両者を同一縮尺にして比較した。炉の位置、炭化物片の集中状況、石器類の散布など、時代を超えた、両者間の著しい類似に注目すべきであろう。

第12ブロック（第42・43図）

a) 分布状況 第4地点の南西にある昭和60年度調査区内で検出された。遺物は主に3J-32、42区にまたがる径約6mほどの範囲内に分布しているが、3J-43ポイント西側に礫の集中部が東西1.5m、南北3.7mに亘って認められ、その外縁部に稀薄な散布域がひろがっている。礫片はある程度集中するとは言え、飛散した状況を呈しており、典型的な礫群とは、若干様相を異にしている。石器は礫間に散在するが、石核3点はブロックの一番外側に位置している。

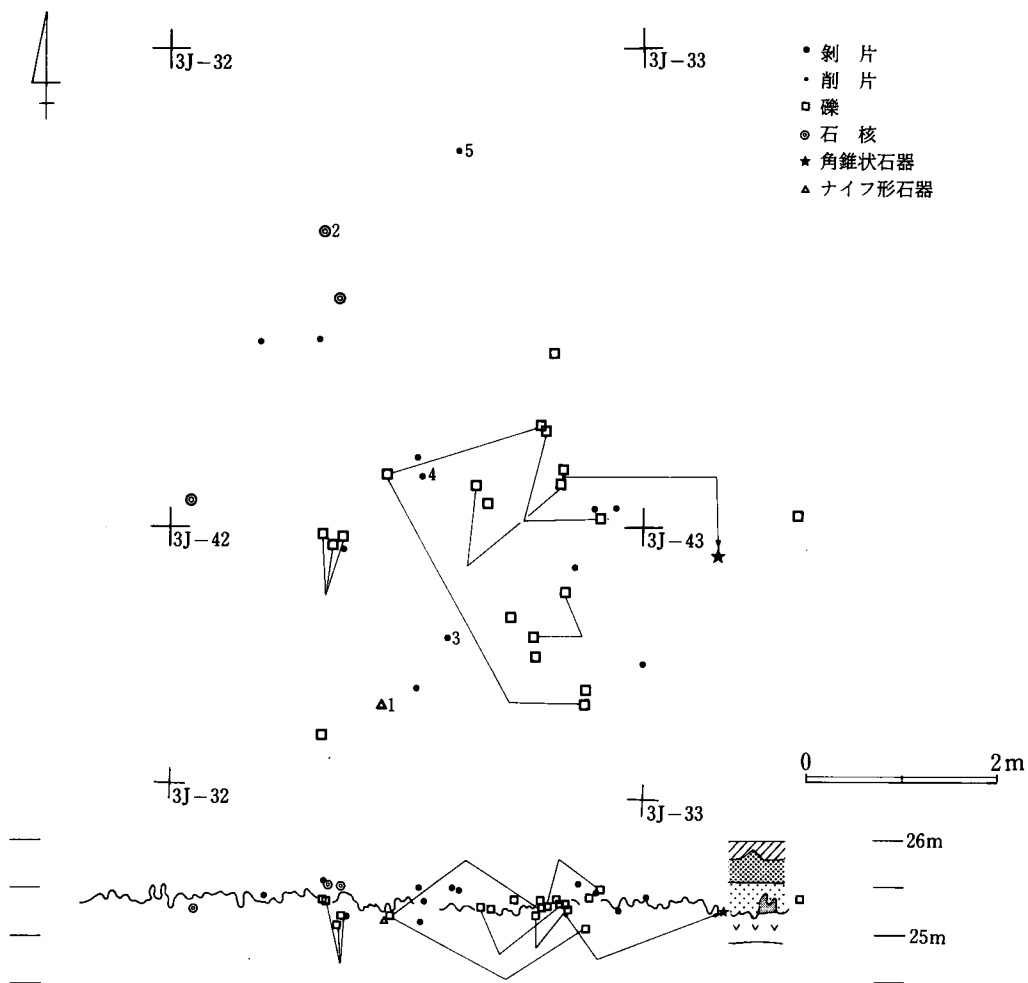
一方、遺物の垂直分布は、ソフトローム層中からVI層に及ぶが、ハードローム層の上部に集中するので、このあたりが生活面であろうと考えられる。しかし、本ブロック周辺はVI層上面近くまでローム層の膨軟化がすすんでおり、正確な帰属層準の確定は困難であった。

b) 出土遺物 本ブロックからは、石器18点、礫28点の遺物が検出された。礫主体のブロックと言えよう。石器には、ナイフ形石器や角錐状石器の小破片が含まれているので、ブロックの時期を考える手懸りになるかもしれない。他に石核3点、剝片12点があるが、削片は1点しかなく、しかもこれは角錐状石器の破片であることが、接合関係を通じて判明している。

図の1は小型のナイフ形石器。横打剝片の打面部から尾部にかけてブランディングが加えら

第12表 第12ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	角錐状石器	石核	剝片	削片	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
安山岩 18	0	0	1	2	0	0	3	6.5	29.17	3.2
安山岩 19	0	0	0	2	0	0	2	4.3	14.93	1.6
安山岩 20	0	0	0	1	0	0	1	2.2	10.73	1.2
安山岩 21	0	0	1	0	0	0	1	2.2	26.54	2.9
安山岩 22	0	0	0	0	0	1	1	2.2	295.10	32.3
安山岩 23	0	0	0	0	0	15	15	32.6	152.34	16.7
砂岩 20	0	0	0	0	0	3	3	6.5	65.04	7.1
砂岩 21	0	0	0	1	0	0	1	2.2	1.82	0.2
砂岩 22	0	0	0	1	0	0	1	2.2	50.59	5.5
砂岩 23	0	0	0	0	0	8	8	17.4	120.20	13.1
粗面岩 1	0	0	0	0	0	1	1	2.2	122.30	13.4
メノウ 3	0	0	1	0	0	0	1	2.2	11.92	1.3
珪質頁岩 25	0	0	0	1	0	0	1	2.2	6.65	0.7
黒曜石 15	1	1	0	3	1	0	6	13.0	5.48	0.6
チャート 7	0	0	0	1	0	0	1	2.2	1.69	0.2
総数	1	1	3	12	1	28	46	100	914.50	100
組成比(%)	2.2	2.2	6.5	26.1	2.2	60.9				



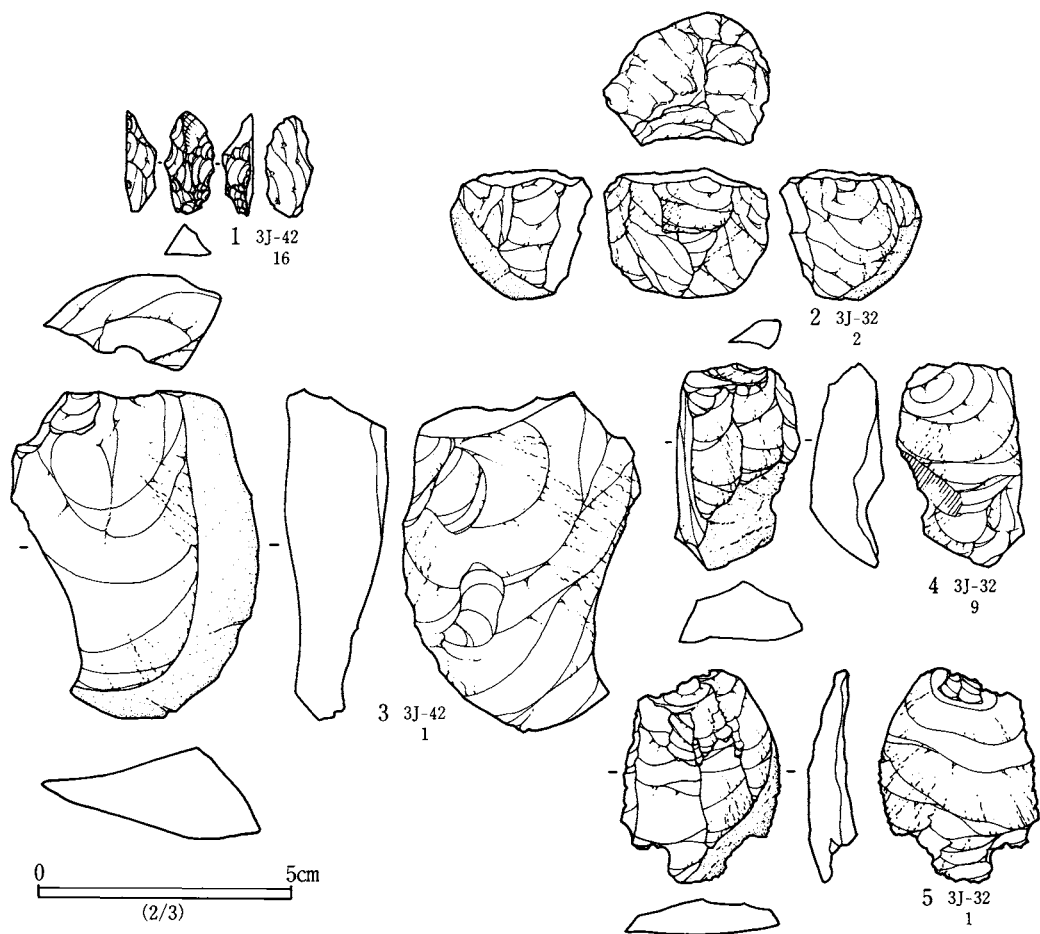
第42図 第12ブロック遺物出土状況

れている。背面左側縁基部側の剝離面は素材剝片を剝離した石核底面であり、この石器が背の低い石核から得られたものであることが分る。

2は典型的な打面・作業面交代型の石核。3～5は比較的大型の剝片を示した。3、4は平坦打面、5は線状打面で、各例共に背面に一部原礫面を留めている。

c) 石器石材 石器には安山岩が多用されている。他に砂岩、メノウ、珪質頁岩、黒曜石、チャートなど多彩な石材が認められる。安山岩を含めて各母岩はいずれも単独、若しくは数点の資料しか存在していない点に注意したい。

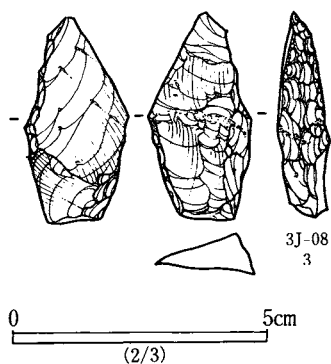
礫については個別に観察したい。安山岩22は完形礫で、片面にのみ赤変がある。8.7cm×6.2cm×4.3cm。安山岩23は細かく砕けていて、まとめてみても本来の礫の一部分にしかない。全体に赤変が著しい。砂岩20は3点に割れていて、そのうち2点が接合するが、いずれも小破片である。赤変が著明だが、2点は礫表面のみが、もう1点は破砕面を含めて変色している。



第43図 第12ブロック石器実測図

砂岩23は8点の細片で、そのうち4点と2点とがそれぞれ別個に接合している。比較的大き目の礫で、極く一部しか遺存しない。礫表面の赤変は著しい。破碎面の一部に煤状の付着物を留めるものもある。粗面岩1は完形で、7.1cm×5.0cm×2.8cmという比較的小型の礫。特に色調の変化は認められない。

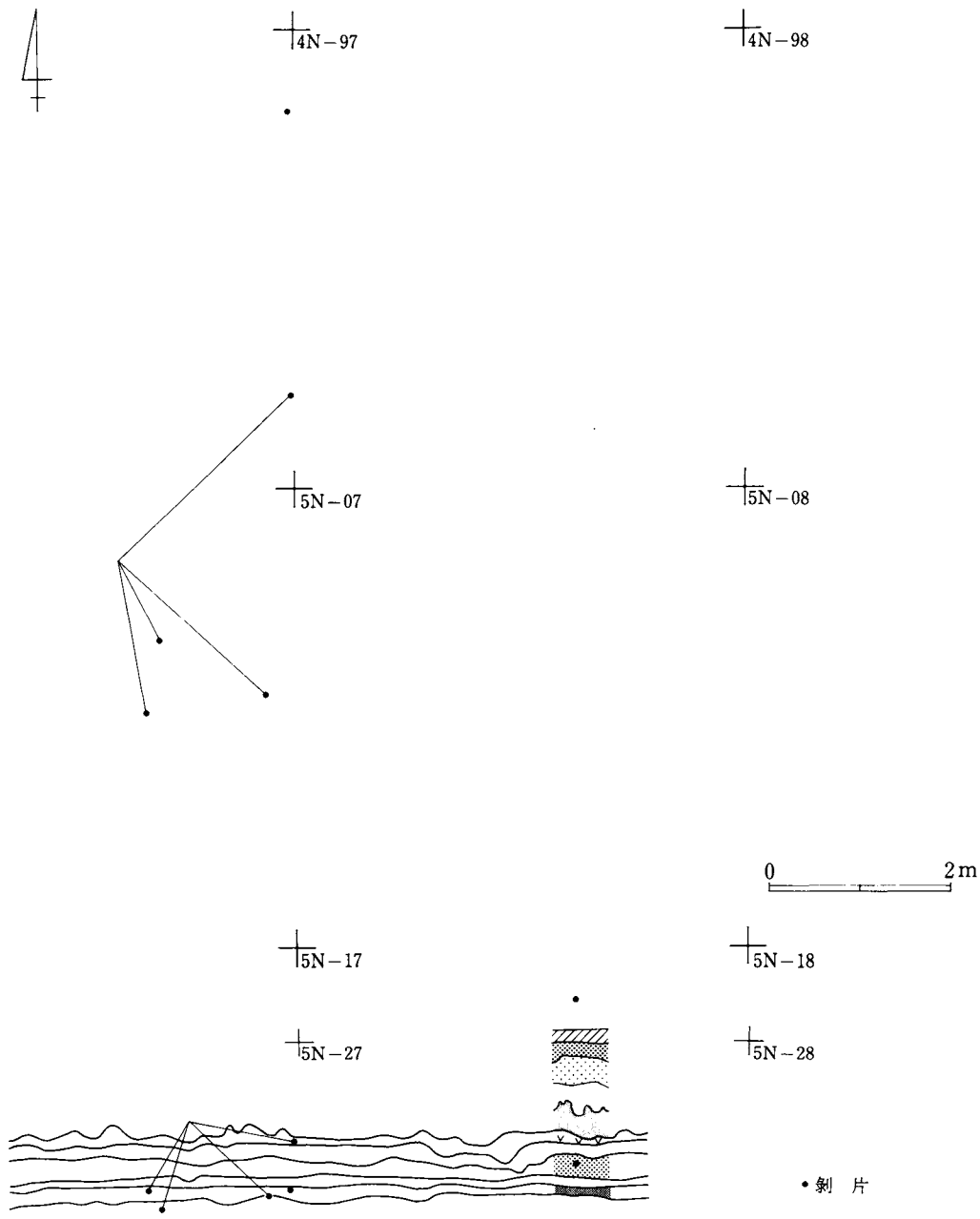
d) 小結 礫を主体としたブロックで、これに少量の石器類の伴出する状況が確認された。礫は破碎したものが多く、分布もまばらである。しかしこのようなあり方は、下総台地にあつては一般的であり、本地域にあつては、石器と同様に礫も遺跡から遺跡へと移動し、その一部が少量ずつ廃棄されていったものと考えられる。



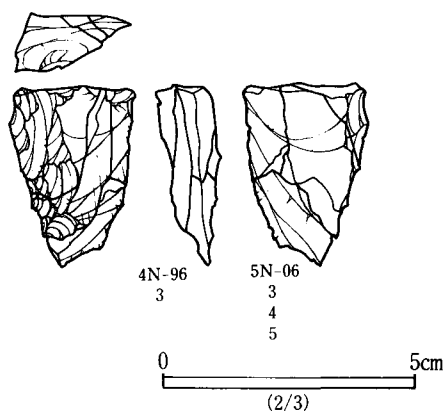
第44図 第4地点単独出土の石器

ブロック外の遺物 (第44図、図版12)

3 J-08区から単独でナイフ形石器が出土している。産出層準は不詳であるが、第II文化層に前後する時期のものと考えられる。背面に横方向からの剝離痕を留める剝片の2側縁にプランティングが認められる。特に背面左側縁のそれは背・腹両面から剝離が重ねられており、厚味のある背部を形成している。基部は未加工で、素材剝片を得た石核底面を残している。



第45図 第13ブロック遺物出土状況



第46図 第13ブロック石器実測図

C. 第III文化層 (第45・第46図、図版□)

第2地点東方にある第5地点のIXc層を中心として剥片6点の検出があり、これを第13ブロックとした。本文化層に帰属するブロックはこのブロックのみであった。

a) 分布状況 5N-07ポイントの周辺の広い範囲から散発的に6点の遺物が出土した。産出層位はVI層からX層に及んでおり、特にIXc層に分布するものが多い。VI層の遺物とX層の遺物とが接合する。両者のレヴェル差は約0.75mである。

b) 出土遺物 6点あるが、全てが剥片によって占められている。うち4点が接合して折断剥片の尾部が復原された(1)。極めて珪質な頁岩製で、背面左側縁に平坦な節理面を残している。背面左側の剥離はこの節理面から加えられたものである。腹面には火ばね様の器表の剥落があり、受熱剥片である可能性が高い。

c) 石器石材 6点のうち5点は珪質頁岩の同一母岩に属し、もう1点はチャートの小剥片である。

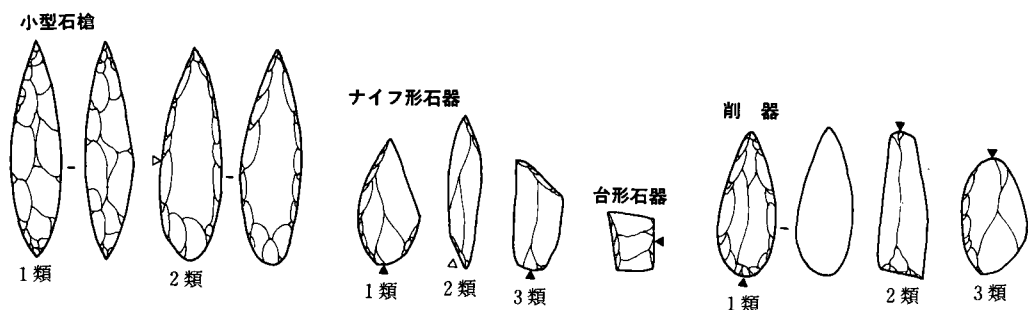
d) 小結 情報量の少ないブロックであるが、受熱剥片の分布状況が注意される。

第13表 第13ブロック遺物集計表

母岩番号	剥片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 23	5	5	83.3	9.18	71.0
チャート 5	1	1	16.7	3.76	29.0
総数	6	6	100	12.94	100
組成比 (%)	100				

D. 第I文化層の問題点 御塚山遺跡の調査によって得られた13箇所のブロックに就いて、前項までにその概要を記載してきた。既に指摘したとおり、これらのブロックは大別して3つの文化層に振り分けられたが、それらのうちでも就中、第I文化層には9箇所のブロックが集中し、遺物の量もまとまっているので、本項ではもう少し詳細にブロックの内容を検討し、石器群の成り立ちについて若干の言及を試みたい。

a) 第I文化層の細分 初めに述べたとおり、第I文化層はソフトローム層を遺物の産出層準としていることを、ひとつの前提条件としていた。しかし、本地域のソフトローム層は、武蔵



第47図 御塚山Ia期の特徴器種一覧

野台地でのIII層とIV層のかなりの部分をあわせたものに対応しており、従ってかなりの時間的な幅をもつため、異なる時期の石器群が層準差を持たずに並存する危険性に常にさらされている。例えば、今回の調査によって得られた9箇所のブロックが、全体として一時期のものであるかどうかは、極めて疑問であり、諸種の検討が必要であろう。

第1ブロックではナイフ形石器のうち、黒曜石製のものに就いては、その産出層準が特に深いものであったことを根拠として旧く位置づけた。次に、第2地点の6箇所のブロックに関しては、厳密な意味で同時に存在したとは言えないが、相互にいろいろな脈絡があるようなので、大体近接した時期の所産と理解した。また、第1ブロックとの関連に関しては、同形態のナイフ形石器と削器とが含まれること、黒曜石、珪質頁岩、珪質凝灰岩という3種の石材を主体とした石材組成をとっていることなどから、両者間には大きな時間差が介在しないことも推定された。しかし、両ブロックには共通する母岩を抽出することができないので、直接的な関係を指摘することは難しいようである。

第14表 御塚山 I a 期の石器組成表

分類：ブロック	1	2	3	4	5	6	7
小型石槍 1類		3					
2類		1					
ナイフ形石器 1類	1		1	1	1		
2類				2		2	1
3類	1						
4類		3					
台形石器		2	1				
削器 1類	1	1	1	4			
2類				1			
3類	3	1	1	3		1	
彫器 1類			1				
2類					1		
楔形石器		1					

第3地点の第8ブロックも同層準の検出であったが、特徴的な器種を含んでいないので比較が困難であるのと、石材組成が第1～第7ブロックまでとは全く異っていることなどから、直接的な対比は不可能であった。第9ブロックも石器組成が不完全であったが、産出層準が僅かながら深く、第1～第7ブロックに先行するブロックである可能性

が高いようである。それでは、どのぐらい旧くなるのか、と言われると、応えるのが難しいが、近接する大林遺跡の調査成果に従うなら、次章で検討する大林遺跡III b期に近接した時期のものであり、所謂砂川期の一部に編年される可能性は指摘されて良いのではないかと思う。

以上の検討を経て、御塚山遺跡の第I文化層は最低でも2期に細分されることになる。すなわち、第1ブロック下層のナイフ形石器や第9ブロックなどの段階と、第1、第2地点によって代表される段階に分離されると考えられ、後者を御塚山I a期、前者を御塚山I b期と区別しておくことにしよう。しかし、I b期の資料は極めて限定されているので、これとて便宜的な区分であることを付言しない訳にはいかない。

b) 御塚山I a期の石器組成 御塚山I a期に帰属する第1・第2地点の石器群について、その組成と器種について検討を加える。ここでは、まず、個々のブロックの組成を捨象して、全体的な内容が如何なるものであるのかに就いて瞥見したい。

既に各ブロックの状況から明らかなように、I a期の石器群は、小型石槍、ナイフ形石器、台形石器、削器、彫器、楔形石器、石刃、剥片等から構成されている。各器種毎に細かい分類をすすめる。

小型石槍 これには2種ある。

1類 細身の両面打製のもの。

2類 両面打製であるが、周縁加工に近いもの。

ナイフ形石器 これには4種あり、変化が大きい。

1類 やや幅広で打面を基部側に残す2側縁加工のもの。丸味のある基部形態を特徴としている。たいへん特徴的な形態である。

2類 縦長剥片の一端を折断する細身のもの。ブランディングは折断面にのみ顕著で、基部の尖るものもある。

3類 截頂石刃を便宜的に含める。

4類 その他の諸種を含める。

台形石器 資料が少なく細かい分類は困難である。横長剥片の尾部にブランディングを加工している。

削器 3類に大別した。

1類 片面打製の石槍状のもので、その一部は小型石槍との区別が難しいが、腹面を未加工のまま残すものは本類に含める。

2類 縦長剥片の尾部に直線的な刃部の認められるもの。端削器の一種と考えられる。

3類 その他の種々の側削器を一括する。

彫器 典型例を欠くが、類彫器と考えられるものがあり、それは、2種に分かれる。

1類 素材剥片の打面から両側縁に刻打を加えるもの。

2類 打面部を斜めに削ぐように刻打を加えるもの。

楔形石器 小型のものが1例あるにすぎない。

以上の各器種の分布状況を第14表に示した。

c) 御塚山 I a 期の剥片剥離技術 御塚山 I a 期の7箇所のブロックのうち、ブロック近傍で剥片剥離が行われたと見られるのは、第1ブロック、第2ブロック、第3ブロック、第4ブロック、第6ブロックの5ブロックである。各地点共に黒曜石を主体とする剥片剥離が行われているが、第4地点の黒曜石以外に珪質凝灰岩1個体を消費している。その他の石材については、組織的な剥片剥離の痕跡は極めて薄弱である。このことは、おそらく黒曜石の原石、あるいはブランクの供給時とブロックの形成が比較的近接した時期であったことと、それ以外の石材の多くが別地点で消費され、その一部が集団と共に、あるいは他者を媒介として移動したことを物語っている。各石材毎に剥片剥離技術を考察したい。

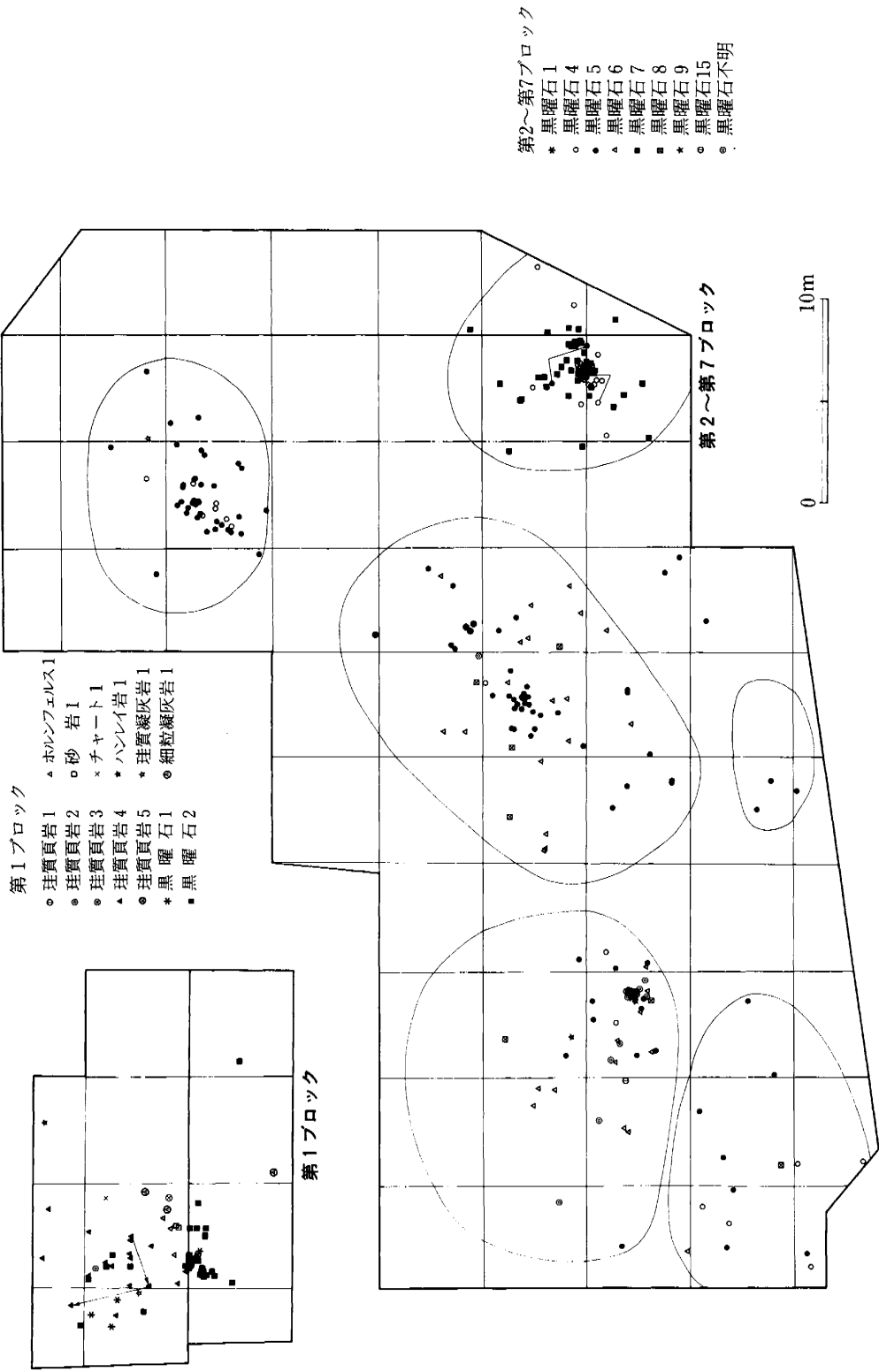
黒曜石の石核は3点遺存している。これらの観察結果は既に記載したとおりであるが、第4ブロック37の資料が基準となろう。打面は平坦打面を原則としているが、細調整の認められるものもある。しかし、複剥離打面の出現頻度から見て、打面の細調整は、1枚、若しくは数枚の大き目の剥離による打面の作出時において、部分的に生じたかもしれない不整な凹凸の除去と言ったような、むしろ付随的な性格を帯びていたようである。剥片剥離はこの平坦打面の縁辺を半周するように打点を振りながらすすめられるが、打面は固定されており、転位、再生等の工程を認めることができない。頭部調整かと認められる細かい剥離の観察される例はあるが、独立的工程として認識し得るかどうかはよく分らない。

作出される剥片はその長幅比が1：1から2：1の間にあるものが一般的である。比較的小型のものが多く、長さが15mm～30mm、幅が10mm～25mmの範囲にくるものが、一応企図的な剥片と見てよいであろう。この過程で生産された剥片は、ナイフ形石器4類及び台形石器の素材に供されているが、大半の企図的な剥片は2次加工を経ず使用されている。その際に折断手法が多用され、長さ15mm～25mm、幅10mm～20mmの台形剥片が組織的に生産された根拠がある。それは絶対数においても他のあらゆる器種を凌駕しており、需要の大きさを示唆している。

珪質凝灰岩は石核1個体と同母岩の剥片、石器が15点あるにすぎないが、原則的には黒曜石と同一の剥片剥離手法によったものと考えられる。しかしながら、特定器種との結びつきは大きく異っており、ナイフ形石器1類、削器1類、就中、削器1類とは密接な関連性があるものとみられる。折断剥片としての供用は殆んどなかったと判定される。

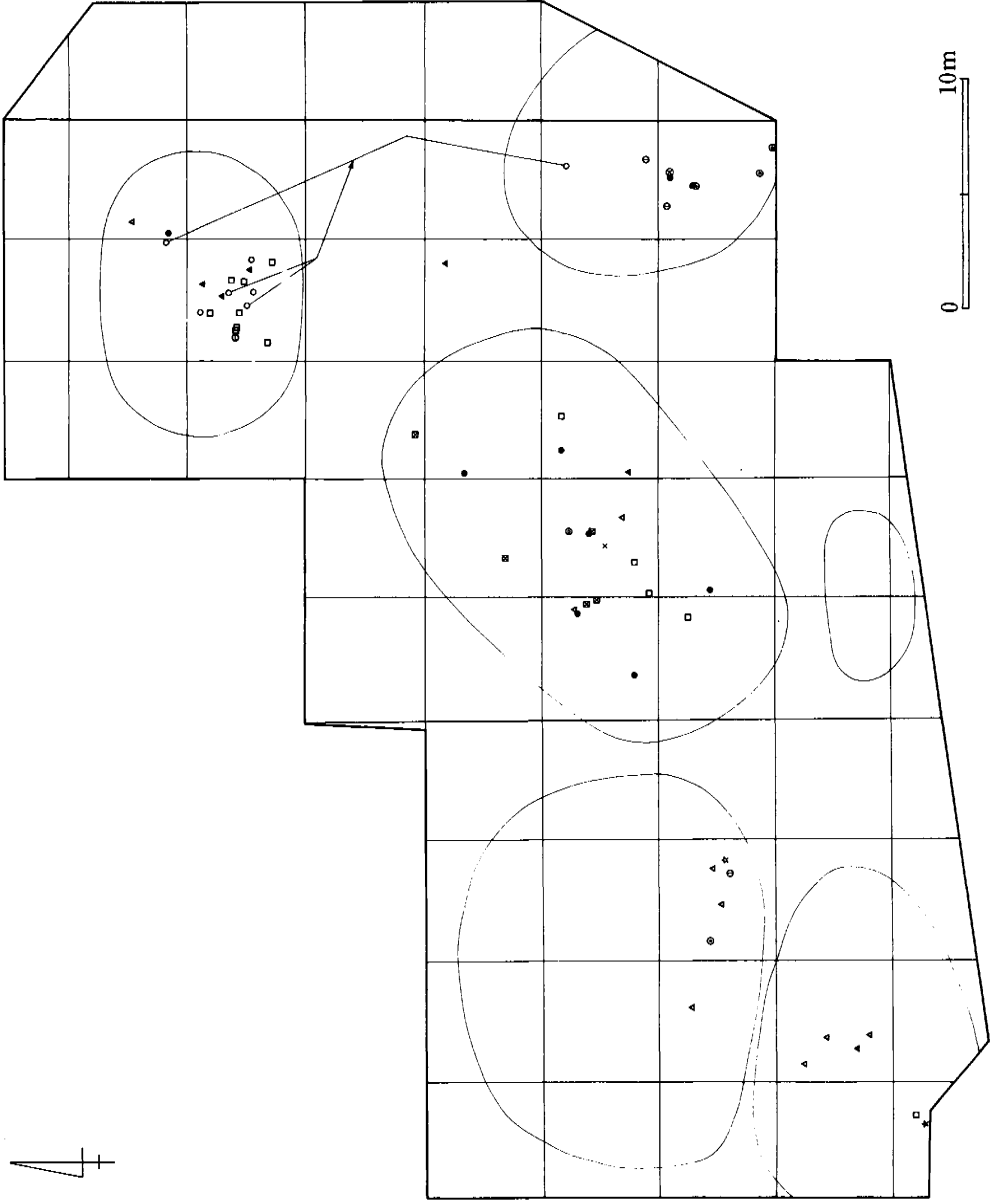
珪質頁岩に就いては、その大半が別地点において作出された資料から構成されているので、剥片剥離工程の実体的復原は極めて困難である。石刃状の縦長のものが目立つ。打面は複剥離の調整打面のものが多く、精細な頭部調整も存在する。また、打面の再生を示唆する大型で、側縁に旧作業面の一部を留める例（第2ブロック25）もあり、打面周辺の管理は比較的ゆき届

4+



第48図 第1~第7ブロックの母岩別資料分布状況(1)

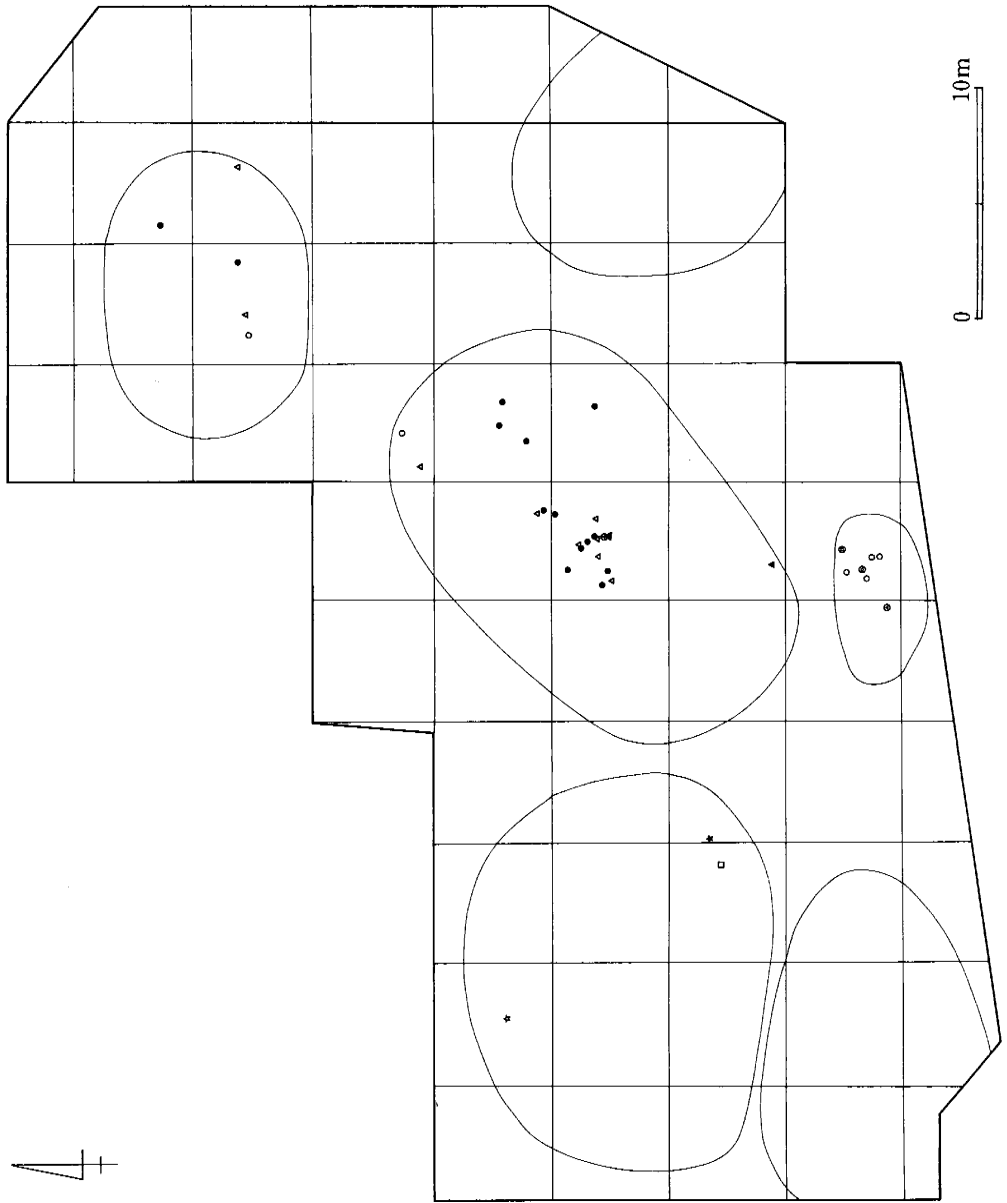
4+



- 珪質頁岩 5
- 珪質頁岩 6
- 珪質頁岩 7
- 珪質頁岩 8
- 珪質頁岩 9
- ▲ 珪質頁岩 10
- △ 珪質頁岩 11
- 珪質頁岩 12
- 珪質頁岩 13
- 珪質頁岩 14
- 珪質頁岩 15
- × 珪質頁岩 16
- ★ 珪質頁岩 17
- ★ 珪質頁岩 18
- 珪質頁岩 23

第49図 第2～第7ブロックの母岩別資料分布状況(2)

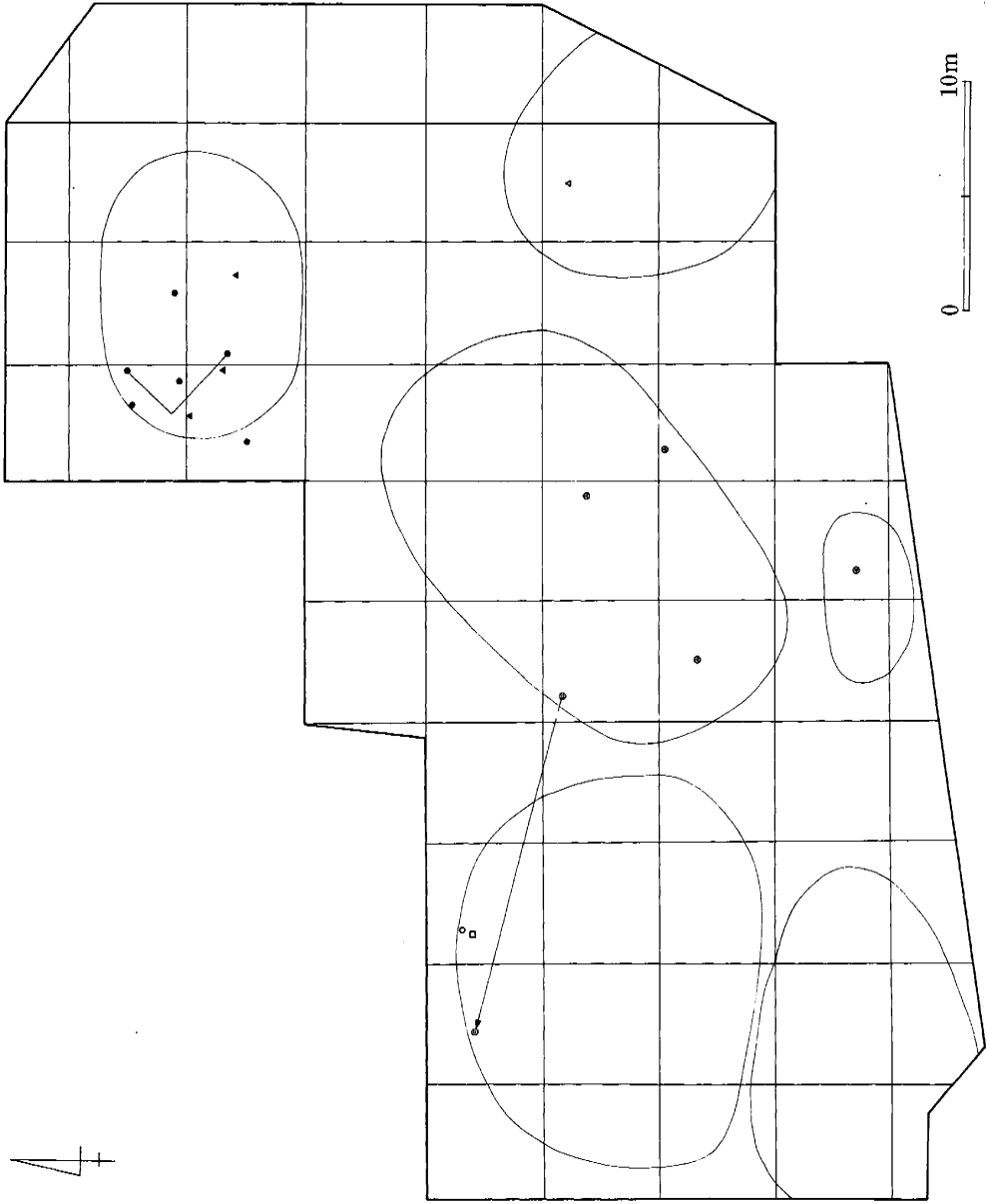
4



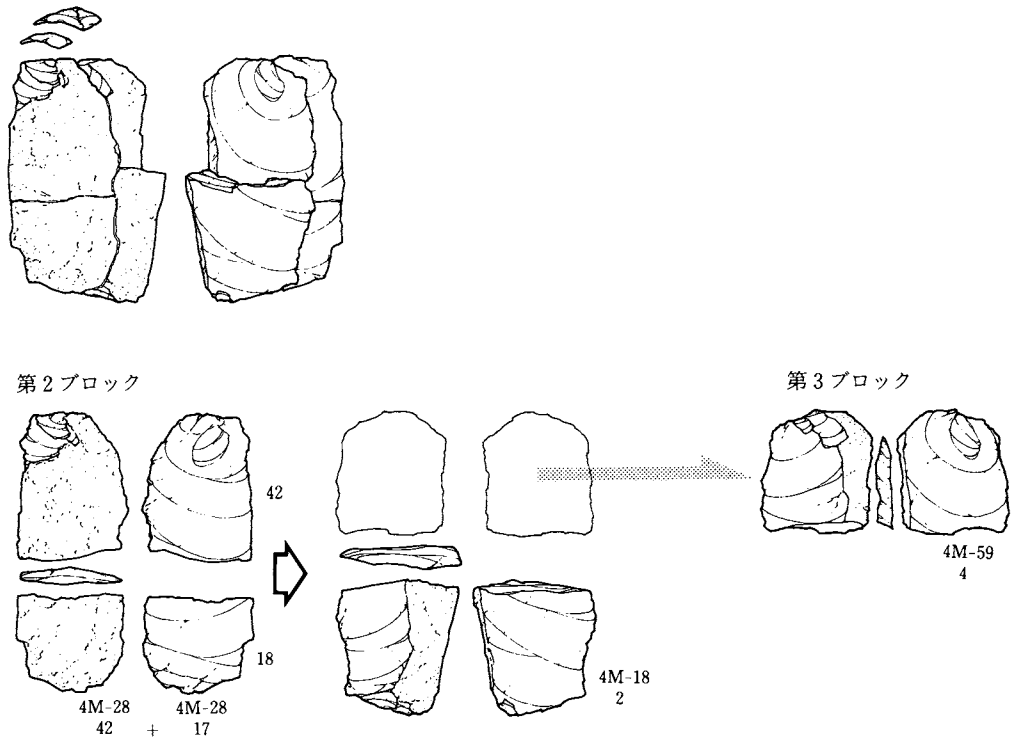
- 珪質凝灰岩 2
- 珪質凝灰岩 3
- △ 珪質凝灰岩 4
- ▲ 珪質凝灰岩 5
- 珪質凝灰岩 6
- * 珪質凝灰岩 7
- 珪質凝灰岩 8
- 凝灰岩 1
- * 凝灰岩 2

第50図 第2～第7ブロックの母岩別資料分布状況(3)

4



第51図 第2～第7ブロックの母岩別資料分布状況(4)



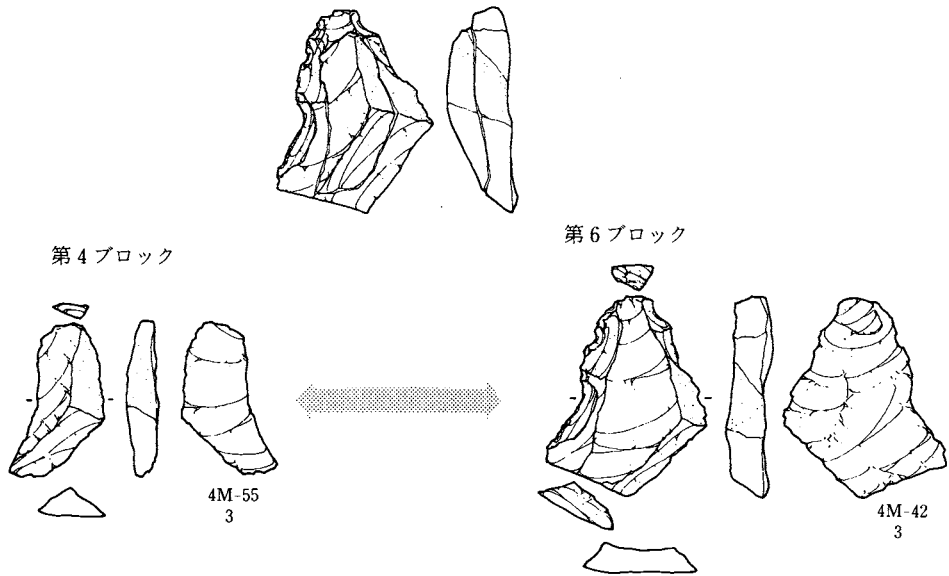
第52図 珪質頁岩 8 の接合状況 (2/3)

いていたものとみられる。背面 2 稜型の典型的な石刃もあるが、大多数のものは単稜型、複稜型のものである。石核の側面調整は 1 例の剥片背面に観察される (第 2 ブロック 15)。単設打面からの連続性を持った剥片剥離が一般的であるが、両設型の例も少数存在する。以上の如く、退嬰的との印象は払拭できないにせよ、明らかに石刃技法は維持されていると見られる。

石刃と特定器種との結びつきは比較的弱いだが、ナイフ形石器 1 類・3 類、削器 2 種との関係に注意したい。しかしながら、大半のものは、即自的に使用過程に組み込まれている。この際には、黒曜石に顕著であった折断過程は介在しないのが一般である。

d) **母岩別分布と器種構成** 次に、第 1 地点、及び第 2 地点から検出された諸ブロックの石材構成と器種構成について考えたい。

第 1 地点には 2 つのクラスターからなるブロックが検出されている。珪質頁岩、黒曜石を主体にしており、それぞれが各クラスターの主要構成母岩でもある。珪質頁岩は石刃を基調としているが、ブロック内で生産された形跡はない。黒曜石からはさかんに剥片が落とされたらしい。剥片のうち折断されているものが 20 点あり、その大半は黒曜石であった。すなわち、ブロック内では黒曜石の剥片が生産され、そのかなりの部分が折断されて所定の機能を分担するように利用されているのに対して、石刃と石刃素材の石器の外部で製作され、本ブロックに搬入され、廃棄・遺棄されるに到ったことが想定される。黒曜石の石核は遺存しないので、本地点



第53図 安山岩4の接合状況 (2/3)

での母岩消費を前提とすれば、別な地点で剥片を再生産するために搬出されたことは明らかである。

ここに観察された事実は石器のうち、好適な素材を獲得し、入念な準備と工作を経た石器と、原石・ブランクを常に携帯し、その場その場の必要に応じて適宜製作される石器とがあることを暗示している。ビンフォードの指摘に従って、前者を予備的な石器、後者を応時的な石器と呼んでおこう。そうすると、珪質頁岩製の石刃石器群は予備的な石器であり、黒曜石の折断剥片群は応時的な石器と分類されることになる。

第2地点には6箇所のブロックがあるが、錯綜した母岩の共有関係が存在する。詳細な分布状況は第47図～第50図に譲るが、他の石材に比較して、黒曜石の消費量の多いのは第1地点と同様の傾向と言えよう。ただし、黒曜石を含めて、識別の困難な石材が多いので、断言することはできないが、第1地点との共有母岩は存在しないようである。

黒曜石のうち、黒曜石4～黒曜石7の4個体がブロック内消費母岩である。黒曜石4、黒曜石7の2個体は第3ブロックで、黒曜石5は、第2、第4、第6ブロックで、黒曜石6は第4、第6ブロックでそれぞれ消費されている。黒曜石5の場合、3ブロックの間にまたがって消費されているが、石核は第4、第6ブロックに分有されているので、本来第2ブロックにあって剥片の生産が一定程度進行した石核が、第4ブロック・第6ブロックに移動したと考えることができる。第4、第6ブロックは2種に亘る消費母岩を共有するが、石片の散布状況から推定された母岩消費の順番が、両ブロック共に黒曜石6→黒曜石5となっているところからおそらく両者は同時に存在した蓋然性が高い。そうすると多分、第2ブロック→第4・第6ブロック

という先後関係があったのであろう。第3ブロックは、自立的な傾向が強いが、黒曜石7を単独で消費し、黒曜石4の一部を第2ブロックに供給しているように見える。

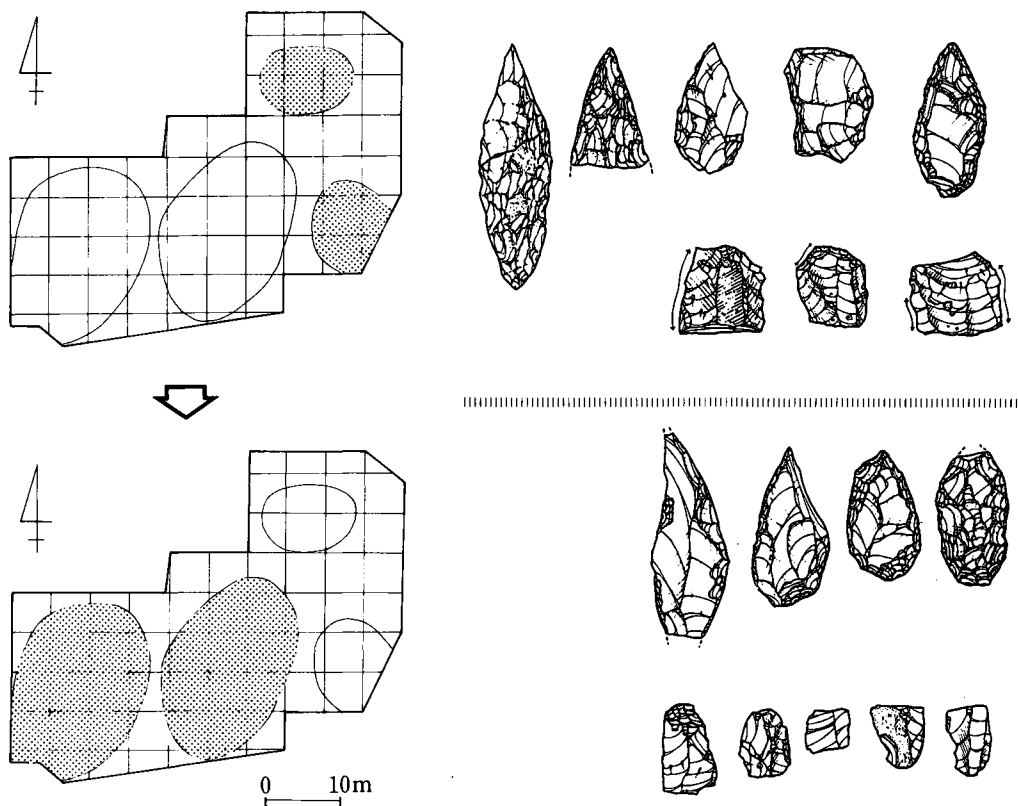
黒曜石は、台形石器、削器の素材として供用されているが、それにも増して重要であるのは、折断剥片として各ブロックで多用されていることである。既に前項で検討したように、黒曜石から得られる剥片は、縦長とも横長とも規定し得ぬ矩形のものが多く、また、形態的にも不整なものも支配的であることが、折断手法による台形剥片生産の根拠となっている。このことは同時に、黒曜石が台形石器の素材として多用される要因でもある。このような台形石器、あるいは台形剥片の多量の生産を促した条件は良く分らないが、条件の変化に対応し得る技術的基盤の内部構造に注意したい。すなわち、先に予備的と規定した珪質頁岩の対極に黒曜石が位置し、諸種の制約のもとで両者が推移的に立ち現われる機制をこの石器群は保有している。そして、この過程は負の送還 (negative feedback system) と解釈することができる。

珪質頁岩は、第2、第3、第4の各ブロックに集中的に分布しているが、第2・第4両ブロック間に共通する例が著明である。珪質頁岩8のみが、第2・第3ブロック間に共存し、かつ接合関係を持ち、黒曜石4のあり方と共に、両者が並存していた可能性を示唆していよう。珪質頁岩12・13は、第3ブロックと第6ブロックに分有されているが、これは多分、別なブロックの介在による結果なのであろう。なお、先に、珪質頁岩9・10・11が第2・第4ブロックに共存しているばかりか、その絶対的保有数も相似的である事実を指摘したが、これは第2ブロックに存在した母岩量の割合が、黒曜石5・6のあり方から想定された、両ブロック間の時間差を超えて転位したものと考えたい。

これと全く同様の転位関係は珪質凝灰岩2・3・4の間でも確認される。特に、珪質凝灰岩3は、石核自体が、第2ブロックから第4ブロックに移動している事実が確認されており、黒曜石5・6の分布状態から想定されたブロック間の新旧関係に関する仮説を補強するものとなっている。

次に、珪質頁岩と珪質凝灰岩の使用状況を観察する。珪質頁岩は、ナイフ形石器2類・4類、台形石器、削器各類、彫器など諸種の石器の素材として供用されており、特定の器種との特定の結合関係は稀薄であり、むしろ石刃としての即自的使用に備えて集団の移動に伴ってその一部の部分も移動したようである。従って、珪質頁岩は、戦略的手段として、石刃、若しくは諸種の石器のプランクとして特定生産地点を離れて遠くまで荷搬されたと考えられる。一点の石刃には永い時間が蓄積されていると言えようか。

次に、珪質凝灰岩のあり方を検討してみたい。珪質凝灰岩は8種の母岩を識別したが、比較的多くの資料を含むものは、珪質凝灰岩3・4の2者があるにすぎず、しかも、いずれも削片を少数しか含まず、分布も特定の地点に収斂しないので、ブロック内で多量の消費は行われていなかったと見るべきである。特に、削器の全ては外部からの搬入と考えられるが、1例のみ



第54図 御塚山遺跡第2地点の変遷

石核が遺存しているので、集団の移動に伴って、各処で少しずつ消費されていたことを否定することは難しい。全般的に、珪質頁岩と黒曜石の中間的な位相を占めるものと理解しておきたい。

最後に小型石槍に就いて検討したい。本文化層は、ナイフ形石器を、見かけ上狩猟貝の基調としているが、第2ブロックにのみ4個体の小型石槍が共存した。既に見てきた様に、石槍の素材は安山岩と、チャートに近い暗灰色をした珪質粘板岩の2種の母岩であり、これらはほぼ単独に存在している。搬入後の破損の結果、廃棄されたものと見られよう。

これまでの考察に従うと、第2地点のブロック群は大別して2期に分離され、第2・第3ブロックが古い部分を、第4・第6ブロックが新しい部分を構成していた（第5・第7両ブロックは、各々、第4、第6ブロックに統合しておくことにしたい）。そうすると、小型石槍は第2地点の古段階のブロックに存在するが、新段階には共存しない、という興味深い事実を指摘する事ができる。しかも、第2地点のブロック群は、同一集団の前後2期に亘る反覆居住の結果であると解釈したのであるから、同一の集団であっても、ある時期には小型石槍を保有していたのに、別な時期には保有しないということがあったのかもしれない。第14表から窺われると

おり、小型石槍は第2ブロックにのみ偏在し、刺突的機能の推定されるナイフ形石器1類と2類は第4・第6ブロックに集中している。この区分は、第2地点の新旧の区分と一致し、同一の集団が槍として、各種の石器を選択的に使用していたことを暗示していよう。更に興味深いことに、台形石器が小型石槍と伴出し、台形剥片は常に生産され続けている。あるいは、槍として最も一般的であったのは、未加工の台形剥片を装着したものであったのかもしれない。いずれにせよ、石器群の構成はフィードバックループを媒介とする推移構造を保有し、特徴器種をメルクマールとする理解の射程は決定的に浅い。

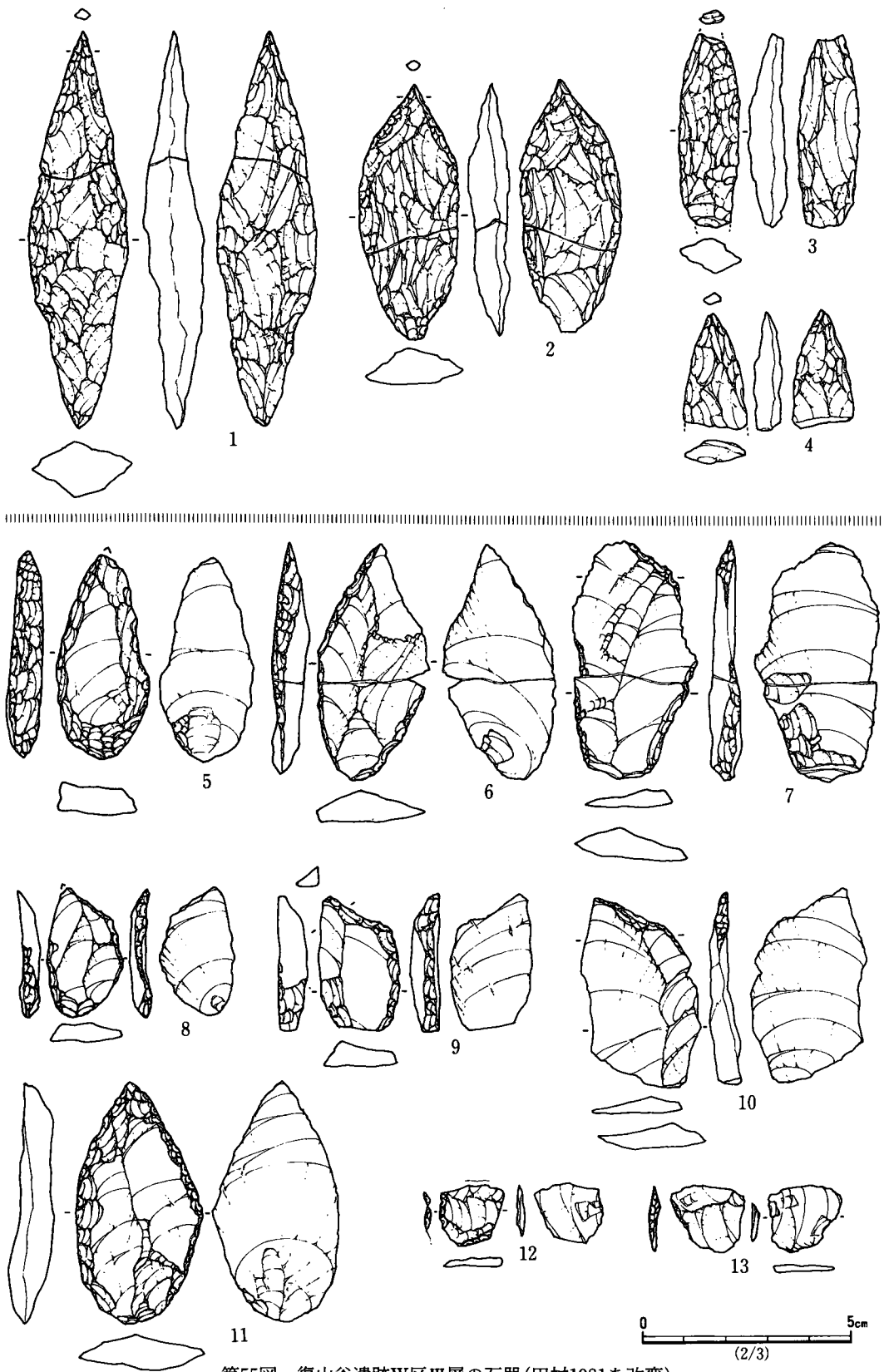
e) 編年 御塚山遺跡第I文化層と対比される石器群を近隣地域にもとめると、白井町復山谷遺跡W区III層の石器群(第55図)をまずあげることができる。復山谷遺跡III層にはいくつかのブロックがあるが、このうち、WIII₂からWIII₆とした5箇所のブロックがこれに該当している。剥片剥離技術やナイフ形石器の形態などに一致した特徴を認めることができる。また、石材も、珪質頁岩、珪質凝灰岩(オパール)、黒曜石の3種から構成されており、これは御塚山遺跡の構成とほぼ完全に一致している。各石材の外観も酷似していた。このため、遺跡間での接合関係の有無をチェックしたが、残念ながら接合するものを検出することはできなかった。

両遺跡の石器群を比較して、まず問題となるのは小型石槍の伴出関係である。御塚山遺跡では、第2ブロックにおいて、ナイフ形石器と小型石槍との共存を確認した。ところが、復山谷遺跡では、各ブロック共に小型石槍を伴っていない。ただ、気にかかるのは、WIII₃ブロックとした大型の石器集中地点のすぐ南側に、安山岩製の細身の槍の集中地点(WIII直上Iブロック)の存在していることである。特に一端の尖鋭化した木葉形で細身のものは御塚山例とよく似ている。報告書においては、先土器時代終末期に位置づけたが、今回、あらたに御塚山遺跡において、明確なナイフ形石器との共伴例が確認されたことによって、その編年的位置も流動的なものになった。

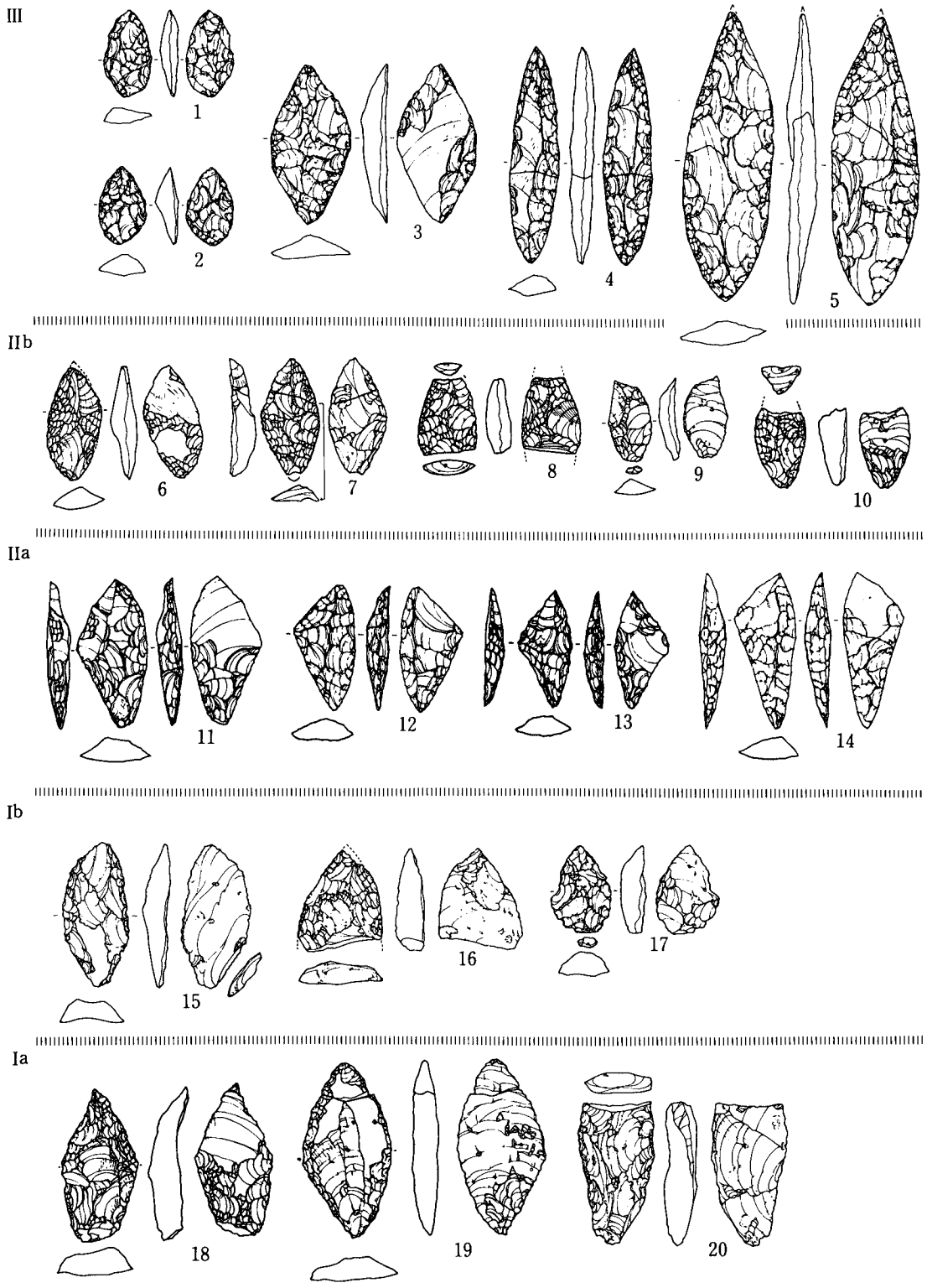
下総台地のソフトローム層中に含まれる石器群の変遷は、南志津地区の調査によって、従来不明確であった点のいくつかが解明された。詳細は大林遺跡の項で述べられるが、その流れの中で、本遺跡の石器群も、自ずとその編年的位置が定まるであろう。

大林遺跡の層位的観察によれば、ソフトローム層の中・下層部には、石刃ナイフを含む文化層(第III文化層)があり、その上部に、ほぼ御塚山I a期というパラレルな文化層(第II文化層a)が認められた。これは、御塚山遺跡第1～第7ブロックと、第9ブロックとの層位的な先後関係を補強するものと評価したい。また、大林遺跡第II文化層bとした、小型の東内野尖頭器を含む石器群と、御塚山I a期の石器群もほぼ相前後するものと認められるに到った。しかし、両石器群には、ほとんど共通項を見い出すことができず、その解釈に苦慮する。

これらの石器群は、大体、相模野IV期と言われる時期と併行している(矢島・鈴木 1976、鈴木・矢島1978)。そして、この時期は前後2時期に細分されるという(諏訪間・堤 1985)。



第55図 復山谷遺跡W区Ⅲ層の石器(田村1981を改変)



第56図 下総台地における小型石槍の変遷
 (1~5西の台, 6~10大林, 11~14平賀一の台, 15~17, 20井戸向, 18, 19権現後)

この見解に従うと、

相模野IV期後半 大林II・御塚山I a

相模野IV期前半 大林III・御塚山I b

という対応関係が導かれるが、下総側での資料的蓄積が十分とは言えない。また、東内野型尖頭器については、概略次のよう変遷が予測される。

相模野IV期後半 木苺峠（鈴木 1975）

相模野IV期前半 平賀一の台（道沢 1985）

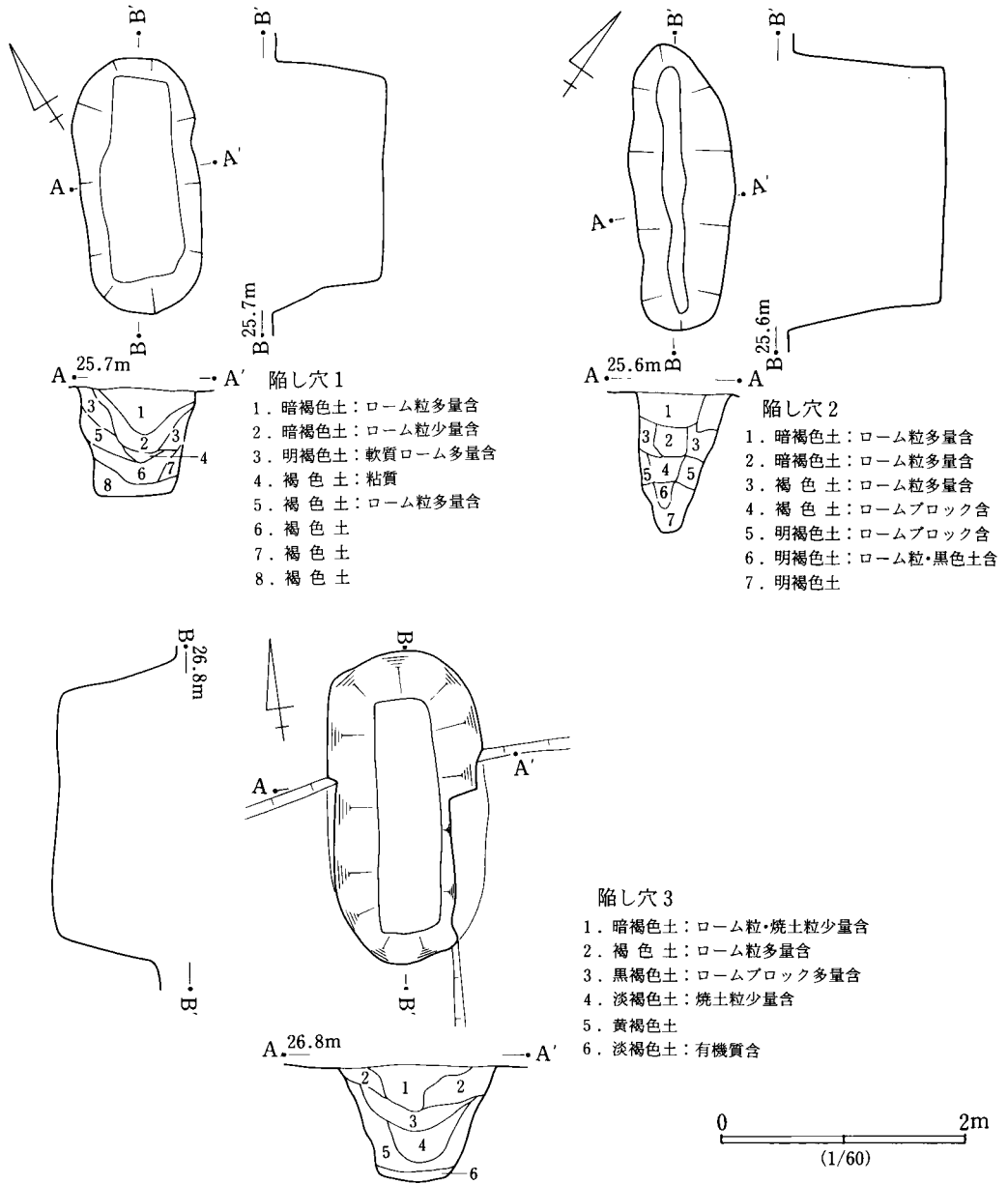
平賀段階に先行する小型の石槍の変遷を見ると、権現後遺跡第12・第14ブロック（橋本 1984）、井戸向遺跡S-3ブロック（田村 1987）が最も古く、これに、井戸向遺跡S-2ブロック例が後続している。また、御塚山I a期の石槍は、若干の時間差は当然認め得るとしても、西の台遺跡（道沢 1985）の石槍の系列に帰属するものと考えられる。西の台遺跡では、仙川や男女倉の影響と、越中山の影響が出会ったものとする見解がとられている（道沢 前掲書）が、石槍の大きさ・形態の分化がすすみ、比較的大型の両面打製のものが含まれるなど、ほぼ相模野V期に並行するものと見られる。従って、先の年代観によれば、木苺峠に後続する第3段階ということができよう。以上の変化をまとめると第56図のようになり、比較的短期間に、いろいろな形態をした石槍の推移する傾向が窺われる。しかし、大筋としては、東内野型尖頭器を基準として、3段階に亘る変遷過程が辿れそうである（段階I・II・III）。

ナイフ形石器の変遷については詳しくは触れないが、御塚山I a期のナイフ形石器は、例えば、深見諏訪山遺跡第III文化層（榎田 1987）や、中村遺跡第IV文化層（伊藤 1987）から多量に検出された諸種のナイフ形石器を、少量ずつ分けてもっている様子が窺われる。いずれも、相模野IV期後半の典型的な石器群であるが、このような内容の石器群が、はたして、下総台地においても一般的であったのか、それとも客体的存在にしかすぎないかは、なお今後の調査事例の増加に俟つところが大きい。しかし、御塚山遺跡にせよ、あるいは復山谷遺跡にせよ、その使用石材は、黒曜石を除外すれば、いずれも北部関東以北を指向し、相模野の状況とは大きく異っており、単なる客体的存在と看做す立場の成立が困難であることを暗示している。この点に関しては、山形県平林遺跡（加藤 1963）の存在が示唆的であろう。最後に各遺跡の対応関係を示しておく。

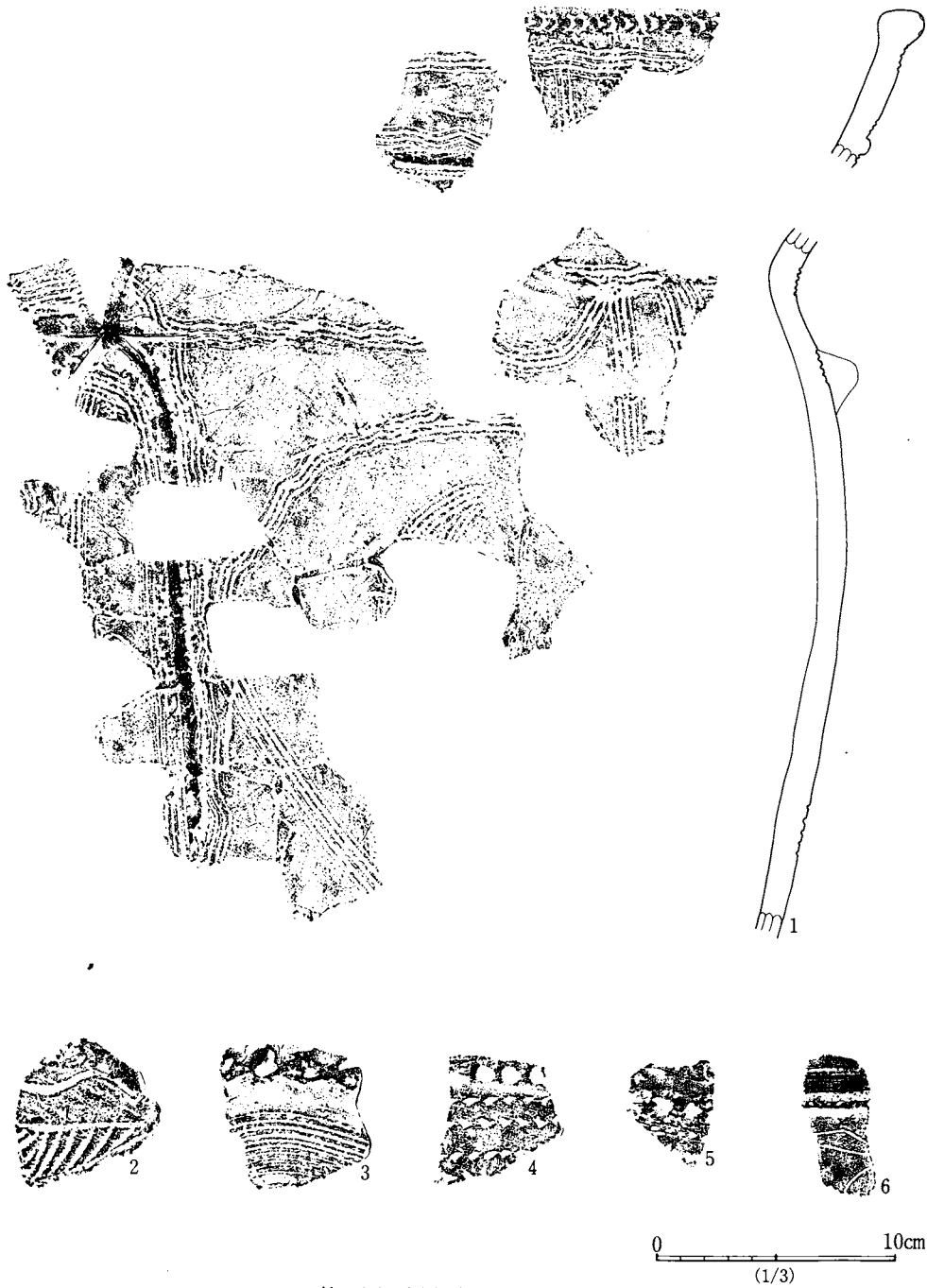
相 模 野	下 総	御 塚 山	大 林
V 期	西 の 台		
IV 期(新)	木 苺 峠	第 I 文化層 a	第 II 文化層
IV 期(古)	平 賀	第 I 文化層 b	第 III 文化層

第3節 縄文時代

御塚山遺跡からは発見された縄文時代の遺構は陥し穴3基のみである。これ以外に、少量の土器と石器の検出があったが、特に遺物包含層と認定し得る程の量ではなく、数個体分の細片が点在している、といった状態であった。そのなかで、2L-40区からは同一個体の阿玉台式土器の破片が集中していた。



第57図 陥し穴



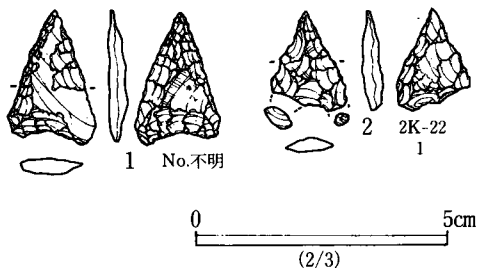
第58図 縄文時代の遺物（土器）

A. 陥し穴（第57図、図版4・5） 3基の陥し穴は、昭和60年度本調査区に隣接して2基、谷頭部西側で1基を検出した。確認調査で終了している部分が多いので、これ以外にもいくつか存在した可能性もあるが、点々と分布しているため、全てを捕捉することは困難であった。

陥し穴1 3J-30区にある。長軸2.1m、短軸1mの隅丸方形のプランで、底面も同様の形状となっている。深さは検出面から0.9m。底面の長軸は1.6m、短軸0.6mで、ほぼ平坦であり、下部施設は確認されなかった。壁はほぼ垂直に立ち上るが、僅かに外開きの形態をとる。埋土は8層に分けられるが、上半にローム混入が多く、人為的な埋め戻しが行われている。遺物の検出はない。

陥し穴2 3J-22区にある。V字形に近い掘り方をもつ典型的な陥し穴である。長軸は2.3m、短軸0.8m、深さ1.1mであるが、底面は、長軸2mに対して、短軸は0.2mしかなく、狭長な形態と言える。掘り方はほぼ垂直に近い。埋土は全体にローム土が混入した褐色土で、底面に通常看取される黒色土の堆積はない。また、底面に下部施設は確認されなかった。

陥し穴3 4I-58ポイントの直下に検出された。陥し穴1と同様の形状を呈している。長軸2.5m、短軸1.3m、深さは検出面から0.95mとなっている。確認調査に際して南側の半分の上部を削平している。底面には腐植土層が薄く堆積し、その上部はローム混じりの土層が数枚重なっている。やはり底面に下部施設は確認されなかった。

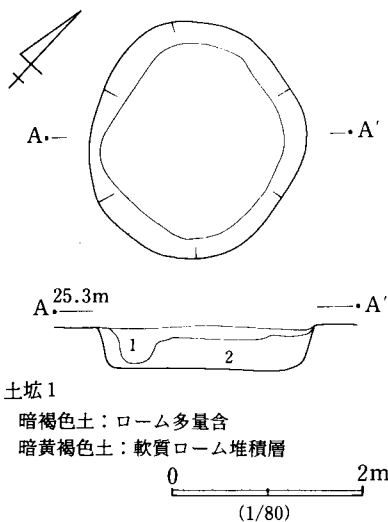


第59図 縄文時代の遺物（石器）

B. 縄文時代の遺物（第58図・第59図）
縄文土器は全て合わせても、整理箱1箱分ぐらいしかなく、少量の検出であった。1は2L-40区から集中的に出土した土器で櫛歯状工具による波状文をもつ土器で、阿玉台式後葉のもの。2～6は早期中葉から後期にかけての細片である。石器は図示した黒曜石製の石鏃が2点あるのみであった。

第4節 近世の遺構

近世以降の遺構としては土坑と溝があるが、何れも幕末以降のものと思われる。溝に関しては記載を省略した。土坑1（第60図）は3I-65区にあり、径2.3m、深さ0.4mの円形のもので、ローム土を多く含んだ土で埋められていた。覆土上面には破損した陶磁器が取りまとめられた状態で廃棄されていた。遺跡周辺は幕末期に佐倉藩下級士族の屋敷があり、あるいはそれに関連するものかもしれない。（田村）



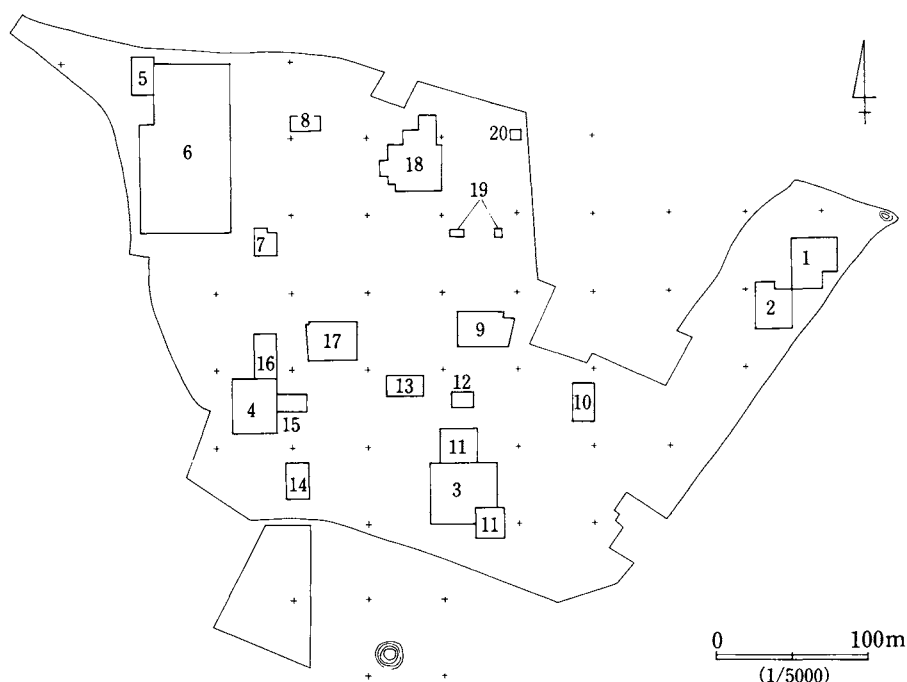
第60図 土坑

第2章 大林遺跡

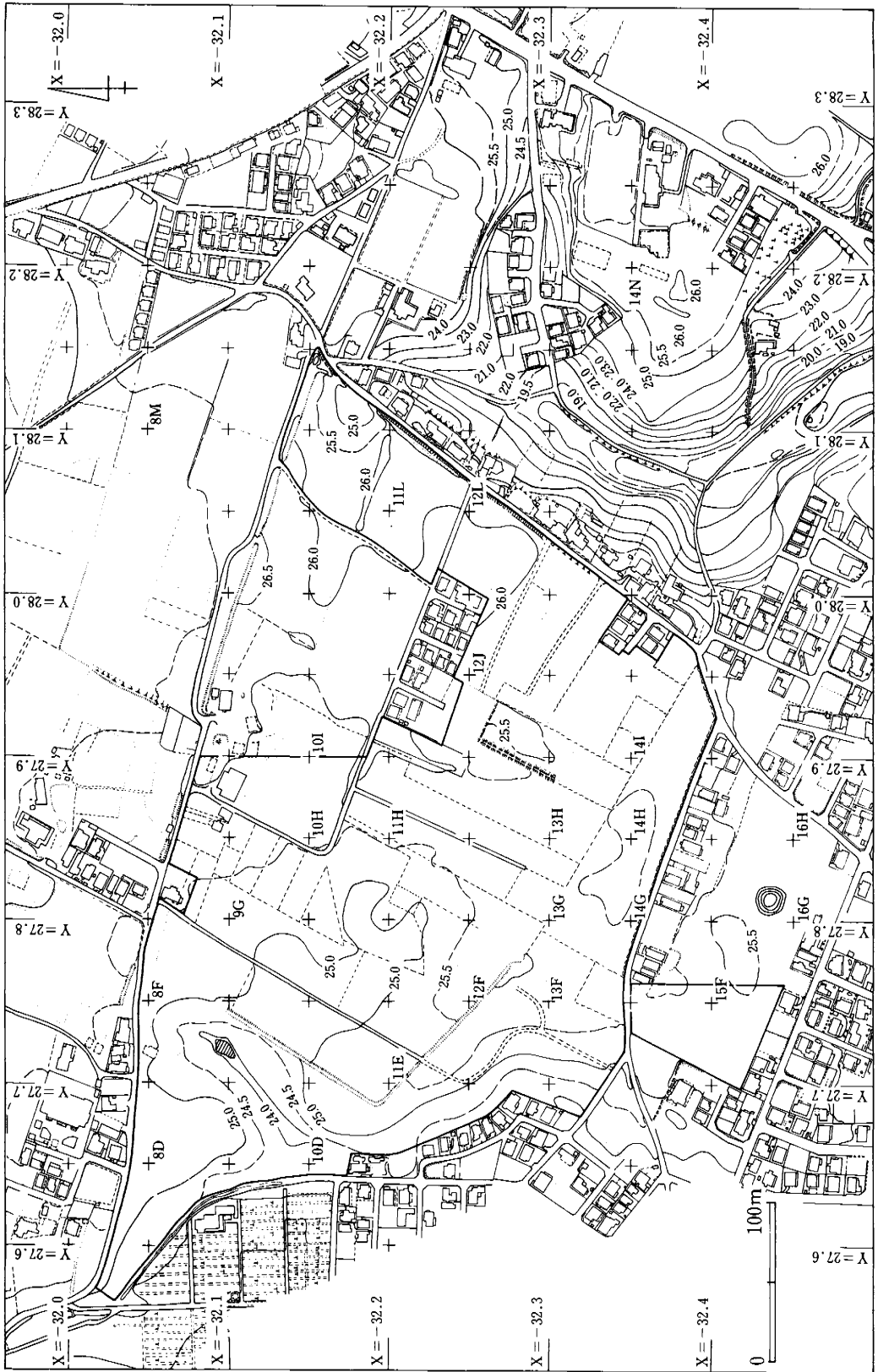
第1節 調査の概要

大林遺跡は昭和62年度までに104.510m²の調査を終了した。南志津地区において最も広い面積の調査となったが、縄文時代以降の検出遺構は極めて少なく、その主体は先土器時代であると言ってよい。先土器時代の遺物は、遺跡西縁部と、遺跡内を東西に走る埋没谷に沿って大きく36箇所に入る集中地点を形成していた。産出層準は立川ローム層の全層準に亘り、7枚の文化層を識別したが、就中、III層、IV層、IX層の各層準からはまとまった資料が得られている。

縄文時代では、草創期後半夏島式の土器片が多量に出土した地点もあるが、それは広大な遺跡内の限定された領域であり、しかも、埋没谷河口部であることは、この谷の由来を知る上で甚だ興味深いものがある。早期以降の遺物は縹渺たる状況であったが、谷沿いに陥し穴と見られる長円形土坑が各処で発見されている。また土器片や石器が単独で散布している地点もある。以降、長期に亘り遺跡内での人類活動の形跡は途絶するが、幕末期に到り再び人影を見るようである。本遺跡の調査は、昭和57年度以降数次に及ぶため、調査時に各地点に番号が付された。このため、初めに各地点の概要を述べ、次いで各時代毎に詳細な記載を行う。



第61図 大林遺跡の調査区とその呼称



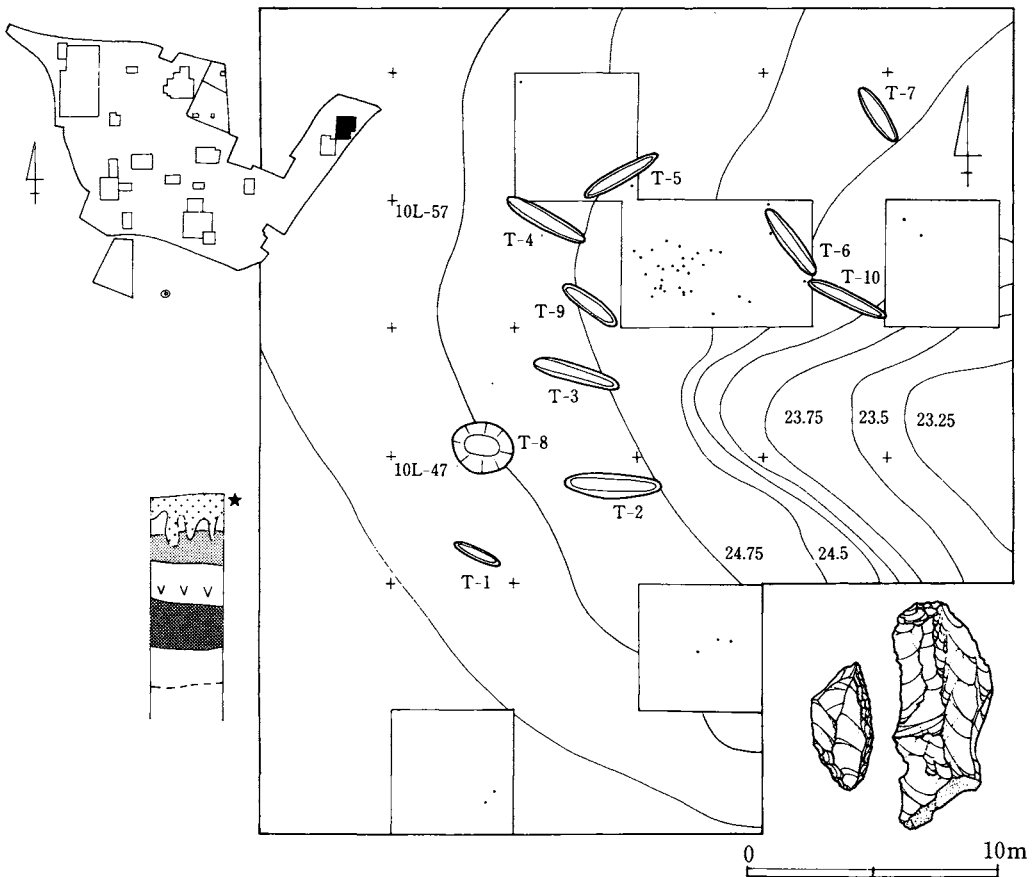
第92図 大林遺跡全体図

第1地点

第1地点は大森遺跡最東端に位置している。台地の平坦面から斜面にかけて調査した。調査区のほぼ中央に、ノッチ状に浸食された部分があり、古い谷があると見られる。この谷頭部を取り囲むように、先土器時代から縄文時代にかけての遺構と遺物が検出された。

先土器時代の遺物は、10L-59区を中心とする小規模なまとまりを形成している。斜面部にあり、土層の流れがあるためか、ローム層の遺存状況は悪く、遺物の産出状況には不明な部分もあるが、大体、ソフトローム層の上部から検出されている。遺物は総数で50点足らずしかなく、剥片を中心にしている。ナイフ形石器や削器、石刃などもあるが少数である。石材としては珪質頁岩が多用されている。これを第5ブロックとした。第II文化層aに帰属している。

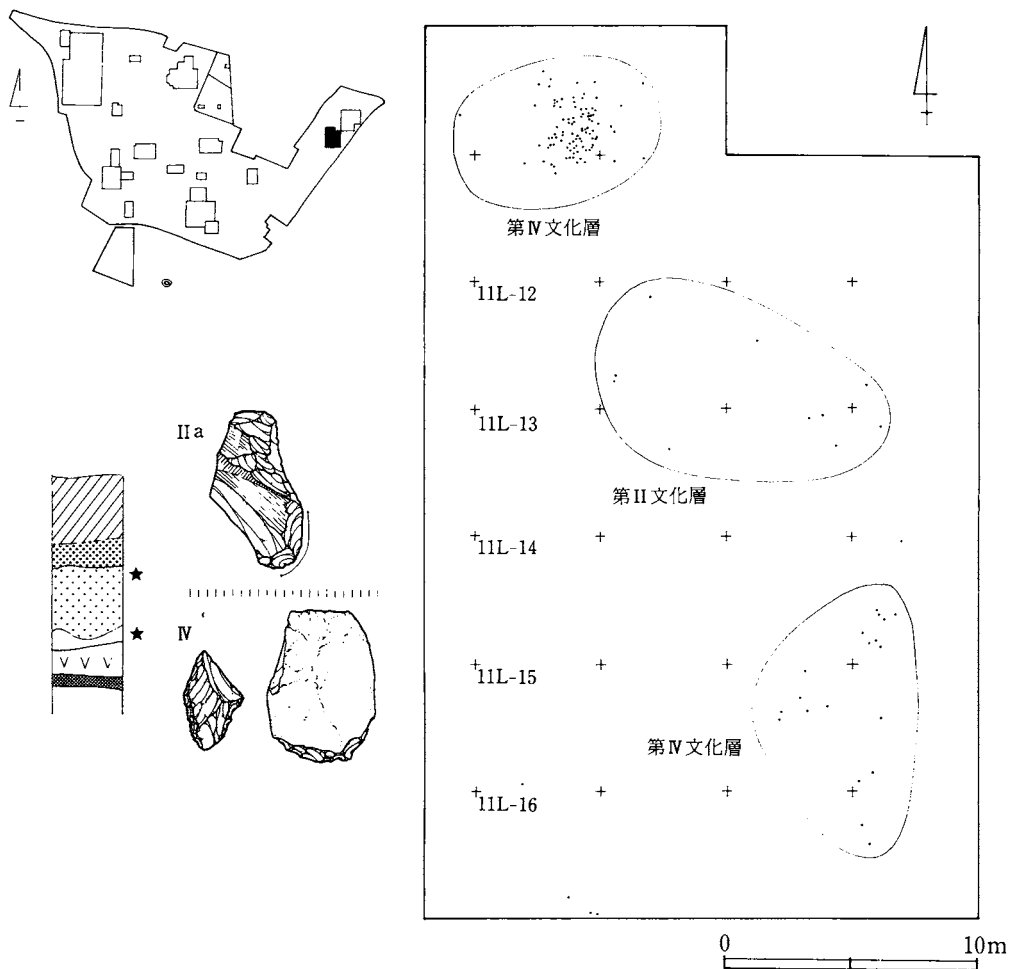
縄文時代の遺構としては、10基に上る土坑の存在が注目される。土坑には2種あり、平面形態が円形のもの、細長い長円形のもの、とが区別されるが、大半は後者である。分布は谷の北側に集中しており、コンターラインと直角に近い角度で交わるものが多い。陥し穴と見られるが、時期の決め手となる遺物は検出されなかった。



第63図 大森遺跡第1地点の概要 (Tは陥し穴)

第2地点

第1地点のすぐ南側に接している。先土器時代の遺物集中地点が3箇所発見されたが、第1地点のような土坑は検出されなかった。先土器時代の文化層は上下2枚あり、調査区中央に第1ブロック（第II a文化層）、南北に第21、22ブロック（第IV文化層）が位置していた。



第64図 大林遺跡第2地点の概要

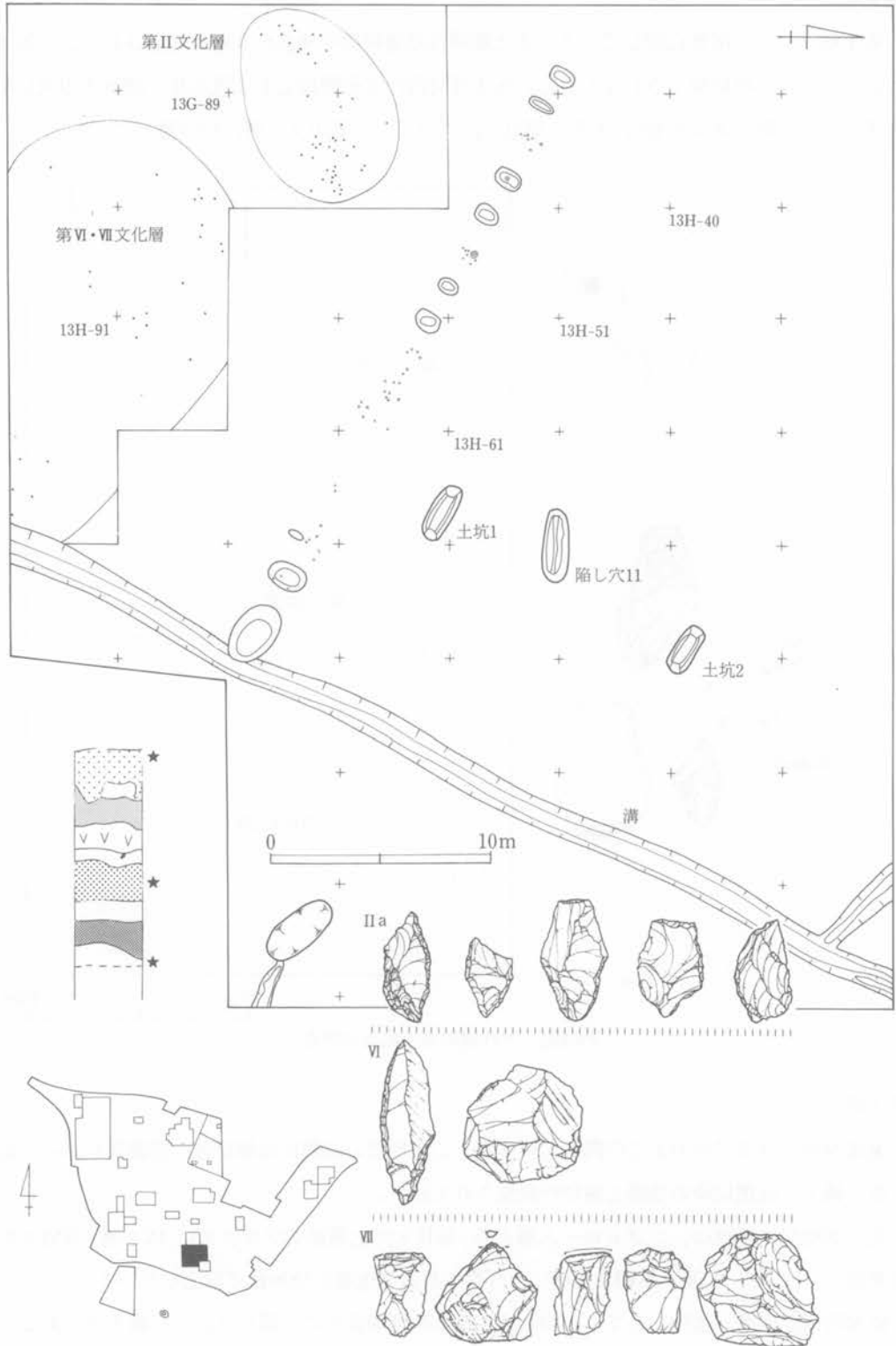
第3地点

遺跡南側のほぼ平坦面上に位置しているが、この地点の北側には埋没谷の谷頭部がある。先土器、縄文、近世以降の遺構と遺物が発見されている。

先土器時代の遺物は、ソフトローム層上部（第II a文化層第7ブロック）、IX a層（第VI文化層第39ブロック）、X層（第VII文化層）と3枚に及ぶ文化層に分かれて出土している。

縄文時代の遺構、遺物としては、陥し穴1基と草創期後半の土器片3点、石鏃1点がある。

歴史時代の遺構としては、溝と小土坑列があり、これに伴って陶磁器破片29点、寛永通宝1点が出土した。いずれも、幕末期以降の所産と見られる。

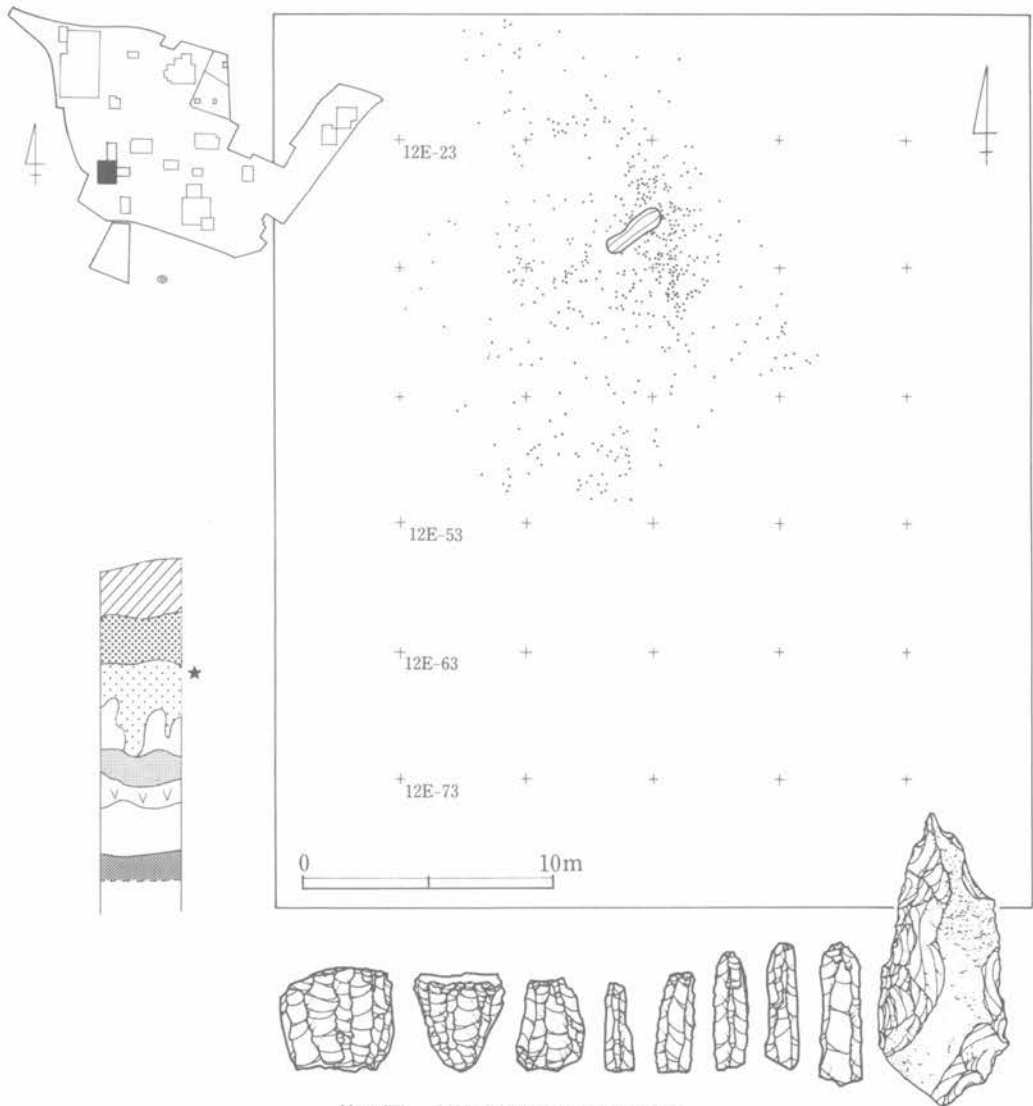


第65図 大林遺跡第3地点の概要

第4地点

大林遺跡西縁部を構成する台地端に位置している。西側に古いノッチの痕跡があり、東側には遺跡中央の埋没谷が縦走し、かつての地形が浅い谷の浸食を受け、緩やかに盛り上がった尾根状のものであったことが推定される。

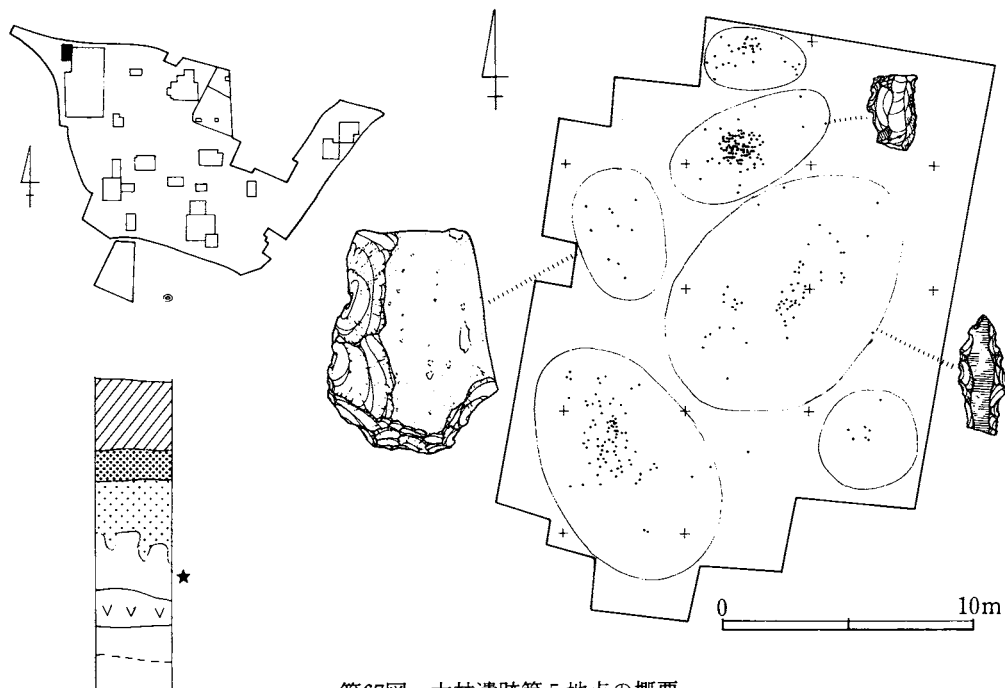
縄文時代の陥し穴が1基検出されたが、先土器時代の遺物が多数検出され、これを第I文化層第1ブロックとした。ブロックは東西16m、南北25mに及び、614点の資料が得られた。産出層準はソフトローム層の最上部と見られる。遺物には、細石刃、細石核、削器、彫器、剥片、打割器などがある。細石核とそのブランクが30点以上あり、また、関東地方で発見される細石器文化の全ての器種を含むなど、今のところ該期の最も良好なブロックの一つである。石材には、チャート、頁岩、凝灰岩、安山岩が多く、黒曜石を含んでいない。



第66図 大林遺跡第4地点の概要

第5地点

台地西縁に沿って調査区が設定された。この調査区の全域から先土器時代の遺物が出土している。これらは全て、ハードローム層の上部を遺物産出層準としており、6箇所のブロックに分けられたが（第IV文化層第23～第28ブロック）、相前後して形成されたものと見られる。



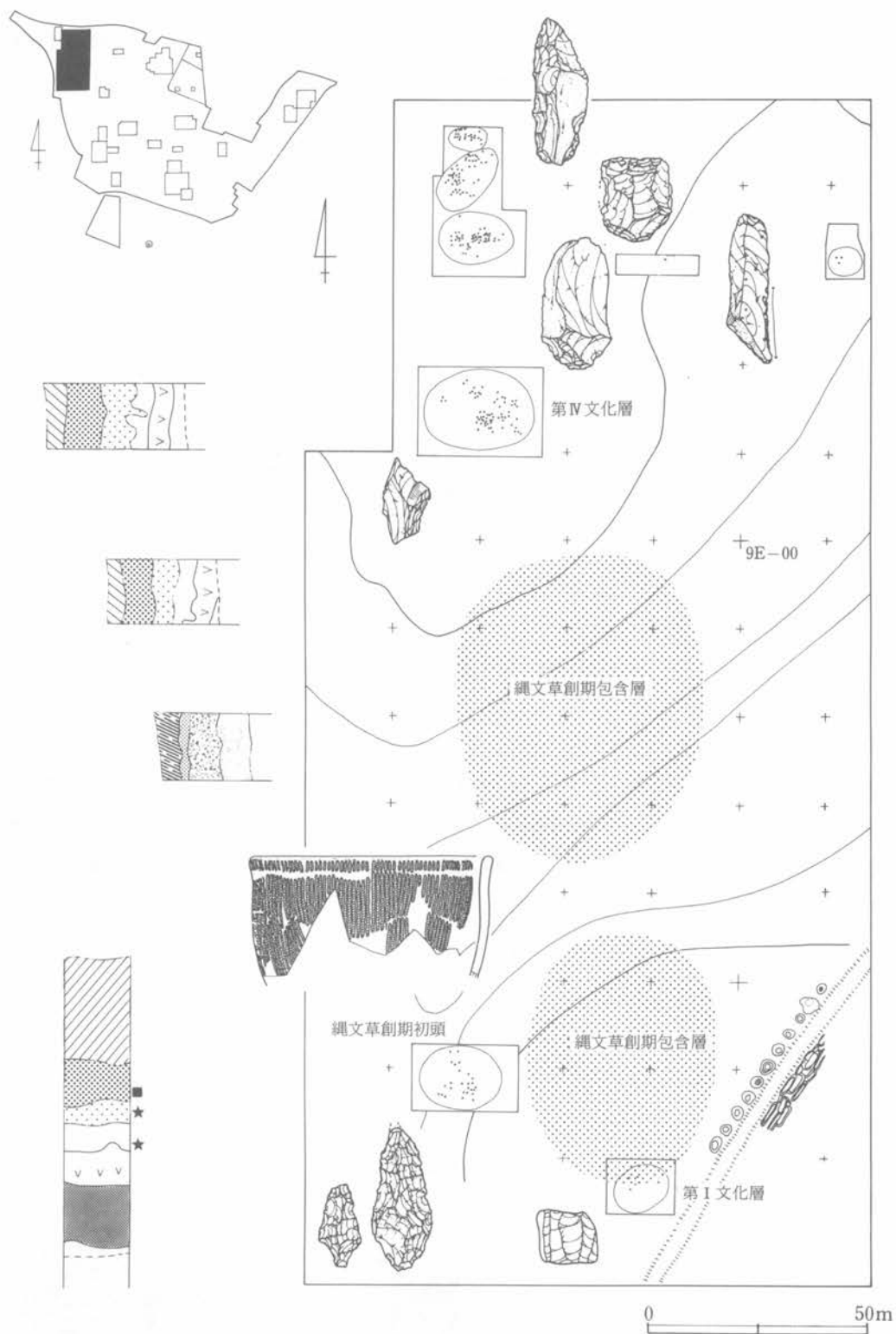
第67図 大林遺跡第5地点の概要

第6地点

やはり台地西縁に位置するが、調査区中央に埋没谷が西に開口しており、変化に富む地形となっている。埋没谷の東西には、先土器時代～縄文時代草創期の遺物が多く分布していた。

縄文時代の遺物は、埋没谷南側高処に草創期初頭の石器集中地点があるが、主体は草創期後半の遺物包含層であった。包含層は谷底部と、その南側緩斜面～平坦部にあり、大量の夏島式土器の破片が出土している。また、それに伴う各種の石器類も採集された。

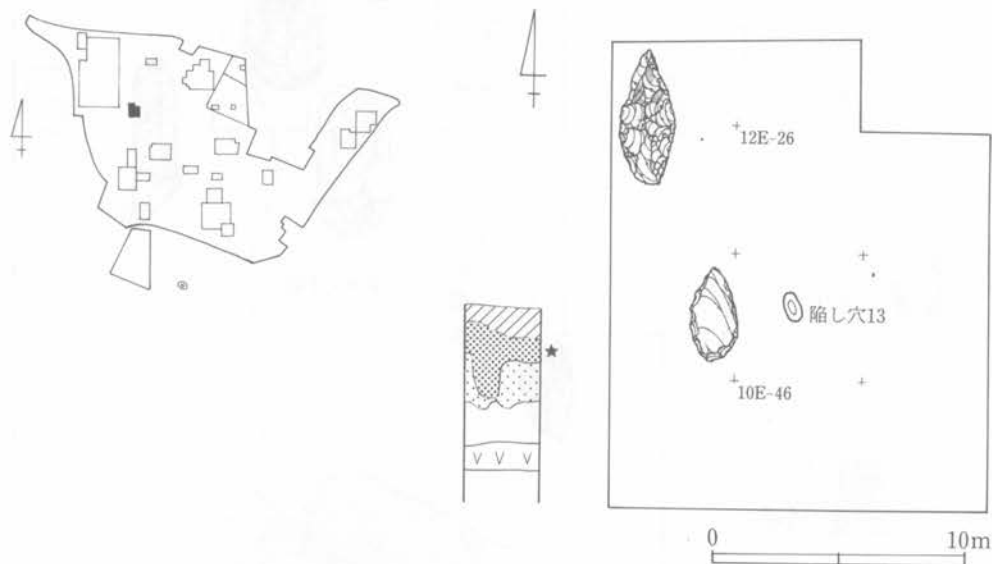
先土器時代の遺物集中地点は、埋没谷南側平坦面上に1箇所、北側平坦面上に4箇所あり、その他若干の資料が単独にて採集されている。南側の集中箇所は小規模なもので、細石刃、細石核、ナイフ形石器など8点の遺物からなる。これは、第4地点のブロックと似ているので、第I文化層、第2ブロックとした。一方、北側の4箇所の集中箇所は、第5地点のブロック群の西側に連続しており、地点こそ異なるものの、産出層準や接合資料の存在などから一連のものと思われる。これらを、第IV文化層第29～第32ブロックとした。ナイフ形石器、剝片製端削器など、武蔵野台地IV下層石器文化との関連性が指摘される。第5地点のブロックを合計すると、ほぼ同時期のブロックが10箇所程度群在する様相が認められる。



第68図 大林遺跡第6地点の概要

第7地点

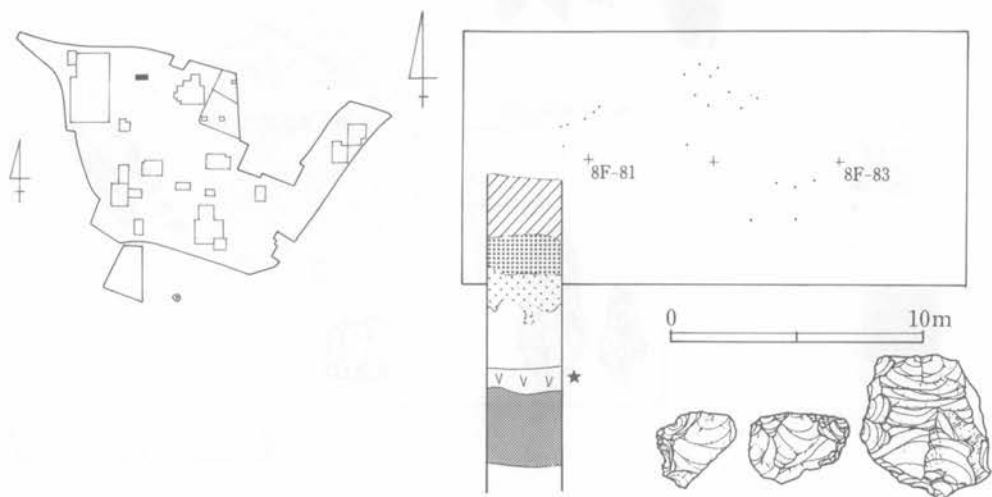
本地点は第6地点の南東部に位置している。遺構としては、縄文時代の陥穴状土坑が1基検出されたが、詳しい時期は不詳である。先土器時代の石器は石槍、ナイフ形石器各1点の出土が記録されているにすぎない。



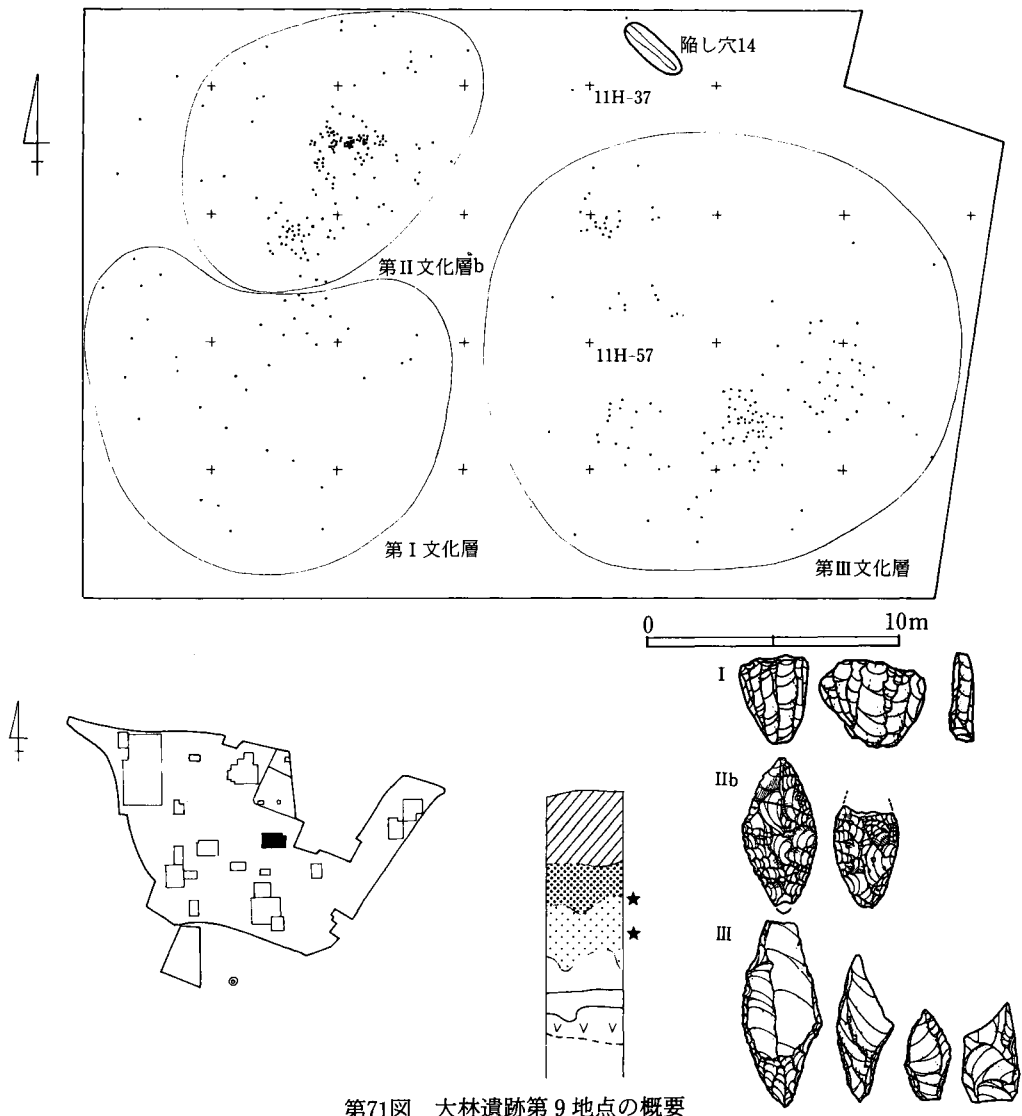
第69図 大林遺跡第7地点の概要

第8地点

第6地点東方、埋没谷北側に位置する。AT層準から石器群が検出され、第V文化層第38ブロックとした。ブロックは3つの小群からなり、少量の剥片類を主体としている。剥片は一般的な剥片剥離工程によるものであり、VI層石器群に一般的である石刃技法による石器類を全く保持していない点が注目されよう。



第70図 大林遺跡第8地点の概要



第71図 大林遺跡第9地点の概要

第9地点

大林遺跡のほぼ中央に位置している。調査時にはほぼ平坦な景観を呈していたが、遺跡中央の埋没谷東側の緩斜部から平坦面上に立地する地点である。調査の結果、縄文時代の陥し穴1基と先土器時代の石器集中地点とが検出された。

先土器時代の石器集中地点は、調査区のほぼ全域に亘って検出されたが、いずれもソフトローム層内を産出基準とするものであった。これらの石器集中地点はいずれも近接して検出されており、ソフトローム層中での僅かな層準差が検知され、また、各石器群の型式学的検討を経て、大別3枚の文化層が識別された。

最上層のものは、ソフトローム層最上部から検出され、細石刃、細石核、安山岩製横打剝片などを含み、第4地点のブロックと並行関係にあるものと考えられる。1ブロックのみの検出

であったが、これを第I文化層第3ブロックとした。

この僅かに下層から、黒曜石製の東内野型尖頭器の製作址が2箇所検出された。東内野型尖頭器の破損品や、剝片・削片があり、これらを第II文化層b第9・第10ブロックとした。

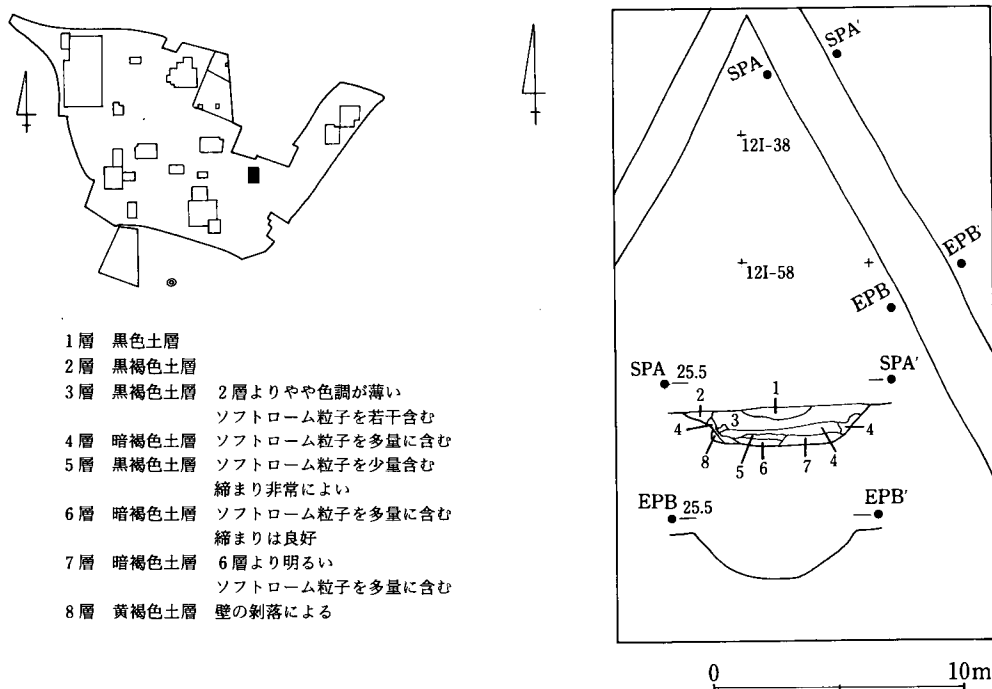
最下層はソフトローム層の下部に位置しており、大小5箇所のブロックに分かれて分布していた。第III文化層第12～第16ブロックがこれである。この文化層の特徴は、石刃とそれを素材とするナイフ形石器が多く存在する点であり、所謂砂川期とされている段階に相当している。砂川期の文化層と、東内野型尖頭器を含む文化層との層位的検出は、本地域にあつては稀有の事例であり、両者の編年観や系統的研究に寄与するところが大きいであろう。

第10地点

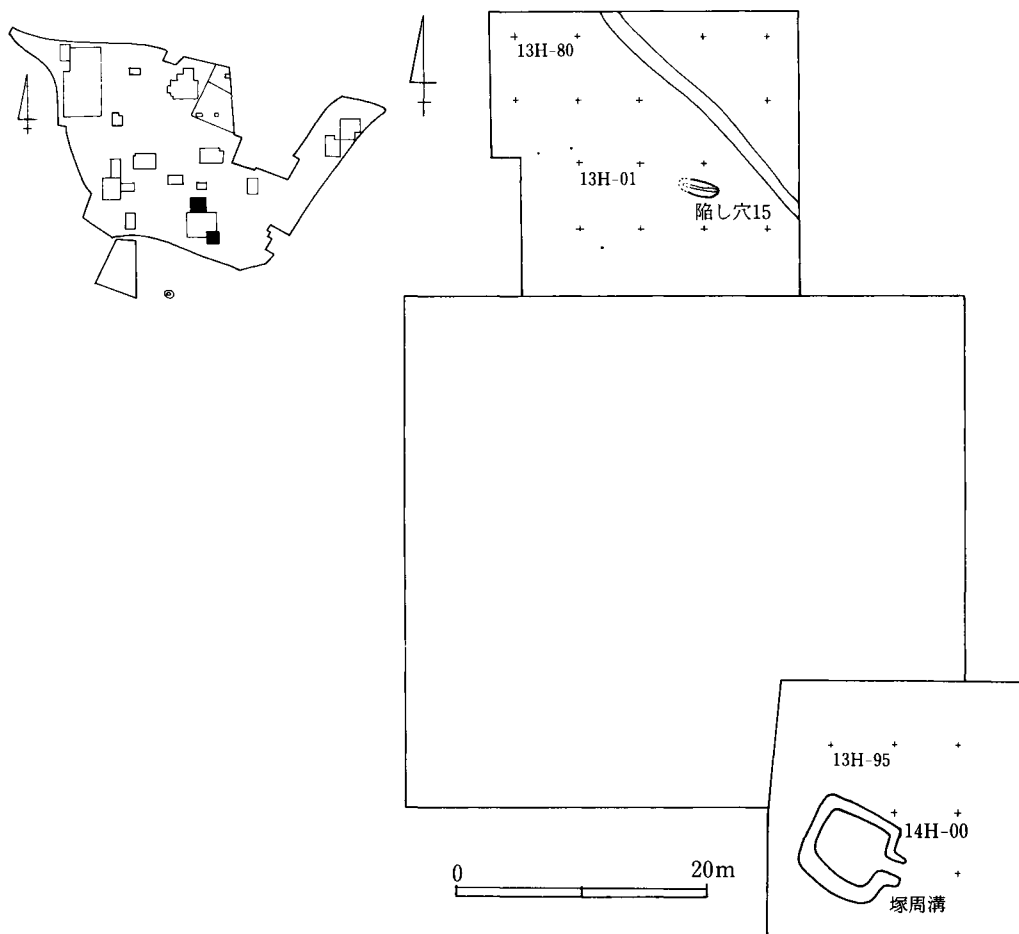
多数のブロックの形成要因である埋没谷から距たった内陸部にあるため、先土器時代の遺物の検出はなく、近世以降の溝2条の検出に留まった。

第11地点

第3地点の南北に調査区を設定した。北側の調査区からは、縄文時代の陥し穴1基、近世以降の溝1条の検出があつた。溝は第3地点の溝と接続するものと見られるが、その性格は不明である。南側の調査区からは、羽子板状の形態をとる特異な周溝状遺構が検出されたが、近接する大塚1号塚との関連から、盛土部分を失った塚であると判断した。



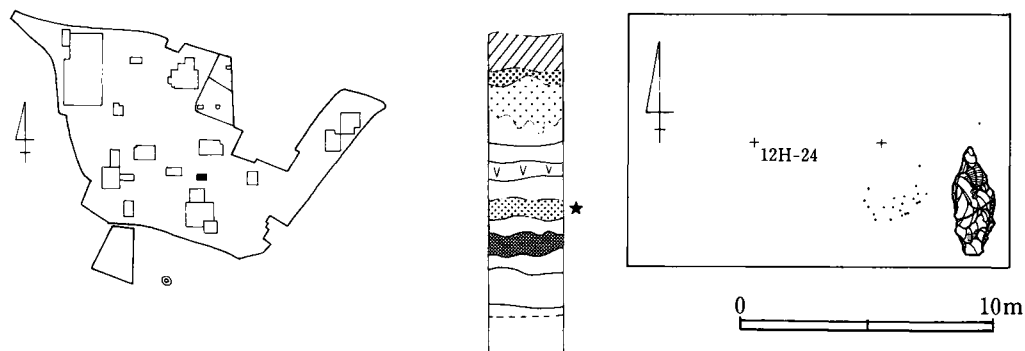
第72図 大林遺跡第10地点の概要



第73図 大林遺跡第11地点の概要

第12地点

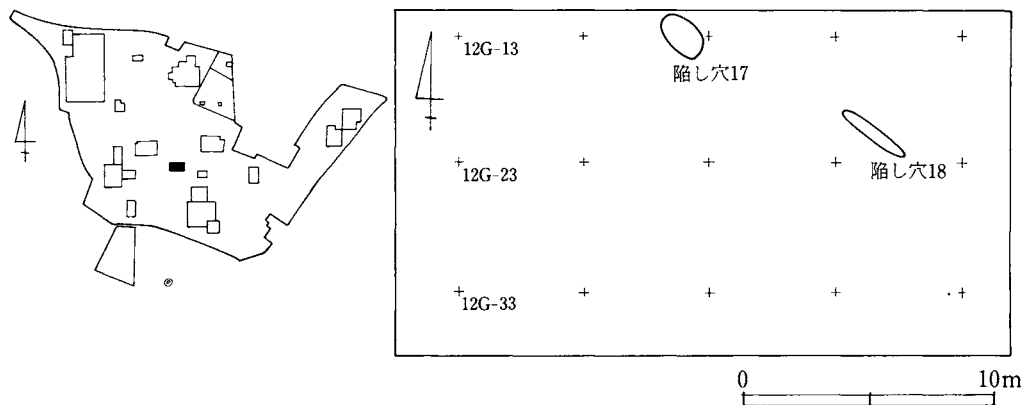
遺跡中央の埋没谷谷頭部に立地している。この地点の周辺は土層の条件に恵まれ、本地域の典型的なテフラの堆積状況を観察することができた。本地点からは、IX a 層より黒曜石の剝片製小型ナイフを含む小規模なブロックが1箇所検出された（第VI文化層第40ブロック）。



第74図 大林遺跡第12地点の概要

第13地点

第12地点のすぐ西側の地点であり、先土器時代の遺物の出土を予想したが、縄文時代の陥し穴2基の検出に留まった。陥し穴は埋没谷沿いに点々と分布するらしい。

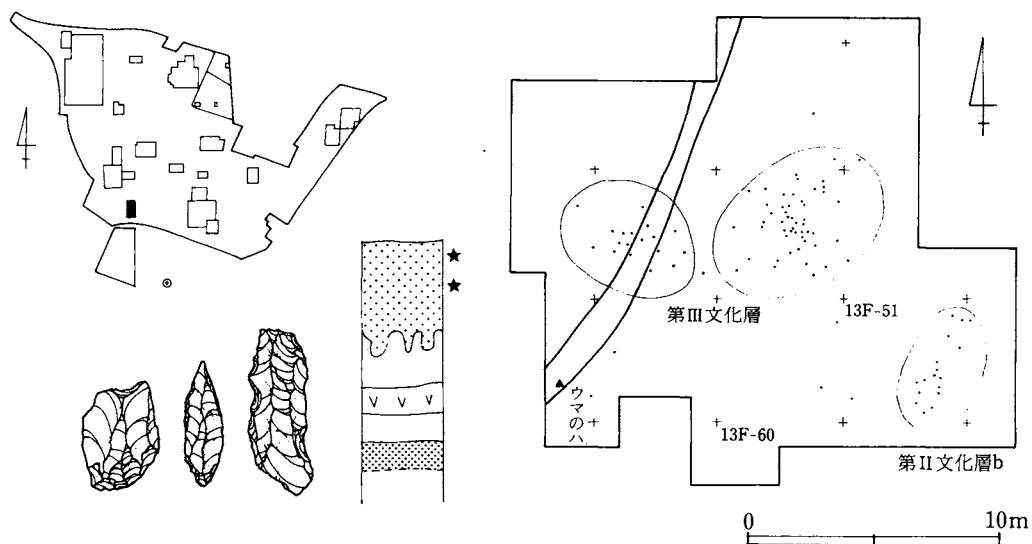


第75図 大林遺跡第13地点の概要

第14地点

遺跡南西端に位置している。近世の溝1条と、先土器時代の石器集中地点3箇所を検出した。溝は調査区西縁を縦走しているが、その覆土上部よりウマの歯を検出した。

先土器時代の3箇所のブロックは、いずれもソフトローム層中にあり、僅かのレベル差をもち、上層の第II文化層b第10ブロックと、下層の第III文化層第17・第18ブロックとに2分されるが、時期的には近接したものと見られる。



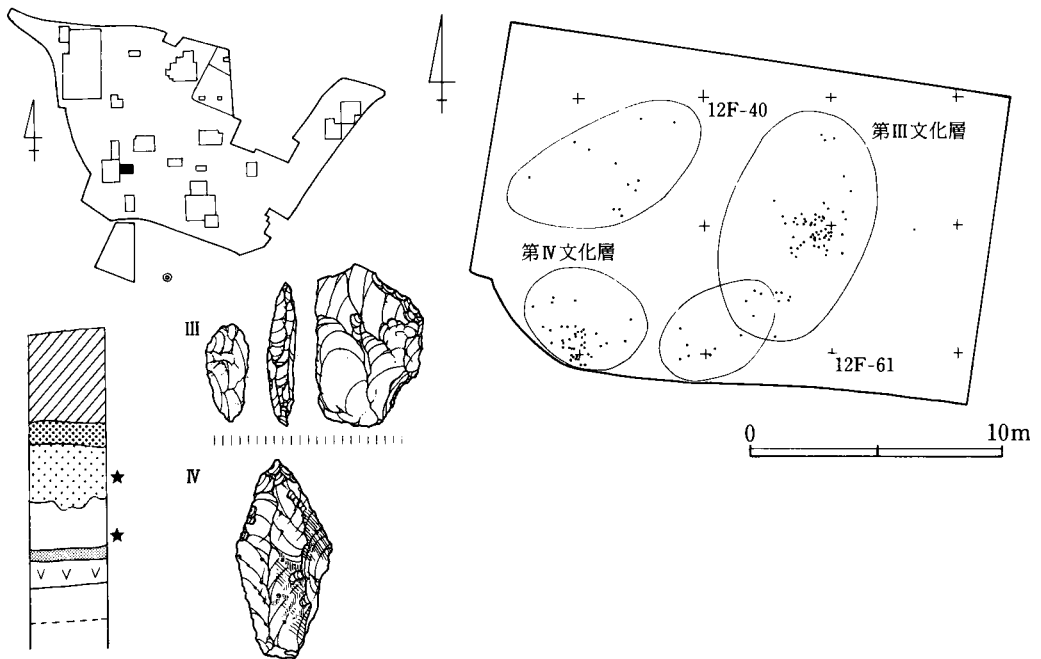
第76図 大林遺跡第14地点の概要

第15地点

第4地点の東側に隣接している。上層からの遺構・遺物の検出はなく、先土器時代の石器集中地点が4箇所認められた。これらは上下2枚の文化層に分離される。

下層のブロックは、調査区南側に並存しており、ハードローム層上部を産出層準としている。これを第IV文化層第32・第33ブロックとしたが、両ブロック間には、黒曜石の同一母岩が多く存在し、相前後して形成されたものと見られる。

上層のブロックも2箇所認められたが、産出層準はソフトローム層中位であり、明らかに下層のブロックとはレベル差をもっている。これを第III文化層第19・第20ブロックとした。第20ブロックには小規模な礫群が伴う。全般に多様な横打剥片製の石器が多いが、1点のみ石刃製柳葉形をした基部加工のナイフ形石器を検出した。



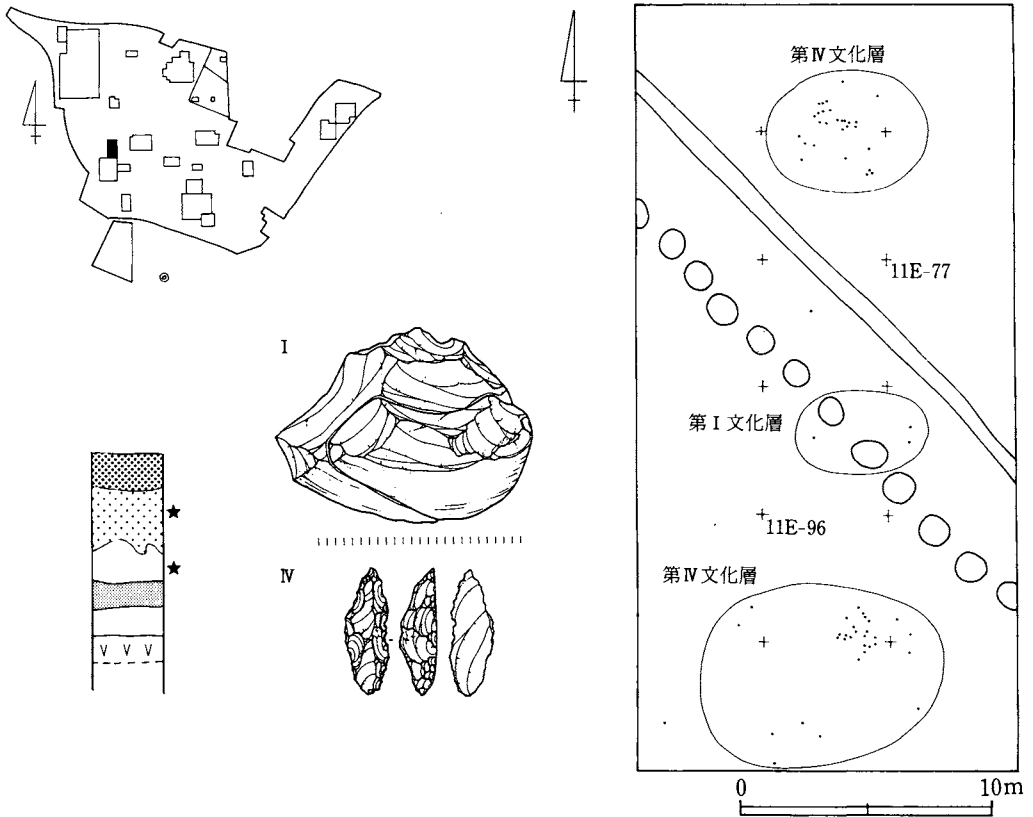
第77図 大林遺跡第15地点の概要

第16地点

第4地点の北側に隣接する地点である。北西から南東にかけて溝と土坑列があるが、これらは第3地点の溝と土坑列に接続しよう。先土器時代の石器集中地点は3箇所から検出された。

3箇所のブロックは大別2枚の文化層に還元された。下層には南北2箇所のブロックがあり、北側のものを第IV文化層第35ブロック、南側を第IV文化層第36ブロックとした。角錐状石器や削器があり、破碎礫も多くある。一方、上層のブロックは本地点の中央部、ソフトローム層上部から検出された。これを第I文化層第4ブロックとした。砂岩とホルンフェルスの礫から連続的に打ち落された大型の横打剥片から構成されている。注目されるのは、これらの剥片が、

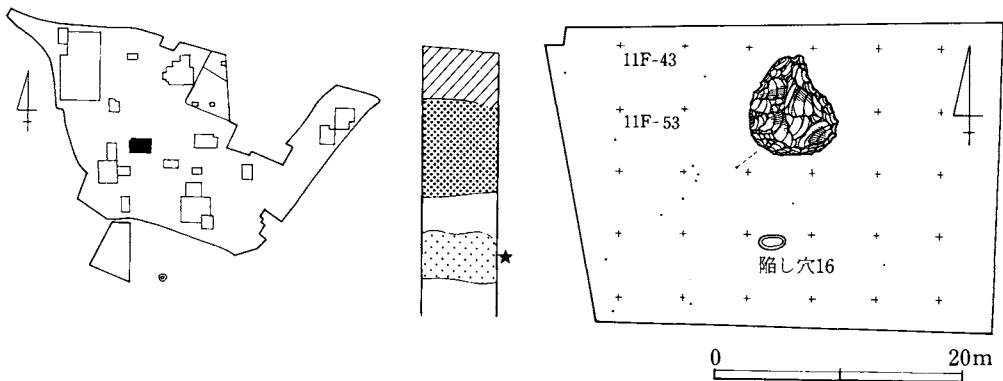
第4地点の第I文化層第1ブロックの剥片と接合関係をもつことであり、両者の関連、剥片の機能など、示唆的である。



第78図 大林遺跡第16地点の概要

第17地点

第16地点の東側にあり、埋没谷沿いの平坦面から緩斜面にかけて立地する地点である。調査の結果、縄文時代の陥し穴が1基検出された。先土器時代の遺物は調査区の南西部を中心にまばらに石器類が点在していた。ブロックとしての認定は困難であった。



第79図 大林遺跡第17地点の概要

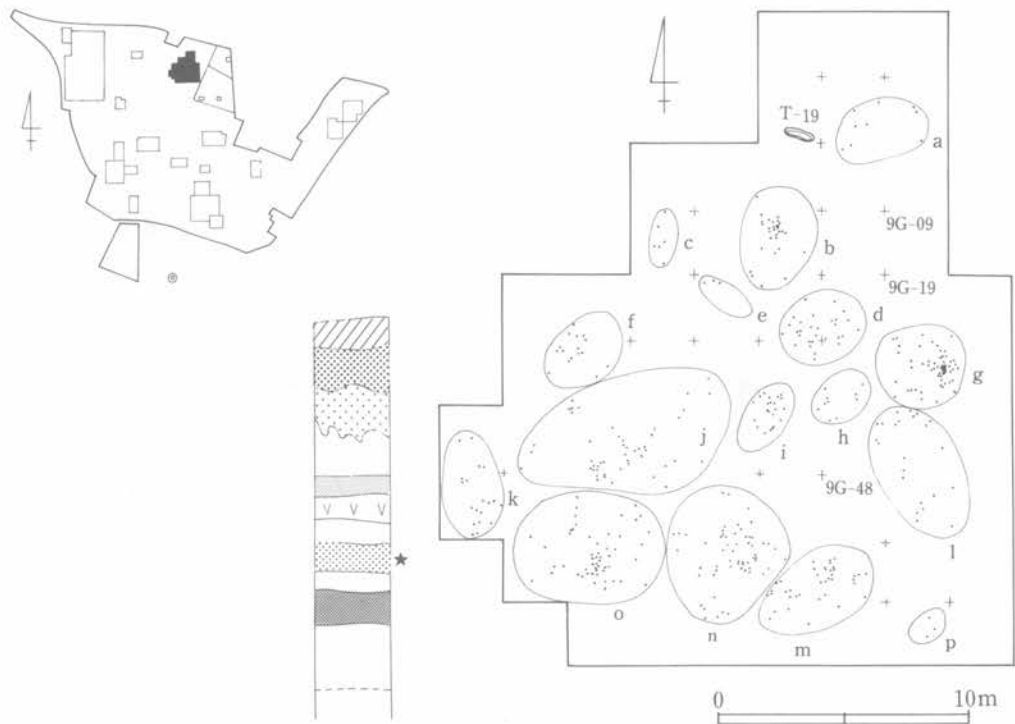
第18地点

遺跡中央部北端にあるが、水漬ロームの分布から埋没谷に臨む小規模な舌状地形が復原され、かつては水辺の微高地上であったと見られる。IX a 層から多数の遺物が検出された。

第18地点には大小16箇所の石器、礫片の集中箇所がある。これらを慣例に従ってブロックと呼称することもできるが、より機能的な分節が妥当であると考え、各々の集中地点をクラスターと呼ぶことにしよう。従って、第18地点全体を第VI文化層第41ブロックとし、その内部の部分的集中箇所をクラスター a～p と細分した。

各クラスターから得られた資料の総数は505点であり、その大半が剥片類である。剥片は各種の一般的剥片剥離手法によって作出されており、石刃と言えものを1点も含んでいない点は重要な特徴と考えられる。2次加工の著明な石器は少数であったが、ナイフ形石器、削器、楔形石器、錐などがあり、使用痕と見られる刃こぼれのある剥片も多い。これらの中で注目されるのは楔形石器であり、それ自体が各種の機能を帯びた石器であると同時に、細石刃様の小型剥片を多量に生産する石核でもあった。

石器の石材としては安山岩が多くあり、ブロック内でさかんに消費されているが、楔形石器を組織的に生産する過程で多用されている。この他には、珪質頁岩と流紋岩質の凝灰岩も多数の母岩を保有している。

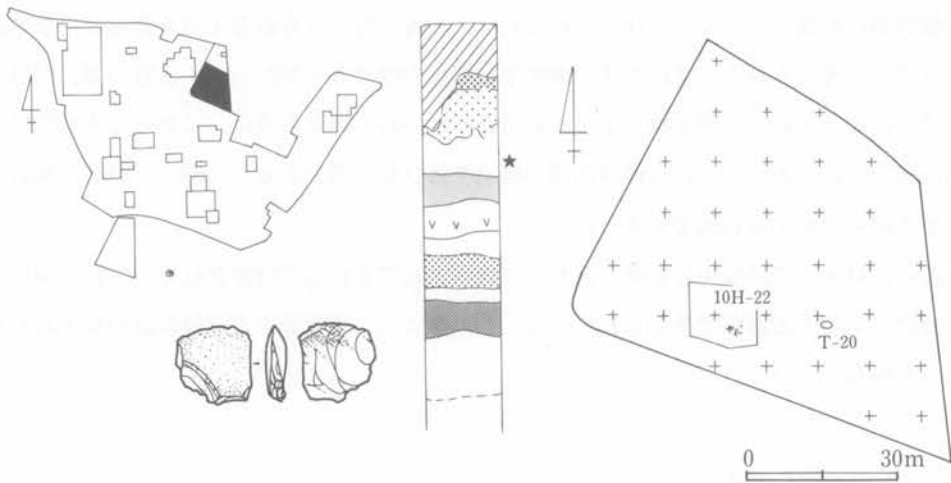


第80図 大林遺跡第18地点の概要

第19地点

第18地点の南東に近接する地点である。埋没谷から若干距たった地点であり、遺構・遺物の検出量は僅少であったが、縄文時代の陥し穴1基と、先土器時代のブロックを1箇所検出した。

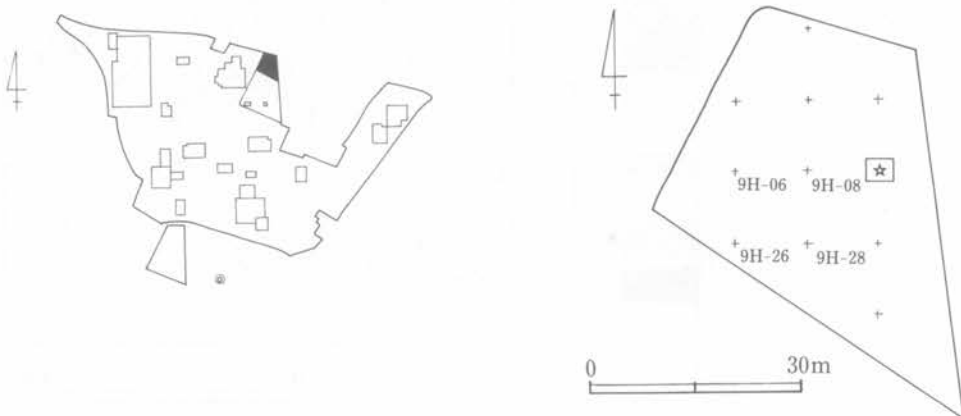
先土器時代の遺物は狭い範囲から集中的に出土した。産出層準は、第1黒色帯を視認し得たため、IV層の下部であることが判明した。これを第IV文化層第37ブロックとした。このブロックの特徴は、礫片を多く含むことで、礫群としての位置づけが可能である。しかし、小型の礫片が多く、礫も集団と共に移動することを暗示している。



第81図 大林遺跡第19地点の概要

第20地点

第19地点の北側である。大林遺跡としては最も内陸部に位置しているため、遺構の検出はなく、遺物としては、僅かに阿玉台Ia(新)式土器1個体分を得たにすぎない。



第82図 大林遺跡第20地点の概要

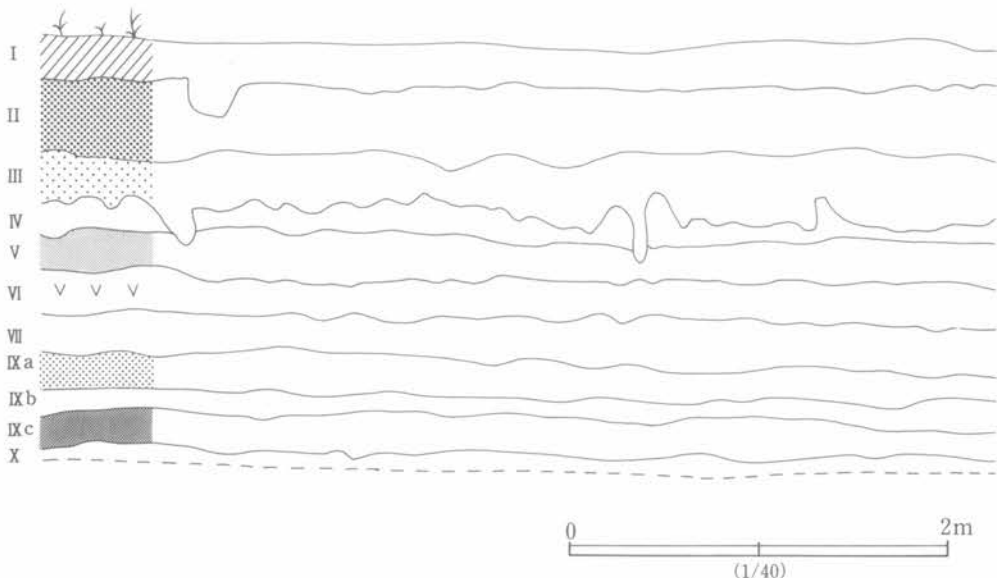
第2節 先土器時代

A. 第I文化層 細石器を一つの指標とする文化層である。第4、第6、第9、第16の各地点にブロックが確認された。この他に、第14地点周辺にも関連しそうな遺物が散見されたが、遺物の二次的な移動が疑われ、ブロックは設定していない(第18ブロックとし、付節参照)。第4地点のものを第1ブロックとし、以下順次番号を付している。第1ブロックの多量の資料は、本地域の細石器文化の理解に大きく寄与するものと確信している。

第I文化層の帰属層準に関しては、大体、II層からソフトローム層へ漸移する部分と見られる。第2～4ブロックでは、遺物の絶対量が僅少であるため、信頼し得るデータは得られていない。第1ブロック中央では、遺物の産出標高24.875mから25.125mの層厚0.25mの間に産出量のピークがあり、II層とソフトローム層の境界平均高が、24.975mの前後であるので(第94図)、ほぼソフトローム層の最上部、若しくは、その上面が文化層面と推定される。なお、第6地点における、縄文草創期初頭のブロックの産出層準がII層の下部であること、第9地点で、本文化層に帰属する第3ブロックに隣接する、東内野型尖頭器の新しい部分を含む第II文化層bの産出層準がソフトローム層の最上部であることから、従来の編年観に照してみても、先の推定に大きな誤りはないと思われる。

石器の製作技術と分類

初めに、第I文化層全体に亘る石器の観察を行い、その製作技術と形態学的特徴を明らかに



第83図 大林遺跡の基本層序(第18地点 9H-60～9H-70)

しておきたい。第Ⅰ文化層の石器群は大別して3つの技術的系列から構成されている。各系列は独立しており、相互に変容することは、ほとんどない。これらを、構成1、構成2、構成3とする。構成1は、細石刃の製作体系を、構成2は安山岩を主とする一般的剥片剥離手法に基づく石器製作体系を、構成3は、礫器状石核による剥片剥離体系を意味している。各構成の具体的内容は以下のとおりである。

構成1 母核(細石核のブランク)、細石核、細石刃、調整剥片という4つの要素を含んでいる。チャート、凝灰岩、珪質頁岩を主たる素材とし、黒曜石は1点も含んでいない。

1 a. 母核 (第87図) 原礫の分割から細石刃の剥離直前までの諸段階を含む。母核の形成過程を復原し得る良好な資料はないが、1～4を見ると、分割された礫のかけらが順次角錐状に整えられていく状況が示されている。過半数の細石核の背面、あるいは側面に、原礫分割時の原礫面や節理面が残されており、母核を形成するための調整剥離が、打面と作業面の確保に重点をおいたものであることが窺われる。少数の例外はあるが、打面は母核形成の最終段階で確定し、打面形成後には、原則的に側面に対する調整剥離は行われぬ。7、8などが、細石刃剥離の前段階の状態と見られるが、打面の調整が不足しているように思われる。

1 b. 調整剥片 (第88図) 母核形成の過程で、多数の調整剥片を生じる。調整剥片のうち、属性選択の過程を媒介として、相当量のものが石器としての使用過程に繰り込まれている。その大半のものが刃器(UF)として使用されているが(3、4)、少量のものは2次加工を経て、彫器(1)、楔形石器(2)などに転化している。

1 c. 細石核 (第84図) 細石核は、第1ブロックに23点、第2ブロックに4点、第3ブロックに7点、合計34点検出された。大体似たような作り方をしているが、形態的に多少の変化が認められる。7類に分ける。

1類 細石器剥離作業面が全周するもので、円錐形細石核と分類される。打面は非調整のものと、軽微な調整の認められるものがある。

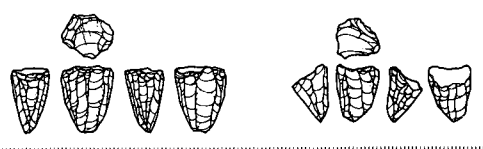
2類 単設の打面をもつ所謂半円錐形のもの。最も個体数が多い。打面長軸に直交して作業面を設定するa種と、打面長軸に平行して作業面を設定するb種とがある。両者共に、調整打面のものと、平坦打面のものを含むが、調整打面を持つものが一般的である。打面の再生が観察される。

3類 両設打面をもつ円筒状のもの。少例である。これにも、2類に認めたa種とb種がある。上下の打面は調整されている。

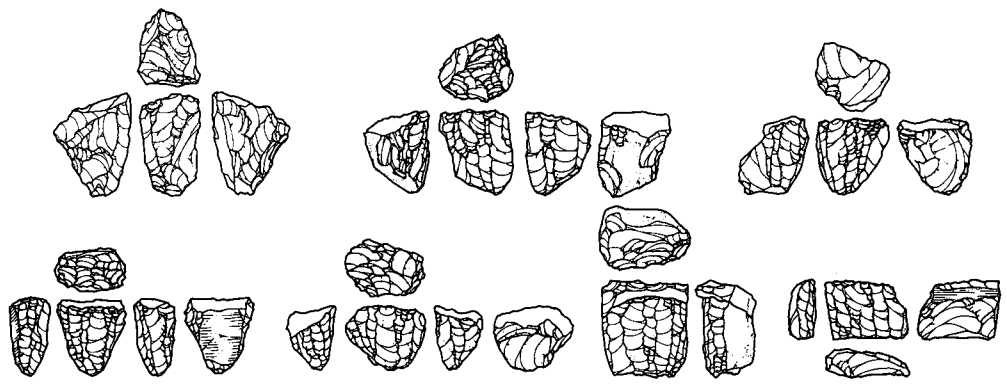
4類 打面と細石刃剥離作業面との交角(剥離面角)が著しく鋭角となるものである。2例あり、両者共に単設の調整打面を持っている。

5類 両設のものうち、片側の打面が4類の特徴を示し、楔形の側面形態を示すものである。3例ある。もう一方の打面は調整、非調整の両者がある。

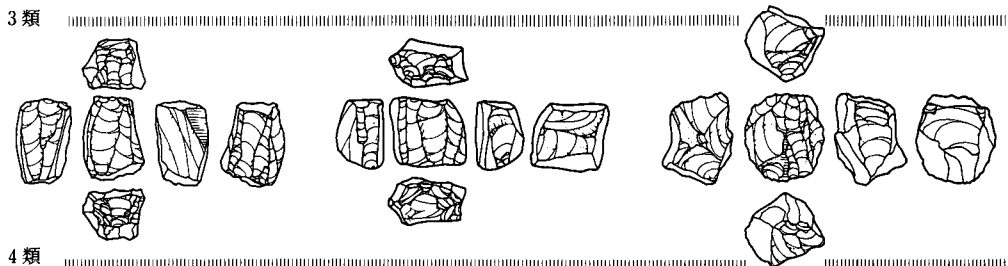
1類



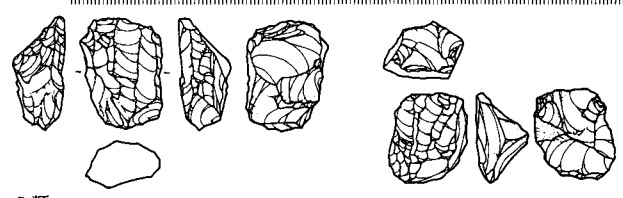
2類



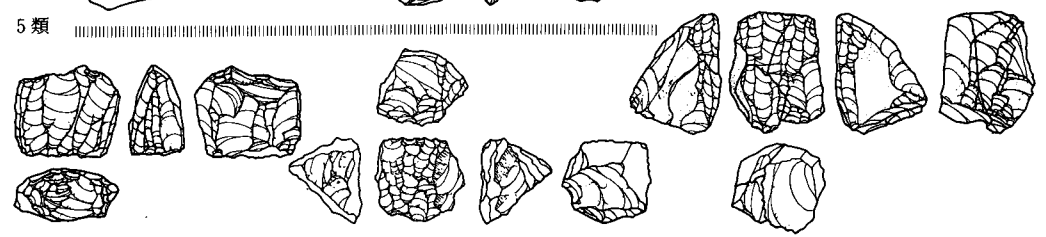
3類



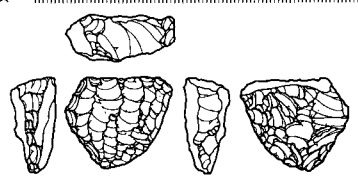
4類



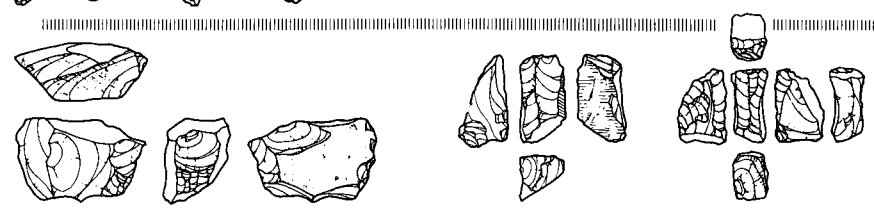
5類



6類

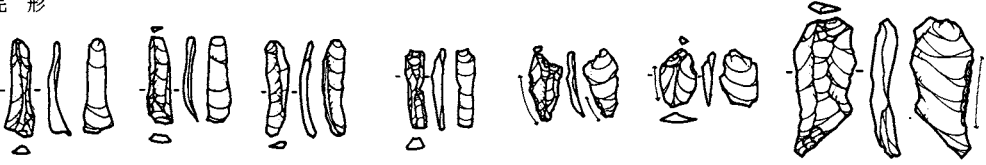


7類

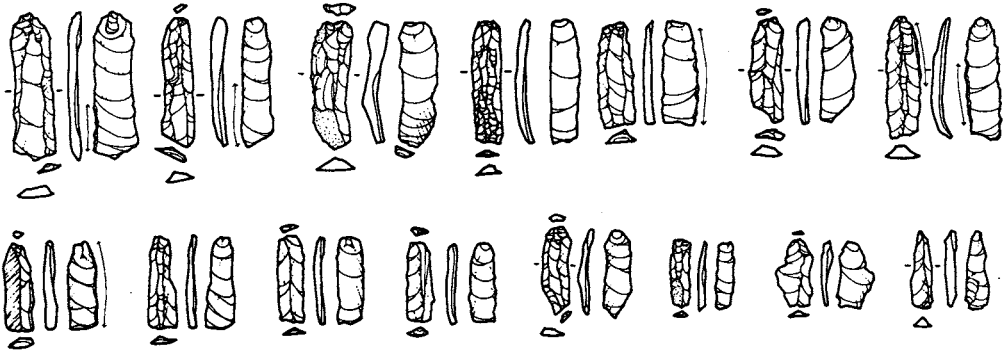


第84図 第I文化層細石核の分類

完形



準完形



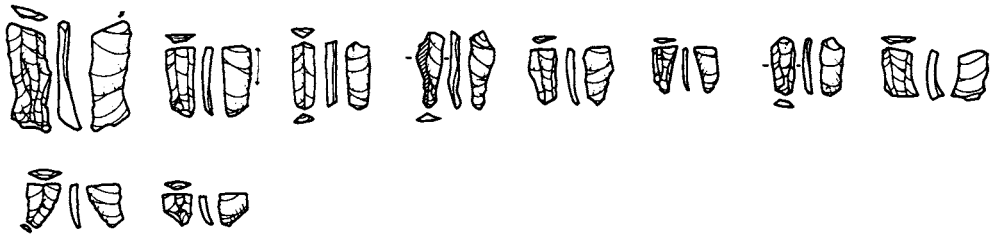
頭部



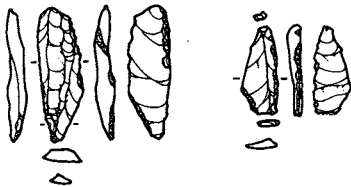
胴部



尾部



2次加工のあるもの



第85図 第I文化層の細石刃

6類 最終的な形態は、2種b類そのものであるが、90°の打面転位の看取されるもの。1例あるにすぎない。旧打面は調整打面であるが、新打面は非調整の平坦打面である。

7類 板状の剝片の木口面に、比較的幅の狭い細石刃剝離作業面を設定するものである。打面には、平坦打面と調整打面の両者があるが、側面調整をほとんど行わない点が重要な特徴である。3例ある。

1 d. 細石刃 第4地点に40点、第6地点に1点、第9地点に3点、合計して44点あるにすぎず、細石核の個体数と比較して、少し少なすぎるような印象を受ける。部位別に見ると、完形9点、尾部端を僅かに折り取る準完形18点、頭部4点、胴部2点、尾部10点である。使用痕の認められるものも多いが、2次加工の施されたものが2例ある。属性分布を第86図に示す。

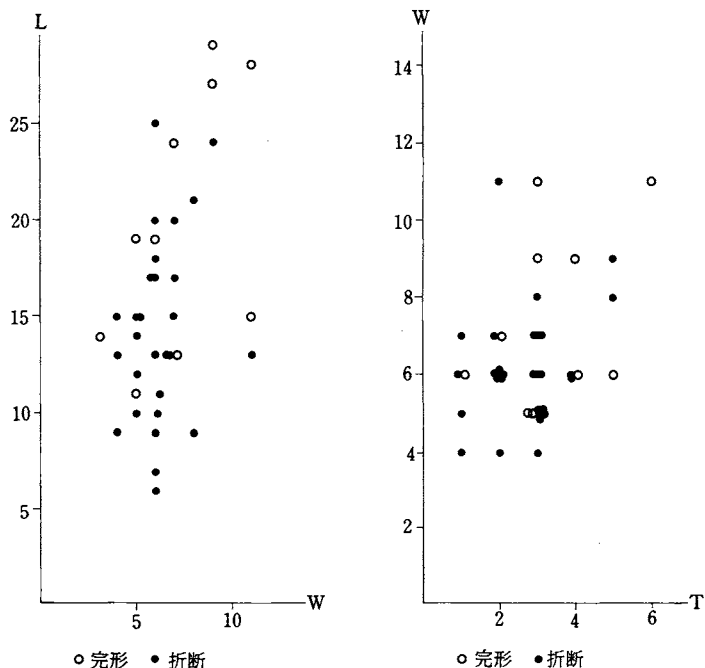
構成2 一般的剝片剝離手法によって各種の石器を製作する系列である。その殆んどが黒色緻密質の安山岩を素材としている。

2 a. 剝片剝離技術 (第89図) 接合資料と石核、剝片の属性をもとに、大別3類の剝離手法が復原されるが、これらはいずれも極めて一般的なものであり、累積的な手法群である。

1類 恣意性の強い打面転位を行うもので、打面と剝片剝離作業面の位置関係が相対的なものを本類にまとめた。賽子状の石核を生じる。

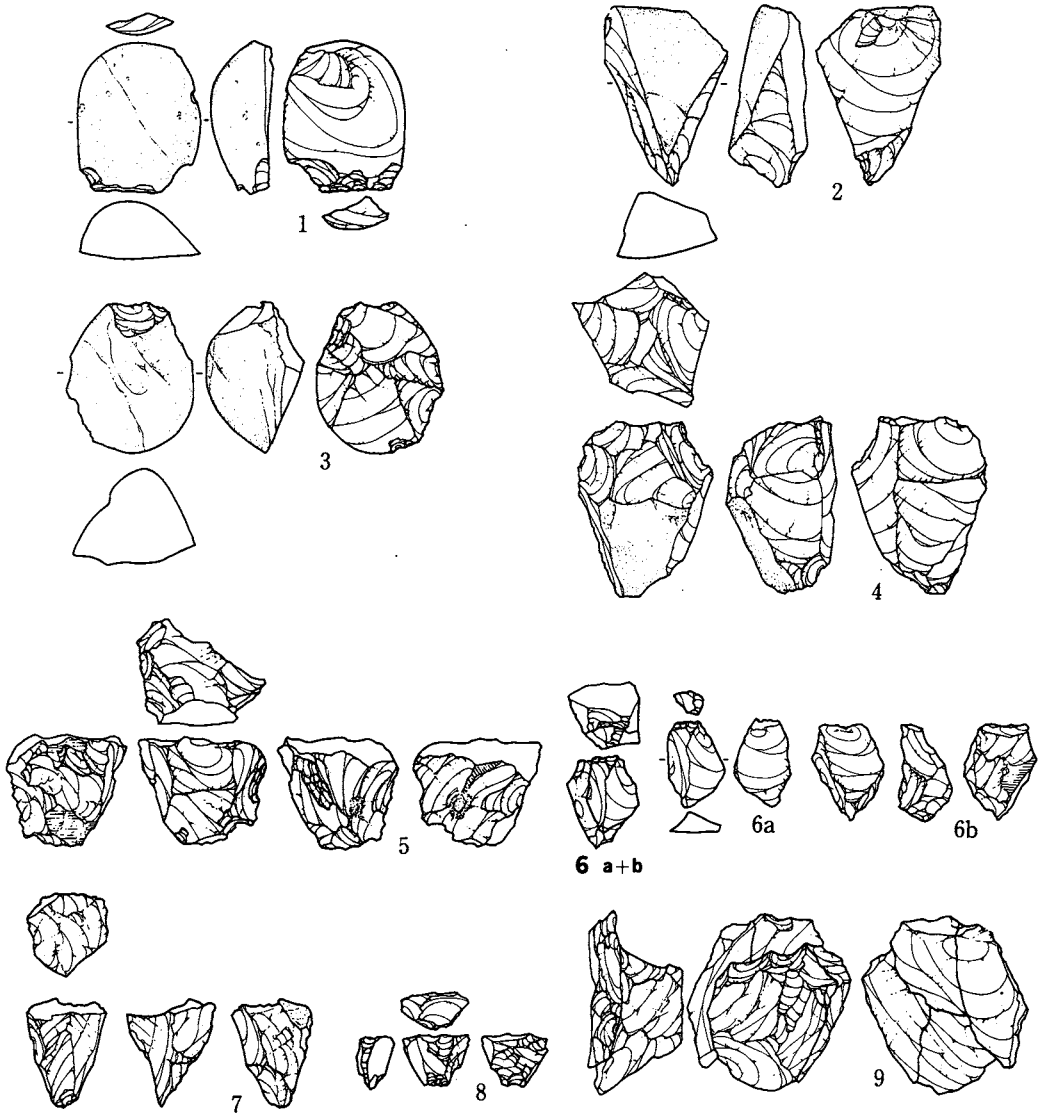
2類 石核の反転を行って、打面と剝離作業面を入れ換えるもの。チョッパー状の石核を生じる。

3類 部厚い剝片の腹面に多面を固定し、側縁部に沿って剝片を打ち落すものを本類とした。盤状石核を生じる。



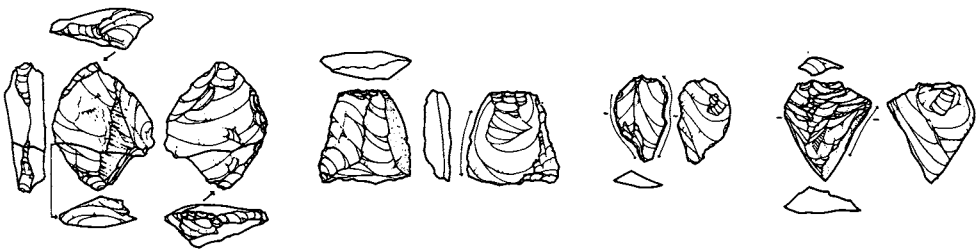
第86図 第1ブロック細石刃の長・幅(左),幅・厚(右)分布(単位mm)

2 b. 剝片とその利用(第90図) 2 aのかかなりの過程で多量の剝片が生産されている。その多くの部分がUFとして用いられたと見られるが、風化の著明な安山岩製のものが殆んどであるため、使用痕はごく少数のものに観察されたにすぎない。長幅指数100を中心とする寸づまりな矩形のものが多く、大きさは、長さ、幅共に10mm~60mmの範囲内に大半のものが分布しているが、この分布の上限に近



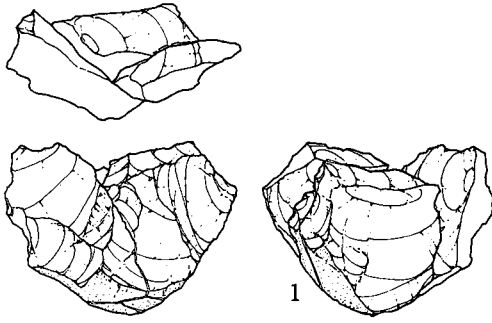
第87図 第I文化層細石核の母型

いものが、削器の素材として用いられる傾向に注意したい。削器には大別して3種ある。

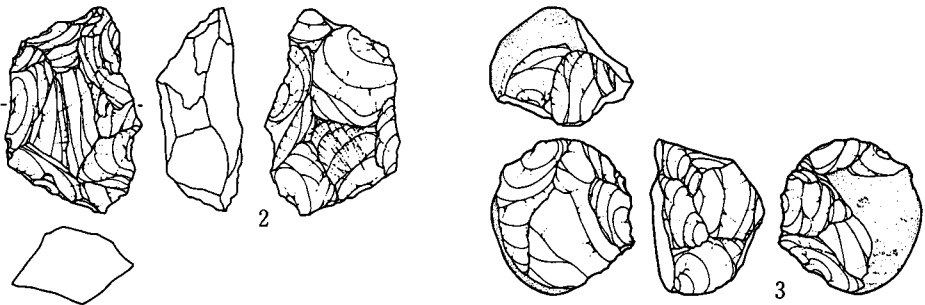


第88図 第I文化層構成1の剥片石器

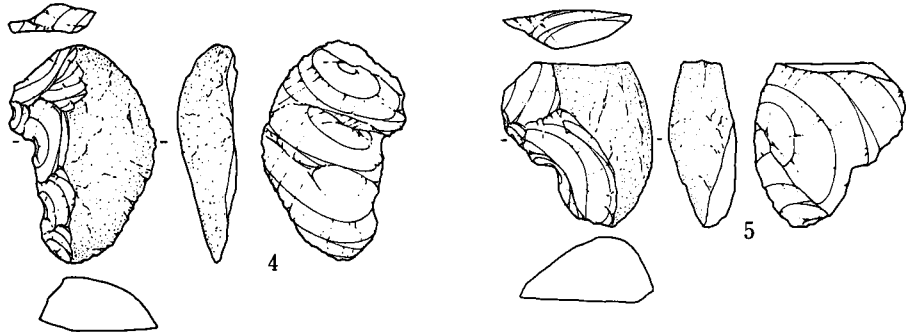
1類



2類



3類



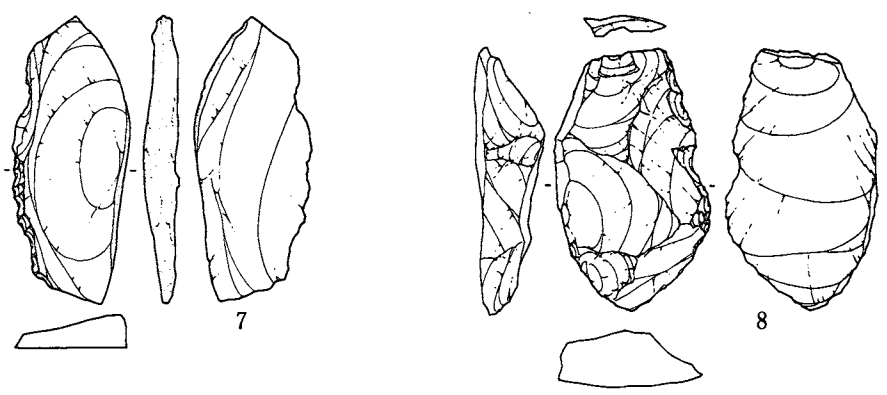
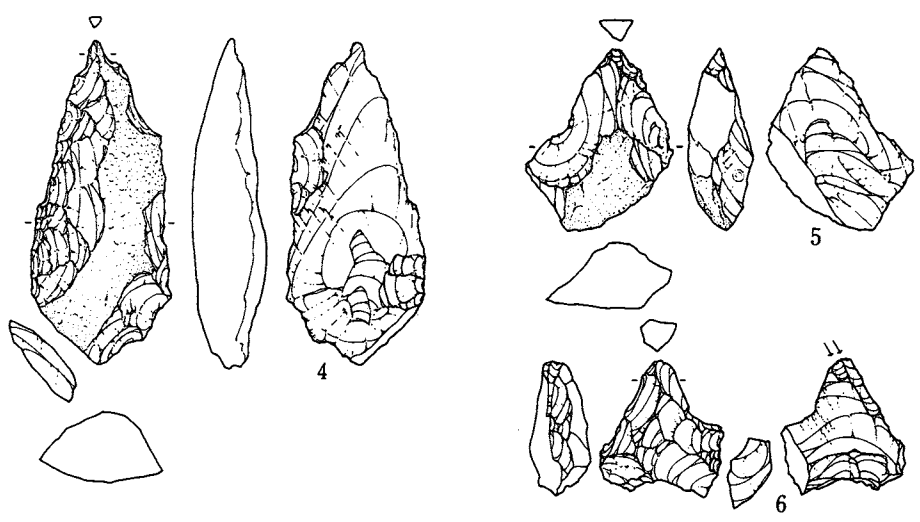
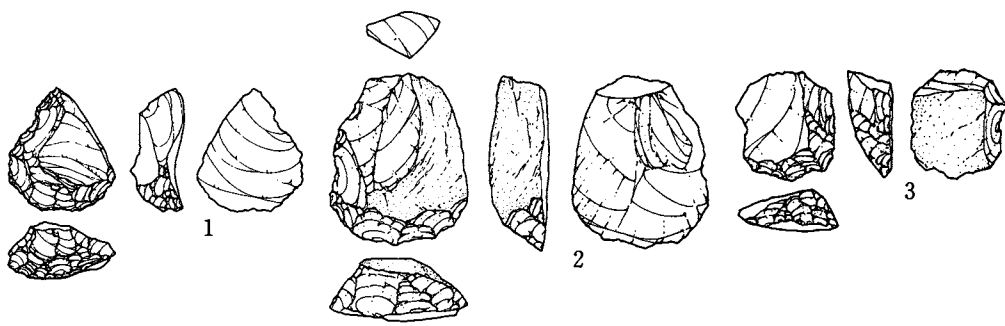
第89図 第I文化層構成2の石核

1類 端削器（1～3）。

2類 尖頭部をもつもの（4～6）。4が典型例で、尖頭削器と分類される（a種）。5、6は意識的に尖頭部が作出されている（b種）。

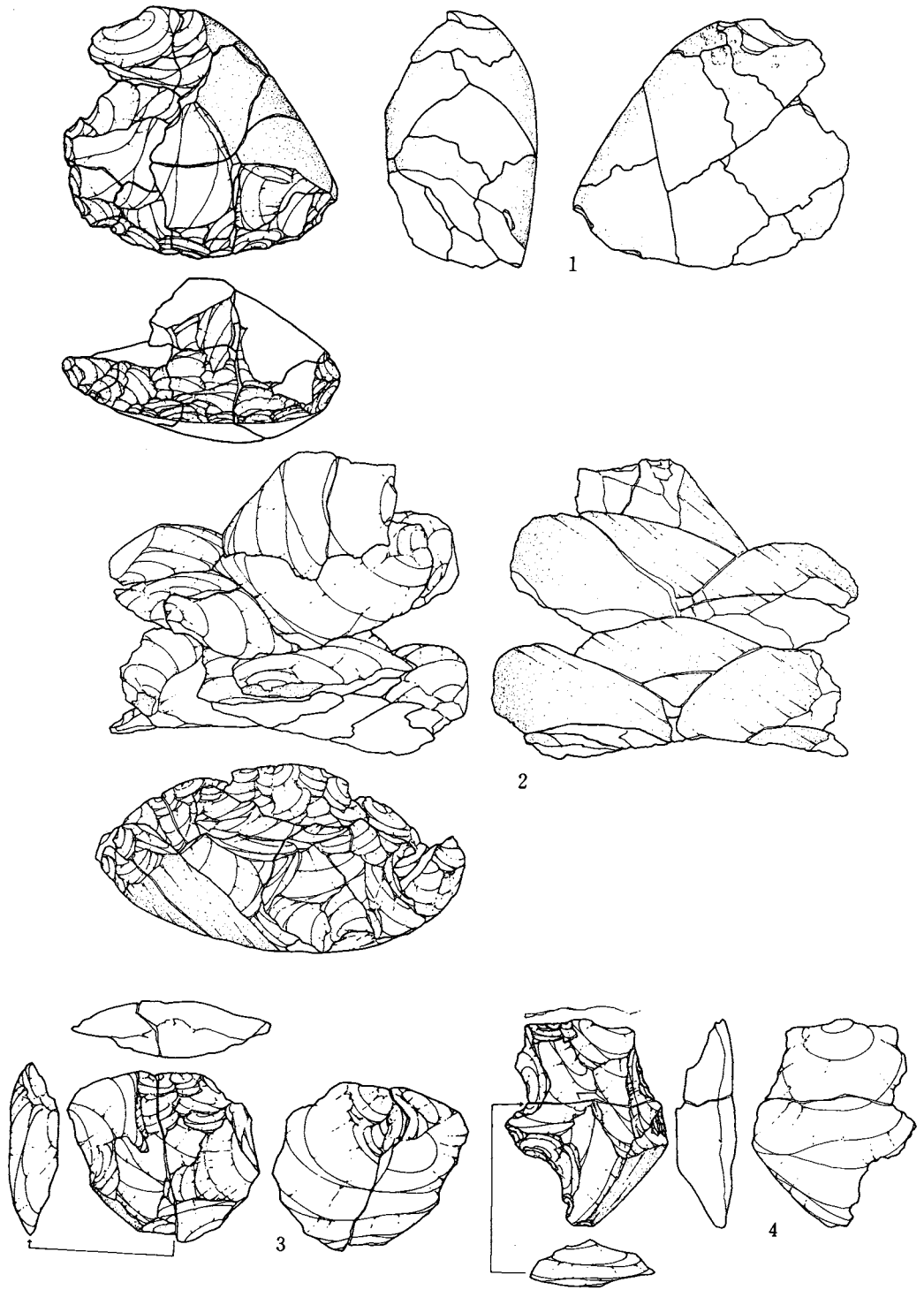
3類 側削器（7、8）。両側から窺われるように、刃部と対応する縁辺部に、礫面や旧剥離面からなる未加工の背部を保持する、比較的大型の剥片から作られたものが多い。また、削器各類のなかでは、本類の量比は高く、一般的な器種である。

構成3 チョッパー・コアを生じる過程で、打割器と大型の剥片が生産される。この種の系列については諸説があるが、いずれも、打割器か石核かという、二者択一的な排中律に従うもので



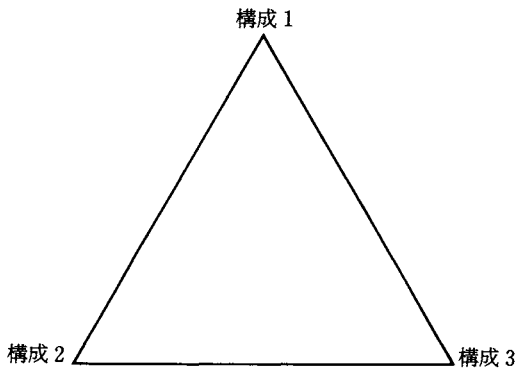
第90図 第1文化層構成2の剝片石器

あることに注意したい。これは、単一の器種が単一の機能を担うとする伝統的理念に基づいているものと考えられる。しかし、これは、現在の極端に機能分化した道具世界に立脚した類推にすぎず、むしろ、単一の器種（と決められたもの）は、主・客の差は当然認め得るにせよ、複数の機能を保有していたと考えるのが自然であるばかりか、一般論としては、その機能自体



第91図 第I文化層構成3の石器組成

も、決して固定的なものではないと見做すことが必要である場合もある。



第92図 第I文化層の構造

1～4に本系の資料を掲げた。1は明らかに刃部の作出を企図した打割器であるが、破碎しており、その破片の一部は石核に転用されている。2は、横断面が偏平な楕円形をした円礫から削ぎ落すように剝離された剝片の接合状況を示している。3、4はこうした剝片の例で、4は側削器に加工されている。なお、第4ブロックは、複数の母岩からなるこの種の剝片の一部のみが廃棄された地点である。

。以上より、構成3は次のように分類される。

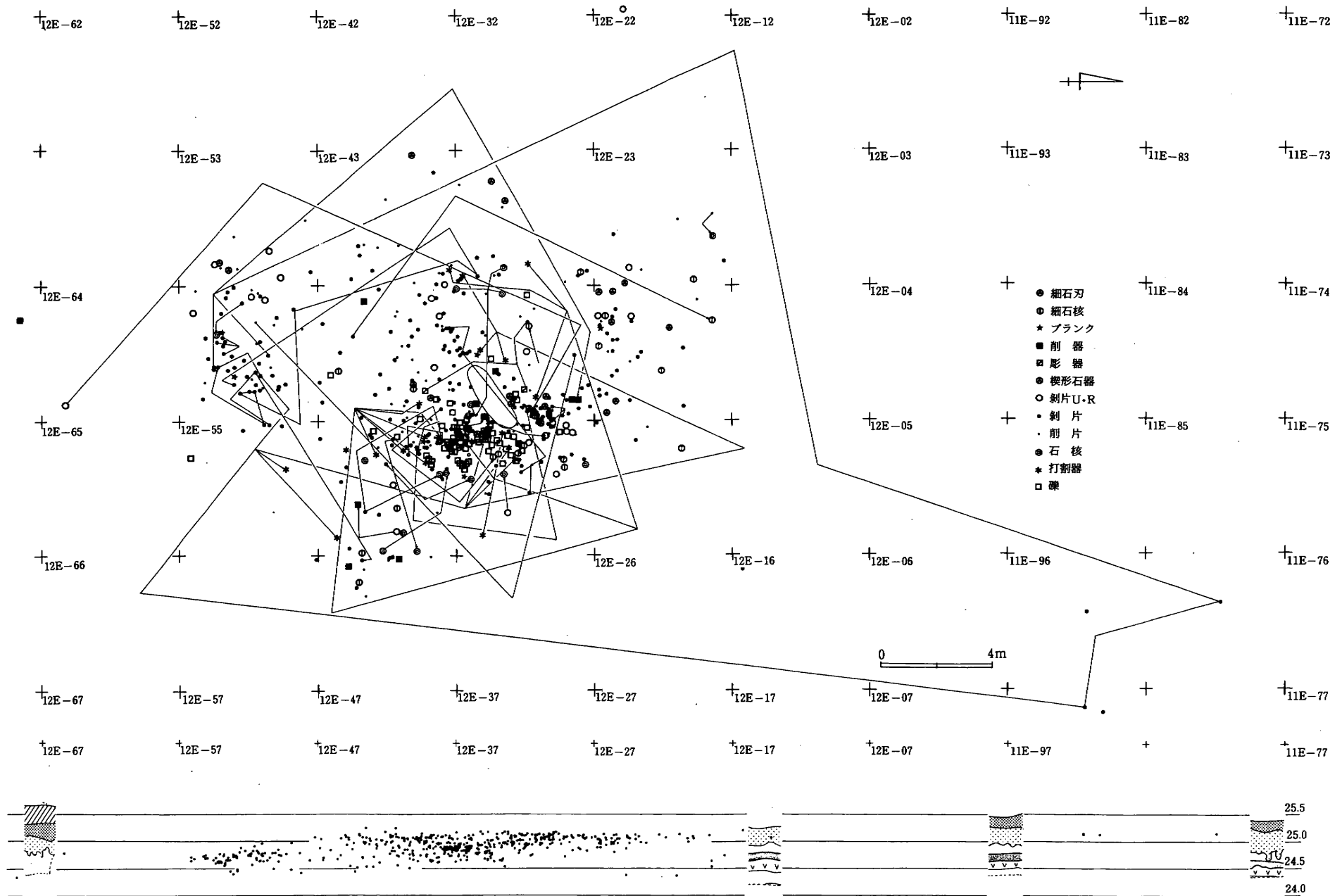
3 a. チョパー・コア いずれの機能が主となるかは、個々の石器がおかれた脈絡によって決定されたのであろう。集中的な剝片剝離と、打割器としての機能が反覆されたと推定される。

3 b. 剝片 3 aの過程で多数の剝片が得られる。プランクの大きさに規制されて、剝片の属性にも変化が生じるが、遺存する資料を見ると、構成2で生産された剝片と大きさ、長幅比、幅厚比共に大きな差は認められない。しかし、構成2の剝片の分布範囲を超える大型剝片も得られており、第4ブロックにおける廃棄の状況から、この種のものの一部を選択的に使用した可能性が示唆される。剝片の2次加工は、構成2の諸例と比較して明らかに僅少である。ごく少数に簡略な2次加工が看取され、削器を生じている。なお、構成3には粗粒の石材が充てられることが多いのも、使用痕観察を妨げる一因となっている。

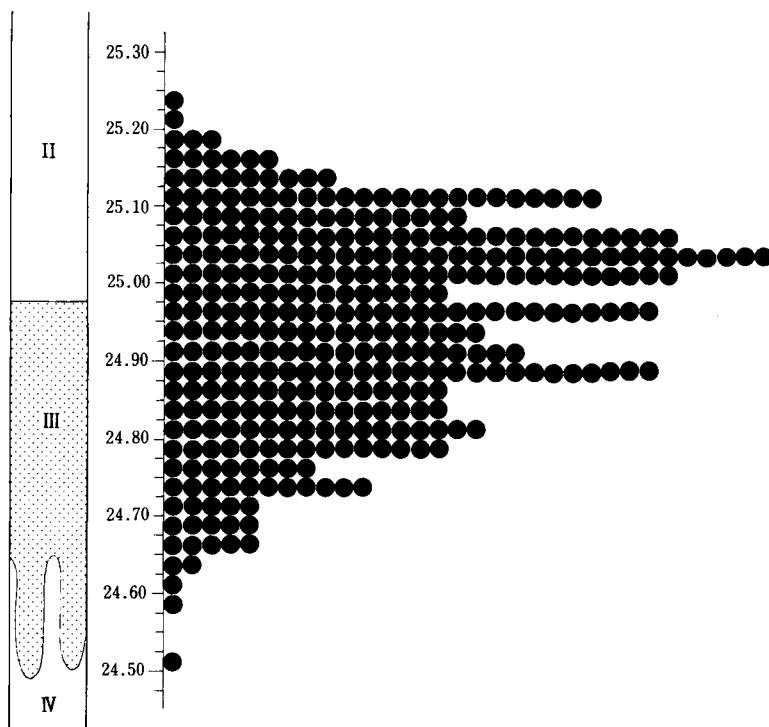
第1ブロック (第93～168図、図版54～61)

a) 分布状況 第4地点から検出された。第4地点は、大林遺跡をのせる台地面を限る谷沿いの緩斜面上の平坦面にあり、ブロックの中央部あたりから西側は僅かに傾斜している。また、本地点の西・南側には、弱いノッチが認められ、この埋積谷の存在がブロックの形成と関連していた可能性も高い。一方、第4地点東側は、遺跡中央を南北に走る浅い沢の谷頭部に相当し、西側の深い河谷と、東側の浅い沢地に囲まれた尾根状の平坦面上を占地するようにブロックがひろがっている。この尾根上には、その北端に第2ブロックがあり、また、第1ブロックのすぐ北側に第4ブロックが検出され、南側にも、関連資料の散見された第14地点が近接するなど、点々と本文化層のブロックが存在している。また、浅い沢地の対岸には第3ブロックが位置しており、台地西縁部の反覆利用の状況が看取される。

ブロックの規模は極めて大きく、12E区北半の東西16m、南北25mという広い範囲から遺物が検出された。12E-34区の周辺に特に分布密度の高い部分があるが、第95図から窺われるとおり、12E-24区を馬蹄形に取り囲む北側の集中部と、12E-44区を中心とする南側の集中部



第93図 第1ブロック遺物出土状況



第94図 大林遺跡第1ブロック遺物垂直分布(12E-24・25・34・35)

とに大別されるが、多数のブロックが重複して切り合っているらしく、これをいくつかのブロックに単純に分離することは不可能である。詳細は各母岩の分布状況の分析に挨ちたいが、一般的傾向として、北側の部分には、礫片の集中を中心として、構成1、構成2の分布が濃く、南側では構成3の分布が稠密である。

b) 母岩構成とその分布 第1ブロックの遺物は総数614点ある。これらの詳しい組成は第15表に譲るが、南関東の細石器文化を特徴づける全ての器種を網羅するばかりか、それに量的な裏付けを与えるものとして、極めて良好な一括資料であることは疑うことができない。本項では、識別し得た72の母岩に就いては個別に検討を加える。ここで用いる石器の分類は既に前項で触れているので、これに従うものとする。

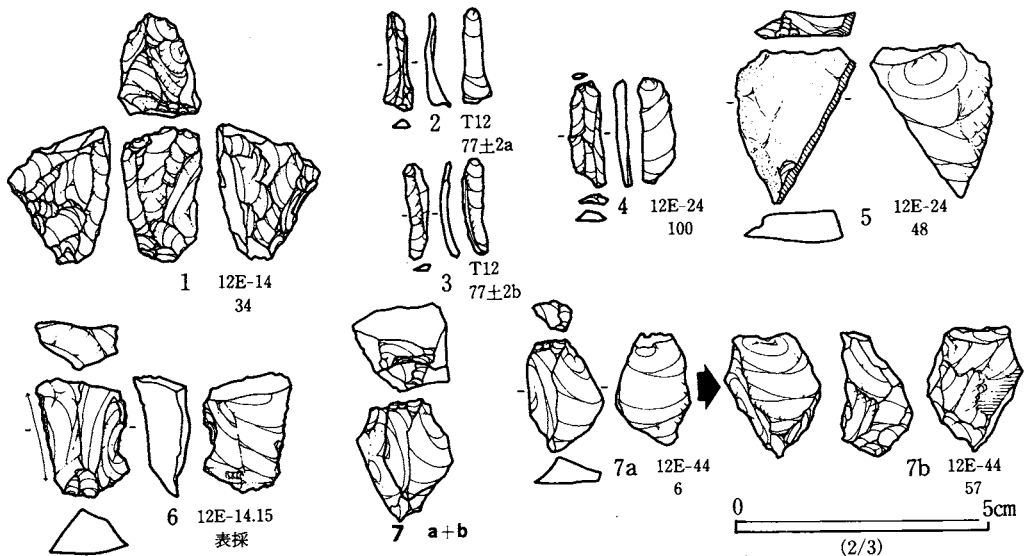
第15表 第1ブロック遺物集計表

母岩番号	細石刃	細石核	ブランク	削器	彫器	楔形石器	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	打割器	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
チャート 6	3	1	0	0	0	0	1	3	0	1	0	0	9	1.5	26.00	0.5
チャート 7	8	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	10	1.7	10.86	0.2
チャート 8	0	0	1	0	0	1	4	4	2	0	0	0	12	2.0	15.28	0.3
チャート 9	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	3	0.5	19.28	0.3
チャート 10	0	0	1	0	0	0	1	4	0	0	0	0	6	1.0	41.75	0.7
チャート 11	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	3	0.5	3.68	0.1
チャート 12	0	0	1	1(2)	1(2)	0	2(3)	5	1	0	0	0	11(4)	1.9	49.31	0.9

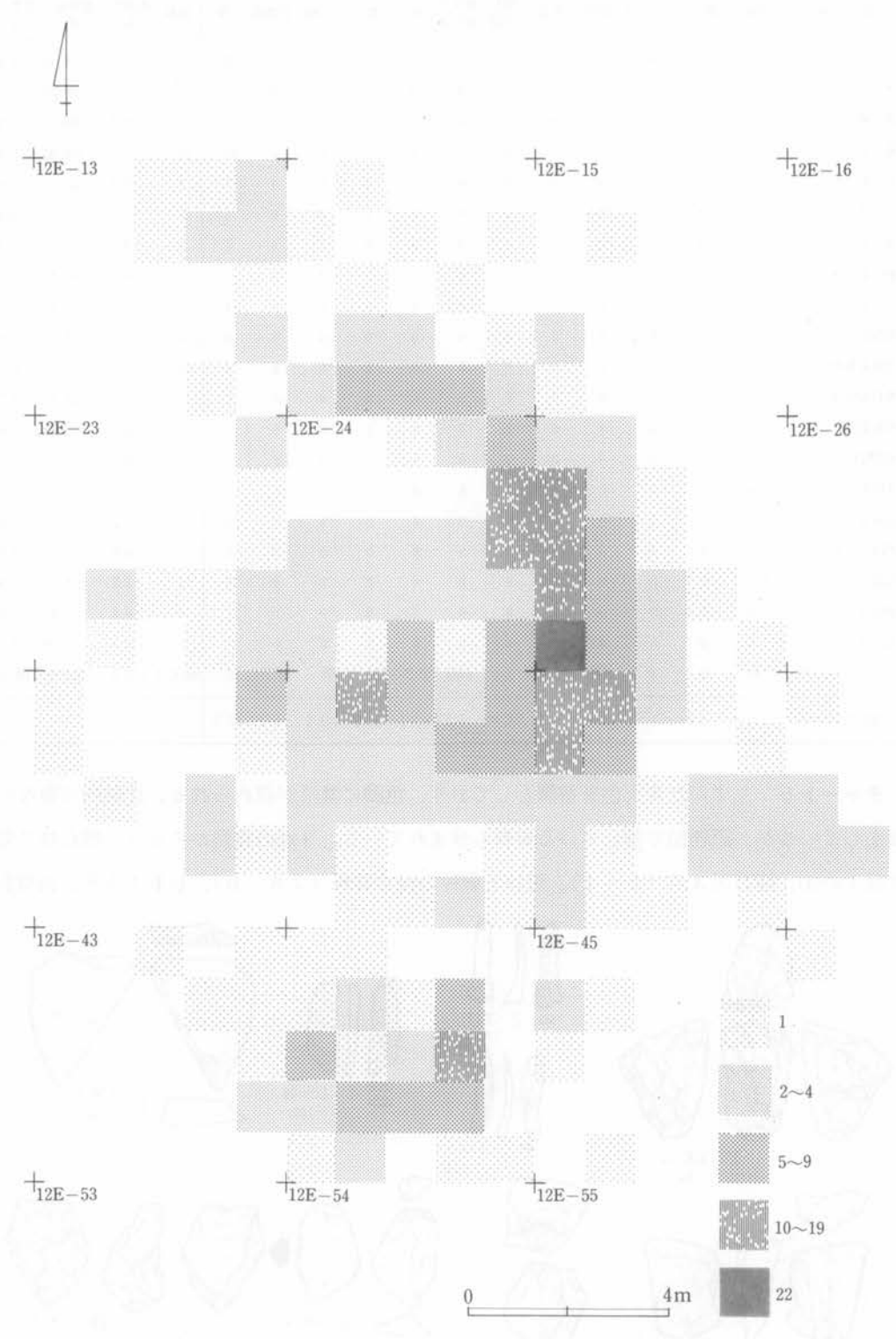
母岩番号	細石対	細石核	ブランク	削器	彫器	楔形石器	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	打割器	鏢	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
チャート 13	1	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	4	0.7	9.48	0.2
チャート 14	5	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	7	1.2	5.99	0.1
チャート 15	2	3	0	0	0	0	7	1	0	0	0	0	13	2.2	40.77	0.7
チャート 16	9	3	0	0	0	0	8	4	2	0	0	0	26	4.4	51.20	0.9
珪質頁岩 21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.2	26.98	0.5
珪質頁岩 22	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	0.3	3.20	0.1
珪質頁岩 23	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2	3.13	0.1
珪質頁岩 24	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2	0.41	0.01
珪質頁岩 25	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.2	1.64	0.03
珪質頁岩 26	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0.3	17.87	0.3
珪質頁岩 27	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	4.95	0.1
珪質頁岩 28	2	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	6	1.0	20.77	0.4
凝灰岩 5	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2	23.07	0.4
凝灰岩 6	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.3	60.15	1.0
凝灰岩 7	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2	29.71	0.5
凝灰岩 8	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0.5	11.19	0.2
凝灰岩 9	2	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	6	1.0	11.12	0.2
凝灰岩 10	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	1.17	0.02
凝灰岩 11	4	6	0	0	0	1	2	2	0	0	0	0	15	2.6	48.43	0.8
凝灰岩 13	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2	7.84	0.1
凝灰岩 14	0	0	0	0	0	0	1	4	1	0	0	0	6	1.0	14.61	0.2
泥岩 1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	0.3	23.30	0.4
安山岩 24	1	2	1	1	0	0	1	16	15	1	0	0	38	6.5	190.11	3.3
珪質粘板岩 2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.2	8.67	0.2
珪質粘板岩 3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2	9.36	0.2
安山岩 18	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2	21.59	0.4
安山岩 19	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.3	92.24	1.6
安山岩 20	0	0	0	2	0	0	6	18	0	3	0	0	29	4.9	359.64	6.3
安山岩 21	0	0	0	2	0	0	0	40	27	3	0	0	72	12.3	362.94	6.3
安山岩 22	0	0	0	0	0	0	1	11	2	7	0	0	21	3.6	384.61	6.7
安山岩 23	0	0	0	4	0	0	4	34	18	2	0	0	62	10.6	584.84	10.2
安山岩 25	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	13.44	0.2
凝灰岩 12	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	0.3	415.34	7.3
砂岩 8	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	4	0.7	79.61	1.4
砂岩 9	0	0	0	0	0	0	0	30	10	0	0	0	40	6.8	279.38	4.9
砂岩 11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2(2)	0	2(2)	0.3	384.32	6.7
砂岩 20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.2	180.90	3.2
砂岩 50	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0.3	23.04	0.4
ホルンフェルス 4	0	0	0	1(2)	0	0	0	22(2)	16	0	0	0	39(4)	6.7	321.88	6.7
ホルンフェルス 5	0	0	0	0	0	0	0	29(3)	4	0	0	0	33(3)	5.6	205.50	3.6
結晶片岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	0.3	4.49	0.1
チャート 17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0.5	71.34	1.2
チャート 18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.2	4.37	0.1
チャート 19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.2	16.52	0.3
チャート 20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.2	14.73	0.2

母岩番号	細石刃	細石核	プランク	削器	彫器	楔形石器	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	打割器	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
チャート 21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.3	19.31	0.3
チャート 22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	6	1.0	39.38	0.7
砂岩 13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.3	69.60	1.2
砂岩 14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	10	1.7	162.60	2.8
砂岩 15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.2	43.16	0.8
砂岩 16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0.5	50.05	0.9
砂岩 17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0.5	39.52	0.7
砂岩 18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0.5	55.77	1.0
砂岩 19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0.5	55.83	1.0
粘板岩 2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0.7	51.67	0.9
流紋岩質凝灰岩 26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0.5	28.36	0.5
粗粒安山岩 2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.2	112.70	1.9
粗粒安山岩 4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.2	43.99	0.8
粗粒安山岩 5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.2	52.29	0.9
流紋岩 2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.2	21.93	0.4
流紋岩 3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0.7	48.34	0.8
流紋岩 4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	5	0.9	55.82	1.0
流紋岩 5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	13	2.2	111.27	1.9
流紋岩 22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.3	32.93	0.6
流紋岩 26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.3	7.50	0.1
総数	40	23	9	15(7)	1(2)	2	44(6)	253(256)	101	20	2(23)	76	586(614)	100.0	5714.02	100.0
組成比 %	6.8	3.9	1.5	2.6	0.2	0.3	7.5	43.2	17.2	3.4	0.3	12.9				

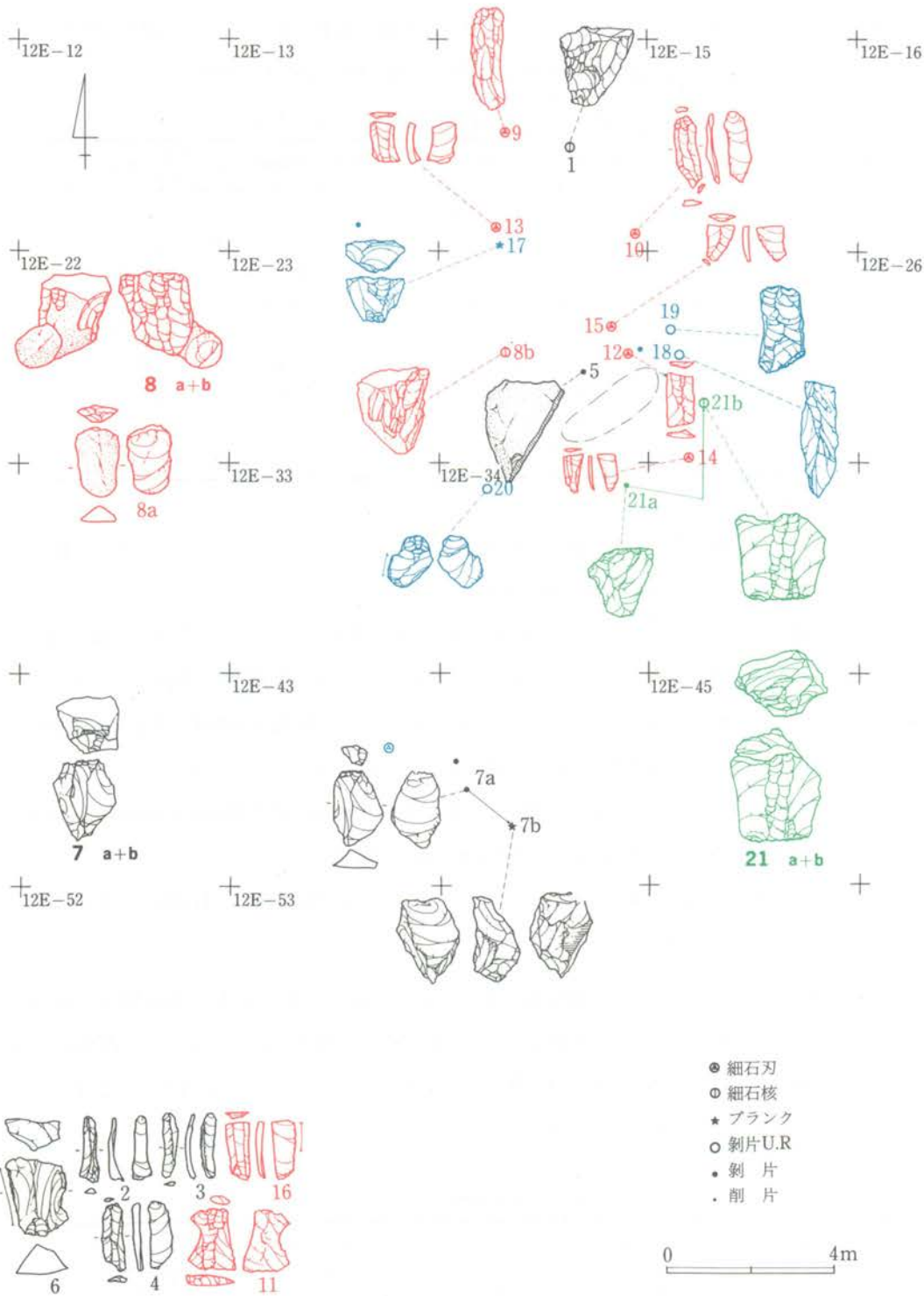
チャート6 くすんだ青灰色を基調としており、色調に濃淡が認められる。比較的均質な石質をしているが、節理面で割れている資料も含まれている。9点の資料からなり、細石核2類 a種1点(1)、細石刃3点(2~4)、母核と剥片の接合資料(7a、b)、UF1点(6)、調整剝



第95図 第1ブロック石器実測図(チャート6)



第96図 第1ブロック遺物の分布密度



第97図 第1ブロック母岩別遺物出土状況(1)
 (黒 チャート6・赤 チャート7・青 チャート8・緑 チャート9)

片2点(5)から構成されている。12号陥し穴の覆土に含まれている遺物が4点もあり、分布状況を明確にすることが難しいが、12E-24区周辺と、南側の12E-44区とに分かれた分布を示すようである。母核と剥片2点は南側にあり、北側には細石核と細石刃が分布している。

第16表 第1ブロック遺物属性表 (チャート6)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-34	細石核	24×23×16	8.08	1								
2	12E-24-48	剥片	33×19×7	4.59	5	6(4)	17×4.5	107.5°	I+F	F	-	-	
3	12E-44-4	剥片	16×13×7	1.53		1(0)	5×1	121°	II+IV+F	O	-	-	
4	12E-44-6	剥片	23×14×7	1.78	7a	2(0)	7×5	115.5°	II+IV	H	-	-	½
5	12E-44-57	ブランク	26×18×14	5.92	7b								⅓
6	12E-24-100	細石刃	20×6×4	0.33	4	2(0)	4×1	101.5°	II	-	+	H	
7	T-12フク±2a	細石刃	19×6×5	0.19	2	P	-	-	II	O	-	-	
8	T-12フク±2b	細石刃	19×5×3	0.12	3	P	-	-	II	F	-	-	
9	12E-14・15表採	剥片・R	17×23×11	3.46	6	1(0)	22×9.5	104.5°	IV	H	+	-	

(注) 石器属性表の見方

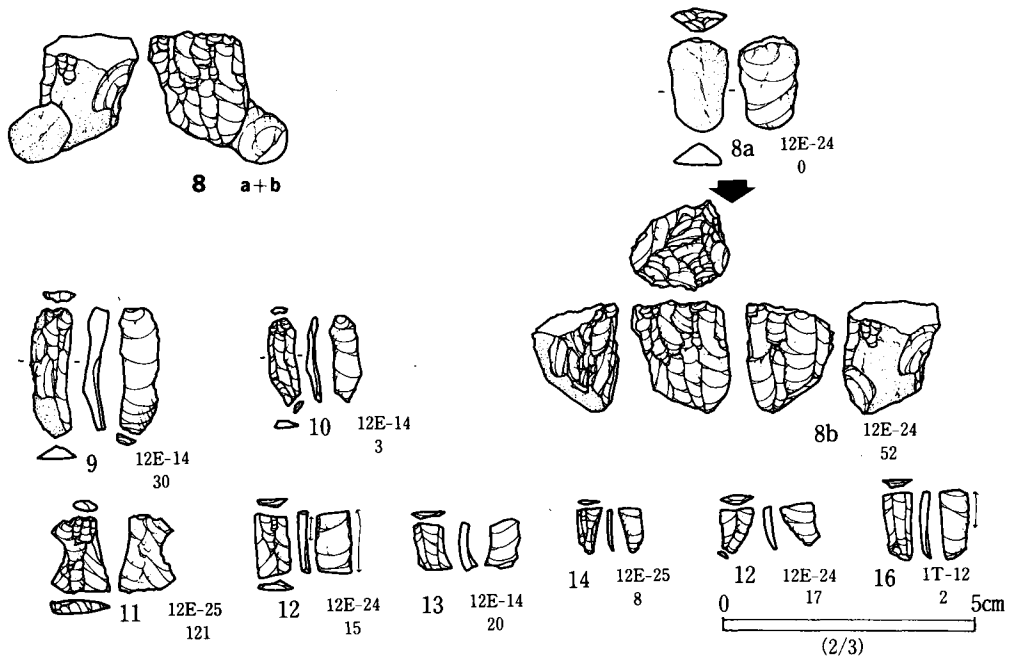
1. 打面 打面を構成する剥離面数を示す。括弧内はその内ネガティブバルブのあるものの数である。Pは点状打面を、1は線状打面を示す。またCは自然面である。
2. 背面構成 Iは原礫面に大きく被覆されるもの。IIは腹面の剥離方向と一致する剥離面。IIIは腹面と逆位の剥離面。IVは腹面に直行もしくは斜交する方向から加撃された剥離面とする。○を付したものは礫面付のものである。また、剥離方向の識別の困難な節理面はFとする。背面が複方向の剥離面から構成される場合は、以上の記号を組み合わせる表示する。
3. 末端 剥片末端の形状は3種に分類する。Fは Feather end, Hは Hinge fracture,あるいは Step fracture, Oは Outrepassé あるいは石核底面を切るもの。
4. 折面 折損した剥片の遺存部を表記している。Hは頭部、Mは中間部、Bは尾部、Rは背面に対して右側、Lは左側となる。

チャート7 やや褐色を帯びた青灰色の色調をした良質の石材。細石核2類a種1点(8b)、細石刃8点(9~16)、細石核の調整剥片1点(8a)から構成されている。この調整剥片は、細石核の側面に接合する(8)が、他には同趣の剥片は検出されていない。各資料は、12E-14、24、25の各区に分散し、集中性は認められない。

第17表 第1ブロック遺物属性表 (チャート7)

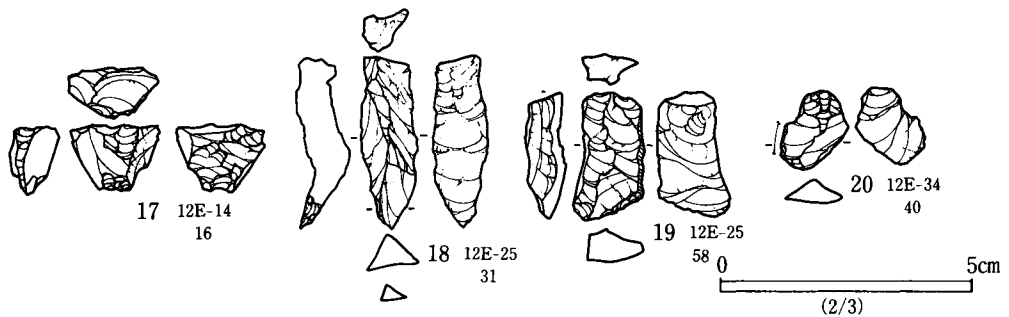
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-3	細石刃	17×6×2	0.17	10	1(0)	2.5×1	91.5°	II+III	-	-	H	
2	12E-14-20	細石刃	10×6×3	0.14	13	-	-	-	II	-	-	M	
3	12E-14-30	細石刃	24×9×5	0.65	9	1(0)	5.5×1	101°	II-IV	-	-	H	
4	12E-24-15	細石刃	13×7×2	0.23	12	-	-	-	II	-	+	M	

№	遺物 №	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
5	12E-24-17	細石刃	9×6×2	0.04	15	—	—	—	II	F	—	B	½
6	12E-24-52	細石核	21×21×16	7.85	8 b								
7	12E-25-8	細石刃	9×4×1	—	14	—	—	—	II	F	—	B	½
8	12E-24-0	剥片	19×11×6	1.17	8 a	4 (0)	10.5×4	114°	I	F	—	—	
9	12E-25-121	細石刃	15×11×3	0.46	11	1 (0)	5×2	98°	II	O	—	—	
10	T-12-2	細石刃	13×11×2	0.15	16	—	—	—	II	F	+	B	



第98図 第1ブロック石器実測図(チャート7)

チャート8 淡青灰色の地に、暗灰色の縞が入る特徴的な石材である。総数12点の資料から



第99図 第1ブロック石器実測図(チャート8)

構成されている。小型の母核 (17) があるが、その他は全て調整剥片及び、それを素材とする石器 (18~20) によって構成され、細石核、細石刃を含んでいない。なお、細石核を欠くため、剥片類が別種の工程に属する石核から得られた可能性も高いが、母核が1点あるので、調整剥片の一部と推定した。12点の調整剥片の内容は、削片2点、剥片5点、UF3点、RF1点、楔形石器1点であり、その利用度が高かったことを示唆している。分布は、12E-25区に4点が集中するが、それ以外のものは広く飛散している。

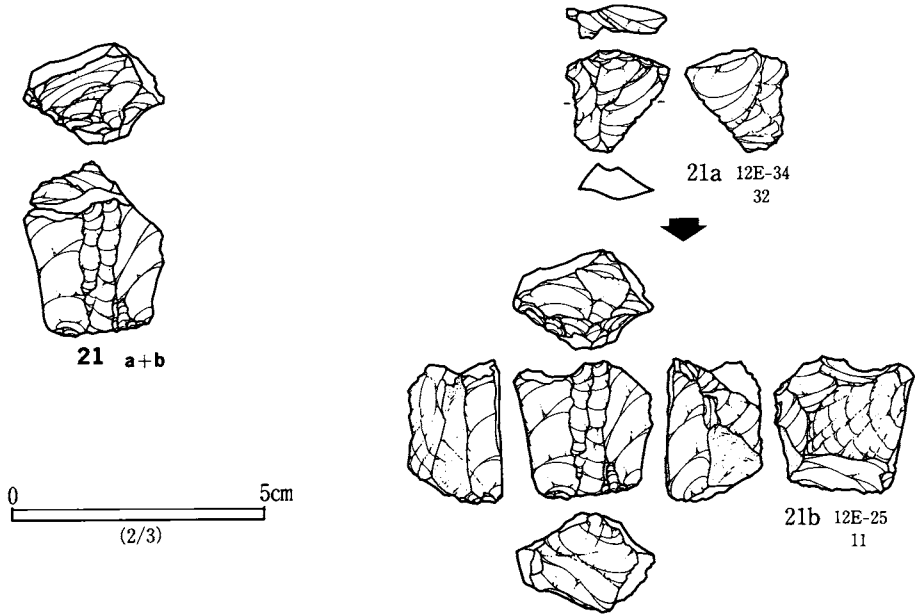
第18表 第1ブロック遺物属性表 (チャート8)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-13-13	剥片	11×17×9	1.20		F	15 × 10	82.5°	F+II	O	-	-	
2	12E-14-16	プランク	14×17×10	2.09	17								
3	12E-24-14	剥片	10×23×11	2.91		不明	不明	不明	F	不明	-	破片	
4	12E-25-31	剥片 R	12×33×11	2.63	18	F	8.5 × 6	97.5°	II	F	+	-	
5	12E-25-58	剥片 U	26×14×9	2.69	19	F	11 × 5.5	115.5°	II+III	H	+	-	
6	12E-25-71	削片	12×9×4	0.33									
7	12E-34-40	剥片 U	16×10×7	0.84	20	ℓ		-	II	H	+	-	
8	12E-43-3	楔形石器	17×15×7	0.99									
9	12E-24-86	剥片 U	19×9×7	0.46		p	-	-	II	F	+	-	
10	12E-25-121 a	剥片	17×10×6	0.66		F	8 × 3	110°	II+IV	F	-	-	
11	12E-25-121 b	削片	13×8×2	0.16									
12	T-12フク土内	剥片	8×8×6	0.32		2(0)	7.5×3	127°	II	-	-	H	

チャート9 暗灰色をしているが、網目状に明褐色の縞目が入り、節理面も認められる。細石核 (21 b) は、細石刃剥離のごく初期の段階で、石核正面に2条の樋状剥離痕を留めている。剥片が2点 (21 a) あり、2点ともこの細石核の打面に接合した(2)。図では、1点接合の状況を示しているが、21 a 背面右側にもう1点の剥片が接合する。本母岩には、他に1点の資料も含まれていないので、別地点から母核の状態で搬入され、ブロック内での打面の修整を経て、細石刃が剥離された直後に廃棄された蓋然性が極めて高い。12E-23、25、34の各区に分布している。

第19表 第1ブロック遺物属性表 (チャート9)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-23-12	剥片	17×14×6	1.18		ℓ	-	-	II+F	F	-	-	1/3
2	12E-25-11	細石核	28×24×19	15.62	21 b								1/3
3	12E-34-32	剥片	21×17×11	2.48	21 a	2(0)	20.5×6	98°	II	H	-	-	1/3



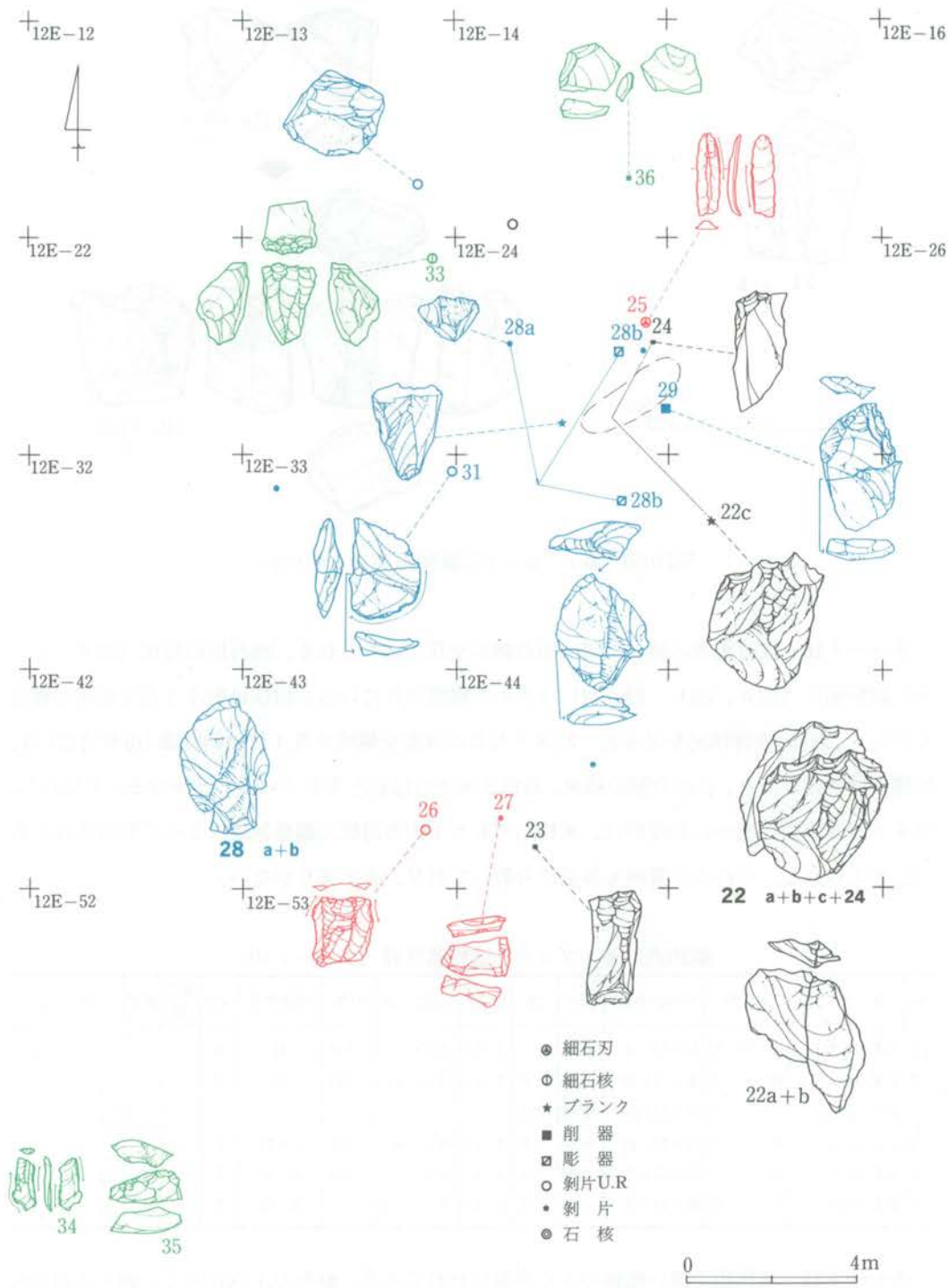
第100図 第1ブロック石器実測図(チャート9)

チャート10 淡黄褐色の縞と、暗灰色の縞が交互に認められる。細石核の母核(22c)と、その調整剥片(22a、22b、23、24)5点から構成されている。母核に剥片3点2個体が接合している(22)。接合状況を見ると、22a+22bの背面を構成する1枚の剝離面(母核背面)は、原礫の分割面であり、この分割の結果、最低2個体の母岩を生じていることが分る。すなわち、22a+22b側面の細かい剝離痕は、未検出のもう1個の母核の調整剝離によって形成されたものと考えられる。これらの資料も各処に分散しており、まとまりがない。

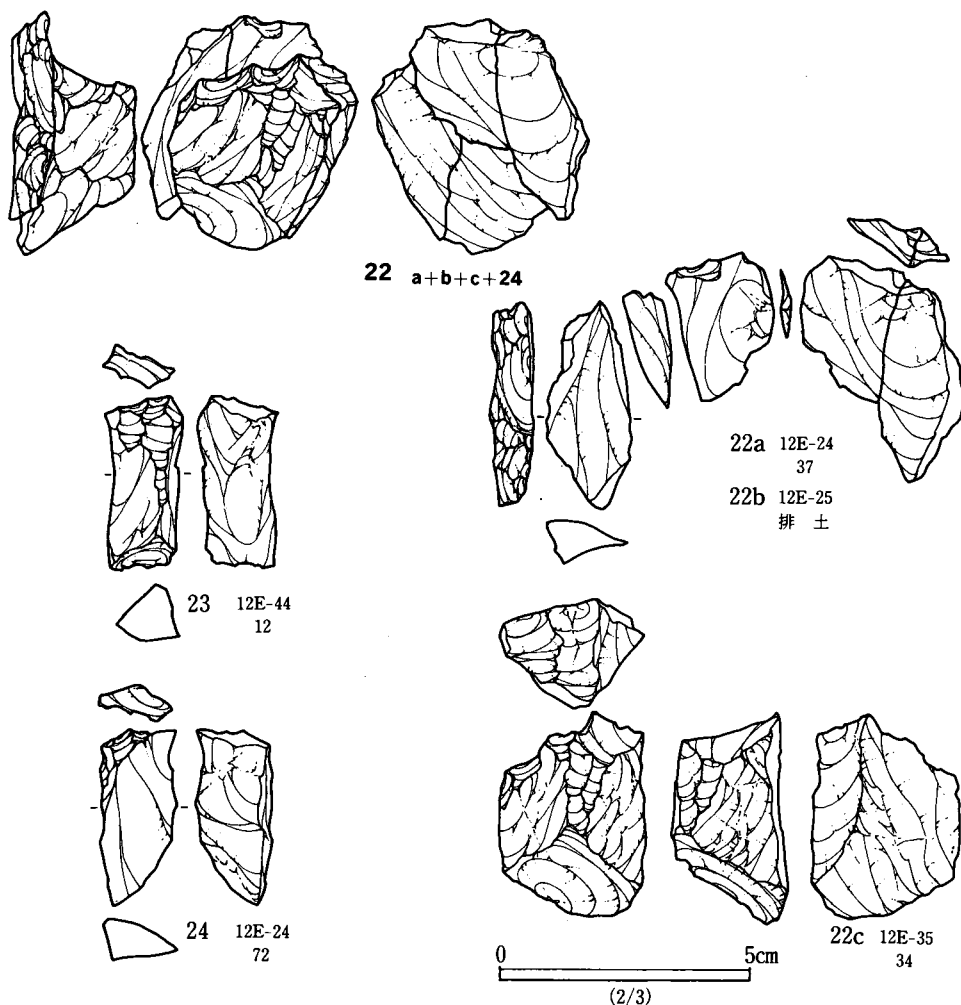
第20表 第1ブロック遺物属性表(チャート10)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-37	剥片 U	14×13×4	0.38		1(0)	6.5×2	110°	II	H	—	—	
2	12E-24-72	剥片	34×15×10	4.36	24	1(1)	14.5×6	140°	II	H	—	—	¼
3	12E-35-34	ブランク	40×28×21	22.44	22c								¼
4	12E-44-12	剥片	34×15×11	5.50	23	1(0)	14.5×6	123°	II+III	F	—	—	
5	12E-24-37	剥片	20×25×9	3.08	22a	2(1)	14.5×7	133°	II+IV	F	—	R	¼
6	12E-25排土	剥片	40×18×9	5.99	22b	2(0)	6×5.5	—	III+IV	F	—	L	¼

チャート11 青灰色で黒い細縞の入る良質に石材である。細石刃1点(25)と、剥片2点(26、27)から構成されている。26の剥片は、細石核の剝離作業面を大きく削ぎ落しており、石核の再生は企図したものである可能性もある。剥片2点はブロック南側に近接して検出されたが、細石刃は北側に遠く遊離している。



第101図 第1ブロック母岩別遺物出土状況(2)
 (黒チャート10・赤チャート11・青チャート12・緑チャート13)

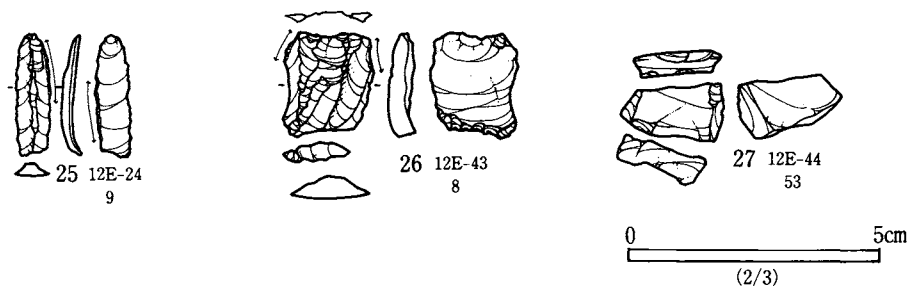


第102図 第1ブロック石器実測図(チャート10)

第21表 第1ブロック遺物属性表(チャート11)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-24-9	細石刃	24×7×4	0.34	25	P	—	—	II	F	+	—	
2	12E-43-8	剥片R・U	21×16×7	1.82	26	ℓ	—	—	II	O	+	—	
3	12E-44-53	剥片	20×12×6	1.52	27	—	—	—	II+III	—	—	M	

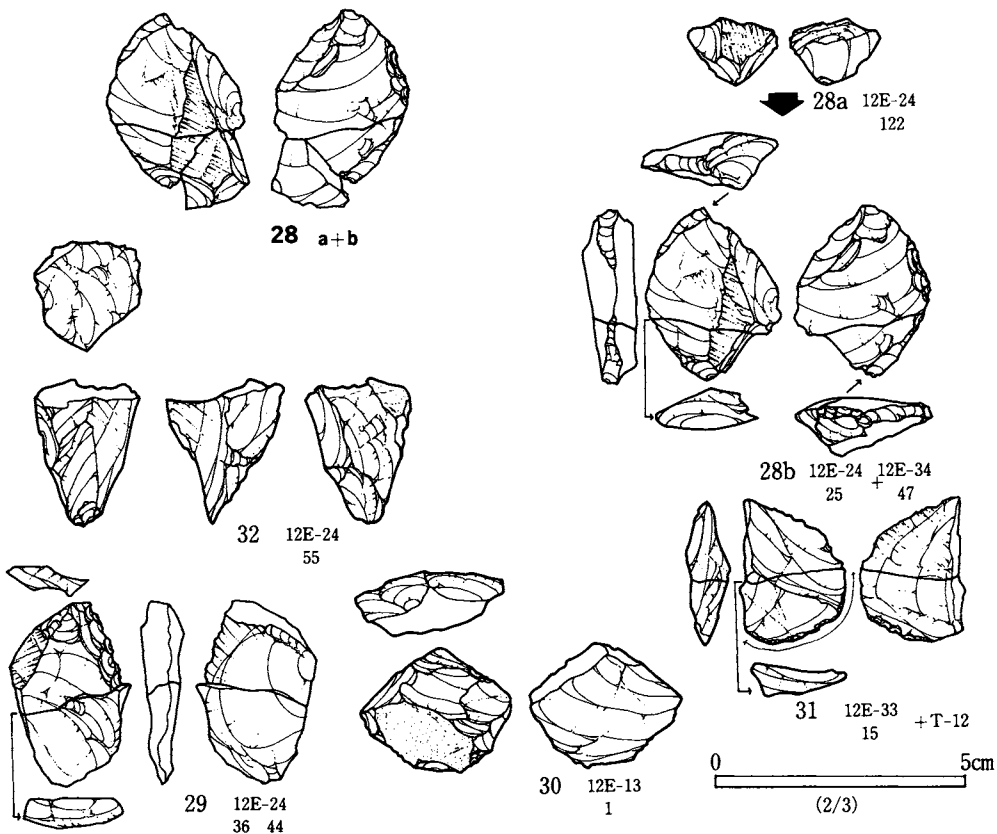
チャート12 僅かに緑色がかった暗灰色をしている。少し軟質の石材で、稜線が微かに磨滅した印象を受ける。珪質の粘板岩とすべきか。14点の資料から構成されている。細石核の母核(32)が1点あるが、他は石核調整剥片と、それを素材とする器種によって占められている(28~31)。母核は三角錐状に整えられており、細石刃作出の直前の段階と見られる。彫器が1点あり(28b)、これに剥片が1点(28a)接合している(28)。彫器は幅広の楕円形をした剥片の両端にノッチを設け、そこを打面とし側縁に沿うように刻打を加えている。28aは、ノッチの設定を



第103図 第1ブロック石器実測図(チャート11)

目的とした剥離によって生じている。29は側削器、30、31はU Fで、全般的に調整剥片の利用度が高い。分布は、12E-24区を中心に、疎らに散在している。接合するものも、数メートルを距てている。

チャート13 暗青灰色の良質な石材。4点あり、細石核2類a種1点(33)、細石刃1点(34)、調整剥片2点(35、36)を含んでいる。細石核は、傾斜打面をもつ4類に近いが、打面調整による平坦な面が僅かに残されているので、2類に含めた。調整剥片は2例しかないが、共に折

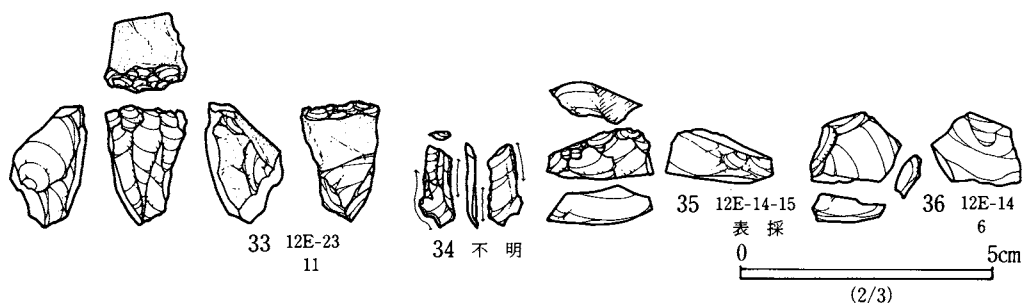


第104図 第1ブロック石器実測図(チャート12)

第22表 第1ブロック遺物属性表 (チャート12)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-13-1	剥片 U	24×25×12	7.10	30	2(0)	18.5×8	101.5°	⑩+⑪	F	+	-	
2	12E-24-0	剥片	7×4×1	0.04									
3	12E-24-26	剥片	18×22×10	3.84		1(0)	21×8	110.5°	C	H	-	-	
4	12E-24-25	彫器	25×26×12	6.48	28 b								1/3
5	12E-24-36	削器	22×19×9	4.71	29								1/2
6	12E-24-55	プランク	30×20×22	8.97	32								
7	12E-24-122	剥片	12×17×8	1.28	28 a	-	-	-	F+III+IV	F	-	B	1/3
8	12E-33-15	剥片 U	20×15×7	1.57	31	-	-	-	II+IV	F	+	R	1/2
9	12E-33-17	剥片	15×18×9	2.05		1(0)	14×7	120°	II+IV	-	-	H	
10	12E-34-47	彫器	12×20×8	1.74	28 b								1/3
11	12E-44-35	剥片	25×18×11	4.18		1(0)	14×7.5	88°	II+IV	F	-	-	
12	12E-24-112	剥片	21×19×7	2.9		1(0)	18.5×5.5	120.5°	II+F	F	-	-	
13	T-12-フク土	剥片 U	15×20×8	1.89	31	-	-	-	II+IV	F	+	L	1/2
14	12E-24-44	削器	19×23×7	2.56	29								1/2

断剥片である。4点中2点の出土位置が不明で、分布状況は明らかでない。

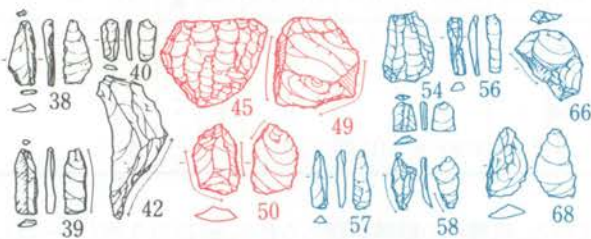
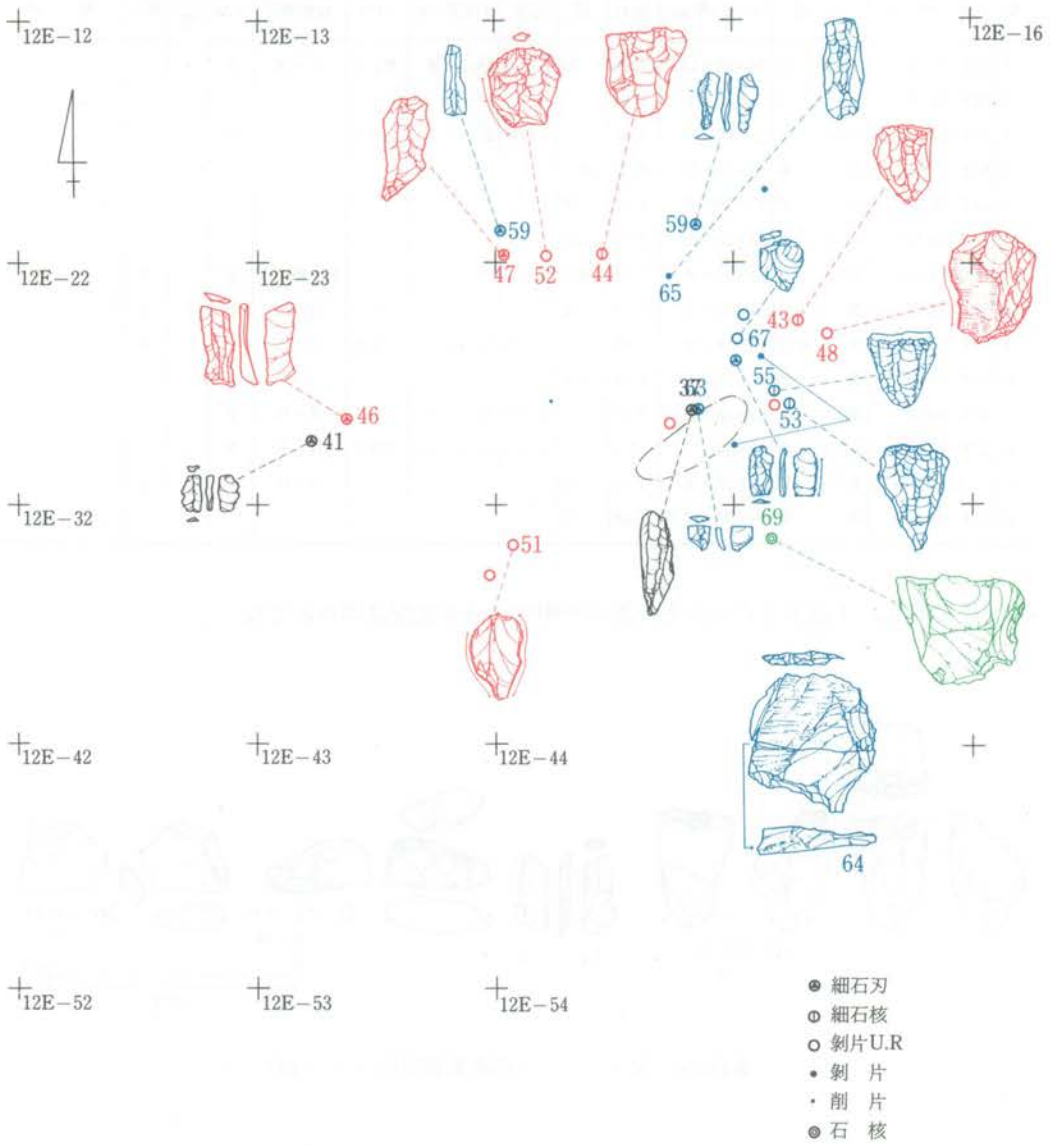


第105図 第1ブロック石器実測図(チャート13)

第23表 第1ブロック遺物属性表 (チャート13)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-6	剥片	19×15×7	1.67	36	-	-	-	IV	-	-	M	
2	12E-23-11	細石核	20×15×17	5.67	33								
3	番号不明	細石刃	15×7×3	0.19	34	-	-	-	II	F	+	B	
4	12E-14-15表採	剥片	13×20×8	1.95	35	F+10)	17.5×6	117.5°	II	-	-	H	

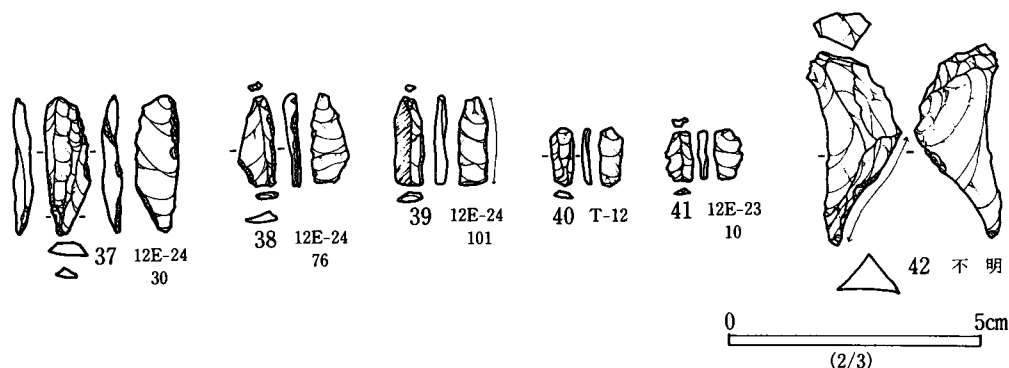
チャート14 透明感のある明灰色をしている。明褐色の細縞が認められる。細石刃5点(37~41)、UF1点(42)、削片1点から構成されている。細石刃で特に注目されるのは、2次加工の著明なものが2例あることである(37、38)。37は、背腹両面に部分的な微調整が加えられ、錐状の



0 ————— 4m

第106図 第1ブロック母岩別遺物出土状況(3)
 (黒 チャート14・赤 チャート15・青 チャート16・緑 珪質頁岩21)

尖頭器が形成されている。38は尾部が折損しているが、背面両側縁に細かい2次加工痕が観察される。未加工の縁辺部にも、更に微細な刃こぼれが認められるが、これは使用痕と見られる。2次加工の顕著な細石刃は、この母岩の2点のみであった。出土位置の不明な遺物が多く、正確な分布状況の推定は不可能である。



第107図 第1ブロック石器実測図(チャート14)

第24表 第1ブロック遺物属性表(チャート14)

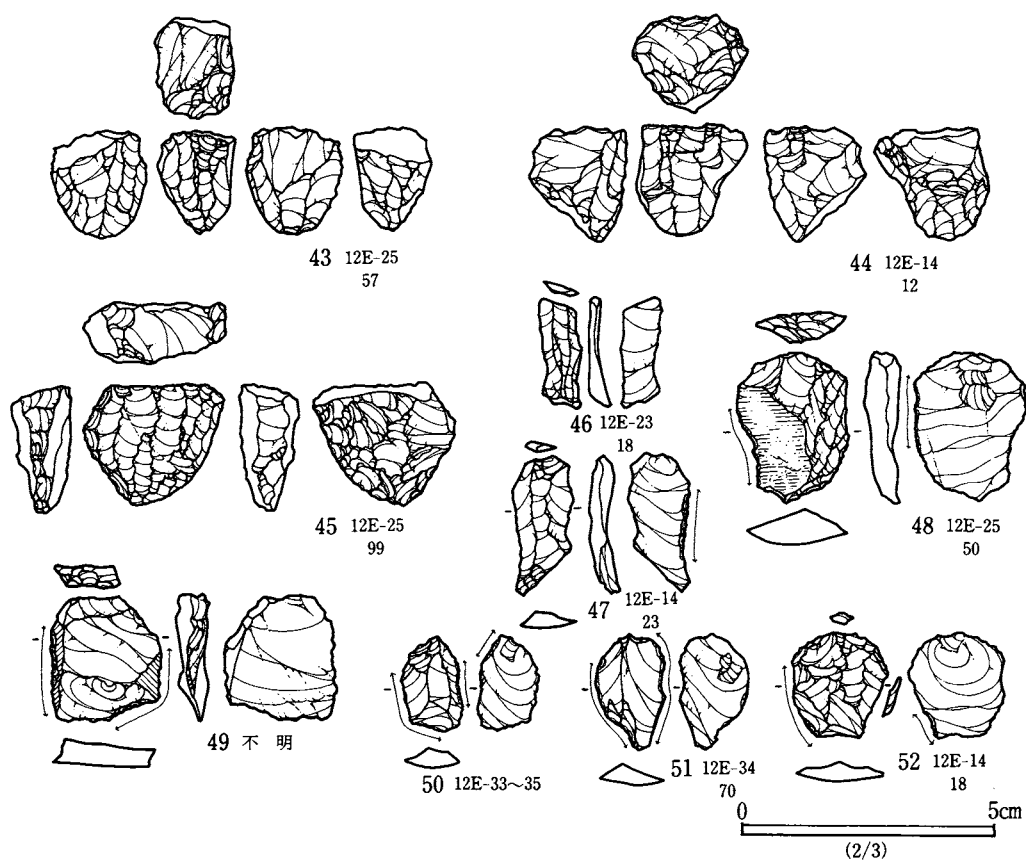
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-23-10	細石刃	10×5×3	0.06	41	1(0)	2.5×0.5	95°	II	—	—	H	
2	12E-24-30	細石刃	27×9×4	0.68	37	P	—	—	II	F	+	—	
3	番号不明	剥片U	17×37×13	4.67	42	ℓ	—	—	II+IV	F	+	—	
4	12E-24-76	細石刃	17×7×3	0.24	38	1(0)	2.5×1	101°	II	—	+	H	
5	12E-24-101	細石刃	17×6×3	0.22	39	1(0)	2×0.5	100°	F+II	—	+	H	
6	12E-25-90	削片	7×15×3	0.07									
7	T-12-フク土	細石刃	11×5×3	0.05	40	P	—	—	II	F	+	—	

チャート15 青灰色の地に、灰白色の細縞が多数並走している。均質で良好な石材である。細石核3点、細石刃2点、剥片8点から構成されている。細石核には、2類a種(43、44)、6類(45)の両者がある。2点の細石刃(46、47)には、共に使用痕が認められる。剥片(48~52)の大半に使用痕が観察される。剥片のうち、48はチャート11の26の例に比較される。背面に多方向からの剥離面を留める52は、おそらく細石核の打面の作出、あるいは更新と関係しよう。分布状況を見ると、ブロック北側の集中部に点在しており、まとまりを欠いている。

第25表 第1ブロック遺物属性表(チャート15)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-12	細石核	23×18×19	8.21	44								
2	12E-14-18	剥片U	20×20×5	1.44	52	1(0)	4.5×2	101.5°	II+IV	H	+	—	
3	12E-14-23	細石刃	28×11×6	1.32	47	2(1)	5×2	102.5°	II+III	O	+	—	

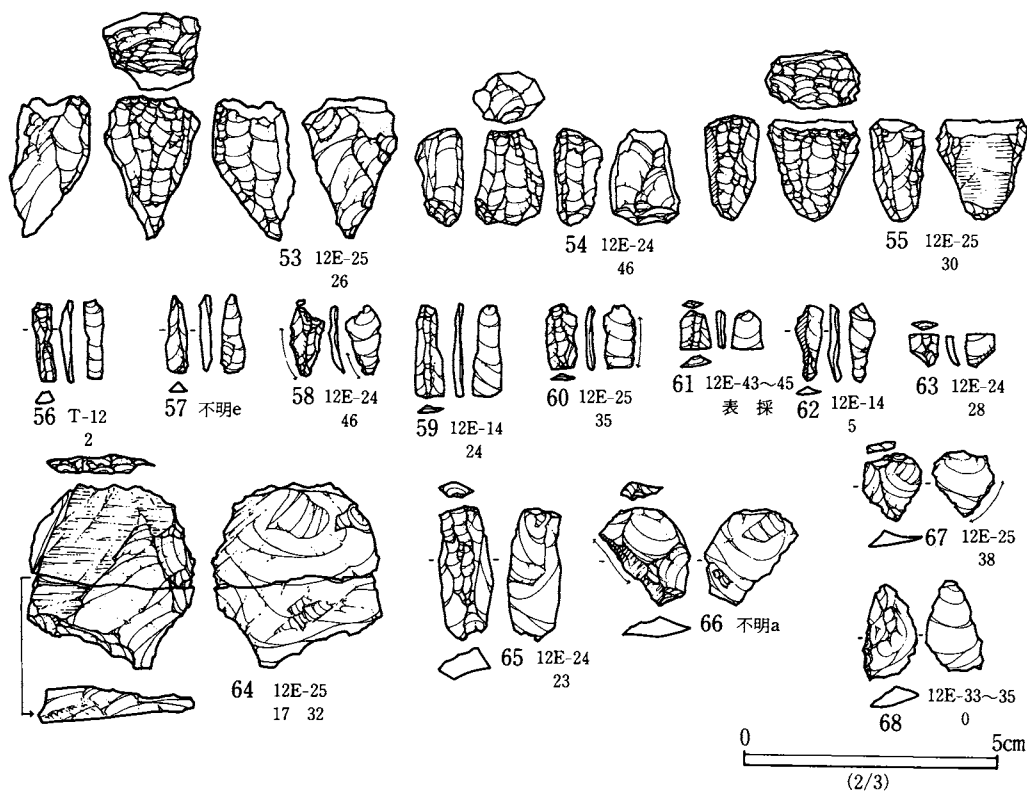
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
4	12E-23-18	細石刃	21×8×5	0.44	46	—	—	—	II	F	+	B	
5	12E-24-88	剥片U	15×8×5	0.44		2(0)	4×1.5	107°	II+III	F	+	—	
6	12E-25-50	剥片U	29×21×7	3.80	48	6(0)	17×4	105°	F+II	F	+	—	
7	12E-25-57	細石核	21×17×15	6.77	43								
8	12E-33-1	剥片U	18×14×8	0.87		1(0)	4×1	114.5°	II	O	+	—	
9	12E-34-70	剥片U	14×22×4	0.92	51	1(0)	4.5×1	115.5°	II	H	+	—	
10	12E-?-8	剥片U	27×26×7	3.87	49	8(3)	12×4.5	111.5°	F+II	F	+	—	
11	番号不明	剥片	24×19×10	3.17		2(0)	8×2	119°	IV	F	—	—	
12	12E-25-99	細石核	26×25×13	8.62	45								
13	12E-33・34・35	剥片U	18×13×5	0.90	50	ℓ	—	—	II+III	F	+	—	



第108図 第1ブロック石器実測図(チャート15)

チャート16 青白色を呈しているが、色調に濃淡があり、明色部ではチャート14との差は微妙である。細石核3点、細石刃9点、剥片14点から構成されている。細石核は多様で、2類a種(53)、2類b種(55)、3類(54)と三者三様のあり方を示している。9点の細石刃は、全般に小型のものが目立ち、使用痕のあるものも多い。部位別の遺存状況を見ると、完形、若し

くは準完形のもの4点、頭部2点、尾部2点であり、3分割手法が必ずしも一般的でないことを示している。14点の剥片があるが、そのうち8点に使用痕が認められる。調整剥片の重要性を改めて述べるまでもないが、その使用はコード化されており、決して偶然ではあるまい。分布は12E-24、25区に比較的集中している。



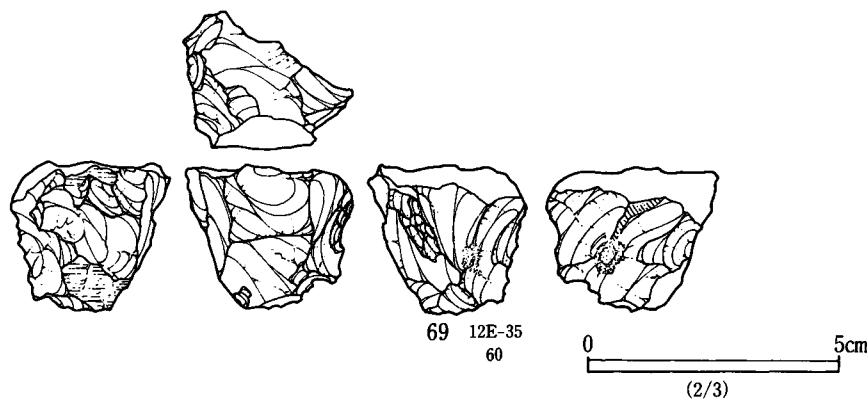
第109図 第1ブロック石器実測図(チャート16)

第26表 第1ブロック遺物属性表(チャート16)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-5	細石刃	15×5×3	0.10	62	—	—	—	F+II	F	—	B	
2	12E-14-24	細石刃	18×6×2	0.14	59	ℓ	—	—	II	—	+	H	
3	12E-15-3	剥片	27×39×16	11.99		F+I(0)	27×16	108°	ⓐ	H	—	—	
4	12E-24-23	剥片	27×11×8	2.07	65	1(1)	7×3	117°	II	F	—	—	
5	12E-24-28	細石刃	6×6×2	0.04	63	—	—	—	II+III	F	—	B	
6	12E-24-92	削片	9×5×3	0.12									
7	12E-25-17	剥片	19×33×9	3.53	64	—	—	—	F+IV	F	—	B	½
8	12E-25-26	細石核	26×17×13	6.83	53								
9	12E-25-30	細石核	20×18×10	4.32	55								
10	12E-25-32	剥片	20×33×7	5.20	64	7(3)	25×4	113°	F+IV	—	—	H	½
11	12E-25-35	細石刃	13×6×1	0.08	60	1(0)	2×0.5	113°	II+IV	—	+	H	
12	12E-25-38	剥片	13×12×5	0.40	67	1(0)	5×1	97°	II	F	+	—	

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
13	12E-25-43	剥片 U	36×14×13	4.27		1(0)	5×4	124.5°	II+IV	H	+	-	
14	12E-25-121	剥片 U	15×15×5	0.57		3(1)	15×4	113°	F+III	F	+	-	
15	番号不明 a	剥片 U	20×15×5	1.15	66	3(1)	9×4	97°	F+II+IV	F	+	-	
16	番号不明 b	剥片 U	15×22×5	1.64		1(0)	16.5×6.5	114.5°	II+IV	H	+	-	
17	番号不明 c	剥片 U	17×22×9	2.12		-	-	-	II+IV	O	+	R	
18	番号不明 d	剥片 U	16×31×10	2.70		1(0)	5×1.5	119.5°	IV	F	+	-	
19	番号不明 e	細石 刃	15×5×3	0.12	57	P	-	-	II	-	+	H	
20	12E-24-45	細石 刃	13×7×2	0.11	58	P	-	-	II	F	+	-	
21	12E-24-46	細石 核	18×13×10	2.88	54								
22	12E-24-105	削片	6×10×3	0.11									
23	T-12フク土内2	細石 刃	11×6×1	0.02		P	-	-	II	H	-	-	
24	T-12-2	細石 刃	15×4×3	0.09	56	P	-	-	II+III	-	-	H	
25	12E-33・34・35 0	剥片 U	19×10×5	0.54	68	P	-	-	II	F	+	-	
26	12E-43・44・45 表採	細石 刃	7×6×2	0.06	61	2(0)	3.5×1	98°	II	-	-	H	

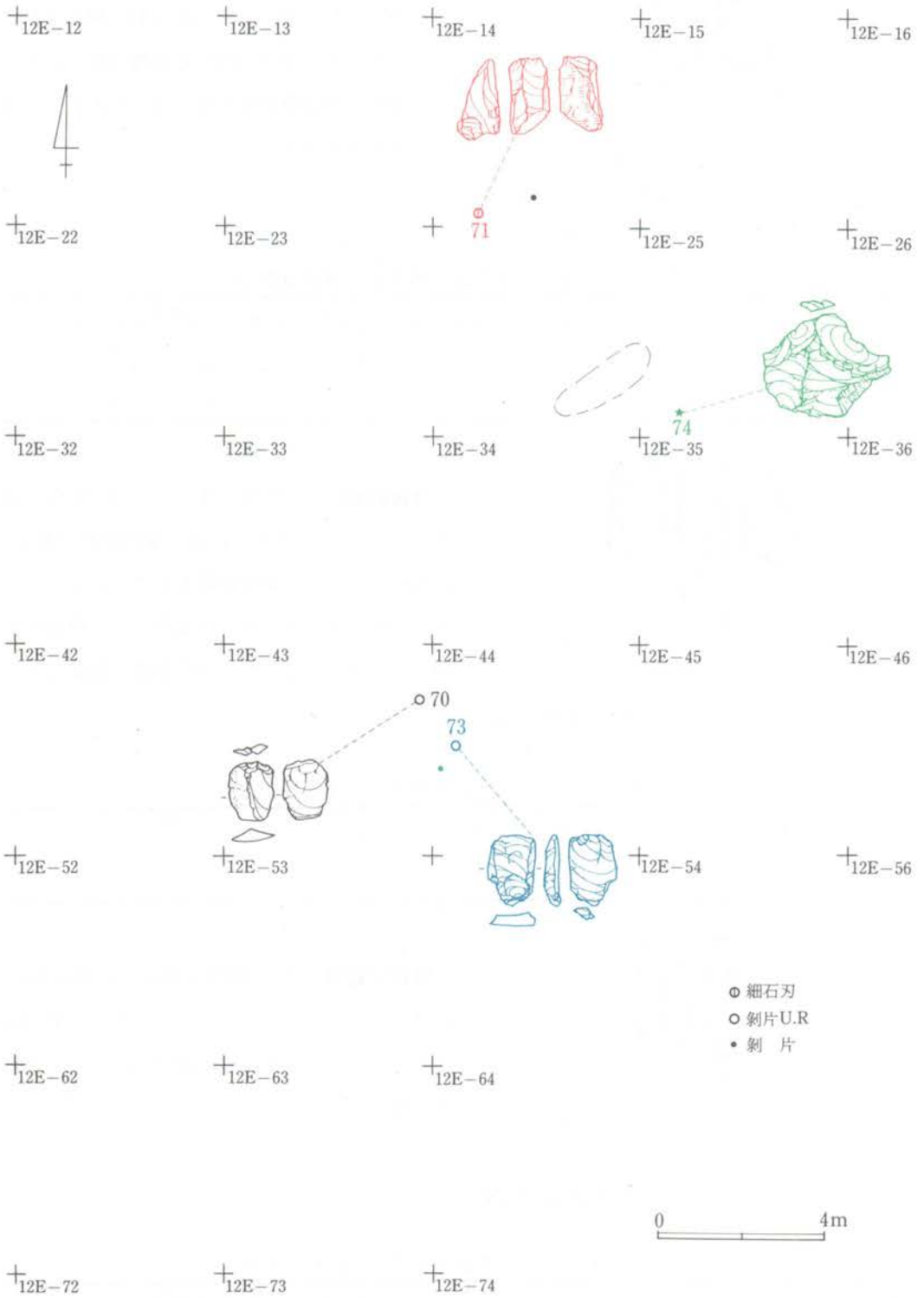
珪質頁岩21 濃淡のある暗灰色の部分と、淡青灰色の部分が縞状に認められる。捕獲岩片の一部らしいものが見え、流紋岩質凝灰岩であるかもしれない。細石核の母核が1点のみである。打面の作出は認められず、別地点で粗割りされたものが、再加工を経ずに廃棄された可能性が高い。チャート10の母核と似ている。



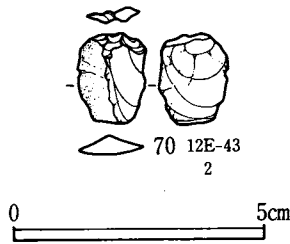
第110図 第1ブロック石器実測図(珪質頁岩21)

第27表 第1ブロック遺物属性表(珪質頁岩21)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-35-60	石 核	37×30×24	26.98	69								



第111図 第1ブロック母岩別遺物出土状況(4)
 (黒 珩質頁岩22・赤 珩質頁岩23・青 珩質頁岩25・緑 珩質頁岩26)

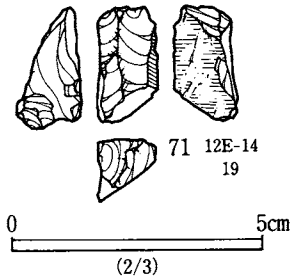


第112図 第1ブロック石器実測図(珪質頁岩22)

珪質頁岩22 明淡褐色を呈し、暗色の縞の入る珪質な石材。剥片2点が散発的に検出されている。比較的小型の円礫から剥離されているので、細石核の調整剥片と見てよいであろう。1例に使用痕を認める。

第28表 第1ブロック遺物属性表(珪質頁岩22)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-10	剥片	18×18×6	2.12		C	12×5	76.5°	II	H	-	R	
2	12E-43-2	剥片 U	18×13×5	1.08	70	2(0)	11×2.5	13.9°	ⓐ	H	+	-	

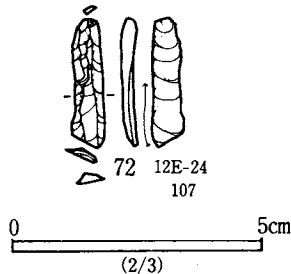


第113図 第1ブロック石器実測図(珪質頁岩23)

珪質頁岩23 明褐色で珪質な石材。表面は微光沢がある。細石核1点のみの単独資料である。傾斜打面を持つ4類の仲間とも見られるが、板状の素材の狭い木口面を作業面とする特徴を重視し、7類に編入した。石核下部は欠損している。

第29表 第1ブロック遺物属性表(珪質頁岩23)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-19	細石核	15×24×10	3.13	71								

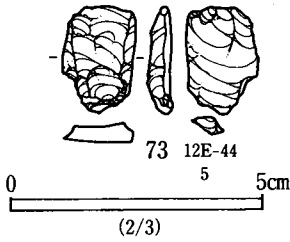


第114図 第1ブロック石器実測図(珪質頁岩24)

珪質頁岩24 淡い黄褐色の縞の入る暗灰色の石材。それほど珪化はすすんでいない。尾部端を僅かに欠損する準完形の細石刃が1点のみ単独で存在する。

第30表 第1ブロック遺物属性表(珪質頁岩24)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-24-107	細石刃	25×6×3	0.41	72	1(0)	2.5×0.5	98.5°	II	-	+	H	

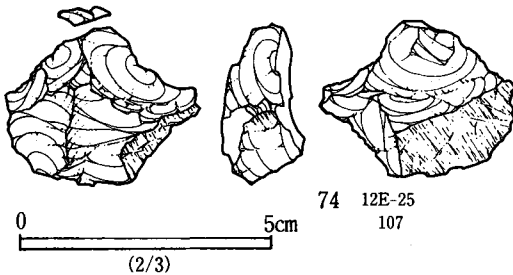


第115図 第1ブロック石器実測図(珩質頁岩25)

珩質頁岩25 僅かに黄色味を帯びる褐色の石材で、珩質緻密な石材。剥片が1点あるが、側縁に細石刃剥離時の槌状の剥離痕が一部残されている。剥片の状況は、楔形石器から打ち落された剥片の特徴を具備しており、両極加撃によって作出された剥片と見られる。

第31表 第1ブロック遺物属性表(珩質頁岩25)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-44-5	剥片 U	21×14×5	1.64	73	ℓ	—	—	III	O	+	—	

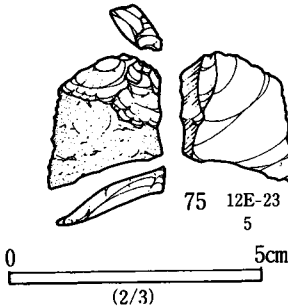


第116図 第1ブロック石器実測図(珩質頁岩26)

珩質頁岩26 灰緑色の地に暗灰色の斑紋が認められる。節理面が発達している。74は比較的大型の剥片であるが、剥離後に腹面からの加撃が認められ、細石核の母岩となる可能性が高い。もう1点剥片があるが、両者間の検出地点には大きな距りがある。

第32表 第1ブロック遺物属性表(珩質頁岩26)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-10	ブランク	30×36×15	12.27	74	2(0)	11×3	123°	II+III	O	—	—	
2	12E-44-56	剥片	35×18×10	5.60		C	15×7.5	111.5°	⑩+⑪	F	—	—	

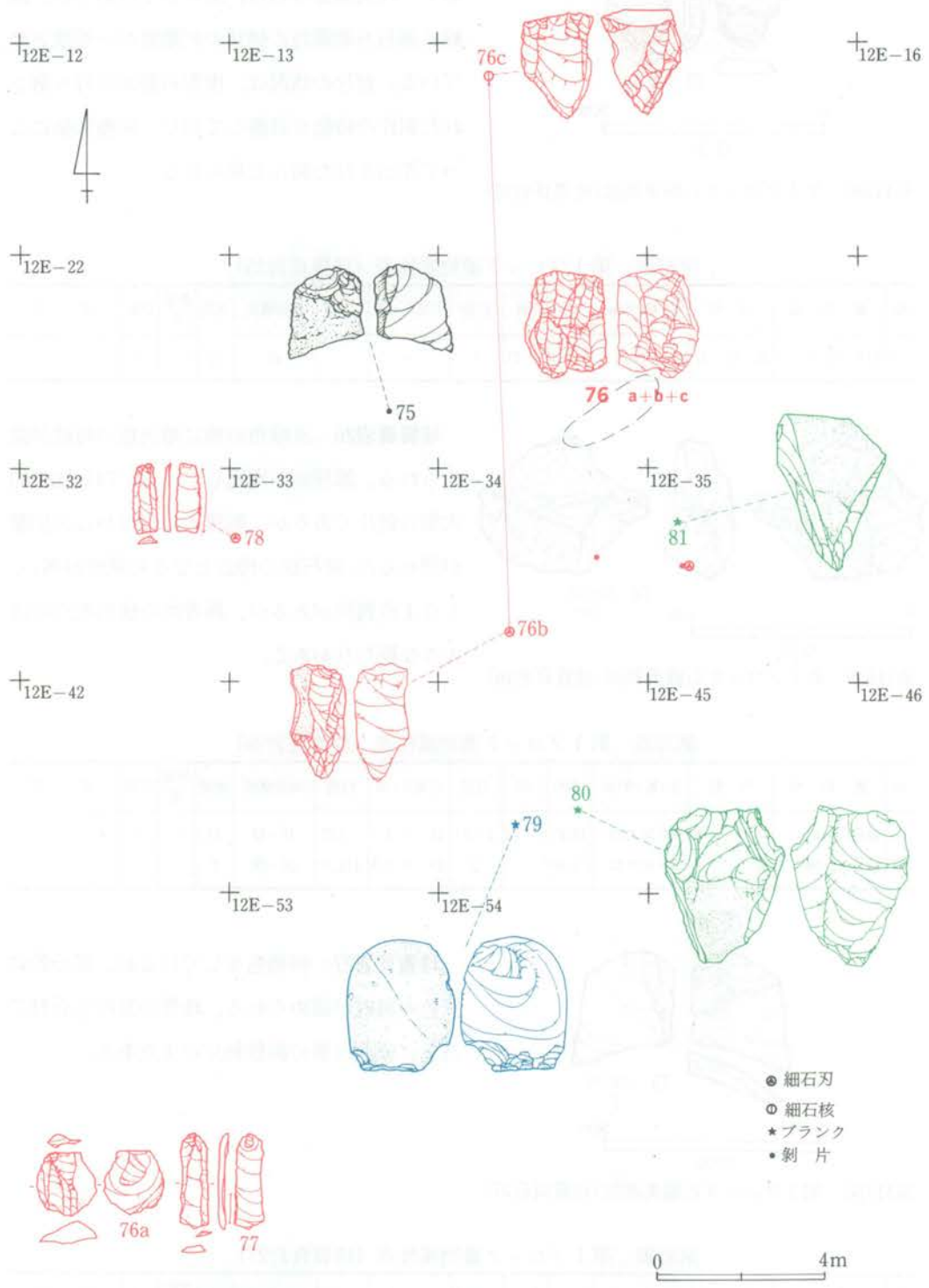


第117図 第1ブロック石器実測図(珩質頁岩27)

珩質頁岩27 明褐色をしているが、部分的に灰色の斑紋が認められる。珩質の良好な石材である。礫面付着の調整剥片が1点ある。

第33表 第1ブロック遺物属性表(珩質頁岩27)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-23-5	剥片	23×25×9	4.95	75	2(1)	12.5×2.5	97.5°	⑩	—	—	H	

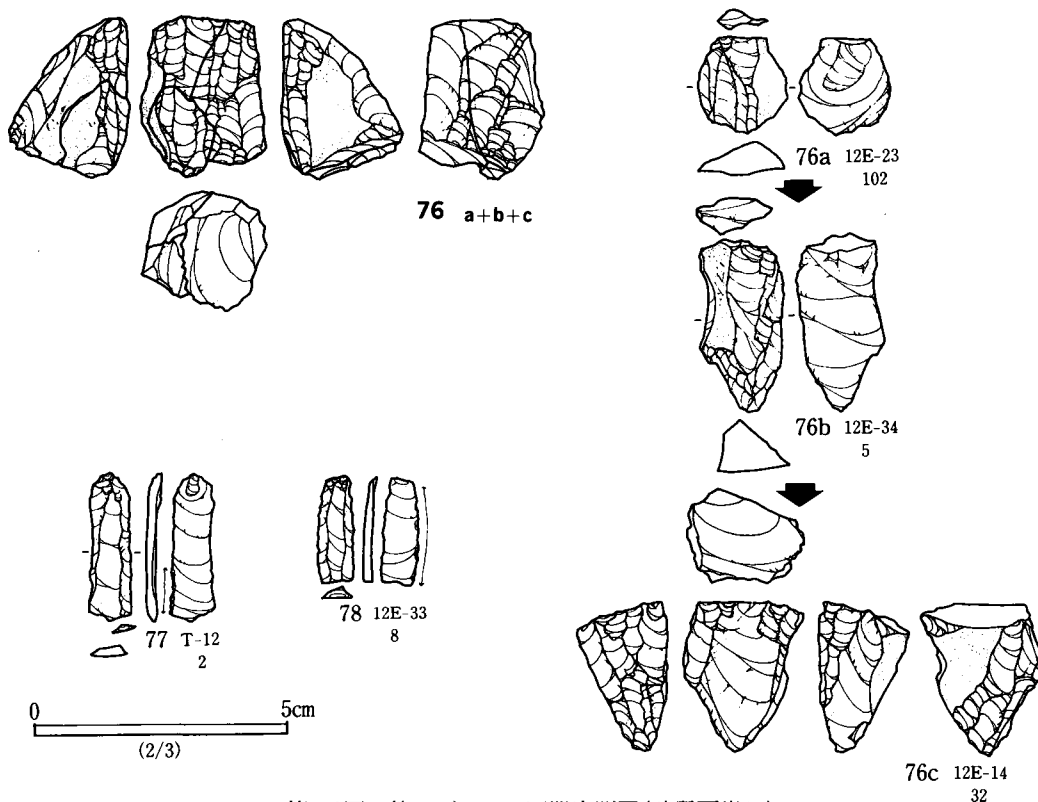


第118図 第1ブロック母岩別遺物出土状況(5)
 (黒 珩質頁岩27・赤 珩質頁岩28・青 凝灰岩5・緑 凝灰岩6)

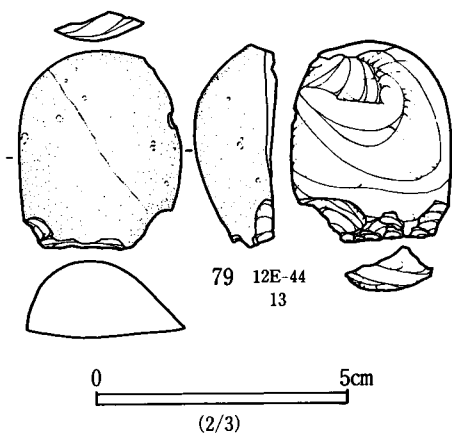
珪質頁岩28 暗灰褐色を呈する。やや粒子が粗く、珪化度の弱い泥岩とすべきものかもしれない。細石核1点、細石刃2点、剥片3点から構成されている。細石核(76c)は5類であるが、これに剥片2点(76a、76b)が接合する(76)。この過程は次のように考えることができる。初め、傾斜打面からの細石刃剥離がすすめられていたが、石核の反転に伴って、下設打面からの剥離が開始された直後に、76aの不整な剥片を生じたため、作業面に乱れを生じた。これを補正するために、石核をたち割るような加撃を加えて、76bと76cが結果している。一種の作業面の再生と扱えられるが、再生後の細石刃剥離は認められない。細石刃2点(77、78)は比較的大型のもので、共に準完形である。各資料の分布はまばらで、接合するものも11m以上離れている。

第34表 第1ブロック遺物属性表(珪質頁岩28)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-32	細石核	30×22×17	10.69	76c								1/3
2	12E-33-8	細石刃	20×7×1	0.30	78	1(0)	4.5×0.5	114.5°	II	-	+	H	
3	12E-34-5	剥片	34×17×13	6.49	76b	1(0)	13×6	114.5°	II+III	F	-	-	1/3
4	12E-35-41	剥片	16×12×5	0.78		3(1)	10×3.5	128.5°	⑩+⑪	F	-	-	
5	12E-24-102	剥片	20×18×6	2.00	76a	1(0)	9×3.5	114°	⑩+⑪	F	-	-	1/3
6	T-12-2 覆土内	細石刃	29×9×3	0.51	77	1(0)	2×0.5	96.5°	II	F	+	-	



第119図 第1ブロック石器実測図(珪質頁岩28)



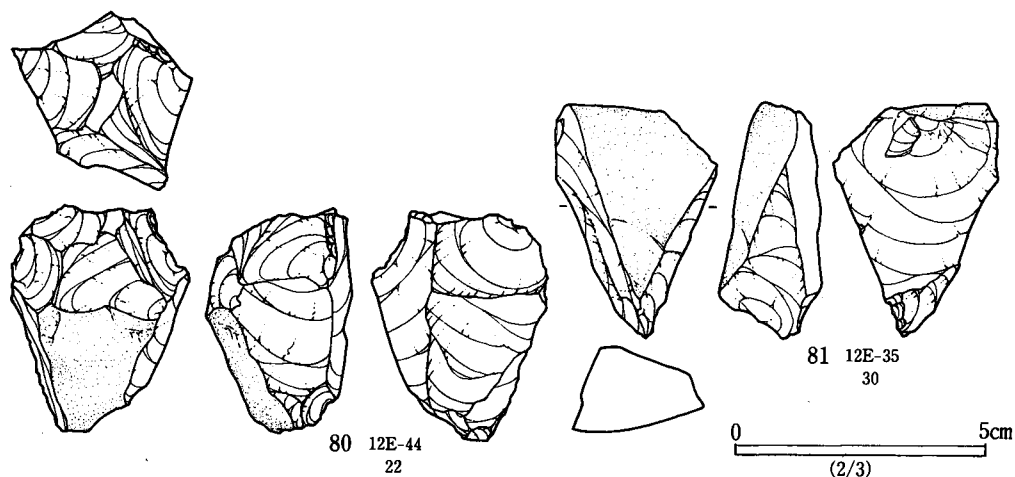
凝灰岩 5 細粒の凝灰岩で、淡褐色をしている。礫面は平滑で微光沢がある。円礫の一端を横割にし、その尾部折断面から腹面に垂直な加撃による調整を行っている。細石核母核の最も初期的な段階である。同一母岩の資料を含んでおらず、おそらく母核搬入時の状況を留めているものと考えられる。

第120図 第1ブロック石器実測図(凝灰岩 5)

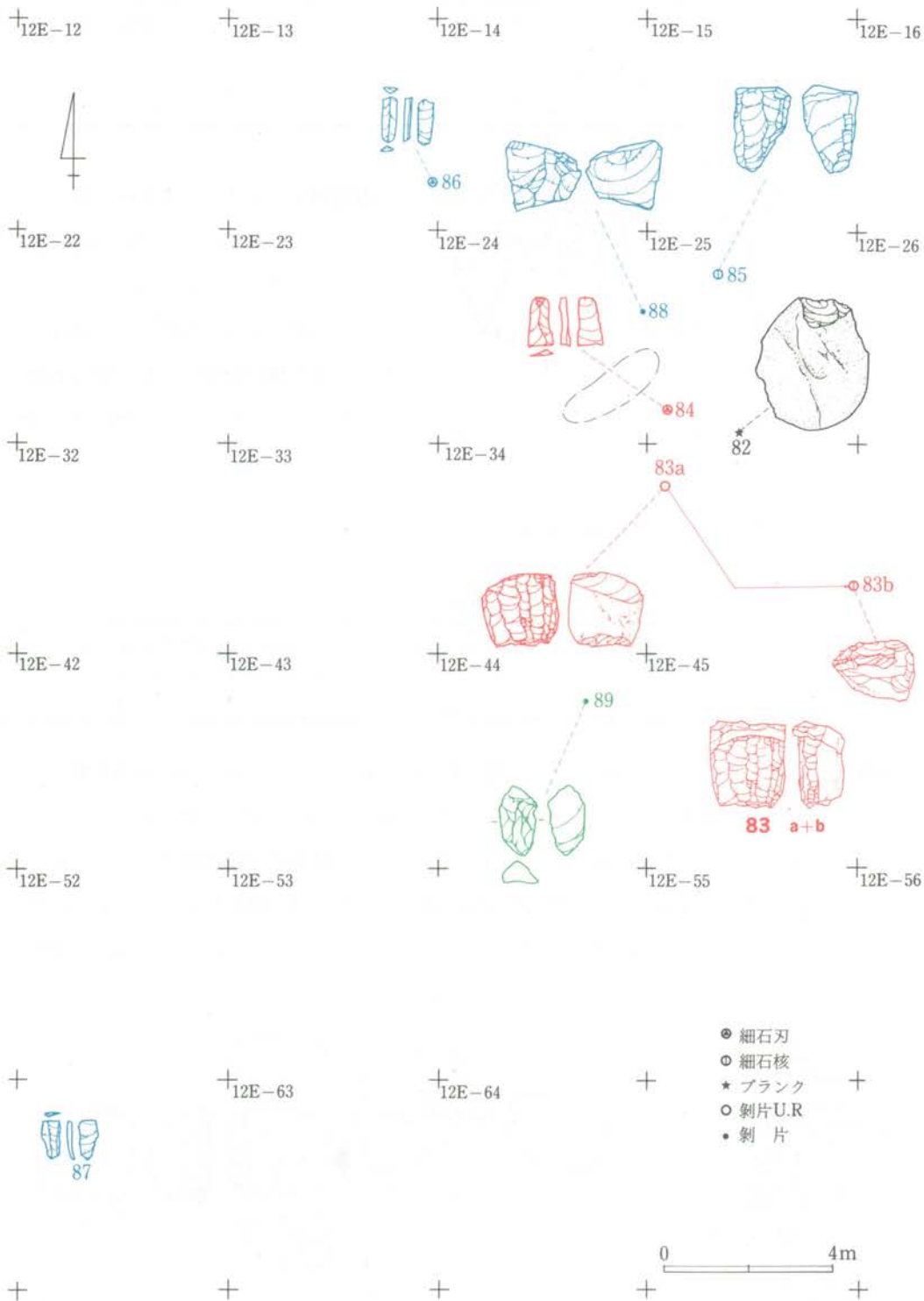
第35表 第1ブロック遺物属性表(凝灰岩 5)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-44-13	ブランク	39×32×15	23.07	79								

凝灰岩 6 明黄褐色をした細粒の凝灰岩。色調に若干の差が認められるものの、凝灰岩 5 と全く同質の石材であり、同一地点からの同時搬入の疑いもある。原石は比較的小型の円礫であり、古鬼怒川上流域から搬入された可能性が高い。約 6 m を距てて 2 点の母核が検出された。81 では、79 と全く同様にして、大型剥片の尾部の折断→細かい腹面剥離という工程を踏んでいる。80 は、ほぼ打面と作業面の位置関係が決まった段階で、稜角を打ち落すような剥離によって、三角錐状の原形が作り出されている。



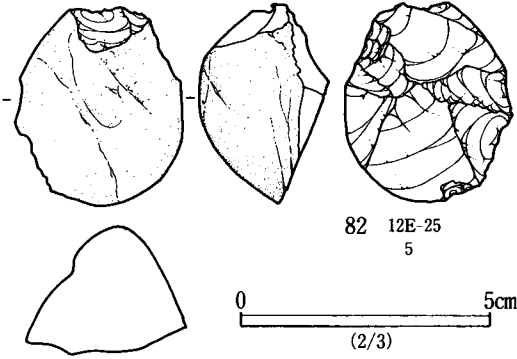
第121図 第1ブロック石器実測図(凝灰岩 6)



第122図 第1ブロック母岩別遺物出土状況(6)
 (黒 凝灰岩7・赤 凝灰岩8・青 凝灰岩9・緑 凝灰岩10)

第36表 第1ブロック遺物属性表 (凝灰岩 6)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-35-30	ブランク	49×32×19	20.76	81								
2	12E-44-22	ブランク	45×32×29	39.39	80								



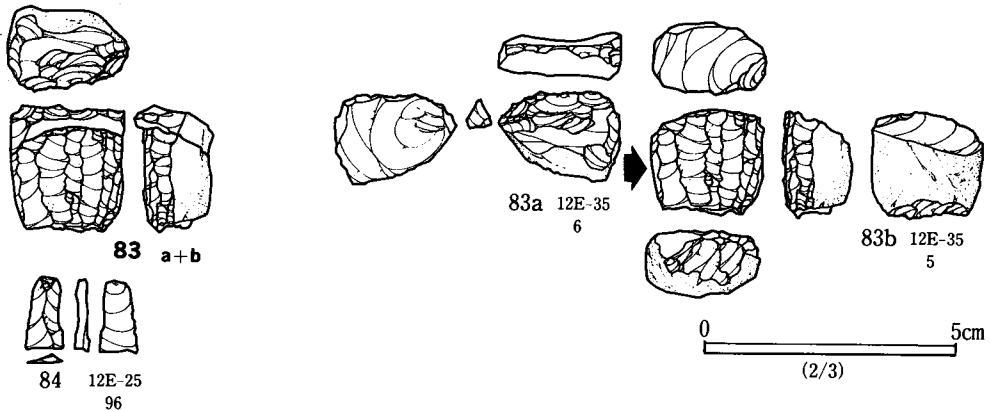
凝灰岩 7 かすかに黄色味を帯びた灰褐色をしている。泥岩との差異の識別は、肉眼的には全く不可能であるが、前記 2 母岩と同質のものと判断した。比較的小型の円礫を横に分割し、粗い腹面剝離による整形が行われている。細石核の母核である。

第123図 第1ブロック石器実測図(凝灰岩 7)

第37表 第1ブロック遺物属性表 (凝灰岩 7)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-5	ブランク	37×34×24	29.71	82								

凝灰岩 8 黄白色の珪質な石材である。細石核 1 点、細石刃 1 点、細石核打面再生剥片 1 点の計 3 点の資料から構成されている。細石核は 2 類 b 種で、初めは調整打面をもつものであったが、再生後は非調整の平坦打面をもつものになっている。僅かに頭部調整と見られる細かい剝離痕が最終作業面に看取される。打面再生後の細石刃の作出は、細石核に向って右から開始され、左端から折り返し、ほぼ中央に到達するまでの 1.5 往復に亘って行われている。この間に、



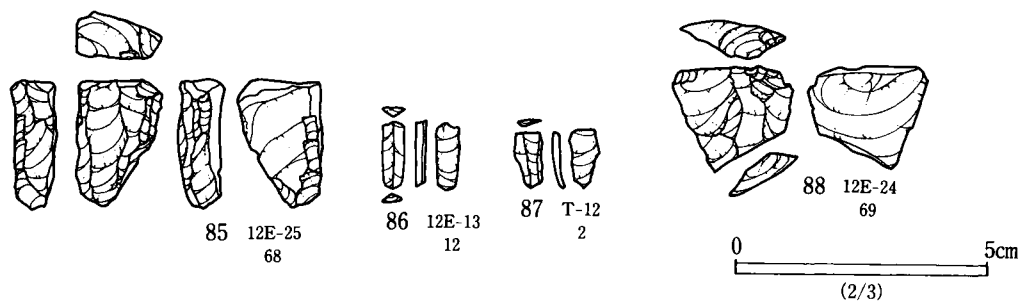
第124図 第1ブロック石器実測図(凝灰岩 8)

8本前後の細石刃が得られたものと考えられる。分布にはまとまりがなく、細石核と打面再生剥片の接合距離は6mである。

第38表 第1ブロック遺物属性表(凝灰岩8)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-96	細石刃	9×8×3	0.17	84	ℓ	—	—	II	—	—	H	
2	12E-35-5	細石核	22×22×13	7.52	83b								½
3	12E-35-6	剥片	25×18×9	3.50	83a	1(0)	5×4.5	114°	Ⓧ	O	—	—	½

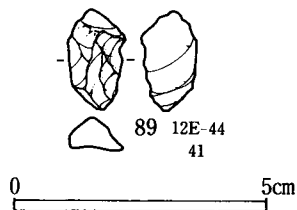
凝灰岩9 微斑晶の観察される流紋岩質の石材である。表面は灰褐色に風化しているが、内面は少し暗い色調となる。細石核1点(85)、細石刃2点(86、87)、調整剥片3点(88)から構成されている。細石核は平坦打面を持つ2類b種。12E-24、25区周辺に分布する。



第125図 第1ブロック石器実測図(凝灰岩9)

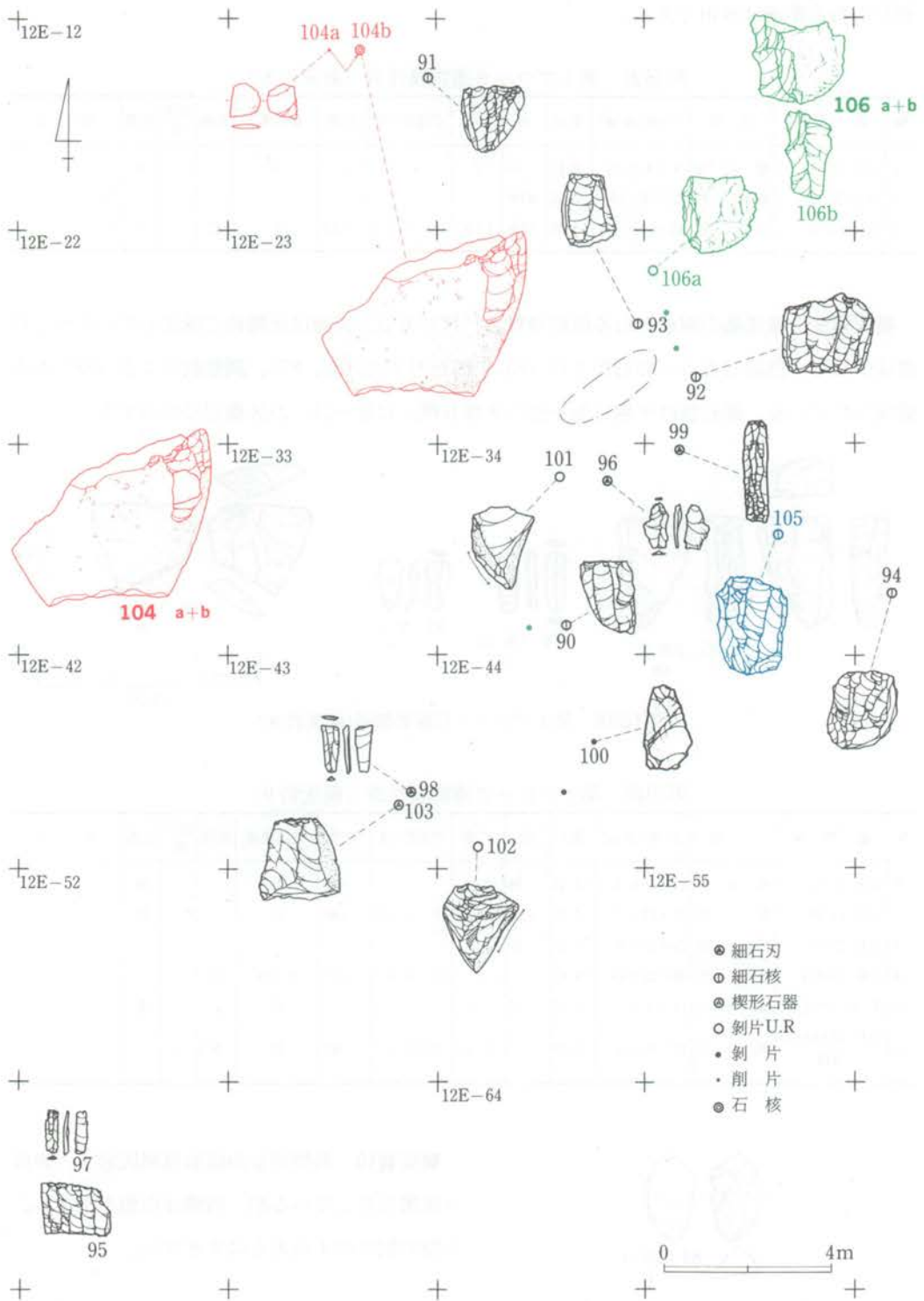
第39表 第1ブロック遺物属性表(凝灰岩9)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-13-12	細石刃	12×5×3	0.11	86	—	—	—	II	—	—	M	
2	12E-24-69	剥片	21×23×7	2.45	88	C+3(3)	19×6.5	100°	II	—	—	H	
3	12E-25-68	細石核	26×17×9	3.19	85								
4	12E-25-121	剥片	25×24×13	4.82		C	21×6	125°	II+IV	O	—	—	
5	T-12フク土2	細石刃	11×6×2	0.06	87	—	—	—	II	F	—	B	
6	12E-43・44・45 表探	剥片	12×10×6	0.49		2(1)	9.5×5	85°	II	F	—	—	



第126図 第1ブロック石器実測図(凝灰岩10)

凝灰岩10 典型的な流紋岩質凝灰岩で、表面は淡褐色をしているが、内側は白色を呈する。小型の剥片が1点あるにすぎない。



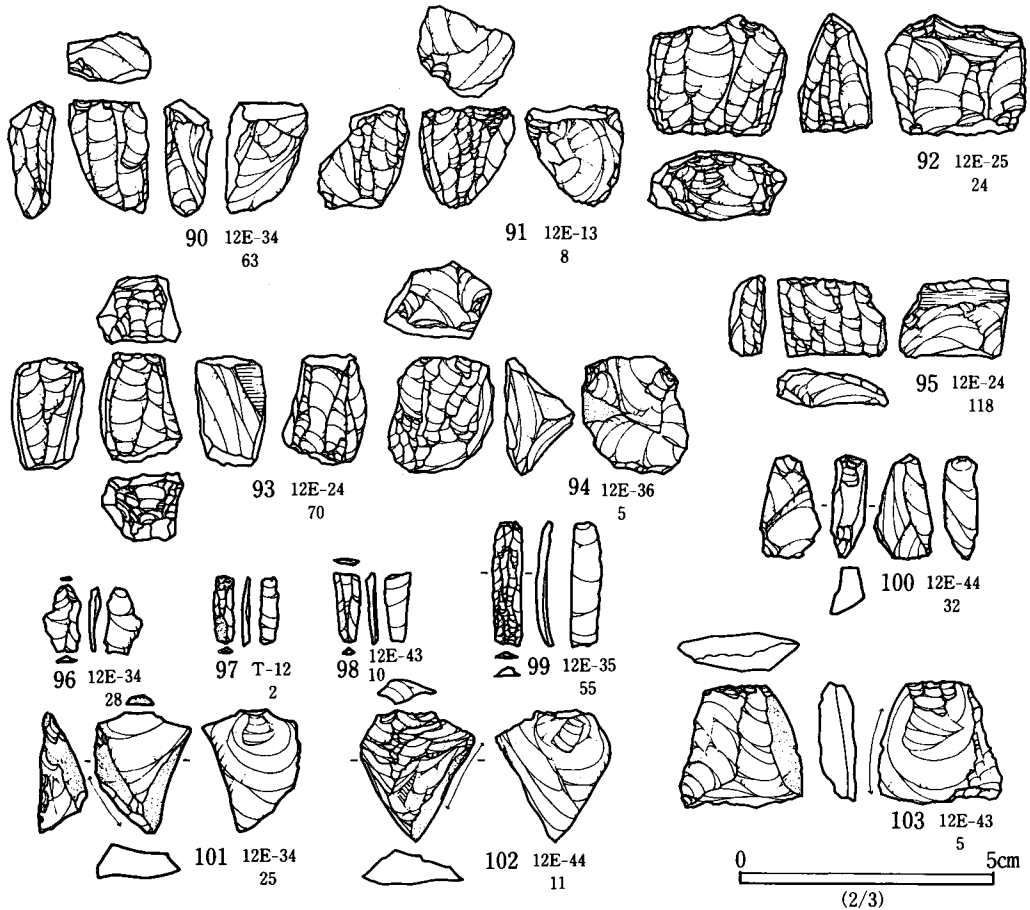
第127図 第1ブロック母岩別遺物出土状況(7)
 (黒 凝灰岩11・赤 凝灰岩12・青 凝灰岩13・緑 凝灰岩14)

第40表 第1ブロック遺物属性表 (凝灰岩10)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-44-41	剥片	20×11×8	1.17	89	ℓ	—	—	II+IV	F	不明	—	

凝灰岩11 肌色に近い淡い淡灰褐色をした、極めて細粒の石材である。新鮮な割れ口を見ると暗灰色をしており、緻密な泥岩である可能性も高いが、肉眼による判定は困難であった。細石核6点 (90～95)、細石刃4点 (96～99)、剥片4点 (100～102)、楔形石器1点 (103)、合計15点の資料から構成されている。細石核の構成は、2類a種2点 (91、93)、2類b種2点 (90、95)、4類1点 (94)、5類1点 (92) と多様であるが、通常の打面を持つものと、傾斜打面を持つものが、2：1の比率で存在している。また、比較的入念な打面調整を持つものは、92、93の2例にすぎず、平坦打面、若しくは非調整打面との比率もまた、2：1となっている。細石刃は資料数が極端に少ないが、3分割を示唆する例は含まれていない。

調整剥片の利用率は高く、2例に使用痕が、また1例が楔形石器に再生されている。楔形石

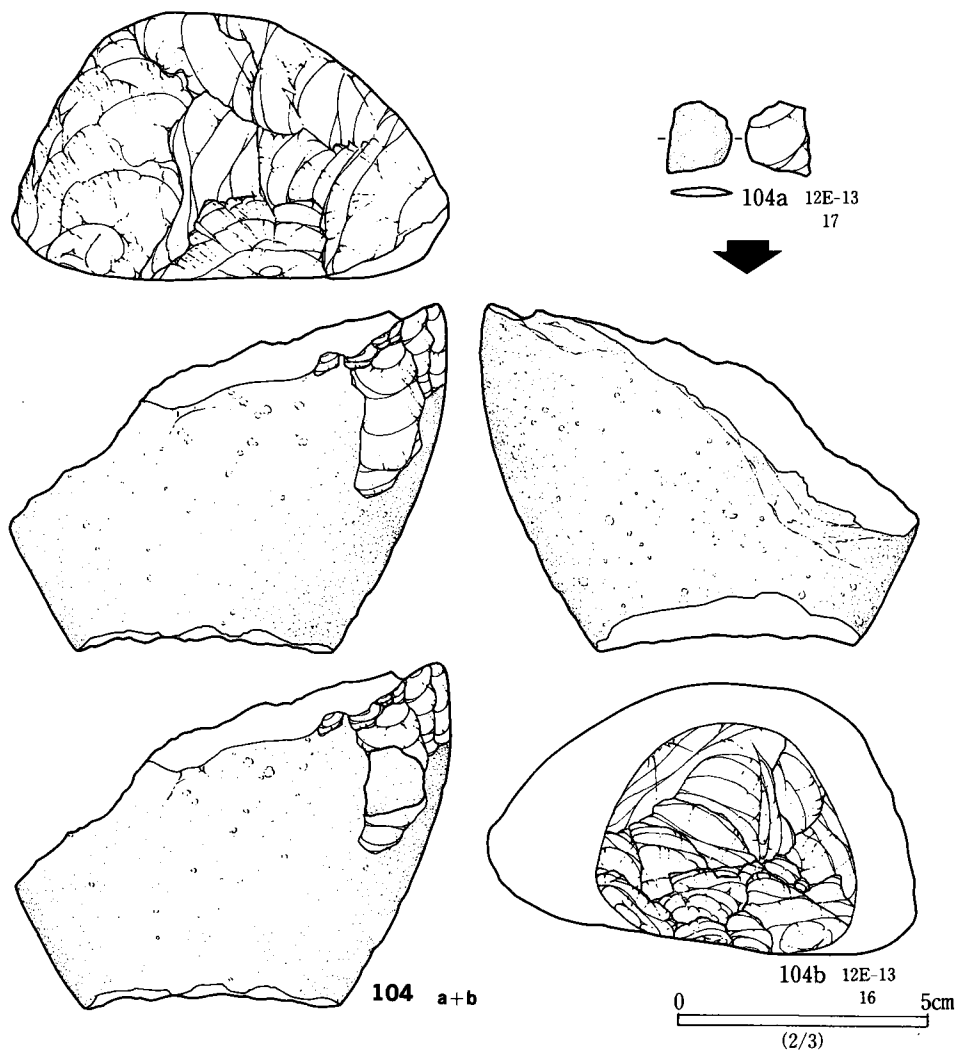


第128図 第1ブロック石器実測図(凝灰岩11)

器には、加撃痕の残る頭部と、尾部及び腹面左側縁に磨滅し光沢を放つ部分が観察される。この磨滅痕は、縁辺部に狭い帯状に発達し、石器内面には及んでいないので、例えば切截や、溝切りのように、石器縁辺を平行に反覆移動した結果である可能性が指摘される。100は打面再生剥片である。側縁の一部、原礫面と接する部分に槌状剥離痕が残されている。分布状況を見ると、南北15mにわたって点々と散布している状態が観察される。分布の特に集中する地点は認められない。

第41表 第1ブロック遺物属性表(凝灰岩11)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-13-8	細石核	19×19×13	4.98	91								
2	12E-24-70	細石核	22×15×14	6.52	93								



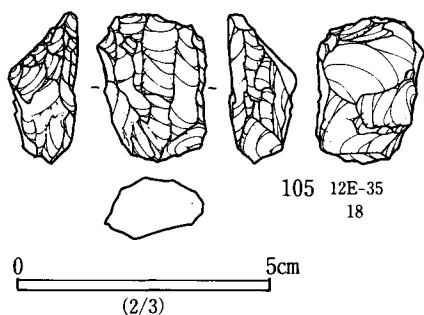
第129図 第1ブロック石器実測図(凝灰岩12)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
3	12E-25-24	細石核	25×27×15	11.17	92								
4	12E-34-25	剥片 U	25×20×10	2.86	101	1(0)	6 × 1.5	122.5°	㊸	F	+	-	
5	12E-34-28	細石刃	13×7×3	0.10	96	1(0)	2 × 0.5	103.5°	II	-	-	H	
6	12E-34-63	細石核	24×15×10	3.63	90								
7	12E-35-55	細石刃	25×6×4	0.31	99	1(0)	2.5×1	118.5°	II	-	-	H	
8	12E-36-5	細石核	24×20×14	5.96	94								
9	12E-43-5	楔形石器	25×23×9	3.97	103								
10	12E-43-10	細石刃	14×5×1	0.08	98	-	-	-	II	-	+	M	
11	12E-44-11	剥片 U	27×23×10	3.17	102	2(0)	11 × 4.5	124.5°	㊸	F	+	-	
12	12E-44-32	剥片	20×11×7	1.43	100	不明	6 × 2	104°	㊸+㊸+㊸	F	-	-	
13	12E-44-51	剥片	20×11×7	1.43		1(0)	4 × 1	110°	IV	F	-	-	
14	12E-24-118	細石核	22×15×7	2.76	95								
15	T-12-2	細石刃	13×4×2	0.06	97	ℓ	-	-	㊸	-	-	H	

凝灰岩12 青灰色をしたやや粗粒の石材である。比較的大型の礫を素材とする石核(104b)が1個体あり、これに接合する剥片(104c)も1点ある。構成3の石核とも見られる。

第42表 第1ブロック遺物属性表(凝灰岩12)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-13-16	石核	98×63×55	415.00	104 b								
2	12E-13-17	削片	13×13×2	0.34	104 a								



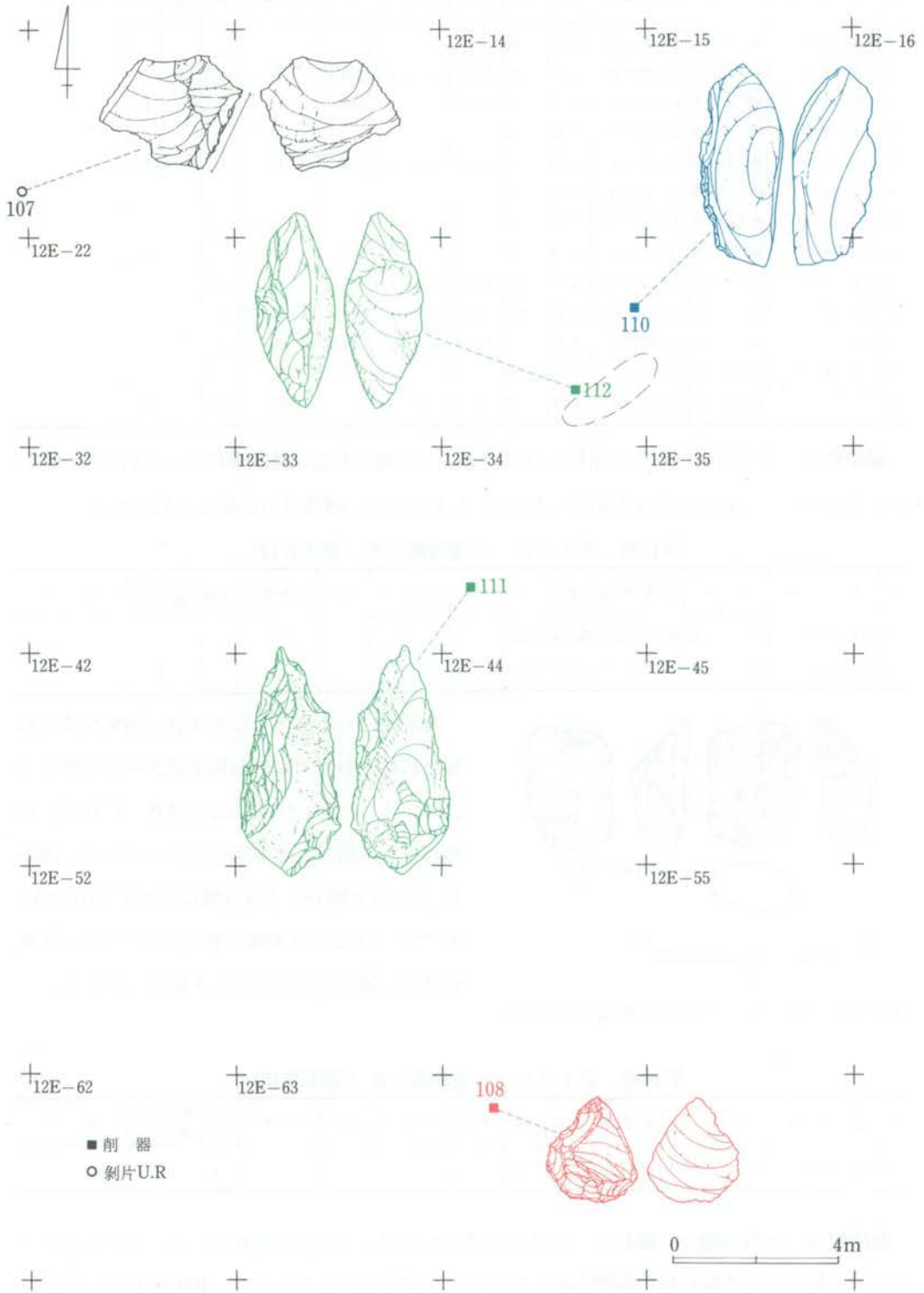
第130図 第1ブロック石器実測図(凝灰岩13)

凝灰岩13 乳白色をした珪質、緻密な流紋岩質の石材。典型的な細石核4類が単独で検出されている。打面と作業面との交角(打面角)は極めて鋭角的で、38°前後で交わっている。因みに、やはり本類若しくは5類に帰属する76で65°、92で62°、94でも53°前後の値を示しており、本例が格段に鋭角的であることを物語っている。

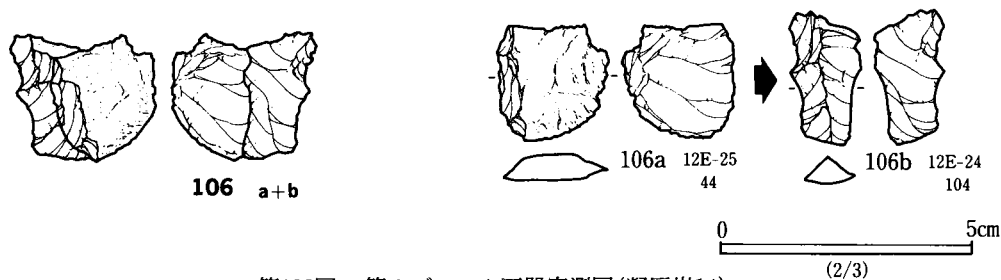
第43表 第1ブロック遺物属性表(凝灰岩13)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-35-18	細石核	21×28×13	7.84	105								

凝灰岩14 灰色の細かい細目と、淡褐色の縞とが平行して交互に現れている。剥片6点からなり、石質から見て細石核の調整剥片と見られる。使用痕のあるものは、106aの1点のみで、103で観察されたものと全く同一の特徴を示す。光沢に富む磨滅痕が腹面右側縁部に認められる。12E-25区の周辺に比較的にコンパクトなまとまりをもって分布している。



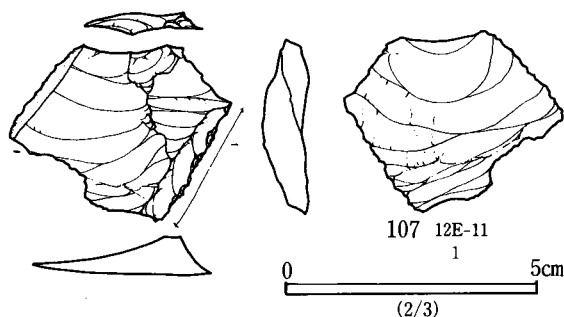
第131図 第1ブロック母岩別遺物出土状況(8)
 (黒 珪質粘板岩2・赤 珪質粘板岩3・青 安山岩18・緑 安山岩19)



第132図 第1ブロック石器実測図(凝灰岩14)

第44表 第1ブロック遺物属性表(凝灰岩14)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-44	剥片 U	26×22×5	2.88	106 a	ℓ	—	—	Ⅳ	F	—	—	½
2	12E-25-59	剥片	35×19×12	5.48		1 (0)	22×7.5	126°	Ⅱ+Ⅲ	H	—	—	
3	12E-25-67	剥片	17×23×9	3.05		ℓ	—	—	Ⅲ	H	—	—	
4	12E-34-3	剥片	10×12×7	0.57		—	—	—	Ⅱ	O	—	B	
5	T-12フク土3	削片	17×15×6	0.95		2 (0)	10×5.5	104.5°	Ⅱ	F	—	—	
6	12E-24-104	剥片	27×14×7	1.68	106 b	ℓ	—	—	Ⅱ	O	—	—	½



第133図 第1ブロック石器実測図(珪質粘板岩2)

珪質粘板岩 2 灰黒色の緻密な石材。使用痕のある剥片が1点あるのみであり、どのような石核に由来するものか分からない。使用痕は細かい剝離痕であるが、いずれも末端がstepになっている。

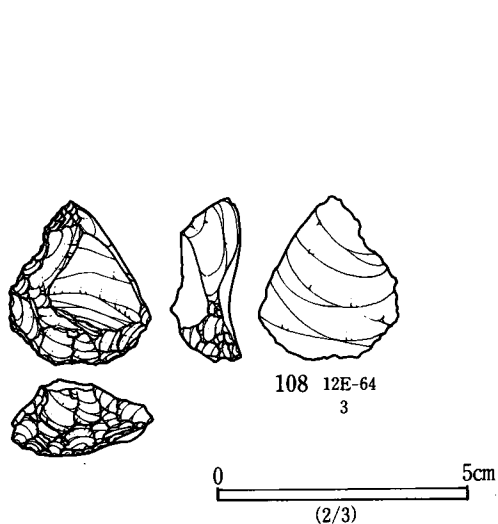
第45表 第1ブロック遺物属性表(珪質粘板岩2)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-11-1	剥片 U	35×42×9	8.67	107	3 (3)	20 × 3.5	134.5°	Ⅱ	H	+	—	

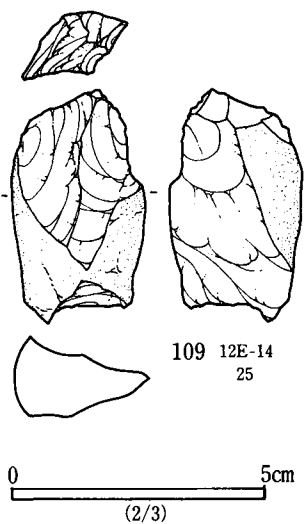
珪質粘板岩 3 珪質粘板岩 2 と極めて近い石質であるが、一層緻密で微光沢を帯びている。粘板岩がホルンフェルス化したものかもしれない。典型的な端削器が1点あるにすぎない。

第46表 第1ブロック遺物属性表(珪質粘板岩3)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-64-3	削器	32×26×13	9.36	108								



第134図 第1ブロック石器実測図(珪質粘板岩3)

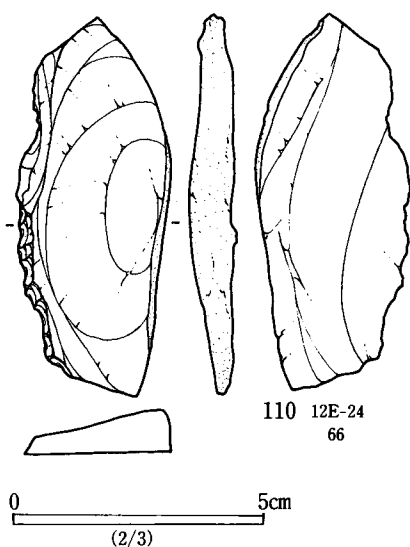


第135図 第1ブロック石器実測図(泥岩1)

泥岩1 暗灰色をした細粒の岩石。剥片2点しかなく、内容は不明である。109の剥片は部厚い角柱状をしているので、細石核の素材である可能性もある。2点は近接して出土している。

第47表 第1ブロック遺物属性表 (泥岩1)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-13	剥片	23×15×10	3.01		1(0)	13 × 7	99.5°	II	—	—	H	
2	12E-14-25	剥片 R	42×25×17	20.29	109	4(2)	11 × 14	130°	⊕	—	—	—	



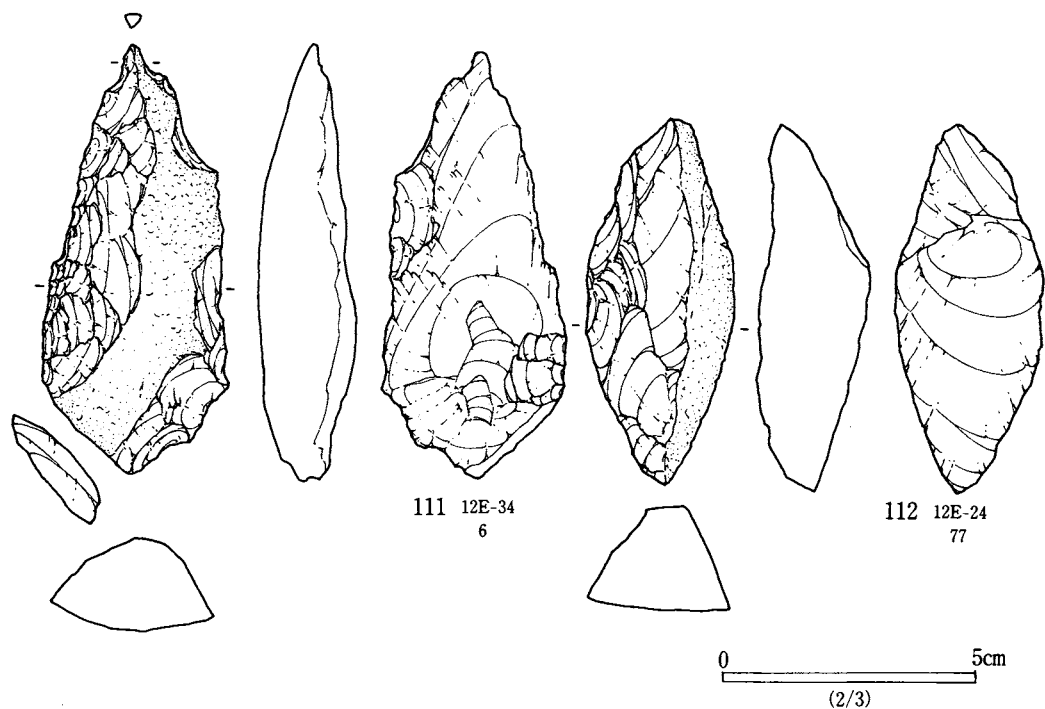
第136図 第1ブロック石器実測図(安山岩18)

安山岩18 褐色に風化し気孔の多い石材。原礫面には細かい罅が網目状に発達している。側削器が1例あるにすぎない。素材は打面部に細長く礫皮を残した偏平、板状の大型横打剥片である。2次加工は剥片尾部に相当する底縁に連続的に加えられているが、それは弱い鋸歯状を呈する腹面剥離である。刃角は60°以下の部分が多いが、やや安定感に欠けている。

第48表 第1ブロック遺物属性表 (安山岩18)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-24-66	削器	32×75×10	21.59	110								

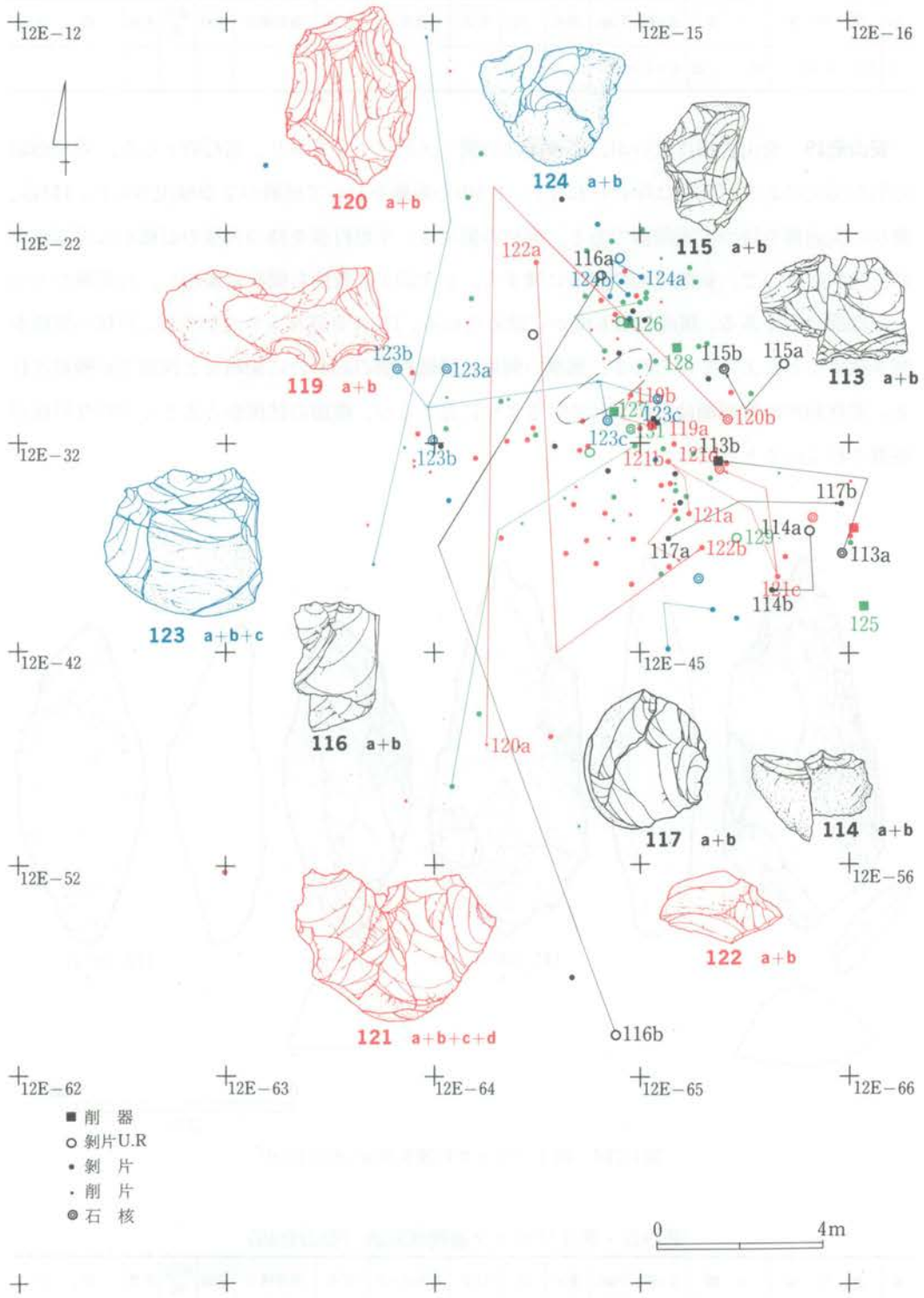
安山岩19 安山岩18に近いが、原礫面は所謂ツメ石状をしており、別母岩とした。同一母岩の別な部位である可能性は斥けられない。4.5mの距離をおいて削器が2点検出された。111は、錐状の尖頭部を持つ尖頭削器である。素材の剥片は、平坦打面を持つ大型の石核から得られた逆三角状のもので、剥離の初期段階に属する。2次加工は背面右側縁に集中し、左側縁からのものは部分的である。腹面剥離も僅かに認められる。112は舟底状をした側削器。石核の側稜を削ぎ落すことによって得られる、部厚い剥片の側縁片側の約半分に簡略な2次加工が観察される。素材剥片の打面部は折断されているように見えるが、腹面の状況から大きく平坦な打面が残置されていると判断した。



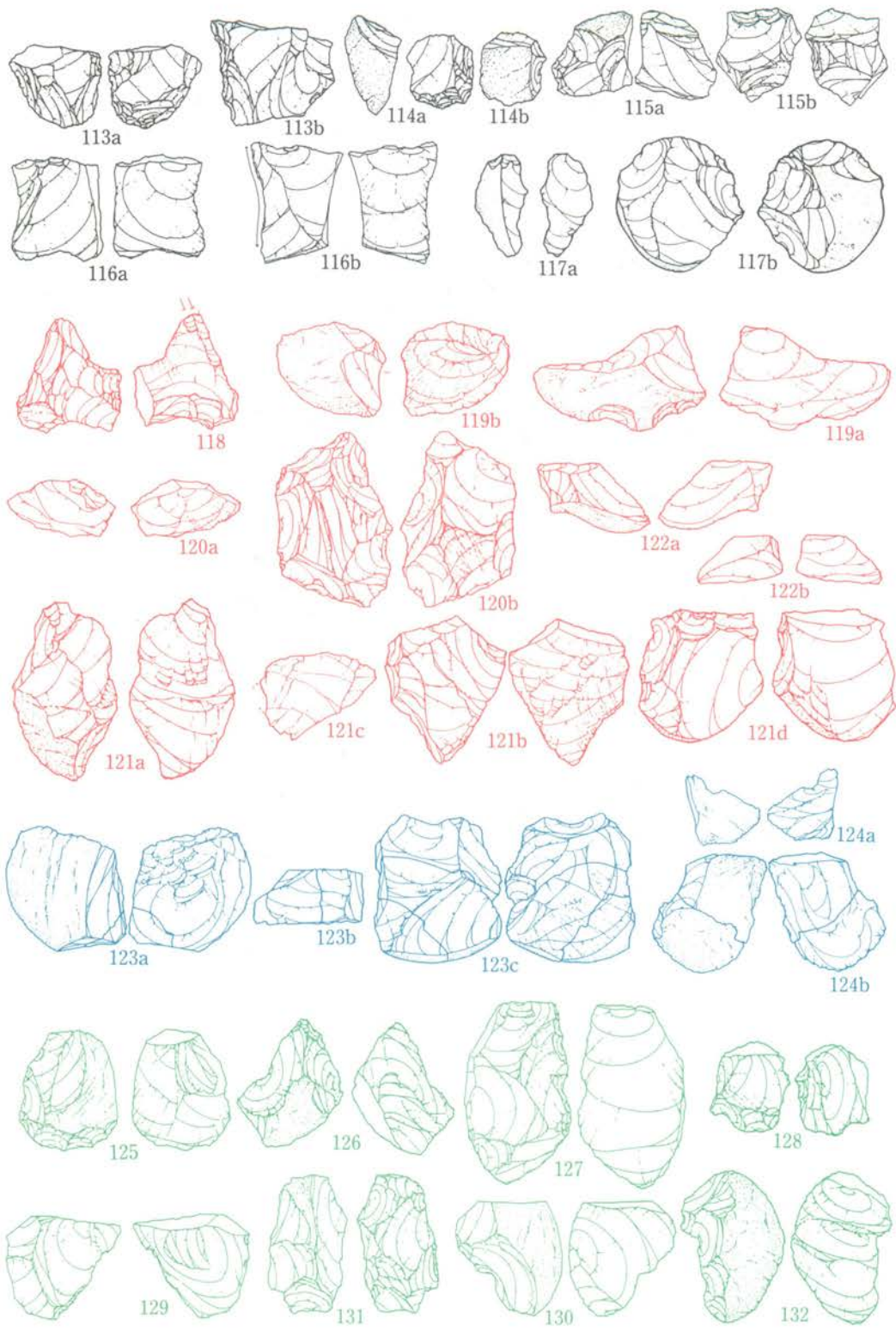
第137図 第1ブロック石器実測図(安山岩19)

第49表 第1ブロック遺物属性表 (安山岩19)

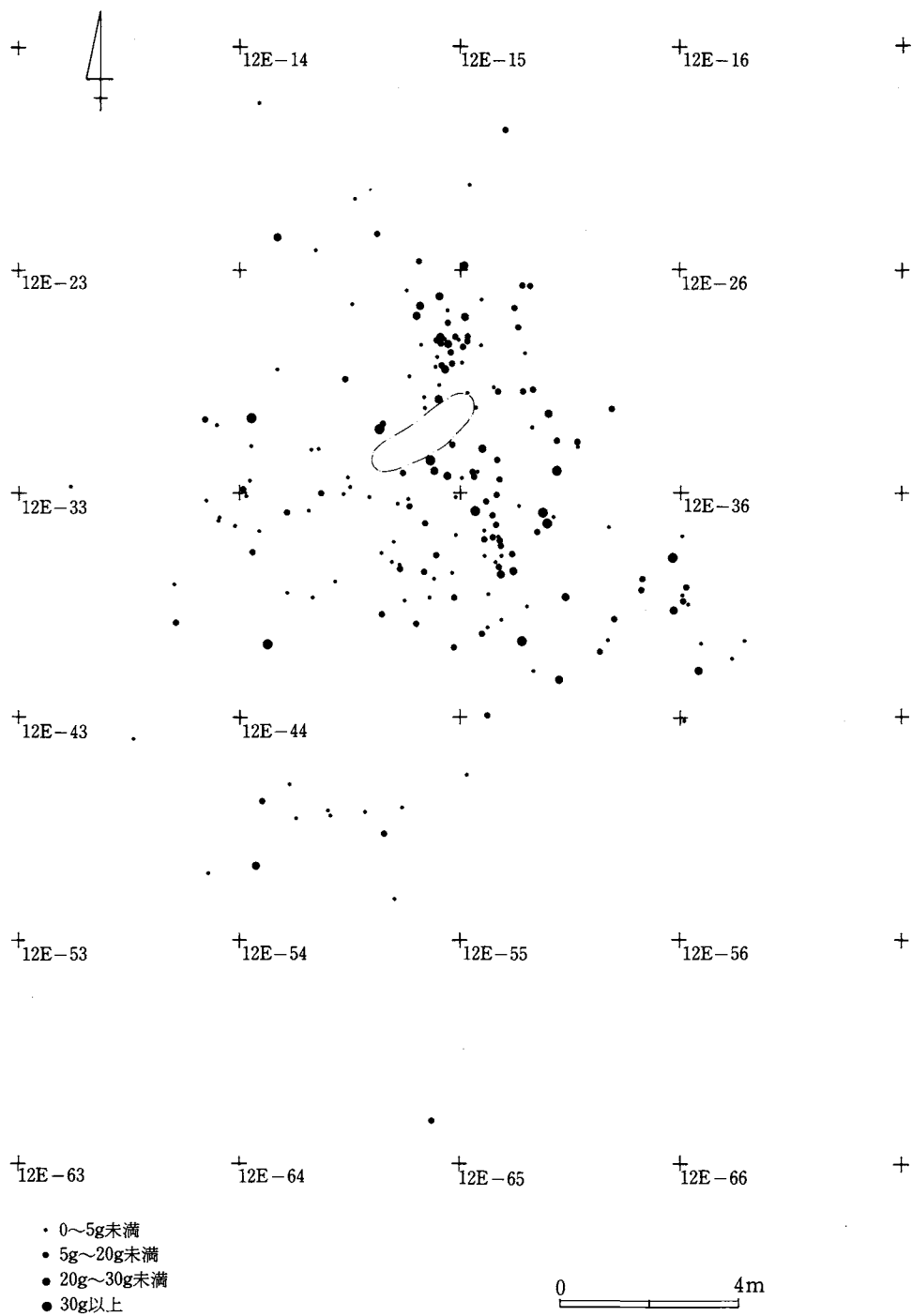
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-24-77	削器	73×30×22	38.39	112								
2	12E-34-6	削器	84×35×18	53.85	111								



第139図 第1ブロック母岩別遺物出土状況(9-A)
 (黒 安山岩20・赤 安山岩21・青 安山岩22・緑 安山岩23)



第140図 第1ブロック母岩別遺物出土状況(9-B)
 (黒 安山岩20・赤 安山岩21・青 安山岩22・緑 安山岩23)



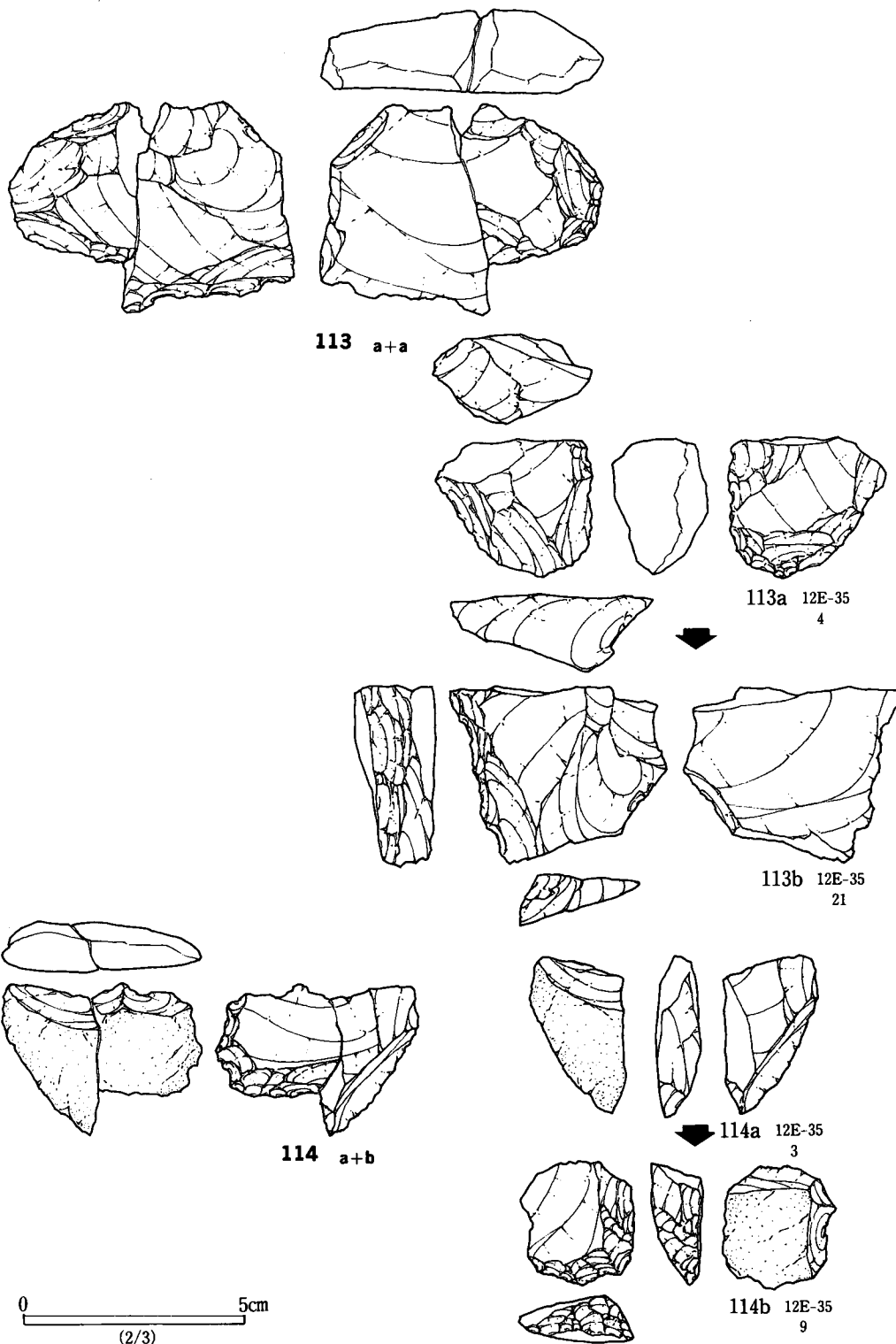
第138図 第1ブロック安山岩製石器の重量別分布図

安山岩20 表面は黄色味のある灰褐色を呈し、原礫面は比較的平滑である。29点の資料を識別した。内容は、削器2点、UF・RF6点、剥片18点、石核3点となっている。石核(113a、115b、117b)は、1類と2類で、3類を含んでいない。113bは、大型の横長剥片を縦割にし、その一方の側縁部に粗い刃付をした側削器、114bも、これと全く同様の作り方をした端削器である。115aはRF。116では、打点を集中させて、比較的縦長をした矩形の剥片が連続的に生産されている。この資料に基づいて、別種の剥離工程の設定もできなくはないが、打面部、側縁部に残された剥離面の性格が十分に明らかにされておらず、ここでは1類の変異としておきたい。12E-24、25に集中分布するが、115の接合距離は18mを超えている。

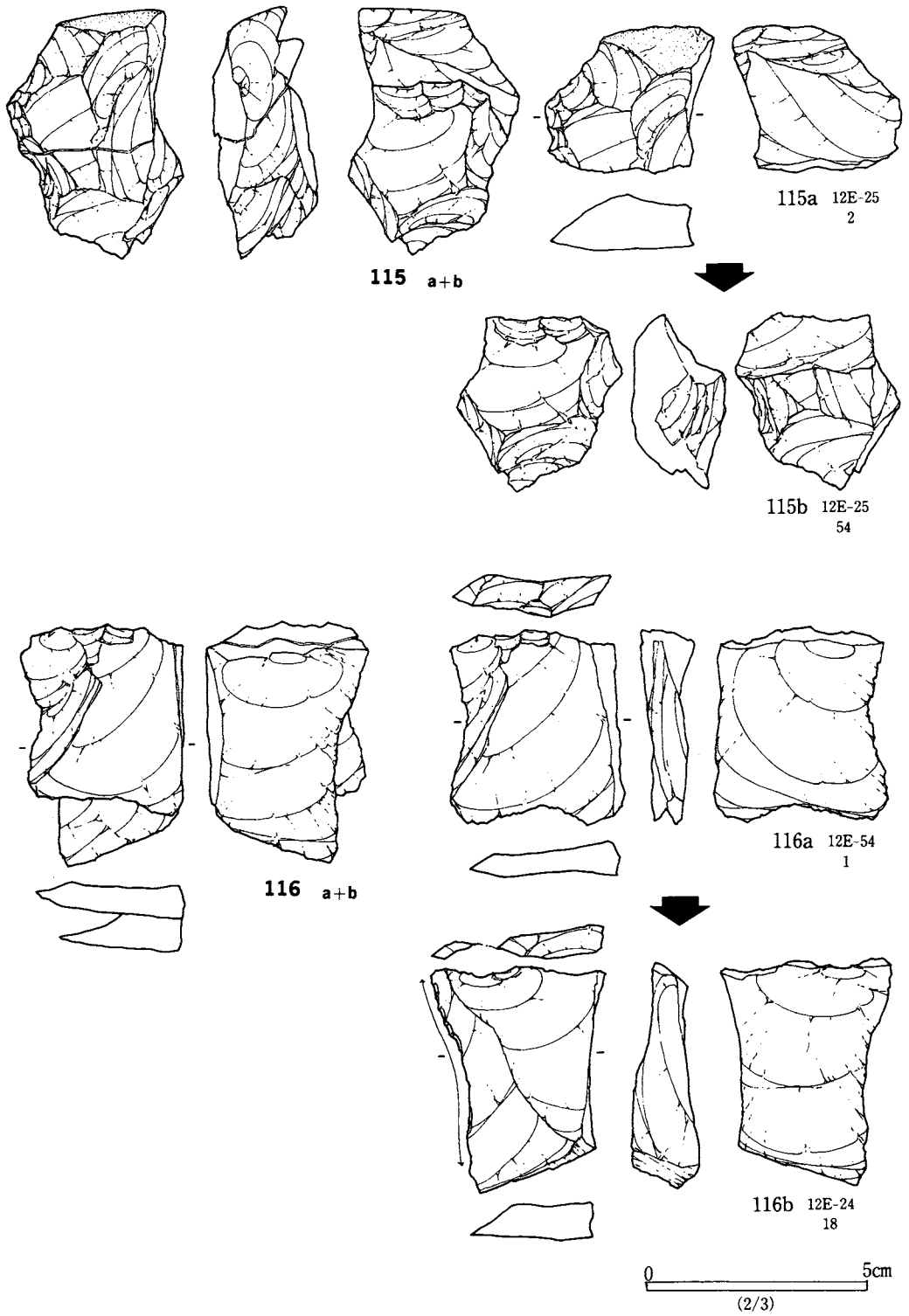
第50表 第1ブロック遺物属性表(安山岩20)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-9	剥片	41×36×4	5.15		P	—	—	II+IV	H	—	—	
2	12E-24-10	剥片	37×44×15	17.72		—	—	—	II+III	O	—	B	
3	12E-24-18	剥片 U	50×39×15	23.35	116b	2(0)	37.5×6	121°	II+IV	O	+	—	½
4	12E-24-27	剥片	56×25×22	24.25		1(1)	12×10	128°	II+IV	F	—	L	½
5	12E-24-51	剥片 U	40×25×10	8.02		2(0)	23.5×7.5	ⓐ	O	—	—		
6	12E-25-2	剥片 R	40×31×15	19.00	115a	—	—	—	ⓓ+ⓔ	H	—	B	½
7	12E-25-13	剥片	16×38×13	4.72		ℓ	—	—	ⓕ	O	—	—	½
8	12E-25-34	剥片	35×30×5	3.08		1(0)	8.5×1	126°	ⓑ	F	—	—	
9	12E-25-54	石核	35×42×21	26.43	115b								½
10	12E-25-56	剥片	22×35×9	3.38		1(0)	18×5.5	120°	II	F	—	—	
11	12E-25-95	剥片	27×44×10	11.03		—	—	—	II+IV	—	—	M	
12	12E-25-98	剥片	49×17×11	7.12		1(0)	8×7	128°	IV	F	—	R	½
13	12E-34-26	剥片	40×17×8	4.06		ℓ	—	—	ⓑ	F	—	—	
14	12E-34-31	剥片	45×34×13	16.83		1(1)	19×13	115°	III+IV	O	—	—	
15	12E-34-41	剥片	18×41×10	2.68		1(0)	15×7	115.5°	ⓑ	—	—	H	
16	12E-35-1	石核	39×36×27	44.11	117b								
17	12E-35-3	剥片 R	36×22×11	7.18	114a	—	—	—	ⓑ	—	+	M	½
18	12E-35-4	石核	37×30×17	20.64	113								½
19	12E-35-9	削器	23×29×10	7.80	114b								½
20	12E-35-21	削器	46×40×18	31.34	113b								½
21	12E-35-33	剥片	23×26×10	3.65		3(2)	30×11	109°	II	F	—	—	
22	12E-35-49	剥片	43×29×14	16.40		1(0)	9.5×3	136°	II+IV	F	—	—	
23	12E-35-40	剥片	31×17×8	2.76	117a	1(0)	5×2	116.5°	ⓑ	F	—	—	
24	12E-54-1	剥片 U	44×39×12	16.63	116a	4(1)	36×7.5	113.5°	II+IV	F	+	—	½
25	12E-24-93	剥片	34×27×15	13.16		1(0)	22×8	121°	ⓑ+ⓓ+ⓔ	F	—	—	
26	12E-24-106	剥片	16×26×8	2.38		—	—	—	II	F	—	B	
27	12E-25-120	剥片	31×28×10	4.81		3(2)	26×11	131°	II	F	—	—	
28	12E-25-92	剥片 U	33×32×9	4.72		C	15×4	136°	IV	F	+	—	½
29	12E-14-15表採	剥片	33×40×6	7.24									

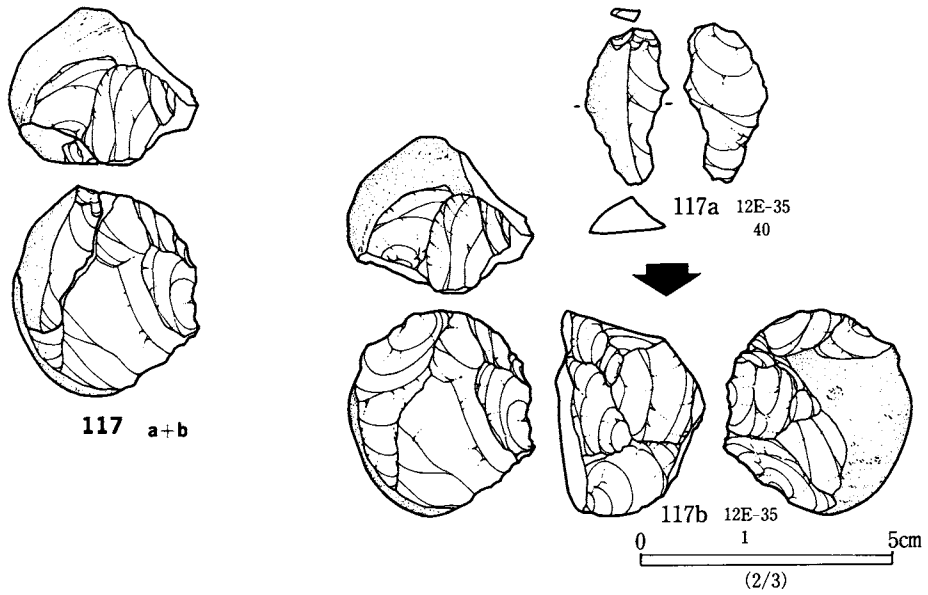
安山岩21 黒味の強い暗褐色を呈し、原礫面に細かい罫の入るもの。やや肌目が粗く見える。



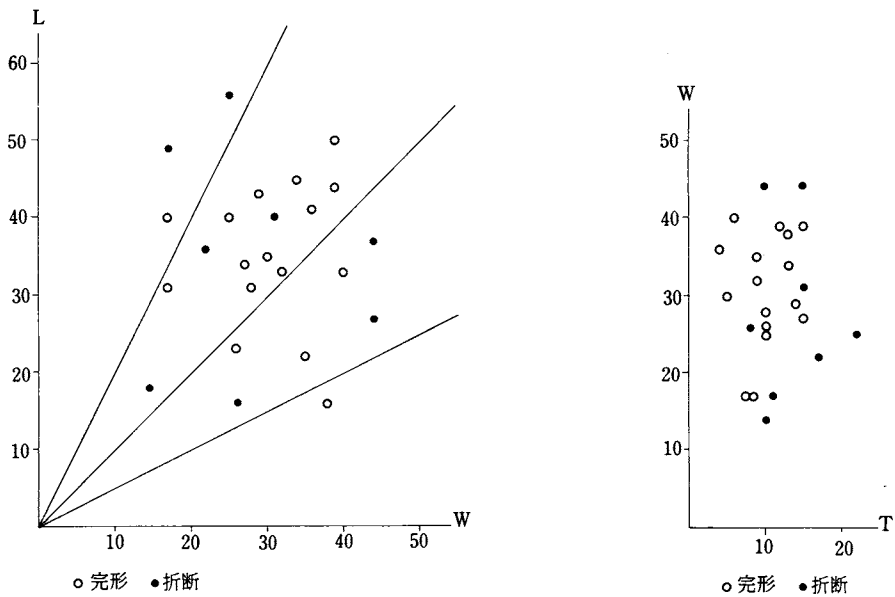
第141図 第1ブロック石器実測図(安山岩20-1)



第142図 第1ブロック石器実測図(安山岩20-2)

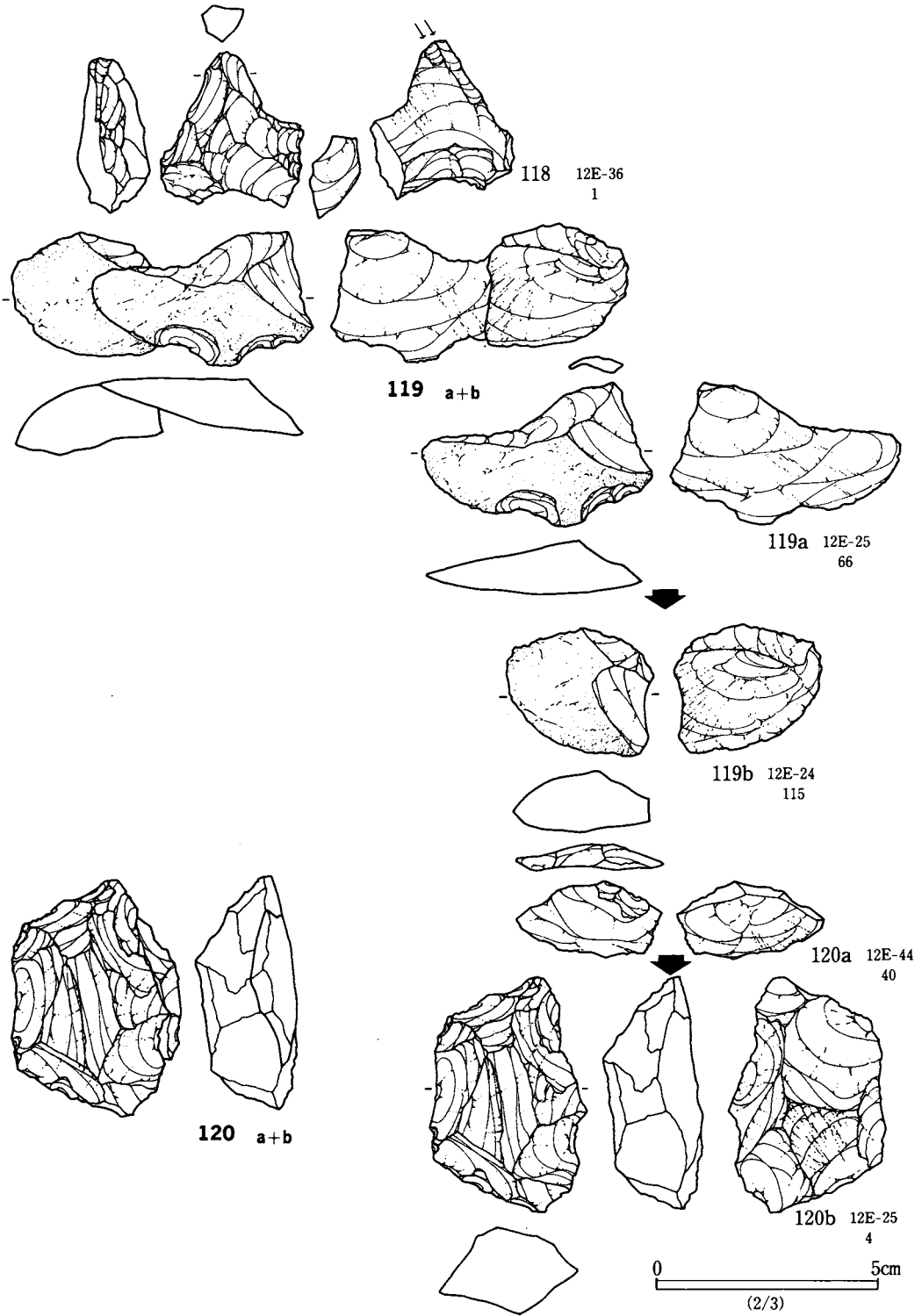


第143図 第1ブロック石器実測図(安山岩20-3)

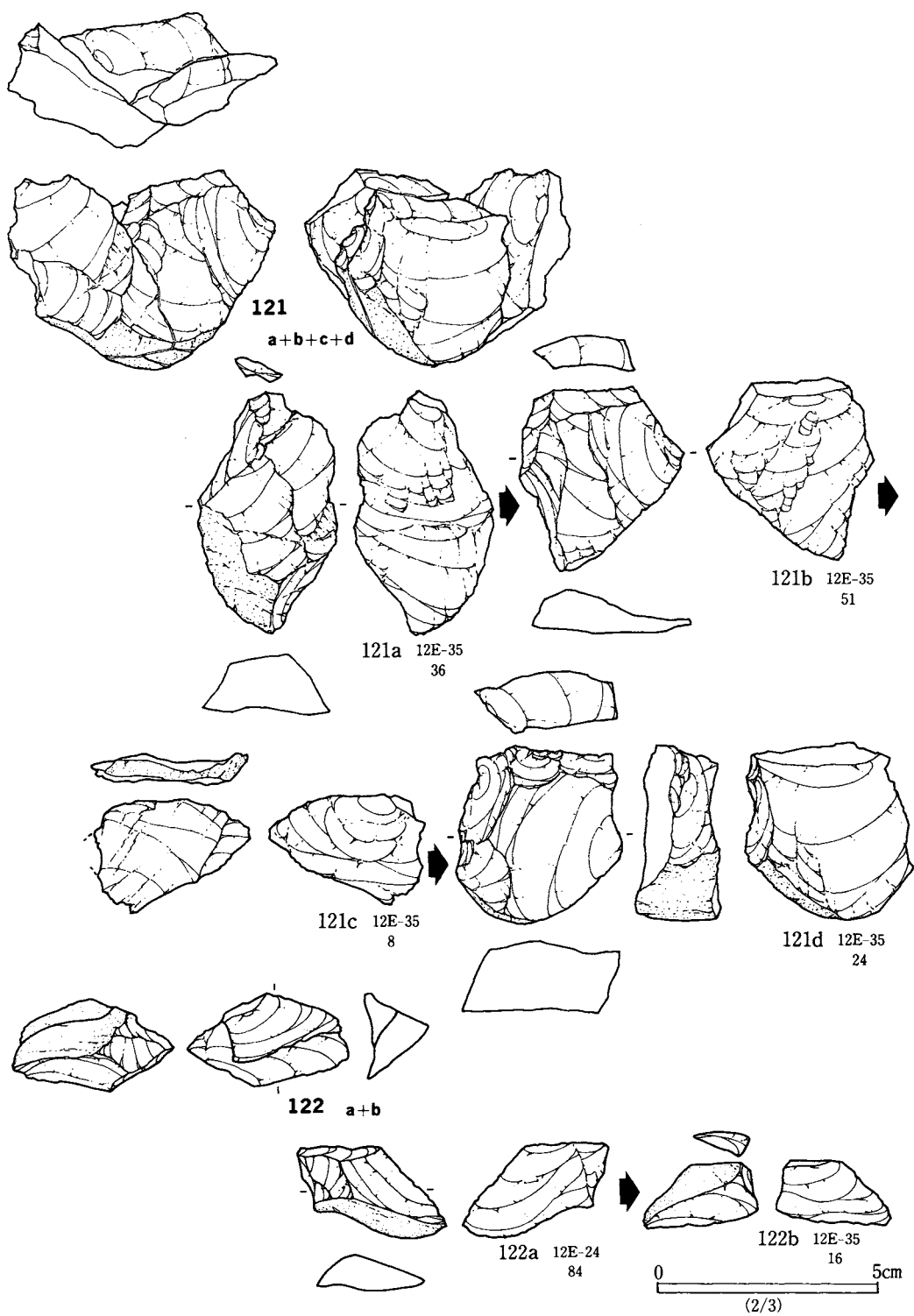


第144図 安山岩20の長・幅(左),幅・厚(右)分布(単位mm)

72点という多量の資料が得られている。内容は、削器2点、剥片40点、削器27点、石核3点で、2次加工のあるものは僅少である。剥片は全般に小型で、前記の安山岩21と比較すると、その差は明らかである。この傾向と、2次加工のある石器の僅少性との関連が問題になるが、構成2の削器に大型のものが多くを考えると、無関係とは思われない。118は、尖端に2条の樋



第145図 第1ブロック石器実測図(安山岩21-1)



第146図 第1ブロック石器実測図(安山岩21-2)

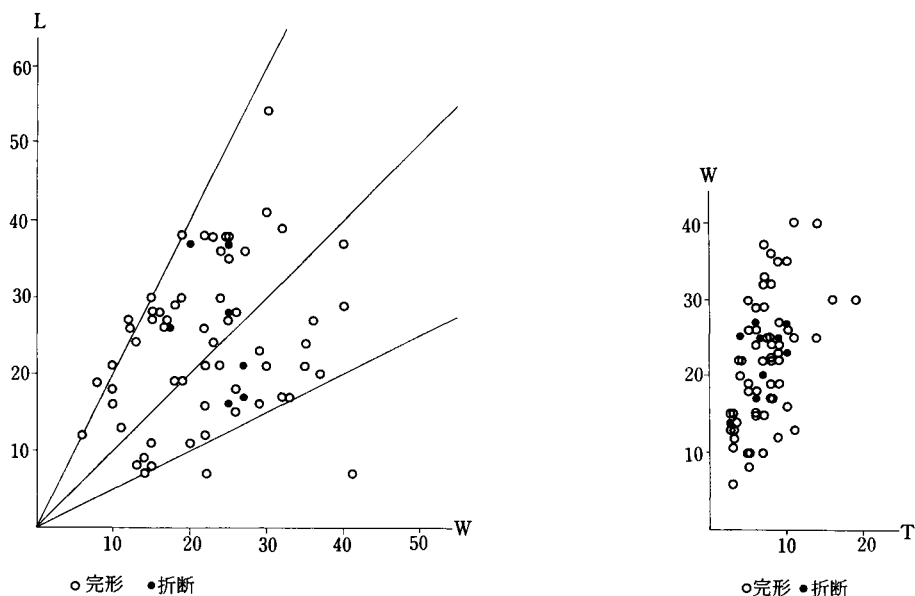
状剝離痕のある特殊な石器で、尖頭削器とした。119は石核3類から得られる剝片2点の接合状況。剝片のうち1点は側削器に加工されているが、剝離は部分的で安定性がない。120は石核2類と剝片の接合状況。121も接合状況を示しているが、石核3類(121d)に剝片3点が接合している。122は帰属する石核の様子がよく分らないが、多分1類であろう。12E-24、34区を中心に広い範囲に亘る分布が認められる。

第51表 第1ブロック遺物属性表(安山岩21)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	24E-14-31	削片	18×10×5	0.80									
2	12E-23-14	剝片	21×27×10	4.85		C	27 × 9	73.5°	II	F	—	L	
3	12E-23-16	剝片	23×29×7	3.46		1(0)	14 × 4.5	92°	II	H	—	—	
4	12E-24-5	剝片	30×19×5	2.52		1(0)	12 × 2.5	120°	㊶	H	—	—	
5	12E-24-43	剝片	38×22×9	7.17		1(0)	12 × 4	129°	㊶	F	—	—	
6	12E-24-59	剝片	39×32×8	9.64		1(0)	17 × 6	142°	II+III	F	—	—	
7	12E-24-65	剝片	28×25×7	3.61		C	22 × 4.5	109°	II	F	—	R	
8	12E-24-73	削片	16×22×7	1.65									
9	12E-24-74	削片	8 × 13 × 3	0.15									
10	12E-24-75	削片	19×18×5	1.55									
11	12E-24-78	削片	16×29×6	1.55									
12	12E-24-79	剝片	26×17×6	2.03		1(0)	9 × 1	109°	㊶	H	—	L	
13	12E-24-81	剝片	27×36×8	4.49		1(1)	10 × 3	115°	㊶+㊷	F	—	—	
14	12E-24-84	剝片	15×26×10	2.43	122 a	1(0)	12 × 5	89.5°	㊶+㊸	F	—	—	½
15	12E-24-85	剝片	24×35×9	4.75		1(0)	15 × 4	146°	II+III	F	—	—	
16	12E-24-97	剝片	26×22×8	3.61		1(0)	17.5×3.5	111°	II	H	—	—	
17	12E-24-115	剝片	35×25×14	13.29	119 b	1(1)	27 × 12	118°	㊶	F	—	—	½
18	12E-24-116	削片	16×25×4	1.47									
19	12E-25-4	石核	36×52×8	33.54	120 b							½	
20	12E-25-40	削片	27×15×3	0.73									
21	12E-25-66	削器	50×29×13	14.69	119 a							½	
22	12E-25-76	剝片	21×22×4	1.41		ℓ	—	—	II	H	—	—	
23	12E-25-85	剝片	38×23×9	5.53		ℓ	—	—	㊶	F	—	—	
24	12E-33-4	削片	21×10×7	1.00									
25	12E-33-9	削片	16×10×5	0.57									
26	12E-33-14	削片	24×13×3	0.82									
27	12E-33-16	削片	18×27×6	2.47		—	—	—	II	—	—	M	
28	12E-34-10	剝片	30×15×6	1.48		1(0)	7 × 4.5	121.5°	㊶	F	—	—	
29	12E-34-14	剝片	29×40×14	10.19		F+100	32 × 11	71°	II+IV	H	—	—	
30	12E-34-15	剝片	36×27×9	9.20		1(0)	11.5×2	129°	㊶	H	—	—	
31	12E-34-16	剝片	37×20×7	6.69		1(0)	14 × 4	134°	㊶	F	—	R	
32	12E-34-17	剝片	30×24×9	5.35		1(0)	15 × 3	130°	㊶	H	—	—	
33	12E-34-18	削片	12×22×8	2.01									
34	12E-34-20	剝片	27×25×11	5.79		1(0)	10 × 10	134°	㊶	H	—	—	
35	12E-34-27	剝片	28×26×5	3.94		1(0)	10 × 3.5	90°	II	F	—	—	
36	12E-34-29	剝片	27×17×8	3.00		2(1)	9 × 6	100°	㊶	F	—	—	

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
37	12E-34-49	剥片	37×25×9	6.05		1(0)	17×8.5	105°	II	—	—	—H	
38	12E-34-60	剥片	21×30×5	2.94		ℓ	—	—	II	H	—	—	
39	12E-34-62	剥片	24×23×10	3.74		1(0)	10×6	119°	II	—	—	H	
40	12E-34-66	削片	7×14×3	0.20									
41	12E-34-72	削片	7×22×4	0.34									
42	12E-35-2	石核	29×22×13	9.95									
43	12E-35-8	剥片	36×24×8	4.26	121 c	C	32×3	108.5°	III	H	—	—	¼
44	12E-35-16	剥片	38×19×9	4.99	122 b	ℓ	—	—	III+IV	F	—	—	½
45	12E-35-20	剥片	28×15×7	1.59		1(0)	12.5×3	108.5°	II	F	—	—	
46	12E-35-24	石核	42×35×17	32.35	121 d								¼
47	12E-35-31	削片	8×15×3	0.22									
48	12E-35-32	削片	28×16×10	1.67									
49	12E-35-36	剥片	54×30×16	20.79	121 a	1(0)	11.5×4	117°	III+IV	F	—	—	¼
50	12E-35-43	剥片	21×24×6	2.67		1(0)	13×6	134°	II	H	—	—	
51	12E-35-47	剥片	21×35×10	5.11		2(0)	34×9	125°	III+IV	H	—	—	
52	12E-35-51	剥片	37×40×11	13.35	121 b	1(0)	20×6	117.5°	II	H	—	—	¼
53	12E-35-54	剥片	38×25×7	6.37		1(0)	14.5×9	119.5°	II	F	—	—	
54	12E-35-57	削片	19×19×8	3.36									½
55	12E-35-64	剥片	41×30×19	18.17		1(0)	5×3	125.5°	II	F	—	—	½
56	12E-35-70	剥片	38×25×7	6.37		ℓ	—	—	I	H	—	—	
57	12E-35-72	剥片	51×13×11	5.30		p	—	—	II	H	—	—	
58	12E-36-1	削器	35×30×14	14.17	118								
59	12E-36-2	剥片	17×33×7	2.57		ℓ	—	—	II	H	—	—	
60	12E-36-4	削片	19×8×5	0.66									
61	12E-36-12	削片	13×11×3	0.45									
62	12E-43-4	削片	18×26×6	2.26									
63	12E-44-36	剥片	26×17×8	2.15									
64	12E-44-40	削片	17×32×7	2.62	120 a								
65	T-12フク土3	削片	11×15×6	0.50									
66	12E-24-91	削片	26×12×9	3.05									
67	12E-24-110	削片	9×14×3	0.16									
68	12E-25-120 a	剥片	29×18×6	2.88		1(0)	10×1	117°	II	F	—	—	
69	12E-25-120 b	削片	27×12×3	0.55									
70	12E-25-120 c	削片	11×20×4	0.49									
71	12E-33~35o	剥片	20×37×7	3.01		1(0)	18×2	115°	II+IV	H	—	—	
72	12E-43~45表探	削片	12×6×3	0.20									

安山岩22 色調、原礫面の外観は安山岩21とたいへん良く似ているが、内部にも細かい網状の罅が認められる。剥片類が14点、破碎状態の石核断片が1個体分7点ある。石核(123)は破片を接合した結果1類であることが判明した。破碎面は不規則な凹凸が著しく、受熱に起因する破碎礫の割裂状況と酷似し、また、節理面が茶褐色に変質しているところから、被熱に起因する可能性が高い。124の破損も同様であるが、全体的に見ると、4点の剥片を除く17点が被熱

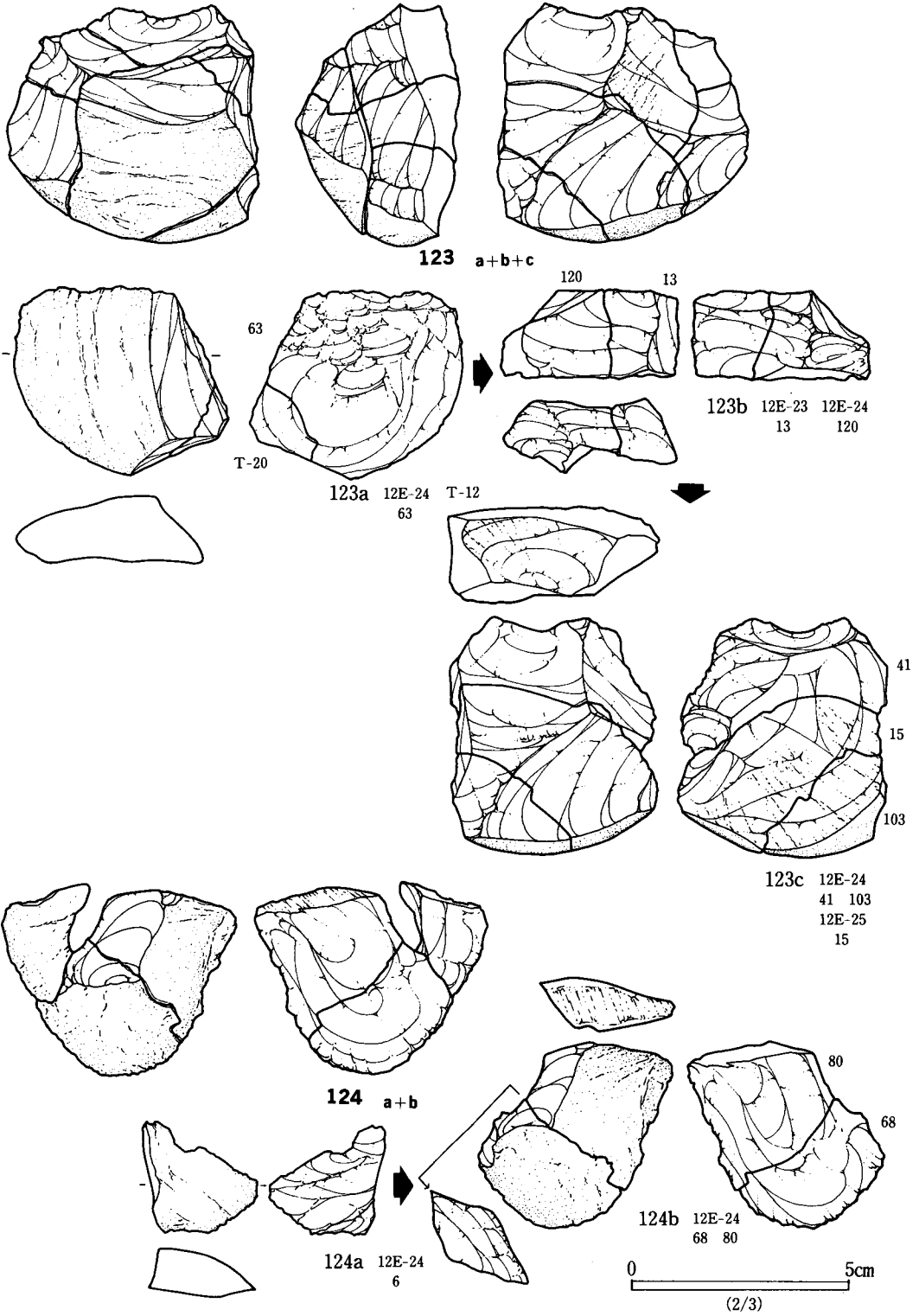


第147図 安山岩21の長・幅(左),幅・厚(右)分布(単位mm)

資料と見られる。被熱資料は、12E-24区を中心に4箇所からまとまって検出されている。興味深いことに、これらのうち、123cの3点が破碎礫の集中部と重複分布している。特異な廃棄状況を呈する母岩と言えよう。

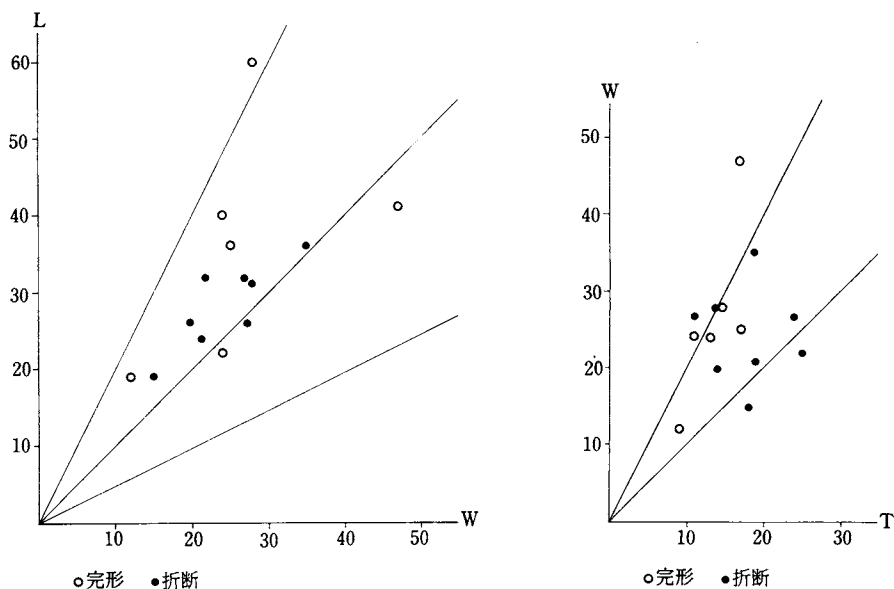
第52表 第1ブロック遺物属性表 (安山岩22)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-4	剥片	26×20×14	6.50		—	—	—	—	—	—	破片	1/7
2	12E-23-13	石核	24×17×13	6.15	123 b							破片	
3	12E-24-4	剥片	32×22×25	20.89		—	—	—	—	—	—	破片	
4	12E-24-6	剥片	26×27×11	6.46	124 a	—	—	—	—	—	—	破片	1/3
5	12E-24-12	剥片	40×24×11	11.42		1(0)	19.5×8	106°	I	F	—	—	
6	12E-24-41	石核	48×33×17	23.17	123 c							破片	1/7
7	12E-24-63	石核	50×40×18	40.10	123 a							破片	1/7
8	12E-24-68	剥片	36×25×17	12.45	124 b	—	—	—	I	F	—	破片	1/3
9	12E-24-80	剥片	31×28×14	15.10	124 b	F	不明	118.5°	I	—	—	破片	1/3
10	12E-24-103	石核	36×19×18	14.97	123 c							破片	1/7
11	12E-24-120	石核	27×22×16	8.84	123 b							破片	1/7
12	12E-25-15	石核	52×34×22	26.08	123 c							破片	1/7
13	12E-25-42	剥片 U	60×28×14	22.66		1(0)	15×7.5	133.5°	ⓐ	F	+	—	
14	12E-33-5	削片	22×24×13	5.31								破片	
15	12E-34-52	剥片	32×27×24	18.45		—	—	—	—	—	—	破片	
16	12E-35-10	剥片	36×35×19	27.49		—	—	—	—	C	—	破片	
17	12E-35-11	剥片	19×15×18	4.60		—	—	—	—	—	—	破片	
18	12E-35-13	剥片	24×21×19	8.98		—	—	—	—	—	—	破片	



第148図 第1ブロック石器実測図(安山岩22)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
19	12E-35-14	石核	54×33×28	63.90									
20	12E-35-52	剥片	41×47×17	39.48		C	48×18	81°	II+III+IV	O	—	—	
21	T-12フク土	削片	19×12×9	1.61	123 a							破片	1/2



第149図 安山岩22の長・幅(左),幅・厚(右)分布(単位mm)

安山岩23 明るい灰褐色をしている。原礫面には細かい罅が密集している。気孔が多く、全体的に風化はあまり進んでおらず、安山岩18、19と近似した印象を受けるが、色調と原礫面の差異を根拠に別母岩と仮定した。62点という多量の遺物から構成されている。これには削器4点、U F・R F 4点、剥片34点、削片18点、石核3点が含まれている。これは、ほぼ安山岩20と同一の構成と言えるが、両者の剥片類の、長幅分布、幅厚分布を比較すると、安山岩23の分布は20よりも広く、母岩の消費過程、あるいは剥片の生産過程の差異を反映している。特に削片類の有無と、幅40mmを超える大型の横長剥片の存否が注目されよう。

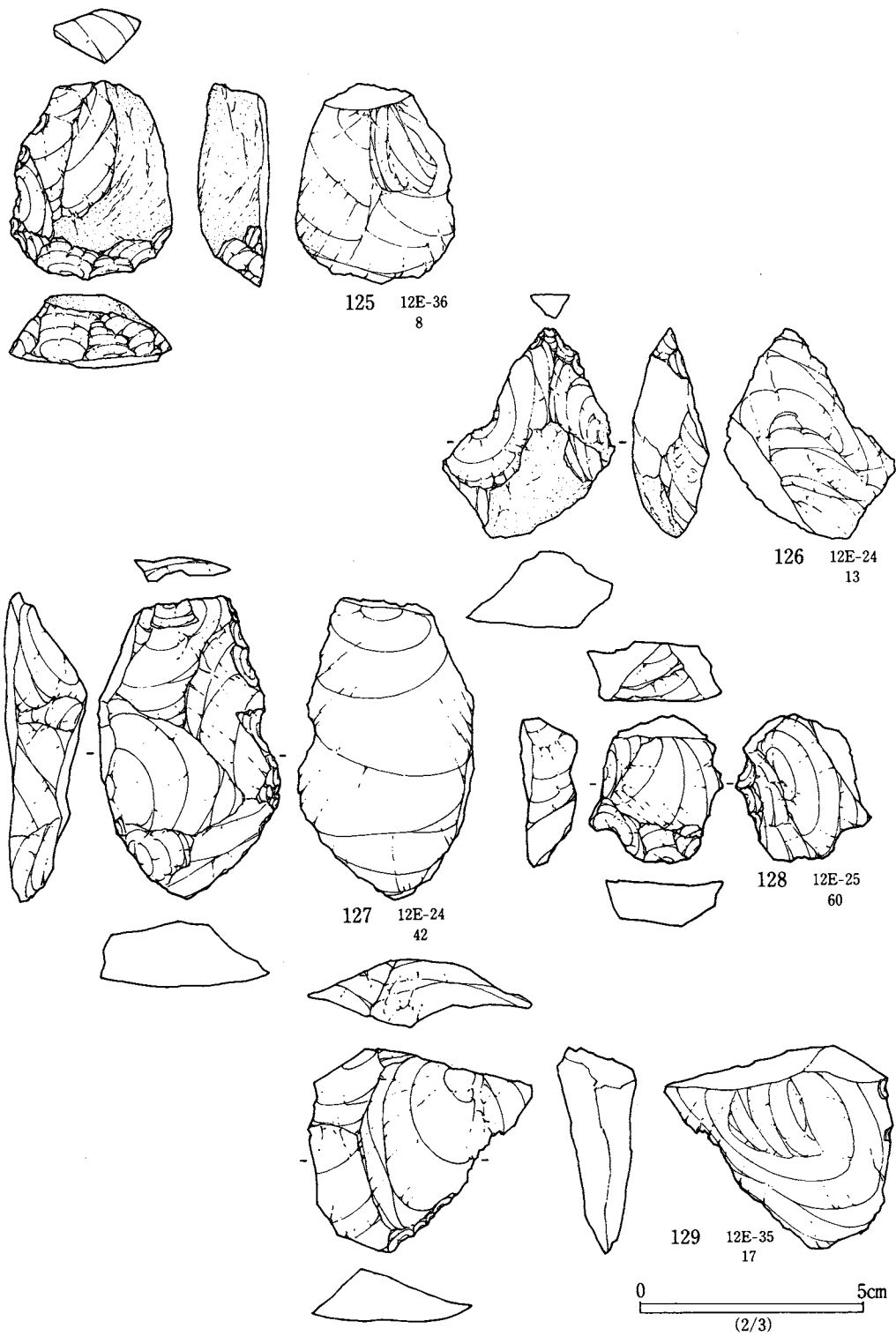
125は厚味のある縦長剥片末端に弧状の刃部を作出した端削器。126は石核c類の一端に尖頭部を設定したもの。尖頭削器の一種とした。127は石核a類から剥離された楕円形の大型剥片を素材とする側削器、129も同趣の石核から得られた剥片で、使用痕の顕著なもの。130は、126と近似する石核c類であるが、剥離作業面縁辺に使用痕があり、凹削器としての機能が推定される。131は石核2類、132は同3類の典型例である。

以上の諸例を見ると、石核c類が顕著であるが、この背景として、c類の素材となる剥片が、石核a類から得られる場合が一般的であり、両者間に量的不均衡が生じることが指摘されよう。

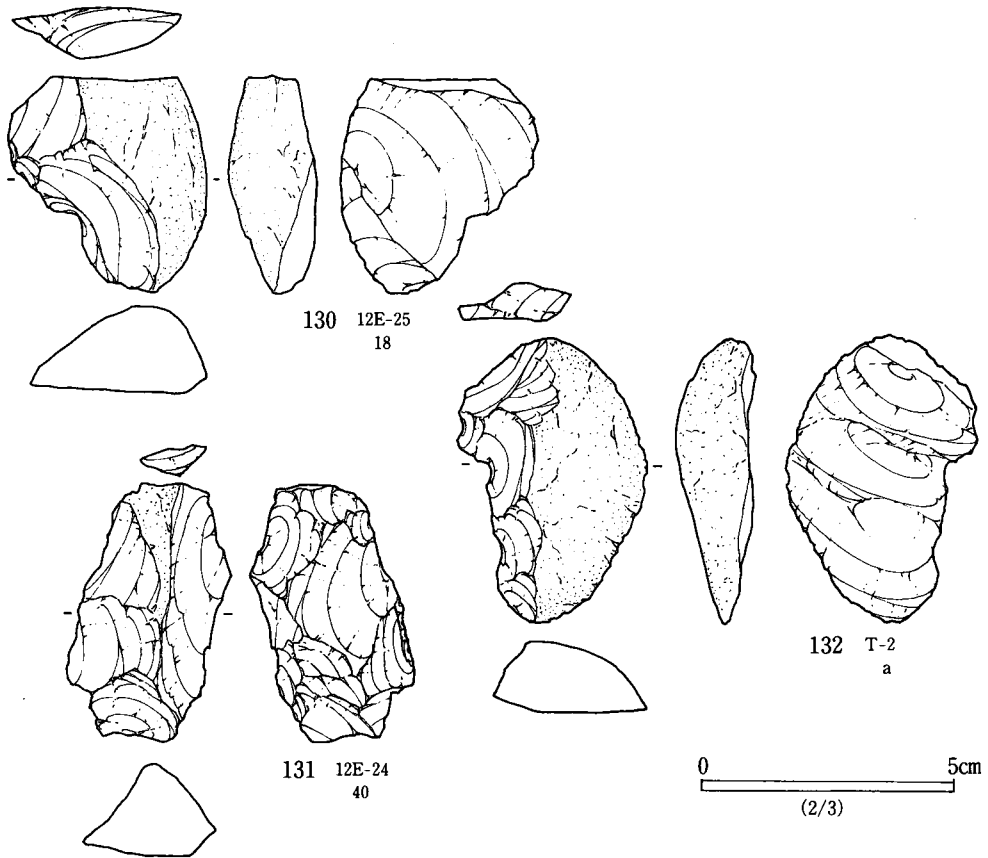
b類も多分同様であろう。また、削器の素材もa類に収斂し、剥片剥離技術体系の内部に階層性が認められるばかりか、この体系と器種間にも一定の対応関係の存在することが窺われる。すなわち、一見、不定形に見える構成2の内部にも、それを支える秩序とも言うべき、技術的相互関係が存在している。

第53表 第1ブロック遺物属性表 (安山岩23)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-22	剥片	42×47×10	21.04		1(0)	24 × 11.5	128°	⑩	H	—	—	
2	12E-15-5	剥片	36×63×13	25.14		C	53 × 13.5	95°	II+III	H	—	—	
3	12E-24-3	剥片	30×25×11	7.32		1(0)	14 × 5.5	139°	II+IV	H	—	—	
4	12E-24-8	剥片	23×26×13	5.63		2(0)	26 × 12	112°	不明+II	F	—	—	
5	12E-24-13	削器	31×45×16	21.67	126								
6	12E-24-22	剥片	20×22×5	2.86		1(0)	21 × 2.5	105.5°	II	H	—	R	
7	12E-24-40	石核	51×28×22	23.70	131								
8	12E-24-42	削器	67×39×17	44.12	127								
9	12E-24-53	剥片	23×20×8	3.38		1(0)	14 × 5.5	123°	⑩	F	—	—	
10	12E-24-57	剥片	34×17×8	3.26		1(0)	14 × 3	138.5°	⑩	F	—	—	
11	12E-24-61	剥片	21×20×7	2.21		—	—	—	⑩	H	—	B	
12	12E-24-62	削片	16×9×4	0.44									
13	12E-24-71	剥片U	49×25×10	9.45		1(0)	24 × 9	125.5°	⑩	F	+	—	
14	12E-24-87	剥片	23×31×9	4.02		—	—	—	IV	H	—	B	½
15	12E-24-95	削片	8×8×9	0.53									
16	12E-25-3	剥片	43×23×9	8.16		1(0)	16 × 4.5	131°	⑩+⑩⑩	F	—	—	
17	12E-25-20	剥片	40×17×7	4.25		1(0)	13 × 4	130°	⑩	H	—	—	
18	12E-25-29	剥片	26×32×9	7.31		2(0)	25 × 7.5	136°	II	H	—	—	
19	12E-25-36	剥片	21×31×11	5.14		1(0)	8 × 5.5	124°	IV	—	—	H	½
20	12E-25-37	剥片	32×33×11	10.26		C	28 × 10	83.5°	IV	—	—	H	
21	12E-25-39	剥片	27×28×13	8.79		1(0)	16 × 6	127°	⑩	—	—	H	
22	12E-25-45	削片	14×16×7	1.14									
23	12E-25-48	剥片	38×27×15	12.85		1(0)	20 × 15	120°	⑩	O	—	—	
24	12E-25-49	剥片	25×36×11	8.40		—	—	—	⑩	O	—	B	
25	12E-25-51	剥片	18×40×12	7.22		1(0)	20 × 5	119°	II	—	—	H	
26	12E-25-60	削器	34×28×13	12.38	128								
27	12E-33-3	削片	18×17×5	0.75									
28	12E-34-11	削片	21×9×3	0.40									
29	12E-34-19	削片	24×11×6	1.89									
30	12E-34-21	剥片	37×34×10	13.19		2(0)	20 × 7	120°	I	H	—	—	
31	12E-34-24	削片	22×12×3	0.60									
32	12E-34-43	削片	15×12×6	0.93									
33	12E-34-46	剥片U	28×54×11	11.90		C	34 × 9.5	107°	II	F	—	+	—
34	12E-34-69	剥片	35×17×10	3.88		2(0)	12 × 5	109°	⑩	F	—	—	½
35	12E-35-17	剥片U	46×47×15	24.23	129	2(0)	47 × 14	100.5°	II	F	+	—	
36	12E-35-19	削片	18×10×10	1.59									
37	12E-35-23	剥片	18×47×8	4.65		C	44 × 6	102°	II	H	—	—	
38	12E-35-25	剥片	41×32×8	10.30		2(1)	27 × 4	101.5°	II+IV	H	—	—	



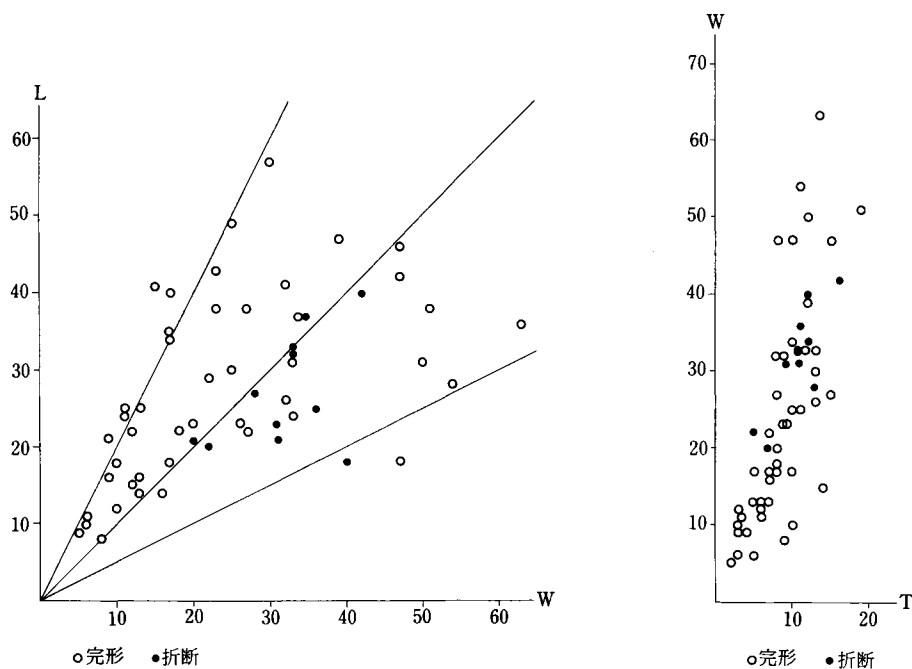
第150図 第1ブロック石器実測図(安山岩23-1)



第151図 第1ブロック石器実測図(安山岩23-2)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合	
39	12E-35-28	剥片	31×33×13	10.08		1(0)	26 × 5	137°	II	F	—	—		
40	12E-35-35	剥片	24×33×11	7.05		1(0)	21 × 9	91°	ⓐ	F	—	—		
41	12E-35-38	剥片	57×30×13	20.67		1(0)	19.5×7	141.5°	ⓐ	F	—	—		
42	12E-35-53	剥片	38×23×9	7.09		1(0)	20 × 8	77.5°	II	F	—	—		
43	12E-35-56	剥片	41×15×14	7.94		不明	不明	不明	不明	不明	—	—		
44	12E-35-59	削片	14×13×7	1.37										
45	12E-36-3	剥片	33×33×11	13.18	125	1(0)	15 × 5	124°	I	—	—	H		
46	12E-36-8	削器	47×36×15	28.59										
47	12E-44-2	剥片	29×22×7	4.87		1(0)	18 × 4.5	129°	ⓐ	H	—	—		
48	12E-44-9	剥片	47×39×12	23.76		ℓ	—	—	I	H	—	—	½	
49	12E-44-23	削片	25×11×6	1.89										
50	12E-44-39	削片	25×13×6	1.82										
51	12E-24-34	剥片	38×51×19	31.24		1(0)	23 × 10	135.5°	II+III+IV	F	—	—		
52	12E-24-35	剥片	31×50×12	15.02		1(0)	31 × 4.5	124°	II	H	—	—		
53	12E-24-119	削片	11×6×3	0.23										

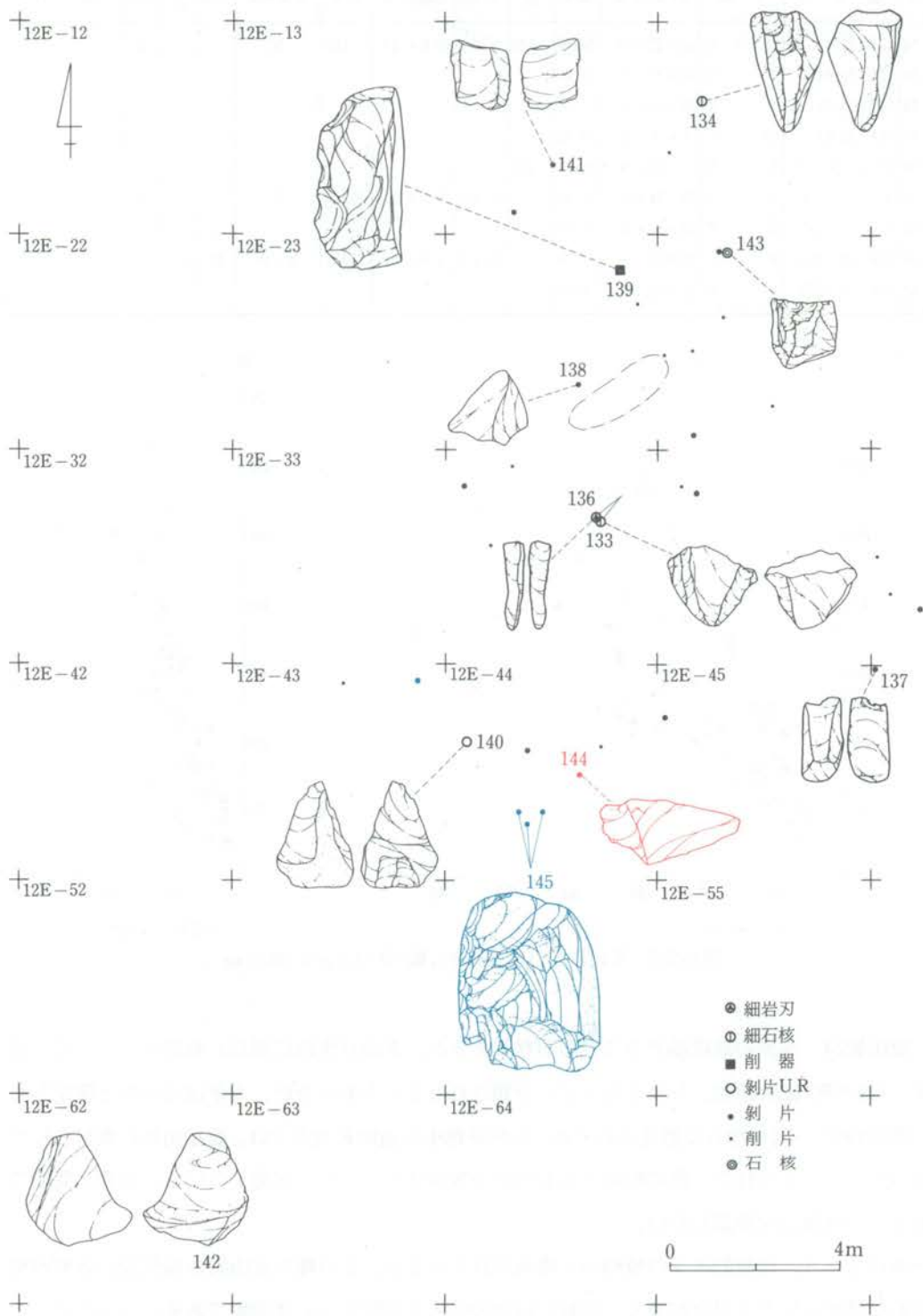
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
54	12E-25-18	剝片 U	40×42×16	26.86	130	1(0)	30.5×10	142°	Ⅴ	-	+	H	
55	12E-25-64	削片	10×6×5	0.30									
56	12E-25-73	削片	22×18×8	2.74									
57	12E-25-89	削片	9×5×2	0.05									
58	T-12フク土 a	石核	57×37×14	24.09	132								
59	T-12フク土 b	剝片	37×34×12	16.35		1(0)	5.5×1.5	136.5°	Ⅱ	-	+	H	
60	12E-14・15	削片	12×10×3	0.24									
61	12E-43~45 a	剝片	22×27×8	3.76		1(0)	5.5×2	113.5°	Ⅱ+Ⅳ	H	-	-	
62	12E-43~45 b	削片	16×13×5	0.67									



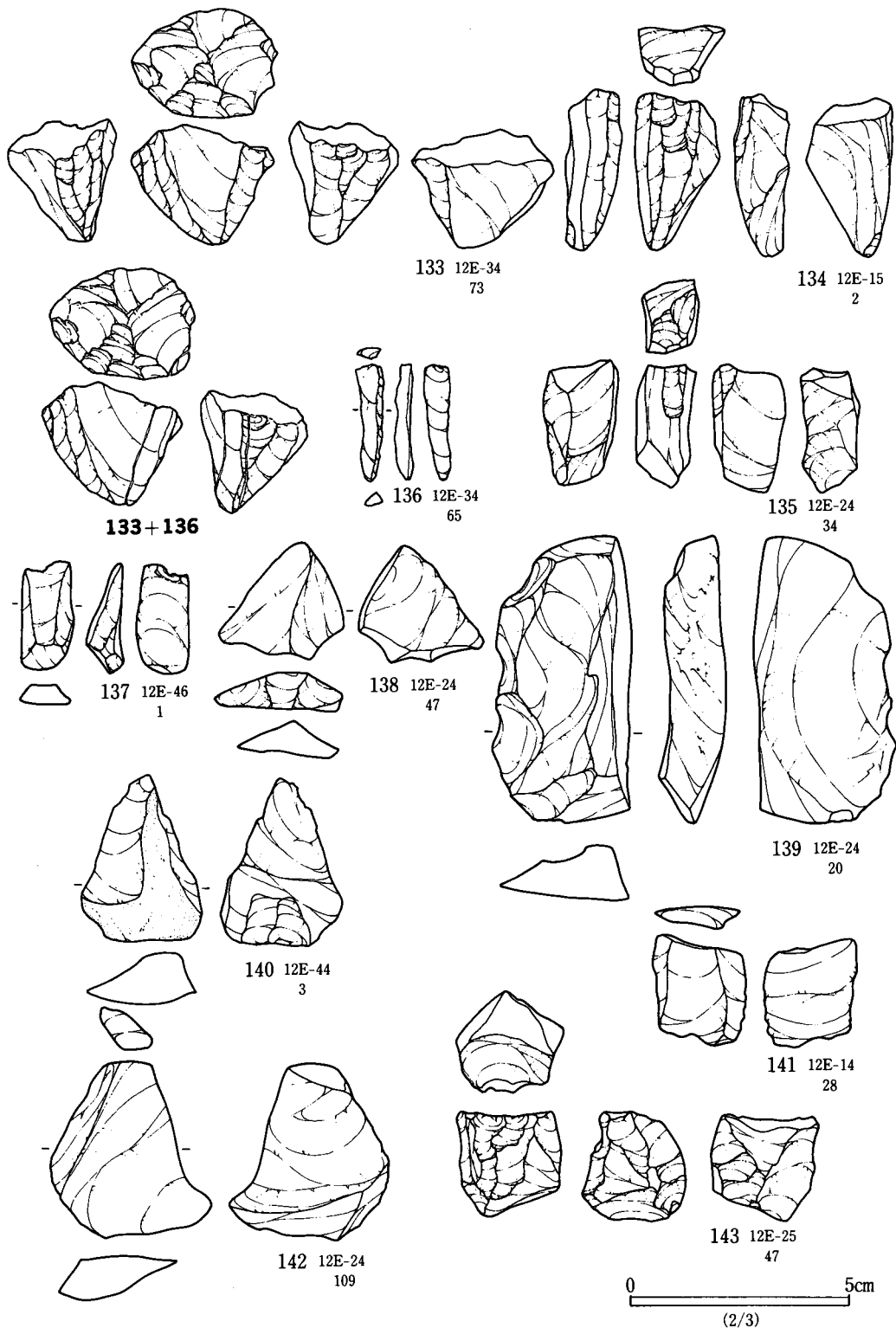
第152図 安山岩23の長・幅(左),幅・厚(右)分布(単位mm)

安山岩24 漆黒の無斑晶ガラス質の石材であるが、表面は灰色に風化し軟質化している。従来、(凝灰質)細粒砂岩、シルト岩などと分類されたこともあったが、大半は安山岩と確定した(澤野1987)。関東地方で散見されるが、山形県越中山遺跡K地点では、翼状剝片の素材として用いられている石材の一部に酷似するものが多数含まれていたと記憶している。重要な問題であるので再検討を要請したい。

38点という、比較的多くの資料から構成されているが、この種の安山岩は風化後の状態が相似的な様相を呈する場合が多く、複数の母岩の混入を排除するのは困難である。このため、この38点を、厳密に同一母岩とすることはできないが、見かけ上区別できないので、便宜的に一括した。内容は多彩で、細石刃1点(136)、細石核2点(133、134)、同母核1点(135)、削器



第153図 第1ブロック母岩別遺物出土状況(10)
 (黒 安山岩24・赤 安山岩25・青 砂岩8)



第154図 第1ブロック石器実測図(安山岩24)

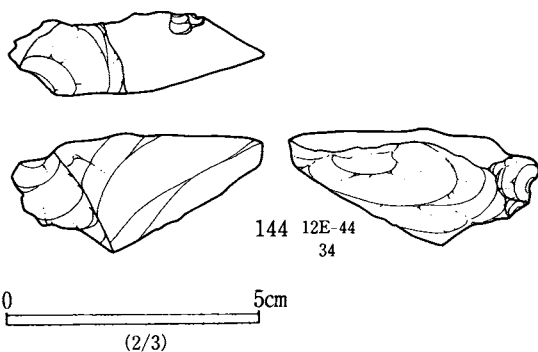
1点(139)、剥片類32点(137、138、140~142)、石核1点(143)という構成を示している。剥片の中には、細石刃剥離作業面の再生剥片(137)や、打面再生剥片(138)が含まれている。141、143など、細石核以外の石核の存在を示唆する資料が含まれ、仮に、これらが同一の母岩に還元し得るとすれば、母岩の分割によって、構成1と構成2とを複合的に得るという特異な工程が想定されるところとなるが、前記の如く両者は別母岩である可能性も否定することができない。また、139のような大型の側削器も構成1には知られていない。

各資料の分布は広範囲に及び、集中性を欠いているが、ブロック北側の馬蹄形をした集中部分と大体一致している。なお、133の細石核と、136の細石刃は最終的に接合し、また、両者が相接して出土しているところから、検出地点で剥離された可能性もあろう。

第54表 第1ブロック遺物属性表(安山岩24)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-15	剥片	15×46×8	3.50		—	—	—	不明	H	不明	B	
2	12E-14-28	剥片	24×21×6	2.76	141	1(0)	7×2	110°	不明+II	—	不明	H	
3	12E-15-2	細石核	37×18×12	8.72	134								½
4	12E-15-4	削片	26×16×4	1.37									
5	12E-23-9	削片	19×15×7	1.20									
6	12E-24-20	削器	65×35×13	26.61	139								
7	12E-24-47	剥片	23×28×9	5.14	138								
8	12E-24-67	削片	7×4×2	0.04									
9	12E-25-46	剥片	40×27×9	7.45		ℓ	—	—	不明	H	不明	—	
10	12E-25-47	石核	26×19×21	14.45	143								
11	12E-25-65	削片	11×9×3	0.16									
12	12E-25-69	削片	26×10×8	1.65									
13	12E-25-70	削片	17×21×8	2.07									
14	12E-25-72	削片	16×11×3	0.28									
15	12E-25-81	剥片	30×28×10	5.47		2(0)	28×10	120°	II	H	不明	—	
16	12E-34-9	削片	15×7×4	0.28									
17	12E-34-39	削片	13×15×4	0.65									
18	12E-34-65	細石刃	26×6×5	0.54	136								
19	12E-34-70	剥片	34×12×12	4.57		不明	不明	不明	不明	不明	不明		
20	12E-34-73	細石核	29×30×22	16.18	133								
21	12E-35-29	剥片	36×31×13	14.44		不明	14×5	127°	C+II+IV	—	不明	H	
22	12E-35-48	削片	15×10×10	1.14									
23	12E-36-9	削片	19×19×12	3.66									
24	12E-36-10	削片	12×25×8	2.16									
25	12E-36-11	剥片	27×17×8	4.34		1(0)	5×1	113.5°	不明+II	F	不明	—	
26	12E-43-7	削片	28×10×8	1.70									
27	12E-44-3	剥片	R 32×27×13	9.82	140	ℓ	—	—	㊸	—	+	—	
28	12E-44-44	剥片	21×17×9	2.08		1(0)	8×6.5	100°	不明	H	不明	—	
29	12E-44-50	削片	27×10×7	1.18									
30	12E-45-6	剥片	20×11×7	1.01		—	—	—	不明	—	不明	破片	

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
31	12E-46-1	剥片	26×12×8	2.12	137	1(0)	8×3		III	F	不明	—	
32	12E-24-34	ブランク	29×18×13	7.44	135								
33	12E-24-109	剥片	41×35×11	11.62	142	1(0)	14×7.5	130°	II+III	O	不明	—	
34	12E-24-113	剥片	27×14×8	2.10		1(0)	6×3	128.5°	不明+II	F	不明	—	
35	12E-14・15表採a	剥片	23×47×7	5.52		C	36×6	115°	II	F	不明	—	
36	12E-14・15表採b	剥片	34×19×8	2.49		—	—	—	不明	F	不明	B	
37	No 4 地点表採	削片	12×10×6	0.70									
38	12E-240	剥片	26×42×11	13.50		1(0)	12×6	125°	不明+II	不明	不明	不明	

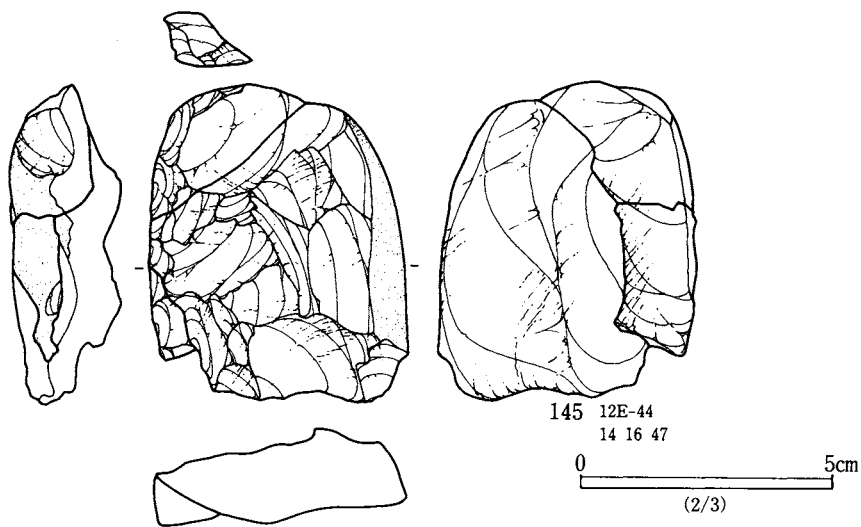


安山岩25 明灰色の色調を呈し、一般の黒色緻密質安山岩と安山岩24に特徴を見る安山岩(トロトロ石)との中間的な石材である。剥片が1点あるのみで、詳細は不明である。

第155図 第1ブロック石器実測図(安山岩25)

第55表 第1ブロック遺物属性表(安山岩25)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-44-34	剥片	24×50×17	13.44	144	2(1)	49×14	92.5°	II+IV	F	不明	—	



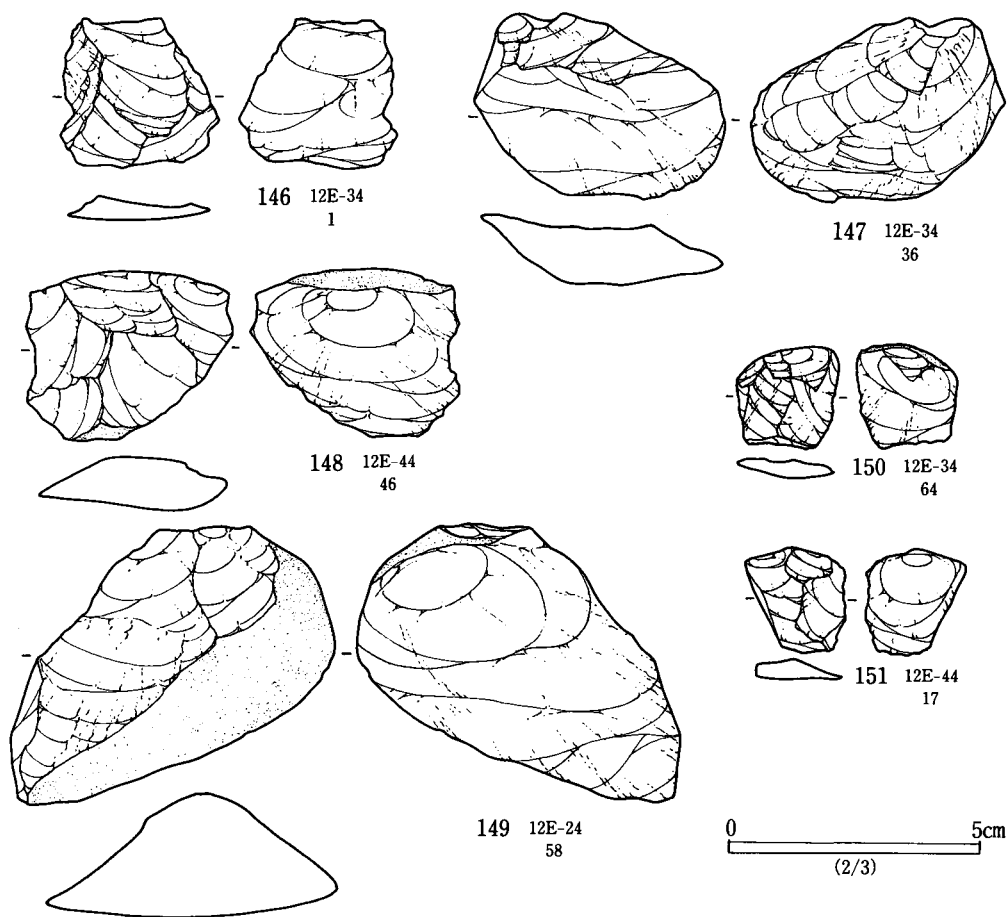
第156図 第1ブロック石器実測図(砂岩8)

砂岩 8 明灰色をした比較的粗粒の岩石。剥片が4点ある。そのうち、検出地点の判明する3点は、近接して出土し、接合した。円礫の長軸に直交するように剥片剥離作業面を設定し、打点を左右に大きく移動しながら大型の剥片を作出している。打面部側と尾部側に大きく原礫面が残されているが、打点の位置する部分には細かい剥離痕が存在する。

第56表 第1ブロック遺物属性表(砂岩8)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-43-1	剥片	19×20×9	3.01		—	—	—	III	F	—	B	
2	12E-44-14	剥片	20×31×11	5.02	145	—	—	—	IV	—	—	B	1/3
3	12E-44-16	剥片	52×60×20	60.20	145	—	—	—	⑩	H	—	B	1/3
4	12E-44-47	剥片	21×38×17	11.38	145	4(2)	14 × 10	114°	IV	—	—	H	1/3

砂岩 9 やや暗い灰色の色調を呈し、粒子が粗く風化した印象をうける石材である。剥片類



第157図 第1ブロック石器実測図(砂岩9-1)

のみ40点から構成されている。剥片剥離は円礫長軸と直交する剥片剥離作業面が設定され、次いで円礫を固定し、先行剥離面の稜角を次々に打ち落しながら打点位置を後退させていく手法によっている。この間に打面部側への剥離が介在することは、40例中7例の打面に作業面側からの剥離痕の観察されるものが存在することから明らかである。剥片の属性分布(第159図)より、素材の円礫の厚味に大きく制約された分布状況が窺われるが、長幅比1を中心にした矩形の剥片が卓越している。長さ、厚さよりもその幅において変異が大きい。分布はブロック南側

第57表 第1ブロック遺物属性表(砂岩9)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-24-39	剥片	38×29×14	13.92		ℓ	—	—	II	H	—	—	
2	12E-24-56	剥片	35×30×14	15.48		C	12×5	133°	II	H	—	—	
3	12E-24-58	剥片	45×73×27	78.30	149	C+22)	32×12	124°	ⓐ	H	—	—	
4	12E-24-82	削片	10×11×3	0.17									
5	12E-24-94	削片	18×30×5	1.90									
6	12E-24-121	剥片	17×20×7	2.12		C	15×4.5	129°	II	H	—	—	
7	12E-25-88	剥片	20×35×14	14.14		—	—	—	不明	—	—	破片	
8	12E-33-7	削片	10×13×5	0.45									
9	12E-33-11	剥片	26×35×11	8.21		C	17×2	125°	II+IV	H	—	—	
10	12E-33-12	剥片	20×19×10	2.32		P	—	—	ⓑ	—	—	H	
11	12E-33-13	剥片	30×19×7	2.69		1(0)	16×9	123°	IV	F	—	—	
12	12E-34-1	剥片	36×33×7	5.87	146	ℓ	—	—	II	H	—	—	
13	12E-34-4	剥片	15×16×7	0.86									
14	12E-34-13	剥片	43×16×9	5.35		C	5×5.5	99°	ⓑ	F	—	—	¼
15	12E-34-33	剥片	27×22×8	4.59		ℓ	—	—	不明	H	—	—	
16	12E-34-36	剥片	34×52×17	24.27	147	1(0)	12×3.5	127°	II	H	—	—	
17	12E-34-64	剥片	21×25×6	1.66	150	C	15×1.5	119.5°	II	H	—	—	
18	12E-34-67	剥片	23×36×6	4.65		1(0)	21×3	133°	II	H	—	—	
19	12E-35-6	剥片	20×27×12	5.53		—	—	—	I	—	—	破片	
20	12E-35-22	剥片	23×25×6	2.57		ℓ	—	—	ⓐ	H	—	—	½
21	12E-35-63	剥片	32×25×9	6.32		C	19×6.5	105°	II	—	—	—	H
22	12E-35-66	剥片	21×26×6	2.76		—	—	—	F	—	—	破片	
23	12E-35-71	削片	10×8×4	0.44									
24	12E-36-6	剥片	36×56×10	16.09	152C	C+11)	29×6	122.5°	ⓐ+ⓑ	F	—	—	⅓
25	12E-43-9	削片	15×17×7	1.28									
26	12E-44-7	削片	9×12×6	0.33									
27	12E-44-8	剥片	34×16×8	3.61		C	6×4.5	98°	II	—	—	HL	¼
28	12E-44-10	削片	16×12×5	0.73									
29	12E-44-17	剥片	21×19×5	1.83	151	C	15×2	120.5°	II	H	—	—	
30	12E-44-19	剥片	16×26×5	1.43		1(0)	11×1	116.5°	II	H	—	L	
31	12E-44-20	剥片	30×40×12	8.26		ℓ	—	—	II	F	—	B	
32	12E-44-24	剥片	33×21×7	4.72		C	18×5.5	98°	II	—	—	HR	¼
33	12E-44-29	剥片	25×31×7	3.90		C	19×4.5	110.5°	ⓐ	H	—	—	
34	12E-44-33	剥片	27×43×10	6.64	152b	C	28×3	119°	ⓐ	F	—	—	⅓
35	12E-44-37	削片	23×11×5	0.90									

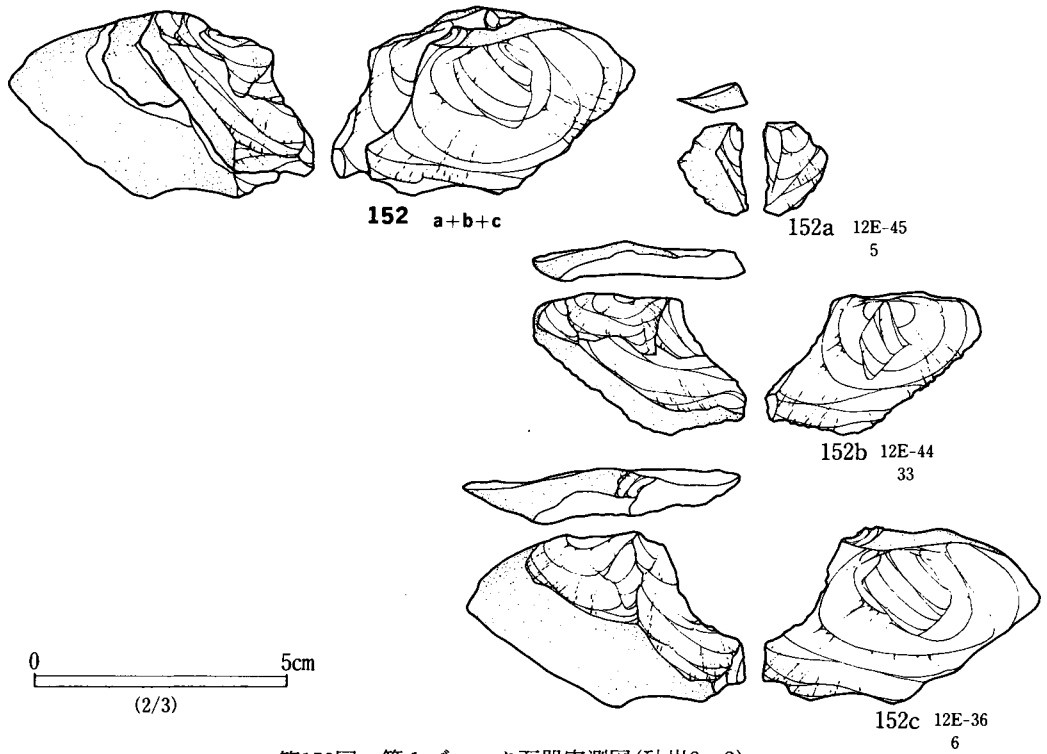
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
36	12E-44-43	剥片	15×38×9	4.09		—	—	—	⑩	F	—	B	¼
37	12E-44-45	削片	11×22×9	1.23									
38	12E-44-46	剥片	35×40×12	15.06	148	C+100	35 × 7	117°	⑩+④	H	—	—	
39	12E-44-49	剥片	26×22×7	3.70		ℓ	—	—	⑩	F	—	—	½
40	12E-45-5	剥片	19×13×6	1.01	152 a	C	6 × 4.5	94.5	⑩	F	—	—	⅓

の径約12mの範囲内にまとまっているが、集中度は低く、この範囲内に散在する状況を呈している。

砂岩11 暗褐色の細粒砂岩である。2次的に破碎した23点の資料から構成されているが、2個体の片刃の打割器あるいは石核にまとめられた。153は弧状の刃部を持つ片刃打割器であろう。刃部の調整は比較的入念で、一般の石核とは明らかに違う。刃部の角度は71°前後であり、80°～90°に集中する構成3の諸例と比較してみると、その差が際立っている。破碎は被熱によるものとみられるが、破碎後に更に剥片を剥離した形跡があり、構成3においては、打割器と石核という2つの範疇が相互に変容する過程を示唆している。154は破損度が高く、打割器とすべきか、石核とすべきか判然としない。打面(刃)角は90°に近く石核的であるが、打面側から最終的に小さ目の段階状剥離が加えられており、この点では打割器的と言えよう。両者は、約8m×12

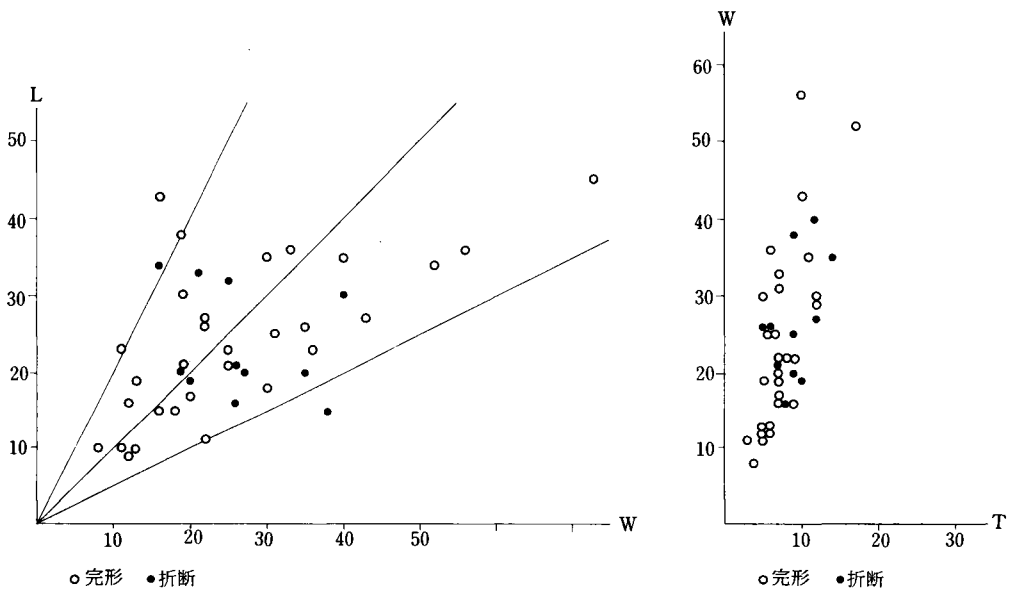
第58表 第1ブロック遺物属性表(砂岩11)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-23-2	打割器	46×38×10	24.25	154							破片	⅛
2	12E-23-6	打割器	23×22×15	8.40	153							破片	⅓
3	12E-24-16	打割器	35×28×16	10.92	153							破片	⅓
4	12E-24-49	打割器	32×16×13	5.25	154							破片	⅛
5	12E-24-54	打割器	29×45×21	26.28	154							破片	⅛
6	12E-25-1	打割器	36×29×18	13.61	153							破片	⅓
7	12E-25-10	打割器	26×24×16	8.15								破片	
8	12E-25-16	打割器	29×23×10	7.13	154							破片	⅛
9	12E-25-22	打割器	20×28×18	7.35	153							破片	⅓
10	12E-25-25	打割器	32×33×12	13.86	154							破片	⅛
11	12E-25-28	打割器	21×35×12	7.49	154							破片	⅛
12	12E-25-95	打割器	25×27×19	11.53	153							破片	⅓
13	12E-33-2	打割器	17×25×15	6.24	153							破片	⅓
14	12E-34-22	打割器	36×26×23	27.87	153							破片	⅓
15	12E-35-7	打割器	26×37×18	18.40	154							破片	⅛
16	12E-35-12	打割器	29×46×19	23.67								破片	
17	12E-35-15	打割器	39×34×26	32.86	153							破片	⅓
18	12E-35-37	打割器	33×34×16	17.55	153							破片	⅓
19	12E-35-45	打割器	37×27×23	13.88	153							破片	⅓
20	12E-35-50	打割器	32×28×14	13.89	153							破片	⅓

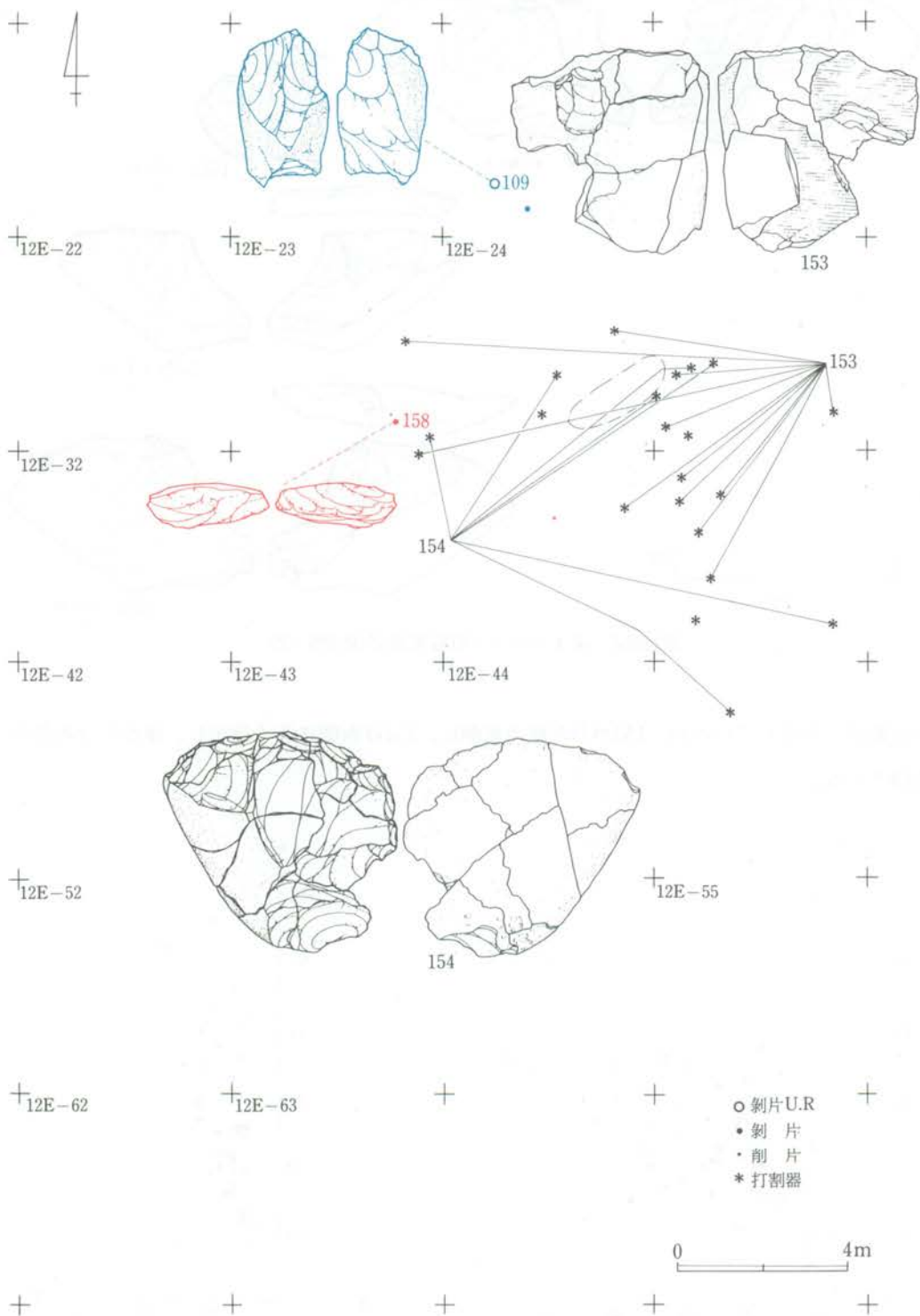


第158図 第1ブロック石器実測図(砂岩9-2)

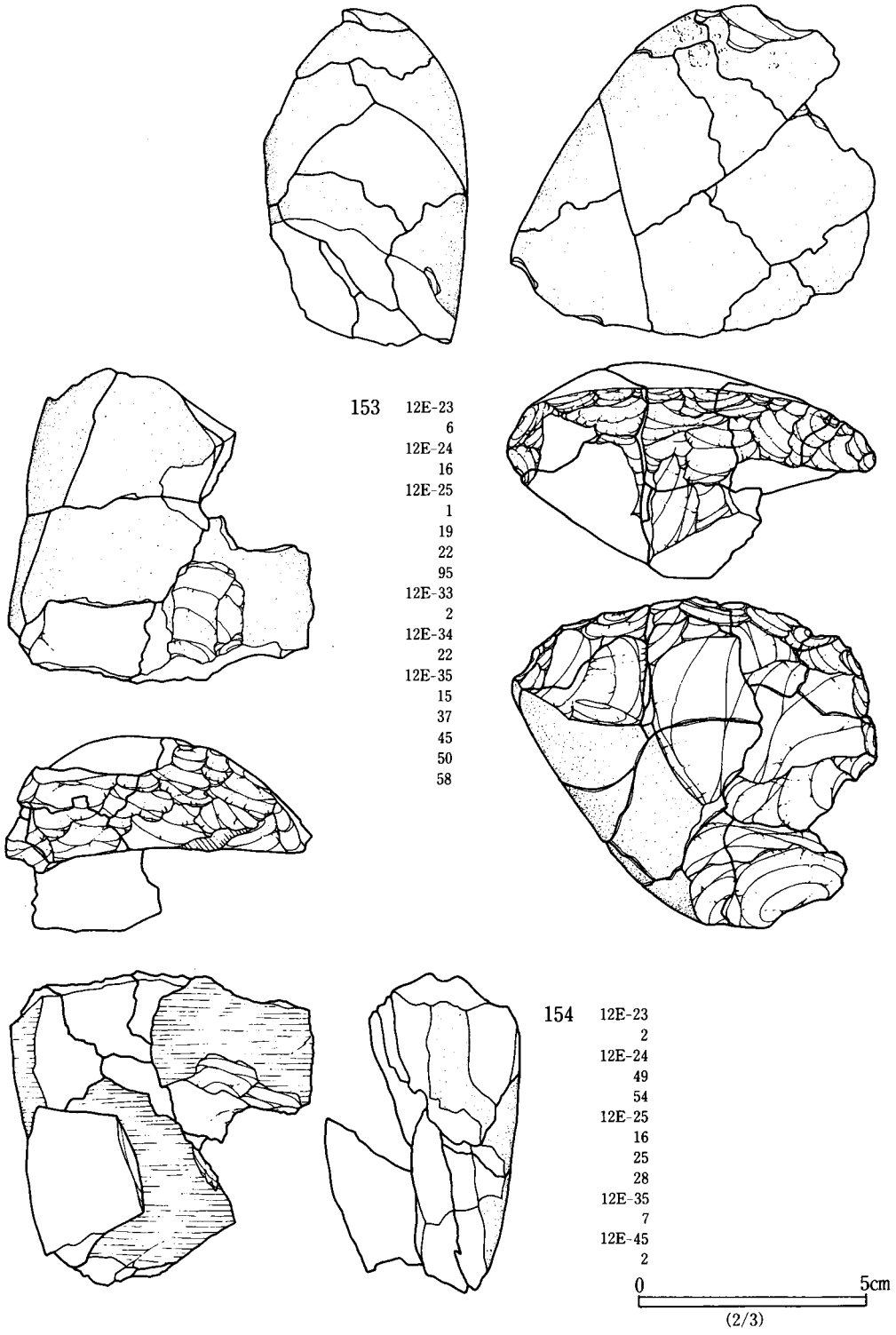
mの範囲に点在しているが、153が分布域の東側に、154は西側に多く分布し、僅かに分布差が指摘される。



第159図 砂岩9の長・幅(左),幅・厚(右)分布(単位mm)



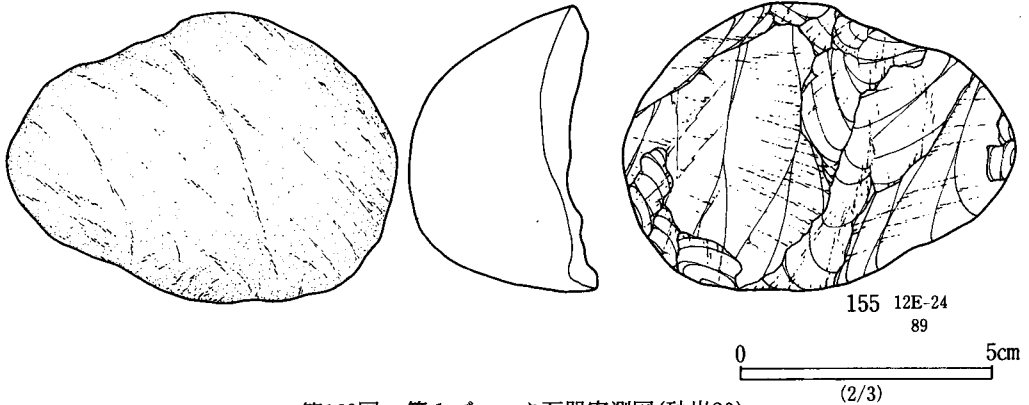
第160図 第1ブロック母岩別遺物出土状況(1)
 (黒 砂岩11・赤 結晶片岩1・青 泥岩1)



第161図 第1ブロック石器実測図(砂岩11)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
21	12E-35-58	打割器	28×40×22	24.35	153							破片	1/3
22	12E-45-2	打割器	35×50×24	36.25	154							破片	1/8
23	12E-25-19	打割器	30×37×22	25.14	153							破片	1/3

砂岩20 淡灰褐色を呈し、暗褐色の縞目の認められる石材。石核が1点ある。仮に、構成3に一般的な剥片剥離が想定し得るとすれば、この資料は所謂残核の状態を示しているものと考えられる。



第162図 第1ブロック石器実測図(砂岩20)

第59表 第1ブロック遺物属性表(砂岩20)

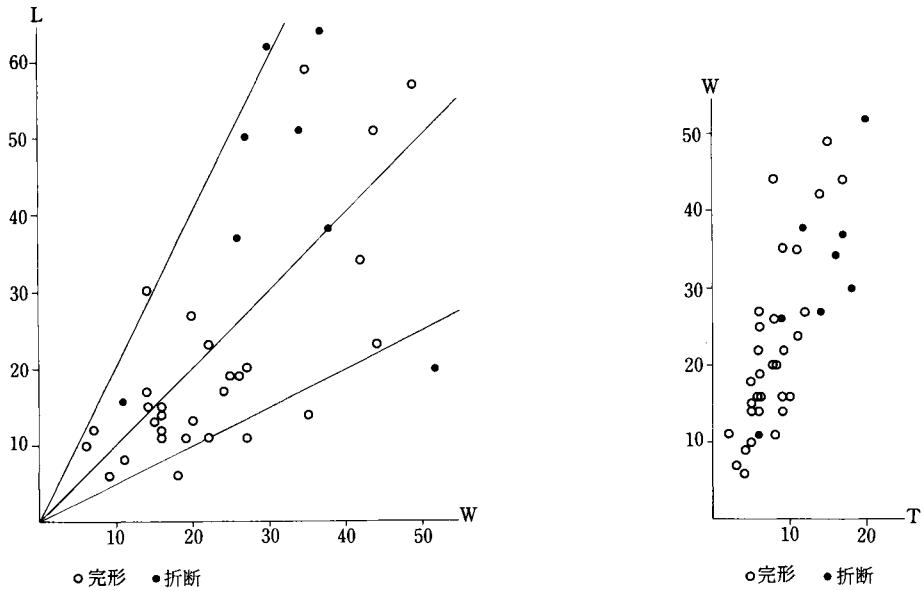
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-24-89	石核	80×58×37	180.9	155								

砂岩50 暗灰色の砂岩であるが、礫表が茶褐色に変色しており、礫群構成礫から選択された素材である可能性が高い。剥片2点を含むにすぎない。

第60表 第1ブロック遺物属性表(砂岩50)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-24-83	剥片	14×18×9	2.03									
2	12E-24-33	剥片	37×33×16	21.01									

ホルンフェルス4 灰褐色を呈する細粒の石材で、粘板岩起源の変成岩である。第1ブロックに39点の資料が集中しているが、第4ブロックにも2点が分布する。この石材に関する剥片生産過程は156の接合資料に明らかである。横断面楕円形の母岩の木口面から連続的に剥片を落している。打点は自然打面上を半周するように往復しているが、石核の正面では比較的すづ

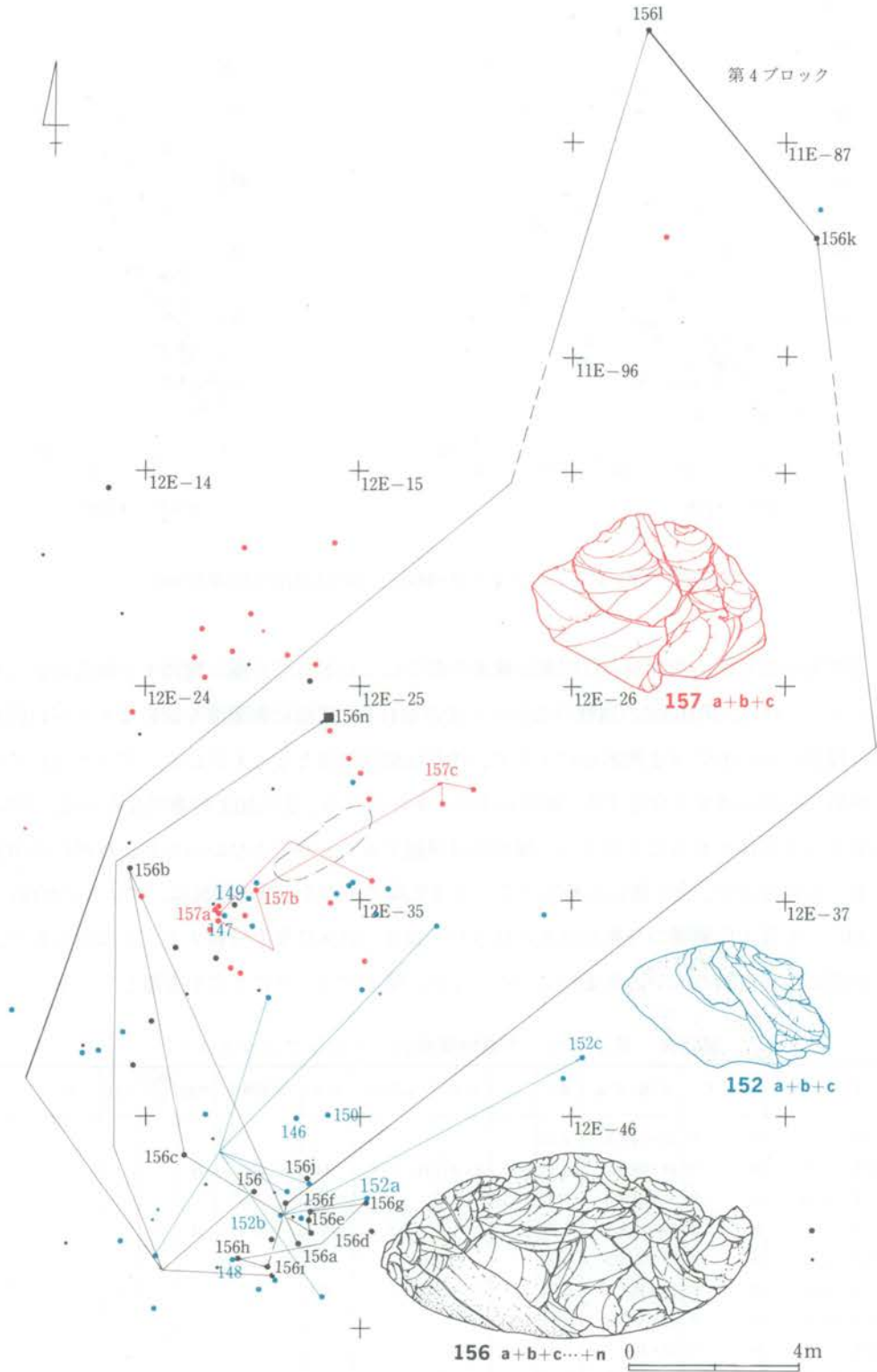


第163図 ホルンフェルス4の長・幅(左),幅・厚(右)分布(単位mm)

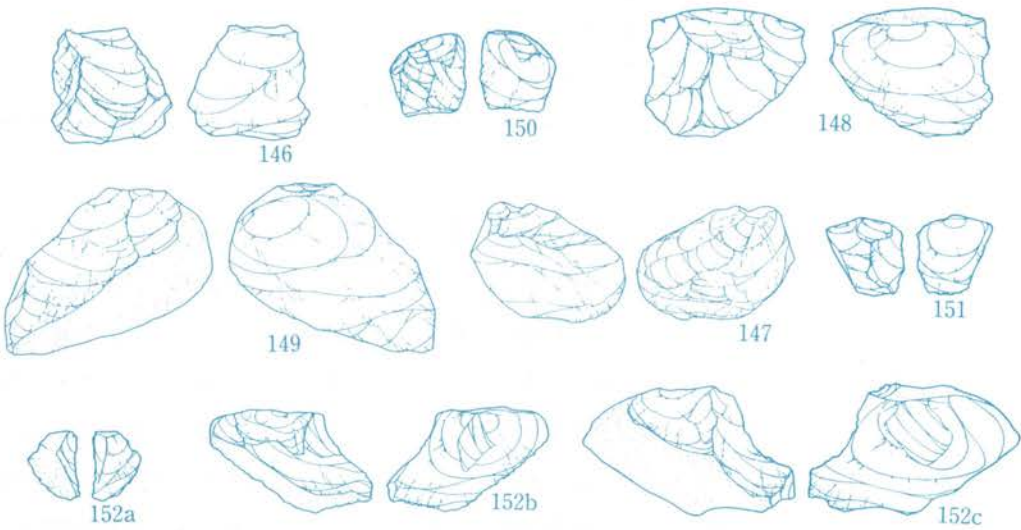
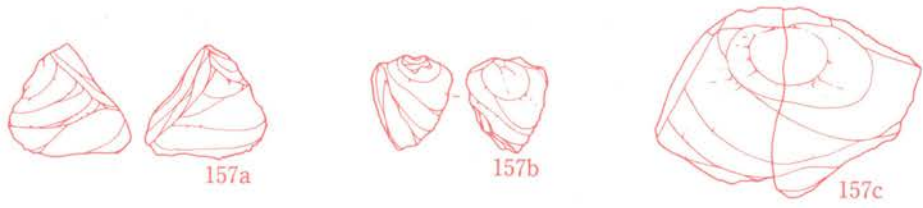
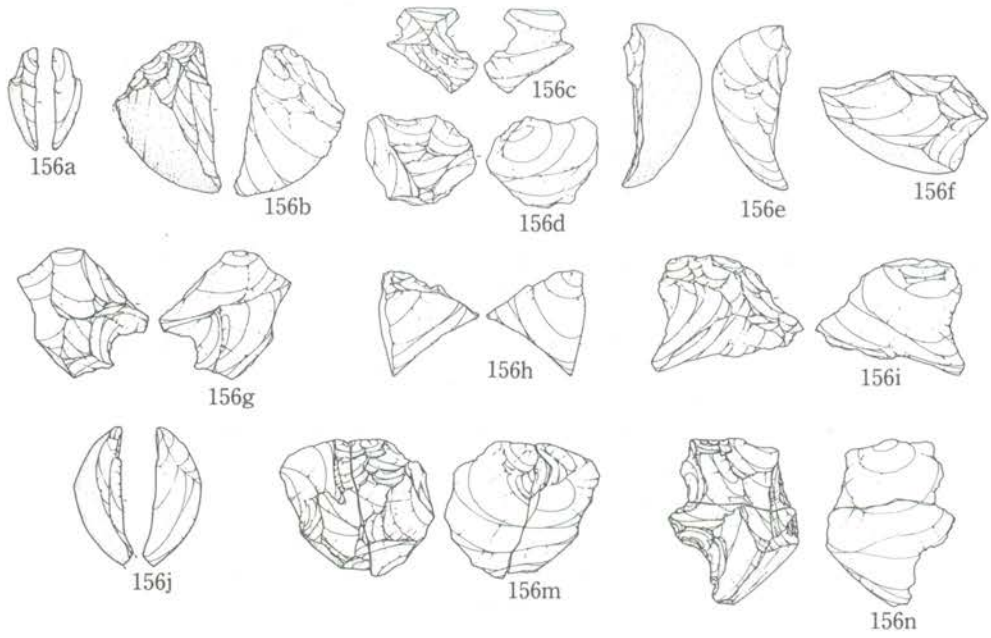
まちな矩形の剥片が、側面からは尾部が礫面の曲率にしたがって片側に彎曲する縦長の剥片が得られる。これは、第163図の属性分布からも読み取れる。打面に剝離面を留めるものが11例あるが、礫面のみのもは3例あるにすぎず、残りは線状打面となるものによって占められている。簡略な打面の調整が介在する可能性がある。剥片のうち、2次加工の著明なものは、157の側削器2点1個体があるにすぎない。使用痕は視認することができなかったが、石材自体が風化し易いものなので、全く無いと断定することは危険であろう。分布状況は、ブロック西縁に、南北20mにも及ぶ広範囲の分布が認められるが、12E-44区に集中分布することは明らかで、この内部に接合資料の大半も含まれている。なお、第4ブロックに2点が遊離している。

第61表 第1ブロック遺物属性表(ホルンフェルス4)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-13-3	削片	15×14×5	0.62									
2	12E-13-15	剥片	14×35×11	3.92		2(0)	33×9	142'	II	H	-	-	
3	12E-13-18	削片	6×18×5	0.37									
4	12E-14-1	剥片	19×25×6	1.76		ℓ	-	-	II	H	-	-	
5	12E-14-11	削片	12×7×3	0.20									
6	12E-14-38	剥片	16×11×6	0.70		2(0)	8×3	124'	II	-	-	H	
7	12E-23-3	剥片	59×35×19	35.22	156 b								1/9
8	12E-23-7	削片	12×16×9	1.14									
9	12E-23-17	削片	11×19×6	0.88									
10	12E-24-21	削器	26×40×13	12.54	157	ℓ	-	-	II+IV	-	+	H	1/2



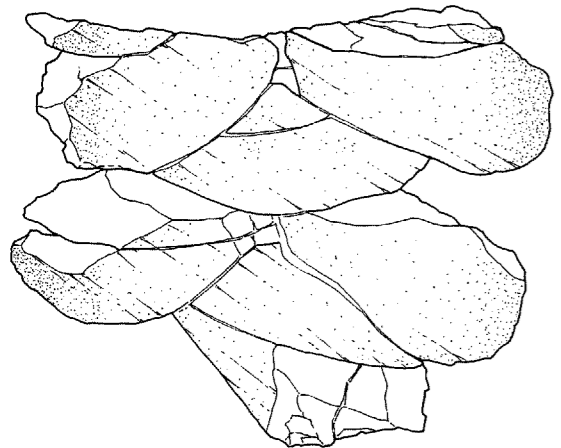
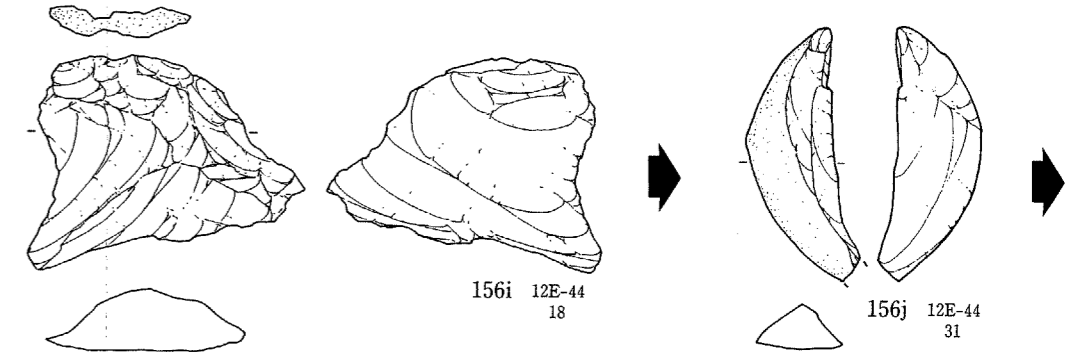
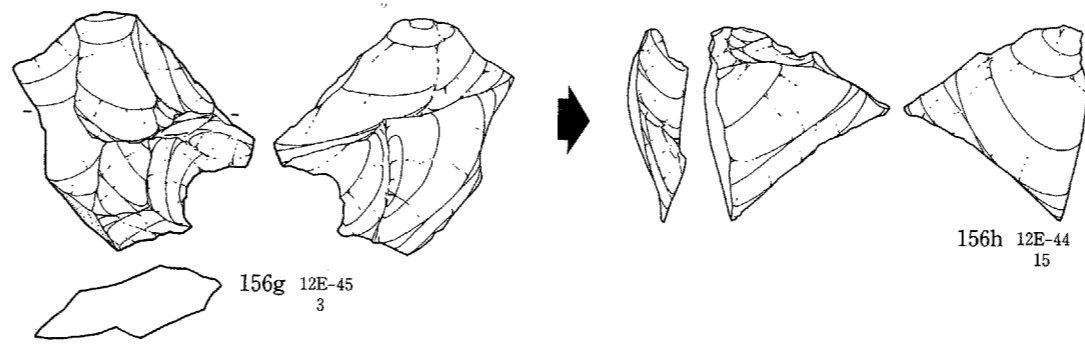
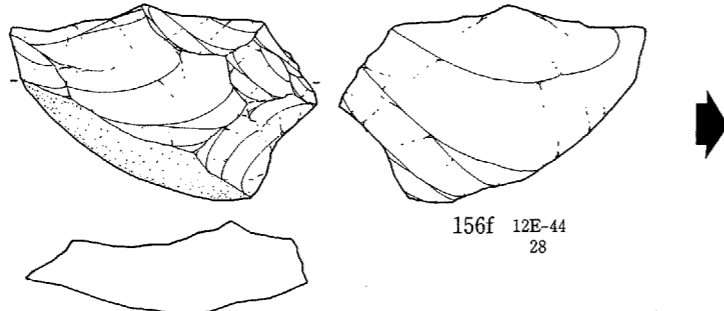
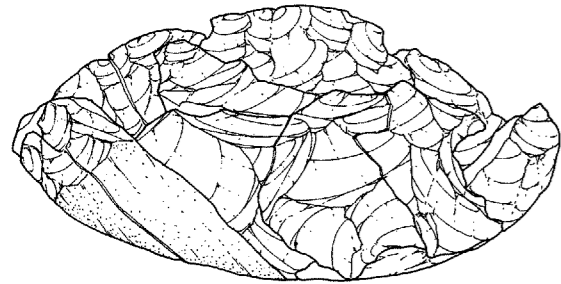
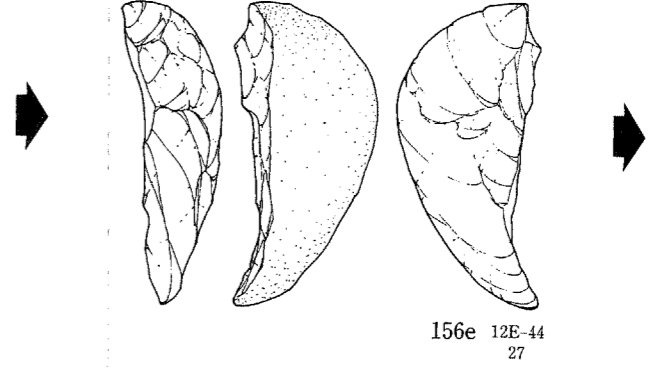
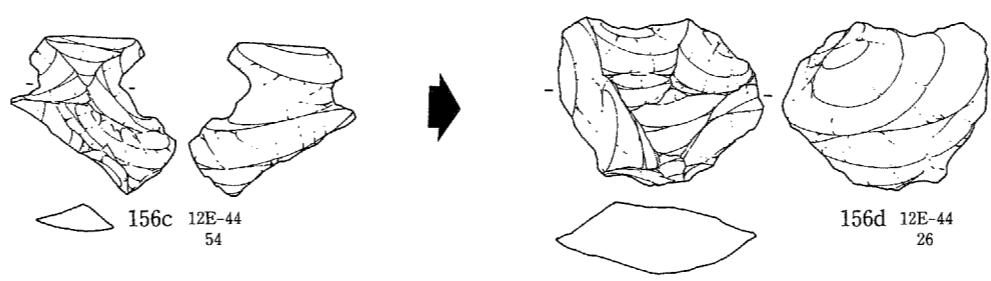
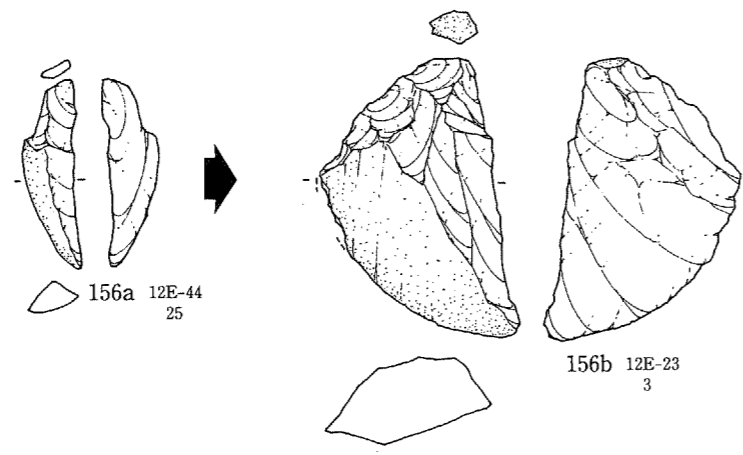
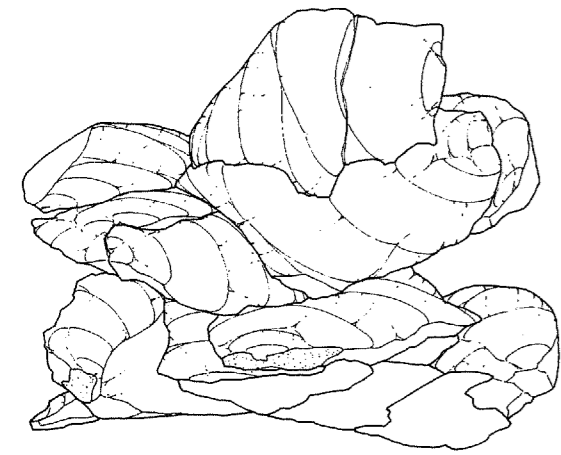
第164図 第1ブロック母岩別遺物出土状況(12-A)
 (黒 ホルンフェルス4・赤 ホルンフェルス5・青 砂岩9)



第165図 第1ブロック母岩別遺物出土状況(12-B)
 (黒 ホルンフェルス4・赤 ホルンフェルス5・青 砂岩9)

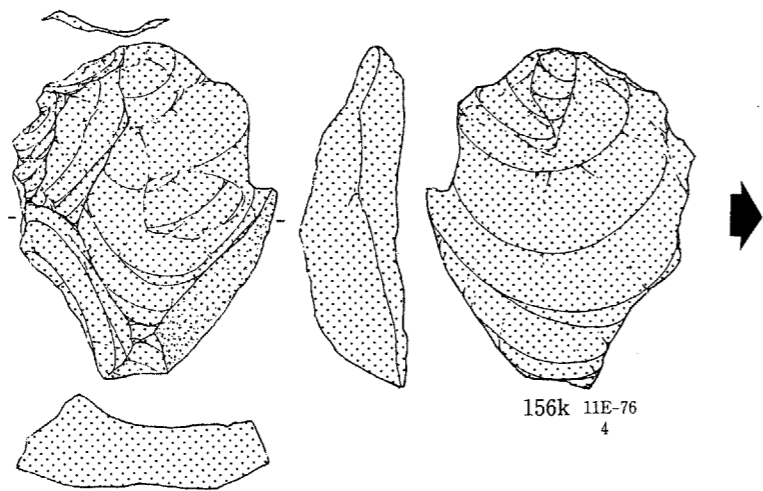
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
11	12E-24-50	削片	13×15×5	0.63									
12	12E-25-123	削片	12×22×6	1.35									
13	12E-33-6	削片	18×10×5	0.70									
14	12E-33-10	剥片	27×20×8	2.95		C	10 × 7	95°	II	H	-	-	
15	12E-34-8	削片	13×20×8	1.18									
16	12E-34-35	剥片	23×22×9	3.31		1(0)	21 × 4.5	119.5°	II	H	-	-	
17	12E-34-42	剥片	23×44×8	7.95		1(0)	25 × 5.5	129.5°	II+IV	H	-	-	
18	12E-34-51	削片	14×16×6	1.58									
19	12E-34-55	剥片	20×27×12	3.70		4(1)	26 × 11	110°	II	F	-	-	
20	12E-34-59	削片	15×16×6	1.22									
21	12E-34-71	剥片	19×26×8	1.64		1(0)	19.5 × 7	107°	II+IV	H	-	-	
22	12E-43-6	削片	17×14×6	1.38									
23	12E-44-1	削片	11×16×10	1.10									
24	12E-44-15	剥片	38×38×12	11.27	156 h	P	-	-	II	H	-	R	1/9
25	12E-44-18	剥片	57×49×15	26.67	156 i	1(0)	27 × 5.5	155.5°	II	H	-	-	1/9
26	12E-44-21	剥片	11×27×6	1.93		1(0)	16 × 2	127.5°	II	H	-	-	
27	12E-44-25	剥片	38×11×8	2.13	156 a	1(0)	7 × 2	119°	ⓐ	F	-	-	
28	12E-44-26	剥片	34×42×14	17.61	156 d	ℓ	-	-	II+IV	H	-	-	1/9
29	12E-44-27	剥片	62×30×18	26.93	156 e	-	-	-	I	F	-	B	1/9
30	12E-44-28	剥片	64×37×17	36.33	156 f	-	-	-	ⓑ	F	-	B	1/9
31	12E-44-30	削片	6 × 9 × 4	0.18									
32	12E-44-31	剥片	20×52×12	8.68	156 j	-	-	-	ⓑ	F	-	B	
33	12E-44-38	剥片	51×34×16	21.76	156 m	ℓ	-	-	II+IV	H	-	L	1/2
34	12E-44-42	剥片	30×14×9	3.72		1(0)	44 × 6	100.5°	II+IV	F	-	-	
35	12E-44-48	削片	8 × 11 × 2	0.19									
36	12E-44-52	剥片	50×27×14	19.02	156 m	ℓ	-	-	ⓑ	H	-	R	1/2
37	12E-44-54	剥片	37×26×9	5.43	156 c	-	-	-	II	H	-	B	1/9
38	12E-44-55	削片	10 × 6 × 4	0.19									
39	12E-45-3	剥片	51×44×17	26.17	156 g	1(0)	9 × 6	104.5°	ⓑ	F	-	-	1/9
40	12E-45-4	剥片	17×24×11	3.87		C	10 × 7	124.5°	II	H	-	-	
41	12E-14・15表採	削器	39×48×17	23.76	156 n	-	-	-	ⓑ+ⓓ	F	+	B	1/2

ホルンフェルス 5 暗灰色を呈し、細かい点紋の散る粘板岩起源の石材で、ホルンフェルス 4 と同質のものと見られる。剥片剥離過程も前記のホルンフェルス 4 と大差ない。35点の剥片類によって構成されている。剥片のうち、打面部の観察し得る23例について見ると、剥離作業面からの剥離痕を留めるものと、自然面に被覆されるものとの比率は13:10となっており、本母岩においても、打面の部分的調整の介在する可能性が指摘されることになる。属性分布は、ホルンフェルス 4 と比較してまとまりが良いが、おそらく、これは素材となった円礫の偏平度が関与しているのだろう。資料は、径 5 m 程の環状の分布を呈しているが、接合資料(157)は、この環の南半に集中している。また、ホルンフェルス 4 とは分布域を異にしている。

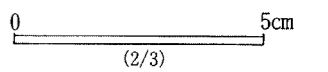
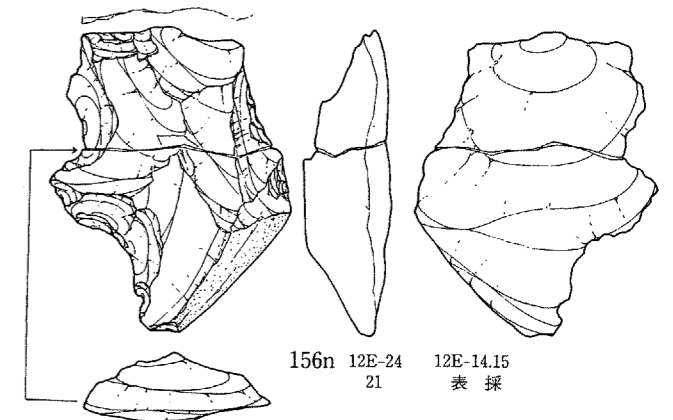
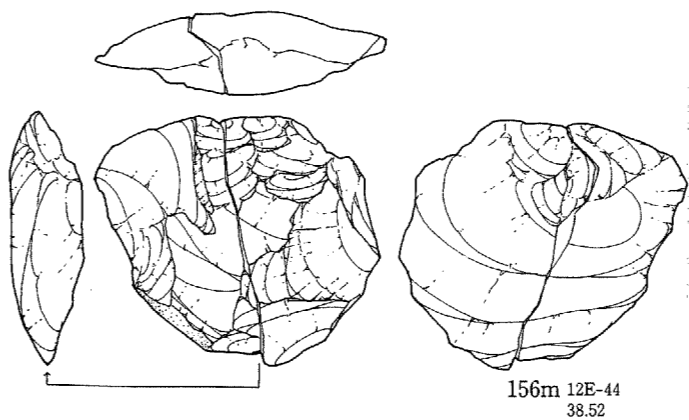
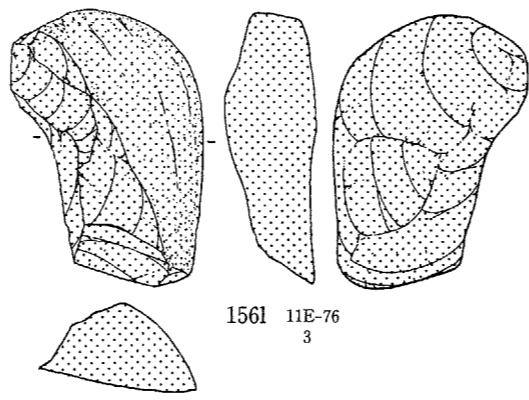


156 a+b+c+d+e+f+g+h+i+j+k+l+m+n

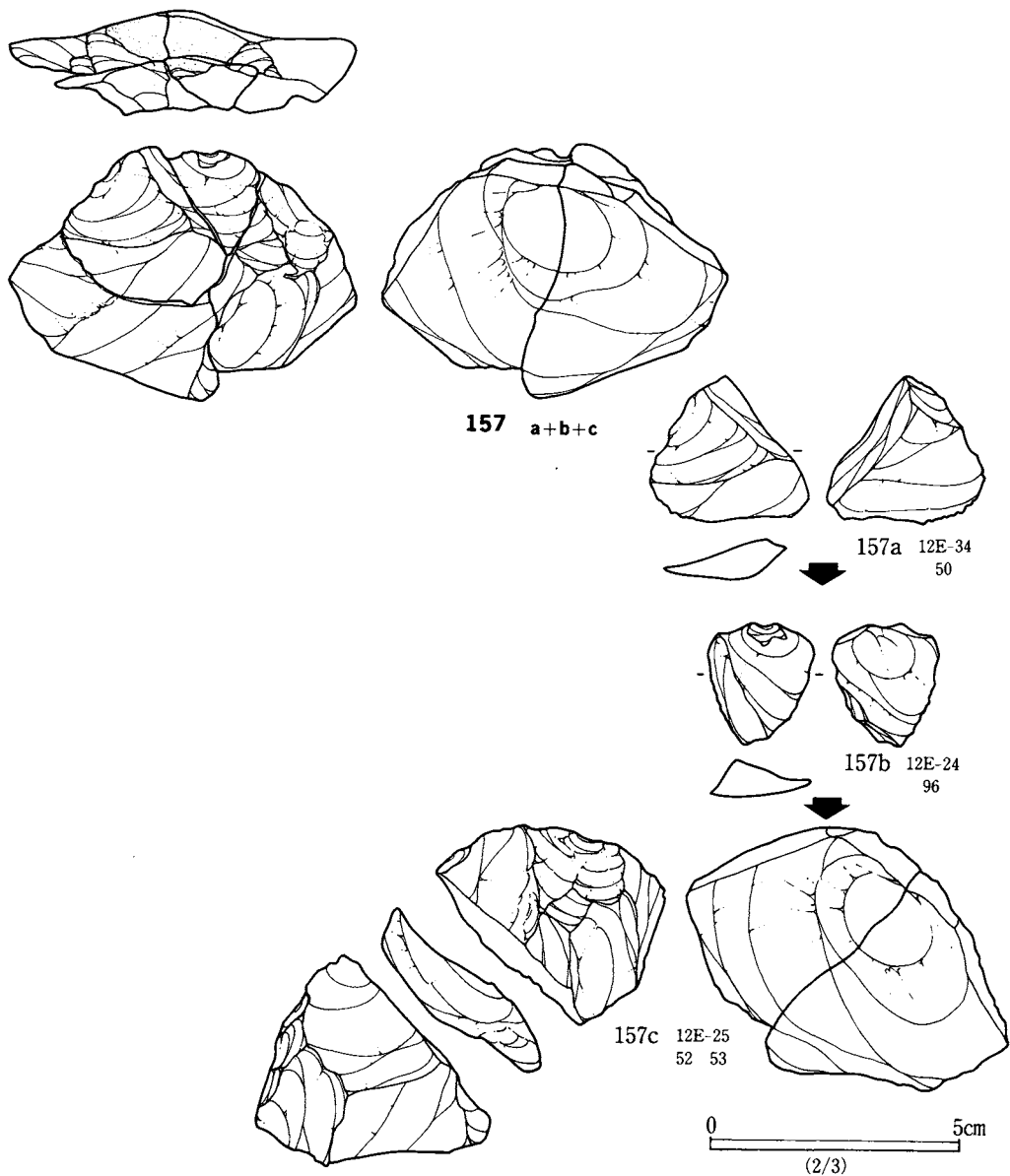
第4ブロック



第4ブロック



第166図 第1ブロック石器実測図(ホルンフェルス4)

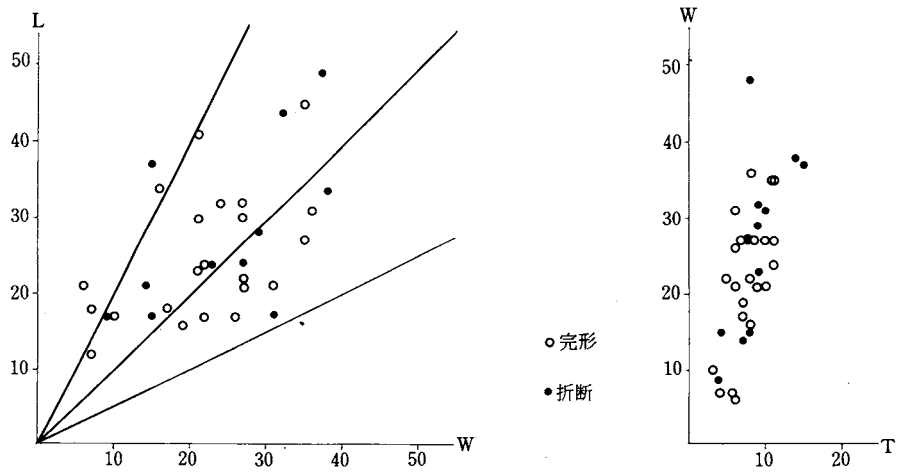


第167図 第1ブロック石器実測図(ホルンフェルス5)

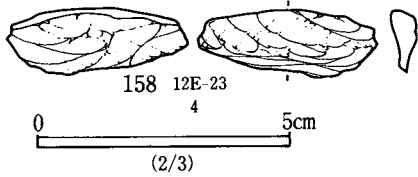
第62表 第1ブロック遺物属性表(ホルンフェルス5)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-14-7	剥片	32×24×11	5.42		1(0)	3.5×1.5	130°	II	H	—	—	
2	12E-14-14	剥片	18×17×7	1.56		C	15×4	130.5°	II	H	—	—	
3	12E-14-17	削片	12×7×4	0.29									
4	12E-14-21	剥片	17×26×6	2.27		ℓ	—	—	Ⓜ	H	—	—	
5	12E-14-26	剥片	30×27×11	6.47		1(0)	6×2	98°	II+IV	H	—	—	

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
6	12E-14-27	削片	21×6×6	0.56									
7	12E-14-29	剥片	27×35×11	9.81		C	30×7.5	131°	⑩	F	—	—	
8	12E-14-33	剥片	45×35×11	13.91		C	10×3	118°	II	H	—	—	
9	12E-14-35	剥片	34×16×8	4.03		1(0)	4.5×2	136°	⑩	F	—	—	
10	12E-14-36	剥片	31×36×8	6.56		ℓ	—	—	II	F	—	—	
11	12E-23-1	削片	18×7×6	1.15									
12	12E-23-8	剥片	24×23×9	4.86		—	—	—	⑩	F	—	B	
13	12E-23-15	削片	17×10×3	0.41									
14	12E-24-7	剥片	34×38×14	11.30		—	—	—	⑩+⑪	H	—	B	½
15	12E-24-11	剥片	17×31×10	4.06		C	24.5×5	120°	II	—	—	H	
16	12E-24-19	剥片	23×21×6	2.94		C	14.5×1	139°	II	H	—	—	
17	12E-24-96	剥片	24×22×8	3.45	157 b	2(1)	20×3	120.5°	II	H	—	—	¼
18	12E-25-14	剥片	48×45×13	21.52		1(0)	7×3	125.5°	II	H	—	—	
19	12E-25-33	剥片	37×15×8	3.68		—	—	—	不明	H	—	B	
20	12E-25-52	剥片	49×37×15	20.67	157 c	C	12×9	126°	II	H	—	L	¼
21	12E-25-53	剥片	44×32×19	23.35	157 c	C	14×9	126°	II	H	—	R	¼
22	12E-34-12	剥片	27×48×8	11.22		C	27×6	113°	II+IV	—	—	H	
23	12E-34-30	剥片	21×14×7	2.10		C	8.5×4	125°	II	—	—	H	
24	12E-34-34	剥片	17×9×4	0.51		—	—	—	II	F	—	B	
25	12E-34-37	剥片	41×21×10	7.83		1(0)	5.5×3	138.5°	II	F	—	—	
26	12E-34-38	剥片	17×15×4	0.79		—	—	—	⑩	F	—	B	
27	12E-34-48	剥片	30×21×9	4.15		C+I(0)	21.5×5.5	115°	II	H	—	—	
28	12E-34-50	剥片	32×27×10	5.90	157 a	1(0)	11×9.5	117.5°	II	H	—	—	¼
29	12E-34-53	剥片	16×19×7	1.43		1(0)	11×3	124.5°	II	F	—	—	
30	12E-34-54	剥片	22×27×8	4.50		C	10×3	112°	II	H	—	—	
31	12E-34-56	剥片	17×22×5	1.22		1(0)	14×3.5	93°	II	H	—	—	
32	12E-35-44	剥片	28×29×9	7.07		—	—	—	C	F	—	B	
33	12E-24-108	剥片	24×27×8	4.22		3(1)	11.5×8	94°	⑩+⑪	—	—	H	½
34	12E-24-0	剥片	21×31×6	2.84		2(1)	20×4	97°	II	H	—	—	
35	12E-24-0	剥片	21×27×7	3.45		1(0)	6×2	120.5°	II	H	—	—	



第168図 ホルンフェルス5の長・幅(左),幅・厚(右)分布(単位mm)



第169図 第1ブロック石器実測図(結晶片岩1)

結晶片岩1 茶褐色を呈し、剝離性に富む石材である。粘板岩起源の片岩系の石材であるが、岩石名の正確な同定はできなかった。剝片、削片が1点ずつ、約4mの距離を距てて検出された。単なる礫片となる可能性もあるが、非焼成と見られる。

第63表 第1ブロック遺物属性表(結晶片岩1)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-23-4	剝片	35×12×8	3.60	158	C	33.5×7	89°	F	H	-	-	
2	12E-34-58	削片	11×17×7	0.89									

チャート17 比較的小型の礫の破片が3点ある。近接して検出された2点が接合する。表面、内面とも赤褐色に変色している。遺存度は3点合計して2/3位となる。

第64表 第1ブロック遺物属性表(チャート17)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-21	礫	10×14×6	0.70									1/2
2	12E-25-55	礫	33×37×25	40.54									1/2
3	12E-35-75	礫	42×26×25	30.10									

チャート18 遺存度の全く分らない破砕片が1点ある。礫表面のみ僅かに赤変している。

第65表 第1ブロック遺物属性表(チャート18)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-78	礫	19×20×13	4.37									

チャート19 砂岩質の部分と互層になる。暗灰色を呈し、礫表面のみ僅かに赤変している。遺存度不明の破片である。

第66表 第1ブロック遺物属性表(チャート19)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-83	礫	25×35×20	16.52									

チャート20 破砕した小破片であるため、本来の形状を知ることができない。礫表面はそれほど赤化していないが、被熱により破砕したものと見られる。

第67表 第1ブロック遺物属性表 (チャート20)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-35-73.	礫	25×33×18	14.73									

チャート21 この母岩の遺存度も碎片化していて不明。同一区から2点出土しているが、両者とも暗赤色に焼けている。近接して出土し接合する。

第68表 第1ブロック遺物属性表 (チャート21)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-35-76	礫	28×16×12	4.85									1/2
2	12E-35-77	礫	43×27×11	14.46								1/2	

チャート22 6点あるがいずれも細片化していて原礫の状態を窺うことはできない。6点中4点が赤化しているが、2点は判然としない。本母岩に限らず、チャートには細片化しているものが目立つ。石質に由来するものであろう。

第69表 第1ブロック遺物属性表 (チャート22)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-80	礫	19×28×10	5.04									1/3 a
2	12E-25-97	礫	22×14×9	3.93									1/3 b
3	12E-34-45	礫	19×25×19	8.26									1/3 a
4	12E-35-65	礫	19×22×13	4.83									1/3 b
5	12E-35-74	礫	18×28×12	5.46									1/3 a
6	12E-35-78	礫	32×20×17	11.86									1/3 b

砂岩13 小型偏平な礫で、約1/4を遺存している。2点あり接合する。受熱による色調の変化は認められないが、破断面は不定な鋸歯状となっており、被熱によって分断されたものと判断した。

第70表 第1ブロック遺物属性表 (砂岩13)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-105	礫	54×33×23	58.40									1/2
2	12E-25-106	礫	19×27×19	11.20									1/2

砂岩14 10点の破片があり、そのうち4点が接合する。全てを合わせても、遺存度は1/2以下と見られる。良く焼かれており、赤褐色をしている。特に礫面の変色は顕著である。

第71表 第1ブロック遺物属性表 (砂岩14)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-41	礫	35×33×21	20.99									1/4
2	12E-25-61	礫	12×15×11	2.03									
3	12E-25-62	礫	41×31×20	23.71									1/4
4	12E-25-75	礫	50×30×28	36.18									
5	12E-25-86	礫	21×26×19	9.34									1/4
6	12E-25-108	礫	37×35×28	37.05									
7	12E-25-112	礫	36×28×25	21.33									
8	12E-25-119	礫	16×21×14	4.59									
9	12E-24-90	礫	10×10×4	0.37									
10	T-12-フク土	礫	24×16×15	7.01									1/4

砂岩15 楕円形をした小円礫。完存しており、何らかの石器とも考えられるが、使用痕を留めていない。比較的緻密な石材で、被熱による変色はない。

第72表 第1ブロック遺物属性表 (砂岩15)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-45-7	礫	52×33×19	43.16									

砂岩16 偏平小型な円礫で、相互に接合する大小3点の破片がある。茶褐色に変色し、遺存度は1/4以下であろう。

第73表 第1ブロック遺物属性表 (砂岩16)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-23	礫	44×46×22	43.27									1/3
2	12E-25-103	礫	17×19×14	3.81									1/3
3	12E-25-114	礫	15×14×10	2.97									1/3

砂岩17 細かい破片が3点あり、接合する。赤褐色に変色し、遺存度は不明である。

第74表 第1ブロック遺物属性表 (砂岩17)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-63	礫	39×27×13	9.60									1/3
2	12E-25-115	礫	35×25×13	13.43									1/3
3	12E-35-67	礫	35×30×17	16.49									1/3

砂岩18 3点あるが、2点が接合する。暗赤褐色に変色している。全点合計してもその遺存度は1/4以下であろう。

第75表 第1ブロック遺物属性表 (砂岩18)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-27	礫	20×16×11	2.95									½
2	12E-25-101	礫	30×33×27	26.79								½	
3	12E-25-117	礫	35×28×22	26.03									

砂岩19 3点の破片があり、全て接合する。暗赤褐色に変色し、遺存度 1/4 以下。

第76表 第1ブロック遺物属性表 (砂岩19)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-24-87	礫	38×22×21	16.36									⅓
2	12E-25-102	礫	38×34×26	37.57								⅓	
3	12E-25-111	礫	19×11×11	1.90								⅓	

粘板岩2 4点の小破片がある。石核の断片である可能性もある。色調に変化は無く、遺存度は不明である。

第77表 第1ブロック遺物属性表 (粘板岩2)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-77	礫	20×13×5	1.23									
2	12E-25-82	礫	42×32×23	36.33									
3	12E-34-68	礫	25×22×11	5.22									
4	12E-35-42	礫	30×27×12	8.89									

流紋岩質凝灰岩26 相互に接合する3点の資料からなるが、いずれも細片で、遺存度は不明である。全体に暗赤褐色に変化している。

第78表 第1ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩26)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-35-26	礫	28×36×18	16.84									⅓
2	12E-35-69	礫	28×16×8	4.25								⅓	
3	12E-35-80	礫	22×26×12	7.27								⅓	

粗粒安山岩2 大粒の斑晶を含む安山岩を黒色緻密質なものと同様に粗粒安山岩とした。小型の礫で、剥落部はあるものの、ほぼ完形をしている。非常に良く焼けており、一部には黒色の煤状付着物も認められる。

第79表 第1ブロック遺物属性表（粗粒安山岩2）

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-109	礫	75×50×29	112.7									

粗粒安山岩4 小型の礫で、約2/3を遺存している。ほぼ半分が暗赤色になっている。

第80表 第1ブロック遺物属性表（粗粒安山岩4）

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-35-68	礫	45×32×25	43.99									

粗粒安山岩5 これも小型の礫で、約3/4を遺存している。非常によく焼けている。

第81表 第1ブロック遺物属性表（粗粒安山岩5）

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-116	礫	49×37×23	52.29									

流紋岩2 破砕片が1点あるのみである。淡紅色に変色している。

第82表 第1ブロック遺物属性表（流紋岩2）

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-74	礫	38×25×24	21.93									

流紋岩3 砕けた破片が4点あり、いずれも暗赤褐色化している。4点のうち3点が接合した。遺存度は1/4以下であろう。

第83表 第1ブロック遺物属性表（流紋岩3）

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-84	礫	21×18×15	4.14									
2	12E-25-100	礫	39×27×20	19.30									1/3
3	12E-25-113	礫	41×26×22	21.27									1/3
4	12E-35-27	礫	24×17×13	3.63									1/3

流紋岩4 大小5点の破片からなり、うち2点は接合する。赤褐色に変色している。遺存度は1/4以下。

第84表 第1ブロック遺物属性表 (流紋岩4)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-79	礫	7×5×4	0.15									
2	12E-25-104	礫	17×12×10	2.48									
3	12E-34-23	礫	39×44×24	40.41								½	
4	12E-35-39	礫	26×22×20	10.39								½	
5	12E-24-111	礫	20×15×9	2.39									

流紋岩5 13点に破碎している。2組5点が接合するが、大型の母岩が割れたものらしく、遺存度の推定は難しい。赤化は全ての礫面に認められる。

第85表 第1ブロック遺物属性表 (流紋岩5)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-24-29	礫	29×25×14	8.43									
2	12E-24-64	礫	21×25×14	6.50									
3	12E-24-98	礫	27×18×15	6.59									
4	12E-24-114	礫	31×25×17	10.78								½	
5	12E-25-6	礫	21×17×11	3.50								⅓	
6	12E-25-7	礫	37×37×26	30.45								⅓	
7	12E-25-110	礫	8×8×5	0.32									
8	12E-34-2	礫	12×13×9	1.53									
9	12E-34-44	礫	29×29×24	18.79									
10	12E-34-61	礫	19×16×12	3.43								½	
11	12E-35-79	礫	23×19×12	5.05								⅓	
12	12E-24-31	礫	24×25×11	5.26									
13	12E-24-117	礫	34×18×18	10.64									

流紋岩22 球状の小型礫の破片が2点ある。非焼成で何らかの石器の破片かもしれない。

第86表 第1ブロック遺物属性表 (流紋岩22)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-12	礫	24×30×15	11.22									
2	12E-35-61	礫	30×38×18	21.71									

流紋岩26 被焼成の破砕片2点を検出した。

第87表 第1ブロック遺物属性表 (流紋岩26)

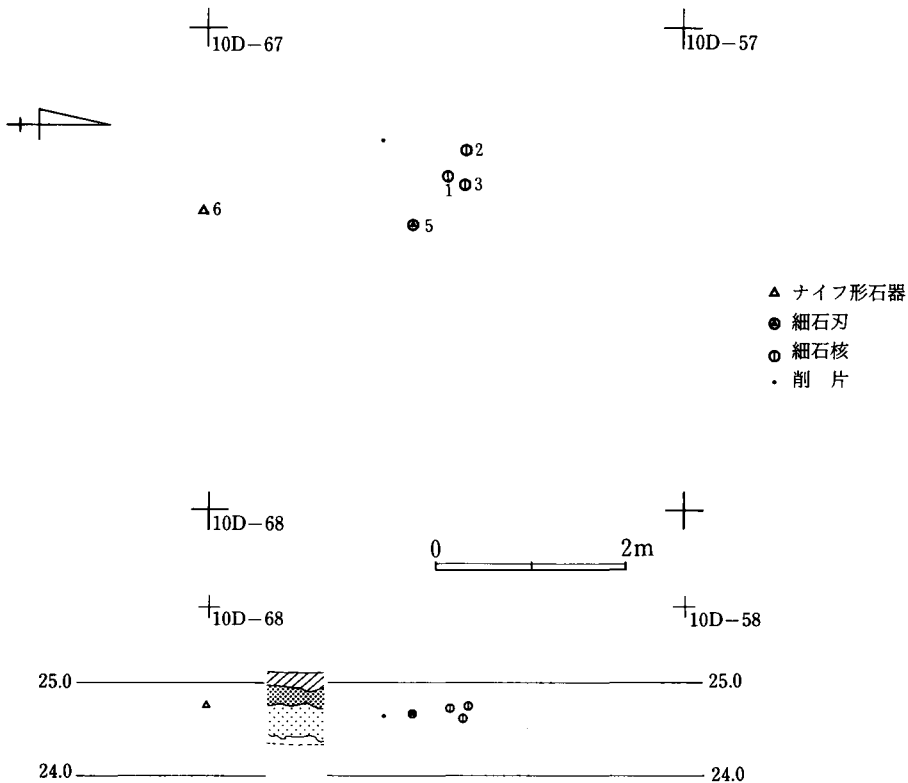
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	12E-25-94	礫	24×20×15	5.80									
2	12E-25-118	礫	17×13×8	1.70									

第2ブロック (第170・第171図、図版61)

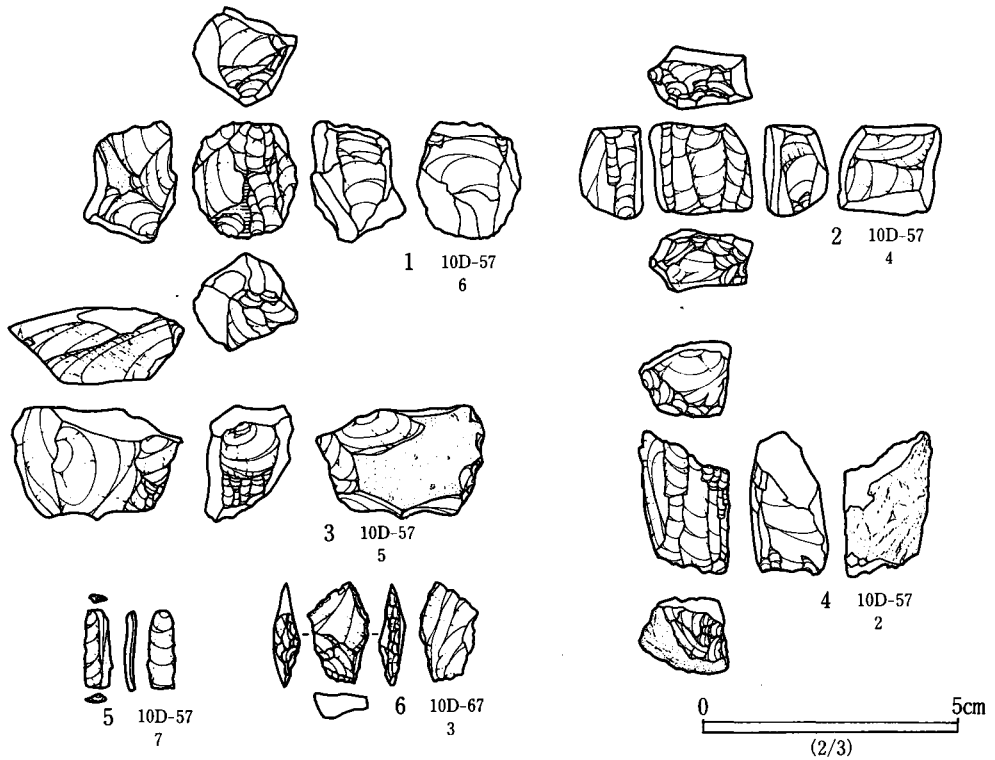
a) 分布状況 第6地点南端、10D-57区の狭い範囲に細石核3点、細石刃1点、削片1点が集中していた。この集中部の南側2mの地点のソフトローム層上面にナイフ形石器が単独で、また、西側にやや離れ、10D-55区からも細石核が遊離して出土している。以上を全て含めて第2ブロックとしているが、その出土状況からして、同時性が保証されているのは、10D-57

第88表 第2ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	細石刃	細石核	剥片U 剥片R	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 35	0	1	0	0	0	1	12.5	0.16	0.4
珪質頁岩 36	1	0	0	0	0	1	12.5	1.01	2.7
珪質頁岩 37	0	0	1	0	0	1	12.5	9.08	24.6
チャート 25	0	0	0	1	0	1	12.5	1.29	3.5
凝灰岩 15	0	0	1	0	1	2	25.0	6.00	16.2
凝灰岩 16	0	0	1	0	0	1	12.5	7.52	20.4
凝灰岩 17	0	0	1	0	0	1	12.5	11.88	32.2
総数	1	1	4	1	1	8	100.0	36.94	100.0
組成比 (%)	12.5	12.5	50.0	12.5	12.5				



第170図 第2ブロック遺物出土状況



第171図 第2ブロック石器実測図

第89表 第2ブロック遺物属性表

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	母岩
1	10D-57-2	細石核	28×18×15	7.52	4								凝灰岩16
2	10D-57-3	削片	11×10×4.5	0.38									凝灰岩15
3	10D-57-4	細石核	21×17×12	5.62	2								凝灰岩15
4	10D-57-5	細石核	35×25×14	11.88	3								凝灰岩17
5	10D-57-6	細石核	23×16×18	9.08	1								珩質頁岩37
6	10D-57-7	細石刃	16×5×2	0.16	5	4(3)	2.5×1	90°	II	-	+	H	珩質頁岩35
7	10D-67-2	剝片U	26×20×2.5	1.29		<i>ℓ</i>	-	-	II+III	F	+	-	チャート25
8	10D-67-3	ナイフ	12×20×6	1.01	6	6(4)	11×4.5	121°	II	-	+	-	珩質頁岩36

区の集中部のみである。

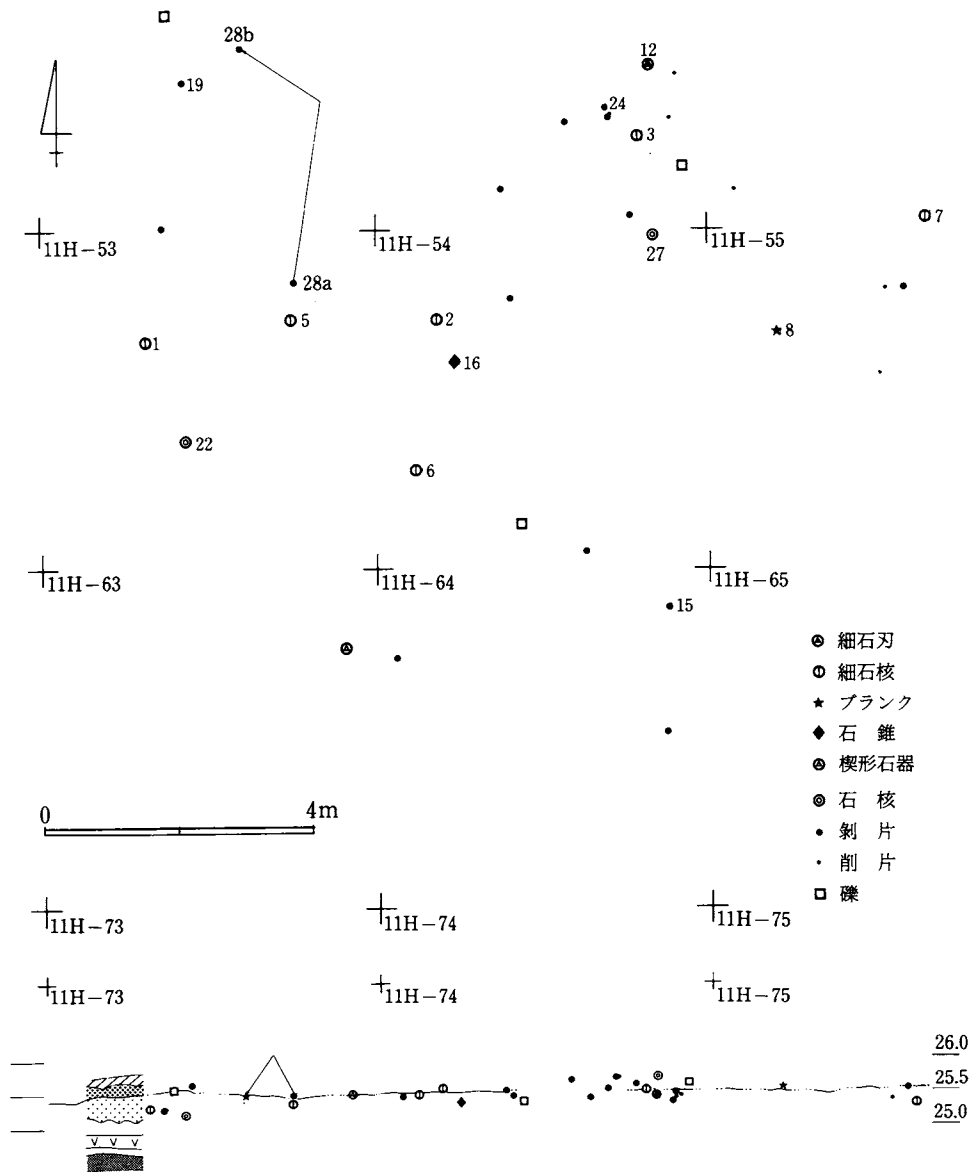
b) 出土遺物 8点の資料から構成されているが、その内訳は既に前項で触れた。ナイフ形石器を除いて、全て構成1に帰属する点が著しい特徴である。

細石核1は両設打面の3類、2も3類、3は7類、4は2類a種である。これらの細石核から剝離された細石刃は1点もない。5は細石刃で、尾部端を少し折り取った準完形である。6は切出形石器。打面の反対側の側縁に2次加工がある。刃部にも細かい剝離痕があるが、こちらは使用痕と見られる。

c) 石器石材 珉質頁岩 3種、チャート 1種、凝灰岩 3種という母岩構成を示し、このうち、凝灰岩15が 2点あるが、それ以外は全て 1母岩 1点という構成になっている。細石器と関連する母岩は、いずれも第 1ブロックに同質の母岩が存在するが、同一母岩と認定できるものはない。ただし、凝灰岩15とした乳白色の流紋岩質のものは、第 1ブロックの凝灰岩13と酷似した外観を呈し、あるいは同一の母岩に由来するかもしれない。

第 3 ブロック (第172・第173図、図版62)

a) 分布状況 第 9 地点にある。この地点には、ソフトローム層中に 3枚の文化層の重複が



第172図 第 3 ブロック 遺物出土状況

第90表 第3ブロック遺物集計表

母岩番号	細石刃	細石核	プランク	石鏃	楔形石器	剥片U 剥片R	石核	剥片	削片	礫	原石	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
チャート 37	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.1	3.54	0.5
チャート 39	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.1	3.56	0.5
チャート 40	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.1	14.19	2.2
珪質頁岩 44	0	1	0	1	0	0	0	3	0	0	0	5	5.7	7.75	1.2
珪質頁岩 46	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	2.3	2.72	0.4
珪質頁岩 47	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.1	0.34	0.1
珪質頁岩 48	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.1	1.79	0.3
珪質頁岩 50	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	3	3.4	3.75	0.6
珪質頁岩 51	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.1	0.51	0.1
珪質頁岩 65	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.1	1.82	0.3
珪質頁岩 70	0	1	0	0	1	0	0	4	0	0	0	6	6.8	35.75	5.5
珪質頁岩 76	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2.3	0.23	0.1
珪質頁岩 126	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.1	9.32	1.4
頁岩 5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.1	9.90	1.5
頁岩 6	0	0	0	0	0	0	1	2	1	0	0	4	4.5	115.02	17.9
凝灰岩 20	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	2.3	3.12	0.5
凝灰岩 21	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1.1	0.32	0.1
凝灰岩 22	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.1	2.86	0.4
凝灰岩 39	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.1	1.05	0.2
珪質粘板岩 4	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	3	3.4	28.15	4.4
安山岩 67	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.1	7.96	1.2
安山岩 71	0	0	0	0	0	0	4	5	0	0	0	9	10.1	132.87	20.7
安山岩 72	0	0	0	0	0	1	0	4	2	0	0	7	7.9	27.47	4.3
安山岩 74	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1.1	12.91	2.0
安山岩 75	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	2.3	13.83	2.2
安山岩 76	0	0	0	0	0	0	0	5	2	0	0	7	7.9	23.95	3.7
安山岩 77	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1.1	0.73	0.1
安山岩 78	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	2.3	0.78	0.1
安山岩不明	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	2.3	0.87	0.1
砂岩 34	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.1	13.07	2.0
砂岩 36	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.1	0.95	0.1
砂岩 37	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.1	25.49	3.9
砂岩 38	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	2.3	3.99	0.6
メノウ 10	0	0	0	0	0	2	1	1	1	0	0	5	5.7	17.47	2.7
ホルンフェルス 8	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.1	6.43	1.0
石英 1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	3	3.4	16.44	2.6
砂岩 35	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1.1	69.60	10.9
砂岩 39	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1.1	9.49	1.5
花崗岩 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1.1	10.86	1.7
総数	3	6	3	1	2	7	6	41	15	3	1	88	100.0	640.85	100.0
組成比 (%)	3.4	6.8	3.4	1.1	2.2	7.9	6.8	46.6	17.0	3.4	1.1				

観察され、各々の垂直分布状況を詳細に比較対照することによって、砂川期の石刃ナイフを含む文化層→東内野型尖頭器を含む小型石槍の文化層→細石器を含む文化層という重要な層位的知見を得ることができた。

遺物は11H-54区を中心に周辺各区に及び、東西15m、南北10mぐらいの広い範囲内の各処から点々と検出されている。北側で第10ブロックと切り合い、遺物の混在が認められたが、第10ブロックが黒曜石の石槍製作地点であったため、両者の分離は比較的容易であった。また、東側にも第16ブロックが位置しているが、幸い両ブロックの間には、幅5m程の無遺物帯があり、遺物の混在は殆んど認められなかった。各器種、礫片の分布は散漫でまとまりがないが、細石核はブロック中央に帯状に分布していた。また、ソフトローム層の上部に耕作による攪乱の及ぶ部分があり、一部の遺物の2次的な移動が想定される。

b) 出土遺物 総数88点の遺物を検出した。組成は、細石刃3点、細石核6点、同母核3点、石錐1点、楔形石器2点、UFあるいはRF7点、石核6点、剥片41点、削片15点、礫片3点、原石1点となり、この段階の大体の器種を認めることができる。大枠として見ると、構成1と構成2の複合した内容であり、構成3を保有しないことが特徴であろう。

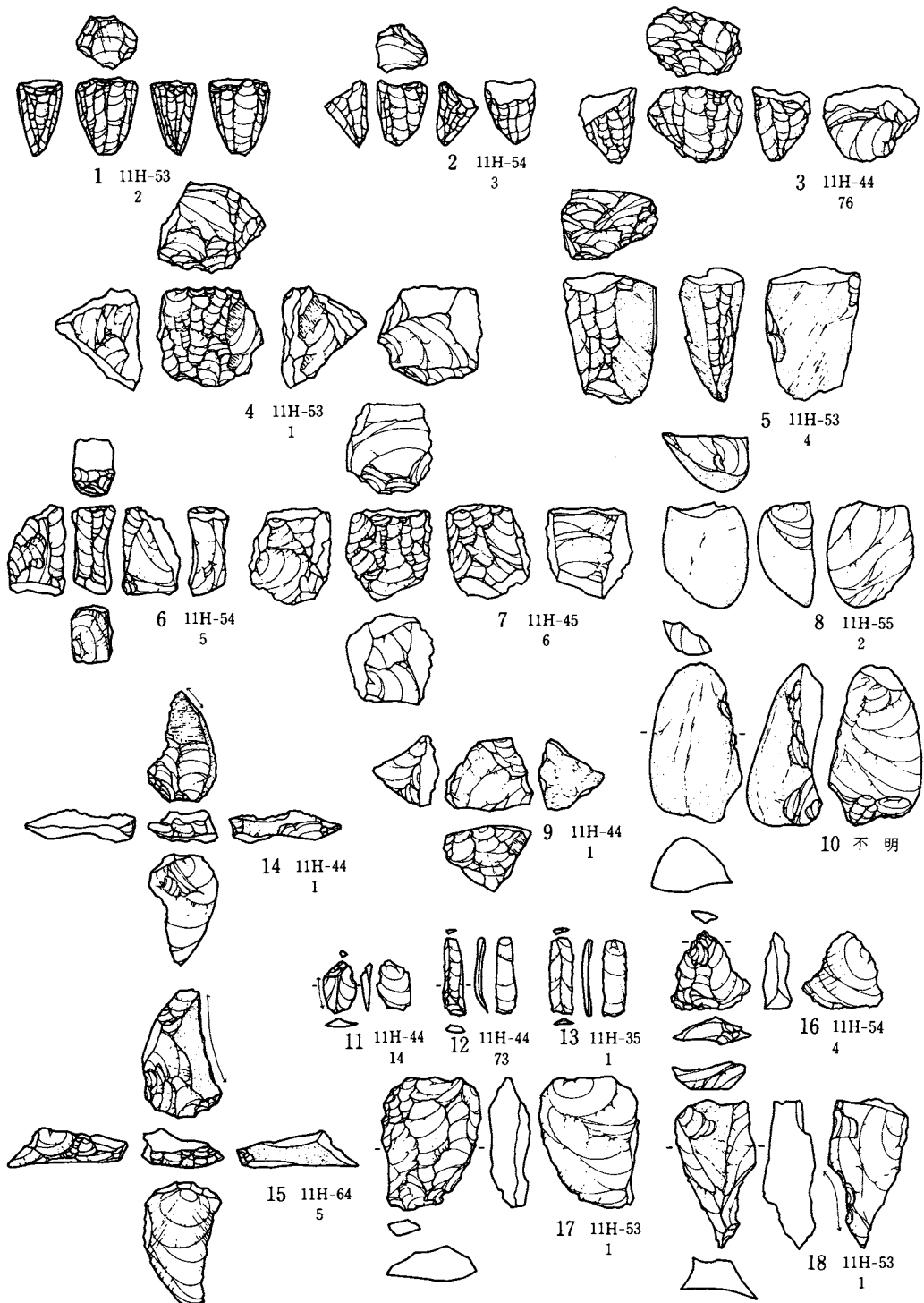
細石核には各種あり、1、2が1類、3、5、7が2類a種、4が5類、6は7類となる。1は円錐形の典型的な例で、打面角は83°~96°の間にあり、88°前後が平均となろうか。打面調整は明らかに存在し、部分的に頭部調整とも見られる小剥離痕もある。2もこれに準じるが、打面の形状は不正な台形をしており、2類以下の諸例に近い。打面が内彎曲しているため、打面角はまちまちで65°~99°の間に分散するが、前例よりも小さくなる傾向は明らかである。打面は大き目の剥離面1枚と、小さ目のもの2枚からなる。大き目のものは、細石核正面の細石刃剥離によって切られるが、側面のもを切り、また、小さ目の2枚も、細石核背面の剥離痕を切っている。明らかに打面の修正あるいは再生が介在している。3以下の諸例は、第1ブロックに類例が多くあり、第1ブロックにおける細石核の組成と平行的な関係をもつ点は重要である。

典型的な細石刃は2点しかない(12、13)。細石核の個体数と比較して均衡を失している。しかも、細石刃と同一母岩の細石核は1例もない。11は不定形だが、細石刃かもしれない。

8~10、28は細石核の母核となる可能性のあるものを示した。いずれも、比較的小型のチャートの円礫の分割されたもので、28はその接合状況から、具体的に分割の過程の一端を示している。おそらく、8、28d→10→9というような過程を辿って母核が調整されていくのであろう。細石核5は、細石刃剥離の初期段階を示し、以上の過程に継続するものである。

14~27は各種の剥片とそれを生産した石核を示している。大きく2種に分けられる。

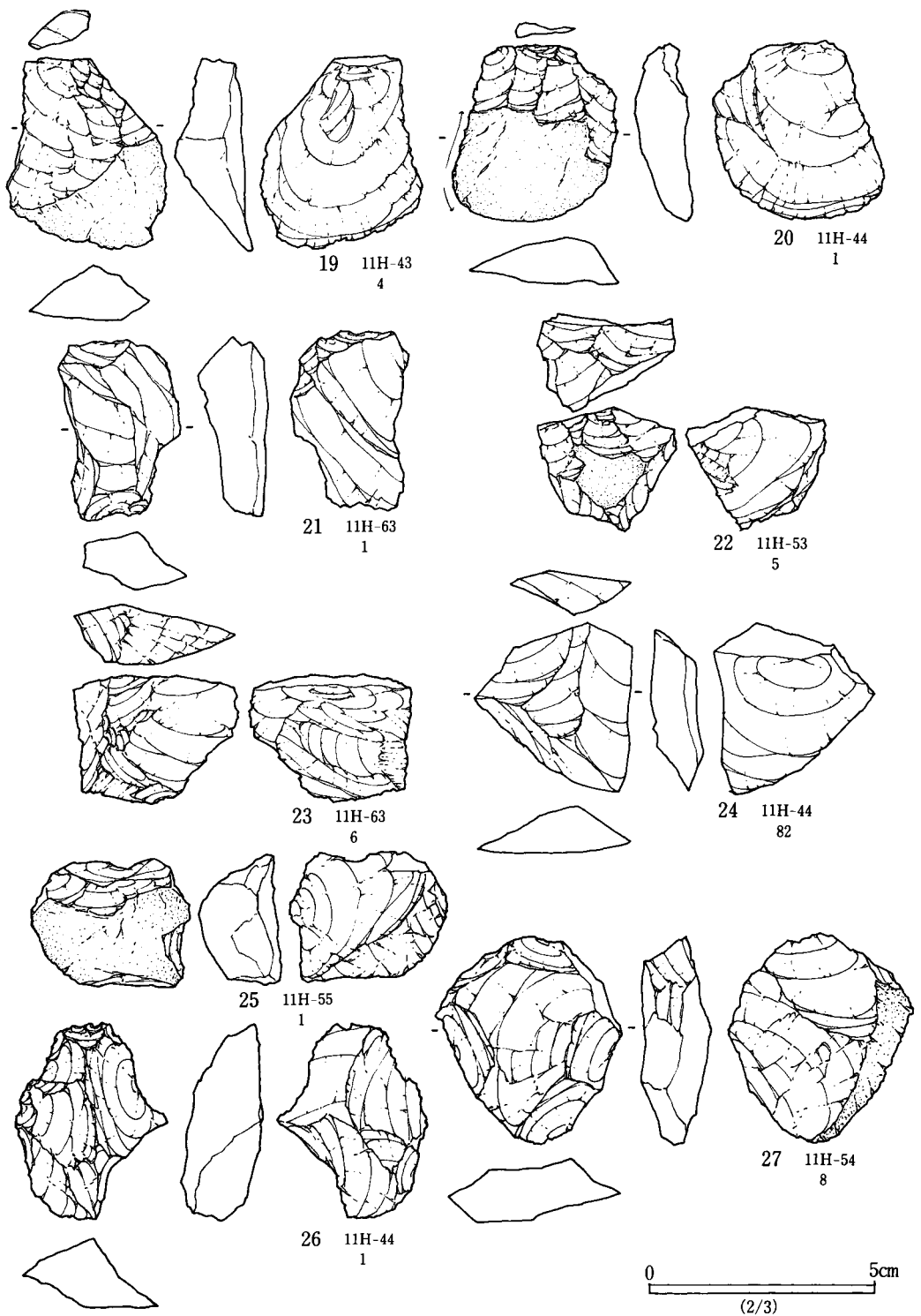
(1) 構成1に関連するもの。14~16、18、22などがこれに含まれる。28a~cも同様である。構成1の調整剥片は、既に第1ブロックで詳しく観察したように、石器として利用される場合が多々あり、ある意味で、細石核の形成過程は、有目的剥片の生産過程でもあるという二



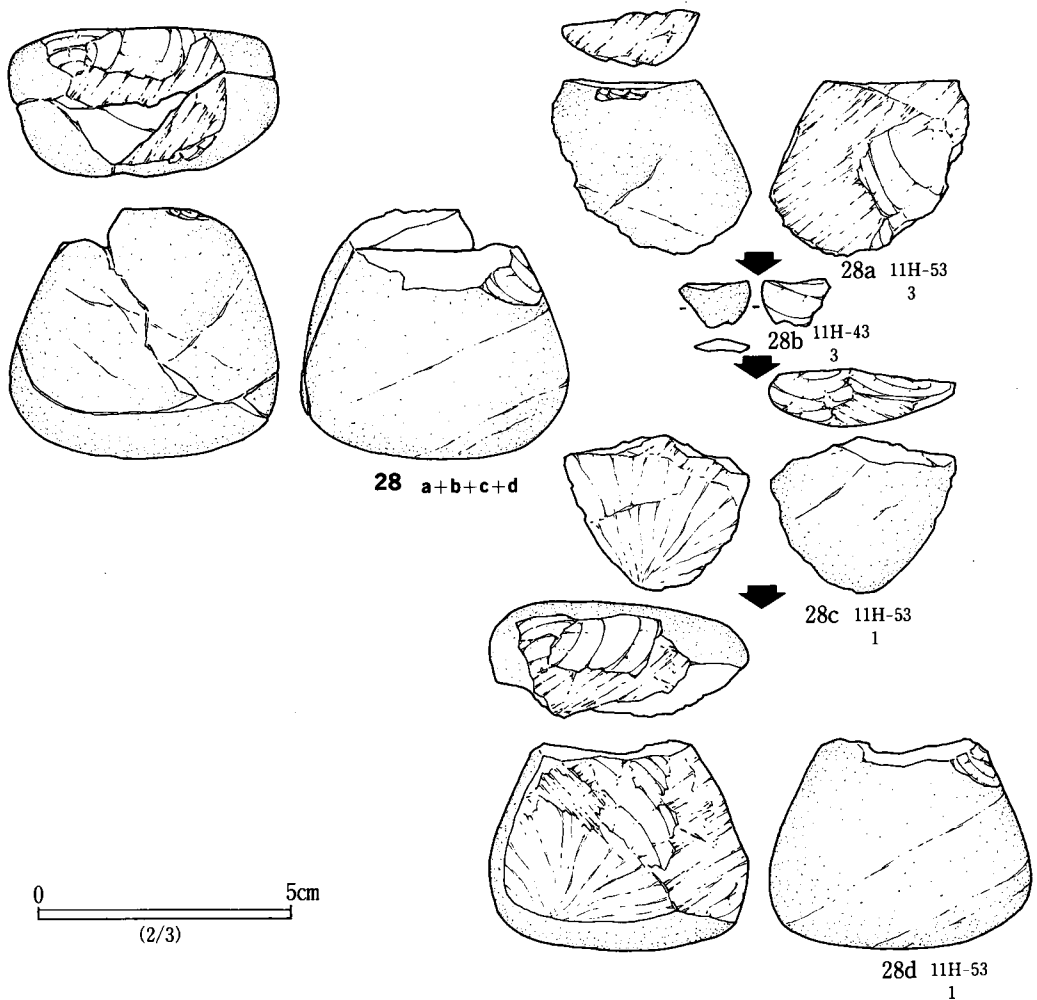
0 5cm

(2/3)

第173図 第3ブロック石器実測図(1)



第174図 第3ブロック石器実測図(2)



第175図 第3ブロック石器実測図(3)

重性をすら指摘してよい程である。本ブロックにおいても、全く同様の傾向が指摘される。16は石錐に再加工され、14、15の再面再生剥片、18などにも使用痕が著明である。打面再生剥片はこの2例以外にもう1例同趣のものがあるが、3例共に細石核2類b種、あるいは7種に関係している。これらはいずれも細石核の本体を伴っておらず、再生剥片のみが石器として移動した可能性すらある。

(2) 構成2に関連するもの。17、19～22、24～27の諸例がこの類に含まれる。石核の構成を見ると、3類(25～27)のみの単純な構成を示しているが、既に指摘したように、3類は1類を前提としているので、2類を欠いていると評価すべきであろう。例えば、22などは1類から得られた剥片であろう。使用痕の観察には不適な素材が多用され、その有無の検定には大きな制約があるが、20には明瞭な刃こぼれが認められる。また、21は楔形石器として利用されている。

c) 石器石材 第3ブロックには、珪質頁岩10種、(流紋岩質)凝灰岩5種、安山岩8種、チャート3種、砂岩6種、石英1種、メノウ1種、頁岩2種、ホルンフェルス1種、珪質粘板岩1種、合計38種にも及ぶ母岩が認められた。このうち、砂岩の3種と花崗岩は礫片であるため、石器の素材としては34母岩が識別された。これらの母岩を構成別に分類すると、構成1が、珪質頁岩25点、凝灰岩6点、チャート3点、頁岩5点、珪質粘板岩3点、計42点、構成2が、安山岩を主体とする残余の45点を占め、資料数からは拮抗している。また、この両者の石材構成は、第1ブロックと平行関係にある。礫片はいずれも細片だが、非焼成のものばかりで、何らかの石器の破片を含むかもしれない。

以上の資料中、ブロック内での剥片剥離を伴う工作の可能性が認められるものは、安山岩のうち、比較的多くの資料を含む3母岩(71、72、76)と、細石核の母核の製作を行っている頁岩6が挙げ得るにすぎない。6点の資料を保有する珪質頁岩70の場合も、調整剥片5点と、細石核1点から構成されているが、前者は細石核と共に、既に剥片化した状態で、ブロック内に搬入された可能性もあり、判断が難しい。これら以外の母岩は、いずれも4点以下の資料しか含んでおらず、就中単独資料のものが23母岩にも達している。

第91表 第3ブロック遺物属性表

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	母岩
1	11H-25-10	剥片 U	31×30×12	9.53		1(0)	15 × 5.5	122°	II	H	+	—	メノウ10
2	11H-34-1	削片	13×11×2	0.26									安山岩76
3	11H-34-4	削片	14×17×3	0.48									安山岩72
4	11H-34-5	削片	15×8×4.5	0.28									メノウ10
5	11H-34-22	剥片	39×21×7	3.63		—	—	—	不明	F	不明	B	安山岩76
6	11H-34-32	剥片	40×31×12.5	7.96		1(0)	21 × 6	117°	II+IV	F	—	—	安山岩67
7	11H-34-52	剥片	29×23×6.5	3.92		—	—	—	II	F	不明	B	安山岩76
8	11H-34-61	剥片	24×21×8	3.83		—	—	—	不明	H	不明	B	安山岩76
9	11H-35-1	細石 刃	17×6×1.5	0.13	13	2(0)	3 × 0.5	108°	II	—	+	H	珪質頁岩76
10	11H-35-1a	原石	40×19×18	16.42									石英1
11	11H-35-1b	剥片	22×11×3.5	0.93		—	—	—	II	H	—	B	メノウ10
12	11H-35-1c	剥片 U	28×18×5.5	2.63		c	12 × 4	102.5°	II	H	+	—	珪質頁岩50
13	11H-35-1d	削片	14×16×3.5	0.52									珪質頁岩50
14	11H-35-5	削片	14×13×4	0.60		2(0)	10 × 2	95.5°	⑩	—	—	H	珪質頁岩50
15	11H-35-22	剥片	17×9×6	0.51		—	—	—	II	—	—	M	珪質頁岩51
16	11H-43-1	剥片	17×28×6.5	1.82		1(0)	11 × 2.5	91°	II	H	—	R	珪質頁岩65
17	11H-43-2	礫	28×31×10	9.49									砂岩39
18	11H-43-3	削片	9×14×1.5	0.22	28b								頁岩6
19	11H-43-4	剥片	46×36×13.5	17.38	19	1(0)	14 × 6	108°	⑩	F	—	—	安山岩71
20	11H-43-5	剥片	15×14×7.5	1.51		1(0)	10 × 4.5	91°	IV	O	—	—	珪質頁岩70
21	11H-44-1a	細石 刃	12×10×3	0.34		1(0)	4.5 × 1	92.5°	II	H	+	—	珪質頁岩47
22	11H-44-1b	剥片	25×15×6	1.79	14	3(0)	14 × 4	106°	⑩	F	—	—	珪質頁岩48
23	11H-44-1c	剥片	24×29×8	3.87		1(0)	17 × 6	98.5°	⑩	F	—	—	珪質頁岩70

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	母岩
24	11H-44-1d	剥片 U	16×23×5	1.13		1(0)	6 × 2	96.5°	㊸	F	+	—	凝灰岩20
25	11H-44-1e	削片	12×12×3	0.32									凝灰岩21
26	11H-44-1f	石核	43×32×18.5	18.21	26								安山岩71
27	11H-44-1g	剥片	35×40×10	16.34		ℓ	—	—	㊸+㊹	F	—	—	安山岩71
28	11H-44-1h	削片	23×22×9	4.39									安山岩72
29	11H-44-1i	削片	20×10×7	1.75		2(0)	20.5×9.5	126°	II	H	—	—	安山岩72
30	11H-44-1j	剥片	19×22×5.5	1.98		C	18.5×5.5	89°	II	F	—	—	安山岩75
31	11H-44-1k	剥片	19×51×13	8.04		—	—	—	不明	O	不明	B	安山岩76
32	11H-44-1ℓ	剥片	36×10×9.5	3.54		P	—	—	㊸+㊺	O	—	—	チャート37
33	11H-44-1m	ブランク	20×16×13.5	3.56	9								チャート39
34	11H-44-1n	剥片	42×33×10	13.07	20	1(0)	10 × 3	87.5°	㊸	F	—	+	砂岩34
35	11H-44-1o	削片	23×12×7	1.65									砂岩38
36	11H-44-1p	石核	26×13×14	4.60									メノウ10
37	11H-44-1q	剥片	33×30×0.5	6.43		3(1)	27.5×6	91°	I	F	—	—	ホルンフェルス 8
38	11H-44-2	剥片	42×29×9	11.10		1(0)	21 × 3.5	88°	I	F	—	—	安山岩72
39	11H-44-14	剥片 U	11×7×2.5	0.11	11	P	—	—	II	F	+	—	珪質頁岩46
40	11H-44-17	剥片	17×11×5	0.75		—	—	—	不明	H	—	B	珪質頁岩44
41	11H-44-19a	削片	6 × 7 × < 1	< 0.01									石英 1
42	11H-44-19b	削片	7 × 6 × < 1	< 0.01									石英 1
43	11H-44-22	削片	11×7×5	0.26									安山岩76
44	11H-44-71	剥片	27×20×6	3.12		1(0)	21 × 7	134.5°	㊹	H	—	—	安山岩71
45	11H-44-72	剥片	31×23×9	7.72		3(0)	12 × 3	108.5°	㊹	F	—	—	珪質粘板岩 4
46	11H-44-72	削片	12×8×4.5	0.29									安山岩不明
47	11H-44-73	細石 刃	17×5×2.5	0.10	12	1(0)	1.5×0.5	97°	II+III	F	—	—	珪質頁岩76
48	11H-44-76	細石 核	17×20×2.5	4.45	3								珪質頁岩44
49	11H-44-77	礫	42×21×10	10.86									花崗岩 1
50	11H-44-79	剥片	21×13×2.5	0.58		—	—	—	II	H	—	B	安山岩不明
51	11H-44-81	剥片	30×20×9.5	4.24		5(1)	26.5×9	106.5°	II+IV	F	—	—	安山岩72
52	11H-44-82	剥片	39×37×12	11.85	24	1(0)	26.5×10	135.5°	II+IV	F	—	—	安山岩75
53	11H-45-1	削片	19×11×4.5	0.73									安山岩77
54	11H-45-1a	削片	10×10×6	0.59									安山岩78
55	11H-45-1b	削片	7 × 9 × 3.5	0.19									安山岩78
56	11H-45-6	細石 核	18×20×17	9.32	7								珪質頁岩126
57	11H-53-1a	剥片 U	33×17×10	14.33	18	2(1)	16 × 5	105.5°	㊸+㊺	F	+	—	珪質粘板岩 4
58	11H-53-1b	細石 核	21×22×17	7.90	4								珪質頁岩70
59	11H-53-1c	剥片	31×19×13	10.06		—	—	—	II	—	—	M	安山岩71
60	11H-53-1d	剥片	23×28×8	6.57	17	ℓ	—	—	II+III	O	—	—	安山岩71
61	11H-53-1e	剥片 U	23×27×5	3.76		ℓ	—	—	II+III	H	—	—	安山岩72
62	11H-53-1f	剥片	25×16×5.5	1.75		ℓ	—	—	㊸+㊺	F	—	—	安山岩72
63	11H-53-1g	剥片	21×14×4	0.95		1(0)	10.5×3	85.5°	I	F	—	—	砂岩36
64	11H-53-1h	剥片	22×16×6	2.34		2(0)	14.5×6.5	124.5°	II	H	—	—	砂岩38
65	11H-53-1i	剥片 U	20×13×9	2.13		ℓ	—	—	㊸+㊺	O	+	—	メノウ10
66	11H-53-1j	石核	41×52×22	77.40	28d								頁岩 6
67	11H-53-1k	剥片	38×31×13	17.18	28c	—	—	—	I	F	—	L	頁岩 6
68	11H-53-2	細石 核	16×12×10.5	1.99	1								凝灰岩20

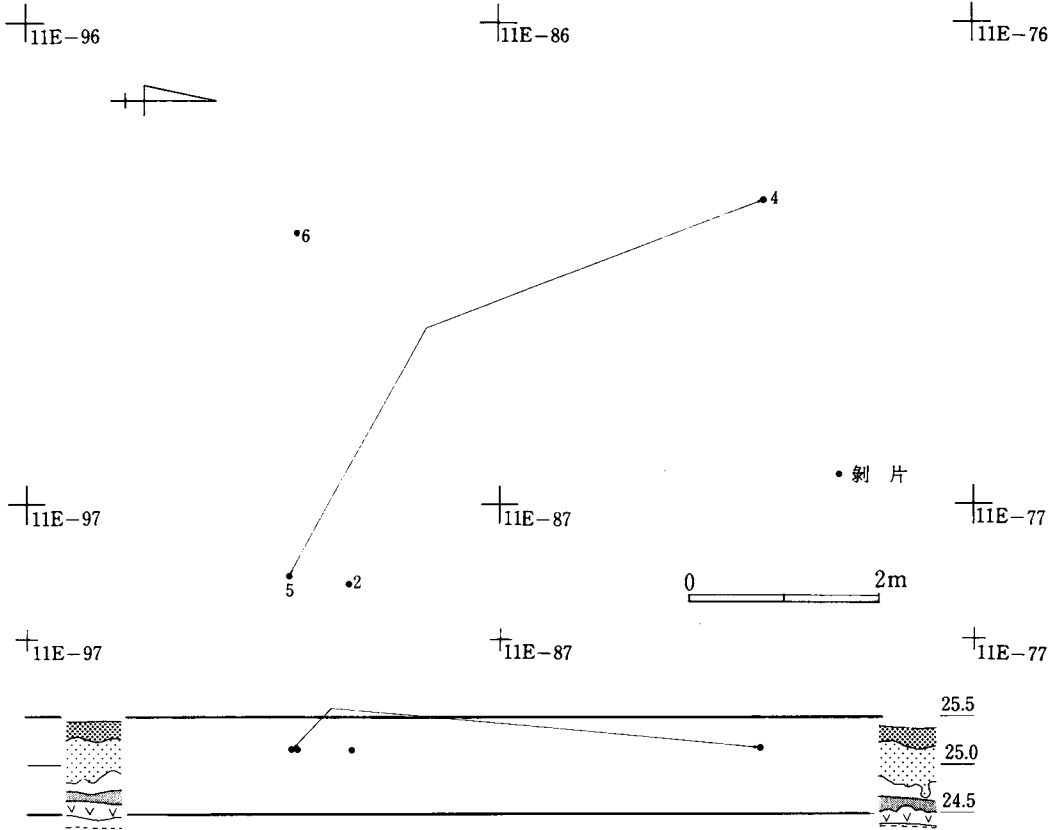
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	母岩
69	11H-53-3	剥片	43×32×14	20.22	28a	1(0)	27 × 10.5	86°	I	F	—	R	頁岩6
70	11H-53-4	細石核	29×20×14	9.90	5								頁岩5
71	11H-53-5	石核	30×27×20	16.44	22								安山岩71
72	11H-54-2	剥片	45×34×17	25.49		—	—	—	㊸	F	—	B	砂岩37
73	11H-54-3	細石核	13×12×11.5	1.40	2								珩質頁岩44
74	11H-54-4	石錐	17×16×6	1.32	16								珩質頁岩44
75	11H-54-5	細石核	20×12×9.5	2.61	6								珩質頁岩46
76	11H-54-6	礫	50×40×27	69.60									砂岩35
77	11H-54-7	剥片	34×18×7.5	4.01		—	—	—	不明	F	不明	B	安山岩76
78	11H-54-8	石核	43×36×14.5	25.25	27								安山岩71
79	11H-55-1	石核	35×28×16	19.50	25								安山岩71
80	11H-55-2	プランク	24×19×12	6.10	8								珩質粘板岩4
81	11H-55-4	剥片	14×17×5	0.72		1(0)	5 × 1.5	99°	II+IV	H	—	—	珩質頁岩44
82	11H-63-1	楔形石器	40×26×13.5	12.91	21								安山岩74
83	11H-63-2	楔形石器	19×21×7	2.52									珩質頁岩70
84	11H-63-6	剥片	37×30×15.5	15.47	23	2(0)	35 × 12	107°	II	F	—	—	珩質頁岩70
85	11H-64-2	剥片	25×16×12	3.56		5(0)	15 × 3	106°	㊸+㊹	F	—	—	珩質頁岩44
86	11H-64-4	剥片	16×16×6	1.05		1(0)	15 × 2	108.5°	II	F	不明	—	凝灰岩39
87	11H-64-5	剥片	28×18×8	2.86	15	10(3)	16.5 × 4	107°	㊸+㊹	+	—	—	凝灰岩22
88	番号不明a	剥片U	35×15×8	4.48		1(0)	6 × 8	126.5°	F	H	+	R	珩質頁岩70
89	番号不明b	プランク	35×22×16	14.19	10								チャート40

第4ブロック (第176・177図、図版61)

a) 分布状況 第1ブロックがある第4地点の北側に接して設定された16地点から検出された。第16地点には3箇所のブロックがあるが、このうち、南北に第IV文化層第34、35ブロックが位置し、ほぼ中央から本ブロックを構成する資料が出土している。6点の石器からなる小規模なブロックであるが、同一母岩の存在と接合関係を媒介として、第1ブロックとの関連が求められる点は、重要である。遺物の分布は、11E-76、86、87の3区にまたがり、比較的広範囲を占めるが、分布密度は極めて疎である。垂直分布を見ると、ソフトローム層に僅かにくい込むものが多い。

第92表 第4ブロック遺物集計表

母岩番号	剥片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
砂岩 9	3	3	50.0	136.88	57.6
ホルンフェルス 4	2	2	33.4	93.29	39.2
ホルンフェルス 5	1	1	16.6	7.63	3.2
総数	6	6	100.0	237.80	100.0
組成比 (%)	100.0				



第176図 第4ブロック遺物出土状況

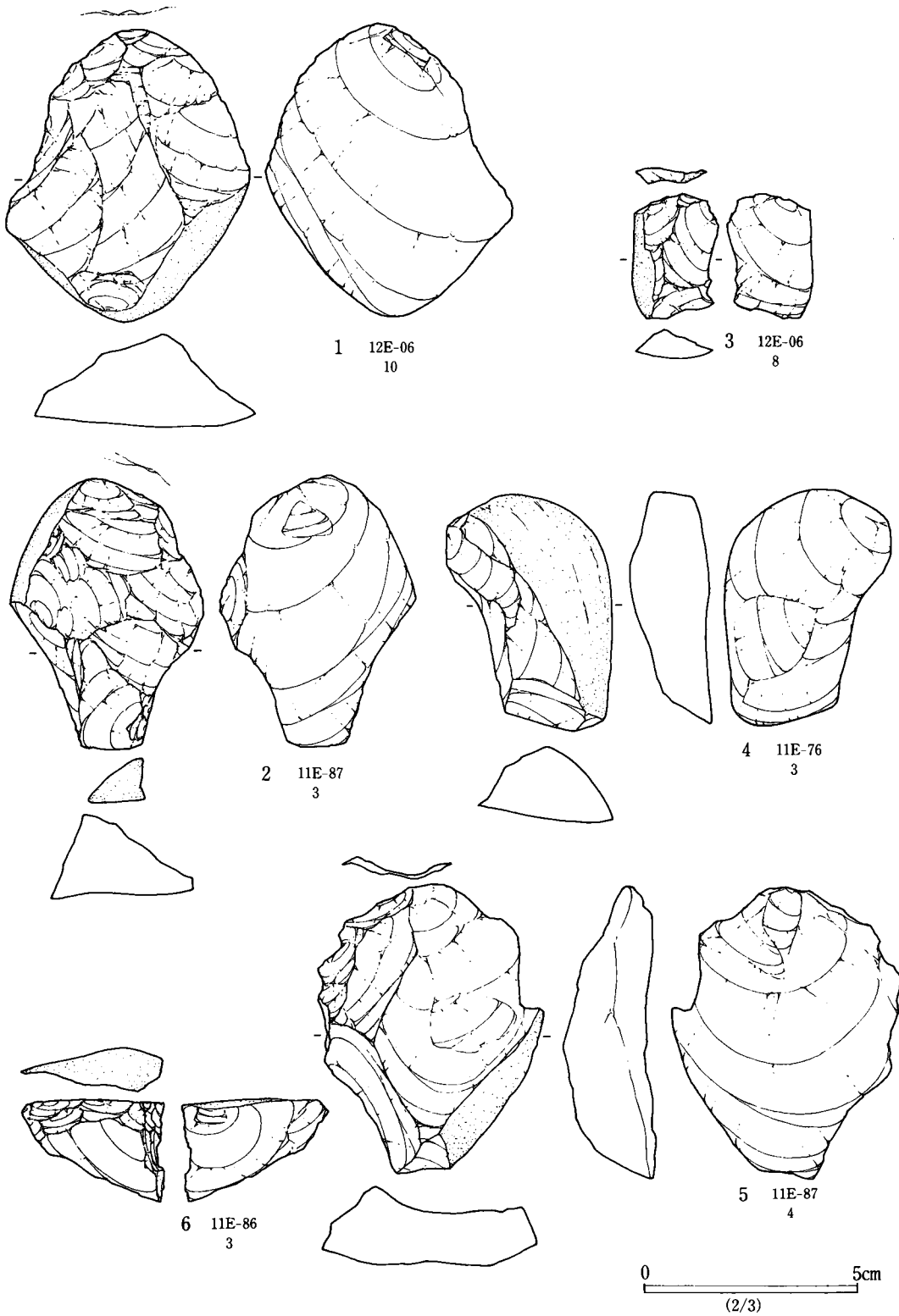
b) 母岩構成 6点の遺物は全て第1ブロックに同一の母岩が存在し、それらは構成3に帰属している。

砂岩9 3点の剥片から構成されている。比較的大型のもの2点、小型のもの1点があり、大型のもののうち1点は、打面と作業面との入れ換えを示唆している。遺存状況から、第1ブロックで作出された剥片の一部が選択的に搬入された可能性が強い。

第93表 第4ブロック遺物属性表 (砂岩9)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	11E-87-3	剥片	63×45×21.5	55.52		ℓ	—	—	Ⅱ+Ⅳ	O	不明	—	
2	12E-06-8	剥片	29×19×7	3.96		2(0)	17 × 3.5	119.5°	Ⅱ	F	不明	—	
3	12E-06-10	剥片	53×63×23.5	77.4		ℓ	—	—	Ⅱ	O	不明	—	

ホルンフェルス4 剥片2点からなる。両者共に第1ブロックの仲間と接合する。第1ブロックの一連の剥離過程のごく一部を構成する剥片であること、削片的性格の小型剥片がブロッ



第177図 第4ブロック石器実測図

ク内に遺存していないことなど、打割器の削片としては理解の難しい遺存状況であり、やはり、砂岩9と同様に企図的搬入品と理解したい。しかし、このことは、この母岩の石核が、刃打割器として機能しなかったということでは決してない。

第94表 第4ブロック遺物属性表（ホルンフェルス4）

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	11E-76-3	剥片	57×37×19	37.31	156 ℓ	ℓ	—	—	㊶	F	—	—	1/9
2	11E-87-4	剥片	56×63×21	55.98	156 k	1(0)	29 × 2	125.5°	㊶+㊷	F	—	—	1/9

ホルンフェルス5 比較的小型の剥片が1例ある。前記2母岩と同様の理解が可能であろう。

第95表 第4ブロック遺物属性表（ホルンフェルス5）

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	接合
1	11E-86-3	剥片	36×23×12	7.63		1(0)	32 × 11	96.5°	㊶	H	—	—	

B. 第II文化層 a 本文化層は御塚山I a期とほぼ平行な時期の文化層であると考えられ、ソフトローム層の上部を産出層準としている。4箇所のブロックから構成されているが、各ブロックは小規模で遺物の量も少ない。また、相互に関連性を持たず、遺跡内に散在している。層厚の薄いソフトローム層内で、前後の文化層と層準差を検知することは困難である場合が多く、明確な層位的出土状況を基礎として文化層が設定されている訳では決してない。多くは特徴器種の型式学的交差による設定であることに注意したい。

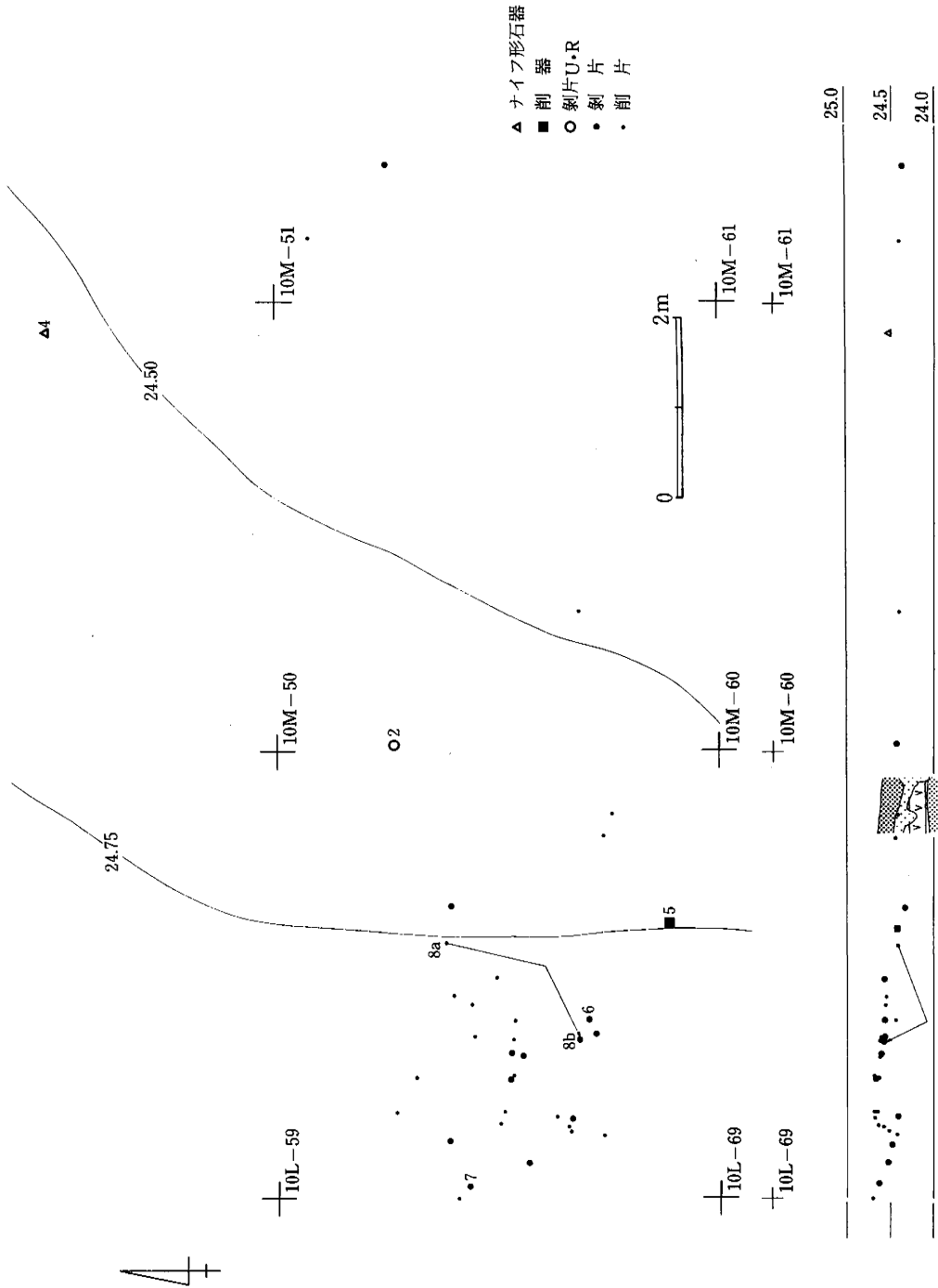
第5ブロック（第178・第179図、図版62）

a) 分布状況 第1地点の谷頭部に集中する陥し穴群に取り囲まれるような状態で石器類の散布が認められ、これを第5ブロックとした。ブロックは10L-59区にほぼ収まる範囲に広がっているが、西から東へ緩やかに傾斜する地形に応じて、斜面下方にも少量の遺物が飛散している状態が観察される。

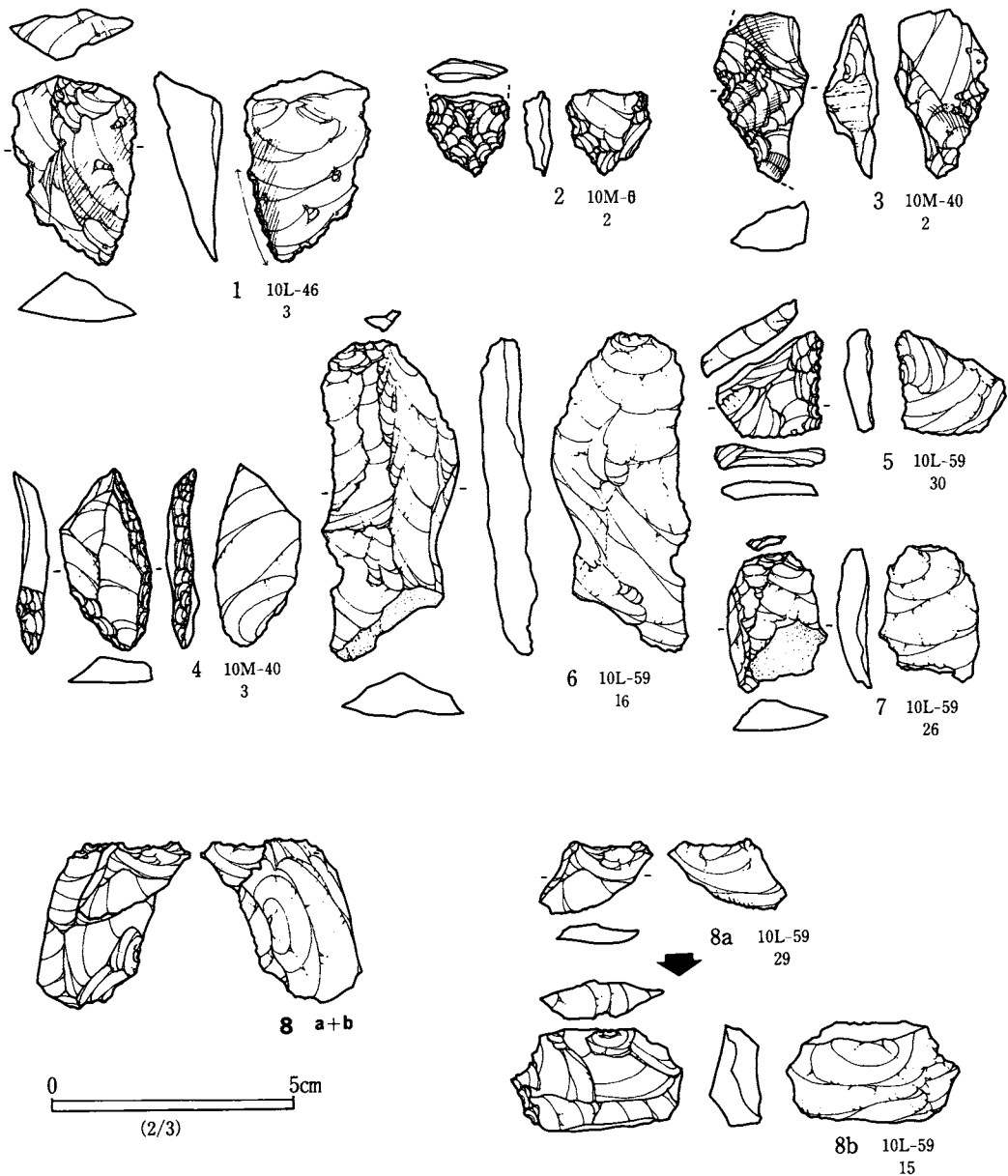
ブロックの平面的分布は、10L-59区中央西寄りの径約2.5mの範囲に大体の遺物が集中しているが、それは全て剥片類によって構成されている。削器はその外縁部に、そしてナイフ形石器はブロック外にあり、本ブロックに帰属させる必然性はない。

遺物の産出層準はソフトローム層の上部であるが、一般的に本層の発達が悪く、更に、ブロックが斜面部に位置しているため、土層の堆積状況に安定性を欠いており、断定的な判断は差し控えたい。

b) 出土遺物 ブロックとその周辺部を合せて、48点の遺物がある。2次加工のある石器は、



第178図 第5ブロック遺物出土状況



第179図 第5ブロック石器実測図

ナイフ形石器と削器とが各1点ずつあるにすぎず、大小の剥片が主体となっている。図の2、3は黒曜石製の剥片で、2次加工痕が著明であるが、検出地点がブロック外であり、また調整技術からも縄文時代の石器である可能性が濃い。また、1の刃こぼれのある剥片も検出地点がブロック外であることから本ブロックへの帰属に問題を残している。この石器もあるいは縄文時代のものであるかもしれない。そこで、一応この3点は資料から除外しておくことにしたい。

4は珪質凝灰岩製のナイフ形石器である。比較的横長の剥片を素材としている。打面部と一

第96表 第5ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	削器	剥片U 剥片R	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 1	0	0	0	3	9	12	25.0	17.00	10.6
珪質頁岩 2	0	0	0	3	9	12	25.0	18.15	11.4
珪質頁岩 4	0	0	0	1	0	1	2.1	5.64	3.5
珪質頁岩 5	0	0	0	1	0	1	2.1	12.36	7.7
珪質凝灰岩 1	0	1	0	1	4	6	12.5	9.53	6.0
珪質凝灰岩 2	1	0	0	0	0	1	2.1	3.45	2.2
黒曜石 1	0	0	0	2	0	2	4.2	1.44	0.9
黒曜石 2	0	0	0	0	2	2	4.2	0.85	0.5
黒曜石 3	0	0	1	0	0	1	2.1	1.16	0.7
黒曜石 4	0	0	1	0	0	1	2.1	4.04	2.7
黒曜石 5	0	0	0	1	0	1	2.1	11.15	7.0
黒曜石 6	0	0	1	0	0	1	2.1	7.02	4.4
メノウ 1	0	0	0	1	0	1	2.1	2.50	1.6
メノウ 2	0	0	0	1	0	1	2.1	1.13	0.7
安山岩 1	0	0	0	1	0	1	2.1	2.86	1.8
安山岩 2	0	0	0	1	0	1	2.1	48.81	30.5
チャート 1	0	0	0	1	0	1	2.1	8.00	5.0
粘板岩 1	0	0	0	1	0	1	2.1	1.76	1.1
ホルンフェルス 1	0	0	0	1	0	1	2.1	2.79	1.7
総数	1	1	3	19	24	48	100.0	159.64	100.0
組成比 (%)	2.1	2.1	6.3	39.6	50.0				

側縁にブランディングが施されている。このため、本来の素材剥片の形状を失っているが、側縁部の2次加工は剥片側縁の形態に則して加えられているようであり、所謂斜め整形の手法は採られていない。この母岩は単独検出であり、また、この資料自体がブロック外検出であるため、やはり帰属関係に曖昧な部分が残されている。

5の側削器も珪質凝灰岩製である。破片であるため全体的な状況がよく分らない。

6は石刃状の縦長剥片で、珪質凝灰岩とも珪化のすすんだ頁岩とも判定のつかない石材から作られている。尾部の一部に原礫面を残しているが、背面は打面部側からの単一の剝離方向を示す6面の剝離面が切り合っている。各背稜は大体側縁と並行している。打面部はハジケているので、一部を遺存しているにすぎない。剝離角はほぼ直角に近い。

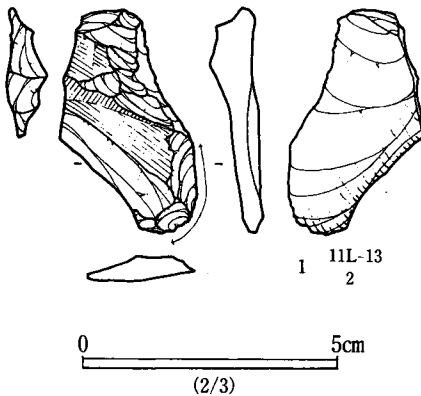
剥片は小型不整なものが大半を占め、上の石刃と関連しそうな例は7に示した1例のみであった。8は剥片2点の接合状況であり、90°の打面転移が観察される。

c) 石器石材 珪質頁岩が4個体26点あり、過半を占めている。特にブロック中心の遺物集中部分には珪質頁岩1と2が入り混じるように分布している。他に、珪質凝灰岩（オパールあるいは蛋白石とも言う）が2種、黒曜石が3種（縄文の疑いある3個体を除く）、メノウ2種、安山岩2種、チャート、粘板岩、ホルンフェルスが各1種ずつある。しかし、各母岩に帰属す

る資料数は2点以下であり、多種多様な石材が少量ずつ認められるという観を呈している。珪質凝灰岩は2個体と少量の検出に留まったが、それは御塚山I a期に多用されている石材に近似し、該種石材の多出期がソフトローム層上部のある特定の時期に集中する傾向は、本ブロックにおいても認められることになる。

d) 小結 谷頭部の傾斜地に立地するブロックである。産出層準には若干の疑点を残すが、ソフトローム層の最上部に近いあたりだろうと推定した。ブロック外のナイフ形石器が、確実に本ブロックに伴うとすれば、その帰属時期を確定することができよう。ブロックの内容は、珪質頁岩2種の剥片剝離を基調とし、それに多種多様な石材が少量ずつ集合する状況であり、その母岩数の多さと、母岩内容の僅少さは、ブロックの形成が一回的なものではなく、むしろ短期的かつ周回的事であることを示唆している。

第6ブロック (第180・第181図)



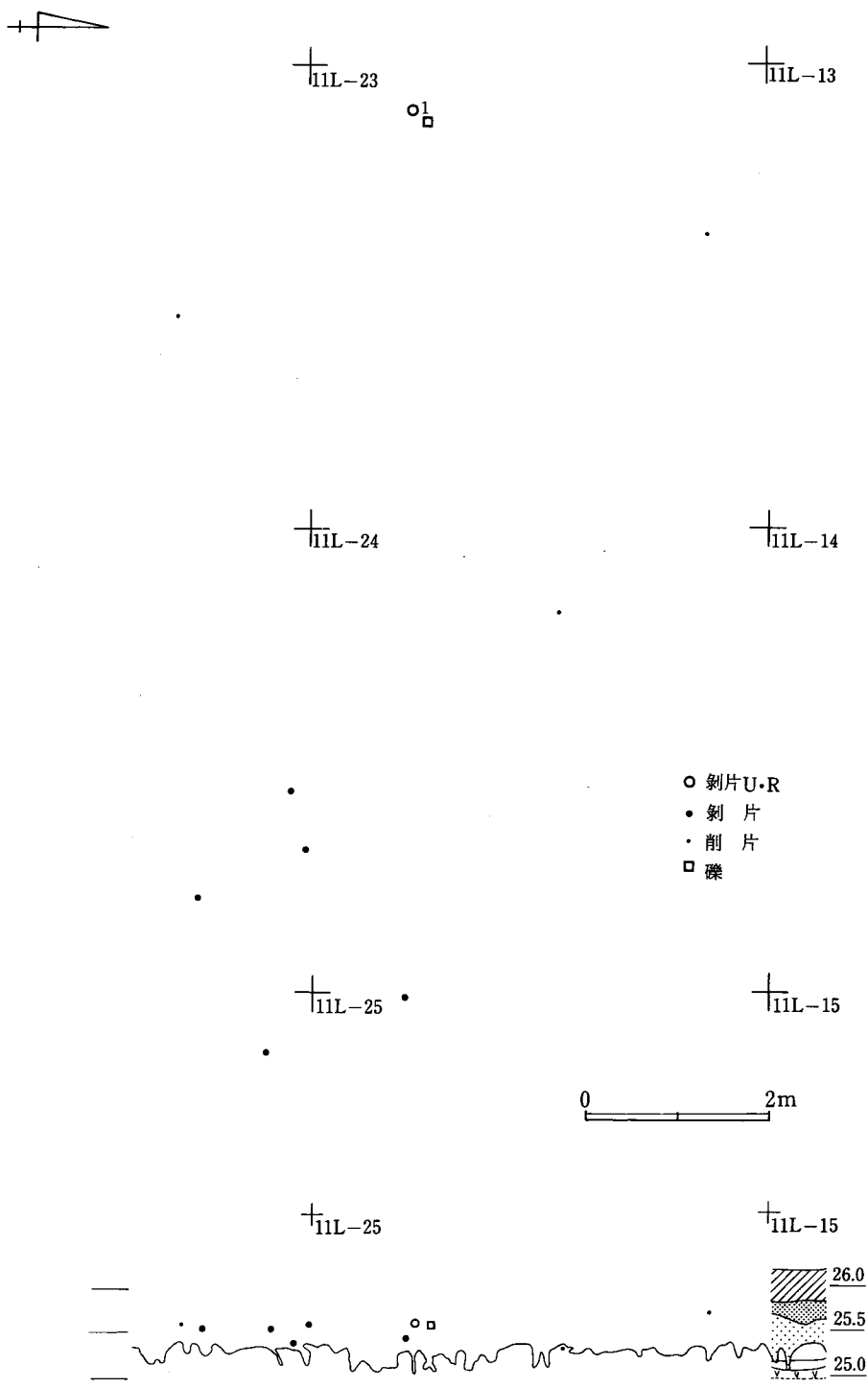
第180図 第6ブロック石器実測図

a) 分布状況 第1地点南側に連続する第2地点のほぼ中央部に位置している。11L-24・25ポイントを中心に広範囲に少量の遺物が散在している。これらを一括して第6ブロックとしたが、もとより同時性の根拠がある訳ではなく、ソフトローム層の比較的上部に検出された遺物群を総称する、便宜的なブロック設定であるというにすぎない。

b) 出土遺物 剥片9点、削片3点の他に礫片が1点ある。剥片のうち使用痕の著明なもの

第97表 第6ブロック遺物集計表

母岩番号	剥片U 剥片R	剥片	削片	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 7	1	0	0	0	1	7.7	5.83	6.9
黒曜石 8	0	0	1	0	1	7.7	1.54	1.8
黒曜石 9	0	1	0	0	1	7.7	1.45	1.7
安山岩 3	0	2	0	0	2	15.4	10.12	11.9
安山岩 9	0	1	0	0	1	7.7	17.85	21.0
砂岩 1	0	1	2	0	3	23.1	2.41	2.8
砂岩 2	0	3	0	0	3	23.1	28.68	33.8
砂岩 4	0	0	0	1	1	7.7	16.95	20.0
総数	1	8	3	1	13	100.0	84.83	100.0
組成比 (%)	7.7	61.5	23.1	7.7				



第181図 第6ブロック遺物出土状況

が1点あり、これは礫片の近傍から検出されている。

c) 石器石材 珩質頁岩、黒曜石、安山岩、砂岩など8種の母岩を識別した。これらの母岩は3点以下の資料しか含んでおらず、分布も散在的であることが特徴である。このような母岩のあり方は、第5ブロックにおける、珩質頁岩1、2を除外した母岩構成と近似している。

d) 小結 多様な石材が広範囲に分布しているので、性格の把握が難しい。第5ブロックと同様に、廃棄の開始と終了の間にある程度の時間幅を想定した方が理解し易いであろう。

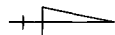
第7ブロック (第182~184図、図版63)

a) 分布状況) 第3地点にあり、遺跡の中央に北西方向から浸す埋没谷の谷頭部を囲繞するブロック群の一部を構成している。分布図から明らかなように、このブロックは、18G-78区にある遺物集中部と、18G-79ポイント東側の集中部に分離することができる。前者をクラスターa、後者をクラスターbと呼ぶことにしよう。

クラスターaは、径約3mの範囲内に15点の石器類が分布している。遺物はクラスター西側に偏在する傾向が強い。器種的には剝片、それも不整形・貝殻状のものがほとんどであるが、ナイフ形石器が1点含まれていた。

第98表 第7ブロック遺物集計表

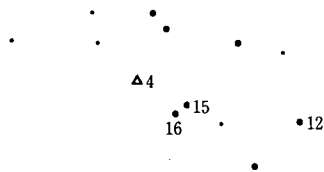
母岩番号	ナイフ形石器	削器	剝片U 剝片R	剝片	削片	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珩質頁岩 8	0	0	0	3	0	0	3	6.3	30.38	6.6
珩質頁岩 9	0	0	0	1	0	0	1	2.1	1.99	0.4
珩質頁岩 10	0	0	0	2	0	0	2	4.2	6.62	1.4
珩質頁岩 12	1	0	0	2	1	0	4	8.3	6.72	1.5
珩質頁岩 13	0	1	0	0	0	0	1	2.1	7.70	1.7
珩質頁岩 14	0	0	0	1	0	0	1	2.1	2.42	0.5
珩質頁岩 15	1	0	0	0	1	0	2	4.2	4.97	1.1
珩質頁岩 16	0	0	1	0	2	0	3	6.3	3.49	0.8
珩質頁岩 17	0	0	0	1	0	0	1	2.1	16.34	3.6
珩質頁岩 18	0	0	0	3	1	0	4	8.3	3.32	0.7
珩質頁岩 19	2	0	2	4	2	0	10	20.8	60.74	13.2
珩質頁岩 20	0	0	0	1	0	0	1	2.1	8.85	1.9
黒曜石 10	1	0	0	1	0	0	2	4.2	6.36	1.4
凝灰岩 1	0	0	0	1	0	0	1	2.1	2.48	0.5
凝灰岩 2	0	0	0	1	0	0	1	2.1	3.23	0.7
凝灰岩 4	0	0	0	0	2	0	2	4.2	1.59	0.3
安山岩 11	0	0	0	0	0	1	1	2.1	3.87	0.8
砂岩 7	0	0	0	0	0	7	7	14.6	239.38	52.1
粗粒安山岩 1	0	0	0	0	0	1	1	2.1	49.36	10.7
総数	5	1	3	21	9	9	48	100.0	459.81	100.0
組成比 (%)	10.4	2.1	6.3	43.8	18.7	18.7				



13G-88

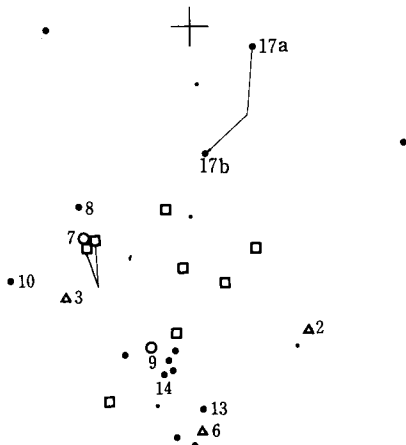
13G-78

13G-68



13G-89

13G-69



13H-80

13H-70

- ▲ ナイフ形石器
- 剥片U・R
- 剥片
- ・ 削片
- 礫

13H-60



13H-80

13H-70

13H-60



第182図 第7ブロック遺物出土状況

クラスター b は、クラスター a のすぐ東側にあり、遺物の散布範囲はこれとほぼ同じ位であるが、遺物量は比較的多く、30点ほどある。このうち3個体分9点の礫片が含まれ、他にナイフ形石器が3点、剥片類は18点ある。特に剥片は企図性の高いものが目立つようである。

b) 出土遺物 1は尖頭削器である。ブロック外の遺物で共伴関係に問題を残すが、仮に共伴したとしても矛盾は無い。剥片周縁部から精細な2次加工を加えて尖鋭な尖頭部をもつ木葉形の外形を作り出している。基部は素材剥片を折り取って、更に背腹両面に2次加工を施している。折れ面の step が一部残されている。背面には素材剥片の背面を構成する剥離面が残されているが、その剥離の方向に一定性は無い。器体横断面は平凸型で、刃部の角度は45°~50°の間にくる。

2はクラスター b から検出された。ナイフ形石器と考えられる。基部は尖り気味で、背面左側は未加工のまま残されている。横長の剥片を素材としているようにも見えるが、そうではない。縦長剥片を折断し、その尾部破片を素材としているものと見られる。

ところが、3は明らかに横長剥片を使っている。基部に未加工面を残し、打面と対応する尾部側縁に2次加工がある。2の尖頭部が70°であるのに対して、この例では55°であり、たいへん鋭い。

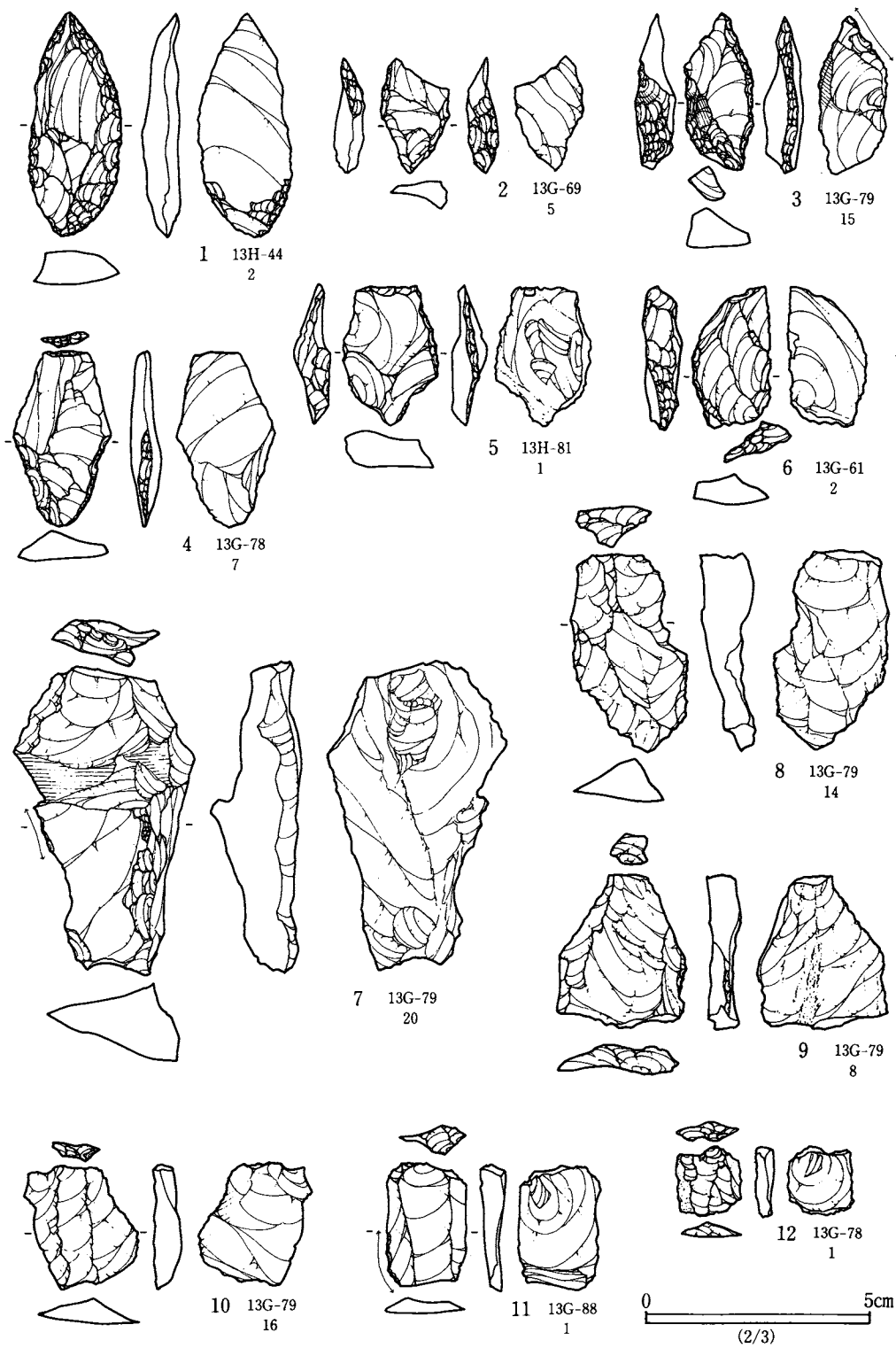
4はクラスター a で検出された唯一のナイフ形石器である。横長剥片の打面部を折り取り(折れ面は step)、折れ面と尾部縁辺の一部にブランディングを施し、丸味のある基部をつくるが、尖端部側にも器体を横に載るような細かい2次加工があり、特徴のある形態を保有する石器になっている。あるいは端削器とすべきものなのであろうか。

5はナイフ形石器に含めたが、水平な刃部を持つ台形状の石器である。2次加工は打面側にはなく、横長剥片の底部を構成する縁辺部の一部に簡略な2次加工が認められる。基部は尖っていて、2と似ている。母岩も共通している(珪質頁岩19)。

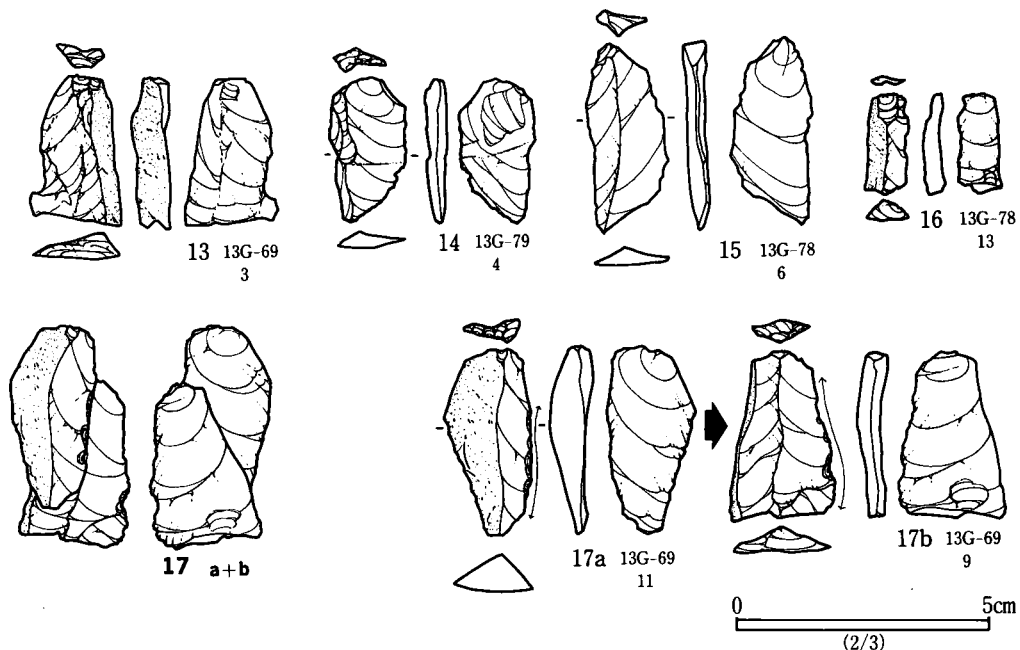
6も明瞭な尖頭部がないので、ナイフ形石器と言えないかもしれない。横長の剥片底面に簡略な2次加工が看取される。

7~17に剥片類を示した。12、15、16の3点がクラスター a に属するが、残りの8点はクラスター b に分布している。剥片はいずれも少量の母岩別資料から構成されているので、系統的に剥片剥離過程を復原することが困難である。

剥片のうちから不整な調整剥片を除外して、比較的縦長の例について観察する。打面は複剥離の調整打面をもつものが多い。頭部調整と見られる小剥離痕を背面に残す例はない。また、打面の転位、再生を直接的に指示する資料もない。ただし、17を見ると、17a、17bという打面を残す剥片が接合しているが、その打面は別な打面、換言すれば、17aの打面は、17bの剥離時には遺存しておらず、その間に何らかの別種の工程が介在したにちがいない。次に、各剥片の背面構成を見ると、側縁に並行する背稜が切り合う例がほとんどであるが、7のように石



第183図 第7ブロック石器実測図(1)



第184図 第7ブロック石器実測図(2)

核の側面調整を示唆する横位の剝離痕のある場合もある。以上の諸特徴から、単設打面をもつ石刃状の縦長剥片作出を企図する調整石核の存在が予測されるが、断定的なことは何も言えない。また、これ以外の剥片生産技術に就いては、その形跡を指摘することはできなかった。

c) 石器石材 ブロック全体としては、珪質頁岩12種、凝灰岩3種、安山岩、黒曜岩、砂岩、粗粒安山岩各1種という石材組成を示しており、圧倒的に珪質頁岩が多用されている。凝灰岩は優白色の流紋岩質のものが目立つ。次に、この母岩が、クラスター間にどのように分布しているかを見ると、クラスターaには珪質頁岩以外の石材の分布は認められない。内容は次のとおりである。

クラスターaにのみ分布するもの

珪質頁岩9(剥片1)、珪質頁岩18(剥片3、削片1)

クラスターa・bに分かれて分布するもの

珪質頁岩8(クラスターa:剥片2、クラスターb:剥片1)、珪質頁岩12(クラスターa:ナイフ形石器1、剥片1、削片1、クラスターb:剥片1)、珪質頁岩15(クラスターa:削片1、クラスターb:ナイフ形石器1)、珪質頁岩16(クラスターa:削片1、クラスターb:削片1)

これら以外の石材は全てクラスターbに偏在している。この結果から判断されるように、両クラスター間にまたがるものでも、一方から他方へ供給されているような形跡を留める資料は皆無であり、ごく少数の資料が無秩序に散在しているにすぎない。

次に、クラスターbから検出された礫について観察したい。礫は3個体分あるが、破碎状態のものが2個体、ほぼ完存するものが1個体ある。安山岩11は前者の例で、細かい破片が1点あるにすぎない。砂岩7も、7点に破碎しうち2点が接合するが、全体の約2/3を遺存しているにすぎず、やはり過半は別地点に移動している。全体に僅かに赤変している。赤変は破損面にも及んでいる。粗粒安山岩は縁辺の一部を欠くがほぼ完存する。小型（径約45mm）の礫で、礫表の変色は看取されない。

d) 小結 2箇所のクラスターから構成されるブロックである。比較的縦長の剥片の剥片が多いが、ナイフ形石器は横長の剥片を利用した台形状、三角形形状などの幾何学的形態をとる点に注意されよう。片面打製の石槍状削器が伴出している。

a、b両クラスターの関係に関しては言及し得るに足る根拠が薄弱であるが、同時に存在したという確証はなく、むしろ、僅かの時間差をもちながら、継起的に形成されたと理解しておきたい。ただし、その形成主体は同一の集団であった蓋然性が高い。

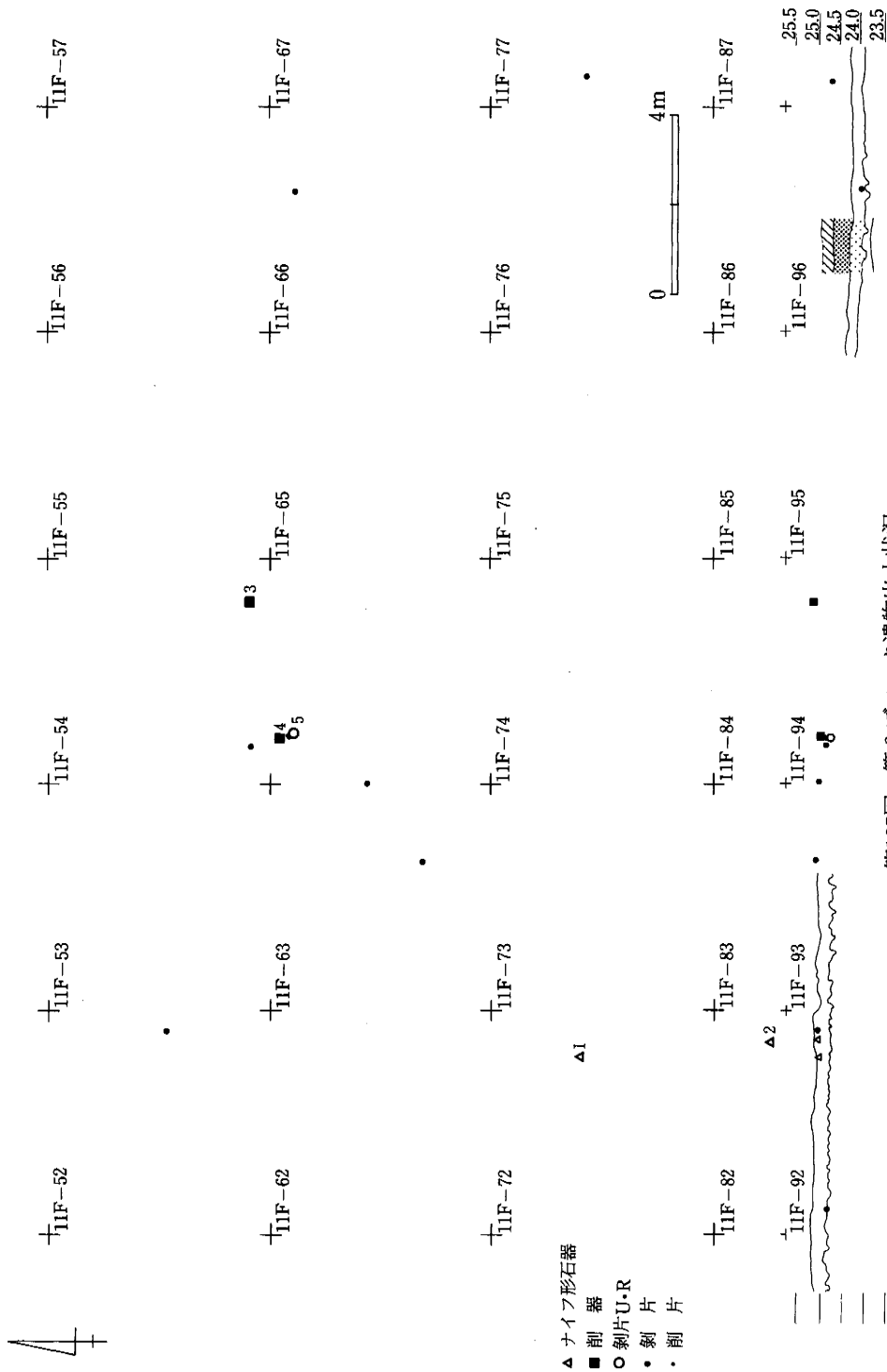
第8ブロック（第185・第186図、図版64）

a) 分布状況 第17地点から検出されたソフトローム層上部の資料を一括して本ブロックを設定する。分布はこの地点の西半全域に及び、極めて散漫な状況を呈し、従って本ブロックの設定も恣意的なものにならざるを得ない。従って、一括性も保証されていない。

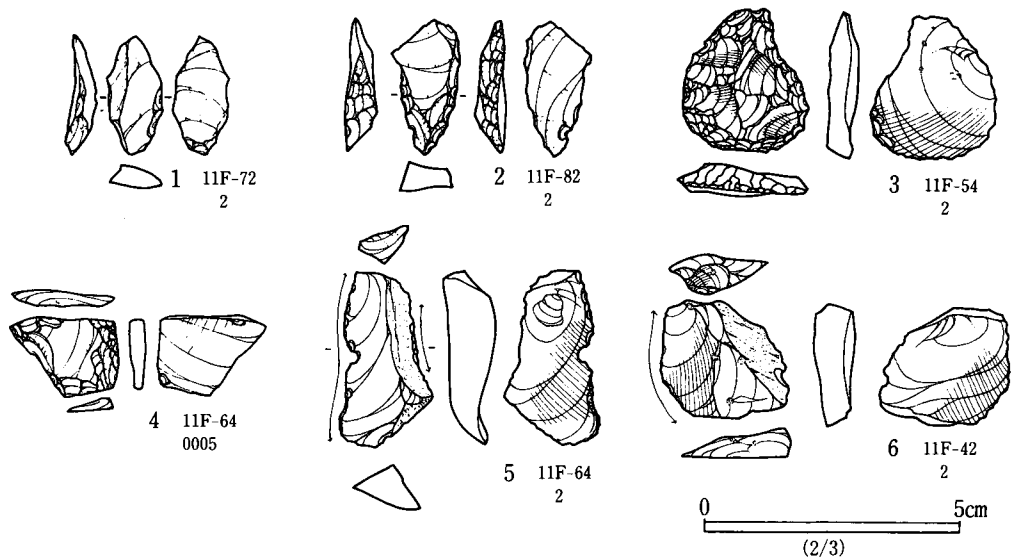
b) 出土遺物 15点の遺物があるが、上述のような検出状況であるため、代表的な資料の記載にのみとどめる。

第99表 第8ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	削器	剥片U 剥片R	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
黒曜石 40	0	1	0	0	0	1	6.7	3.71	9.3
黒曜石 41	0	0	0	1	0	1	6.7	4.50	11.2
黒曜石 42	0	1	0	0	0	1	6.7	1.06	2.6
黒曜石 43	0	0	0	1	0	1	6.7	1.10	2.7
黒曜石 44	0	0	1	0	0	1	6.7	3.91	9.8
黒曜石 45	0	0	0	0	1	1	6.7	0.78	1.9
黒曜石 46	0	0	0	0	1	1	6.7	0.28	0.7
黒曜石 47	0	0	0	0	1	1	6.7	0.16	0.4
珪質頁岩 97	0	0	0	1	0	1	6.7	6.22	15.5
珪質頁岩 98	0	0	0	1	0	1	6.7	7.03	17.6
砂岩 48	1	0	0	0	0	1	6.7	1.26	3.1
安山岩 89	0	0	0	3	0	3	20.0	8.41	21.0
凝灰岩 51	1	0	0	0	0	1	6.7	1.62	4.0
総数	2	2	1	7	3	15	100.0	40.04	100.0
組成比 (%)	13.3	13.3	6.7	46.7	20.0				



第185図 第8ブロック遺物出土状況



第186図 第8ブロック石器実測図

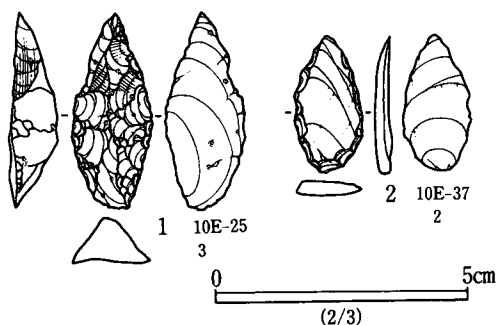
1は砂岩製のナイフ形石器。彎曲する剝片の打面部側に簡単な2次加工が認められる。2もナイフ形石器。凝灰岩製で、横長剝片の打面側と底辺にプランティングを加えて、基部の尖る三角形状の形態を作り出している。小型幾何形ナイフの仲間であり、明らかに第7ブロックの諸例に比較されよう。

削器には端削器の典型例(3)と側削器(4)が含まれている。3は黒曜石製で、全縁加工の美しいものである。他に刃こぼれのある剝片もある(5、6)。

c) 石器石材 広範囲に散布する分布を示している状況を反映して、石材も多種に亘るばかりか、同一の母岩に属する資料も、安山岩の一例を除くと、一例ずつとなっている。

d) 小結 第17地点の遺物の分布は、一般のブロックとは異なり、その分布に収斂性が認められない。この地点は、大林遺跡の中央部分に西北方に浸入する埋積谷沿いの緩斜部であり、ある時期には谷頭の一角であったとも推定され、この水辺をめぐる種々の活動を反映しているのかもしれない。その時期は、ちょうどローム層の形成が終焉を迎える時期を中心としていたと考えられる。

C. 第II文化層 b 小型石槍の文化層である。第9地点に2ブロック、第14地点に1ブロック、合計しても3ブロックあるにすぎない。第9地点には、第I文化層のブロックが上層にあり、更に石槍のブロックの東側からは石刃ナイフを保有する別なブロック群が検出されており、そのいずれもがソフトローム層中に存在している。この石刃ナイフを保有するグループと産出の層準に有意な差異を認め得るか否かが問題である。第189図に両者の石器の垂直分布状況を示した。これを見る限り、僅かに石槍のブロック群が上位にあるようである。第14地点もソ



第187図 第7地点石器実測図

フトローム中に3つのブロックが並存しており、それらの分離は極めて困難であったが、第9地点と同様の方針で分離を計った。以上の層位的検討を参考として、第II文化層と第III文化層の分離を行った。なお、ブロックは設定しなかったが、第187図の2点も本文化層に帰属しよう。1は黒曜石製の東内野型尖頭器、2はホルンフェルス製の周辺加工の尖頭器である。

第9ブロック (第188～第190図、図版63)

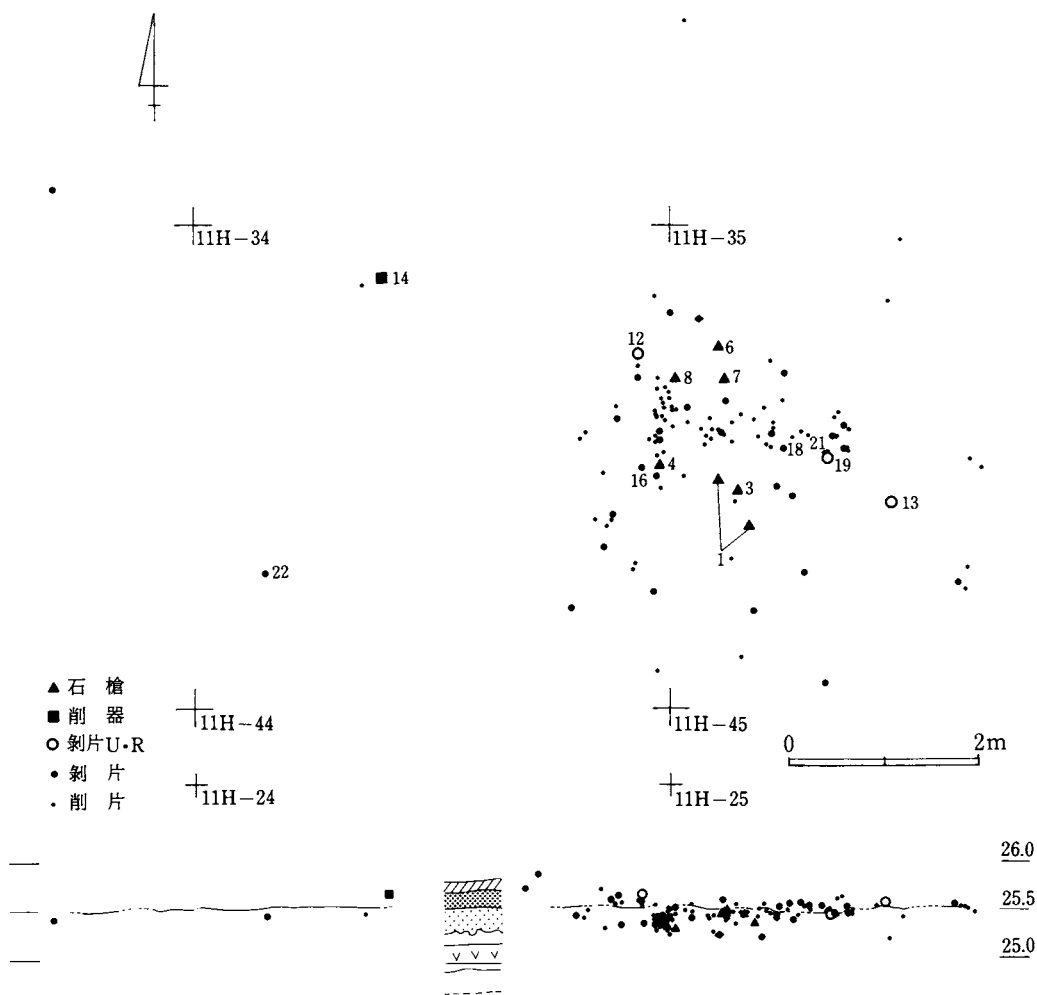
a) 分布状況 第9地点にある第2文化層のブロック群のうち、北側に位置するものである。南側に接するように第10ブロックがあり、2つのブロックで1つのまとまりを形成している。ブロックは11H-34区東側から11H-35区にかけて、径約3m位の遺物の濃密な分布域があり、これを中心に、東西約7m、南北約5mの範囲にひろがっている。遺物集中部分の特徴は、剥片よりも微細な削片類の卓越することであり、これに入り混じるように石槍が集中しているが、完存するものは殆どない。産出層準はソフトローム層上部である。

b) 出土遺物 近接して別な文化層に帰属するブロックが存在し、かつ、それらがいずれもソフトローム層中に存在しているので、遺物の分離が困難な場合があり、必ずしも確実な石器組成を抽出し得た訳ではない。集中部分の資料をもとに一応の分離を計った。その結果は第100表に示したが、小型石槍9点8個体、台形石器状のナイフ形石器1点、削器1点、2次加工ある剥片3点、その他剥片類164点、合計178点という石器組成が復原される。

石槍(1～9)は9個体分あるが、いずれも小型のものである。そのうち接合して完形となった2点1個体を別として、他の7個体が破損しており、製作過程で多数の破損品を生じてい

第100表 第9ブロック遺物集計表

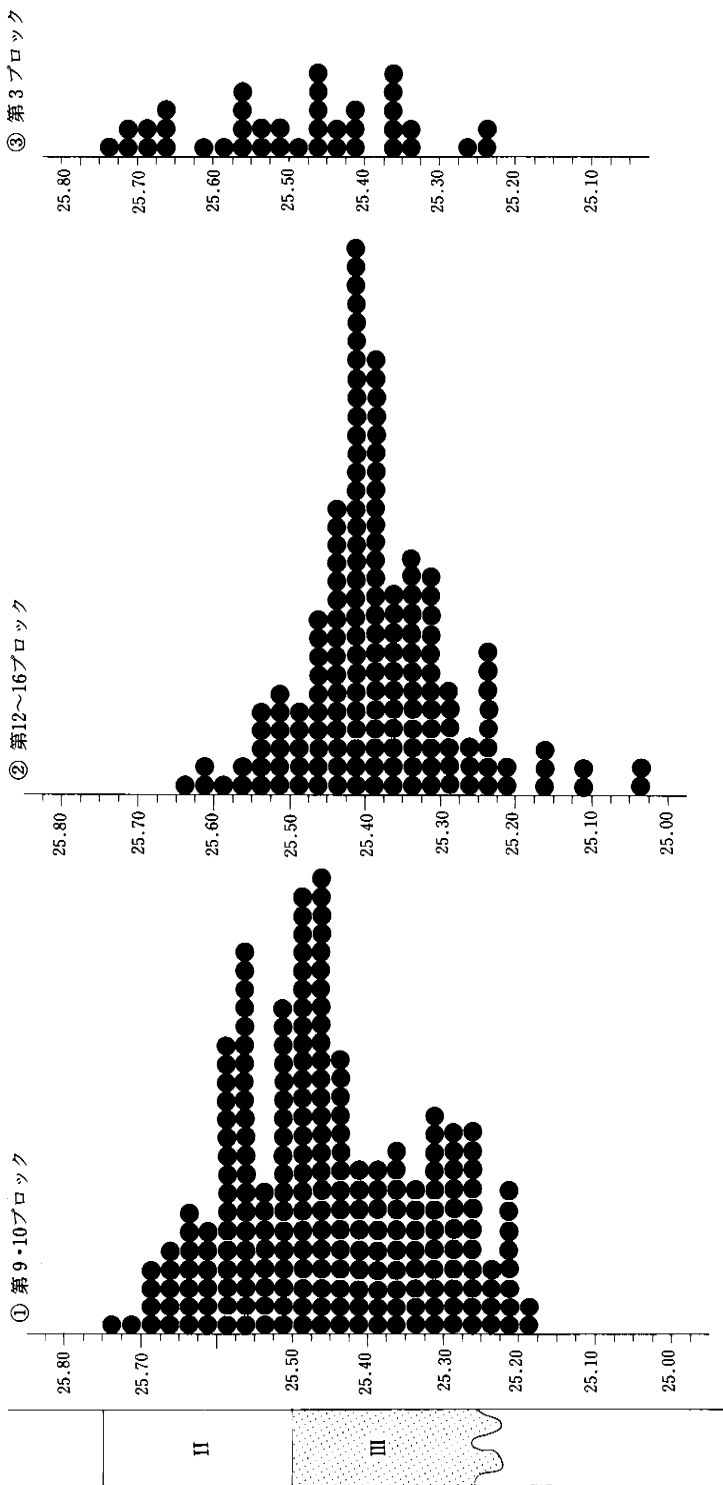
母岩番号	石槍	削器	彫器	剥片U 剥片R	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
凝灰岩 24	0	0	1	0	1	1	3	1.7	2.89	1.9
凝灰岩 25	0	1	0	0	0	0	1	0.6	8.34	5.4
黒曜石 24	1(2)	0	0	0	0	0	1(2)	0.6	5.63	3.7
黒曜石 25	0	0	0	2	10	32	44	24.9	21.52	14.0
黒曜石 26	7	0	0	3	23	20	53	29.9	101.89	66.4
黒曜石不明	0	0	0	0	0	74	74	41.8	7.62	4.9
安山岩 73	0	0	0	0	1	0	1	0.6	5.47	3.6
総数	8(9)	1	1	5	35	127	177(178)	100.0	153.36	100.0
組成比 (%)	4.5	0.6	0.6	2.8	19.8	71.8				



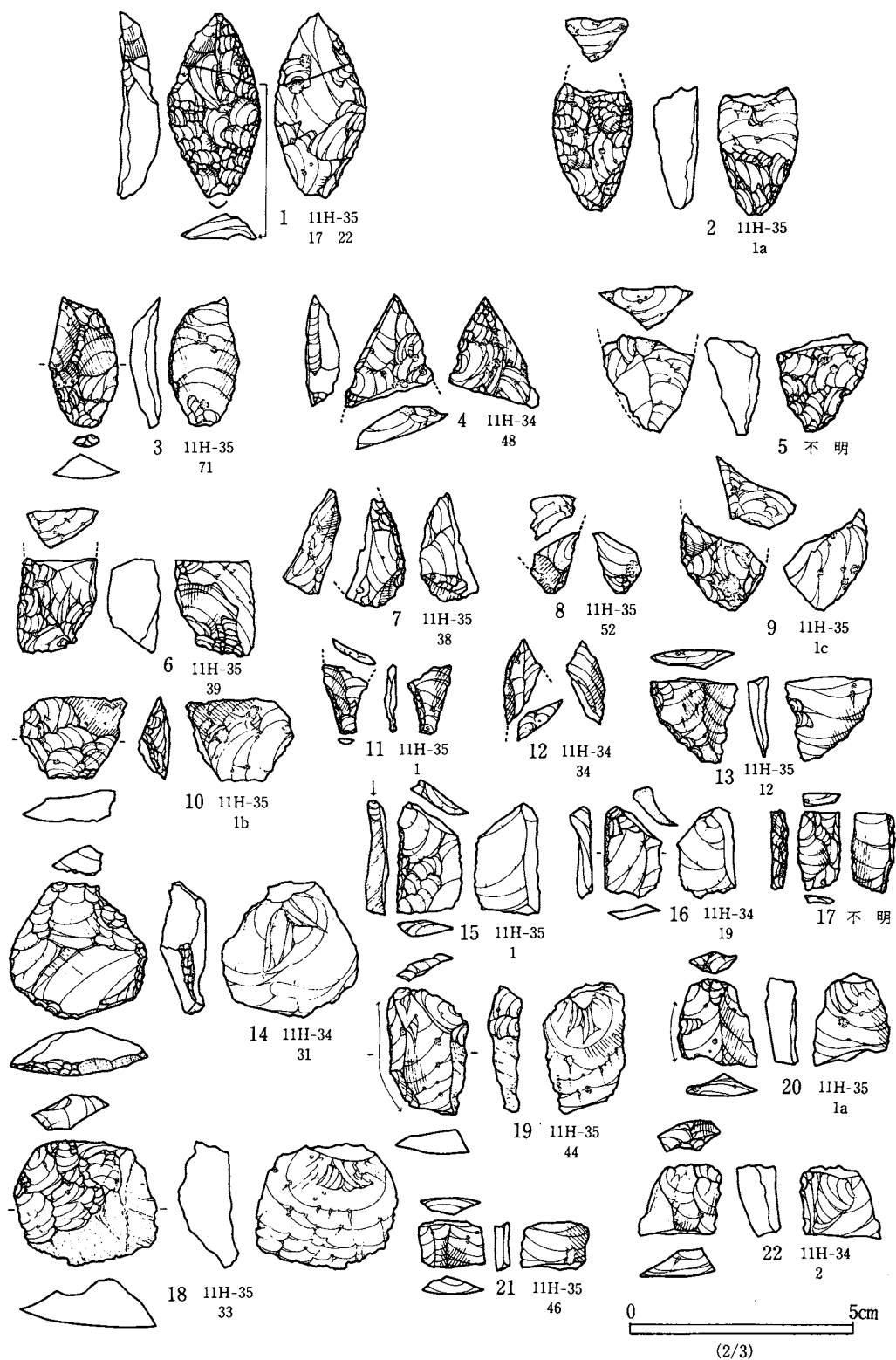
第188図 第9ブロック遺物出土状況

ることが窺われる。1は僅かに基部端を欠損しているが、尖頭部と基部とが接合してほぼ完形となった。横長剥片を素材とし、背面側の全面が2次加工による剥離面に被覆されるが、腹面側の加工は周縁的であり、大きく素材の腹面を残している。従って、その横断面は平凸型となっている。背面左側縁尖頭部寄りに石器長軸に対して30°の方向に細長い剥離が加えられているが、尖頭部を形成する細かい調整剥離によって切られ、ネガティブバルブを失っている。この剥離面と素材腹面との交角は58°である。黒曜石26から作られている。

2は尖頭部側を欠損するが、1とほぼ同様の外形を呈するものと考えられる。素材剥片の打面部を基部と一致させている。腹面は打瘤部の周辺に剥離を集中させているが、背面側は全面加工となっている。比較的厚手のもので、背面中央が蒲鉾状に隆起している。尖頭部からの細長い剥離面は看取されない。



第189図 大林遺跡第9地点遺物垂直分布



(2/3)

第190図 第9ブロック石器実測図

3は周縁加工の粗製品である。縦長剥片製で、基部に打面を残置している。2次加工は背面左側縁基部側と右側縁尖頭部寄りの部分に平行するような状態で加えられている。この手法はナイフ形石器に多用されるが、剥離の状態は角度の浅い石槍的なものとなっている。

4は尖頭部の破片。片面に素材剥片の主要剥離面を残しているが、2次調整は良く行き届いている。尖頭部から2条の細長い剥離が器体長軸に対して26°の傾きをもって付加されている。このうち側縁寄りのものは器体調整の最終段階での剥離と考えられる。横断面はやはり平凸型で、尖頭部からの最終剥離面を腹面との交角は70°である。

5以下の諸例は破損例である。大きさ、形態、横断面共に、標準標本である1と近似したものを作出しようとしている。15~17の剥片は小型石槍の尖頭部から斜めに剥離された細長い剥片と考えられるものである。15、16は片面打製の、17は両面打製のブランクから剥離されている。15は彫器として再利用されているように見える。15、16は流紋岩質の凝灰岩製で、同一母岩に帰属している。17は黒曜石製のもの。

10は縦長の剥片の頭部と尾部を折り取り、尾部側の折れ面に再加工を加えた台形状の石器。刃部には微細な刃こぼれが著しい。11は器種分類困難な2次加工のある剥片で、打面部に接する側縁部に細かい2次加工が錯向的に看取される。ナイフ形石器の一種であろうか。12、13は側縁部に2次加工のある剥片で、削器的な機能を帯びているものかもしれない。14は定型的な端削器である。貝殻状の剥片尾部に円弧状の刃部が付設されている。凝灰岩製で、ブロック外縁に出土を見た。

剥片類は多数あるが、特徴を捕捉し難い。まず大型のものを見ると(18)、大体原石の角礫面を残しているので、剥離過程の初期の段階で生産され、廃棄されたものと見られる。中型のものには刃こぼれのある例(19、20)もあるが、多くを遺存しない。小型~超小型のものは多数ある。これらは大体石槍の製作と関連するのであろう。そうすると、これらの資料は石核の製作から剥片剥離、あるいは石槍の製作とといった、いくつかの過程を反映している可能性が高い。

c) 石器石材 本ブロックの石器石材は黒曜石の多用を著しい特徴としており、178点の遺物のうち、黒曜石以外のものは、僅かに5点あるにすぎない。すなわち、凝灰岩24が3点、凝灰岩25が1点、安山岩73が1点という構成となっている。凝灰岩24は3点のうち2点までが石槍尖頭部からの剥離による細長い剥片で、その遺存状況から、この種の剥片自体が石器として機能していた可能性は極めて高い。特に15の様に彫器への転用が企図されている資料の存在は、この見解を補強するものと評価されよう。凝灰岩25は端削器であり、安山岩73は剥片である。

黒曜石には3種の母岩がある。黒曜石24は2点出土したが、これは接合して1個体の石槍となった。黒曜石25は剥片類を主体とした母岩で、石槍を含んでいない。石槍は専ら、黒曜石26を素材としている。また、黒曜石25の剥片中には、明確な石槍作出剥片が含まれていないことは重要であり、母岩毎に作出器種が分化している状態を観察することができよう。母岩不明と

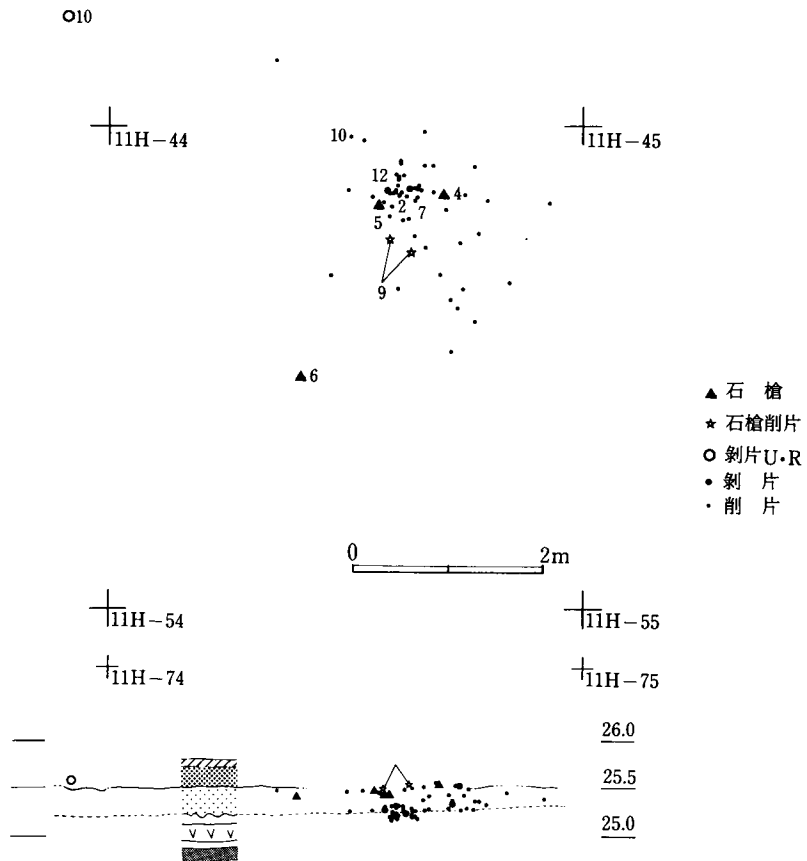
したもののは大半は、石槍作出時の細かい剥片であるので、黒曜石26に帰属する可能性が高いものと考えられる。

以上の如く、2種の消費母岩と、4種の非消費母岩が識別され、消費の内容も各々別個のものであることが判明した。

d) 小結 第9ブロックは剥片剥離・石槍製作という2種の作業を軸として形成されたブロックである。製作された石槍は所謂東内野型尖頭器と同種のものとも考えられる。形態的に見ると、東内野例(戸田、篠原 1977)とは異なり、また、一ノ台例(道沢 1985b)とも違う。最も近似するものとして、木苅峠(鈴木 1975a)上層の諸例が挙げられるであろう。

第10ブロック (第191・第192図・図版64)

a) 分布状況 第9ブロックのすぐ南西に位置している。11H-44区の径約1.5mという狭い範囲内に大半の遺物が集中している。特に削片類が集中的に分布し、その間に破損した石槍が点在する状況を呈しており、第9ブロックの遺存状況と良く似ている。



第191図 第10ブロック遺物出土状況

第101表 第10ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	石槍	石槍削片	剥片U 剥片R	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
黒曜石 24	0	1	0	0	0	0	1	1.3	0.97	1.8
黒曜石 26	1	5	0	1	0	1	8	10.3	26.78	49.7
黒曜石 52	0	0	2	0	3	16	21	27.3	13.28	24.7
黒曜石 53	0	1	0	0	0	0	1	1.3	5.33	9.9
黒曜石不明	0	0	0	0	0	45	45	58.4	2.49	4.6
安山岩 73	0	1	0	0	0	0	1	1.3	4.96	9.2
総数	1	8	2	1	3	62	77	100.0	53.81	100.0
組成比 (%)	1.3	10.3	2.6	1.3	3.9	80.5				

垂直分布の上で注意したいのは、遺物の分布がソフトローム層の上部と、ハードローム層の直上部の2箇所にピークをもつ点で、両ピーク間のレベル差は15cmぐらいある。第191図における、標高25.250mから25.300mにかけてのピークがこれで、その成因が問題である。

b) 出土遺物 石槍8点、ナイフ形石器1点、その他剥片類が68点という組成を示している。第9ブロックと較べて剥片数は少ないが、遺存した石槍の本数はほぼ一致している。剥片数の差異は、母岩消費の内容の差異と対応するようである。

1は石槍の完形品。ブロックの外縁部で検出した。プロフィールは第9ブロック1と良く一致している。図の左側の面は完全に剝離面に被覆されるが、右側の面は基部側が平坦に調整されているのに対して、尖頭部側は角礫風化面かと思われる未加工の面が残されている。横断面は典型的な平凸形となっているが、平面が素材背面であり、凸面が腹面と一致するという特異な素材利用を示している。調整剝離は精緻で、最終段階で尖頭部から一側縁にかけて刃部の作出を企図する剝離が施されている。

2は両面打製の槍で、一端を欠損する。遺存部が尖頭部なのか基部なのかは分からない。左右非対称の形態を示し、横断面は平凸型になっている。3も同趣の破片であるが、両端を欠いている。この例では、最終段階での刃部作出剝離痕の末端が観察され、上下を決することができる。やはり平凸型の横断面形態を示しているが、2と同様に、平面側の剝離痕は原則的に凸面側に切れ、かつ平面側の剝離痕末端が弱い step/hinge となる特徴を指摘することができる。これは、平面側の調整剝離が、器体を長軸に平行するように左上に固定し、これに僅かの傾きを与えて垂直に加撃して得られたものであることを示している。もしこの台が石のように硬いものであれば、加撃の反作用によって加撃縁に対応する縁辺からも細かいかけらが剝落するかもしれない。また、木や骨角のように、相対的に柔軟な台を用いる場合には、縁辺に僅かのキズを残すのみであるかもしれない。しかし、いずれの場合も、一種の両極的手法を見做すことができよう。この種の剝離を今後、砸撃剝離と呼びたい。

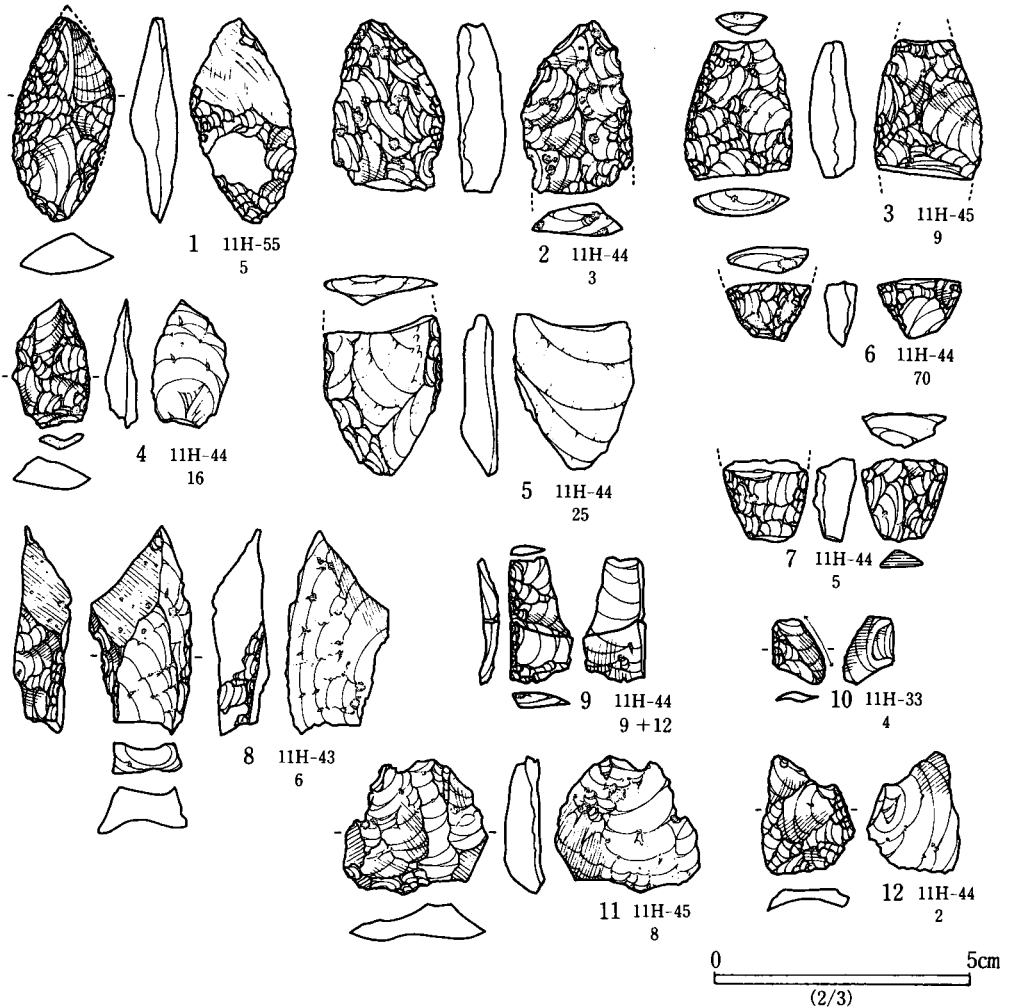
4、5は片面加工のもの。4は、第9ブロックの3と比較される。基部に素材剥片の打面を

残し、2側縁に角度の浅い調整剥離が認められる。3と同様に、短目の斜刃が残されている点に注意したい。

6、7はいずれも小破片であり、全体の様子が分らないが、両面打製であること、横断面が平凸型となること等の共通点がある。以上の諸例が、第9ブロックのものと共通する特徴を示していることは明らかであろう。

ナイフ形石器は1例のみ検出された。背面の一部に原礫面を残す横長剥片の打面部と底辺に2次加工痕がある。基部には未加工の面が残されているが、折れ面である。尖頭部は極めて鋭利で、刃部には微細な刃こぼれが断続的に残されている。なお、背面右側の剥離面は、石核底面で、剥片ポジ面である点を付言しておこう。武蔵野台地IV下層・V層期のナイフ形石器と区別することは困難である。

9～12に剥片を示した。9は石槍製作の最終段階に剥離された刃部作出剥片である。片面打



第192図 第10ブロック石器実測図

製の本体から剥がされたものであるが、本体は遺存しない。11は一般的剥片、10、12は石槍作出剥片である。10の側縁部には使用痕と見られる微細剝離痕が著明であり、所謂 Ad hoc である。

c) 石器石材 安山岩の石槍が1点あるが、残りは4種の黒曜石から構成されている。黒曜石のうち、石槍1、6の2点が各々単独母岩である。また、5点の石槍を含む黒曜石26も既製品の卓越する母岩であり、以上3母岩については別地点での石槍の生産が予測されるが、黒曜石26は第9ブロックにおいて石槍の製作を目的に消費された母岩であるので、彼我の関連性は明らかである。また、黒曜石25は本地点において消費された母岩であるが、石槍本体は遺存しないものの、9、10、12に図示したような石槍製作に関連する付随資料を多く含んでいるので、確実に石槍の製作を企図して消費されたものと見做すことができる。しかし、この母岩は第9ブロックには分布していない。

d) 小結 小型石槍の製作過程を内包するブロックである。隣接する第9ブロックとの関連性が問題である。これには種々の解釈が可能であり、そのいずれもが決定的な論拠を欠くものであるが、相前後して同一の集団が形成したものと考えるのが妥当ではあるまいか。そして、この場合、第9ブロックがまず形成され、次いで第10ブロックが残されたと仮定したい。両ブロックの母岩別資料のあり方から考えて、両者の形成された間隔は、黒曜石26の槍が完全に消耗しない期間であるから、比較的短期なものであった。その間に、黒曜石26の滅失を補うために黒曜石25が入手されたものと理解したい。

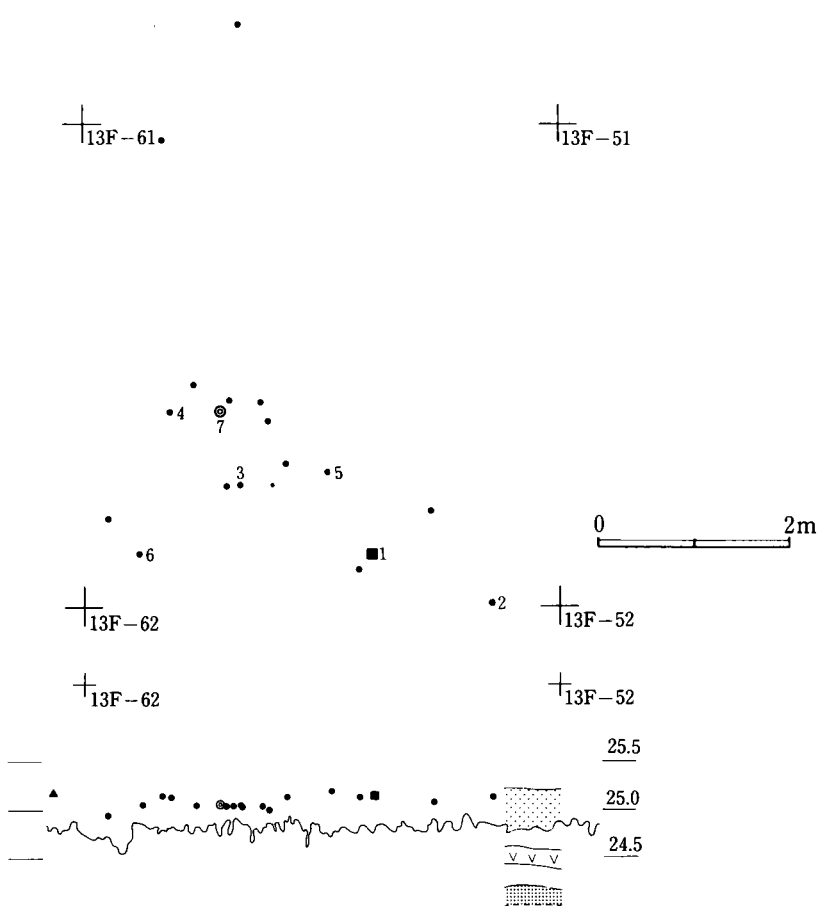
更に、いずれのブロックも、槍以外には殆んど別種の道具を含んでいないところから、小集団からなる狩猟を目的とするキャンプサイトとしての位置づけが可能であろう。そうであるならば、同一の狩猟集団が周期的に特定の地点を占拠するという、言わば、戦略的な行動パターンが再構成されるばかりか、その行動には、少量の石器原石やプランクが携帯され、それが随時消費されていく過程をも思い描くことができよう。

第11ブロック (第193～196図、図版64・65)

a) 分布状況 第14地点にある。この地点には3箇所のブロックが存在するが、遺物の垂直分布状況から、上下2枚の文化層の重複が予測された。しかし、これらの文化層はいずれもソフトローム層中にあり、遺物出土量のピークから推定される2つの生活面のレベル差は僅かに0.1mにすぎない。このため、このような機械的な文化層の分離が、果たして妥当なものであるか否か、別な基準からの十分な吟味が必要となる。このため、通例のとおり石器群の様相、母岩別資料のあり方、接合関係等々の検討を行ったが、紋上の分離を棄却するに足る論拠を見出すことは困難であった。このため、若干の恣意性を排除できないが、文化層を2枚設定し、このうち上層のものを、第III文化層 a に、下層のものを第III文化層 b に位置づけたい。



- ▲ 石 槍
- 削 器
- 剥 片
- 削 片
- ◎ 石 核



第193図 第11ブロック遺物出土状況

第11ブロックは、13F-51区を中心とする東西3.5m、南北2mの範囲を中心とし、これを逸脱するものも少量ある。遺物量が少ないので、比較的散漫な分布状況と言えよう。遺物の垂直分布は、あまり上下に移動しているものではなく、ソフトローム層の上部にほぼ水平に散在している。

b) 出土遺物 石器組成は、小型石槍1点、削器1点、剥片16点、削片1点、他に石核が1点ある。石槍はブロック外であるが、便宜的に本ブロックで取り扱う。

第102表 第11ブロック遺物集計表

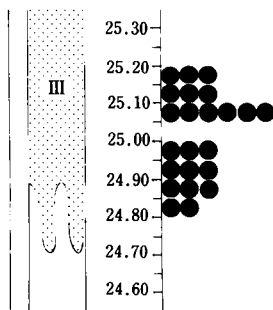
母岩番号	石槍	削器	剥片	削片	石核	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 127	1	1	2	1	0	5	25.0	26.84	15.9
珪質頁岩 128	0	0	2	0	0	2	10.0	20.91	12.4
泥岩 26	0	0	1	0	0	1	5.0	17.94	10.6
安山岩 79	0	0	1	0	0	1	5.0	23.71	14.0
安山岩 80	0	0	0	0	1	1	5.0	9.42	5.6
安山岩 82	0	0	9	0	0	9	45.0	60.55	35.8
安山岩 106	0	0	1	0	0	1	5.0	9.61	5.7
総数	1	1	16	1	1	20	100.0	168.98	100.0
組成比 (%)	5.0	5.0	80.0	5.0	5.0				

第195図が確実に本ブロックに帰属する資料である。1が削器、他は剥片である。削器は縦長の剥片の尾部に扇形の刃部を付設する端削器と考えられる。素材剥片は、背面に横位の剝離痕があるが、打面は精細に調整されている。尾部の腹面剝離は、端削器としては破格なものである。刃部の角度は55°前後で、あまり切り立ったものではない。

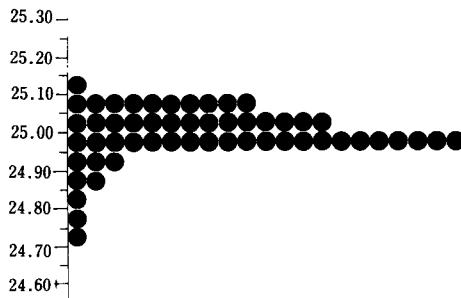
剥片の中には、4のような石刃が含まれている。平坦打面をもち、背面に単一方向からの剝離面が切り合う。しかしながら、明確に石刃と言えるのは、本例のみであり、その実体については殆んど何も分からない。6は石槍作出剥片である。比較的大き目で細身の槍が存在した可能性があろう。この資料に類する剥片はもう1点あるが、石槍の本体はない。従って、この2点の資料は別地点での製作に伴う剥片の一部が選択的に搬入されたものと考えられよう。

第215図1はブロック外採集の小型石槍である。基部端を欠損するが、ほぼ完形である。珪質頁岩の石刃、あるいは縦長剥片を素材としている。半両面打製で、素材の背面側は、基部右側に旧剝離面を僅かに残しているが、ほぼ全面が2次加工面におおわれている。一方、腹面側は、基部寄りの部分が良く調整されているが、尖頭部側では周辺部のみ細かく剝離されている。横断面は紡錘形をしている。第9、第10ブロックの槍とは大きく異なっているようである。

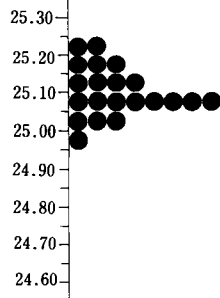
① 第17ブロック



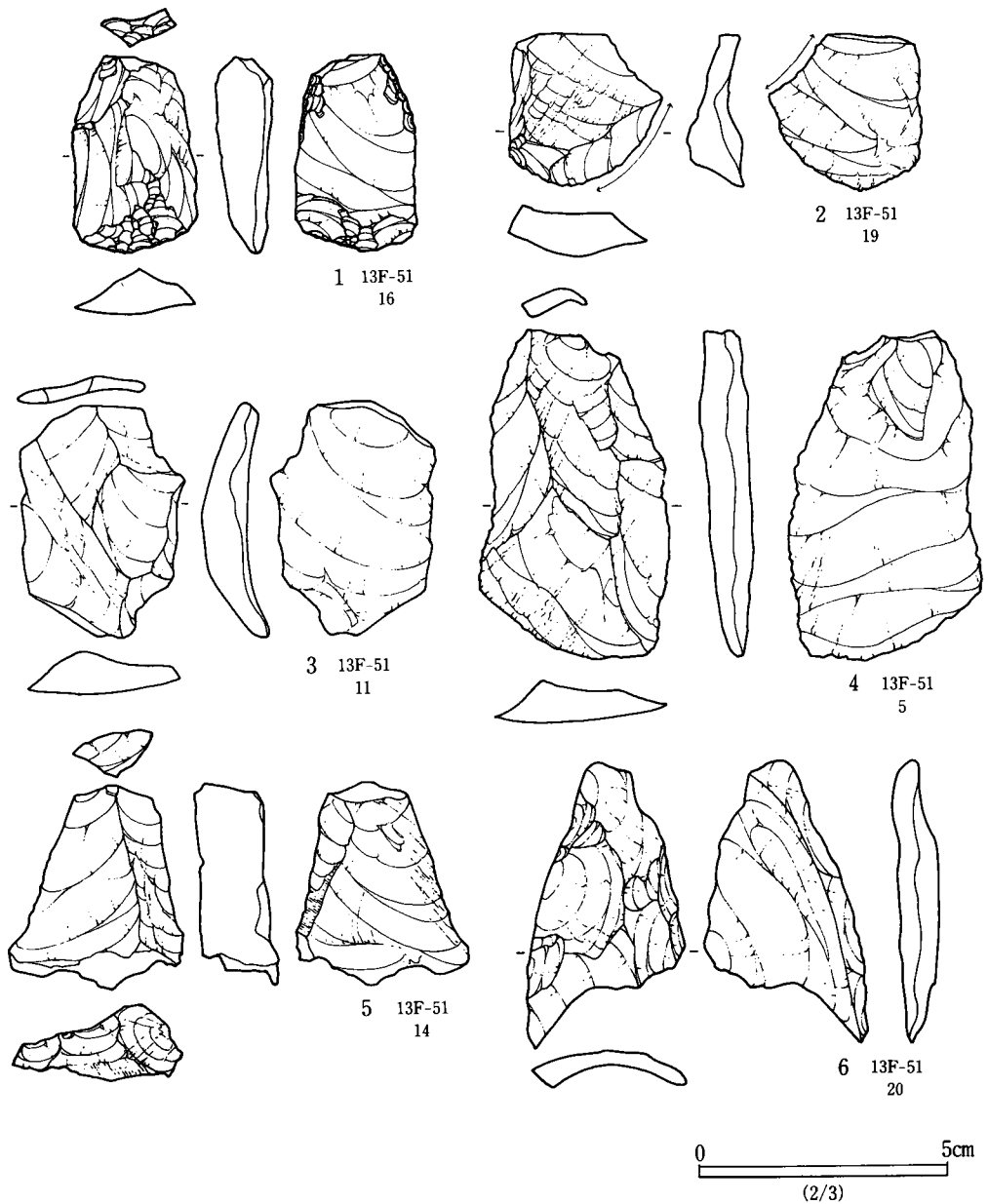
② 第18ブロック



③ 第11ブロック

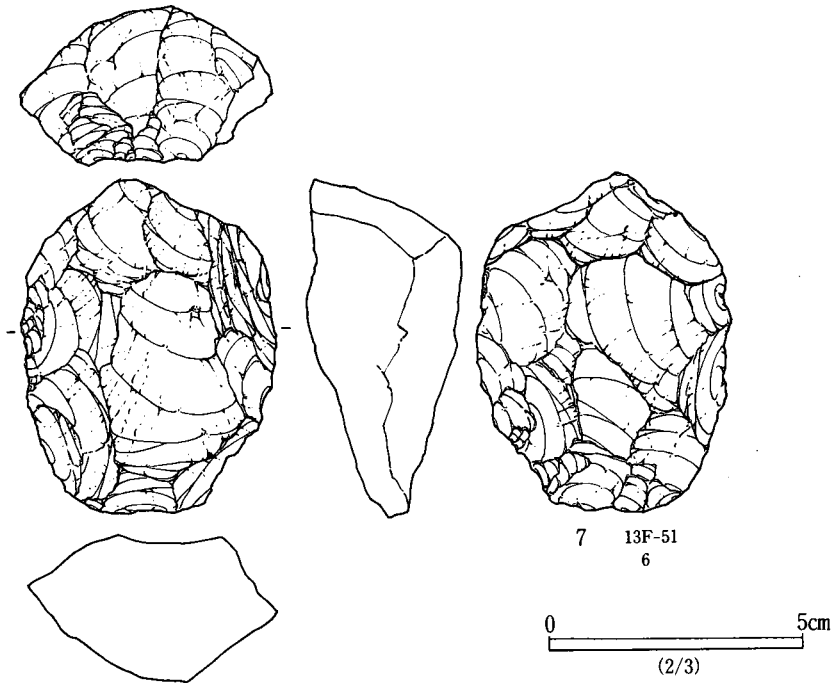


第194図 大林遺跡第14地点遺物垂直分布



第195図 第11ブロック石器実測図(1)

7は安山岩製の石核と考えられる。説明の都合で、実測図に向って左側の面を正面、左側を背面、上部の傾斜する面を上面と呼ぶ。上面は、大き目の3枚の剝離面と、小型の調整剝離痕とから構成されているが、これらの各面は正面中央の剝離痕を切っており、一種の調整打面と見ることができる。正面には周辺からの調整剝離痕と、それを切る上面からの細長い剝離面、さらに、これを切るやや幅広の剝離面があり、大きく、周縁からの求心的剝離による面と、上面からの剝離面とに分けられよう。一方、背面は、周縁からの求心的剝離痕が全面を被覆し、亀甲



第196図 第11ブロック石器実測図(2)

状の盛り上りを見せている。以上の状況から、正面中央の面は旧打面からの企図的な剥片剥離痕と判断され、この剥離後に、再び上面に調整が加えられ、新打面が準備されたのであろう。従って、この石核から剥離された目的剥片は、その背面に横位の剥離痕をとどめる縦長のものであったにちがいない。

c) **石器石材** 珪質頁岩2種、泥岩1種、安山岩4種という母岩構成で、第9・第10ブロックのように黒曜石を使っていない。ブロック外の石槍は、端削器の石質と酷似しており、同一の母岩に含めた。安山岩82は、トロトロ安山岩であるため、母岩の識別が容易ではない。あるいは更に細分される可能性を孕んでいる。

d) **小結** 小型石槍を含む小ブロックである。石槍は細身で木葉形の半両面加工のものが1点あるにすぎず、どのような形態組成を示すものかは不明である。石槍作出剥片を見ると、両面打製の細身の槍もあったのかもしれない。ナイフ形石器は伴出しなかったが、もとより、このブロックが全ての器種を具備しているとは到底言えないので、石器組成に就いては不明としておく以外にはない。第9、第10ブロックとの時間的關係についても議論することはできない。しかしながら、第9、第14両地点において、上下2枚の、ある意味で相似的な文化層が近接して並存する点は記憶されてよいかもしれない。

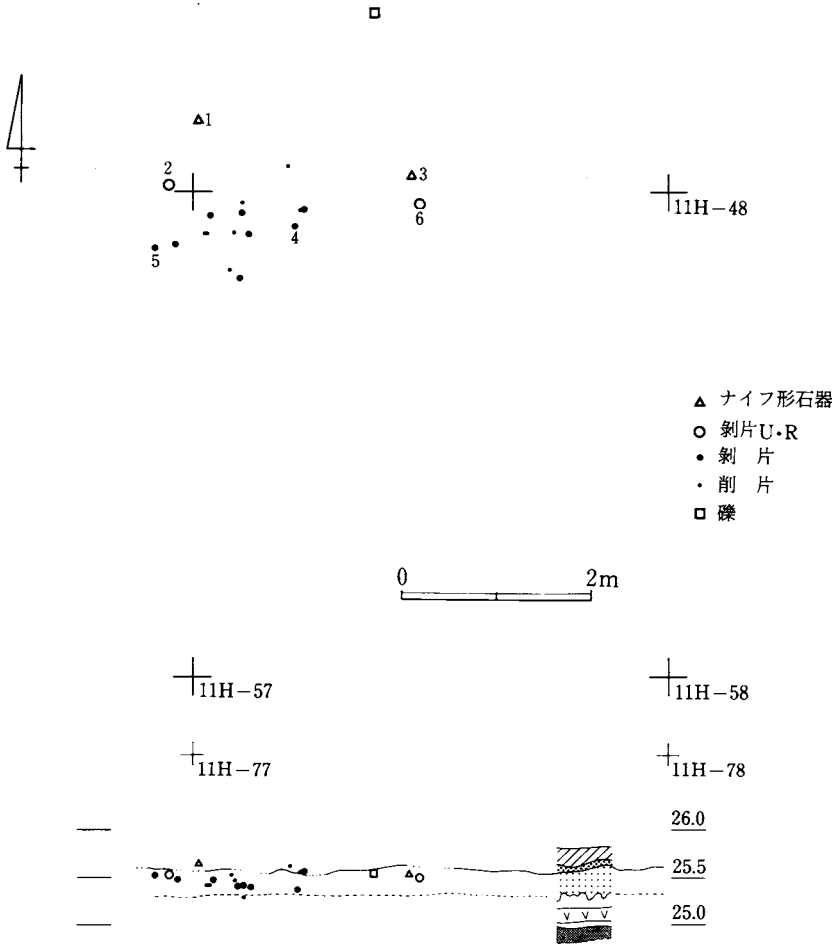
D. 第Ⅲ文化層 ソフトローム層中に生活面の想定される文化層である。第9地点におけ

る層位的出土状況からソフトローム層中の石器群を上下に2分したが、そのうち下層部に位置するブロックを基準として文化層を設定した。第9地点に5ブロック、第14地点に2ブロック、第15地点に2ブロック、全てで3地点9ブロックという分布状態を示している。各地点間には直接的関係が見い出されないで、当然相当の、あるいは若干の時間差を指摘し得るが、便宜的に一文化層に統合した。

12ブロック (第197・第198図、図版66)

a) 分布状況 第9地点に設定した5箇所のブロックのうち最北端に位置している。11H-47ポイントの東側を中心とする、東面3m、南北2mの範囲で、少量の石器類がコンパクトに集中している。ブロックの中心部分には剥片類が、外縁部に2次加工のある石器や目的剥片が分布する傾向が窺える。産出層準はソフトローム層の中位により若干上部と考えられる。

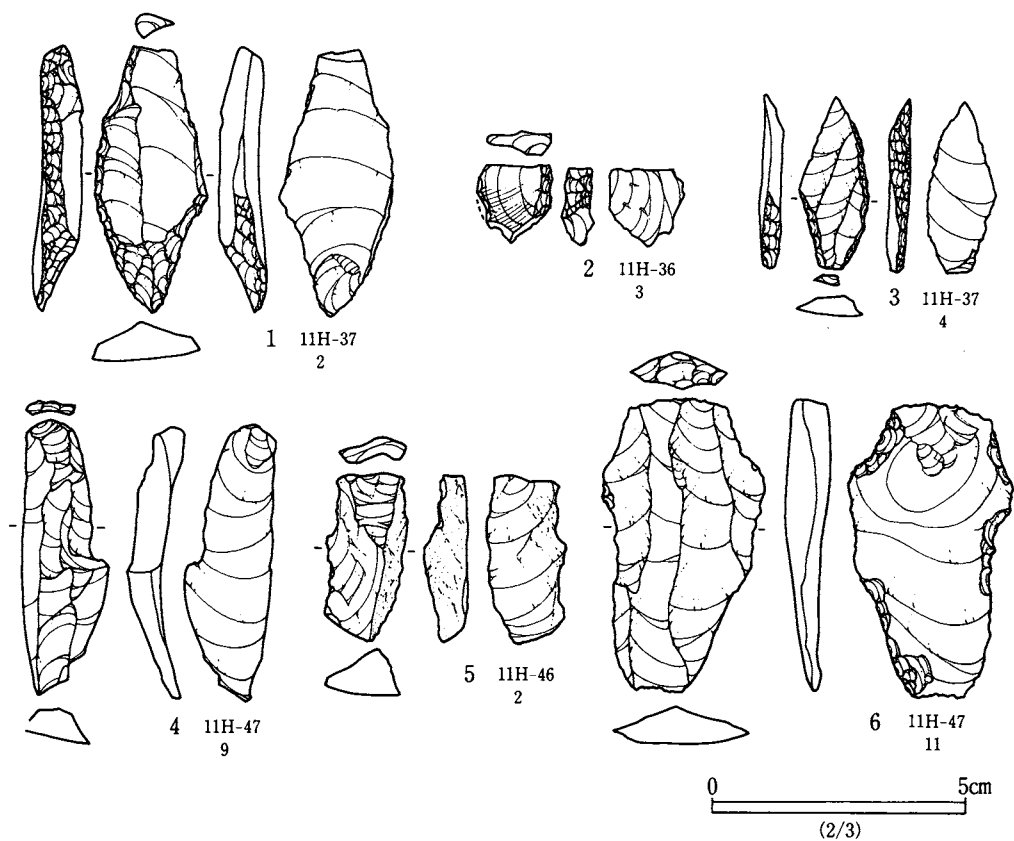
b) 出土遺物 ナイフ形石器2点、加工痕ある剥片2点、剥片10点、砕・削片8点、碎碎礫



第197図 第12ブロック遺物出土状況

第103表 第12ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	剥片U 剥片R	剥片	削片	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珩質頁岩 52	1	0	0	0	0	1	4.3	8.69	11.7
凝灰岩 26	1	0	9	7	0	17	73.9	27.62	37.0
凝灰岩 29	0	1	0	0	0	1	4.3	14.41	19.3
凝灰岩 40	0	0	1	0	0	1	4.3	20.14	27.0
黒曜石 27	0	0	0	1	0	1	4.3	0.16	0.2
黒曜石 28	0	1	0	0	0	1	4.3	1.12	1.5
チャート 38	0	0	0	0	1	1	4.3	2.41	3.2
総数	2	2	10	8	1	23	100.0	74.55	100.0
組成比 (%)	8.7	8.7	43.5	34.8	4.3				



第198図 第12ブロック石器実測図

1点、合計して23点の遺物から構成されている。

1はチョコレート色の良質で珩化の著明な頁岩から作られた石刃ナイフである。石刃打面側を基部にし、2側縁に精緻なブランティングが観察される。尖頭部は古い欠損で、その部分に連続する未加工の縁辺には微細な刃こぼれが看取される。3はやや小型であるが、周趣の石刃製2側縁加工のナイフ形石器である。打面部を尖頭部側におくが、典型的な斜め整形によって

完全に除去されている。基部端を僅かに欠損するが、1と同様に尖基となろう。2もナイフ形石器かもしれないが、はっきりしないので、2次加工のある剥片と分類した。横長貝殻状の素材打面部を折り取るように2次加工痕が認められる。

4～6は石刃である。石刃はこの3点しか遺存せず詳細は技術的特徴を把握することはできない。打面には平坦(5)、複剝離(4、6)の2者があるが、6のように、作業面の剝離痕を切って細かい2次調整を行う例がある。背面構成には、自然面を残すもの(5)、打面側からの剝離痕のみによって構成されるもの(6)、打面と逆位の剝離軸をもつ剝離痕の加わるもの(4)などの別があり、打面調整や打面転位といった諸技術の介在を窺わせる。

c) **石器石材** 珪質頁岩、凝灰岩、黒曜石などが石器の素材とされているが、特に凝灰岩が多用されている。凝灰岩には3母岩存在するが、このうち凝灰岩26の量が圧倒的に多い。この石材は、細かい砕削岩片をゴマ塩状に含む茶褐色の部分が縞状に入る僅かに青味を帯びる極細粒白色凝灰岩であり、磁器状の外観を呈している。本ブロック例をも含めて、珪質凝灰岩(オパール)は珪質頁岩と対になって検出される場合が多いことは既に指摘したとおりである。このことは、両者の原産地が一致、若しくは近接するものであることを暗示している。仮にそうであれば、新第三紀初頭のグリーンタフ火山活動と、それに後続する女川期の珪質頁岩の形成域と関連する蓋然性が最も高いであろう。両者は福島県中通り以西で共存しており(相田 1987)、この地域から、奥日光にかけての山間部が今後問題となるであろう。砂川型ナイフを出した塩坪遺跡の存在は暗示的である。

d) **小結** ソフトローム層上部を産出層準とし、ナイフ形石器と石刃を主体とする小規模なブロックである。その性格は、第9地点の全体の中で考えなければならない。

第13ブロック (第199・第200図)

a) **分布状況** 第9地点の第12ブロックと第16ブロックの中間に位置している。11H-57ポイントの北側、東西2m、南北1mの範囲に大体の遺物が分布している。

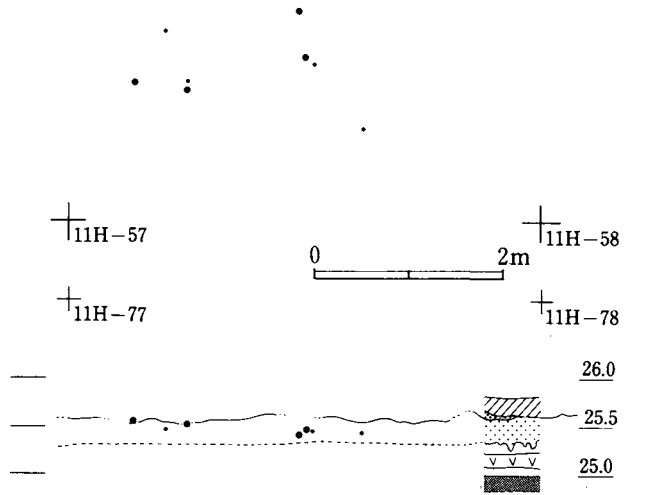
b) **出土遺物** 剥片4点、砕・削片4点のみの検出である。剥片は図示したものが最大のもので、全てが不定形の調整剥片によって占められている。石刃を1点も含まず、廃棄された waste

第104表 第13ブロック遺物集計表

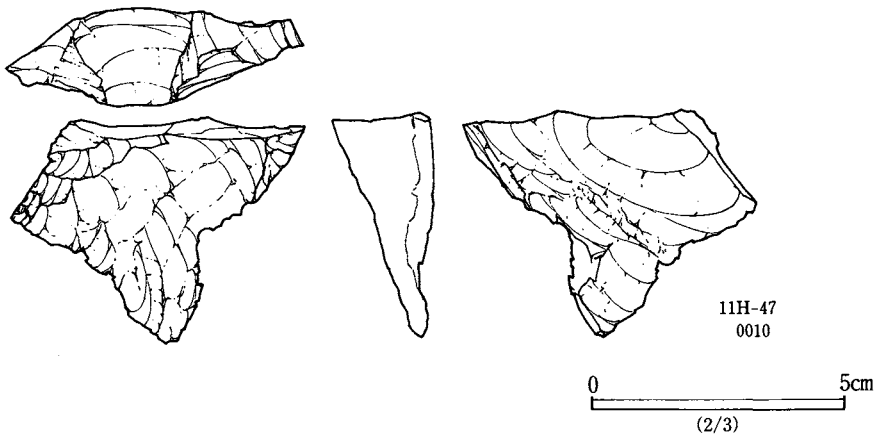
母岩番号	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
凝灰岩 26	3	3	6	75.0	36.28	94.6
凝灰岩 27	1	0	1	12.5	1.87	4.9
黒曜石不明	0	1	1	12.5	0.17	0.4
総数	4	4	8	100.0	38.32	100.0
組成比 (%)	50.0	50.0	100.0			

11H-47

11H-48



第199図 第13ブロック遺物出土状況



第200図 第13ブロック石器実測図

である可能性が高い。

c) 石器石材 凝灰岩26が6点と大半を占め、他に凝灰岩と黒曜石とが1点ずつあるにすぎない。

d) 小結 小範囲内にごく少量の剥片が散布しており、性格に不明な部分が多い。

第14ブロック (第201～203図、図版66)

a) 分布状況 第9地点東端のブロックである。11H-58区から59区にかけて、東西5m、南北3.8mの範囲に集中的に遺物が分布しているが、周辺に散るものも少量ある。

b) 出土遺物 総数で40点と少量の遺物しかないように見えるが、これは本ブロックに殆んど削片が含まれていないことに帰因し、狭義の石器一道具の占める割合は極めて高率である。石器組成は、ナイフ形石器7点、端削器1点、2次加工、あるいは刃こぼれのある削片5点4個体、削片16点、うち石刃6点、砕・削片6点、礫片4点である。

1～7に破片を含めた全てのナイフ形石器を示した。1は石刃の斜め整形による2側縁加工の爪型ナイフ形石器。打面部は尖頭部側にあるが、斜め整形手法の採用に伴い、素材の打面部

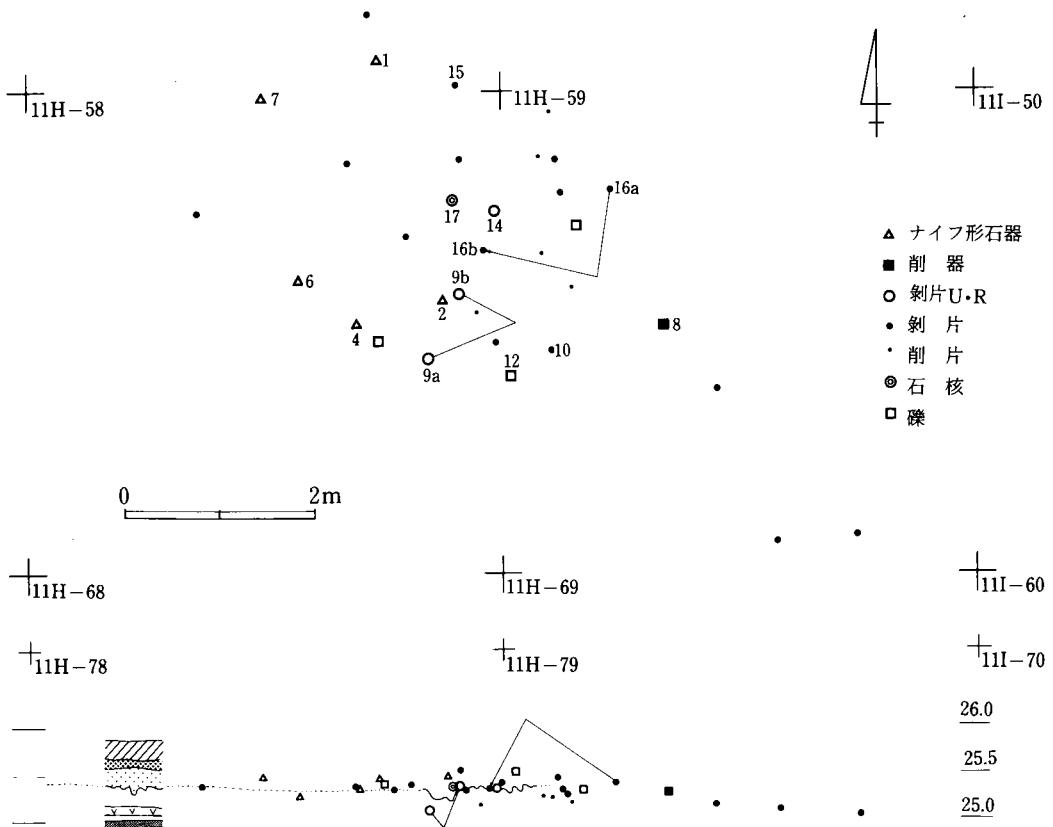
第105表 第14ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	削器	削片U 削片R	削片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 53	1	0	1	0	0	0	0	2	5.1	12.96	6.3
珪質頁岩 54	0	0	0	1	0	0	0	1	2.6	4.58	2.2
珪質頁岩 55	0	0	1	0	0	0	0	1	2.6	5.26	2.6
珪質頁岩 56	0	1	0	0	0	0	0	1	2.6	14.85	7.2
珪質頁岩 57	0	0	1(2)	0	0	0	0	1(2)	2.6	17.33	8.4
珪質頁岩 58	0	0	0	1	0	0	0	1	2.6	7.83	3.8
珪質頁岩 59	0	0	0	1	0	0	0	1	2.6	5.18	2.5
珪質頁岩 60	1	0	0	0	0	0	0	1	2.6	2.66	1.3
珪質頁岩 61	1	0	0	0	0	0	0	1	2.6	1.25	0.6
珪質頁岩 62	0	0	0	1	0	0	0	1	2.6	0.68	0.3
珪質頁岩 78	0	0	0	0	1	0	0	1	2.6	0.21	0.1
珪質頁岩不明	0	0	0	1	0	0	0	1	2.6	0.20	0.1
凝灰岩 26	1	0	0	0	0	0	0	1	2.6	4.27	2.1
凝灰岩 28	1	0	0	0	0	0	0	1	2.6	2.18	1.1
凝灰岩 30	2	0	0	0	0	0	0	2	5.1	3.03	1.5
凝灰岩 31	0	0	0	5	0	0	0	5	12.8	17.21	8.4
凝灰岩 32	0	0	1	0	0	0	0	1	2.6	9.13	4.4
凝灰岩 35	0	0	0	0	1	0	0	1	2.6	0.52	0.3
凝灰岩 41	0	0	0	0	1	0	0	1	2.6	0.06	0.01
凝灰岩 42	0	0	0	0	1	0	0	1	2.6	0.12	0.06
安山岩 67	0	0	0	2	2	0	0	4	10.3	12.31	6.0
安山岩 74	0	0	0	1	0	0	0	1	2.6	21.46	10.5
泥岩 7	0	0	0	1	0	0	0	1	2.6	1.41	0.7
泥岩 8	0	0	0	1	0	1	0	2	5.1	28.39	13.8
泥岩 9	0	0	0	1	0	0	0	1	2.6	0.42	0.2
砂岩 40	0	0	0	0	0	0	2	2	5.1	18.74	9.1
流紋岩 6	0	0	0	0	0	0	2	2	5.1	13.05	6.4
総数	7	1	4(5)	16	6	1	4	39(40)	100.0	205.29	100.0
組成比 (%)	17.9	2.6	10.3	41.0	15.4	2.6	10.3				

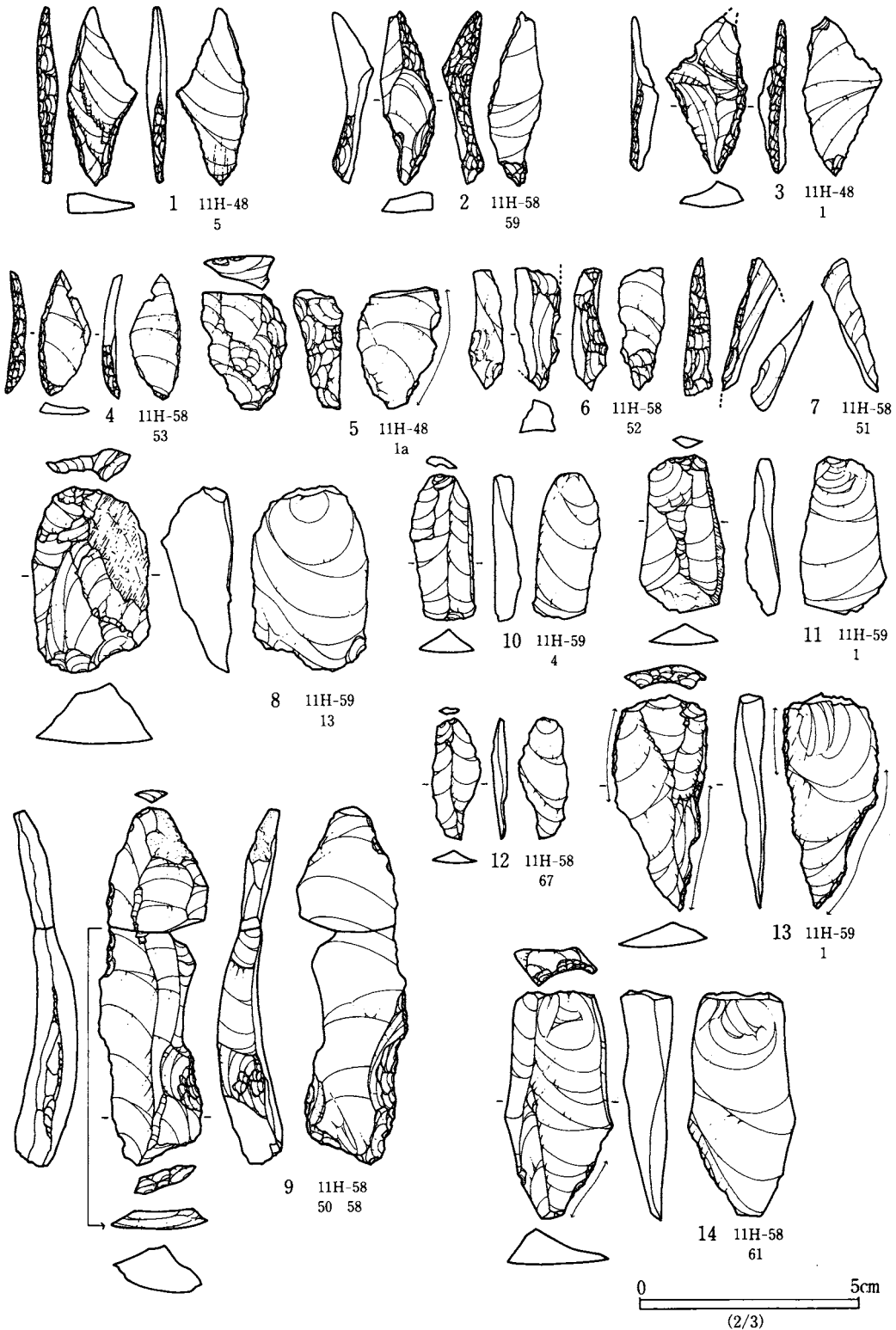
と石器基部との対応関係は失われている。2も同種の石器であるが、厚手の石刃を折断するため、背腹両面からブランディングが加えられている。それから、もうひとつ注意したいのは、基部の腹面剥離で、腹面左側縁からの細かい剥離痕が観察される。刃部は、1の例では微細剥離痕が連続していたが、本例ではシャープな縁辺が保持され、未使用の槍先かと想像される。

3は本ブロック近くの採集品であるため、厳密にはブロックに含めることはできないが、便宜的にこの項で説明したい。3角形に近い幾何学的形態をしているが、両設打面、あるいは多設打面の石核から落された剥片を素材としている。2側縁加工で、未加工の側縁が残されているが、1と同様の弧状の微細な刃こぼれが認められる。基部腹面に斜列に近い調整がある。4は石刃の斜め整形による2側縁加工の例である。半月形の形態であり、第13ブロックに類例がある。刃部の尖頭部寄り4.5mmの範囲にの軽微な刃こぼれが看取される。

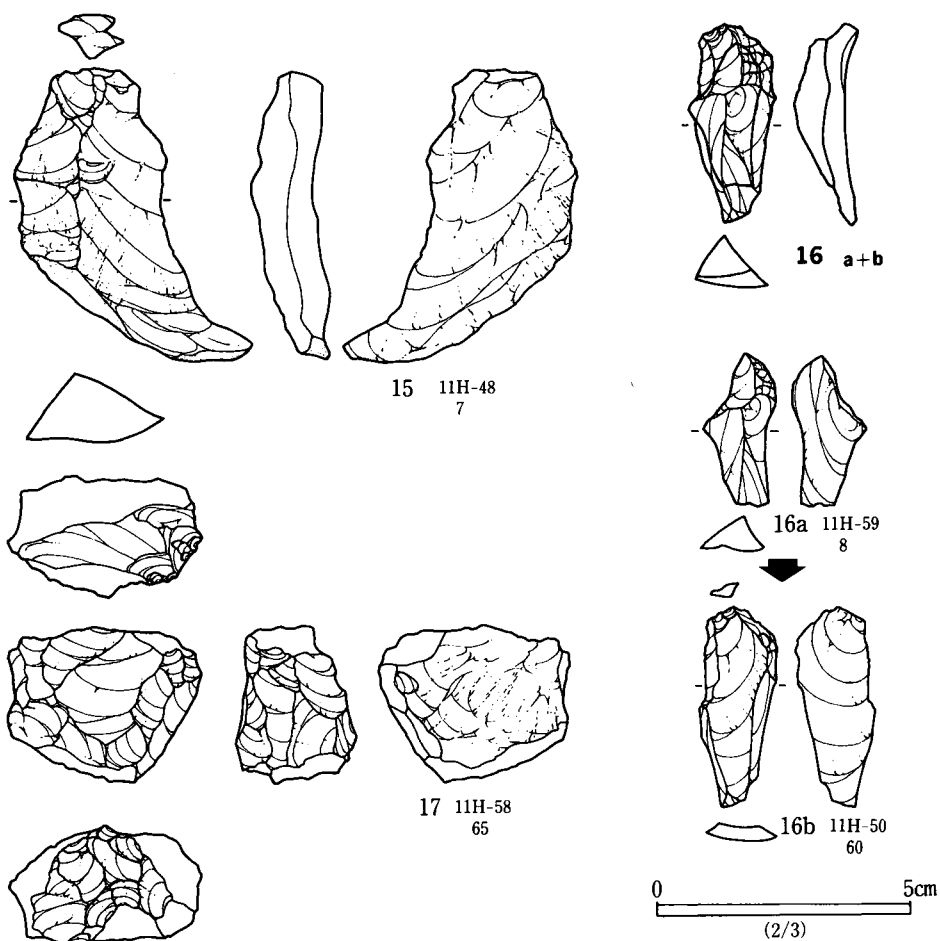
5～7はいずれも破損品で詳細は不明である。5は1側縁加工の例かもしれない。6が基部破片であるとする推定が正しければ、本資料もまた3と近似した腹面調整のある例となる。51は明らかに尖頭部の破片で、比較的大型のナイフ形石器となるかもしれない。なお、6、7は同一個体となる可能性もある。7に遺存する刃部には刃こぼれは認められない。



第201図 第14ブロック遺物出土状況



第202図 第14ブロック石器実測図(1)



第203図 第14ブロック石器実測図(2)

8は縦長剥片尾部を刃部とする端削器である。しかし、刃部の加工は粗略で、角度も浅く典型的な端削器と見ることは到底できない。

9～16には石刃を、17に石核を示した。石刃の特徴として、第11ブロックのそれにつけ加えるものはない。複剥離打面をもち、背稜と側縁のそろう9が典型的なものであろう。頭部調整の過程は一般的ではない。16では稜形成の作業面調整と見做しうる背稜上の加撃痕が看取される。9のように側面、腹面に2次加工のある特異な例もある。

石核は1点あるが(17)、最終段階に至っており、剥片乃至石刃の生産過程を反映する資料ではない。

c) 石器石材 本ブロックの石材構成は、珪質頁岩11種、凝灰岩8種、泥岩3種、安山岩2種、砂岩、流紋岩各1種、計26種の母岩から構成されている。

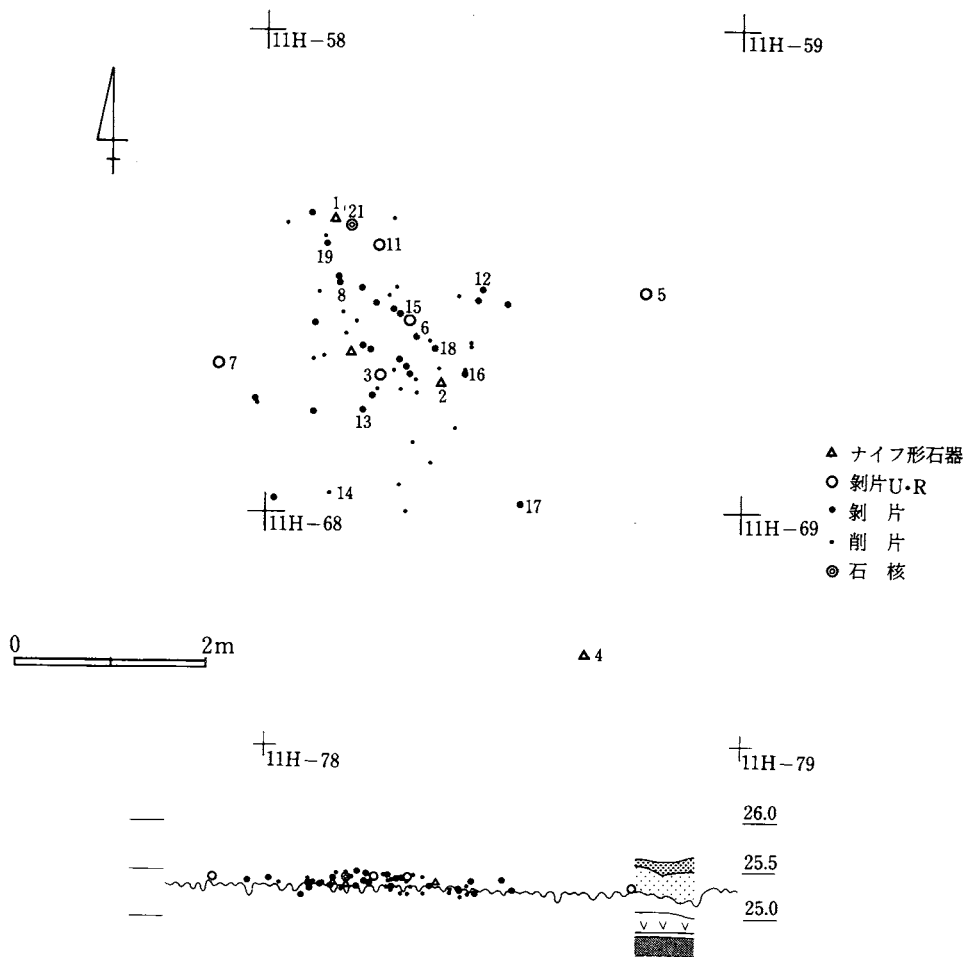
総点数が40点であるから、単純に1母岩に帰属する資料の平均をもとめると、2点に満たないという些か異常なあり方を示している。1母岩に1点しか含まれないものが19種にものぼり、

最も多くの資料をもつ凝灰岩31の場合も、その資料数は5点あるにすぎない。

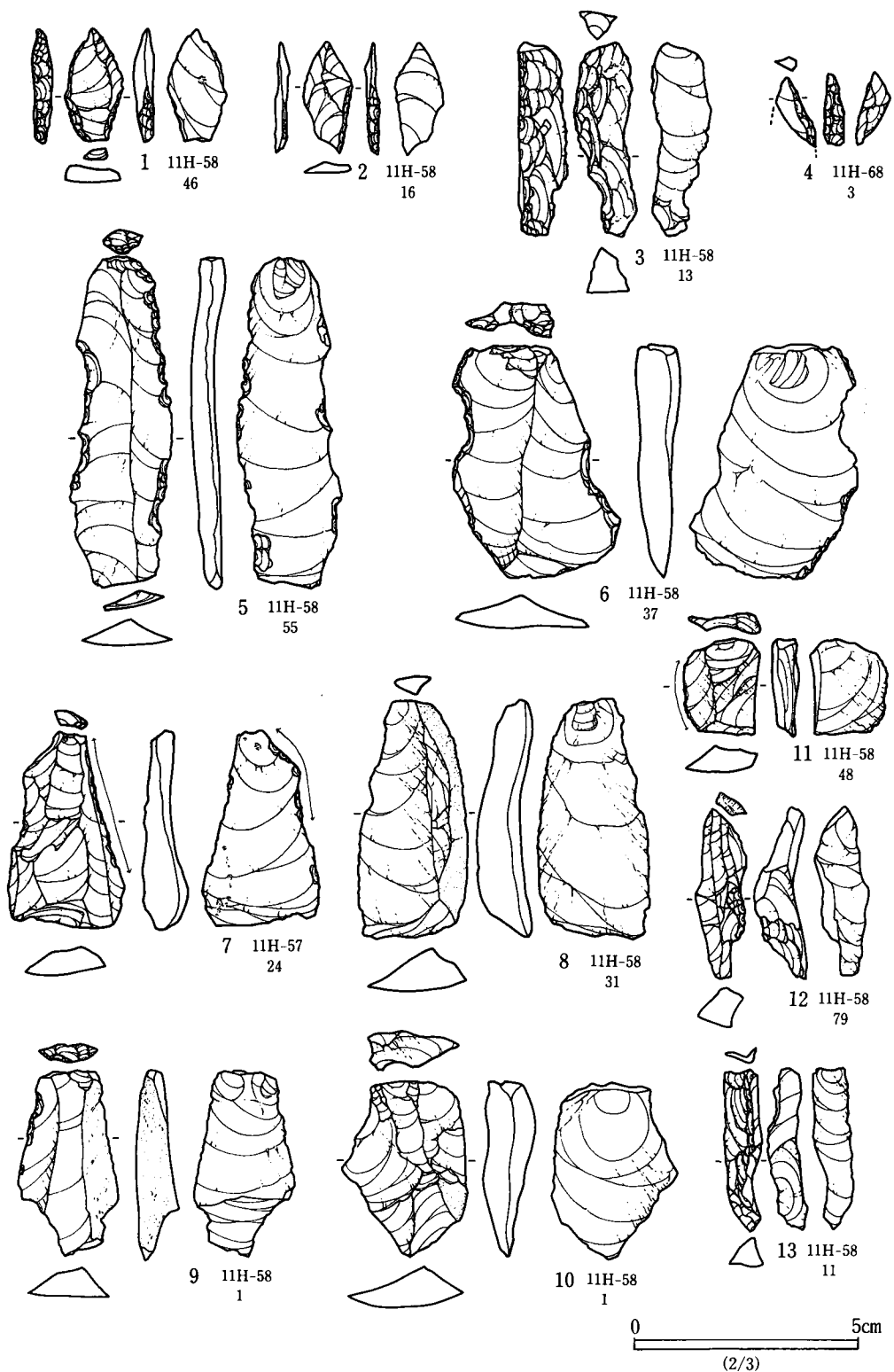
d) 小結 第14ブロックの特徴は、道具として使用過程に組み込まれた、あるいは、組み込まれることを企図された石器が集中することである。しかも、それらの道具類の大半は異なった種類の石材から作られている。

第15ブロック (第204～第206図、図版66)

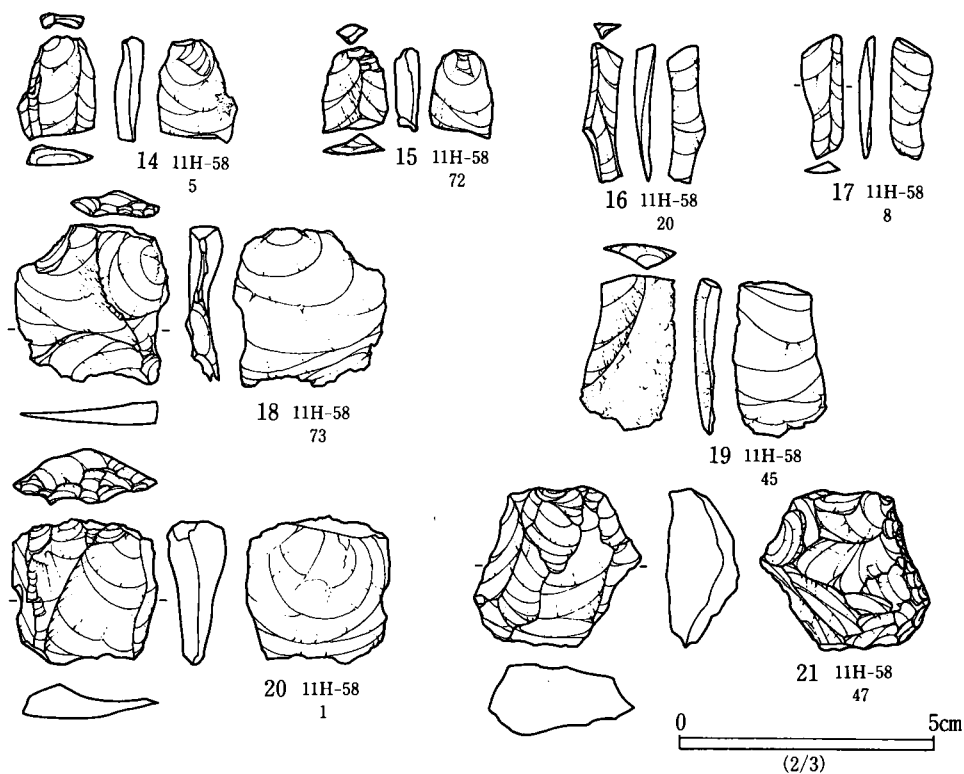
a) 分布状況 第14ブロックの南西側にあり、第16ブロックとも南西で接しており、3ブロックが並存する状態を呈している。ブロックは11H-58区にあり、径約3mぐらいのまとまりを示している。この南側にも若干の遺物の飛散が認められるが少量である。ブロックの中心部分には、剥片と碎・削片が集中し、2次加工の有無に拘らず、道具と見做し得るものが剥片類と重複する状態で分布している。



第204図 第15ブロック遺物出土状況



第205図 第15ブロック石器実測図(1)



第206図 第15ブロック石器実測図(2)

第106表 第15ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珉質頁岩 67	0	1	0	0	0	1	1.4	11.97	8.9
珉質頁岩 68	2	0	0	0	0	2	2.9	1.81	1.3
珉質頁岩 69	0	0	5	4	0	9	12.9	6.68	5.0
珉質頁岩 77	0	0	0	1	0	1	1.4	0.08	<0.1
珉質頁岩 79	1	0	0	0	0	1	1.4	0.14	<0.1
凝灰岩 31	0	0	1	0	0	1	1.4	23.67	17.6
凝灰岩 26	0	2	9	12	0	23	32.9	28.36	21.1
凝灰岩 36	0	1	0	0	0	1	1.4	8.35	6.2
凝灰岩 37	0	0	2	1	1	4	5.7	17.19	12.8
凝灰岩 41	1	0	0	5	0	6	8.6	0.69	0.5
凝灰岩 42	0	0	0	1	0	1	1.4	0.16	0.1
安山岩 67	0	0	1	0	0	1	1.4	12.69	9.4
泥岩 10	0	0	1	0	0	1	1.4	0.41	0.3
泥岩 12	0	1	0	0	0	1	1.4	2.08	1.5
泥岩 13	0	0	9	6	0	15	21.4	19.14	14.2
泥岩 14	0	0	0	1	0	1	1.4	0.07	<0.1
水晶 1	0	0	1	0	0	1	1.4	1.03	0.8
総数	4	5	29	31	1	70	100.0	134.52	100.0
組成比 (%)	5.7	7.1	41.4	44.3	1.4				

b) **出土遺物** 70点の遺物から構成されている。ナイフ形石器4点、石刃14点を含む剥片29点、削片31点、石核1点という構成を示している。凝灰岩26の個体消費を反映して、調整剥片や砕・削片の検出量が多いことも特徴である。

ナイフ形石器は不確実なもの1点を含めて4点ある。1は基部端を少し欠いているが、ほぼ完存している。石刃素材の斜め整形のものであるが、比較的小型の部類に属する。2も石刃尾部をトリミングした小型のもの。両例共に刃部に細かい刃こぼれがある。4も同趣のナイフ形石器の尖頭部破片。3は断面3角形の部厚い剥片の一側縁に2次加工痕があり、第14ブロック5と近似したナイフ形石器かとも考えられるが、半欠しており、判定は困難である。

石刃(5～17、19)と剥片(18、20)に関しては、新たに指摘し得る点は少ない。稜形成の作業面調整を示唆する稜付石刃は2例が追加された(12、13)。しかし、打面再生に関与する剥片は認められず、この工程の存在は留保せざるを得なかった。

石核は1例あるが(21)、この石核からの剥片剥離に関連する剥片類は3点あるのみで、ブロック内における剥片生産に就いては否定的にならざるを得ない。石核自体は最終段階のもので、一部両極加撃痕が認められるなど、遺存状況から見て、先行する過程を復原することは困難である。

c) **石器石材** 珪質頁岩が5種、凝灰岩が6種、泥岩(頁岩)が4種、安山岩と水晶が1種ずつ、計17種の母岩が識別された。このうち、単独母岩が11種と相変らず多数を占めるが、凝灰岩26は、剥片11点、砕・削片12点という内容を有し、かつ、ブロック内における分布も、遺物集中部に収斂する傾向が認められるので、限定的とは言え、剥片剥離の工程の存在を想定してもよいかもしれない。

d) **小結** 第9地点の諸ブロックの中では数量的に卓越するブロックであるが、ブロック自体のひろがり、他と比較してもそれほど大きな懸隔は認められない。むしろ、分布密度が相対的に高いブロックとなっている。この背景には、凝灰岩26の母岩消費に伴う waste の廃棄が指摘される。この母岩の存在を排除してみると、単独母岩を主とする少量の母岩別資料しか含まぬ各種母岩の集会的様相が浮上することになる。

第16ブロック(第207・第208図 図版67)

a) **分布状況** 第15ブロックの西側、11H-57区に中心として、東西4m、南北5mの範囲を占めている。遺物はブロックの北側に分布するものが目立ち、北西から南東に流れるように飛散するものが少量ではあるが認められる。同様の傾向は第13・15ブロックにも観察される。

b) **出土遺物** ナイフ形石器が小破片を含めて2点あるが、剥片を主体としたブロックと考えられる。剥片類は削片が1点含まれるが、石刃8点、一般的剥片13点という構成となっている。

第107表 第16ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	剥片U 剥片R	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 63	1	0	0	0	1	4.2	1.85	1.2
珪質頁岩 64	0	1	0	0	1	4.2	1.86	1.2
珪質頁岩 65	0	0	1	0	1	4.2	1.71	1.1
珪質頁岩 66	0	0	1	0	1	4.2	3.11	2.0
凝灰岩 26	1	0	8	0	9	37.5	30.69	19.7
凝灰岩 34	0	0	1	0	1	4.2	9.82	6.3
黒曜石不明	0	0	0	1	1	4.2	0.27	0.2
安山岩 67	0	0	7	0	7	29.2	104.54	67.2
泥岩 11	0	0	1	0	1	4.2	1.24	0.8
石英 1	0	0	1	0	1	4.2	0.59	0.4
総数	2	1	20	1	24	100.0	155.68	100.0
組成比 (%)	8.3	4.2	83.3	4.2				

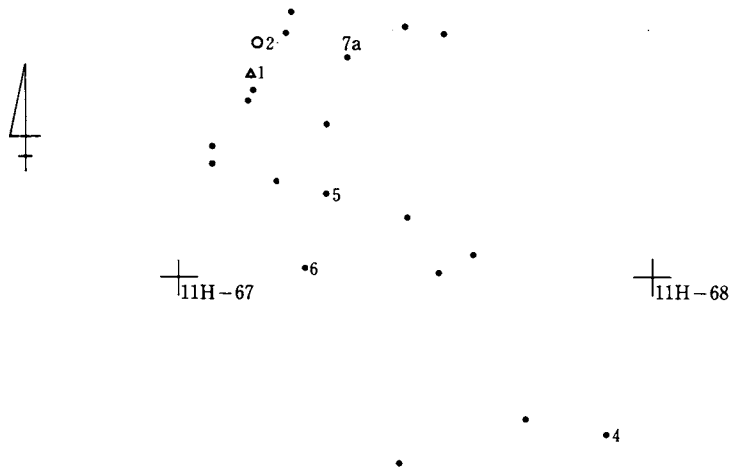
1はナイフ形石器である。基部を欠損している。背面に多方向からの剥離面を残す縦長剥片の側縁にブランディングが看取される。ナイフ形石器はもう1点あるが、背部の小破片で詳細は分からない。2～6は石刃、7は安山岩製の剥片と石核の接合状況を示した。7bの石核は検出地点が不明であるが、ブロック内の大型剥片(7a)と接合する。この安山岩と同一の母岩に属する剥片は他に5点あるが、大型のものはない。ここで特に注意したいのは、この接合資料が如実に示すような、打面作業面交代型の横長剥片作出の手法が、多数の石刃と共存した点である。更に、石刃が珪化度の高い頁岩と凝灰岩を素材とするのに対して、横長剥片作出の石核が安山岩製である点にも留意しておきたい。すなわち、剥片剥離手法も二項的であるが、同時に、その素材の選択も二項的である。

c) 石器石材 凝灰岩26が9点、安山岩67が7点(石核を含めると8点)の資料を含んでいるが、他の8母岩はいずれも単独の資料しか含んでいない。凝灰岩26の9点の内訳は、ナイフ形石器破片1点を除く残りの8点はナイフ形石器作出剥片と考えられ、第15ブロックで作出された剥片がブランクとして搬入され、本ブロック内でナイフ形石器が製作された可能性が指摘される。安山岩に就いては、本ブロック内での剥片作出が消極的に肯定される。

d) 小結 ナイフ形石器と石刃を基調とする点では、第14・15ブロック等と構成上での差はないが、量的には少数である。ナイフ形石器や石刃の大半のものが、別地点で生産された搬入製品であるという基本的性格も共通点として列挙し得るであろう。

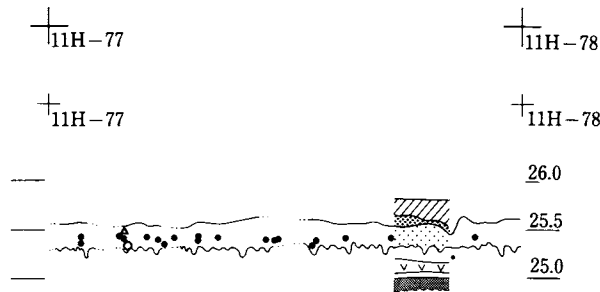
第17ブロック (第209・第210図、図版67)

a) 分布状況 第14地点にある。この地点には3箇所のブロックが並存するが、産出層準の微妙な差(第194図)をもとに、文化層を上下に2分した。上層のものに就いては既に第II文化



- ▲ ナイフ形石器
- 剥片U・R
- 剥片
- ・ 削片

0 2m

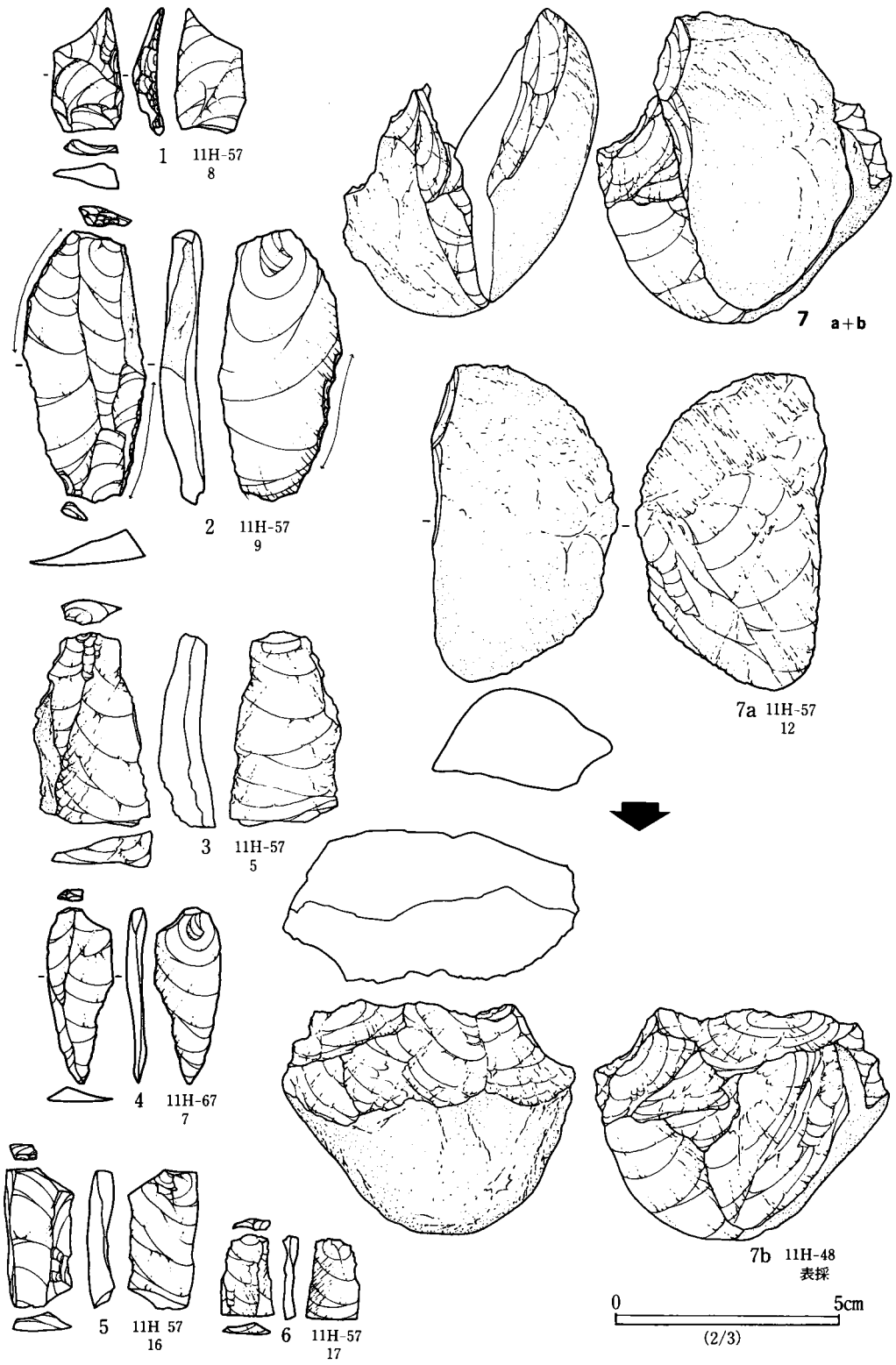


第207図 第16ブロック遺物出土状況

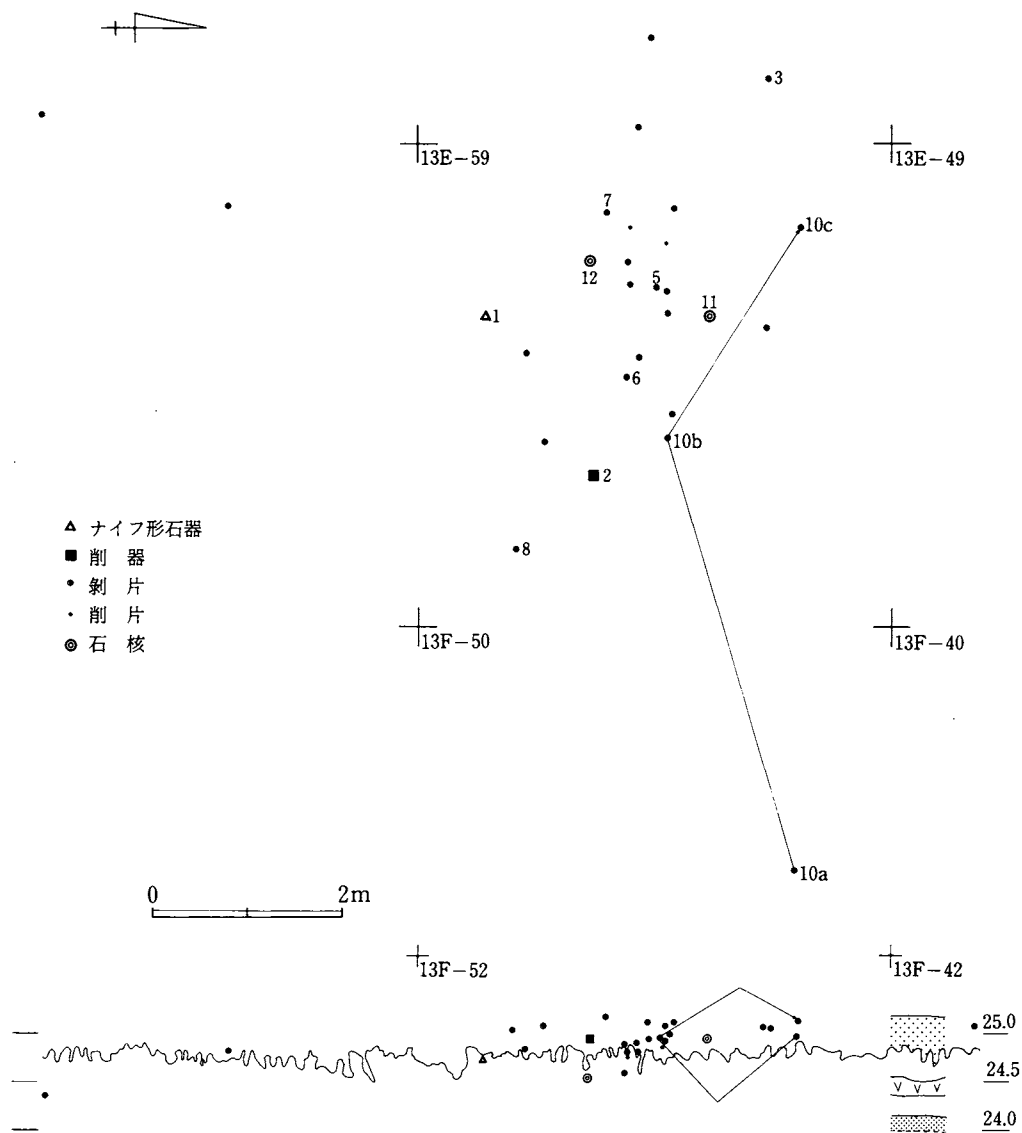
層 b、第10ブロックの項で触れた。下層の2ブロックをそれぞれ、第17、第18ブロックとした。上、下層の石器産出層準は極く近接しているが、多少の問題はあるものの、両者の間には約10cmのレベル差が認められると判断した。

ブロックは13E-49区にあり、遺物は東西2.5m、南北3mの範囲に集中している。ブロックのほぼ中央を南北に走る近世の溝に切られ、遺物の一部を失っている可能性が高い。遺物の垂直分布表で、25.00mから25.05mの間の遺物が一例も記録されていないのは不自然であり、あるいは溝の掘削の影響とも見られる。産出層準はソフトロー層の中位と推定される。

b) 出土遺物 34点の遺物を回収しているが、攪乱溝の存在を考慮すると、本来はもう少し遺物量は多かったかもしれない。石器組成はナイフ形石器、削器各1点、剥片類30点、石核2点であり、2次加工のある石器の数が少ないが、剥片のなかには、10点の石刃が含まれている。



第208図 第16ブロック石器実測図

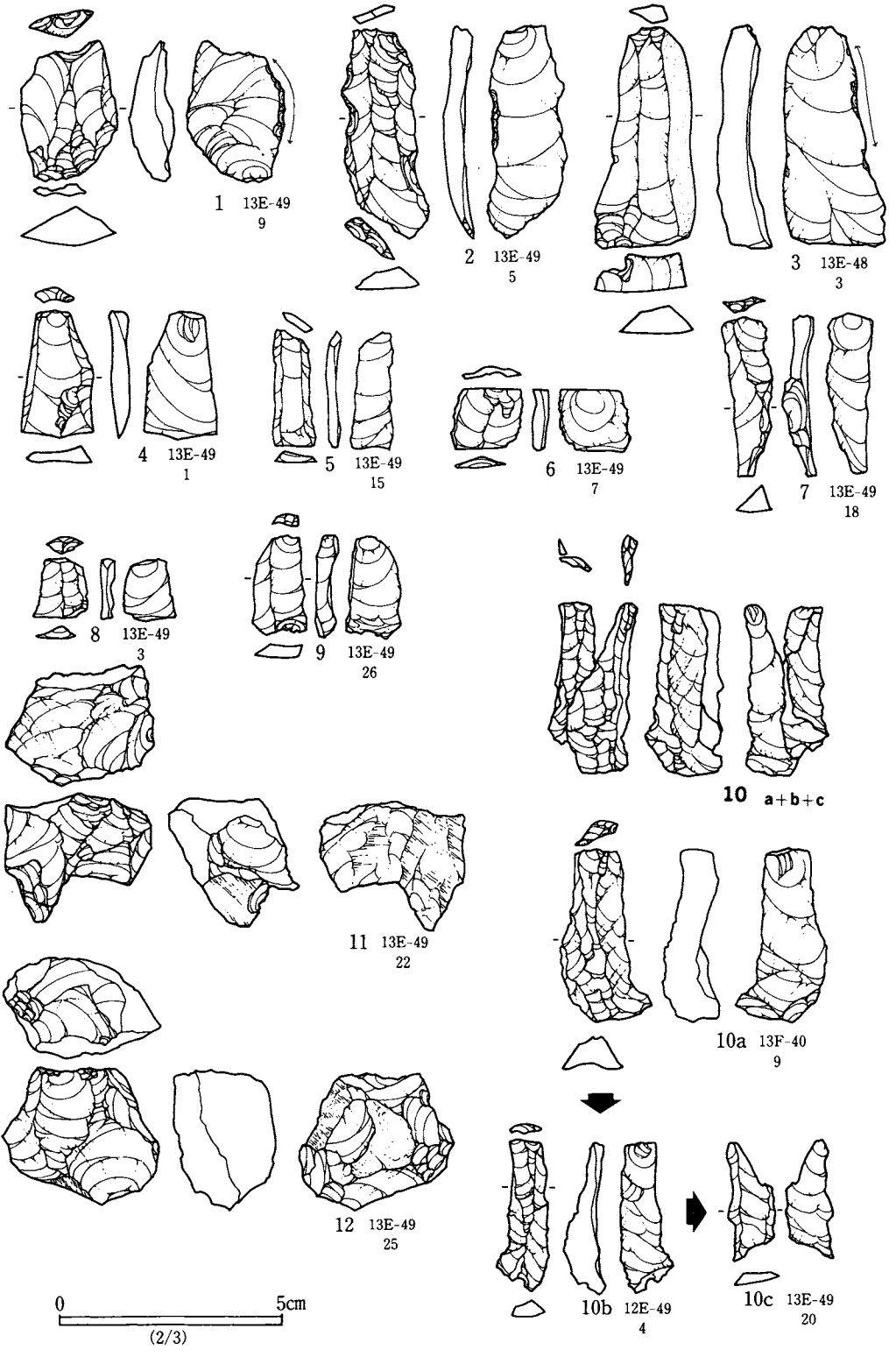


第209図 第17ブロック遺物出土状況

石刃の卓越するブロックと評価し得よう。

1は慣例に従ってナイフ形石器としたが、適切な分類とは言えない。截頂石刃とすべきものである。素材は小さ目の打面をもち、入念な頭部調整痕を残す石刃である。尾部を斜めに截ちおとすように2次加工が加えられている。腹面の片側縁には微細な刃こぼれが著しい。2は石刃製側削器としたが、尾部の2次加工を評価すれば、1と同工異曲の截頂石刃とも分類されよう。

石刃(3~10)に就いては、断片的な接合資料が1例(10)あるのみなので、技術的な過程



第210図 第17ブロック石器実測図

第108表 第17ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	削器	剥片	削片	石核	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 83	1	0	2	1	0	4	11.8	7.52	7.0
珪質頁岩 86	0	0	7	0	1	8	23.5	26.46	24.8
珪質頁岩 88	0	1	3	0	1	5	14.7	32.48	30.4
珪質頁岩 89	0	0	1	0	0	1	2.9	1.87	1.8
珪質頁岩 90	0	0	2	0	0	2	5.9	2.23	2.1
泥岩 18	0	0	1	0	0	1	2.9	11.50	10.8
泥岩 20	0	0	0	1	0	1	2.9	0.82	0.8
泥岩 21	0	0	6	0	0	6	17.6	16.28	15.2
安山岩 81	0	0	1	1	0	2	5.9	0.60	0.6
安山岩 105	0	0	1	0	0	1	2.9	3.95	3.7
黒曜石 34	0	0	1	0	0	1	2.9	2.74	2.6
黒曜石 35	0	0	2	0	0	2	5.9	0.37	0.3
総数	1	1	27	3	2	34	100.0	106.82	100.0
組成比 (%)	2.9	2.9	79.4	8.8	5.9				

をトレースすることが困難である。従って、ごく一般的な特徴を指摘し得るにすぎないが、調整打面と稜形成の作業面調整を持つ本格的な石刃技法の片鱗を窺うことができよう。石核(11, 12)は2例共に最終局面にある残核で、石刃核としての特性を欠くが、11の石核からは、5、9の2例が、12からは2、8の両例が剝離されている。

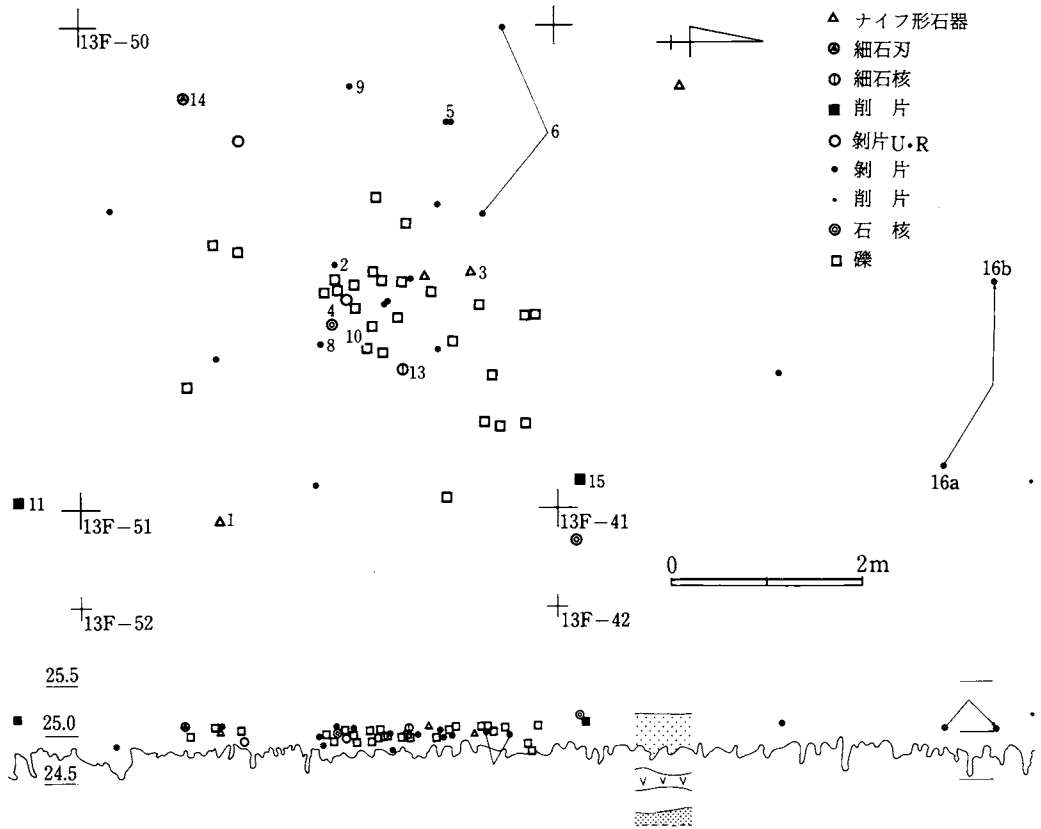
c) 石器石材 珪質頁岩5種、泥岩3種、安山岩、黒曜石各2種、合計して12種もの母岩が存在する。従って、各母岩に帰属する資料数も少数である。特に、削片の遺存度は低く、大半のものが使用を前提としてブロック内に搬入されたものと判断される。

d) 小結 本ブロックの性格を端的に要約すれば、遺跡外の諸地点で生産された石刃を主体とする有用削片の集合体とすることができよう。便宜的にナイフ形石器としたものを含めて、2次加工のある2点も石刃の仲間と考えれば、加工具に偏った組成を示している。

第18ブロック (第211～214図、図版67)

a) 分布状況 第17ブロックのすぐ東側に位置している。13F-40区を中心として、東西2.5m、南北2m位の破碎礫の集中があり、これに入り混じる様に石器類が散在しているが、その分布は散漫で数も少ない。全体的に礫ブロックとしての性格が濃いようである。産出層準はソフトローム層の中位より若干下部である。

b) 出土遺物 58点の遺物があるが、そのうち礫片が27点を占めているので、石器類は31点あるにすぎず、第17ブロックと同一規模の石器群である。石器組成を見ると、截頂石刃を含めたナイフ形石器が3点、削器が1点、石核が2点、他に剥片類が21点あるが、別に、細石核、細石刃、細石核の打面再生剥片を転用した不定形削器各1点が含まれ、清礎な理解を難しいも



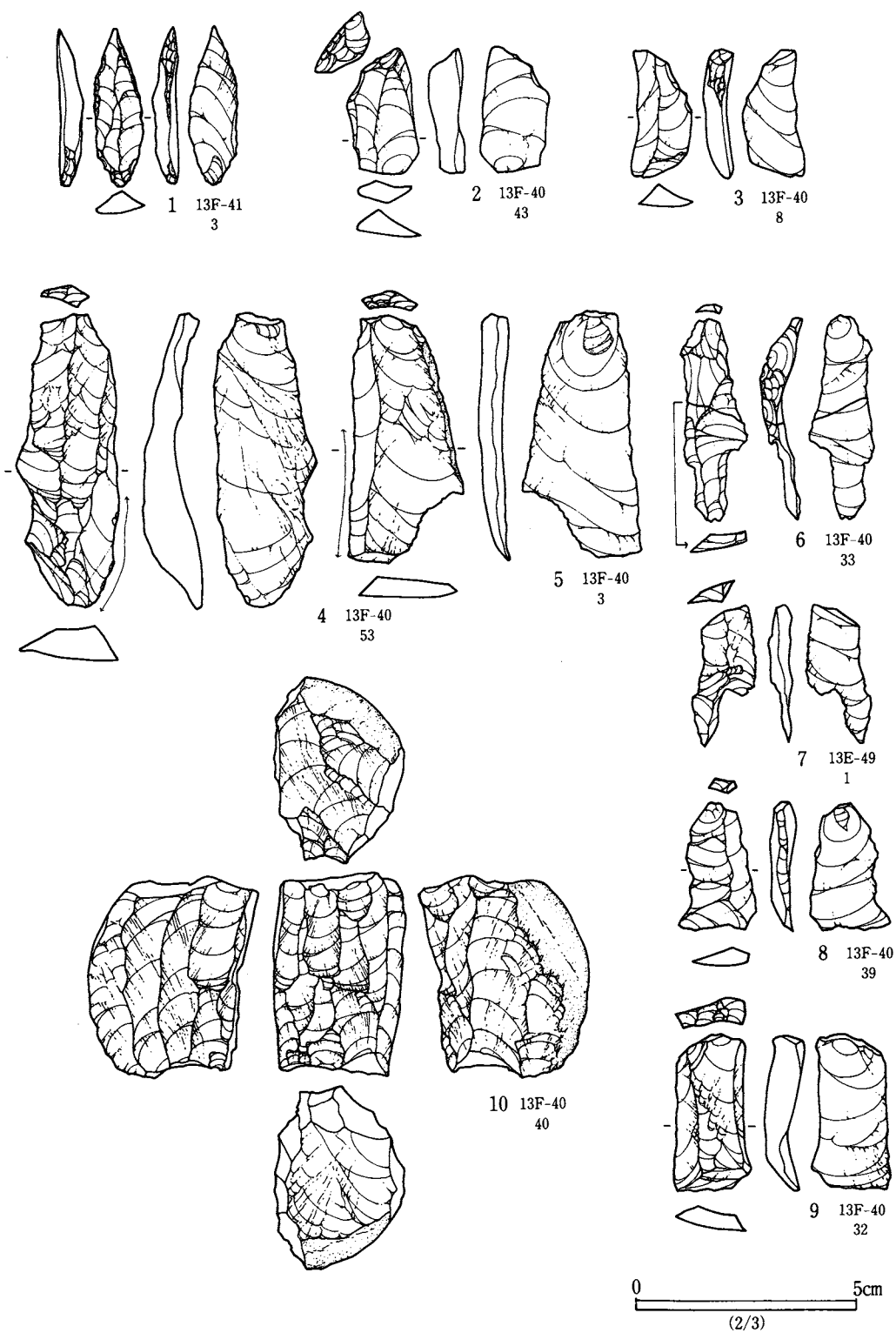
第211図 第18ブロック遺物出土状況

のしている。しかし、細石器と関連する3点の資料は、広範囲に点在しており、それぞれは他と母岩を共有していないので、断定はできないが混在である可能性が高い。

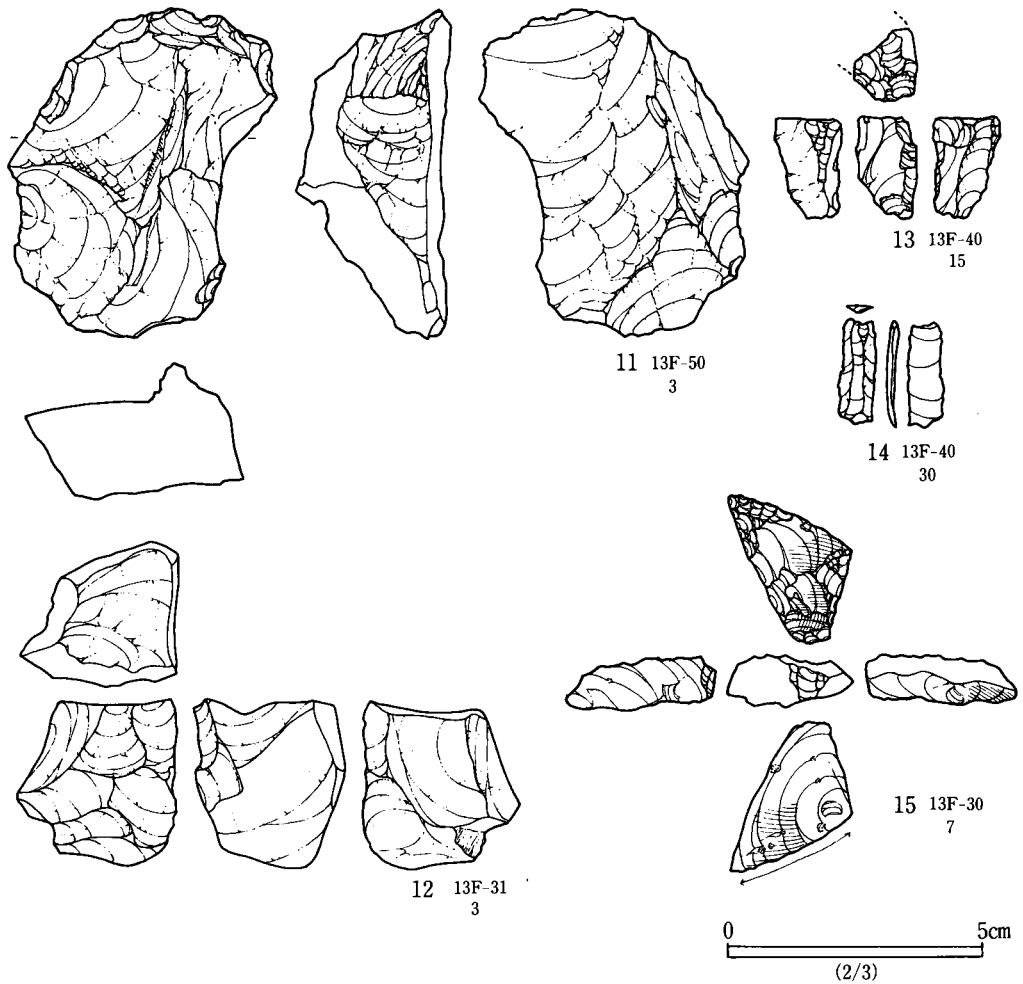
1は珪質頁岩の石刃を素材とする斜め整形のナイフ形石器である。打面に接する一側縁と、その対辺に2次加工を加えて細身の木葉形に仕上げている。腹面には加工痕はない。2、3は凝灰質の泥岩の同一母岩を素材とする截頂石刃である。2では尾部側が斜断されているが、3では打面側が截断されている。

剥片は20点あるが、そのうち10点が石刃である。4～9に6点を、第210図10aに第17ブロックの石刃と接合した一例を示した。全体として第17ブロックの石刃と同一の傾向が指摘される。4、6など両設打面の石核から剥離された例が含まれるが、10のメノウ製の石核が、この種の両設型の石刃石核の典型例である。円柱形をしており、背後に礫面を一部残すが、3/4周に亘って石刃の剥取が看取される。打面は上設のものに簡略な調整が認められるが、下設面は平坦である。

石刃技法と共に別種の剥片剥離手法が存在する。91は粗製の大型削器に転用されているが、



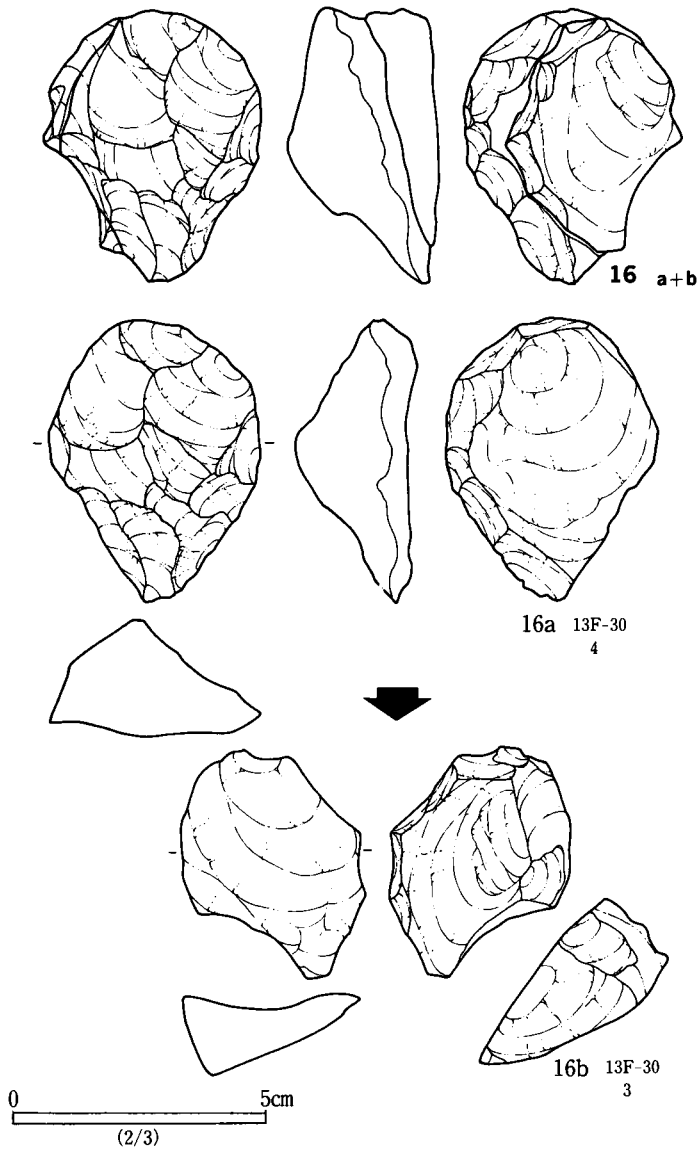
第212図 第18ブロック石器実測図(1)



第213図 第18ブロック石器実測図(2)

本来は16と同種の石核と考えられる。16の接合資料が分り易いので、これから観察する。16 a は石核、16 b がこれから剥離された企画的剥片である。ブランクの素材は安山岩の礫を荒割りした半球状の部厚い剥片である。素材はその両面に求心的な調整剥離を加えて、亀甲状に整えられるが、側面形態は楔形に整えられ、その頭部を打面として固定する。企画的剥片の剥離は亀甲状に盛り上った面を裏面として、平坦面側の中央を大きく切り取るように行なわれている。これと全く同一の工程を示す例が第11ブロックに存在した(第196図)。11では、図の右側の面が目的剥片の剥離作業面である。極めて粗雑な例であるが、12と同一の工程を踏むものであろう。求心的な剥離による貝殻状剥片の連続的生産過程という位置づけもできるが、明らかに打面部を意識的に固定し、更には打面を再生する場合もあるところから、特殊な調整石核の一種であると理解するのが妥当であるかもしれない。

c) 石器石材 礫の石材は砂岩と流紋岩各1母岩である。特に砂岩は大型の円礫の破砕片が



第214図 第18ブロック石器実測図(3)

25点あり、接合するものも多いが、完形になるには至らず、その一部は確実に別地点に移動している。全例、赤化が顕著である。流紋岩は2点あり、接合する。全く変色しておらず、また比較的緻密な石質であるので、あるいは礫表面を留める剥片であるのかもしれない。

石器の石材は、ほとんど一点一母岩を言える程多彩な構成を示している。珪質頁岩の占有率が高いが、泥岩、安山岩、黒曜石、凝灰岩、メノウ、鉄石英などがこれに加わる。これらのうちには、隣接する第17ブロックと共通の母岩が含まれている。珪質頁岩86がブロック間で接合することは既に指摘にした。これ以外に、珪質頁岩83・86・88、泥岩17、黒曜石35の5種が共通母岩として列挙されるが、それらはいずれも、一方から他方へという移動の痕跡を留めてい

第109表 第18ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	削器	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 82	0	0	0	1	0	0	0	1	1.8	1.55	0.2
珪質頁岩 83	0	0	0	1	0	0	0	1	1.8	1.73	0.2
珪質頁岩 86	0	0	0	3	0	0	0	3	5.4	4.69	0.5
珪質頁岩 87	0	0	0	1	0	0	0	1	1.8	6.95	0.7
珪質頁岩 88	0	0	0	1	1	0	0	2	3.6	1.57	0.2
珪質頁岩 90	0	0	0	1	0	0	0	1	1.8	5.35	0.6
珪質頁岩 91	1	1	0	1	0	0	0	3	5.4	103.94	10.9
泥岩 17	0	0	0	1	0	0	0	1	1.8	3.08	0.3
泥岩 20	2	0	0	1	0	0	0	3	5.4	10.79	1.1
安山岩 104	0	0	0	0	0	1	0	1	1.8	41.15	4.3
安山岩 107	0	0	0	2	0	0	0	2	3.6	62.94	6.6
安山岩 108	0	0	0	1	0	0	0	1	1.8	4.26	0.4
黒曜石 33	0	1	0	0	0	0	0	1	1.8	4.19	0.4
黒曜石 35	0	0	0	1	0	0	0	1	1.8	0.10	0.01
凝灰岩 44	0	0	0	1	0	0	0	1	1.8	0.88	0.09
凝灰岩 45	0	0	0	1	0	0	0	1	1.8	3.22	0.3
凝灰岩 46	0	0	0	2	0	0	0	2	3.6	39.83	4.2
凝灰岩 69	0	0	0	1	0	0	0	1	1.8	1.54	0.2
メノウ 12	0	0	0	0	0	1	0	1	1.8	76.30	8.0
鉄石英 1	0	0	1	0	0	0	0	1	1.8	11.40	1.2
砂岩 42	0	0	0	0	0	0	25	25	44.6	557.86	58.3
流紋岩 8	0	0	0	0	0	0	2	2	3.6	13.67	1.4
総数	3	2	1	20	1	2	27	56	100.0	956.99	100.0
組成比 (%)	5.4	3.6	1.8	35.7	1.8	3.6	48.2				

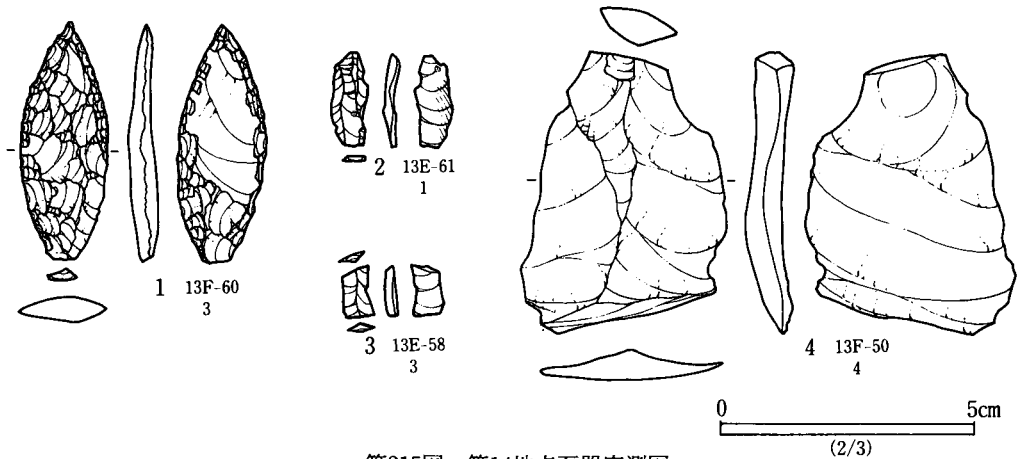
ないが、大体、第17ブロックに多く、第18ブロックには単独で存在する傾向が窺われる。

石材のうち、泥岩20は、群馬県産の所謂黒色頁岩と酷似している。また、凝灰岩の一部は、相模野台地で多用されている石材と良く似ている。あるいは東丹沢産の細粒緑色凝灰岩とも見られよう。

d) 小結 第14地点には、東西に近接して2箇所のブロックが検出された。西側のものを第17ブロック、東側を第18ブロックとしたが、両ブロックの石器組成は基本的には同一のものと見られる。石刃を主体としている。石刃の斜め整形によるナイフ形石器、截頂石刃もあるが少数である。両ブロックには共通する母岩があり、かつ接合資料も存在するので、両者間には密接な相互関係が想定される。第18ブロックには破碎礫がまとまって分布しているが、それは1個体の礫片の集合にしかすぎず、礫群と評価することは躊躇される。両ブロックの同時存在も可能性としては考え得るが、積極的な論拠に欠けているようである。

付 第14地点採集の細石器

第14地点の先土器時代調査区域から少数の細石器が検出されている。いずれも散発的な検出



第215図 第14地点石器実測図

で、ブロックとして把握するには到らなかったが、遺物のみ抄録しておく。

第213図13 細石核の断片である。上下に調整打面をもち、部分的に数条の細石刃剥離痕が認められるが、石核自体が破損しており、作業面の状況を分りにくいものになっている。打面と作業面との交角は 87° ±である。珩質頁岩84。

第213図14 細石刃。胴部破片であるが、頭部、尾部の折損は僅少である。腹面左側縁に微細な刃こぼれが連続している。珩質頁岩85。

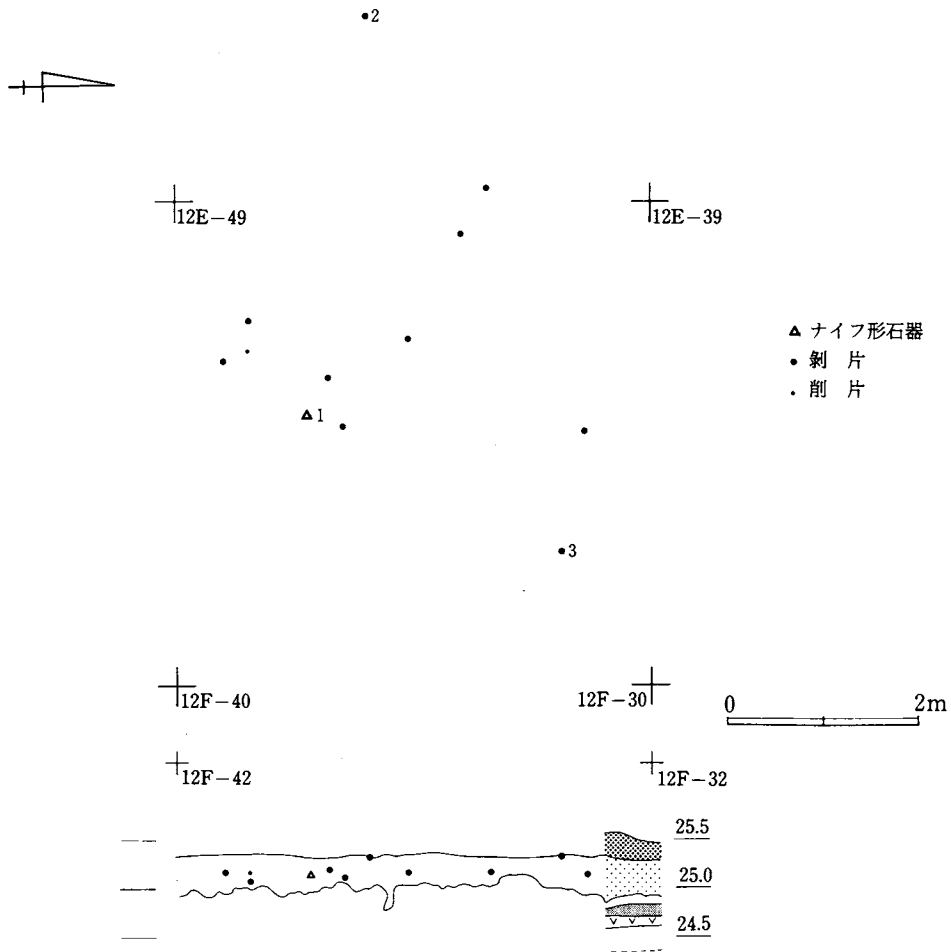
第213図15 細石核の打面再生剥片を使った削器である。側面の一部に槓状の細石刃剥離痕が2条以上観察される。この剥離痕はネガティブバルブを残している。本来の細石核は側面に大きくブランクの剥離面を残し、かつ精細な打面調整の施されたものであることが想定される。作業面角は 92° ±であるが、この測定は不正確である。この細石核から得られた細石刃と見られるものが2点ある(第215図2、3)。2は尾部を欠き、3は頭部、尾部の両方を欠いている。

第19ブロック (第216・第217図、図版68)

a) 分布状況 第15地点から発見された4箇所ブロックの一つである。この地点のブロックは調査区北側にソフトローム層内に生活面の推定されるブロックが2箇所あり、西側のものを第19ブロック、東側を第20ブロックとした。共に第III文化層に帰属させたが、両者間には若干の時間差があるかもしれない。南側の2ブロックは、これらよりも下層にあり、第IV文化層のブロックとした。

第19ブロックは12E-49区にある。東西4m、南北5.5mの範囲にまばらに石器類が散布し、特に平面分布の核と言うべき部分は存在しないため、分布上の特徴を把握し難い。資料の数もたいへん少ないので、産出層準の確定も難しいが、一応ソフトローム層の中位としておこう。

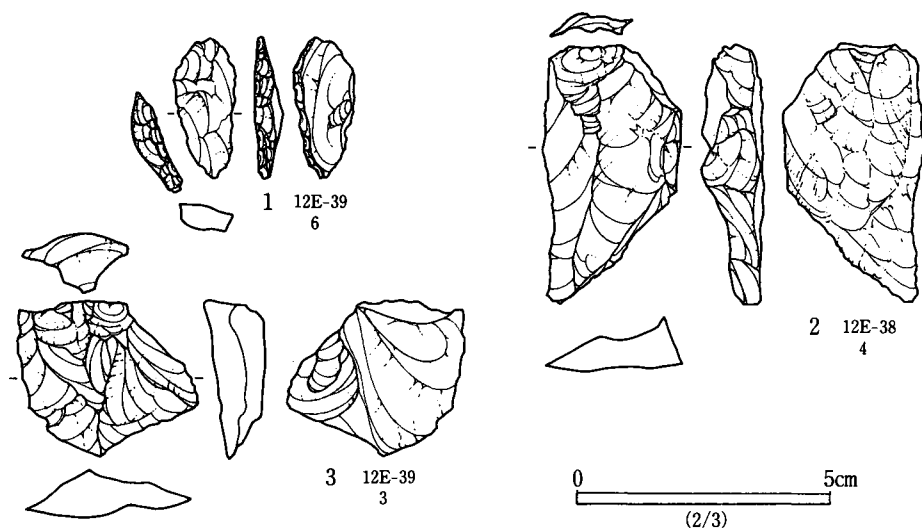
b) 出土遺物 12点の遺物があり、ナイフ形石器1点を除くと他は剥片類によって占められ



第216図 第19ブロック遺物出土状況

第110表 第19ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 94	0	0	1	1	8.3	0.28	0.7
安山岩 83	0	2	0	2	16.7	3.05	7.5
安山岩 84	0	2	0	2	16.7	7.71	19.1
凝灰岩 49	0	1	0	1	8.3	8.01	19.8
チャート 41	0	1	0	1	8.3	14.11	34.9
チャート 42	0	2	0	2	16.7	0.44	1.1
チャート 43	0	2	0	2	16.7	5.04	12.5
メノウ 13	1	0	0	1	8.3	1.76	4.4
総数	1	10	1	12	100.0	40.40	100.0
組成比 (%)	8.3	83.3	8.3				



第217図 第19ブロック石器実測図

ている。ナイフ形石器はメノウの横長剥片の打面側と底辺（尾部）側とに細かい2次加工を施し、基部の尖る三角形に整形している。本文化層のナイフ形石器の範疇を逸脱する資料であり、第IV文化層のそれに接近するとの位置づけも可能であろう。この点は、隣接する第20ブロックの内容とあわせて検討を加える必要がある。

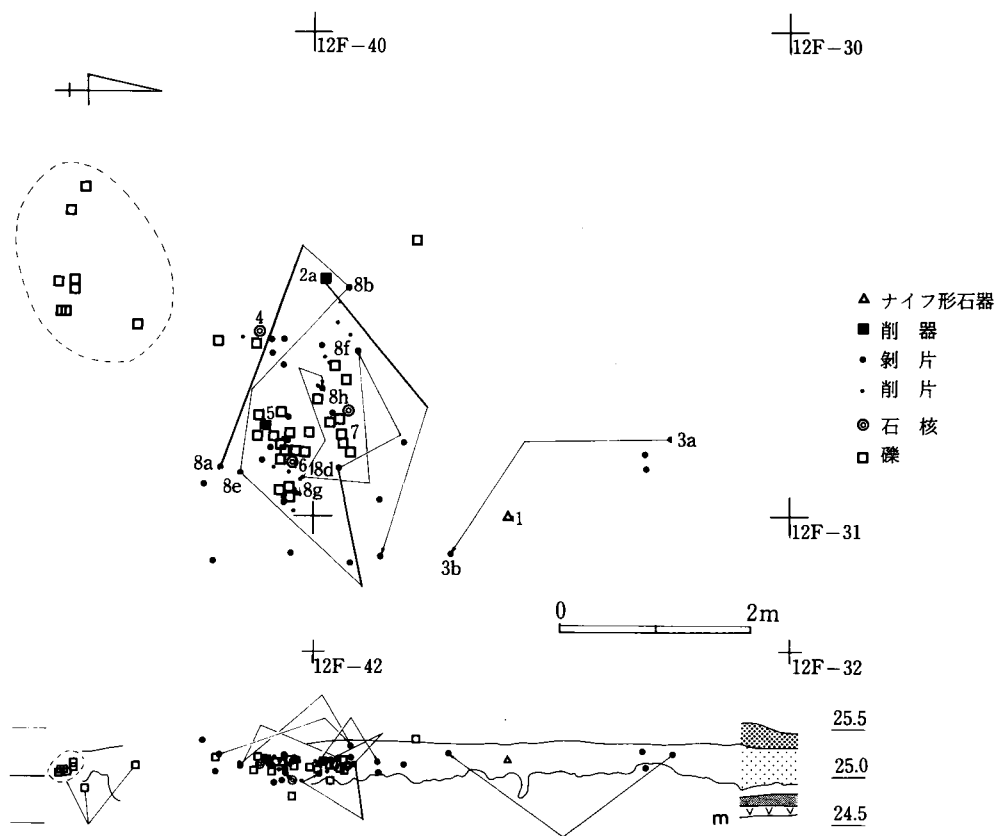
剥片は不定形なものが多く、石刃と見られる例品を欠いている。2は側面に剥片長軸と直交する剥離面があり、大きく打面を入れ換えた過程が推定される。3は剥片背面の状況から、石核上の打面が大きく左右に移転しており、固定された打面からの連続性のある剥片剥離の過程を窺うことはできない。

c) **石器石材** 珪質頁岩、安山岩、凝灰岩、チャート、メノウなど、8種の母岩があり、3点以上の個体別資料を保有する母岩は存在しない。また、本ブロックと母岩を共有するブロックは遺跡内に存在しない。

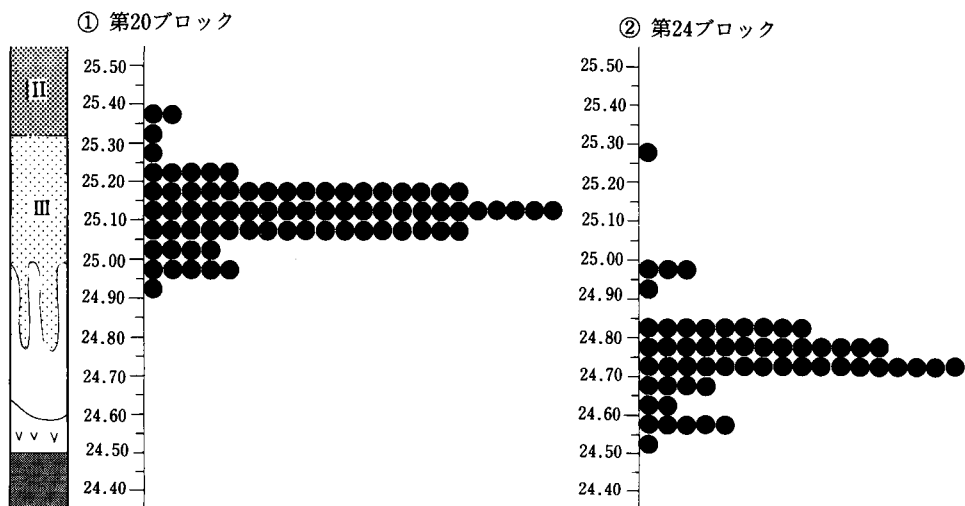
d) **小結** 零細で情報量の乏しいブロックである。産出層準は石刃を多出する層準よりも僅かに下位に位置しており、石器製作の基盤にも大きな差異が存在する可能性を示唆している。

第20ブロック（第218～第221図、図版68）

a) **分布状況** 第15地点、第19ブロックの東側に位置している。両ブロック間の距離は約5mで、両者の分離は容易である。遺物の集中するのは、12F-41ポイントの西側で径約2m位の密集部を形成している。この密集部は同時に破碎礫の集中範囲であり、礫ブロックと石器ブロックの重複と理解することができる。石器と礫片とは無秩序に入り乱れているが、この部分の北側にも少量の石器が点在している。



第218図 第20ブロック遺物出土状況



第219図 大林遺跡第20・24ブロック遺物垂直分布

遺物全体の垂直分布は、標高25.100m～25.200mに分布のピークをもち、礫片のピークが25.100mであるところから、大体の生活面を推定することが可能である。この結果と、ブロックと近

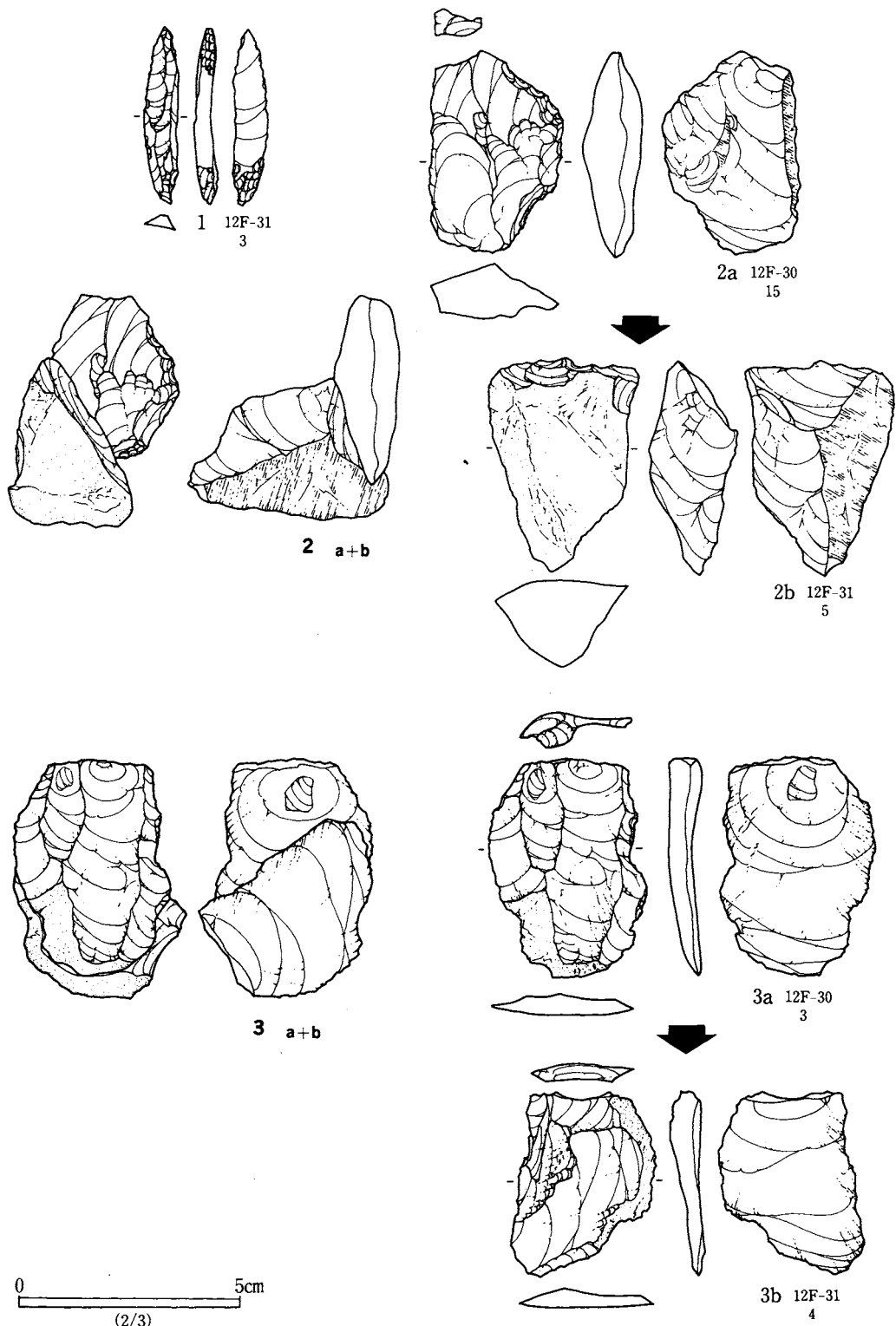
第111表 第20ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	削器	剝片	削片	石核	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
珪質頁岩 92	0	0	1	0	0	0	1	1.2	3.35	0.5
珪質頁岩 93	1	0	0	0	0	0	1	1.2	1.32	0.2
珪質頁岩 94	0	1	2	0	1	0	4	4.8	52.90	8.5
珪質頁岩 95	0	0	4	0	0	0	4	4.8	22.89	3.7
黒曜石 37	0	0	1	0	0	0	1	1.2	2.95	0.5
砂岩 45	0	0	4	4	0	0	8	9.5	12.09	1.9
凝灰岩 47	0	1	13	9	0	0	23	27.4	47.22	7.6
凝灰岩 48	0	0	0	0	1	0	1	1.2	28.14	4.5
凝灰岩 69	0	0	0	0	1	0	1	1.2	9.02	1.4
凝灰岩 70	0	0	1	0	0	0	1	1.2	1.20	0.2
メノウ 14	0	0	1	1	0	0	2	2.4	1.58	0.3
石英 2	0	0	2	1	0	0	3	3.6	6.87	1.1
安山岩 85	0	0	0	0	0	8	8	9.5	67.14	10.8
安山岩 86	0	0	0	0	0	1	1	1.2	15.45	2.5
安山岩 87	0	0	0	0	0	2	2	2.4	33.15	5.3
安山岩 88	0	0	0	0	0	4	4	4.8	35.05	5.6
砂岩 44	0	0	0	0	0	1	1	1.2	6.15	1.0
砂岩 46	0	0	0	0	0	3	3	3.6	83.73	13.4
流紋岩 9	0	0	0	0	0	2	2	2.4	11.24	1.8
流紋岩 10	0	0	0	0	0	4	4	4.8	94.48	15.1
流紋岩 11	0	0	0	0	0	9	9	10.7	88.35	14.2
総数	1	2	29	15	3	34	84	100.0	624.27	100.0
組成比(%)	1.2	2.4	34.5	17.9	3.6	40.5				

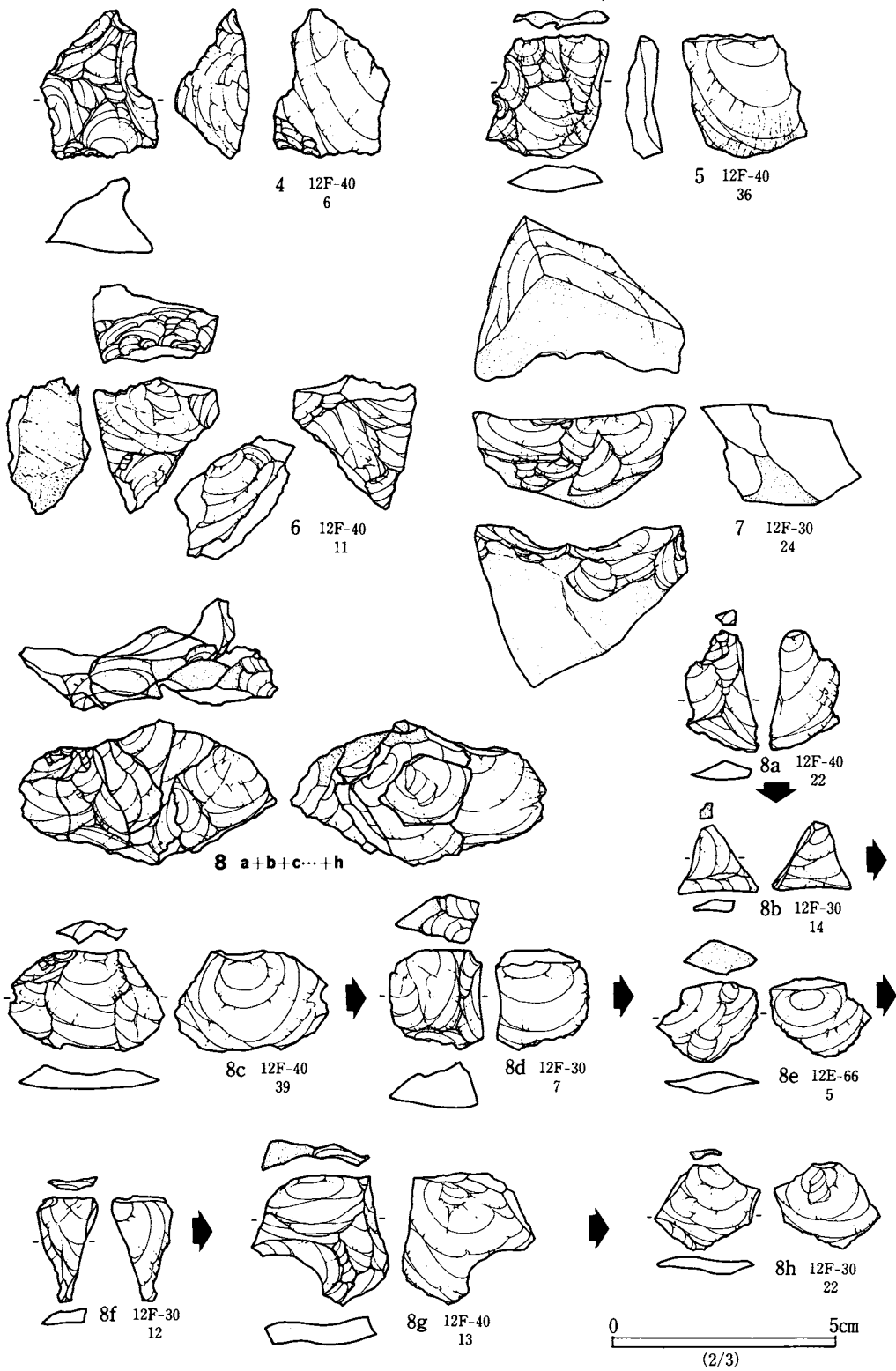
接する土層断面図とを照合してみると、遺物の産出層準はソフトローム層の中位よりも少し下部にあると判定される。この見解を重視すると、第9地点の石刃石器群の産出層準がソフトローム層の中央より少し上であったので、第Ⅲ文化層の内部にも微妙な産出層準の差異が存在する可能性が指摘されることになるが、ソフトローム層内での文化層の対比は難しい場合が多く、断定することは避けたい。

b) 出土遺物 礫片34点と共に、50点の石器類が検出されたが、それらの大半が剝片であり、2次加工の著明なものは、ナイフ形石器1点と削器が2点あるにすぎない。他に石核が3点ある。また、比較的接合資料も多く、ブロック内における剝片の剝離を想定することができる。

1は珪質頁岩製のナイフ形石器である。素材は横断面が台形をした厚味のある典型的な2稜型の石刃である。このブロックでは石刃素材の石器は本例を以って唯一とする。石材も他と異質で、極細粒の珪化度の高い良質の頁岩であり、単独で搬入されたものと考えられる。2次加工は、腹面及び背面右側縁の両端にある。尖頭部側では打面を除去し、基部側のそれは、斜列剝離に近い腹面調整と一体化し、尖り気味の基部を形成することにより、柳葉形の外観を得て



第220図 第20ブロック石器実測図(1)



第221図 第20ブロック石器実測図(2)

いる。整った石刃を素材とすること、2次加工が基部と先端部とに限定されること、裏面基部に斜列剝離をもつこと、など所謂杉久保型に共通する属性をもつナイフ形石器と見ることもできるが、石刃基部を尖頭部側におく点は破格であろう。

2は削器(2a)と剝片(2b)との接合する状態を示している。剝片の剝離は2a→2bとすすめられているが、この間に打面と作業面の置換が介在している。2aは背面右側縁に付刃した側削器の一種である。

3も剝片2点の接合資料。3aを見ると、複剝離打面をもち、固定された石核打面から連続的に剝離された石刃、あるいは縦長の剝片と認定されるが、この資料と接合する剝片(3b)の打面は、3aと90°ずれており、作業面を固定し、打点位置を変えながら剝離の進行する過程が復原される。両例共に、縁辺部に微細な刃こぼれが断続的に観察されるが、その分布には集中性がない。なお、3aの打面の複剝離痕は旧作業面である可能性があり、打面調整と断定することは危険である。

8は凝灰岩47の接合資料である。凝灰岩47は14点の剝片と9点の削片とから構成されているが、石核を遺存しない。比較的大き目の石英粒を含み、緻密な流紋岩の仲間であろう。明灰色を呈し、鬼怒川水系に多産する石材と見られる。接合資料は8枚の剝片が横に長く接続し、偏平な円礫の木口面から小型横長の剝片を次々に打ち落していく過程が復原される。これと同種の手法による石核が他に1例ある(7)。また、この石核から剝離された剝片のなかに、側縁に打ち欠きのあるものが1例ある(5)。石核とも、鋸歯縁削器とも見られるが判然としない。

4は厚い剝片を素材とする盤状石核で、打点が全周している。8とよく似た流紋岩質凝灰岩を使っているが、石英、長石、雲母などの微晶が著明である。6の石核は残核化しており、詳細は不明であるが、少なくともその最終局面では、打面と作業面の頻繁な置換が看取される。チャートに近い珪質頁岩製である。

c) 石器石材 大きく礫と石器素材に分けることができる。礫種としては、安山岩、砂岩、流紋岩類の3種が識別される。各母岩の特徴は以下のとおりである。

安山岩85 8点あるがいずれも破碎した細片である。僅かに淡赤色化しており、煤状の附着物が認められる破片もある。

安山岩86 これも細片で1点を遺存している。茶褐色の変色部が斑紋状にひろがっている。

安山岩87 2点あり接合する。やはり破砕片で、赤色化が著しいが、変色していない破砕面もある。赤色は礫表から5mm内部に及んでいる。酸化鉄状に鮮やかな赤色を呈する部分があるが、煤状の附着物は認められない。

安山岩88 4点あり、そのうち3点が接合している。これも小片ばかりで、大半を遺存していないと見るべきである。前例と同様に赤色化が著明である。しかし、破砕部の赤化と礫表面の赤化とを比較すると、破砕面のそれは明らかに軽微であるので、破砕が焼成の過程に介在す

ることが判明する。

砂岩44 細片が1点ある。礫表と節理面に赤化が観察されるが、色調に変化のない破砕面もある。

砂岩46 3点あり全てが接合する。約1/3を遺存する。全体が淡赤色に変じているが、一側面から片面の一部の変色が著しい。煤状の附着物はない。

流紋岩9 細片が2点あり、接合する。焼成に伴いはじけた礫表部と考えられる。淡赤色に変色しているが、破砕面は新鮮である。

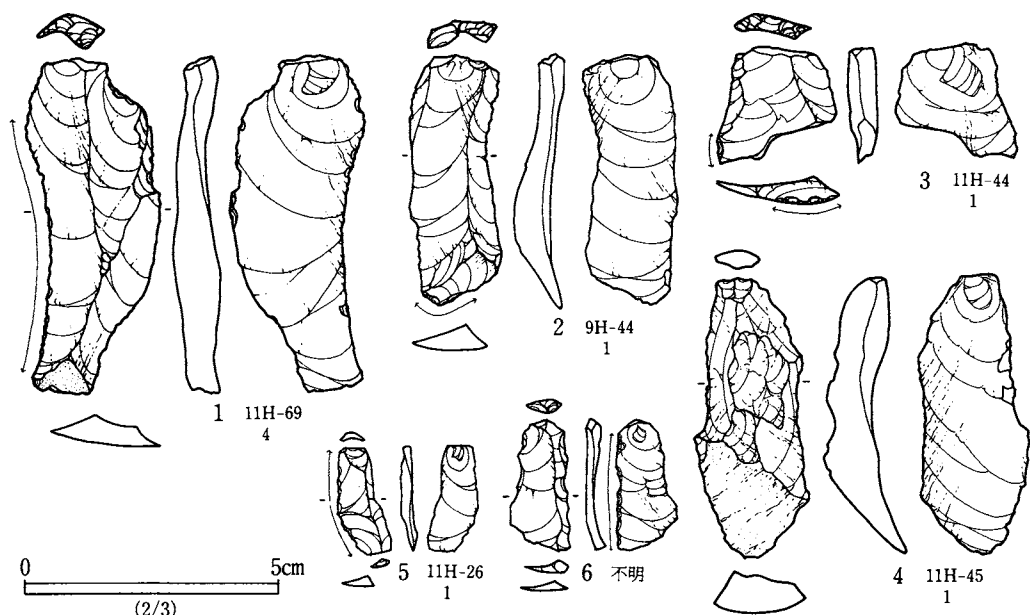
流紋岩10 4点あり、うち3点が接合する。遺存度は1/5以下であると見られる。万遍なく赤色化しているが、礫表と節理面は特に色調の変化が大きく、暗赤色化している部分もある。礫表から2mmの深度まで赤色化が顕著であるが、破砕面も僅かに変色を見せ、安山岩88と同一の使用過程が想定される。

流紋岩11 赤変の著明な細片である。一部に煤状の黒色粒が集中している。

礫は被焼成のものばかりで、しかも破砕した細片、小片が際立って多い。また、数次に亘って共用されたと推定される例もある。不要となった破片のみを破棄したとの解釈も可能であろうが、頻繁な移動は必然的に装備の軽量化を要求するので、特定地点での礫の保留と共に、少量の礫が地点間を移転する過程が理論的に想定される。この基準に立つと、site furnitureとしての礫の寡多とその内容が遺跡の性格を考察する手懸りを与えるかもしれない。

石器の石材としては、珪質頁岩、黒曜石、砂岩、凝灰岩・メノウ、石英など各種あるが、このうち、23点の資料を含む凝灰岩47が卓越している。その他はいずれも少数の資料しか持っていない。砂岩45も4点ずつの剝片と削片を含んでいるので、凝灰岩47と同様ブロック内での剝片剝離の存在が考えられるが、それは極めて限定された行為であり、石核を大きく消費するというものではない。すなわち、この場合、石核は一地点において消耗し尽すという性格のものではなく、移動に伴う諸装備の一環として携帯され、必要に応じて各種の剝片を補充する手段であったと考えられる。

d) 小結 第20ブロックは、破砕礫群と石器ブロックとの複合したものである。破砕礫群は細片化した礫の集中で、石材資源の乏しい下総台地の地域的特性を反映すると共に、武蔵野、相模野の両台地と比較して遙かに広大な自然環境下における狩猟・採集戦略の多様性をも示唆するもの理解したい。石器群の内容に於いては、多様な横長剝片、あるいは一般的剝片の生産技術を基調としているが、僅かに1点とは言え、杉久保類似の石刃製ナイフ形石器を含んでいる。南関東では、縦長剝片素材のナイフ形石器と横長剝片素材のナイフ形石器は、しばしば推移的なあり方を示している。本ブロックの構成もこの一例と理解することができる。全体的な位置づけとしては、第III文化層の細分を強いる内容を呈示しているが、ここでは第IV文化層との過渡期として、便宜的に第III文化層に含めておくことにしよう。



第222図 第9地点石器実測図

第9地点採集の石器 (第222図)

1 石刃状の縦長剥片である。入念な打面調整痕を留める。背面尾部に僅かに原礫面が残されているが、背面の大半は打面部からの3枚の剝離痕によって被われている。ややコンケイブする背面左側縁部の全体に微細な刃こぼれが観察される。重量8.84g。

2 凝灰岩製の石刃である。打面は前例と同様に複剝離打面で、しかも、ネガティブバルブを有するものがあるので、石刃剝離に先行して打面細調整が行なわれたものと考えられる。背面尾部に側方からの小剝離面があるが、単一方向からの並列的剝離痕が切り合っている。尾部の端部に細かい剝離があり、使用痕と認めた。重量5.23gである。

3 は剥片であるが、精細な打面調整の状況が窺われ、あるいは石刃剝取を企図したものの、その剝離に失敗した例とも考えられる。尾部は欠損を受けているが、その折れ面縁辺に微細剝離痕を見ることができる。珪質頁岩製で重量2.52gである。

5 は小型の石刃である。尾部端を僅かに折り取られている。背面には上下からの剝離痕があるので、小型の対向打面をもつ石核から剝離されたものと推定される。使用痕は背面左側縁に長く観察される。珪質頁岩製で、0.47gと軽量である。

6 も小型の石刃であろう。やはり尾部端は折り取られている。打面は精緻な調整打面で、腹面左側縁に顕著な刃こぼれが連続する。凝灰岩製。

7 は安山岩製の石刃である。平坦打面をもつ粗製のものだが、背面に作業面形成の側方剝離痕を残している。石刃剝離初期の資料である。重量11.17g。

E. 第IV文化層 ソフトローム層最下部から第1黒色帯相当層に含まれるブロックを第IV文化層とした。下総台地における層準としては、IV層からV層にかけての幅広い時間帯をもつ地層内に含まれるブロック群と言うことができるが、この両層の発達は、一般に不良である場合が多く、従って、産出層準の推定による文化層の細分は難しい場合が多い。このため、第IV文化層の内部での時間的先後関係を十分に反映した文化層の確定は断念せざるを得ず、ある程度恣意的な方針をとることになった。

第IV文化層に帰属するブロックは6地点から検出され、総計16箇所ブロックを識別した。特に隣接する第5地点と第6地点にはこのうち9ブロックが集中している。また、この時期は、大林遺跡全体の変遷のなかでも最も多くのブロックが残された時期であることにも注意したい。

第21ブロック (第224～第228図、図版28・68)

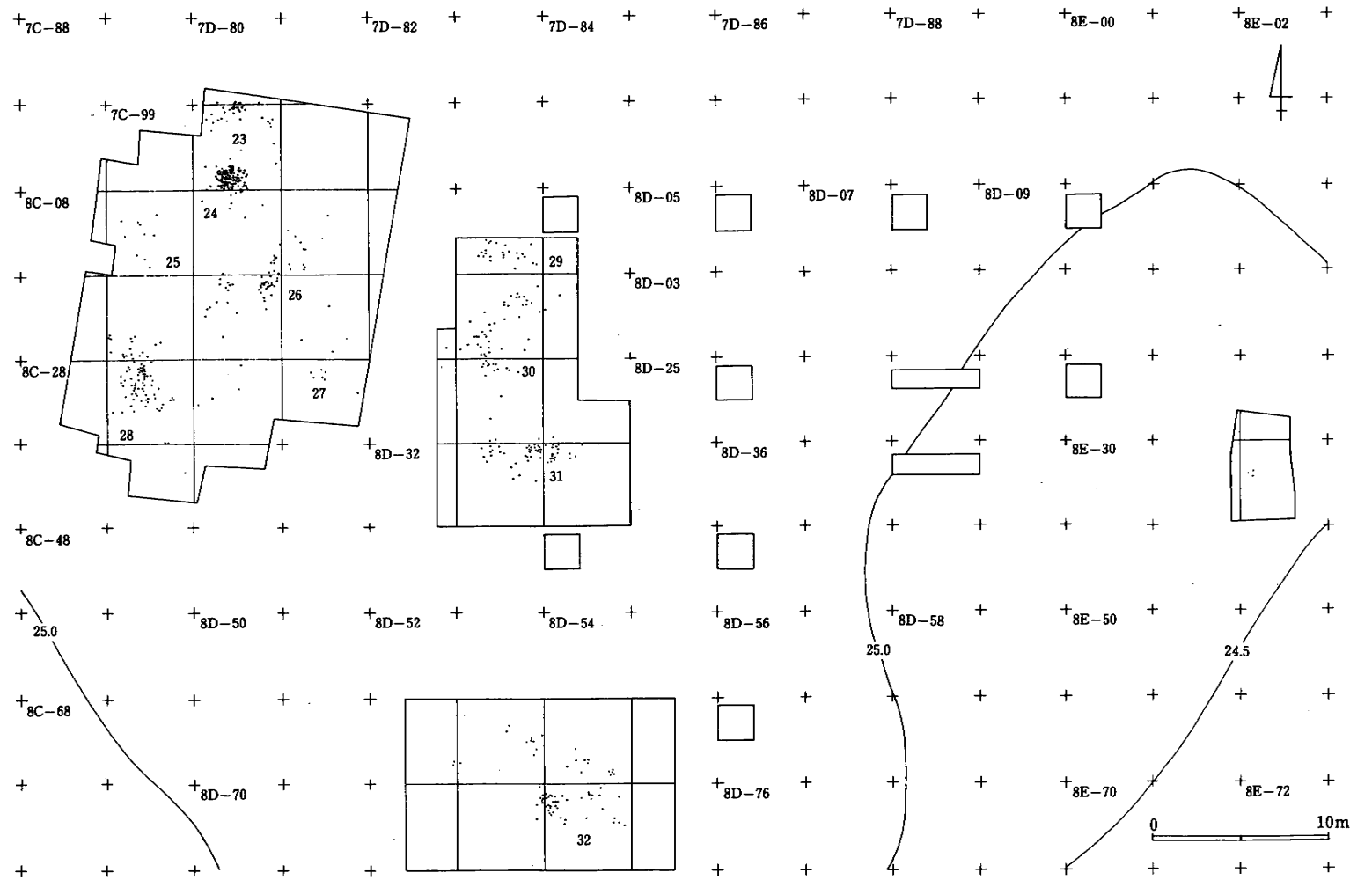
a) 分布状況 第2地点にある3箇所のブロックのうち、最も北側に位置するものである。第2地点の東側は支谷に落ちる斜面となっているので、これらの3箇所のブロックは斜面に沿って並存する状態になっている。遺物は11L-03ポイントの北西側に集中している。その範囲は東西2.5m、南北3mで、比較的集中度は高く、大半の遺物がこの中に分布している。産出層準はVI層より上のハードローム層中であるが、この層は20cm前後の厚さしかないので、層準の対比は不可能である。いずれにせよ、武蔵野台地におけるIV_下層からV層に対応しよう。

b) 出土遺物 総数113点の石器から構成されている。器種的に見ると各種の削器が卓越し、あわせて9点が出土した。その他は剥片と石核、石砧破片など、剥片剥離を反映する内容と評価されよう。

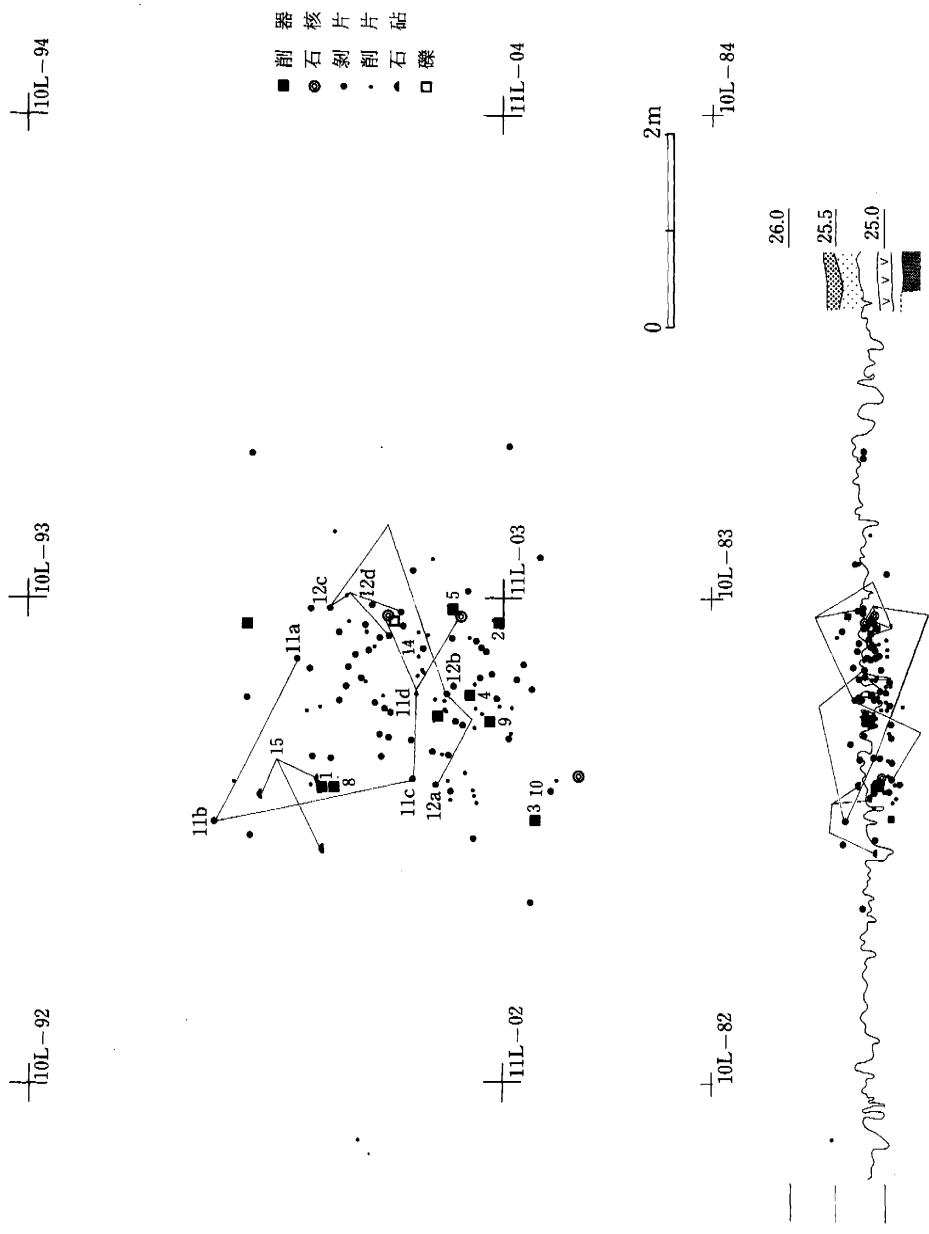
削器は、端削器(1～4)と側削器(5～9)とに大別される。1は安山岩の礫面付の厚手の剥片の尾部に弧状の刃部を作出するもの。4も安山岩製であるが、刃部の作業縁の比較的短

第112表 第21ブロック遺物集計表

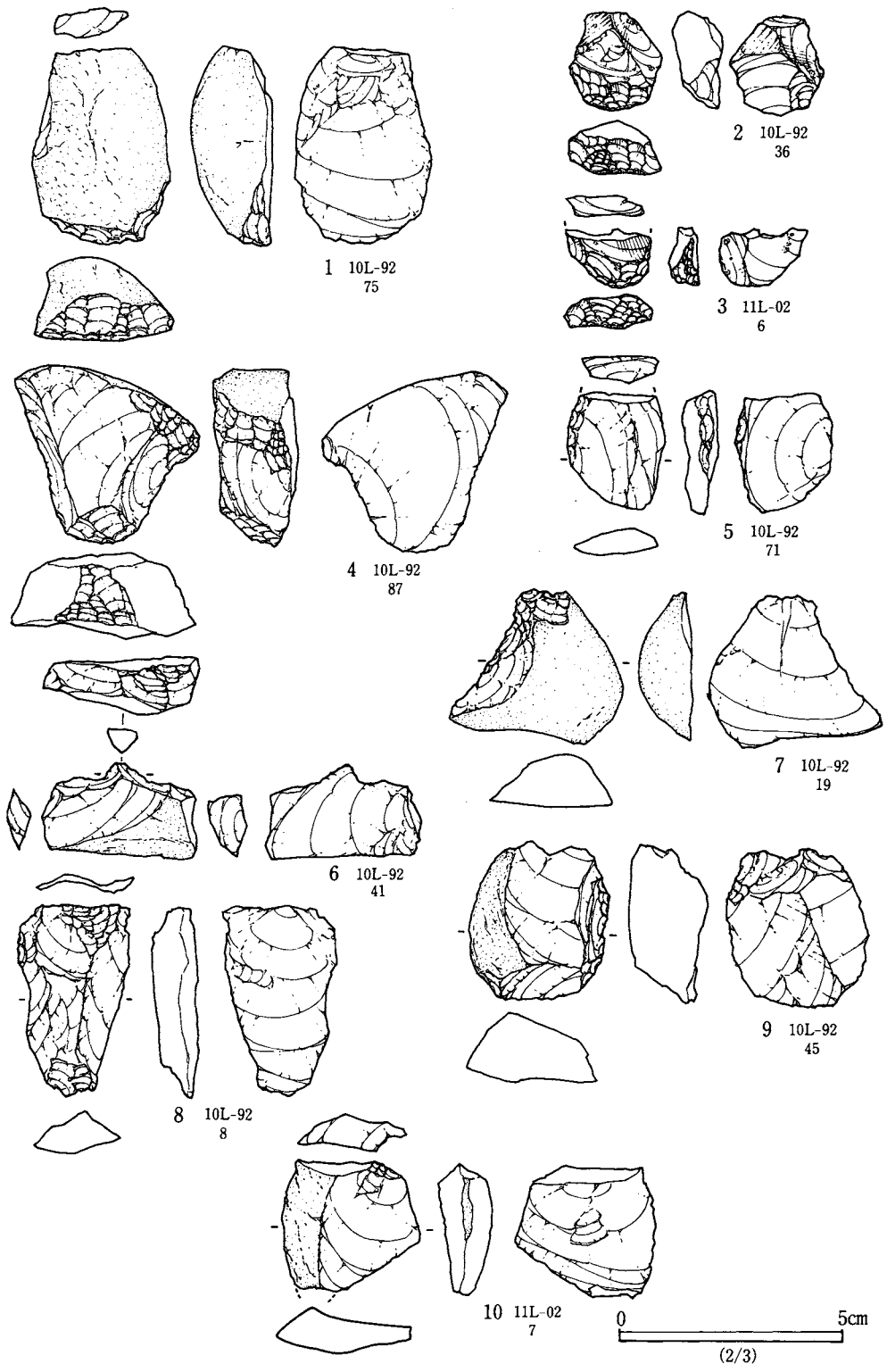
母岩番号	削器	石核	剥片	削片	石砧	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
安山岩 4	1	0	8	0	0	0	9	8.1	21.45	2.9
安山岩 5	5	0	29	16	0	0	50	45.0	326.20	44.6
安山岩 6	0	2	9	4	0	0	15	13.5	144.49	19.8
安山岩 7	0	0	2	2	0	0	4	3.6	6.92	0.9
安山岩 8	1	0	0	0	0	0	1	0.9	27.14	3.7
黒曜石 7	0	1	5	8	0	0	14	12.6	9.70	1.3
黒曜石 8	2	0	3	9	0	0	14	12.6	22.84	3.1
ホルンフェルス 2	0	0	2	0	1(3)	0	3(5)	2.7	70.75	9.7
安山岩 10	0	0	0	0	0	1	1	0.9	101.70	13.9
総数	9	3	58	39	1(3)	1	111(113)	100.0	731.19	100.0
組成比 (%)	8.1	2.7	52.3	35.1	0.9	0.9				



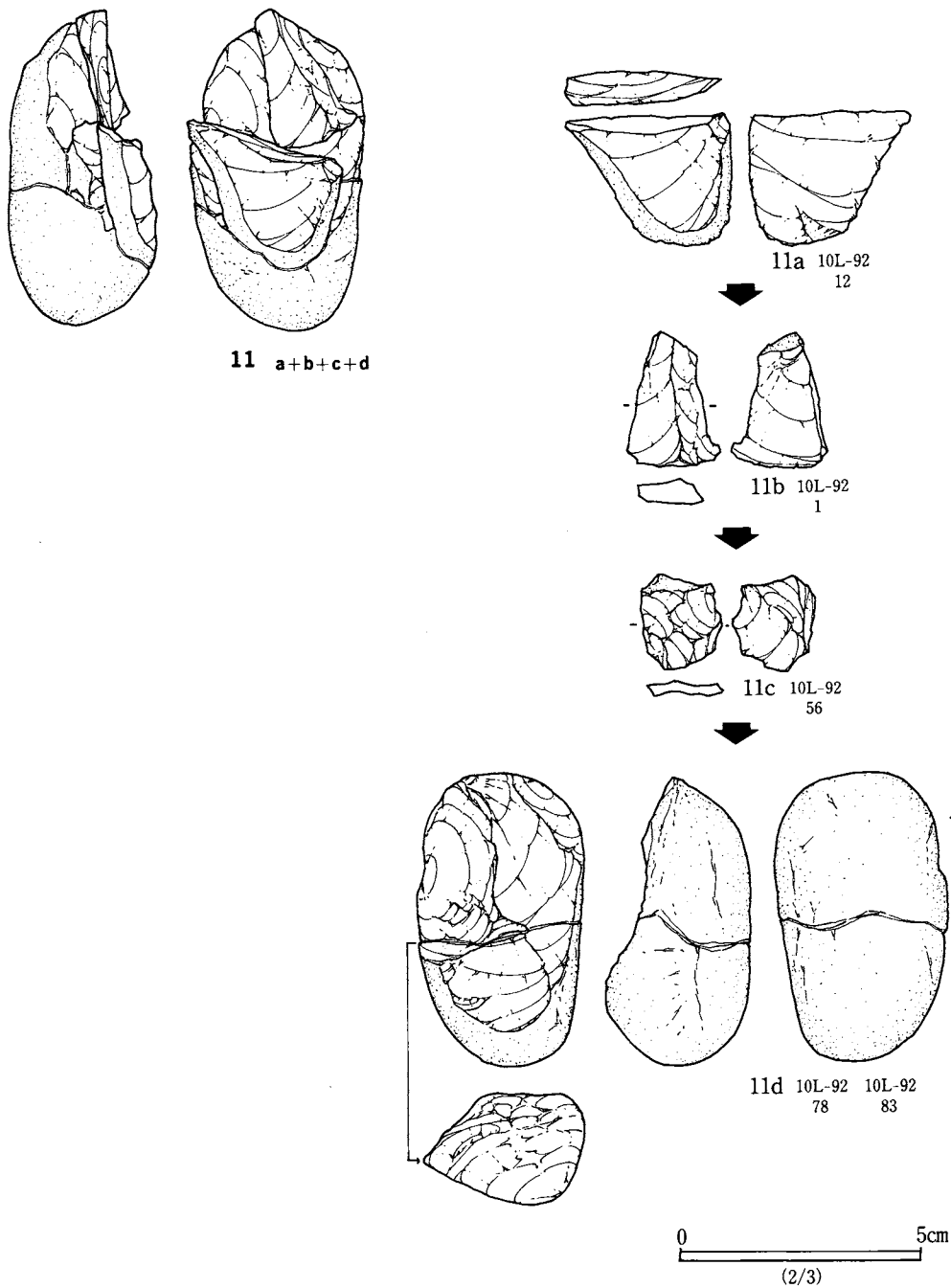
第223図 第23～第32ブロックの分布状況



第224図 第21ブロック遺物出土状況

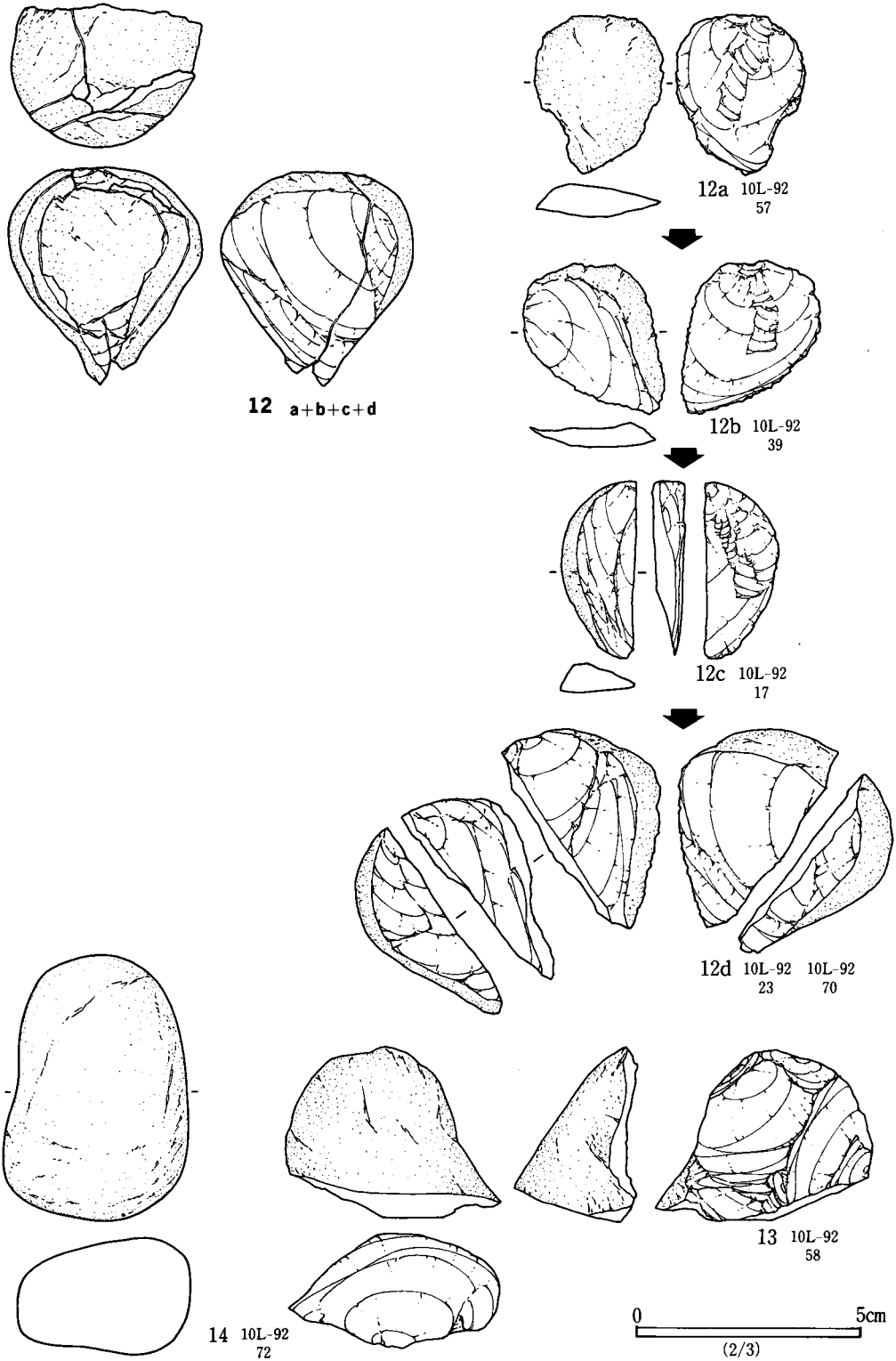


第225図 第21ブロック石器実測図(1)

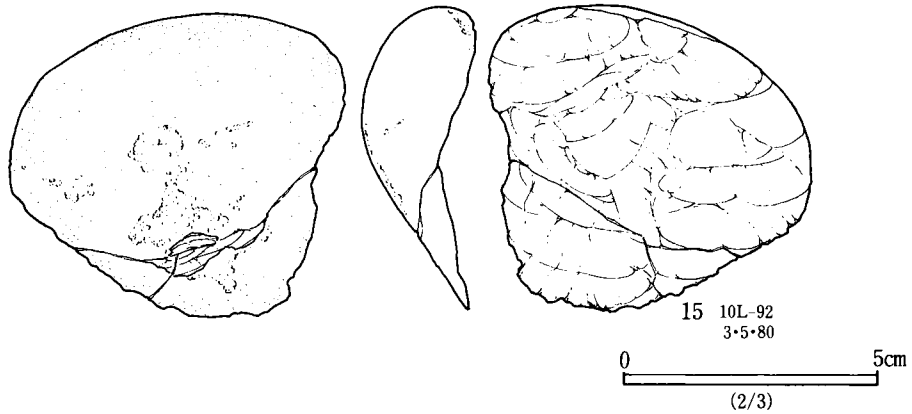


第226図 第21ブロック石器実測図(2)

いもの。剥片製であるが、背面右側縁の大き目の剝離痕の存在から、あるいは盤状横打石核の転用例とも見られる。2、3は黒曜石製の小型のもの。2は表裏に求心的剝離痕を残し、石核の転用と判定した。3は半欠しているが、図の左側の上部にある剝離面がポジ面であるので、剥片素材であることが推定される。側削器には多様な刃部形態が認められる。緩く外彎するも



第227図 第21ブロック石器実測図(3)



第228図 第21ブロック石器実測図(4)

の(5、9)、内彎するもの(7)、鋸齒縁のもの(6)、複刃のもの(8)等。

剥片剥離技術に就いては、2点の接合資料と、石核の観察をもとに概略を知ることができる。11は石核に3点の剥片が接合する。打面を企图的に作出せず、礫表に沿って打点を移動している。14もこれに準ずる例で、自然面を打面とし、礫の形状に応じた不整円形の板状の剥片が連続的に落とされている。石核14も同種のもので、原礫面上を打点が移動し、求心的な剥離痕を残している。以上の3例から、やや特殊な剥離手法が復原されるが、遺存する他の剥片や削器などから、別種の剥離手法の存在が推定される。例えば、4が盤状石核の可能性のあることは既に指摘したが、6、8、10などの平坦打面をもつやや縦長の剥片は、別種の手法によるものと考えられる。しかし、いずれも断片的な資料であり、これ以上の言及は不可能である。

16はホルンフェルスの礫片であるが、表面はアバタ状の潰痕が面的に広がるので、石砧破片と分類する。

c) 石器石材 安山岩、黒曜石、ホルンフェルスの3種の石材がある。このうちホルンフェルスは石砧の破片なので、剥片石器の素材は安山岩と黒曜石の2者となる。安山岩は6母岩あるが、特に安山岩5と6は多くの資料を含み、また、その内部に接合資料を持つことから、ブロック内で消費されたものと考えられる。黒曜石の2母岩も消費対象であったと見られるが、その内容は良く分からない。黒曜石8は削器の製作と関連するかもしれない。その他特記すべきものとして、安山岩の原石が1例遺存することが挙げられる(14)。小型のものであるが、11の接合例から復原される原石と同形・同大のものであることが注意される。

d) 小結 このブロックは比較的剥片の量が多く、かつ特定母岩への量的保証をもった収斂が観察されるところから、剥片剥離から石器製作に到る過程を背景として成立している。一方、石器組成の面では、各種の削器が顕在している反面、別器種を一例も内包していないので、やや偏った作業内容を機能的属性として保有するものとも理解することが可能である。

第22ブロック (第229～第231図、図版68)

a) 分布状況 第2地点南側、11L-44、45ポイントの周辺に散漫ながら石器の散布が認められた。集中度が低く、産出層準もソフトローム層上部からハードローム層間に点在し、単一のブロックと認定することは困難である。2枚以上の文化層の重複する可能性が高いが、時期の特定は困難である。下層の遺物を仮に基準とし、第IV文化層に含めたが、極めて恣意的なものであることは言うまでもない。

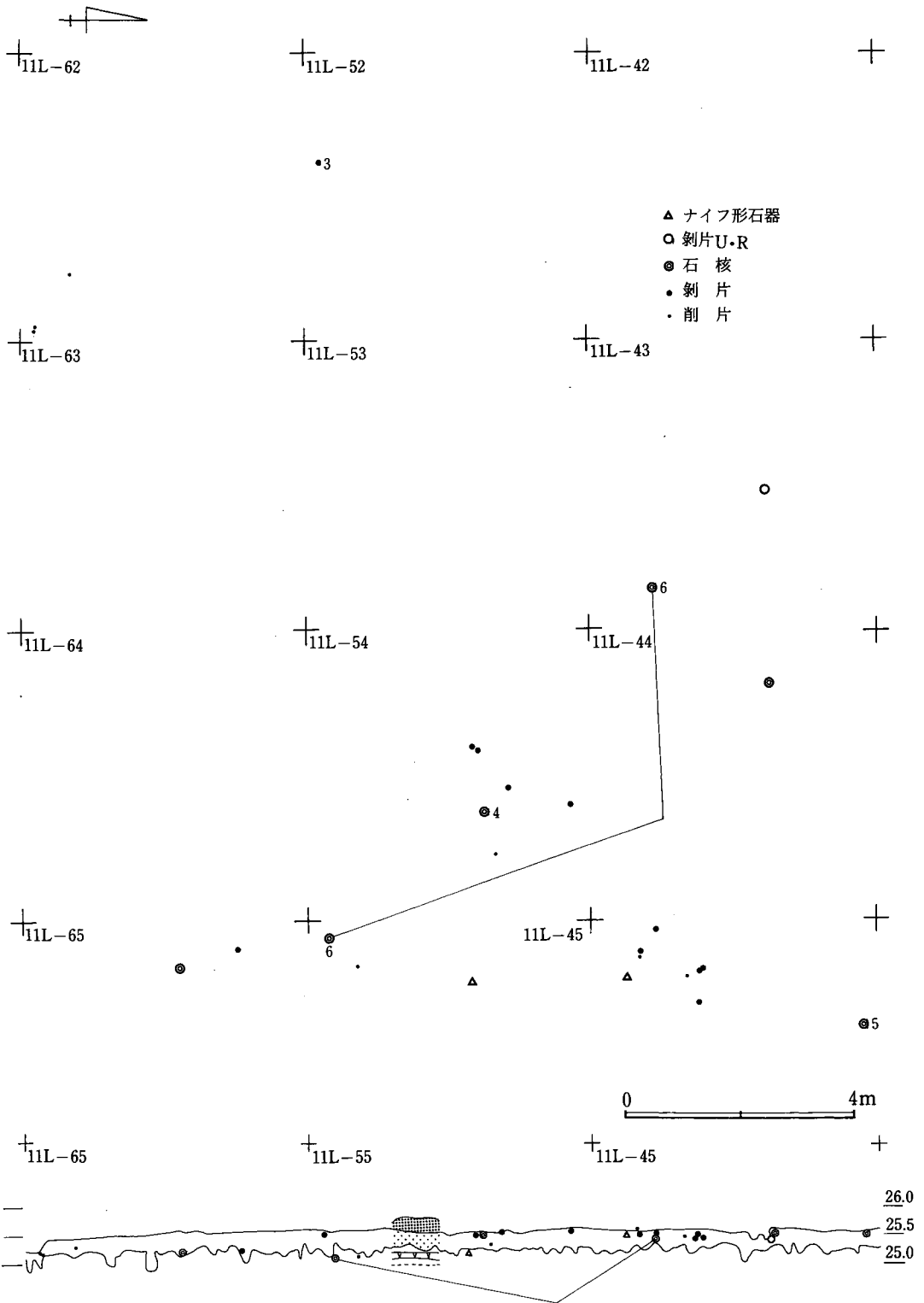
b) 出土遺物 既述の如くブロックとしての内容に不確定の部分が多く、石器組成を具体的に呈示できないので、主要な資料を抜粋しておくに留めたい。1はナイフ形石器、2～4が剥片、6～9に石核を図示した。石核はもう1点あり、剥片(碎片)が2点接合するが、チャートの礫片を砕いたようなもので、加撃点も識別できない資料であるため、図示するには至らなかった。

ナイフ形石器は安山岩の横長剥片を素材とした幾何学的な形態をとるもので、ハードローム層上部から出土した。切出形石器と見る事ができる。2はチャート製の折断剥片で、左右両側縁に使用痕がある。3は求心的な剥離痕を背面に留める大型の剥片。厚味のある素材を薄く輪切りにするように剥片を落している。第21ブロックに類例が存在したが、第I文化層や、第III文化層にも類似の剥片剥離手法を示す石核がある。4、5は安山岩の同一母岩に属する。4は礫面付の剥離工程初期の剥片だが、5では剥離はかなり進行している。背面には多方向からの剥離痕が重複し、石核を回転するように打面を転位する過程が推察される。

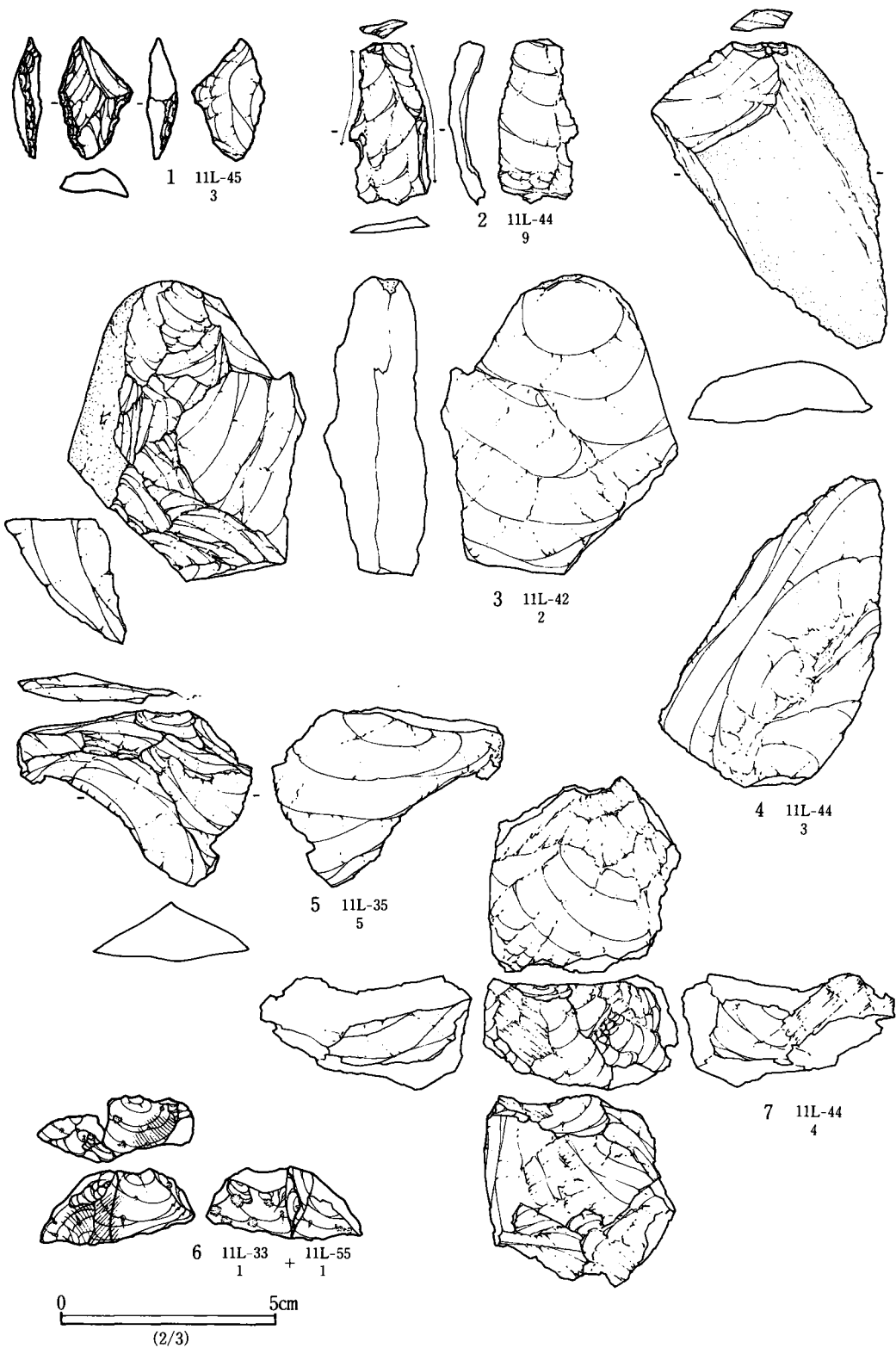
6～9の石核を見ると、打面と作業面とが必ず入れかわるという特徴を共通点として指摘す

第113表 第22ブロック遺物集計表

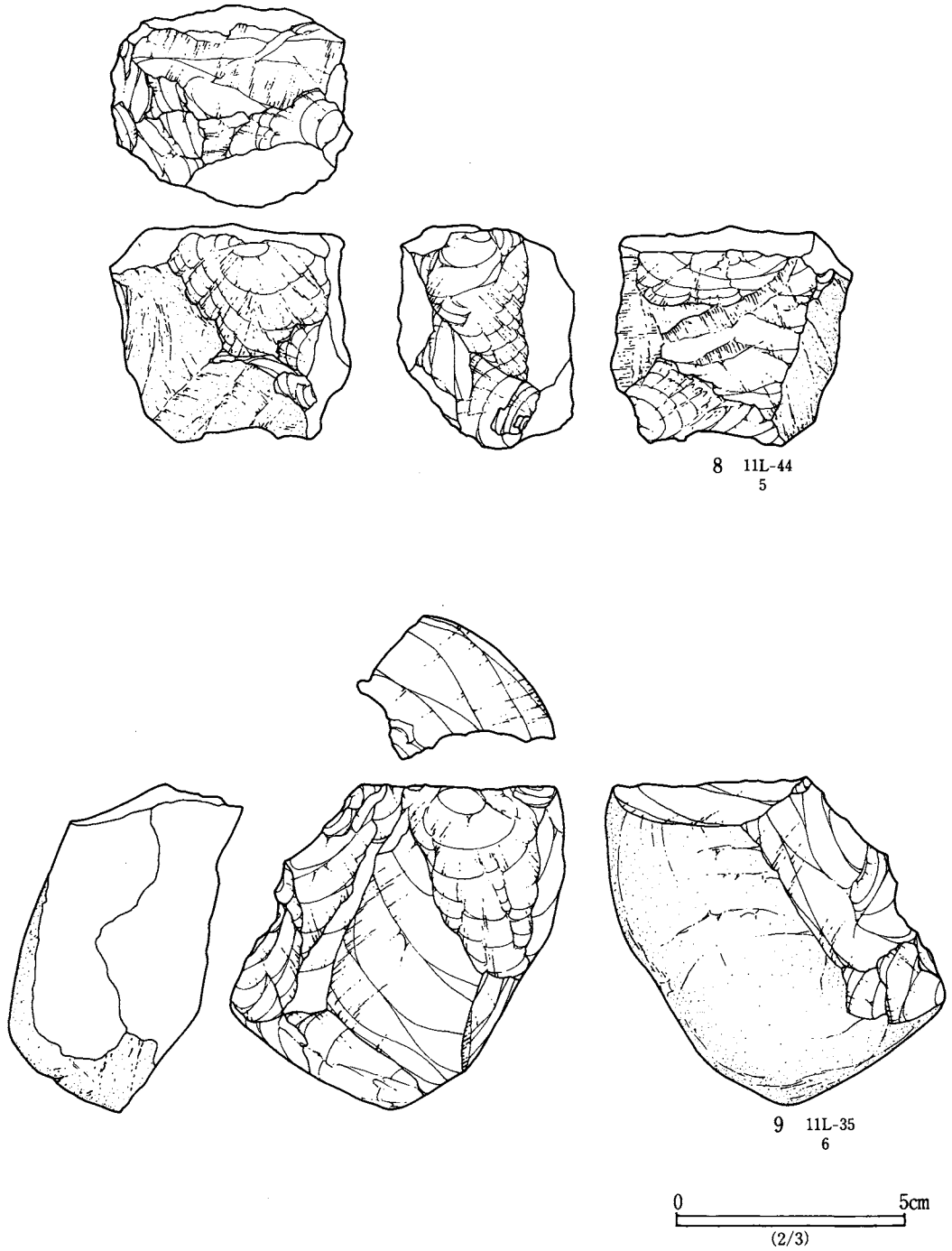
母岩番号	ナイフ形石器	剥片U 剥片R	石核	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
チャート 2	0	0	0	1	0	1	3.4	46.40	7.2
チャート 3	0	0	1	2	3	6	20.7	102.79	15.8
チャート 4	0	1	0	0	0	1	3.4	3.78	0.6
チャート 5	0	0	1	0	0	1	3.4	129.60	20.0
砂岩 1	0	0	0	1	0	1	3.4	1.46	0.2
砂岩 3	0	0	0	1	0	1	3.4	64.30	10.0
安山岩 4	0	0	0	4	1	5	17.2	79.97	12.3
安山岩 5	1	0	0	1	1	3	10.3	3.87	0.6
珪質頁岩 7	0	0	0	1	0	1	3.4	0.93	0.1
ホルンフェルス 3	0	1	0	0	0	1	3.4	1.51	0.2
凝灰質砂岩 1	0	0	1	0	0	1	3.4	205.90	31.7
黒曜石 7	0	0	2	0	4	6	20.7	6.62	1.0
メノウ 3	0	0	0	1	0	1	3.4	1.50	0.2
総数	1	2	5	12	9	29	100.0	648.63	100.0
組成比 (%)	3.4	6.9	17.2	41.4	31.0				



第229図 第22ブロック遺物出土状況



第230図 第22ブロック石器実測図(1)



第231図 第22ブロック石器実測図(2)

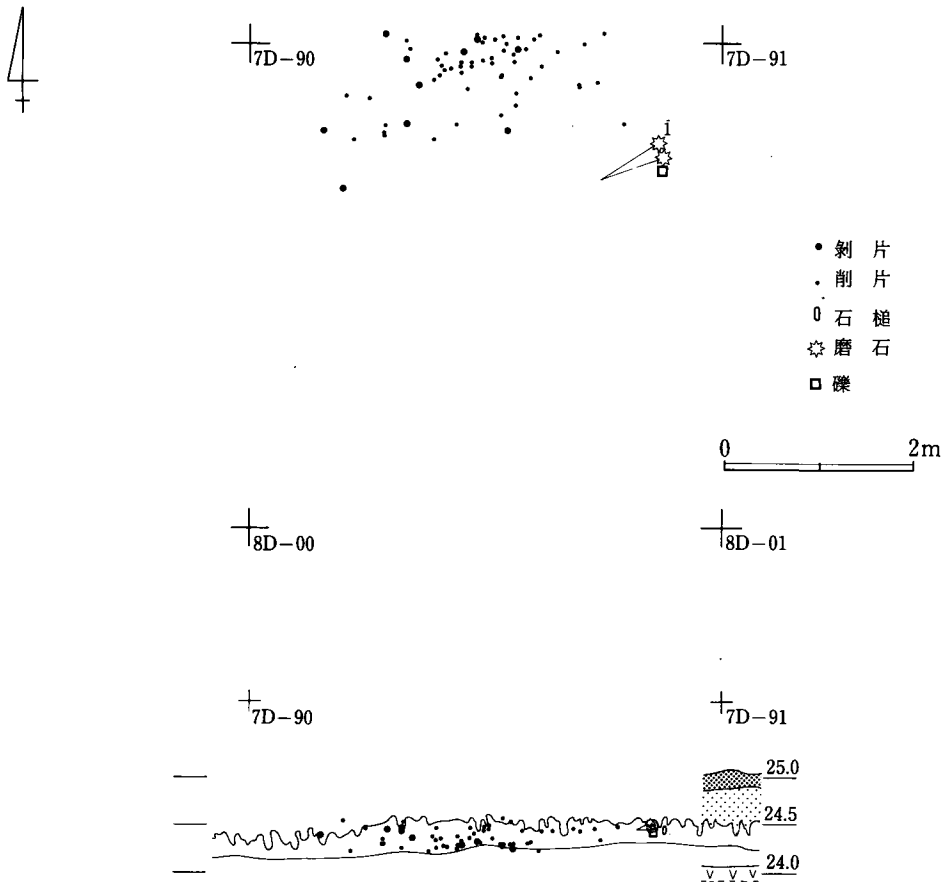
ることができる。6の石核がハードローム層上部から得られているが、他はいずれもソフトローム層中からの検出で、時期的には下降する可能性が高いが、その時期を特定することは困難である。

c) 石器石材 各種の石材があり、いずれも少量の資料しか含んでいない。この中でチャート3と、安山岩4がややまとまった資料から構成されている。このうち、チャート3はブロック周辺で破碎された可能性があるが、安山岩4では、遺存する剥片に工程的連続性が窺われないので、別地点での生産が想定される。

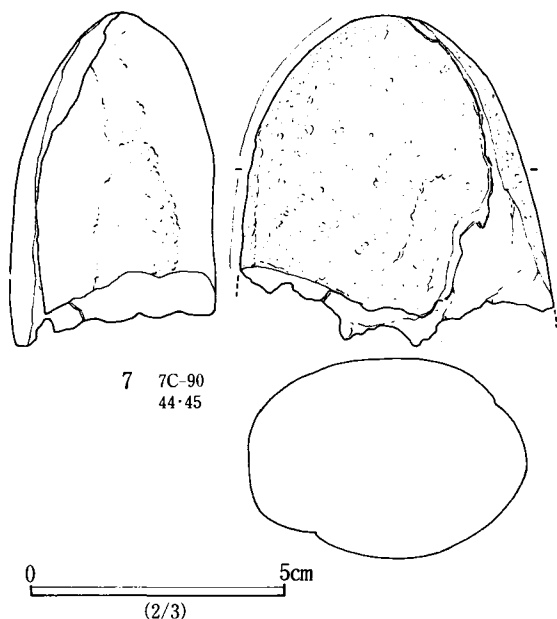
d) 小結 異なる時期の石器が混在している可能性が高いが、少数の資料が広範囲に散在し、また、ローム層の層厚の薄いこともあり、適確な分離は困難であった。

第23ブロック (第223・第232～第234図、図版30)

a) 分布状況 第5地点にある。この地点は東西15m、南北20mの範囲内に広く石器類の散布が認められたが、これを視覚的に6ブロックに分けた。第23ブロックはこのうち最も北側に位置し、その一部は未調査区にも及ぶかと思われる。遺物は7D-90区の北辺に接し、東西2.5m、南北1mの狭い帯状の分布を示している。この部分は剥片と細かい削片の集中部分であり、



第232図 第23ブロック遺物出土状況



第233図 第23ブロック石器実測図

構成されている。剥片は不整なもの、不純物を多量に含む粗悪な黒曜石を素材としているために、破碎した状態になっているものも多くある。2次加工、刃こぼれ等の観察されるものもない。廃棄物の集積と評価することもできよう。

これらの剥片類の集中に隣接して4点の礫片が集中して検出された。このうちには使用痕の認められるものがある。1は安山岩の長円形の円礫側面に面取り状に磨痕、あるいは弱い敲打痕のある例で、磨石と分類した。2点が接合している。砂岩の礫片は、剥片状になっているが、打面部に相当する縁辺に打痕があり、石槌として使用されていた本体から剝落したものと見られる。また、もう1点安山岩の大型礫の破片があり、表面の風化が著しいため詳しい観察がで

第114表 第23ブロック遺物集計表

母岩番号	剥片	削片	石槌	磨石	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 32	1	0	0	0	0	1	1.4	2.69	0.6
黒曜石 12	5	12	0	0	0	17	24.6	21.72	5.0
黒曜石 13	4	9	0	0	0	13	18.8	16.61	3.8
黒曜石 14	0	1	0	0	0	1	1.4	0.55	0.1
黒曜石 不明	0	33	0	0	0	33	47.8	3.97	0.9
砂岩 27	0	0	1	0	0	1	1.4	43.90	10.1
安山岩 47	0	0	0	2	0	2	2.9	149.80	34.6
安山岩 46	0	0	0	0	1	1	1.4	193.60	44.7
総数	10	55	1	2	1	69	100.0	432.84	100.0
組成比 (%)	14.5	79.7	1.4	2.9	1.4				

この南東外縁部に礫、磨石、石槌などがまとまって検出された地点がある。

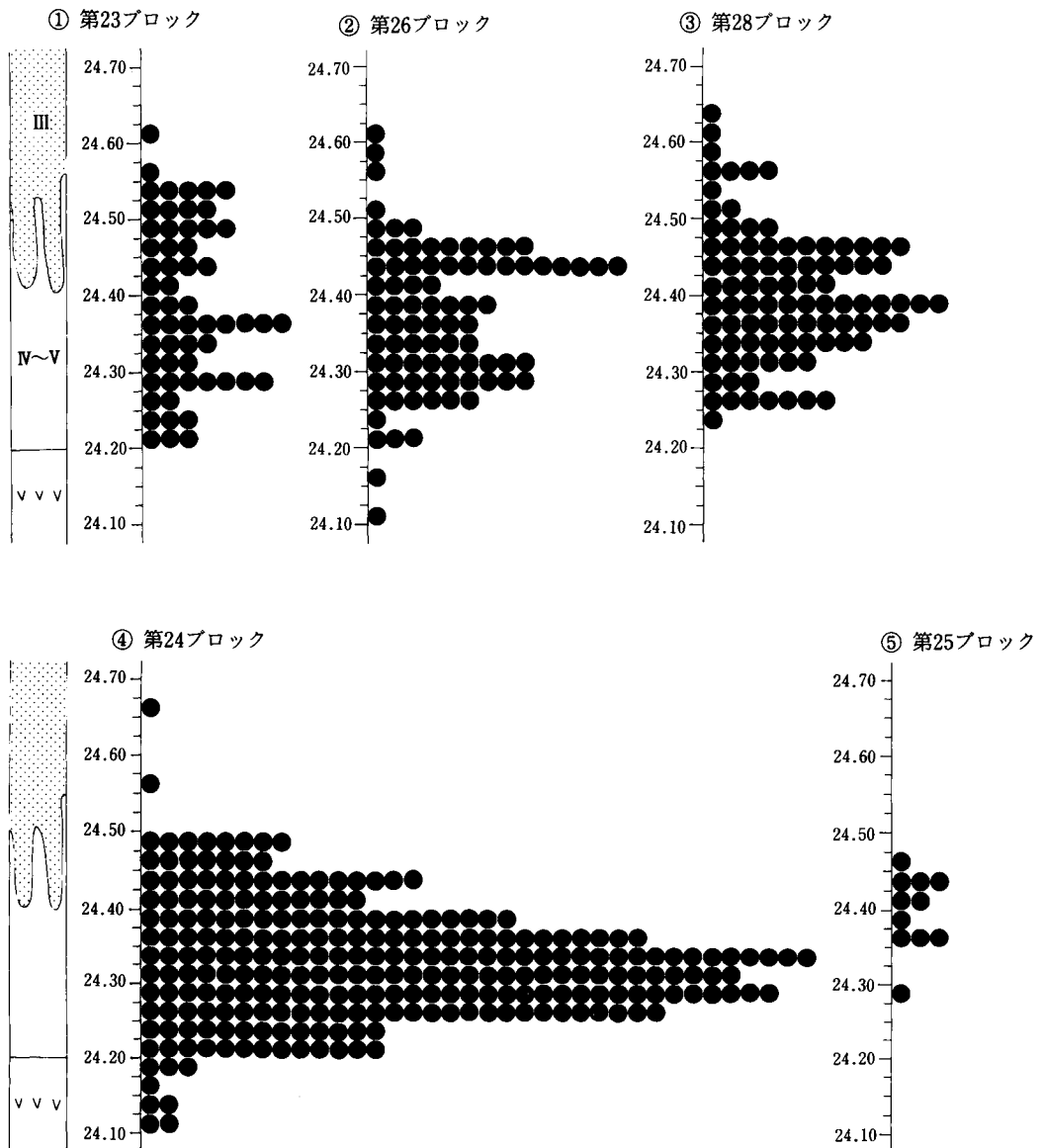
産出層準はハードローム層上部である。IV層下部～V層を産出層準と推定して大過ないと思われる。しかし、比較的重量の大きい礫や礫素材の石器の産出水準が、小重量の剥片よりも上部に位置し、所謂、月見野ヴィーナス曲線（明治大学考古学研究室1969）の一般的傾向を背馳する結果となっている点に注意したい。

b) 出土遺物 69点の資料が得られた。大きく2種に分けられ、剥片・削片類と、礫・礫素材の石器とから

きないが、礫表に不整な凹みがあり、あるいは石砧とも考えることができる。以上のうち、安山岩の2個体は表面が赤く焼けており、礫群構成礫としても使用されていた可能性が高い。

c) 石器石材 剥片の大半が黒曜石によって占められ、他に珪質頁岩の小剥片が1例のみ混入している。黒曜石には3種あるが、母岩識別の困難な細片が圧倒的に多く、最低3母岩が存在すると言った方がよい。しかしながら、黒曜石のうち、12、13の2母岩に大半の資料は振り分けられ蓋然性が高い。これ以外の石材については前項で触れたとおりである。

d) 小結 剥片剥離、あるいは石器製作を反映するブロックである。剥片、削片の集中部が

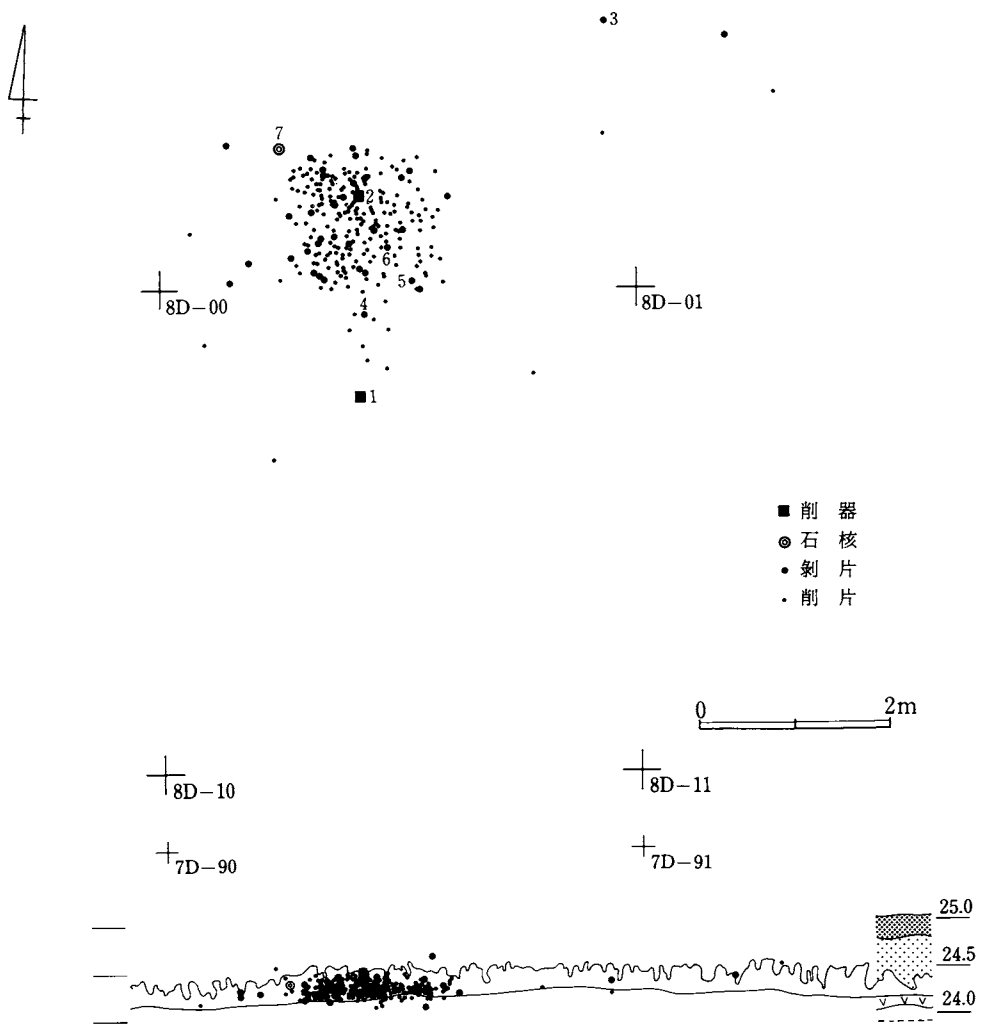


第234図 大林遺跡第23~26・28ブロック遺物垂直分布

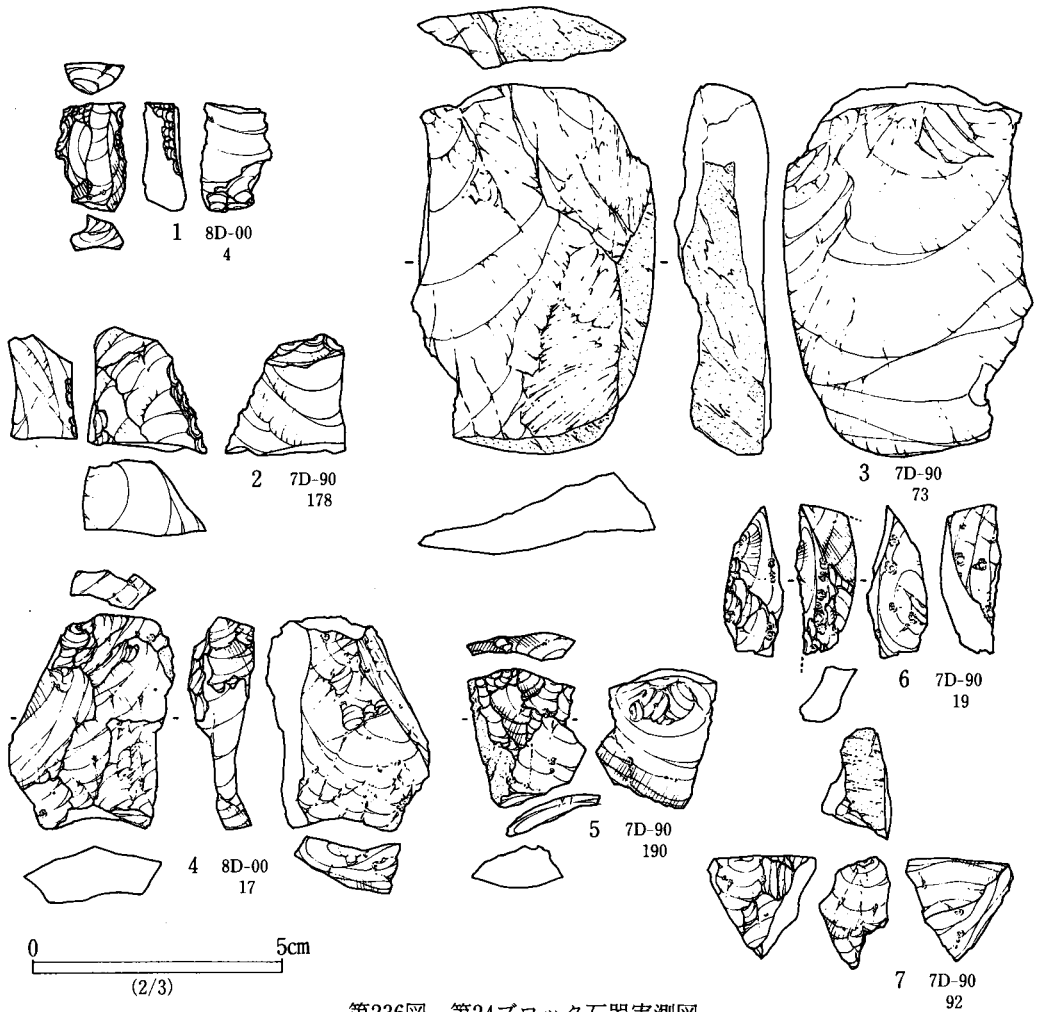
あり、それに接して加工具がとりまとめられている状態は石器群の構成ばかりではなく、それらの状況的属性や、場の機能を知る手がかりとなる一例と考えられる。

第24ブロック (第235・第236図、図版30)

a) **分布状況** 第5地点第23ブロックの南側に濃密な剥片の集中域があり、これを第24ブロックとした。ブロックは、8D-00ポイントのすぐ東北部にあり、径1.5m程の狭い範囲であるが、集中度は極めて高い。この集中は、黒曜石の剥片・削片の集中であり、その他の石材は、外縁部を含めた広い範囲に点々と分布し、特に目立った集中を示していない。産出層準はIV層下部からV層にかけてのいずれかの層準であるが、ブロック周辺での土層の発達が悪く、確定することは困難である。



第235図 第24ブロック遺物出土状況



第236図 第24ブロック石器実測図

b) 出土遺物 遺物の総数は264点あり、1ブロックの資料数としては卓越している。しかし、その殆んど全ては、黒曜石の剥片と削片であり、2次加工のある石器は2点あるにすぎない。1は黒曜石製の縦長剥片の左右両側縁に付刃した側削器。2も同趣の例であろう。メノウの厚手の剥片を使っている。3は比較的大型の安山岩製の剥片で、ブロックの外縁部から検出された。4～7にブロック集中部を構成する黒曜石製の石器の一部を示した。4、5は剥片、6はナイフ形石器の製作剥片、7は石核の断片であろう。第236図は正確な出土地点が分からなくなってしまったが、盤状石核の一種であろう。黒曜石の石質から見て、本ブロックの近傍から出土した蓋然性が高い。

多量の剥片がある割には良好な剥片が少なく、また、石核も断片的であるので剥片剥離の技術的特徴を十分に知ることができない。これは、本ブロックで多用されている2種の黒曜石が粗悪品であるため、企図的な剥片剥離を遂行し得なかったことによるのであろう。4、5など

第115表 第24ブロック遺物集計表

母岩番号	削器	石核	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 34	0	0	1	0	1	0.4	1.83	0.7
黒曜石 12	0	0	14	28	42	15.9	60.96	23.1
黒曜石 13	1	1	12	61	75	28.4	75.47	28.6
黒曜石 15	0	0	3	1	4	1.5	3.10	1.2
黒曜石 不明	0	0	0	133	133	50.4	15.27	5.8
安山岩 35	0	0	1	0	1	0.4	3.42	1.3
安山岩 36	0	0	1	0	1	0.4	22.54	8.5
安山岩 38	0	0	0	1	1	0.4	0.33	0.1
安山岩 39	0	0	1	0	1	0.4	66.60	25.2
メノウ 6	1	0	4	0	5	1.9	14.39	5.4
総数	2	1	37	224	264	100.0	263.91	100.0
組成比 (%)	0.8	0.4	14.0	84.8				

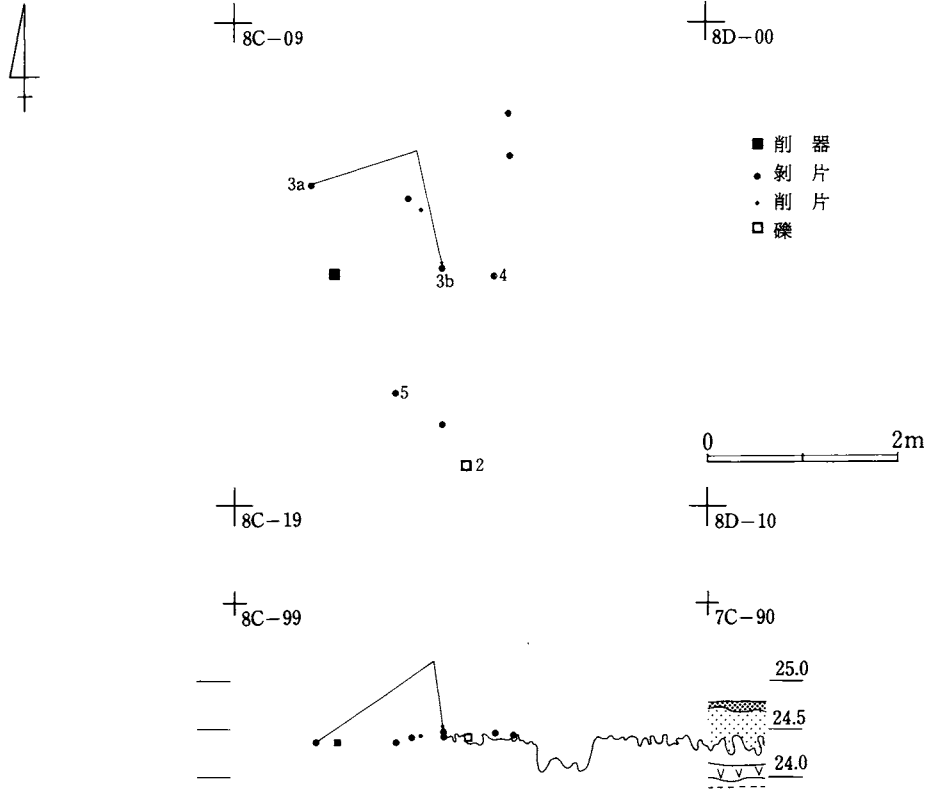
の例を見ると、同一打面から繰り返し剥片を落しているが、これが一般的であったのかどうかよく分からない。第236図の例からも、数種の剥離手法が使い分けられていたのであろう。

c) 石器石材 黒曜石12、及び13が大半を占め、それ以外の石材は5点以下の母岩別資料を保有しているにすぎない。黒曜石12と13は、共に多量の浮石様の不純物を含む漆黒の母岩で、黒曜石12が黄褐色の浮石片のみを含むのに対して、13では灰白色の球果を併せ持ち、比較的大き目の資料では容易に分離することができる。しかし、漆黒の基質を共有するため、微細な剥片での識別は難しく、133点もの帰属不明の資料が残されてしまった。この両母岩は、第23ブロックにも存在している。

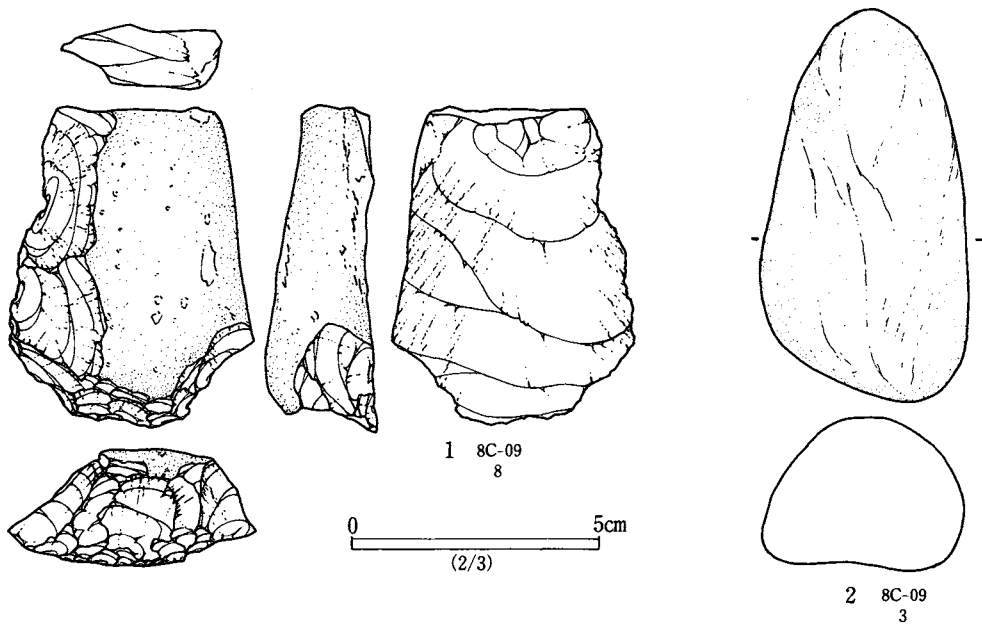
d) 小結 第24ブロックは2種の黒曜石の消費地点である。第23ブロックと極めて近似した内容を示しており、両者の関連性が問題となるが、時間軸上での相関性を確定する根拠は何も残されていない。一般に、ブロック間での接合関係や同一母岩の共有は、それらのブロックの同時性を検証するものであるという短絡的見解が流布されているが、同一の地点が同一の集団によって反覆して利用されたとすれば、その地点には、数シーズン、あるいは数年分の廃棄物が近接して集積されるであろう。そして、その廃棄物の中には同一の母岩から得られた石器が、時間を越えて累積するかもしれない。あるいは、その地点に隠匿された石核やブランクから、やはり時季を距てて剥片が落されるかもしれない。このことが今まで再三指摘してきたように、貧弱な母岩別資料しかもたぬ多種多様な石材が集散的にブロック内に遺存する根拠である。

第25ブロック (第237～第239図、図版30)

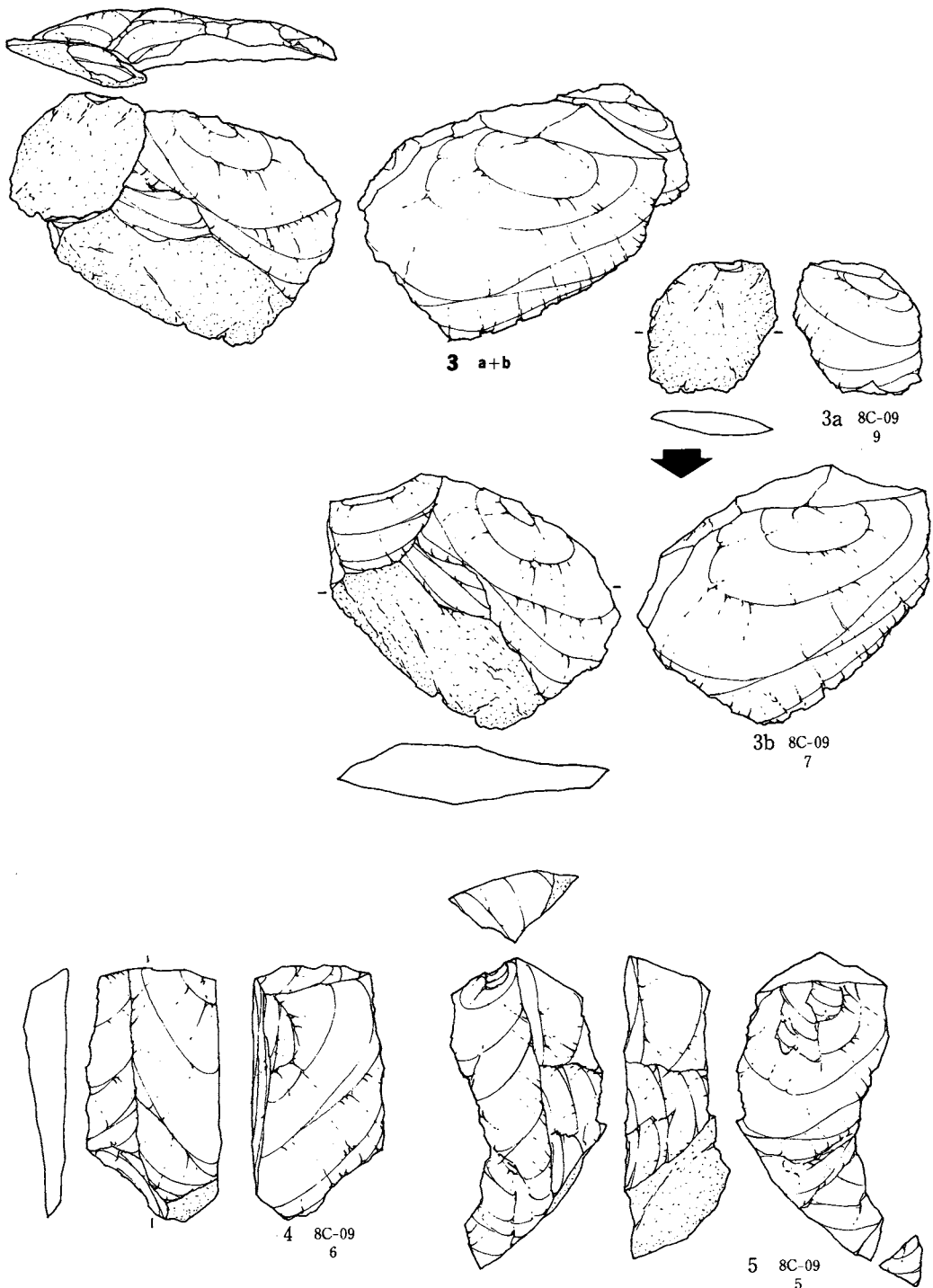
a) 分布状況 第5地点の西端にあり、8C-09区のほぼ中央、東西2.5m、南北3mの範囲内に10点の資料が点在している。その分布は疎らで一様である。また、産出水準は、各遺物と



第237図 第25ブロック遺物出土状況



第238図 第25ブロック石器実測図(1)



0 5cm
(2/3)

第239図 第25ブロック石器実測図(2)

第116表 第25ブロック遺物集計表

母岩番号	削器	剥片	削片	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
安山岩 37	0	2	0	0	2	20.0	77.53	22.1
安山岩 39	1	0	0	0	1	10.0	66.90	19.1
安山岩 40	0	4	1	0	5	50.0	76.62	21.8
メノウ 7	0	1	0	0	1	10.0	3.17	0.9
砂岩 28	0	0	0	1	1	10.0	126.50	36.1
総数	1	7	1	1	10	100.0	350.72	100.0
組成比 (%)	10.0	70.0	10.0	10.0				

も大体24.5m前後にそろい、ほとんど上下差をもっていない。産出層準はIV層～V層であるが、明確ではない。

b) 出土遺物 削器1点、剥片7点、削片1点、他に棒状の円礫がある。削器(1)は安山岩の部厚い礫面付の剥片の側縁から尾部に2次加工を加えたもの。heavy dutyな端削器と考えられる。この端削器とほぼ同形同大の剥片が第24ブロックに存在した。

剥片には比較的大型のものが多く、特に安山岩を素材とするものが目立つ。3は2点の剥片の接合したもの。3bは横に長い複剥離打面をもっているが、その打面を構成する剥離面のうち1面は、3aの剥離後に形成されており、3a→3b打面部→3bという打面の移動が看取されよう。4は縦に折れた剥片。5は90°の打面転移を示す好資料である。他にメノウの剥片が1点あるが(第243図)、第26ブロックの石核に接合する。

2は自然礫であり、使用痕と留めていないが、石槌によくある形態をした非焼成礫であるので、あるいはその種の石器であるのかもしれない。

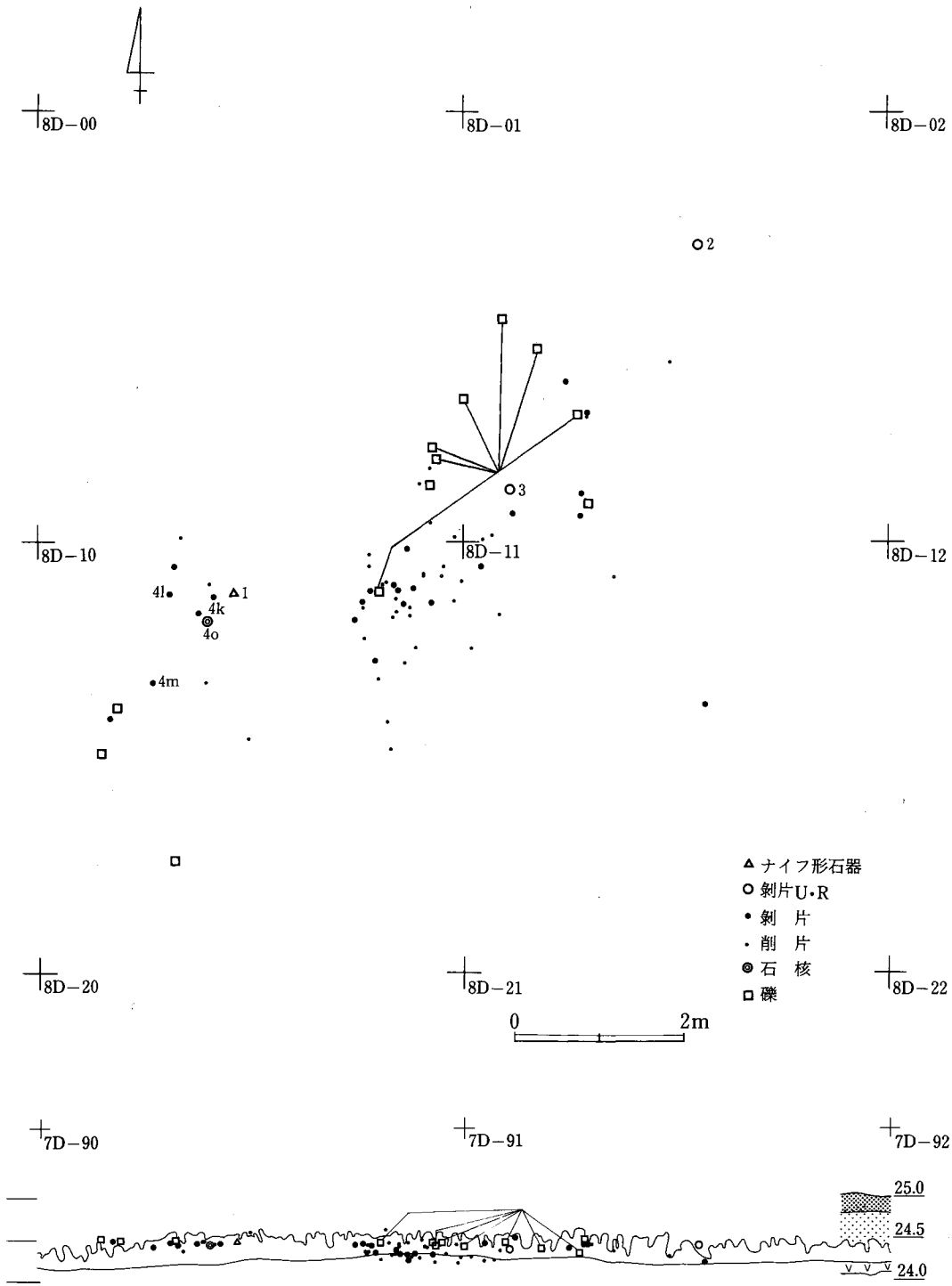
c) 石器石材 安山岩の使用頻度が高い。安山岩には3種の母岩が識別されるが、安山岩40としたものが5点あり、接合資料を含む。残余のものは2点以下の資料しか持っていない。

d) 小結 少数の石器から構成されているが、既に記載した第24ブロックと比較してみると、ブロックの内容に大きな差異があるように見えるが、第24ブロックの構成から消費母岩を控除すると極めて近似した内容が顕在化する点が重要である。装備の恒常性と分節性という概念を母岩消費の側から眺めることができるのかもしれない。

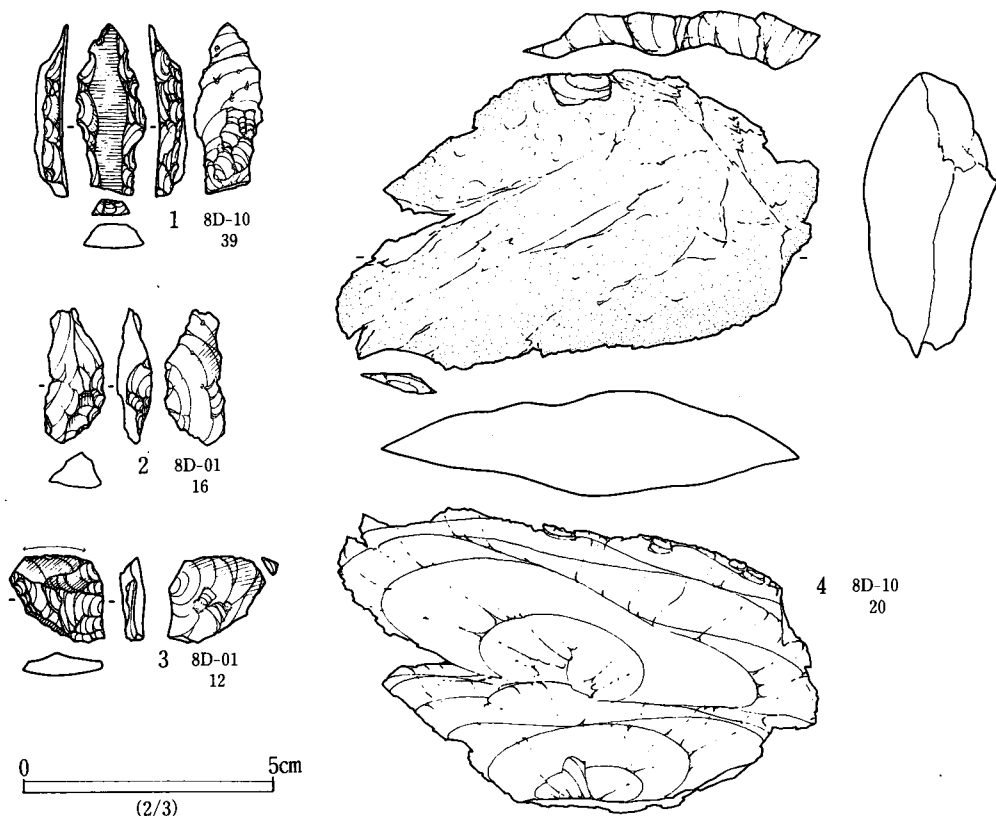
第26ブロック (第240～第243図、図版30)

a) 分布状況 第24ブロックの南側に位置する。8D-11ポイントを中心とする長軸9m、短軸4mという細長い分布域を形成しているが、8D-10区西側の部分と、8D-11ポイントの南北に広がる部分とに分離することができる。前者をクラスターa、後者をクラスターbとする。後で触れる様に、両クラスターの母岩構成には明瞭な差が認められる。

クラスターaは、東西2m、南北4mの細長い集中域で、3点の礫と、ナイフ形石器、剥片、石核等から構成されている。分布は散在的であるが、クラスター北端にメノウの石核と剥片が



第240図 第26ブロック遺物出土状況



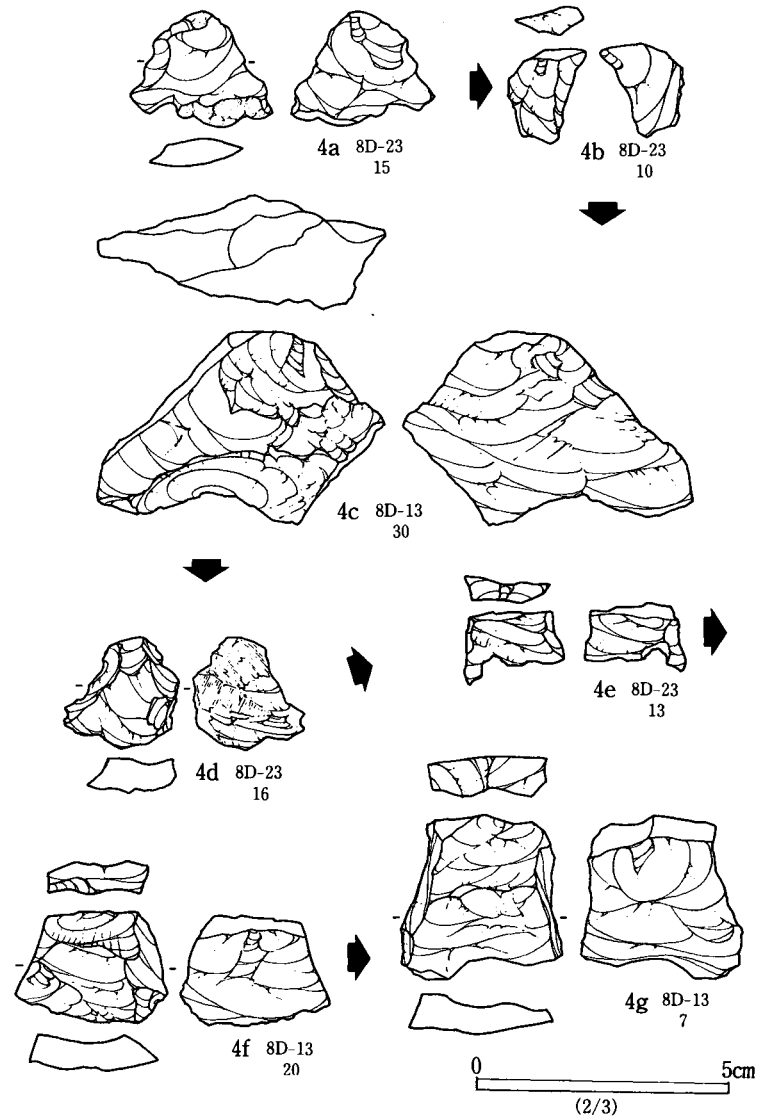
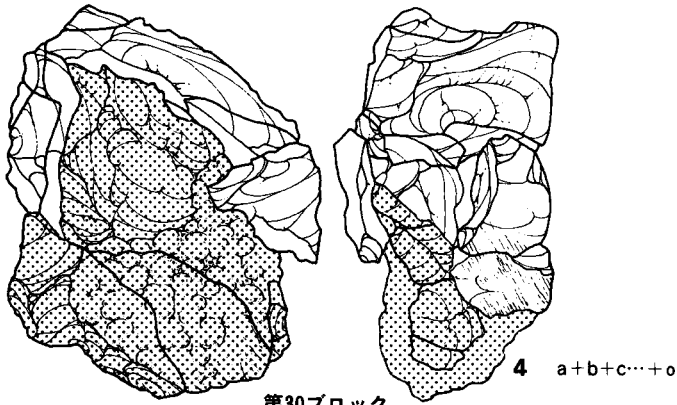
第241図 第26ブロック石器実測図

ややまとまり、接合関係もある。

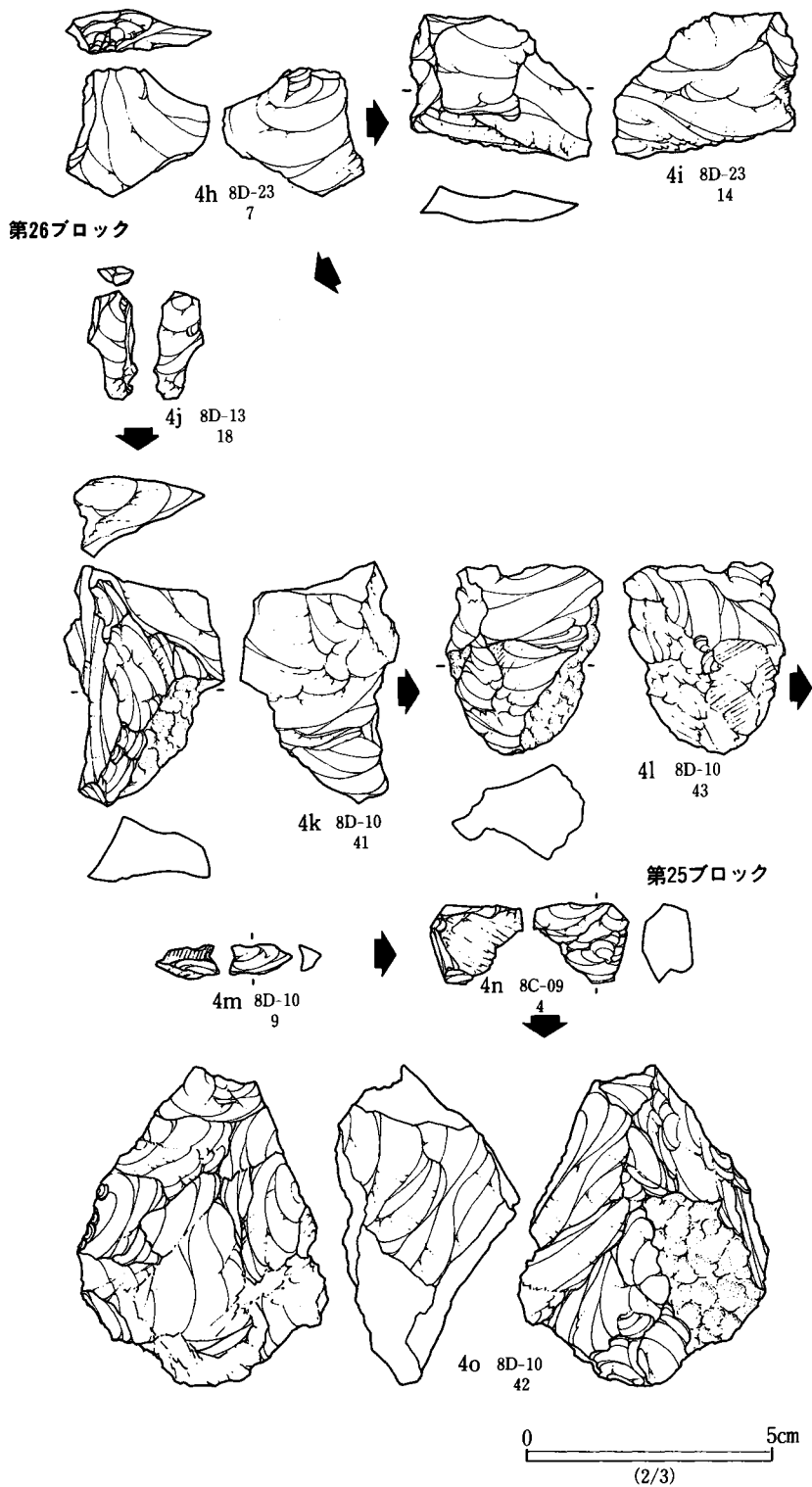
一方、クラスターbは、南北7m、東西2.5mの長楕円形のひろがりをも有し、剥片、削片の集中する南側の部分と、破碎礫の点在する北側の部分とに分離することができるかもしれない。小型で不定型な剥片が大半を占め、2次加工の著明なものは極めて少数である。破碎礫は比較的広い範囲に分布しているが、個体数は僅かに2個体あるにすぎず、そのうち接合するものが大半であり、クラスターaと同様に礫群を形成していると評価することは困難である。

産出層準はハードローム層の上部であるが、クラスターb南半の剥片集中箇所ではVI層上部に及ぶ遺物の分布が確認されている。第23、24ブロックにおいても、その遺物密集地点は周辺と比較して低いレベルにまで分布が及んでいたが、比較的重量の大きい礫片のレベルが相対的に安定しているのと対照的であるばかりか、月見野ヴィーナス曲線の公式的な適用にいくつかの附帯事項のあることを示唆している。

b) 出土遺物 ブロック全体では、77点の資料がある。内訳は、ナイフ形石器1点、剥片26点(2次加工のあるもの2点を含む)、削片37点、石核1点、礫12点となっている。これをクラスター毎に振り分けると、



第242図 第26・第30ブロック石器実測図(メノウ7-1)



第243図 第26・第30ブロック石器実測図(メノウ7-2)

第117表 第26ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 31	0	0	1	1	0	0	2	2.6	1.10	0.1
黒曜石 11	1	0	0	0	0	0	1	1.3	2.50	0.3
黒曜石 12	0	0	6	7	0	0	13	16.6	30.92	3.8
黒曜石 13	0	0	3	5	0	0	8	10.3	8.41	1.0
黒曜石 16	0	2	6	10	0	0	18	23.0	14.30	1.8
黒曜石 不明	0	0	0	10	0	0	10	12.8	0.97	0.1
安山岩 29	0	0	1	0	0	0	1	1.3	108.70	13.3
安山岩 30	0	0	0	1	0	0	1	1.3	2.23	0.3
安山岩 31	0	0	1	0	0	0	1	1.3	14.45	1.8
安山岩 32	0	0	1	0	0	0	1	1.3	0.07	0.01
安山岩 33	0	0	1	1	0	0	2	2.6	5.24	0.6
安山岩 34	0	0	1	0	0	0	1	1.3	5.41	0.7
安山岩 38	0	0	0	1	0	0	1	1.3	2.04	0.3
安山岩 42	0	0	0	1	0	0	1	1.3	0.21	0.03
メノウ 7	0	0	3	0	1	0	4	5.1	111.57	13.7
安山岩 44	0	0	0	0	0	1	1	1.3	133.30	16.3
安山岩 45	0	0	0	0	0	1	1	1.3	3.86	0.5
安山岩 48	0	0	0	0	0	1	1	1.3	115.70	14.2
安山岩 49	0	0	0	0	0	7	7	9.0	230.14	28.2
砂岩 24	0	0	0	0	0	3	3	3.8	24.87	3.0
総数	1	2	24	37	1	13	78	100.0	815.99	100.0
組成比 (%)	1.3	2.6	30.8	47.4	1.3	16.6				

クラスター a ナイフ形石器 1 剥片 6、削片 4、石核 1、礫片 3

クラスター b 剥片 20、削片 33、礫片 9

となり、両者の相対的組成に際立った差異を見出すことはできないが、クラスター b に削片が多く含まれている事実を指摘することができよう。

1 はナイフ形石器。基部に平坦な打面が残されている。両側縁には鋸歯縁状の 2 次加工がある。尖頭部に接して背面左側縁に短い未加工の縁辺が残されている。クラスター a から出土した。

2 と 3 は 2 次加工の認められる剥片。2 は横長剥片の打面を除去するような剝離があり、ナイフ形石器と似ている。3 には細かい 2 次加工と共に縁辺部に微かに刃こぼれがある。共にクラスター b から出土した。4 は安山岩の礫面付きの剥片で、大型の部類に属する。クラスター a から検出されたが、同様の大型礫面付きの剥片は処々のブロックに 1 点ずつ存在する。クラスター a のメノウ製剥片と石核は第 243 図に示したが、これらは第 30 ブロックから搬入された石核から作出されたものである。詳細は第 30 ブロックの項で触れる。

c) 石器石材 石器素材としては、珪質頁岩 1 種、黒曜石 4 種、安山岩 8 種、メノウ 1 種が

列挙される。クラスター a には珪質頁岩31、メノウ7が多く、他に安山岩が5種ある。黒曜石は少数だが、黒曜石13としたものが疎らに散る。クラスター b には、黒曜石12、16、13が主体的に分布し、安山岩も3種あるが少量である。このように、黒曜石13を除くと、両クラスター間に共通する母岩はない。黒曜石13は全母岩のうちで、最も分布範囲がひろく、少量の剥片が広範囲にばら撒かれているように見える。従って、これはクラスター毎に分有されたという性格のものではなく、廃棄後の2次的変換 (transform) が作用している可能性が高い。

礫種としては、安山岩が4種、砂岩が1種ある。安山岩44、45、48がクラスター a に、安山岩49、砂岩24がクラスター b に帰属する。各資料共に被焼成で細片化しているが、このうち、安山岩42が約1/2を遺存し、安山岩49が接合して約2/3まで復原された。復原後の状況を見ると、破片毎の色調に差があり、破碎後も何らかの機能を保持し続けていたことが窺われるが、その破片は細片化しており、大型礫の供給に大きな制約のある本地域の特殊性を反映している。

d) 小結 見かけ上の分離に従い、クラスター a、クラスター b に2分した。各クラスターにはそれぞれ別種の母岩があり、直接の関連性を指摘することができない。従って本来別個のブロックとして扱うのがよいのかもしれない。黒曜石のうち、12、13、14の3母岩が第23、24ブロックと共通し、相互の関連性が問題となるが、消費の過程を開示する資料を欠いている。黒曜石16は第5地点においては、本ブロックに偏在するが、第6地点第32ブロックにまとまって存在する。

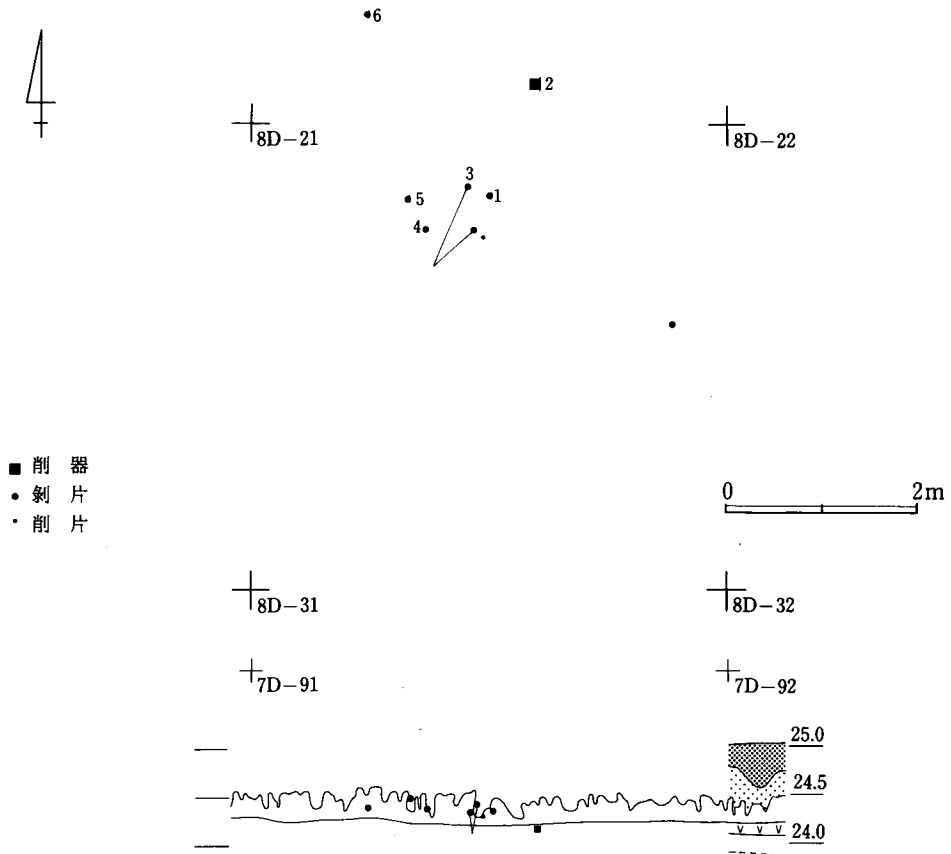
第27ブロック (第244・第245図)

a) 分布状況 第26ブロック南側に位置する小規模なブロックである。8 D-11区から8 D-21区にかけ、東西3.5m、南北3mのひろがりがあり、9点の資料が含まれている。中央部に6点の遺物が集まるが、全体としては散漫な分布状況を呈している。産出層準はハードローム層の上部である。

b) 出土遺物 削器が1点あるが、その他は全て剥片によって占められている。1はメノウ製の縦長剥片。背面、底面に多方向の剝離痕を残し、頻繁な加撃面の転位が観察される。側縁には僅かに刃こぼれが認められるが、断続的である。2は黒曜石の縦長剥片の側縁に2次加

第118表 第27ブロック遺物集計表

母岩番号	削器	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
黒曜石 12	1	5	1	7	77.8	17.83	40.3
安山岩 42	0	1	0	1	11.1	1.97	4.5
メノウ 6	0	1	0	1	11.1	24.42	55.2
総数	1	7	1	9	100.0	44.22	100.0
組成比 (%)	11.1	77.8	11.1				

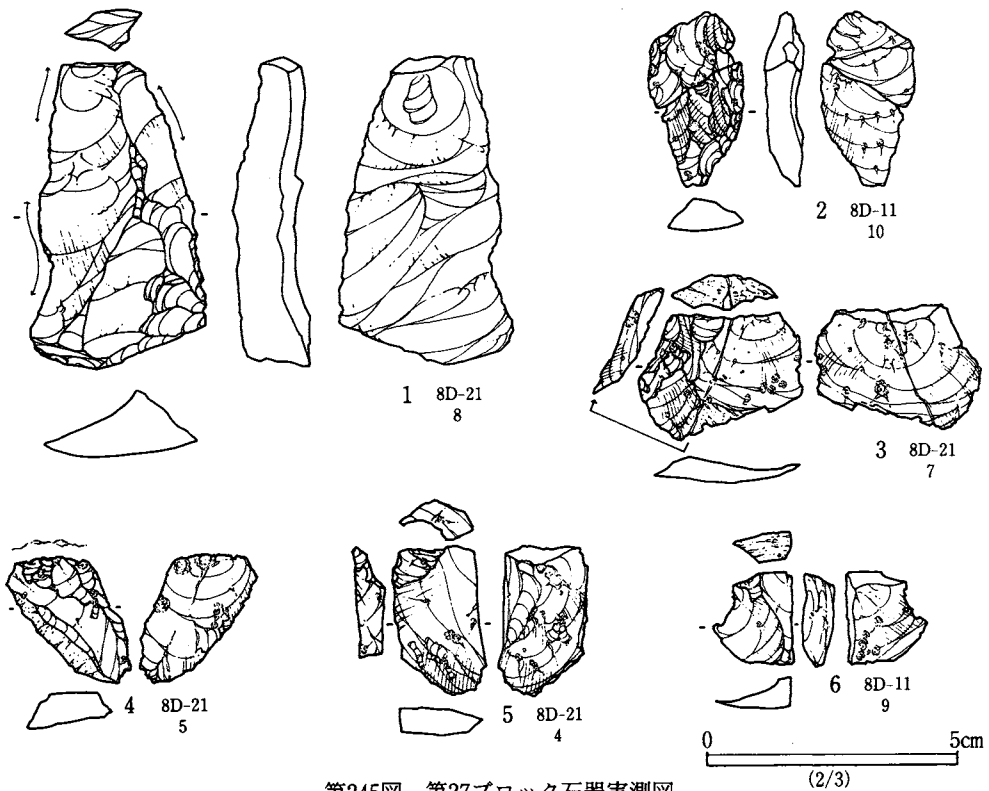


第244図 第27ブロック遺物出土状況

工のある石器で側削器とした。調整剝離は背面中央にまで及び、石槍の表面のようになっている。刃角は62°前後。3～6は黒曜石の剝片で、使用痕も認められない一般的剝片にすぎないが、示唆的な資料でもある。

これらの剝片は同一母岩の黒曜石から作出されているが、この黒曜石は、色調や夾雑物の混入状況からみて、ほぼ黒曜石12と判定された。この母岩は、第23・24・26ブロック等に消費の痕跡を留めているが、就中、第24ブロックでの集中的消費の状況が観察された。しかし、第27ブロックでは母岩消費を肯定し得る資料を欠いているので、別な消費地点、それも極めて近接した叙上の3ブロックのうち、いずれかから持ち込まれたものである可能性は極めて高い。

一般に、剝片がその生産地点を離れて移動するためには、その剝片が将来別な所で機能するのに必要な条件（大きさや形態など）を具備している必要があると考えてよい。すなわち、異なった条件付けを前提として、諸種の属性が選択される。例えば、本ブロックにもあった黒曜石12という石材についてみると、それは多量の不純物を含む粗悪品である。この粗悪品を相手



第245図 第27ブロック石器実測図

とする剥片剥離は、思いどおりに希望する剥片を得ることの難しい、一種の恣意的な破碎過程に他ならず、剥片を剥離する過程よりも、むしろ生産された剥片の中から目的に沿う剥片を選択する過程が重要となろう。この選択の過程は、さし迫った要求を充足するためにも必要とされるが、将来のためにも備えねばならない剥片の選別をも含んでいたかもしれない。既に再三に亘って指摘してきたが、各ブロックを具体的に構成している石材を母岩に環元してみると、意外にも各母岩は少数の資料しか含んでいない場合が多い。このことは、各母岩の帰属資料が、叙上の属性選択の過程を経た、言わば濾過された資料群であることを示唆している。従って、2次加工の有無にとらわれず、各々の剥片の詳細は属性分類と観察が要請されることになる。この視座をさらに強力なものにするためには、綿密な使用痕分析に立脚した石器群総体の再点検が必要である。いずれにせよ、既存の器種分類と技術型式学に基盤をおく石器群の理解はもはや飽和点に達しているように見える。

c) 石器石材 概要は前項で触れた。黒曜石12が7点、安山岩、メノウが各1点ある。

d) 小結 少量の石器しかもたぬ小ブロックであったが、黒曜石12を素材とする剥片は選択的に搬入されたものを判定した。この見方が正しいとすれば、別なブロック・地点で同趣の剥片が検出された場合、その処理には上で述べたような十分な注意を払わねばならないことになる。

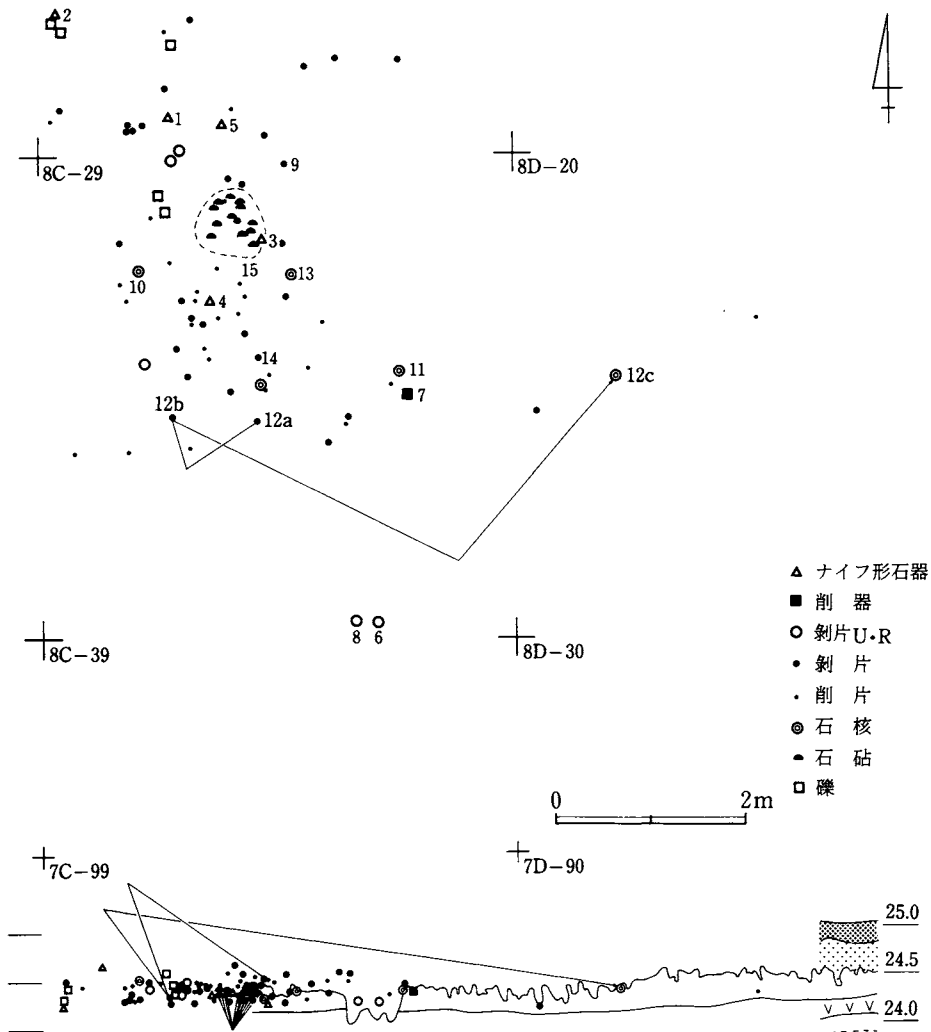
第28ブロック (第246～第249図、図版30)

a) 分布状況 第5地点南西端に位置する。ブロックを構成する遺物のひろがり、8C-29区を中心に、東西8m、南北6mに及んでいるが、8C-29ポイントの東側の、東西2.5m、南北も5m位の楕円形の範囲に大多数の遺物が集中している。この集中部は、剥片類を中心として、ナイフ形石器や石核、それに礫片を含んでいる。興味深いことに、集中部のほぼ中央には、比較的大型の石砧がおかれ、その南側に削片を多く含む剥片の集中があり、そこには3点の石核も含まれている。一方、その北側にはナイフ形石器、剥片と共に、破碎礫も点在し、石砧を結節点とする分布上の差異は明らかである。産出層準はハードローム層の上部である。

b) 出土遺物 総数94点の遺物があるが、このうち6点が礫片、12点が接合して石砧1個体となったので、76点が剥片と石核、及び製品となる。石器組成は、ナイフ形石器が破片を含めて5点、剥片35点(うち刃こぼれ、あるいは簡略な調整痕をもつもの5点)、削片29点、石核5

第119表 第28ブロック遺物集計表

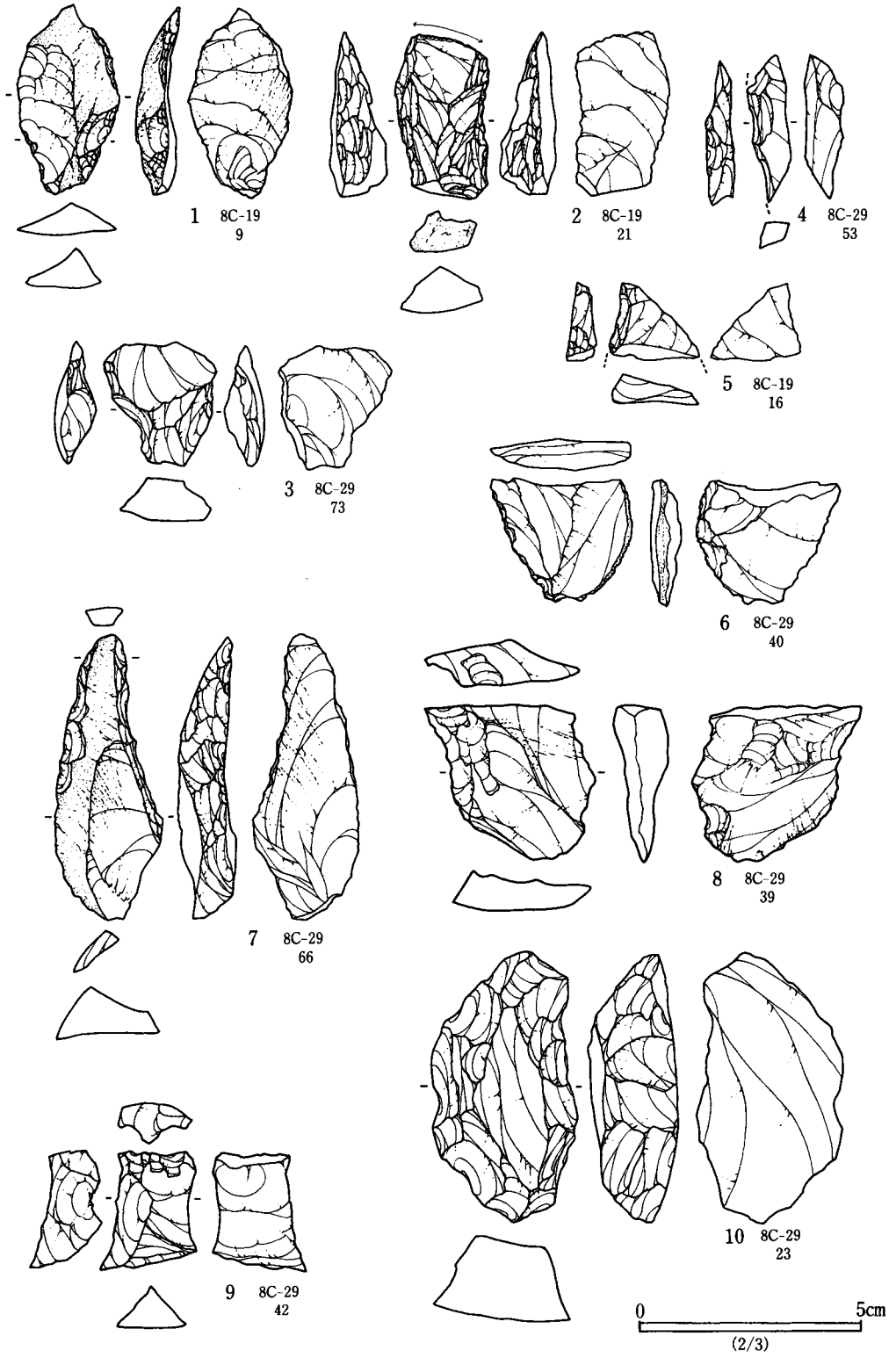
母岩番号	ナイフ形石器	削器	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	石砧	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 29	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.2	9.54	0.6
珪質頁岩 30	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.2	0.48	0.03
珪質頁岩 33	0	2	0	0	0	0	0	0	2	2.4	2.90	0.17
黒曜石 17	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.2	0.14	0.01
黒曜石 48	0	0	0	3	1	0	0	0	4	4.9	12.08	0.7
安山岩 26	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1.2	17.83	1.1
安山岩 27	0	0	1	0	0	1	0	0	2	2.4	37.53	2.3
安山岩 28	3	0	1	0	1	0	0	0	5	6.1	21.66	1.3
安山岩 41	1	0	0	12	7	0	0	0	20	24.4	93.86	5.7
安山岩 114	0	0	1	1	0	0	0	0	2	2.4	11.40	0.7
安山岩 115	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.2	10.44	0.6
安山岩 116	0	0	0	4	17	1	0	0	22	26.8	71.56	4.3
砂岩 23	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.2	3.42	0.2
ホルンフェルス 6	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1.2	38.43	2.3
泥岩 2	1	0	0	3	0	0	0	0	4	4.9	7.01	0.4
泥岩 3	0	0	0	2	0	1	0	0	3	3.7	57.38	3.5
泥岩 4	0	0	0	1	0	1	0	0	2	2.4	2.08	0.1
泥岩 5	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.2	2.98	0.2
泥岩不明	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.2	0.01	0.01
砂岩 25	0	0	0	0	0	0	102	0	102	1.2	865.85	52.1
安山岩 43	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.2	14.62	0.8
安山岩 117	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.2	241.50	14.5
砂岩 26	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2.4	90.50	5.4
ホルンフェルス 13	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2.4	47.83	2.9
総数	5	3	3	30	29	5	102	6	82(93)	100.0	1,661.03	100.0
組成比 (%)	6.1	3.7	3.7	36.6	35.3	6.1	1.2	7.3				



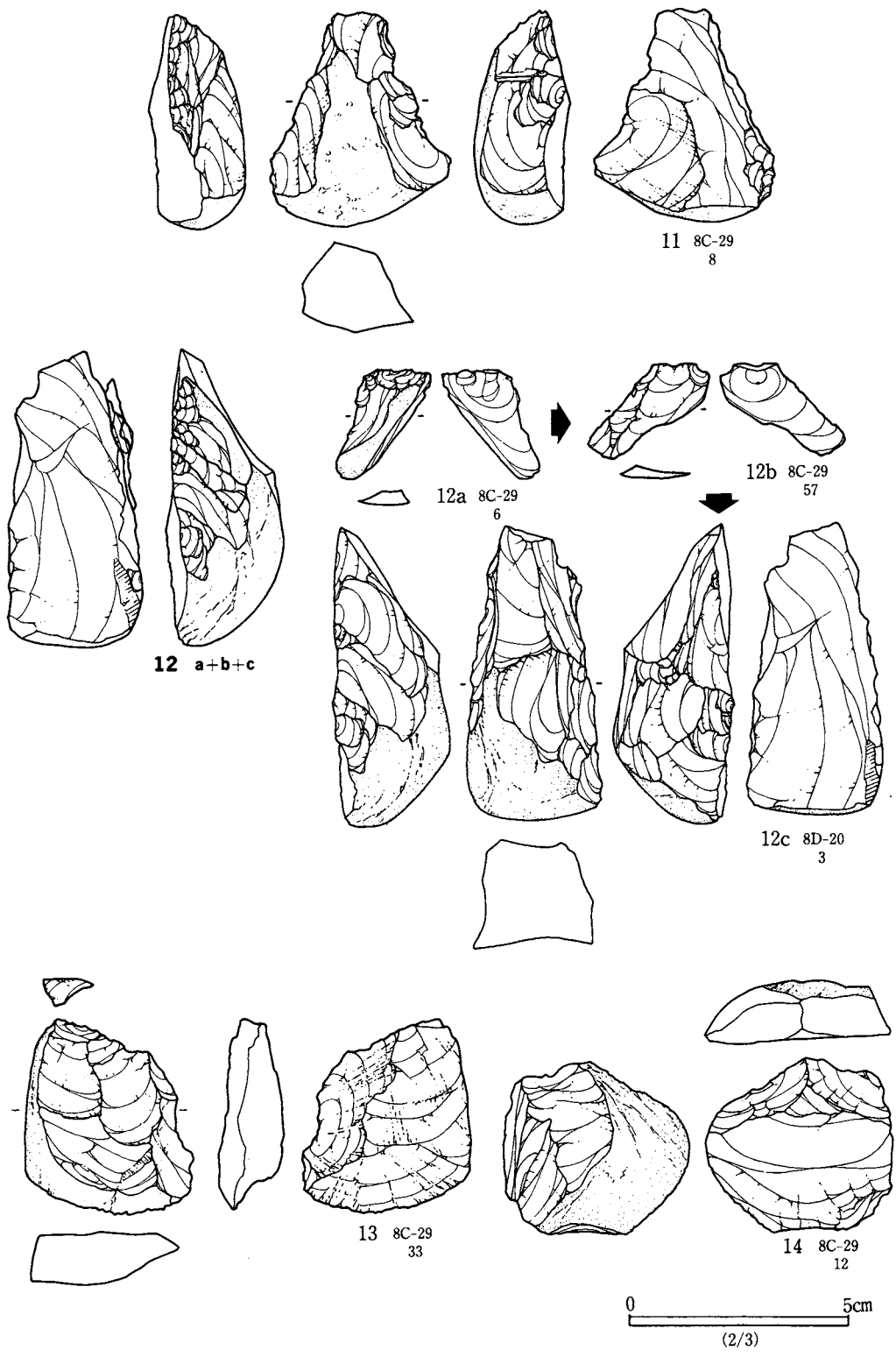
第246図 第28ブロック遺物出土状況

点となり、第5地点の中では充実した器種構成を示している。

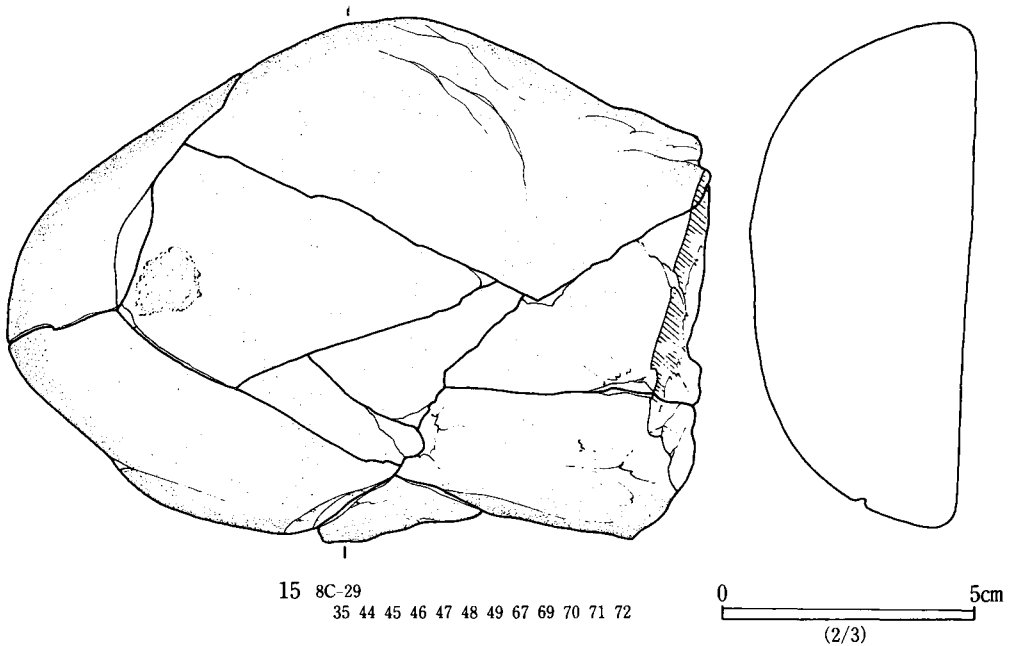
1～5にナイフ形石器を示した。1は木葉形の礫面付剥片の背面右側縁に簡素な2次加工痕のあるもの。基部には僅かに平坦な打面が残されている。2次加工はいずれも角度の浅いもので、所謂プランティングとは違う。安山岩製。2はこれと対照的に入念な2次加工のあるもの。基部に原礫面からなる打面を大きく残置し、左右両側縁が併行する台形状の形態をしている。2次加工は両側縁にあるが、特に背面左側縁に著しい。刃部はほぼ水平で、末端が small step になる微損傷が接続する。1と同一母岩から作られている。3も刃部が水平になるもの。横長剥片の打面部を一側縁とし、尾部(底部)側に2次加工を加えている。刃部は損傷を受けているが、それは所謂 half-moon breakage である。4と5は細片であるため詳しいことは分から



第247図 第28ブロック石器実測図(1)



第248図 第28ブロック石器実測図(2)



第249図 第28ブロック石器実測図(3)

ない。以上の如く、尖頭器と台形状石器とが共伴している。

7は凹削器の仲間であろう。やや厚味のある中型の剥片の一側縁に刃角71°前後の切り立った剥離を加えて、内彎する刃部が作出されている。

6、8、9に剥片の一部を示した。6は尾部破片であるが、腹面左側縁と、それに対応する背面左側縁とに連続する剥離痕がある。楔形石器に分類するべきかもしれない。剥片8の尾端には両面に刃こぼれがある。9の特徴は第25ブロックの一例に一致する(第239図5)。

石核には特徴的なものが3例ある(10、11、12c)。これらの諸例は、厚さ12mm~15mmの分厚い大型の剥片を素材とし、その縁辺部を加撃し、横長貝殻状の剥片を連続的に作出するものである。素材の腹面を打面に固定し、打点を全周するもの(10)と、一端に原礫面を残し、2側縁を往復するもの(11、12)との両者がある。後者では作業面が一端で交叉している。12cには剥片2点(12a、12b)が接合し、剥片剥離の進行状況を知ることができる。一般に、この種の石核から得られる剥片は12a、12bのように、小型で横に長いこと、尾部がstep/hingeとなるものが多いこと、平坦で横長の打面をもつこと等の共通した特徴をもち、かつ、それが連続的に量産されることが重要であろう。

13と14は別種の石核である。前類と比較してみると、剥片素材の石核である点で共通するが、いくつかの相違点が指摘される。例えば、素材が薄手で小型なこと、打面が素材剥片の背面側に設定されること等が異なる属性と評価されよう。作出された剥片は、十分な資料がなく不明

な部分もあるが、前類のそれとはなほだしい懸隔は認められないようである。しかし、作出される剥片の絶対量には大きな差異があるにちがいない。前類が大型のブランクを前提としているのに対して、本類は、言わばその代用品であり、その場凌ぎ的な石核としての評価が可能である。問題は、このようなその場凌ぎの形態を頻繁に要する程に、この種の剥片の需要が大きかった点であり、ある意味において、12aや12bのような剥片が石器生産システムの閾値を制御する機能的中枢の一端を担っていたと考えてよいであろう。

15は石砧である。12点に割れた破片が狭い範囲からまとまって出土したが、全て接合した。約1/4を欠くが、石砧としての機能時に完存していたかどうか分からない。横断面は蒲鉾型で、凸面の一部に被加撃痕がある。また、全体が弱く赤変し、煤状の附着物の認められる部分もある。焼かれたことが破碎の原因であろう。

c) **石器石材** はじめに礫の概要を報告したい。礫には、安山岩2個体、砂岩とホルンフェルスが1個体ずつ存在する。

安山岩43 僅かに赤変した細片である。

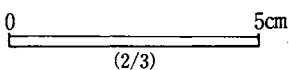
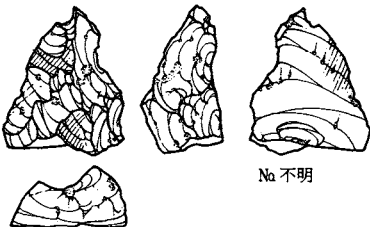
安山岩117 完形礫(68mm×62mm)。特に著しい焼成を受けた形跡に乏しいが、酸化鉄様の鮮やかな朱色の物質が附着している部分がある。磨石かもしれないが、はっきりしない。

ホルンフェルス13 小礫片で、礫表部にのみ赤変部が看取される。粘板岩起源の変成岩である。

砂岩26 小破片が2点ある。非常によく焼かれており、表面の赤化が顕著である。

石器石材には、珪質頁岩、黒曜石、砂岩、ホルンフェルス、泥岩なども少量ずつ含まれているが、安山岩の使用頻度が高く、7種の母岩に細分した。特に、安山岩41、116が多い。この両者はブロック内の剥片集中部の構成資料であり、削片を比較的多く含んでいるところから、集中部及びその周辺での母岩消費が想定される。なお、本ブロックの構成石材の全ては、第5、第6地点にある他のブロックと母岩の共有関係をもっていない。

d) **小結** 第5地点においては孤立的な位置を占めるブロックで、関連のありそうなブロックは一例も検出されなかった。2種の安山岩の消費地点を核として遺物の分布が認められるが、安山岩を主体とする多種多様な母岩構成を見せ、第24ブロックd項で指摘したのと同様の背景があったものとも見られる。石核には注目すべきものがあり、その概要と解釈はb項で述べたとおりである。



第250図 第5地点石器実測図

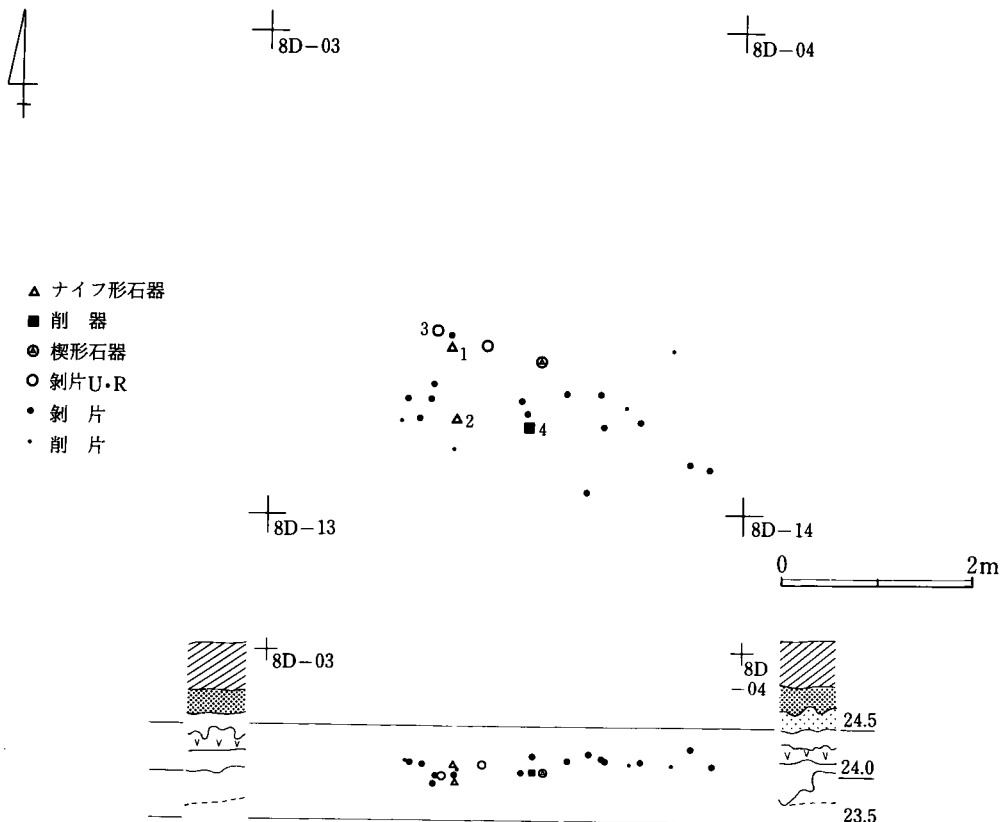
最後に本地点採集の黒曜石12製の石核を示した。厚手の剥片を素材としており、側縁部に沿うように小型貝殻状の剥片を連続的に打ち落している。

第29ブロック (第251・第252図、図版31・69)

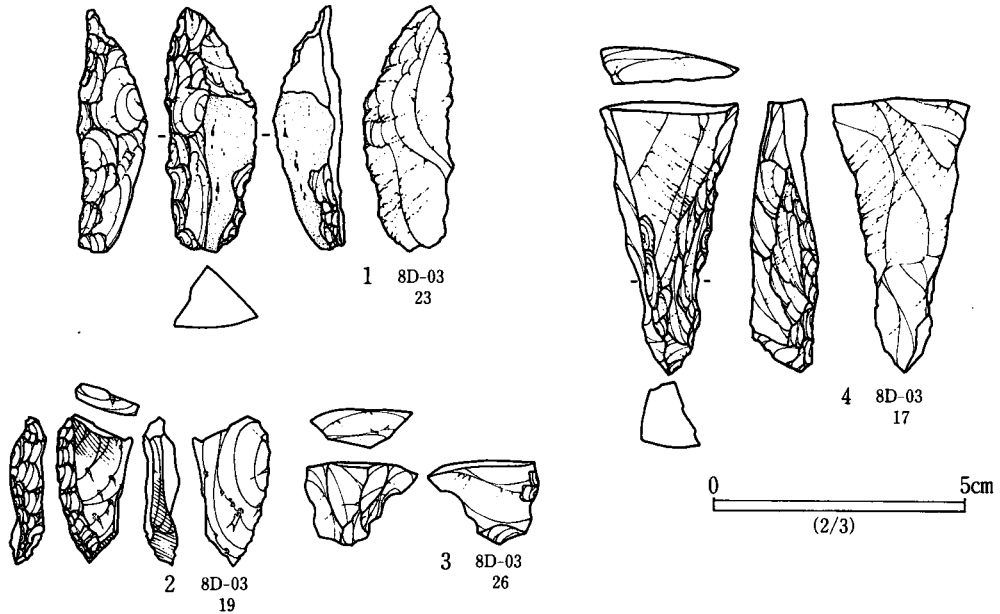
a) 分布状況 第5地点の東側に陸続する第6地点の最も北側に位置している。第26ブロックの東側約10mの地点にあたり、南に第30ブロックが接している。遺物8D-03区の南側の南北2m、東西3.5mの狭い範囲に集中している。産出層準は第251図によると、VI層～VII層に集中するが、遺物台帳の記載と照合してみると、これは実態を反映しておらず、ハードローム層の上部から出るものが多い。第5地点の諸ブロックと、基本的に同一層準と見られる。

b) 出土遺物 25点の遺物がある。内訳は、ナイフ形石器2、削器1、楔形石器1、2次加工のある剥片1、剥片15、削片4であり、構成器種の多いこと、削片が少なく母岩消費の痕跡を欠くことが特徴的である。ナイフ形石器は1が典型例で、2は削器であるかもしれない。3は器種判定が難しいが、やはり削器の可能性がある。4は側削器である。

1は礫面付きの横長剥片を素材とし、打面部を大きく折り取るように2次加工を加えている。この剥離は打面部側と背稜側と両側から施され、横断面が3角形となるように調整している。基部から正面右側にも細調整がある。所謂、角鉾状石器に近い形態と言えよう。2も黒曜石製の横長剥片を素材としている。加工部位も1と同様で、打面部を折り取るように細かい剥離を



第251図 第29ブロック遺物出土状況



第252図 第29ブロック石器実測図

第120表 第29ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	削器	楔形石器	剥片U剥片R	剥片	削片	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
黒曜石 20	1	0	0	0	2	0	3	12.0	5.69	3.5
黒曜石 21	0	0	1	0	0	0	1	4.0	1.23	0.8
安山岩 58	0	0	0	0	0	3	3	12.0	1.20	0.7
安山岩 59	0	0	0	1	6	0	7	28.0	42.43	26.2
安山岩 60	1	1	0	1	6	0	9	36.0	85.09	52.6
チャート 23	0	0	0	0	1	0	1	4.0	25.07	15.5
メノウ 7	0	0	0	0	0	1	1	4.0	1.17	0.7
総数	2	1	1	2	15	4	25	100.0	161.88	100.0
組成比(%)	8.0	4.0	4.0	8.0	60.0	16.0				

重ねている。尾部側は素材剥片の底面で、未加工のまま残されている。

3は破片化していて本来の状況は不明であるが、石核か削器であったと考えられる。4は凹刃側削器であろう。横長の比較的大き目の剥片を素材としている。2次加工は1、2と同様に打面部側を大きく折り取るように施されている。第28ブロックに類例があった(第247図)。楔形石器は図示しなかったが、黒曜石製の小型のものである。剥片剥離については、資料が少なく判然としない。ほとんどが別地点からの搬入品である。

c) 石器石材 黒曜石、安山岩、チャート、メノウの4種の石材を持っているが、このうち、安山岩の量が最も多い。第5地点との共有母岩の有無が気にかかるが、明確に同一母岩と判定される資料を欠いている。第6地点内のブロックとは安山岩59が第30ブロックと母岩を共有す

る他、メノウも第30ブロックと共通している。しかし、近接したブロック内での母岩の共有は、諸種の2次的な変換の介在が予測され、問題は単純でない。また、安山岩を主体とする石材構成の場合、母岩の識別は難しい場合が多いので、以上の結果も一つの見解にすぎない。黒曜石に就いても、同一産地の母岩がまとまって搬入された場合、同様の事情が煮起されよう。

d) 小結 少量の資料しか含んでいないが、ナイフ形石器、削器、楔形石器があり、これに若干の剥片が随伴している。隣接するブロックとの関連の有無は次項で検討したい。

第30ブロック (第242・第243図、第253～第255図・図版31・69)

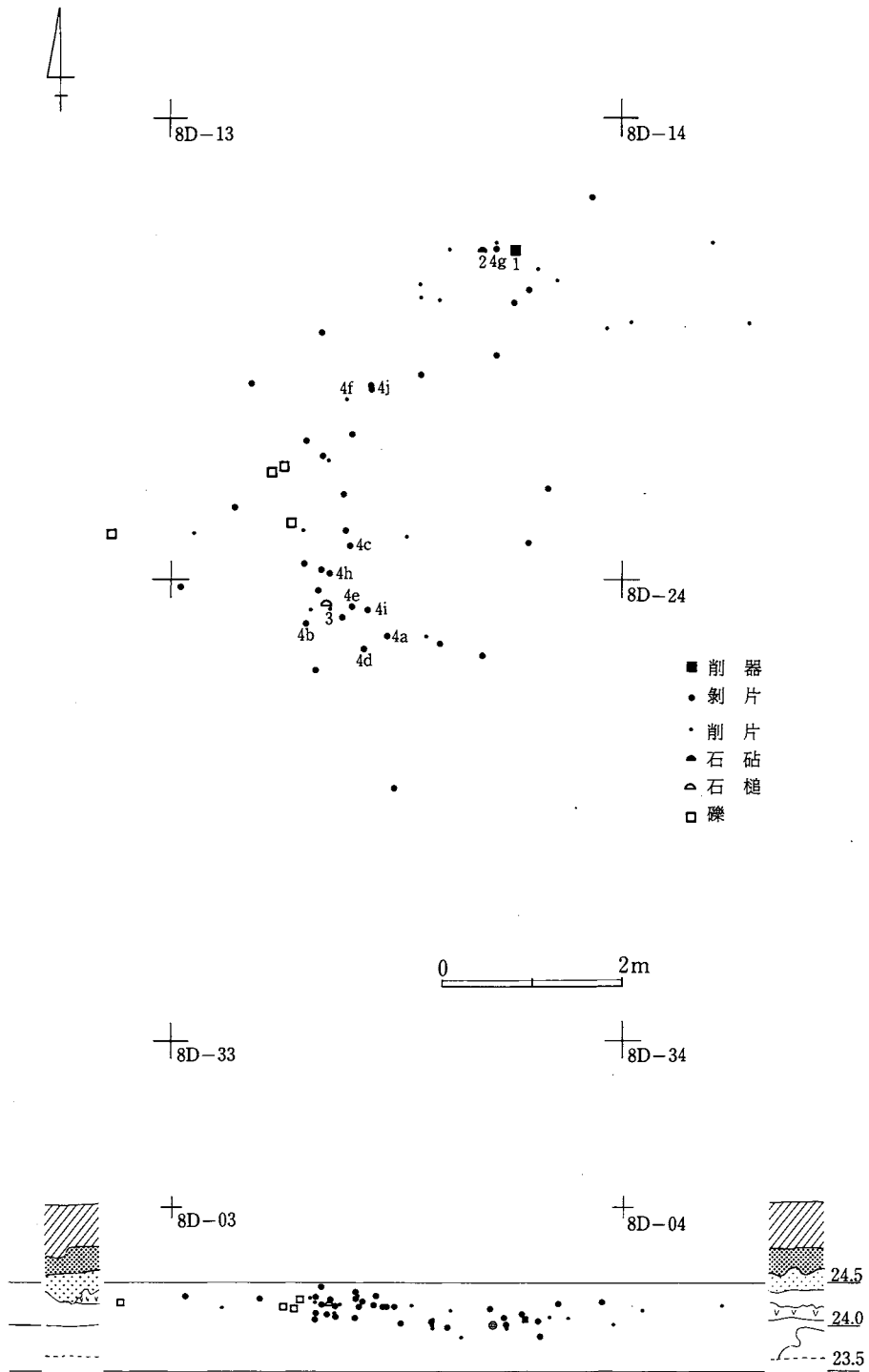
a) 分布状況 第6地点に位置する。第29ブロックのすぐ南にあり、第31ブロックの北側にあたる。8D-13区に分布の中心があるが、一部は南側の8D-14区に及んでいる。分布は、通常の同心円的疎密分布を呈しておらず、東に開口する絞い弧状を描く分布を見せる。この弧状の範囲内に剥片類がばら蒔かれたように散布するが、南側に破碎礫1個体分が飛散し、近接して砂岩製の石槌が1点検出された。この石槌上の周辺には、メノウ製の剥片がまとまっており、そのなかには接合するものも多いので、メノウを素材とする剥片剥離の場がこの石槌を中心とする部分に措定される。産出層準はハードローム層の上部である。

b) 出土遺物 61点の資料を得たが、大半は剥片と削片で、2次加工の認められるものは削器が1点あるにすぎない。他に、使用痕のある石器として、石槌と石砧が1点ずつある。礫も1個体4点の出土に留まった。1は端削器、2は安山岩の部厚い礫面付きの剥片であるが、礫表に被加撃痕があり、石砧とした。3は小型の石槌である。重量は70.0gある。

第242図～第243図にメノウ7の接合状況を示した。メノウ7は、第30ブロックに29点、第26ブロックに4点、第25ブロックに1点ある。このうち、第30ブロックの剥片10点が接合し、これが第25、26ブロックの剥片及び石核6点に接合した。最終的な石核は第26ブロックに遺存している。全般的な流れとして、第30ブロックに分割されたメノウの石塊が持ち込まれ、最少29点

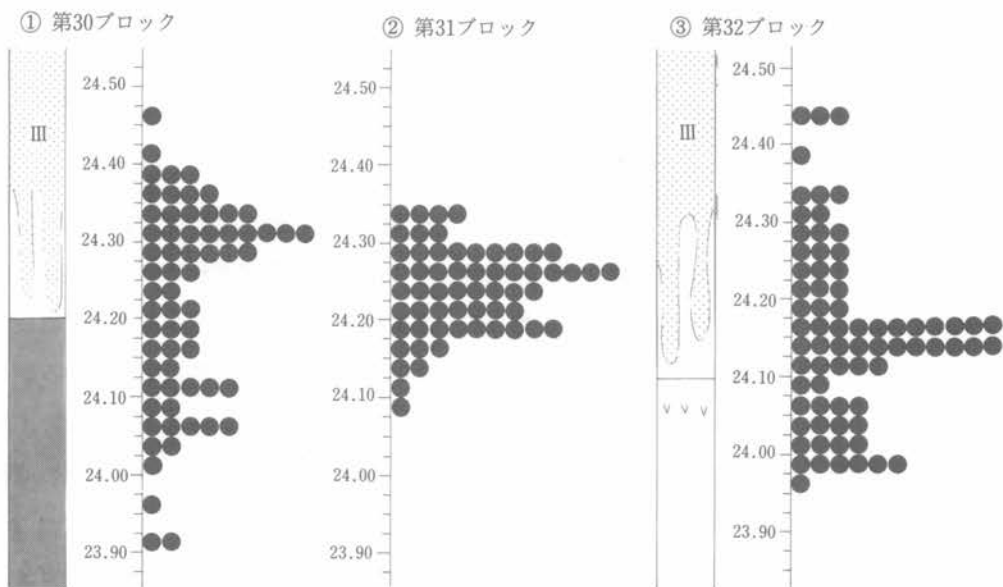
第121表 第30ブロック遺物集計表

母岩番号	削器	剥片	削片	石砧	石槌	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
黒曜石 49	0	1	0	0	0	0	1	1.6	8.77	1.3
黒曜石 50	0	1	0	0	0	0	1	1.6	1.32	0.2
安山岩 59	1	8	12	1	0	0	22	36.1	59.98	8.9
安山岩 60	0	2	0	0	0	0	2	3.3	13.87	2.1
安山岩 63	0	0	1	0	0	0	1	1.6	0.35	0.05
メノウ 7	0	23	6	0	0	0	29	47.5	137.17	20.4
砂岩 30	0	0	0	0	1	0	1	1.6	70.00	10.4
流紋岩 2	0	0	0	0	0	4	4	6.6	379.73	56.6
総数	1	35	19	1	1	4	61	100.0	671.19	100.0
組成比 (%)	1.6	57.4	31.1	1.6	1.6	6.6				



第253図 第30ブロック遺物出土状況

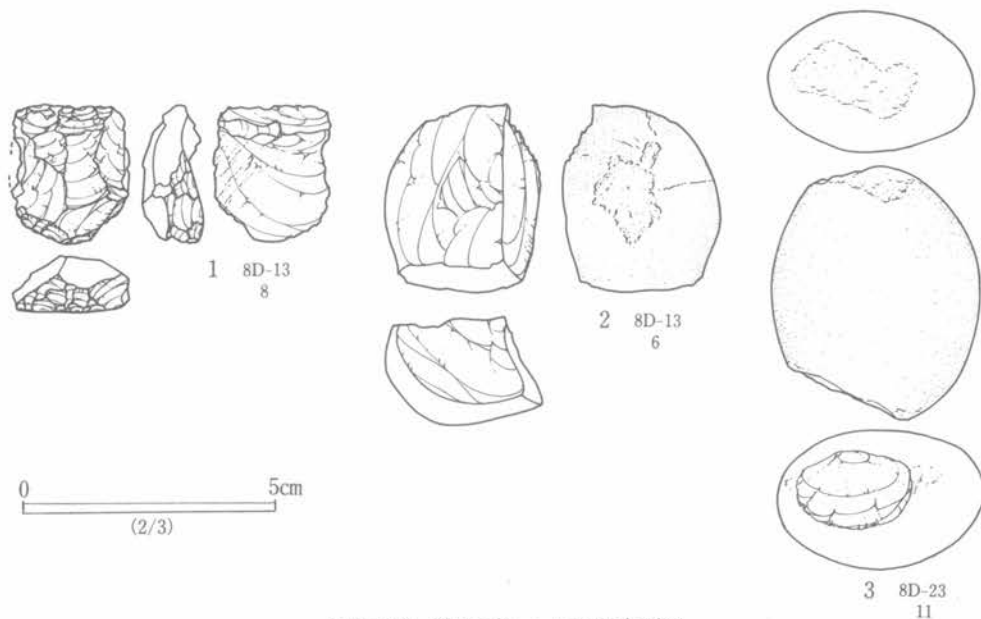
の剥片が落とされ、次いで石核は第26ブロックに移動し、最低4枚の剥片が剥離されたと考えられる。剥片剥離の手法に就いては、石材自体の特殊性があり、不定な碎裂面が発達し、良く



第254図 大林遺跡第30～32ブロック遺物垂直分布

分からないところが多いが、基本的には打面と作業面とを置換する手法が採用されたようである。4 n と見ると、この間の状況をよく看取できよう。

c) 石器石材 黒曜石、安山岩、メノウ、砂岩、流紋岩の5種の母岩から構成されるが、このうち流紋岩は礫片で、石器ではない。比較的大型の礫で、約1/3を遺存しているが、現存長14.6cm、幅8.9cm、4点に破碎していたが全て接合した。非常によく焼けており、煤状の黒色



第255図 第30ブロック石器実測図

附着物が観察される。この附着物は線形にうねるように発達している。多分マンガンなどの土中鉱物の2次的附着であろう。

石器石材としては、安山岩59とメノウ7が卓越している。メノウ7がブロック南側に集中的に分布することは既に述べたが、安山岩59は、第29ブロックから本ブロックを横断するような帯状の分布状態を見せ、結果的にブロック間に分有されるような状態を呈している。しかし、このような理解は正しくないかもしれない。一般論としては、ある限定された時間帯域において、少しずつ地点をずらしながら、そして、地点を一部重複させながら何回かに亘って母岩の消費が行なわれた場合、廃棄された石片の見かけ上のまとまりは、消費回数に応じてひろがり拡大するが、2次的な変換が媒介するため、その消費地点を正確にトレースするような平面分布を示す必然性はないであろう。おそらく、この場合にも、安山岩の消費と、メノウの消費にも若干の時間差があり、複数の消費行為の重複があった可能性が高い。

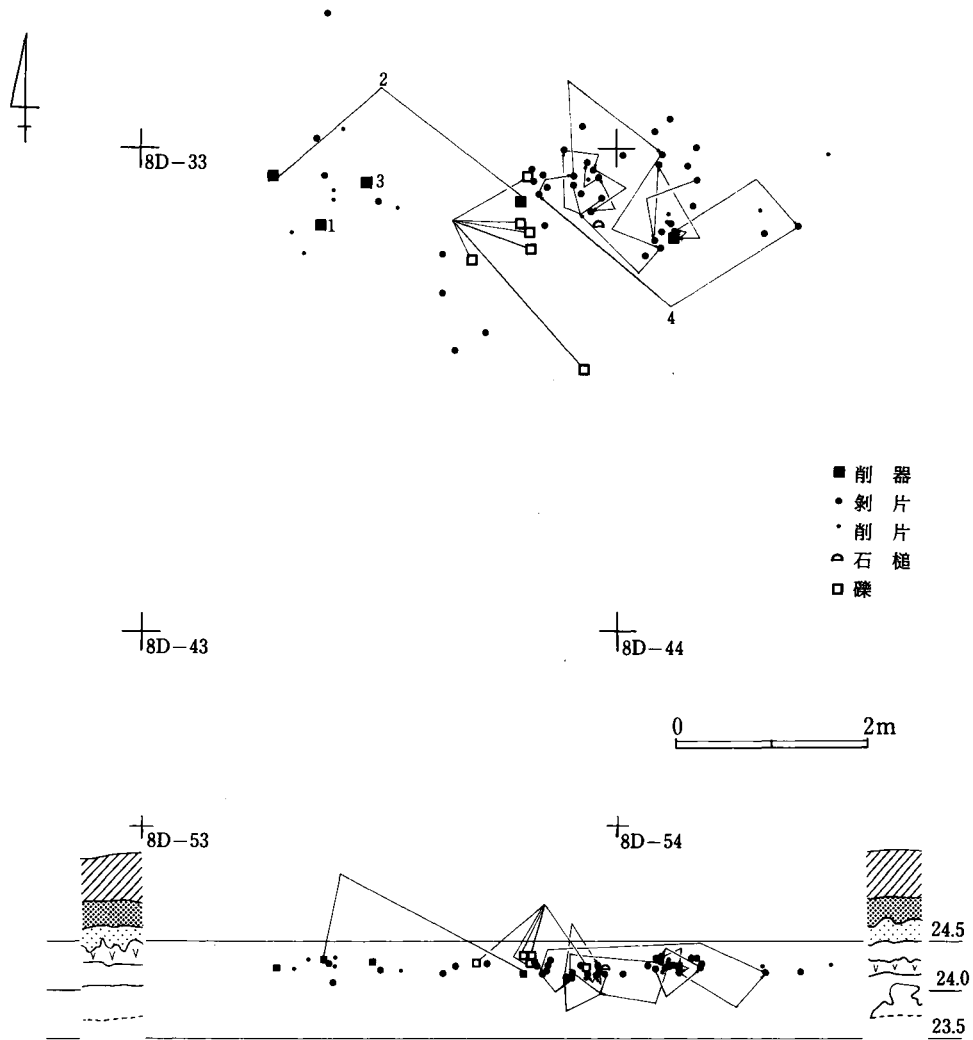
d) 小結 便宜的に第29ブロックと第30ブロックとを分離したが、石材分布を観察すると、この分離が必ずしも適切なものであるかどうか疑問が生じた。ブロックとは、単純に居住の単位である場合や、単なる廃棄空間である場合もあり、その位置づけには諸説があるが、問題は二者択一的な地平にあるのではない。本来的にブロックの認識は分布論の前提条件の1つとしての、方法的な範疇そのものであることに自覚的であらねばならない。

第31ブロック (第256～第258図、図版31・69・70)

a) 分布状況 第6地点、第30ブロックの南側に位置している。第29、第30、第31ブロックと3つのブロックが北から南に並存する状況が看取される。この地点は南側の浅い支谷に突出する舌状各地の脊梁部に相当し、第5地点のブロック群は、この舌状部の西側緩斜面に展開し

第122表 第31ブロック遺物集計表

母岩番号	削器	剝片	削片	石槌	磗	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
安山岩 50	0	1	0	0	0	1	1.8	1.20	0.1
安山岩 55	1(2)	3	1	0	0	5(6)	8.8	90.69	6.7
安山岩 56	2	1	0	0	0	3	5.3	18.49	1.4
安山岩 57	1	31	9	0	0	41	71.9	310.25	22.7
チャート 24	0	0	2	0	0	2	3.5	1.03	0.08
チャート 30	0	0	1	0	0	1	1.8	0.24	0.02
メノウ 6	0	1	0	0	0	1	1.8	4.59	0.3
メノウ 7	0	1	0	0	0	1	1.8	0.47	0.03
砂岩 32	0	0	0	1	0	1	1.8	292.90	21.5
流紋岩 3	0	0	0	0	1(6)	1(6)	1.8	645.41	47.3
総数	4(5)	38	13	1	1(6)	57(63)	100.0	1,365.27	100.0
組成比 (%)	7.0	66.7	22.8	1.8	1.8				



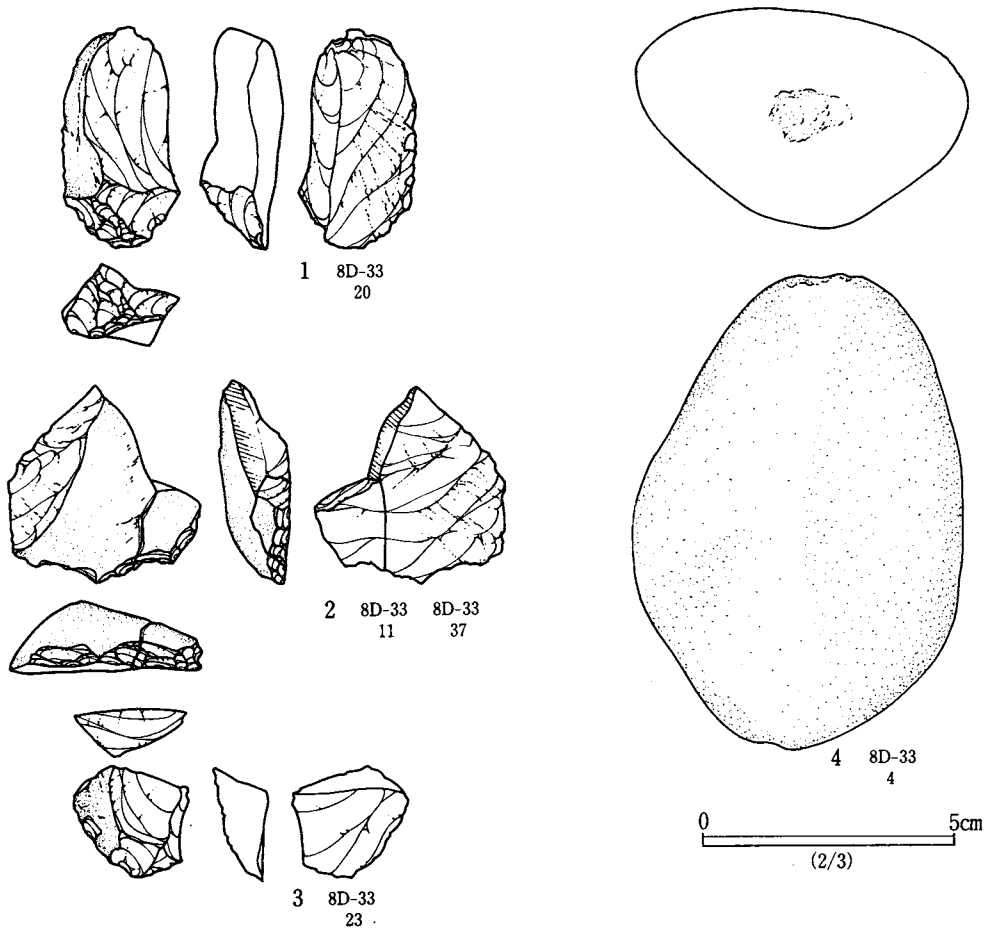
第256図 第31ブロック遺物出土状況

ていることになる。

石器の集中しているのは、8D-33区から8D-34区にかけての、南北2.5m、東西6mの東西に長い範囲である。分布上指摘したいのは、ブロックの西側に削器が、中央に礫片が、東側に安山岩の剥片類が偏在的に分布することである。東側の剥片集中部は安山岩57の剥片によって構成され、多数の接合資料が含まれている。砂岩製の石槌はこの剥片の集中部分のすぐ西側に接して遺存していた。

各遺物の出土レベルは比較的上下の変動が少なくほぼ水平に埋没している。遺物の軽重による上下差も認められない。ハードローム層の上部が産出層準であろう。

b) 出土遺物 63点の遺物がある。礫片が1個体分6点あるので、石器は57点ということになる。その内容は、削器が4個体分5点と卓越するが、他は削片類が56点を占めている。特に



第257図 第31ブロック石器実測図(1)

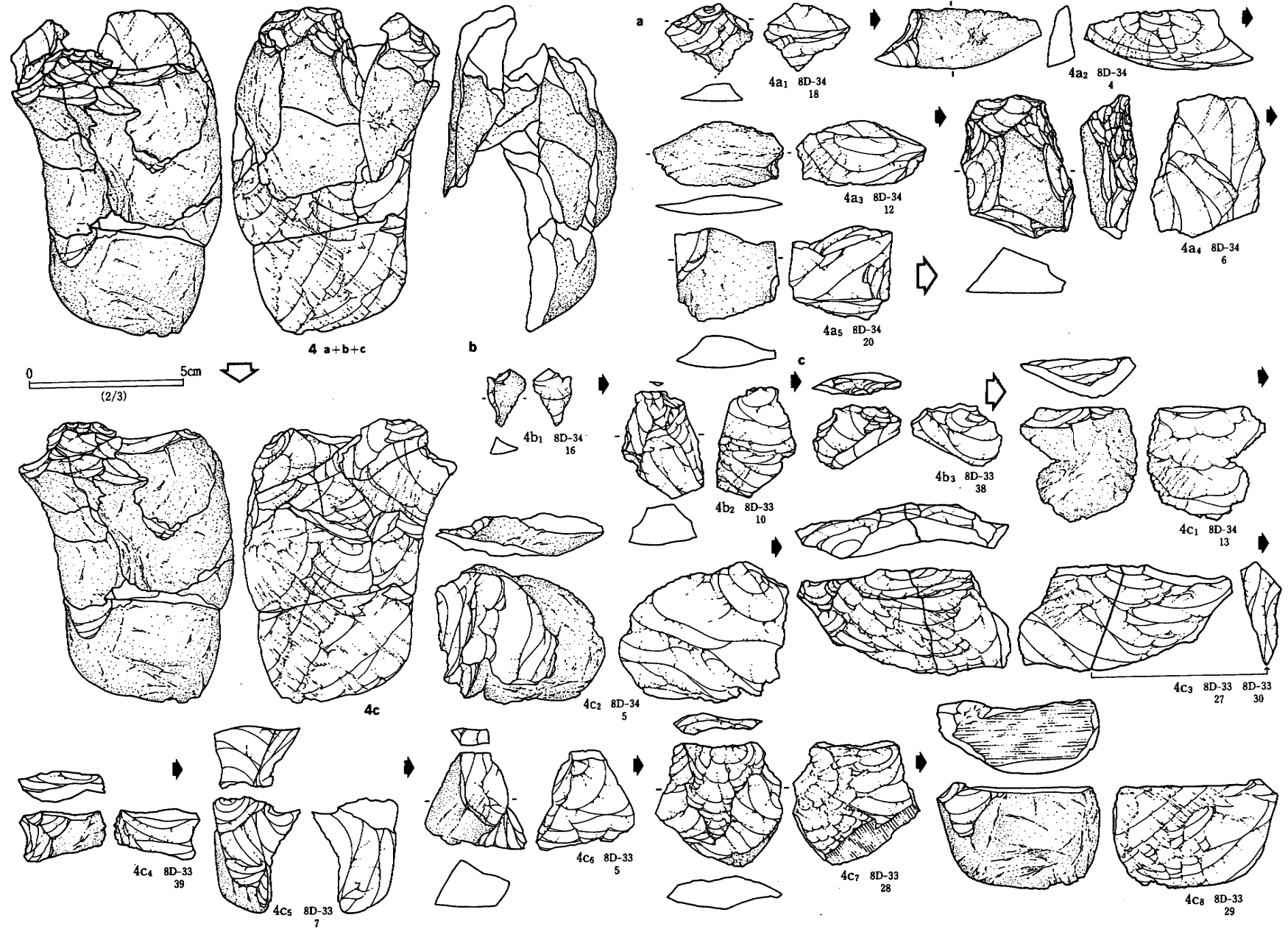
安山岩57の母岩別資料は多く、40点ほどある。他に安山岩の石槌が1点あり、安山岩57の消費と関連しよう。削器には端削器(1)もあるが、側削器が多い(2、3、4 a4)。4は石槌で、細長い円盤の一端に加撃痕がある。

第258図に安山岩57の接合状況を示した。17枚の剥片及び碎片が接合している。剥離工程は大きく3つの段階に分けて観察することができる。

段階1 原石の側縁から長軸と直交するように大型の剥片が剥離される(4 a1～4 a5)。この剥片は一の石核のようにトリミングされて、削器(4 a4)を生じている。おそらくこの剥片の剥離によって生じた剥離面を打面として、段階2の打面を構成する剥離面が形成されたと考えられる。

段階2 前段階に形成された剥離面を打面として剥片(4 b1～4 b3)が落とされる。

段階3 石核は反転され、前段階の作業面が打面に転化され、4 c1～4 c8の剥片が剥離される。この剥離によって石核は完全に消耗する。



第258図 第31ブロック石器実測図(2)

以上の如く、この母岩の消費は典型的な打面と作業面の反転交代手法によって行われている。作出される剥片は矩形、若しくは横長のもので、左右に細長い平坦打面をもち、剝離角の大きなものが多い。

c) 石器石材 安山岩、チャート、メノウが剥片素材に、砂岩が石槌の素材に選ばれている。流紋岩の礫片6点は全て接合し、完形礫の2/3近くまで復原された。全体に赤化し、アバタ状に礫表の剝落する部分がある。また、黒色帯状にタール状の附着物がある。ローム層中のマンガ、鉄分等の凝着部であるかもしれない。

剥片のうち安山岩57が大半を占めることは既に述べたが、残余の母岩はいずれも少量ずつの出土である。各母岩は独自性が強く、他のブロックと連鎖するものは殆どないが、僅かにメノウ1点がメノウ7に帰属するかもしれないが、確定的とは言えない。

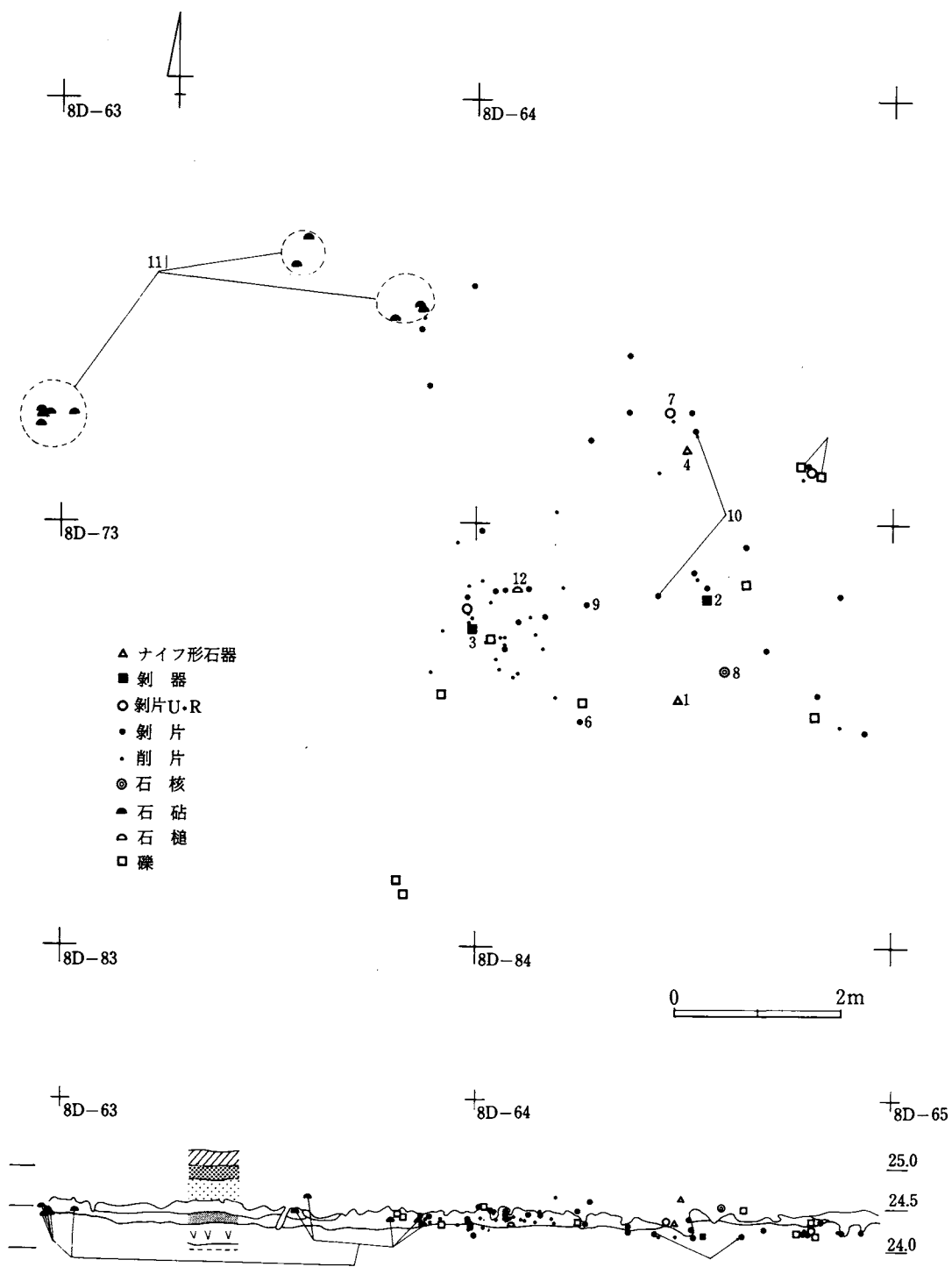
d) 小結 ブロック内で安山岩57の消費が行われているため資料数は62点と、比較的多い部類に属するが、それを除くと、石器16点、礫6点という構成になる。ブロックの石器分布を見ると、安山岩の消費地点と、その他の石器の分布域とは明らかに区別され、別な集中域の複合とも疑われるが、一応一括しておきたい。

第32ブロック (第260・第261図、図版31・71)

a) 分布状況 第6地点の南側、第31ブロックの南方約15mに位置している。遺物のひろがり、東西10m、南北6mという広域に亘るが、3～4箇所のクラスターに分離される。ひとつは、8D-63区の破碎した敲石を主体とするクラスターである。8D-74ポイント南側には

第123表 第32ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	削器	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	石砧	石槌	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
黒曜石 16	2	1	1	7	21	0	0	0	0	32	37.6	26.85	1.9
黒曜石 17	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1.2	1.71	0.1
黒曜石 18	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1.2	7.06	0.5
黒曜石 不明	0	0	0	0	4	0	0	0	0	4	4.7	0.21	0.01
安山岩 53	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2	2.4	54.84	3.8
安山岩 54	0	1	2	15	3	0	0	0	0	21	24.7	245.97	17.3
チャート 26	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3	3.5	8.98	0.6
石質 不明	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	2.4	0.28	0.02
砂岩 33	0	0	0	0	0	0	100	0	0	100	1.2	150.84	10.6
泥岩 6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1.2	50.57	3.5
安山岩 61	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.2	219.80	15.4
安山岩 62	0	0	0	0	0	0	0	0	5	5	5.9	212.83	14.9
安山岩 64	0	0	0	0	0	0	0	0	5	5	5.9	160.96	11.3
流紋岩 4	0	0	0	0	0	0	0	0	6	6	7.1	284.59	20.0
総数	2	2	3	28	30	1	100	1	17	85(94)	100.0	1,425.49	100.0
組成比 (%)	2.4	2.4	3.5	32.9	35.3	1.2	1.2	1.2	20				



第259図 第32ブロック遺物出土状況

狭い範囲に黒曜石の剝片が集中し、別なクラスターを形成している。これには少量の破碎礫破片が伴っている。もうひとつは、ブロック東側の東西2.5m、南北5mの細長い部分で、ここに

は安山岩が多く分布している。やはり少量の礫片を散在している。従って、敲石のクラスターは別にして、黒曜石のクラスターと安山岩のクラスターとが、境を接するように東西に並存する状況となっている。前者は剥片の様相と収約的分布状況とから、ほぼ確実に母岩の消費空間であると推定することができる。これに対して、後者は、比較的多くの同一母岩が看取されるものの、細かい調整剥片を欠き、均等な分散を呈し、分布域内での接合が1例しか認められないなど、剥離空間としての条件に欠けている。

産出層準はハードローム層内であるが、ソフトローム層とVI層との間のローム層の発達が悪く、正確な比定は困難である。

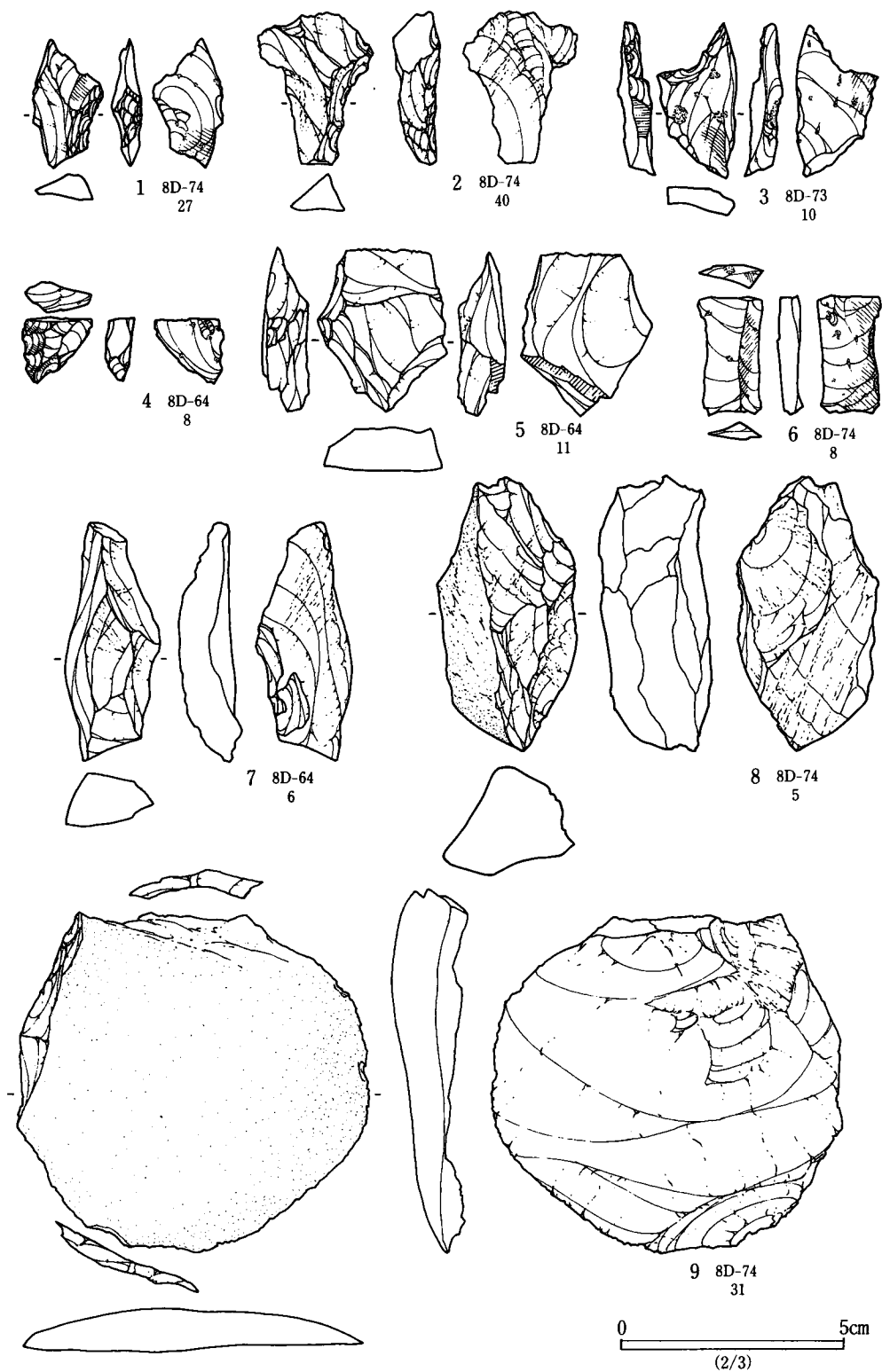
b) 出土遺物 94点あり、比較的充実した石器構成を見せている。内訳は、ナイフ形石器2点、削器2点、剥片31点(加工痕のあるもの3点を含む)、削片30点、石核1点、敲石1個体10点、礫5個体分18点となり、本地点としては多種の石器が含まれている。以下、図に従って観察したい。

1は貝殻状の小型の剥片を利用した切出形石器。2次加工は打面部側のみで、ノッチ状に打面を折り取っている。4もナイフ形石器の破片かもしれない。やはり打面側に細かい鋸歯状の2次加工がある。2は凹削器としたが、2次加工の状態は1に等しいのでナイフ形石器の可能性もあるが、刃部の上面観が不正にねじれているので、第29ブロックの例(第252図4)に従って側削器に含めた。3も同種の例であろうか。剥片一側縁にノッチ状の調整が加えられている。5、7は2次加工のある剥片としたが、機能的には削器に含められるかもしれない。

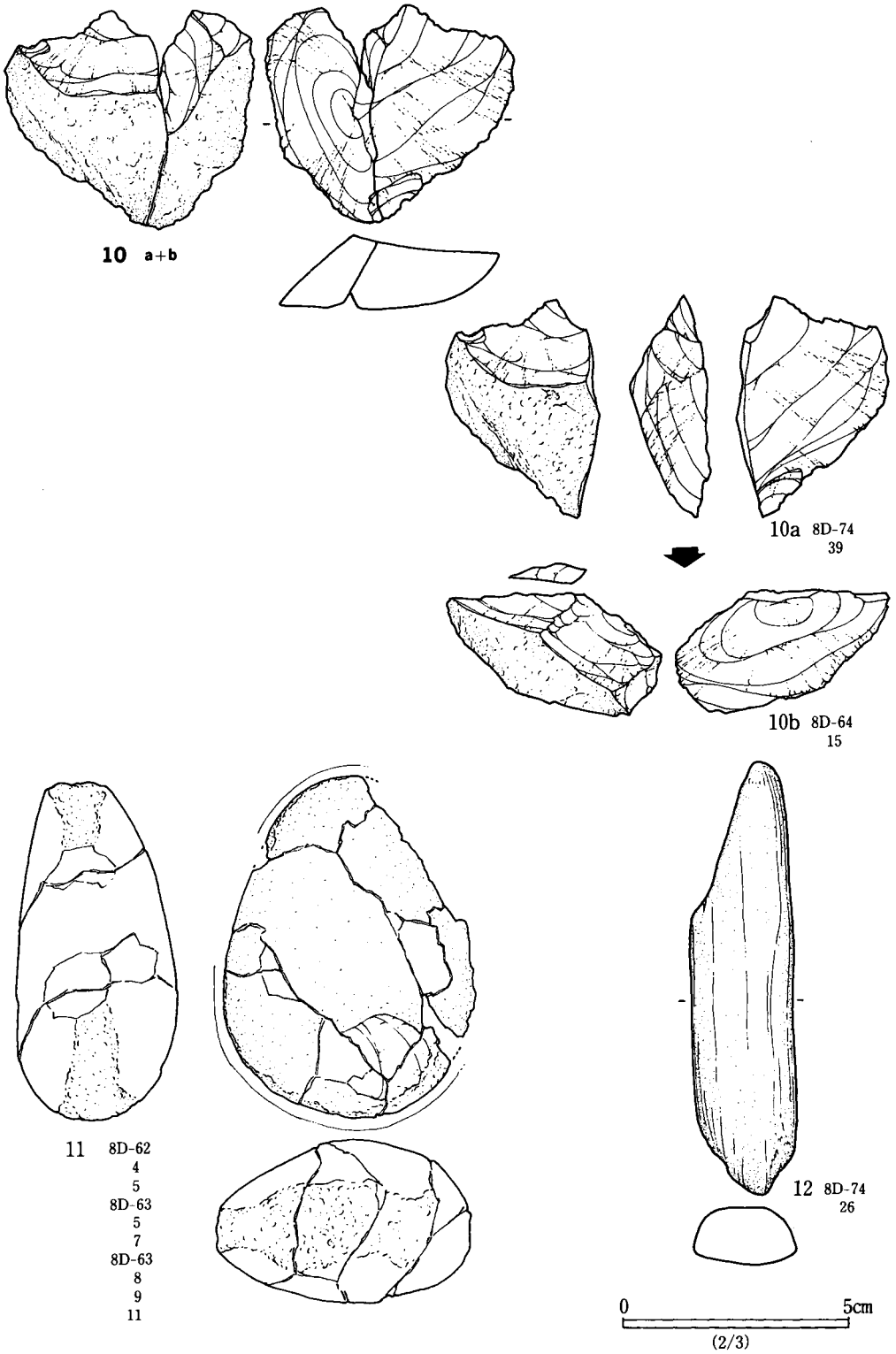
6~10に剥片と石核を示した。剥片には6のように整った石刃状のものは例外で、不整な横長のものが大半である。剥片剥離手法についてはよく分からないところが多い。特に黒曜石の場合は、石核が遺存せず、剥片も小型のものばかりで、詳細は全く不明である。安山岩では、石核8が剥片素材の打面一作業面交代型の盤状のものであり、10も同趣の例と見られる。剥片の腹面を打面とし、横に長い礫面付きの剥片を剥離している(10a+b)。その後、この石核は2分され、そのうち一方の剥片状の石核からは、更に小型の貝殻状剥片が落とされている。(10b)。

11は砂岩の卵型の円礫の周囲の一部に帯状敲打痕が認められる。第5地点第23ブロックに類例がある。なお、この資料は10点に破砕しているが、全て接合した。接合状況を見ると、器体の上部と下部とが約5mの距離をおいて接合する状況を示している。また、全体が僅かに赤化し、煤状の附着物が各処に付着し、確実に焼かれている。ところが、分布地点を異にする破片間の接合面を境として、煤状附着物の吸着状況に大きな差があり、破砕後も南側に分布する5点が焼成されたことが窺われる。12は棒状の礫で、図では分りにくい、下部右側に弱い加撃痕があり、石槌と考えられる。

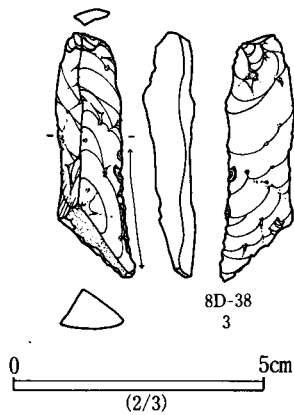
c) 石器石材 黒曜石と安山岩を主体としている。他にチャート、砂岩、泥岩、流紋岩が1個体ずつあるが、これらの石材は大きく石器用のものと、礫とに区分される。



第260図 第32ブロック石器実測図(1)



第261図 第32ブロック石器実測図(2)



第262図 第6地点石器実測図

石器素材として識別されるのは、黒曜石3種、安山岩2種、チャート、砂岩、泥岩各1種、それに石質の分からない同一母岩資料が2点ある。このうち、黒曜石16と安山岩54が多用されていること、そして分布域が異なることは既に触れた。黒曜石16は灰褐色の細目の縞が密接して入る特徴的な黒曜石で、細かい剥片とナイフ形石器、削器などを含み、剥片剥離から製品化に到る一連の工作がブロック内で継起したものと見られるが、これと同一母岩と見られるものが第5地点の第26ブロックに存在した。第26ブロックでは、剥片8点と削片10点の計18点の母岩別資料がある。ブロック間での接合例を欠き、確実に同一の母岩と断定することはできないが、たいへん特徴のある石材であるので、同一母岩となる確率は高いと考えられる。しかし、ブロック間での移動の過程は分からない。第262図に黒曜石16の縦長剥片を補足した。第6地点からの検出遺物であるが、正確な出土地点は不明である。対向打面を持つ石核から得られており、背面の右側縁に使用痕とどめる。

この他には確実に別ブロックと共通する母岩はないが、安山岩62は、第25ブロックの安山岩37と酷似しており、あるいは同一母岩とも見られる。

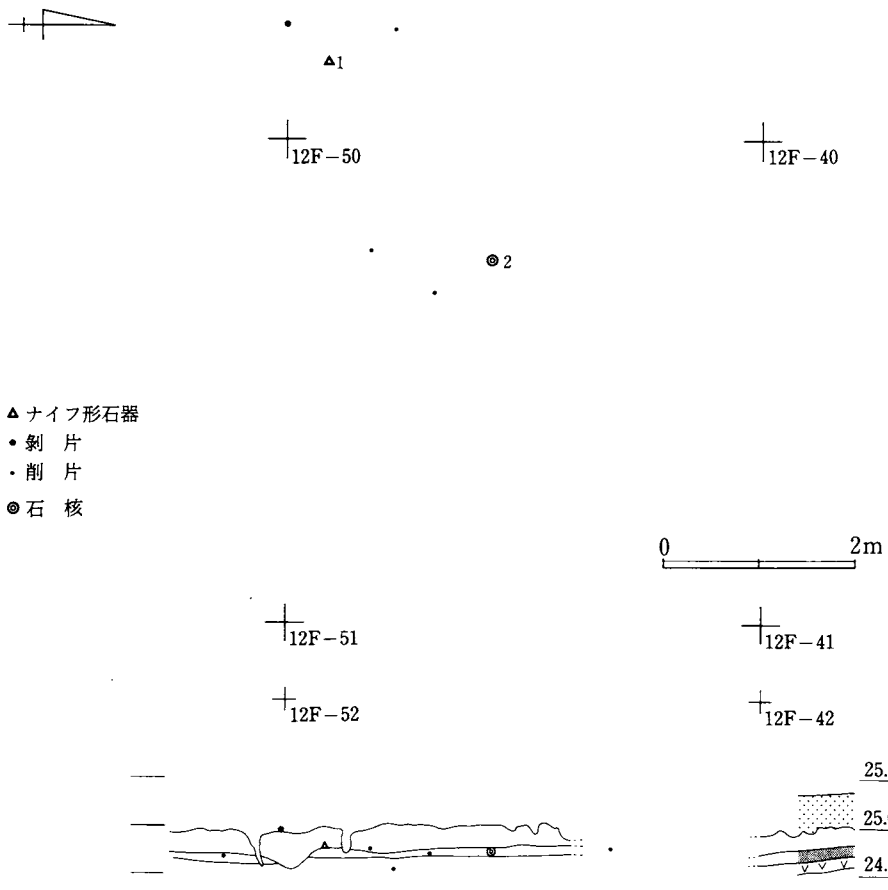
礫片は4個体に分類した。安山岩61は大型礫破片で遺存度1/4、被焼成。安山岩62は5点に破砕しているが全て接合し、遺存度1/3、被焼成。安山岩64も5点に破砕し、2点が接合、小破片で遺存度は不明、被焼成。流紋岩は1個体で、6点の小破片が全て接合した。大型礫破片で、遺存度は1/6以下であろう。被焼成礫。

d) 小結 やや広範囲に及ぶ遺物の飛散が認められるが、敲石の廃棄に伴うクラスター、黒曜石16の剥片剥離、2次加工によるクラスター、安山岩54を中心とする安山岩製の剥片の分布するクラスターという異相3者の集合によって構成されるブロックである。この3つのクラスターが同時に形成されたとする根拠は何もない。しかし、逆に時間差をもつとする根拠もなく、実態把握が難しい。

第33ブロック (第263・第264図、図版71)

a) 分布状況 第15地点の南側に第IV文化層に帰属するブロックが2箇所検出された。東側のものを第32ブロック、西側を第33ブロックとした。

第32ブロックは12E-49区から12F-40区にまたがるが、9点の遺物がまばらに散布している小規模なものである。北側に第20ブロックに帰属する礫片が重複分布するが、出土レベルに差があり、両者の区分は容易であった。また、本地点の周辺では第1黒色帯(V層)が確認



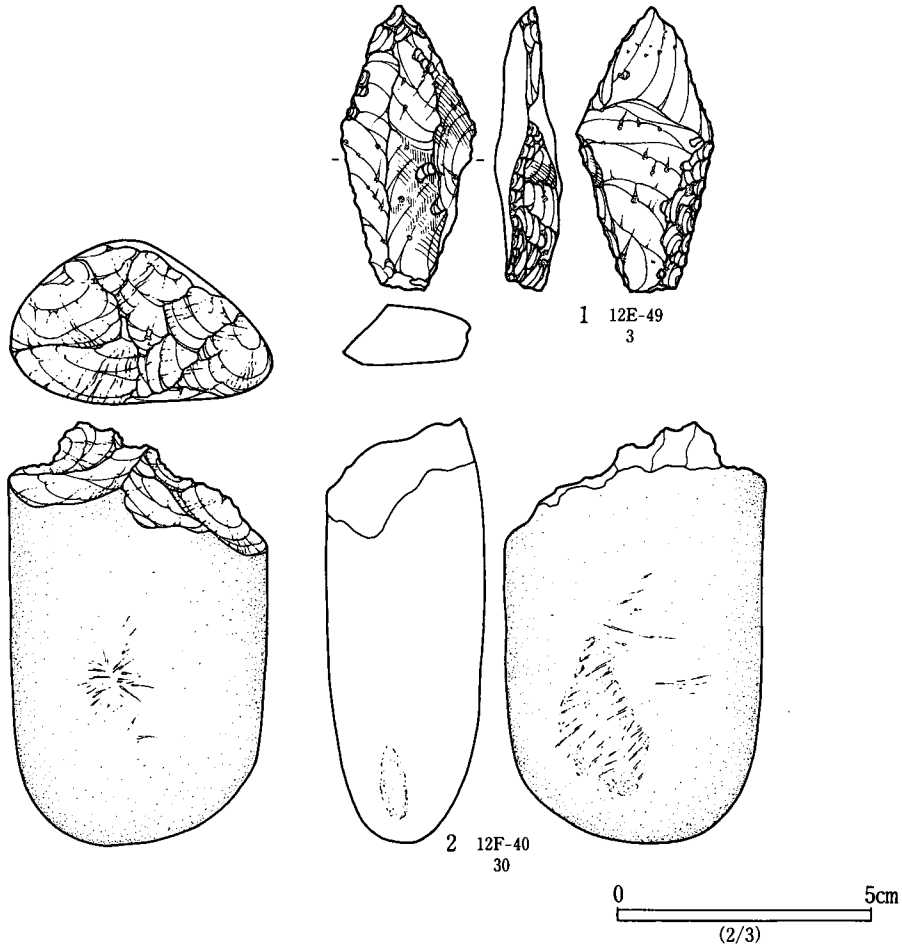
第263図 第33ブロック遺物出土状況

第124表 第33ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	剥片	削片	石核	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
黒曜石 36	1	1	4	0	6	66.7	18.51	8.7
黒曜石 37	0	1	0	0	1	11.1	0.08	0.04
黒曜石 不明	0	0	1	0	1	11.1	0.01	0.01
砂岩 43	0	0	0	1	1	11.1	193.80	91.2
総数	1	2	5	1	9	100.0	212.40	100.0
組成比 (%)	11.1	22.2	55.6	11.1				

できるので、本ブロックの産出層準をIV層下部と推定することが可能であった。

b) 出土遺物 ナイフ形石器が1点、剥片2点、削片5点、一種の石核が1点ある。ナイフ形石器(1)は基部に打面を残す比較的大型のもので、基部両側に2次加工がある。背面右側縁の剥離は典型的なブランティングであるが、これと錯向的に加えられている腹面右側縁のものは



第264図 第33ブロック石器実測図

角度が浅い。また、この石器の背面基部寄りの部分には擦痕状に器面の痕れた部分が観察される。これは器面の凹凸の凸面にのみ磨り硝子状に面的なひろがりを見せるが、腹面側には認められない。

2は細長い円礫の一端に剝離面のあるもので、石核とも打割器とも考えられる。礫の表裏と側面の一部に加撃、あるいは被加撃痕があり、数種の機能を一手に引き受けていた多機能型の石器であると考えられる。

c) 石器石材 ブロックの規模を反映して少数の母岩から構成されている。黒曜石36が剝片とナイフ形石器の素材であり、石核は砂岩を使っている。

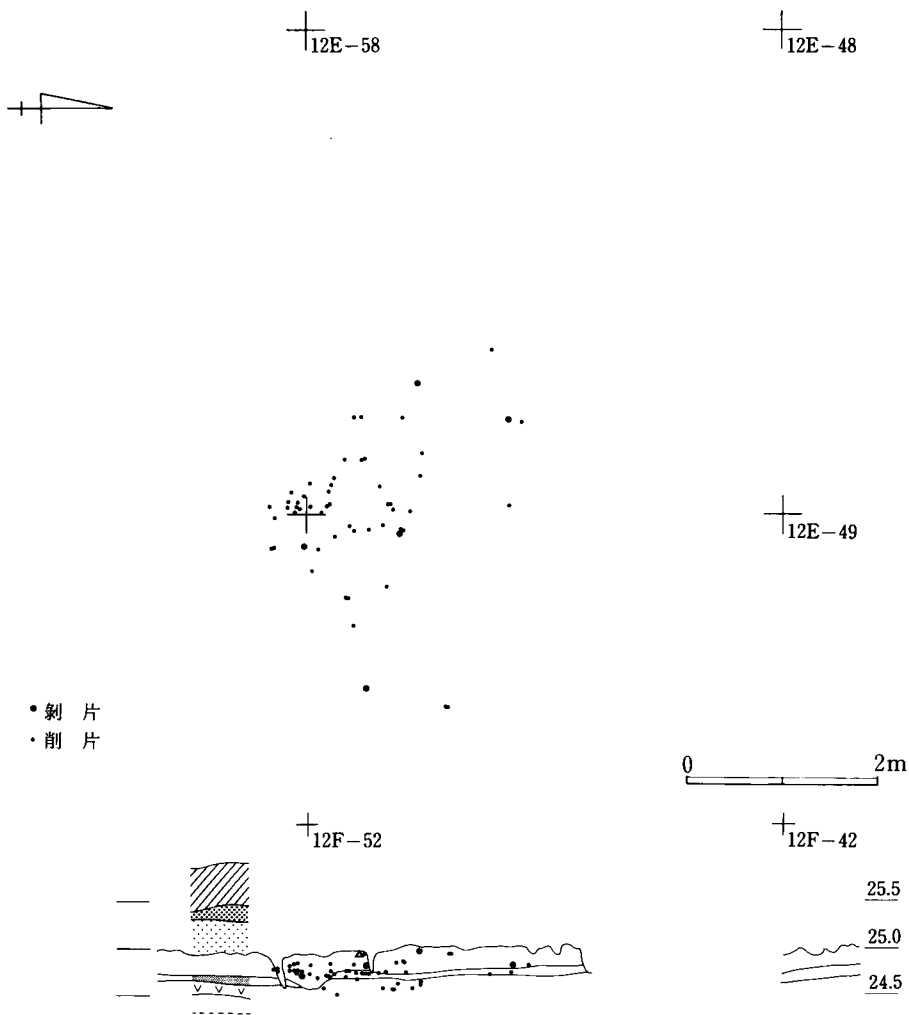
d) 小結 ナイフ形石器と石核を除くと微量の剝片類があるにすぎないが、ここで黒曜石36とした母岩は、隣接する第33ブロックに多くあり、両ブロック間には緊密な関連があると考えられる。

第34ブロック (第265図)

a) 分布状況 第33ブロックのすぐ西側、12E-59ポイント東北部の径1.5m位の狭い範囲に大半の遺物が集中している。この北側にも、少数の飛散遺物が認められるが、その数は少ない。IV層下部を産出層準としている。

b) 出土遺物 57点の資料の全てが同一母岩（黒曜石36）の剥片類である。そのうちとくに削片が卓越している。細かい破片が多いので石の割り方は良く分からない。削片の中にナイフ形石器のブランディングによって生じるものがあり、また、これと同一の母岩から作られたナイフ形石器の完成品が第32ブロックにあるので、本ブロックがナイフ形石器の製作地点として機能していた蓋然性が高い。

c) 石器石材 黒曜石36の単一母岩によって構成されている。



第265図 第34ブロック遺物出土状況

第125表 第34ブロック遺物集計表

母岩番号	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
黒曜石 36	6	51	57	100.0	16.18	100.0
総数	6	51	57	100.0	16.18	100.0
組成比 (%)	10.5	89.5				

d) 小結 単一母岩の消費、具体的にはナイフ形石器の製作に関与するブロックである。極めて短時間に形成されたものと見られる。製品の一部が隣接するブロックにあるが、彼地には、同時に石器工作具とも推定される円礫があり、共に本ブロックから移動したのであろう。

第35ブロック (第266・第267図、図版33・34・71)

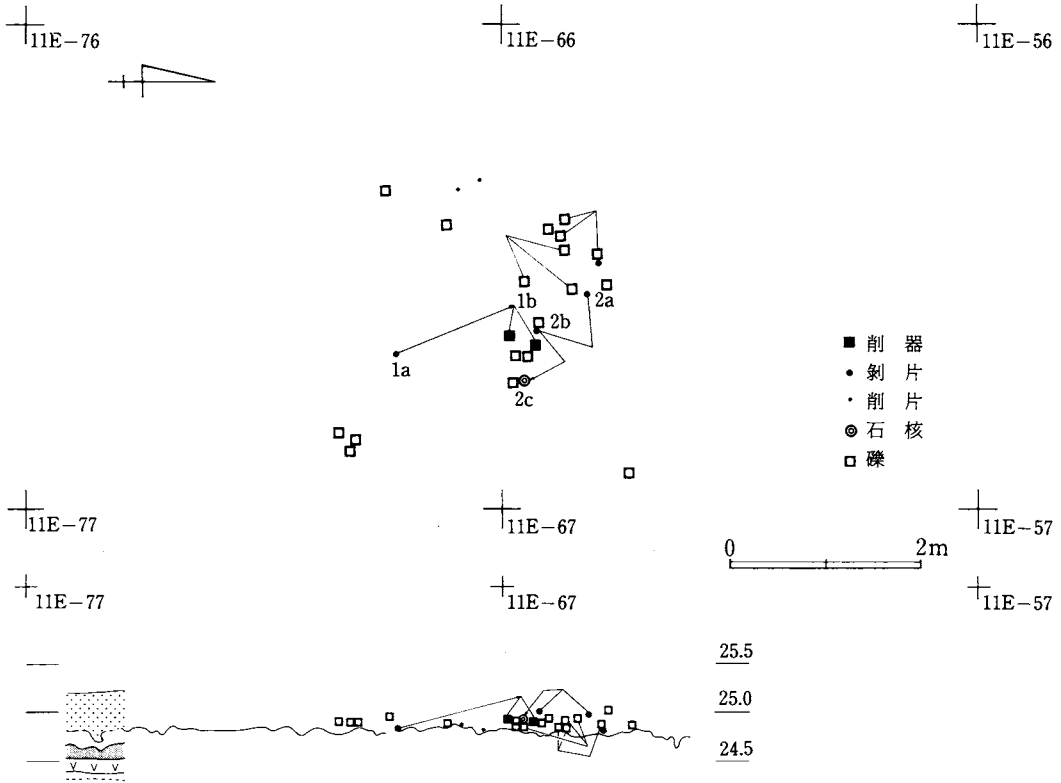
a) 分布状況 第16地点の北側にある。11E-56区から11E-66区にかけ、約3m四方の範囲から破碎礫を中心とする遺物が検出された。礫以外の遺物はブロックの中心部に点在している。産出層準はハードローム層の上面付近で、第IV文化層のなかでは新しい部分に属する可能性がある。

b) 出土遺物 礫片が9個体18点あり、礫ブロックとしての性格が濃いが、削器が2点1個体分、剥片5点、削片2点、石核1点を含まれている。本項では石器のみを対象とする。

1は側削器1bと調整剥片1aの接合状況を示している。1を見ると本来は凹状の刃部が作出されているが、1aの剝離により直線的な刃部に変更された状況が窺われる。2では、石核

第126表 第35ブロック遺物集計表

母岩番号	削器	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
砂岩 48	0	1	0	0	0	1	3.7	6.30	1.2
安山岩 89	1(2)	1	0	0	0	2(3)	7.4	16.04	3.1
安山岩 104	0	2	0	1	0	3	11.1	57.43	11.0
珪質頁岩 96	0	0	2	0	0	2	7.4	1.39	0.3
凝灰岩 47	0	1	0	0	0	1	3.7	1.43	0.03
砂岩 22	0	0	0	0	3	3	11.1	113.18	21.5
砂岩 50	0	0	0	0	4	4	14.8	74.38	14.2
砂岩 51	0	0	0	0	2	2	7.4	24.51	4.7
砂岩 53	0	0	0	0	1	1	3.7	28.97	5.5
砂岩 54	0	0	0	0	1	1	3.7	38.50	7.3
砂岩 55	0	0	0	0	1	1	3.7	27.42	5.2
流紋岩 12	0	0	0	0	4	4	14.8	38.92	7.4
流紋岩 13	0	0	0	0	1	1	3.7	96.50	18.4
チャート 44	0	0	0	0	1	1	3.7	0.38	0.07
総数	1(2)	5	2	1	18	27(28)	100.0	525.35	100.0
組成比 (%)	3.7	18.5	7.4	3.7	66.7				



第266図 第35ブロック遺物出土状況

2cに剥片2点(2a、2b)が接合している。縦、横と打面は移動する。これ以外は不整、小型の剥片が少量あるのみで、石器の数は極めて少ない。

c) 石器石材 ここでは礫片については記載したい。

砂岩22 3点に割れているが、各々は鶏卵大をしている。接合しない。比較的細粒の砂岩で泥岩に近い。遺存度は3点合わせても1/3。軽度の赤変がある。

砂岩50 4点あり、そのうち3点が接合する。いずれも細片で、接合したのものも1/10以下の遺存度であろう。礫表面のみ赤褐色に変色している。

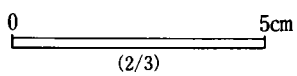
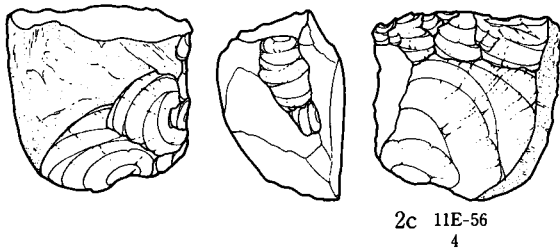
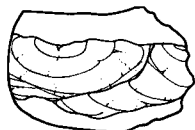
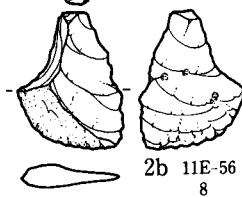
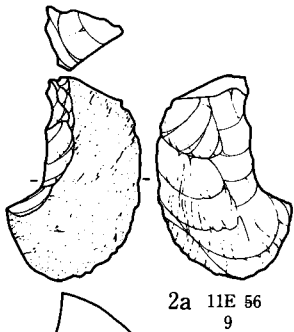
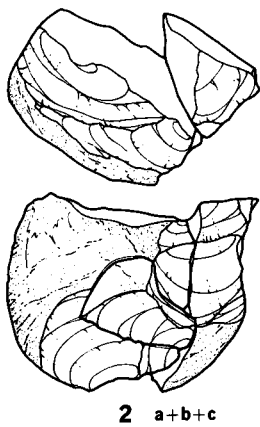
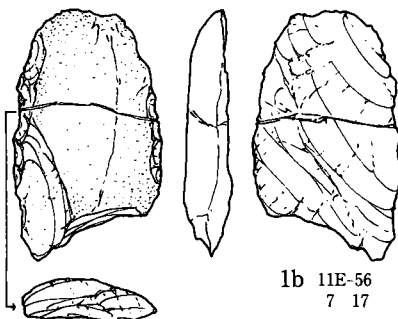
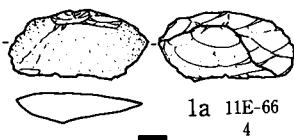
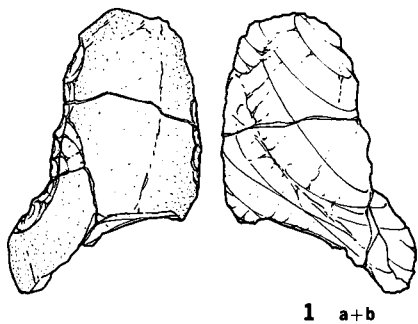
砂岩51 細かい細片が2点あるが接合しない。礫表面は赤褐色をしているが、破砕面には変色が認められない。

砂岩53 これも破砕片で、礫面に近い部分であるが、礫表面は殆んど剥落して一部を残すにすぎない。暗赤色に変色がすすんでいる。

砂岩54 小片であるが、本来小型礫であるため、遺存度は1/2である。全面が赤化している。

砂岩55 細片で遺存度も分からない。礫表面、破砕面共に暗赤色化している。

流紋岩12 4点の破片があり、3点が接合する。接合後の遺存度は1/3である。赤色が顕著である。



第267図 第35ブロック石器実測図

流紋岩13 最も大きな礫片 (50mm×40mm×35mm) で、凝灰岩質である。比較的大型の礫の破片であるため遺存度の見積もりが困難である。礫面は淡紅色に転移している。破碎面は灰色で色調の変化は認められない。

チャート44 受熱によってはじけた細片と見られる。僅かに赤色化している。

d)小結 礫片を主に、石器を従とするブロックである。石器は総数に比して接合例が多く、削器の製作過程や、打面転移による剝片のつくり方などを学ぶことができた。礫はいずれも破片で、しかも細かく砕けたものが多く、既に再三言及した下総台地における礫ブロックの特徴と良く合致している。

第36ブロック (第268・第269図、図版71)

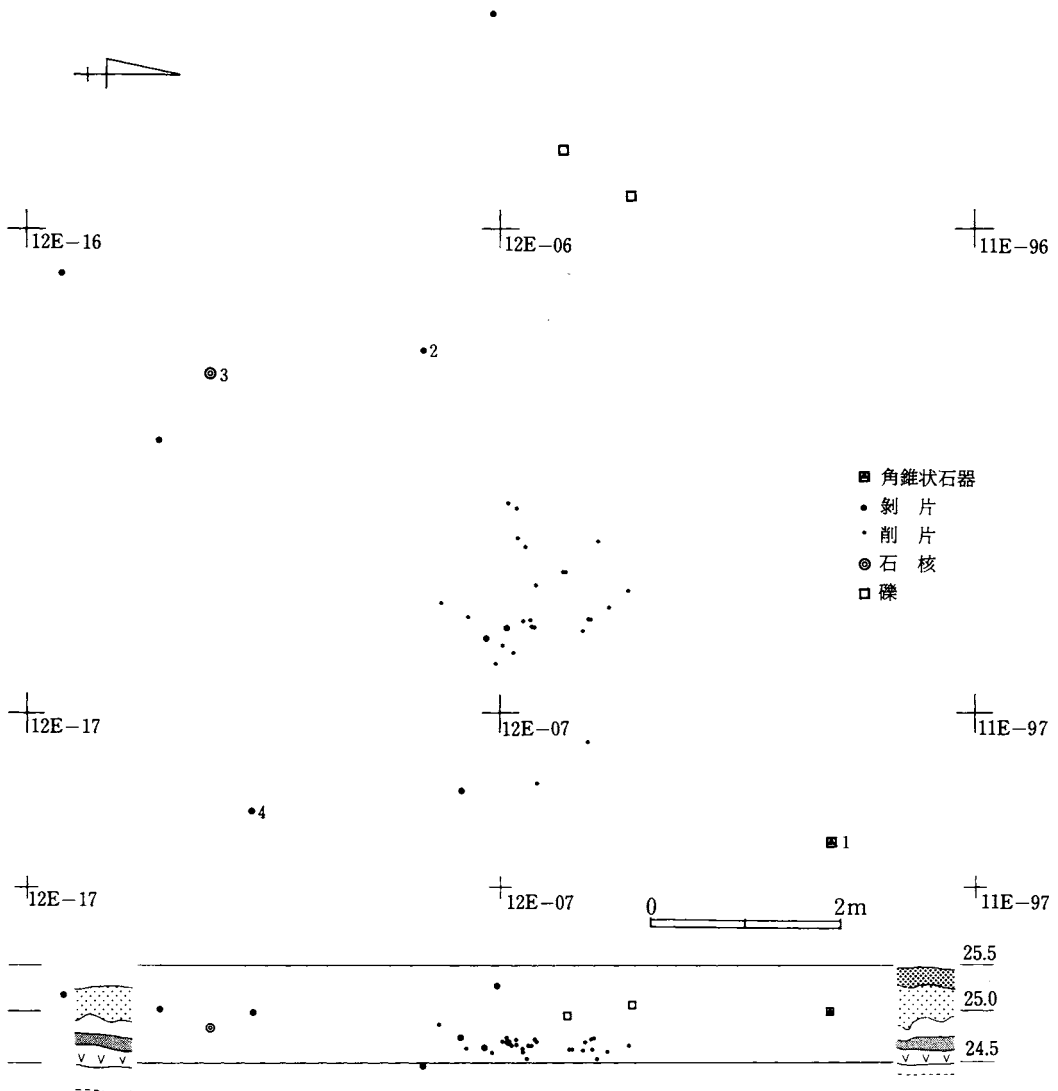
a) 分布状況 第16地点の南側に位置している。第35ブロックが北側10mのところにある。遺物は11E-96区の南側に直径1.5m程の黒曜石の剝片、削片の集中する部分があり、その周囲にも広い範囲に亘って、石器と礫とが点々と分布している。外縁部には、集中部分を構成する黒曜石が分布していない。また、削片の類もなく、両者の差は際立っている。

遺物はソフトローム層からVI層に到る0.8mのレベル差をもって垂直的に分布しているが、ブロック中央の黒曜石の集中地点がV層に主体的に含まれているのに対して、外縁部は一般にハードローム層の上部から産出するものが多い。このことは、このブロックが層位的に区別される最低2箇のブロックの重複したものであることを示唆するものであるかもしれないが、外縁部自体もレベル差をもつ散漫な遺物分布域であり、確定することは難しい。従って、きわめて恣意的に単一のブロックにまとめておく。

b) 出土遺物 37点の遺物があるが、このうち28点が集中部分の剝片と削片であり、外縁部には、角錐状石器1点、剝片5点、石核各1点、礫片2個体2点が分布している。黒曜石は不整な小型剝片であり、剝片剝離に随伴する廃棄物であろうと考えられる。

第127表 第36ブロック遺物集計表

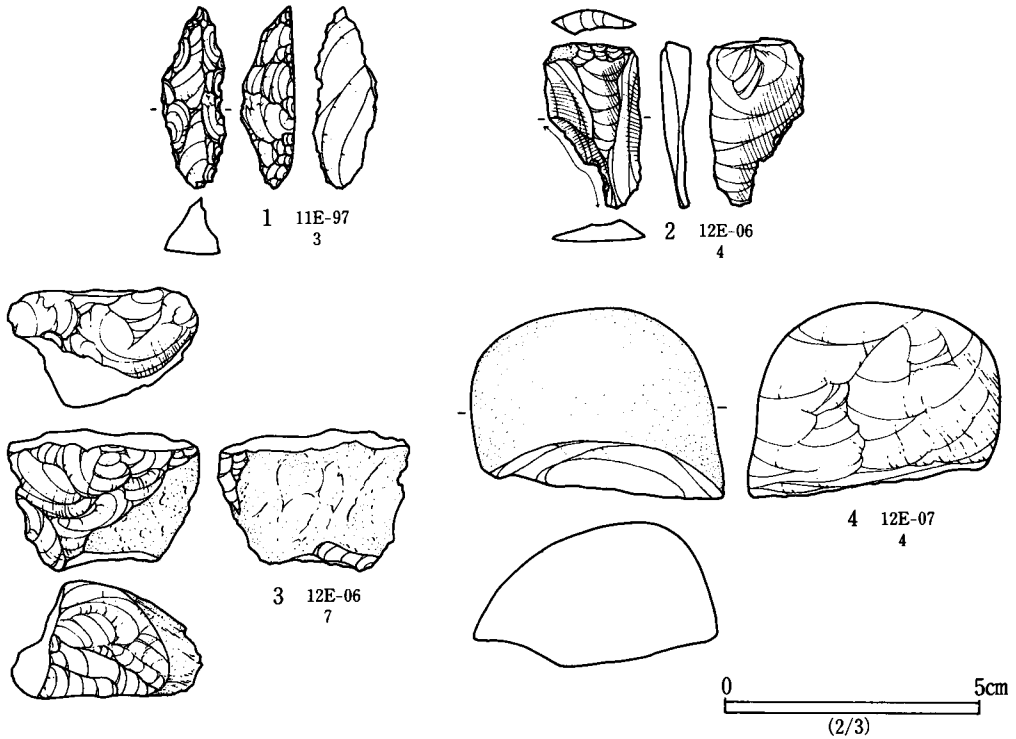
母岩番号	角錐状石器	剝片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
砂岩 48	0	1	0	0	0	1	2.7	76.30	36.5
ホルンフェルス10	0	1	0	0	0	1	2.7	65.00	31.1
凝灰岩 50	1	0	0	0	0	1	2.7	3.59	1.7
黒曜石 38	0	1	0	0	0	1	2.7	2.31	1.1
黒曜石 39	0	3	27	0	0	30	81.1	11.37	5.4
メノウ 15	0	0	0	1	0	1	2.7	27.89	13.3
流紋岩 14	0	0	0	0	1	1	2.7	6.07	2.9
安山岩 90	0	0	0	0	1	1	2.7	16.78	8.0
総数	1	6	27	1	2	37	100.0	209.31	100.0
組成比 (%)	2.7	16.2	73.0	2.7	5.4				



第268図 第36ブロック遺物出土状況

1は若干珪質な凝灰岩製の角錐状石器である。横長剥片の周辺に鋸歯縁状の加工をめぐらせ、尖鋭な尖頭部をもちかつ、断面3角形の舟型の形態に整えている。ハードローム層の上部から出土している。2は良質な黒曜石製の縦長剥片。背面左側縁尾部側に使用痕とも見られる刃こぼれがある。VI層から出土した。4も剥片だが、ホルンフェルス製で礫片様のもの。ハードローム層の上面出土。3はメノウの塊状の破片で、石核、あるいはそのブランクであろう。ハードローム層中の出土である。

c)石器石材 流紋岩と安山岩の碎片状の礫片があるが、石器素材としては、砂岩、凝灰岩、黒曜石、メノウ等がある。集中部とVI層から出土した剥片が黒曜石で、それ以外のものが外縁部に分布しており、石材の面からも、このブロックが層位的に分離される可能性を窺うことが



第269図 第36ブロック石器実測図

できる。

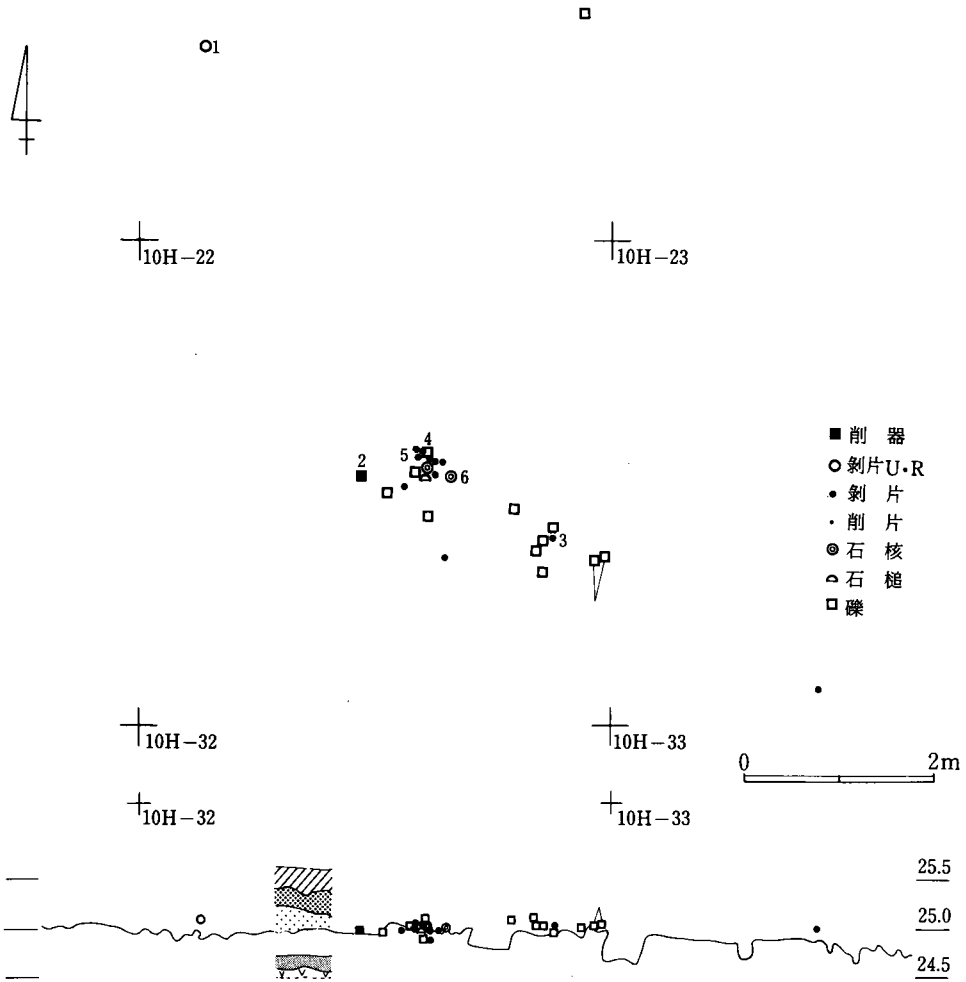
d) **小結** V層を中心として黒曜石の剥片が集中している。この集中部の作業内容は良く分からない。周辺部にIV層上位を中心とする遺物が広い範囲に分布しているが、両者の関係はどうなのであろう。水平な旧地表面を前提とすれば、新旧の分離が妥当と考えられるが、断定は差し控えたい。

第37ブロック (第270～第272図、図版71)

a) **分布状況** 第19地点から1ブロックのみ検出された。周辺部に同期のブロックは存在しない。遺物は10H-22区中央に東西3m、南北1mの狭長な分布域を形成している。遺物の5割が礫片であり、礫ブロックとしての性格が濃い。石器類は集中域の西側の狭い範囲にまとまって分布していた。あるいは、この石器類を含むクラスターと、東側の礫片のみから構成されるクラスターとに分離することが妥当かもしれないが、とりあえず一括しておく。産出層準はハードローム層の上面から少し下部にかけてである。

b) **出土遺物** 15点の石器と11個体12点の礫片からなる。石器には、削器、2次加工のある剥片が各1点、剥片10点、石核2点、石槌1点があり、定型的な器種を含んでいない。

1はチャートの剥片折れ面に2次加工のある台形状の石器。2は小型の石核かもしれないが、



第270図 第37ブロック遺物出土状況

凹削器の一種としたい。剥片の2側縁にノッチが認められる。3・4は剥片、5・6に石核を示した。6はブランクであるかもしれない。7は石槌で、流紋岩の小礫の両端に敲打痕が観察される。

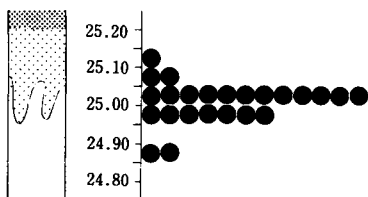
c) 石器石材 石器の用材としては、砂岩、安山岩、凝灰岩5種、チャート4種があり、チャートと凝灰岩が目立つ。チャートに就いては分からないが、凝灰岩は鬼怒川系と推定される。

優白色を呈し、流理構造が著明である。

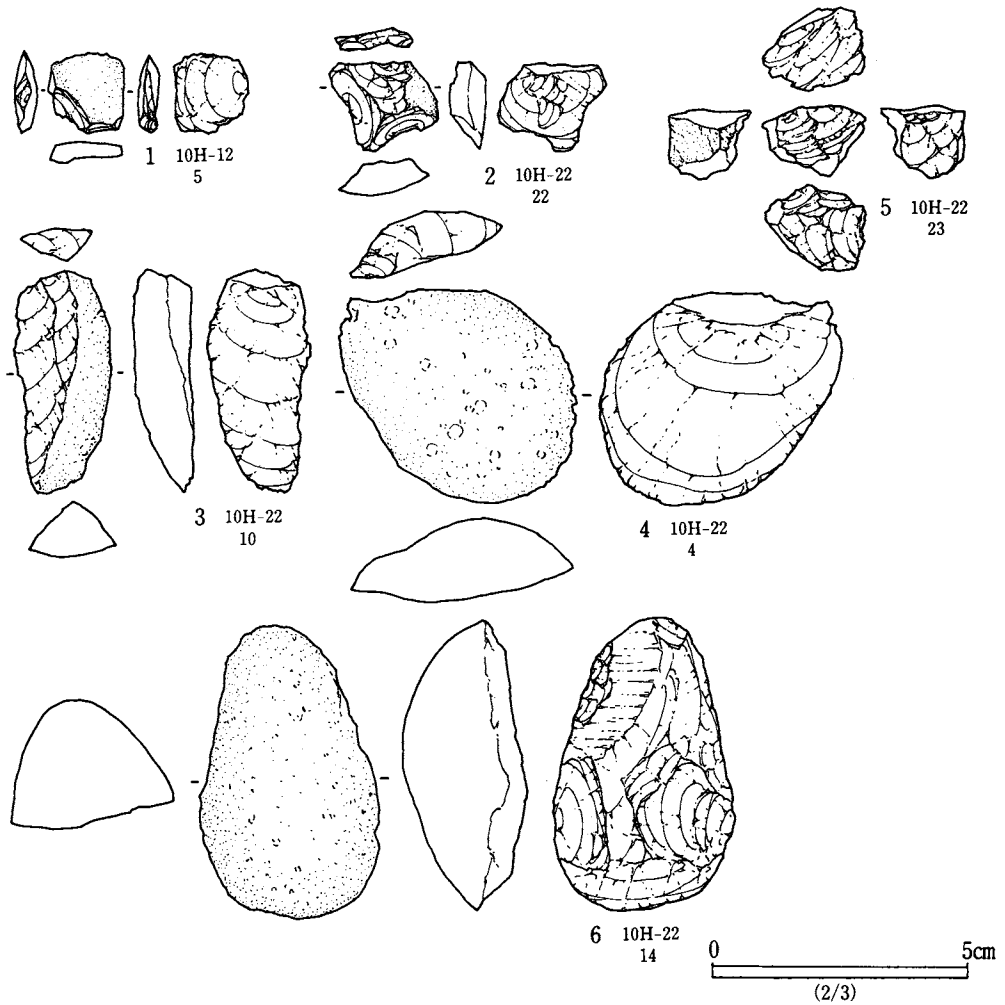
礫については個別に観察したい。全般的な印象としては、小型で可搬性の高いものが多くを占めているようである。

砂岩59 2点あり接合。小片で遺存度不明。

礫面、破砕面とも良く焼けている。



第271図 大林遺跡第37ブロック遺物垂直分布



第272図 第37ブロック石器実測図

砂岩61 細片で遺存度不明。全面が赤変しているが、特に礫表が暗赤色化している。

砂岩62 これも小型偏平な礫の破片である。27mm×28mm×18.5mmで遺存度は1/4。礫表のみ赤褐色に変化している。

砂岩63 非常に小型の礫の破片と考えられる。28mm×23mm×18.5mmしかないが、遺存度は1/4である。僅かに色調が赤く変わっている。

砂岩64 小型偏平の礫で完存する。51mm×40mm×16.5mm。表面が僅かに赤変。

流紋岩21 鶏卵大の礫片で遺存度1/3。淡紅色に変色している。一端に煤状の附着物がある。

流紋岩23 細目の礫の一端である。遺存度は良く分らないが1/3以下であろう。淡紅色を呈し、薄く煤状附着物が吸着している。

流紋岩24 微細な破片で遺存度は1/10以下。全体が赤褐色をしている。

流紋岩25 これも微細片で、1/10以下の遺存。茶褐色に変色している。

第128表 第37ブロック遺物集計表

母岩番号	削器	剥片U 剥片R	剥片	石核	石槌	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
砂岩 60	0	0	3	0	0	0	3	11.1	53.19	11.3
安山岩 101	0	0	1	0	0	0	1	3.7	3.89	0.8
凝灰岩 66	0	0	1	1	0	0	2	7.4	6.11	1.3
凝灰岩 67	0	0	2	0	0	0	2	7.4	1.84	0.4
凝灰岩 68	0	0	1	0	0	0	1	3.7	6.53	1.4
チャート 46	0	0	1	0	0	0	1	3.7	2.36	0.5
チャート 47	1	0	0	0	0	0	1	3.7	1.92	0.4
チャート 48	0	0	1	0	0	0	1	3.7	0.50	0.1
チャート 49	0	1	0	0	0	0	1	3.7	1.06	0.2
流紋岩 19	0	0	0	0	1	0	1	3.7	61.60	13.1
流紋岩 20	0	0	0	1	0	0	1	3.7	48.95	10.4
砂岩 59	0	0	0	0	0	2	2	7.4	36.13	7.7
砂岩 61	0	0	0	0	0	1	1	3.7	13.34	2.8
砂岩 62	0	0	0	0	0	1	1	3.7	12.17	2.6
砂岩 63	0	0	0	0	0	1	1	3.7	11.40	2.4
砂岩 64	0	0	0	0	0	1	1	3.7	45.24	9.6
チャート 50	0	0	0	0	0	1	1	3.7	16.06	3.4
流紋岩 21	0	0	0	0	0	1	1	3.7	43.85	9.3
流紋岩 23	0	0	0	0	0	1	1	3.7	34.17	7.3
流紋岩 24	0	0	0	0	0	1	1	3.7	4.44	0.9
流紋岩 25	0	0	0	0	0	1	1	3.7	4.30	0.9
閃緑岩 1	0	0	0	0	0	1	1	3.7	60.50	12.9
総数	1	1	10	2	1	12	27	100.0	469.55	100.0
組成比 (%)	3.7	3.7	37.0	7.4	3.7	44.5				

チャート50 原礫面を僅かに残す破砕片である。1/10以下の遺存度である。色調はあまり変化していないが、一部に煤状の附着物が認められる。

閃緑岩1 小型の完形礫で被熱の痕跡を欠いている。58mm×36mm×24mm。

以上の如く、砂岩と凝灰質の流紋岩の使用頻度が高く、特に流紋岩に関しては、石器の素材として多用されているものと基本的に差異がなく、同一原産地、おそらく鬼怒川水系から採取された可能性が極めて高い。

d) 小結 小型の礫片を主体とするブロックである。石器には定型的なものが少ないが、小型のチャートの剥片製の石器が2点含まれていた。これ以外のチャートの剥片も小型のものばかりで、比較的大型のものは、砂岩や凝灰岩を素材としている。そして、これらが礫片の用材と一致することは、珩質な良好な石材の入手が制約された条件下における、環境適応型の石器・石材組成を示すものとして重要であろう。また、既に再三指摘してきたように、これらの石器素材や礫種が古鬼怒川水系からもたらされたものを主体とすることから、当時の集団の遊動範囲に関しても重要な知見を加えることができた。

F. 第V文化層 VI層を産出層準とする文化層を第V文化層とした。本遺跡においては第8地点から僅かに1箇所のブロックを検出したに留まった。

第38ブロック (第273・第274図、図版75)

a) 分布状況 8F-71区を中心とし、その東西に広範囲に広がるブロックである。視覚的に3つのクラスターに分けることができる。これをクラスターa～cとする。

クラスターa 8F-81ポイントの西北を中心とする東西1.5m、南北2mの範囲を占めている。6点の石器(1)と1点の細礫片が含まれている。

クラスターb 8F-71区から72区にかけてひろがっている。東西3m、南北5mという比較的広い範囲に散漫な遺物の分布が認められる。13点の石器(2、3、5、6)から構成されている。

クラスターc 8F-82区にあり、5点の石器(4、7、8)がまばらに散っている。その範囲は東西2.5m、南北2mである。

b) 出土遺物 全体で26点の遺物があるが、各クラスターの構成を示しておく。

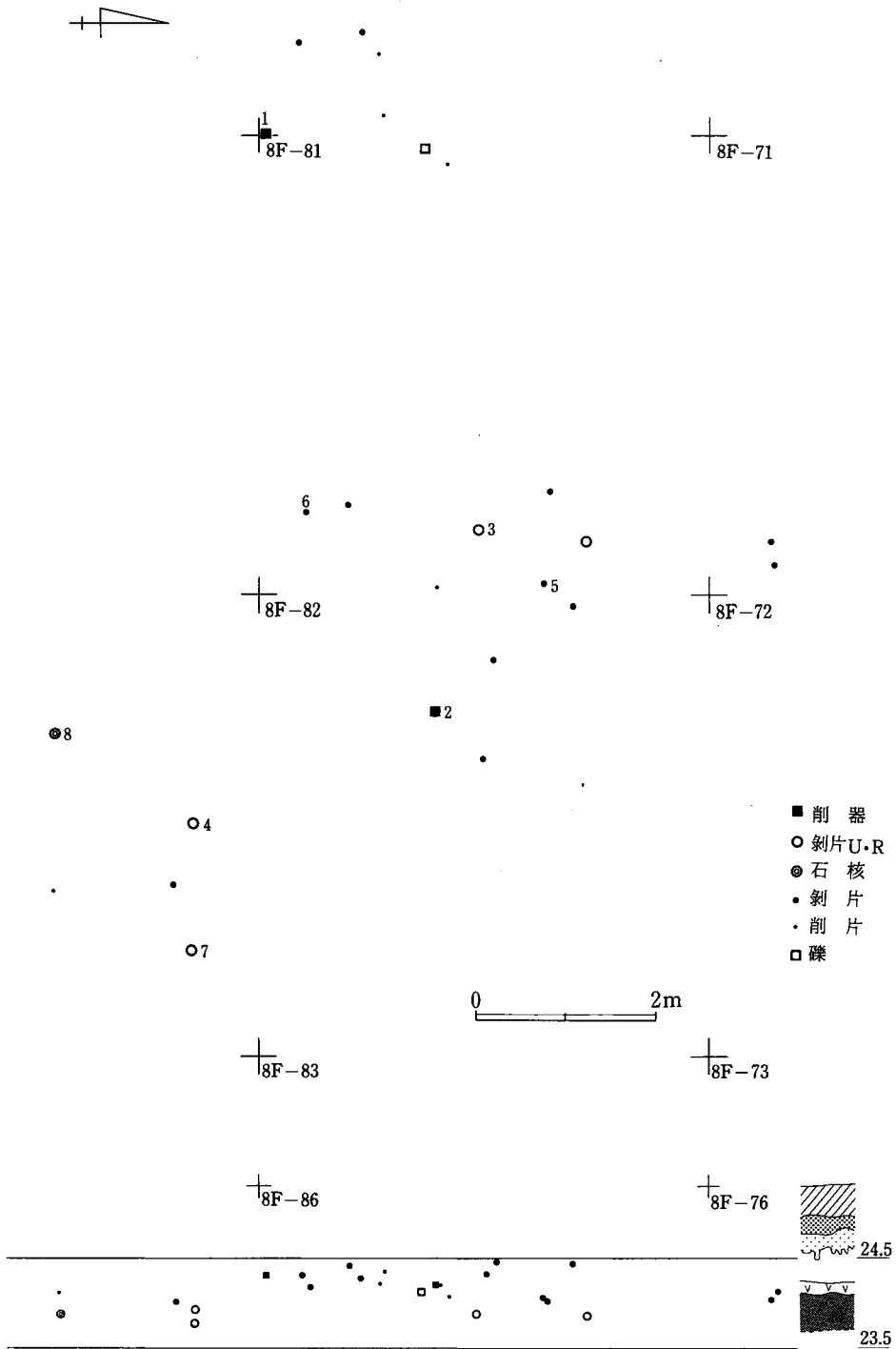
クラスターa 削器1、剥片2、削片3、礫片1(被熱)

クラスターb 削器1、剥片11(使用痕のあるもの2)、削片1

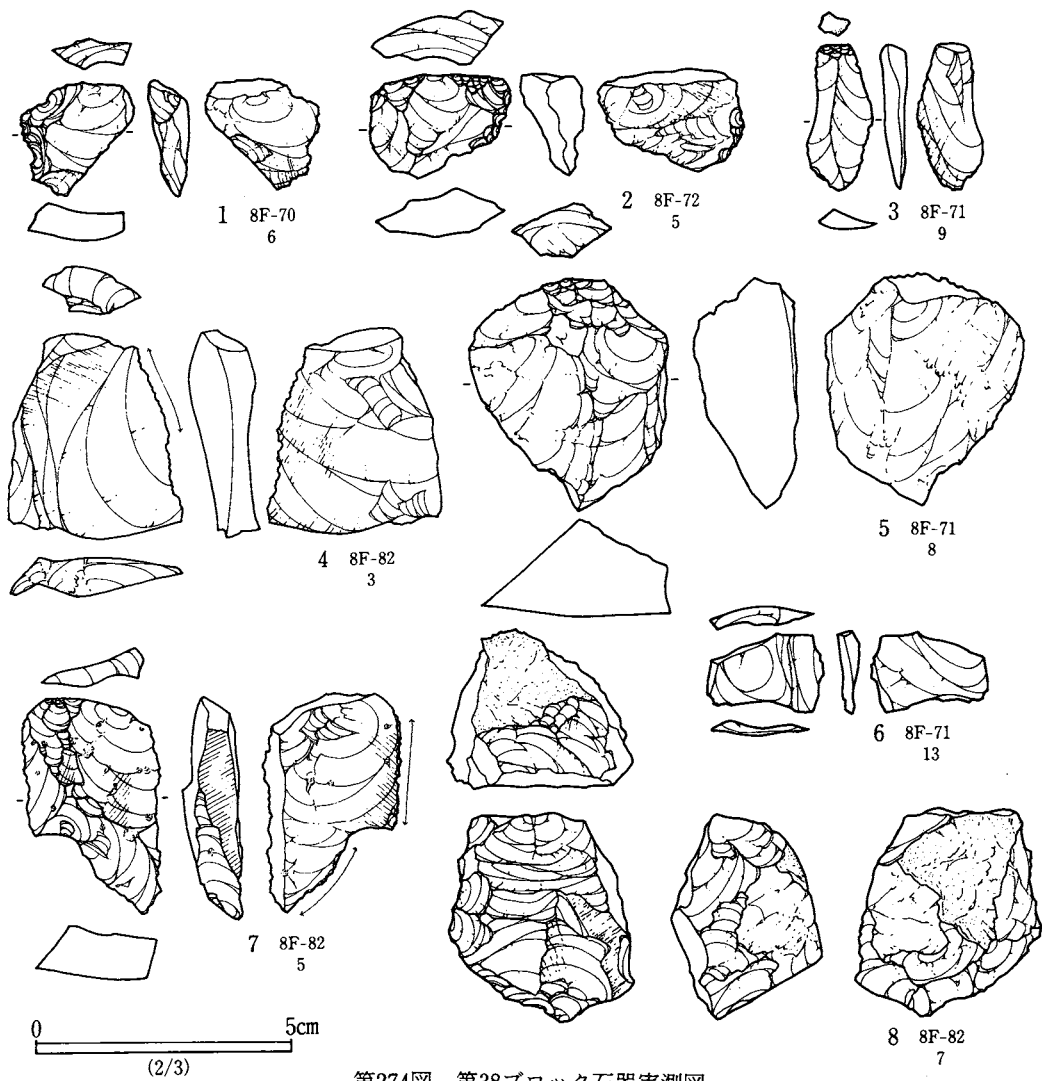
クラスターc 剥片3(使用痕のあるもの2) 削片1 石核1

第129表 第38ブロック遺物集計表

母岩番号	削器	剥片U 剥片R	石核	剥片	削片	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 39	0	0	0	1	0	0	1	3.8	4.34	2.3
珪質頁岩 40	0	0	0	1	0	0	1	3.8	2.37	1.2
珪質頁岩 41	0	0	0	1	0	0	1	3.8	29.36	15.4
珪質頁岩 42	0	1	1	1	0	0	3	11.5	47.28	24.8
珪質頁岩 43	0	1	0	0	0	0	1	3.8	4.00	2.1
凝灰岩 18	0	0	0	1	0	0	1	3.8	9.42	4.9
凝灰岩 19	0	0	0	0	1	0	1	3.8	0.14	0.07
安山岩 65	0	0	0	1	0	0	1	3.8	9.66	5.1
安山岩 66	0	0	0	0	1	0	1	3.8	0.26	0.1
メノウ 8	2	0	0	4	0	0	6	23.1	24.83	13.0
メノウ 9	0	1	0	2	0	0	3	11.5	42.83	22.5
黒曜石 23	0	1	0	0	0	0	1	3.8	9.73	5.1
黒曜石 51	0	0	0	0	2	0	2	7.7	1.80	0.9
凝灰質砂岩 2	0	0	0	0	1	0	1	3.8	1.90	1.0
チャート 36	0	0	0	0	1	0	1	3.8	1.46	0.8
石質 不明	0	0	0	0	0	1	1	3.8	1.25	0.7
総数	2	4	1	12	6	1	26	100.0	190.63	100.0
組成比 (%)	7.7	15.4	3.8	46.2	23.1	3.8				



第273図 第38ブロック遺物出土状況



第274図 第38ブロック石器実測図

各クラスター共に剥片類を主体としており、母岩を消費したと判定されるクラスターは存在しない。第274図に代表的な遺物を掲げた。

1はメノウの剥片の側縁にノッチを入れた凹削器。平坦打面をもつ幅の広い剥片を素材としている。背面右側縁は折り取られており、腹面には折れ面に接する小剥離(step)が観察される。2は大きい平坦打面をもつ横長剥片の側縁部に小さい剥離痕が認められる。剥離痕は背面右側縁の打面寄りの部位と、腹面右側縁の尾部寄りの部位にある。これらの剥離痕のうち大半のものの末端は free であるが、背面側にはこれを切るように末端 step の微細な剥離痕が連続し、あるいは両極手法が採用されたのかもしれない。ここでは一応、削器と分類した。

3～7に各種の剥片を示した。一般的な印象として、縦長の剥片、あるいは石刃を企图的に連続剥取した形跡が殆んど認められない点に注意したい。十分な資料がないので具体的な剥離

手法の復原は難しいが、石核8なども参考にすると、両設、あるいは複設の多面体石核の存在が予測される。なお、図示していないが、黒曜石の剥片の接合状況を見ると、両極手法が採用されており、消耗した剥片、あるいは剥片を台石上に固定して加撃を加え、薄い破片を得る方法も存在したと考えられる。

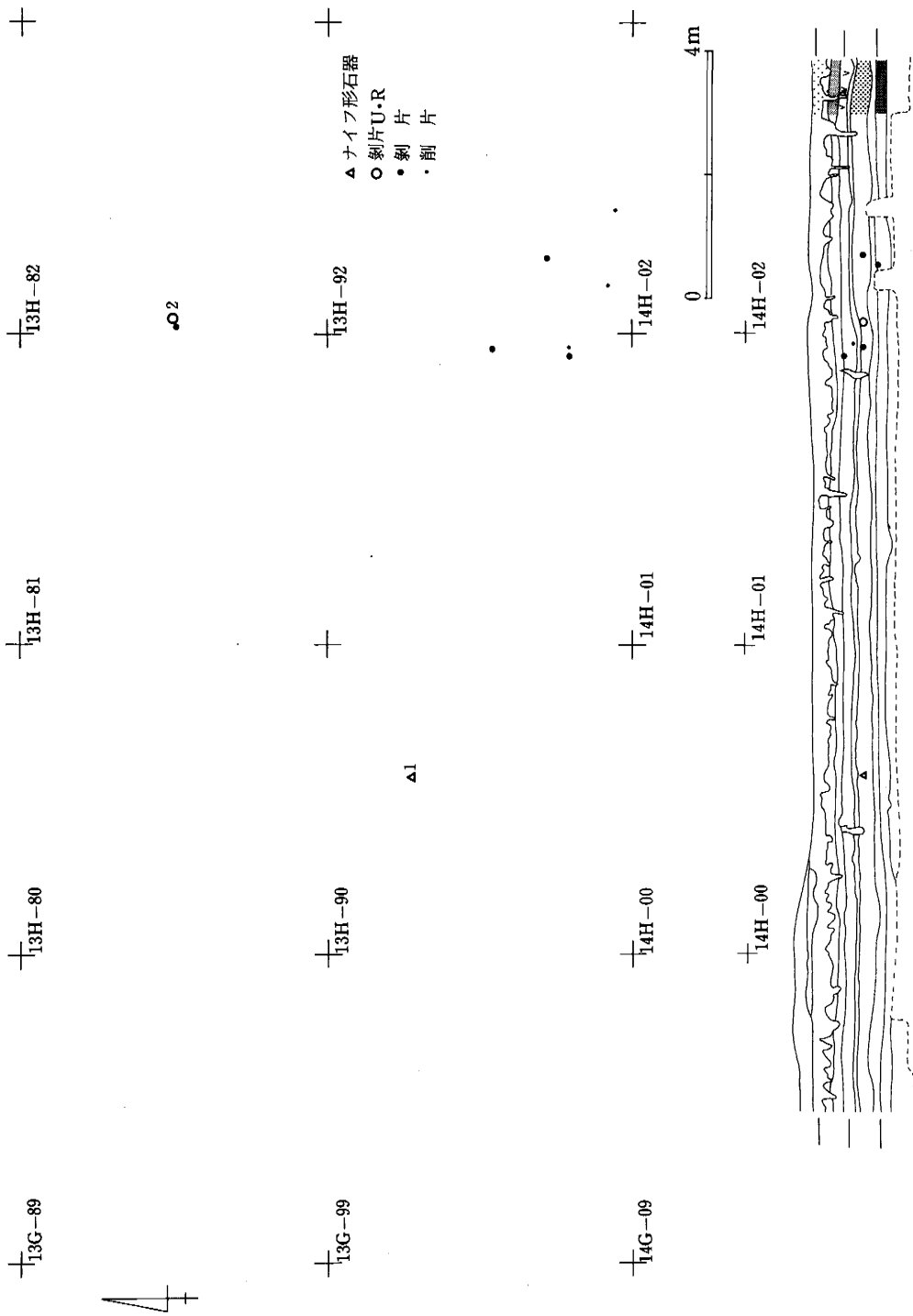
c) **石器石材** 珪質頁岩5種、凝灰岩、安山岩、メノウ、黒曜石各2種、凝灰質砂岩、チャート各1種、計16種の母岩が存在する。礫片は石質不詳なので、これを含めると17種に達し、資料総数が26点であるから、だいたいの母岩が1点の資料しか持っていないということになる。これらのうちでメノウ9が6点というまとまった資料を含んでいる。しかも、本母岩は、クラスターaに2点、クラスターbに3点、クラスターcに1点と広域の分布を示し、各クラスターが無関係に並存しているのではないことを示唆するものとなっている。これ以外に間クラスターの分布を示す母岩は存在しない。

d) **小結** VI層検出のブロックとしては唯一のブロックである。平面分布に従って3箇所のクラスターに区分されるが、各クラスターは資料数の多寡はあるものの、削器や剥片を主とする器種構成を示している。また、メノウの一母岩を例外として、共通する母岩を持たないが、これは、過半の母岩が1点の資料から構成されているという事情をも反映しているのであろう。この事実と、剥片剥離工程をブロックが欠落させていることから、ブロック内に遺存する剥片が属性選択を媒介とする選択的剥片であることが窺われる(第27ブロックの項参照)。

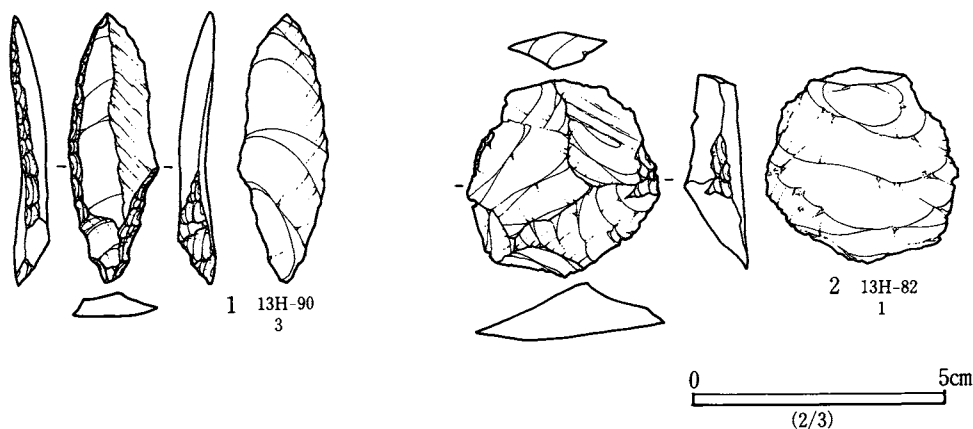
この点と関連して触れなければならないのは、本ブロックの剥片生産の基盤が一般的剥片剥離にある点であろう。この規制の緩い技術的基盤は、企画性に乏しい不整な剥片を量産し、剥片の目的的剥離よりも、むしろ生産された剥片の特定の属性に着目し、それを選択的に利用することに特徴をもっている。言わば一般的剥片剥離技法と属性選択とは不可分の関係にあり、ひとつのシステムを構成しているものとも言えよう。VI層検出のブロックにこのシステムを確認し得た点を重視したい。

G. 第VI文化層 第2黒色帯上半を産出層準とする文化層を第VI文化層とする。第3地点、第12地点、第18地点に該当するブロックが存在するが、特に第18地点は16箇所のブロックが広範囲から検出されている。

第2黒色帯は、下総台地西縁部の標準的分層結果と良く一致し、本遺跡でも4枚に分けられる場合が多い。調査時には、これをVI'、VII a、VII b、VII c層と呼称していたが、現在では、武蔵野台地との対応を円滑化する目的に従って、VI'層を大体VII層に、VII a～VII c層をIX層と対比している。更にIX層に関しては、IX a、IX b、IX c層という細かい分層を実施し、遺跡間の詳細な層準対比をすすめている(田村 1987)。この分層方針に従うなら、第VI文化層の産出層準はVII層～IX a層ということになる。しかしながら、VI'層の分層基準に不明瞭なところがあり、



第275図 第39ブロック遺物出土状況



第276図 第39ブロック石器実測図

第130表 第39ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	剥片U 剥片R	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
安山岩 12	0	1	0	0	1	12.5	12.06	45.6
安山岩 13	0	0	0	1	1	12.5	0.36	1.4
安山岩 15	1	0	0	0	1	12.5	4.86	18.4
安山岩 16	0	0	1	0	1	12.5	3.18	12.0
安山岩 17	0	0	1	2	3	37.5	3.95	14.9
凝灰岩 3	0	0	0	1	1	12.5	2.03	7.7
総数	1	1	2	4	8	100.0	26.44	100.0
組成比 (%)	12.5	12.5	25.0	50.0				

判定の難しい場合もある。

第39ブロック (第275・第276図、図版75)

a) 分布状況 第3地点にある小規模なブロックである。第3地点には、ソフトローム層中、IX a層、X層という3枚の文化層が重複しているが、分布している場所が各々異なり、層準も比較的隔たっているので、一般に遺物の分離は容易であったが、少量のものについては問題を残した。

石器がまとめて出土したのは、13H-92区を中心とする狭い範囲で、遺物の量も少ない。この集中部分の外部、13H-82区、13H-90区からもIX a層から単独で石器の出土があった。この2点に関しては、本ブロックとは無縁である蓋然性も高いが、便宜的に本項で扱いたい。

b) 出土遺物 ブロック内からは剥片が6点検出された。いずれも小型不整なものである。ブロック外からは、使用痕のある剥片(2)、縦長剥片製のナイフ形石器(1)の2点が出土している。ナイフ形石器は安山岩の縦長剥片、あるいは石刃を素材とし、基部の尖る、典型的な2側縁加

工の例である。この種のナイフ形石器は、VII層～VI層にかけて多出する傾向が指摘されている。

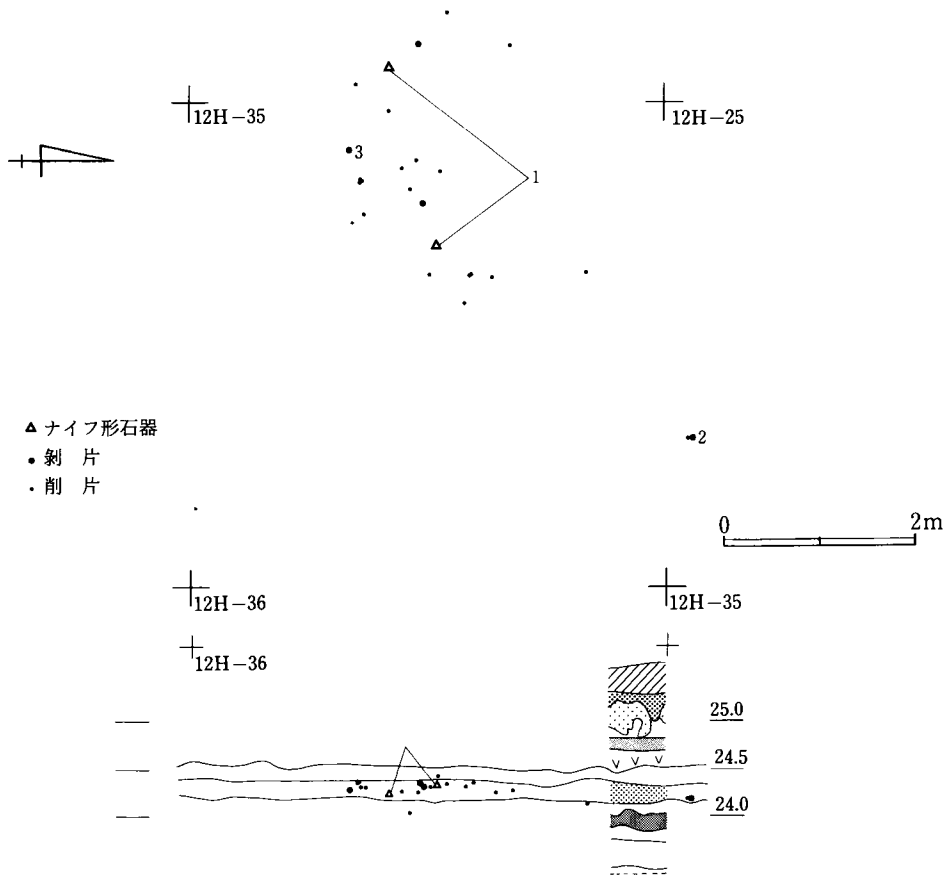
c) **石器石材** 安山岩を主体としている。ブロック内の6点も、5点までが安山岩で、3母岩が識別される。もう1点は流紋岩で、鬼怒川系の石材であろう。ブロック外の2点も安山岩で、各々は別母岩であるばかりか、ブロック内とも母岩を共有していない。

d) **小結** 剥片少量から構成されるブロックで、その外縁にも少量の石器が分布しているが、両者間には直接的な関係は認められない。ブロックは、安山岩と流紋岩を構成石材としているが、この石材組成は第18地点に特徴的である。

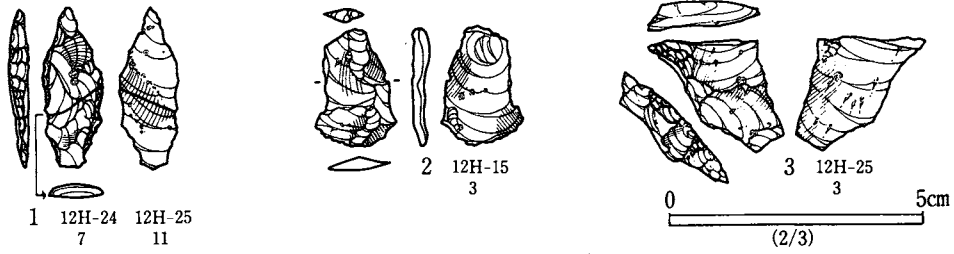
第40ブロック (第277・第278図、図版75)

a) **分布状況** 第12地点から単独で検出された。12H-24区から12H-25区にかけて、緩い弧状をした遺物の分布が認められる。産出層準はIX a 層上部である。

b) **出土遺物** ナイフ形石器1個体2点、剥片4点、削片19点、計25点の遺物から構成されている。1はナイフ形石器。尖頭部と基部とが割れて出土したが接合した。縦長の剥片を素材としているが、背面を見ると、多方向からの剥離面が入り乱れ、どのような由来を持つ剥片を



第277図 第40ブロック遺物出土状況



第278図 第40ブロック石器実測図

第131表 第40ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	剥片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
黒曜石 30	1(2)	4	19	24(25)	100.0	8.39	100.0
総数	1(2)	4	19	24(25)	100.0	8.39	100.0
組成比 (%)	4.2	16.6	79.2				

用いているのか、判断することができない。剥片基部が尖頭部側に一致しているので、背面左側縁の尖頭部のバックが厚い。左右の基部側にも簡略な加工があり、一応、2側縁加工に近いものに見える。

剥片は小型で、特徴の判然としないものが多いが、2点を示した。2を見ると打面側からの継起的な剥片剥離が窺われる。これはおそらく、3の背面左側に遺存する作業面の状態と照応するのであろう。3ではこの作業面を横に切るように剥離が実施されている。打面転位とも、打面再生、あるいは打面修正とも考え得るが、資料数が限定されているので、いずれとも断定できない。

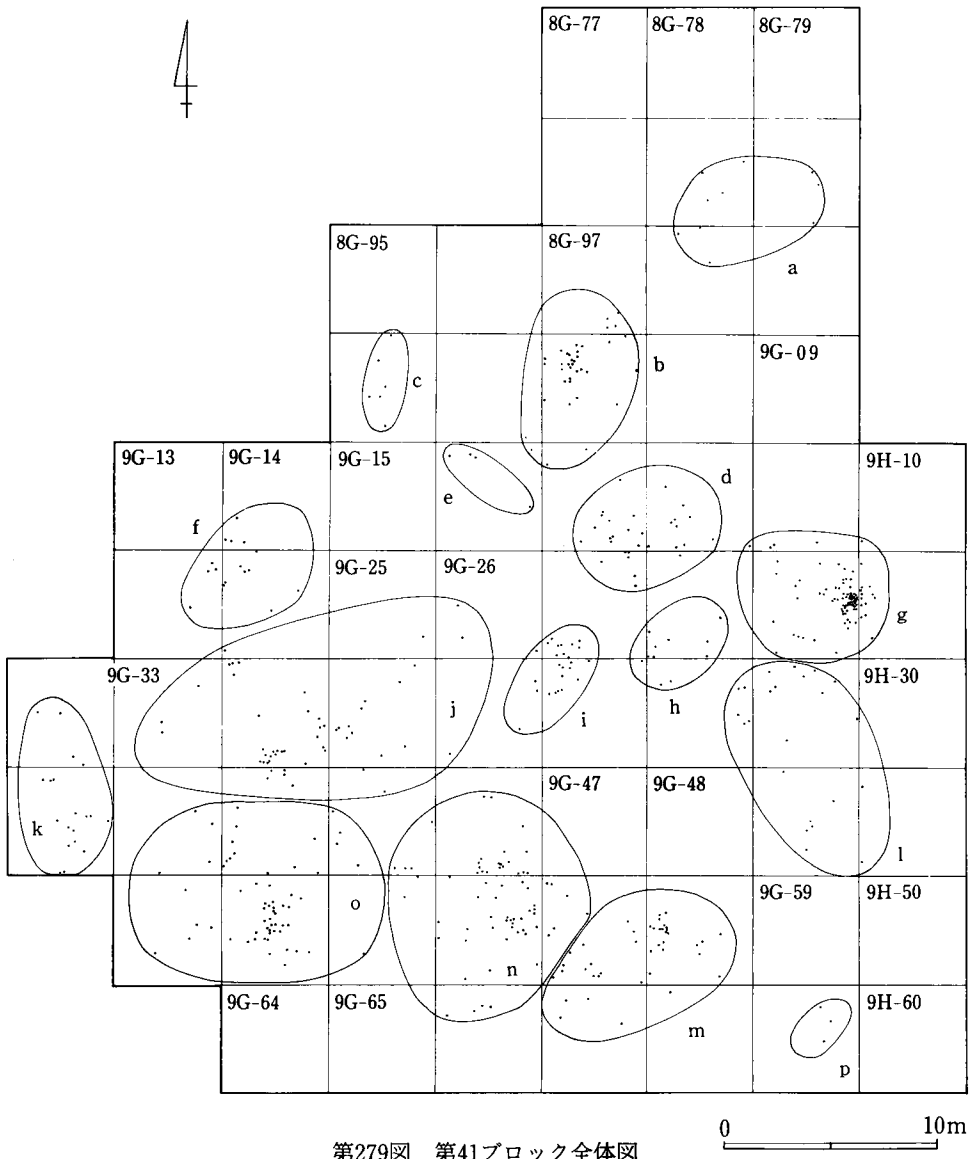
c) 石器石材 全て同一母岩に属する黒曜石から構成されている。限定的とは言え、ある程度の母岩消費と、ナイフ形石器の製作工程の存在が想定される。

d) 小結 単一の母岩から構成された小規模な石器製作空間である。破損したナイフ形石器があるので、その種の石器が製作されたのかもしれない。別種の母岩を1点も含んでいないのは異例に属そう。

第41ブロック (第279～第369図、図版35・36・72～75)

a) 分布状況 第18地点を総称して、第41ブロックと呼ぶが、東西45m、南北にも45mという広域に亘る分布が確認された。遺物の出土した調査区の合計は1.175m²に達し、芋窪遺跡と共に本期のまとまった資料を得ることができた。

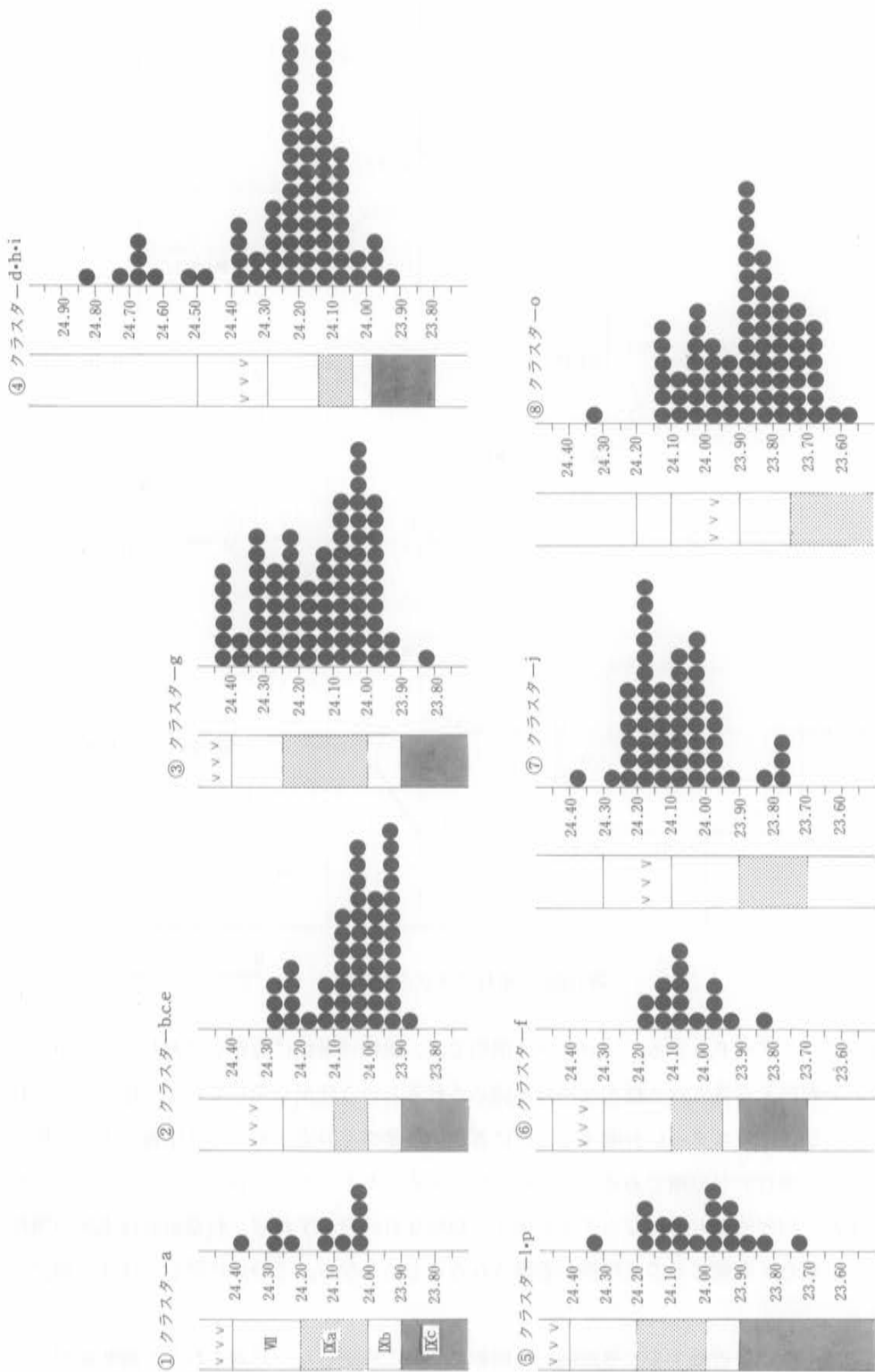
石器類は、この範囲内に万遍のない散布を示すのではなく、いくつかのまとまりを形成している。分布図を見ながら、これを便宜的に16箇所のクラスターに分離した。これらを、クラス



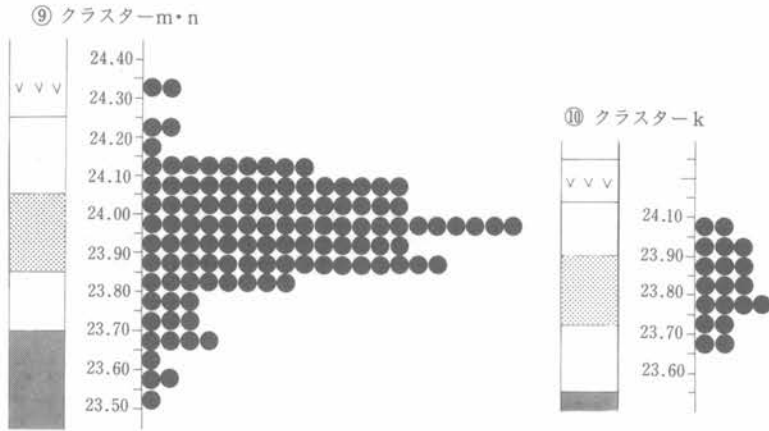
第279図 第41ブロック全体図

ター a～クラスター p とする。ブロックの南側では、遺物は帯状に分布しており、その中にいくつかの分布核とも言うべき稠密な部分が認められるという状況を示している。従って、それらをいくつかのクラスターに分離することに客観的な基準を設定することは困難であり、極めて恣意的かつ便宜的な分離であることは明らかである。そうすると、各クラスターの持つ石器組成もまた、相対的なものにならざるを得ず、極端な言い方をすれば、石器組成は遺跡の属性を離れて、私たちの側にその決定権が委譲されることにもなる。この点に関しては逐次検討を加える。

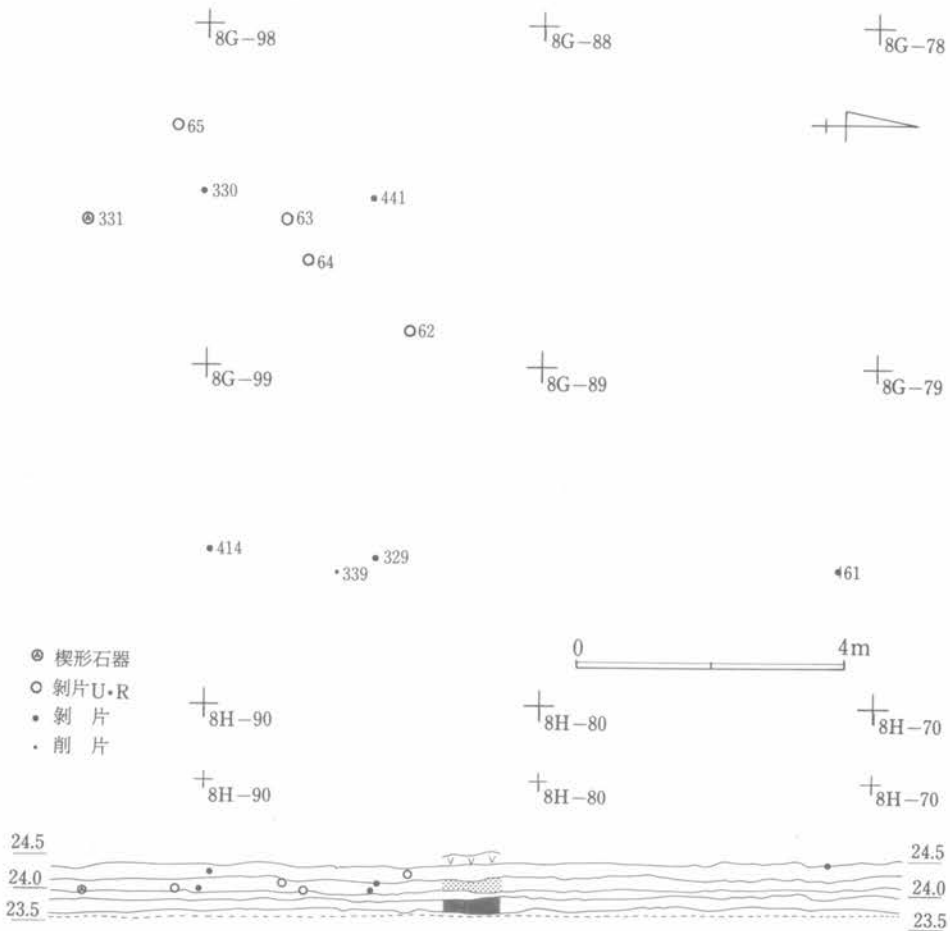
石器の産出層準は近接する土層断面への投影によって決定した。記録された土層断面図のうち、最も西側のものは、埋没谷に接した部分に相当しており、水によるローム層の変質が著し



第280図 大林遺跡第41ブロック遺物垂直分布(1)



第281図 大林遺跡第41ブロック遺物垂直分布(2)



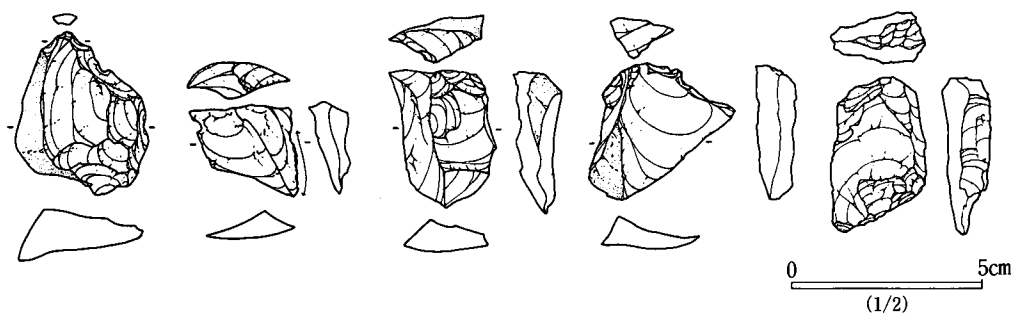
第282図 第41ブロック遺物出土状況(クラスターa)

いので、層準判定には不適であるため、これを除外し、主に東側のクラスターについて検討した(第280・281図)。その結果、各クラスターともにIX層に分布の集中する傾向が確認されるので、同層のほぼ中位を産出層準と決定した。

第132表 第41ブロック遺物集計表

クラスター	分類	ナイフ形石器	楔形石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
a		0	1	0	0	4	6	1	0	0	12	2.4	88.10	2.9
b		0	3	0	0	2	11	25	1	0	42	8.3	190.74	6.3
c		0	2	0	0	0	4	0	0	0	6	1.2	67.62	2.2
d		0	4	0	0	4	11	6	2	2	29	5.7	380.13	12.6
e		0	0	0	0	0	2	2	0	0	4	0.8	5.65	0.2
f		0	1	0	0	2	6	4	2	0	15	3.0	122.34	4.0
g		0	3	0	0	4	21	63	1	0	92	18.2	185.19	6.1
h		0	0	0	0	2	6	2	0	0	10	2.0	18.32	0.6
i		0	0	0	0	1	12	11	1	0	25	5.0	90.39	3.0
j		1	5	1	0	3	34	10	1	0	55	10.9	403.97	13.3
k		0	0	0	0	2	4	9	3	0	18	3.6	80.87	2.7
l		0	0	0	0	6	7	5	3	0	21	4.2	241.98	8.0
m		0	0	0	0	6	15	17	0	1	39	7.7	303.97	10.0
n		0	5	0	1	2	31	28	3	1	71	14.1	328.49	10.9
o		0	3	2	0	4	22	28	1	3	63	12.5	361.49	12.0
p		0	0	0	0	0	2	0	1	0	3	0.6	157.96	5.2
総数		1	27	3	1	42	194	211	19	7	505	100.0	3,027.21	100.0
組成比 (%)		0.2	5.3	0.6	0.2	8.3	38.4	41.8	3.8	1.4				

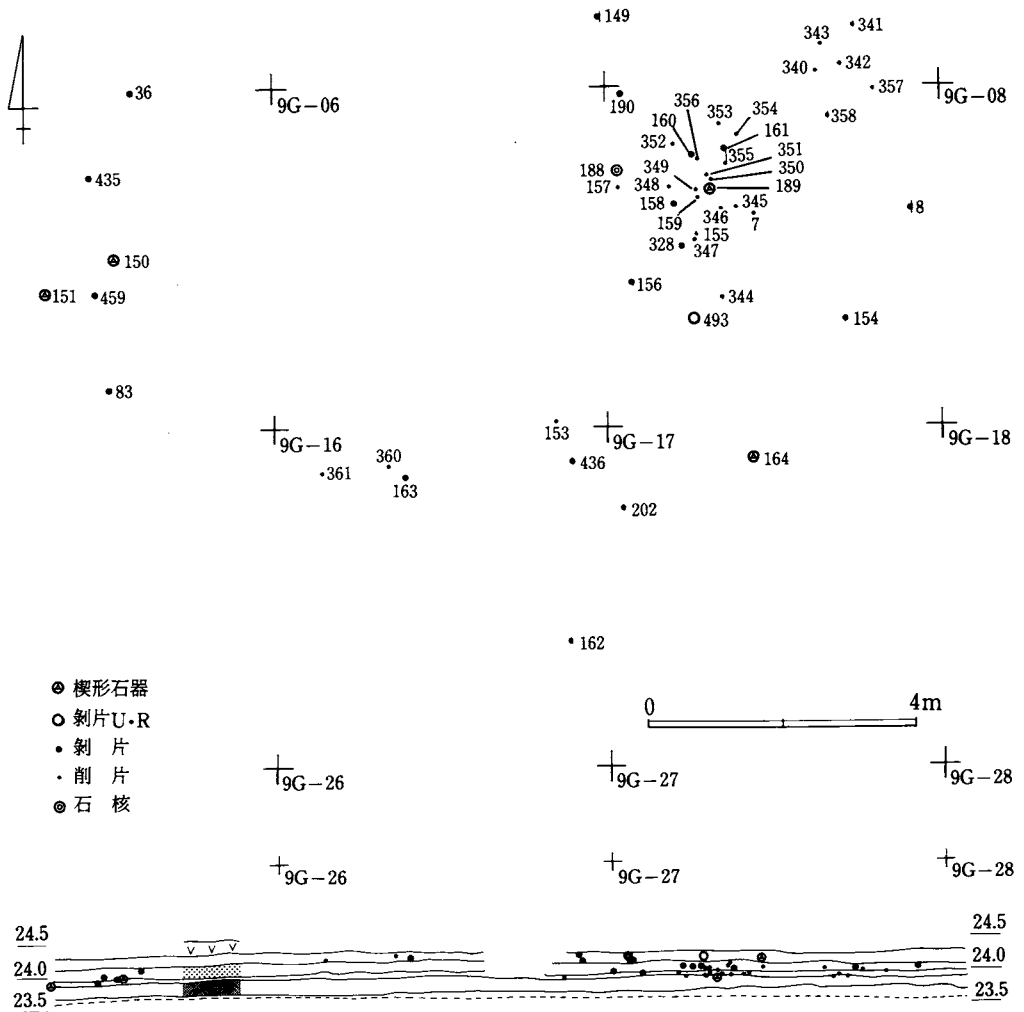
クラスター a 8 G-88区を中心とする東西7m、南北5mの範囲から11点の遺物が散在するように検出された。ブロックの最も北側に位置し、南側のクラスター bからは5m以上の距離がある。楔形石器が1点あるが、剥片類が多く、特に刃こぼれの著明なものが目立つ。最低4種の母岩を含み珪質頁岩121、安山岩107が数点ずつあるが、それ以外のものは単独資料であった。大半の剥片が使用に供されたものと見られる。楔形石器は同一石材の剥片2点を伴っているが、それらは、楔形石器の本体から落とされた剥片ではない。



第283図 第41ブロッククラスター a の石器実測図

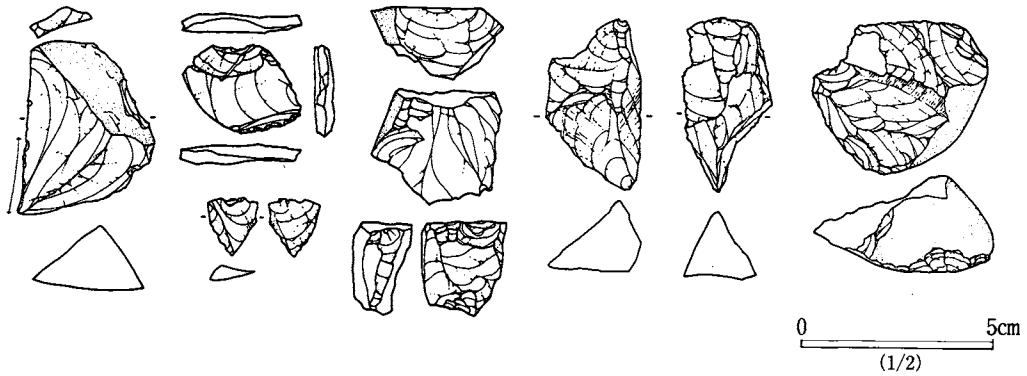
第133表 クラスター a 遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	楔形石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 121	0	0	0	0	4	1	0	0	0	5	41.7	41.74	47.4
安山岩 97	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	8.3	13.36	15.2
安山岩 107	0	1	0	0	0	2	0	0	0	3	25.0	27.85	31.6
安山岩 不明	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	8.3	0.88	1.0
流紋岩質凝灰岩 1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	8.3	1.59	1.8
流紋岩質凝灰岩 11	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	8.3	2.68	3.0
総数	0	1	0	0	4	6	1	0	0	12	100.0	88.10	100.0
組成比 (%)	0	8.3	0	0	33.3	50.0	8.3	0	0				



第284図 第41ブロック遺物出土状況(クラスターb-c-e)

クラスターb 9G-07区を中心としている。9G-07ポイントの南東側に径約2mぐらいの分布密度の高い部分があり、安山岩の細かい剥片が多く分布している。この集中部の周辺にも散漫な遺物の分布があり、南側でクラスターeの範囲と重複している。楔形石器を3点含み、他は全て剥片類によって占められている。8種の母岩を含み、安山岩が卓越している。特に安山岩93は唯一の消費石材で、両極技法による小型縦長剥片を生産し、結果として楔形石器を生じている。

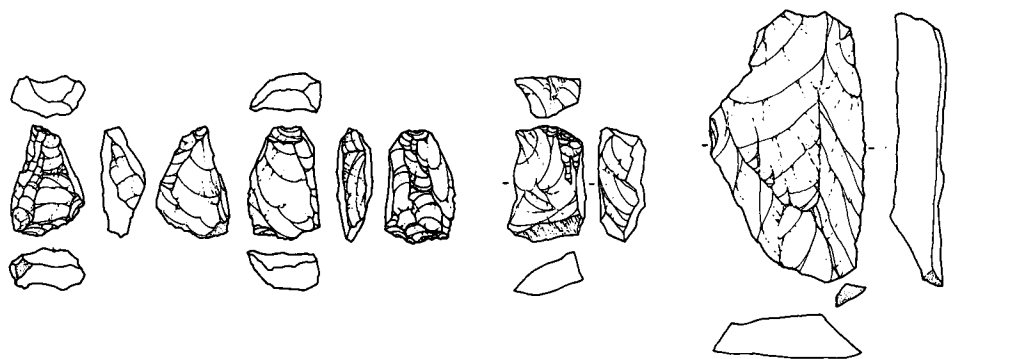


第285図 第41ブロッククラスターbの石器実測図

第134表 クラスターb遺物集計表

母岩番号	ナイフ形 石器	楔形 石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
泥岩 24	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	4.8	11.96	6.3
安山岩 93	0	1	0	0	0	6	5	0	0	12	28.6	56.21	29.5
安山岩 94	0	1	0	0	0	1	0	1	0	3	7.1	58.06	30.4
安山岩 97	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2.4	3.12	1.6
安山岩 99	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2.4	4.78	2.5
安山岩 105	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2.4	18.17	9.5
安山岩 107	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2.4	9.14	4.8
安山岩不明	0	0	0	0	0	0	19	0	0	19	45.2	7.90	4.1
流紋岩質凝灰岩 10	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2.4	1.48	0.8
流紋岩質凝灰岩 25	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2.4	19.92	10.4
総数	0	3	0	0	2	11	25	1	0	42	100.0	190.74	100.0
組成比 (%)	0	7.1	0	0	4.8	26.1	59.5	2.4	0				

クラスターc 9G-05区にある。クラスターb、eの西側に位置する。東西1.7m南北4.5mという細長い範囲から、6点の遺物が検出されている。遺物量は極めて少ないが、内容は、楔形石器2点、剥片4点で、楔形石器の出現頻度が高い。削片を含まず、大半の石器が何らかの機能を荷担していたものと考えられる。楔形石器2点が同一母岩の安山岩であるが、それ以外は全て単独母岩である。



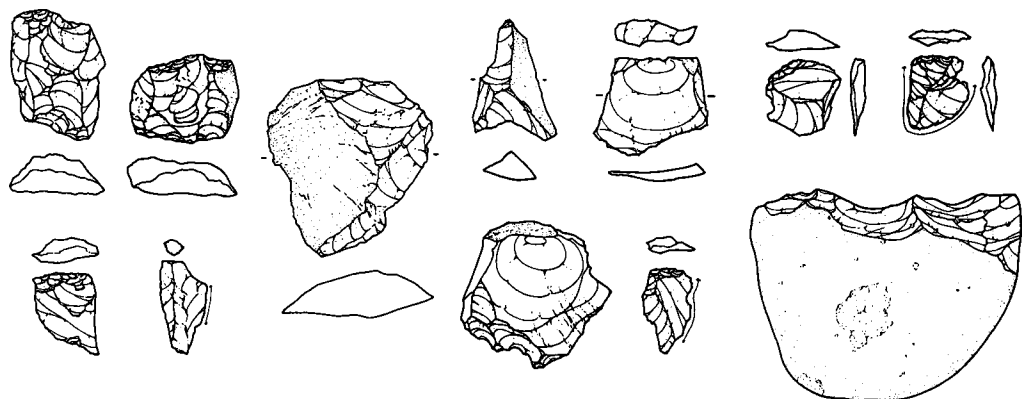
第286図 第41ブロッククラスターcの石器実測図

0 5cm
(1/2)

第135表 クラスターc 遺物集計表

母岩番号	ナ、フ形 石器	楔形 石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総 数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 113	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	16.7	2.85	4.2
安山岩 90	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	16.7	38.26	56.6
安山岩 93	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	33.3	10.44	15.4
流紋岩質凝灰岩 10	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	16.7	7.91	11.7
流紋岩質凝灰岩 18	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	16.7	8.16	12.1
総 数	0	2	0	0	0	4	0	0	0	6	100.0	67.62	100.0
組成比 (%)	0	33.3	0	0	0	66.7	0	0	0				

クラスターd 9G-17、18両区を中心とし、一部はその南側に及び、結果的にクラスターhと接する状態になっている。遺物の散布するのは、東西6.5m、南北5mの長円形をしており、この範囲内では一様な分布状況を呈している。遺物は比較的まとまっており、総数で31点ある。内容は、楔形石器4点の他は剥片類が多くある。石核も3点ある。また、同一個体の礫片が2



第289図 第41ブロッククラスターdの石器実測図

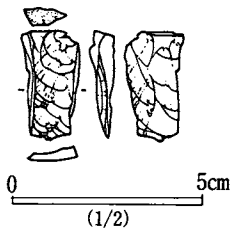
0 5cm
(1/2)

点含まれている。剥片のうち相当量が楔形石器から剥落した縦長の剥片であり、その中には使用痕が観察されるものも多い。安山岩の大型の石核には、礫表の処々に被加撃痕があるので、両極加撃に際して、石砧として機能としていたことも考えてよいかもしれない。

第136表 クラスタ-d 遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	楔形石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
泥岩 22	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	3.4	3.47	0.9
泥岩 23	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3.4	0.87	0.2
珪質頁岩 105	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	3.4	6.33	1.7
珪質頁岩 107	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	3.4	6.93	1.8
珪質頁岩 110	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3.4	0.42	0.1
珪質頁岩 115	0	0	0	0	2	1	0	0	0	3	10.3	2.52	0.7
珪質頁岩 119	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	3.4	2.54	0.7
安山岩 98	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	3.4	219.00	57.6
安山岩 99	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	6.9	26.64	7.0
安山岩 108	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	3.4	5.78	1.5
安山岩 不明	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3.4	0.86	0.2
流紋岩質凝灰岩 7	0	0	0	0	0	1	2	0	0	3	10.3	9.97	2.6
流紋岩質凝灰岩 9	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2	6.9	15.57	4.1
流紋岩質凝灰岩 22	0	1	0	0	2	1	1	1	0	6	20.7	40.00	10.5
流紋岩質凝灰岩 24	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	6.9	5.78	1.5
流紋岩 18	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	6.9	33.45	8.8
総数	0	4	0	0	4	11	6	2	2	29	100.0	380.13	100.0
組成比 (%)	0	13.8	0	0	13.8	37.9	20.7	6.9	6.9				

クラスタ-e 9G-16区にあるが、4点の遺物が散在する小規模なものである。クラスタ

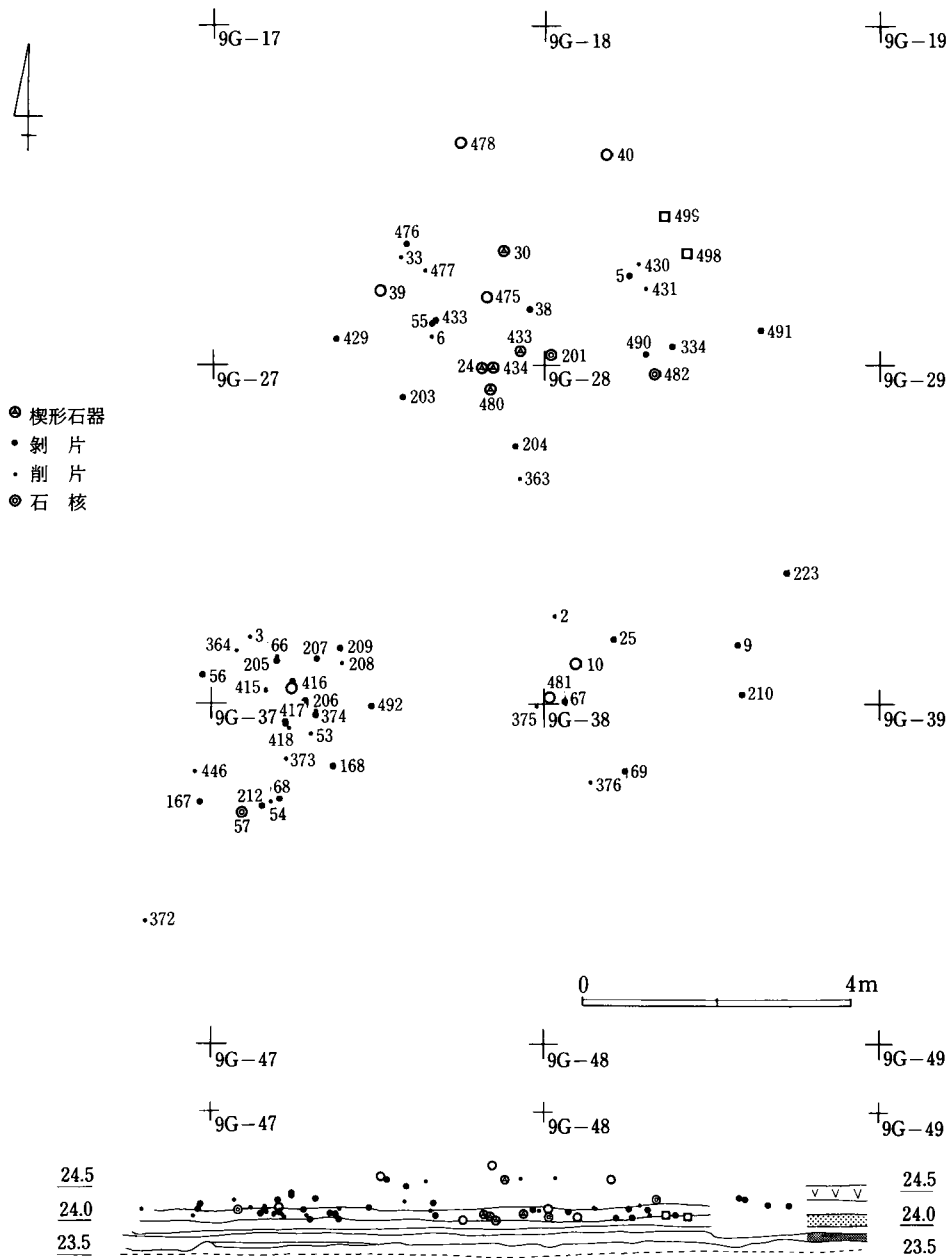


第287図 第41ブロッククラスタ-eの石器実測図

ーbと接しており、両者の分離は便宜的なものと言わざるを得ない。あるいは、9G-17ポイント周辺の遺物はクラスタ-eに含める方がよいのかもしれない。安山岩の剥片類のみによって構成されている。いずれも安山岩の楔形石器から剥落されたものと見られる。

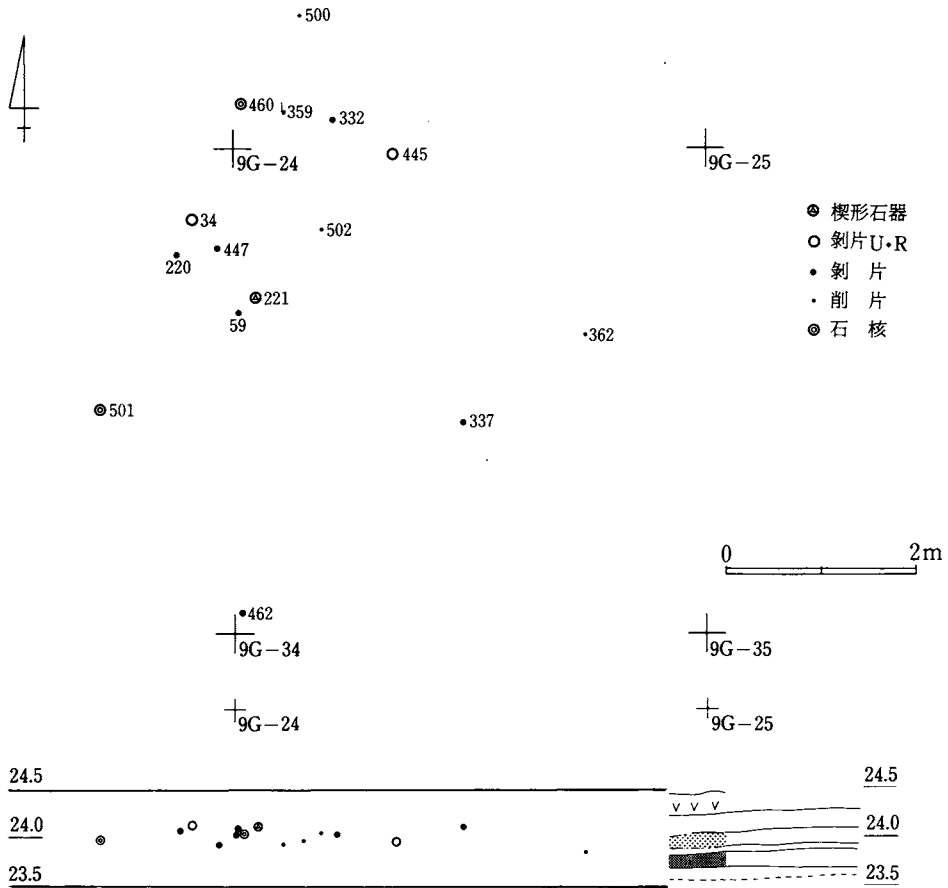
第137表 クラスタ-e 遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	楔形石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
安山岩 93	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	50.0	3.92	69.4
安山岩 不明	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	50.0	1.73	30.6
総数	0	0	0	0	0	2	2	0	0	4	100.0	5.65	100.0
組成比 (%)	0	0	0	0	0	50.0	50.0	0	0				



第288図 第41ブロック遺物出土状況(クラスターd・h・i)

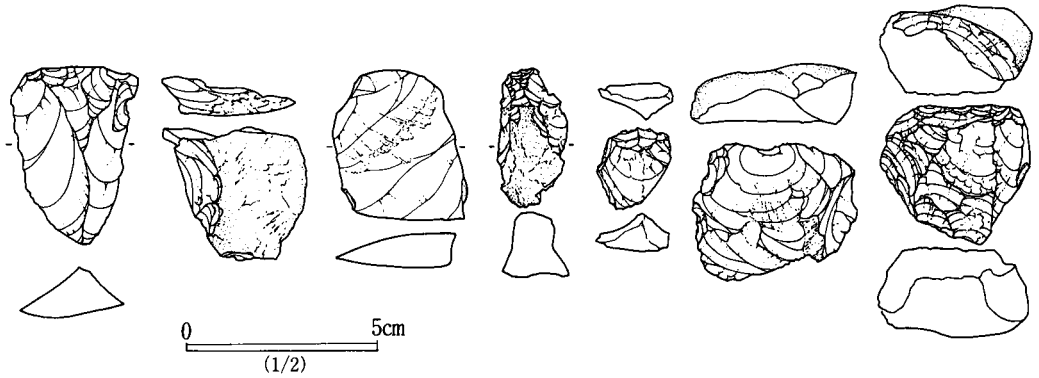
クラスター f 9G-24ポイントの東側を中心に分布する資料を一括した。ポイントの近傍、径約3mの範囲に遺物の集中が認められるが、その外縁にも分布がひろがっている。剥片類を中心としているが、楔形石器1点、石核2点を含んでいる。剥片には通常の石核から剥離された比較的大き目のものと、楔形石器から剥離された小型のものとの2者が含まれている。石核のうち、ホルンフェルス製のものは、両極加撃による楔形石器の仲間であると考えられる。



第292図 第41ブロック遺物出土状況(クラスターf)

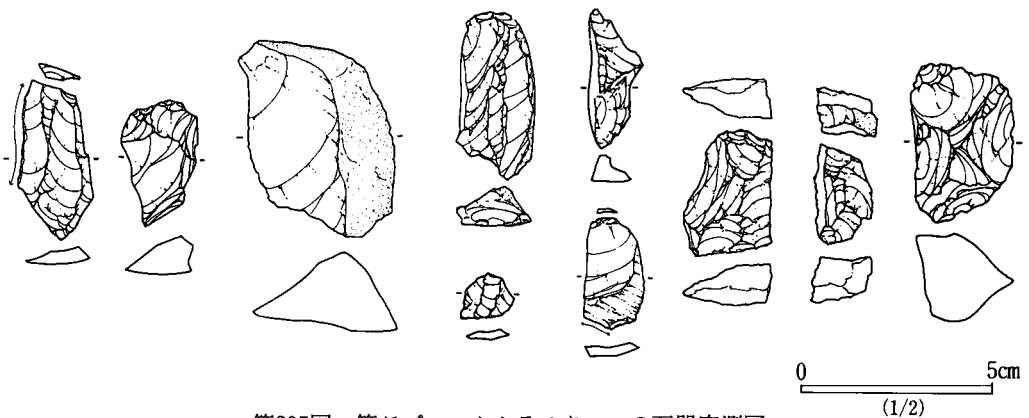
第138表 クラスター f 遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	楔形石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珉質頁岩 111	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	6.7	14.41	11.8
珉質頁岩 120	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	6.7	2.29	1.9
安山岩 100	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2	13.3	5.84	4.8
安山岩 107	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	6.7	5.60	4.6
安山岩 110	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	6.7	15.95	13.0
安山岩 不明	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	13.3	0.87	0.7
流紋岩質凝灰岩 14	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	6.7	15.89	13.0
流紋岩質凝灰岩 15	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	6.7	1.37	1.1
流紋岩質凝灰岩 18	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	13.3	22.74	18.6
ホルンフェルス 11	0	0	0	0	0	0	2	1	0	3	20.0	37.38	30.6
総数	0	1	0	0	2	6	4	2	0	15	100.0	122.34	100.0
組成比 (%)	0	6.7	0	0	13.3	40.0	26.7	13.3	0				



第293図 第41ブロッククラスター f の石器実測図

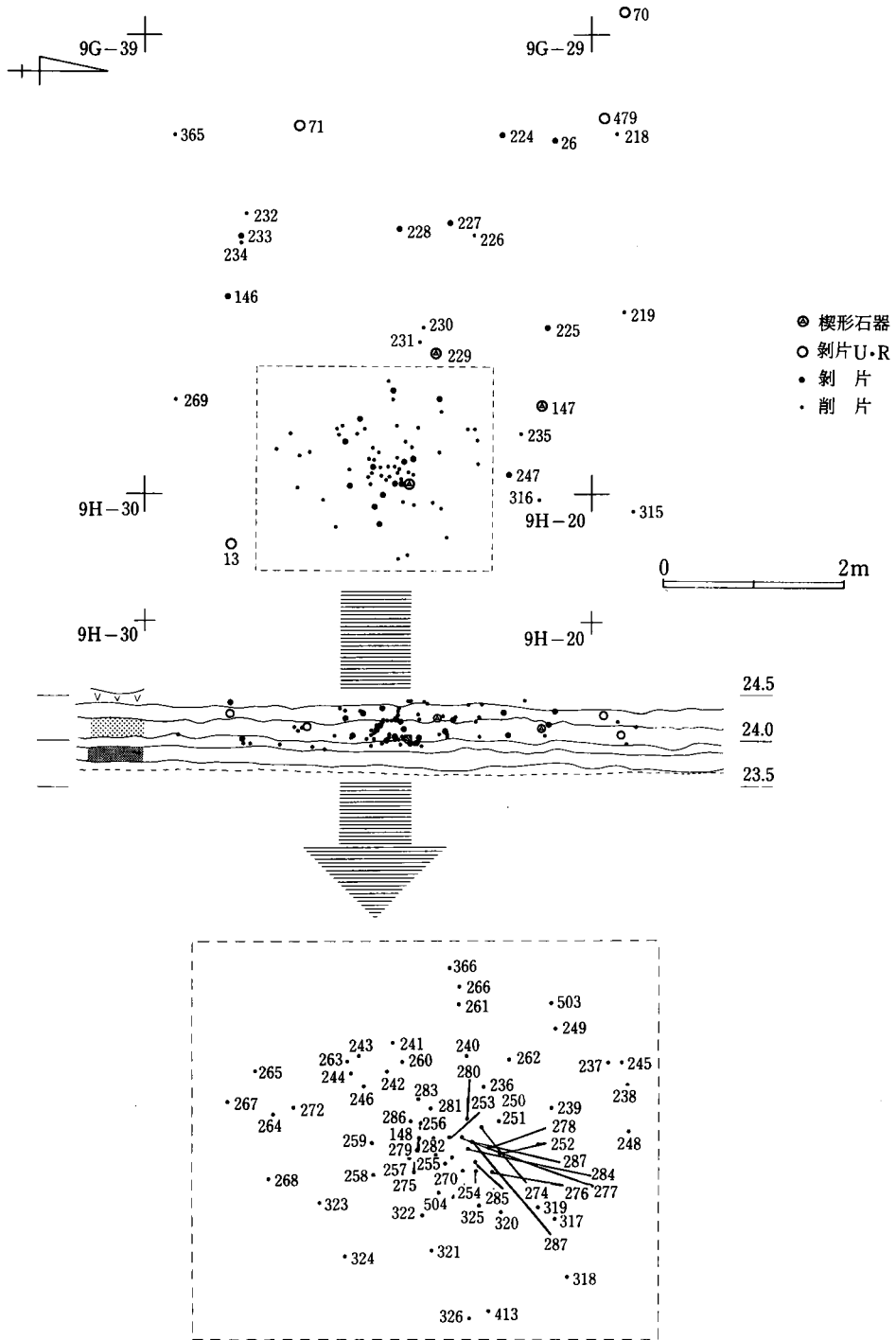
クラスター g 9 G-29区を中心としている。93点という比較的多量の石器を検出した。9 G-29区東側の直径 3 m 位の部分が稠密な分布範囲で、この西側に拡散するように散漫な分布域がひろがっている。全体の飛散範囲は、南北 7 m、東西 8 m に及んでいる。石器組成は、楔形石器 3 点、石核 1 点の他は全て剥片類によって占められている。石核は珪化木製で、同一母岩の剥片 2 点を伴うが、接合せず、クラスター内部での消費の痕跡は乏しい。一方、安山岩 100 を見ると、楔形石器 2 点、剥片 16 点、削片 60 点、計 78 点という多くの資料から構成され、その大半が楔形石器から剥落した剥片と見られる。しかし、接合例は無く、連続的な両極加撃を経て、細かいかけらが次々と飛散した状況を反映している。



第295図 第41ブロッククラスター g の石器実測図

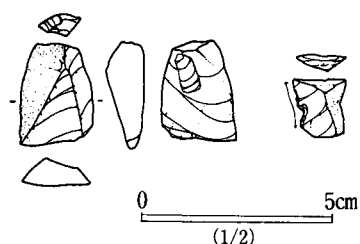
第139表 クラスター g 遺物集計表

母岩番号	ナイフ形 石器	楔形 石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 99	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.1	5.46	2.9
珪質頁岩 106	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.1	1.27	0.7



第294図 第41ブロック遺物出土状況(クラスターg)

母岩番号	ナイフ形石器	楔形石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
チャート 45	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.1	3.76	2.0
珪化木 1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2	2.2	36.09	19.5
安山岩 92	0	1	0	0	0	2	0	0	0	3	3.3	42.57	23.0
安山岩 100	0	2	0	0	0	16	60	0	0	78	84.8	90.39	48.8
安山岩 不明	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	3.3	0.77	0.4
流紋岩質凝灰岩 22	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.1	2.47	1.3
ホルンフェルス 11	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	2.2	2.41	1.3
総数	0	3	0	0	4	21	63	1	0	92	100.0	185.19	100.0
組成比 (%)	0	3.3	0	0	4.3	22.8	68.5	1.1	0				



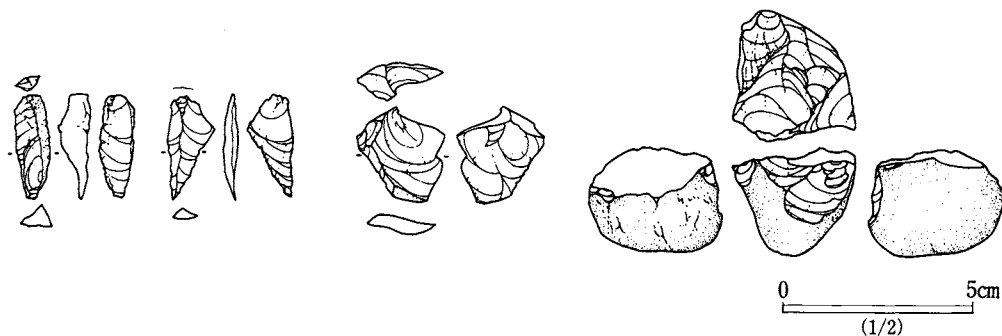
第290図 第41ブロッククラスターhの石器実測図

クラスターh 9G-38ポイントの東側にある。クラスターdの南、クラスターgの西側にあたり、それぞれと境界を接するような位置を占めている。分布範囲は東西4.5m、南北3.5mで、9点の遺物がまばらに分散している。9点の資料は全て剥片類で、諸種の母岩を少量ずつ含んでいる。

第140表 クラスターh遺物集計表

母岩番号	ナイフ形石器	楔形石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
砂岩 56	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	10.0	0.30	1.6
泥岩 25	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	20.0	6.24	34.1
珪質頁岩 106	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	10.0	2.73	14.9
珪質頁岩 121	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	20.0	1.97	10.8
安山岩 99	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	10.0	5.01	27.3
安山岩 100	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	10.0	1.15	6.3
安山岩 不明	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	10.0	0.26	1.4
流紋岩質凝灰岩 22	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	10.0	0.66	3.6
総数	0	0	0	0	2	6	2	0	0	10	100.0	18.32	100.0
組成比 (%)	0	0	0	0	20.0	60.0	20.0	0	0				

クラスターi クラスターhのすぐ西隣に位置している。9G-37ポイントの東側の東西3m、南北4.5mの範囲を分布範囲としている。22点ある遺物は、石核2点を除くと、全てが剥片類から構成されている。安山岩99、流紋岩質凝灰岩2が比較的多いが、そのうち大半のものが、図示した2例の如く、楔形石器からの剝落剥片である。小石刃様の例がある。他に、珪質頁岩119のように、打面—作業面交代型の石核と、それから得られる貝殻状の剥片もある。



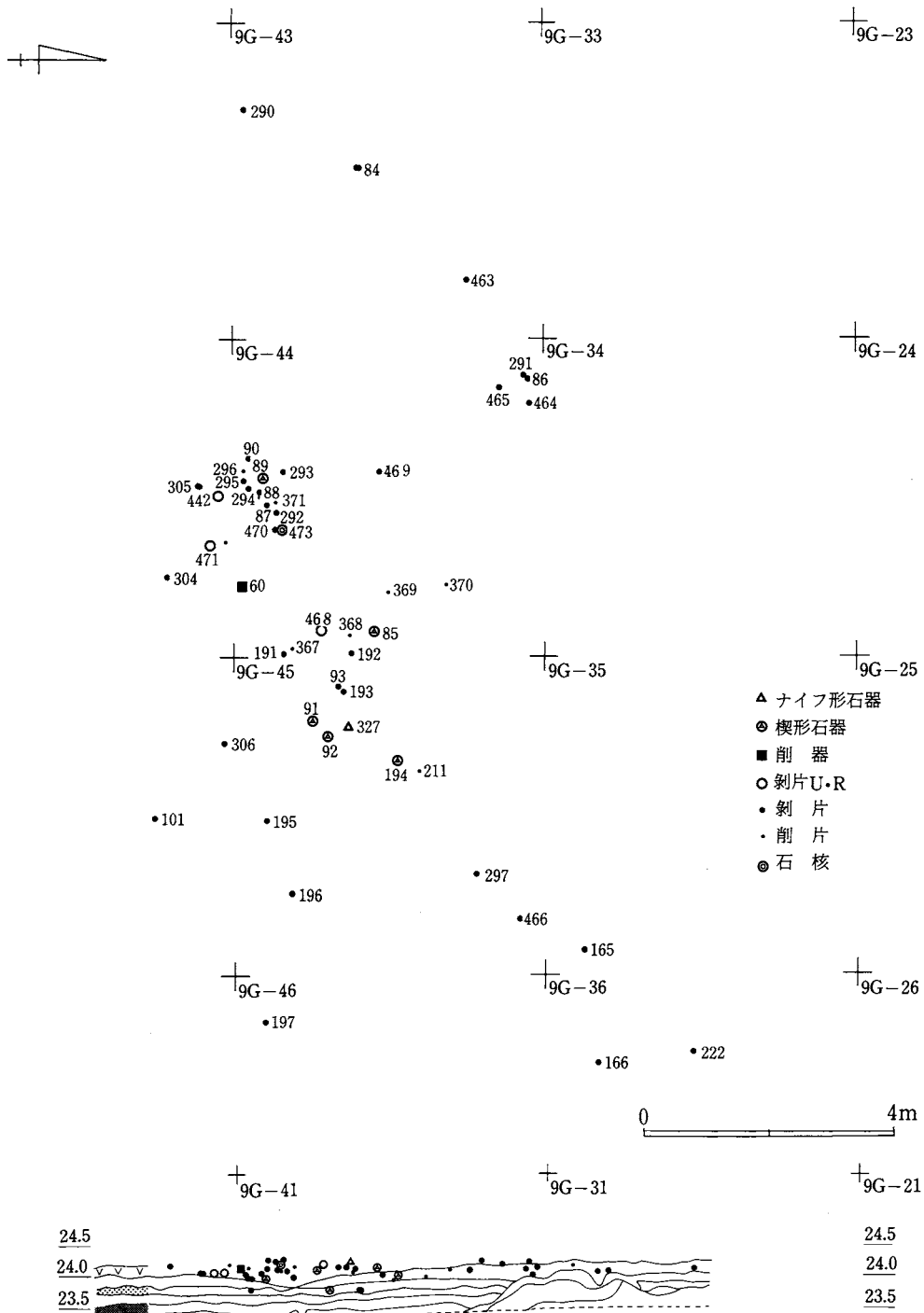
第291図 第41ブロッククラスター i の石器実測図

第141表 クラスター i 遺物集計表

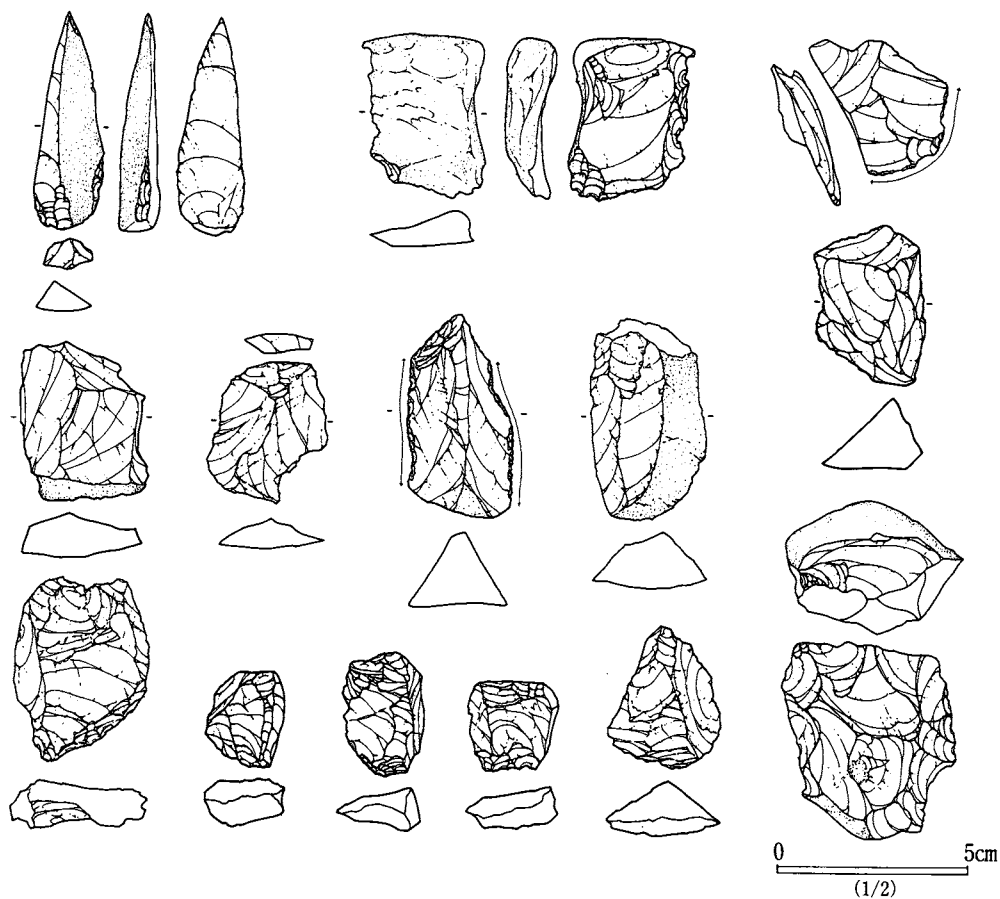
母岩番号	ナイフ形 石器	楔形 石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総 数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
砂 岩 57	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	4.0	0.72	0.8
珪質頁岩 117	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	8.0	0.23	0.3
珪質頁岩 119	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	8.0	33.66	37.2
珪質頁岩 121	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	8.0	1.10	1.2
安山岩 93	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	8.0	10.18	11.3
安山岩 99	0	0	0	0	0	6	0	0	0	6	24.0	31.06	34.4
安山岩 不明	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	16.0	0.99	1.1
流紋岩質凝灰岩 2	0	0	0	0	1	1	2	0	0	4	16.0	2.58	2.9
流紋岩質凝灰岩 14	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	4.0	3.52	3.9
流紋岩質凝灰岩 24	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	4.0	6.35	7.0
総 数	0	0	0	0	1	12	11	1	0	25	100.0	90.39	100.0
組成比 (%)	0	0	0	0	4.0	48.0	44.0	4.0	0				

クラスター j 9 G-33~36区を中心とする東西に長い分布域を一括した。クラスターの範囲としては、南北9 m、東西15 mという本ブロック中最大の範囲が括られたが、分布の中心は、9 G-34区、35区にあり、その外縁に広く散布が及んでいると理解されよう。なお、図の垂直分布は、斜面部下方谷沿いの土層断面図へ投影しているため、全体にレベルが高目に表記されている。この土層図から読み取れるように、本クラスターの西側はローム層が一部グライ化しており、それは特に9 G-31区と51区に顕著であることから、ブロックの形成時には、クラスター k、j のあたりが、浅い谷の水際に張り出した舌部に相当したものと考えることができる。このように推定し得るとすれば、ブロック内部のクラスターの配置は、湿潤な谷部の凹凸に従った弱い舌状の張り出し部という微地形に制約されたものと理解されるかもしれない。

クラスター j から検出された資料数は58点ある。内容は、ナイフ形石器1点、楔形石器5点、削器1点、石核1点、他は全て剥片類となっており、諸種の石器類を網羅している点が特徴と言えよう。楔形石器は安山岩に集中し、その剥片の大半が楔形石器から剥落したものである。



第296図 第41ブロック遺物出土状況(クラスターj)



第297図 第41ブロッククラスターjの石器実測図

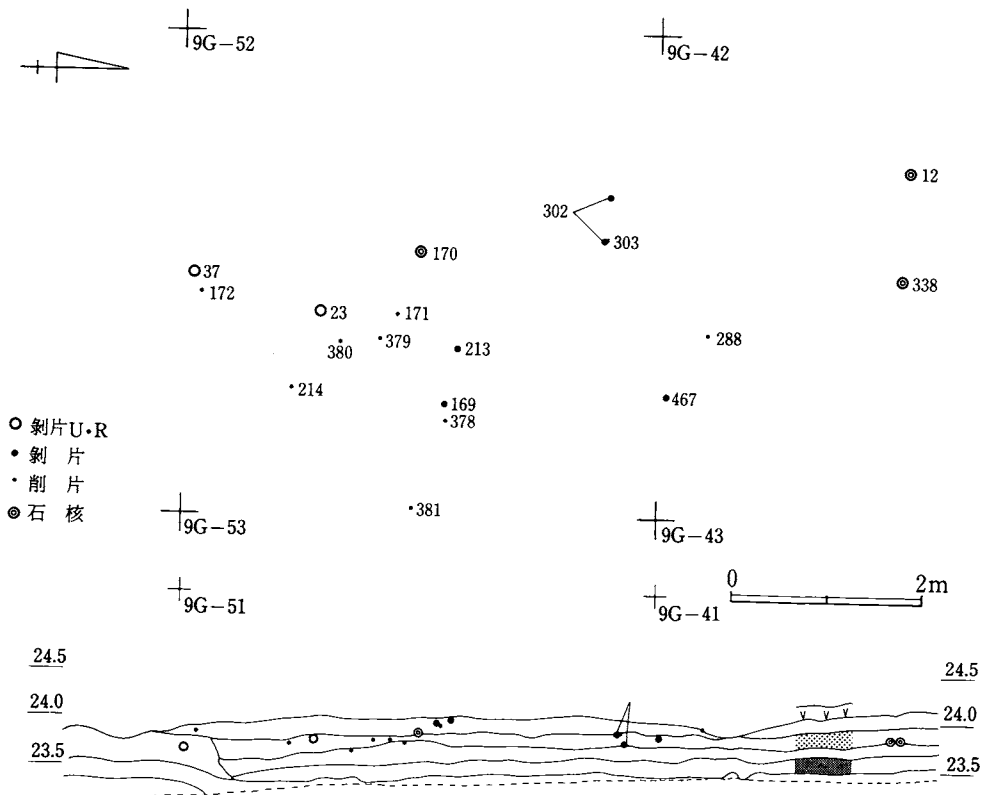
第142表 クラスターj 遺物集計表

母岩番号	ナイフ形 石器	楔形 石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総 数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 120	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1.8	17.52	4.3
安山岩 91	0	4	0	0	0	7	0	0	0	11	20.0	108.94	27.0
安山岩 93	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	3.6	6.04	1.5
安山岩 96	0	1	0	0	0	6	0	0	0	7	12.7	30.04	7.4
安山岩 99	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	3.6	2.69	0.7
安山岩 100	0	0	0	0	0	11	2	0	0	13	23.6	73.23	18.1
安山岩 104	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.8	8.61	2.1
安山岩 不明	0	0	0	0	0	0	6	0	0	6	10.9	2.01	0.5
流紋岩質凝灰岩 12	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.8	8.29	2.0
流紋岩質凝灰岩 18	0	0	0	0	0	5	0	0	0	5	9.1	39.71	9.8
流紋岩質凝灰岩 19	0	0	0	0	2	3	0	0	0	5	9.1	33.69	8.3
流紋岩質凝灰岩 20	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1.8	73.20	18.1
総 数	1	5	1	0	3	34	10	1	0	55	100.0	403.97	100.0
組成比 (%)	1.8	9.1	1.8	0	5.5	61.8	18.2	1.8	0				

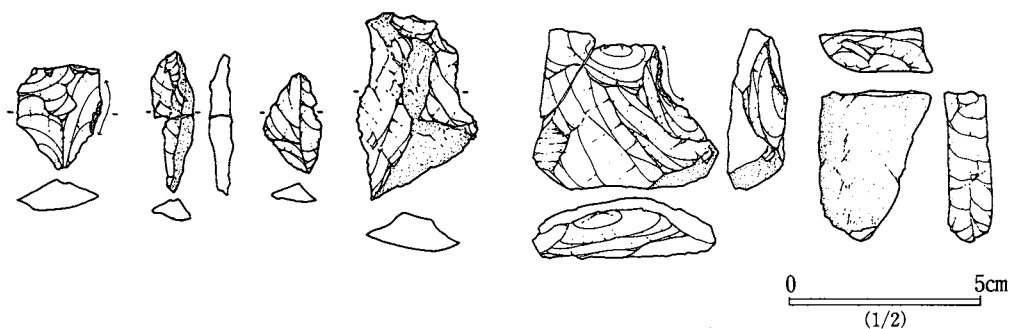
しかし、ここでも接合するものが無く、先に指摘した楔形石器の消耗に伴う細片化と共に、作出された剥片の一部が選択的に刃器として供用された可能性をも考慮する要があろう。安山岩以外には、珪質頁岩と流紋岩質凝灰岩があるが、いずれも一般的剥片剥離によるもので、両極石片を含んでいない。

クラスターk 9G-42区、ブロック西端を占めるクラスターである。前項で指摘した埋積谷に弱く突出する舌部の末端にあり、クラスターの南北はローム層のグライ化が進んでいる。分布範囲は東西4.5m、南北10.5mという細長い範囲で、クラスターjと一部重複するかもしれない。遺物は9J-42区の中央部にややまとまっているが、全体的には散漫な状態となっている。18点の石器類からなり、石核3点、剥片類15点という構成となっている。安山岩の剥片は打面のはじけた小型のものが多く、両極石片と見られる。他の石材は少数で、いずれも使用の痕跡を留めている。

クラスターl 9G-39区から49区にかけて、東西6m、南北9mの範囲を占めている。9G-39区と、49区のみからなり、両者は別箇のクラスターとも見られるが、一括した。また、クラスターgとは北側で接しており、一部遺物の配分は恣意的となっている。特に、本



第298図 第41ブロック遺物出土状況(クラスターk)



第299図 第41ブロッククラスターkの石器実測図

第143表 クラスターk遺物集計表

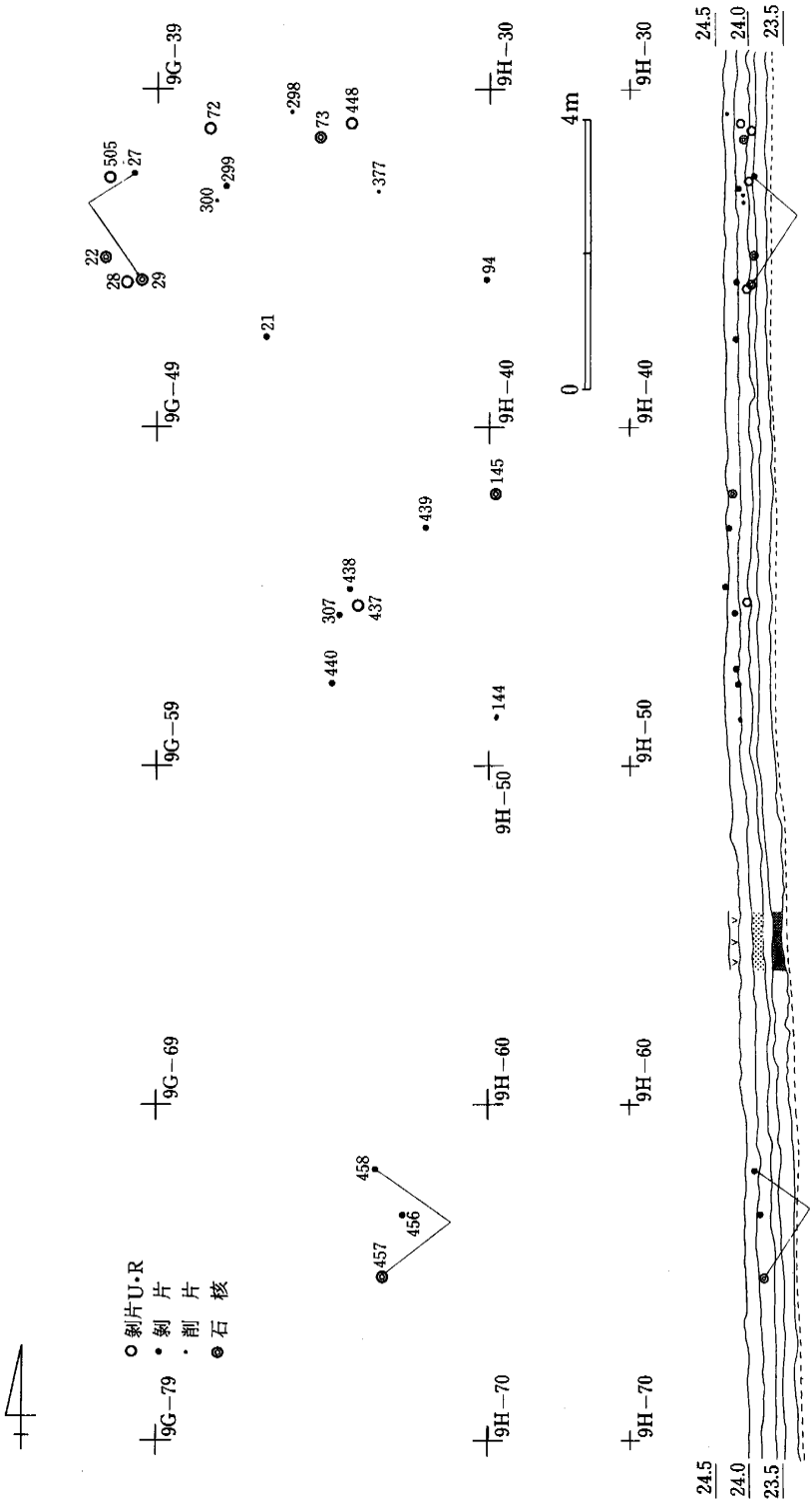
母岩番号	ナイフ形 石器	楔形 石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総 数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珩質粘板岩 5	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	5.6	26.58	32.9
珩質頁岩 104	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	5.6	4.41	5.5
珩質頁岩 114	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	5.6	0.97	1.2
安山岩 93	0	0	0	0	0	1	2	1	0	4	22.2	9.87	12.2
安山岩 99	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	11.1	3.15	3.9
安山岩 100	0	0	0	0	0	2	2	0	0	4	22.2	17.42	21.5
安山岩 111	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	5.6	16.06	19.9
安山岩 不明	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	22.2	2.41	2.9
総 数	0	0	0	0	2	4	9	3	0	18	100.0	80.87	100.0
組成比 (%)	0	0	0	0	11.1	22.2	50.0	16.7	0				

クラスターに含めた安山岩100は、消費地点を勘案すると、本来クラスターgに帰属する可能性が高い。

21点の遺物から構成され、3点の石核を除くと、他は全て剥片類に包括される。9種の母岩を含むが、いずれも4点以下の資料しか保有しておらず、クラスター内での母岩の消費を示唆するものはない。一方、剥片のなかには、使用痕あるいは簡略な2次加工痕をもつものが相当量含まれている。

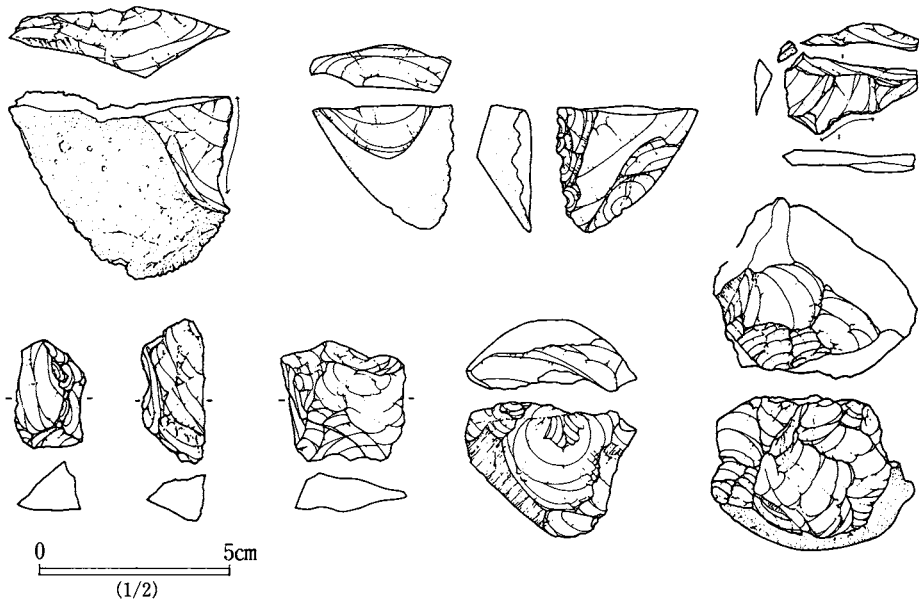
第144表 クラスターl遺物集計表

母岩番号	ナイフ形 石器	楔形 石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総 数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珩質頁岩 102	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	4.8	2.83	1.2
珩質頁岩 103	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	4.8	23.12	9.6
珩質頁岩 106	0	0	0	0	1	1	0	1	0	3	14.3	14.32	5.9
珩化木 1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	4.8	3.68	1.5
安山岩 91	0	0	0	0	0	1	1	1	0	3	14.3	112.53	46.5
安山岩 100	0	0	0	0	0	2	2	0	0	4	19.0	8.51	3.5
安山岩 不明	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	9.5	2.03	0.8
流紋岩質凝灰岩 10	0	0	0	0	1	3	0	0	0	4	19.0	21.94	9.1



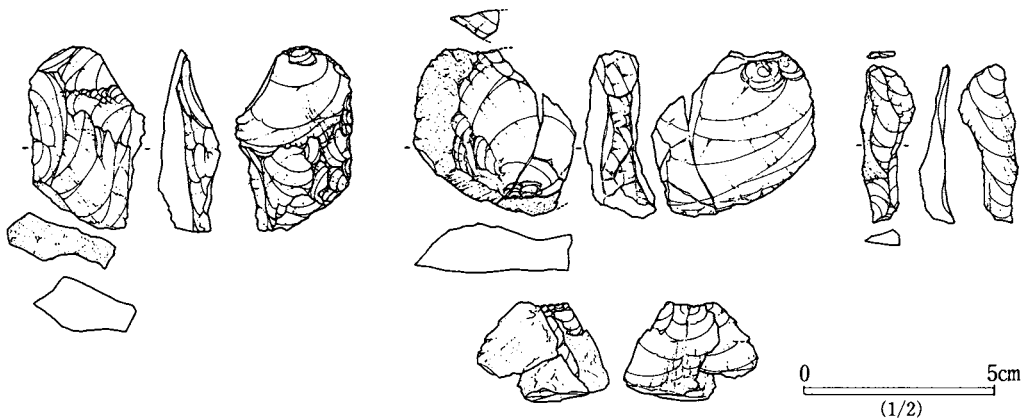
第300図 第41ブロック遺物出土状況(クラスターI・p)

母岩番号	ナイフ形 石器	楔形 石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
流紋岩質凝灰岩 16	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	4.8	38.01	15.7
ホルンフェルス 12	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	4.8	15.01	6.2
総数	0	0	0	0	6	7	5	3	0	21	100.0	241.98	100.0
組成比 (%)	0	0	0	0	28.6	33.3	23.8	14.3	0				

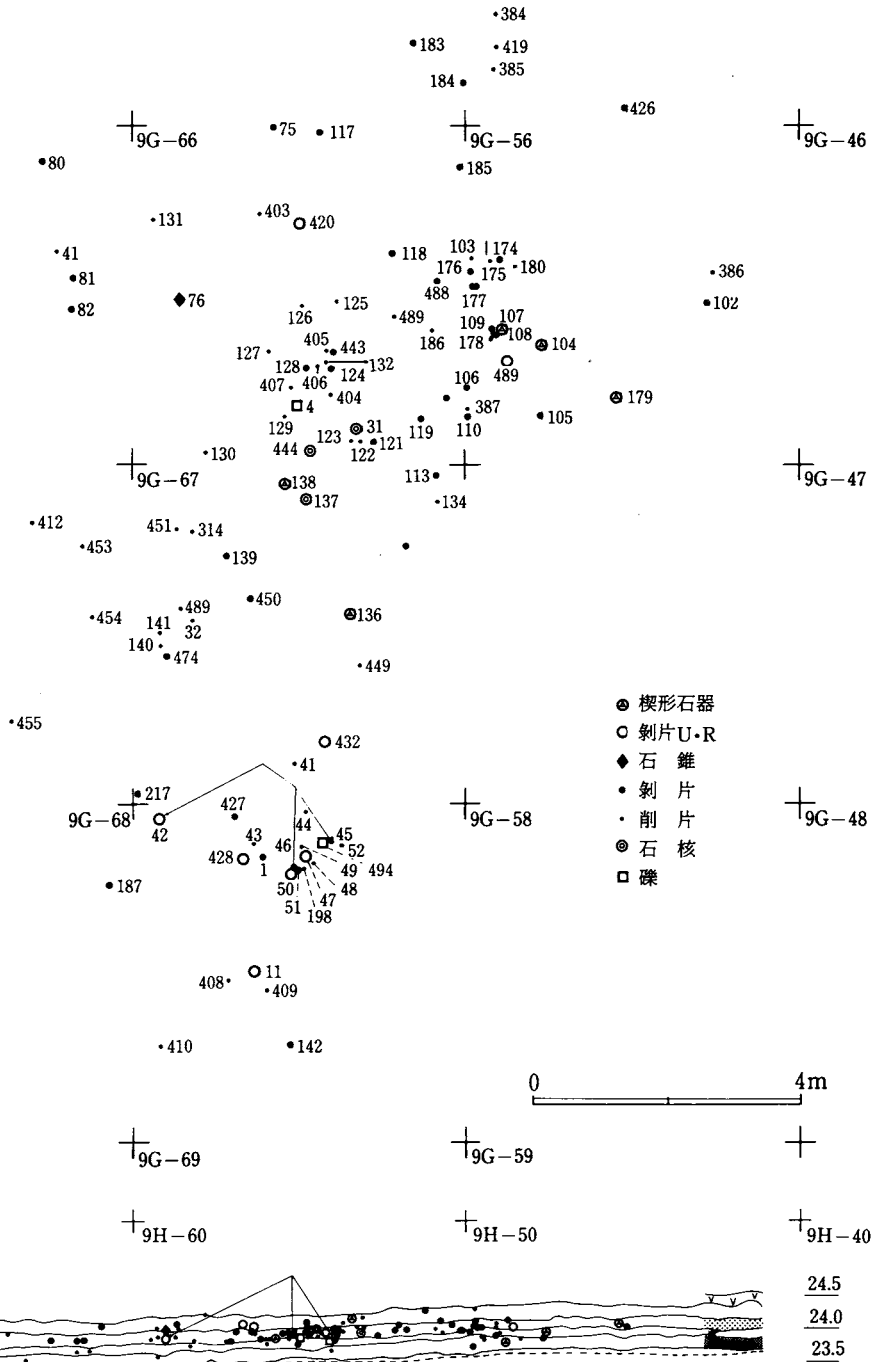
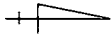


第301図 第41ブロッククラスター1の石器実測図

クラスターm 9G-57区の西側から58区にかけて分布する一群を本クラスターに一括した。あるいは、9G-57区のみと、58区のみとに2分した方が適切であるかもしれない。



第304図 第41ブロッククラスターmの石器実測図



第303図 第41ブロック遺物出土状況(クラスターm-n)

分布は東西 8 m、南北 5 m の長円形を呈している。39 点の資料から構成されているが、石核と礫片とを 1 点ずつ含む他は、全て剥片類によって占められている。剥片には、使用痕や加工痕のあるものが多い。また、受熱剥片もある。14 種の母岩をもつが、珩質頁岩 116 と流紋岩質凝灰岩 16 が比較的まとまっている。両者の分布状況を見ると、珩質頁岩が 9 G-58 区を中心に、流紋岩質凝灰岩が 9 G-57 区を中心に分布している。なお、流紋岩質凝灰岩 16 のうち、接合する 4 点は、受熱剥片である。礫片は、珩質珩岩の消費地点内に遺存していた。

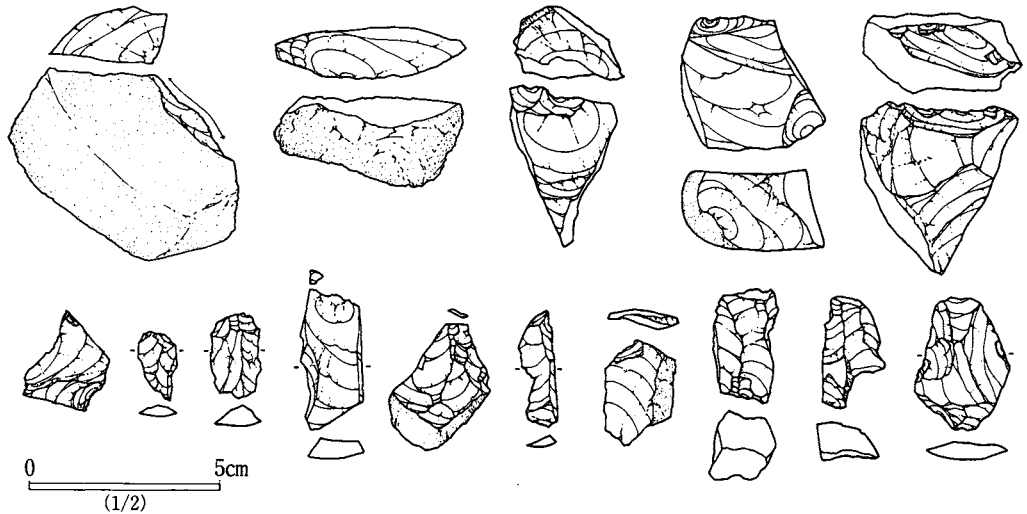
第145表 クラスタ—m遺物集計表

母岩番号	ナイフ形 石器	楔形 石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
砂岩 49	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2.6	1.32	0.4
泥岩 26	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2.6	7.53	2.5
珩質頁岩 109	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2.6	1.16	0.4
珩質頁岩 116	0	0	0	0	3	3	6	0	0	12	30.8	13.07	4.3
安山岩 91	0	0	0	0	0	2	2	0	0	4	10.3	9.87	3.2
安山岩 93	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2.6	3.39	1.1
安山岩 96	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2.6	0.69	0.2
安山岩 99	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2.6	1.64	0.5
安山岩 100	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2.6	<0.01	<0.01
安山岩 不明	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	10.3	0.81	0.3
流紋岩質凝灰岩 6	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	5.1	11.95	3.9
流紋岩質凝灰岩 8	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2.6	19.08	6.3
流紋岩質凝灰岩 16	0	0	0	0	0	4	3	0	0	7	17.9	26.08	8.6
流紋岩質凝灰岩 21	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2.6	14.87	4.9
流紋岩 15	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2.6	192.50	63.3
総数	0	0	0	0	6	15	17	0	1	39	100.0	303.97	100.0
組成比 (%)	0	0	0	0	15.4	38.5	43.6	0	2.6				

クラスタ—n 9 G-56区を中心とする、東西 7 m、南北 10 m という広い範囲内に点々と石器が分布している。東南部でクラスタ—m と一部重複し、西側でクラスタ—o に、北側ではクラスタ—j に接している。微視的に見ると、9 G-46区南半の一群、9 G-51区東半の一群、及び両者をとまぐ外縁部の分布域に細分することも可能であるが、それらは連続的であり、分離は困難である。この状況を母岩別分布に変換してみると、安山岩 91 が最も広い範囲に分布し、ほぼクラスタ—の大枠を決定しているのに対し、安山岩 91、珩化木 1、各種流紋岩質凝灰岩の分布は偏在的であり、この結果として、クラスタ—内部の分布の疎密を生じているものと見られる。これは、おそらく何次にも亘る廃棄の過程を反映しており、更に、各廃棄に随伴する各廃棄後の 2 次的移動 (transform) の状況をも示唆している。

遺物は比較的多く、71 点ある。内容は、楔形石器と剥片を主体とし、本ブロックの全般的特徴と良く一致している。安山岩製の石器は、その大半が楔形石器と、そこから剥落した剥片に

よって占められ、そのなかには、比較的整った擬石刃もある。安山岩以外の石材はいずれも少数で、クラスター内で組織的に消費されたものはない。また、これらのうち、両極技法によって剥片を生産した痕跡を留める例もない。

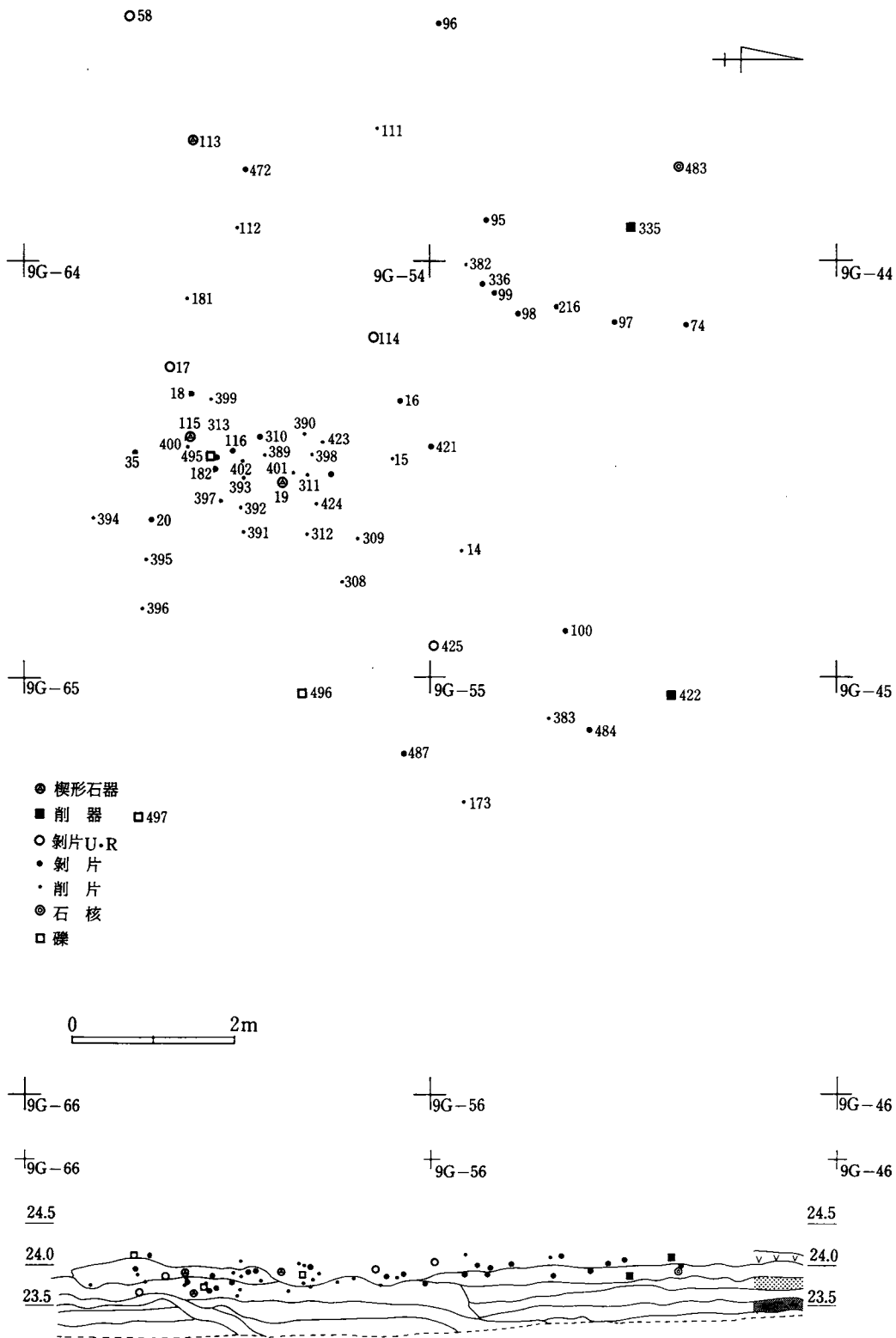


第305図 第41ブロッククラスターnの石器実測図

第146表 クラスターn遺物集計表

母岩番号	ナイフ形 石器	楔形 石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 108	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1.4	31.34	9.5
珪化木 1	0	0	0	1	0	6	1	0	0	8	11.3	16.36	5.0
安山岩 91	0	4	0	0	0	16	11	1	0	32	45.1	108.47	33.0
安山岩 93	0	1	0	0	0	6	4	0	0	11	15.5	18.85	5.7
安山岩 不明	0	0	0	0	0	0	10	0	0	10	14.1	4.35	1.3
流紋岩質凝灰岩 2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1.4	0.22	0.1
流紋岩質凝灰岩 3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.4	35.99	11.0
流紋岩質凝灰岩 5	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.4	10.48	3.2
流紋岩質凝灰岩 13	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	2.8	36.19	11.0
流紋岩質凝灰岩 23	0	0	0	0	1	1	1	0	0	3	4.2	3.74	1.1
砂岩 58	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.4	62.50	19.0
総数	0	5	0	1	2	31	28	3	1	71	100.0	328.49	100.0
組成比 (%)	0	7.0	0	1.4	2.8	43.7	39.4	4.2	1.4				

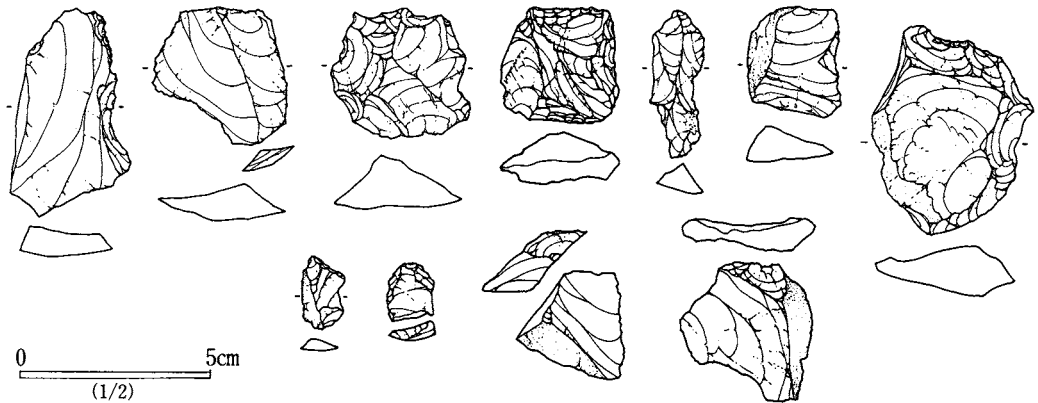
クラスターo 9G-64区を中心とし、近接する5区に及び広い分布を示している。その範囲は東西13m、南北10mで、周囲を、j、k、nの各クラスターが囲繞している。クラスター内には、やはり分布の疎密があり、9G-54区のほぼ中央に砂岩の礫片を中心とする、剥片と削片の集中部が、また、9G区04ラインに沿って、楔形石器、削器、剥片の集中部が認められ



第306図 第41ブロック遺物出土状況(クラスター-o)

る。これを母岩別分布の観点から見ると、9G-54区の集中部は、安山岩100と珪質頁岩101から構成され、ブロックの西側には、安山岩91が多く、東側では各種の流紋岩質凝灰岩が卓越している。この状況はクラスターnに看取された状況と比較される。

63点の遺物がある。剥片類が多く、2次加工のあるものは少量である。本クラスターにおいても、安山岩は楔形石器とその剥片によって構成されている。それ以外の石材は、一般的な剥片剥離に従って得られたものが多い。礫片は3点あるが、散在している。

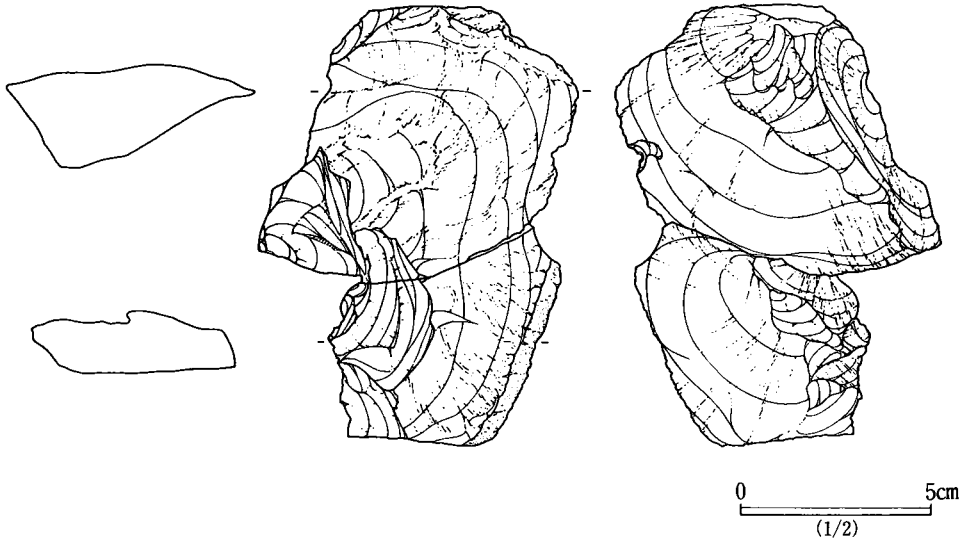


第307図 第41ブロッククラスターoの石器実測図

第147表 クラスターo遺物集計表

母岩番号	ナイフ形 石器	楔形 石器	削器	石鏃	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
珪質頁岩 101	0	1	0	0	1	3	2	0	0	7	11.1	8.72	2.4
珪質頁岩 112	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.6	3.65	1.0
珪質頁岩 119	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.6	1.90	0.5
珪化木 1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.6	5.90	1.6
安山岩 91	0	2	0	0	1	7	2	0	0	12	19.0	51.36	14.2
安山岩 93	0	0	0	0	0	1	2	0	0	3	4.8	4.08	1.1
安山岩 99	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.6	7.50	2.1
安山岩 100	0	0	0	0	0	2	4	0	0	6	9.5	7.93	2.2
安山岩 109	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2	3.2	22.08	6.1
安山岩 不明	0	0	0	0	0	0	16	0	0	16	25.4	6.11	1.7
流紋岩質凝灰岩 4	0	0	1	0	0	1	2	0	0	4	6.3	18.47	5.1
流紋岩質凝灰岩 5	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.6	7.59	2.1
流紋岩質凝灰岩 19	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.6	3.58	1.0
流紋岩質凝灰岩 23	0	0	0	0	0	3	0	1	0	4	6.3	38.57	10.7
流紋岩 16	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.6	81.60	22.6
流紋岩 17	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	3.2	92.45	25.6
総数	0	3	2	0	4	22	28	1	3	63	100.0	361.49	100.0
組成比 (%)	0	4.8	3.2	0	6.3	34.9	44.4	1.6	4.8				

クラスターP 9G-69区から3点の遺物の出土があり、これをクラスターPとした。剥片2点と石核が1点あるが、石核と剥片のうち1点は同一母岩で接合する。この資料は、本地点の石器の中では最も大きな剥片を素材としており、所謂 cache に近い性格のクラスターであるのかもしれない。



第302図 第41ブロッククラスターPの石器実測図

第148表 クラスターP遺物集計表

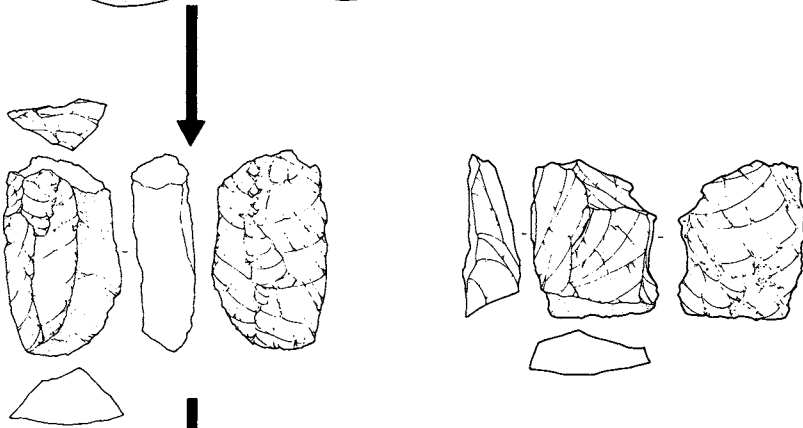
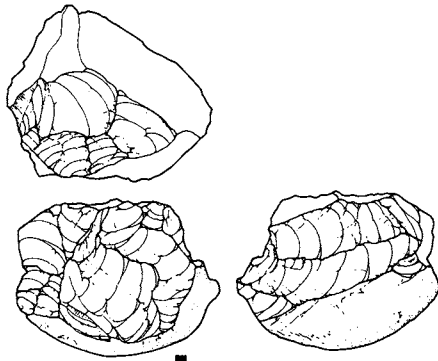
母岩番号	ナイフ形石器	楔形石器	削器	石鏃	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
流紋岩質凝灰岩 16	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	33.3	1.69	1.1
流紋岩質凝灰岩 17	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	66.7	156.27	98.9
総数	0	0	0	0	0	2	0	1	0	3	100.0	157.96	100.0
組成比 (%)	0	0	0	0	0	66.7	0	33.3	0				

b) 遺物の分類 第41ブロックからは498点の石器と、7点の礫を検出した。16箇所のクラスターから構成されるブロックはほぼ完掘の状況であり、この時期の石器群の内容と遺跡のなりたちを窺知し得るものと判断してよいであろう。その石器群は次のような構成となっている。

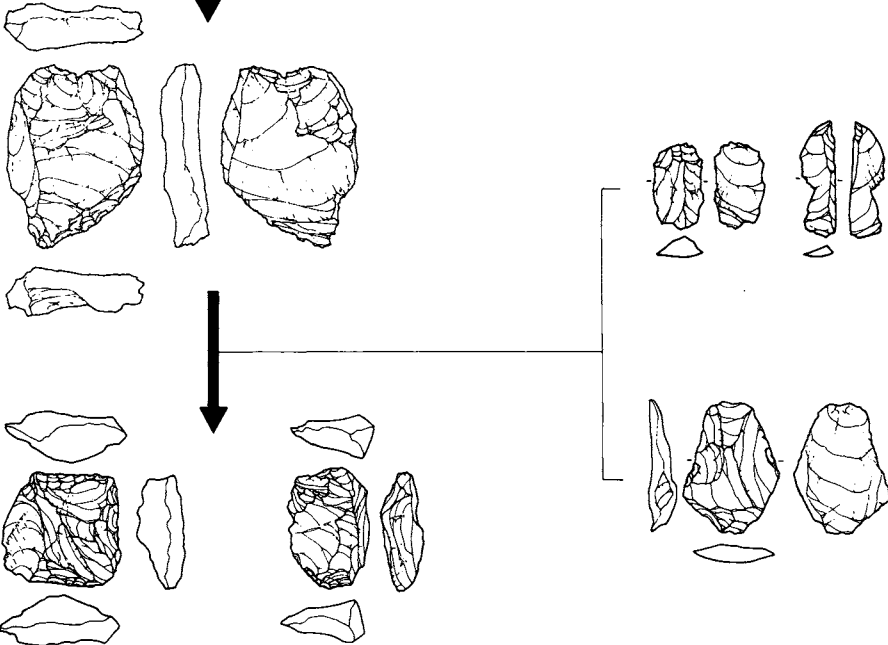
第1群 楔形石器とその生産=消費過程に関連するものを本群にまとめた。

楔形石器は27点あり、その出現頻度は極めて高く、2次加工の認められる石器の大半を占めていると評価される。石材別では、珪質頁岩3点、安山岩22点、流紋岩質凝灰岩2点であり、安山岩が多用されているばかりか、ブロック内での母岩消費はこの器種の製作に収斂していると言ってもよい。この製作の過程に関しては、安山岩91に帰属する62点の母岩別資料を基礎と

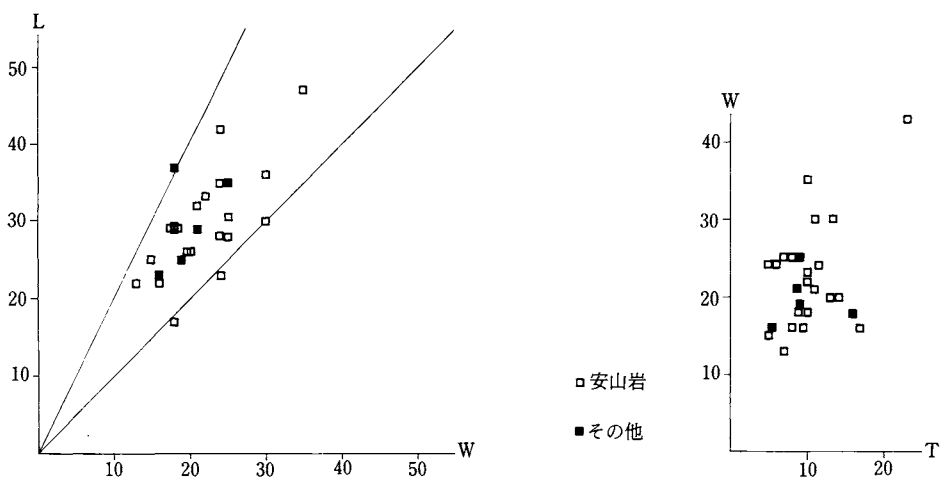
I-1



I-2



第308図 安山岩91における母岩消費システム



第309図 第41ブロック楔形石器の長・幅(左),幅・厚(右)分布(単位mm)

して、具体的に復原することができる(第308図)。全ての母岩について、この過程が該当するかどうかは分からないが、例えば、安山岩93や、安山岩100などでは、ほぼ同様の手順に従っているものと見られる。

第1工程 楔形石器の素材となる剥片が生産される段階である。石核には各種あり、後述する第II群の石核構成に準じたものと考えられるが(第310図)、素材の大きさから見て、3類は少数と見られよう。また、安山岩94やホルンフェルス15の石核のように、円礫を台石上に固定し、石槌で礫面に垂直加撃を繰り返すことによって生じる楔形をした両極石核もある。この場合、素材の確保から始まる全工程が両極技法によって貫徹されることになり、究めて斉一性の強い手法の存在が予測される。

この工程で、素材としてどのような属性を持つ剥片が選択されるかに就いては、十分な資料が無いが、多量の楔形石器を保有する安山岩91、93、100の剥片について検討したい。安山岩91の剥片の長/幅分布、幅/厚分布を見ると(第332図)大別して2群からなる資料群が抽出される。すなわち、長さ30mm、幅20mm、厚さ10mm以下の一群と、少数ではあるがそれよりも大きく、長く、厚い一群とがある。若干の差異はあるが、これと同一の傾向は、他の2種の石材に関しても認められる。そして、この3母岩は楔形石器に関連する資料を多く保有している。あるいは過半が楔形石器から剥落した剥片によって構成されているとも推定されるので、剥片のうち小型の一群が楔形石器に由来するものであると仮定することが妥当であろう。この場合、大型の一群は、楔形石器の直接的母体であると言うことはできないが、少なくとも、その母胎が帰属していた母集団の一部を構成することは確からしく思われる。そうすると、大体、長さ35mm、幅25mm、厚さ10mmぐらいの矩形の剥片を楔形石器の母体として仮定することができるかもしれない。なお、楔形石器の大きさは、ほぼ小型の剥片群の上限と一致しており、紋上の推定を裏付ける結果が得られている(第309図)。

第2工程 第1工程で得られた剥片に両極加撃を加え、多数の小型剥片と楔形石器とが生産される。この工程から生じる小型剥片の大きさは、第1工程で瞥見したとおりである。安山岩91では、長さ10mm～30mm、幅5mm～20mm、厚さ2mm～10mm、安山岩93では、長さ10mm～30mm、幅10mm～20mm、厚さ2mm～10mm、安山岩100では、長さ5mm～25mm、幅2mm～20mm、厚さ1mm～10mmの範囲に分布しており、大半のものが、長幅指数100～200の間に収まっている。これが、楔形石器の最終局面での大きさと調和的であることも既に述べたとおりである。

この点と関連して、楔形石器から剥離された剥片のうち、2次加工の認められるものがある点に注意したい。具体的には、38・51等の諸例が挙げられるが、いずれも楔形石器から得られた薄手板状の剥片を素材とし、更に両極技法によって縁辺部にのみ簡略な2次加工を行っている。従って、これ自体も楔形石器として分類されることになるが、石核としての機能を失っている。この、あたかも入れ子状に楔形石器を生じる過程の存在は、極めて多様な両極技法の応用と見られるが、石核か石器かという硬直的2分法を超えて、むしろ、それらの連続性の内部に、楔形石器の本質的な性格があることを示唆している。

以上の観察に従うとすれば、第2工程は、(1)楔形石器から多量の小型剥片を生産し、その一部を目的に応じて選択する過程、(2)小型剥片に2次加工を加えて、道具としての楔形石器を再生産する過程、(3)最終的に生産された楔形石器が諸種の石器として供用される過程、をも複合的に保有する工程であることが予測され、文字通りの楔としての機能は、極く限定された機能であることも推定されることになる。

最後に、第I群が、本ブロックに占める量的割合を検討したい。第18ブロック全体で識別し得た母岩数は82母岩あるが、このうち5母岩は礫片であるので除外すると、石器の素材として使用されているのは77母岩になる。これらの母岩のうち、両極技法による剥片、あるいは楔形石器を含むものは、確実なものだけでも

珪質頁岩—105、107、115、116

安山岩—91、92、93、94、96、100、107、109

流紋岩質凝灰岩—2、9、15、22、23

の17母岩ある。これは、全母岩数の22%であり、個体数としては決して多いとは言えない。しかし、単純に各母岩に帰属する資料数を合計すると、270点に達し、これは礫片を除く全石器数498点の54%となる。すなわち、大雑把に見積って、本ブロックの石器群の約半分を第I群が占めていることになり、その比重は決して小さいものではない。逆に、第I群以外の資料は、個体数は多いものの、一個体に帰属する石器の数量が、第I群と比較して明らかに少数であることが判明している。この対照的なあり方の中に、楔形石器の保有する特異な位相を窺うことができるかもしれない。

これまで検討してきた工程によって生じる石器は、ほぼ次のように分類することができる。

楔形石器 大きく3類に分類される。

a. 横に長い扁平なもの。表裏両面に縦長の剥離痕があり、企図的に剥片を生産している。一側縁に剥片剥離によって生じた未加工の縁辺を残す場合が多い。

b. 縦に長い厚手のもの。やはり両面に剥片剥離痕があり、石核的色彩の濃いものが多いが、両端に小さい階段状剥離によって生じる鋭角的な刃部を保持するものがある。

c. 薄手板状の剥片、特に、楔形石器から2次的に生じる剥片の縁辺部に弱い両極加撃を加えるもの。石核としての機能は認められない。諸種の形態を生じるが、未加工の縁辺を必ず残している。

楔形石器剥片 (OEF) 楔形石器から剥離された剥片を、それ以外の石核から得られた剥片と区別して特に OEF と呼ぶ。既に指摘したように、OEF のなかには使用痕を留めるものがあり、石器として機能したものが相当量あると考えられる。これらは、たいへん小型のものが多いので、植刃として用いられたにちがいない。誤解を恐れずに言えば、このあり方は細石刃と良く似ており、小剥片を並列して植刃する手法が、この段階に登場するものと見ることができる。

第II群 一般的な剥片剥離手法に立脚する一群で、諸種の石核と、それから得られる剥片を素材とする石器とから構成されている。本群もまた2工程に分けて考察することができる。

第1工程 剥片生産の工程である。良好な接合資料を欠き、工程の細部を明らかにすることは出来なかったが、石核の状態から、大別して4類の剥片剥離工程を抽出した(第310図)。周知の技法であるので簡単に概説するに留める。

石核 a 打面と剥離作業面を入れかえながら剥片を生産するものである。円礫素材のものが多い。

石核 b 打面を固定せず、求心的な剥離によって剥片を生産するもの。やはり円礫を素材としている。

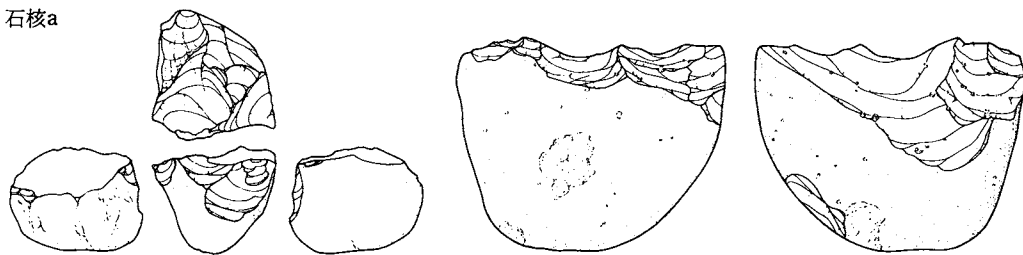
石核 c 剥片製の盤状石核である。背・腹両面を打面をするものや、一面から横打するものなど、いくつかの変化がある。

石核 d 所謂、賽子状をした多面型の石核と考えられる。安山岩91、流紋岩質凝灰岩10などに、この類の石核、あるいは、それから剥取された剥片がある。

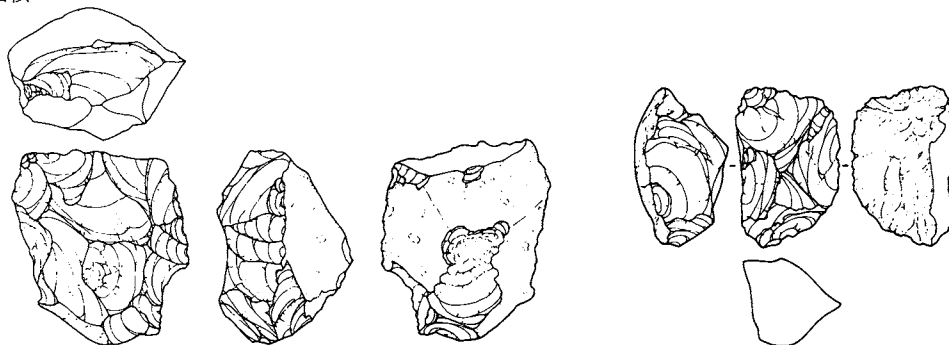
以上の各類は、極めて一般的な剥片剥離手法であり、先土器時代の全期間を通して存在するばかりか、縄文時代にも及んでいる。石核各類からは多様な剥片を生じると考えられるが、各類と産出剥片の属性の対応関係は良く分かっていない。

第2工程 第1工程によって得られた剥片は、2次加工を経ずに属性選択の過程を経て用いられる場合が最も多かったと考えられるが、肉眼的に使用痕の確認される剥片はOEFと比較した場合、格段に大型のものが多く、大体は着柄されずに使用されたものと考えられる(UF)。これら以外に、極めて少数ではあるが、2次加工の認められる石器がある。この2次加工の過

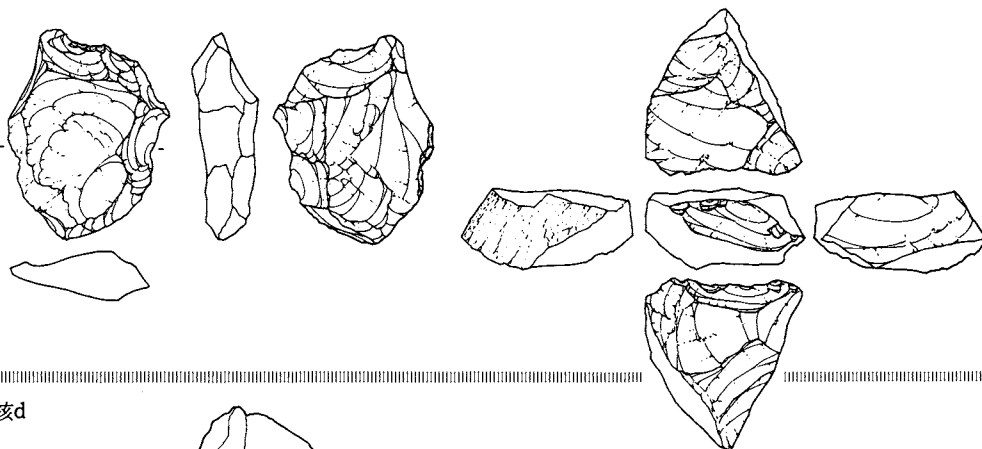
石核a



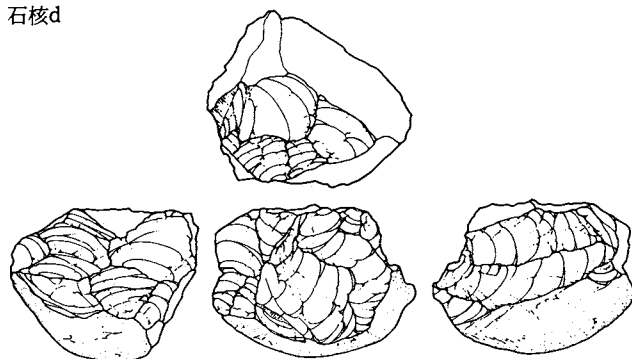
石核b



石核c

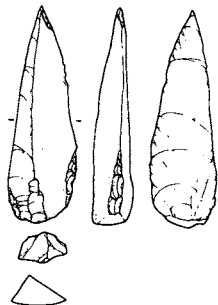


石核d

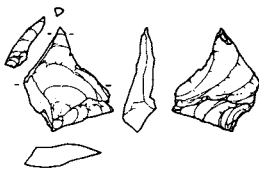


第310図 第41ブロックの石核構成

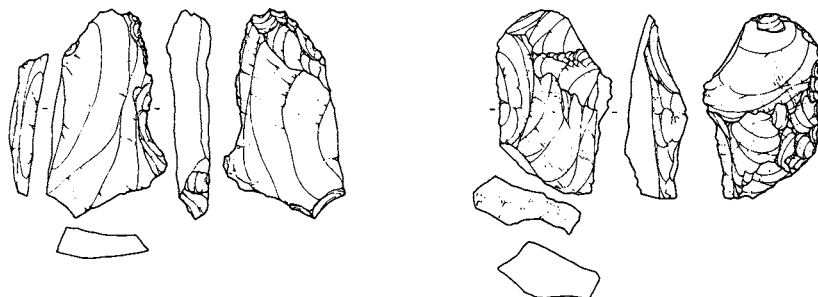
ナイフ形石器



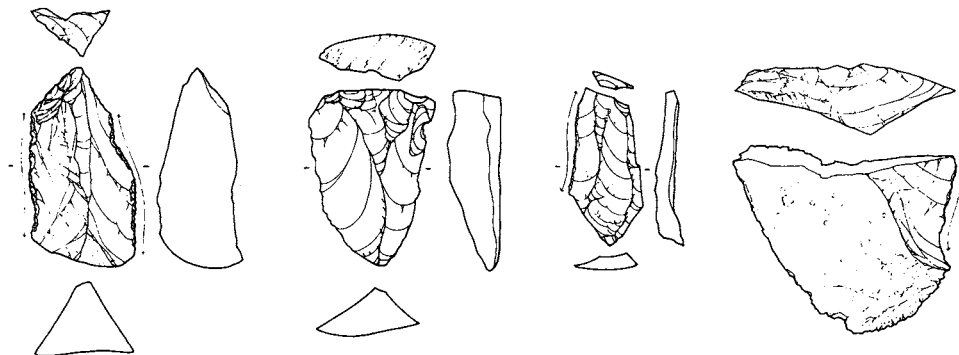
石 錐



削 器



使用痕のある剥片



第311図 第41ブロックの器種構成

第149表 第41ブロック母岩別遺物集計表

	ナイフ形 石器	楔形 石器	削器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)	関連 クラスター
砂岩 49	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.2	1.32	0.04	m
砂岩 56	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.2	0.30	0.01	h
砂岩 57	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.2	0.72	0.02	i
砂岩 58	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.2	62.50	2.1	n
泥岩 22	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.2	3.47	0.1	d
泥岩 23	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.2	0.87	0.03	d
泥岩 24	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	0.4	11.96	0.4	b
泥岩 25	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	0.4	6.24	0.2	h
泥岩 26	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	7.53	0.2	m
珩質粘板岩 5	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.2	26.58	0.9	k
珩質頁岩 99	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	5.46	0.2	g
珩質頁岩 101	0	1	0	0	1	3	2	0	0	7	1.4	8.72	0.3	o
珩質頁岩 102	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	2.83	0.1	ℓ
珩質頁岩 103	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.2	23.12	0.8	ℓ
珩質頁岩 104	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	4.41	0.1	k
珩質頁岩 105	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2	6.33	0.2	d
珩質頁岩 106	0	0	0	0	1	3	0	1	0	5	1.0	18.32	0.6	g・h・ℓ
珩質頁岩 107	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2	16.93	0.6	d
珩質頁岩 108	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.2	31.34	1.0	n
珩質頁岩 109	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.2	1.16	0.04	m
珩質頁岩 110	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.2	0.42	0.01	d
珩質頁岩 111	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	14.41	0.5	f
珩質頁岩 112	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.2	3.65	0.1	o
珩質頁岩 113	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.2	2.85	0.09	c
珩質頁岩 114	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	0.97	0.03	k
珩質頁岩 115	0	0	0	0	2	1	0	0	0	3	0.6	2.52	0.08	d
珩質頁岩 116	0	0	0	0	3	3	6	0	0	12	2.4	13.07	0.4	m
珩質頁岩 117	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0.2	0.23	0.01	i
珩質頁岩 119	0	0	0	0	1	2	0	1	0	4	0.8	38.10	1.3	d・i・o
珩質頁岩 120	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2	0.2	19.81	0.7	f・j
珩質頁岩 121	0	0	0	0	4	4	1	0	0	9	1.8	44.81	1.5	a・h・i
チャート 45	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	3.76	0.1	g
珩化木 1	0	0	0	1	2	7	1	1	0	12	2.4	62.03	2.0	g・ℓ・n・o
安山岩 90	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.2	38.26	1.3	c
安山岩 91	0	10	0	0	1	33	16	2	0	62	12.3	391.17	13.0	j・ℓ・m・n・o
安山岩 92	0	1	0	0	0	2	0	0	0	3	0.6	42.57	1.4	g
安山岩 93	0	4	0	0	0	21	13	1	0	39	7.7	122.98	4.1	b・c・e・i・j・k・m・n・o
安山岩 94	0	1	0	0	0	1	0	1	0	3	0.6	58.06	1.9	b
安山岩 96	0	1	0	0	0	7	0	1	0	8	1.6	30.73	1.0	j・m
安山岩 97	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0.4	16.48	0.5	b
安山岩 98	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.2	219.00	7.2	d
安山岩 99	0	0	0	0	0	13	3	0	0	16	3.2	82.47	2.7	b・d・h・i・j・k・m・o
安山岩 100	0	3	0	0	0	35	71	0	0	109	21.6	204.48	6.8	f・g・h・j・k・o・m・o
安山岩 104	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2	8.61	0.3	j

	ナイフ形 石器	楔形 石器	削器	石鏃	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)	関 連 クラスタ
安山岩 105	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	18.17	0.6	b
安山岩 107	0	2	0	0	0	3	0	0	0	5	1.0	32.59	1.1	a・b・f
安山岩 108	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.2	5.78	0.2	d
安山岩 109	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2	0.4	22.08	0.7	o
安山岩 110	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.2	15.95	0.5	f
安山岩 111	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.2	16.06	0.5	k
安山岩不明	0	0	0	0	0	0	75	0	0	75	14.9	31.98	1.1	a・b・d・e・f・g・h・i・j・ k・l・m・n・o
流紋岩質凝灰岩 1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.2	1.59	0.05	a
流紋岩質凝灰岩 2	0	0	0	0	1	1	3	0	0	5	1.0	2.80	0.09	i・n
流紋岩質凝灰岩 3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	35.99	1.2	n
流紋岩質凝灰岩 4	0	0	1	0	0	1	2	0	0	4	0.8	18.47	0.6	o
流紋岩質凝灰岩 5	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	0.4	18.07	0.6	n・o
流紋岩質凝灰岩 6	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	0.4	11.95	0.4	m
流紋岩質凝灰岩 7	0	0	0	0	0	1	2	0	0	3	0.6	9.97	0.3	d
流紋岩質凝灰岩 8	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	19.08	0.6	m
流紋岩質凝灰岩 9	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2	0.4	15.57	0.5	d
流紋岩質凝灰岩 10	0	0	0	0	1	5	0	0	0	6	1.2	31.33	1.0	b・c・l
流紋岩質凝灰岩 11	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.2	2.68	0.09	a
流紋岩質凝灰岩 12	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	8.29	0.3	j
流紋岩質凝灰岩 13	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0.4	36.19	1.2	n
流紋岩質凝灰岩 14	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2	0.4	19.41	0.6	f・i
流紋岩質凝灰岩 15	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.2	1.37	0.05	f
流紋岩質凝灰岩 16	0	0	0	0	1	5	3	0	0	9	1.8	65.78	2.2	l・m・p
流紋岩質凝灰岩 17	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0.4	156.27	5.2	p
流紋岩質凝灰岩 18	0	0	0	0	0	7	0	1	0	8	1.6	70.61	2.3	c・f・j
流紋岩質凝灰岩 19	0	0	0	0	2	4	0	0	0	6	1.2	37.27	1.2	j・o
流紋岩質凝灰岩 20	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.2	73.20	2.4	j
流紋岩質凝灰岩 21	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.2	14.87	0.5	m
流紋岩質凝灰岩 22	0	1	0	0	4	1	1	1	0	8	1.6	43.13	1.4	d・g・h
流紋岩質凝灰岩 23	0	0	0	0	1	4	1	1	0	7	1.4	42.31	1.4	n・o
流紋岩質凝灰岩 24	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3	0.6	12.13	0.4	d・i
流紋岩質凝灰岩 25	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	19.92	0.7	b
流紋岩 15	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.2	192.50	6.4	m
流紋岩 16	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.2	81.60	2.7	o
流紋岩 17	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.4	92.45	3.1	o
流紋岩 18	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.4	33.45	1.1	d
ホルンフェルス 11	0	0	0	0	0	2	2	1	0	5	1.0	39.79	1.3	f・g
ホルンフェルス 12	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.2	15.01	0.5	l
総 数	1	27	3	1	42	194	211	19	7	505	100.0	3,027.21	100.0	
組成比 (%)	0.2	5.3	0.6	0.2	8.3	38.4	41.8	3.8	1.4					

程を、属性選択の過程と合わせて第2工程とする。2次加工のある石器の器種構成は以下のとおりである。

ナイフ形石器 縦長剥片の基部と尖頭部に細かい加工のあるもの。基部調整のある石刃と関連があるものと見られる。

石錐 矩形をした剥片の側縁と底縁の周辺に2次加工を加えて、錐体部を作出するもの。

削器 いろいろな形態をした剥片の側縁部に剥離痕の認められるもの。側削器の一種と分類される。

以上の結果をまとめて、次の石器分類表を得る。

第I群

楔形石器 a 楔形石器 b 楔形石器 c

楔形石器から目的的に剥離された細石刃様の剥片 (OEFと略記)

第II群

使用痕のある剥片 (UFと略記)

ナイフ形石器 石錐 削器

第II群の器種構成の単調さと帰属資料の少なさが指摘される。しかし、石器群を全体として見た場合、そのような単調性と、量的僅少性を補填し、多様な機能の荷担者として第I群を位置づけることが可能である。

c)母岩構成とその分布 第41ブロックから得られた505点の資料は82種の母岩に還元されたが、各母岩の構成・内容と、16箇所に及ぶクラスターにどのように分布するかを検討する。石器の分類基準は前項に従う。また、全遺物の属性表を付し、更に、検出地点を明示した。

砂岩49 暗灰色の中粒の砂岩、礫面付きの小剥片が1点のみクラスターmにある。

第150表 第41ブロック遺物属性表 (砂岩49)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
1	9 G-58-7	削片	23×14×35	1.32		1(0)	9 × 3.5	98.5°	I	H	-	-	m

砂岩56 灰褐色の比較的細粒の石材。削片とした。クラスターhに1点のみある。

第151表 第41ブロック遺物属性表 (砂岩56)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
2	9 G-28-7	削片	12×10×2.5	0.30									h

砂岩57 黒褐色の緻密な石質で、砕けたような削片である。クラスターiにある。

第152表 第41ブロック遺物属性表 (砂岩57)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
3	9 G-27-10	削片	14×16×4.5	0.72									i

砂岩58 暗灰色をした中粒の砂岩礫の破片。被熱の痕跡はなく、石槌若しくは石砧の破片であるかもしれない。クラスター n にあるが、このクラスターは安山岩製の楔形石器の生産・消費地点であり、この工程に関連する可能性が高い。

第153表 第41ブロック遺物属性表 (砂岩58)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
4	9 G-56-28	礫	65×34×27	62.50									n

泥岩22 灰褐色をした細粒の石材。側面に細長く礫片を残した小削片が1点ある。

第154表 第41ブロック遺物属性表 (泥岩22)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
5	9 G-18-12	削片	29×26×6	3.47		C	—	98.5°	IV	H	—	—	d

泥岩23 灰褐色の緻密な石材。削片が1点クラスター d にある。

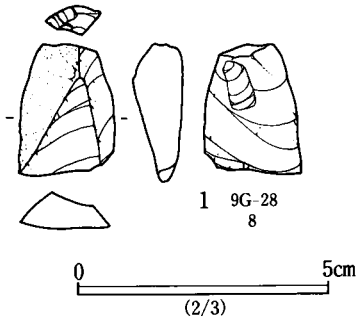
第155表 第41ブロック遺物属性表 (泥岩23)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
6	9 G-17-6	削片	20×14×5	0.87									d

泥岩24 淡褐色を呈し、白い細縞が並走する細粒、凝灰質の石材。平坦打面を持ち、礫面付きの縦長削片と、削片各1点とから構成される。クラスター b にある。

第156表 第41ブロック遺物属性表 (泥岩24)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
7	9 G-07-6	削片	14×11×25	0.37									b
8	9 G-07-33	削片	56×25×12	11.59		1(0)	18.5×9.5	118.5°	I	F	—	—	b



第312図 第41ブロック石器実測図 (泥岩25)

泥岩25 明褐～灰褐色をした細粒な石材。縦長だが、寸づまりな削片がクラスター h に2点ある。そのうち図示したものの腹面右側縁に使用痕が認められる。2例共にクラスター h にある。

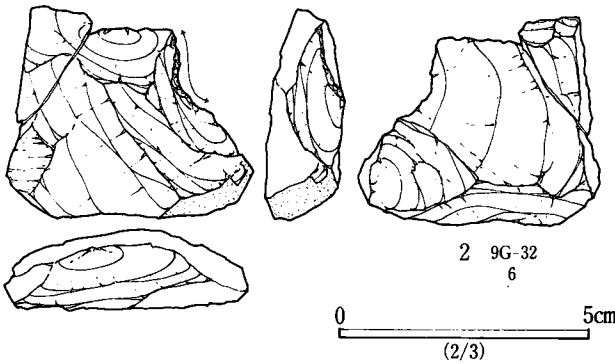
第157表 第41ブロック遺物属性表 (泥岩25)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
9	9 G-28-4	剥片	22×14×6.5	1.62		1 (0)	9 × 3.5	111°	II	H	-	-	h
10	9 G-28-8	剥片 U	27×20×9	4.62	1	4 (2)	11 × 6	110.5°	㊸	H	+	-	h

泥岩26 淡灰褐色の細粒な石材で、僅かに、珪化している。クラスター n に礫面付きのUFが1点ある。

第158表 第41ブロック遺物属性表 (泥岩26)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
11	9 G-58-20	剥片 U	38×23×11	7.53		1 (0)	22 × 9.5	118°	C	H	+	-	m

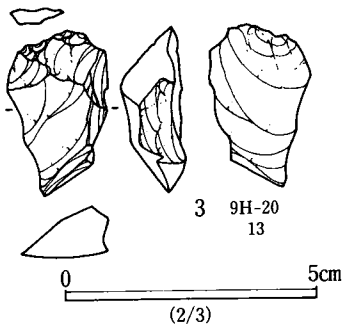


第313図 第41ブロック石器実測図(珪質粘板岩 5)

珪質粘板岩 5 暗青灰色をしたチャートに似た石材であるが、若干較質かつ均質な素材である。灰白色の不純物の薄層が入り、この部分で破損している。石核 c 類が1点のみクラスター k にある。この石核は凹削器に転用されている可能性が高い。

第159表 第41ブロック遺物属性表 (珪質粘板岩 5)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
12	9 G-32-6	石核	48×40×14	26.58	2								k



第314図 第41ブロック石器実測図(珪質頁岩99)

珪質頁岩99 明褐色をした珪化度の高い石材で、チャートに近い。暗灰色と白色の縞が見える。UFが1点のみクラスター g にある。使用痕としたのは、背面左側縁の微細な刃こぼれである。

第160表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩99)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
13	9 H-20-13	剥片 U	33×19×11	5.46	3	1 (0)	12 × 3	108.5°	II+IV	F	+	-	g

珪質頁岩101 黒色緻密な珪化岩で、薄茶色の縞が入る。1点の楔形石器と6点のOEFからなる。おそらく1個体の楔形石器の消費過程を反映している。OEFのうち1点には使用痕がある。全てクラスターoに集中している。

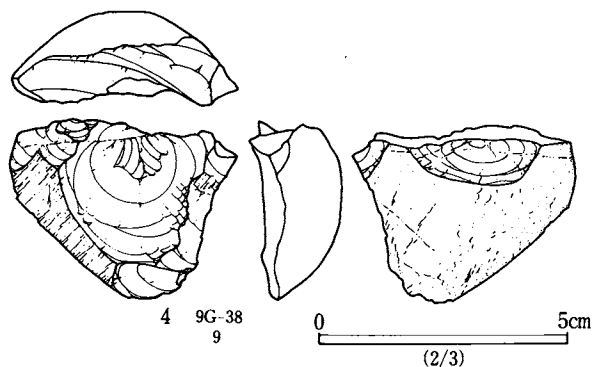
第161表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩101)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
14	9 G-44-16	削片	12×6×2.5	0.15									o
15	9 G-54-5	削片	16×14×7	1.31									o
16	9 G-54-6	剥片	15×22×3.5	0.80		ℓ	-	-	II	H	-	-	o
17	9 G-54-10	剥片 U	23×23×5	1.39		p	-	-	II	F	+	-	o
18	9 G-54-11	剥片	27×10×3	0.55		p	-	-	II	F	-	-	o
19	9 G-54-22	楔形石器	25×19×9	3.58									o
20	9 G-54-27	剥片	18×15×3	0.94		-	-	-	I	F	-	B	o

珪質頁岩102 暗青色のチャートに近い石材である。横長剥片の尾部に刃こぼれの認められるUF1点から構成されている。クラスター1から検出された。

第162表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩102)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
21	9 G-39-7	剥片 U	28×20×5	2.83		C	25 × 8	115.5°	不明	F	+		ℓ

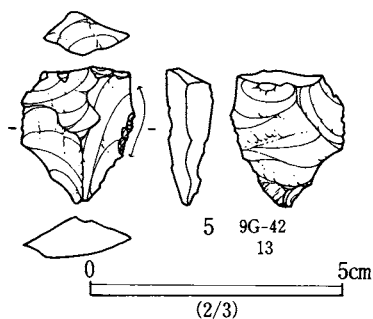


第315図 第41ブロック石器実測図(珪質頁岩103)

珪質頁岩103 暗青灰色のチャートに近い質感の石材である。白色の細縞が縦・横に入る。石核、おそらくa類が1点のみクラスター1にあるが、この石核から落された剥片は遺存していない。

第163表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩103)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
22	9 G-38-9	石核	43×36×16	23.12	4								ℓ

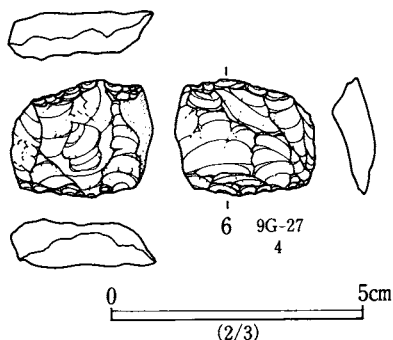


第316図 第41ブロック石器実測図(珪質頁岩104)

珪質頁岩104 暗灰色の珪化度の高い石材。
クラスターkからUFが1点検出されている。

第164表 第41ブロック遺物属性表(珪質頁岩104)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
23	9 G-42-13	剥片 U	27×23×9.5	4.41	5	1(0)	19 × 8.5	115°	II+III	F	+	-	k



第317図 第41ブロック石器実測図(珪質頁岩105)

珪質頁岩105 明褐色の斑紋が散る暗褐色の珪化岩である。楔形石器 a 類が単体でクラスターdに存在する。

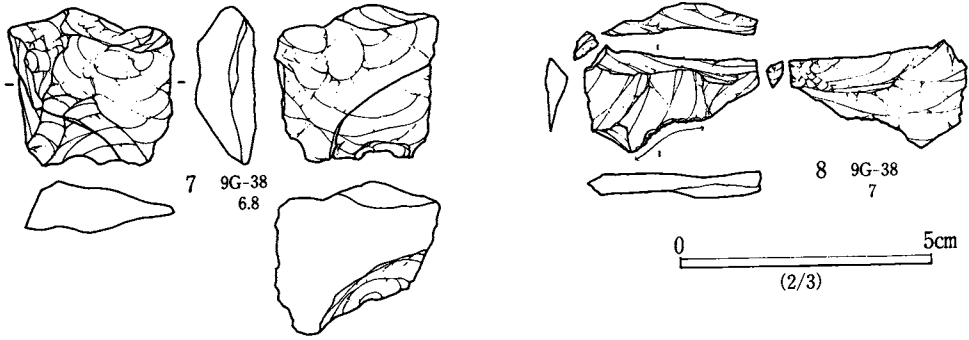
第165表 第41ブロック遺物属性表(珪質頁岩105)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
24	9 G-27-4	楔形石器	29×21×8.5	6.33	6								d

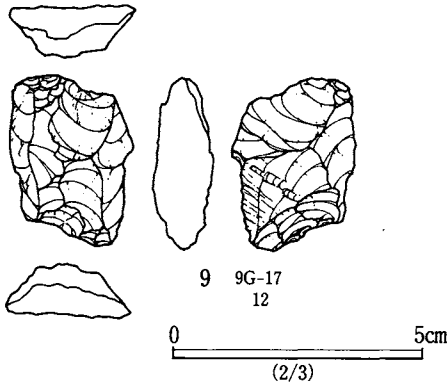
珪質頁岩106 青灰色に灰白色の斑紋の入る珪質な石材である。石核c類に小型の剥片が1点接合する(7)。横長剥片の一側縁に刃こぼれのあるUF(8)、他に小型で横長の剥片が2点ある。これらは、クラスターg、h、lなどブロック東縁部に点在している。

第166表 第41ブロック遺物属性表(珪質頁岩106)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
25	9 G-28-6	剥片	29×18×8	2.73		1(0)	23 × 6	111.5°	II	F	-	-	h
26	9 G-29-3	剥片	23×15×6	1.27		1(0)	15 × 5	90°	II	F	-	-	g
27	9 G-38-6	剥片	26×16×9	2.34	7	1(0)	20.5×11	83.5°	III	O	-	-	l
28	9 G-38-7	剥片 U	36×21×5	2.82	8	1(0)	10.5 × 3	108.5°	III+IV				l
29	9 G-38-8	石核	33×31×10.5	9.16	7								l



第318図 第41ブロック石器実測図(珪質頁岩106)

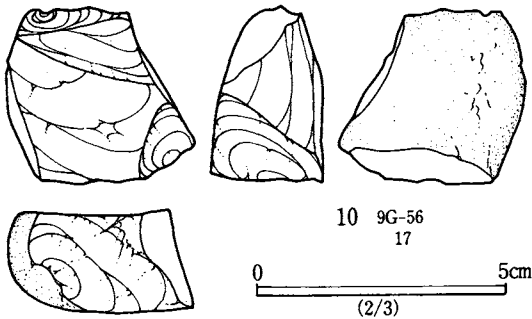


第319図 第41ブロック石器実測図(珪質頁岩107)

珪質頁岩107 淡青灰色をしている。楔形石器 a 類が単独でクラスター d から検出されている。両端は細かい step が切り合い使用痕の観察は不可能であるが、鋭利な刃部が形成されている。

第167表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩107)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
30	9 G-17-12	楔形石器	35×25×8.5	6.93	9								d



第320図 第41ブロック石器実測図(珪質頁岩108)

珪質頁岩108 灰褐色の緻密な石材である。比較的小型の分割礫の端部から剥片を落とす石核 b 類の仲間であろう。クラスター n にあるが、この母岩の剥片は他に 1 点も存在しない。

第168表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩108)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
31	9 G-56-17	石核	35×34×20	31.34	10								n

珪質頁岩109 チャートに近似した石材で、黒味の強い青灰色をしている。暗灰色の縞が認められる。削片が1例、クラスターmにある。

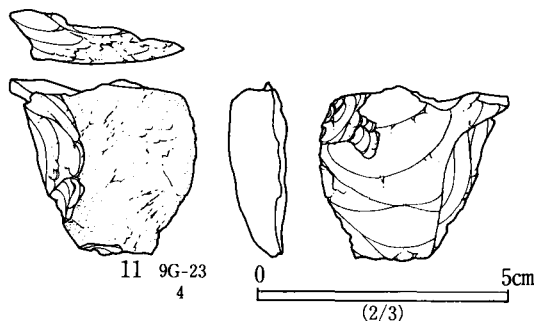
第169表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩109)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
32	9 G-57-13	削片	19×16×4	1.16									m

珪質頁岩110 暗灰色をしている。削片の破碎したものが、クラスターdに1点ある。

第170表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩110)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
33	9 G-17-17	削片	24×9×2	0.42									d



第321図 第41ブロック石器実測図(珪質頁岩111)

珪質頁岩111 青灰色をした珪化度の高い石材である。UFと分類したが、腹面の剥離は素材を石砧上に固定し、垂直に加撃して得られたものである可能性が高く、楔形石器c類と同一の技術基盤にあるものと推定される。クラスターfにある。

第171表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩111)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
34	9 G-23-4	剥片 U	35×37×11	14.41	11	—	—	—	IV	F	+	B	f

珪質頁岩112 茶褐色の石材で、流紋岩系統の石材である可能性もある。クラスターoに剥片が1点ある。

第172表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩112)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
35	9 G-54-26	剥片	36×20×8.5	3.65		1(0)	11 × 3.5	129°	F	F	—	R	o

珪質頁岩113 青味を帯びた暗灰色をしている。クラスターcに小型の剥片が1例ある。

第173表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩113)

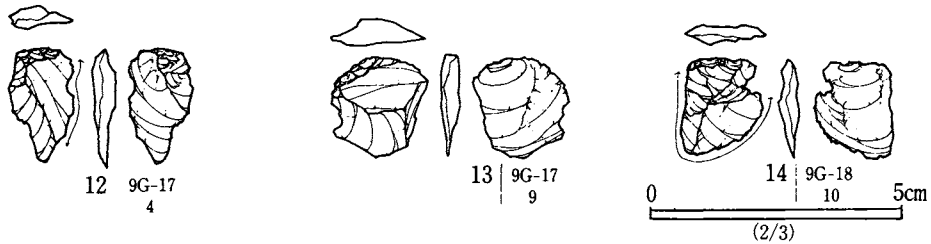
No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
36	9 G-05-3	剥片	21×22×8	2.85		1(0)	4.5×6	100°	II	H	—	—	c

珪質頁岩114 暗灰色をしている。打面のはじけた偏平な剥片で、OEFの可能性が高い。縁辺部に一部使用痕がある。クラスターkの単独資料であるが、この種の使用痕のあるOEFのあり方として重要である。

第174表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩114)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
37	9G-42-17	剥片 U	22×18×2.5	0.97		ℓ	—	—	II	F	+	—	k

珪質頁岩115 明るい青灰色をしたチャートに近い石材である。3点共に OEF で、しかも、そのうち2点に使用痕が観察された。前例と共に OEF の機能を明示している。クラスターdに集中している。

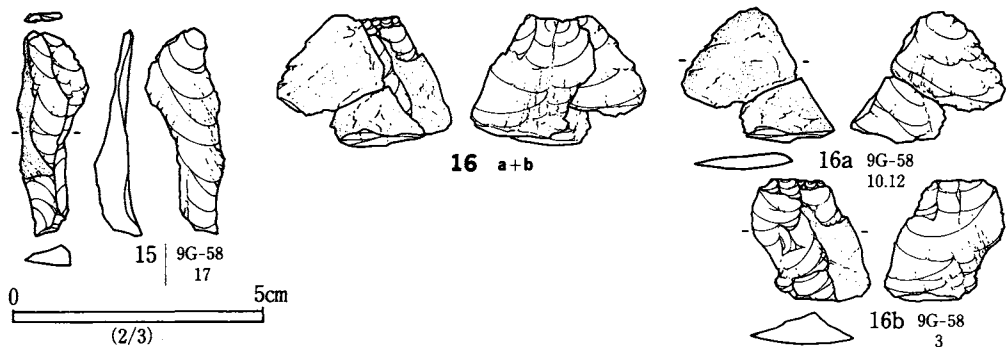


第322図 第41ブロック石器実測図(珪質頁岩115)'

第175表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩115)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
38	9G-17-4	剥片	23×13×4	0.76	12	ℓ	—	—	II	F	—	—	d
39	9G-17-9	剥片 U	20×19×4	1.04	13	ℓ	—	—	IV	F	+	—	d
40	9G-18-10	剥片 U	19×16×4	0.72	14	ℓ	—	—	II	F	+	—	d

珪質頁岩116 白色をしており、珪化凝灰岩となる公算も強い。12点の OEF から構成されているが、本体を遺存しない。明確に使用痕を断定し得る痕跡は認められなかった。これらの資



第323図 第41ブロック石器実測図(珪質頁岩116)

料はクラスターmの一部からまとまって検出されている。

第176表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩116)

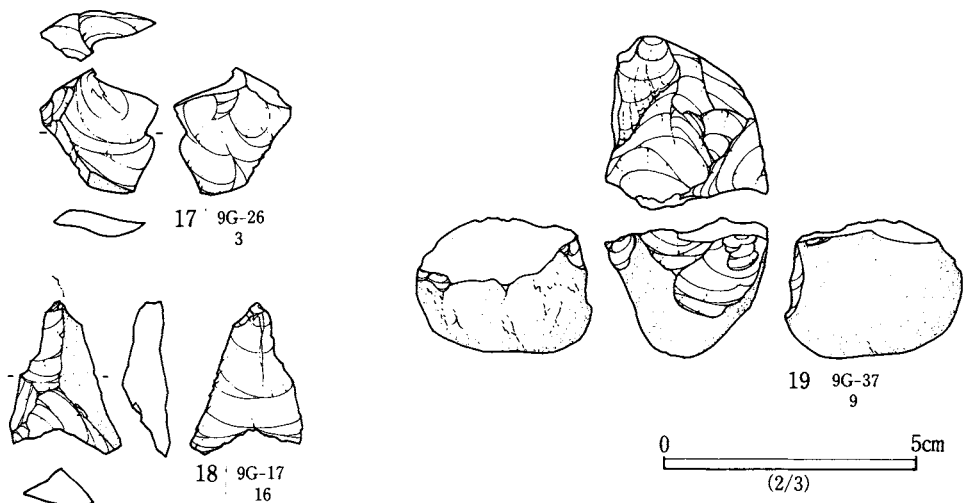
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
41	9 G-57-22	削片	15×14×3.5	0.60									m
42	9 G-58-3	剥片	28×18×7.5	3.29	16 b	ℓ	—	—	㊸	—	+	H	m
43	9 G-58-6	削片	7×9×1	0.07									m
44	9 G-58-8	削片	10×11×4	0.39									m
45	9 G-58-10	剥片	23×17×3.5	1.32	16 a	ℓ	—	—	I	—	—	H	m
46	9 G-58-12	剥片	17×14×6.5	1.45	16 a	—	—	—	I	F	—	B	m
47	9 G-58-13	剥片	28×14×7.5	1.91		p	—	—	㊸+㊹	F	+	—	m
48	9 G-58-15	削片	13×6×3	0.17									m
49	9 G-58-16	削片	17×9×3	0.31									m
50	9 G-58-17	剥片	41×13×8.5	1.98	15	ℓ	—	—	㊸+㊹	F	+	—	m
51	9 G-58-18	剥片	25×19×5	1.20		p	—	—	II+III	F	—	—	m
52	9 G-58-19	削片	14×7×4.5	0.38									m

珪質頁岩117 乳白色をしており、やはり珪化凝灰岩であるかもしれない。断定できないが、OEFであろう。2点共にクラスターiにある。

第177表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩117)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
53	9 G-37-3	削片	20×5×2.5	0.10									i
54	9 G-37-15	削片	12×8×2.5	0.13									i

珪質頁岩119 風化原礫面は明褐色をしているが、内部は灰褐色の緻密な石材である。石核 a

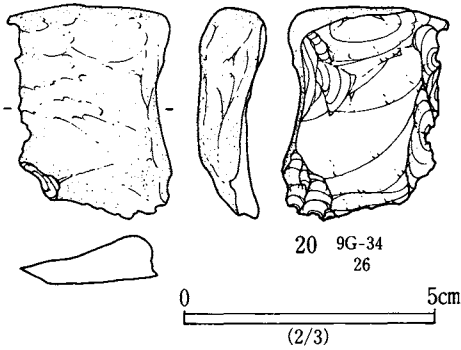


第324図 第41ブロック石器実測図(珪質頁岩119)

類(19)と、剥片(17、18) 3点から構成されている。18はOEFであるかもしれない。クラスター-d、i、oに分かれて分布している。

第178表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩119)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
55	9 G-17-16	剥片	31×22×8.5	2.54	18	P	—	—	⑩+⑪	F	—	—	d
56	9 G-26-3	剥片	26×19×10	3.19	17	2(0)	17.5×8	95°	⑩	F	—	—	i
57	9 G-37-9	石核	31×35×26.5	30.47	19								i
58	9 G-53-7	剥片 U	22×15×6.5	1.90		—	—	—	II+III	F	+	B	o



珪質頁岩120 暗灰色と灰褐色の縞が交互に現われている。原礫面は茶褐色で光沢に富む。剥片と側削器(20)の2点あり、クラスター-f、jに分かれて分布するが、両ブロックは隣接しているので、有意な分布差と断定することは困難である。

第325図 第41ブロック石器実測図(珪質頁岩120)

第179表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩120)

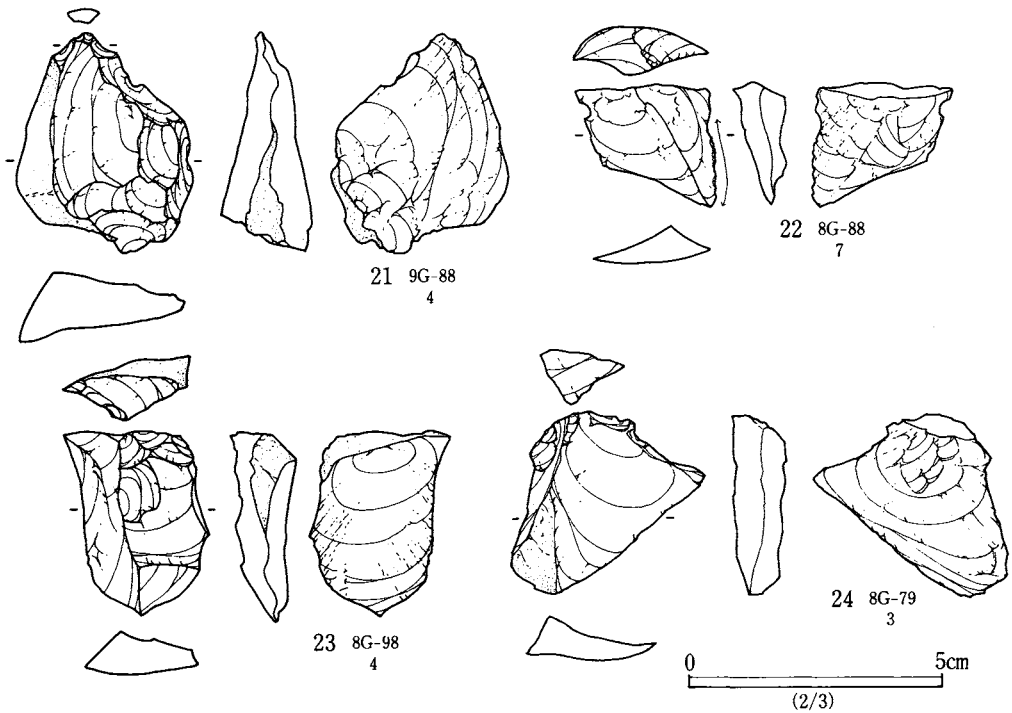
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
59	9 G-24-8	剥片	24×25×4.5	2.29		C	12 × 2.5	111.5°	II+III	H	—	—	f
60	9 G-34-26	削器	42×31×12.5	17.52	20								j

珪質頁岩121 僅かに紫色のかかった黒褐色の頁岩であるが、珪化度は弱い。原礫面は明褐色をしている。剥片類が多いが、21は2次加工があり RF としたが、削器、あるいは石錐の一種

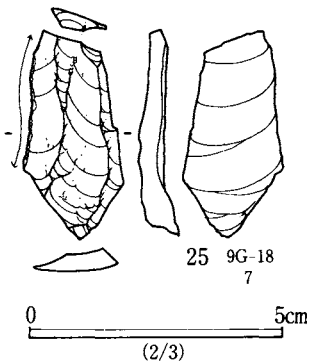
第180表 第41ブロック遺物属性表 (珪質頁岩121)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
61	8 G-79-3	剥片	28×41×10.5	8.57	24	1(0)	14.5×10.5	111°	II	H	—	—	a
62	8 G-88-4	剥片 R	35×40×17	16.95	21	C	23.5×7	114°	II	O	+	—	a
63	8 G-88-6	剥片 U	23×14×6.5	1.85		1(0)	13 × 7.5	115°	IV	F	+	—	a
64	8 G-88-7	剥片 U	26×26×10	4.05	22	2(0)	25 × 9	106.5°	II	H	+	—	a
65	8 G-98-4	剥片 U	38×25×13	10.32	23	2(0)	23 × 10	117°	II	H	+	—	a
66	9 G-27-11	削片	6×11×1.5	0.08									i
67	9 G-28-9	剥片	12×19×3.5	0.48		1(0)	11.5×1	115.5°	II	H	—	—	h
68	9 G-37-7	剥片	24×15×4	1.02		P	—	—	I	F	—	—	i
69	9 G-38-4	剥片	28×16×5	1.49		1(0)	8 × 2.5	111°	II+III	H	—	—	h

とした方がよいであろう。22、23はUF、24は剥片である。22は背面右側縁に顕著な刃こぼれがあり、23ではほぼ全周に断続的な微細な刃こぼれがある。これらは、ブロック北端（クラスターa）と、中央（クラスターh、i）に分かれて数点ずつ分布している。



第326図 第41ブロック石器実測図(珪質頁岩121)



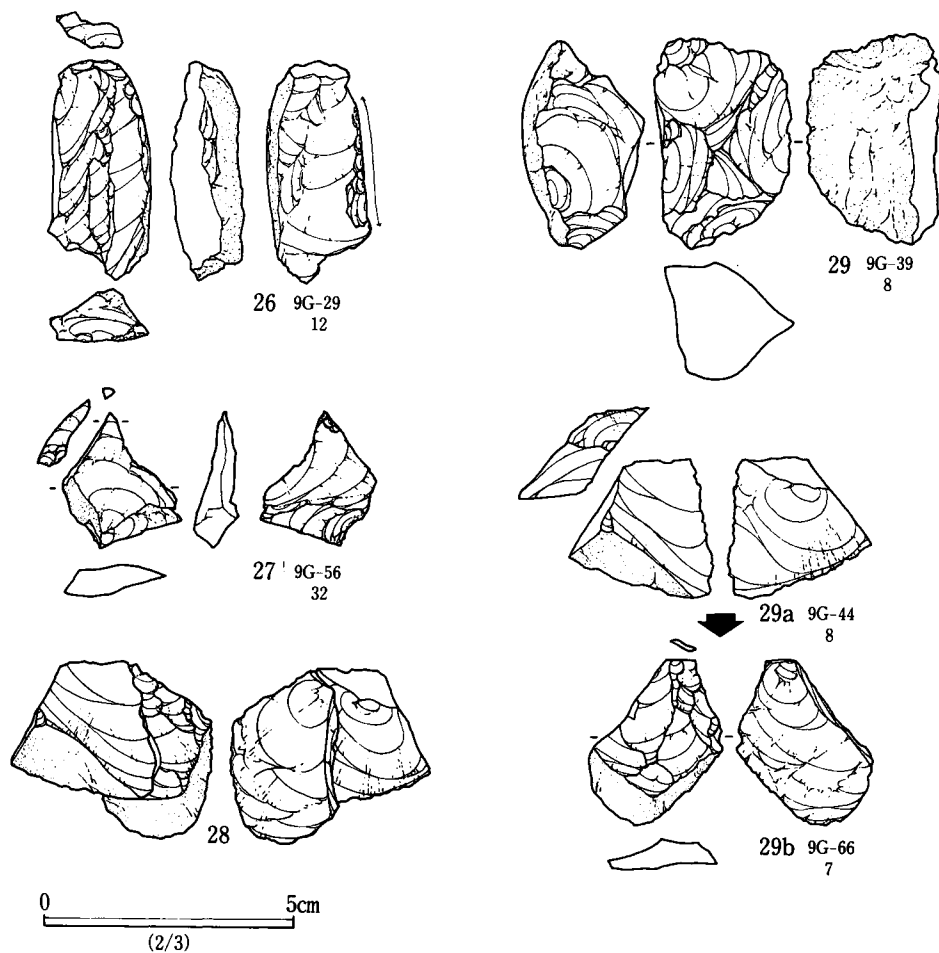
第327図 第41ブロック石器実測図(チャート45)

チャート45 青味を帯びたチャート。縦長のUFが1点クラスターgにある。背稜が側縁と並走しているが、石刃であるかどうかは、この1点しか遺存していないため断定することは困難である。

第181表 第41ブロック遺物属性表 (チャート45)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
70	9 G-18-7	剥片 U	41×20×7	3.76	25	—	—	—	II	F	+	B	g

珪化木1 黒褐色と灰褐色を基調とする、微妙に色調の異なる縞目が年輪に従って認められる。珪化度は高く美しい石材である。石核 (29)、石錐 (27)、剥片 (26、28) 等12点の資料から構成されている。g、l、m、oの4つのクラスターに分かれて分布しているが、g、lなどブロック東縁の部分と、n、oなど南縁の部分とに分かれていると理解するべきである。石核はクラスターgにあるが、8点の資料がクラスターに集中するので、クラスターn→クラスターgという石核の移動が想定されるかもしれない。

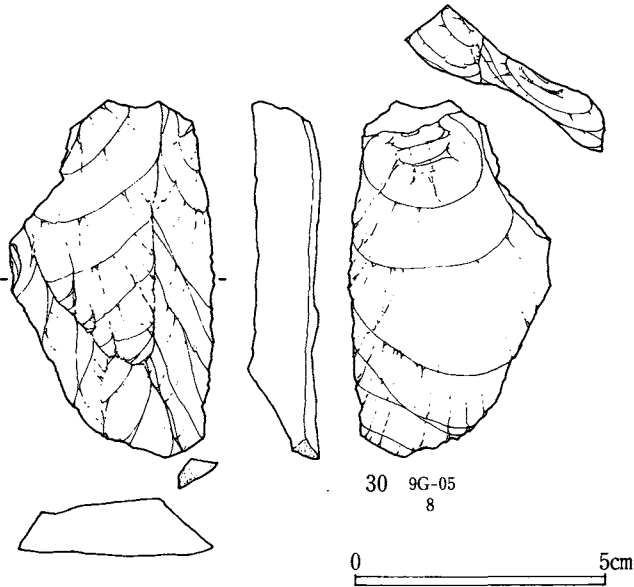


第328図 第41ブロック石器実測図(珪化木1)

第182表 第41ブロック遺物属性表(珪化木1)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
71	9 G-29-12	剥片 U	42×20×15	12.06	26	1(0)	13 × 5.5	117°	①	O	+	-	g
72	9 G-39-3	剥片 U	39×15×8.5	3.68		1(1)	14.5×5	117.5°	II + F	F	+	-	l
73	9 G-39-8	石核	41×28×23.5	24.03	29								g
74	9 G-44-8	剥片	30×29×9.5	5.90	28a	1(0)	12 × 8.5	114.5°	①	F	-	-	o
75	9 G-56-5	剥片	22×14×5.5	1.53		P	-	-	①	O	-	-	n

№	遺物 №	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
76	9 G-56-32	石 錐	19×26×7.5	2.48	27								n
77	9 G-66-1	削 片	19×8×4	0.53									n
78	9 G-66-2	剥 片	29×13×5	1.80		ℓ	—	—	II+IV	H	—	—	n
79	9 G-66-3	剥 片	13×29×2.5	0.78		—	—	—	II	H	—	B	n
80	9 G-66-7	剥 片	35×21×8	5.53	28 b	ℓ	—	—	⑩	F	—	—	n
81	9 G-66-9	剥 片	21×18×8	2.07		1(0)	4×1	102.5°	⑨	O	—	—	n
82	9 G-66-10	剥 片	16×26×4	1.64		2(1)	12.5×3.5	115.5°	⑨	H	—	—	n



第329図 第41ブロック石器実測図(安山岩90)

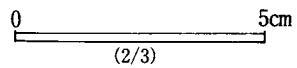
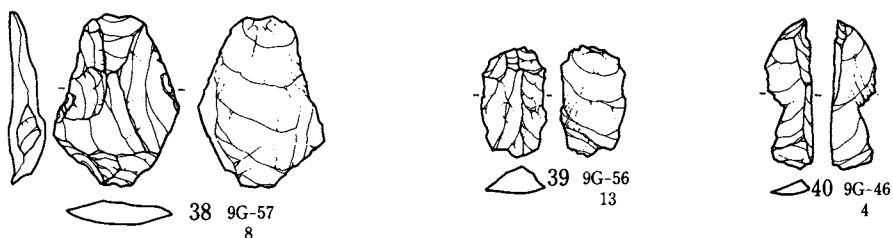
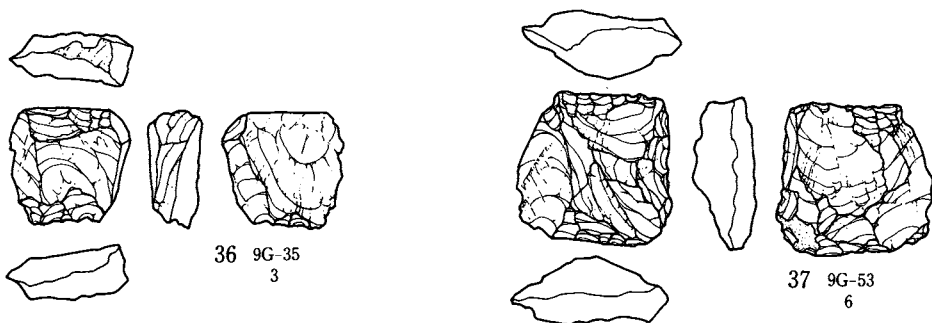
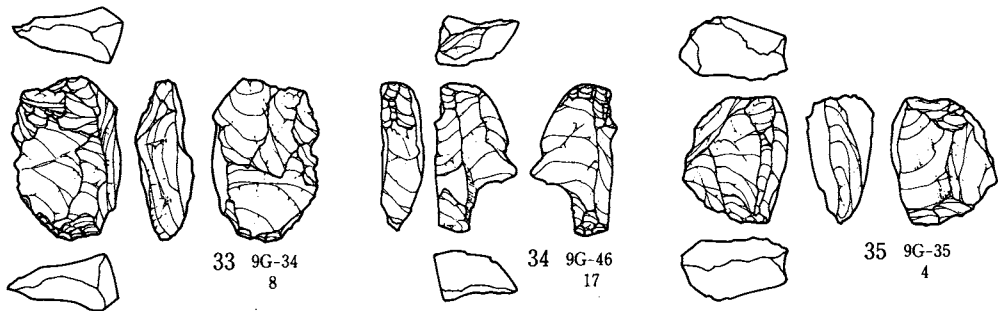
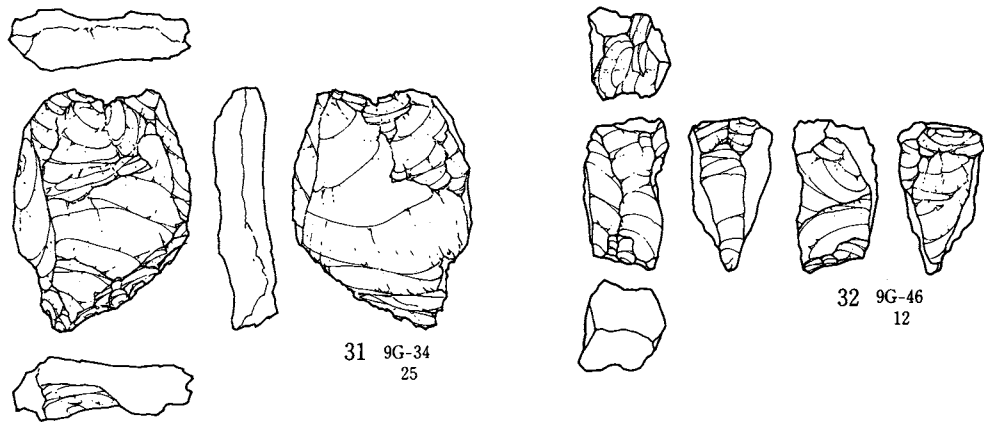
安山岩90 表面は明灰色で多数の小孔が認められる。比較的大型の剥片がクラスターcに単独で存在する。打面部から側面部にかけて、背面の剥離面を切る2枚の剥離痕が残されており、明らかに石核a類から生産された剥片であると考えられる。

第183表 第41ブロック遺物属性表 (安山岩90)

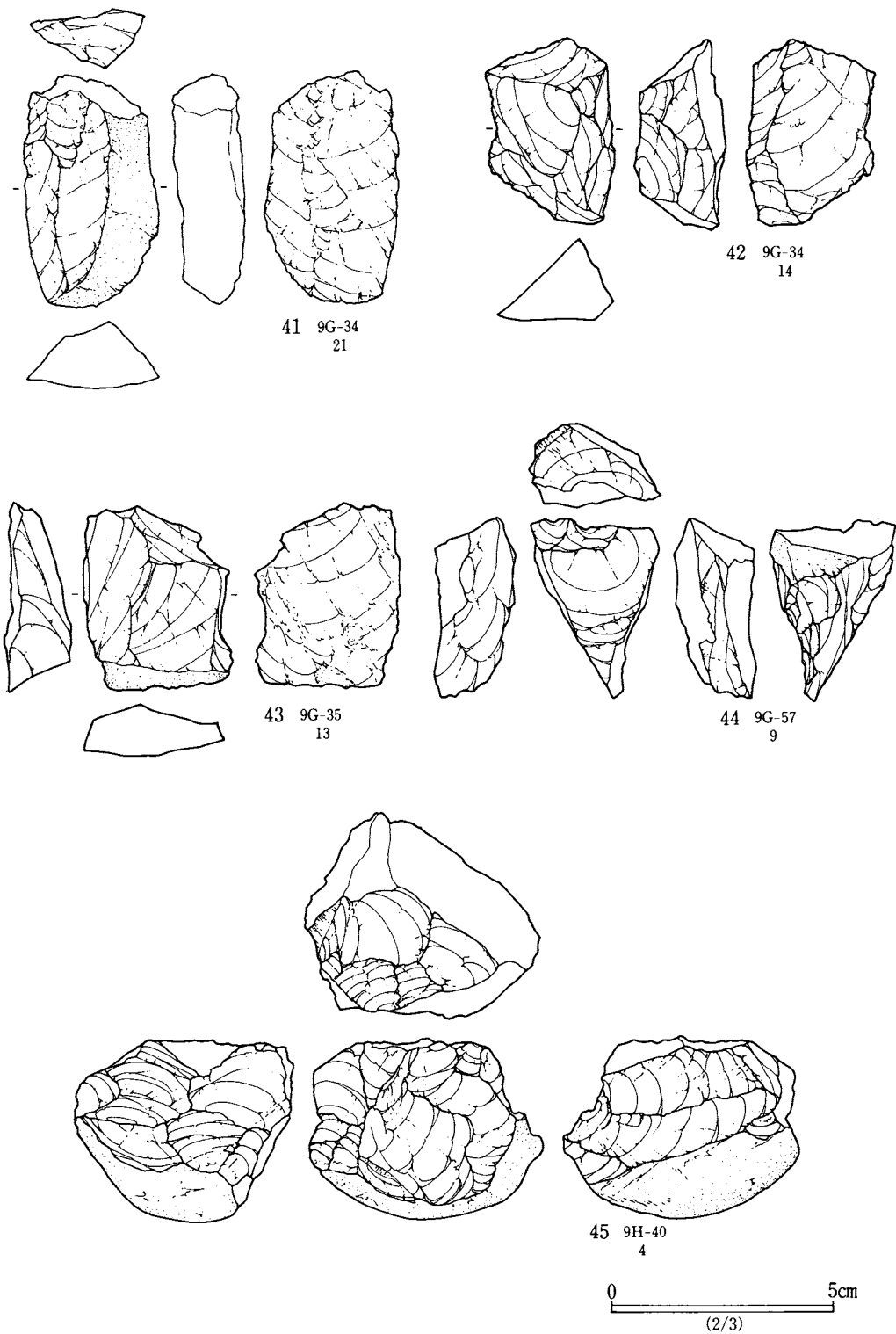
№	遺物 №	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
83	9 G-05-8	剥 片	71×40×13.5	38.26	30	1(0)	19×11	114.5°	⑩	F	+	—	c

安山岩91 表面は暗灰色で、少量の斜長石の斑晶が含まれている。礫表は比較的肌理が細かい。62点の資料を識別したが、一般に、安山岩の母岩識別は難しいので、多少のエラーが当然予測される。資料の内容は、楔形石器10点、UF 1点、剥片33点、削片16点、石核2点となっており、楔形石器が卓越している。

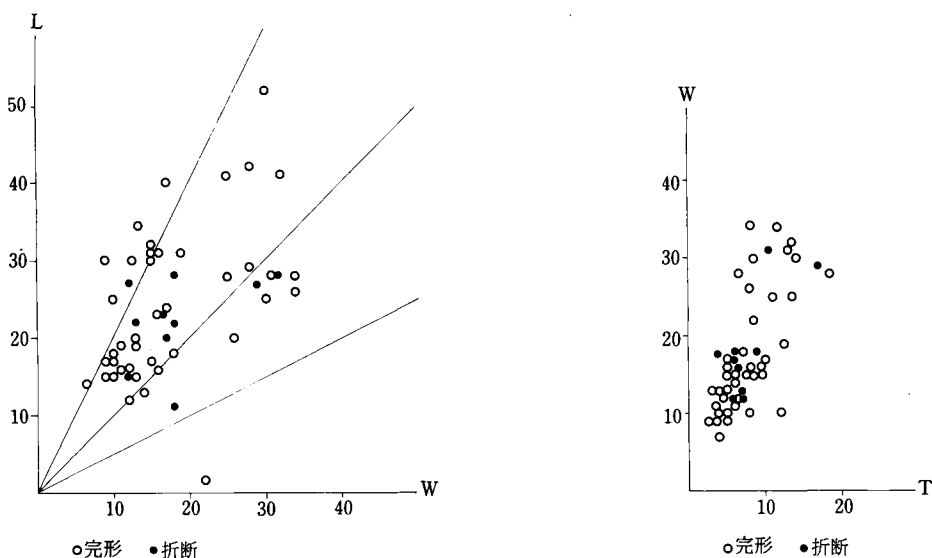
楔形石器にはa類(31、33、35~37)、b類(32、34)、c類(38)の各種がある。小型の剥片の大半はOEFと考えられるが、2例のみ図示した(39、40)。石材の関係で、OEFの使用痕の有無は良く分からない。41~43に剥片を、44、45に石核を示す。石核d類を主体とする剥離手法の存在が看取されよう。なお、本母岩の資料を基礎として第I群の2工程を復原している。



第330図 第41ブロック石器実測図(安山岩91-1)



第331図 第41ブロック石器実測図(安山岩91-2)



第332図 安山岩91の長・幅(左), 幅・厚(右)分布(単位mm)

分布状況を見ると、j、l、m、n、oの各クラスターに分かれているが、資料の分布状況を観察すると、大きく3群からなる集中分布が確認される。(1)クラスターnを中心に、一部mに及ぶ分布域で、石核1点、楔形石器4点、剥片類31点から構成されている。(2)クラスターjとkにまたがる分布域で、楔形石器6点、剥片類17点からなる。ただし、この一群には、若干の分布の偏在性があり、各クラスターに分離されるかもしれない。(3)これらとはやや離れて、クラスター1にも3点の資料があり、大型の石核1点、剥片2点を含んでいる。この分布状況の示唆するところによれば、同一母岩に対して複数の、しかも、地点を異にする廃棄が行なわれたことになる。その廃棄の順番を推定するに足る、例えば、接合資料に立脚した十分な資料的裏付けはないが、(1)では第1工程から第2工程に至る全過程が、(2)では第2工程のみが、そして、(3)では第2工程以後の状況が窮知されることから、あるいは、(1)→(2)→(3)という変化を推定することができるかもしれない。

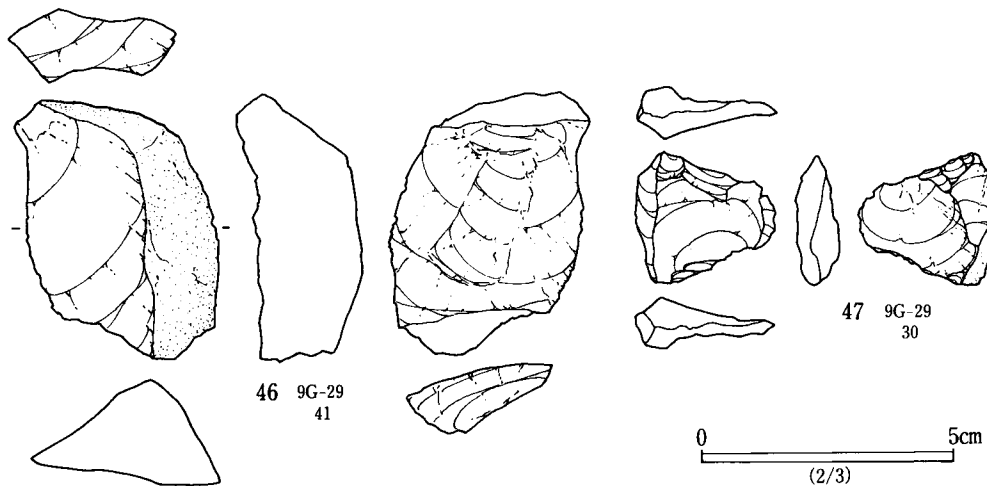
第184表 第41ブロック遺物属性表 (安山岩91)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
84	9 G-33-5	剥片	25×30×8.5	4.45		P	—	—	II	H	—	—	j
85	9 G-34-8	楔形石器	32×21×11	6.09	33								j
86	9 G-34-14	剥片	42×28×18.5	20.28	42	ℓ	—	—	II+IV	F	—	—	j
87	9 G-34-19	剥片	15×12×6	1.23		1(0)	12 × 4.5	108°	IV	—	—	H	j
88	9 G-34-21	剥片	52×30×14	24.55	41	1(0)	27.5×13	93°	II	—	—	—	j
89	9 G-34-25	楔形石器	47×35×10	18.15	31								j

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
90	9 G-34-27	剥片	11×18×4	0.71		—	—	—	II	—	—	M	j
91	9 G-35-3	楔形石器	24×23×10	6.18	36								j
92	9 G-35-4	楔形石器	26×20×13	6.95	35								j
93	9 G-35-13	剥片	41×32×13.5	18.27	43	—	—	—	II	O	—	—	j
94	9 G-39-13	剥片	27×29×7	4.53		—	—	—	I	F	—	B	ℓ
95	9 G-43-5	剥片	28×31×13	10.69		c	28.5×11	120.5°	II+IV	H	—	—	o
96	9 G-43-6	剥片	15×22×8.5	2.24		p	—	—	IV	F	—	—	o
97	9 G-44-9	剥片	28×15×8	3.03		1(0)	15×6	—	II+IV	F	—	—	o
98	9 G-44-11	剥片	41×25×11	7.76		c	33.5×11	95.5°	II	H	—	—	o
99	9 G-44-12	剥片	31×19×12.5	6.77		ℓ	—	—	II	O	—	—	o
100	9 G-44-18	剥片	20×13×4	1.06		p	—	—	II	H	—	—	o
101	9 G-45-4	剥片	25×10×8	2.08		p	—	—	IV	F	—	—	j
102	9 G-46-4	剥片	30×9×5	0.98	40	p	—	—	II	F	—	—	n
103	9 G-46-7	削片	19×13×5	0.93									n
104	9 G-46-12	楔形石器	29×16×17	8.27	32								n
105	9 G-46-14	剥片	28×25×13.5	7.43		p	—	—	II	F	—	—	n
106	9 G-46-15	剥片	29×28×6.5	3.76		ℓ	—	—	II+III	F	—	—	n
107	9 G-46-17	楔形石器	29×16×8	3.80	34								n
108	9 G-46-19	剥片	26×34×8	6.18		ℓ	—	—	II+IV	F	—	—	n
109	9 G-46-20	剥片	23×16×5	2.05		1(0)	13×4.5	90°	II	不明	—	—	n
110	9 G-46-21	剥片	30×15×6	2.21		p	—	—	II	F	—	—	n
111	9 G-53-3	削片	16×11×6	0.91									o
112	9 G-53-4	削片	16×12×4.5	0.74									o
113	9 G-53-6	楔形石器	30×30×11	10.96	37								o
114	9 G-54-7	剥片 U	24×17×5	2.12		p	—	—	II	F	+	—	o
115	9 G-54-13	楔形石器	22×13×7	2.15									o
116	9 G-54-15	剥片	31×16×8	2.93		3(0)	31×9	61.5°	IV	F	—	—	o
117	9 G-56-4	剥片	28×18×9	4.18		—	—	—	I	F	—	B	n
118	9 G-56-8	剥片	28×34×12	10.29		C	19×6	98.5°	II	O	—	—	n
119	9 G-56-12	剥片	20×26×8	2.40		ℓ	—	—	II	F	—	—	n
120	9 G-56-13	剥片	22×13×7	1.78	39	1(0)	6.5×2	117°	II	—	—	H	n
121	9 G-56-14	剥片	20×17×6	1.61		—	—	—	II	H	—	B	n
122	9 G-56-15	削片	19×11×3.5	0.48									n
123	9 G-56-16	削片	18×10×4	0.61									n
124	9 G-56-19	剥片	23×16×6.5	2.03		—	—	—	II	O	—	B	n
125	9 G-56-22	削片	12×12×6	0.72									n
126	9 G-56-23	削片	17×9×3.5	0.54									n
127	9 G-56-24	削片	14×7×4	0.46									n
128	9 G-56-25	剥片	22×18×6	2.09		ℓ	—	—	II	—	—	H	n
129	9 G-56-29	削片	15×9×2.5	0.28									n
130	9 G-56-31	削片	15×13×3	0.69									n
131	9 G-56-33	削片	15×10×12	1.34									n
132	9 G-56-34	削片	18×18×7	1.67									n
133	9 G-57-4	剥片	28×31×10.5	9.27		—	—	—	II	F	—	B	n

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
134	9 G-57-5	削片	13×14×6	1.13									n
135	9 G-57-6	剥片	27×12×7	2.69		1(0)	18 × 4.5	96.5°	I	—	—	H	n
136	9 G-57-8	楔形石器	35×24×6	4.90	38								n
137	9 G-57-9	石核	40×28×17	15.22	44								n
138	9 G-57-10	楔形石器	31×25×7	4.95									n
139	9 G-57-11	剥片	31×15×8	2.23		3(0)	20.5×6	107°	II	F	—	—	m
140	9 G-57-16	削片	17×15×5	1.03									m
141	9 G-57-17	削片	17×10×5	0.49									m
142	9 G-58-23	剥片	40×17×10	6.12		P	—	—	II	F	—	—	m
143	9 G-66-4	剥片	32×15×9.5	3.48		C	14.5×9	95.5°	I	F	—	—	n
144	9 H-40-3	削片	16×16×9.5	2.10									ℓ
145	9 H-40-4	石核	50×45×38	105.9	45								ℓ

安山岩92 表面は黒味の強い暗灰色で、あまり風化がすすんでいない。斜長石の細かい斑晶が多い。礫表は灰褐色で肌理が細かい。楔形石器 1 (47)、剥片 2 (46) の 3 点がクラスター g にある。



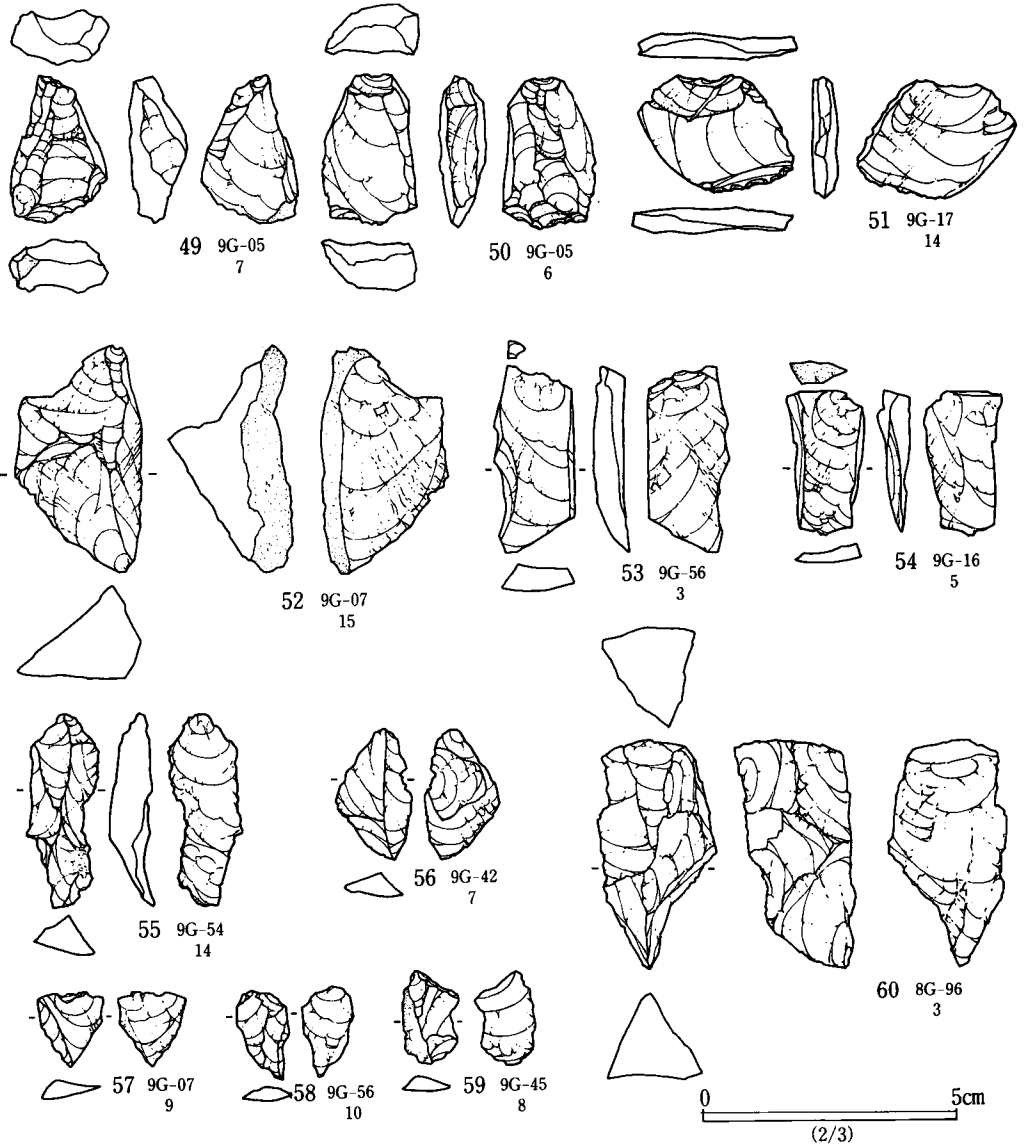
第333図 第41ブロック石器実測図(安山岩92)

第185表 第41ブロック遺物属性表(安山岩92)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
146	9 G-29-16	剥片	21×9×7	0.93		P	—	—	III+IV	F	—	—	g
147	9 G-29-30	楔形石器	28×25×8.5	4.27	47								g
148	9 G-29-41	剥片	55×37×22.5	37.37	46	1(0)	31 × 13	124°	II	—	—	H	g

安山岩93 本ブロックの安山岩の中では最も風化が軽微であり、非常に黒味の強い暗灰色をしている。礫面もほぼ同様の色調であり、かつ、肌理が細かい。斑晶と共に2mm以下の青灰色をした捕獲岩片と思われるものを処々に含むことも大きな特徴である。かなり特徴的な石材であるため、その識別は比較的容易であった。

器種構成は、楔形石器4(49~51)、剥片類21(52~60)、石核1の計39点で、ほぼ第I群のみの内容となっている。49、50はクラスターcから検出されているが、この地点には他に剥片類がなく、楔形石器のみが単独で存在していた。また、55~59に示したような打面のハジケた小型の剥片が多く、OEFと見られる石核は図示していないが、破碎した状態の残核である。以

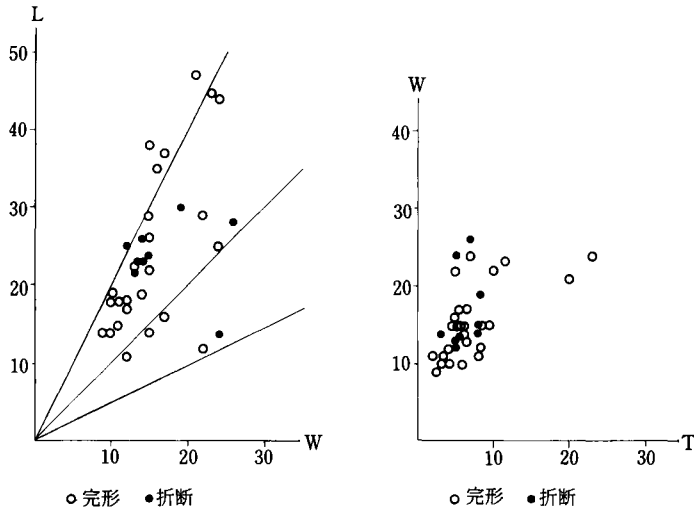


第334図 第41ブロック石器実測図(安山岩93)

上の石器類はブロック各処に少量ずつ散在しているが、クラスターb、nに10点以上の集かが認められる。この両クラスターを中心として消費されたものと見られるが、隣接したクラスターへの搬出関係を提示し得るデータはない。

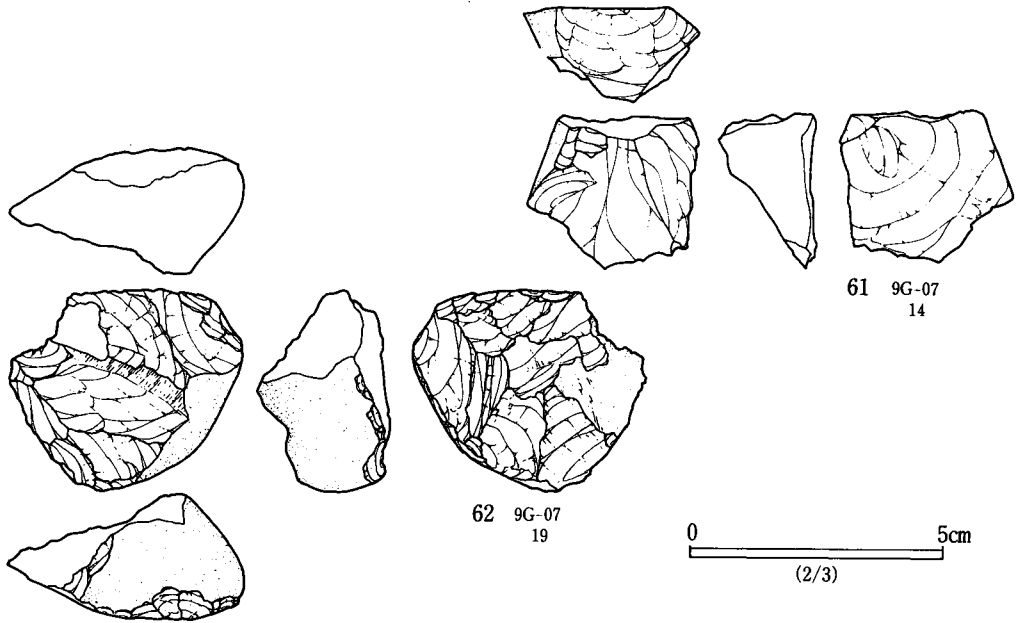
第186表 第41ブロック遺物属性表 (安山岩93)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
149	8 G-96-3	剥片	47×21×20	18.22	60	C	18 × 20	79.5°	I + IV	F	—	—	b
150	9 G-05-6	楔形石器	29×18×9	5.76	50								c
151	9 G-05-7	楔形石器	29×18×9	4.68	49								c
152	9 G-06-1	削片	18×10×6	1.01									b
153	9 G-06-5	削片	12×22×5	1.23									b
154	9 G-07-3	剥片	25×12×5	1.68		1(0)	3 × 6	112°	IV	F	—	L	b
155	9 G-07-9	削片	14×15×5	0.80	57								b
156	9 G-07-12	剥片	29×22×10	5.79		1(0)	12 × 7.5	112°	II + IV	F	—	—	b
157	9 G-07-13	削片	19×14×6	1.29									b
158	9 G-07-15	剥片	44×24×23	16.59	52	ℓ	—	—	II + III	F	—	—	b
159	9 G-07-17	削片	17×12×4	0.63									b
160	9 G-07-22	剥片	30×19×8	3.11		c	14 × 6	108°	II	F	—	R	b
161	9 G-07-26	剥片	23×14×8	2.23		—	—	—	II	F	—	B	b
162	9 G-16-4	剥片	14×24×5	1.64		—	—	—	II + IV	—	—	M	e
163	9 G-16-5	剥片	29×15×6	2.28	54	c	11 × 5	102.5°	II	F	—	—	e
164	9 G-17-14	楔形石器	28×24×5	3.63	51								b
165	9 G-25-3	剥片	28×26×7	4.18		ℓ	—	—	II + III	—	—	H	j
166	9 G-26-4	剥片	26×14×6	1.86		1(0)	9 × 3.5	不明	II	—	—	H	j
167	9 G-36-5	剥片	24×15×8	2.09		—	—	—	III + IV	F	—	B	i
168	9 G-37-5	剥片	45×23×11.5	8.09		ℓ	—	—	IV	F	—	—	i
169	9 G-42-7	剥片	26×15×5.5	1.45	56	p	—	—	II + IV	F	—	—	k
170	9 G-42-9	石核	22×22×15.5	6.71									k
171	9 G-42-10	削片	14×9×2.5	0.29									k
172	9 G-42-15	削片	16×17×5.5	1.42									k
173	9 G-45-8	削片	18×11×4	0.59	59								o
174	9 G-46-5	剥片	35×16×5	2.66		p	—	—	IV	F	—	—	n
175	9 G-46-6	削片	15×11×8	1.38									n
176	9 G-46-8	剥片	23×14×3	1.04		—	—	—	II	F	—	B	n
177	9 G-46-9	剥片	22×13×5	1.22		1(0)	12 × 4.5	116°	II	—	—	H	n
178	9 G-46-10	削片	14×10×4	0.46									n
179	9 G-46-13	楔形石器	17×18×10	2.90									n
180	9 G-46-18	削片	11×12×8.5	0.94									n
181	9 G-54-9	削片	18×11×3.5	0.46									o
182	9 G-54-14	剥片	38×15×8.5	3.03	55	p	—	—	II + IV	F	—	—	o
183	9 G-55-6	剥片	22×15×9.5	2.05									n
184	9 G-55-7	剥片	22×13×6.5	1.35		p	—	—	II	F	—	—	n
185	9 G-56-3	剥片	37×17×6.5	4.15	53	ℓ	—	—	II	F	—	—	n
186	9 G-56-10	削片	19×10×3.5	0.73	58								n
187	9 G-68-3	剥片	25×24×7	3.39		ℓ	—	—	II + IV	F	—	—	m



第335図 安山岩93の長・幅(左),幅・厚(右)分布(単位mm)

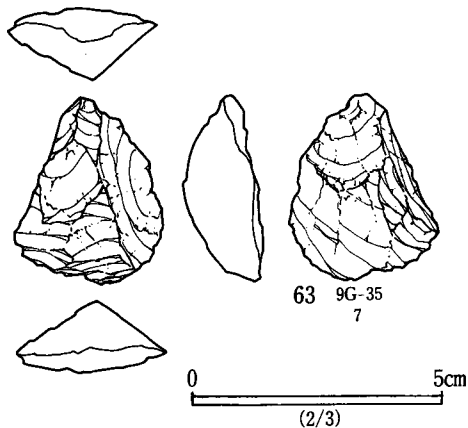
安山岩94 明灰色を呈し、小さ目の斑晶をやや多く含む。礫面の肌理は細かい方だが、繊細で屈曲した溝が多数認められる。クラスターbに集中し、楔形石器(62)、石核(61)、剥片が1例ずつある。楔形石器は部厚い石核状のもので、b類であろう。61は剥片のように見えるが、腹面の一部を切って小型貝殻状の剥片が作出されている。石核c類である。



第336図 第41ブロック石器実測図(安山岩94)

第187表 第41ブロック遺物属性表(安山岩94)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
188	9 G-07-14	石核	34×35×18	14.15	61								b
189	9 G-07-19	楔形石器	40×43×23	35.06	62								b
190	9 G-07-24	剥片	36×22×9	8.85		1(0)	15 × 7.5	114.5°	I	-	-	H	b



第337図 第41ブロック石器実測図(安山岩96)

安山岩96 明灰色を呈し、多量の斑晶が含まれている。流理が著明で、その識別は極めて容易である。8点の資料からなり、楔形石器a類が1点(63)あるが、他は剥片によって占められている。剥片のうち、5点は確実にOEFである。7点がクラスターjに集中するが、OEFが1点のみクラスターmに分布している。

第188表 第41ブロック遺物属性表(安山岩96)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
191	9 G-34-3	剥片	29×18×7.5	4.21		1(0)	6×5.5	101.5°	不明	F	—	—	j
192	9 G-34-6	剥片	25×17×8.5	2.61		p	—	—	Ⅳ+不明	F	不明	—	j
193	9 G-35-6	剥片	35×24×7	4.72		—	—	—	I	F	不明	B	j
194	9 G-35-7	楔形石器	36×30×13.5	11.96	63								j
195	9 G-35-9	剥片	34×16×7	3.79		2(0)	12.5×6	110°	Ⅳ	F	不明	—	j
196	9 G-35-10	剥片	15×21×7	1.61		ℓ	—	—	II	F	不明	—	j
197	9 G-36-3	剥片	25×11×4	1.14		ℓ	—	—	II	F	不明	—	j
198	9 G-58-14	剥片	16×11×4.5	0.69		—	—	—	IV	F	不明	B	m

安山岩97 やや黒味がかかった暗灰色で、礫面は所謂ツメ石状になっている。長石を主体とする微斑晶が認められる。クラスターa、bから剥片が1点ずつ検出されている。

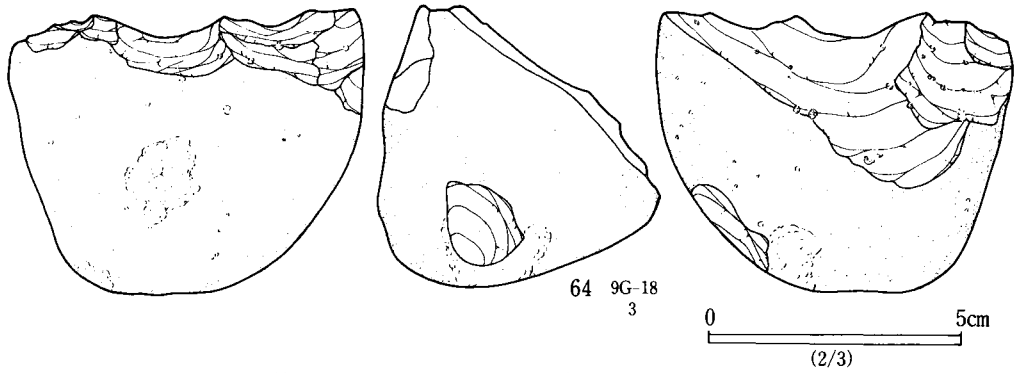
第189表 第41ブロック遺物属性表(安山岩97)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
199	8 G-88-3	剥片	40×27×16	13.36		ℓ	—	—	Ⅳ	F	—	—	a
200	9 G-06-2	剥片	30×22×6	3.12		ℓ	—	—	Ⅱ	F	—	—	b

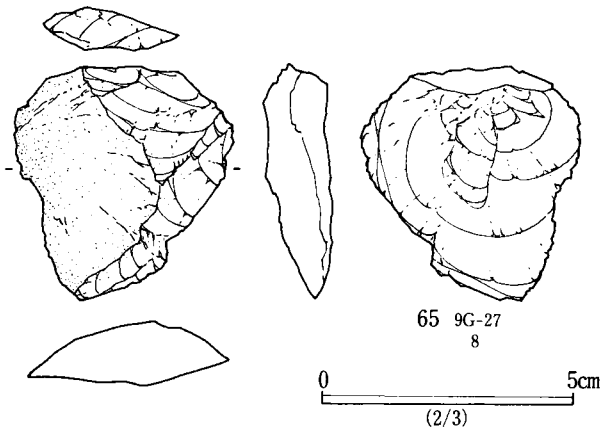
安山岩98 明るい灰色を呈し、風化がすすんでいる。3mm以下の比較的大粒の斑晶が少量認められ、一部に流理が入っている。通常の黒色緻密質安山岩とトロトロ石との中間的な石材である。石砧兼用の石核が1点、クラスターdにあるが、関連する剥片は存在しない。

第190表 第41ブロック遺物属性表(安山岩98)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
201	9 G-18-3	石核	61×71×49	219.0	64								d



第338図 第41ブロック石器実測図(安山岩98)

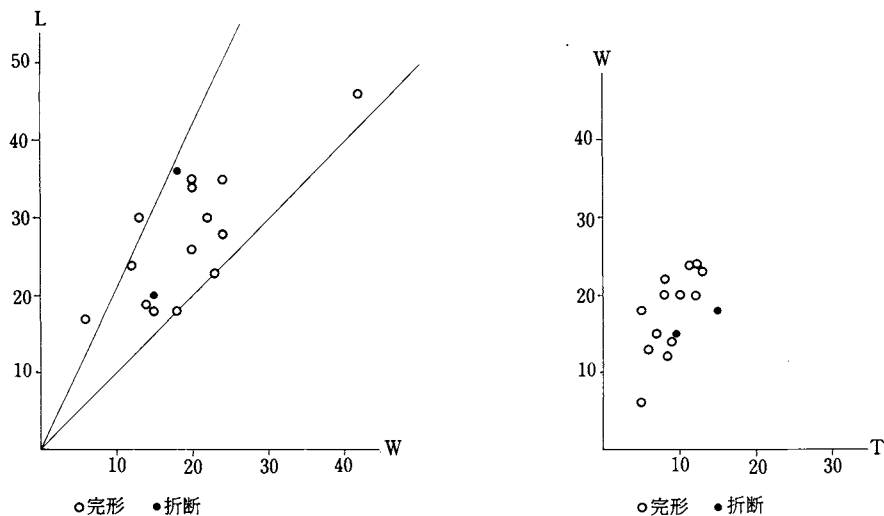


第339図 第41ブロック石器実測図(安山岩99)

安山岩99 暗灰色を呈し、斑晶の少ない石質であるが、やや特徴に乏しく、識別時のエラーが懸念される。16点あるが、その全てが剥片である。7箇所のクラスターに分散している。クラスター i に6点が集中するが、他は2点以下の分布である。別母岩の混入が疑われる。

第191表 第41ブロック遺物属性表 (安山岩99)

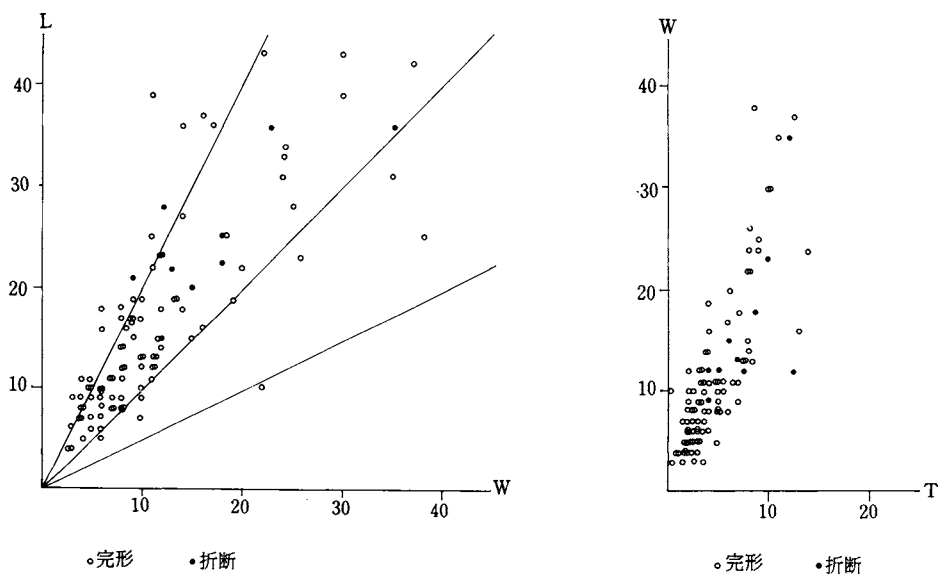
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(±)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
202	9 G-17-15	剥片	30×22×8	4.78		1(0)	5.5×5	90°	II	H	—	—	b
203	9 G-27-7	剥片	23×23×13	5.08		C	25×10	106°	II+IV	F	—	—	d
204	9 G-27-8	剥片	46×42×12	21.56	65	1(0)	28×7	115.5°	II	F	—	—	d
205	9 G-27-11	剥片	18×15×7	1.81		1(0)	14×6	85°	II	H	—	—	i
206	9 G-27-14	剥片	34×20×12	6.54		1(0)	10×8	79°	IV	H	—	—	i
207	9 G-27-15	剥片	30×13×6	2.44		—	—	—	IV	F	—	—	i
208	9 G-27-16	剥片	28×24×12	6.57		1(0)	19×5.5	97.5°	II	F	—	—	i
209	9 G-27-18	剥片	26×20×10	4.86		ℓ	—	—	II+IV	F	—	—	i
210	9 G-28-5	剥片	35×20×8	5.01		ℓ	—	—	II+III	F	—	—	h
211	9 G-35-8	削片	17×6×5	0.94									j
212	9 G-37-8	剥片	36×18×15	8.84		—	—	—	I	F	—	B	i
213	9 G-42-8	剥片	24×12×8.5	1.75		p	—	—	II+III	F	—	—	k
214	9 G-42-14	削片	18×18×5	1.40									k
215	9 G-44-1	削片	19×14×9	1.75									j
216	9 G-44-10	剥片	35×24×11.5	7.50		p	—	—	IV	H	—	—	o
217	9 G-57-21	剥片	20×15×9.5	1.64		—	—	—	II	—	—	B	m



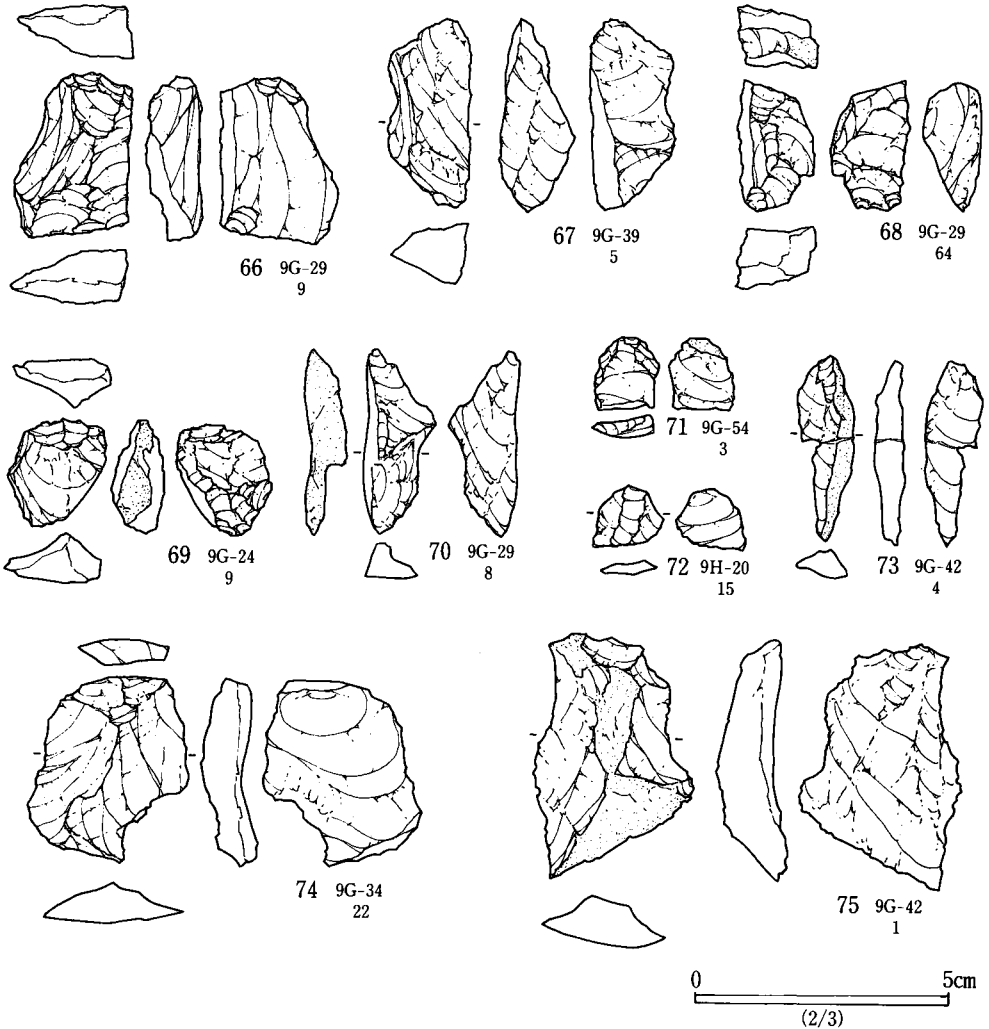
第340図 安山岩99の長・幅(左),幅・厚(右)分布(単位mm)

安山岩100 若干青味を帯びた灰白色を呈しているが、新鮮な断口を見ると漆黒色をしており、風化が著しい。大粒の斑晶が少量含まれ、部分的に流理も認められる。全安山岩中、最も識別の容易な母岩であった。

109点という多量の資料を含んでいる。組成は、楔形石器3(65、67、68)、剥片106点で、圧倒的に剥片が多い。剥片は3属性の分布(第342図)から読みとれるように、長さ25mm、幅20mm、厚さ10mm以下の小型の一群と、それを超える大型の一群とに分かれる。小型のもの(66、69~72)の大半はOEFである。73、74などは大型の例で、第I群第1工程で準備されるブランクを含む



第342図 安山岩100の長幅(左),幅・厚(右)分布(単位mm)



第341図 第41ブロック石器実測図(安山岩100)

ものと見られる。全体の構成は、石核を欠落しているが、安山岩91と同一のもので、ブロック内で多く消費された母岩がいずれも第I群に収斂する点は重要であろう。

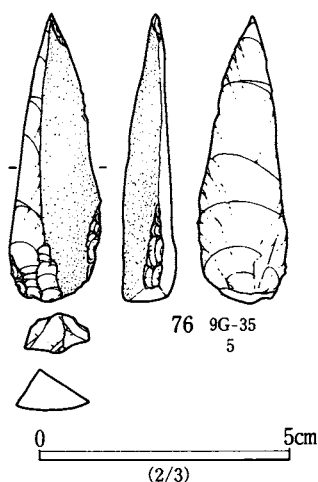
クラスター毎の分布状況を見ると、クラスターgに78点もの資料が集中しており、この地点を母岩の集中的な消費地点と特定したい。クラスターh、1にある少数の剥片も、この地点から飛散したものであろう。これ以外に、クラスターf、j、k、oに数点の剥片が一定の範囲にまとまって分布するスポットがある。これらのスポットには、比較的大型の剥片(73、74など)と共に、70、72のようなOEFを伴存しているが、クラスターgに多く見られる小さ目の削片、碎片の類を欠いている。多分、クラスターgで作出された剥片が各スポットに廃棄されたものと推定される。これを各クラスターへの分与ということと同一視することはできず、反覆的廃棄の過程をこそ反映しているにちがいない。

第192表 第41ブロック遺物属性表 (安山岩100)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
218	9 G-19-4	削片	14×8×5	0.53									g
218	9 G-19-5	削片	6×5×2.5	<0.01									g
220	9 G-23-5	剥片	23×16×7	2.69		不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	f
221	9 G-24-9	楔形石器	22×16×9.5	3.15	69								f
222	9 G-26-5	剥片	43×30×10	11.45		不明	不明	不明	I	H	不明	—	j
223	9 G-28-3	剥片	19×19×4	1.15		ℓ	—	—	II+IV	F	不明	—	h
224	9 G-29-4	剥片	27×14×4	1.09		1(0)	7.5×5	109.5°	II	F	不明	—	g
225	9 G-29-5	剥片	28×25×9	5.98		1(0)	23×6	111°	II	F	不明	—	g
226	9 G-29-6	削片	13×11×6.5	1.07									g
227	9 G-29-7	剥片	23×26×8	4.06		1(0)	13.5×3	110°	㊸	F	不明	—	g
228	9 G-29-8	剥片	36×14×8	2.59	70	p	—	—	㊸	F	不明	—	g
229	9 G-29-9	楔形石器	33×22×10	7.83	66								g
230	9 G-29-10	削片	13×11×3.5	0.47									g
231	9 G-29-11	削片	11×8×6	0.48									g
232	9 G-29-13	削片	11×5×5	0.29									g
233	9 G-29-14	剥片	31×24×9	5.07		1(0)	11.5×7	123.5°	㊸	F	不明	—	g
234	9 G-29-15	削片	13×10×3.5	0.41									g
235	9 G-29-18	削片	10×6×3	0.20									g
236	9 G-29-19	削片	18×6×3	0.33									g
237	9 G-29-20	削片	15×15×8	1.26									g
238	9 G-29-21	削片	8×8×3.5	0.19									g
239	9 G-29-22	削片	12×11×5	0.58									g
240	9 G-29-23	削片	8×7×3.5	0.29									g
241	9 G-29-24	剥片	22×13×7	2.23		—	—	—	㊸	—	不明	M	g
242	9 G-29-25	削片	8×8×2	0.08									g
243	9 G-29-26	削片	9×5×2.5	0.09									g
244	9 G-29-27	削片	19×9×2	0.41									g
245	9 G-29-28	削片	17×9×5	0.70									g
246	9 G-29-29	剥片	19×13×8.5	2.90		不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	g
247	9 G-29-31	剥片	36×23×10	8.18		—	—	—	不明	H	不明	B	g
248	9 G-29-32	削片	17×10×5	0.61									g
249	9 G-29-34	削片	12×11×4	0.47									g
250	9 G-29-35	削片	18×14×8	1.79									g
251	9 G-29-36	剥片	23×12×12.5	3.53		—	—	—	I	—	不明	B	g
252	9 G-29-37	削片	11×7×2	0.18									g
253	9 G-29-38	削片	10×5×2	0.10									g
254	9 G-29-39	剥片	36×17×6	3.51		2(0)	18×3.5	114°	II	H	不明	—	g
255	9 G-29-40	削片	6×6×2	0.05									g
256	9 G-29-42	削片	10×5×3	0.11									g
257	9 G-29-43	削片	15×9×7	0.85									g
258	9 G-29-44	剥片	25×18×8.5	3.33		1(0)	9×3	110°	㊸	—	不明	H	g
259	9 G-29-45	削片	11×7×3	0.27									g
260	9 G-29-46	削片	8×7×1.5	0.07									g
261	9 G-29-47	削片	4×3×0.5	<0.01									g

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
262	9 G-29-49	削片	12×10×2.5	0.16									g
263	9 G-29-50	削片	17×9×3	0.47									g
264	9 G-29-52	削片	18×12×3	0.63									g
265	9 G-29-53	削片	14×8×5	0.56									g
266	9 G-29-54	剝片	20×15×6	1.86		2 (0)	13 × 5	94.5°	II	—	不明	H	g
267	9 G-29-55	削片	19×13×7.5	1.52									g
268	9 G-29-56	削片	7×6×2.5	0.08									g
269	9 G-29-57	削片	8×6×2	0.12									g
270	9 G-29-58	削片	10×10×2	0.14									g
271	9 G-29-59	削片	9×10×3.5	0.22									g
272	9 G-29-60	削片	11×11×3.5	0.34									g
273	9 G-29-61	剝片	25×38×85	4.87		1 (0)	11 × 5	112°	II	F	不明	—	g
274	9 G-29-62	剝片	23×14×11.5	3.47		不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	g
275	9 G-29-63	削片	8×4×2	0.08									g
276	9 G-29-64	楔形石器	25×15×10	4.76	68								g
277	9 G-29-66	削片	6×3×2.5	<0.01									g
278	9 G-29-67	削片	11×4×2.5	0.06									g
279	9 G-29-68	削片	9×3×3.5	0.10									g
280	9 G-29-69	削片	4×3×1.5	<0.01									g
281	9 G-29-70	削片	7×4×3	0.06									g
282	9 G-29-71	削片	12×8×2.5	0.18									g
283	9 G-29-72	削片	9×7×2.5	0.16									g
284	9 G-29-73	削片	8×8×5	0.31									g
285	9 G-29-75	削片	9×4×1	0.02									g
286	9 G-29-76	削片	7×4×1	<0.01									g
287	9 G-29-77	削片	8×4×2	0.01									g
288	9 G-32-4	削片	13×9×3	0.24									k
289	9 G-33-3	剝片	33×24×14	9.39		1 (0)	20 × 10	98°	ⓐ	F	不明	—	j
290	9 G-33-4	削片	10×22×8	1.72									j
291	9 G-34-12	剝片	22×11×7	1.26		p	—	—	II	F	不明	—	j
292	9 G-34-18	剝片	28×12×7.5	2.25		—	—	—	ⓑ	F	不明	B	j
293	9 G-34-20	剝片	43×22×8	7.57		ℓ	—	—	ⓑ	F	不明	—	j
294	9 G-34-22	剝片	39×30×10	8.50	74	1 (0)	13 × 4	110°	II	O	不明	—	j
295	9 G-34-23	剝片	22×20×6	2.51		ℓ	—	—	II	F	不明	—	j
296	9 G-34-24	削片	19×10×5.5	0.90									j
297	9 G-35-11	剝片	31×35×11	10.42		ℓ	—	—	II	F	不明	—	j
298	9 G-39-4	削片	10×6×3.5	0.20									ℓ
299	9 G-39-5	剝片	37×16×13	6.70	67	ℓ	—	—	II	F	不明	—	ℓ
300	9 G-39-6	削片	9×8×2.5	0.16									ℓ
301	9 G-42-1	剝片	42×37×12.5	13.89	75	ℓ	—	—	II	F	不明	—	k
302	9 G-42-4	剝片	24×15×5	1.66	73	—	—	—	II	F	不明	不明	k
303	9 G-42-4	剝片	39×11×5	1.63		p	—	—	II	F	不明	—	k
304	9 G-44-3	剝片	34×24×8	4.32		p	—	—	III	F	不明	—	j
305	9 G-44-7	剝片	36×35×12	11.74		—	—	—	I	F	不明	B	j

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
306	9 G-45-3	剥片	25×11×5.5	1.20	71	P	—	—	II	F	不明	—	j
307	9 G-49-4	剥片	23×12×4	1.45		—	—	—	不明	—	—	M	l
308	9 G-54-3	削片	15×12×5	0.98		C	9 × 4.5	109°	III	—	不明	H	o
309	9 G-54-4	削片	7 × 5 × 2	0.08									o
310	9 G-54-16	剥片	24×18×9	4.27		不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	o
311	9 G-54-18	削片	9 × 6 × 4	0.23									o
312	9 G-54-21	削片	16×6×4	0.44									o
313	9 G-54-37	剥片	27×15×6	1.93		不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	o
314	9 G-57-20	削片	5 × 4 × 2	<0.01									m
315	9 H-10-3	削片	17×8×6	0.63									g
316	9 H-20-3	削片	19×13×7.5	1.42									g
317	9 H-20-4	削片	18×8×3.5	0.59									g
318	9 H-20-5	削片	7 × 10 × 0.1	0.05									g
319	9 H-20-6	削片	16×16×4	0.82									g
320	9 H-20-7	削片	12×8×4	0.35									g
321	9 H-20-9	剥片	21×9×4	0.67		—	—	—	II	F	不明	B	g
322	9 H-20-10	剥片	25×18×7	2.39		C	12 × 5	101.5°	II	H	不明	—	g
323	9 H-20-11	削片	10×6×4	0.21									g
324	9 H-20-12	削片	14×12×2	0.34									g
325	9 H-20-14	削片	5 × 6 × 2	0.03									g
326	9 H-20-15	削片	15×12×3	0.48	72								g



第343図 第41ブロック石器実測図(安山岩104)

第193表 第41ブロック遺物属性表 (安山岩104)

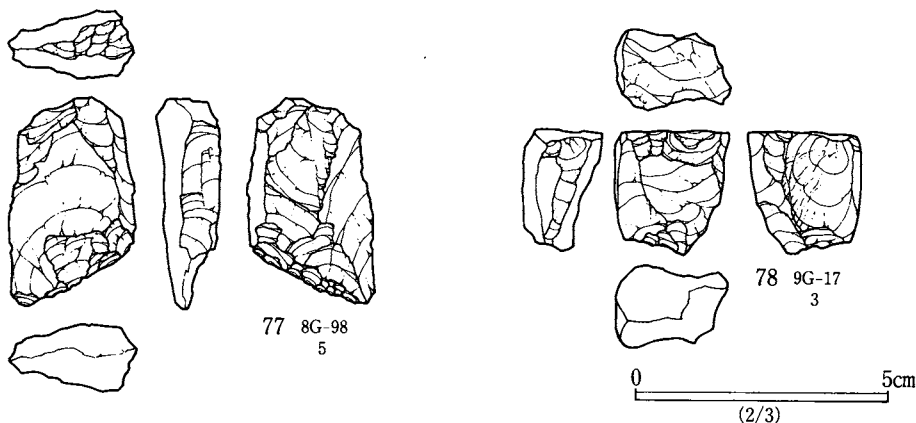
No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
327	9 G-35-5	ナイフ	56×15×11	8.61	76	2(0)	12 × 9	101°	①	F	—	—	j

安山岩105 安山岩104と同系の石材と思われるが、極めて肌理が細かく、原礫面も平滑である。淡青灰色に風化しているが、内部は黒色の無斑晶玻璃質である。UFが1点のみクラスターbに分布する。

第194表 第41ブロック遺物属性表 (安山岩105)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
328	9 G-07-11	剥片 U	48×30×17.5	18.17		ℓ	—	—	I	F	+	—	b

安山岩107 表面は赤味を帯びた灰褐色で、僅かに斑晶が認められる。楔形石器a類(77)、b類(78)、通常の剥片3点からなり、OEFを含んでいない。クラスターa、bなど、ブロック北端に少量の資料が点在している。



第344図 第41ブロック石器実測図(安山岩107)

第195表 第41ブロック遺物属性表 (安山岩107)

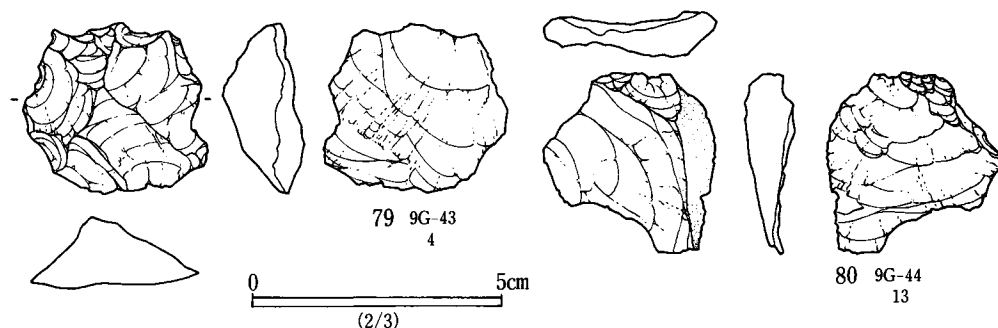
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
329	8 G-89-3	剥片	34×25×15	9.77		C	24 × 12	77°	II + III	F	—	—	a
330	8 G-98-3	剥片	49×12×12.5	6.63		1(0)	12 × 6	116.5°	III	F	—	—	a
331	8 G-98-5	楔形石器	42×24×11.5	1.45	77								a
332	9 G-14-4	剥片	35×19×11	5.60		1(0)	22.5 × 9.5	114°	II	H	—	—	b
333	9 G-17-3	楔形石器	26×20×14	9.14	78								b

安山岩108 ツメ石状の礫面をもつ暗灰色無斑晶の石材。剥片が1点のみクラスターdから検出された。

第196表 第41ブロック遺物属性表 (安山岩108)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
334	9 G-18-5	剥片	26×26×10	5.78		ℓ	—	—	IV	F	—	—	d

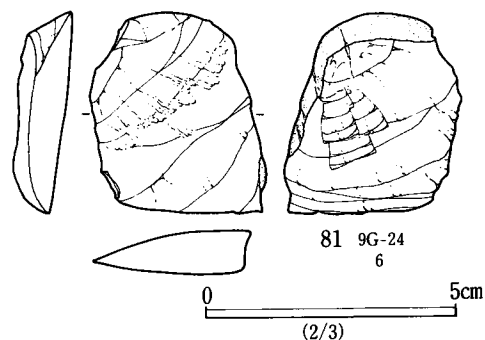
安山岩109 黒味の強い灰褐色で、肌理の細かい原礫面をもっている。礫面は僅かに褐色を帯びている。79は剝片と分類されているが、2次加工がある。80も削器としたが、加工は両極的であり、楔形石器c類であろう。共にクラスターoに存在する。



第345図 第41ブロック石器実測図(安山岩109)

第197表 第41ブロック遺物属性表(安山岩109)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
335	9 G-43-4	削器	34×35×13	14.69	79								o
336	9 G-44-13	剝片	34×38×10	7.39	80	ℓ	—	—	II+IV	F	—	—	o



第346図 第41ブロック石器実測図(安山岩110)

安山岩110 淡灰褐色を呈し均質で滑らかな感じの石材である。原礫面には細かい網目状の縞目が入り、その内側は赤く酸化している。剝片が1点のみクラスターfにある。

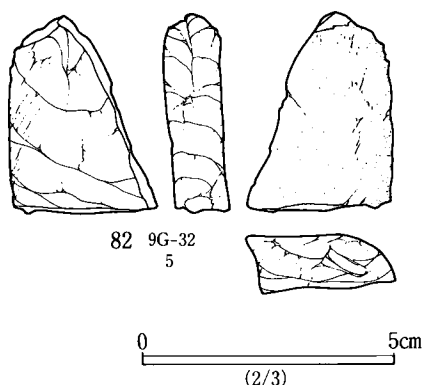
第198表 第41ブロック遺物属性表(安山岩110)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
337	9 G-24-6	剝片	42×33×9	15.95	81	C	22.5×9	120°	I	H	—	—	f

安山岩111 淡灰褐色の色調は、安山岩110に近いが、少量であるが斑晶が目立ち、別母岩と

第199表 第41ブロック遺物属性表(安山岩111)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
338	9 G-32-5	石核	40×27×10.5	16.06	82								k



した。石核が1点ある。礫面付きの剥片の折れ面を打面として側面部から剥片を落としている。この剥離は両極剥離であり、あるいは、剥片の分割を企図したものかもしれない。楔形石器の一種とも見られよう。クラスターk検出である。

第347図 第41ブロック石器実測図(安山岩111)

第200表 第41ブロック遺物属性表 (安山岩不明)

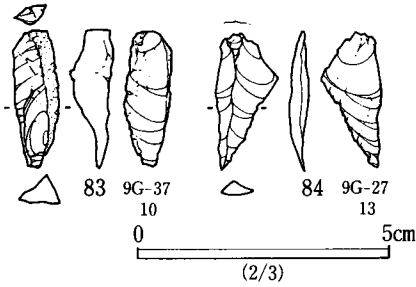
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
339	8 G-89-4	削片	19×10×5.5	0.88									a
340	8 G-97-3	削片	13×14×2.5	0.40									b
341	8 G-97-4	削片	12×11×3.5	0.29									b
342	8 G-97-5	削片	10×8×4	0.22									b
343	8 G-97-6	削片	13×7×3	0.26									b
344	9 G-07-5	削片	30×14×6.5	2.23									b
345	9 G-07-7	削片	10×6×2.5	0.09									b
346	9 G-07-8	削片	12×8×4	0.48									b
347	9 G-07-10	削片	10×5×3.5	0.18									b
348	9 G-07-16	削片	14×8×3	0.33									b
349	9 G-07-18	削片	15×10×6	0.88									b
350	9 G-07-20	削片	15×12×2	0.26									b
351	9 G-07-21	削片	7×7×1.5	0.07									b
352	9 G-07-23	削片	13×10×2.5	0.25									b
353	9 G-07-25	削片	15×12×5.5	0.93									b
354	9 G-07-27	削片	9×8×3	0.17									b
355	9 G-07-29	削片	8×5×2	0.10									b
356	9 G-07-30	削片	16×8×4.5	0.43									b
357	9 G-07-31	削片	7×3×1.5	<0.01									b
358	9 G-07-32	削片	16×11×2.5	0.32									b
359	9 G-14-3	削片	15×9×5	0.37									f
360	9 G-16-6	削片	13×15×6.5	0.90									e
361	9 G-16-7	削片	17×14×5.5	0.83									e
362	9 G-24-5	削片	15×8×4	0.50									f
363	9 G-27-6	削片	15×16×6.5	0.86									d
364	9 G-27-9	削片	10×10×4	0.31									i
365	9 G-29-17	削片	17×12×3.5	0.35									g
366	9 G-29-48	削片	8×4×1.5	0.03									g
367	9 G-34-4	削片	9×10×2.5	0.23									j
368	9 G-34-7	削片	17×8×5	0.58									j

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
369	9 G-34-9	削片	10×7×2.5	0.14									j
370	9 G-34-10	削片	12×10×5	0.57									j
371	9 G-34-28	削片	13×8×3	0.30									j
372	9 G-36-4	削片	10×7×3	0.19									j
373	9 G-37-4	削片	14×6×2.5	0.17									i
374	9 G-37-11	削片	13×7×3.5	0.20									i
375	9 G-37-13	削片	15×8×3.5	0.31									i
376	9 G-38-3	削片	14×6×3.5	0.26									h
377	9 G-39-12	削片	23×14×3.5	0.96									ℓ
378	9 G-42-6	削片	18×12×7.5	1.21									k
379	9 G-42-11	削片	22×7×6.5	0.73									k
380	9 G-42-12	削片	11×8×3	0.25									k
381	9 G-42-16	削片	10×8×3	0.22									k
382	9 G-44-14	削片	17×7×3.5	0.26									o
383	9 G-45-7	削片	15×9×2.5	0.29									o
384	9 G-45-9	削片	12×7×3.5	0.30									n
385	9 G-45-11	削片	10×7×2.5	0.12									n
386	9 G-46-3	削片	19×18×3	0.86									n
387	9 G-46-16	削片	16×12×8.5	1.18									n
388	9 G-49-3	削片	13×19×5.5	1.07									ℓ
389	9 G-54-12	削片	7×5×4	0.09									o
390	9 G-54-17	削片	8×7×3	0.15									o
391	9 G-54-23	削片	18×10×3	0.57									o
392	9 G-54-24	削片	15×11×5	0.51									o
393	9 G-54-25	削片	8×6×2	0.10									o
394	9 G-54-28	削片	12×14×7	0.66									o
395	9 G-54-29	削片	19×17×4	0.86									o
396	9 G-54-30	削片	7×5×3	0.05									o
397	9 G-54-31	削片	24×14×5	1.05									o
398	9 G-54-32	削片	14×15×6	0.89									o
399	9 G-54-33	削片	11×4×4	0.19									o
400	9 G-54-34	削片	8×4×2	0.05									o
401	9 G-54-35	削片	18×9×4.5	0.38									o
402	9 G-54-36	削片	8×5×1.5	<0.01									o
403	9 G-56-6	削片	12×6×2.5	0.19									n
404	9 G-56-18	削片	9×6×2.5	0.13									n
405	9 G-56-21	削片	7×13×6	0.48									n
406	9 G-56-26	削片	5×4×1	<0.01									n
407	9 G-56-27	削片	13×10×4	0.50									n
408	9 G-58-21	削片	7×8×4.5	0.31									m
409	9 G-58-22	削片	10×10×2.5	0.23									m
410	9 G-58-24	削片	9×7×3	0.18									m
411	9 G-66-8	削片	19×9×4	0.58									n
412	9 G-67-3	削片	7×7×2	0.09									m
413	9 H-20-8	削片	11×9×4	0.39									g

流紋岩質凝灰岩 1 淡青灰色の地に明褐色の斑紋が入る珪質の石材。石核 a 類、あるいは d 類から得られたと思われる剥片が 1 点ある。クラスター a 検出。

第201表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩 1)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
414	8 G-89-5	剥片	19×21×6	1.59		2(1)	7×4	111°	IV	H	-	-	a



流紋岩質凝灰岩 2 光沢に富む黄白色を呈する珪質の石材。OEF が 5 点あり、うち 1 点に使用痕が認められる (83)。クラスター i に 4 点が集中するが、1 点のみクラスター n に分布しているが、興味深いことに、この個体のみ被熱により一

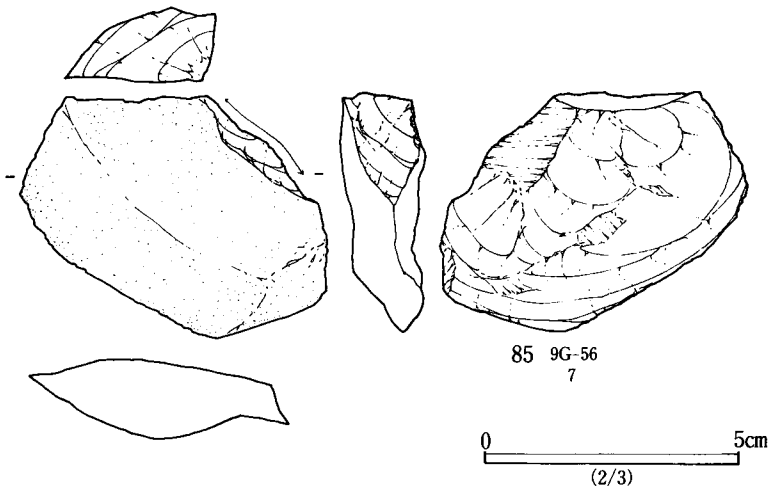
部が暗赤色に変色している。

第348図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩 2)

第202表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩 2)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
415	9 G-27-12	削片	14×6×4	0.27									i
416	9 G-27-13	剥片	27×12×3	0.62	84	P	-	-	II	F	-	-	i
417	9 G-37-10	剥片	27×9×7	1.48	83	P	-	-	Ⓧ	F	+	-	i
418	9 G-37-14	削片	8×10×2	0.21									i
419	9 G-45-10	削片	13×7×3.5	0.22									n

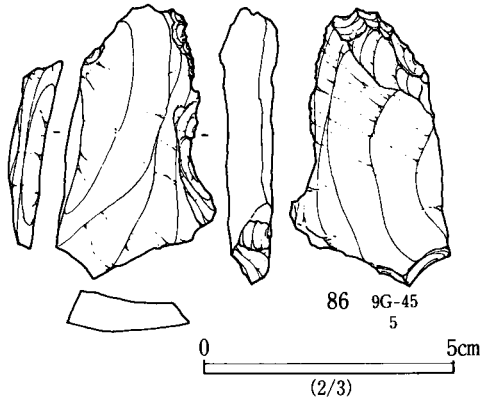
流紋岩質凝灰岩 3 若干灰色がかった緑色をしている。僅かに粒子が見えるが緻密な石材である。礫面付きの剥片がクラスター n に 1 点ある。



第349図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩 3)

第203表 第41ブロック遺物属性表（流紋岩質凝灰岩 3）

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
420	9 G-56-7	剥片 U	64×42×13.5	35.99	85	1(1)	30.5×14	108°	I	H	+	-	n



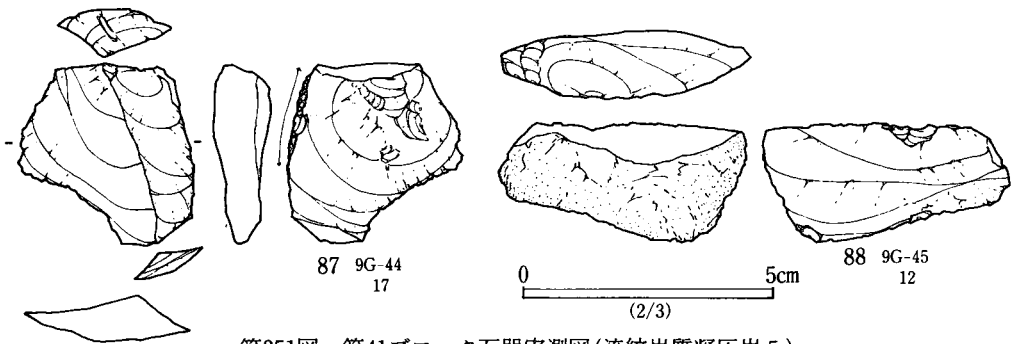
流紋岩質凝灰岩 4 黒味の強い紫色と暗褐色の部分が縞状に重なる渋味のある美しい色調の石材である。横長の不定形剥片を加工した側削器(86)と、不整な剥片類がクラスターoに集中している。

第350図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩 4)

第204表 第41ブロック遺物属性表（流紋岩質凝灰岩 4）

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター	
421	9 G-44-15	剥片	20×11×9.5	1.47	86	ℓ	-	-	IV	F	-	-	o	
422	9 G-45-5	削器	56×30×10.5	16.13										o
423	9 G-54-8	削片	12×19×6	0.76										o
424	9 G-54-20	削片	10×9×2	0.11										o

流紋岩質凝灰岩 5 乳白色の珪質な石材。原礫面は淡いオレンジ色をしている。剥片 2 点がクラスター o、n などブロック南縁から検出されている。



第351図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩 5)

第205表 第41ブロック遺物属性表（流紋岩質凝灰岩 5）

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
425	9 G-44-17	剥片 U	38×33×10	7.59	87	1(0)	21 × 8	126°	II	-	+	H	o
426	9 G-45-12	剥片	49×23×12	10.48	88	-	-	-	I	F	-	B	n

流紋岩質凝灰岩 6 斑晶の目立つ珪質な石材で、紫色の勝った灰色を基調とする。不定形剥片がクラスターmに2点ある。

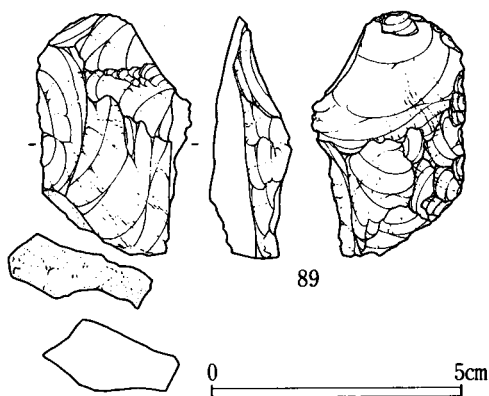
第206表 第41ブロック遺物属性表（流紋岩質凝灰岩 6）

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
427	9 G-58-4	剥片	33×18×8.5	2.90		1(0)	2 × 5.5	108.5°	II+IV	F	-	-	m
428	9 G-58-5	剥片 U	38×26×13	9.05		C	10 × 3	113°	III+IV	O	+	-	m

流紋岩質凝灰岩 7 紫灰色の若干粒子の粗い石材。原礫面は明灰色で平滑である。クラスター-d に3点の剥片・削片が分布している。

第207表 第41ブロック遺物属性表（流紋岩質凝灰岩 7）

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
429	9 G-17-8	剥片	28×23×12	8.97		1(0)	20.5×10	102.5°	II	H	-	-	d
430	9 G-18-11	削片	18×12×4.5	0.79									d
431	9 G-18-13	削片	13×7×2.5	0.21									d



第352図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩 8)

流紋岩質凝灰岩 8 前記の流紋岩質凝灰岩 7 と酷似しており、あるいは同一母岩とも見られるが、灰褐色の粗い原礫面であるため、一応、別母岩とした。剥片の側縁に2次加工のある石器(89)が1点ある。加工は両極剝離によるものらしく、一種の楔形石器とすべきものかもしれないが、RFとしておく。クラスターmにある。

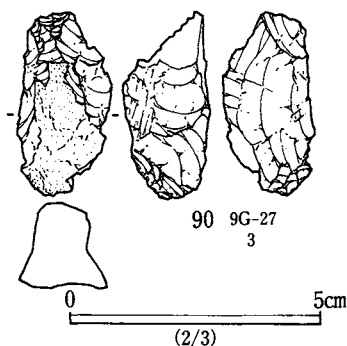
第208表 第41ブロック遺物属性表（流紋岩質凝灰岩 8）

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
432	9 G-57-23	剥片 R	48×31×16	19.08	89								m

流紋岩質凝灰岩 9 斑晶の目立つ、紫色がかった赤褐色をした石材。楔形石器b類(90)と

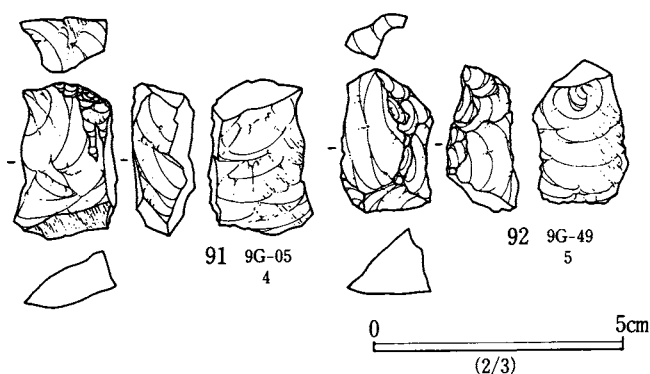
第209表 第41ブロック遺物属性表（流紋岩質凝灰岩 9）

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
433	9 G-17-7	剥片	30×26×13.5	5.47		P	-	-	II	O	-	-	d
434	9 G-27-3	楔形石器	37×18×16	10.10	90								d



剥片1点がクラスターdにある。剥片は不整な礫面付のもの。

第353図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩9)



流紋岩質凝灰岩10 礫面は淡黄色、剥離面には、暗灰色～淡褐色の縞目が交互に見られる。石核d類から剥離された剥片が6点あるが、クラスターb、cに各1点、クラスター1に4点分布する。

第354図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩10)

第210表 第41ブロック遺物属性表(流紋岩質凝灰岩10)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
435	9 G-05-4	剥片	31×20×11.5	7.91	91	1(0)	18 × 11	112°	II	F	-	-	c
436	9 G-16-3	剥片	20×14×7	1.48		-	-	91.5°	II	H	-	L	b
437	9 G-49-5	剥片 U	28×19×13	5.06	92	1(0)	12.5×6	114.5°	IV	H	+	-	l
438	9 G-49-6	剥片	33×34×13	10.70		1(0)	21 × 9.5	112°	Ⓓ	F	-	-	l
439	9 G-49-7	剥片	27×21×6.5	2.13		l	-	-	II	F	-	-	l
440	9 G-49-8	剥片	33×18×8	4.05		1(0)	10 × 2	111.5°	Ⓓ+Ⓔ	F	-	-	l

流紋岩質凝灰岩11 暗紫灰色を呈し、斑晶を含む。クラスターaに剥片が1点ある。

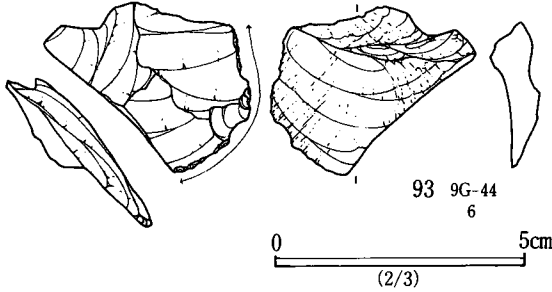
第211表 第41ブロック遺物属性表(流紋岩質凝灰岩11)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
441	8 G-88-5	剥片	28×21×8.5	2.68		3(2)	17 × 5	112°	II	F	-	-	a

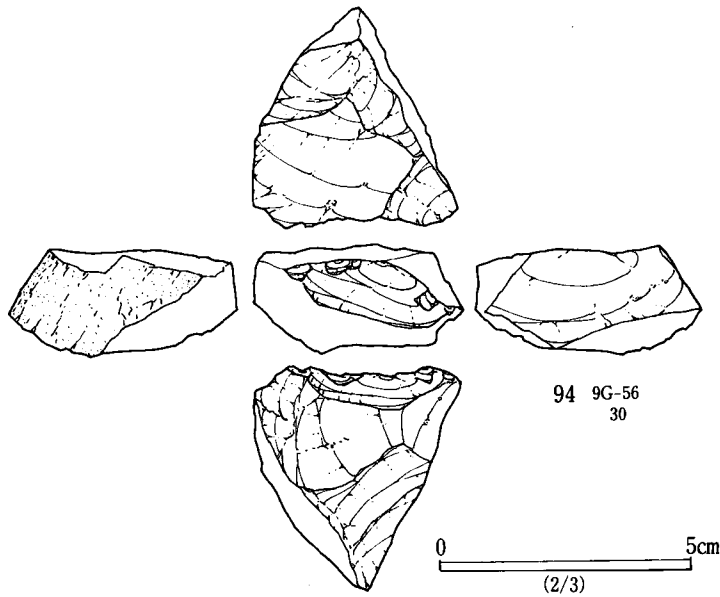
流紋岩質凝灰岩12 灰色と濃紫色の縞が交互に現われる。不定形の剥片が1点あるのみであるが、これには使用痕が認められる。クラスターjの単独資料である。

第212表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩12)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
442	9 G-44-6	剥片 U	36×36×10.5	8.29	93	--	--	--	II	--	+	M	j



第355図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩12)



流紋岩質凝灰岩13 紫灰色を呈し、白色の細かい縞目が平行に入っている。原礫面は淡黄色をしている。石核c類(94)と、剥片が1点ずつある。共にクラスターnの検出である。

第356図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩13)

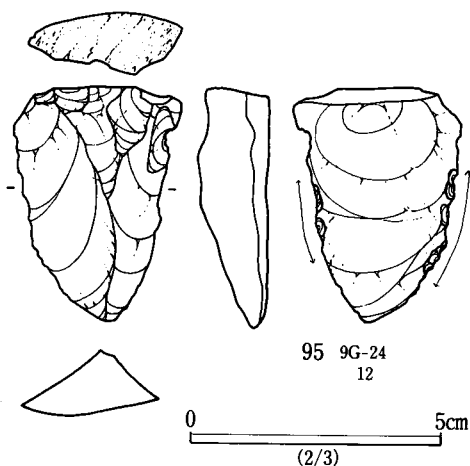
第213表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩13)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
443	9 G-56-20	剥片	28×23×8.5	4.04		--	--	--	II+III	--	--	M	n
444	9 G-56-30	石核	40×43×25	32.15	94							M	n

流紋岩質凝灰岩14 紫色の地に、淡黄色の細かい縞が平行に走っている。僅かに斑晶が認められるが、珪質、緻密な塊状岩である。原礫面は、この種の石材に通有の淡黄色をしている。自然面を打面とする逆三角形をしたUF(95)と、節理面で碎けた削片が1点ずつある。クラスターf、iに分かれて分布している。

第214表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩14)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
445	9 G-24-12	剥片 U	47×33×13	15.89	95	C	30 ×10.5	103°	II	H	+	-	f
446	9 G-36-6	削片	32×17×10	3.52									i



流紋岩質凝灰岩15 灰白色を呈し、暗青灰色の細かい縞が多く認められる。また、斑晶も少量含む。不定な剥片破片がクラスター f にある。

第357図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩14)

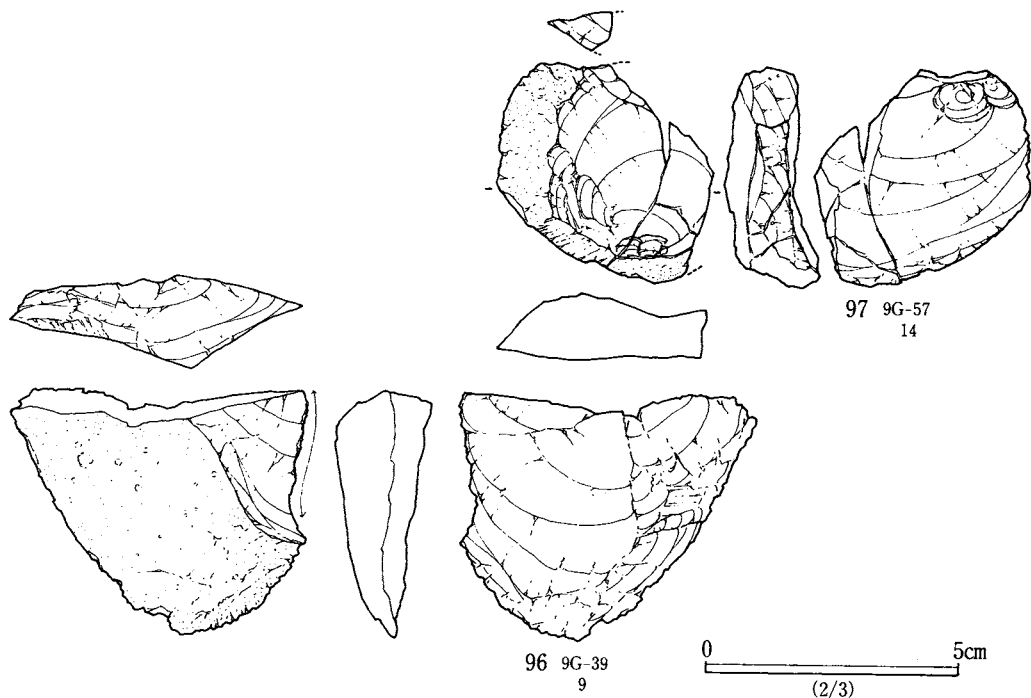
第215表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩15)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
447	9 G-23-3	剥片	23×13×5	1.37		P	-	-	II+III+IV	F	-	-	f

流紋岩質凝灰岩16 僅かに斑晶を含むが、黒味の強い暗灰色を基調とし、乳白色の斑紋が認められる緻密な石材。9点の剥片類によって構成されているが、このうち、クラスターmに7点が集中している。クラスター1、Pの1点は、もしかするとエラーかもしれない。興味深いことに、クラスターmに分布する7点の資料のうち、4点の剥片は、表面が白色に変色し、か

第216表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩16)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
448	9 G-39-9	剥片 U	51×57×17.5	38.01	96	-	-	-	II	F	+	13	l
449	9 G-57-7	剥片	19×10×7.5	1.01	97							破碎	m
450	9 G-57-12	剥片	41×33×13.5	20.00	97	1(0)	-	-	III	O	-	破碎	m
451	9 G-57-14	剥片	22×11×6.5	1.67	97							破碎	m
452	9 G-57-18	剥片	15×17×10.5	2.57	97							破碎	m
453	9 G-67-4	削片	16×6×2	0.15									m
454	9 G-67-5	削片	19×6×6	0.53									m
455	9 G-67-6	削片	7×7×2.5	0.15									m
456	9 G-69-4	剥片	31×11×7	1.69		-	-	-	III	F	-	B	p



第358図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩16)

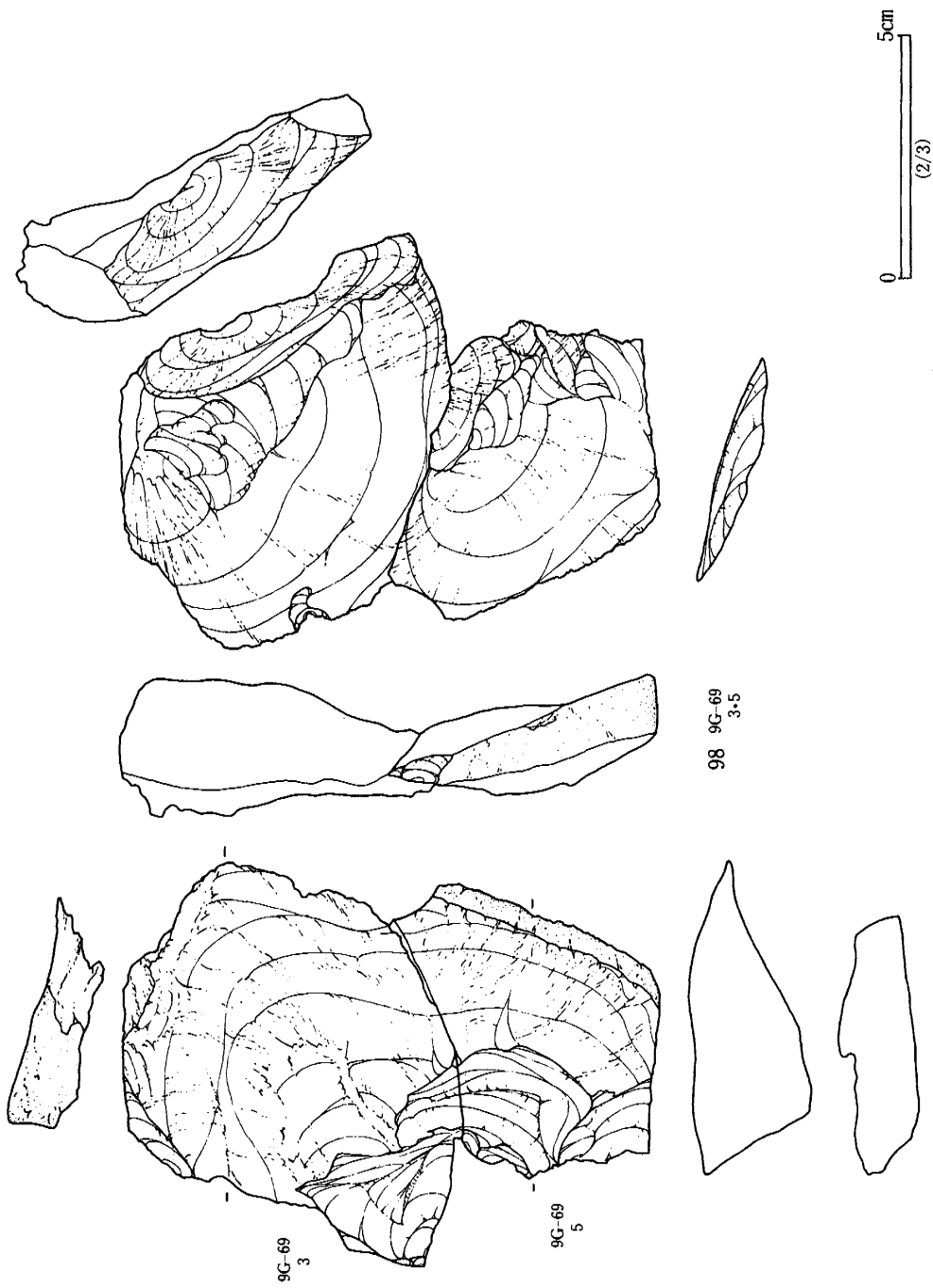
つ火バネが認められることなど、本来1枚の剥片であったものが、被熱によって破碎したものと考えられる。これらは、クラスター西側に偏在していた。

流紋岩質凝灰岩17 黒味の濃い暗灰色をした緻密な石材。明灰色の斑紋が認められる。また、原礫面は淡灰色、節理面は灰褐色になっている。極めて大型の石核（あるいは円礫）から剥離されたと思われる剥片と、それを素材とする石核c類とを1点ずつ含んでいる。両者は接合し、素材が、長辺12cm、短辺8cmぐらいの四角形の横断面をした礫であることが分かるが、礫長軸と直交する面から、求心的加撃によって得られた剥片であることも判明した。2点は共にクラスターPから検出された。

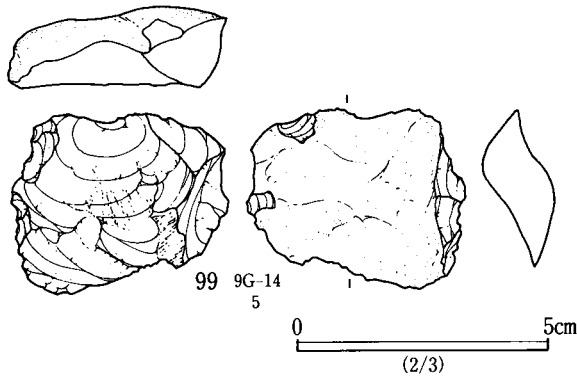
第217表 第41ブロック遺物属性表(流紋岩質凝灰岩17)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
457	9 G-69-3	石核	70×92×26.5	102.9	98								P
458	9 G-69-5	剥片	53×70×16	53.37	98	ℓ	—	—	II	O	—	—	P

流紋岩質凝灰岩18 灰白色と青灰色の縞目が交互に現れる石材。斑晶が少し目立ち、あまり良質な材質ではない。石核1点と、剥片7点とからなる。資料数は多くないが、原礫が比較的小型のものであるため、ブロック内で消費された数少ない母岩のひとつと見られる。礫の割り方は、原礫を石砧上に固定し、石槌で破碎する方法が採用されており、一種の両極的手法と見



第359図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩17)

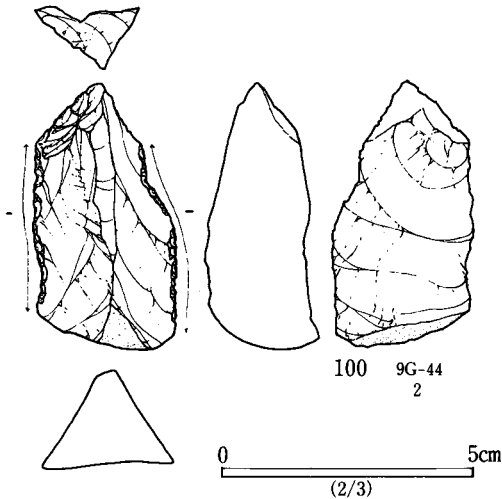


第360図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩18)

られよう。c、f、jなど、ブロック西北部のクラスターに多く、特に、クラスターj西縁にまとまっている。

第218表 第41ブロック遺物属性表(流紋岩質凝灰岩18)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
459	9 G-05-5	剥片	30×23×12	8.16		—	—	—	①	F	—	—	c
460	9 G-14-5	石核	41×35×14.5	19.45	99								f
461	9 G-24-1	剥片	27×22×9	3.29		c	21.5×9.5	81°	II	F	—	—	f
462	9 G-24-7	剥片	22×18×5	1.48		c	—	90°	II	F	—	L	j
463	9 G-33-6	剥片	26×16×6.5	2.59		c	—	102°	II	—	—	H+R	j
464	9 G-34-11	剥片	23×23×6	2.94		c	12×4	77.5°	II	F	—	—	j
465	9 G-34-13	剥片	19×14×5	0.95		—	—	—	II	F	—	B	j
466	9 G-35-12	剥片	37×50×17.5	31.75		(ℓ)	—	—	I	F	—	L	j



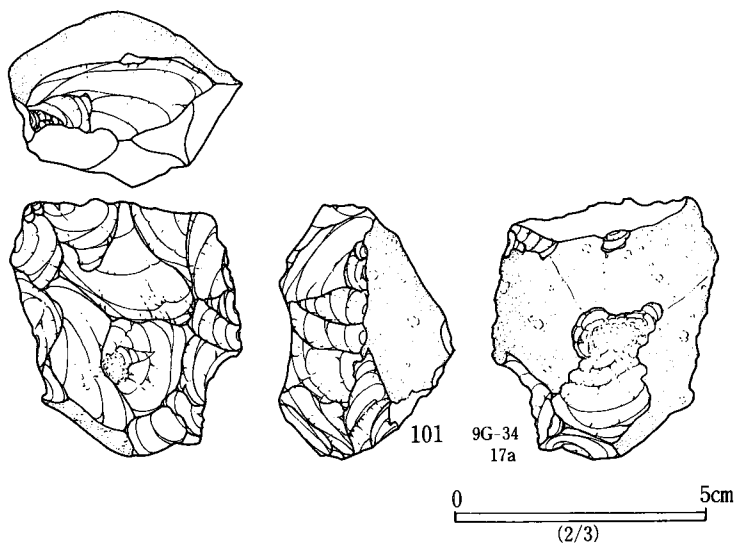
第361図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩19)

流紋岩質凝灰岩19 淡黄色を呈し、若干、粒子が粗いが均質な石材。原礫面は茶褐色をしている。剥片6点があり、クラスターjの中央付近に集中するスポットがある。剥片を見ると、石核d類から剥離されたものが多いと考えられるが、クラスター内部での母岩消費を示唆する資料は得られていない。

流紋岩質凝灰岩20 淡黄褐色の珪質、緻密な石材。原礫面は暗赤褐色で微光沢を帯びる。石核b類が単独でクラスターjに分布している。

第219表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩19)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
467	9 G-32-3	剥片	29×35×7	4.37		2(1)	12 × 2.5	90°	Ⅲ	F	-	-	j
468	9 G-34-5	剥片 U	22×18×9	2.99		1(0)	15 × 7	116°	Ⅳ	-	+	H	j
469	9 G-34-15	剥片	15×15×6	0.82									j
470	9 G-34-176	剥片	20×27×8	2.07		1(0)	9 × 7.5	90°	II	F	-	-	j
471	9 G-44-2	剥片 U	53×27×19.5	23.44	100	1(0)	21 × 11	117°	II	O	+	-	j
472	9 G-53-5	剥片	26×24×7	3.58		1(0)	4 × 4	111°	II	F	-	-	o



第362図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩20)

第220表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩20)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
473	9 G-34-17 a	石核	55×40×31.5	73.20	100								j

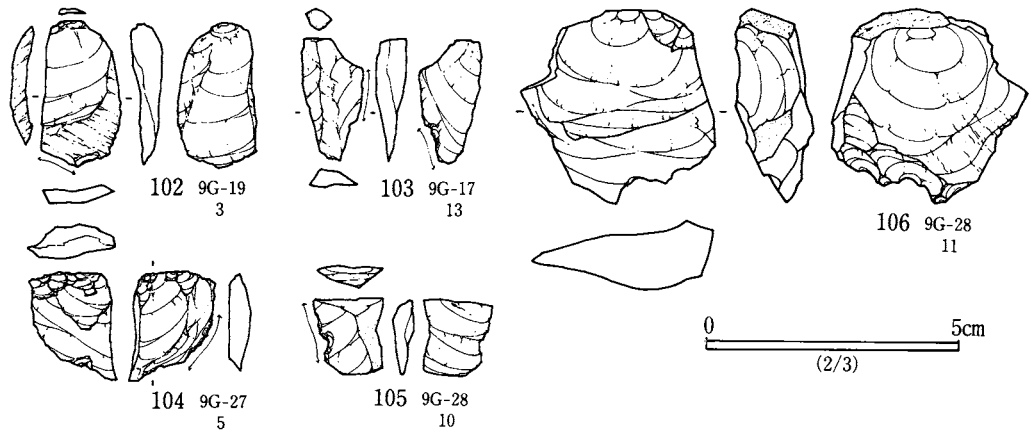
流紋岩質凝灰岩21 淡黄色で、やや粒子が粗く、炭質物を含んでいる。クラスターmに礫面付の剥片が1点分布している。

第221表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩21)

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
474	9 G-57-15	剥片	42×42×11	14.87		1(0)	14 × 8.5	97°	I	F	-	-	m

流紋岩質凝灰岩22 青灰色の細粒な石材。一部に、細かい捕獲岩片が観察される。石核、あるいは削器が1点(106)あるが、他の7点は全て剥片である。剥片のうち、明らかに OEF と

見られるものが3点ある。楔形石器の本体は遺存しないが、OEFには明瞭な使用痕がある。クラスターd、g、hなど、ブロック東縁にまとまって分布している。



第363図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩22)

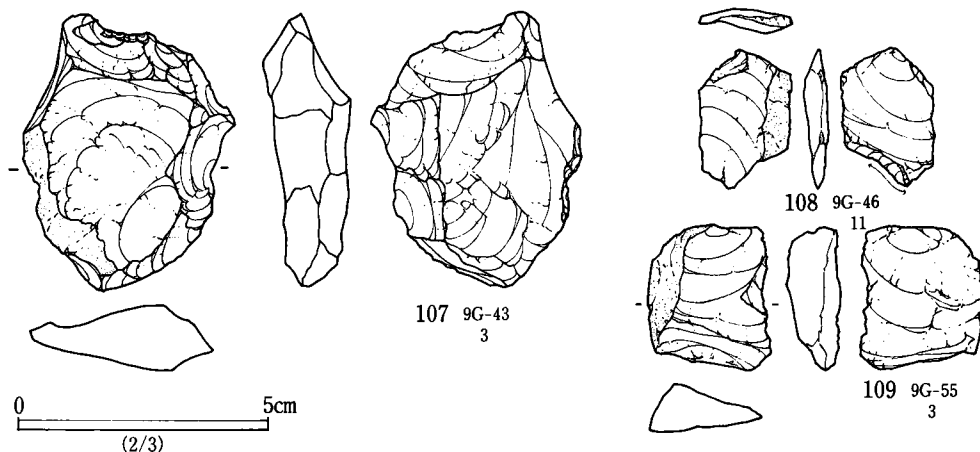
第222表 第41ブロック遺物属性表(流紋岩質凝灰岩22)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
475	9 G-17-5	剥片 R	20×8×6	8.50		—	—	—	IV+不明	—	+	B	d
476	9 G-17-10	剥片	40×20×18	13.26		1(0)	35×13	109°	Ⓧ	F	—	—	d
477	9 G-17-11	削片	7×11×2	0.13									d
478	9 G-17-13	剥片 U	25×13×5.5	1.09	103	C	5.5×4	81.5°	II+III	F	+	—	d
479	9 G-19-3	剥片 U	28×16×6	2.47	102	C	5×0.5	118°	II	H	+	—	g
480	9 G-27-5	楔形石器	23×16×5.5	1.95	104	ℓ	—	—	II	H	+	—	d
481	9 G-28-10	剥片 U	15×14×4	0.66	105	—	—	—	II	H	+	—	h
482	9 G-28-11	石核	37×35×12.5	15.07	106								d

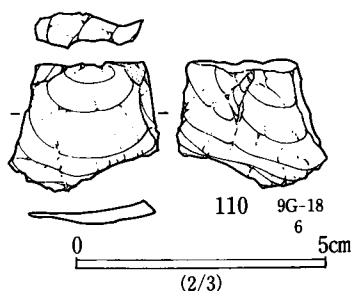
流紋岩質凝灰岩23 暗灰緑色に明灰色の細かい斑紋が入る比較的緻密な石材。107の石核と、それから剥がされた6点の剥片から構成されている。石核はC類であるが、最終的には一種の錐のような石器として用いられたと見られる。分布はクラスターnの中央に3点程まとまっているが、クラスターoにも点在している。

第223表 第41ブロック遺物属性表(流紋岩質凝灰岩23)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
483	9 G-43-3	石核	53×39×15	29.20	107								o
484	9 G-45-6	剥片	19×16×7	1.80		2(0)	15.5×7	80°	III+IV	F	—	—	o
485	9 G-46-11	剥片 U	27×20×5	2.28	108	P	—	—	III	—	+	H	n
486	9 G-54-19	剥片	17×16×6	0.89		C	11×4	102.5°	II	H	—	—	o
487	9 G-55-3	剥片	29×24×9.5	6.68	109	C	20×9	95.5°	II+III	F	—	—	o
488	9 G-56-9	剥片	14×22×5	1.23									n
489	9 G-56-11	削片	12×12×2	0.23									n



第364図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩23)

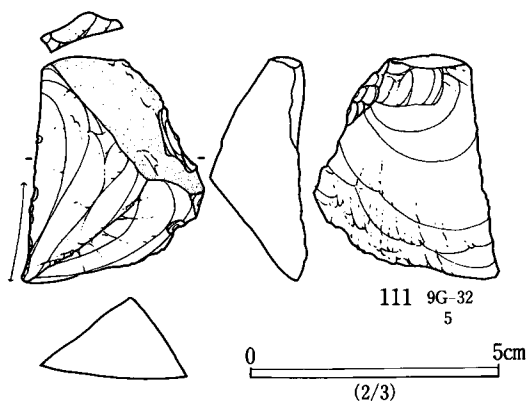


第365図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩24)

流紋岩質凝灰岩24 青灰色を呈し、部分的に白い斑紋が点在している。安山岩の一部との差が微妙である。剥片3点が、クラスターo、i周辺に点在している。

第224表 第41ブロック遺物属性表(流紋岩質凝灰岩24)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
490	9 G-18-4	剥片	19×13×4	1.17		1(0)	9×3	101°	I	F	—	—	d
491	9 G-18-6	剥片	26×28×7	4.61	110	1(0)	21×6	97°	II	H	—	—	d
492	9 G-37-12	剥片	31×20×16	6.35		1(0)	7×5.5	85°	II+III	O	—	—	i



第366図 第41ブロック石器実測図(流紋岩質凝灰岩25)

流紋岩質凝灰岩25 濃淡のある乳白色の部分と、帯状に発達する多量の捕獲岩片を含む暗紫色の部分とから構成されている。珪質で細粒な塊状岩。UFが1点のみ、クラスターbに存在する。腹面左側縁からの平坦な浅い剥離は末端がstepとなるものが多く、両極手法によるものであろう。

第225表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩質凝灰岩25)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
493	9 G-07-4	剥片 U	44×39×16.5	19.92	111	1(0)	17 × 4.5	115.5°	㊸	F	+	-	b

流紋岩15 比較的大型の礫片。加工痕、使用痕共に認められない。被熱の痕跡もない。クラスターmにある。

第226表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩15)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
494	9 G-58-11	礫	10.5×58×30	192.50									m

流紋岩16 完形。扁平な小型礫で、やはり使用痕、加工痕、被熱痕をもたない。クラスターoにある。

第227表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩16)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
495	9 G-54-38	礫	72×55×15	81.60									o

流紋岩17 大小2点ある。本資料も使用された痕跡はないが、小さい方の礫面が僅かに赤くなっているため、破碎後の2次焼成が疑われる。

第228表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩17)

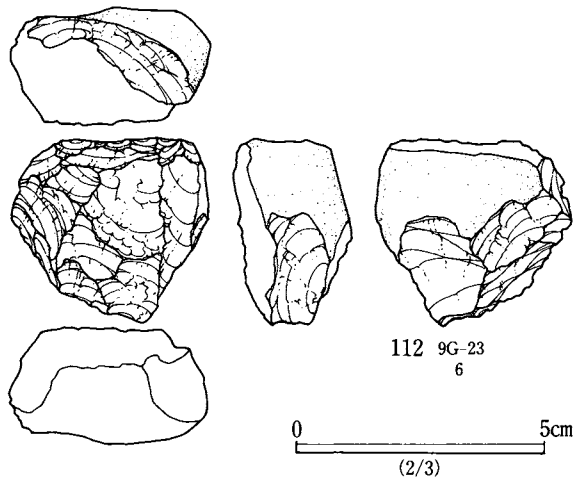
No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
496	9 G-55-4	礫	51×39×37.5	87.70									o
497	9 G-55-5	礫	31×14×10.5	4.75									o

流紋岩18 板状の破片で、2つに割れて出土したが、接合した。斑晶の顕著な石材であるが、あるいは剥片であるかもしれない。被熱された形跡はない。クラスターdから検出された。

第229表 第41ブロック遺物属性表 (流紋岩18)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
498	9 G-18-8	礫	40×30×14	19.66									d
499	9 G-18-9	礫	37×29×14	13.79									d

ホルンフェルス11 粘枝岩起源の変成岩である。黒味の強い暗灰色を呈し、気孔が著しい。両極技法による石核と、それから落とされた薄くスライスされたような扁平な剥片から構成されている。クラスターf、gに分かれて出土している。石核はクラスターfに遺存していた。

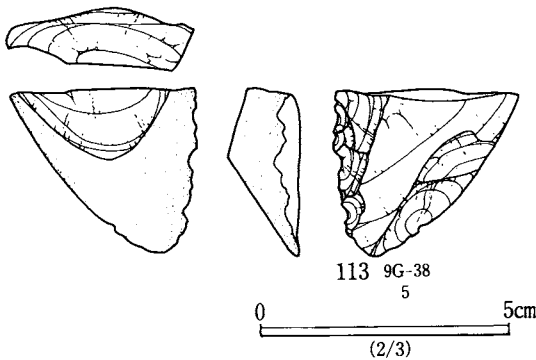


第367図 第41ブロック石器実測図(ホルンフェルス11)

この石核で注意したいのは、剝離作業面に切られて、古い平坦打面の一部が遺存していることで、本来は第II群第1工程に組み込まれていたものが、最終的に第I群へ転移されたことが推察される。安山岩94の65例もこの種の石核であるかもしれない。

第230表 第41ブロック遺物属性表 (ホルンフェルス11)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
500	9 G-14-6	削片	13×7.5×4	0.37									f
501	9 G-23-6	石核	37×36×20.5	36.57	112								f
502	9 G-24-11	削片	18×10×3	0.44									f
503	9 G-29-33	剝片	17×25×3	1.50		C	20 × 2	114.5°	II	H	—	—	g
504	9 G-29-65	剝片	17×13×5	0.91		C	11 × 4	124.5°	III	H	—	—	g



第368図 第41ブロック石器実測図(ホルンフェルス12)

ホルンフェルス12 暗灰色をした、粘板岩起源の変成岩である。明褐色の細かい斑紋が著しい。比較的大型の剝片の腹面に2次加工のある石器が、クラスター1から検出されている。もう少し大きな石器の破片のように見えるが、それがどのようなものであったのか分からない。

第231表 第41ブロック遺物属性表 (ホルンフェルス12)

No	遺物 No	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
505	9 G-38-5	剝片 R	41×34×13	15.01	113	—	—	—	ⓐ	F	+	B	ℓ

d) 小結 第41ブロックは第2 黒色帯上半下部 (IX層上部) を産出層準としている。この石器群は第5章で記載される芋窪遺跡とともに、下総台地第2 黒色帯上部石器群の様相を考察する上で重要である。この二つの石器群は一見したところ、不定形な剥片がその大半を占めており捉えどころがないように見える。しかし、既に遺物の分類の項で検討したように、一般的剥片剥離技術とともに両極技法による剥片剥離・石器製作技術がシステムとして機能していることが予測されるに至った。その詳細は既に述べた通りであるが、最後に構造的な視点から石器群の位置づけを展望しておきたい。

(1) 初めにブロックを構成している石器群を、二つの構成ごとに整理したい。括弧内には各母岩に帰属する資料数を示した。

第II群 泥岩22(1)・23(1)・24(2)・25(2)・26(1)、珪質粘板岩5(1)、珪質頁岩99(1)・102(1)・103(1)・104(1)・106(5)・108(1)・109(1)・110(1)・111(1)・112(1)・113(1)・119(2/3)・120(2)・121(9)、チャート45(1)、珪化木1(12)、安山岩90(1)・97(2)・98(1)・99(16)・104(1)・105(1)・108(1)・110(1)・111(1)・流紋岩質凝灰岩1(1)・3(1)・4(4)・5(2)・6(2)・7(3)・8(1)・10(6)・11(1)・12(1)・13(2)・14(2)・16(9)・17(2)・18(7)・19(6)・20(1)・21(1)・23(7)・24(3)・25(1)、ホルンフェルス11(5)・12(1)

第I群 珪質頁岩101(7)・105(1)・107(1)・114(1)・115(3)・116(12)・117(2)・119(1/3)・安山岩91(62)・92(3)・93(39)・94(3)・96(8)・100(109)・107(5)・109(2)、流紋岩質凝灰岩2(5)・9(2)・22(8)

これを一瞥して明かなように、第II群には珪質頁岩や流紋岩質凝灰岩が主体的に含まれ、珪化した細粒の塊状岩が選択的に使用されている。また、第II群には56個体の母岩が含まれているが、資料総数は141点にすぎず、1母岩あたりの帰属資料数は平均して2.5点あるにすぎない。このことは、本群の資料の大半が剥片、あるいは石核・ブランクの状態で搬入されていることを示しており、ブロック内での母岩消費の痕跡をほとんど残していない。

一方、第I群にあつては珪質頁岩や流紋岩質凝灰岩も少量認められるとは言え、黒色緻密質安山岩の使用頻度が他を圧倒している。母岩の消費状況を観察すると、第I群には19個体の母岩があり、これは第II群の約1/3にすぎないが、平均資料保有数は14.4点と第II群の6倍弱となり、ブロック内での消費を目的として安山岩の原石・ブランクが搬入されている傾向を明瞭に示す結果が得られている。すなわち、石器群の技術形態学的分類と石器石材の選択・石材の消費過程との間に相関的な関係が抽出された。

大林遺跡第41ブロックよりも多少先行する中山新田I遺跡(田村 1986)においても、上述したような相関的な関係が知られている。詳細は別稿を準備しており、それに譲りたいが、ここでは概要を紹介しておこう。中山新田I遺跡の石器群は大別して2群にわけられる。

第II群 石刃の生産・消費体系である。石刃の生産は遺跡内のごく限定された2箇所のプロ

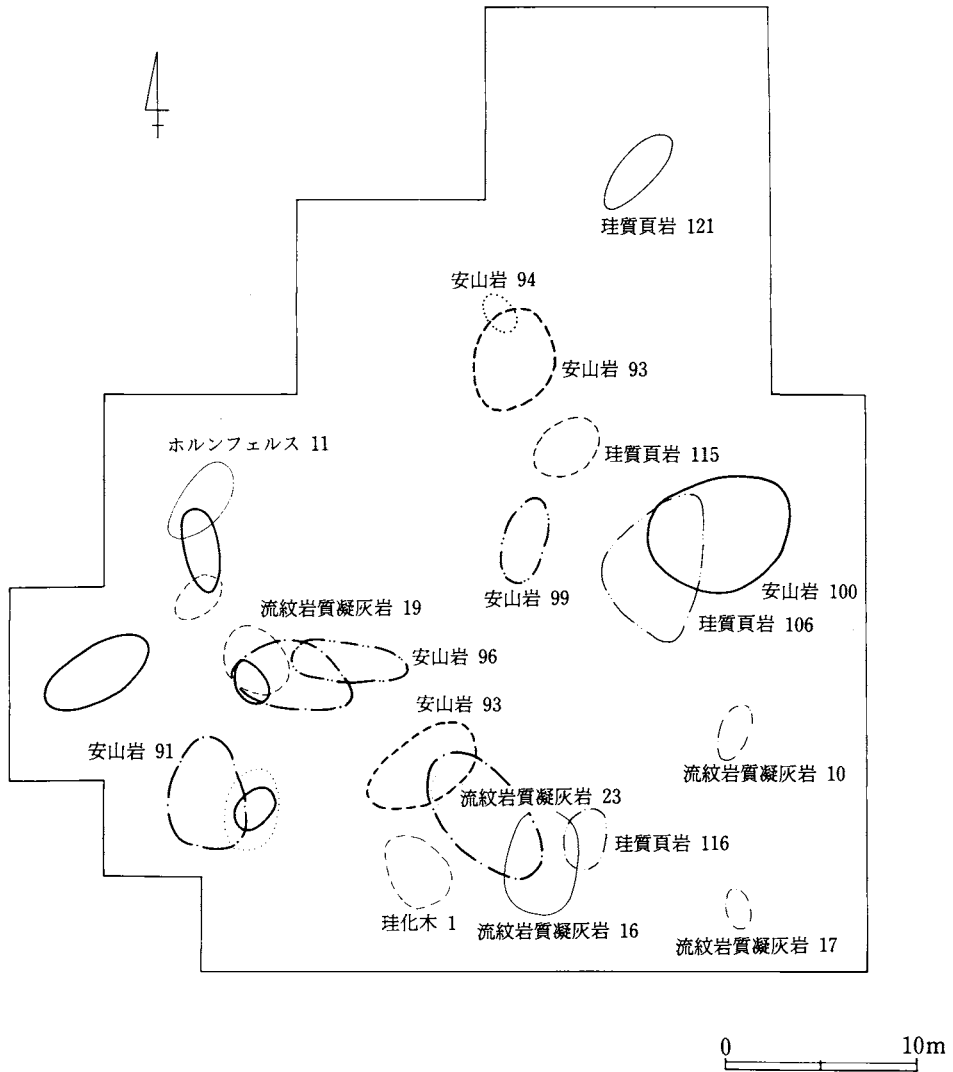
ックで7個体の母岩を消費していることが確認されたが、大半のブロックには石刃や石刃ナイフが単体で存在し、wasteを残していない。また、明らかに同一の母岩から生産されたと思われるものが極めて少ない。石材には珪質頁岩や流紋岩（凝灰岩）など塊状・緻密な珪化岩を選択的に使用している。

第I群 一般的剥片剥離手法による剥片の生産・消費体系である。遺跡内の随所に多くの剥片・削片・石核など waste が散乱して、活発な母岩消費過程の痕跡が観察される。特に、高原山産黒曜石や、安山岩、斑晶の多い流紋岩などを多用して、台形石器が製作されている。

この様相と第41ブロックの石器群の内容の間には大きな差異があることは事実である。例えば、大林遺跡第41ブロックには中山新田I遺跡において第I群とした技術的系列が欠落している。さらに、台形石器の製作の痕跡も留めていない。しかし、最終的な廃棄形態から再構成しうる石器群の生態は、その機能的位相において叙上の差異を超えた相関的關係を示唆しているように思われる。すなわち、石刃は不定形な一般的剥片に変換され、台形石器は楔形石器に変換されていると理解したらどうであろう。ある地域の集団の保持した装備が、ある期間その機能的な面において基本的に変化しなかったとすれば、その変化は諸装備固有の属性の個体発生的変化によると考えることにしよう。されば、台形石器の帯びていた機能はピエスエスキューと両極石核から得られる小石刃に転移した場合が、たとえ限定的ではあったにせよ想定されるのではないか。この場合、台形石器の調整技術の一部にバイポーラーテクニックが採用されていること、また、台形石器が植刃という組み合わせ嵌装技術を潜在的に保持していることは、両者の属性群の指向的変換過程の前提条件となろう。

この問題を厳密に議論するためには、廃棄地点の機能的異差性を排除し、比較の対照となる石器群の社会的・自然的適応形態の等価性が保証されていなければならない。この点に関しては未だ期が熟していないものの、例えば大林遺跡第41ブロックと同様に大量の楔形石器を特徴的に保有している芋窪遺跡や遠山天ノ作遺跡（高橋・奥田 1986）が、本地域における第2黒色帯上半期の遺跡としては破格とも言える千点を超える遺物を保有し、この段階としては過不足のない石器群の内容を開示していると思われること、また、これらの石器群の位置する層準には、中山新田I遺跡の石器群と内容を等しくする石器群は既に存在しないことが多くの調査例から判明しており、議論の前提条件は次第に整備されつつあると言ってよいだろう。しかし、第2黒色帯上部の石器群がおしなべて等質的な技術と組成を示している訳ではない。一方では、剥片製小型ナイフへの移行が認められ、楔形石器と共伴する場合もあるが、そうでないことも多い。この現象は先行する段階におけるナイフ形石器と台形石器の共時的存在様相の変換であり、石刃の限定的出現の示唆するところによれば、石刃的属性群の潜在化に従った石器生産システムにおける負の送還と理解するのがよい。

(2) 次に、各クラスターの形成過程について気づいた点を述べておきたい。第369図に主要母岩



第369図 第41ブロックの主要母岩の分布状況

の分布状況を示したが、この図から明らかなように、単一のクラスター内でまとまりを見せる母岩も存在する一方、点々と廃棄地点を移動したり、クラスター間にまたがるように分布している母岩もある。特に、ブロック内での消費母岩にこの傾向が強く、安山岩100のように、集中的な消費地点を台地奥に持ち、縁辺部にも少量ずつの廃棄地点を合わせもつ例もある。これらの事例からも窺われるように、クラスターとは、異種母岩の廃棄地点が重複した結果、見かけ上独立的な地点分布を形成している場合も多い。すなわち、初めに予想したとおり、個々のクラスターに廃棄地点といったもの以上の過剰な意味を付与することはできない。

これまで、再三に亘ってブロックの形成が同一地点の反覆利用による、複数の廃棄行為の累

†13G-89

†13H-82

†13H-81

†13H-80

†13G-89

†13H-83

†13H-82

†13H-81

†13H-80

†13G-89

⊙2

□13

○4

②

②

3◆

○5

○6

○5

○6

○4

○4

○4

○4

○4

①

①

①

①

①

7○

⑩

⑩

⑩

⑩

⑩

⑩

⑩

⑩

⑩

⑩

⑩

⑩

⑩

⑩

†13H-93

†13H-93

†13H-91

†13H-90

†13G-99

†13H-93

†13H-93

†13H-91

†13H-90

†13G-99

②

◆

○

●

●

②

◆

○

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

②

†14H-03

†14H-02

†14H-01

†14H-00

†14G-09

†14H-03

†14H-02

†14H-01

†14H-00

†14G-09

0

4m

†14H-02

†14H-01

†14H-00

†14H-02

†14H-01

†14H-00

†14H-00

†14H-00

25.0

24.5

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

24.0

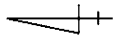
24.0

24.0

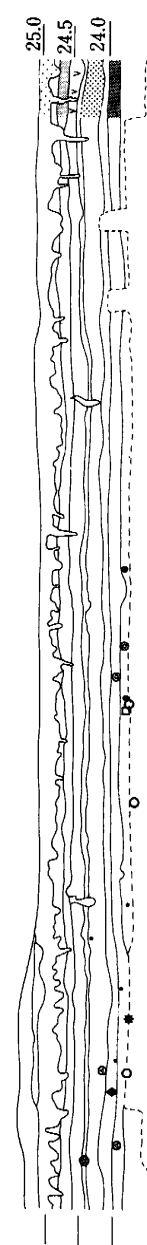
24.0

24.0

24.0



- ② 楔形石器
- ◆ 石鏃
- 剥片U・R
- 剥片
- ・ 剥片核
- ② 石斧
- ② 石鏃
- 礫
- ★ 貝



第370図 第42ブロック遺物出土状況

積によるものである可能性を指摘してきた。第41ブロックのクラスターの多くもまたその母岩分布の交錯によく表現されているように、世帯的単位を反映するという単純な経過を踏むものではなく、母岩の消費と廃棄との複数のサイクルと、廃棄された遺物の2次的な移動再堆積の複合した成因をもつものであることが推定されよう。仮に、この立場にある程度の妥当性が認められるとすれば、単一であれ、複数であれ、ブロックの同時性は如何なる基準のもとに認定し得るであろう。今のところ、それははなはだ困難であるように見える。

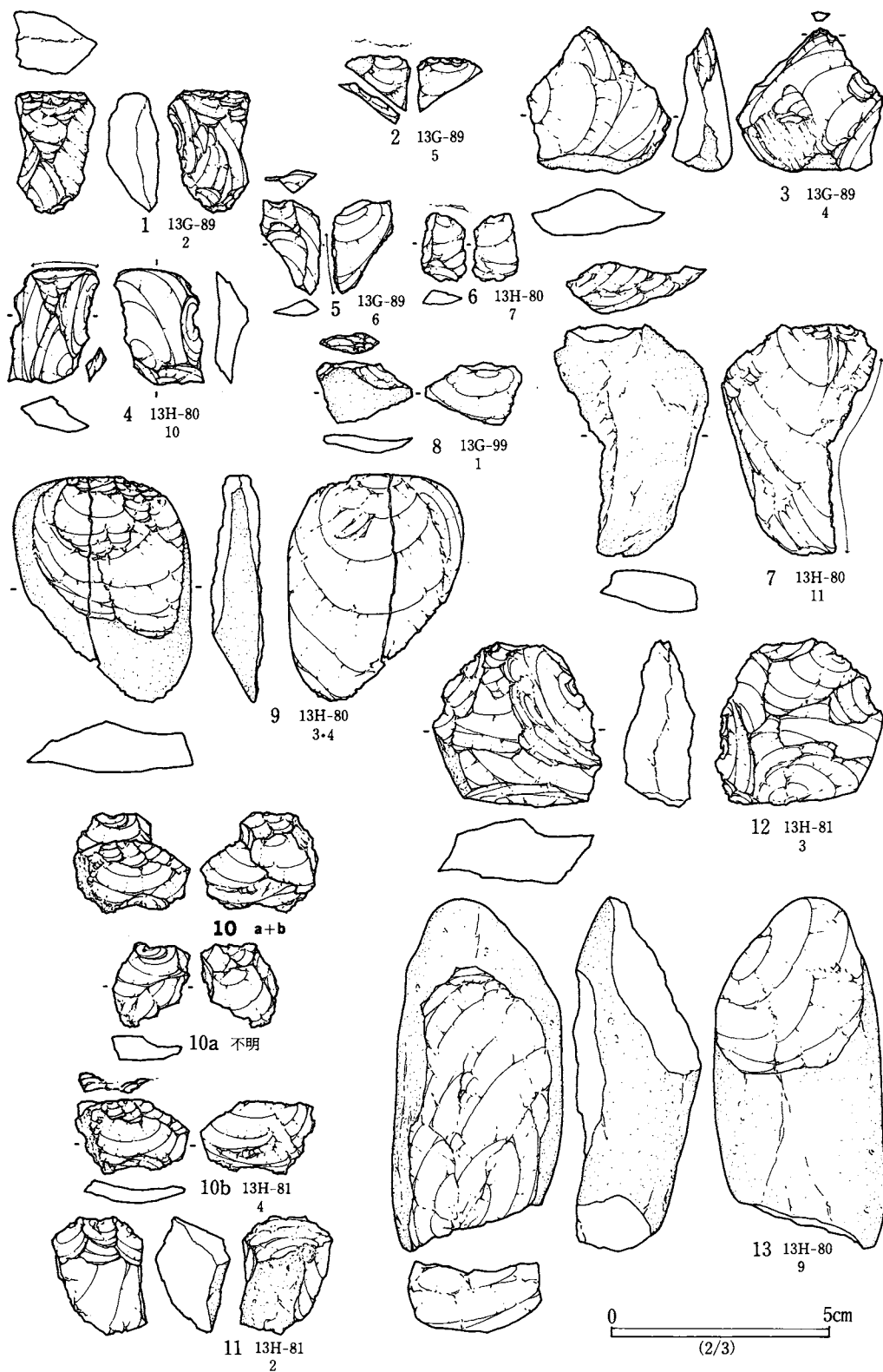
H. 第VII文化層 (第370・371図、図版29・75) IX層最下部～X層上部を産出層準とする文化層である。第3地点最下層のブロックが該当し、これを42ブロックとした。小規模なブロックであるが、この段階の石器群の様相をよく示しているばかりか、海産の貝破片を伴っていた。

a) 分布状況 13G-89～13H-81区にかけて集中的に分布しているが、13G-99区、13H-90区からも1点ずつ遺物が検出されている。集中部分は、東西8.2m、南北4.5mぐらいの範囲で、南に開口する半環状の分布域を構成しているが、東西2群からなるクラスターの集合したものと見ることもできる。貝の検出されたのは、集中域の南約5mの地点で、X層にかなり食い込んでいた(図版29)。西側に剥片が単独で検出されたが、これは石斧の小破片である。この貝は不注意にも廃棄されてしまい、詳細は不明であるが、その後、千葉市荒久遺跡IX層において、成田層起源かと推定される貝化石破片が出土した(報告書作成中)。貝殻が単独で、ローム層中に長期間保存されるとは考えられず、もしかすると、本ブロック例も化石化した貝殻片であったのかもしれない。これに派生する問題点に就いては、荒久遺跡の報文で触れたい。

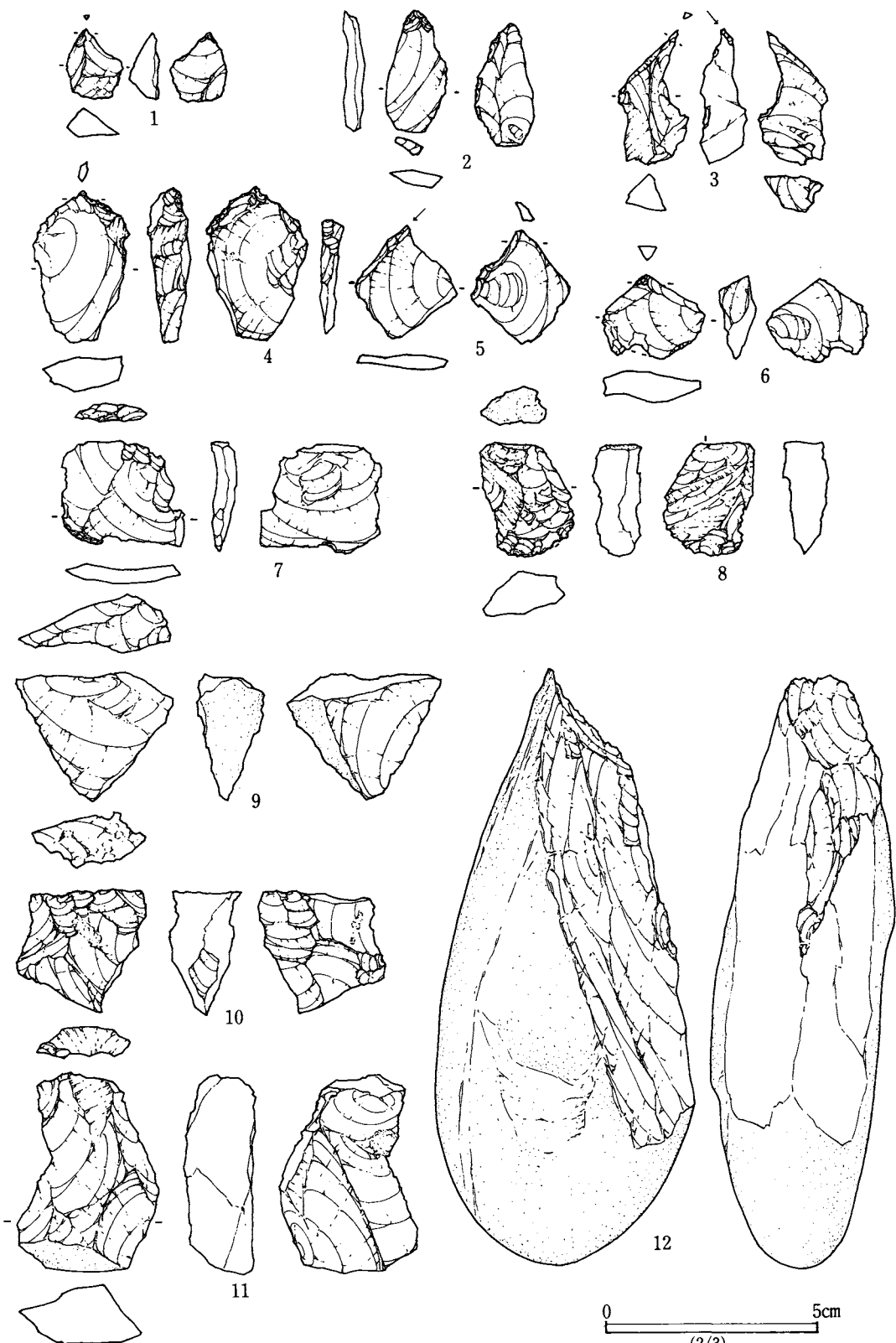
産出層準の確定は難しいが、X層上部検出の遺物が多い。しかし、産出レベルの高いものが若干あり、第38ブロックの遺物との分離に微妙な影響が及ぶかもしれない。石器群の様相をも参照して、一応X層上部を産出層準としたい。

b) 出土遺物 遺物は総数でも20点しかなく石器組成を知るには不十分な資料である。内容は楔形石器2点(1、2)、石錐1点(3)、台形様の調整剥片1点(4)、石斧破片1点(8)、剥片12点(5～7、9、10)、石核2点(11、12)礫1点(13)であり、X層石器文化の特徴器種を含んでいる。資料が少ないので、石器のつくり方を詳しく理解することができないが、分割された剥片の腹面を剥片剥離作業面とする盤状石核(11)や、求心的な剥離を背腹両面に加えて横長の剥片を生産する石核(12)などから種々の剥片が得られている。楔形石器(1)から剥離される小石刃状をした削片(6)、礫器状の石核の予想されるやや大型の剥片(9)などもある。

石器の特徴として、剥片の形状を殆んど変えることなく、部分的に細かい調整を加えた錐状の尖頭器(3)や、台形様の石器(4)を作出することが挙げられる。これは、本遺跡のみの特徴ではなく、例えば、佐倉市向山谷津遺跡X層の石器群(第372図)とも共通している。向山谷津遺跡



第371図 第42ブロック石器実測図



第372図 佐倉市向谷津遺跡X層の石器群(報告書を改変)

では4のような台形様の石器は認められないが、3と比較し得る例が6例ある(同図1~6)。楔形石器も1例(8)ある。更に、13の礫器と似たもの(12)も確実に共伴している。また、石核には、多打面の賽子状のものがあり(10)、両遺跡の資料を合わせると、X層石器群の内容をより具体的に知ることができる。石斧の存否は、本ブロックには断片的資料しかないが、市原市草刈六之台例が知られており、これを組成に加わることにより、ほぼ東京都武蔵台遺跡Xb文化層(都立府中病院内遺跡調査会 1984)と一致する内容が抽出されることになる。

c) 石器石材 本ブロックの構成母岩は10種で、安山岩2種、砂岩2種、珪質頁岩2種、メノウ2種、珪質粘板岩、流紋岩各1種という内訳になる。石斧破片は砂岩、礫は流紋岩であるため、全体的には緻密な石材から構成されている。楔形石器の製作・消費過程に関連する安山岩8が、8点の資料を持つが、それ以外の各母岩は2点以下の資料しか保有していない。

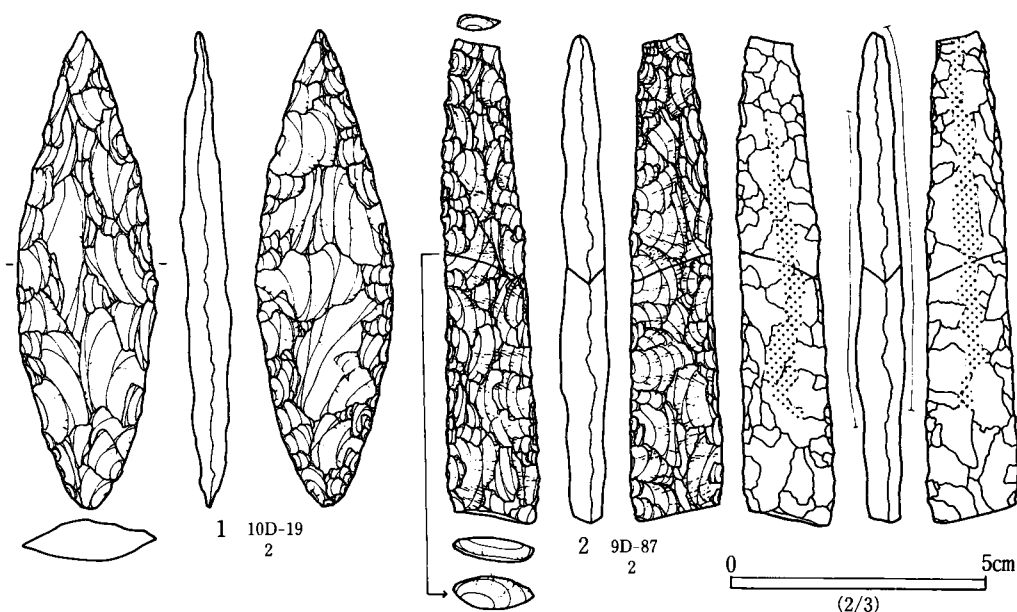
d) 小結 X層上部に含まれる小規模なブロックである。ブロックの西側には、楔形石器や錐状尖頭器など2次加工のあるものが多く、東側には、石核、剥片、礫がまとまっていた。石斧の小破片はブロック集中部分の南側に遊離しており、これのやや東側から貝殻の破片が得られた。貝殻は半月状をしており、単独で出土している。化石化したものを搬入した可能性に就いては既に指摘したが、この場合、非実用的なあるいは、象徴的な性格が示唆されよう。四街道市出口遺跡IX中層からは石製垂飾が2点検出されており、先の荒久例をも加えると、この段階に既に各種の装身具が発達していた可能性もあり、本ブロックの貝殻片もそのような派絡の裡に位置づけられるのかもしれない。

第232表 第42ブロック遺物集計表

母岩番号	楔形石器	石錐	剥片U 剥片R	剥片	削片	石核	石斧	礫	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
安山岩 112	1	0	0	1	0	0	0	0	2	10.0	19.55	9.1
安山岩 113	1	0	0	0	6	1	0	0	8	40.0	29.88	13.9
砂岩 5	0	0	0	2	0	0	0	0	2	10.0	23.37	10.9
砂岩 6	0	0	0	0	0	0	1	0	1	5.0	1.30	0.6
珪質頁岩 11	0	0	1	0	0	0	0	0	1	5.0	18.18	8.5
珪質頁岩 123	0	0	1	0	0	0	0	0	1	5.0	1.04	0.5
メノウ 4	0	0	0	0	0	1	0	0	1	5.0	7.35	3.4
メノウ 5	0	0	1	1	0	0	0	0	2	10.0	7.71	3.6
珪質粘板岩 1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	5.0	9.97	4.6
流紋岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	5.0	96.60	44.9
総数	2	1	3	4	6	2	1	1	20	100.0	214.95	100.0
組成比 (%)	10.0	5.0	15.0	20.0	30.0	10.0	5.0	5.0				

1. 表面採集の遺物 (第376・377図)

確認調査及び本調査時に少量ではあるが先土器時代の遺物が採集されているので、一括して紹介しておきたい。



第373図 単独出土の石器実測図(1)

第373図1 粘板岩製の木葉形の石槍である。表裏から入念な剥離が反覆され、紡錘形の横断面をしている。10D-19区から単独出土。

第373図2 暗青灰色の珪質粘板岩製の植刃である。細身の石槍を横割りしている。表裏共に、基体中央部に磨滅して光沢を帯びる部分が観察される(図右の網をかけた部分)。9D-87区から単独で出土しているが、1の石槍の出土地点と比較的近接している。帰属時期も接近しているよう。

第374図1 チョコレート色の珪質頁岩製のナイフ形石器。尖頭部を失うが基部加工の剥片ナイフである。基部端を中心に褐鉄鉱が附着している。第VII文化層に編入される可能性があるが、出土地点を明確にすることができない。

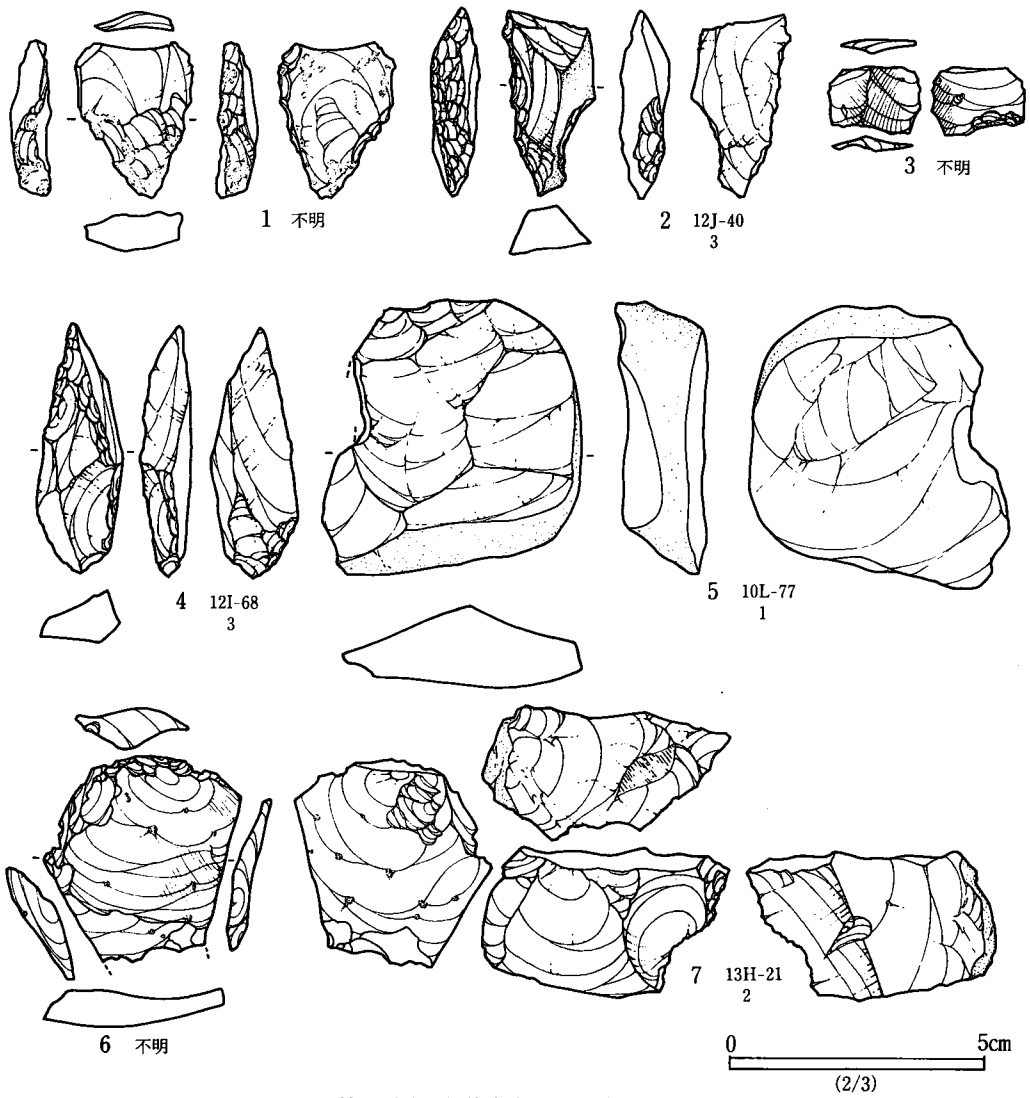
第374図2 黄白色をした流紋岩製のナイフ形石器。横打剥片の上下に2次加工を加えている。VI・V層の石器と見られる。12J-40区から採集された。

第374図3 黒曜石製の折断剥片である。産出地点は不明。

第374図4 黒色緻密質安山岩の横打剥片製のナイフ形石器。背面右側に大きく打面を残し、左側縁尖頭部寄りに2次加工がある。また、基部に簡単な腹面加工が認められる。12I-68区から採集された。

第374図5 トロトロ石(黒色緻密質安山岩)の大型剥片である。3面を原礫面が被覆し、そこを打面とする横打剥片である。第I文化層の構成3の石片に類する。10L-77区の採集品。

第374図6 暗赤色の縞の入る漆黒の黒曜石製剥片。左右を折り取られている。産出地点は不



第374図 単独出土の石器実測図(2)

明である。

第374図7 チョコレート色の珪質頁岩製の石核である。所謂残核となっているため、本来の剥離工程を窺うことはできない。13H-11区から採集された。

第3節 縄文時代

前節において瞥見したように、大林遺跡においては先土器時代各期に亘る居住の痕跡を見出すことができた。本節では、これに後続する縄文時代の様相に就いて記載するが、明らかな生活址は縄文草創期後半において途絶してしまう。草創期の遺物は第6地点に集中するが、これは後に触れるように、大林遺跡中央の埋積谷の消長と密接な関係があると考えられる。草創期以降は、第1地点や第3地点の陥し穴群に象徴されるように、本遺跡は日常的な生活空間から、狩猟と採集の場としての外縁的空間へと変容を遂げていった。第20地点からは、中期前葉の土器が1個体文まとまって出土したが、これも一つの挿話として加え得ようか。

A. 草創期初頭の石器群

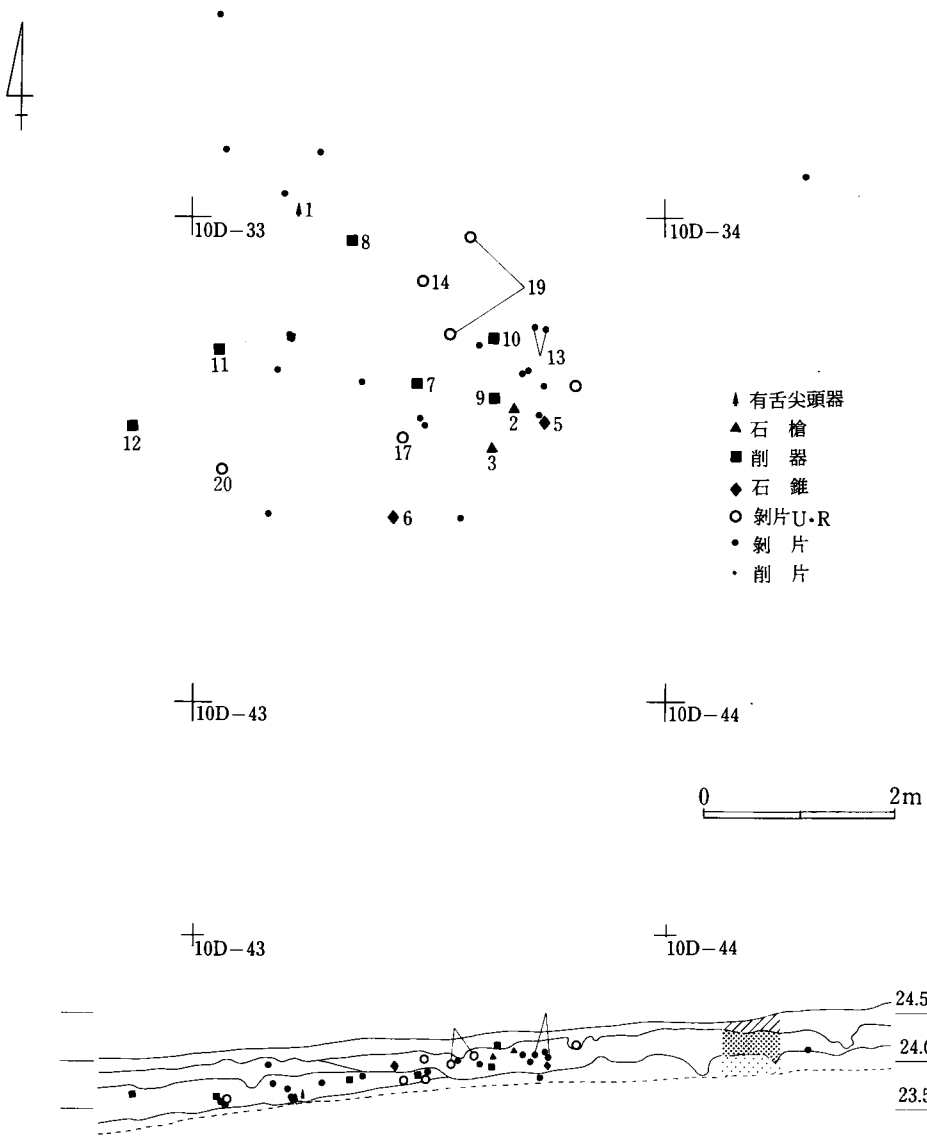
a) 分布状況 10D-33区を中心とする径約5m程の範囲内に有舌尖頭器を含む43点の遺物が集中していた。この地点は埋積谷開口部に臨む舌状台地北端に相当している。遺物は集中範囲の東側に多く、西側は少ない。産出層準はII層の中位から下部である。

b) 出土遺物 土器は検出されなかったが、石器が43点ある。石器の分類には、多少難しいところもあるが、有舌尖頭器1点(1)、石槍4点(2~4)、石錐2点(5、6)、削器6点(7~12)、使用痕のある剝片8点(13~20)、剝片22点、削片2点となろう。利器の占める割合の高い点の特徴であろう。特に、多様な剝片のあり方は重要である。

剝片の生産過程を具体的に示す資料はないが、遺存する剝片の背面構成を見ると、多方向か

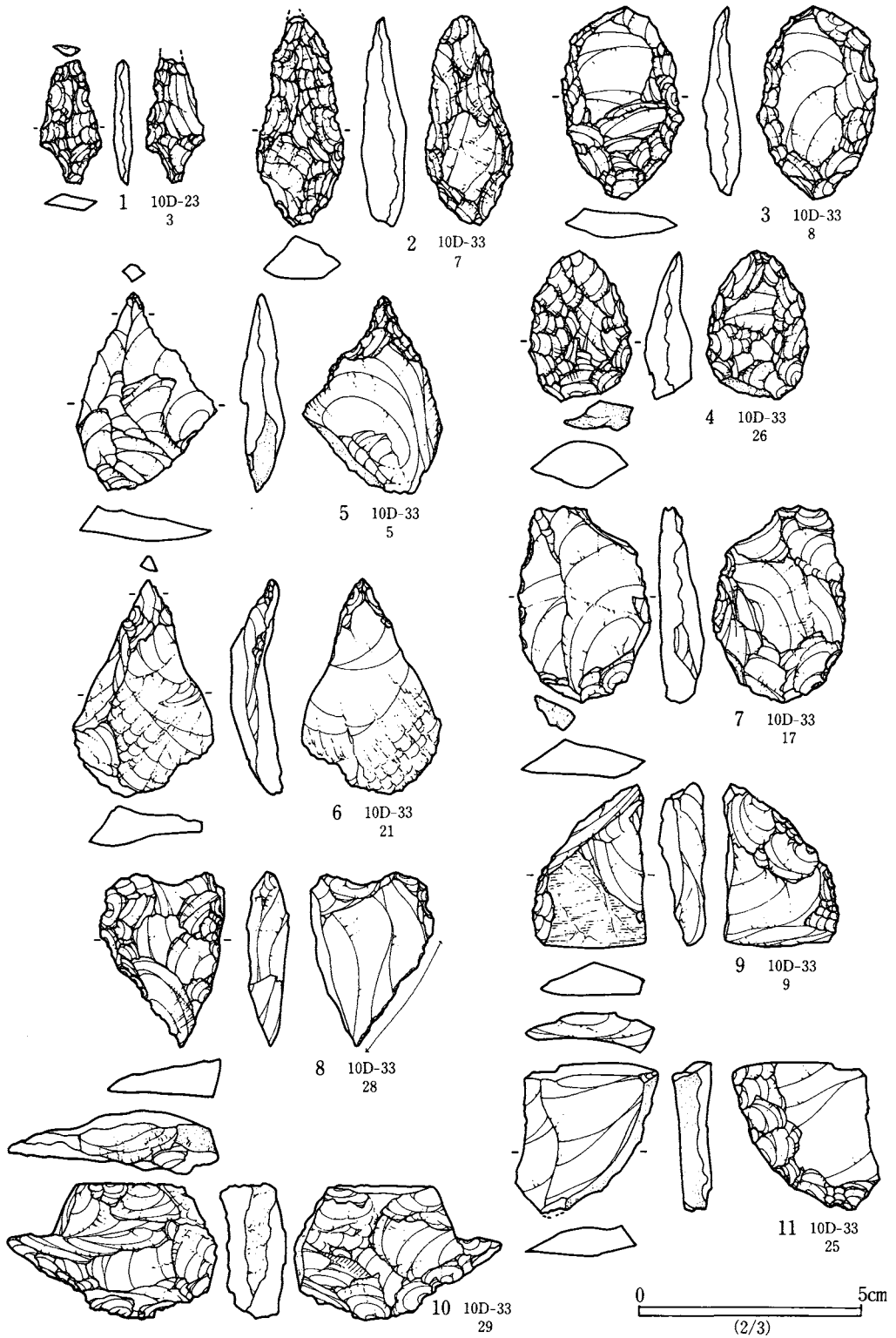
第233表 10D-33区周辺縄文草創期遺物集計表

母岩番号	有舌尖頭器	石槍	削器	石錐	剝片U 剝片R	剝片	削片	総数	数量比 (%)	総重量 (g)	重量比 (%)
頁岩 1	0	0	0	0	1	0	0	1	2.3	13.65	4.9
頁岩 2	0	0	1	0	0	0	0	1	2.3	12.91	4.6
頁岩 3	0	0	0	0	0	3	0	3	7.0	12.68	4.6
頁岩 4	0	1	1	1	2	5	0	10	23.3	73.17	26.3
安山岩 51	0	1	0	0	0	0	0	1	2.3	8.29	3.0
チャート 27	0	1	0	0	0	0	0	1	2.3	8.90	3.2
チャート 28	0	0	0	0	0	2	0	2	4.7	15.83	5.7
チャート 29	0	0	0	0	2	0	0	2	4.7	10.18	3.7
チャート 31	0	0	1	0	0	0	0	1	2.3	8.31	3.0
チャート 32	0	0	1	1	0	2	0	4	9.3	46.35	16.6
チャート 33	0	0	1	0	0	0	0	1	2.3	12.41	4.5
チャート 34	1	1	0	0	2	7	0	11	25.6	50.98	18.3
チャート 35	0	0	0	0	0	1	0	1	2.3	2.65	0.9
砂岩 31	0	0	0	0	0	2	2	4	9.3	2.10	0.8
総数	1	4	5	2	7	22	2	43	100.0	278.41	100.0
組成比 (%)	2.3	9.3	11.6	4.7	16.3	51.2	4.7				

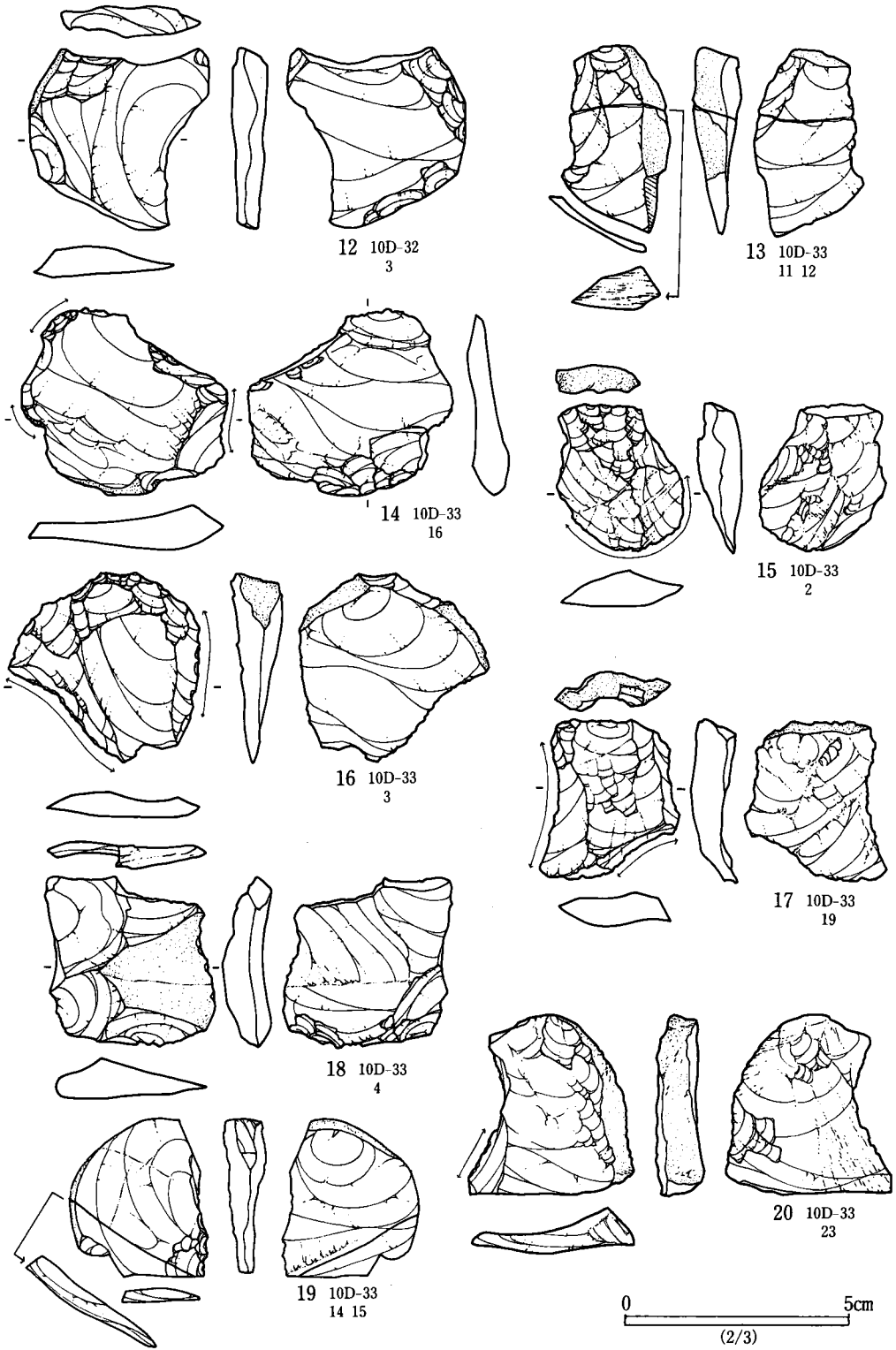


第375図 縄文草創期の遺物分布状況

らの剝離面によって構成されているものが多く、打点を石核側縁に沿って移動させる求心的剝離によるものであることが推察される。打面の状況は、打面を遺存する25例について観察すると、自然面のみによるもの18点、自然面と1枚の剝離面によるもの1点、1枚の剝離面のみによって構成されるもの6点であり、非調整の平坦打面が一般的である。おそらく、円礫の木口面から、礫面に沿って打点を移動しながら、連続的に剝片を得る手法が用いられたのであろう。2次加工の手法として注目されるのは、特に削器の製作において、剝片の折断や腹面剝離の多用される点である。



第376図 第6地点縄文草創期の石器(1)



第377図 第6地点縄文草創期の石器(2)

c) **石器石材** 頁岩4種、安山岩1種、チャート8種、砂岩1種の計14種の母岩が識別された。頁岩4、チャート34に比較的多くの資料が帰属するが、この地点内での剥片剥離を示唆するものではない。大体において、少量の資料しか含まぬ母岩が一般的と言えよう。黒色頁岩はあまり珪質でない黒色細粒のもので、群馬県内で多用されている所謂黒色頁岩に近いものと見られる。特に頁岩2はこれに酷似している。(田村)

B. 第6地点遺物包含層の調査

a) **調査の概要** 第6地点は、既に再三に亘って指摘を繰り返してきたように、大林遺跡東縁の崖線に沿うばかりでなく、調査区の中央には、東から西に向かって入る浅い谷の開口部分に相当している。この谷を挟んで、南北から舌状の小台地が対峙する景観を呈しているが、この、北側の台地上には第IV文化層のブロックが群在し、南側からも第I文化層のブロックが検出されるなど、各期の遺物が多く検出されている。

縄文時代の包含層は、ほぼ調査区の全域に及ぶが、北側の台地南縁部から谷底部にかけての部分と、南側の台地北側の緩斜面部とに顕著な発達を示している。従って、視覚的には2つの大きなブロックに分けることができるかもしれない。なお、谷底部では層厚40cm位の黒色土層がローム層上に堆積し、その中には多量の草創期後半の土器片が包含されていた。調査時の所見では、この層中で層位別の土器の変化が確認されているが、湧水の影響や調査期間の制約もあり記録が十分でなく、再現性を欠いている点が惜まれる。

b) **出土遺物** 第6地点からは、約15,000点の土器片と53点の石器、及び70点の礫片の出土があった。遺物の詳細は後述するが、縄文土器のうち、撚糸文期の遺物が約12,000点に達しており、この時期を中心に包含層の形成が行われたと見てよい。しかし、遺構とすべきものの検出は無く、石器も多量の土器と比較して、あまりにも僅少であるなど、廃棄自体の所謂c変換が問題である。(田村)

(1) 縄文土器 (第374図～399図)

本遺跡の地形はすでに述べたように、9E基準杭から10D基準杭に向けて浅い谷が台地を浸食しており、台地上の平坦面と約1mの比高差がある。谷の幅は20m弱で、極めて規模の小さなものである。

縄文時代の遺物包含層は、この谷を中心として、谷の南北の台地上まで広がっており、調査により総数約15,000点の遺物が出土した。しかし、谷底では僅か1mの比高差にもかかわらず湧水があり、谷の中央では調査が十分に行なえなかった。遺物の取り上げは5mメッシュの小グリッドを基本的な単位とし、分層も試みたが、可能であったのは堆積土の厚い谷中央部に限られ、遺物包含層全体をカバーすることは出来なかった。遺物は時期ごとに下記のごとく大別し、説明を加える。

- 1 群土器 早期捺糸文土器
- 2 群土器 早期沈線文土器
- 3 群土器 早期条痕文土器
- 4 群土器 前期前半の胎土に繊維を混入する土器
- 5 群土器 前期後半の土器
- 6 群土器 中期の土器
- 7 群土器 後期の土器

1 群土器 (第378～第389・第396図、図版45～50)

●分布 所謂捺糸文系の土器は、縄文施文と捺糸文施文の2者があり、包含層出土の土器の中で最も割合の高い一群である。分布域は、谷の北側の10D-05から9D-55にあり、ちょうど緩斜面にかかる範囲が濃密である。しかし、谷の南側の10D-37付近にも出現頻度が高い地点がある。谷の北側では、斜面下位に向けて出現頻度が高くなるのに対し、谷の南側では、斜面下位に向けて出現頻度が低くなっていることが理解できる。両地点間の接合、あるいは同一個体の散逸は認められないものの、土器の様相に大きな隔たりはない。

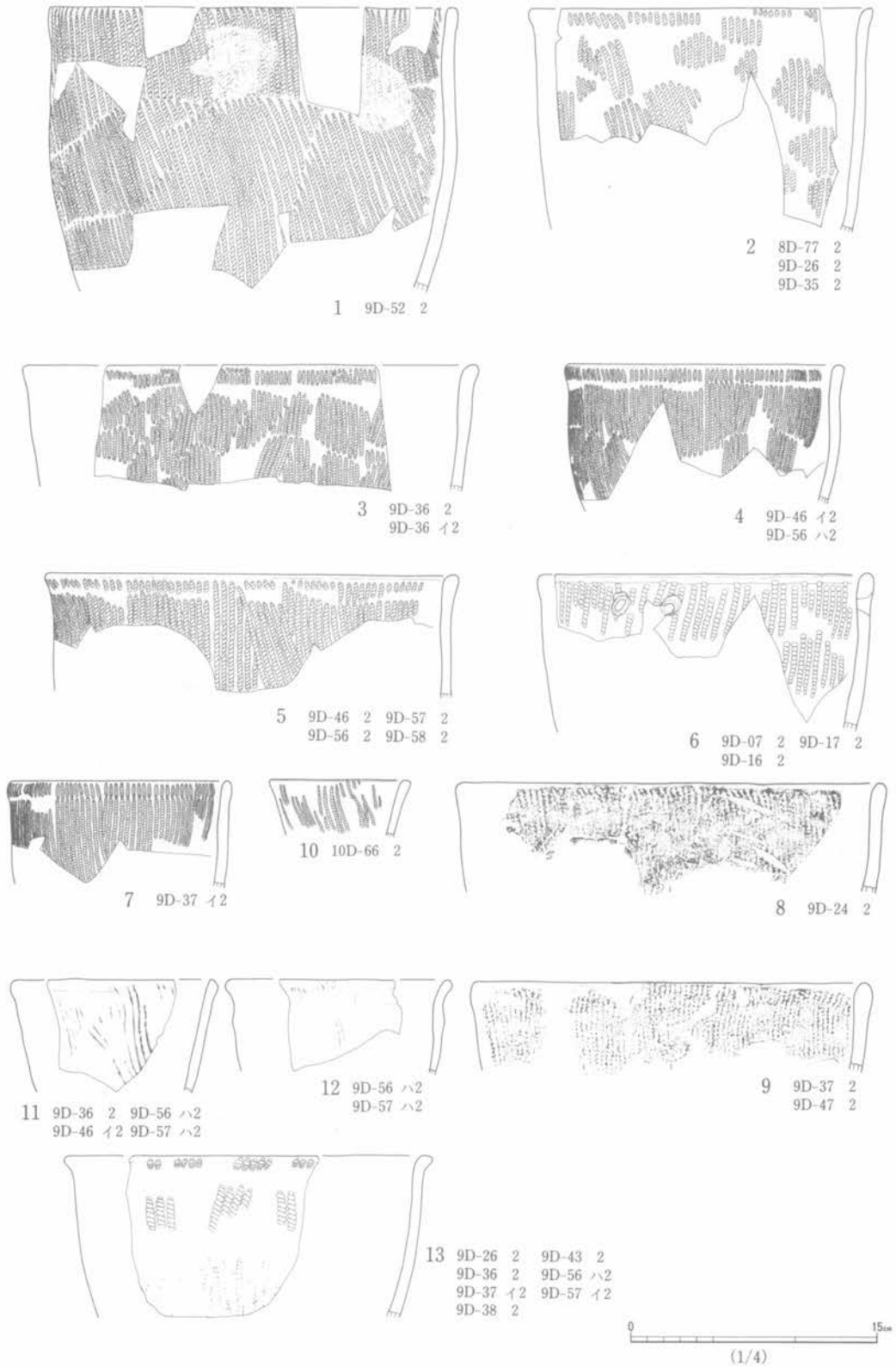
●細分 1群土器は施文手法、製作手法によりさらに細分を行なった。大きくは縄文施文と捺糸文施文、無文の3者の分類が可能であり、さらに、口唇部に絡条体圧痕を施すものがある。

縄文施文

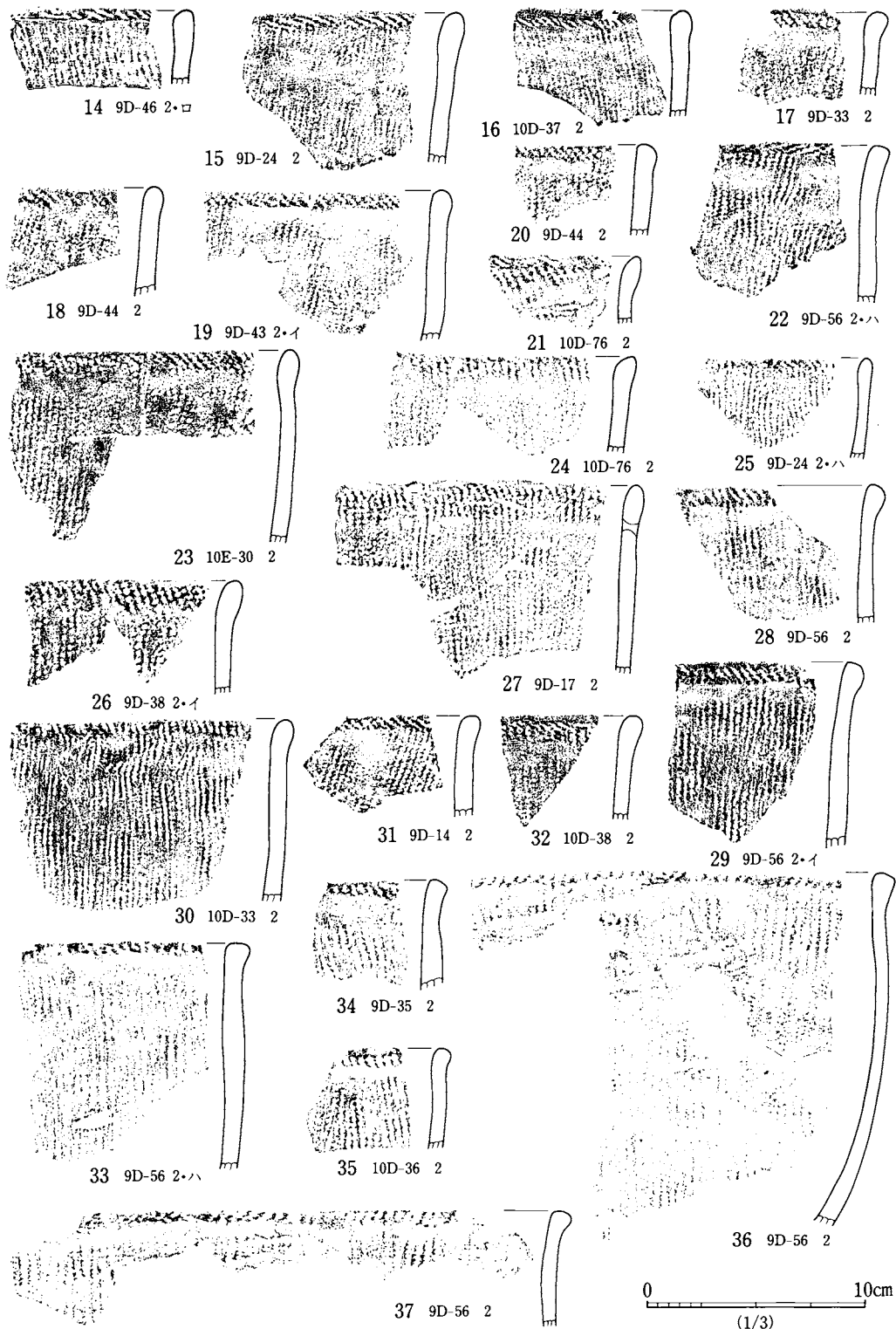
a類 (14～37) 器面が口唇部文様帯と胴部文様帯から構成されたものである。胴部の縄文は密に施され、基本的に縦走している。文様帯の表出は、口唇部の施文方向を変えるもので、14～21は原体RLの縄文で、共に口唇端部の外側に横走に近い表出を行なっている。口唇部は丸く納められ、16は丁寧に磨いている。18～20は同一個体で、やはり口唇部に磨きを行なうが、この3点は口唇部文様帯直下に横位の調整が伺える。胴部の施文もRL原体で、14～16は不鮮明な施文である。なお、数量としては非常に少ないが、原体LRを使用したものもある(22)。

23～37は口唇部が僅かに外方へ肥厚するもので、この肥厚した部分を文様帯として捉えることが可能である。しかし、これらは後述する**b類**の一部とは異なり、施文によっても明らかに胴部とを画することが必要となる。口唇部の施文の方向は斜位ないし縦位となり、前述のものとは若干趣を異にしている。原体はやはりRLが圧倒的に多く、原体LRは36の1点を図示しただけである。口唇端部は丁寧に磨くことが多いが、内面、あるいは外面にまで至るものはなく、内面は横方向の粗い調整が観察できる。胎土は砂粒の混入がかなり多く、色調は褐色ないし暗褐色を呈するのが一般である。

b類 (38～129) 口唇部文様帯の表出はなく、器面全面縦走する縄文で覆われている。やはり縄文原体はRLが圧倒的に多く、1～8、38～91を図示した。第1図にはある程度器形を知ることが出来る個体を示したが、1・2・4に見るように、口縁部に緩い屈曲を持ち、口縁部が



第378図 第6地点包含層の遺物(土器-1)



第379図 第6地点包含層の遺物(土器-2)

外方へ若干開くものが一般的なプロポーションとして認定でき、口縁部が直線的に開くものは、10のような小形の製品で例外的な存在となる。施文は1～4の個体から理解できるように、施文単位はあまり大きいものではなく、狭い範囲での施文を繰り返している。なお、2～5には口唇部に文様帯に似た施文を見ることが出来るが、これらは意識的に胴部とを区画したのではなく、口縁部の僅かな屈曲により施文されない部分が帯状に巡ったものである。1は図示した部分が全周の約 $\frac{1}{2}$ 遺存している。縄文は口唇部で僅かに斜めであるが、胴部にいたってほぼ縦位となる。口唇部の調整はあまり丁寧に行なわれず、僅かに磨いているようだが、その痕跡はさほど明瞭ではない。ただし、他の個体を含めて口唇部を磨くことは精粗の差はあるものの一般的でa類同様、内面ないし外面まで及ぶものではない。内面の調整は口唇部を横位に行なうが、胴部以下については器面の遺存も悪く、総ての個体について明らかにすることが出来ないが、基本的に縦位となるようで、5は縦位の調整が口縁部にまで達している。胎土は10を除いて砂粒の混入が多く、色調は褐色ないし赤褐色を呈する。

拓影図に示したもののうち39～44、47・48、49～53、54・55、56～59、60・61、63～65、66～68、69・70、71～77はそれぞれ同一個体である。口唇部は僅かに肥厚するものも含まれているが、基本的に端部を丸く納めている。口唇端部にかなり近い位置から縄文施文を行なうため38・45のように原体を強く押圧したり、60・61のようによじれる例もある。47は口縁部に横方向の調整が観察できるが、これも文様帯を表出する目的で行なったものではなく、施文順序も縄文施文前の調整である。口唇部の形状は細かく観察すると多岐にわたり、48・61のように単純に丸く納めるものはむしろ少ない存在である。比較的多く見られるのは40～43や75・76のように端部が僅かに尖った印象を与えるもので、これらは例外なく端部を磨いている。44は底部に近い部分の破片で、器厚の変化は少なく、比較的多く丸みを帯びた底部が想像できる。口唇部の調整は先に挙げた個体以外でも丁寧に磨くものが多く、端部だけに留めるのが一般的であるが、49・50及び57・58は内面に及んでいる。この2個体はそれぞれ別の個体と判断したもので、前者は10D-22～29を中心に東西方向に散逸し、後者は9D-26を中心として四方に散逸し、分布範囲は重ならない。出土点数は多いが胎土が極めて特徴的で、個体資料の識別は容易である。胎土には粒径1mm前後の石英粒をかなり多く混入し、焼成は良好で、にぶい黄褐色を呈している。他の個体は胎土に砂粒を多く混入し、69・70は暗褐色を呈するが、他は赤褐色を呈している。

11・12、78～91はrの縄文原体を用いるもので、量的には非常に少ない。11・12はともに小形の製品である。口縁部の形状は11が外方へ肥厚し、12は屈曲して開いている。また、12は口縁部に横方向の調整が認められ、口唇部の屈曲をより強いものにしてしている。原体は共にrの無節で、12の施文はまばらである。拓影図に示したもののうち78～80、81～83、84～88は同一個体である。総ての個体が口唇部を丸く納め、あまり顕著ではないが磨いている。このうち78～80、89はかなり丁寧な磨きが行なわれているが、やはり端部だけに留められている。なお、81～83

は器面の凹凸が著しく、施文も粗雑である。胎土には砂粒を多く混入し、色調は明褐色を呈している。

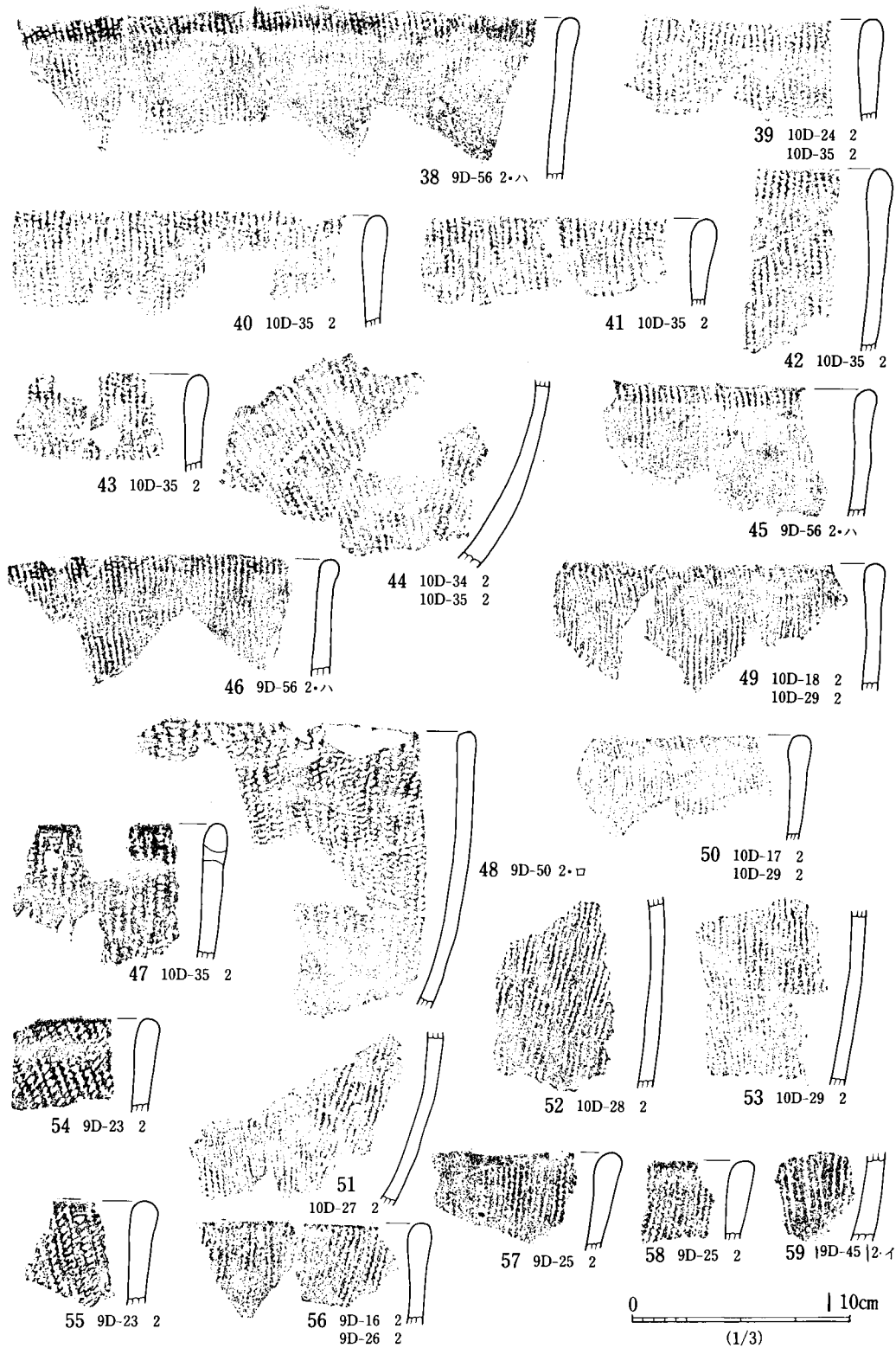
9・92～106は原体にLRを使用している。a類同様原体LRの使用は非常に少ない。口唇部の調整は例外なく磨きが施され、やはり端部だけに留まっている。拓影図では100・101が外面に及んでいるように見えるが、口唇部の範囲を出るものではない。

107～122は口唇部の肥厚が強いものである。縄文原体はRLが圧倒的に多く、107～115がそれに当たる。このうち107・108、109～111は同一個体に帰属する。肥厚するといっても器面から突出するようなものは含まれておらず、前述までのものと大きな隔たりはない。しかし、107・108、112・113は口唇部をかなり意識的に整形しており、断面も方形に段を形成している。ただし、施文は胴部とを区別することなく、口唇部から胴部へと連続して行なっている。112・113も口唇部直下が無文となるが、意識的に行なったものではなく、施文の不鮮明な部分があるに過ぎない。口唇端部はいずれも丁寧に磨き、やはり端部だけに留められるものの、115は外面の縄文施文を僅かに消している。内面は明瞭に横方向の調整が観察でき、口縁部を含まない110、111は器面の遺存が悪く、調整は観察できない。胎土には砂粒をかなり多く混入し、色調は褐色ないし赤褐色を呈する。

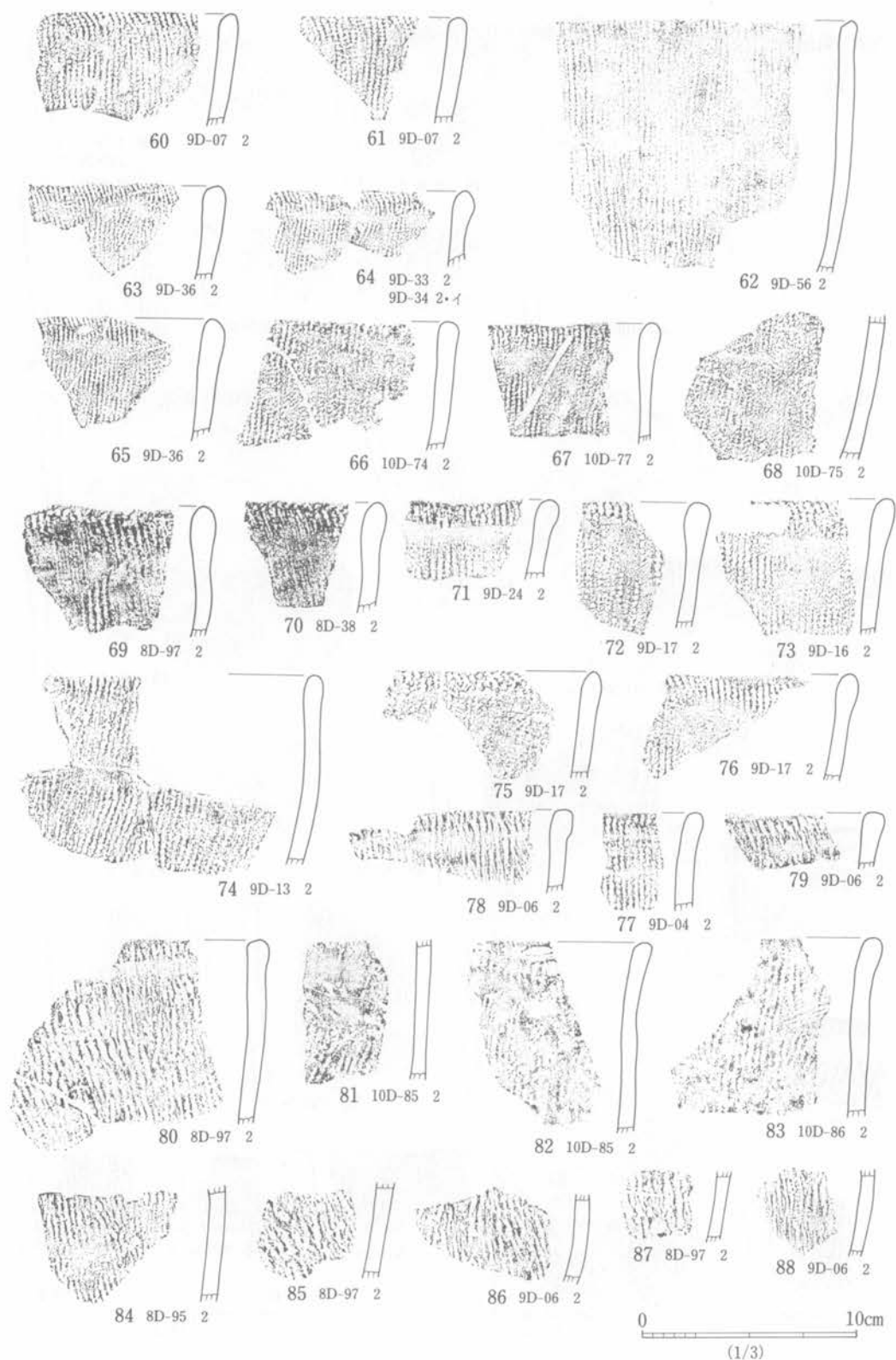
他の縄文原体によって施文を行なうものは非常に少なく、rとLRが確認されている。rを使用するのは116で、小形の製品である。これは口唇部が肥厚するというよりは、むしろ外方へ屈曲して開くといった方が適切かも知れない。施文は口縁部から胴部へ連続して行なっている。原体LRを使用しているのは119～122で、119～121は同一個体である。これらも先に挙げた107等の肥厚の具合とは若干趣を異にした口唇端部の形状を示し、口唇部が器面に対して外方に向いている。端部は丁寧に磨かれ、やはり内外面に及ぶものではない。この中で122は縄文施文が口唇端部から開始され、胴部へと連続している。胎土は砂粒をかなり多く混入し、色調は赤褐色ないし暗赤褐色を呈している。

123～129は口唇部を断面方形に納めるもので、端部はかなり意識的に面を構成している。口唇端部の調整は他にもまして丁寧に磨くことが多いが、124は磨かれていない。また、125は内面の約1.5cmまで磨きが行なわれている。124の縄文の在り方からすると、口唇部の調整は縄文施文後に行なった可能性がある。縄文の原体はRLとLRの2者が認められ、123～125がRL、126～129がLRとなるが、相対的に個体数が少ないことから、原体の違いによる量的な差は大きくない。原体Lを使用するものでは、126の口唇部に横走る縄文施文が見られ、上端を口唇部の調整によって消されている。胎土はいずれも砂粒を多く混入し、色調は褐色ないし赤褐色を呈する。

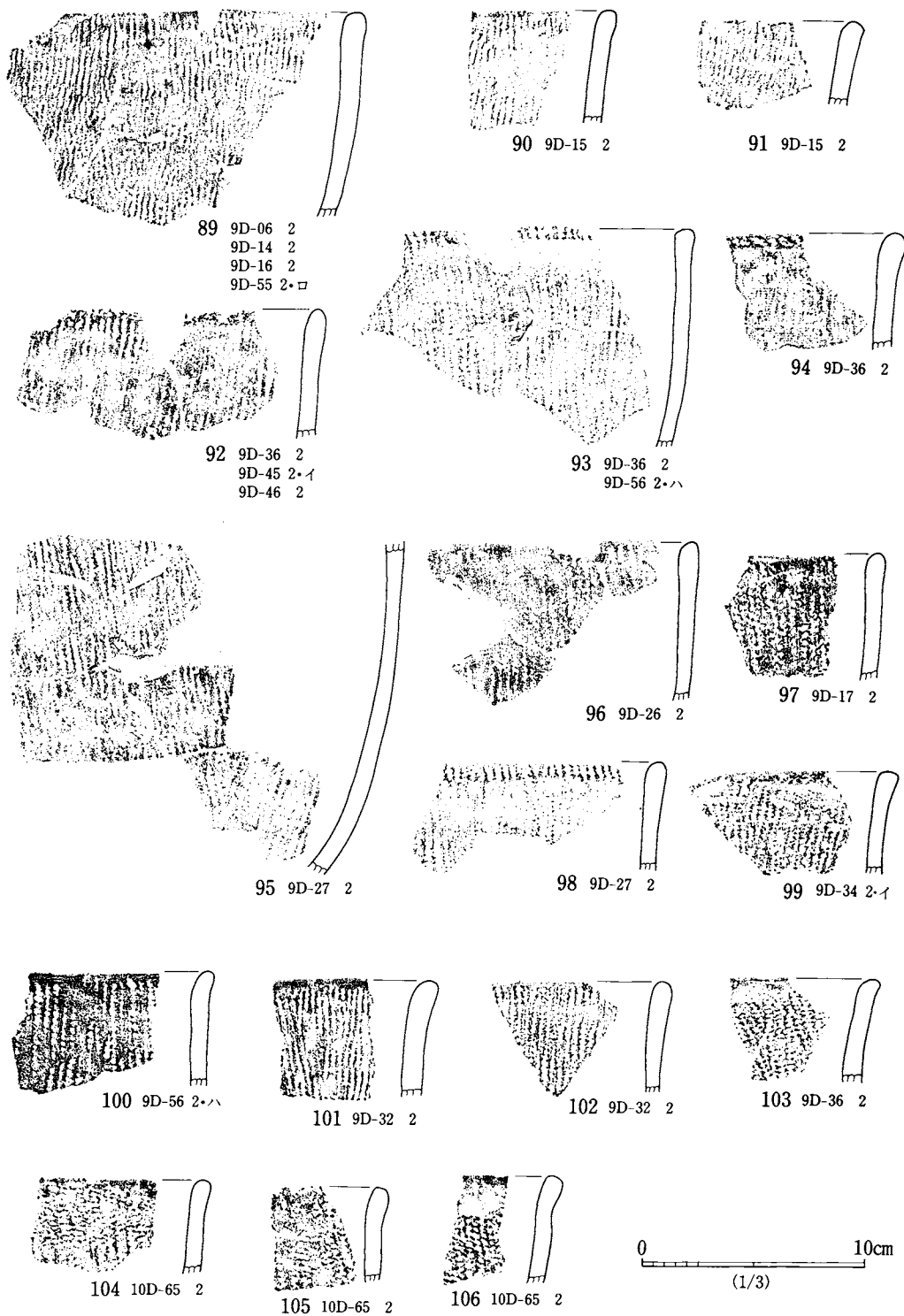
c類(130～135)口縁部に無文帯を巡らすもので、量的には非常に少ない存在である。拓影図に示したもののうち130・131、132・133は同一個体である。口唇部の形状は、口唇部を肥厚させ、端部が器面に対して外方に向くものと、口唇部を断面方形に納め、端部に面を構成する



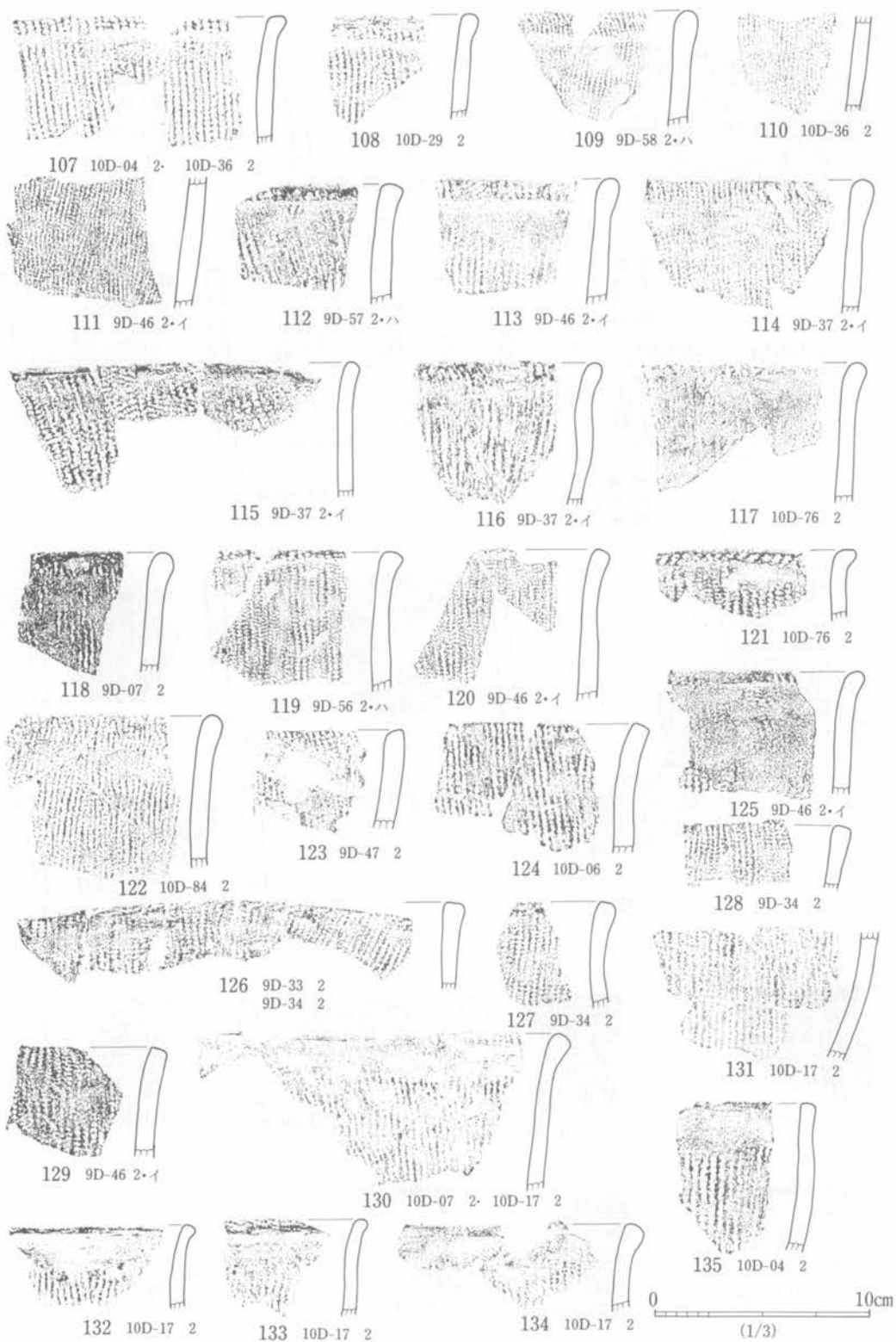
第380図 第6地点包含層の遺物(土器-3)



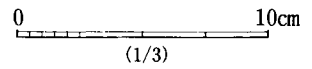
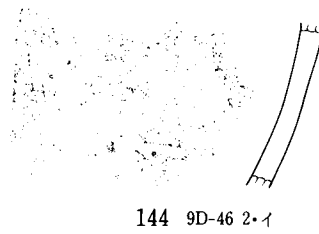
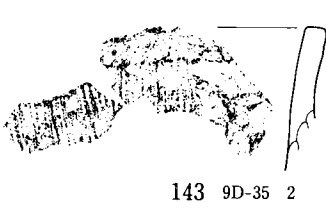
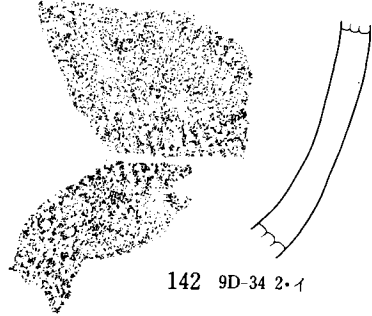
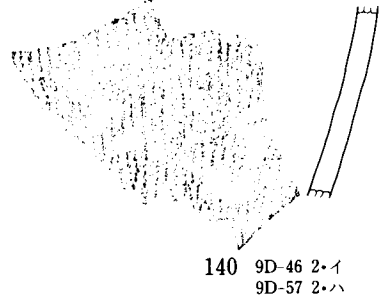
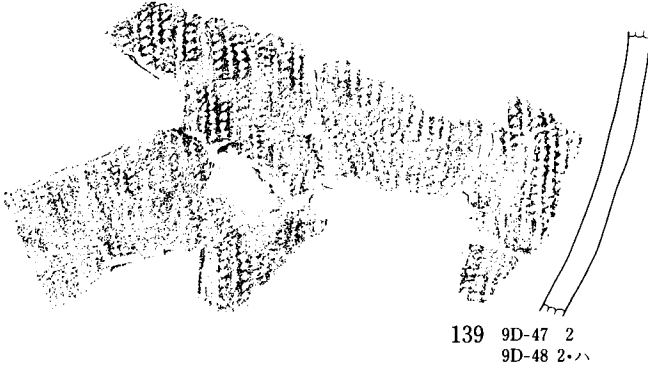
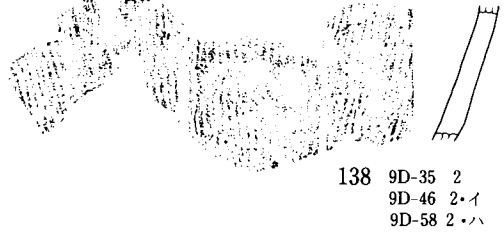
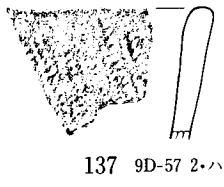
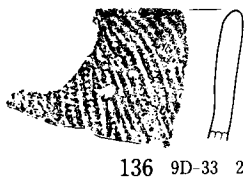
第381図 第6地点包含層の遺物(土器-4)



第382図 第6地点包含層の遺物(土器-5)



第383図 第6地点包含層の遺物(土器-6)



第384図 第6地点包含層の遺物(土器-7)

ものの2者が認められ、単純に丸く納めるものは存在しない。前者はb類119～121、後者はb類123～129に共通するもので、時期的にも大きな隔たりはないものと思われる。口唇端部の調整は丁寧に磨くものが一般的のようだが、132、133はこの部分に横走る縄文を施しており、あるいは区別されるべきものかも知れない。無文帯の表出は、当初口唇直下まで施した縄文を横方向のナデで消すもので、この点132・133も同様の手法を用いている。内面の調整は口縁部を横方向に行ない、132はかなり上位から縦方向の調整が始まっている。胎土は砂粒を多く混入するが、132・133は他と比較して堅緻で焼成も良好である。色調は褐色ないし赤褐色を呈し、135だけが明黄褐色を呈している。

第6図にはその他の破片と胴部の破片を一括して掲載した。136・137は口唇部を丸く納め、器面を斜位の縄文で覆っている。部分的な破片のため、器面全体を斜位の縄文で覆っているのが判断しかねる。原体は2点ともRの撚り合わせである。142・146は底部の破片で、全体の器形は丸みを持った逆三角形となることが伺える。

撚糸文施文

a類(10～75) 器面全体に撚糸文を施すものである。撚糸文施文のものは、口唇部に文様帯を表出するものは認められなかった。1群土器全体に占める割合は約20%でしかなく、縄文施文の約1/3である。第385図にある程度器形を伺うことが出来る個体を示した。器形はスマートで、底部も頂点を持つ尖底となる。1は口縁部から緩いカーブを描いて底部にいたり、2・3は口縁部に僅かな屈曲がある。口唇部の形状は、縄文施文の個体と同様の3者がある。1・2は口唇部を丸く納めるもので、口径は1が25cm、2が23cmを測る。口唇部の調整は2に粗雑な磨きが施され、1については不明である。胴部の施文は共に原体Rを使用し、2はかなり密に施されているが、1は若干条間隔が開く。

第7図の拓影図に示したもののうち、10・11、12～15、16～18、19～21、22～25、26～29は同一個体である。口唇部の調整は粗雑な磨きを施すものが多く、図示した中で丁寧に磨くものはない。施文は密に施され、10・11のように原体の細かいものもある。全体的に縄文施文の個体と比較して施文が強いのは、施文原体の構造的な差によるものと思われる。内面の調整は口縁部で横方向に行ない、胴部以下は縦方向となるが、胴部は器面の遺存状態が悪く、調整を観察できるものは少ない。胎土は砂粒をかなり多く混入し、色調は赤褐色ないし暗褐色を呈している。30～38も同様の器面構成となり、31～34、35～37が同一個体である。前述までのものと比較して撚糸文の条間隔が広く、施文も若干弱い。口唇部は30～34が入念に磨いている。施文原体はやはりRが多いが、35～37はL、38は無節である。胎土は30～34に粒径1mm前後の石英粒を多く混入し、焼成もよく、特徴的である。35～38は砂粒の混入が多く、色調は赤褐色を呈している。

3・6・39～47は口唇部が外方へ肥厚するものである。肥厚の度合いはさして大きいもので

はなく、施文もこの部分から胴部へ連続して行なわれ、文様帯は表出していない。口唇部の調整は磨きを行なうが、あまり丁寧に行なわれた例はない。施文は前述までのものと変わるところはなく、3・39・43のように原体の細かいものも同時に存在し、また、6・47のように条間隔の広いものも見られる。ただ、6・47は施文開始の位置が若干下にあり、口唇部は無文となっている。さらに6は口縁部に僅かな横方向の調整が認められる。

48～75は口唇部を断面方向に納め、端部に面を構成するものである。50～52、53～55、61・62、68～73は同一個体である。48、49、63は斜位の施文であるが、基本的には縦走するものが主体となる。端部の面の調整が弱いものも含まれているが、同一個体と認められる破片でも、部分により均一な調整ではない。口唇部の調整は粗雑な磨きを施し、丁寧に磨くものは少ない。磨きはやはり端部だけに留まっていて、内外面に及ぶものはない。ただ、57・61には口縁部に横方向の調整が施され、その部分の施文を消している。これらは、後述するc類に含めるべきかもしれないが、61と同一個体と判断できる62にはこの調整が見られない。施文原体はRが圧倒的に多い。胎土は砂粒をかなり多く混入し、色調は暗褐色ないし赤褐色を呈している。

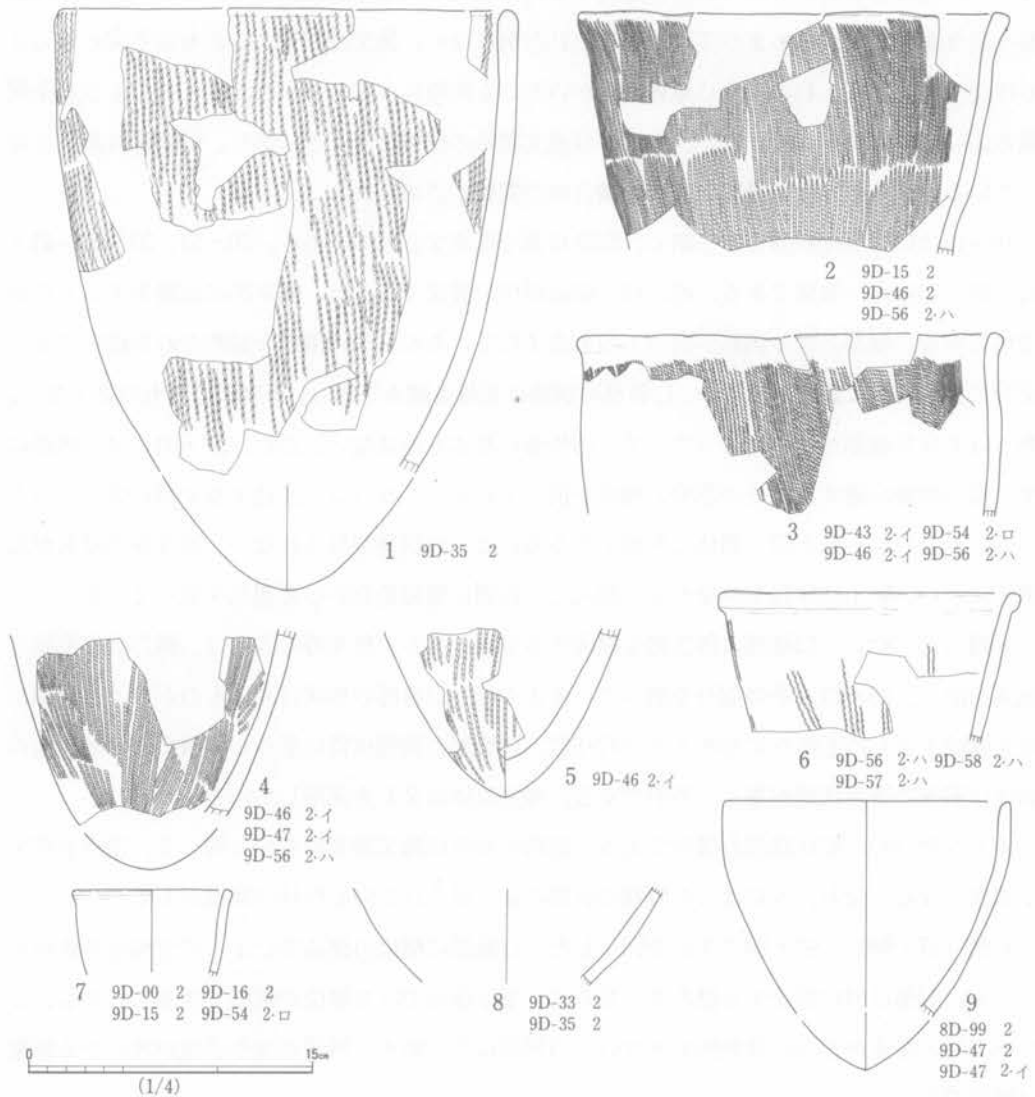
b類 (76～82) 口縁部に無文帯を構成するものである。無文帯の表出は、横方向の調整で施文を消し、76・77はその部分を磨いているようだ。口唇部の形状は丸いものが多く、端部に面を構成するものも僅かに存在する(77・82)。口唇部の調整は77に磨きが観察できるが、他の個体は器面の遺存状態が悪く、不明である。施文原体はRLを使用している。

4・5及び83～85は底部の破片である。底部の形状は縄文施文のものと同一で、頂点を有する尖底となる。なお、8にはこの時期の底部によく見られる同心円状の擦痕がある。

c類 (97・98) 97・98の2点を図示した。口縁部に横位の撚糸文によって文様帯を表出している。胴部は97に斜走する撚糸文が見られ、遺存部分では2単位が観察できる。しかし、これが羽状となるかどうかは判断できない。口唇部は丸く納め、器面の遺存状態が悪いため調整は観察できない。

無文 (86～92) 器面全体が無文のものである。外面は口縁部を横方向、胴部を縦方向に調整し、86・90・91は比較的丁寧な調整である。しかし、8・87は調整が粗雑で、施文のあるものと比較して器面に凹凸が目立つ。口唇部の形状は総て丸く納め、端部の調整は不明である。胎土は砂粒を多く混入し、色調は明褐色ないし明黄褐色を呈するものが多い。

絡条体圧痕文を有する土器 (93～96) 口縁部に絡条体圧痕文を施すもので、出土点数は非常に少ない。93は縄文施文のもので、口縁部に鋸歯状の施文がある。部分的な破片であるため、絡条体が連続して施されているのが判断しかねるが、左側へ連続していない。地文は原体RLの縄文を縦位に施している。口唇部は丸く納められ、端部を磨いている。94～96は撚糸文施文のもので、同一個体である。口唇部は僅かに肥厚し、肥厚した部分の直下の屈曲部に絡条体圧痕文を巡らせている。地文は原体RLの撚糸文が縦走し、条間隔は広い。口唇部は丸く納め



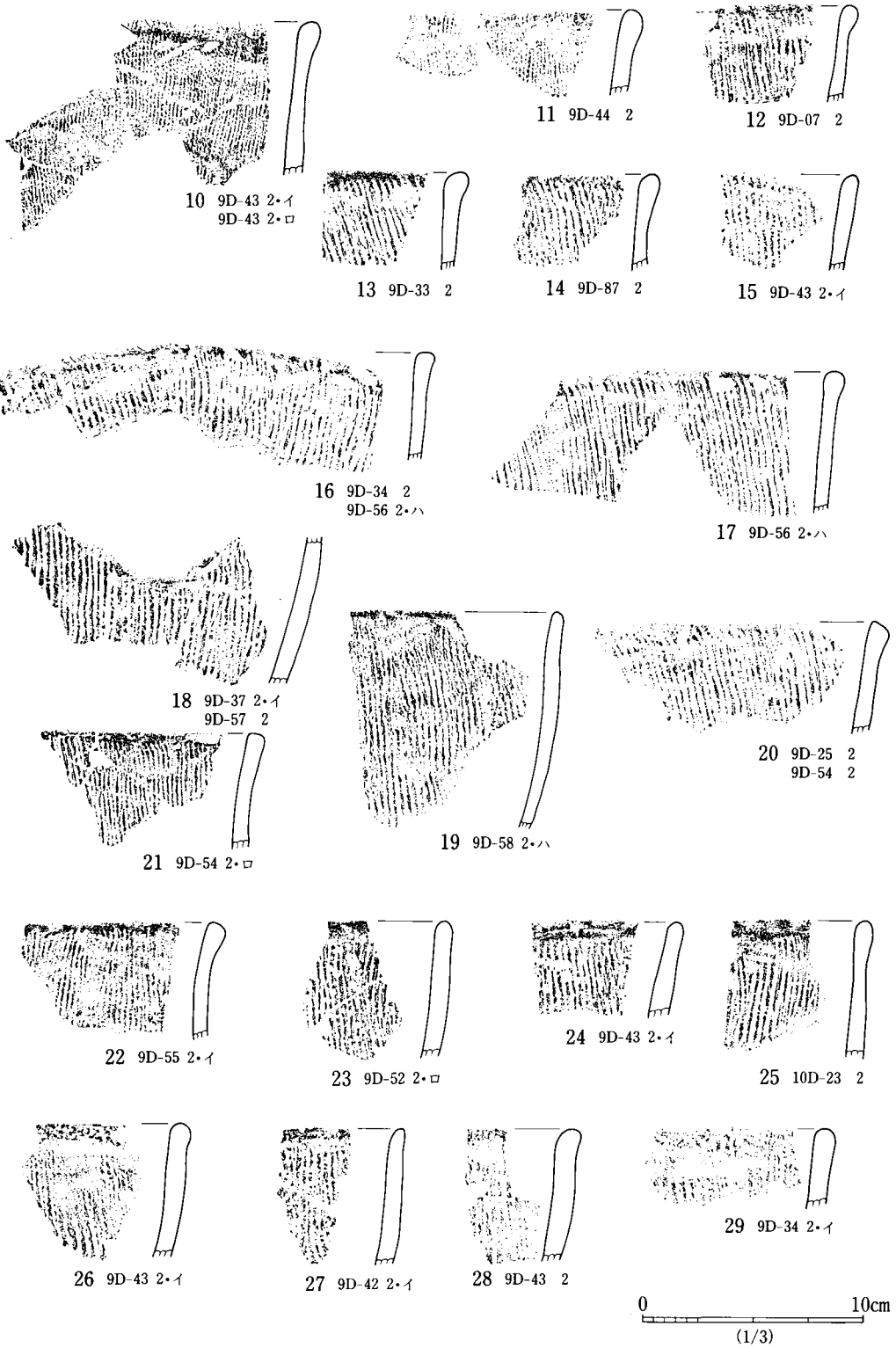
第385図 第6地点包含層の遺物(土器-8)

られ、端部から外面にかけて丁寧に磨かれている。なお、内面の調整も丁寧に行なわれている。胎土は砂粒をかなり多く混入し、色調は暗黄褐色を呈している。

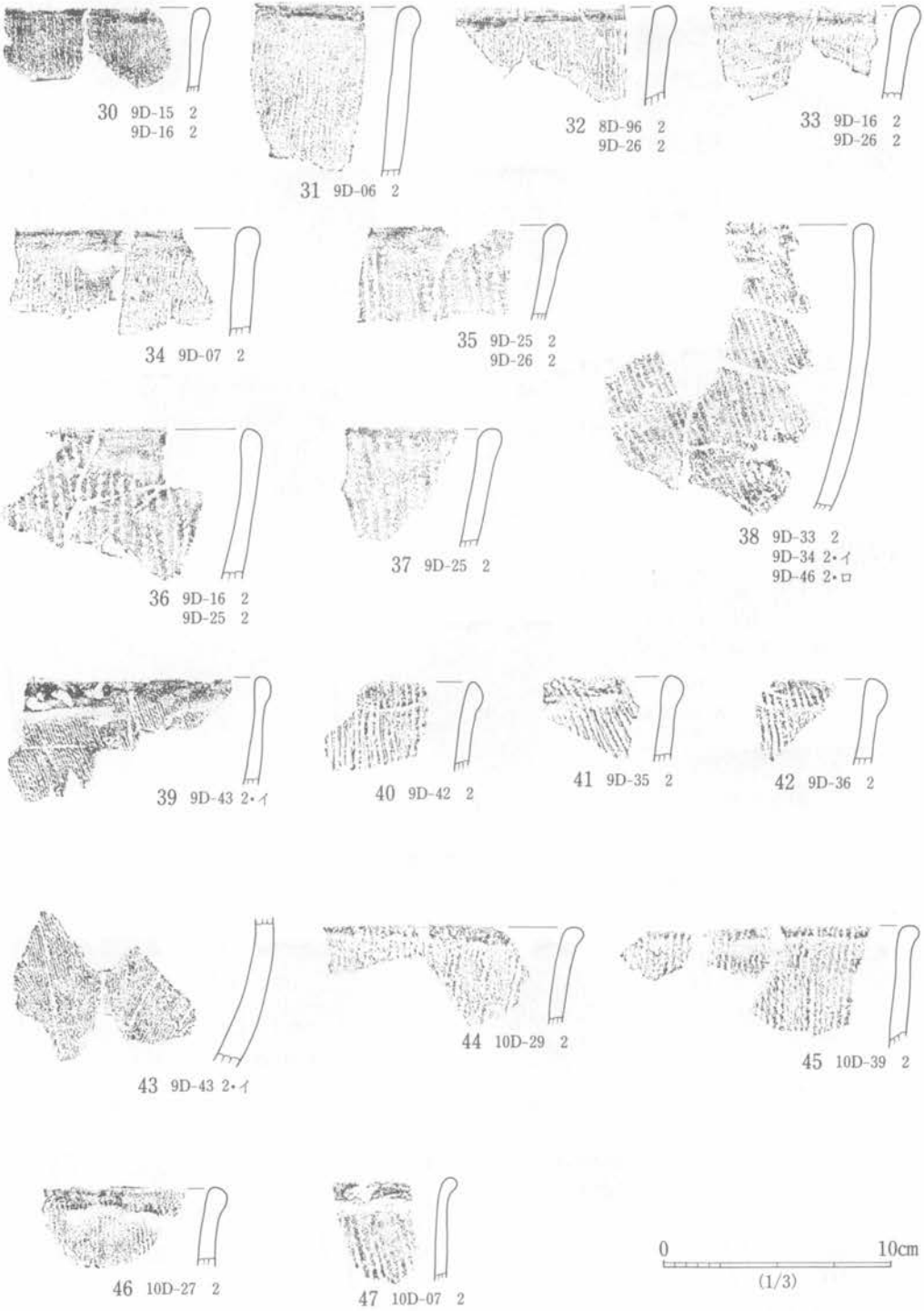
2群土器 (第390・第396図、図版50)

●分布 2群土器は全体で96点の破片が出土した。分布域は谷の南側の台地縁辺にあたり、10D-24での出土点数と周囲の状況を考えれば、土器の廃棄は10D-24において短時に行なわれ、1群土器のように連続した土器廃棄ではなく、分布の中心も1群土器とは重ならない。

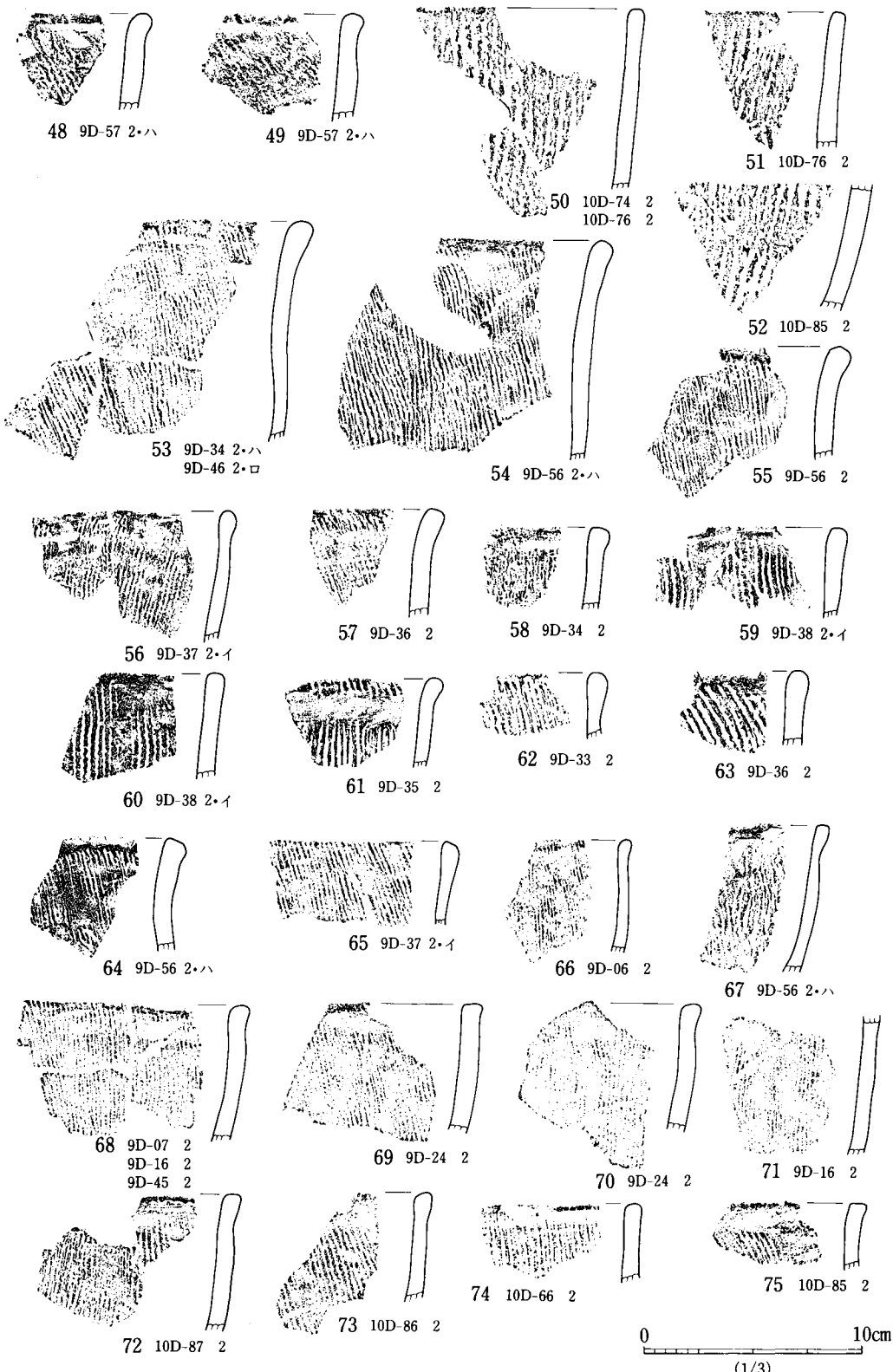
●細分 2群土器は絶対的な個体数も少なく、個体ごとの細分となってしまうが、文様表出方の違いにより細分を行なった。



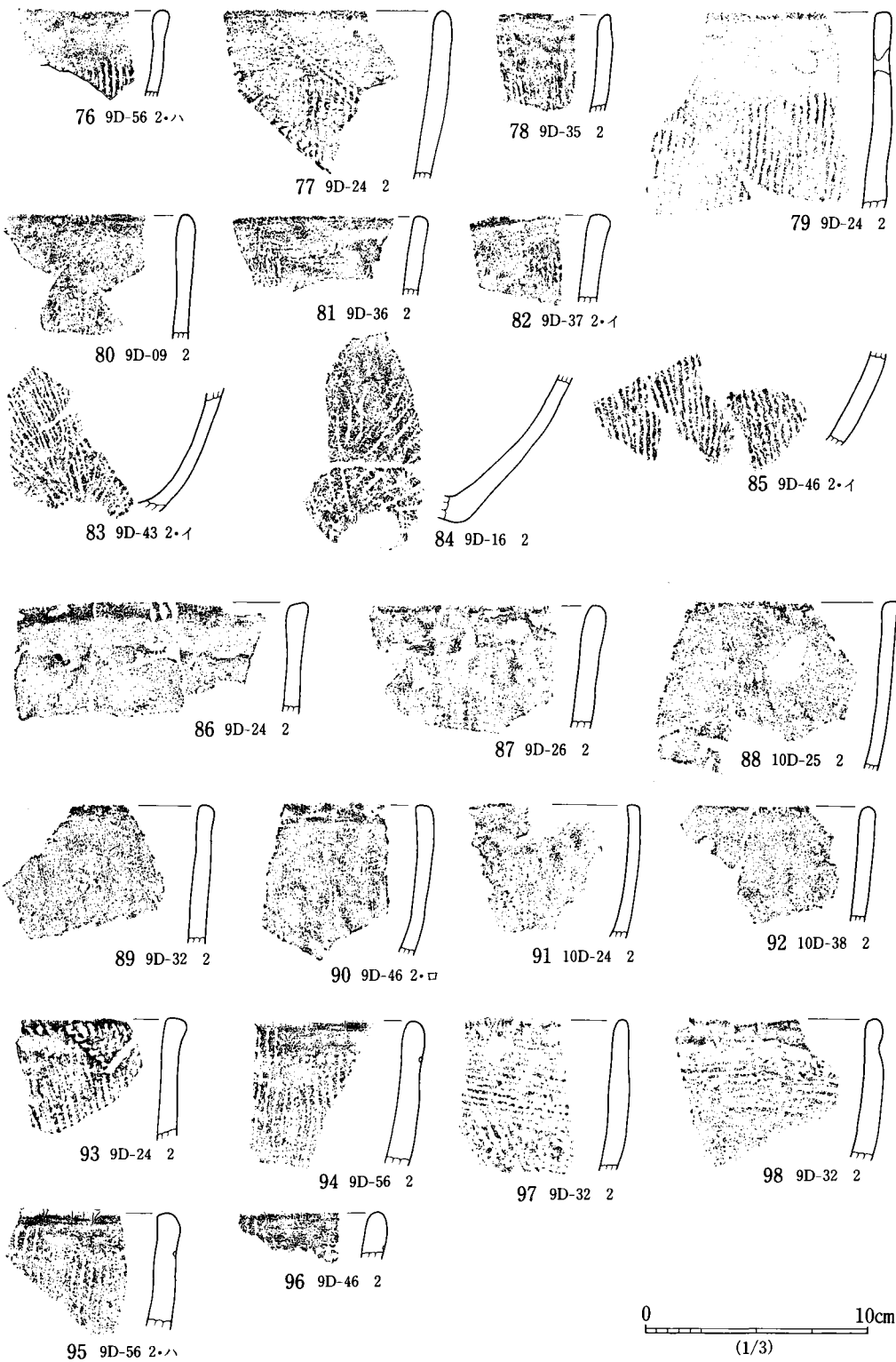
第386図 第6地点包含層の遺物(土器-9)



第387図 第6地点包含層の遺物(土器-10)



第388図 第6地点包含層の遺物(土器-11)



第389図 第6地点包含層の遺物(土器-12)

a類 (1～6) 太くしっかりとした沈線で施文するもので、1～6総てが同一個体である。口縁部の破片は含まれていないが、恐らく口縁部から器面を巡る文様帯が数段構成されるもので、文様帯には直線的な沈線を充填している。沈線は太いものと細いものを巧みに組み合わせている。胎土は砂粒が目立つものの緻密で、焼成もよい。

b類 (7～10) 頂部にスリットを持つ隆帯で文様帯を構成するもので、7～10の総てが同一個体である。いずれも口縁部の破片で、大きく屈曲している。隆帯は直線的な配置を取り、口縁部から屈曲部の下位に連繋している。なお、口唇部にも隆帯同様のスリットが施されている。胎土はa類と酷似している。

c類 (11) a類同様沈線が施されるが、a類のごとく規則的な文様構成を取っていない。沈線は細く、断面もシャープである。口唇部は棒状工具によりスリットが施される。胎土は緻密で、焼成もよい。

d類 (12) 口縁部に爪形の刺突文を施すものである。細片であるため全体の文様構成は伺えず、とりあえず個別に記載した。口唇部には工具を押圧した痕跡があり、スリットが施されていたと思われる。

3 群土器 (第390・第397図、図版50)

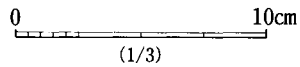
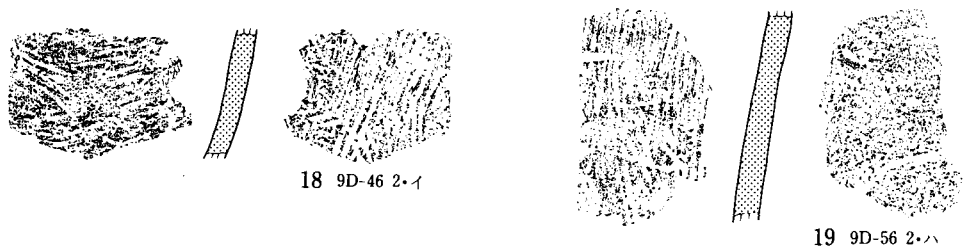
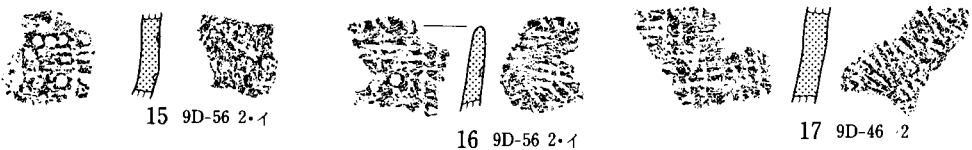
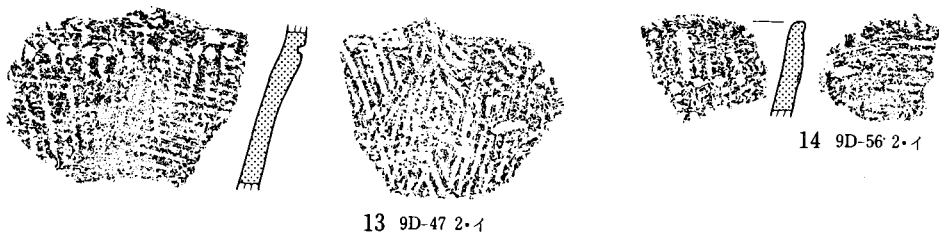
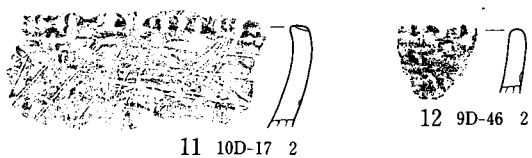
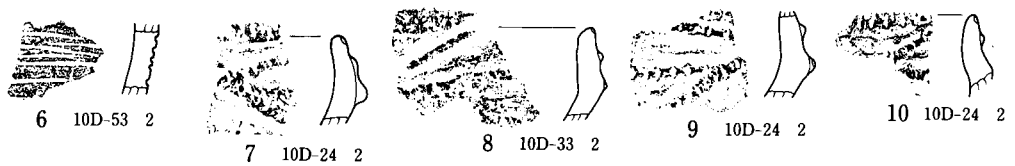
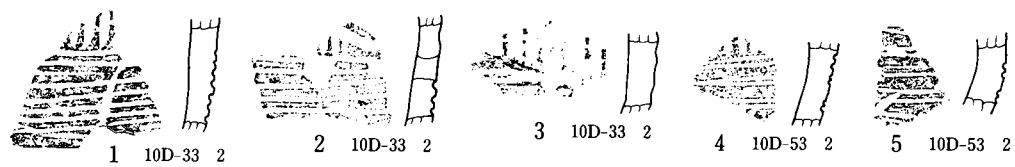
●分布 3群土器も出土点数がごく僅かなもので、全体で58点が出土している。しかし、一つのグリッドで20点以上の破片が出土した地区はなく、その分布もかなり限られている。分布域は2箇所であり、2群土器と重なる範囲に1箇所、その北側の9D-56を中心とする谷底にもう1箇所ある。どちらも短時に土器廃棄が行なわれ、廃棄された個体数も非常に少ないものと想像できる。細分は行なわない。

●13～18は同一個体である。内外面とも全面に貝殻条痕を施し、口縁部に文様帯を表出している。文様帯は円形刺突文で構成され、施文は先端を尖らせた棒状工具を押し広げるように回転させたものである。また、地文に条痕と同一工具と思われる貝殻腹縁文を縦位に施している。貝殻条痕は外面を横位に施し、胴部の破片である18でも横位となっている。内面は口縁部で横位に施すが、口縁部文様帯下端である13はすでに縦位となっている。胎土は植物繊維と共に、粒径1mm前後の石英粒を非常に多く混入している。

4 群土器 (第391・第397図、図版51)

●分布 4群土器もやはり谷の南側の台地縁辺に分布域があり、340点が出土している。最も出土点数が多いのは10D-25にあるが、そこを中心として等高線に直交するように分布域が広がっており、土器廃棄の方向を示すものと考えられる。

●細分 個体数は先行する3群土器や後続の5群土器に比べて多いが、それでも中心となる個体は5～6個体であろう。器面装飾の違いにより細分を行なったが、個体ごとに細分する結果となった。



第390図 第6地点包含層の遺物(土器-13)

a類(1～3) 沈線により文様を表出するものである。表出されるモチーフは多様である。1・2は同一個体で、粗雑な沈線を不規則な格子状に配している。器面の調整も粗雑で凹凸が目立ち、原体LRの縄文を地文に有する。3～7も同一個体で、所謂肋骨文を表出している。施文は半截竹管を使用した平行沈線で、胴部上半の文様帯に肋骨文を、胴部下半は5～7のように不規則な施文となる。8～12は器面に幅広の平行沈線を幾重にも施すもので、やはり半截竹管を使用している。恐らく器面全体が同様の施文で覆われるものと思え、10・12に見えるように胴部に僅かな屈曲がある。13～15も同一個体で、全面LRの縄文で覆っている。4群土器全体としては、植物繊維の混入が多く、3～7、13～15の個体は砂粒もかなり目立っている。口縁部も1・2・9・14・15と各個体に遺存しており、いずれも共通して端部が若干尖ったように調整されている。内面は磨きが施されていて、8～12の個体は入念に行なうが、1・2・13～15は器面の遺存状態が悪く観察できない。

5群土器(第391・第398図、図版51)

●分布 全体で20点の破片が出土しているが、図示できるものは少ない。分布の中心は8D-91と10D-36～39の2箇所であり、谷を挟んだ両側の台地縁辺に位置する。その他にも9D-41・42や10D-02・03等で僅かに土器が出土しているが、量的に大きなものではない。前述した2箇所の分布の中心も連続した土器廃棄を想定できるものではない。南側の10D-36～39で出土した破片はほとんどが同一個体になる。細分は行なわない。

●16は10D-36～39で出土したもので、推定口径33.5cmを測る。器形は直線的に開く深鉢形を呈し、口縁部は波打っている。胴部上半の文様帯は半截竹管を使用した有節平行沈線・平行沈線で表出し、諸磯b式土器にも共通するモチーフを描く。胴部下半の器面構成は不明だが、17～19に同一個体の可能性があり、ハマグリのロッキングと考えられる。

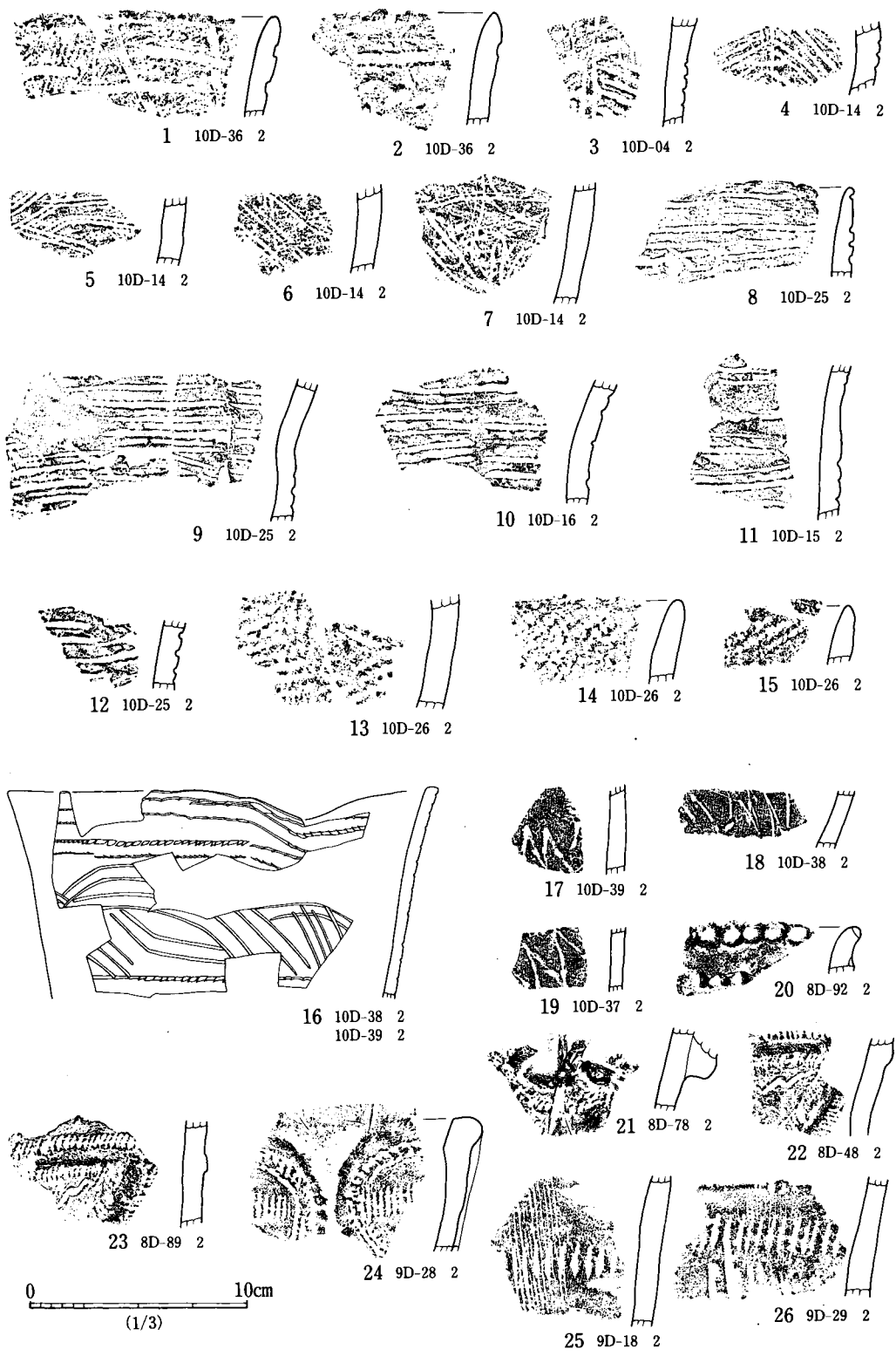
20は口唇部・口縁部に押圧文を連続させている。口縁部は大きく外反し、端部は器面に対して外方を向いている。5群土器全体としては、胎土に若干砂粒を混入するものの焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

6群土器(第391・第392・第398図、図版52)

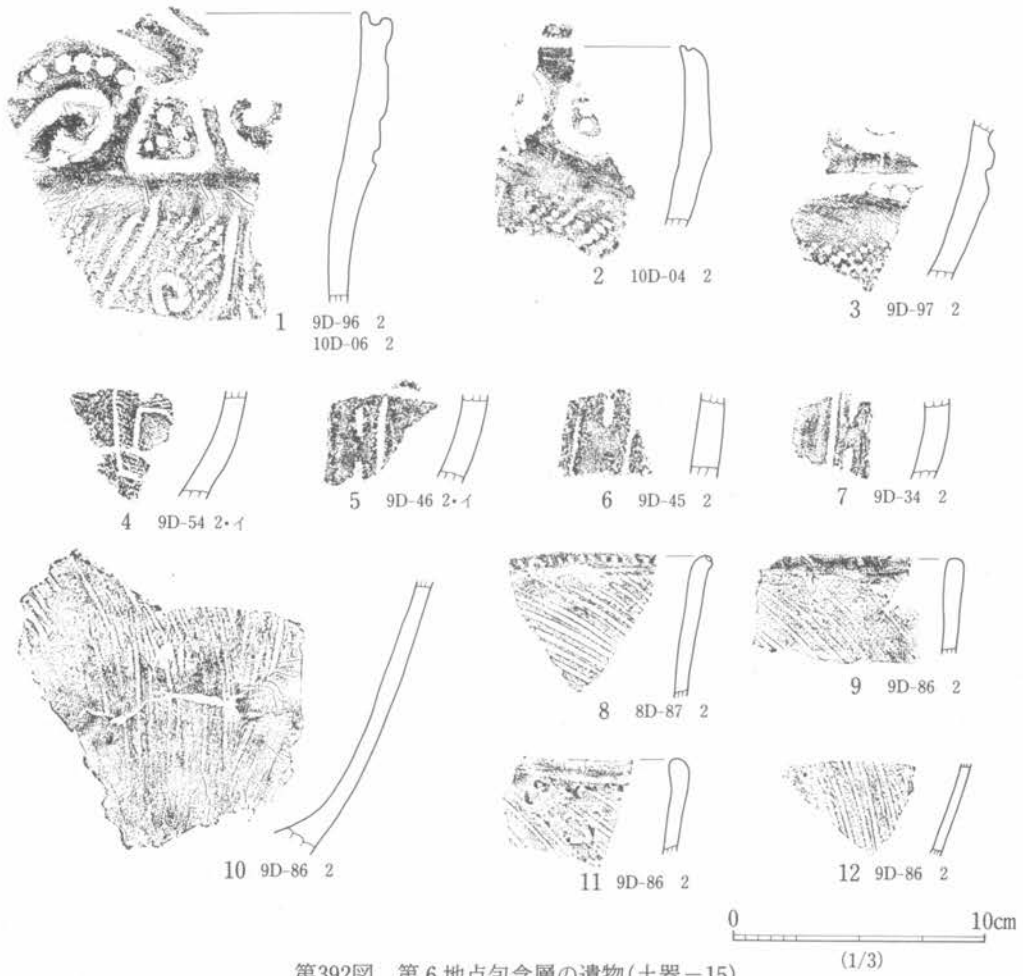
●分布 便宜的に中期の土器を一括したが、大きく阿玉台・勝坂式土器と加曽利E式土器に分離できる。両者の分布域は重ならず、前者は北側台地の縁辺から谷にかかる8D-78・89、9D-29、9D-54を中心とする3箇所の範囲に認められ、各分布域も短時の土器廃棄によるもので、出土量も全体で64点しかない。加曽利E式土器は南側台地の縁辺に8点の土器片が出土しているに過ぎず、それも総て同一個体に帰属する。

●細分 土器型式に基づいて細分を行なった。

a類(21～23) 勝坂式土器の影響を強く看取することが出来るもので、21～23は同一個体である。21には所謂捻り餅状の隆帯が見られ、22・23も低平な隆帯とそれに伴うキャピラ文で枠状区画を構成している。区画内には蛇行沈線を配する。胎土は雲母細粒ならびに石英粒を



第391図 第6地点包含層の遺物(土器-14)



第392図 第6地点包含層の遺物(土器-15)

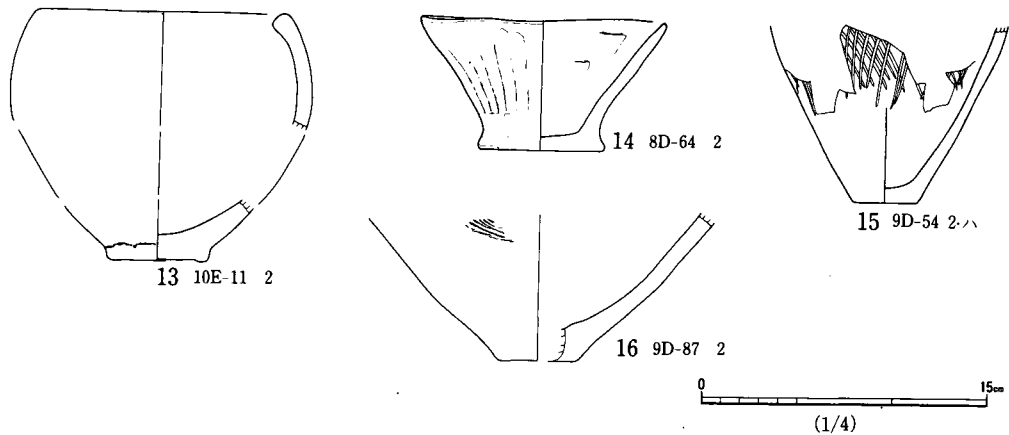
多く混入している。色調は赤褐色を呈している。

b類 (24~26) 時期的にa類と平行するもので、阿玉台式土器に比定出来る。24~26の3点は同一個体である。24は口縁部の破片で、隆帯により楕円形の区画を構成している。区画内には隆帯に沿ってペン先状工具の刺突を巡らせ、中央に貝殻腹縁文を施している。25・26は胴部の破片で、横位に貝殻腹縁文を巡らせ、縦位に細沈線を垂下させている。胎土には雲母粒・石英粒をかなり多く混入している。

c類 (1~3) 加曾利E式土器である。口縁部は若干内弯し、文様帯は隆帯と太い沈線によって区画され、区画内に円形刺突文を充填している。胴部はRLの縄文施文を地文とし、太い沈線により懸垂文を描くが、遺存する部分に磨消帯は見られない。胎土は石英粒・雲母粒を多く混入している。

7群土器 (第392・第393・第399図、図版52)

●分布 便宜的に後期の土器を一括したが、その内容は称名寺式土器と加曾利B式土器に分け



第393図 第6地点包含層の遺物(土器-16)

られる。分布域は分離できず、9D-45~56を中心とする谷底に集中し、南北の台地上にも僅かに包含が認められる。

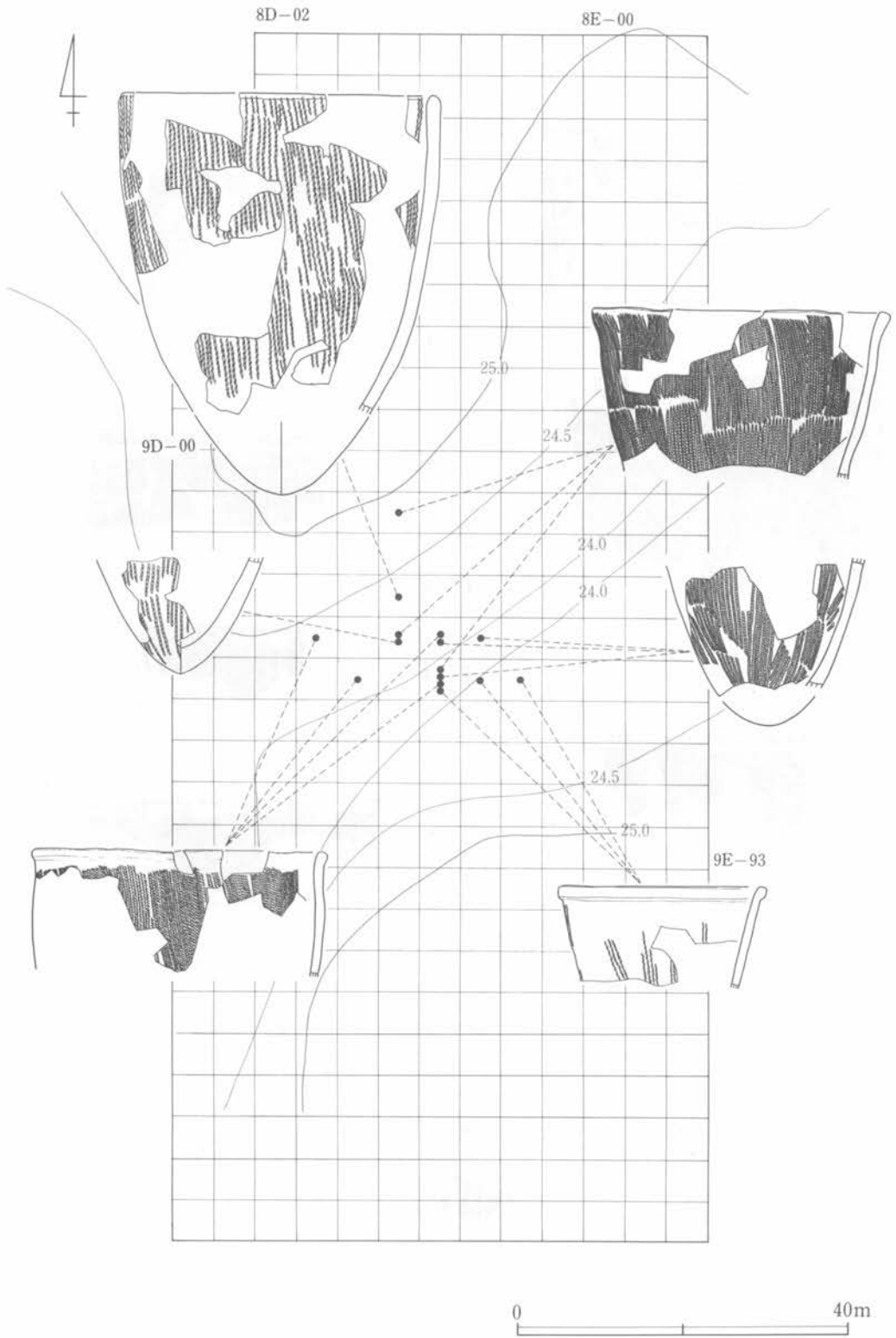
●細分 土器型式に基づいて細分を行なった。

a類 (4~7) 称名寺式土器に比定出来るもので4~7を図示した。4は沈線区画の意匠文内に原体LRの縄文を充填するもので、5~7とは時期的に一致しない。意匠文の構成は不明で、無文となる区画は磨いている。5~7は沈線区画の意匠文内に列点文を施すもので、やはり意匠文の構成は伺えないが、列点文は単なる刺突ではなく、約1cmの長さを持つ沈線様になっている。

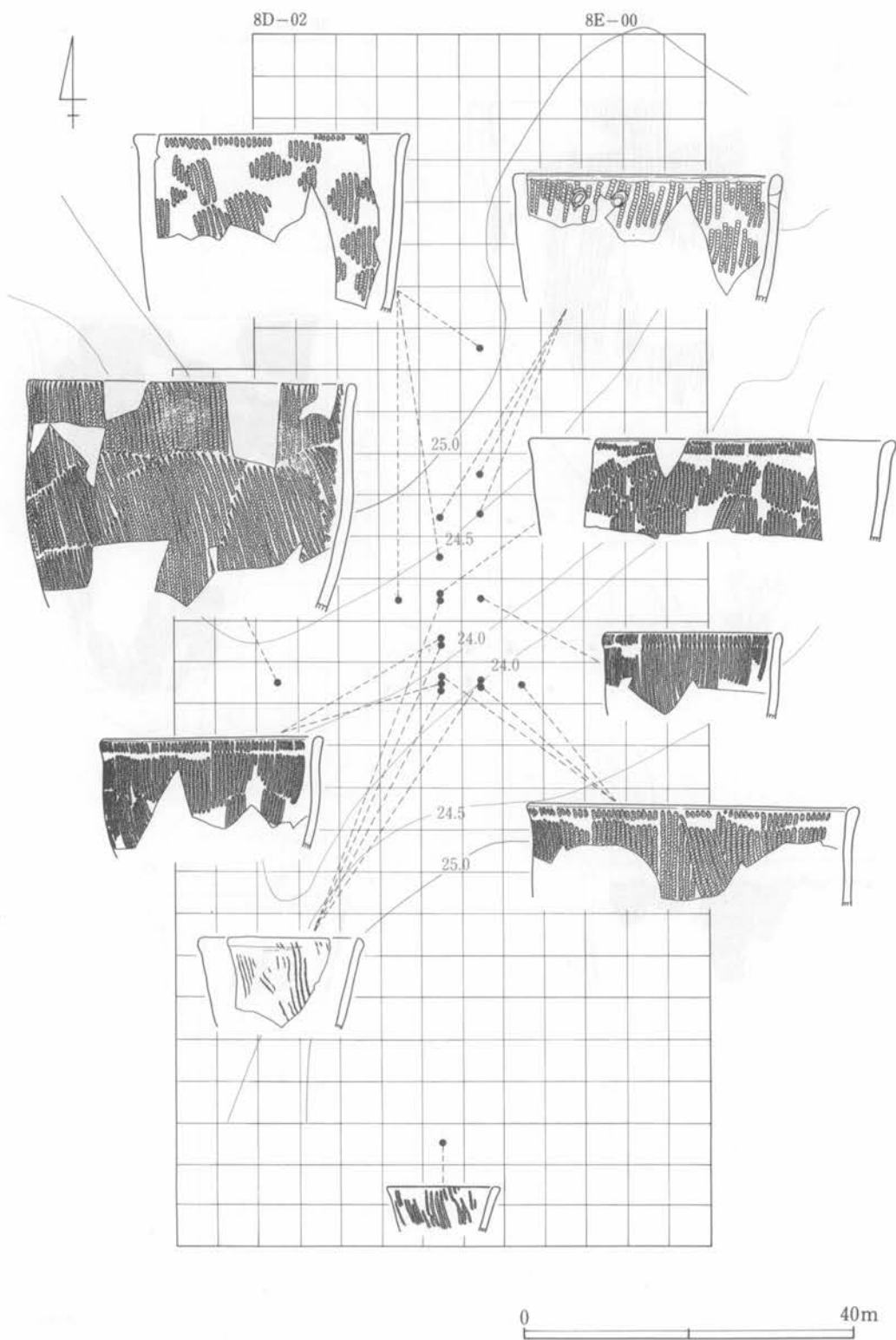
b類 (8~12) 加曾利B式に比定出来るもので、13~16はある程度器形を伺うことが出来る。13・14は詳細な所属時期が明らかではないが、後期に属することは間違いない。13は内弯する口縁部と底部が遺存しており、施文はない。外面は横方向の粗雑な調整が観察でき、底部もあまり丁寧な作りではない。14は完形で、8D-64から単独で出土した。口径12.6cm、底径6.6cm、器高6.6cmを測る。やはり施文はなく、外面を縦方向、内面を横方向に調整している。共に胎土は微細な長石粒を混入している。8~12・15・16は加曾利B式土器の美しい装飾をしないものである。器面全体に斜走ないしは交差する沈線を施している。口縁部は8がかなり開くようだが、口唇部にスリットを施し、9・11は端部から内面を磨いている。

●小結

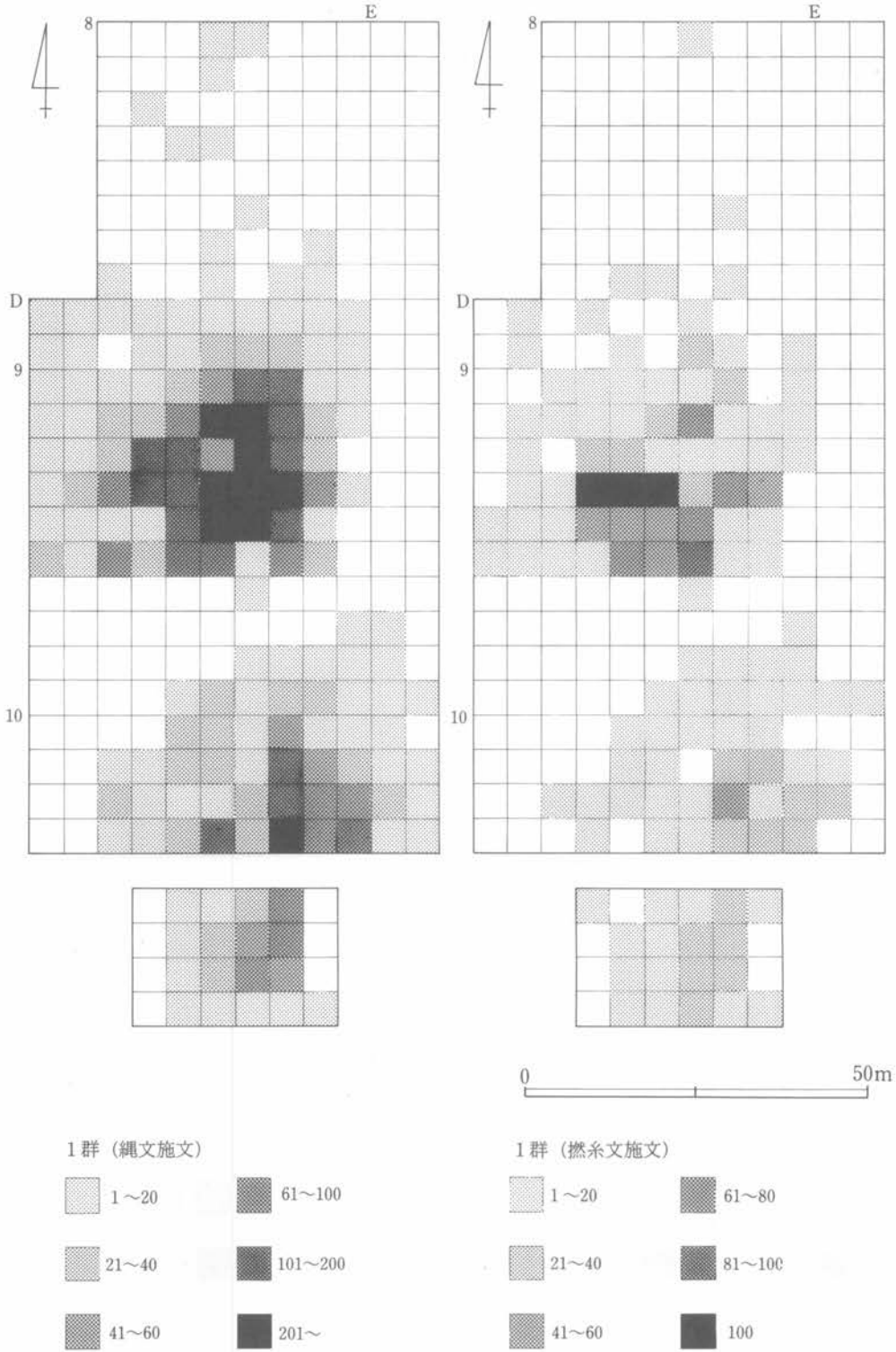
大林遺跡の遺物包含層から出土した土器は、晩期を除く縄文時代各期にわたるが、撚糸文土器を除けば長期に及ばない土器廃棄によってもたらされたもので、出土点数も少なく、また、遺物の分布範囲も非常に狭いものである。しかし、撚糸文土器の出土量は膨大で、ある程度連続した期間の土器廃棄が想定できる。それは分布の項でも触れたように、小支谷を挟んだ南北両側の台地に認められ、この2地点での出現頻度の極の在り方に違いが認められた。全体的な出土量としては、北側の台地が遙かに上回っている。また、両地点の土器の様相に大きな違いは



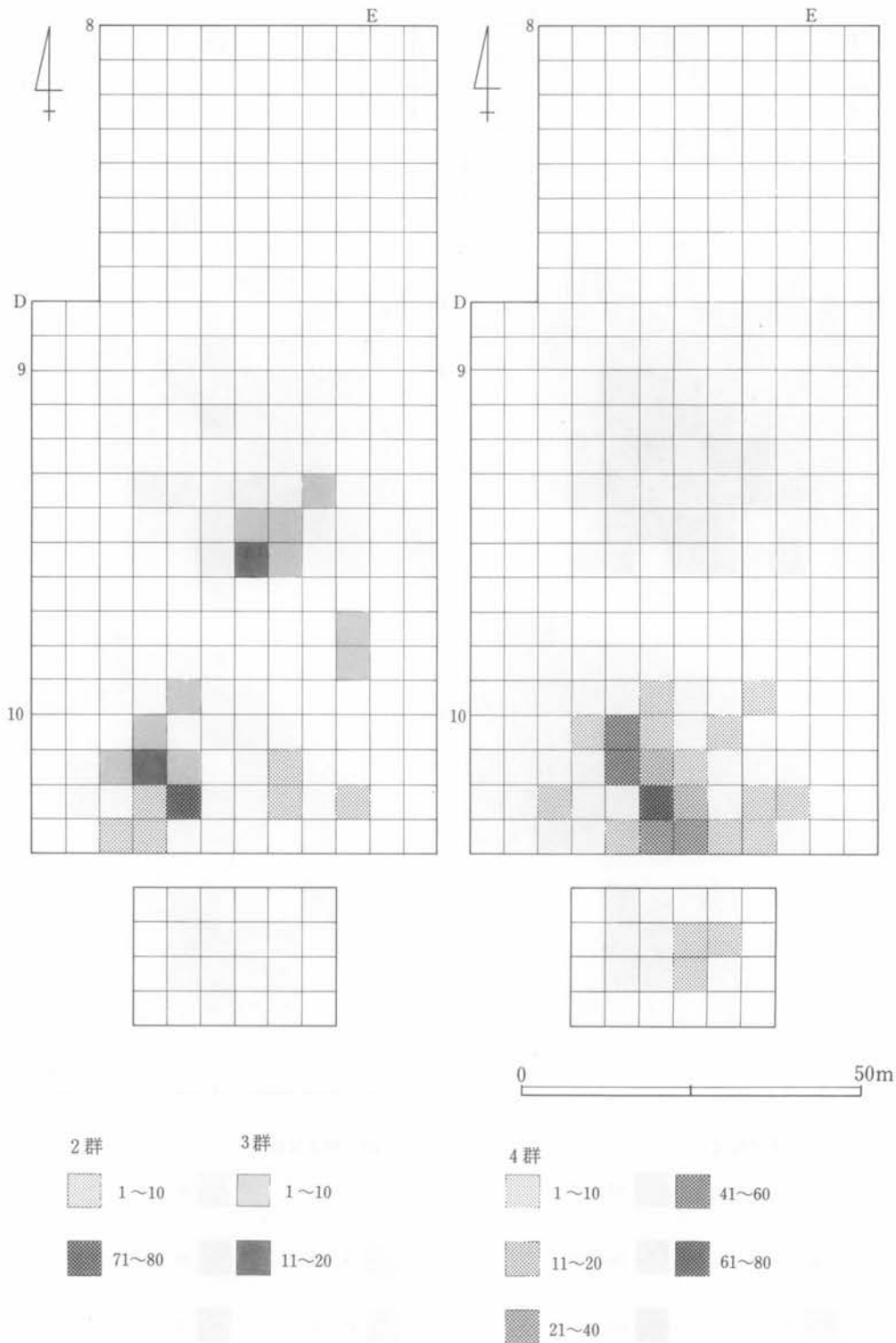
第394图 第6地点包含層遺物分布图(主要遺物-1)



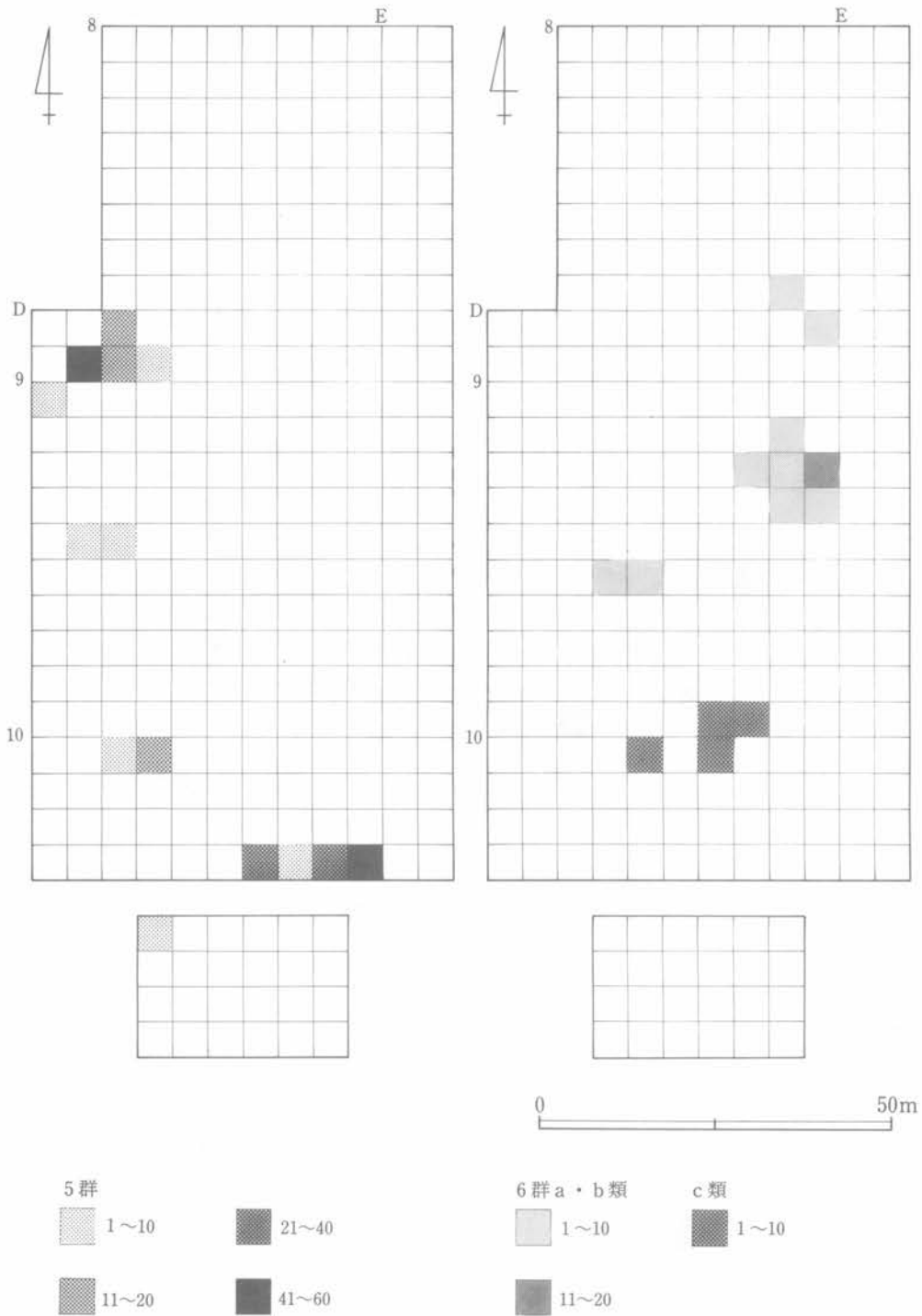
第395图 第6地点包含層遺物分布图(主要遺物-2)



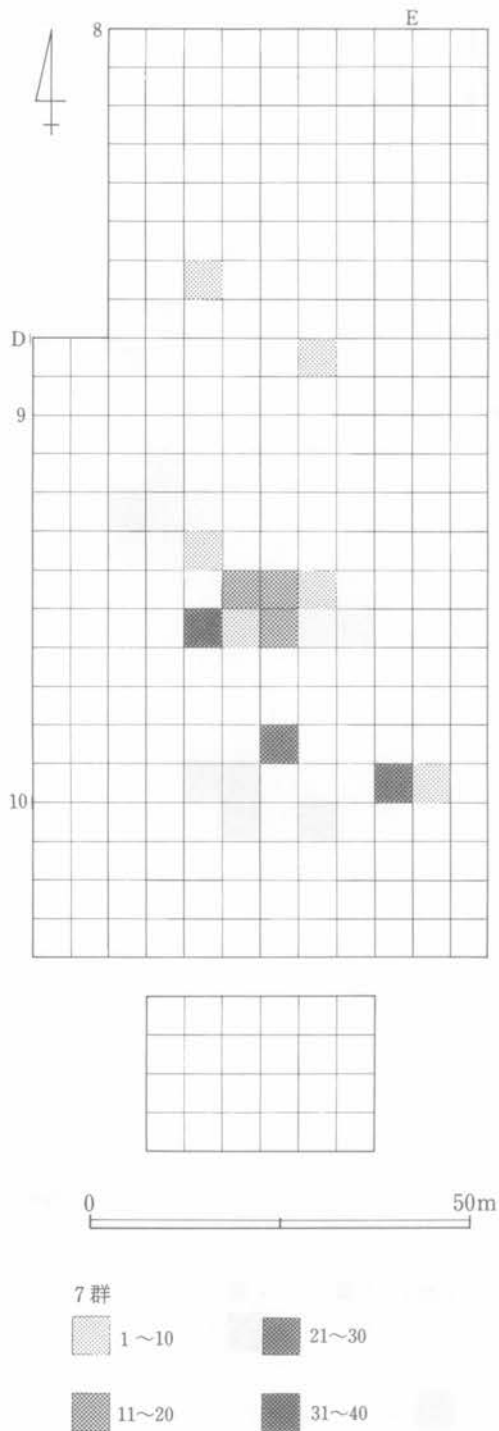
第396図 第6地点包含層遺物分布図(縄文土器-1)



第397図 第6地点包含層遺物分布図(縄文土器-2)



第398図 第6地点包含層遺物分布図(縄文土器-3)



第399図 第6地点包含層遺物分布図(縄文土器-4)

ないものの、接合関係、同一個体の散逸は確認できず、土器の様相から時期的な差は確認できないものの、両地点間には時間的先後関係が存在した可能性は高い。異集団の存在の可能性が皆無となったわけではないが、地形的に見てその可能性は低いと考える。

土器の出土量は先にも述べたように約15,000点を数え、この内の約80%が撚糸文土器である。個体数も2桁を楽に数え、この時期としては比較的安定した居住域が存在したものと思われる。具体的に居住域を限定することは出来なかったが、南北両台地とも、台地上の平坦地を居住域としていたことは十分に考えられ、そこから谷に向けて土器廃棄を行なったとするのが妥当である。

土器は、縄文施文・撚糸文施文・無文と絡状体圧痕文のある土器の4類に大きく分類して説明を加えた。これらの中で、縄文施文と撚糸文施文の土器が全体の約8割を占め、無文・絡状体圧痕文のある土器は非常に少ない存在である。縄文施文と撚糸文施文の比率は6：4程度で縄文施文が主体的存在となり、東京湾東側の一般的傾向と矛盾しない。ただし東寺山石神遺跡の報文で指摘されているような“圧倒的に優位”というような状況ではなく、また、新東京国際空港内No.7遺跡のように2：1で撚糸文施文が優位に立つという状況でもない。土器の特徴としては、いずれも際だった口唇部文様帯を形成せず、施文の条間隔が開く例も少ないことから夏島式土器の範疇に

収まるものがほとんど考えられる。この中で、縄文施文 b 類123～129、捺糸文施文 a 類48～75 は、口唇端部に面を有するもので、縄文施文 a 類には存在しない。縄文施文 a 類については、口唇部の施文がかろうじて胴部と区分される程度で、積極的に縄文施文 b 類との先後関係を肯定するまでには及んでいない。しかし、口唇部に面を有するものが縄文施文 c 類・捺糸文施文 b 類にも存在することは無視できない。縄文施文 c 類・捺糸文施文 b 類は口唇部に無文帯を構成し、新東京国際空港内No.6 遺跡での出土例から新出の要素であることが確認されている。口唇部に面を有するものも同時に新出の要素として認められ、本遺跡では口縁部に沈線や凹線を巡らすものは存在しないが、その関係は無視できないものと思われる。同様に絡条体圧痕文を有する土器も東寺山石神遺跡や金堀遺跡で酷似する例があり、夏島式土器の範疇には収まらないものである。一部で稻荷原式土器と呼ばれている土器群がこれに当たるようであるが、稻荷原式土器自体の解釈も決して十分なものではない。無文の土器に関しては、所謂捺糸文末期に出現する無文土器とは異なるものと考えられ、内面の調整・胎土・焼成などは本遺跡の縄文施文の土器と分離することは不可能である。白井町寺向遺跡でも夏島式土器もしくは稻荷台式土器に伴って無文の土器が出土しており、この時期に少ないながら器面装飾のない土器が存在するらしい。

(大野)

(2) 石器 (第400～第408図、図版53)

第6地点から得られた石器は、石鏃10点(1～10)、楔形石器3点(11～13)、削器1点(15)、石核1点(14)、剝片8点、石斧2点(16、17)、スタンプ状石器7点(18～23)、礫器1点(24)、加工痕のある礫2点(25)、合計35点である。石鏃とスタンプ状石器を主体とする石器群と評価を得よう。石器の分布は、大きく南北2群に分かれるが、これは第1群土器の分布と完全に重複しており、両者の廃棄時が概ね一致するものであることを示唆している。

石鏃 大体凹基3角鏃の範疇に属するが、諸種の形態が認められる。

a 類 側縁部が少し外側にふくらむもの。短身で基部は僅かに凹む。1が典型例で、9もこの仲間であろう。

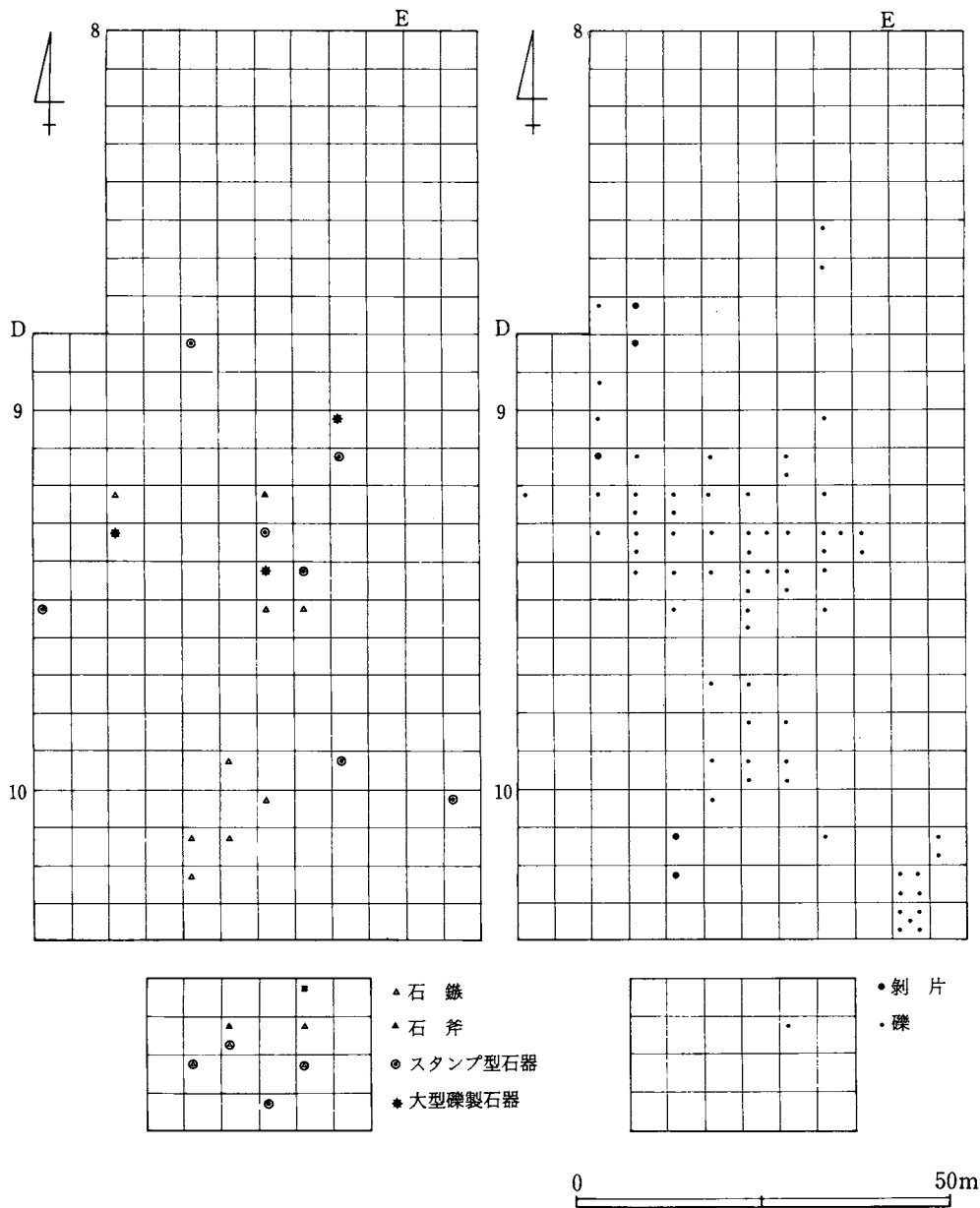
b 類 側縁の内彎するもの。基部は凹み、短身のもの(2)と、長身のもの(3)がある。

c 類 直線的な側縁をもつ長身のもの。5～8などが本類に属する。基部は少し凹むものが多いが、6のように比較的目立つものや、7のように微かなものなど若干の変化がある。

以上の各類の分布を見ると、b類は北側のブロックに分布し、c類は南側に分布している。

a類は南北に1点ずつある。石材としては、チャートが多用されているが、2、6、8が安山岩、3が白色の凝灰岩、9が黒曜石製である。特に6と8は同一母岩と見られる。

楔形石器 南側のブロックから3点検出された。11は安山岩の剝片を素材としている。この安山岩は、石鏃6、8と同一母岩であるかもしれない。剝片の尾部と一側縁に末端がstepとな



第400図 第6地点包含層遺物分布図(石器・礫)

る細かい剥離痕が集中している。この剥離は、剥片を固定し、一端を連続的に加撃することによって生じるが、固定する際に、(1)垂直に立てると剥片の両面に小剥離痕を生じ、(2)一定の角度を与えると片面にのみ小剥離痕を生じる。これは両極手法の過程として理解し得る場合もあるが、むしろ別種の調整手法と理解した方がよい場合もある。むしろ、後者の場合が一般的であったかもしれない。ここでは仮に、砸撃調整と呼んでおこう。

12、13は粘板岩の同一母岩から作られている。11と違って、調整は両面に及んでいる。楔形

石器の両面を被う細長い剝離は、両極的な使用の過程によって生じるという意見もあるが、筆者の楔形石器の製作・使用実験によれば、器体の上縁から下縁に達するような長目の剝離が使用時に頻繁に生じることは決してない。作業縁に接して細かい漬痕様に階段状剝離が生じるのが一般であろう。そこで仮に楔としての機能が存在したにせよ、それは砸撃調整を経た石器の一使用過程であるにすぎないと考えられよう。また、石核としての機能が確実に想定されることも諸氏の御指摘のとおりである。

削器 粗粒の砂岩製のものが1点あるが、不定形なものである。南側のブロックにある。

石斧 2点あるが、南北に1点ずつ分布している。16は北側のブロックのもの。全面研磨の乳棒状に近い定角石斧である。刃部寄りの部分を大きく欠損しており、石錘に再生されている。各面共に研磨のゆき届いた優品であるが、頭部に被加撃痕を留めている。凝灰質の細粒砂岩製である。

17は南側のブロックから採集された。粘板岩の偏平な円礫を素材とし、短冊型に調整加撃されている。側縁～頭部は啄打による稜の潰れが著しい。表裏に原礫面が残るが、刃部側では礫面の研磨が行なわれ、本来は局部磨製石斧であったものと見られるが、刃部の破損に伴う再生が行なわれている。この資料で注意されるのは、器体中央部に表裏に亘って磨滅、光沢の顕著な部分が観察される点である。図ではこの特に著しい部分を網で示した。着柄の関連することは見易い。

スタンプ状石器 円礫を長軸と直交して分割した、平らな面を作業面とする石器で、8点7個体の資料が検出されている。北側のブロックに4個体、南側には3個体あり、石鏃と同様に、南北に応分に振り分けられたかのように分布していた。また、検出グリッドの分布から明らかなように、両ブロック共に土器廃棄地点の外縁部に点々と廃棄された状況を窺うこともできよう。2類に大別される。

a類 入念な2次加工によって作業面を形成するもの。18・19の両側が典型的である。2次加工は側面にも及び所謂凡字形の形態に整えられている。23も同趣のものであるが、体部は未加工で、作業面の調整も粗い。18では作業面から背面にかけて小剝離が連なり、この稜線に磨滅が著しい。19の底面にも稜線の磨滅があり、軽くたく、押す、磨るといった内容の作業が想定される。23ではこの種の痕跡が全く認められないので、あるいは、作業面の再生が行なわれているのかもしれない。短身であることもこれと符合しよう。石質は19が砂岩、18、23は流紋岩である。

b類 未加工、あるいは、ほとんど作業面調整の認められないものである。20～22の3例がある。20は砂岩製で、分割面を打面として、各面を剝離している。この結果、幅の狭い剝離面が残されることになるが、この面は磨滅し、微光沢を帯びている。21も砂岩製。傾斜した作業面をもち、この面と背面との間に小さい剝離痕が数多く認められる。一種の使用痕であるが、

この例と20とは使用痕に大きな差があり、両者間に機能の差異が示唆されよう。20も砂岩製で、2枚の剝離痕が作業面を構成している。使用痕は認められない。

26は凹み石として利用されているものの破片で、本来の形態はよく分からないが、磨滅痕の著明な剝離面があり、スタンプ状石器の仲間であるかもしれない。砂岩製

石核 安山岩製の石核と思われるものが1点ある。打面と作業面の入れ換えが行なわれている。

剝片 剝片は10点あるが、砂岩製の比較的大き目のものは、石斧やスタンプ状石器など大型の石器の作出剝片と見られる。流紋岩のもの1例も同様である。これ以外には、安山岩のもの2点、ホルンフェルス、黒曜石、チャートのもものが1点ずつあるにすぎない。北側のブロックに4点、南側には6点という分布を示している。

礫器 細長い棒状の円礫の一端に刃部を作出したものである。側面の一部にも調整が加えられている。流紋岩製で、北側のブロックから検出された。

加工痕のある礫 25は粗粒の砂岩の礫で、周辺部の一部に加工痕が認められる。性格は不明である。27は大型の礫片で石皿の破片であろうか。両面に平坦な研磨面が認められる。特に一面は浅く凹んだ状況を呈している。砂岩製。

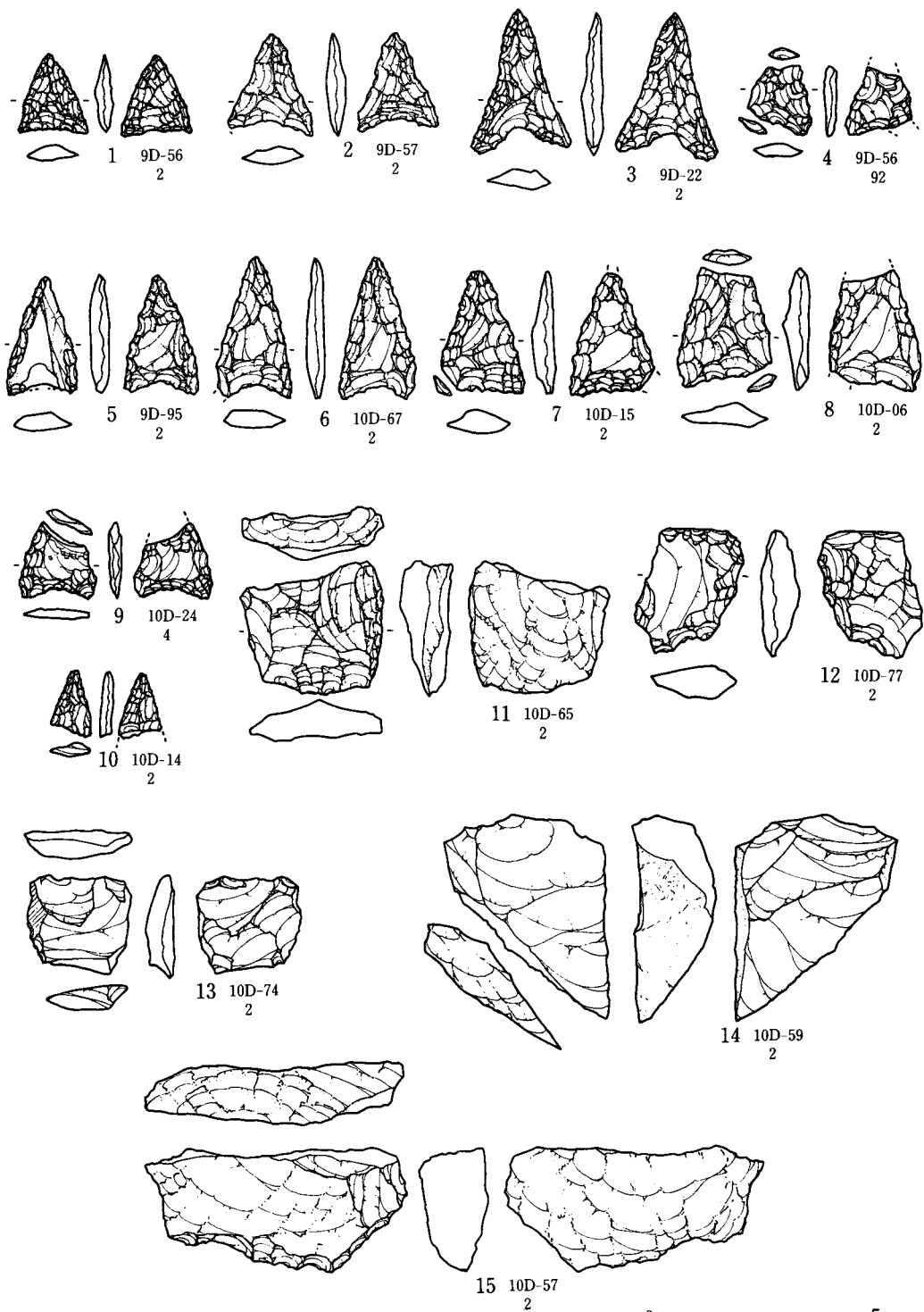
(3) 礫

石器と共に少数の礫片が検出された。70点あるが、北側のブロックに48点、南側に22点が分布している。構成礫種は次のとおりである。砂岩31点、(赤化礫4点)、流紋岩9点(赤化礫2点)、チャート6点(赤化礫なし)、安山岩5点(赤化礫3点)、各種深成岩類5点(赤化礫なし)、点紋ホルンフェルス2点(赤化礫なし)、泥岩1点(赤化礫なし)、不明11点(赤化礫なし)であり、全体としても被焼成の赤化礫は7点あるにすぎず、礫の機能が問題となる。遺存度は全般に低く、完形礫8点は、1点を除きいずれも小型のものである。大半が $\frac{1}{2}$ 以下の遺存度を示している。4母岩が地点を異にする資料を含んでいるが、南北のブロック間に同一母岩は認められなかった。

C. 各地点採集の石器 (第409図、図版53)

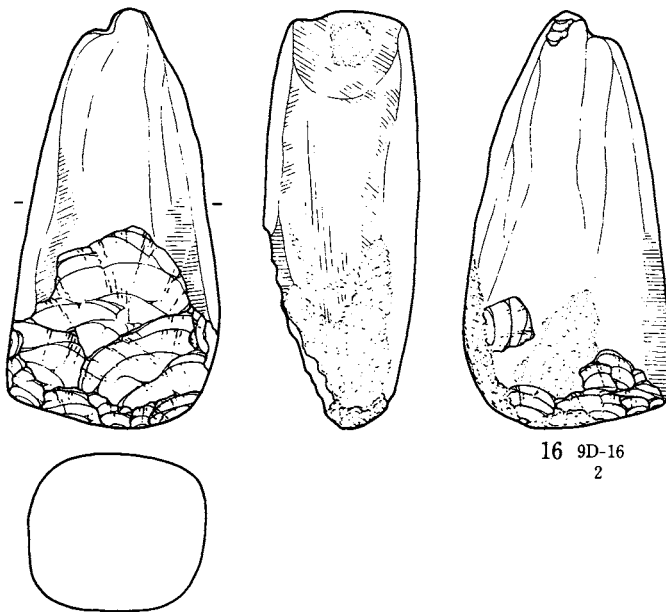
確認調査とそれに続く各地点の本調査に際して、少量の石器が採集されている。いずれも単独出土に近い状態で検出されたもので、土坑覆土に混入していたものもある。

石鏃 (1~14) 14点ある。大体第6地点と同様の形態をしているが、若干の異同がある。1は第1地点4号陥し穴の覆土から出土した。チャート製でa類である。2~4は第4地点の検出。2はa類に近いが、基部の挟りが深い。4、5はb類で良く似ている。全てチャート製である。5・6は9地点の遺物である。5は安山岩製で、側縁上部に肩部を作出する例、6は2と同一の形態的特徴を示している。チャート製。7、8は第17地点採集。7はa類に、8は

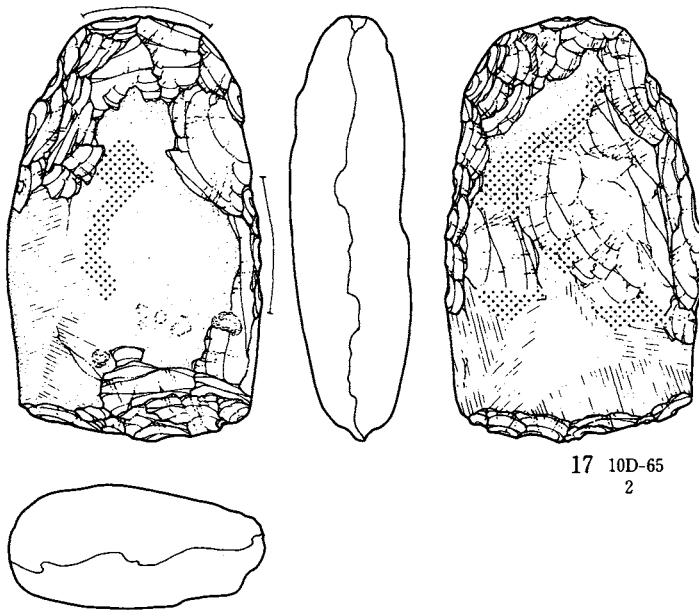


0 5cm
(2/3)

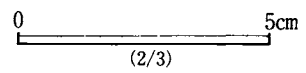
第401図 第6地点包含層の遺物(石器-1)



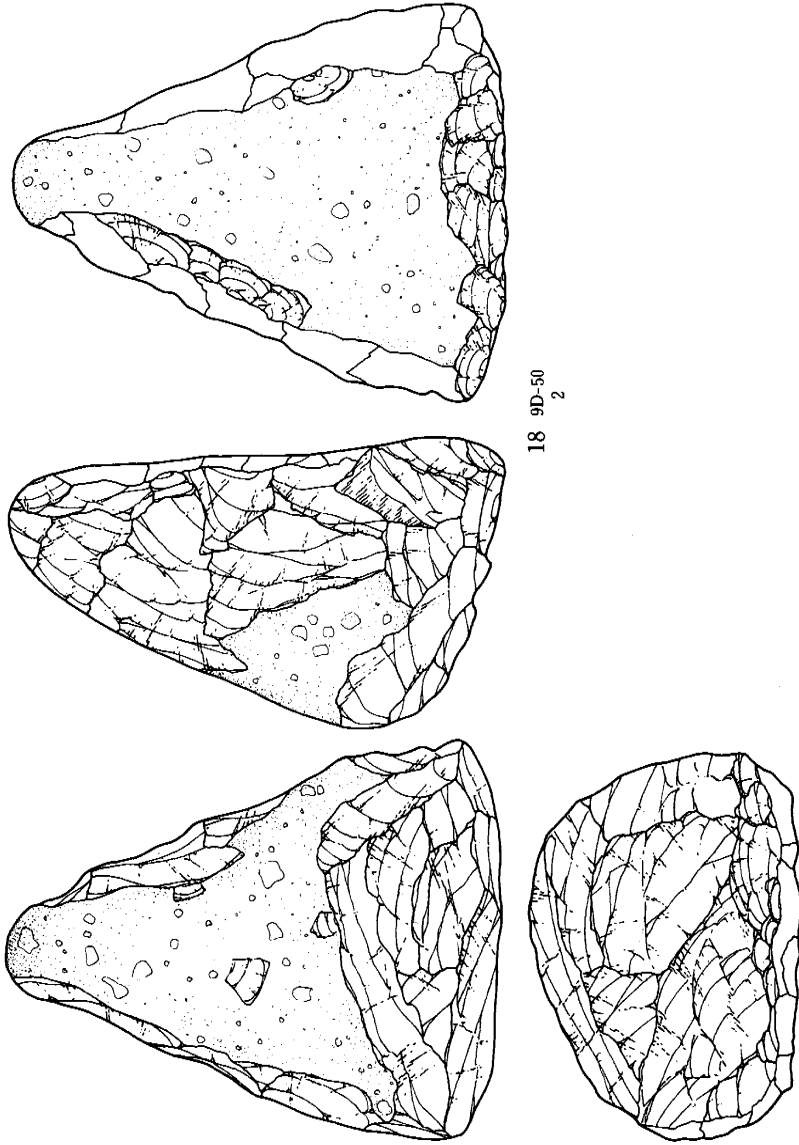
16 9D-16
2



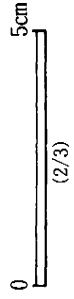
17 10D-65
2



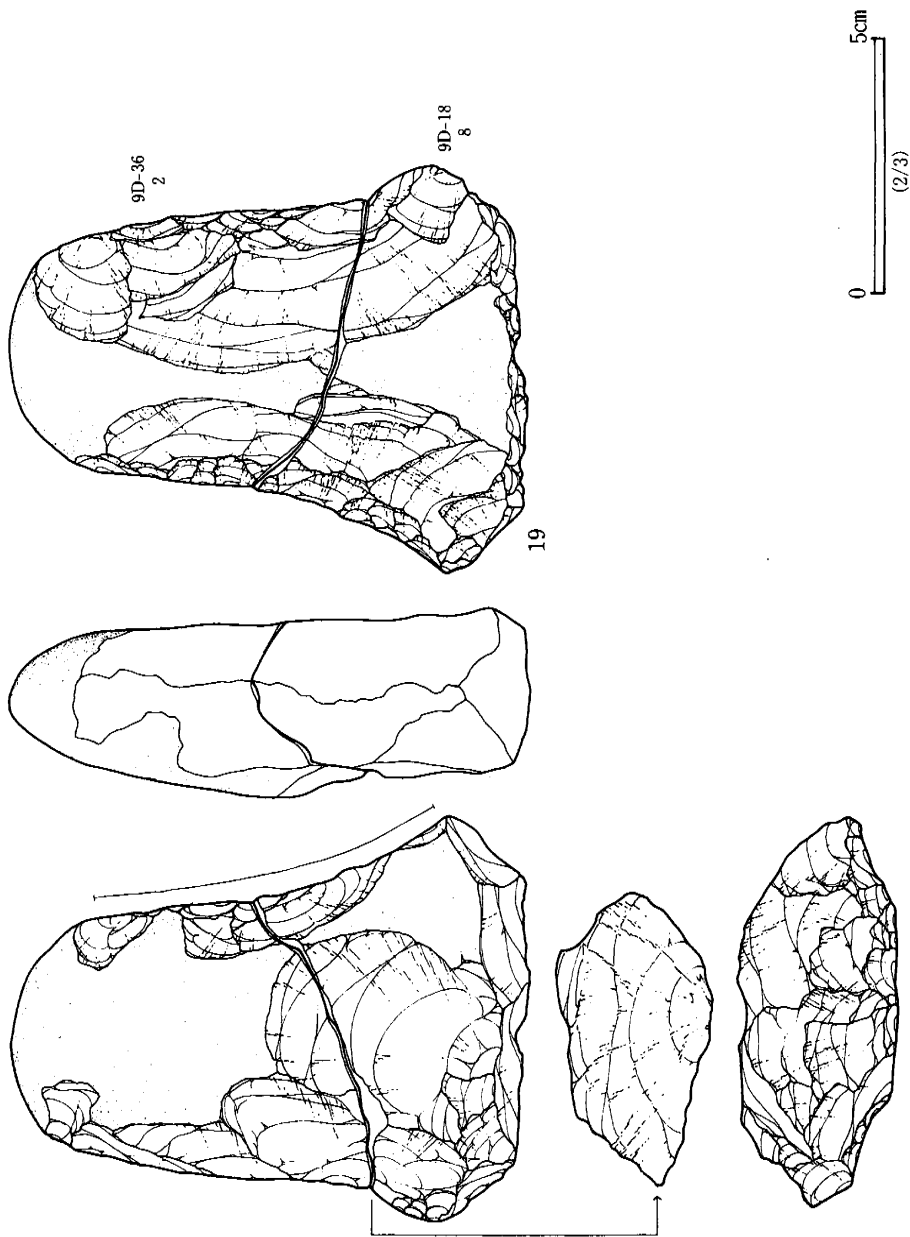
第402図 第6地点包含層の遺物(石器-2)



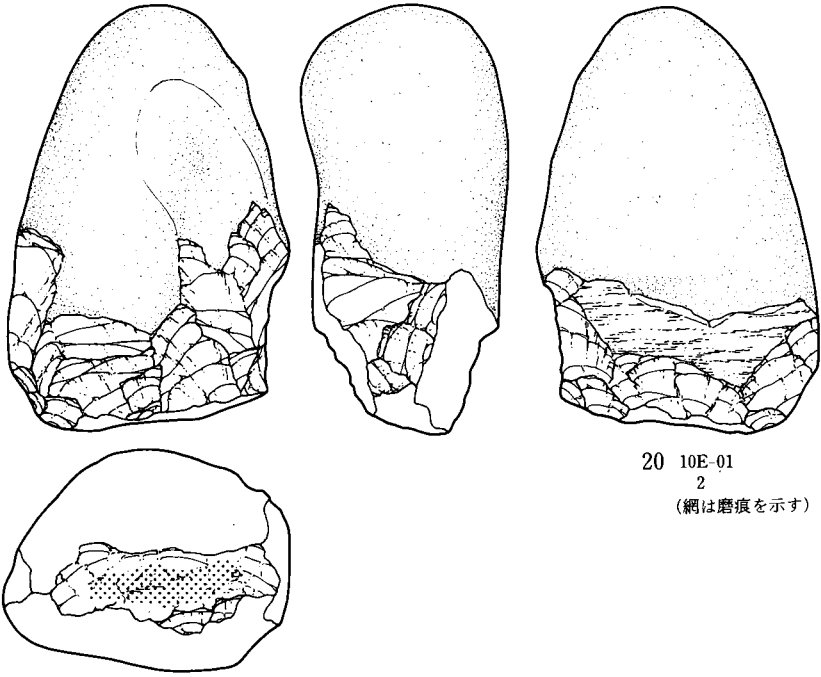
18 9D-50
2



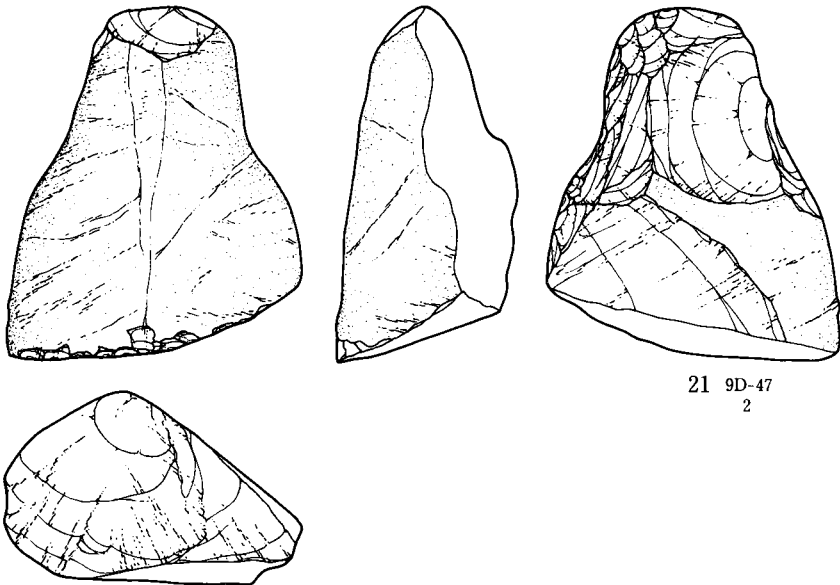
第403図 第6地点包含層の遺物(石器-3)



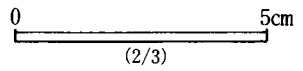
第404図 第6地点包含層の遺物(石器-4)



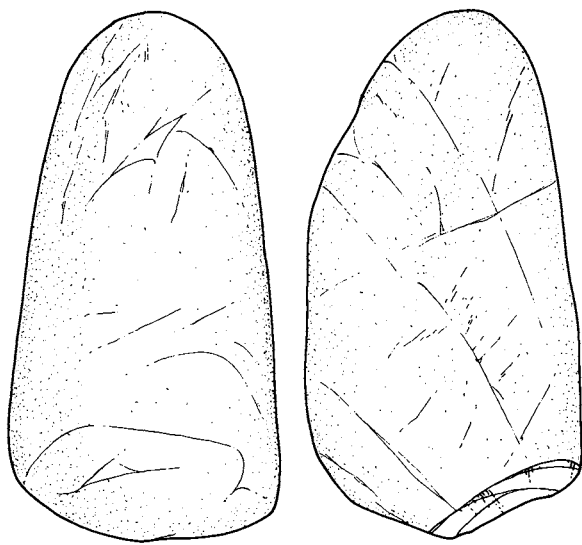
20 10E-01
2
(網は磨痕を示す)



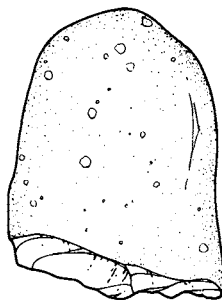
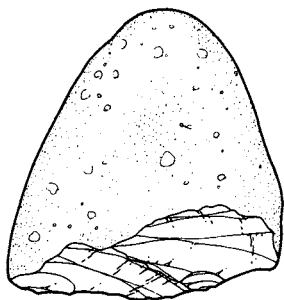
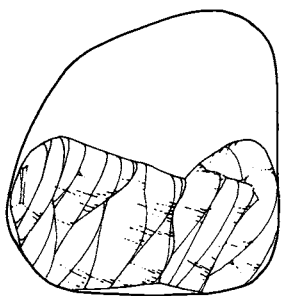
21 9D-47
2



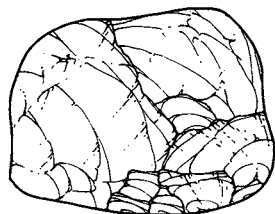
第405図 第6地点包含層の遺物(石器-5)



22 9D-04
2

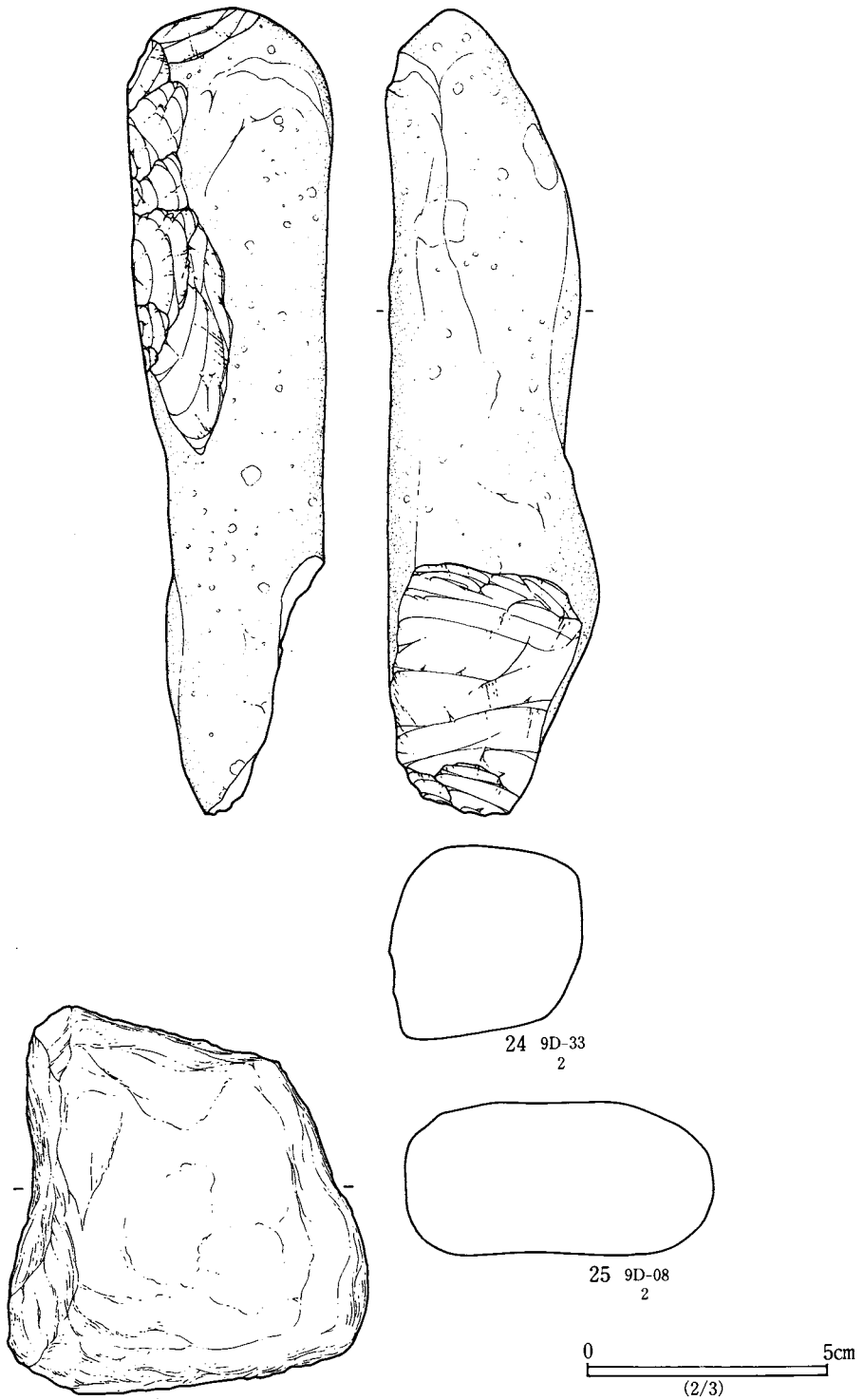


23 9D-98
8

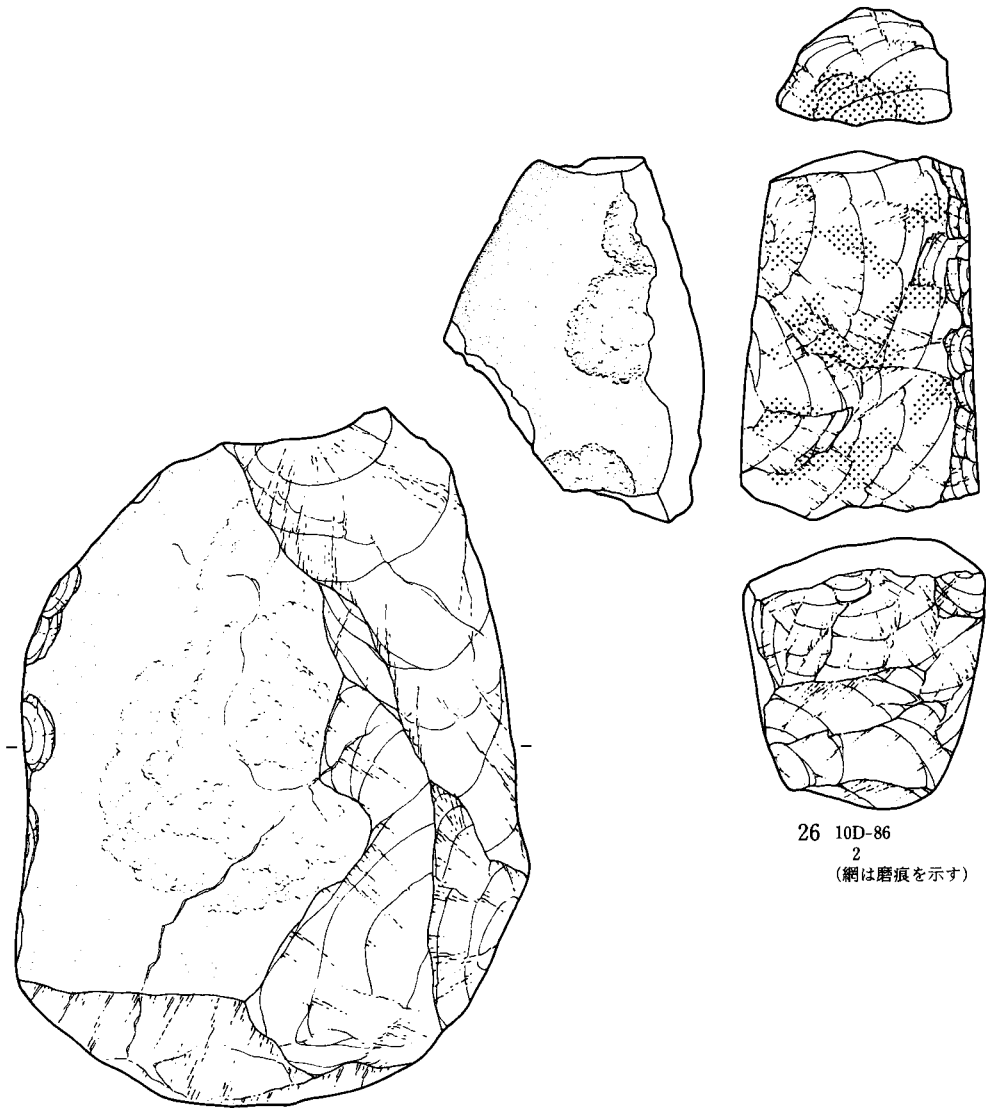


0 5cm
(2/3)

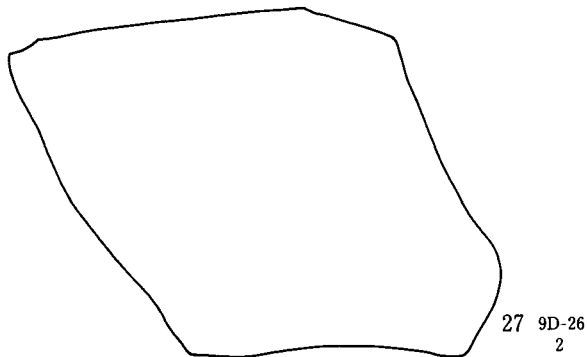
第406図 第6地点包含層の遺物(石器-6)



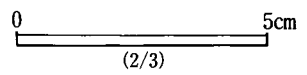
第407図 第6地点包含層の遺物(石器-7)



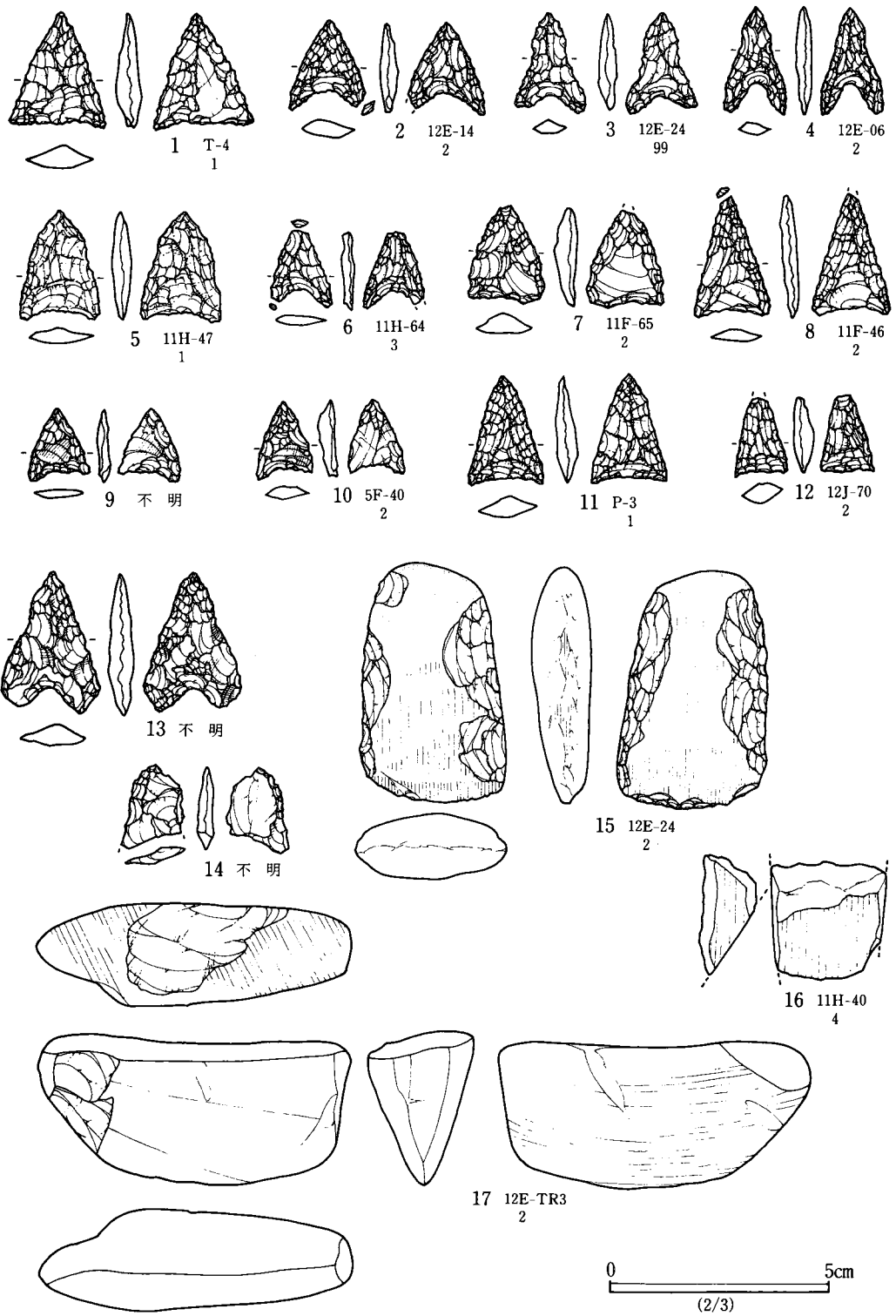
26 10D-86
2
(網は磨痕を示す)



27 9D-26
2



第408図 第6地点包含層の遺物(石器-8)



第409図 大林遺跡各地点採集の石器

c類である。7は黒曜石製、8はチャート製である。9は採集地点不明である。黒曜石製でa類。10は確認調査時に12F-40区で採集された。9と石質、形態が共通している。11はチャート製のc類である。12は流紋岩質凝灰岩製のもの。確認調査時に12J-70区から採集された。13は採集地点が不明だが、特徴的な脚部形態から縄文中期の所産と見られる。14も採集地点が分からない。未製品であろうか。チャート製である。

石斧 (15~17) 3点ある。15は小型偏平な砂岩の円礫の側面に打調を加えた局部磨製石斧。第4地点から出土した。側面の中央部にも磨滅が及んでいる。2~4の石鏃と関連し、第6地点包含層の形成期に帰属しよう。16、17は砂岩製の石斧状のものであるが、はっきりしない。17は刃部破片のようにも見えるが、折れ面にも研磨が及んでいる。所謂矩斧状のものか。

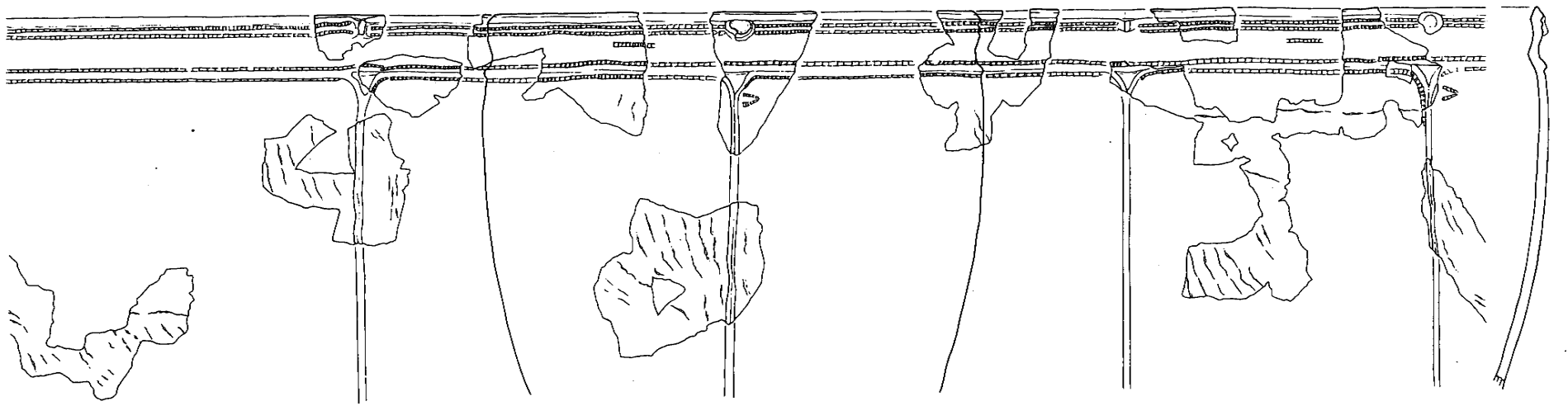
(田村)

D. 第20地点の縄文土器 (第417図、図版52)

本地点の調査は確認調整にとどまるものであったが、第417図に示した阿玉台土器一個体分が採集された。本地点には調査前に牧場に伴う施設があり、その基礎撤去作業によって土層に攪乱がみられ、本資料についても原位置を保つものではなかった。しかしこの一個体分は6I-00区の約2m四方に散布していたものであり、加えて破片の断面状態のなかには真新しいものも認められたので、本来は良好な一括資料であった可能性がある。

現存部分は全体の約20%に相当すると思われるもので、口縁部上にみられる突起とその延長上に垂下する「Y字状隆起線」の位置関係より器形復原を試みた。器形は口縁部と胴部との境で「くの字形」に屈曲するやや甕形を呈し、内側の稜も明瞭である。推定口径42.4cmを計り、やや大形である。器高は復元状態で実際のおおよそ $\frac{2}{3}$ 位、34.0cmを計るが、この断面状態を観察するとかなり磨耗しており、廃棄の時点で胴部下半を欠いていたのかもしれない。

口縁部は上下の断面三角形の隆起線によって胴部と区画され、そのうち口唇部の隆起線にはその直下に二列沿って、口縁部下部の隆起線には両側に沿って角押文がみられ、口縁部文様帯を構成している。角押文は器面に押し引きされた形状より判断すると湾曲がそれ程でもないので、円形竹管を約 $\frac{1}{2}$ 位に裁断した施文具を用いて施文されたものであろう。口縁部下部の隆起線に接続して断面略三角形の「Y字状隆起線」が垂下するが、角押文は接続部付近で沿うだけで、この隆起線には沿わないと思われる。口唇部隆起線上の突起は現存で二ヶ所に認められる。一つは「扇状把手」の祖形の一つになったと思われる円盤状の突起、今一つは短い粘土紐を芯にしてそれを横一条の粘土紐で囲った突起である。現存する破片より推察すると、これら二種の突起は交互に胴部に垂下する「Y字状隆起線」の上位に位置し、四単位構成となって「Y字状隆起線」の縦位四分割の補助的役割を果たしていたと思われる。また口縁部文様帯内や「Y字状隆起線」の片側に角押文がみられるが、これは縦位分割ごとの左右非対象を示しているも



第410図 第20地点の縄文土器

0 10cm
(1/3)

のかもしれない。

器面は表面については口縁部から胴部上半までは比較的平滑に仕上げられているが、それ以下は斜方向に粗いヘラ状工具痕がみられたり、部分的に輪積痕も認められる。裏面は平滑である。焼成は良好で胎土中にこの時期に特徴的な雲母粒の混入が認められない点は、やや例外的であるかもしれない。

以上述べてきた特徴より判断すると、本資料は阿玉台式でもより古式に属すると思われる。すなわち口縁部文様帯内で楕円区画文や窓枠状工区画文がみられない点、口唇部隆起線に付随する突起の形状、その突起と胴部の「Y字状隆起線」による縦位分割が左右非対称を意識している点等から判断すれば、西村編年の阿玉台 I a 式に相当するものである。しかし内面に明瞭な稜をつくりだしたり、平滑な器面調整がされている点は、西村編年の I a 式よりやや後出する要素でもある。

類例として柏市聖人塚遺跡151埋壘土坑の阿玉台 I a 式深鉢形土器が挙げられる。個々の文様要素、例えば突起や「Y字状隆起」には共通点がみられるが、明確な口縁部文様帯区画がされない点や、胴部に垂下する隆起線はあるが縦位分割されない等の相違点が認められ、これは本例より先行する要素を具備していると思われる。他に全体の特徴を示す良好な資料が乏しいので類例の増加を望まれるところであるが、本例は阿玉台 I a 式でも、より新しい様相をもつものと考えておきたい。

(上守)

E. 土坑 (第410～第416図、図版20～27)

大林遺跡から検出された縄文時代の遺構としては、僅かに20基の土坑を挙げ得るにすぎない。土坑は第1地点に10基が集中しており、それ以外には、遺跡中央の埋積谷を巡るように、各地点に点在する状況が認められる。各地点共に狭長な楕円形を呈する掘り込みの深いものが主体を占めており、陥し穴と言われているものに相当する。個々の事例に就いては後に述べるが、大体次のような諸元からなる形態を呈している。

長さ：最小1.2m、最大4.0m、 $\bar{x}=2.907\text{m}$ 、 $\delta=0.64$

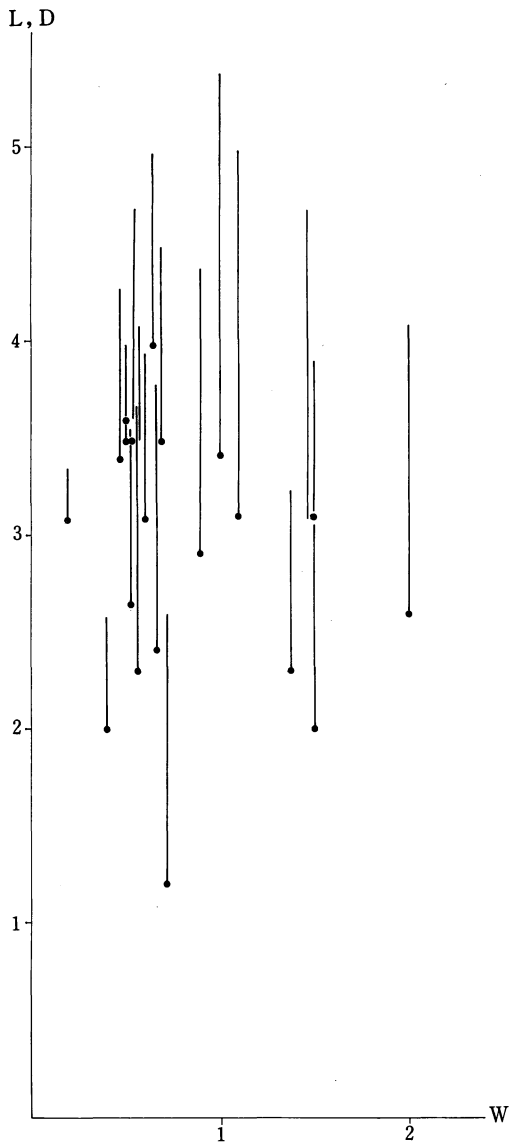
幅：最小0.2m、最大2.0m、 $\bar{x}=0.83\text{m}$ 、 $\delta=0.51$

長／幅指数：最小1.3、最大15.5、 $\bar{x}=3.59$ 、 $\delta=3.30$

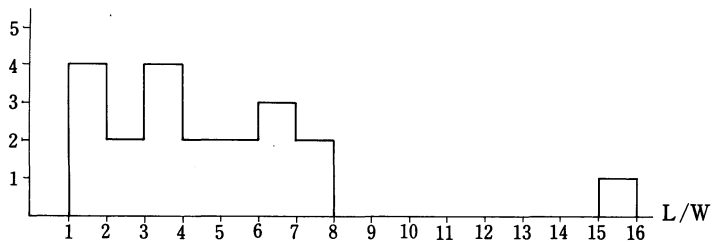
深さ：最小0.25、最大2.0、 $\bar{x}=1.16$ 、 $\delta=0.48$

これらの値は、いずれも検出面における計測値であり、上半部をかなり削平している可能性が高く、本来の値とは異なる場合も多く、あまり参考にならないかもしれない。なお、長／幅指数に数値のバラツキが著しいが、これは、狭長なタイプ（a類）と、小判型に近いタイプ（b類）の両者が母集団に含まれていることによるものと見られる（第410・411図）。

分布上、特に注意したいのは、第1地点の状況である（第63図）。第1地点には、調査区の中



第411図 陥し穴の長・幅・深さの分布状況(単位：m)



第412図 陥し穴の長幅分布

中央部に西から東に開口する谷が認められ、この谷頭部を取り囲んで10基の陥し穴が設定されている。10基のうち7基は谷頭部を巡って数メートル間隔に配置され、残りの3基はこの南北の緩斜面部に位置している。谷頭部を巡るものはコンターラインと斜交関係にあり、a類のみによって構成されている。一方、緩斜面部のものはa類2基、b類1基で、このうち、a類は谷頭部を巡る一群の中軸線に対してほぼ対称に配されており、企画性の高い配置関係が窺われる。b類に属する1基については、企画外の可能性もある。各陥し穴の概要は以下のとおりである。

陥し穴1 第1地点にある。長軸2.0m、短軸0.4m、深さは検出面であるソフトローム層上面から0.5～0.6mある。非常に小型の部類に属しよう。覆土は上部がロームを含む暗色土で、底面には黒味の強い腐植質の土層が認められた。V字形の横断面を呈し、下部施設は確認されていない。

陥し穴2 第1地点にある。長軸4.0m、短軸0.66mの狭長な平面形をも大型の土坑である。横断面は漏斗状となり、底面付近で急に狭まっている。縦断面はほぼ箱型に近い。一方が僅かに奥に掘り込まれているが、他端は垂直な壁面となっている。下部施設は確認されていない。覆土の状態は陥し穴1に近く、上部がローム質、下部が腐植質となる。

陥し穴3 第1地点にあり、先土器時代確認調査時の試掘坑が東半分にかかり、その一部を削平している。長軸3.5m、短軸0.5mで、陥し穴2より少し小さい。深さは0.8mあるが、本来はもう少し深かったはずである。横断面は漏斗状となる。縦断面を見ると、両端は僅かに傾斜する状態を呈しており、普通とは違うようである。覆土は、上部にローム質の土が、下部に腐植質の土が堆積している。やはり下部施設は確認されていない。

陥し穴4 第1地点にある。規模は陥し穴3に近く、長軸3.4m、短軸0.7m、深さ1.0～1.2mとなっている。横断面は弱い漏斗状を呈し、両端部は奥に掘り込まれ、縦断面を見ると広口のフラスコ型をしている。比較的平坦な底面があり、下部施設の存在が疑われるが、確認されていない。覆土の状況は、上部にローム質土が厚く堆積し、底面を約0.2mの厚さで腐植土が覆っている。

陥し穴5 第1地点にある。長軸3.4m、短軸0.5m、深さ0.9mで、陥し穴3とほぼ同形・同大のものと判定される。縦・横の断面形態も陥し穴3と一致する特徴を示しており、あるいは同一の人間による掘削が行なわれたと考えられるのかもしれない。覆土は、上層部にローム質土が、基底部に薄く腐植土が堆積している。下部施設は確認されていない。

陥し穴6 第1地点にある。長軸3.1m、短軸0.6m、深さ0.8～1.0mとなっている。縦断面は、上部に弱い肩をもつ漏斗状を示している。端部は、一端はほぼ垂直に掘り込まれているが、他端はオーバーハングするように奥に向かって掘り込みが認められる。覆土は上部がローム質土、底面に薄く腐植質土が堆積している。下部施設は確認されなかった。

陥し穴7 第1地点の検出。長軸3.6m、短軸0.5m、深さ1.3mある。北側の一部を先土器確

認調査時の試掘坑が切り、若干原形が損なわれている。横断面から窺われるよう、両壁は垂直に掘り込まれ、底面近くで更に細い溝を切り込んでいる。また、両端は大きく奥に掘り込みをもち、広口のフラスコ状の縦断面を呈している。覆土は大別して3層に分かれ、最上部に暗褐色土が、中層に厚くローム質土が、そして基底部に薄く腐植土が堆積している。下部施設の存在は確認されていない。

陥し穴8 a類の卓越する第1地点にあり、唯一b類に分類されたものである。長軸2.6m、短軸2.0mの幅広の小判型をしている。深さは1.5mあり、壁面は傾斜し、中端で肩部を形成し、上部の開く形態となっている。下面はほぼ平坦で、長軸1.7m、短軸0.8mの小判型を呈する。覆土は他と異なり、底面上に厚さ0.2m程のローム土があり、その上部に薄く腐植土が認められた。その上部はローム質土で、最上層に部分的に暗褐色土が発達している。この状態から、掘削直後の基底部の埋め戻しが想定されるが、おそらく、この過程で何らかの下部施設の敷設が行われたものと見られる。ただし、調査時には何らの痕跡も注意されていない。

陥し穴9 第1地点にある。先土器確認の試掘坑の掘削に伴って検出されたため、北側を大きく削平している。長軸2.64m、短軸0.62m、深さ0.9~1.4mの規模をもつ。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、顕著な肩部を形成していない。このため、比較的平坦な底面をもつが、下部施設の確認はない。覆土の大半がローム質土であり、底面に接して、0.1m位の腐植土の堆積が観察された。

陥し穴10 第1地点にある。長軸3.5m、短軸0.54mで、陥し穴7とほぼ同一の大きさと言える。深さは1.4mあり、両端に掘り込み部をもつタイプで、これも陥し穴7と一致した特徴と言える。ただ、横断面を見ると、左右両壁はなだらかに外方に開く形態をとり、2段の掘り込みをもつ陥し穴7とは違う。覆土の状態は通例のとおり、底面に腐植土がたまり、その上部には黒色土とロームとの混じった土が堆積している。

陥し穴11 第3地点から単独で検出された。長軸3.4m、短軸1.0mの長楕円形の平面形態をしている。上部を外側に開くように傾斜させ、下部は垂直に掘り込まれ、断面形は肩部をもつ漏斗状を呈する。深さ2mあり、大林遺跡の陥し穴の中では最も深い部類に属する。覆土は大別3層からなり、上・下層に黒色土が、中層にはローム質土が発達している。ローム質土の下半は、ブロック状のロームが乱堆積しており、短期間内での再堆積が想定されよう。下部施設は確認されていない。

陥し穴12 第4地点から単独で検出された。長軸2.3m、短軸0.65mあり、中央部の僅かにくびれる長楕円形の平面形態を示している。深さは1.4mで、肩部をもつ掘り込みが認められるが、長軸両端は奥に向かって掘り込まれており、縦断面は広口のフラスコ状を呈する。埋土の堆積状況は特異で、ローム質土が壁際に何層かに亘って堆積しているのに対して、土坑の中央部には、ほぼ垂直に暗褐色土が貫入しており、あたかも柱根状になっている。しかし、図版25に明

らかな如く、この暗褐色土は長軸に従って細長く、単独の柱根とは認められない。おそらく、一度、下半分を埋め戻し、その後に細長い溝が掘削されたものと見られる。この溝については一種の下部施設とも考えられるが分明ではない。

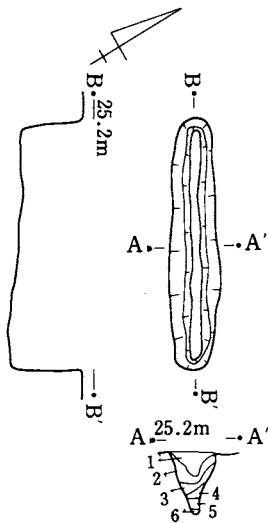
陥し穴13 第7地点から単独で検出された。長軸1.2m、短軸0.72mあり、b類に帰属する。下部への掘り込みはa類と同様であり、口の開く漏斗状の断面形態となっている。平面形態は小型であるが、深さは1.4mあり、平均よりも深い。覆土は、最上部に暗褐色土があるが、以下はローム質土と黒色土が互層になる。底面には腐植土がたまっておらず、ほぼ純粋な軟ロームが0.5mの厚さをもって堆積していた。おそらく、掘削後短期間で埋め戻されたものと見られる。坑底には下部施設は確認されていない。

陥し穴14 第9地点から単独で検出された。長軸2.9m、短軸0.9m、深さは1.5mある。掘り込みはほぼ垂直に行なわれており、通例認められる肩部をもたない。本陥し穴で注意される点は、陥し穴12と同一の覆土構成の観察されることである。すなわち、坑底に0.2m程の土層が堆積した後に0.6mの厚さをもつローム土で埋め戻し、その中央部分を長軸に沿って溝状に掘削している状況が推測される。この溝は上面幅0.3m、深さ0.6m、底面幅0.1mの狭長なもので、その全長は、ほぼ土坑長軸に一致するものと見られるが不明である。

陥し穴15 第11地点にある。西端に先土器確認用の試掘坑が入り、土坑上部で大きく削平している。長軸の推定長3.1m、短軸1.1m、深さは検出面であるソフトローム層上部から1.9mあり、本来は2m以上あったものと考えられ、坑底は武蔵野ローム層上部に達していた。顕著な肩部をもたぬ掘込が認められるが、両端は奥に掘り込まれ、縦断面は袋状を呈する。覆土は一般的な状況で、坑底に腐植土が薄くたまり、その上部を2次堆積のローム層が埋めている。層境に交叉する部分があり、南北両側からの埋め土の形成が窺われる。下部施設は確認されていない。

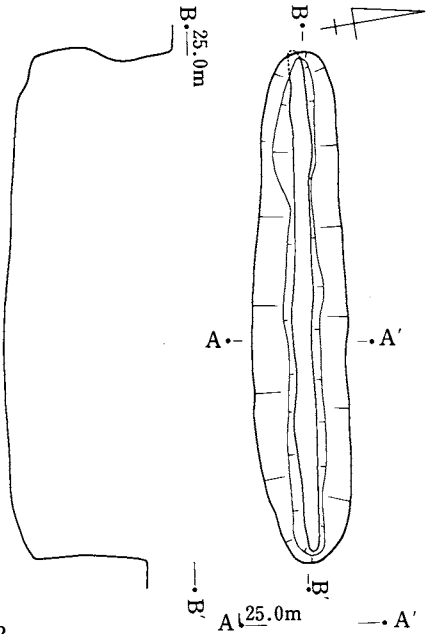
陥し穴16 第17地点に単独で存在した。長軸2.3m、短軸1.4mの隅丸長方形、あるいは小判型の平面形態をしている。深さは0.96mと浅く、陥し穴と分類するには難点があるかもしれないが、後に述べたように覆土形成のメカニズムに共通する部分があり、一応陥し穴に含めておいた。掘り方を見ると、上部は外方に開くように傾斜した状態に、下部は垂直に掘り込まれ、結果的には漏斗状の断面形態をとっている。覆土は、最下部に薄く坑底を被覆するように腐植土がたまり、その上部はローム質土が厚く堆積している。底面は平坦で、小判型の形状をしているが、何らの下部施設も確認されていない。

陥し穴17 第13地点に2基あるうちの1基である。長軸2m、短軸1.5mの小判型をしており、b類に属する。深さは1.9mあり、ほぼ垂直に掘り込まれている。側壁の一部に古い崩落の痕跡がある。覆土は14枚に細分されているが、その中位に腐植土層が厚さ0.1m程堆積しているところから、人為的な埋め戻しは半分位までしか行なわれなかったものと見られる。腐植土層より



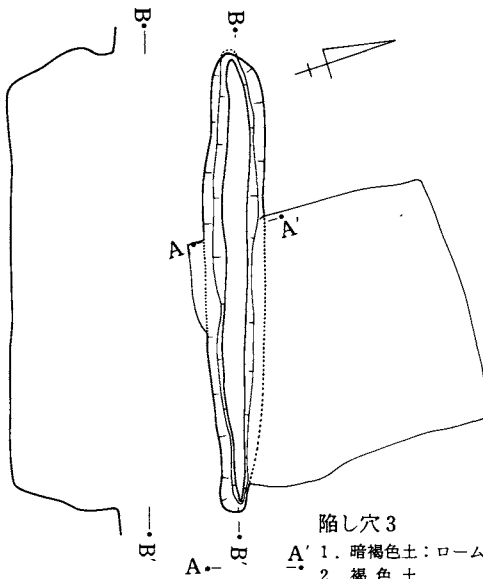
陥し穴 1

1. 暗褐色土：ローム粒少量含
2. 暗褐色土：ローム粒少量含
3. 明黄褐色土：ロームブロック含
4. 黄褐色土：黒色土主体
5. 黒褐色土



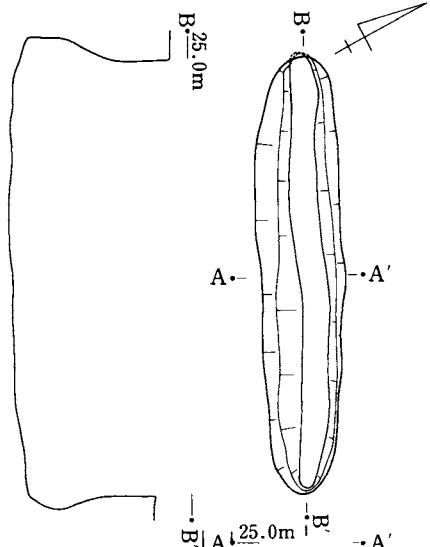
陥し穴 2

1. 暗褐色土：ロームブロック含
2. 黄褐色土：ロームブロック含
3. 暗黄褐色土：腐植土混在
4. 褐色土：ローム粒多量含
5. 黒褐色土：腐植土



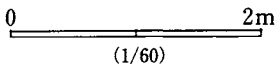
陥し穴 3

1. 暗褐色土：ローム粒含
2. 褐色土
3. 暗褐色土：ローム粒含
4. 黄褐色土：ロームブロック多量含
5. 黒褐色土：腐植土ローム粒含
6. 黒褐色土：腐植土

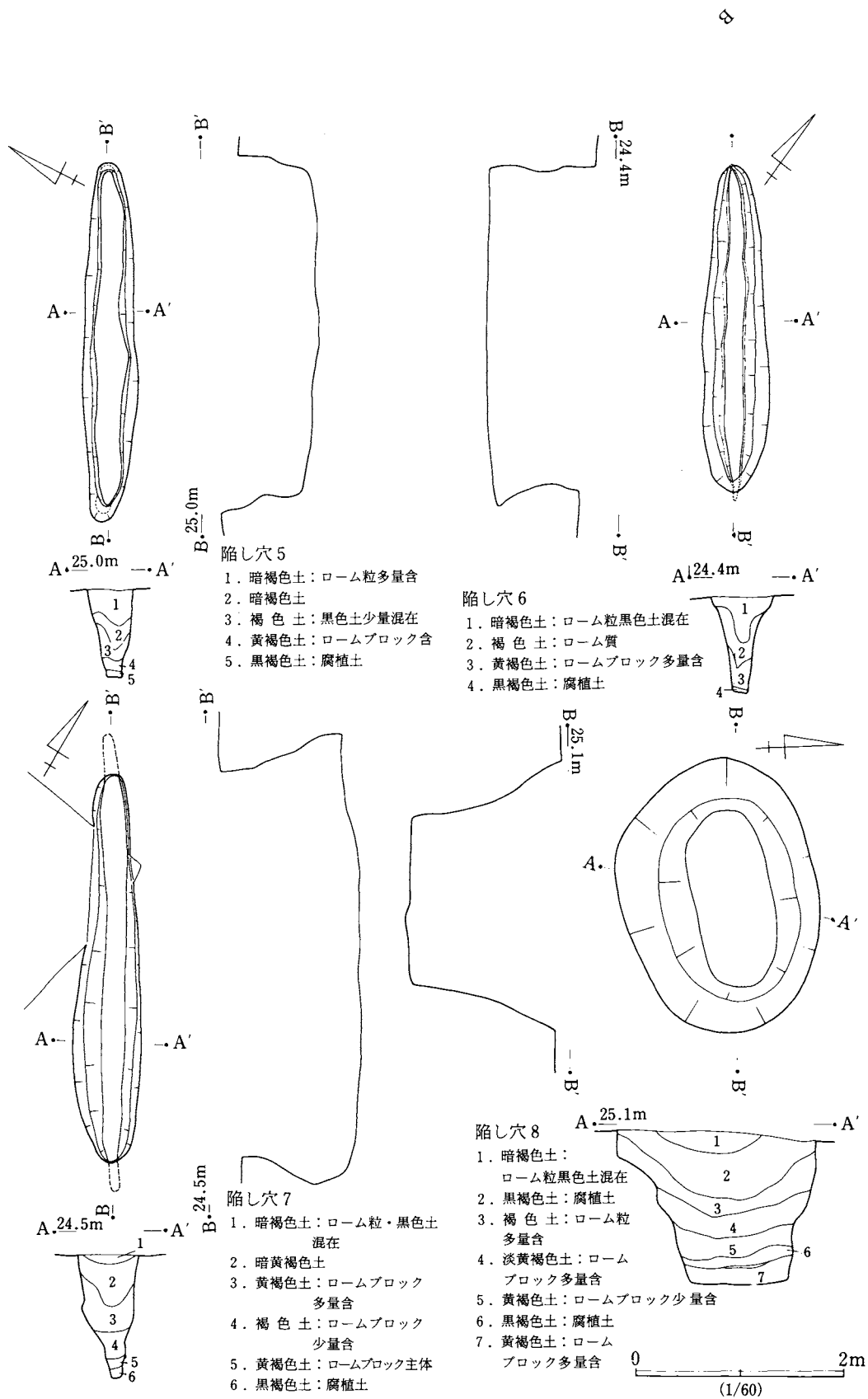


陥し穴 4

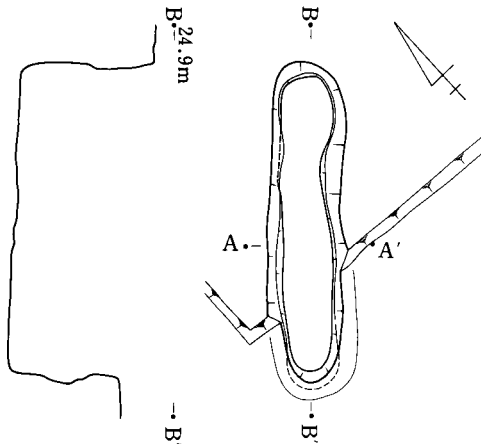
1. 暗褐色土：ロームブロック含
2. 褐色土：ローム粒多量含
3. 黄褐色土：ローム粒多量含
4. 暗黄褐色土：ロームブロック含
5. 黒褐色土：腐植土



第413図 陥し穴(1)

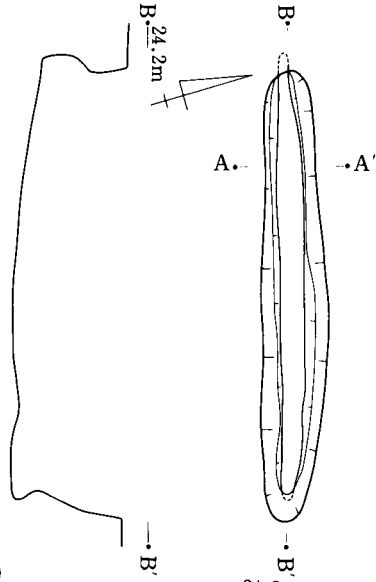
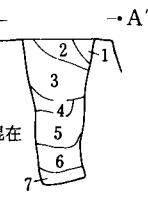


第414図 陥し穴(2)



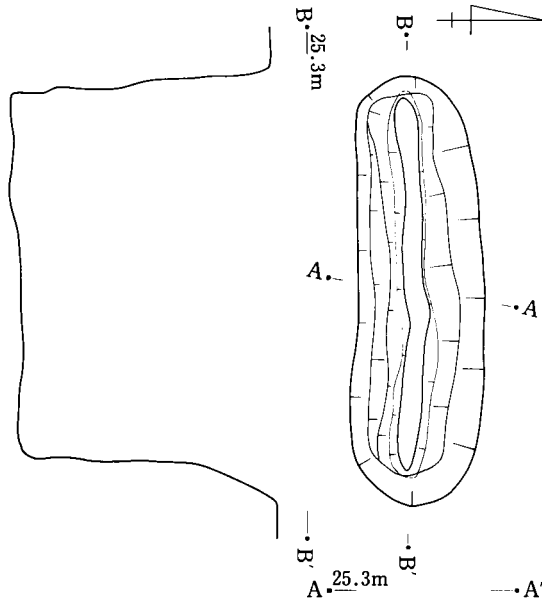
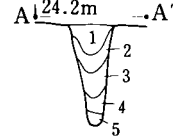
陥し穴9

1. 黄褐色土：軟質ローム多量含
2. 暗褐色土
3. 褐色土：軟質ローム堆積層
4. 暗褐色土：腐植土・軟質ローム混在
5. 褐色土：ATブロック状混入
6. 暗褐色土：炭化粒混入
7. 褐色土



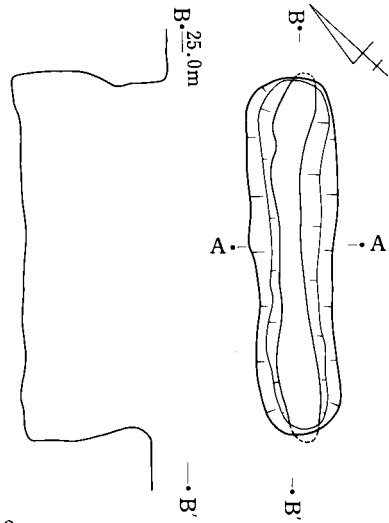
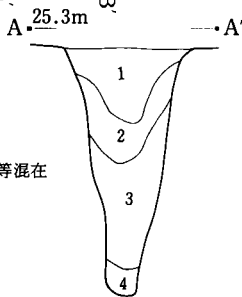
陥し穴10

1. 黒褐色土：腐植土
2. 暗褐色土：腐植土・ローム粒混在
3. 暗褐色土
4. 褐色土：軟質ローム堆積層
5. 黒色土：有機質多量含



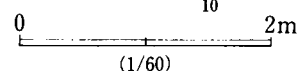
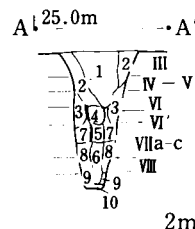
陥し穴11

1. 黒褐色土：ローム粒少量含
2. 茶褐色土：ローム粒少量含
3. 黄褐色土：ロームブロック含
4. 暗褐色土：腐植土・ローム粒同等混在

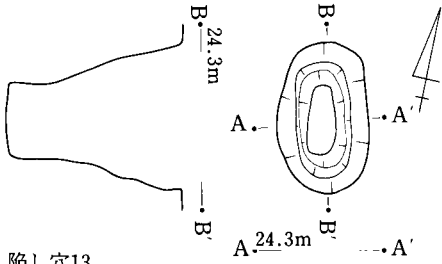


陥し穴12

1. 黒褐色土
2. 暗褐色土
3. 褐色土
4. 暗褐色土
5. 暗褐色土
6. 褐色土
7. 黄褐色土
8. 暗褐色土
9. 褐色土
10. 黒色土

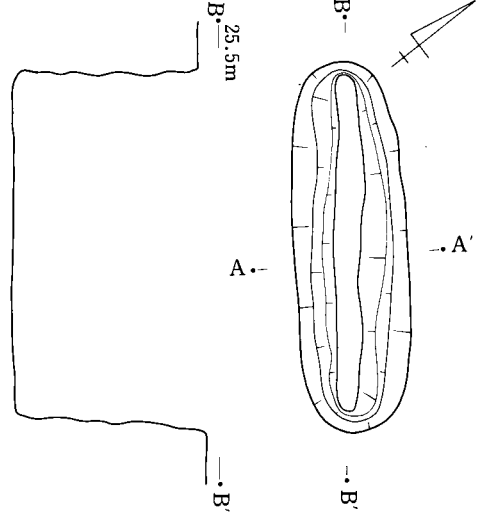


第415図 陥し穴(3)



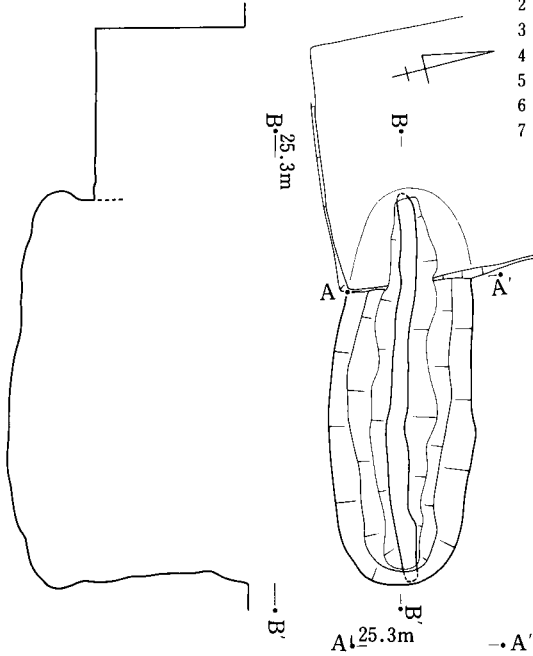
陥し穴13

1. 暗褐色土：ローム粒少量含
2. 褐色土：ローム粒・ロームブロック多量含
3. 暗褐色土：新期テフラ多量含
4. 褐色土：ローム粒多量に含
5. 黒色土：ローム粒少量含
6. 明褐色土：炭化粒微量含
7. 黒色土
8. 明褐色土
9. 暗黄褐色土
10. 明黄褐色土：軟質ローム堆積層



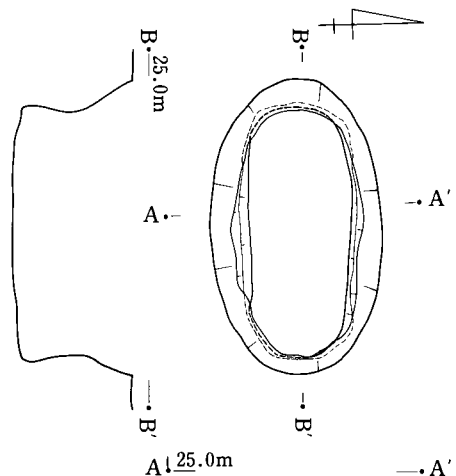
陥し穴14

1. 黒褐色土：ロームブロック少量含
2. 暗褐色土：ローム粒多量含
3. 褐色土：軟質ローム堆積層
4. 明黄褐色土：ロームブロック多量含
5. 黄褐色土：ロームブロック多量含
6. 暗褐色土：黒色土・ローム粒混在
7. 黒褐色土：黒色土・ローム粒混在



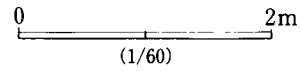
陥し穴15

1. 暗褐色土：ローム粒少量含
2. 暗褐色土
3. 黄褐色土：ロームブロック多量含
4. 黄褐色土：ロームブロック多量含
5. 明褐色土
6. 灰褐色土
7. 黒褐色土

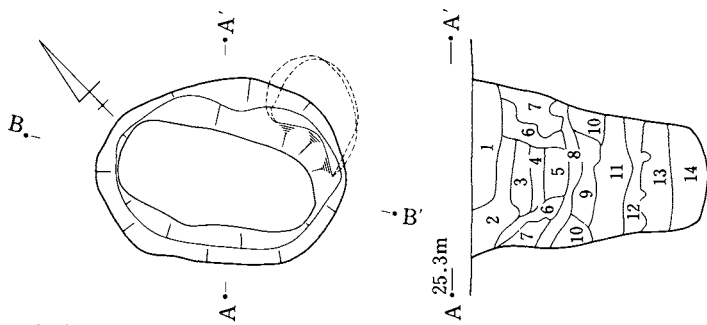


陥し穴16

1. 暗褐色土
2. 黄褐色土
3. 褐色土：有機質含

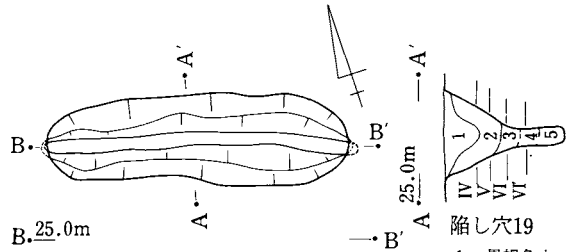
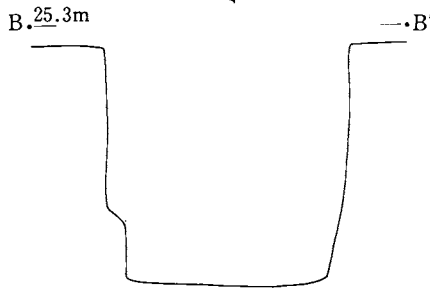


第416図 陥し穴(4)



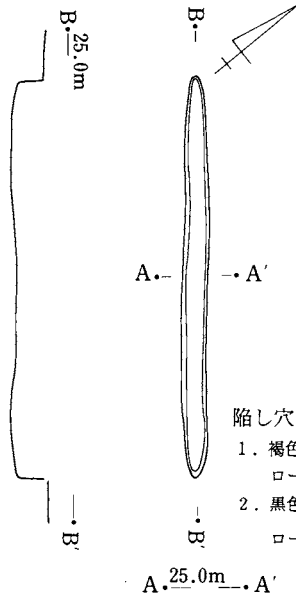
陥し穴17

- | | |
|---------|----------|
| 1. 暗褐色土 | 8. 黒色土 |
| 2. 黒褐色土 | 9. 褐色土 |
| 3. 暗褐色土 | 10. 黄褐色土 |
| 4. 黒褐色土 | 11. 黄褐色土 |
| 5. 暗褐色土 | 12. 黒色土 |
| 6. 褐色土 | 13. 暗褐色土 |
| 7. 黄褐色土 | 14. 褐色土 |



陥し穴19

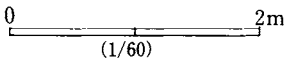
- | |
|---------|
| 1. 黒褐色土 |
| 2. 暗褐色土 |
| 3. 褐色土 |
| 4. 褐色土 |
| 5. 黒褐色土 |



陥し穴18

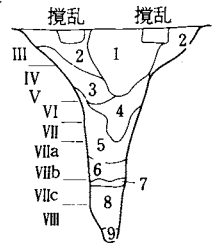
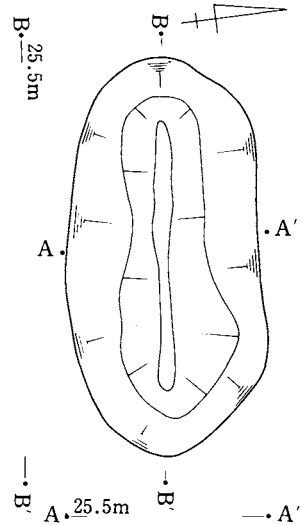
- | |
|----------|
| 1. 褐色土 : |
| ローム粒含 |
| 2. 黒色土 : |
| ロームブロック含 |

A. 25.0m . A'



陥し穴20

- | | |
|-----------|----------|
| 1. 黒褐色土 : | ローム粒少量含 |
| 2. 暗褐色土 : | ローム粒少量含 |
| 3. 褐色土 : | ローム粒・ローム |
| | ブロック含 |
| 4. 明褐色土 : | ロームブロック |
| | 多量含 |
| 5. 黄褐色土 | |
| 6. 暗褐色土 | |
| 7. 黒褐色土 : | 有機質土層 |
| 8. 暗褐色土 | |
| 9. 黒褐色土 : | 有機質土層 |



第417図 陥し穴(5)

上部の埋土は暗褐色土を主体としており、また、側壁に沿って三角堆積土も認められたところから徐々に埋没していった経過が窺われる。坑底に下部施設は確認されていない。

陥し穴18 第13地点の検出。長軸3.1m、短軸0.2mという極めて狭長な形態であり、しかも深さは0.25mしかなく、陥し穴と分類し得るかどうか問題であるが、形態的には陥し穴に近い。また、坑底に腐植土が薄く堆積し、その上部にローム層が再堆積しているところも陥し穴的であろう。おそらく、上部の多くを削平され、底面付近のみが遺存しているものと見られる。下部施設は確認されていない。

陥し穴19 第18地点から単独で検出された。長軸2.4m、短軸0.7m、深さ1.4mある。側壁は明瞭な肩部をもち、両端は僅かに奥へ掘り込まれている。従って、横断面は漏斗状、縦断面は袋状の形態となる。覆土は全般に暗褐色系統の土層で、あまりローム土を多く含んでいない。下部施設は確認されていない。

陥し穴20 第19地点の検出。平面形は、長軸3.1m、短軸1.5mと、比較的幅のある隅丸長方形としている。深さは1.6mあり、明瞭な肩部をもつ掘り方をしている。底面は極めて狭長で、西側が1段深く掘り込まれている。覆土は大別して3層に分けられる。坑底には腐植土が薄く堆積しているが、同趣の腐植土層は0.3mの厚さをもつ暗褐色土層を介在して、もう1枚認められる。この上部はローム質土が厚いが、最上層は自然堆積による黒褐色土となっている。下層部の2枚の黒褐色腐植土層の存在から、この陥し穴は最低でも2回に亘って機能していたと考えられる。下部施設は確認されていない。

第4節 歴史時代

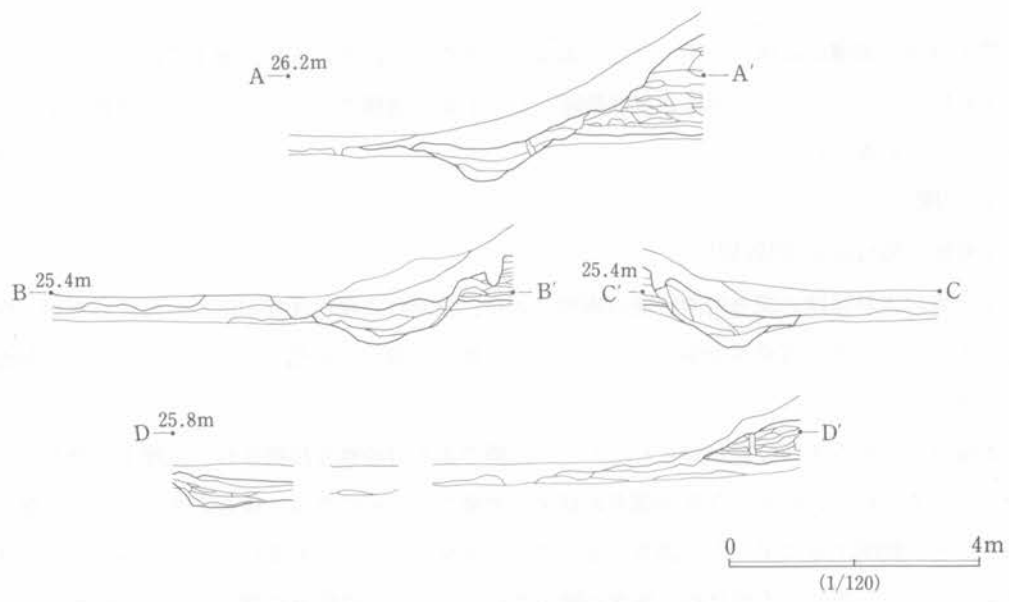
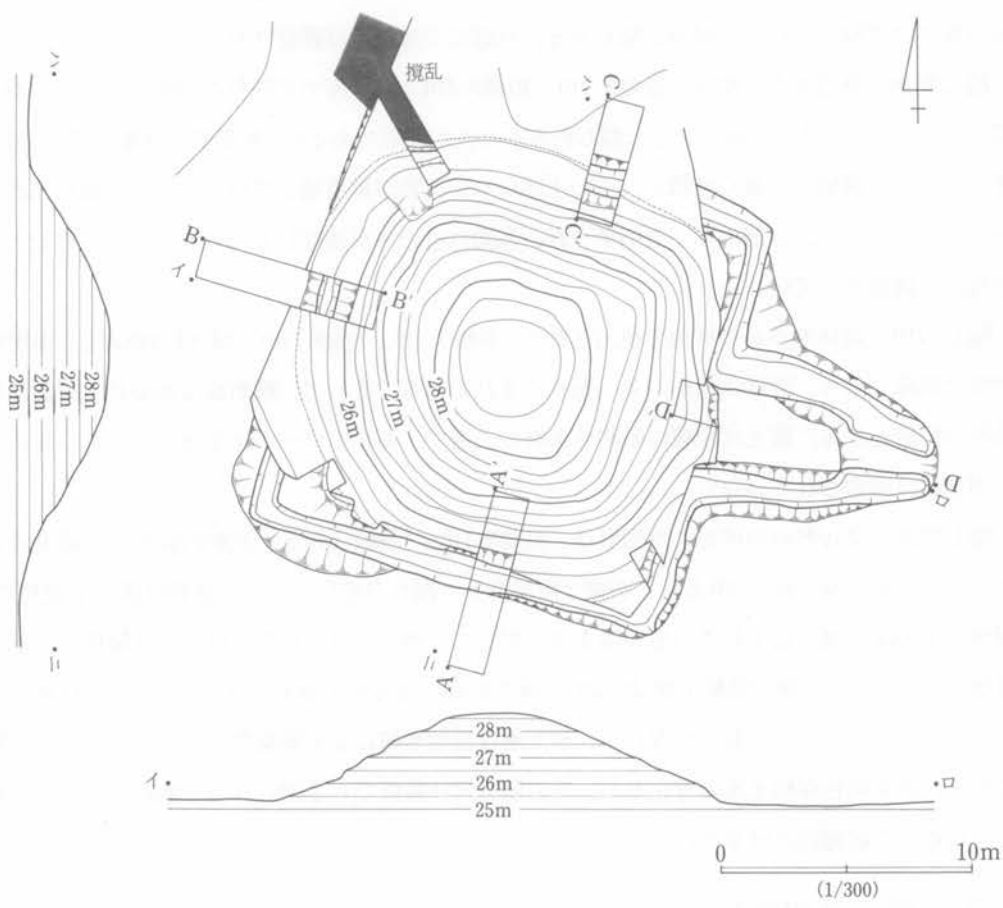
歴史時代の遺構には塚、土手、土坑、溝などがある。これらのうち、塚1基に就いては、大塚1号墳として、また、土手は武家屋敷跡として旧知の遺構であったが、今回の調査によってその一部が調査された。

A. 塚

1号塚（第418図、図版19）

1号塚は大塚遺跡の調査対象区域の南側にあり、公園内に現状保存が決められていたが、保存に際しては、その性格を究明し、あわせてその範囲の確定が必要であるため、トレンチ調査を実施した。

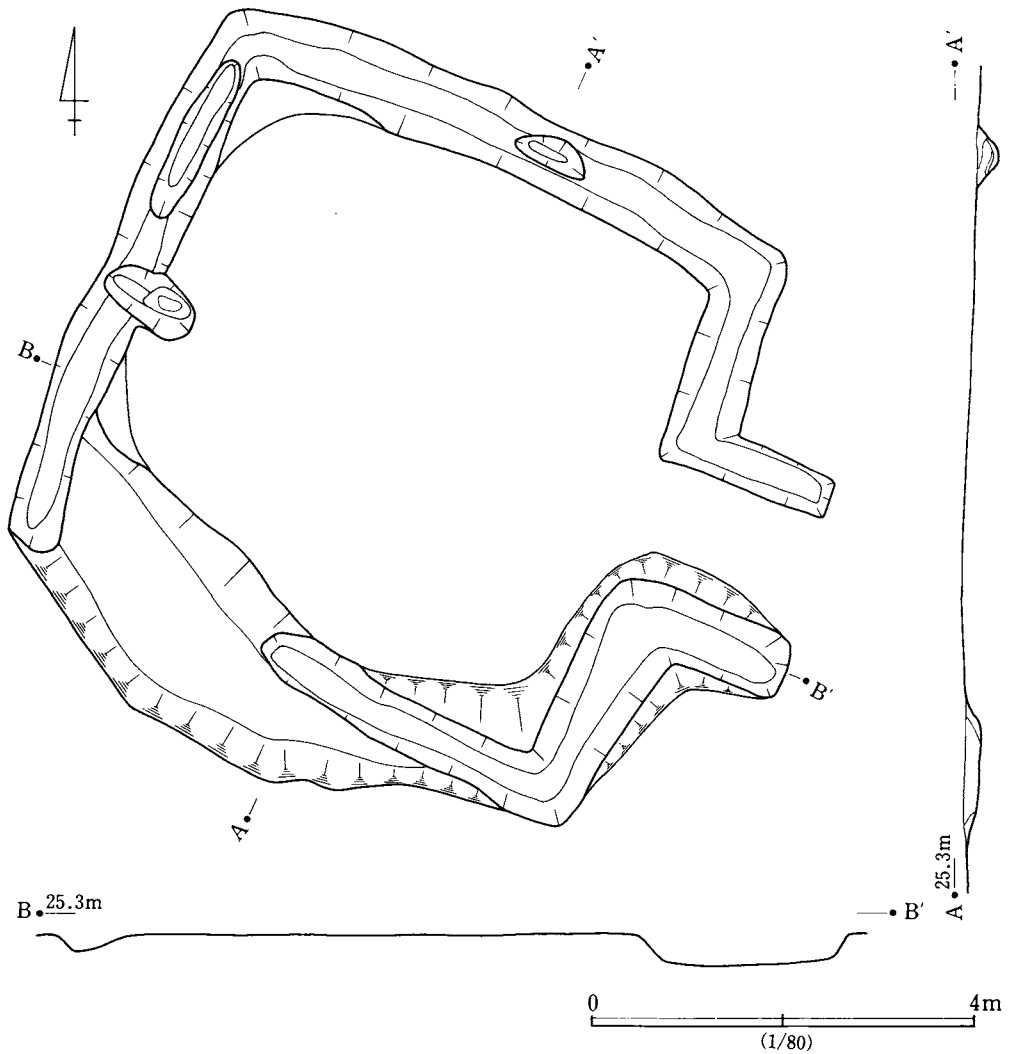
本塚は古くからその存在が知られており、古墳である可能性も指摘され、大塚1号墳という仮称が与えられていたが、今回の調査の結果、古墳である可能性はほぼ否定され、近世の塚であることが判明するに至った。調査は盛土部分の測量を主とし、裾部についてのみトレンチ調査を行ったが、東側に予期せぬ付属溝が検出されたため、この部分に就いてのみ平面的に掘り広げ、旧態の復原を行った。調査終了後は埋め戻しを行ったため、付属溝部分は観察できなく



第418図 1号塚の平・断面図

なっているが、現地に掲示板を設置し、これに全測図を加えることにより、見学者の便宜をはかった。

調査着手時に、塚は高さ3m程の円墳、あるいは方墳状の高まりを見せ、叢木の繁茂する状況であった(図版19)。トレンチは盛り土の裾部に中央、及び対角線上に8本を設定し、周溝の有無、盛り土の状態を観察したが、東側に張り出し部分をもつ羽子板状の周溝が予測されたため、南側から東側の2辺に就いては周溝部分の全容を露呈し、その構造を検討した。周溝は全掘していないが、東西12.5m、南北13.5mの方形の盛り土部分と、それを囲む羽子板状の周溝が確認された。周溝は幅が約1.7mあり、東側中央で外側に張り出すが、張り出し部分は長軸9.6mある。開口部の幅は0.8mと狭いが、開口部から3mのところでは2.5mに広がり、西側を周溝ではさまれた長さ6m程の平坦面が造られている。この部分が塚の正面ということになり、一



第419図 2号塚の平・断面図

種の参道状の遺構とも見られる。この張り出し部分の中軸線は、ほぼ塚の中心を通り、仮にそれを主軸とすれば、主軸方位はN-76°-Wである。

盛り土は、高さが2.94mあり南側は崩れているが、北側は比較的遺存が良く、明らかに截頂角錐状の旧態を窺うことができる。盛り土は、旧表土上に十数層に亘ってローム質土を多く混入する暗褐色を主として、積まれているが、各層はほぼ水平に堆積している。また、各層共に、あまりしまりがなく、古墳封土とは大分印象を異にしている。最上層には厚さ0.25mほど表土層がのり、その一部は下位の盛り土を削り取っているように見えるので、構築後に若干の変形を蒙っているところもあるかもしれない。周溝埋土も盛り土と近い堆積物から構成されていた。盛り土内、及び周溝内からは1点の遺物も検出されておらず、構築年代を決定することはできない。

2号塚 (第419図、図版17)

1号塚の北東75mの地点にある。第11地点の調査に際して検出されたものである。周溝のみしか遺存せず、積極的に塚と位置づけることはできないが、種々の点で1号塚と近似しており、盛り土を失っているものの、同一の性格を有する遺構と考え2号塚と命名した。

2号塚は、1号塚と全く同様のプランをもつ東側の一辺に張り出し部を設定する羽子板状の周溝である。周溝は外側で一辺6.4m、内側で5.2mとなるが、南辺はやや崩れており、本来の掘り方を留めていないようである。東側の周溝は中央付近で途切れ、外側に向かって開口部を形成している。開口部は1号塚より短かく、1.96mの長さしかもたず、また、1号塚のように、盛り土に接して参道状の平坦面を造り出しておらず、構造的に簡略化がすすんでいるようである。

周溝は浅く、0.36m程度の深さしかない。南側の周溝は西半が削平されているように見えるが、この部分は固く踏みしめられていた。また、西側の周溝中央には浅い長円形の掘り込みをもつピットがあり、この中央を、盛り土中央と張り出し部の中軸線を結ぶ主軸が通過している。主軸はN-67°-Wであり、1号塚と9°のずれが認められるものの、その差は10°未満であり、大体一致していると見てよいであろう。周溝埋土は暗褐色を主体としており黒色土粒の混入が顕著であった。周溝内からの遺物の検出はなく、構築の年代は不明である。

B. 土手 (第420図)

ちょうど大林遺跡を括るように土手が矩形にめぐっている(第420図)。その規模は東辺180m、西辺300m以上、南辺350m、北辺370mという大きさで、西方及び北方にもその延長部分が確認される。現在は各地で寸断されており、約½が遺存しているにすぎないが、明治時代の古地図をみると、新川の一支出谷を挟んで、その東西に土塁による区画が認められる(第420図)。支谷

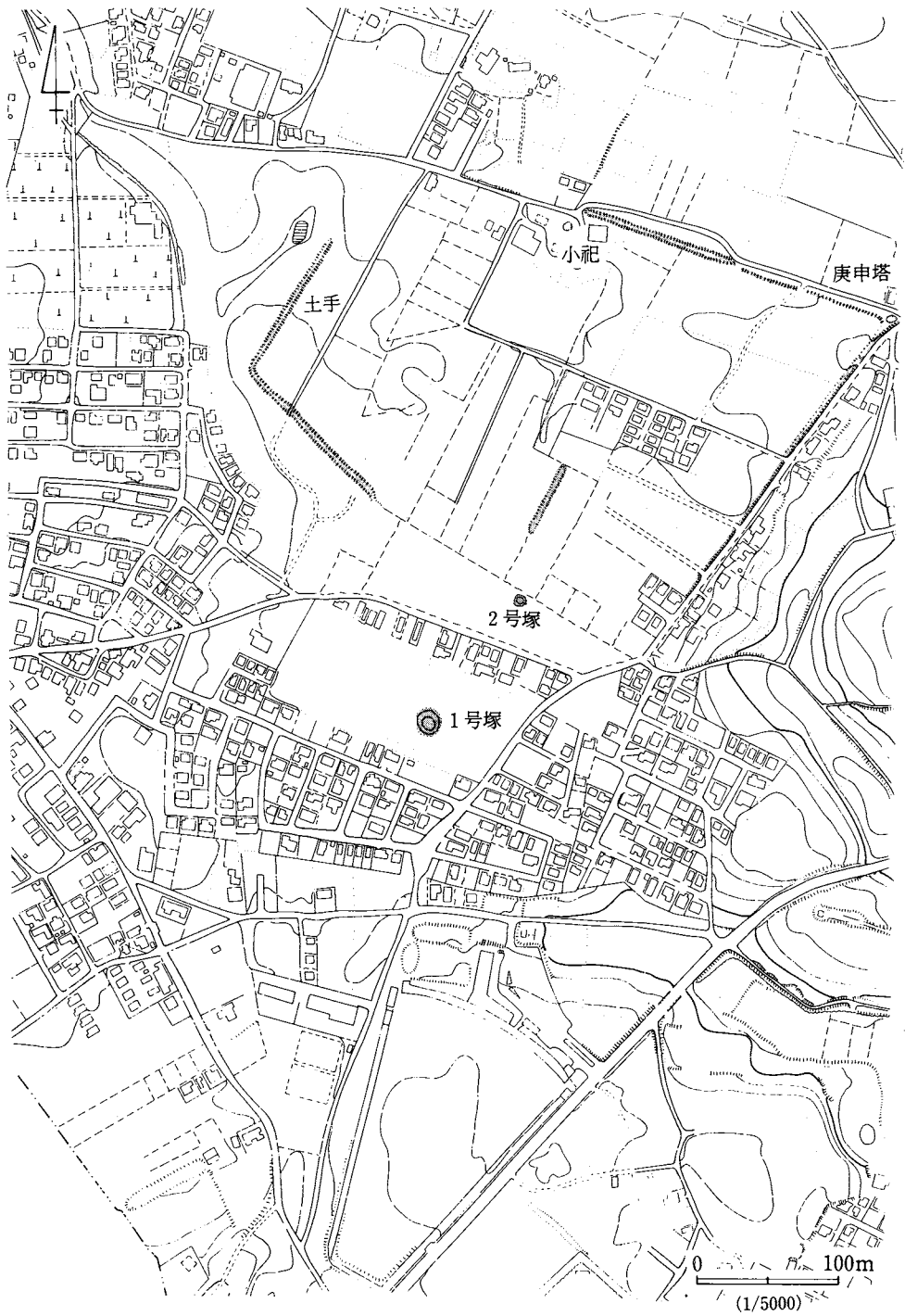
西側のものは、矩形の土手で、東方隅に出入部が開いているようである。一方、東側では南北2箇所の区画が合わさっている様子が窺われる。南側の区画の西辺を欠いているように図示されているが、実際にはこの部分にも土手が構築されているので、2箇の方形区画が南北に接続したものと見ることができよう。大林遺跡に遺存するのは、この南側の区画を構成する土手である。この南側の区画内にも部分的に土手が遺存しており、区画内部が更に細かい小区画に分かれていたことが看取される。

土手は最も遺存の良い部分では、幅が2m、高さが1m程ある。第6地点でこの土手の一部を切断して観察を行ったが、片側には土手に沿って径1.2m程の浅いピットが連続的に並存しており、もう片側にも底面に凹凸のある浅い溝が掘削されていることが判明した(第68図)。第16地点においてもピット列を伴う溝が土手に並走することが確認された(第78図)。これらのピットや溝を掘削した土を積んで土手が築かれたものと考えられるが、円形ピットについては柵様の上部構造の存在を暗示させるものである。この場合、柵列は土手の外側に位置することになる。

なお、土手の要所には塚や石塔が配置されている。すなわち、東北隅には文政十年(1827年)銘の庚甲塔が、北辺中央の北側区画との接点には小祠があり、更に南辺の内部区画の土手の接点には前記の2号塚が存在する。また、1号塚は土手による区画外にあるが、2号塚に接する内部区画線の延長軸上に位置しており、旧区画と無関係とは考えられない。

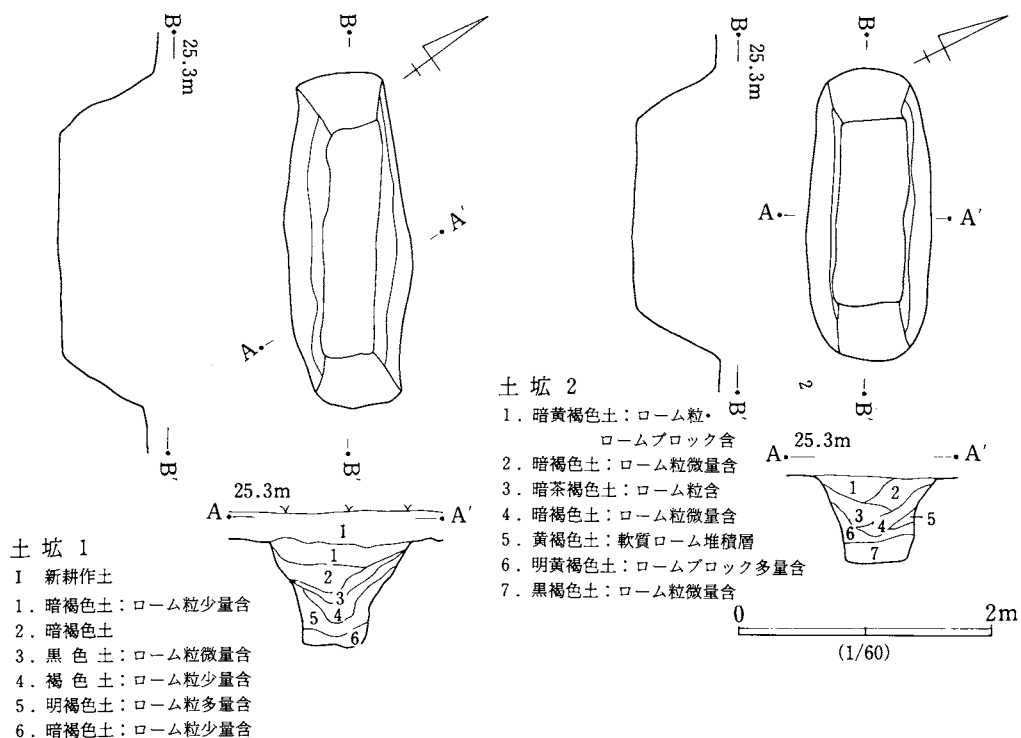
これらの土手は、佐倉藩下級藩士の武家屋敷の遺構とされているが、武家屋敷の存在を示す遺構・遺物を伴っておらず、これを考古学的に証明することはできなかった。なお、これらの土手を武家屋敷とする根拠は、文久三癸亥年二月の「原野開墾御趣意書」(二月十三日付)にあるとおり、江戸詰の佐倉引掲げに伴い、大佐倉村将門山、角来村埜谷、飯野村御林地の3ヶ所に屋敷割を行う旨の決定が挙げられる。井野村に就いては、同月十八日付の廻状中に、次男・三男以下に井野村新田の百姓受地を引き上げる旨の記述があり、将門山以下の3ヶ村と共に、主に少壯の面々の救済策として原野開墾がすすめられたことが窺われる。また、元治元甲子年七月廿九日付の「原野住居之面々勤方一件」によれば、城下より最も遠方にある井野村新田の藩士には、種々の特例が設けられていたことが知られる。

しかし、これらの文書中に具体的に土手の構築に就いて触れているものは無く、土手の一端に文政十年銘の石塔が含まれていることもあり、土手の全てが文久三年以降に構築されたものであるのか否かが問題となろう。将門山、埜谷、御林地の3ヶ所には土手の構築は無く、この点からも疑問が生じるが、上記3ヶ所が城下に近接した地域であったのに対して、井野村は前記の如く最も遠隔地に所在していることが、あるいは土手構築の大きな要因であったのかもしれない。この場合、この地が新田開発に伴う百姓受地であったことは、土手の構築が古い区画に沿う形態を惹起し、土手の一部に文政十年建立の庚甲塔を取り込むことになったのである



第420図 大林遺跡の歴史時代

う。従って、1号塚、2号塚もまた、既設の構築物として処遇された可能性を生じ、その構築を必らずしも文久三年以降と考える必要はない。



第421図 土坑

C. 土坑と溝 (第421図)

第3地点から溝に平行して土坑2基が検出されている。土坑1(第421図)は、長軸2.64m、短軸1.0m、深さ0.7mの隅丸長方形のプランをもち、壁はなだらかに立ち上がる。底面(1.8m×0.4m)はほぼ平坦で、上端と同一のプランとなる。土坑2は、長軸2.3m、短軸1.0m、深さ0.7m、底面の長軸1.5m、短軸0.5mで、土坑1と同一の形態を呈している。覆土の状況から近世の土坑と見られるが、性格は良く分からない。深さも一致しており、同一の機能を担ったものであろう。この他に、第1節で触れたように、数条の溝が発掘されているが、いずれも近世以降の溝であり、特筆すべきことはない。(田村)

第3章 大堀遺跡

第1節 先土器時代

はじめに

本遺跡における先土器時代遺物検出地点は、確認調査によって調査区東端と西端の2箇所から検出された。いずれも立川ローム層第2黒色帯（第VII層）より遺物が出土し、遺物の量も多く、南志津地区内では希少な資料である。しかし、2地点とも事業地範囲のぎりぎりの地点にあるため石器群を完掘できなかったことが残念であった。

A. 概要

調査区の西側には南志津地区ではあまり見られない深い支谷が入り込んでいるため、調査区全域がこの谷に向かって緩く傾斜をもつ。しかし第1地点は、傾斜がほとんど感じられない平坦部となって、さらに西側へ行くと急斜面となり谷に至っている。第2地点は第1地点に比べやや角度のきつい斜面となってそのまま緩く谷に至っている。2つの石器群の立地条件は多少の違いが見られるが、いずれも平坦部から斜面部へ移行する部分を選択していると言える。

本遺跡の基準層序は他の遺跡で確認されたものと同様である。

B. 遺構と遺物

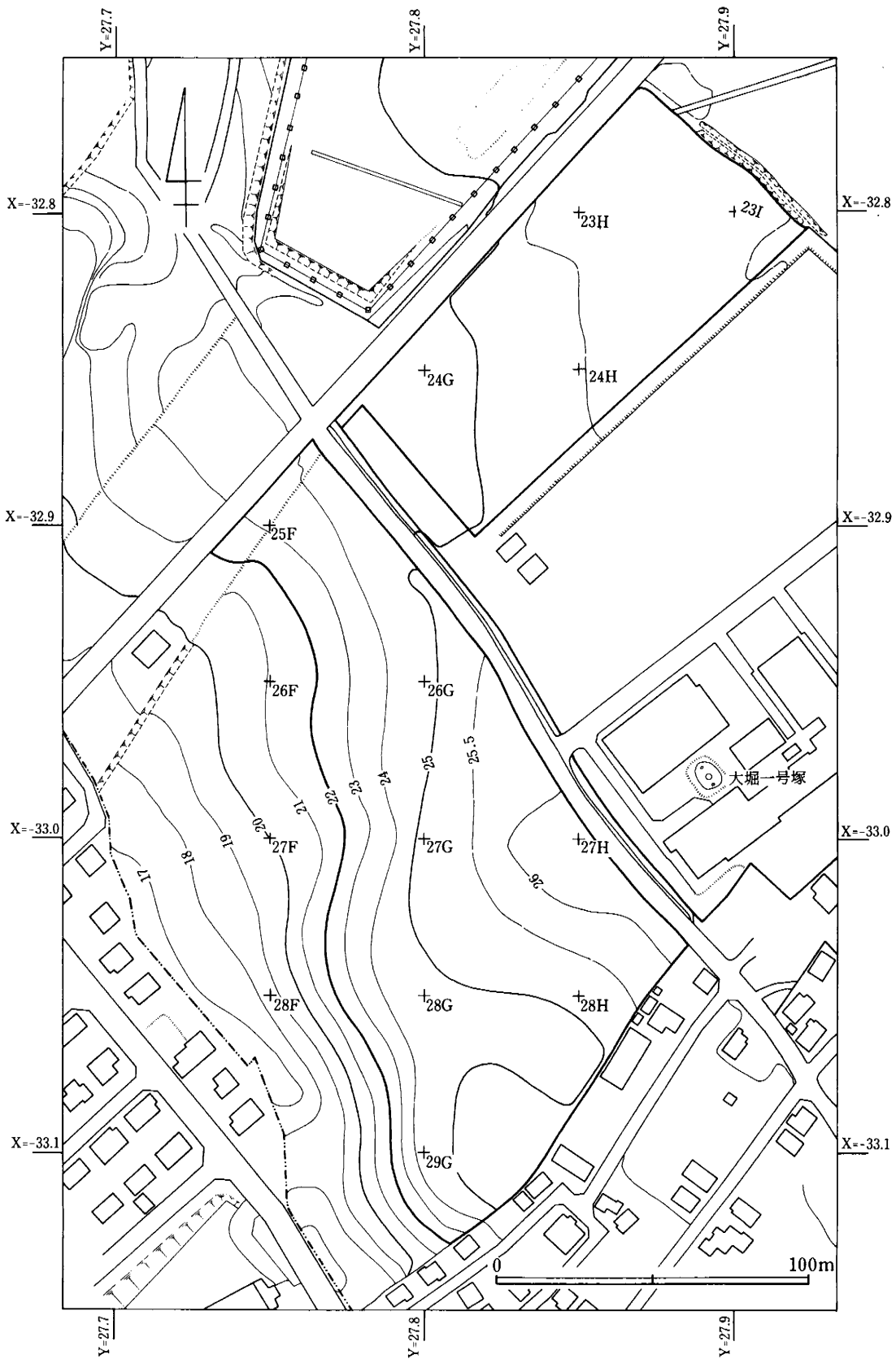
a) 第1地点（第425図、図版77）

本地点からは、2つのブロックが検出され、出土層位はいずれも第VI層～第VIIa層からであり、第VIIa層に集中している。そして、2つのブロック間は5m弱と近接しており1ユニットを構成するものと考えられる。東側の石器集中部をAブロック、西側の石器集中部をBブロックと呼称した。Aブロックは平面分布を見ると、28G-77、78グリッドに分布を置くもの（A1ブロック）と28G-78グリッド西側に分布を置くもの（A2ブロック）の2つに分けることができる。このブロックは東側の調査区外へ延びる可能性が大であり、また調査区外はすでに宅地となっており、本ブロックの攪乱が著しい部分があり、2つのブロックのつながりが不明瞭である。

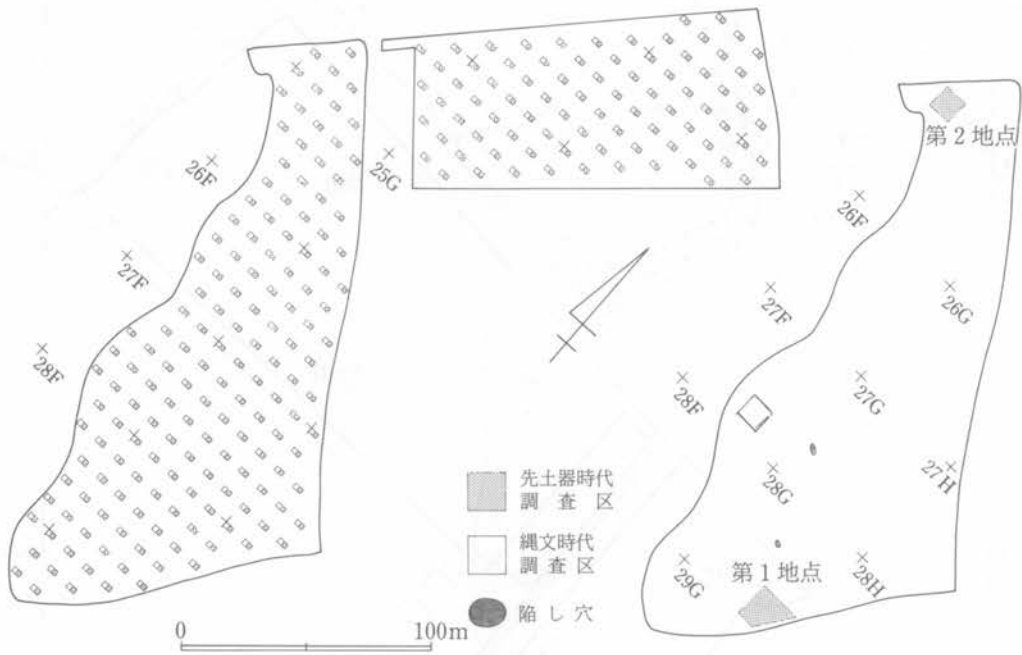
Aブロック（第426～第428図、図版78・79）

A1ブロック

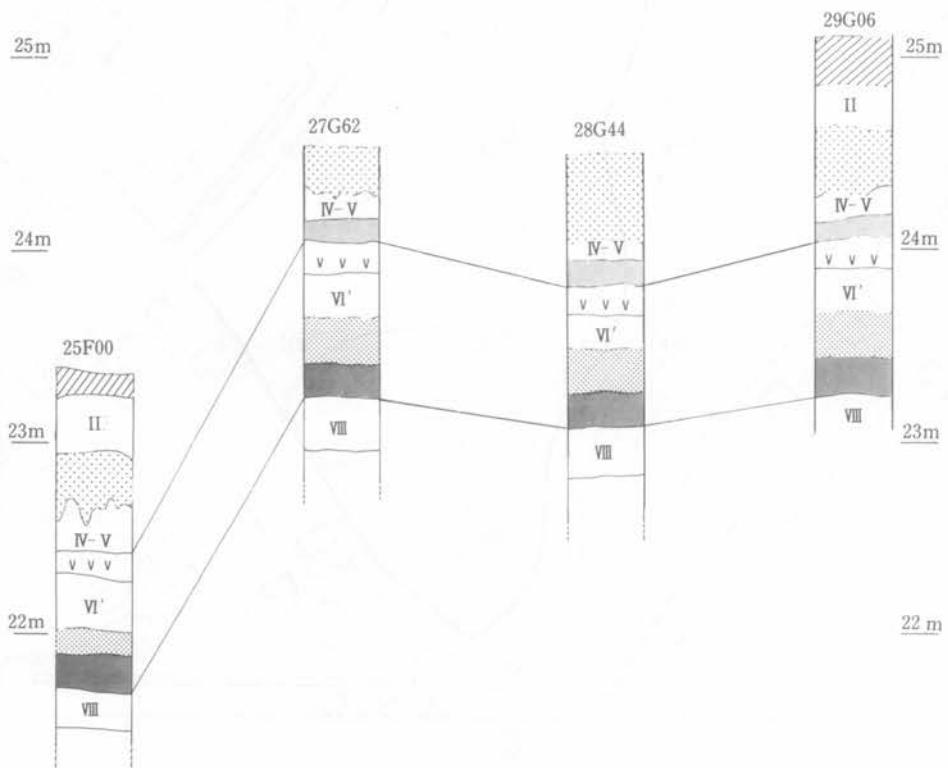
遺物分布 平面分布は南北軸9m、東西軸2m程の楕円形状の広がりをもつが、この範囲全域に均等的分布ではなく、北側にやや密集した部分があり、そして南側はやや散在しているような状況である。北側密集部は石斧をはじめとして製品が多く見られ、南側では、剥片が多く見



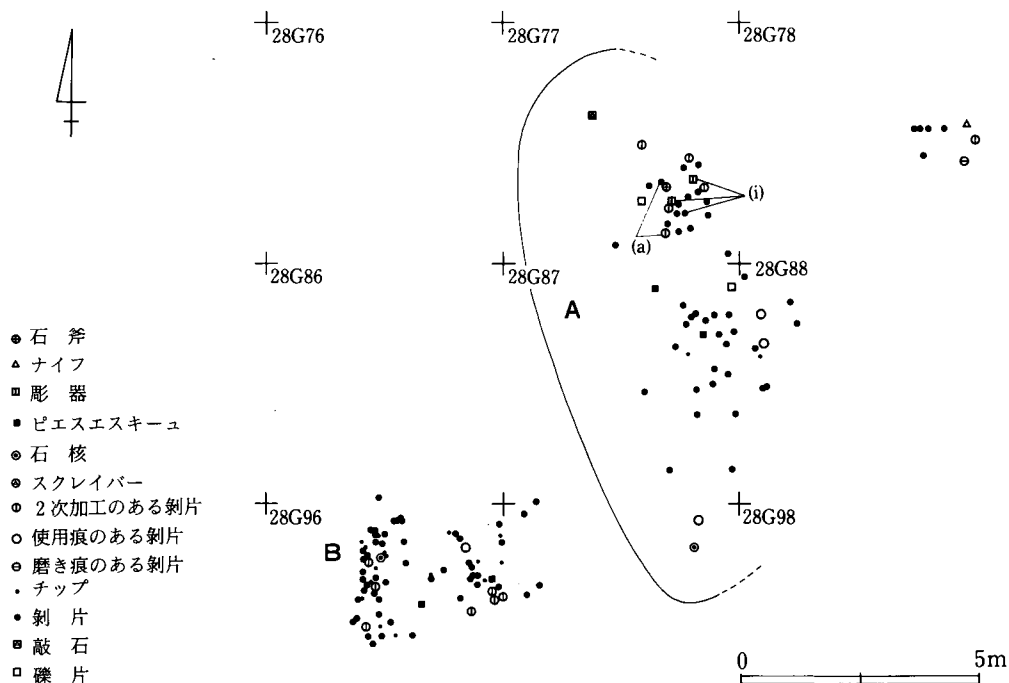
第422図 大壩遺跡地形図



第423図 大堀遺跡試掘坑配置図・遺構配置図



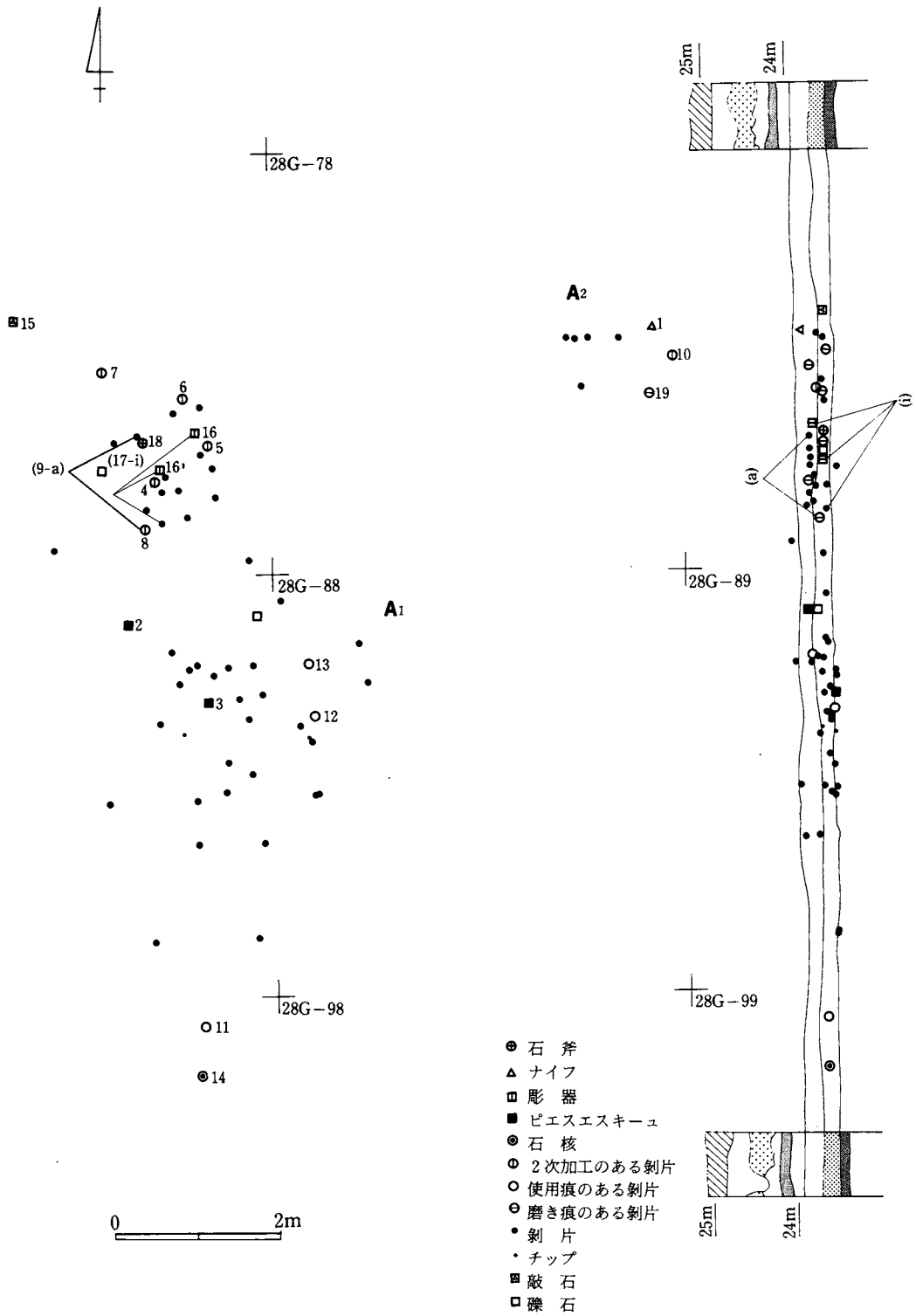
第424図 大堀遺跡の基本層序



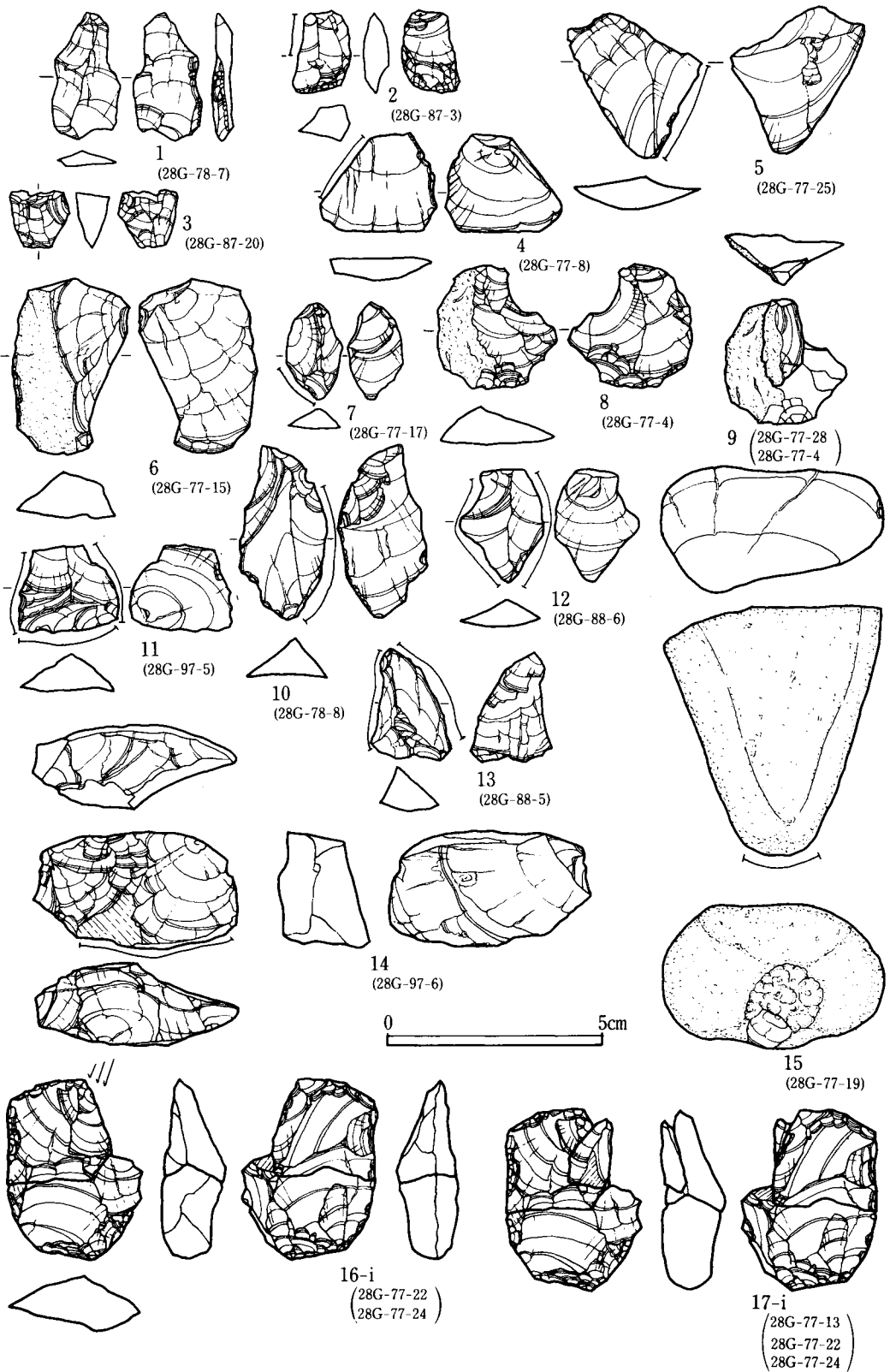
第425図 第1地点遺物分布図 (A, B)

第234表 第1地点Aブロック石器組成表

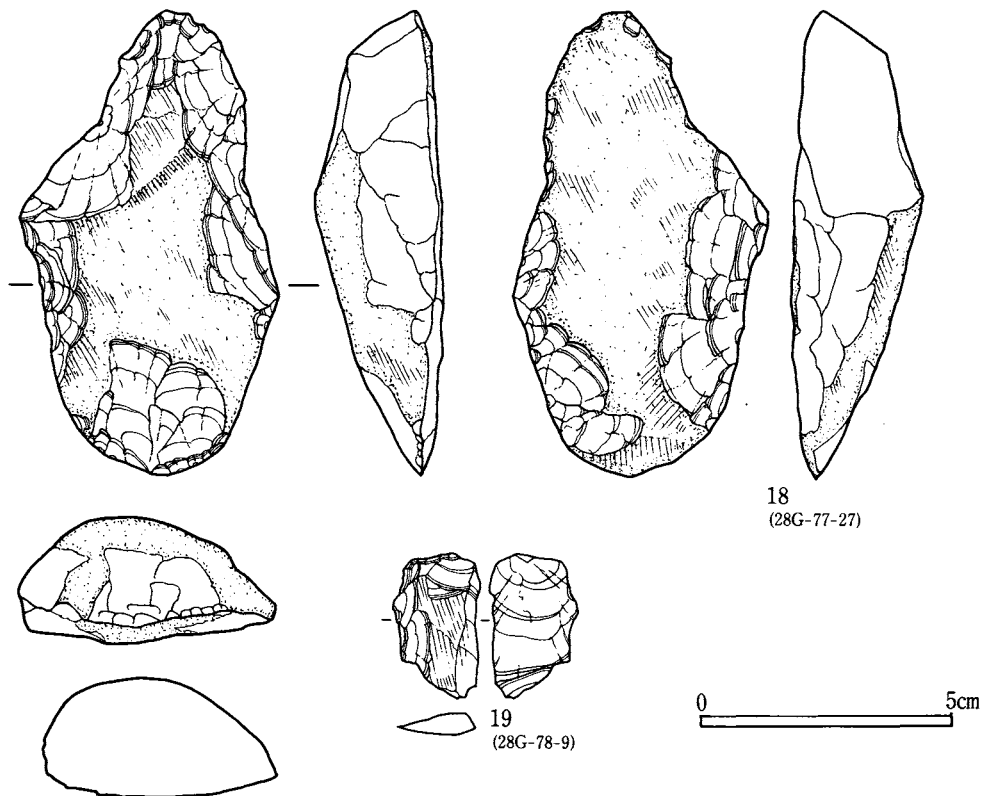
石 質	頁 岩	チャート	安山岩	ホルンフェルス	黒色緻密 質安山岩	凝灰岩	流紋岩	瑪 瑙	砂 岩	其他	合 計
ナイフ形石器	1										1
ピエスエスキュー	2										2
スクレイパー											
彫 器	1										1
礫 器											
敲 石						1					1
2次加工のある剥片	5							1			6
使用痕のある剥片	3										3
石 核	1										1
局部磨製石斧									1		1
剥 片	25	1	7	1	4	4	2	2	2	3	51
チップ	2										2
礫 (礫片)		1					1			1	3
合 計	40	2	7	1	4	5	3	3	3	4	72



第426図 第1地点遺物分布図 (A1・A2)



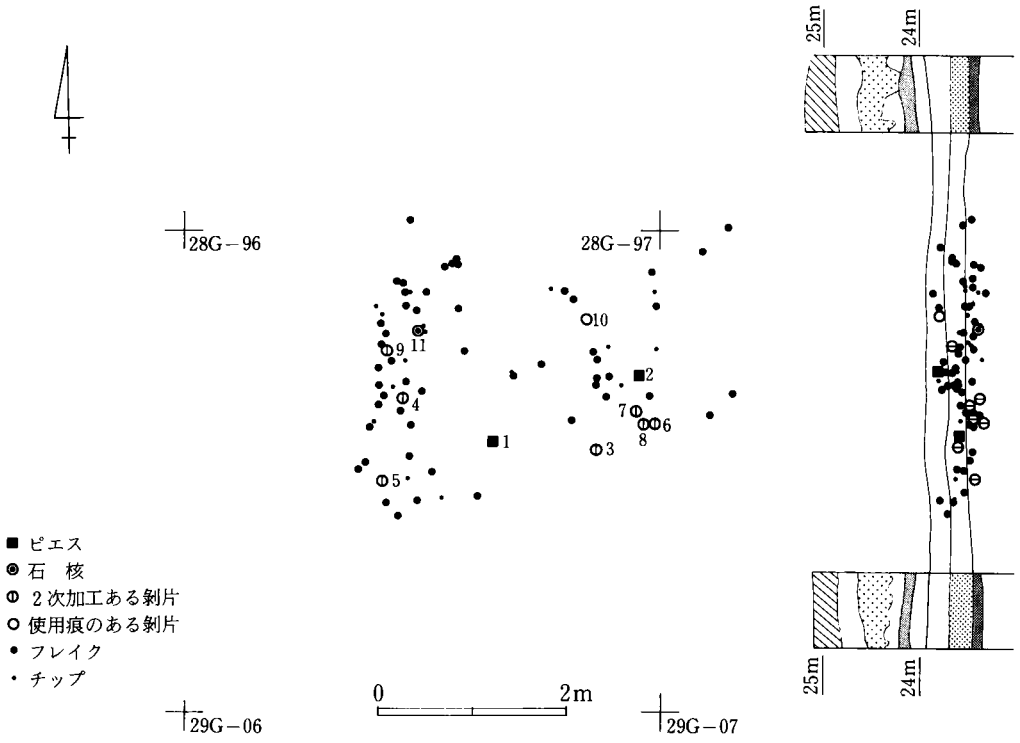
第427図 第1地点Aブロックの石器(1)



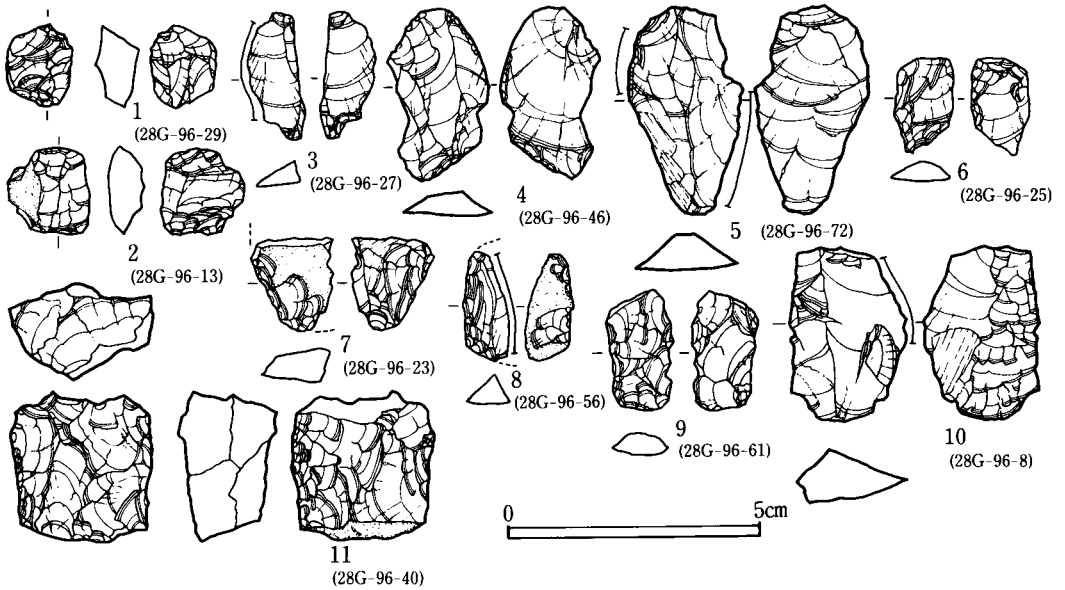
第428図 第1地点Aブロックの石器(2)

られる。垂直分布は、第VI'層上位からVII a層下位にかけて0.6m程の幅をもっているが、VII a層に集中しており、この層に属するものと言える。

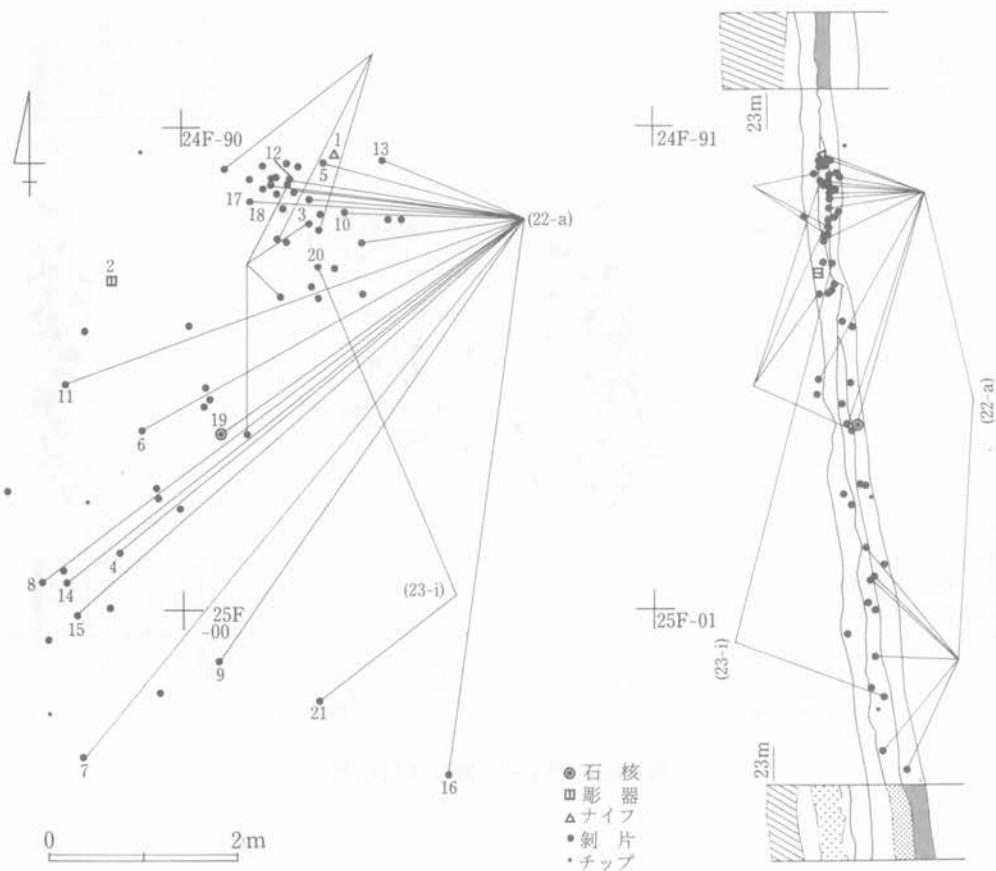
出土遺物 出土遺物総数64点を数え、その内訳は局部磨製石斧1、彫器1、ピエスエスキュー2、石核1、2次加工のある剥片6、使用痕のある剥片3、敲石1、剥片42、礫片2、チップ2と多様な石器組成が見られる。石器素材としては、頁岩、黒曜石、凝灰岩、砂岩が使われ、頁岩が主体を占める。石斧(18)は、ほぼ完存状態であるが基部が一部欠損している。楕円形状のやや偏平な礫を素材とし、その周縁を調整剥離により整形し、さらに研磨による調整が施されている。調整剥離は、ほぼ全周に及び、特に側縁部は両面より調整が施されている。刃部は、背面部に粗い調整剥離の後に微細な調整剥離を施し、そして裏面より顕著な研磨により片刃状に作り出されている。研磨による調整は、刃部が特に顕著であるが、礫面部の全面に施されている。彫器(16-i)は胴部より破損した資料である。縦長剥片を素材とし、両側片に微細な調整剥離が施され、刃部には3条の樋状剥離痕が見られる。なお、樋状剥片が1点接合した(17-i)。ピエスエスキュー(2、3)は非常に小型のものである。剥片は、石質に関係なく幅広の縦長剥片が主体となっている。石核(14)は縦長剥片を素材とし、打面を転移しなが



第429図 第1地点遺物分布図(B)



第430図 第1地点Bブロックの石器



第431図 第2地点遺物分布図

ら幅広い剥片を作取している。

A 2ブロック

遺物分布 径1 m程の範囲に納まる小規模の分布であり、遺物の量も少量である。しかし、先にも述べたようにこのブロックの東側の調査区域外へさら広がる可能性も充分考えられる。垂直分布はA 1ブロックと同様である。

出土遺物 出土遺物総数8点で、その内訳はナイフ形石器1、2次加工のある剥片1、磨き痕のある剥片1、剥片5である。ナイフ形石器(1)は、縦長剥片を素材として1側縁にのみ微細なブランディングをわずかに施したものである。磨き痕のある剥片(19)は、A 1ブロックの石斧と同じ石質であるが、同一母岩と認められず、他の石斧の破片と考えられ、このブロックに複数の石斧の存在が窺われる。

Bブロック (第429・第430図、図版78)

遺物分布 本ブロックは、28G-96、97グリッドに位置する。平面分布は、南北軸3 m、東西

第235表 第1地点Aブロック石器計測表

挿図番号	器種	石質	計測値				遺物番号	備考
			長さmm	幅mm	厚さmm	重さg		
427-1	ナイフ形石器	頁岩	28.9	14.1	3.6	1.4	28G-78-0007	
2	ピエスエスキーユ	頁岩	17.2	11.3	6.2	1.4	28G-87-0003	
3	ピエスエスキーユ	頁岩	13.4	12.1	6.6	1.4	28G-87-0020	
4	2次加工のある剥片	頁岩	21.0	26.6	5.5	3.4	28G-77-0008	
5	2次加工のある剥片	頁岩	34.3	26.1	7.1	4.8	28G-77-0025	
6	2次加工のある剥片	頁岩	39.0	23.4	15.2	12.1	28G-77-0015	
7	2次加工のある剥片	頁岩	21.6	13.2	4.2	1.1	28G-77-0017	
8a	2次加工のある剥片	瑪瑙	28.6	27.4	7.2	4.9	28G-77-0004	
9a	—	—	—	—	—	—	8a + 28G-77-0028	
10	2次加工のある剥片	頁岩	39.7	18.5	10.4	5.2	28G-78-0008	
11	使用痕のある剥片	頁岩	19.6	22.8	7.8	3.1	28G-97-0005	
12	使用痕のある剥片	頁岩	25.5	19.5	6.5	2.2	28G-88-0006	
13	使用痕のある剥片	頁岩	24.5	17.3	9.2	28.7	28G-88-0005	
14	石核	頁岩	25.2	46.6	16.9	26.0	28G-97-0006	
15	敲石	緑色凝灰岩	56.1	51.5	30.0	120.1	28G-77-0019	
16i	彫器	頁岩	44.3	31.2	13.0	13.7	28G-77-0013 +0024	
17i	—	—	—	—	—	—	16i + 28G-77-0002	
428-18	局部磨製石斧	緑色凝灰岩	90.0	49.0	24.9	113.8	28G-77-0027	
19	剥片	緑色凝灰岩	27.4	16.2	4.8	2.7	28G-78-0009	背面に研磨痕有り

第236表 第1地点Bブロック石器組成表

石質	頁岩	チャート	安山岩	ホルンフェルス	黒色緻密質安山岩	凝灰岩	流紋岩	瑪瑙	砂岩	その他	合計
ナイフ形石器											
ピエスエスキーユ	1		1								2
スクレイパー											
彫器											
礫器											
敲石											
2次加工のある剥片	2		3		1			1			7
使用痕のある剥片	1										1
石核			1								1
局部磨製石斧											
剥片	24		8		5			5			51
チップ	3				1			7			16
礫(礫片)											
合計	31		13		6			6		5	78

第237表 第1地点Bブロック石器計測表

挿図番号	器種	石質	計測値				遺物番号	備考
			長さmm	幅mm	厚さmm	重さg		
430-1	ピエスエスキュー	頁岩	15.0	12.1	8.6	1.7	28G-96-0029	
2	ピエスエスキュー	チャート	16.0	15.8	6.9	2.1	28G-96-0013	
3	2次加工のある剥片	流紋岩	24.5	9.3	4.4	1.0	28G-96-0027	
4	2次加工のある剥片	頁岩	33.5	17.7	5.6	3.0	28G-96-0046	
5	2次加工のある剥片	頁岩	40.8	22.0	6.7	5.5	28G-96-0072	
6	2次加工のある剥片	チャート	19.7	11.5	4.6	0.9	28G-96-0025	
7	2次加工のある剥片	チャート	18.0	15.7	6.2	2.0	28G-96-0023	
8	2次加工のある剥片	チャート	21.0	7.4	7.9	1.2	28G-96-0056	
9	2次加工のある剥片	安山岩	22.5	12.5	4.6	1.6	28G-96-0061	
10	使用痕のある剥片	頁岩	33.1	22.3	9.4	6.9	28G-96-0008	
11	石核	チャート	28.1	28.0	16.0	14.4	28G-96-0040	

第238表 第2地点石器組成表

石質	頁岩	チャート	安山岩	ホルンフェルス	黒色緻密質安山岩	凝灰岩	流紋岩	瑪瑙	砂岩	その他	合計
ナイフ形石器			1								1
ピエスエスキュー											
スクレイパー											
彫器	1										1
礫器											
敲石											
2次加工のある剥片											
使用痕のある剥片											
石核					1						1
局部磨製石斧											
剥片	4		2		46			5			57
チップ	1		1					1			3
礫(礫片)											
合計	6		4		47			6			63

軸4mの楕円形状の範囲に密集した分布が見られるが、グリッド中央部が遺物の分布が希薄となり、本ブロックが2つに分離しているようであるが、器種別、石質別の分布状況からは明確な分離ができないため、1ブロックとして捉えた。垂直分布状況は、第VI'層から第VIIc層にかけて0.8m程のやや幅の広い分布であるが、第VIIa層に主体を置くものと言える。

出土遺物 出土遺物総数78点で、石質は頁岩が主体となっている。その内訳はピエスエスキュー2、石核1、2次加工のある剥片7、使用痕のある剥片1、剥片53、チップ15であり、石器組成はAブロックに比べて貧弱である。また接合資料は皆無である。ピエスエスキュー(1、

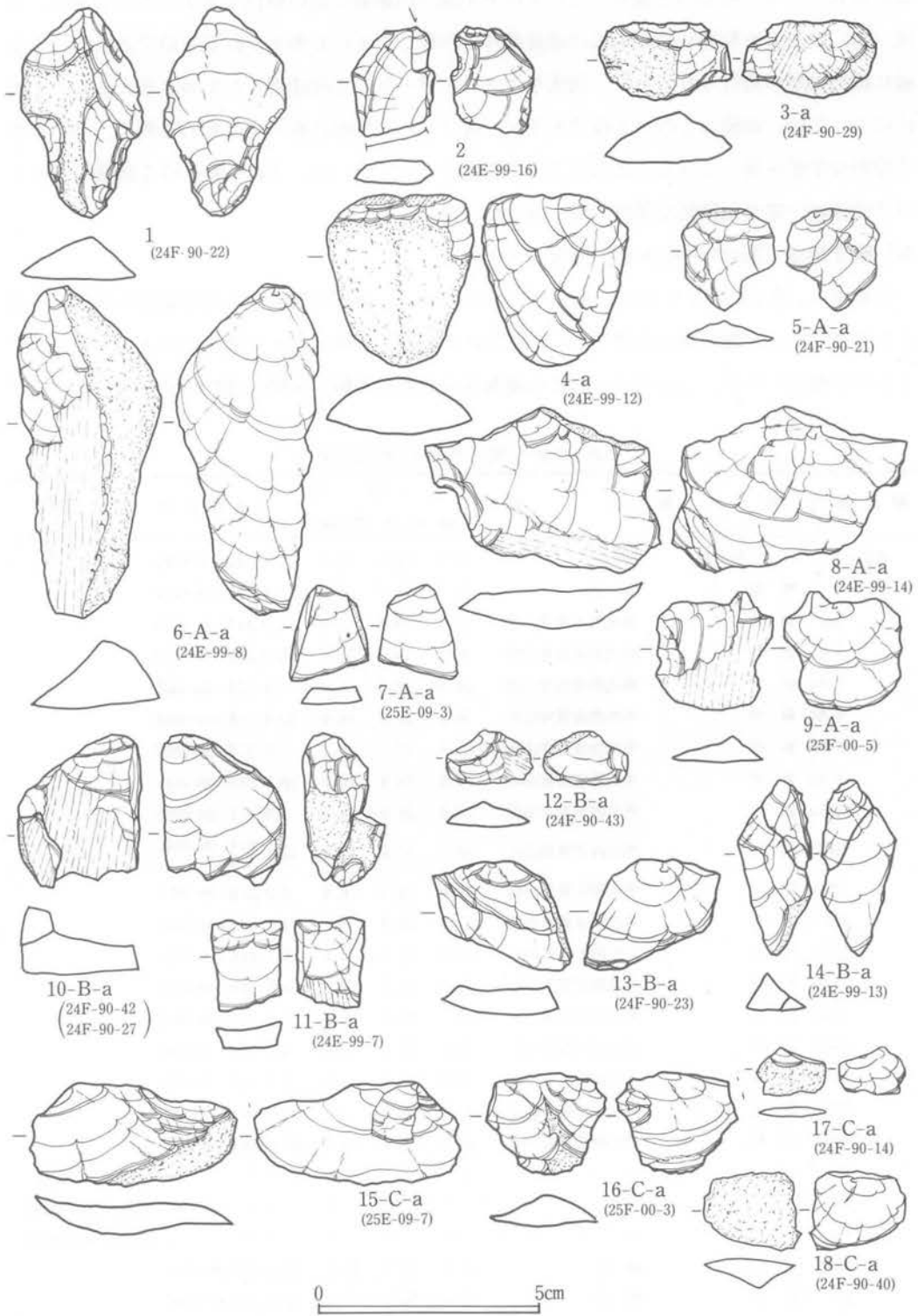
2) はAブロックのものと類似していずれも小型の円錐形に近い形状を呈するものである。石核(11)は打面を転移しつつ幅広の縦長剥片を作取したものと考えられるものであるが、1側縁に細部調整が施行されており、残核をスクレイパーとして再使用したものと考えられる。剥片については、縦長のものが主体であるが、Aブロック同様に画一的なもの無く、いわゆる不定形な形状を呈している。2次加工のある剥片(3~9)は、それら剥片の1側縁、もしくは2側縁の一部分に微細な調整剥離が施されている。

b) 第2地点(第431~第434図、図版79・80)

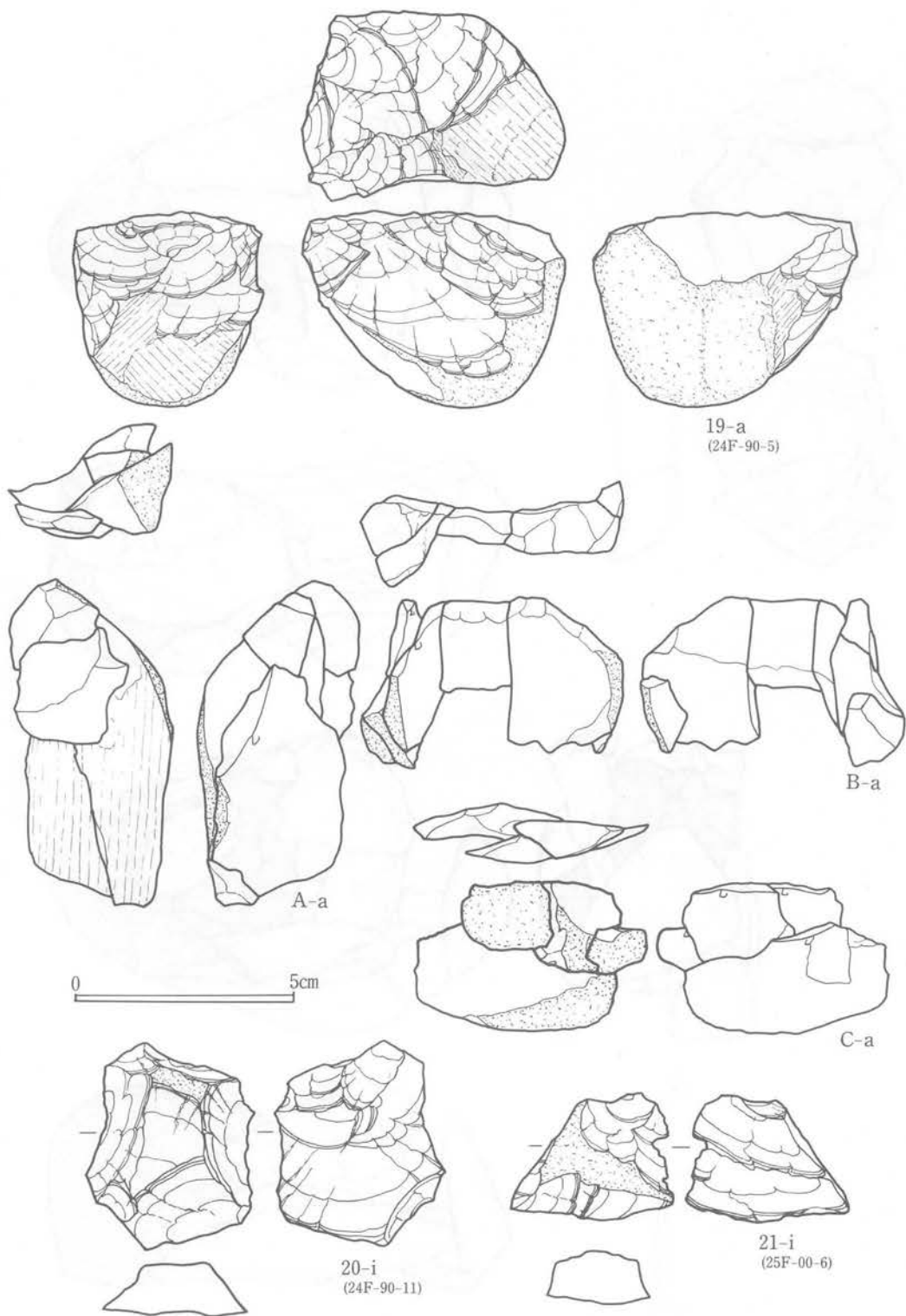
本地点は、第1地点より北西に200m程の地点にあり、調査対象範囲の北西端部の台地平坦部より南西に向かう緩斜面に位置する。本地点からは第VI'~VIIc層より遺物を出土するブロック1ヶ所を検出したが、このブロックより調査区外である北側、西側に遺物の分布はさらに広が

第239表 第2地点石器計測表

挿図番号	器種	石質	計測値				遺物番号	備考
			長さmm	幅mm	厚さmm	重さg		
432-1	ナイフ形石器	安山岩	47.5	26.0	10.0	11.4	24F-90-0022	
2	彫器	頁岩	21.2	18.0	8.0	3.1	24E-99-0016	
3a	剥片	黒色緻密質安山岩	17.0	29.0	9.6	4.9	24F-90-0029	
4a	剥片	黒色緻密質安山岩	39.0	33.0	12.3	15.9	24E-99-0012	
5Aa	剥片	黒色緻密質安山岩	22.8	20.2	5.0	2.2	24F-90-0021	
6Aa	剥片	黒色緻密質安山岩	74.8	31.5	18.4	32.0	24E-99-0008	
7Aa	剥片	黒色緻密質安山岩	20.5	17.5	5.2	1.6	25E-09-0003	
8Aa	剥片	黒色緻密質安山岩	34.5	50.0	10.7	20.7	24E-99-0014	
9Aa	剥片	黒色緻密質安山岩	26.0	26.0	5.3	3.6	25F-00-0005	
10Ba	剥片	黒色緻密質安山岩	31.4	27.0	20.0	13.1	24F-90-0027 +0047	
11Ba	剥片	黒色緻密質安山岩	20.0	16.0	6.4	2.9	24E-99-0007	
12Ba	剥片	黒色緻密質安山岩	12.0	19.8	5.4	1.4	24F-90-0043	
13Ba	剥片	黒色緻密質安山岩	22.5	26.0	6.1	5.1	24F-90-0023	
14Ba	剥片	黒色緻密質安山岩	39.0	16.2	9.1	4.6	24E-99-0013	
15Ca	剥片	黒色緻密質安山岩	22.5	46.0	7.5	7.8	25E-09-0007	
16Ca	剥片	黒色緻密質安山岩	22.8	26.0	8.5	4.5	25F-00-0003	
17Ca	剥片	黒色緻密質安山岩	11.0	15.0	2.0	0.4	24F-90-0014	
18Ca	剥片	黒色緻密質安山岩	17.8	20.8	5.7	1.9	24F-90-0040	
433-19a	石核	黒色緻密質安山岩	44.5	59.0	44.0	144.0	24F-90-0005	
Aa	—	—	—	—	—	—	—	5Aa~9Aa接合
Ba	—	—	—	—	—	—	—	10Ba~14Ba接合
Ca	—	—	—	—	—	—	—	15Ca~18Ca接合
20i	剥片	砂岩	47.0	36.7	14.2	22.9	24F-90-0011	
21i	剥片	砂岩	27.6	36.1	13.0	12.0	25E-00-0006	
434-22a	—	—	—	—	—	—	—	Aa+Ba+Ca
23i	—	—	—	—	—	—	—	20i+21i



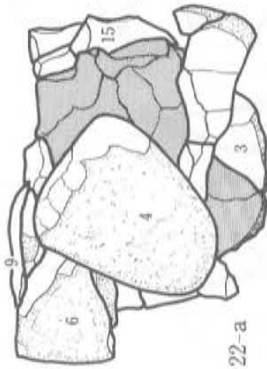
第432図 第2地点の石器(1)



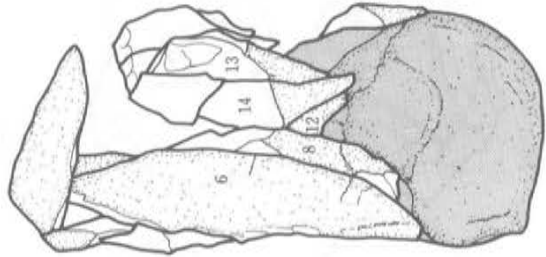
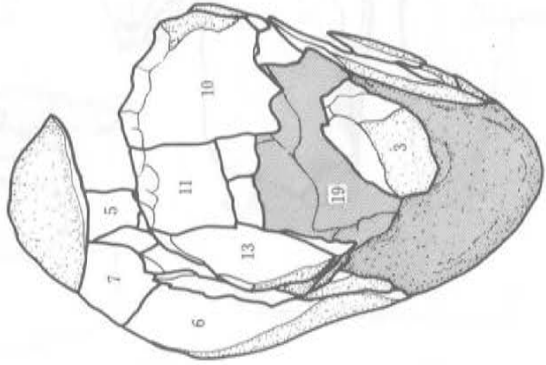
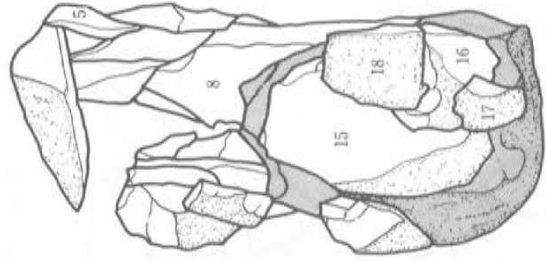
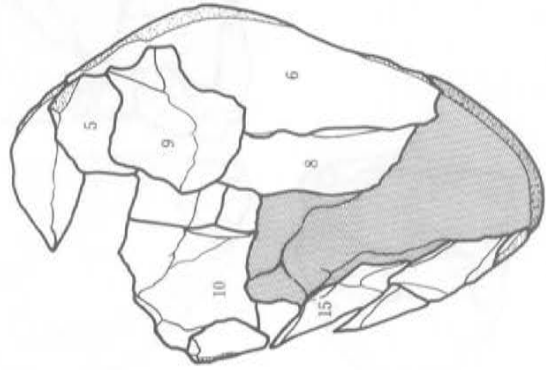
第433図 第2地点の石器(2)



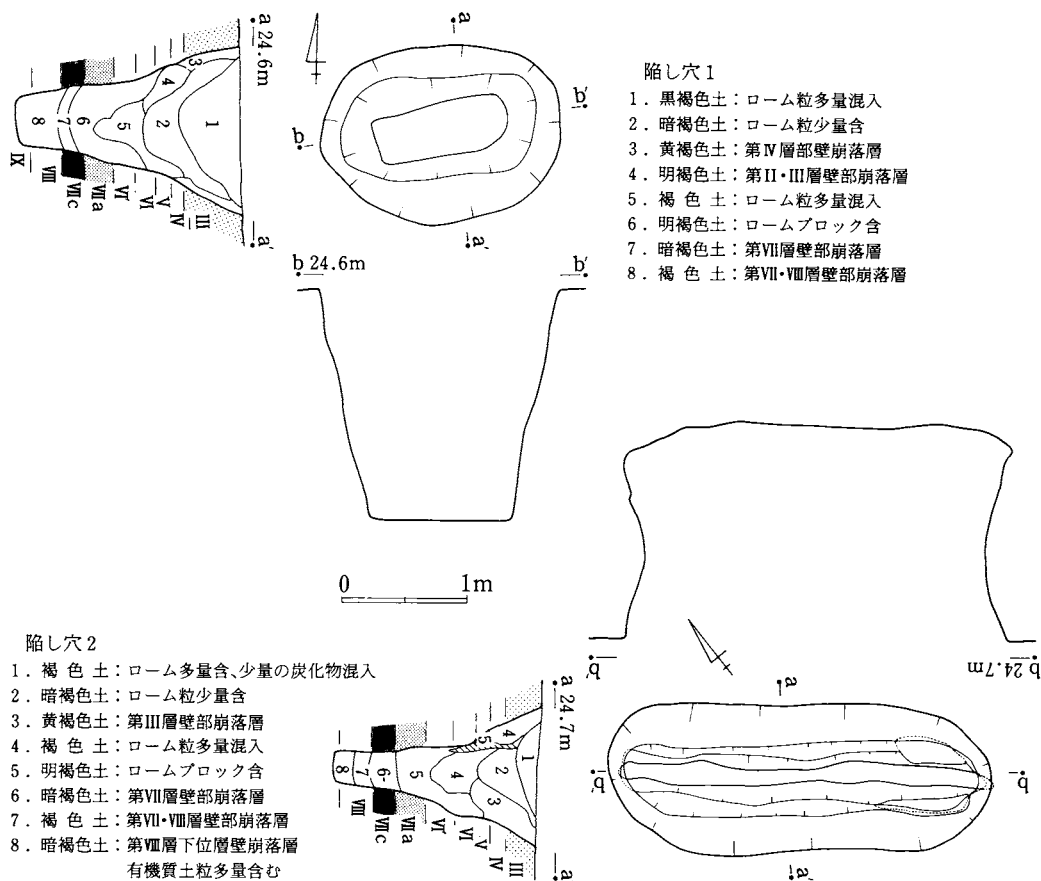
23-i



22-a



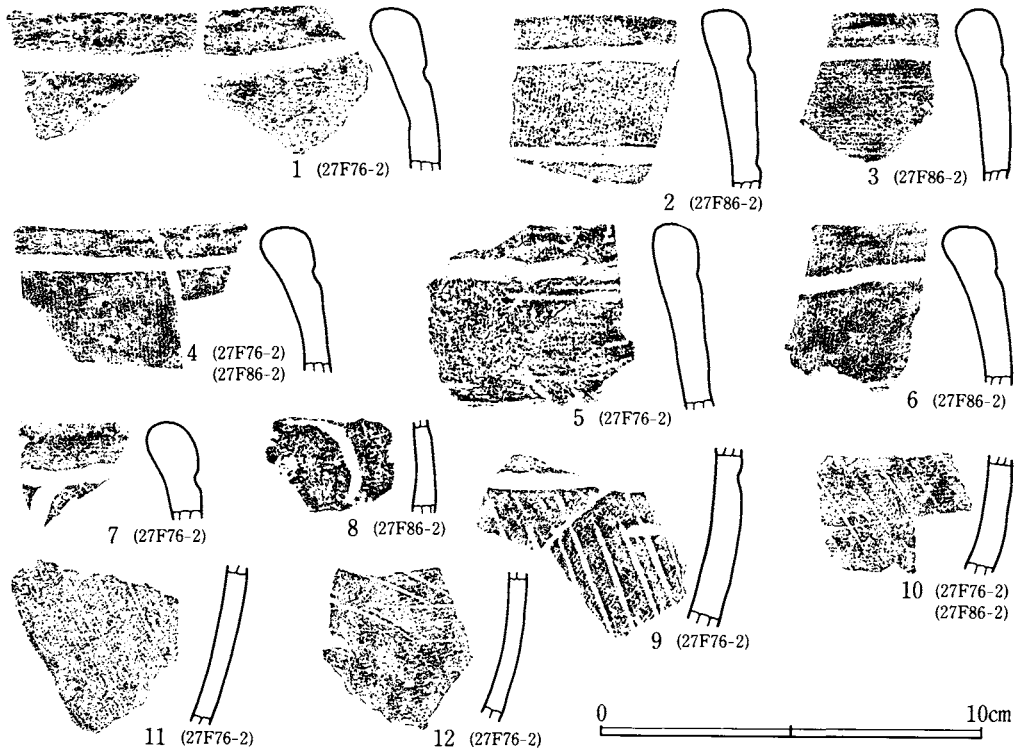
第134図 第2地点の石器(3)



第435図 陥し穴

るものと思われる(調査中、遺物の出土状況は、さら北側に広がる傾向にあった)。また傾斜地であることから多くの遺物が原位置を保った可能性が低く、本ブロックの平面分布状況は充分なものと言えない。土層についても平坦地で確認されたものと比べ不明瞭な部分が見られ、さらに掘削や樹木の根による攪乱が土中深くまで及んでいた。

遺物分布 24E-99、24F-90グリッドに位置し、南北軸6m、東西軸3m程の楕円形状の平面分布状況を呈している。しかし遺物の集中分布状況は、ブロック北側の径2m程の範囲に集中中部が見られ、南側は散在している状況である。この分布状況は、土層断面図と照らし合わせるとブロック北側は傾斜角度がごく緩やかであるのに対して、北側は傾斜角度がきつくなっており、このために南側に散在する遺物は、本来北側集中部周囲に在ったものが流れ込んだものと考えられる。よって本来のブロックの分布範囲は北側の集中部もしくはさらにその北側に在ったものと推定できる。また、本ブロック出土遺物の90%近くが、黒色緻密質安山岩製で同一母岩である。垂直分布は、第VI'~VIIc層より遺物の出土が見られ、北側集中部では、第VIIa層



第436図 縄文土器

下位に集中が見られる。

出土遺物 出土遺物総数63点を数え、その内訳はナイフ形石器1、彫器1、石核1、剥片54、チップ3である。ナイフ形石器(1)は砂岩質の石材製の、背面に礫の自然面を残す縦長剥片を素材とし、背面の基部両側縁に角度の浅いブランディングを施し、さらに裏面に微細な調整剥離を施し打瘤削除等の基部調整を行っている。彫器(2)は横長剥片を素材とし、調整剥離は施されず、1条の樋状剥離により刃部を作り出している。また鋭利な1側縁に刃こぼれ痕が見られる。石核(19-a)は17点の剥片が接合し(22-a)、ほぼ原石の形状を知るまで復元できた。原石は、拳より一回り大きい黒色緻密質安山岩の厚味のある楕円形状の礫である。剥離された剥片をみると、縦長のもの、横長のものの比がほぼ同様であり、縦長のもでも幅広のものが多く、横長もしくは幅広の縦長剥片の作取を目的とした感が強く感じられる。剥片剥離に際しては、打面の作りだし調整、打面調整が頻繁に行われたと見られる。

第2節 縄文時代

1. はじめに

本遺跡から検出された縄文時代の遺構・遺物は希薄であり、27F-86グリッド周辺より後期の土器の包蔵層が検出され、28G-44、27G-61グリッドから1基ずつ時期は不明であるが、

陥し穴状土坑が検出されたのみである。

2. 遺構と出土遺物

a. 陥し穴状土坑（第435図、図版76・77）

2基の陥し穴状土坑は、規模的に相違がみられるが、長軸を東西方向にもちこの地点の傾斜方向とほぼ一致し、またほぼ同一の等高線上に在る。そして形態的にも類似していることから同一時期のものと言える。

b. 出土遺物（第436図）

本遺跡から出土した縄文時代の遺物は全て27F-86グリッド周辺より10m×10mの範囲より出土した包蔵地のものである。

すべて同一個体と考えられ、口縁部及び口縁部文様帯部8点（1～8）、胴部4点（9～12）を採拓した。口縁は平縁でやや内傾し、端部が若干肥厚している。口縁部文様帯は、2条の沈線を施しているが、7・8に見られるように窓状の区画文となるようである。文様帯全体で、この区画文が何段表現されていたのかは不明であるが、一般的には1段ないし2段となる。胴部は9に見られるように口縁部文様帯と接してやや鋭い斜行沈線を施しており、11・12に見られるように胴部下半で消滅している。

胎土はかなり粗いもので、雲母粒並びに石英粒を僅かに混入し、焼成・遺存状態とも良好である。色調は基本的には黄褐色を呈しているが、胴部の破片の中には外面が黒色となるものもある（姥山台式土器）。

小 結

本遺跡からは先土器時代の石器群と縄文時代の陥し穴状土坑、そして縄文時代後期の遺物包蔵地が検出されたのみであった。

縄文時代では遺構としては陥し穴状土坑が検出されたのみであり、住居跡は検出されていない。このことは、南志津地区にある他の遺跡についても言えることであるが、この地区は、当時の人々の狩猟領域であったと言えるであろう。（野口）

4章 西野遺跡

はじめに

西野遺跡は、確認調査の結果調査区の北西部分より溝状遺構2条を検出したのみであり、遺物も溝状遺構の覆土中より縄文土器片、須恵器片をわずかに検出したのみであったため、本調査には移行せずに、溝状遺構部の拡張と土層の観察を行い調査を終了した。

本遺跡の基本層序は、第 図の柱状図に示した通りである。

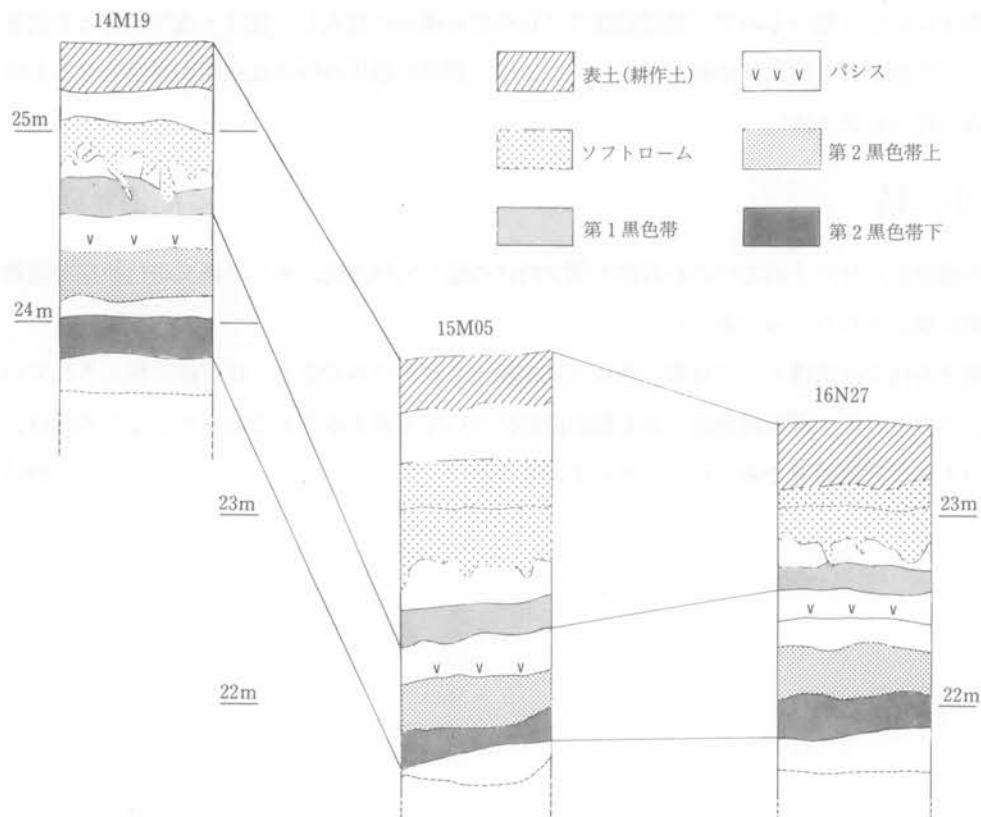
第I層 表土層

第II層 暗褐色土層で、縄文時代以降の遺物包蔵層

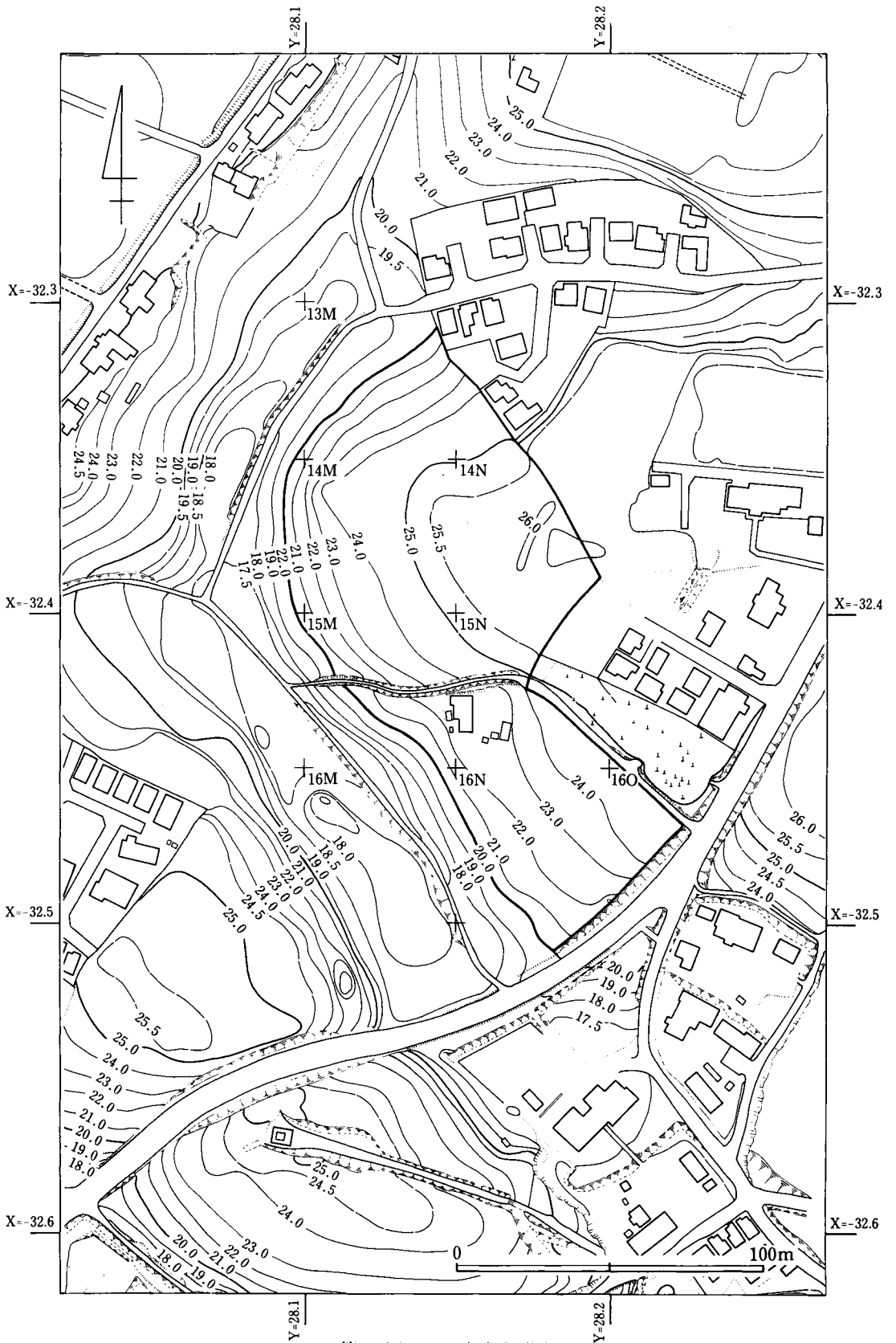
第III層 ソフトローム層

第IV層 ハードローム層

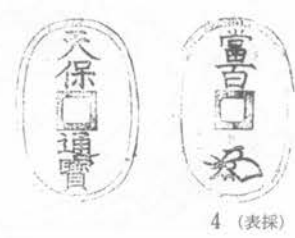
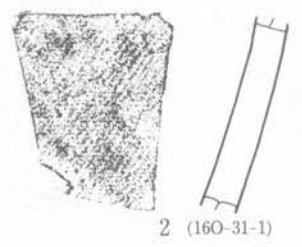
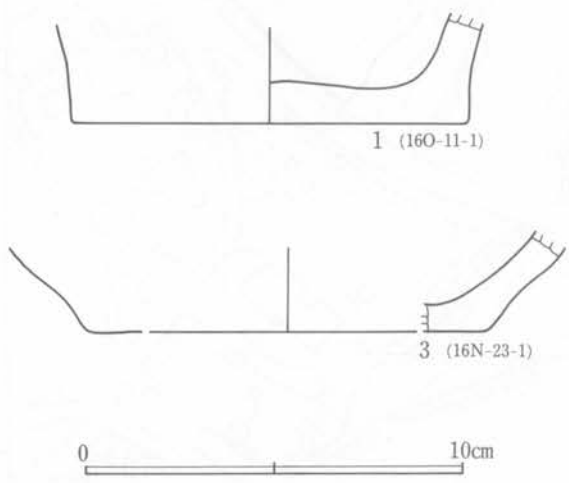
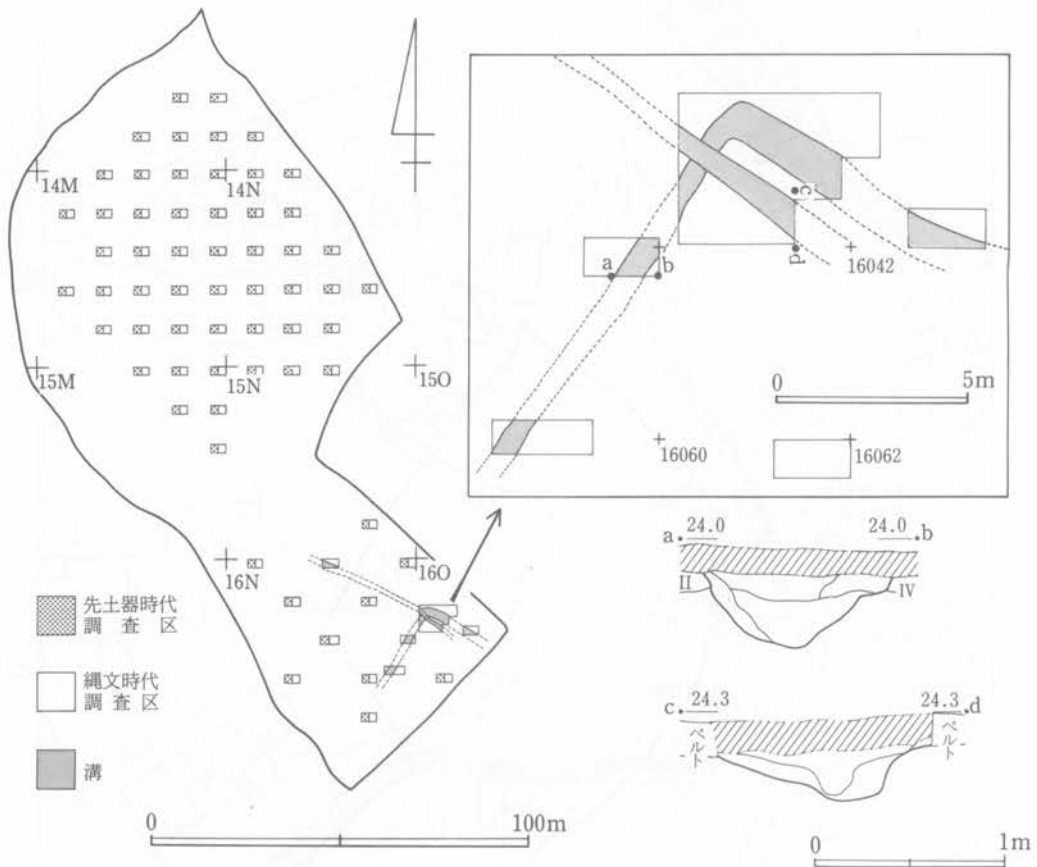
第V層 第1黒色帯



第437図 西野遺跡の基本層序



第438図 西野遺跡地形図



第439図 西野遺跡試掘配置図・溝状遺構1,2セクション図・出土遺物

第VI層 始良Tn 火山灰を含む明褐色硬質ローム層

第VI'層 始良Tn 火山灰をわずかに含む黄褐色ローム層

第VII層 第2黒色帯で3層に分けられ、上層をVII a、中層をVII b、下層をVII cとした。

第VIII層 立川ローム最下層

遺構と遺物

遺構は、溝状遺構2条が検出され、1条は東西にほぼまっすぐに延び、他の1条は東西方向から南北方向にほぼ直角に曲がり延びている。規模は2条とも幅1.0～1.5m、深さ0.5m程を検出面より測り、壁は緩い傾斜をもって底面に達する。出土遺物(第439図)としては、1の縄文時代後期の土器底部破片、2の須恵器胴部破片、3の陶磁器底部破片などがわずかに検出したが、これらの遺物はいずれの溝条遺構にも伴うものとは考えられない。4は15Nグリッド周辺より表採したものである。

2条の溝条遺構の時期、性格は不明であるが、覆土の堆積状況から見て、近世以降のものと推定できる。

(野口)

第5章 芋窪遺跡

第1節 先土器時代

はじめに

本遺跡より検出された、先土器時代の石器群の分布は、1,000㎡余りと広い分布状況を示している。そしてこの広い範囲内のほぼ全域に、かなり密集した遺物分布状況であり、いくつかのブロックにより構成されているものと思われる。明瞭なブロックの区分は困難であるが、器種別・石質別の平面的分布や接合状況により5つのブロックに区分した。この各ブロックは、さらに細かな構成要素に区分される可能性も高いが、接合の状況を見ると、広範囲に渡っての接合資料が多く見られるため、大観的にブロックを捉えた。なお、この石器群以外に、確認調査時に、25O-66、27P-60グリッドより1点ずつナイフ形石器が第Ⅲ層中より検出され、その周辺の拡張を行ったがその他の遺物は検出されなかった。

A. 概要 (第443・第444図、図版83)

芋窪遺跡より検出された先土器時代のブロックは5ヶ所を数える。遺物検出地点は、調査区北側の台地平坦部より西側の谷に緩く傾斜し始める地点に集中している。ブロックの平面分布は、いずれも隣接し、集中した分布状況である。これらブロックの平面分布は、北側の調査区外へ広がる可能性も考えられるが、今回の調査ではほぼ全容を検出できたものと考えられる。そして、出土層位はいずれのブロックとも、第Ⅵ層下部～第Ⅶa上部層に及んでおり、第Ⅵ層下位から第Ⅶa層にかけて最も集中し、また相互のブロック間での接合資料が見られることから、これらのブロックは同一時に存在していたと言える。

遺跡の基本層序は第442図の柱状図に示した通りであるが、耕作による攪乱が著しく、第Ⅲ層にまで及んでいる地点が多く見られた。

第Ⅰ層 表土層

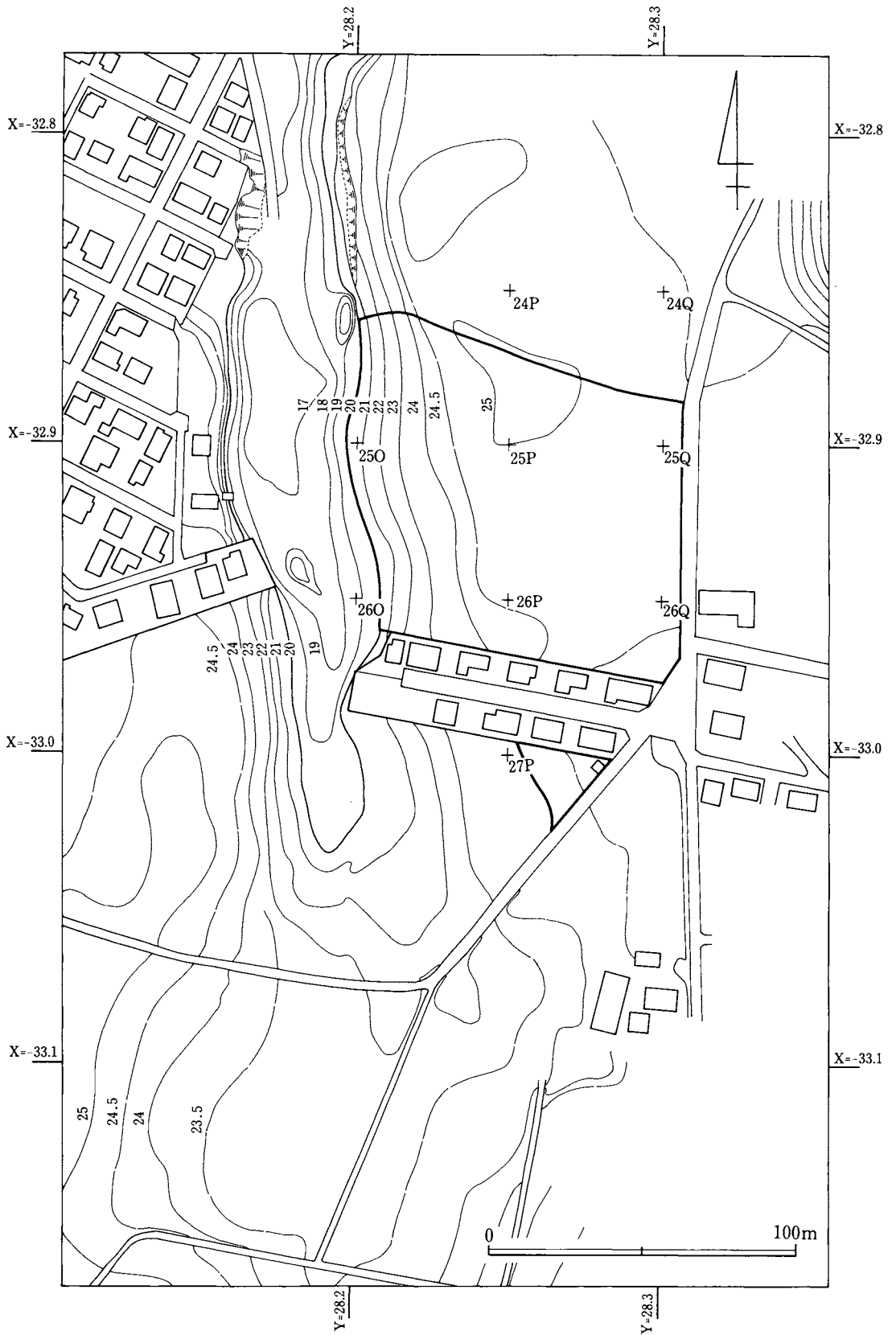
第Ⅱ層 暗褐色土層…縄文時代以降の遺物包蔵層であるが、本遺跡では、耕作による攪乱が著しいため遺存地点が少ない。

第Ⅲ層 ソフトローム層

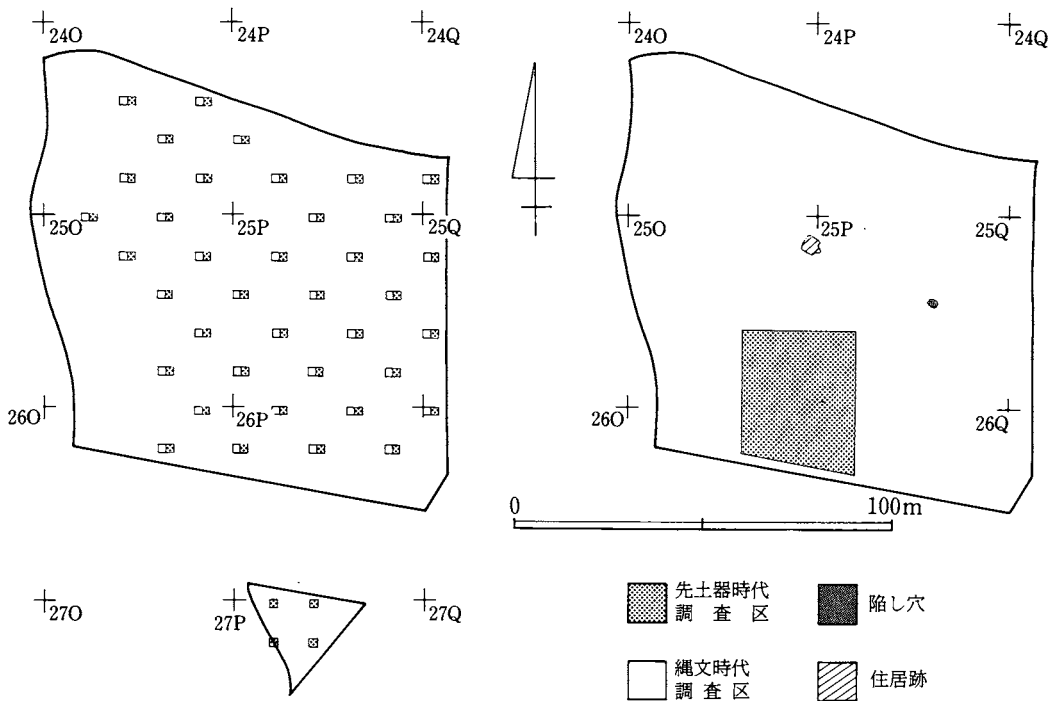
第Ⅳ-Ⅴ層 ハードローム層…本来分離できる層であるが、本遺跡では色調により分離はできなかった。なお、第Ⅴ層は第1黒色帯に相当する層である。

第Ⅵ層 始良 Tn 火山灰を含む明黄褐色硬質ローム層

第Ⅵ'層 始良 Tn 火山灰をわずかに含む黄褐色ローム層



第440図 芋窪遺跡地形図



第441図 芋窪遺跡試掘配置図・遺構配置図

第Ⅶ層 第2黒色帯…本層は3層に分けられ、上層をⅦa、中層をⅦb、下層をⅦcとした。

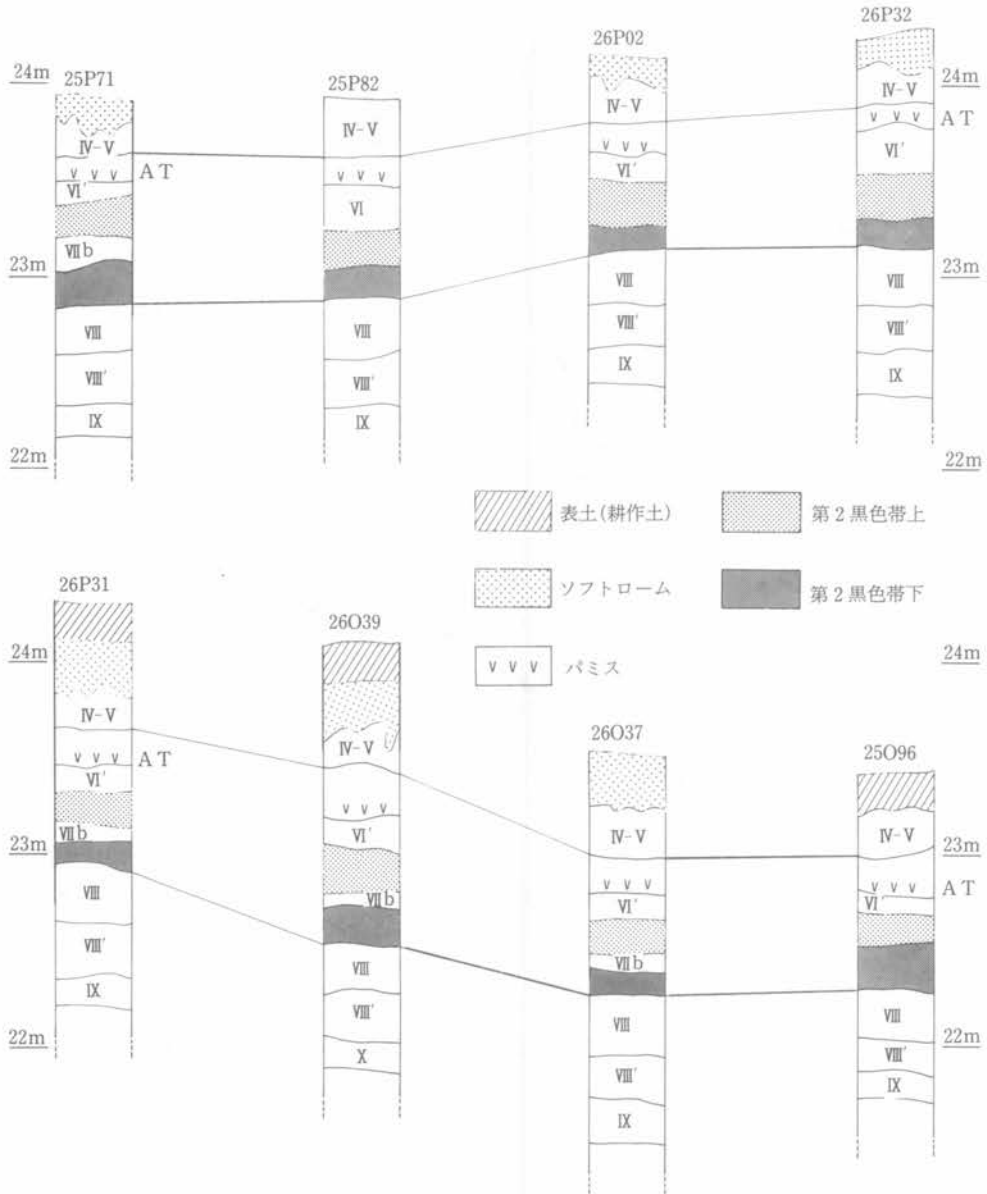
第Ⅷ層 立川ローム層最下層 本層は2層に分けられ、上層をⅧa、下層をⅧbとした。

B. ブロックとその遺物

Aブロック (第445～第450図、図版84)

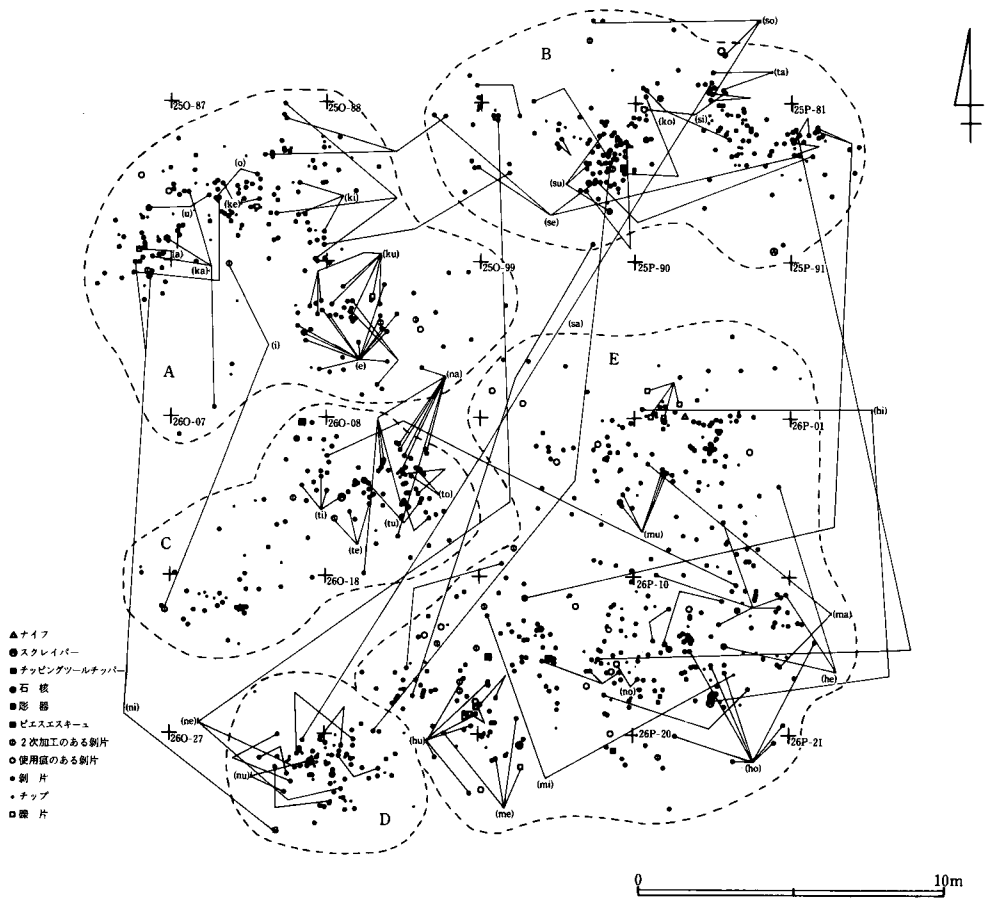
本ブロックは、石器群の北西部に位置し、南北方向10m、東西方向15mの規模の平面分布である。このブロックは、さらに北側に分布をもつものと南側に分布をもつものの2に分けることができる。北側に分布をもつものは、石材としては、頁岩が主体となり、他に安山岩、チャート、ホルンフェルスが少量見られる。遺物の平面分布は、本石器群の中では、比較的散漫な状態と言える。これに対して、南側に分布をもつものは、石材に、ホルンフェルス、砂岩が主体となり、チャートがわずかに見られる。

出土遺物 出土遺物総数210点が検出されている。そのうち製品としては、チョッパー1点、スクレイパー1点、2次加工のある剥片4点、使用痕のある剥片3点、そして石核が3点と石器組成のうち占める割合は小さく、剥片が大きな割合を占めている。そして接合資料が14例見られる。1のチョッパーは小型の偏平な礫を素材とし、先端部に細かな調整により刃部を作り出し、基部と側縁に粗い調整により成形がされている。3のスクレイパーは、横長剥片の1側縁



第442図 芋窪遺跡の基本層序

に調整剥離が施されているものである。2次加工のある剥片（7、8、9、34）は、縦長・横長剥片の1側縁の一部に微細な調整剥離が見られる。7は節理面より3つに割れている。石核（15、29、37）は、いずれも剥片類が接合する。石核の素材には、円礫もしくは角礫を用い、いずれのものにも背面に自然面を残している。15には、縦長剥片が1点のみ接合したが、この剥片は、打面を作り出す調整剥片であり、目的剥片としては、横長または幅広の縦長剥片を作取したものと思われる。29には、12点の剥片類が接合したが、打面調整剥片(23)、石核の整



第443図 器種別遺物分布図

形のためと思われる剥片（26）以外の剥片は、幅広の縦長小剥片であり、その多くは石器製作のための目的剥片とは考えられず、石核の調整剥片と思われる。石核の作業面に残された剥離痕を見ると、横長・幅広の縦長剥片を搾取したものと言える。37は、3点の剥片が接合し、うち1点は2次加工の調整のあるものである。作取された剥片は、先の2点と同様に横長・幅広の縦長のもと思われる、打面を転移しながら剥離作業が行われている。

Bブロック（第451～第454図、図版85）

本ブロックは、石器群の北側に位置し、南北方向7m、東西方向15m程の規模の平面分布を呈している。本ブロックは、さらに西側と東側の2つの集中部に分けられ、いずれも径5m程の平面分布である。使用石材は、西側集中部では、頁岩、ホルンフェルスが大半を占め、他に安山岩、チャート等が見られ、東側集中部は、頁岩が主体を占め、他に安山岩、メノウ、チャート等が見られる。接合資料は19例見られ、そのうち他のブロック間との接合資料は、5例見られる。

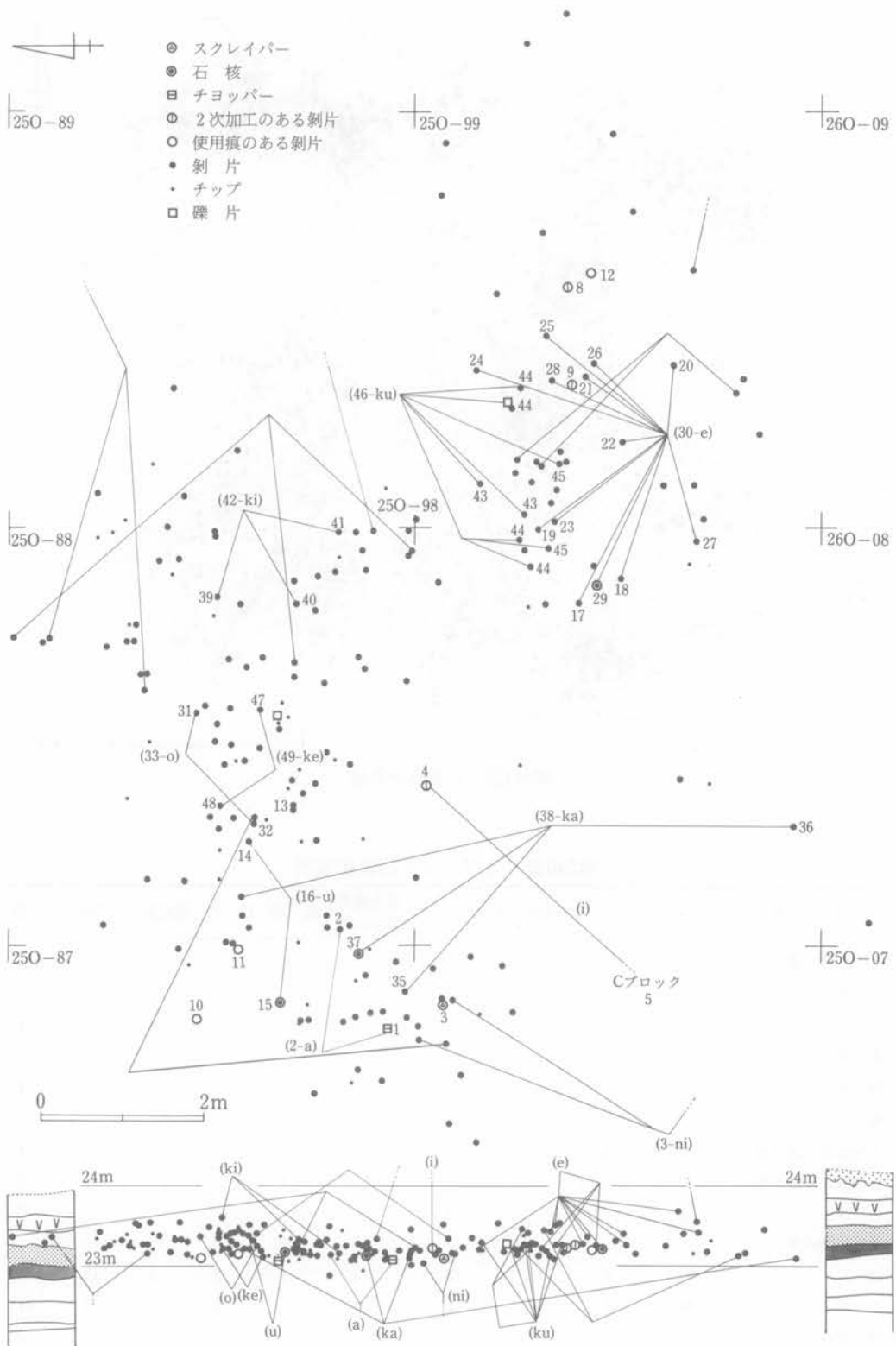
出土遺物 出土遺物総数208点であり、そのうち剥片・チップ類が大半を占め、製品としては、



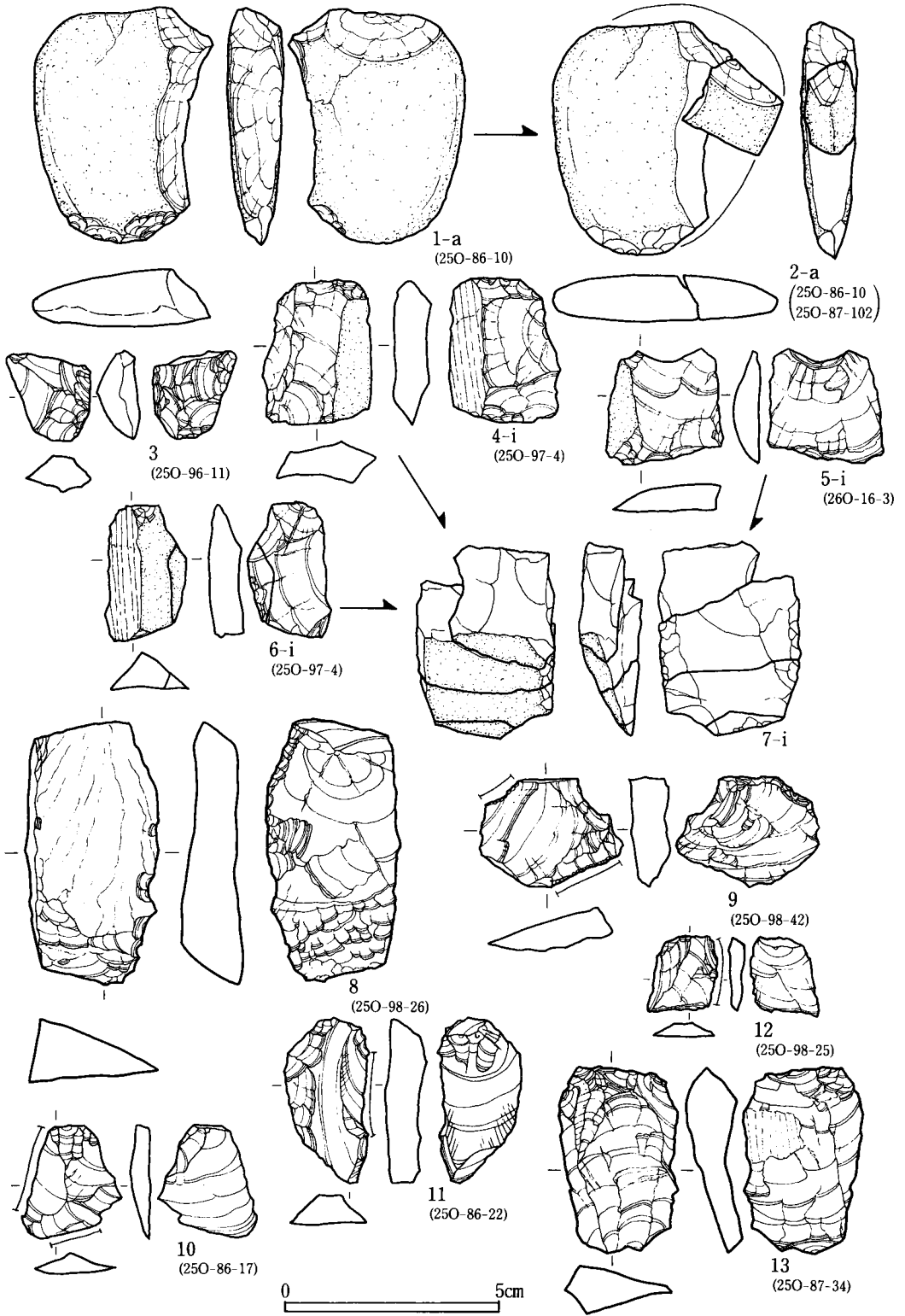
第444図 石質別分布図

第240表 Aブロック石器組成表

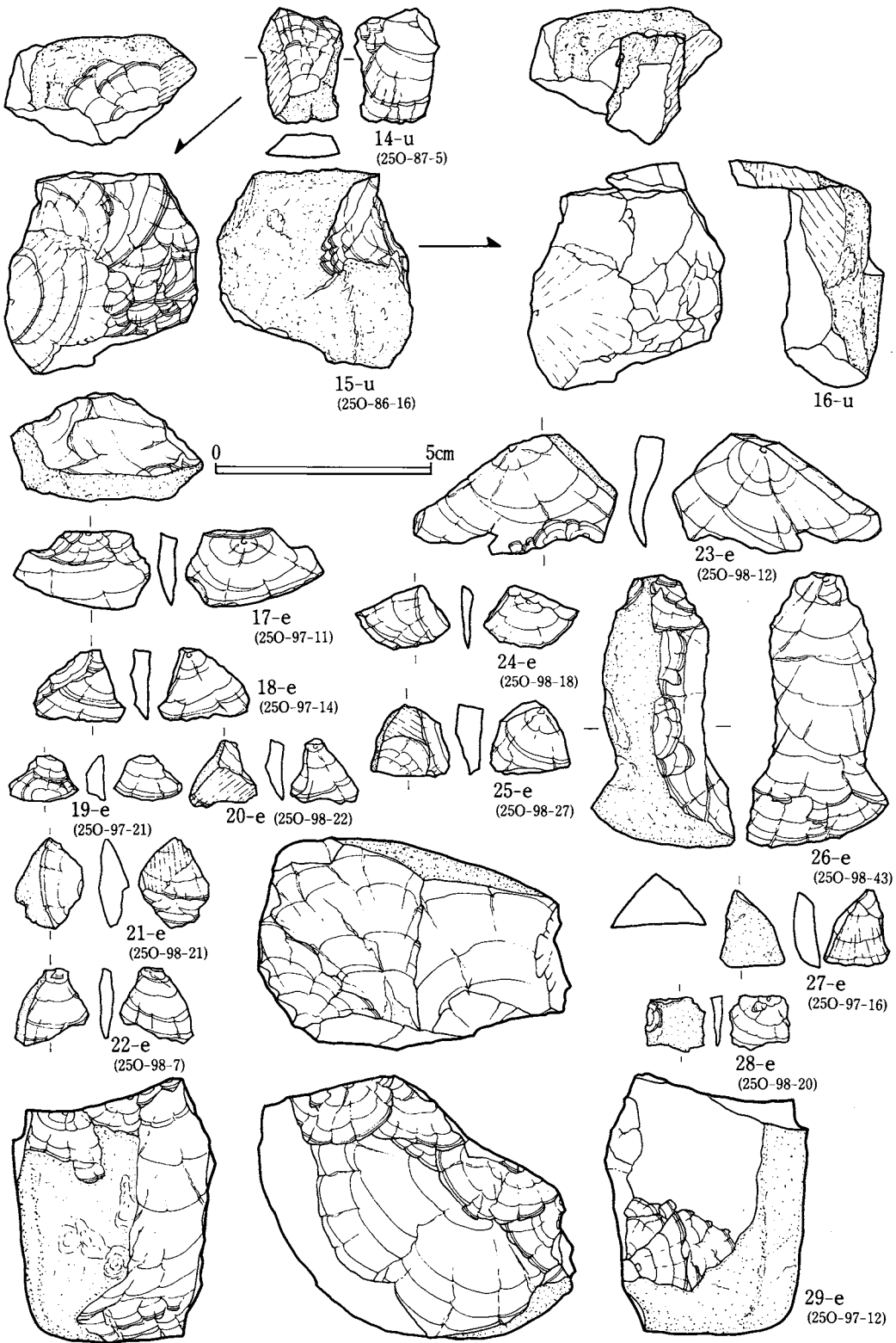
石質	頁岩	チャート	安山岩	ホルンフェルス	黒色緻密 質安山岩	瑪瑙	砂岩	流紋岩	その他	合計
ナイフ形石器										
ピエスエスキュー										
スクレイパー		1								1
彫器										
礫器				1						1
敲石										
2次加工のある剥片	2	1						1		4
使用痕のある剥片	2					1				3
石核	2			1						3
局部磨製石斧										
剥片	95	9	9	23	4	1	8	2	10	159
チップ	16	1	6	3	1		2		5	34
礫(礫片)	1						2			3
合計	119	11	15	28	5	2	12	3	15	210



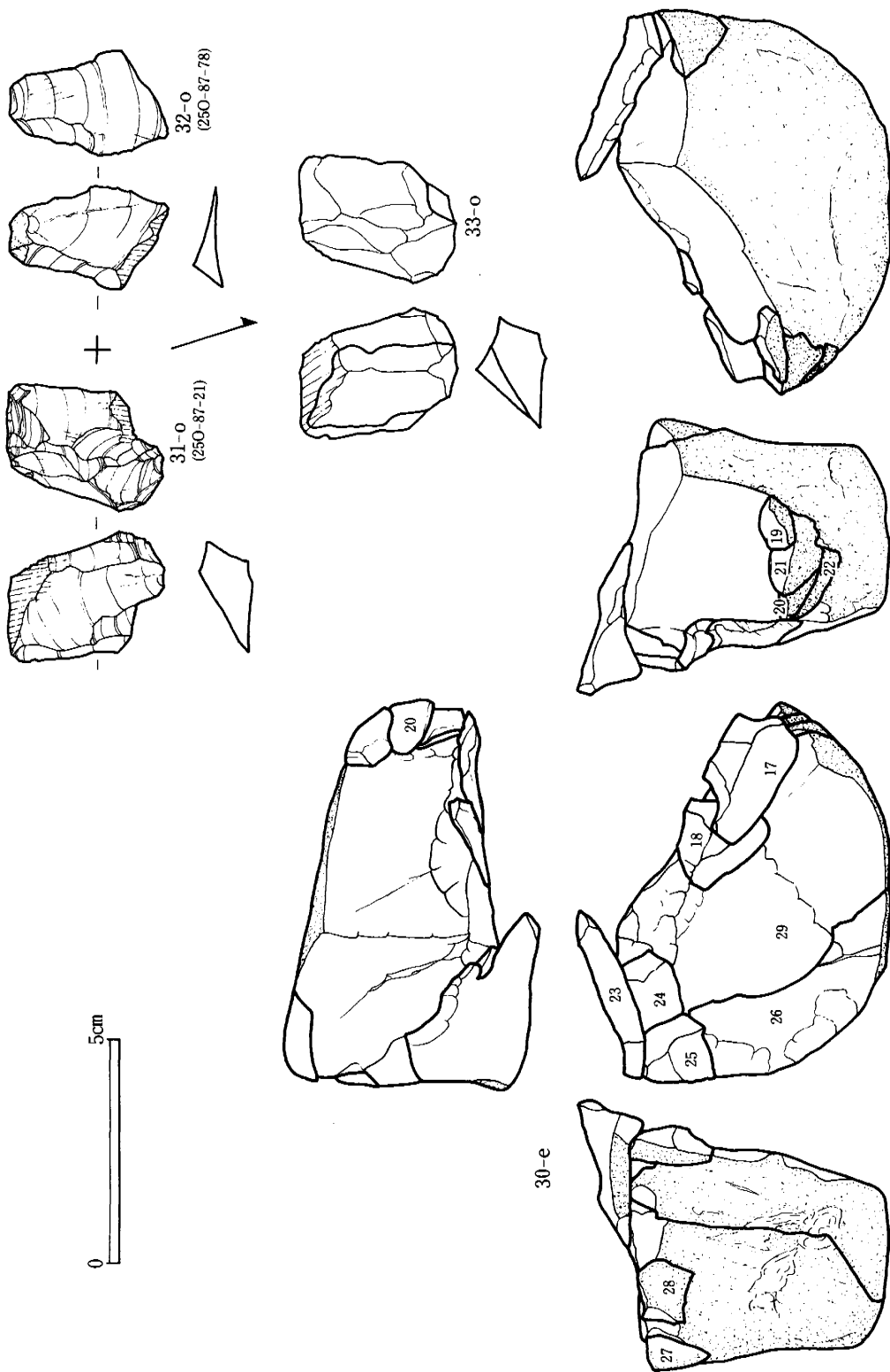
第445図 Aブロック遺物分布図



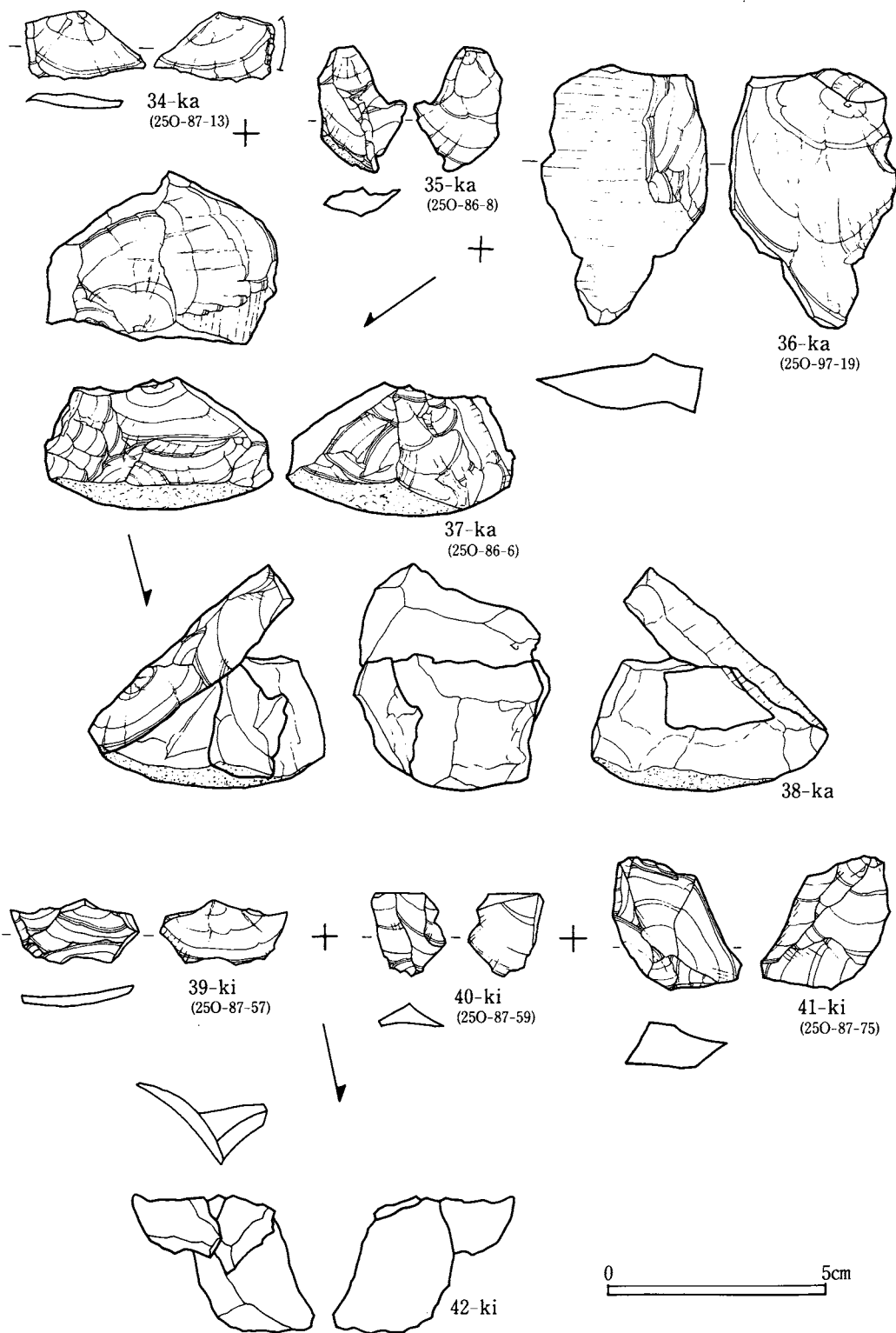
第446図 Aブロックの石器(1)



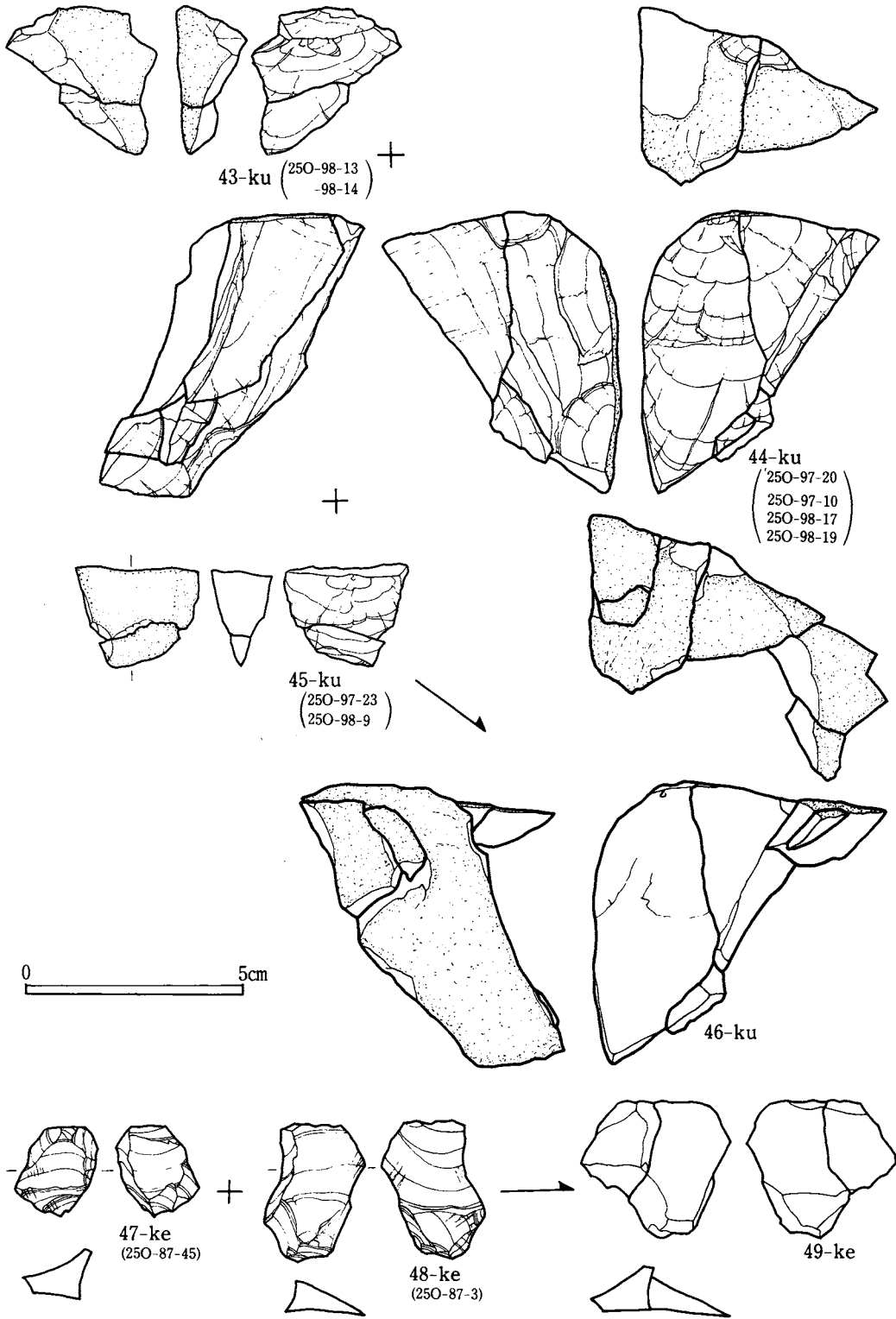
第447図 Aブロックの石器(2)



第448図 Aブロックの石器(3)



第449図 Aブロックの石器(4)



第450図 Aブロックの石器(5)

第241表 Aブロック石器計測表

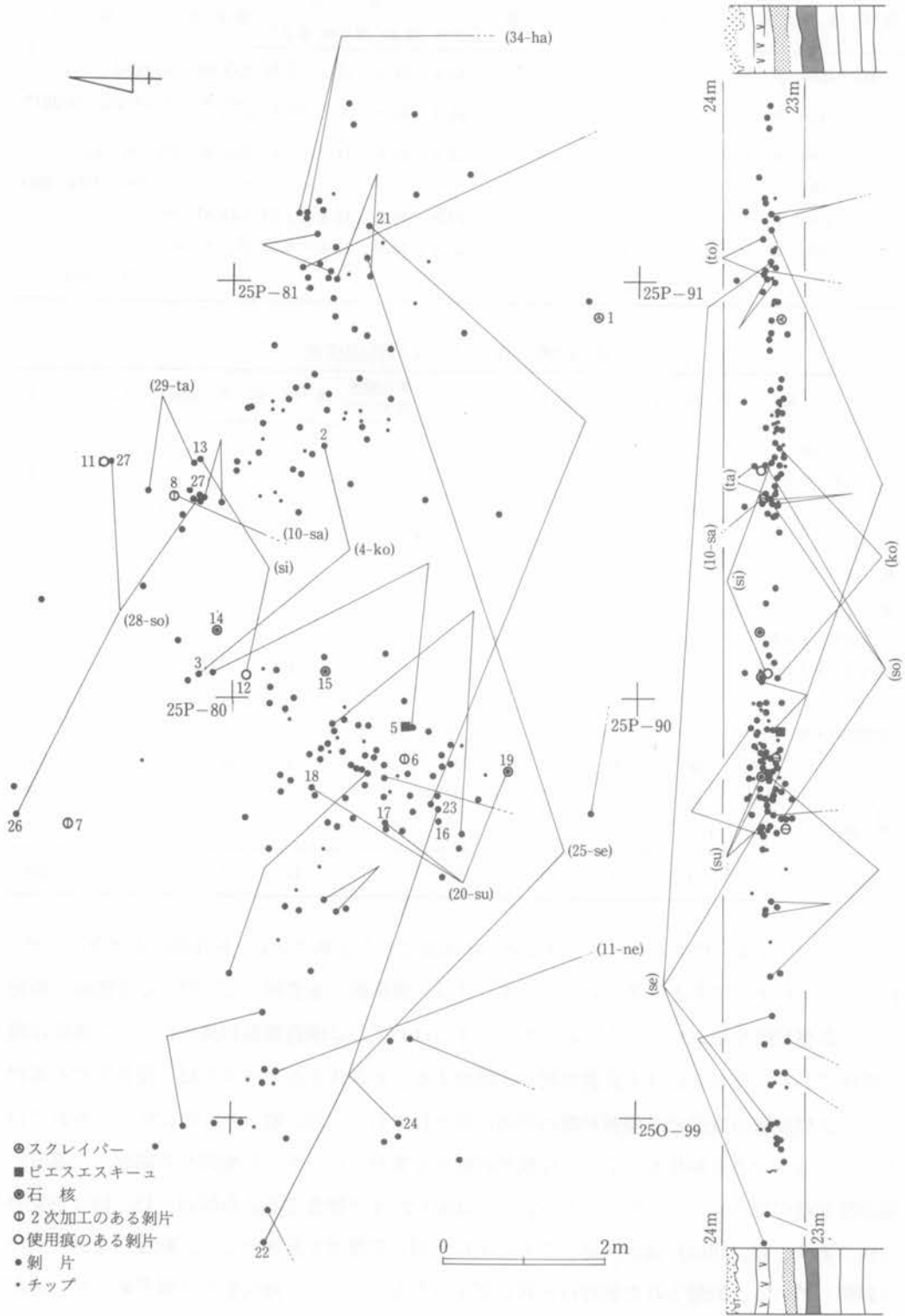
挿 図 番 号	器 種	石 質	計 測 値				遺 物 番 号	備 考	
			長さmm	幅 mm	厚さmm	重さg			
446-1a	チョッパー	ホルンフェルス	3	52.5	39.0	10.9	32.41	25O-86-0010	25O-87-0102接合
3	スクレイパー	頁 岩		17.5	18.5	6.4	2.7	25O-96-0011	
4i	剥 片	流紋岩		32.0	33.0	10.6	14.82	25O-97-0004	cブロック出土
5i	剥 片	流紋岩		26.0	27.0	5.4	4.38	26O-16-0003	
6i	剥 片	流紋岩		—	—	—	—	25O-97-0004	
7i	2次加工のある剥片	—		—	—	—	—	—	4i+5i+6i
8	2次加工のある剥片	チャート		59.5	31.0	16.0	31.1	25O-98-0026	
9	2次加工のある剥片	頁 岩		24.5	32.5	7.1	6.4	25O-98-0042	
10	使用痕のある剥片	頁 岩		25.5	21.0	4.2	2.1	25O-86-0017	
11	使用痕のある剥片	瑪 瑙		36.0	19.0	7.3	6.0	25O-86-0022	
12	使用痕のある剥片	頁 岩		17.0	14.0	3.5	1.2	25O-98-0025	
13	剥 片	チャート		43.0	28.5	11.4	12.6	25O-87-0034	
447-14u	剥 片	頁 岩		26.0	19.0	6.3	32.2	25O-87-0005	
15u	石 核	頁 岩		44.0	43.5	18.4	51.74	25O-86-0016	
16u	—	—		—	—	—	—	—	14u+15u
17e	剥 片	ホルンフェルス		17.5	31.5	4.1	2.14	25O-97-0011	
18e	剥 片	ホルンフェルス		21.0	16.5	4.6	1.11	25O-97-0014	
19e	剥 片	ホルンフェルス		10.5	15.5	4.8	0.80	25O-97-0021	
20e	剥 片	ホルンフェルス		14.0	15.5	3.0	0.69	25O-98-0022	
21e	剥 片	ホルンフェルス		20.0	15.5	8.2	1.88	25O-98-0021	
22e	剥 片	ホルンフェルス		16.0	16.0	3.5	0.92	25O-98-0007	
23e	剥 片	ホルンフェルス		25.5	45.0	5.5	7.29	25O-98-0012	
24e	剥 片	ホルンフェルス		13.0	21.0	2.9	1.03	25O-98-0018	
25e	剥 片	ホルンフェルス		16.0	18.0	6.0	2.10	25O-98-0027	
26e	剥 片	ホルンフェルス		60.0	32.0	15.8	24.40	25O-98-0043	
27e	剥 片	ホルンフェルス		17.5	15.0	5.8	1.36	25O-97-0016	
28e	剥 片	ホルンフェルス		12.0	13.5	2.1	0.39	25O-98-0020	
29e	石 核	ホルンフェルス		59.5	47.0	44.3	246.7	25O-97-0012	
448-30e	—	—		—	—	—	—	—	17e~29e接合
31o	剥 片	頁 岩		35.0	26.5	12.3	11.48	25O-87-0021	
32o	剥 片	頁 岩		35.5	22.0	0.60	4.82	25O-87-0078	
33o	—	—		—	—	—	—	—	31o+32o
449-34ka	2次加工のある剥片	頁 岩		15.0	26.5	2.2	0.90	25O-87-0013	
35ka	剥 片	頁 岩		26.5	20.0	5.3	2.48	25O-86-0008	
36ka	剥 片	頁 岩		57.0	38.0	10.0	29.25	25O-97-0019	
37ka	石 核	頁 岩		29.5	51.0	26.7	69.30	25O-86-0006	
38ka	—	—		—	—	—	—	—	34ka~37ka接合
39ki	剥 片	頁 岩		13.0	28.0	5.0	1.56	25O-87-0057	
40ki	剥 片	頁 岩		19.0	15.0	5.4	1.49	25O-87-0059	
41ki	剥 片	頁 岩		28.0	23.5	12.9	7.60	25O-87-0075	
42ki	—	—		—	—	—	—	—	39ki+40ki+41ki

挿図番号	器種	石質	計測値				遺物番号	備考
			長さmm	幅mm	厚さmm	重さg		
450-43ku	剥片	ホルンフェルス	42.6	31.3	15.2	8.94	25O-98-0013,0014	
44ku	剥片	ホルンフェルス	84.0	33.0	30.6	95.17	25O-97-0010,0020,-98-0017,0019	
45ku	剥片	ホルンフェルス	24.4	28.8	14.3	7.85	25O-97-0023,-98-0009	
46ku	—	—	—	—	—	—	43ku+44ku+45ku	
47ke	剥片	頁岩	20.5	16.0	10.8	3.93	25O-87-0045	
48ke	剥片	頁岩	32.0	18.5	11.4	6.50	25O-87-0003	
49ke	—	—	—	—	—	—	47ke+48ke	

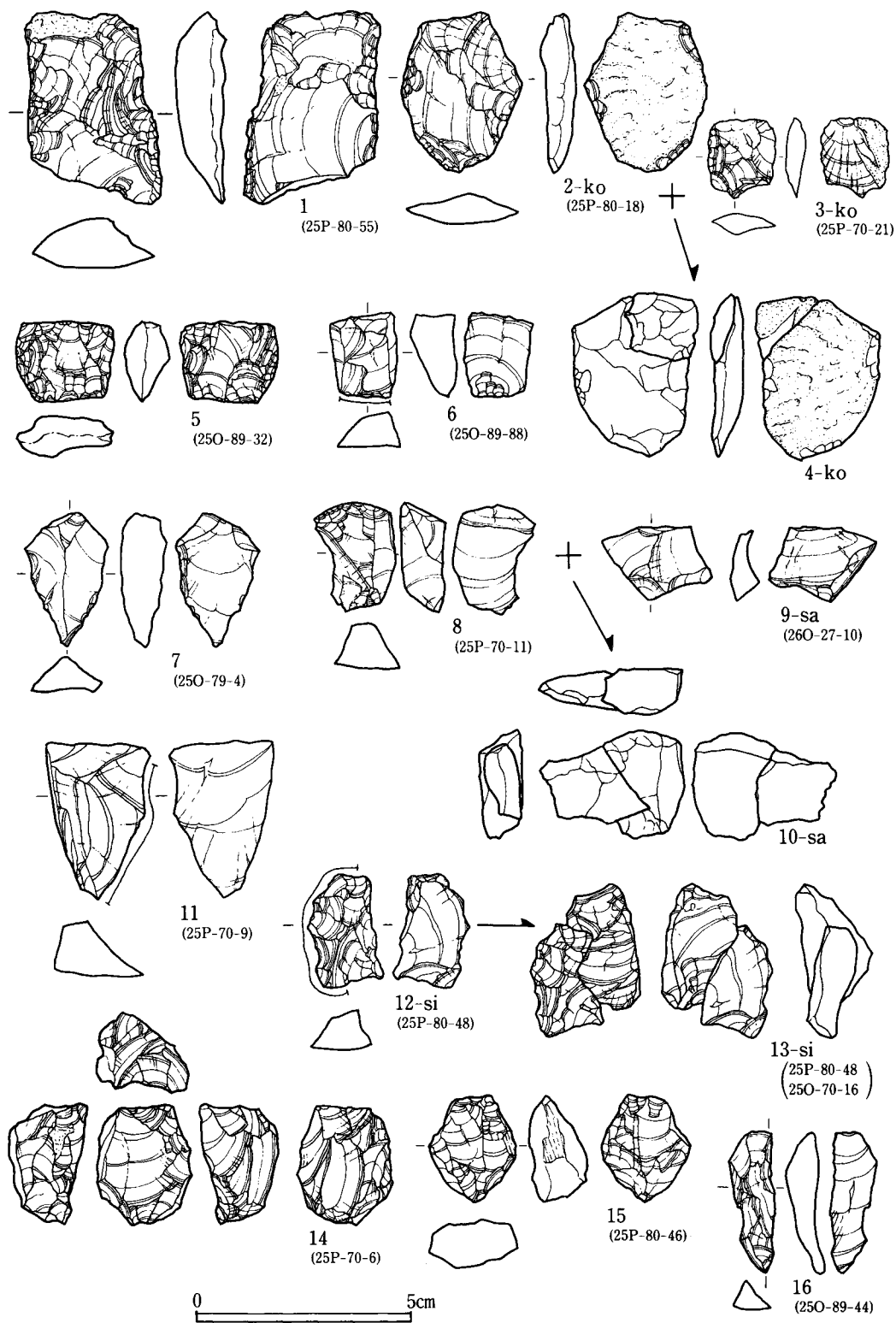
第242表 Bブロック石器組成表

石質	頁岩	チャート	安山岩	ホルンフェルス	黒色緻密質安山岩	瑪瑙	砂岩	流紋岩	その他	合計
ナイフ形石器										
ピエスエスキュー	1									1
スクレイパー	1							1		2
彫器										
礫器										
敲石										
2次加工のある剥片	2							1		3
使用痕のある剥片	1					1				2
石核	2							1		3
局部磨製石斧										
剥片	68	6	22	23		9	14	5	12	159
チップ	16		12	2					8	38
礫(礫片)										
合計	91	6	34	25		10	14	8	20	208

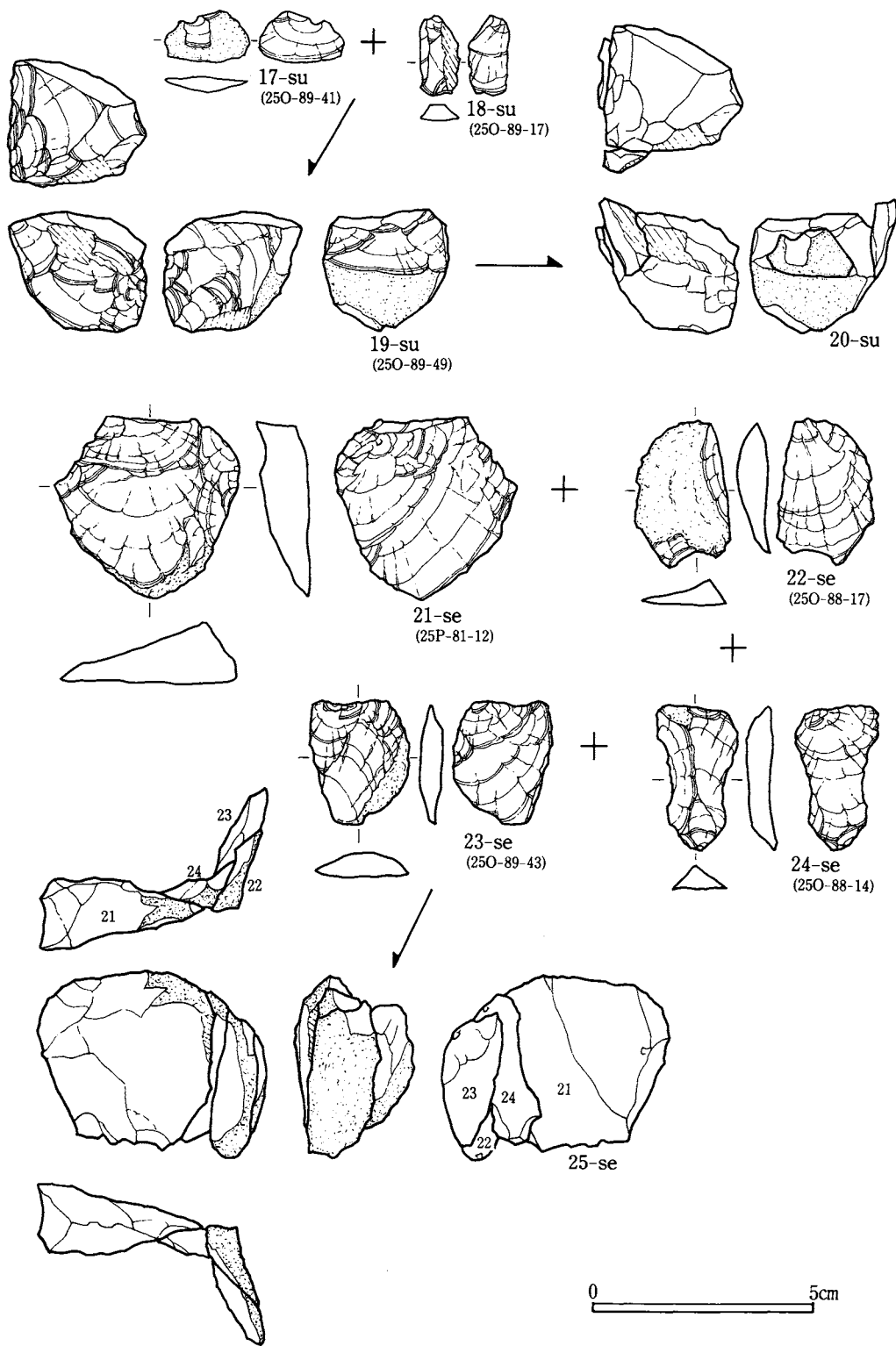
スクレイパー2点、ピエスエスキュー1点、2次加工のある剥片3点、使用痕のある剥片2点、石核3点とわずかである。スクレイパー1、2は、横長剥片を素材とし、対する2側縁に両面からの調整剥離が施されているものである。1にはわずかに礫自然面が見られ、2の裏面は礫自然面である。なお2には1点調整剥片が接合する。ピエスエスキュー5は、縦長剥片を素材とし、調整剥離の後微細な調整剥離が周囲に施されており、形の整ったものに仕上げられている。2次加工のある剥片6、7、8は縦長の剥片を素材とし、その打面部や先端部の一部分に微調整剥離が施されているものである。8には剥片が1点接合する。石核14、15、19は小型の石核であり、14、19は打面が一定しておらずに、剥片剥離面を打面として、転移しながら剥片を剥離している。剥離された剥片は形状が定まったものでなく、縦長剥片と横長剥片が、混在していると思われる。15は単設の打面を持ち、縦長剥片が剥離したと思われるが、剥片の形状には斉一性が無いものと思われる。なお、19には2点の小型の縦長剥片と横長剥片が1点ずつ



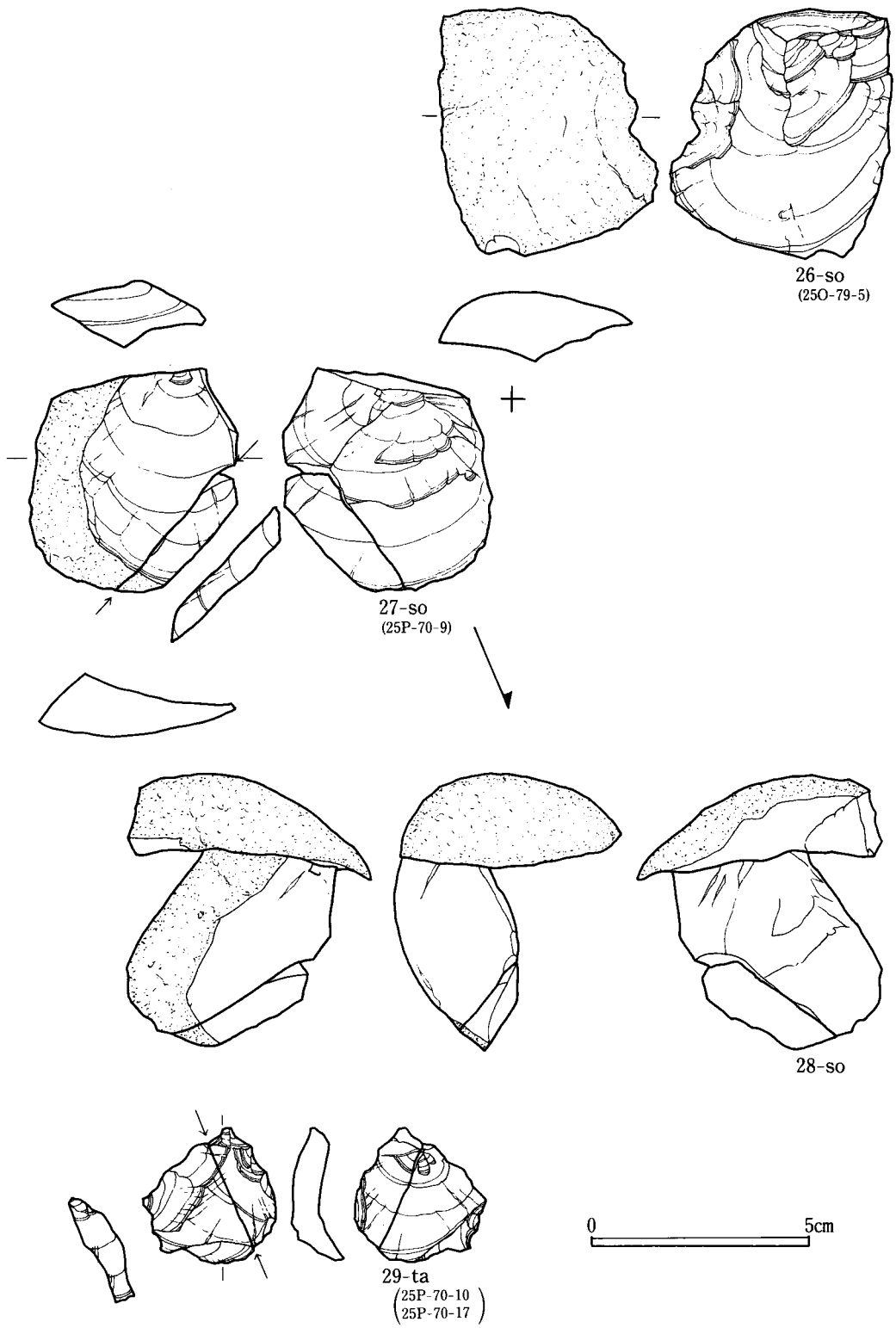
第451図 Bブロック遺物分布図



第452図 Bブロックの石器(1)



第453図 Bブロックの石器(2)



第454図 Bブロックの石器(3)

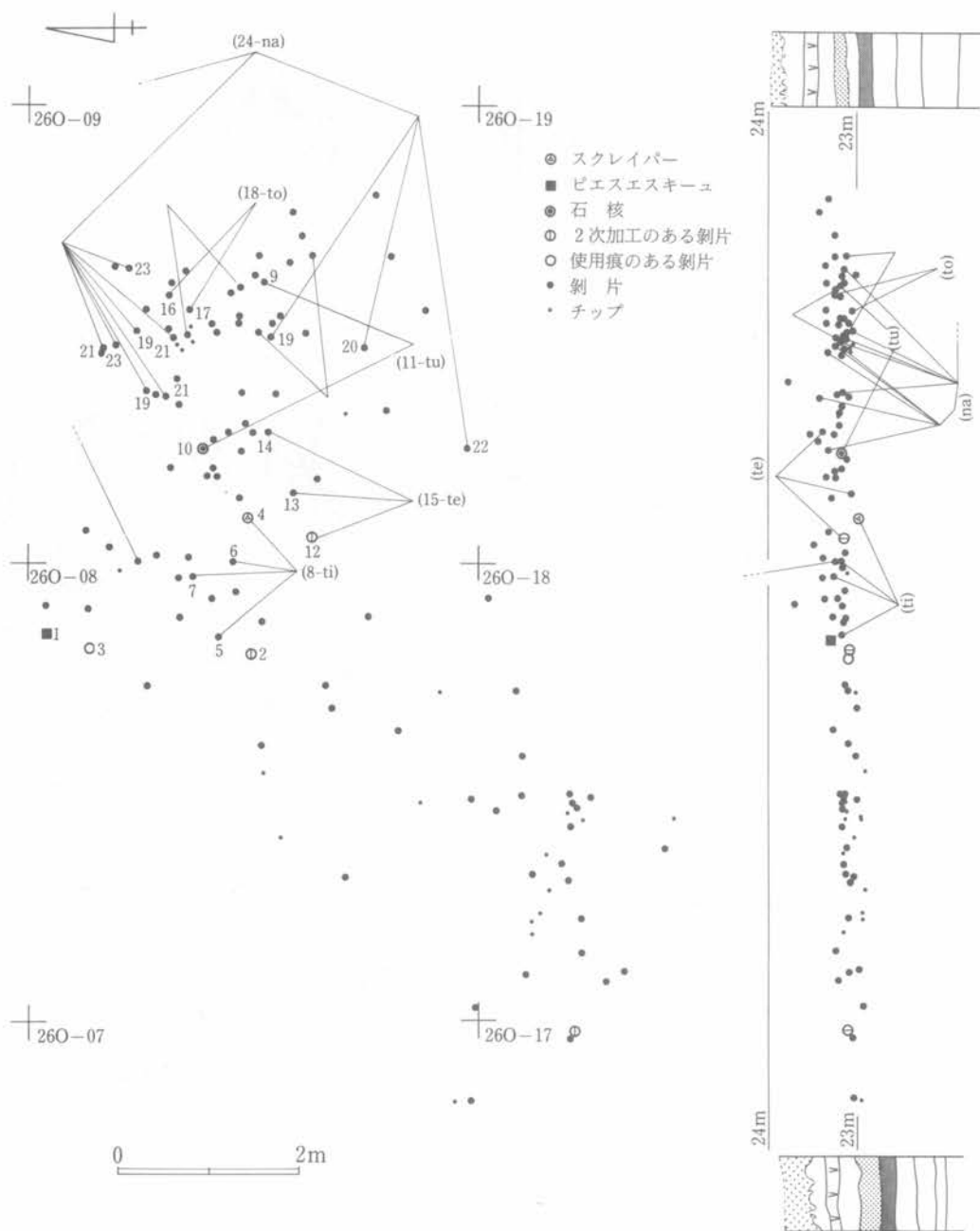
第243表 Bブロック石器計測表

挿 図 番 号	器 種	石 質	計 測 値				遺 物 番 号	備 考
			長さmm	幅 mm	厚さmm	重さg		
452-1	スクレイパー	頁 岩	40.0	30.0	10.0	15.0	25P-80-0055	
2 ko	スクレイパー	流紋岩	35.0	27.5	6.6	7.2	25P-80-0018	
3 ko	剥 片	流紋岩	17.5	15.5	4.4	1.4	25P-70-0021	
4 ko	—	—	—	—	—	—	—	2ko+3ko
5	ピエスエスキューユ	頁 岩	18.0	22.5	8.9	4.0	25O-89-0032	
6	2次加工のある剥片	頁 岩	19.0	15.0	9.1	3.1	25O-89-0088	
7	2次加工のある剥片	頁 岩	30.0	18.5	8.1	2.8	25O-79-0004	
8 sa	2次加工のある剥片	流紋岩	24.5	18.0	9.3	4.9	25P-70-0011	石核調整剥片利用
9 sa	剥 片	流紋岩	17.0	21.5	7.0	2.7	26O-27-0010	
10sa	—	—	—	—	—	—	—	8sa+9sa
11	使用痕のある剥片	頁 岩	35.5	24.0	12.2	8.7	25P-70-0009	
12si	使用痕のある剥片	瑪 瑙	25.2	14.8	7.8	3.7	25P-80-0048	
13si	—	—	—	—	—	—	25O-70-0016+12si	
14	石 核	頁 岩	29.0	22.0	15.5	9.4	25P-70-0006	
15	石 核	頁 岩	25.3	22.5	10.6	5.5	25P-80-0046	
16	剥 片	頁 岩	33.0	10.0	5.8	1.9	25O-89-0044	石核調整剥片
453-17su	剥 片	流紋岩	19.0	11.5	2.7	0.6	25O-89-0041	
18su	剥 片	流紋岩	17.5	9.0	3.7	0.8	25O-89-0017	
19su	石 核	流紋岩	23.8	25.0	22.8	25.0	25O-89-0049	
20su	—	—	—	—	—	—	—	17su+18su+19su
21se	剥 片	安山岩	39.5	41.5	13.7	18.9	25P-81-0012	
22se	剥 片	安山岩	30.0	21.5	6.6	3.3	25O-88-0014	
23se	剥 片	安山岩	27.0	22.5	5.1	3.9	25O-89-0043	
24se	剥 片	安山岩	31.5	18.0	7.0	4.1	25O-88-0017	
25se	—	—	—	—	—	—	—	21se~24se接合
26so	剥 片	頁岩	56.0	49.0	15.8	51.3	25O-79-0005	
454-27so	剥 片	頁 岩	49.8	48.2	13.7	33.1	25O-70-0009+0015	
28so	—	—	—	—	—	—	—	26so+27so
29to	剥 片	流紋岩	31.5	30.0	6.7	7.9	25P+70-0010+0017	

接合する。接合資料 se、so は、円礫の頁岩を母岩として、se は縦長剥片を連続して剥離を行っており、so はほぼ90度の打撃方向の違う大型の縦長剥片が接合するものである。これらいずれの剥片にも打面に調整がされているものである。また so、ta は、意図的と思われる剥片の切断された資料である。この接合資料と、先の石核を見ると、目的的剥片に全くの違いが見られ、少なくともこのブロックには、2種類の剥片剥離技術が存在していたことが窺える。

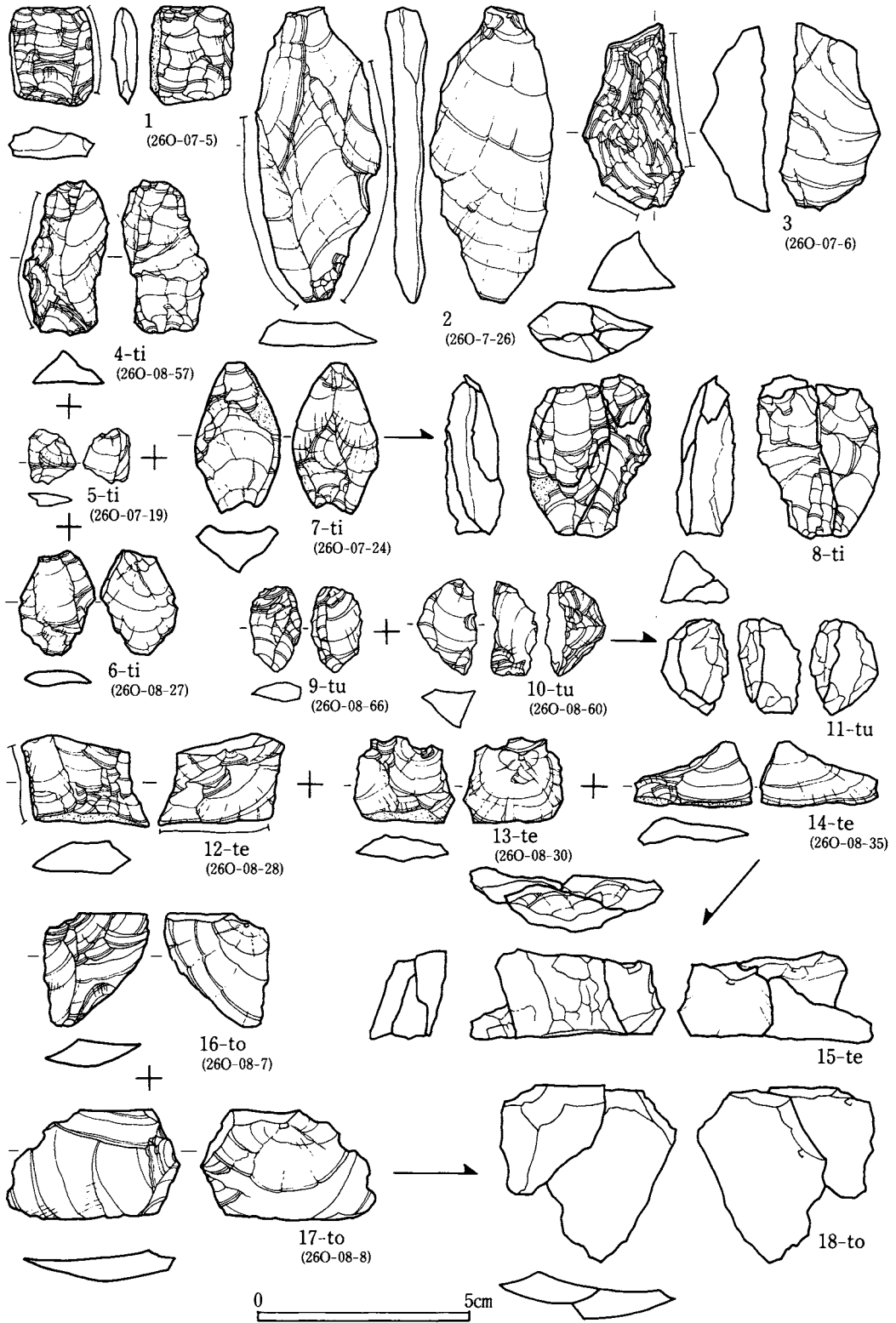
Cブロック (第455~第458図、図版86)

本ブロックは、石器群の中央部からやや西側に位置し、南北方向6m、東西方向11mの楕円状に広がり呈しているものである。このブロックも平面的広がりには、東側と、西側の2つ

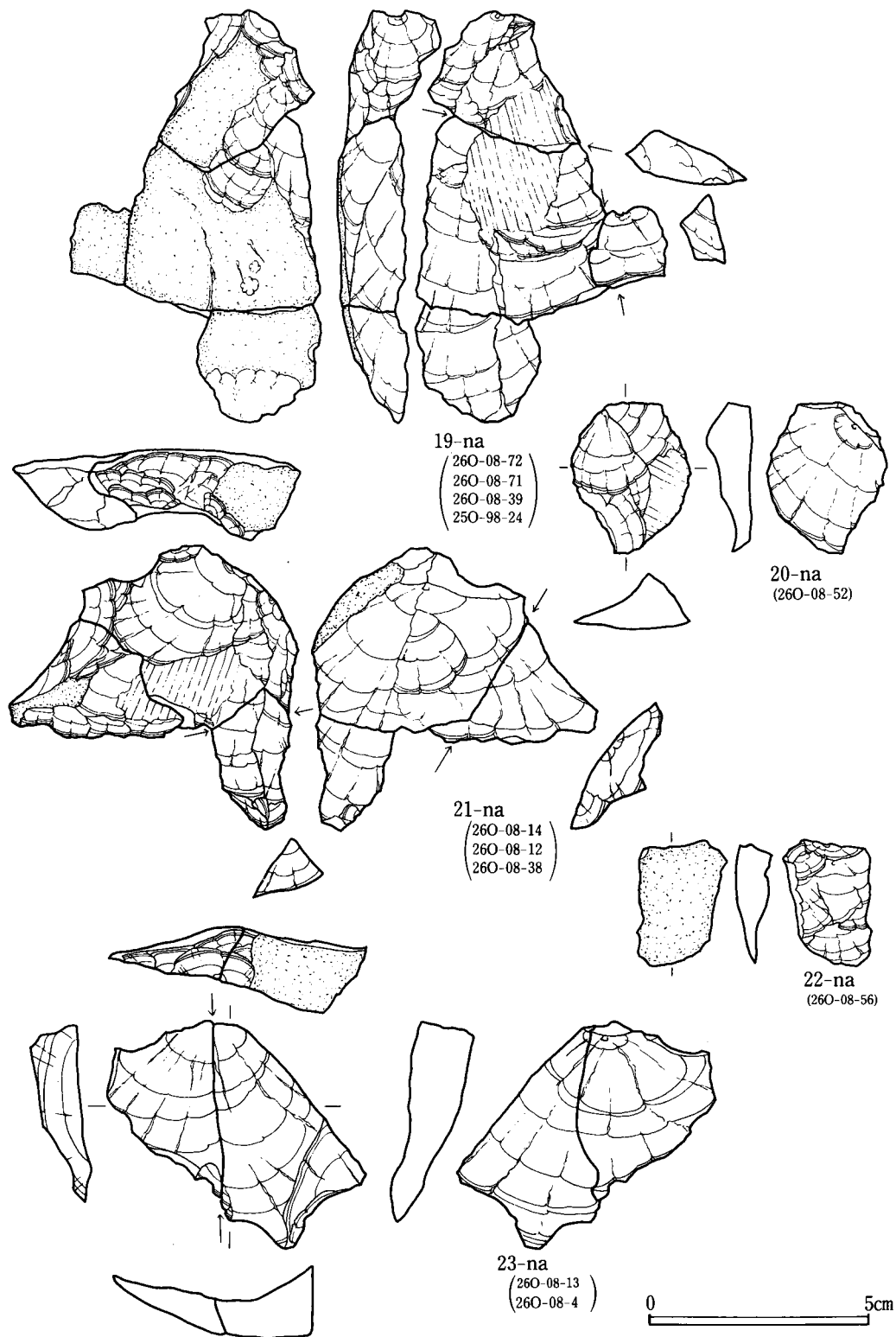


第455図 Cブロック遺物分布図

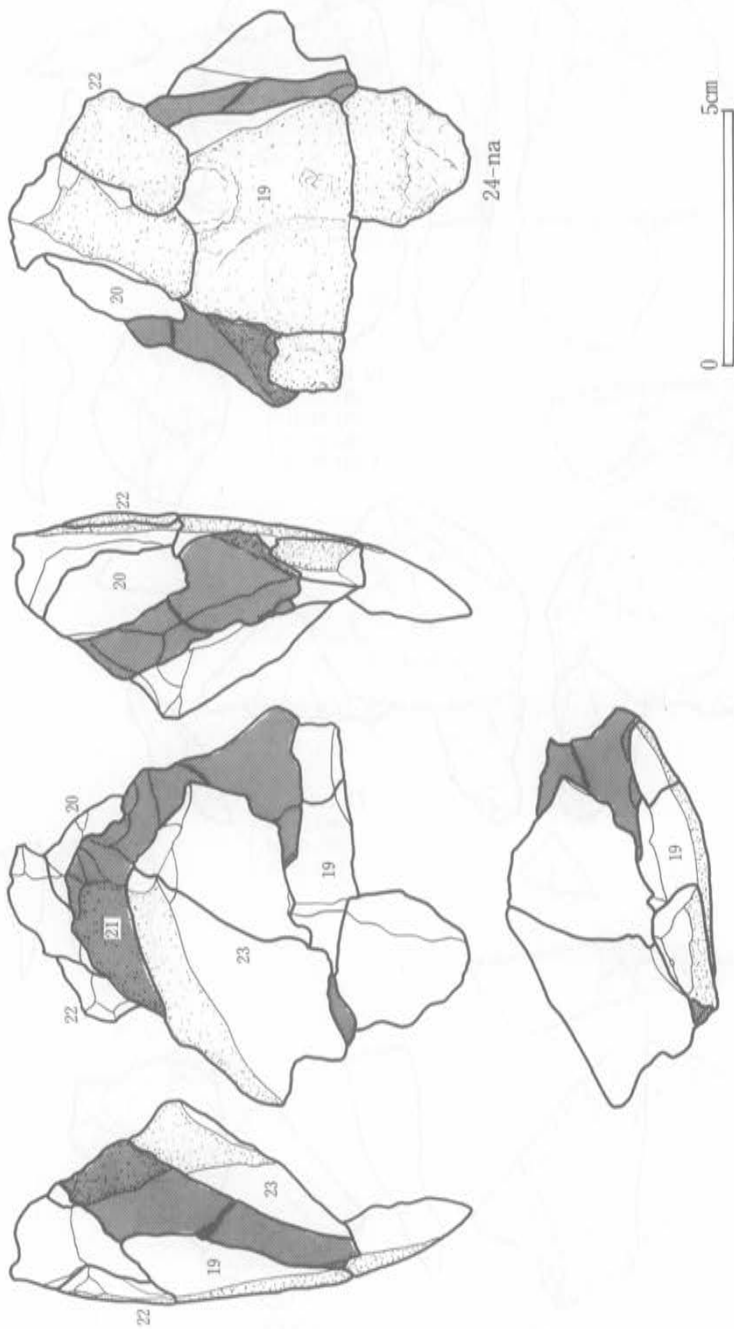
の集中部が見られる。東側の集中部は、ホルンフェルスを母岩とするものが主体となり、その他メノウ、チャート等がわずかに見られるだけである。一方西側の集中部は、安山岩を母岩とするものが主体であり、その他ホルンフェルスがわずかに含まれるだけである。また、前者には、接合資料が9例見られ、本ブロックより検出された石器製品も、こちら側に集中して見ら



第456図 Cブロックの石器(1)



第457図 Cブロックの石器(2)



第458図 Cブロックの石器(3)

第244表 Cブロック石器組成表

石 質	頁 岩	チャート	安山岩	ホルンフェルス	黒色緻密 質安山岩	瑪 瑙	砂 岩	流紋岩	その他	合 計
ナイフ形石器										
ピエスエスキュー	1									1
スクレイパー	1									1
彫 器										
礫 器										
敲 石										
2次加工のある剥片	1		1				1			2
使用痕のある剥片										1
石 核	1									1
局部磨製石斧										
剥 片	21	6	25	29	1	6	2		15	105
チップ			8	2					8	18
礫 (礫片)										
合 計	25	6	34	31	1	6	3		23	129

れる。後者には、接合資料はAブロックのものと接合するものが1例、そして石器製品としても2次加工のある剥片が1点検出されているのみで、他は剥片・チップ類である。

出土遺物 出土遺物総数129点であり、そのうち製品としては、ピエスエスキュー1点、スクレイパー1点、2次加工のある剥片2点、使用痕のある剥片1点、石核1点と石器組成上で占める割合はやはり少ない。ピエスエスキュー1は、丹念な調整剥離により形の整ったものに仕上げられ、両端部には微細な調整剥離が施されている。スクレイパー4は、縦長剥片を素材とし、1側縁に調整剥離が施されているものである。このスクレイパーには他に3点の縦長剥片が接合する。2次加工のある剥片2、12のうち2は、大型の縦長剥片を素材とし、その両側縁に微細な調整剥離が施されているものであり、12は、厚みのある横長剥片を素材として、その1側縁の先端部に微細な調整剥離が施されている。12には他に2点の横長剥片が接合する。石核10は、非常に小型であり、石核として良いか疑問はあるが、縦長剥片が1点接合する。打面を転移しながら剥片を剥離したものと考えられ、小型剥片を目的剥片としたものと考えられる。接合資料は、10例見られるが、各接合資料とも剥片剥離技術に特徴を持ったものであり、斉一性が余り見いだせない。接合資料tiは、スクレイパーが接合する資料であるが、スクレイパーを含めた4点の剥片は、縦長剥片であり、それら剥片の背面に残された剥離痕を見ても、いずれも縦長剥片を目的剥片をした両設打面より剥離されていたと考えられる。これに対し、接合資料te、toは、横長剥片どおしの接合資料であり、打面調整が行われた後に、この3点の横長剥片が連続して剥離されている。接合資料tuは、先にも述べたように小型の石核より小型の縦長剥片が剥離されたものである。接合資料naは、拳大のやや扁平な礫を原石とし、丹念な打

第245表 Cブロック石器計測表

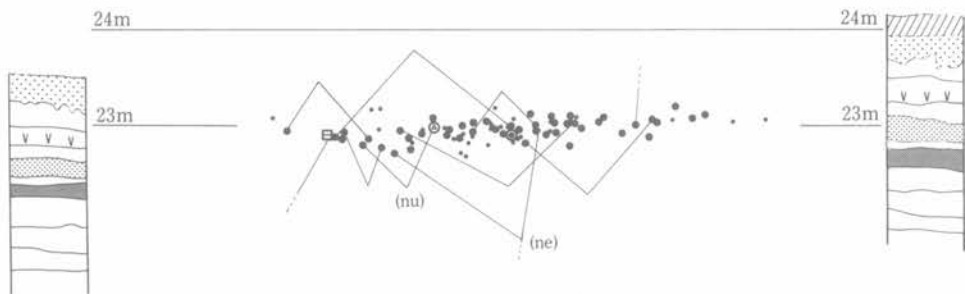
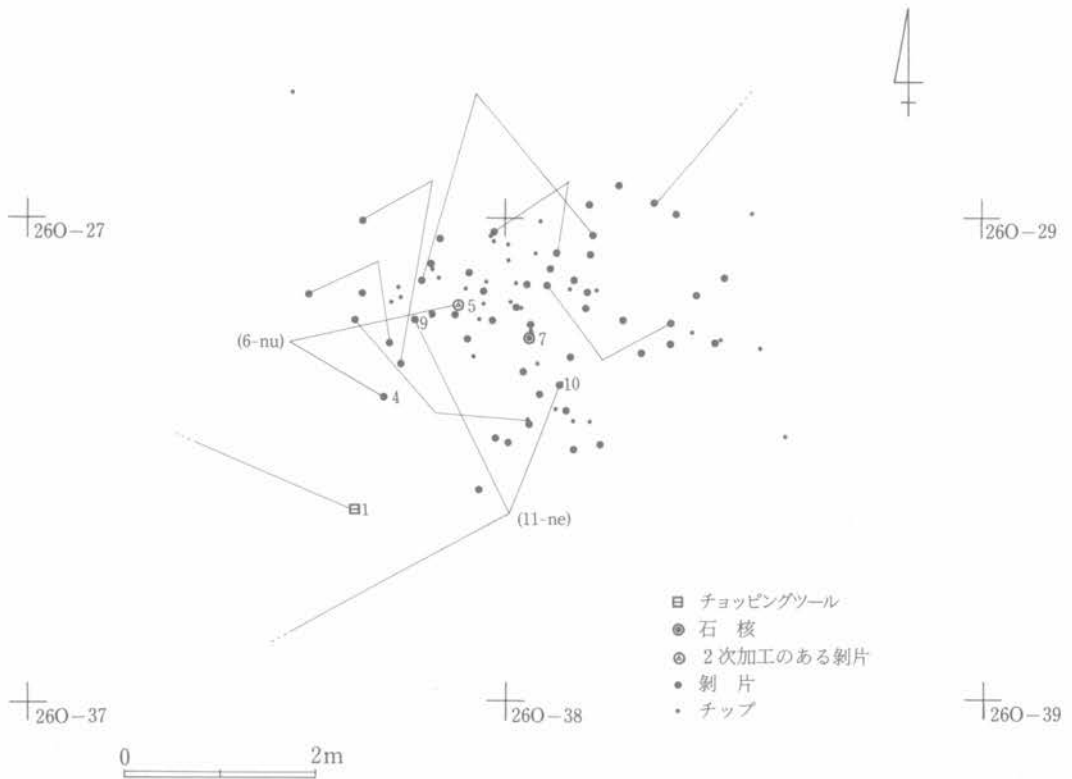
挿 図 番 号	器 種	石 質	計 測 値				遺 物 番 号	備 考
			長さmm	幅 mm	厚さmm	重さg		
456-1	ピエスエスキューユ	頁 岩	22.5	19.0	6.6	3.7	26O-07-0005	
2	2次加工のある剥片	頁 岩	67.0	28.5	6.0	15.0	26O-07-0026	
3	使用痕のある剥片	頁 岩	41.0	21.5	14.0	10.5	26O-07-0006	
4 ti	スクレイパー	頁 岩	34.5	18.0	7.1	5.0	26O-08-0057	
5 ti	剥 片	頁 岩	10.0	12.8	2.9	0.3	26O-07-0019	
6 ti	剥 片	頁 岩	24.0	17.0	3.2	13.4	26O-08-0027	
7 ti	剥 片	頁 岩	34.0	19.5	11.6	6.4	26O-07-0024	
8 ti	—	—	—	—	—	—	—	4 ti~7 ti接合
9 tu	剥 片	頁 岩	20.0	12.0	3.7	1.1	26O-08-0066	
10tu	石 核	頁 岩	22.0	14.0	11.9	2.3	26O-08-0060	
11tu	—	—	—	—	—	—	—	9 tu+10tu
12te	調整痕のある剥片	安山岩	20.0	26.5	7.8	5.3	26O-08-0028	
13te	剥 片	安山岩	19.0	23.5	6.0	2.7	26O-08-0030	
14te	剥 片	安山岩	15.0	27.0	4.6	1.9	26O-08-0035	
15te	—	—	—	—	—	—	—	12te+13te+14te
16to	剥 片	ホルンフェルス	19.7	32.2	6.4	3.8	26O-08-0007	
17to	剥 片	ホルンフェルス	24.5	39.6	5.9	7.2	26O-08-0008	
18to	—	—	—	—	—	—	—	16to+17to
457-19na	剥 片	ホルンフェルス	100.0	60.0	14.2	58.3	26O-08-39, 71, 72, 25O-98-24	
20na	剥 片	ホルンフェルス	34.0	26.5	11.2	8.9	26O-08-0052	
21na	剥 片	ホルンフェルス	67.2	67.1	16.7	48.7	26O-08-0012, 0014, 0038	
22na	剥 片	ホルンフェルス	27.5	18.0	7.4	3.1	26O-08-0056	
23na	剥 片	ホルンフェルス	55.8	65.3	13.9	29.2	26O-08-0004, 0013	
458-24na	—	—	—	—	—	—	—	19na~23na接合

面を作り出す調整剥離 (20、22) を行った後、大型の横長剥片を連続して剥離したものである。また剥離された大型の横長剥片は、意図的に切断されているのもこの資料の特徴である。

Dブロック (第459・第460図、図版87)

本ブロックは、石器群の南西部に位置し、径5m程の広がりを持つ、集中部1ヶ所の石器群の中では小型のものである。使用されている石材としては、ホルンフェルス、安山岩が大半を占め、その他に頁岩、チャート等がわずか見られる。接合資料は10例を数える。

出土遺物 出土遺物総数87点であり、そのうち石器製品としてチョッピングツール1点、スクレイパー1点、石核2点と他のブロック同様に少ない。チョッピングツール1は、拳大程の頁岩の角礫を原石とし、それを撃ち欠くようにしてこの石器の素材を作り出し、そして1側縁に打撃角度の深い調整剥離により刃部を作りだした後、微細な調整剥離により更に刃部を整えているものである。この石器には、2点の剥片が接合する。スクレイパー5は、幅広の縦長剥片を素材として、その周縁に調整剥離が施され、更に部分的に微細な調整剥離が施されている。

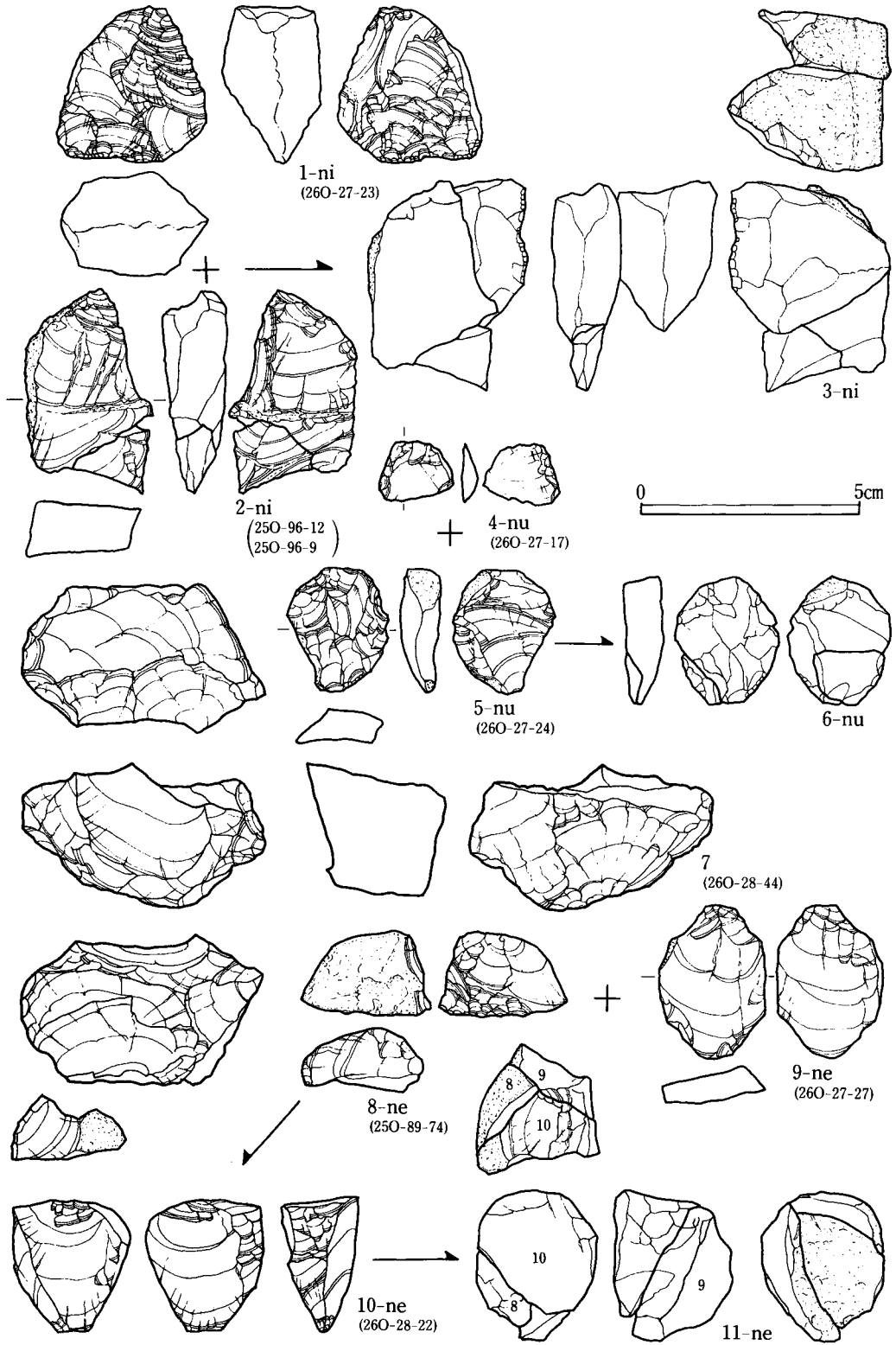


第459図 Dブロック遺物分布図

なお、この石器には、調整剥片1点が接合する。石核7、10のうち、7は打面を転移しながら横長剥片を剥離したものと考えられるもので、10は小型の円礫を原石とし、細かな調整により打面を作りだした後、打ち欠くような剥離が行われ縦長剥片を作り出している。

Eブロック (第461～第468図、図版88)

本ブロックは、石器群の北東部に位置し、南北方向11m、東西方向12m程の広がりを持つものであり、その中にはいくつかの集中部分が見られ、本石器群において最大の規模の広がりを持つが、他のブロックと比較して、遺物集中度はあまり密でなく散在している状況である。このブロックの北側部分には、黒色緻密質安山岩が主体となり、その他にホルンフェルス、頁岩、安山岩等が多く見られる部分、本ブロックの中央部分には、ホルンフェルス、頁岩が主体をな



第460図 Dブロックの石器

第246表 Dブロック石器組成表

石質	頁岩	チャート	安山岩	ホルンフェルス	黒色緻密質安山岩	瑪瑙	砂岩	流紋岩	その他	合計
ナイフ形石器										
ピエスエスキーユ										
スクレイパー							1			1
彫器										
礫器	1									1
敲石										
2次加工のある剥片										
使用痕のある剥片										
石核	1			1						2
局部磨製石斧										
剥片	14	3	17	2			13	1	1	51
チップ	7	1	13	1			1		9	32
礫(礫片)										
合計	23	4	30	4			15	1	10	87

第247表 Dブロック石器計測表

挿図番号	器種	石質	計測値				遺物番号	備考
			長さmm	幅mm	厚さmm	重さg		
460-1ni	チョッピングツール	頁岩	35.5	33.0	21.2	27.5	26O-27-0023	
2ni	剥片	頁岩	47.1	36.9	11.8	28.1	25O-96-0009 0012	Aブロック出土
3ni	—	—	—	—	—	—	—	1ni+2ni
4nu	剥片	流紋岩	13.0	17.0	3.0	0.7	26O-27-0017	
5nu	スクレイパー	砂岩	28.0	23.5	8.0	5.7	26O-27-0024	
6nu	—	—	—	—	—	—	—	4nu+5nu
7	石核	ホルンフェルス	30.0	55.5	25.1	59.3	26O-28-0044	
8ne	剥片	頁岩	19.0	30.0	11.9	7.7	25O-89-0074	Bブロック出土
9ne	剥片	頁岩	35.0	24.5	7.3	8.2	26O-27-0027	
10ne	石核	頁岩	30.0	27.0	12.3	11.7	26O-28-0022	
11ne	—	—	—	—	—	—	—	8ne+9ne+10ne

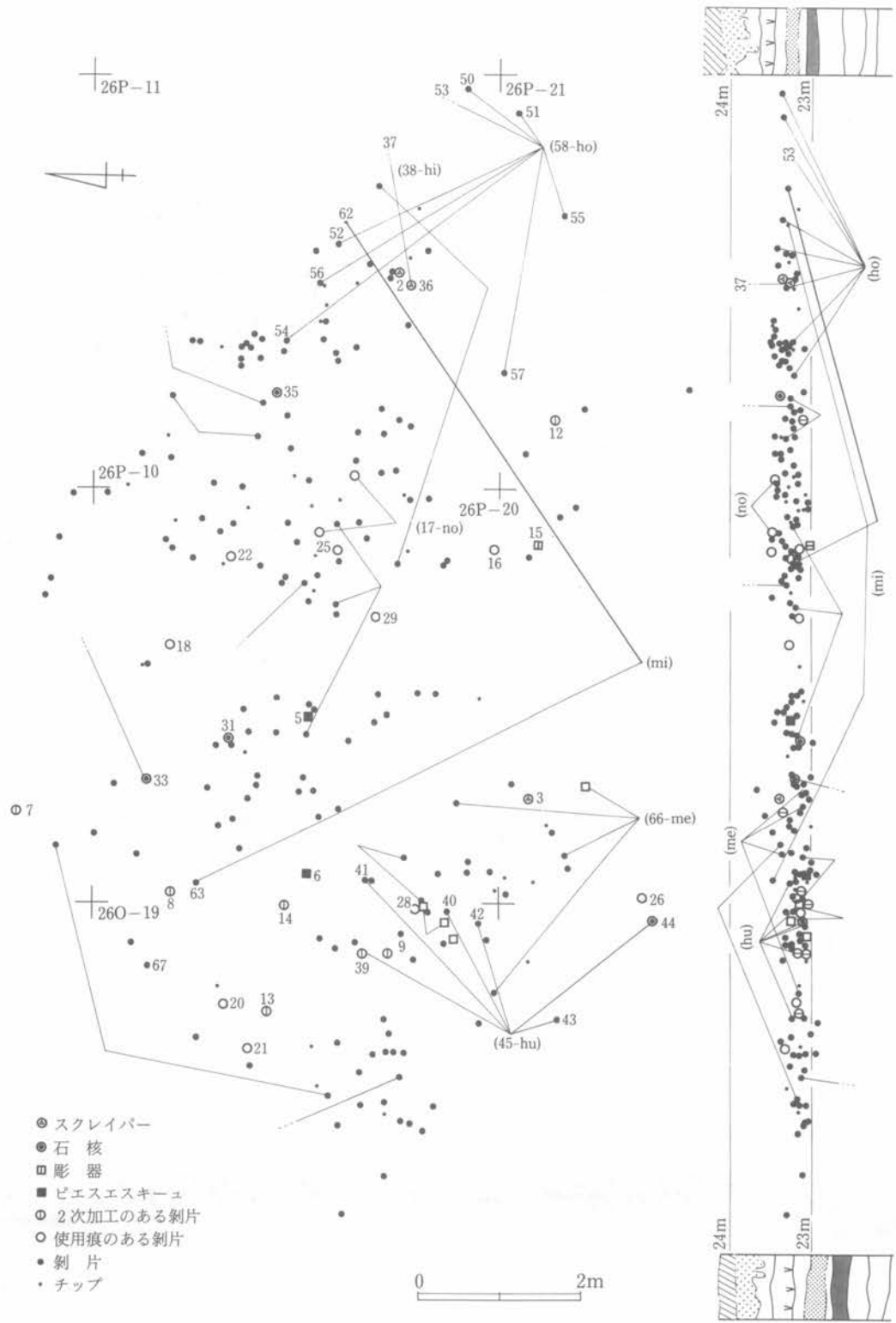
し、その他にチャート等が目につく部分、そして西側部分には、頁岩、チャートが主体をなす部分に石材別の平面的分布状況は分けることができるが、それほど明瞭は見られない。器種別の平面分布状況においては、西側の集中部分に石器製品が多く見られるが、やはり各集中部分において、明瞭な特徴は見いだせない。

出土遺物 出土遺物総数は421点であり、そのうち石器製品としては、ナイフ形石器1点、スクレイパー4点、ピエスエスキーユ2点、彫器1点、2次加工のある剥片9点、使用痕のある剥片15点、石核5点である。ナイフ形石器1は、縦長剥片の1側縁1部に背面よりのブランディ

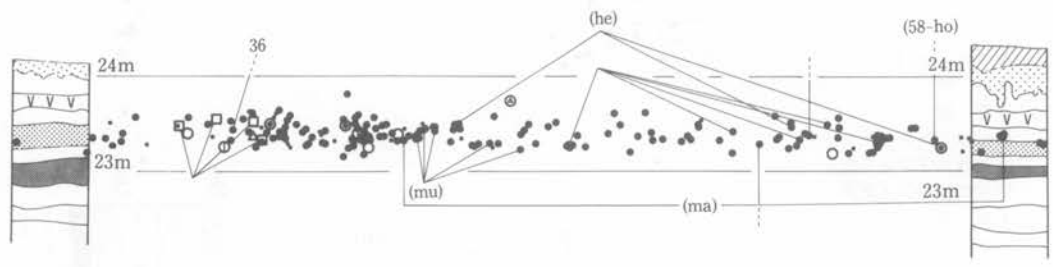
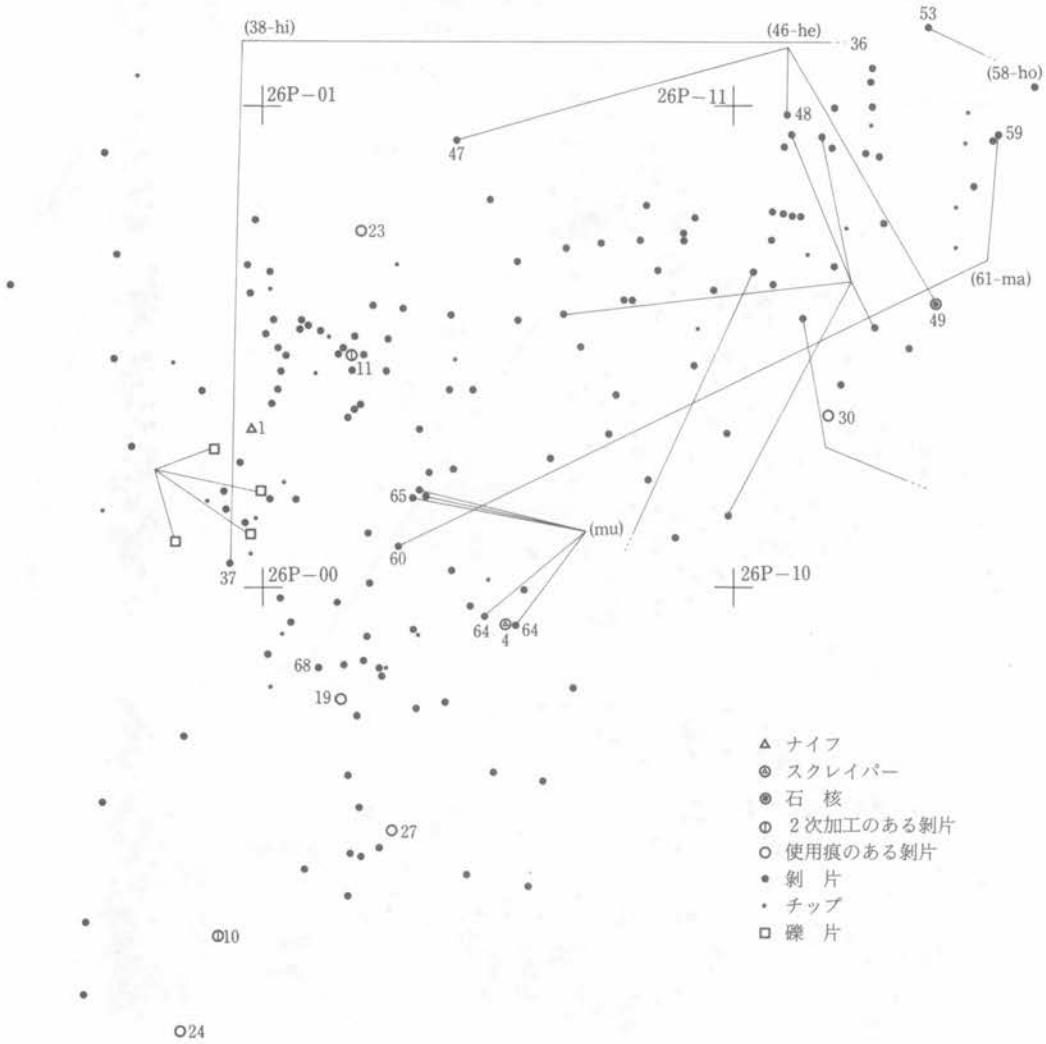
第248表 Eブロック石器組成表

石 質	頁 岩	チャート	安山岩	ホルンフェルス	黒色緻密 質安山岩	瑪 瑙	砂 岩	流紋岩	その他	合 計
ナイフ形石器	1									1
ピエスエスキュー	2									2
スクレイパー	4									4
彫 器	1									1
礫 器										
敲 石										
2次加工のある剥片	9									9
使用痕のある剥片	13	2								15
石 核	3	1			1					5
局部磨製石斧										
剥 片	161	18	22	40	43	8	4		23	319
チップ	22	4	12	2	9		1		7	57
礫 (礫片)		4					4			8
合 計	216	29	34	42	53	8	9		30	421

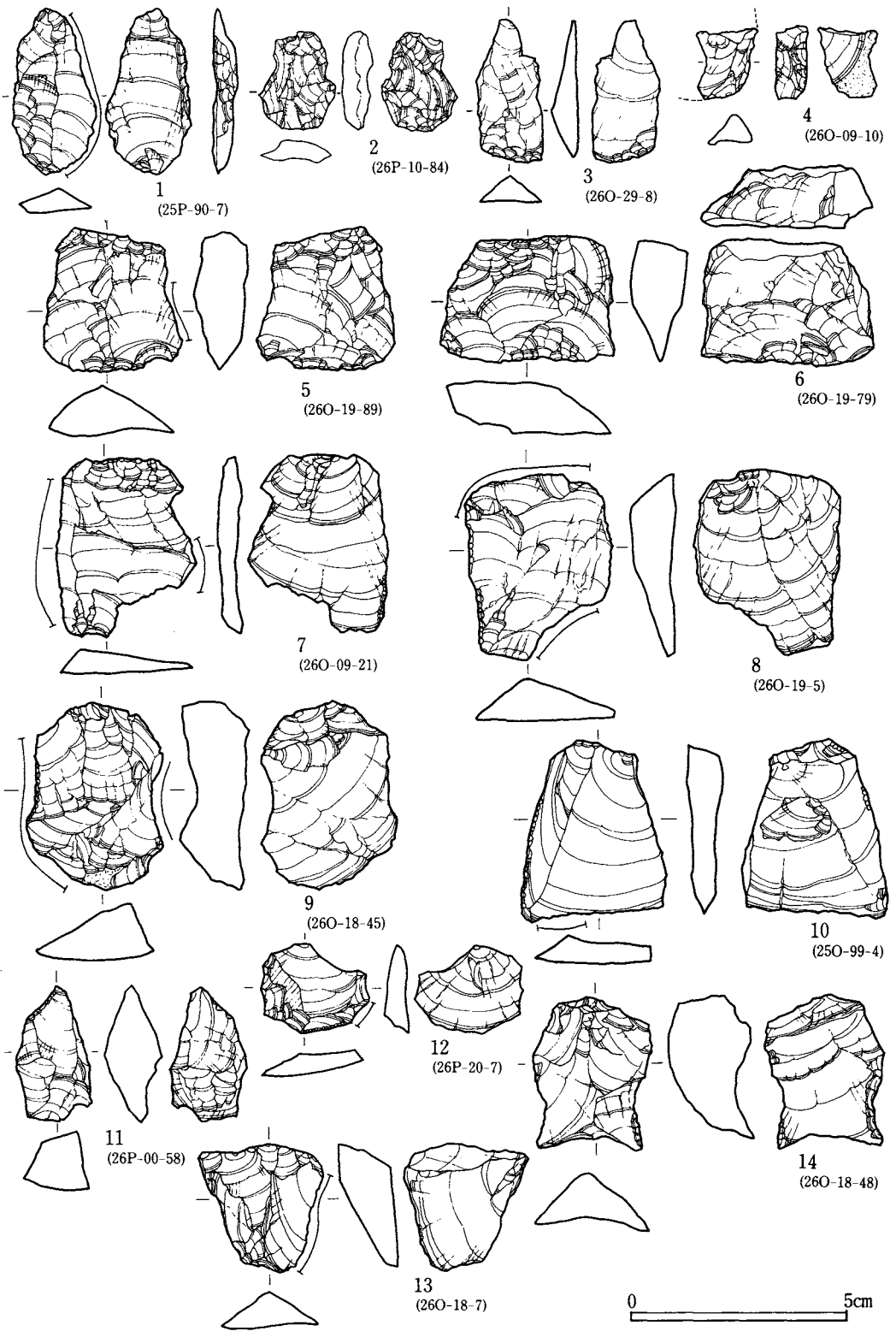
ングが施されたもので、基部調整は行われておらず、打点、打瘤を残している。ブランディング調整の施されている側縁に対する側縁には、使用痕が見られる。スクレイパー2、3、4、36のうち、2はほぼ全面に調整が施され、刃部には微細な調整が施されている。3、36は縦長剥片を素材とし、その先端部分に調整が施されているものである。4は2と同様のものの破片と考えられるものである。ピエスエスキュー5、6は大型の厚手の形の良く整ったもので、5の1側縁には使用痕が見られる。彫器15は縦長剥片の素材として、その先端部分に1つの槌状剥離跡が見られるのみで、他に調整は施されていない。2次加工のある剥片は、縦長・横長剥片の1側縁もしくは2側縁に微細な調整剥離が施されているものであり、素材となる剥片の形状や微調整剥離を施す部位に規則性は見られない。石核31、33、35、44、49のうち、31、35は両設の打面を持ち、基本的にはこの両打面より縦長剥片の剥離が行われているが、それとほぼ90度打撃方向を回し、横長剥片の剥離も行っている。33、49は礫を石核の素材としているもので、礫の自然面を多く残しているものである。33は小型の円礫を素材とし、打面の作りだしをすることなく直接に打撃を加えて縦長剥片を剥離している。49は近く礫の自然面を残すものであるが、拳大ほどの礫を素材とし、打面を含め数度の粗い剥離により円錐形に近い形状に作り上げ、縦長剥片を剥離している。44は小型の偏平な礫を素材とし、縦長剥片を一方よりの打撃により剥離を繰り返しているものである。接合資料は22例を数える。これらを見ると剥離される剥片(目的剥片)は接合資料 ha、hu、he、mi のように比較的小型の剥片を剥離しているものと、接合資料 hi、ho、maに見られるように幅広の大型の剥片を剥離しているもの大きく2つに分けることができる。この2は共通する部分も多く、打面は一定するものでなく、



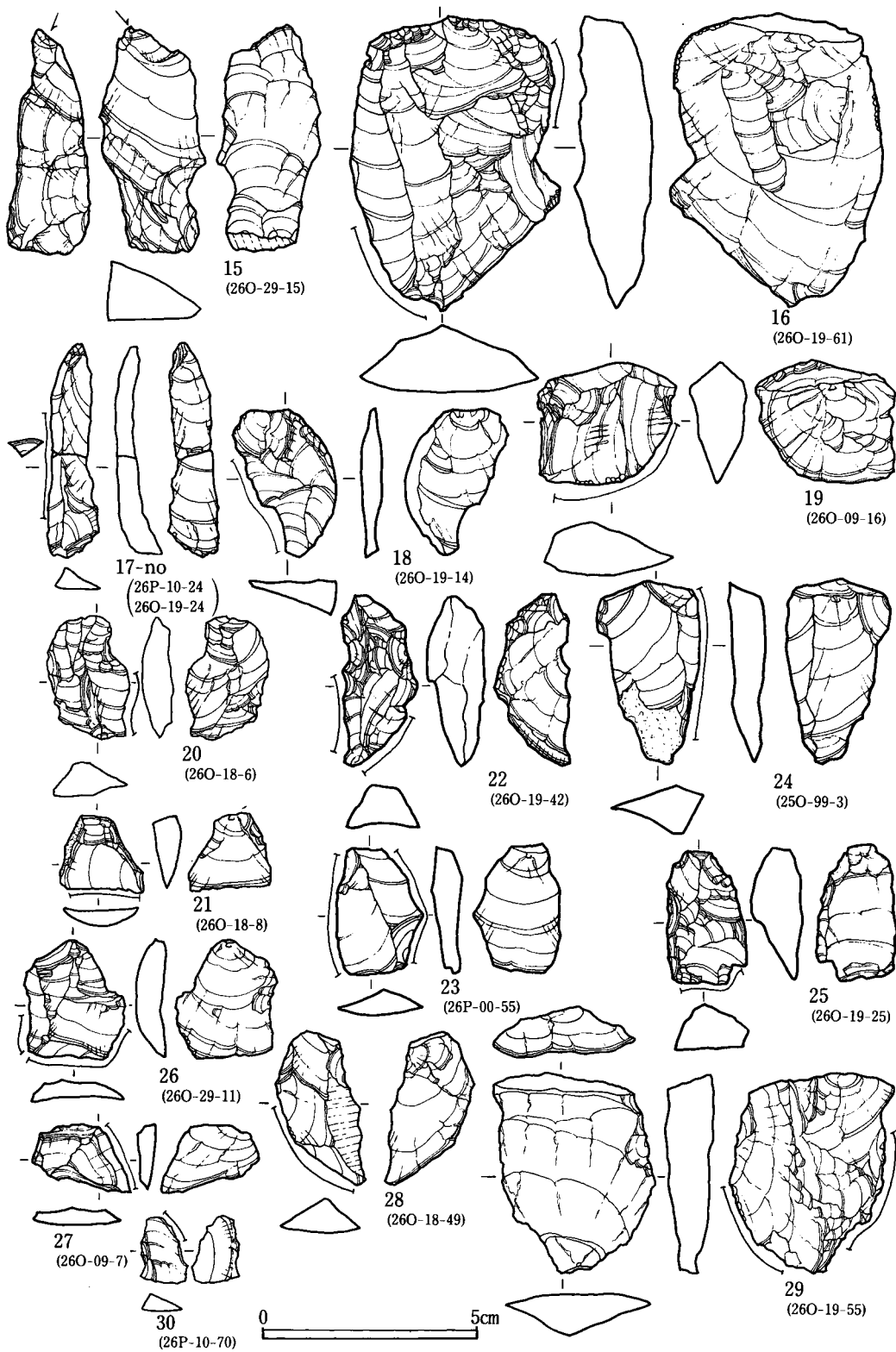
第461図 E₁ブロック遺物分布図



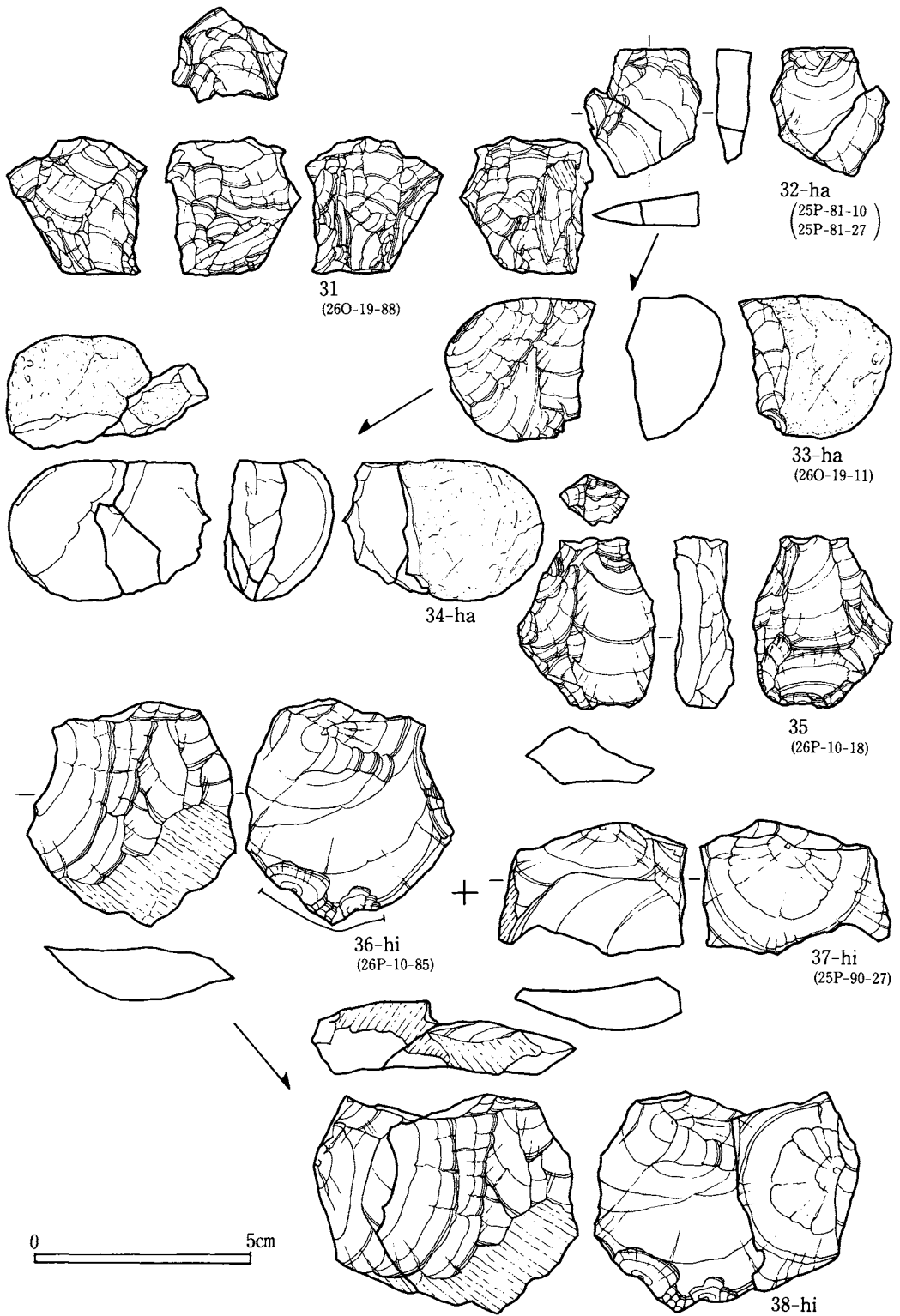
第462図 E₂ブロック遺物分布図



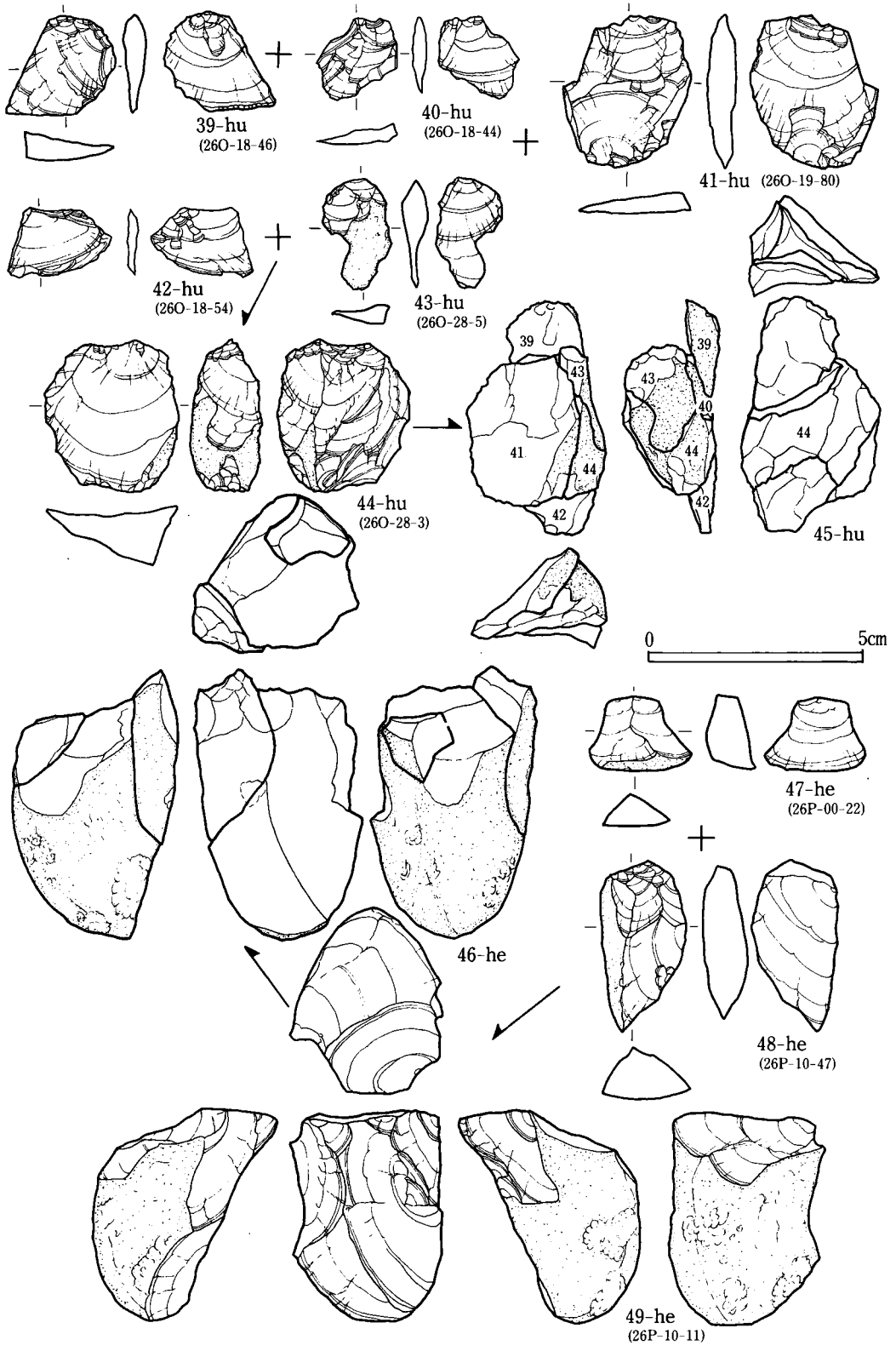
第463図 Eブロックの石器(1)



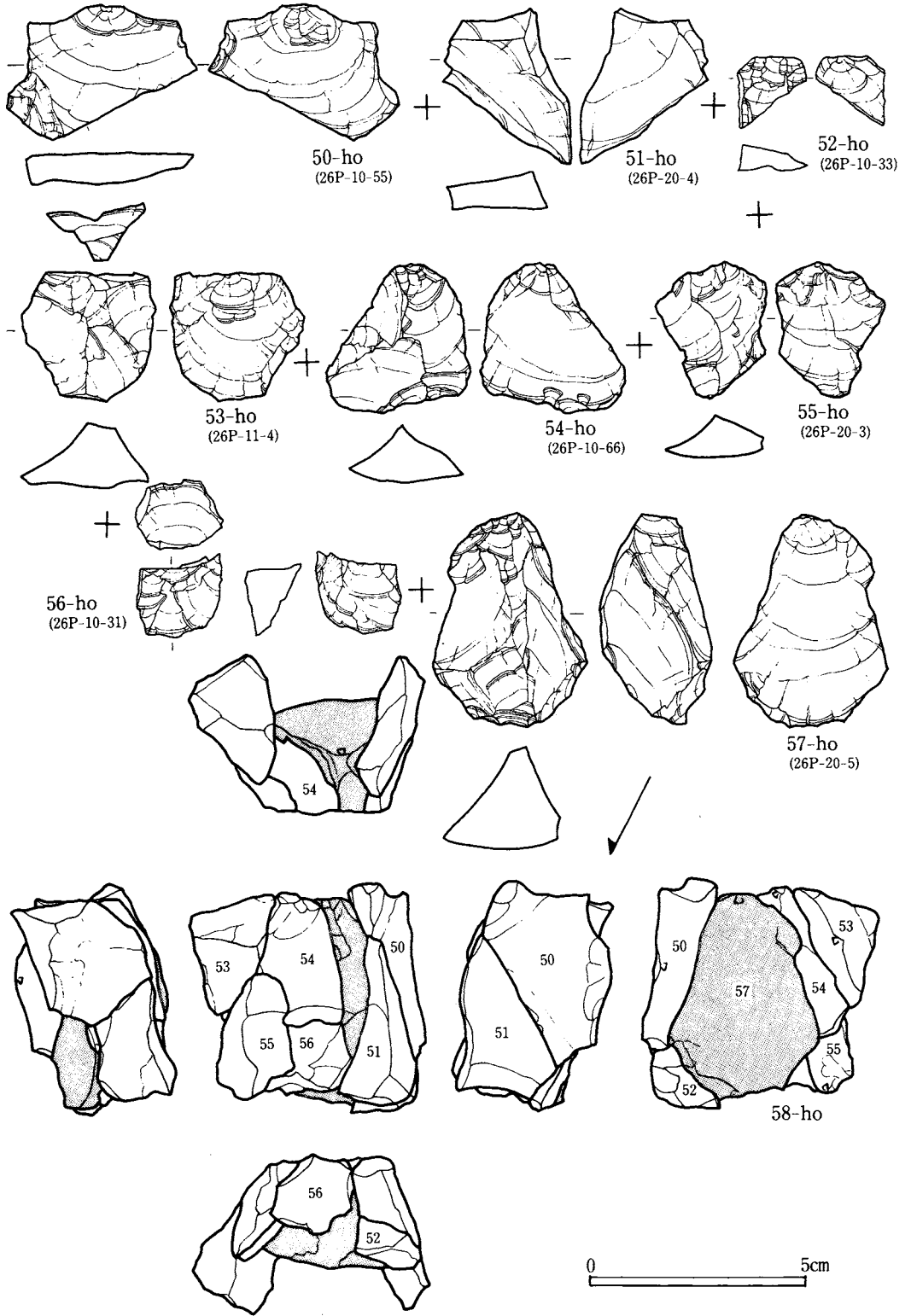
第464図 Eブロックの石器(2)



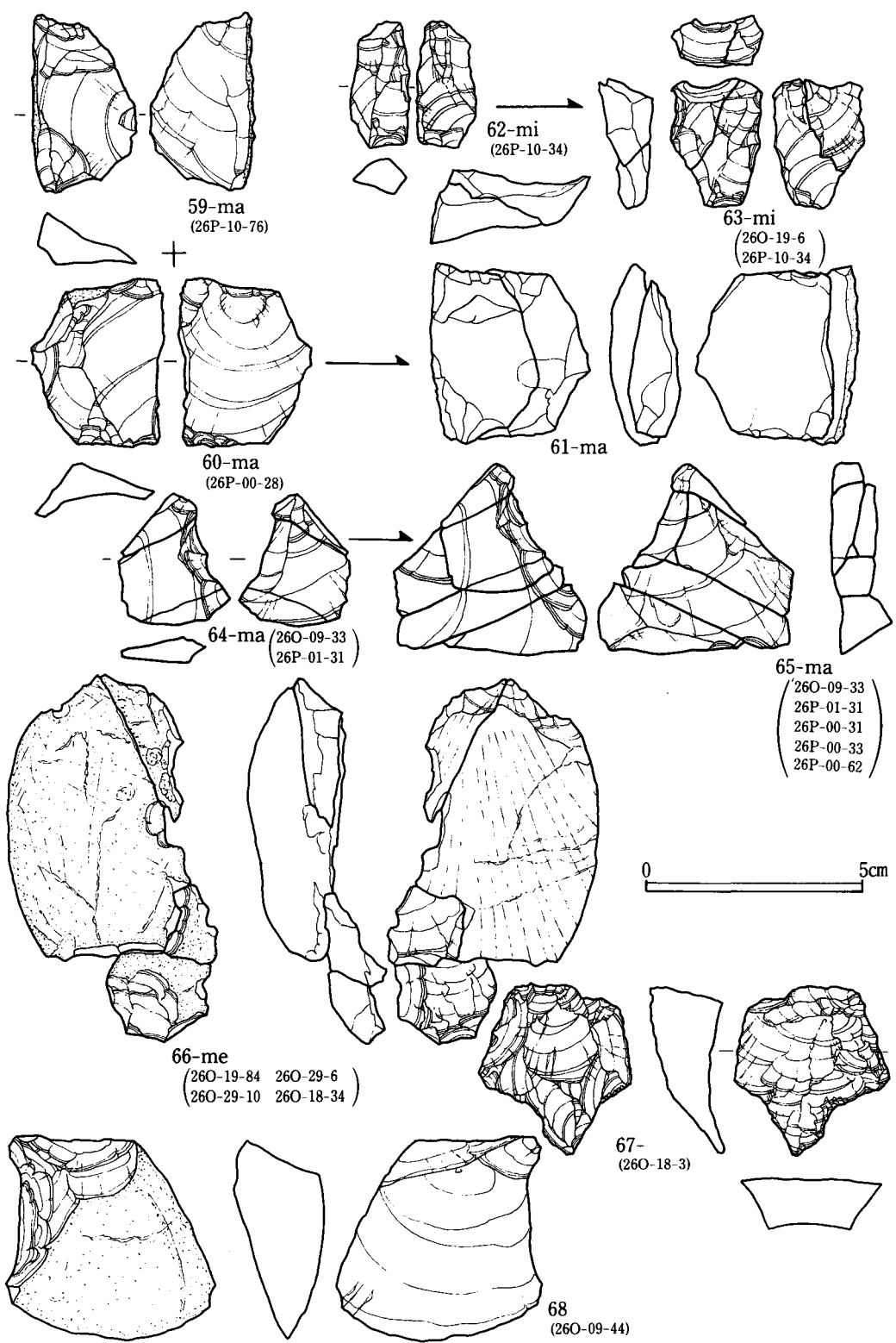
第465図 Eブロックの石器(3)



第466図 Eブロックの石器(4)



第467図 Eブロックの石器(5)



第468図 Eブロックの石器(6)

3～4回の剥片剥離の後、転移しながら（多くのものは90度ほどである）剥片剥離作業を繰り返している。この工程を把握しうる好資料として接合資料 ho が挙げられる。これを見ると横長もしくは幅広の縦長剥片（50、51、53、55）を剥離した後、ほぼ90度打撃方向を転移し、縦長剥片（54、57）の剥離を行っている。また56は打面調整剥片と考えられるもので、打面調整は丹念に行っていると思われる。この資料に見られるような剥片剥離方法が、剥離される剥片

第249表 Eブロック石器計測表

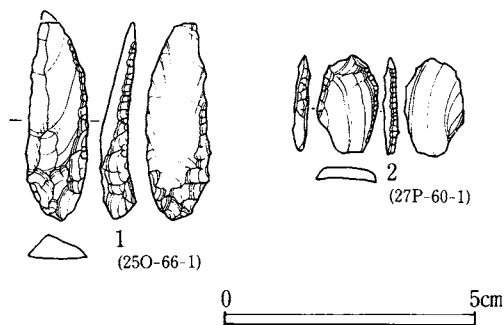
挿 図 番 号	器 種	石 質	計 測 値				遺 物 番 号	備 考
			長さmm	幅 mm	厚さmm	重さg		
463-1	ナイフ形石器	頁 岩	38.0	19.5	4.7	3.5	25P-90-0007	
2	スクレイパー	頁 岩	22.0	17.0	6.2	2.2	26P-10-0084	
3	スクレイパー	頁 岩	32.0	14.5	5.8	2.7	26O-29-0008	
4	スクレイパー	頁 岩	16.0	14.0	6.2	1.5	26O-09-0010	
5	ピエスエスキューユ	頁 岩	32.0	32.0	10.7	9.5	26O-19-0089	
6	ピエスエスキューユ	頁 岩	28.0	40.0	12.4	17.0	26O-19-0079	
7	2次加工のある剥片	頁 岩	40.0	32.0	4.7	5.9	26O-09-0021	
8	2次加工のある剥片	頁 岩	42.0	33.0	9.1	12.4	26O-19-0005	
9	2次加工のある剥片	頁 岩	42.0	30.0	14.0	18.6	26O-18-0045	
10	2次加工のある剥片	頁 岩	39.5	33.0	7.0	10.5	25O-99-0004	
11	2次加工のある剥片	頁 岩	31.0	17.0	13.4	5.6	26P-00-0058	
12	2次加工のある剥片	頁 岩	20.0	24.5	5.9	2.5	26P-20-0007	
13	2次加工のある剥片	頁 岩	29.0	27.5	10.5	6.4	26O-18-0007	
14	2次加工のある剥片	頁 岩	32.5	26.5	11.3	11.1	26O-18-0048	
464-15	彫 器	頁 岩	50.0	19.0	13.5	16.8	26O-29-0015	
16	使用痕のある剥片	頁 岩	65.0	47.5	13.6	48.7	26O-19-0061	
17no	使用痕のある剥片	頁 岩	24.4	11.3	5.5	10.4	26P-10-0024, 26O-19-0024	
18	使用痕のある剥片	チャート	33.0	19.0	7.2	3.7	26O-19-0014	
19	使用痕のある剥片	頁 岩	27.0	30.0	11.8	10.0	26O-09-0016	
20	使用痕のある剥片	チャート	27.0	18.0	7.0	3.7	26O-18-0006	
21	使用痕のある剥片	頁 岩	16.5	18.0	5.6	1.6	26O-18-0008	
22	使用痕のある剥片	頁 岩	38.5	16.0	12.9	7.9	26O-19-0042	
23	使用痕のある剥片	頁 岩	28.0	20.0	4.9	3.2	26O-00-0055	
24	使用痕のある剥片	頁 岩	40.0	23.5	10.4	7.8	25O-99-0003	
25	使用痕のある剥片	頁 岩	29.5	18.0	11.4	5.9	26O-19-0025	
26	使用痕のある剥片	頁 岩	26.5	22.0	5.2	3.3	26O-29-0011	
27	使用痕のある剥片	頁 岩	13.0	20.0	4.4	1.5	26O-09-0007	
28	使用痕のある剥片	頁 岩	31.0	17.0	7.4	3.9	26O-18-0049	
29	使用痕のある剥片	頁 岩	35.0	35.0	9.7	17.2	26O-19-0055	
30	使用痕のある剥片	頁 岩	15.0	10.1	4.3	0.6	26P-10-0070	
465-31	石 核	頁 岩	31.3	32.6	25.2	24.9	26O-19-0088	
32ha	剥 片	チャート	21.2	11.5	6.0	1.9	25P-81-0010 0027	Bブロック出土
33ha	石 核	チャート	32.4	30.8	22.8	30.8	26O-19-0011	

挿 図 番 号	器	種 石	質	計 測 値				遺 物 番 号	備 考
				長さmm	幅 mm	厚さmm	重さg		
34ha	—	—	—	—	—	—	—	32ha+33ha	
35	石 核	頁 岩		37.2	31.0	12.6	14.2	26P-10-0018	
36hi	スクレイパー	頁 岩		51.1	48.0	2.5	31.3	26P-10-0085	
37hi	剥 片	頁 岩		30.0	42.0	8.6	12.4	25P-90-0027 Eブロック出土	
38hi	—	—	—	—	—	—	—	36hi+37hi	
466-39hu	2次加工のある剥片	頁 岩		23.0	21.0	16.2	2.9	26O-18-0046	
40hu	剥 片	頁 岩		18.0	19.0	1.9	1.0	26O-18-0044	
41hu	剥 片	頁 岩		33.0	29.0	4.3	6.2	26O-19-0080	
42hu	剥 片	頁 岩		15.0	21.5	4.4	1.5	26O-18-0054	
43hu	剥 片	頁 岩		25.0	15.0	5.3	1.5	26O-28-0005	
44hu	石 核	頁 岩		32.9	29.7	15.4	13.9	26O-28-0003	
45hu	—	—	—	—	—	—	—	19hu~44hu接合	
46he	—	—	—	—	—	—	—	47he+48he+49he	
47he	剥 片	黒色緻密質安山岩		17.0	23.0	8.2	2.6	26P-00-0022	
48he	剥 片	黒色緻密質安山岩		36.0	19.0	11.0	1.8	26P-10-0047	
49he	石 核	黒色緻密質安山岩		55.0	30.6	30.1	62.4	26P-10-0011	
467-50ho	剥 片	頁 岩		27.0	39.0	6.6	8.9	26P-10-0055	
51ho	剥 片	頁 岩		32.0	26.5	9.6	8.4	26P-20-0004	
52ho	剥 片	頁 岩		13.0	16.0	5.9	1.5	26P-10-0033	
53ho	剥 片	頁 岩		29.0	30.0	13.7	10.1	26P-11-0004 Eブロック出土	
54ho	剥 片	頁 岩		32.0	33.0	12.2	8.4	26P-10-0066	
55ho	剥 片	頁 岩		29.0	25.0	8.4	6.6	26P-20-0003	
56ho	剥 片	頁 岩		16.0	19.0	11.2	3.8	26P-10-0031	
57ho	剥 片	頁 岩		48.5	35.0	25.0	30.8	26P-20-0005	
58ho	—	—	—	—	—	—	—	50ho~57ho接合	
468-59ho	剥 片	頁 岩		39.0	24.0	13.0	10.4	26P-10-0076	
60ho	剥 片	頁 岩		37.0	29.5	8.4	10.3	26P-00-0028	
61ma	—	—	—	—	—	—	—	59ma+60ma	
62ma	剥 片	頁 岩		28.0	14.0	12.2	10.4	26P-10-0034	
63mi	—	—	—	29.0	21.0	12.2	5.4	62mi+ 26O-19-0006	
64mu	剥 片	頁 岩		20.2	7.3	5.3	1.2	26O-09-0033 節理面での剥離	
65mu	—	—	—	44.8	43.8	9.0	7.4	64mu+26O-09-31, 33+26P-00-31, 33	
66me	—	チャート		83.6	44.8	22.4	77.9	26O-18-34+19-84+-29-06, 01	
67	剥 片	頁 岩		38.0	35.0	12.6	15.9	26O-18-0003	
68	剥 片	黒色緻密質安山岩		46.0	48.0	20.0	45.2	26O-09-0044	

の大きさを問わず本ブロックを始め本石器群に共通しかつ多くみられるものである。

ブロック以外の遺物 (第469図)

確認調査時に単独出土の先土器時代遺物が2点検出された。1は25O-66グリッドからの出土であり、出土層位は第IV層上位からである。石材は砂岩を用い、縦長の剥片を素材とし、1



第469図 地点外の遺物

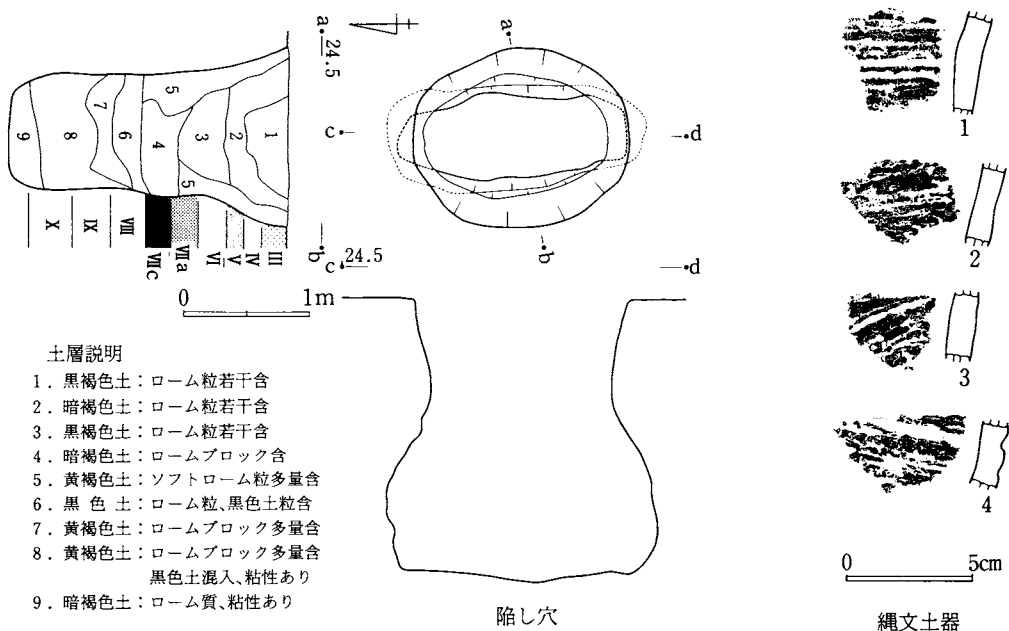
側縁に両面からのブランディング調整が施され、基部には打点、打瘤を削除する調整が入念に行われている。2は27P-60グリッドの第III層上位からの出土である。石材は頁岩を用い、薄い横長剥片を素材としている。ブランディング調整は、打点、打瘤を削除するものとそれに対する1側縁に微細な調整剥離が施されている。

第2節 縄文時代以降の遺構と遺物

本遺跡は先土器時代の他に、縄文時代、平安時代、そして近世の遺構・遺物も量的には少ないが検出されている。しかし、これらの上層に在る遺構・遺物は、以前の牛蒡栽培のトレンチャーにより耕作が盛んに行われていたために、土層の天地返しはなほだしい状態であり、著しく破壊されていた状態であった。

A. 縄文時代 (第470図、図版83)

本遺跡より検出された遺構は陥し穴状土坑1基、遺物としては25P-30グリッドより条痕文



土層説明

1. 黒褐色土：ローム粒若干含
2. 暗褐色土：ローム粒若干含
3. 黒褐色土：ローム粒若干含
4. 暗褐色土：ロームブロック含
5. 黄褐色土：ソフトローム粒多量含
6. 黒色土：ローム粒、黒色土粒含
7. 黄褐色土：ロームブロック多量含
8. 黄褐色土：ロームブロック多量含
黒色土混入、粘性あり
9. 暗褐色土：ローム質、粘性あり

第470図 土坑・縄文土器・縄文時代石器

系の土器片数点が検出されたのみである。

陥し穴状土坑は、わずかに谷に向かって傾斜をもつ25P-46グリッドに在る。そして長軸は谷方向に向かっている。規模は、開口部で長軸1.9m、短軸1.55m、底部では長軸2.3m、短軸0.9m、深さは2.4mを計り、平面形は楕円形を呈する。長軸での断面形は底部がオーバーハングし、フラスコ状を呈している。遺物の出土は無かった。

遺物は25P-30グリッドの包蔵層より縄文時代早期の遺物数点が検出された。これらの遺物は表裏面に条痕文が見られる条痕文系の粗製土器片であり、胎土中には少量の繊維が含まれている。

B. 平安時代 (第471図、図版82)

住居跡1軒が検出されている。この住居跡は調査区域のほぼ中央部の25O-19グリッドに在る。攪乱が著しいため明瞭なプランの検出はできなかったが、柱穴を含むピットやわずかに残された壁の立ち上がりなどから推定すると、平面形は、一辺4m程の正方形に近い隅丸方形を呈するものと思われる。西側壁にはカマドが敷設され、遺物はカマド周辺より多く検出されたが、いずれも小破片である。1、2は甕形土器の底部破片であり、器面には入念なヘラ削りによる調整がみられる。3は、坏もしくは椀形土器の口縁部破片である。

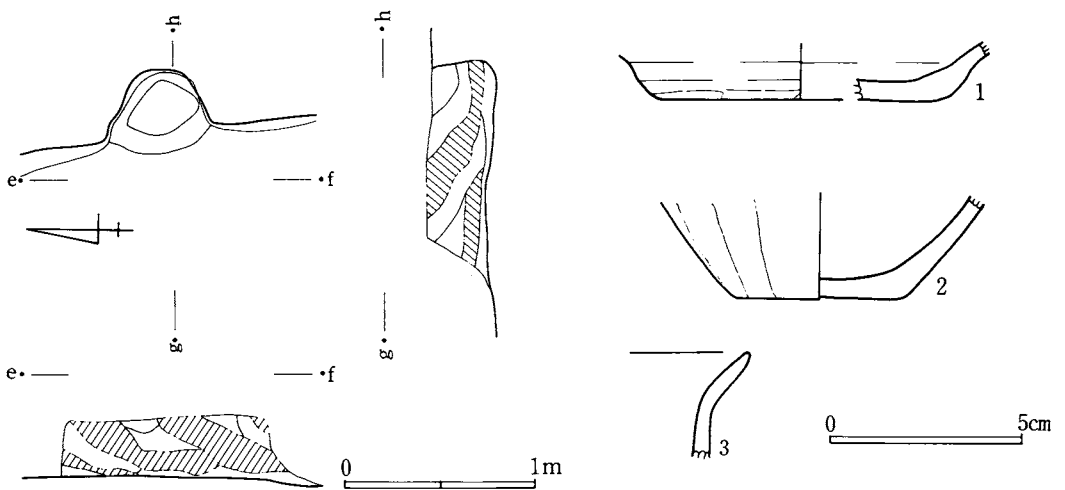
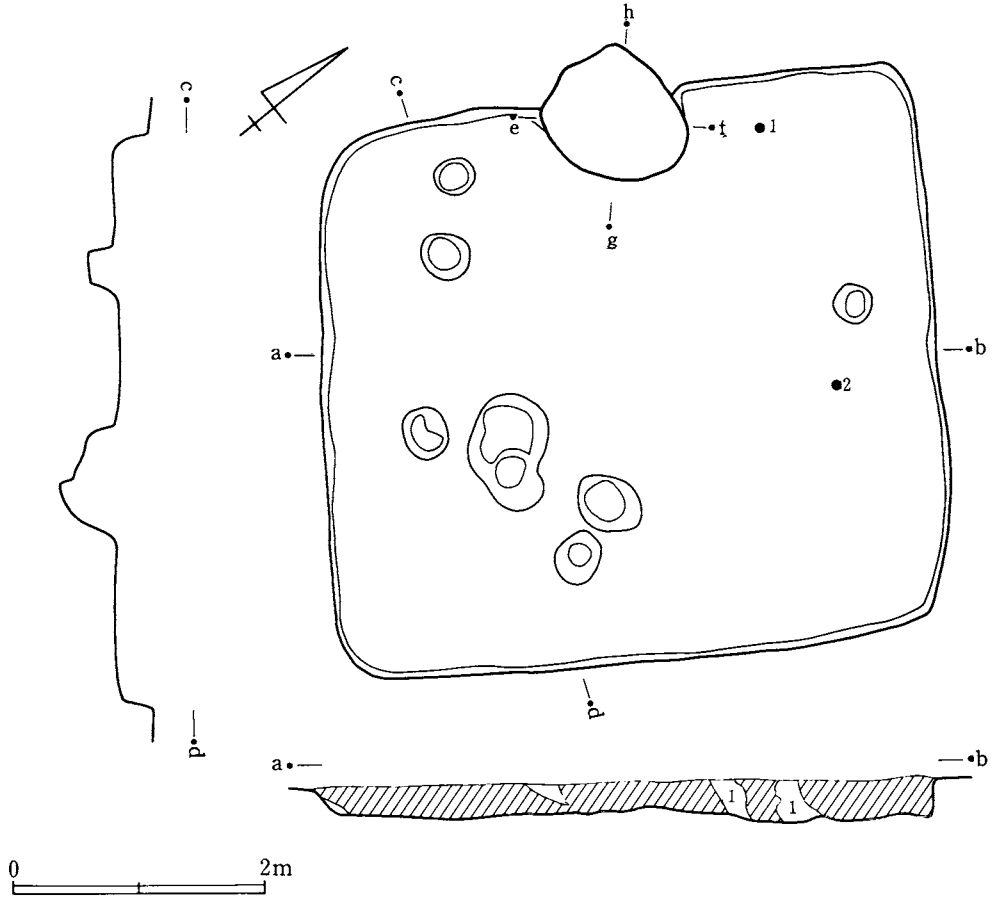
C. 近世 (第472図)

近世の遺構は検出されなかったが、26P-20グリッドを中心にその周辺より、まとまった状態で古銭や素焼の土器が検出され、近世のいくつかの墓墳が在った可能性が考えられる。古銭は、「熙寧元宝」(2)、「元豊通宝」(3)、「洪武通宝」(4)、「永楽通宝」(5)が各1点、そして数枚が付着した状態の「寛永通宝」がある。この他に、野菜と人面を模した泥面子が検出されている。

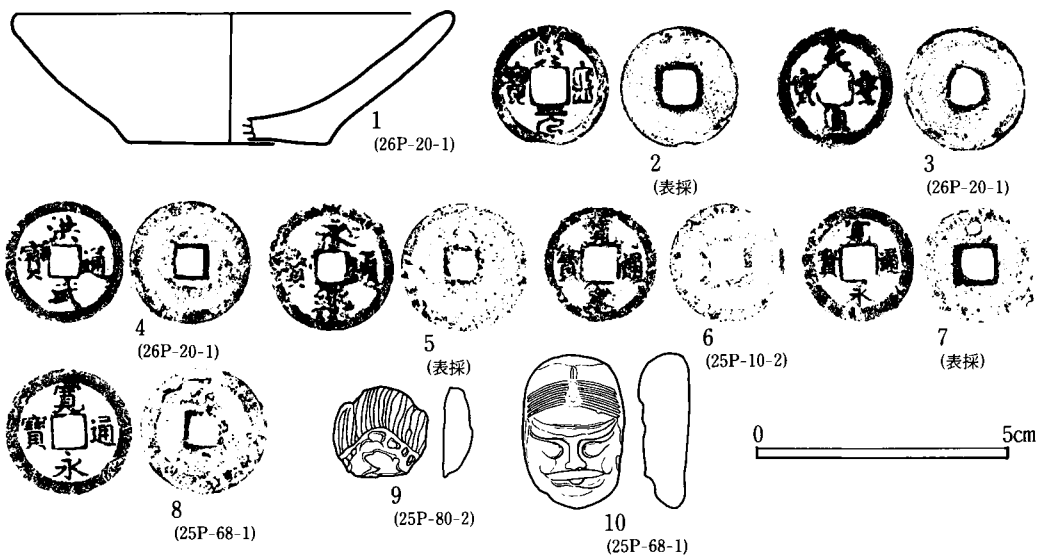
小 結

芋窪遺跡からは、発掘調査の結果、先土器時代、縄文時代、平安時代、近世の遺構・遺物を検出されたが、先土器時代以外の時期については、遺構・遺物とも希薄で、他の南志津地区での遺跡と同様な様相をみせている。

先土器時代の石器群や遺物は他の遺跡でも多く検出されているが、本遺跡のように第VI層からVII層にかけて1,000点を越える多量の遺物が1つの石器群として検出されたものはそれほど多くない。その分布状況においては小範囲の中に密集した状況であり、数個のブロックの存在が確認でき、それらは同一時期に形成されたと考えられるものであり、また遺物の接合状況を見ると、個々のブロック内での接合資料はもとより、他のブロック間とかなり広範囲において接合資料をみることができ、本石器群が、かなり複雑な当時の人々の行動様式をみせていると



第471図 1号住居跡・カマド・土器実測図



第472図 近世以降の遺物

思われる。

先土器時代の他に、平安時代の住居跡が1軒のみではあるが検出されたことは、印旛沼周囲で多く見ることのできるこの時期の居住空間としての集落が成り立つ範囲が、本地区の東端に位置する本遺跡が限界域であったと考えられよう。 (野口)

付節 主要石器解説（追加）（第473～第480図）

Aブロック（1～6）

1. 粘板岩質のホルンフェルス製の横長剥片。背面は原礫面を切る3枚の大きい剥離面と、打面側からの小さい剥離面とから構成されている。打面は2面構成で、稜上加撃となる。底辺の腹面側に細かい刃こぼれが認められる。

2. 安山岩製の石刃である。この安山岩は本例のみで、石刃として搬入されたことは明らかである。2稜型の背面構成をもつ整った形態のものであるが、背面左側の面は石核側面であり、また、背面右側の面は下設打面からの剥離面となっている。上設打面は平坦なもので、末端は下設打面の一部を切っている。

3. 小型の剥片を用いた楔形石器。おそらく、素材となった剥片も楔形石器から剥落した剥片と見られ、これは、大林遺跡の項で指摘した第1・第2工程そのものである。なお、本資料が台形石器の範疇に帰属する可能性は極めて高く、小型の楔形石器全般の見直しが必要である。珪質頁岩製。

4. 楔形石器であるが、末端に切り立った刃部が認められ、削器に転用されたものと見られる。珪質頁岩製。

5. 楔形石器の接合資料。剥片2点（5a、5b）が石核（5c）と接合している。接合状況から、原礫面と分割面とを両側縁にもつ角柱状の素材を石砧上に固定して、これを連続的に加撃することによって扁平薄手の矩形をした剥片が何枚も得られている過程を復原することができる。剥片に特に使用痕は認められないが、5aの頭部は極めて鋭利である。5cから明らかのように、剥片を落とした段階で、この石核の機能は停止している。珪質頁岩製。

6. 斜軸尖頭器を想起させる側削器である。1と近似した粘板岩質ホルンフェルスが用いられているが、別母岩と見られる。素材は円盤状をした石核から得られており、背面には求心的な剥離痕が観察される。2次加工は腹面右側縁部、背面尖頭部などに加えられている。

Bブロック（7～14）

7. 珪質頁岩製の楔形石器。素材のポジ面を一部に残すが、剥片両端からの砸撃剥離面が認められる。側面に折れ面があり、折断剥片を素材としていることが分かる。側縁に刃こぼれが多く、これ自体が刃器として機能していた状況が察知される。

8. やはり珪質頁岩製の楔形石器。両端部より旧剥離面を切る大小の砸撃剥離痕が認められる。旧剥離面は、その剥離方向が一定せず、多面体の石核から楔形石器のブランクを生産していた可能性が高い。

9. 小型の楔形石器で、3と比較される。入念な砸撃剥離が両端から繰り返し加えられており、台形石器の調整技術であると位置づけたい。この場合、未加工の一側縁が刃部となろう。緻密な安山岩製。

10. 楔形石器と剥片の接合資料。素材は厚手の剥片で、3角錐状の形態をしている。砸撃剥離は、この3角錐の底面にのみ加えられており、頂部の削がれた剥片が接合する。珪質頁岩製。

11. 楔形石器から落とされた剥片が2枚接合している。この例から明らかな如く、楔形石器から剥落した剥片には、再度砸撃調整が加えられており、刃器としての再生が看取される。同様の例は多数あり、大林遺跡で指摘された楔形石器の生産・消費システムが一般的であることを明示している。粘板岩起源のホルンフェルスが素材とされている。

12. 楔形石器が最終的に分割された状態を示す接合資料である。部厚い角柱状の素材が用いられており、小石刃状の剥片が多く生産された状況が窺われる。これらの小石刃が細石刃と同様な機能を帯びたものであった可能性は既に指摘した。興味深いことに、この分割片の片方は削器に再生されている。実測図右から2番目の側縁に認められる細かい剥離痕が刃部となる。珪質頁岩製。

13と14は楔形石器から得られた小石刃である。13はチャート質の珪質頁岩製で、腹面両端に細かい調整痕がある。なお、この調整も砸撃剥離によるものである。14は安山岩製で、尖端部に細かい2次加工が加えられている。錐状の尖頭器となろう。

Cブロック (15~19)

15. 珪質頁岩製の楔形石器。表裏に素材剥片の剥離面を留め、両端に砸撃調整による細かい剥離痕が残されている。

16. やはり楔形石器であるが、石英の小円礫から剥離された小型の剥片を素材としているらしい。砸撃剥離は上下両端から加えられているが、片面の大きい剥離は一端から他端に抜け、12と同様に半分に削げ落ちた剥片と見られる。しかし、分割後にも加撃が行なわれており、3、9と同様の小型の器体が形成されている。

17. 側削器であろう。小石刃様の縦長剥片が用いられているが、背面構成から見て楔形石器から得られた剥片である蓋然性が高いであろう。2次加工は背面左側縁に集中している。石材は珪質頁岩か珪化凝灰岩と思われるが確定できない。

18. 楔形石器の分割片である。縦断面紡錘形をした本体が斜めに削げ落ちるように分割されている。下端は激しい加撃により潰れたような状態を呈している。側縁の一部に連続的な刃こぼれがあるが、使用痕と断定することは慎まれる。安山岩製。

19. 削器の一種と見られる。6と近いであろう。打角の大きな厚手盤状の剥片の周縁部に2次加工が認められる。2次加工は錯向的に表裏両面に加えられている。粘板岩質のホルンフェ

ルス製。

Dブロック (20~25)

20. 流紋岩製の楔形石器。板状の幅広剥片を素材としている。片面に旧ネガ面が大きく残されているが、もう片面には両端からの砸撃剥離痕が残されている。しかし、この打面は素材剥片の平坦な旧剥離面なので、楔形石器に特有のリニアな打面形態はとらない。石核の一種と分類されようか。

21. 砸撃剥離による剥片が2枚接合している。砸撃剥離により得られた、やや大き目の剥片を更に石砧上に固定し、これを加撃することによって縦長の剥片を2枚削ぎ落とすように打ち落している。その片割れの側縁部には顕著な刃こぼれがあり、UFであることは明らかである。安山岩製。

22. 楔形石器から打ち落とされた剥片に、別な剥片が接合している。22aは自然面からなる打面をもつ剥片で、その背面構成から見て、求心的な剥離痕をもつ石核から得られたものと考えられる。22bも、この石核から生産された剥片を素材とするが、側面に旧石核の一部をとり込んでいる他は、全て砸撃剥離痕によって被覆されている。実測図右側の面がポジ面で、アンジュレーションを起こしている。この剥片は剥離後にも砸撃剥離が加えられている。また、縦割れしているが、これが企図的なものであるかどうかは分からない。

23. 前例と同一の母岩である。自然面を打面とする横長剥片が2枚接合しているが、楔形石器のブランクを作出する過程に他ならず、22aと同一の性格を与えることができよう。緻密な安山岩製で、9も同一の母岩となる。

24. 楔形石器から剥離された剥片が2点接合した。24aは小石刃様の剥片、24bも縦長の剥片となっている。これには、腹面の一部に小剥離痕を留めており、また、背面側にも刃こぼれがあるのでUFである可能性が高い。楔形石器から得られた剥片が、刃器として供用されていることを示唆する好例であろう。安山岩製で、25と同一の母岩である。24、25とは、ほぼ長さが一致しており、小さ目の原石の用いられていることが窺われる。

25. 楔形石器2点の接合資料。楔形石器から剥離された剥片から、更に別な楔形石器を、言わば入れ子状に生じていく過程を明らかに示す好例である。25aは薄手の礫面付きの剥片で、その腹面には両端からの砸撃剥離痕が何枚も看取される。25bはやや厚味のある角柱状の例で、母体からの剥離後に、25aと同様に砸撃剥離が施されているが、それは小さ目の剥離に終始し、両端に鑿状の刃部を形成している。

Eブロック (26~35)

26. 楔形石器。偏平横長の剥片を素材としている。砸撃剥離は上下・左右から行なわれてお

り、結果的には全周加工のように見え、各辺共に鋭利な刃部を保持している。図の右側の面には素材剥片のポジ面が大きく残されているが、左側の面は殆んど砸撃剝離痕によって覆われている。粘板岩起源のホルンフェルスから作られている。

27. 明瞭な使用痕を一側縁に留める楔形石器である。実測図右面は楔形石器本体から剝落時の面で、剝落後にも微細な調整剝離とも言える両極的加撃が上下に加えられている。一側縁には旧剝離面が残されているが、もう一方の縁辺は極めて鋭利で、微細な刃こぼれが長く連続的に看取される。側刃器と見られよう。珪質頁岩、あるいは珪化した凝灰岩を素材としている。

28と29は同一母岩に属する楔形石器。両例共に比較的部厚い剥片を用い、両端に砸撃剝離痕を留めている。楔形石器の中では、石核的性格の濃い資料であろう。珪質頁岩製。

30. 楔形石器から剝離された剥片2点の接合資料。側縁部の上方に素材剥片のポジティブバルブがあり、厚手の角柱状の剥片を素材としていることが分かる。接合状況の腹面部分から明らかのように、上下両方の打面から打ち落とされた剥片が、各々の末端部で接合している。石材は凝灰岩である。

31. 剥片であるが、打面部を再加撃して除去している。側面には原礫面と共に、石核の一部が残されている。粘板岩質ホルンフェルス製。

32. やはり剥片であるが、点状打面をもち、楔形石器から剝離された資料と見られる。背面には上下両端からの剝離面の切り合いが看取される。珪質頁岩製。

33. 横長剥片素材の尖頭器である。2次加工は打面部側と底辺とに観察される。打面部側のそれは、打面部を除去するように、背面側から腹面側に向かう剝離であり、器体を石砧上に横に寝せ、僅かに背面を手前に傾けた状態を保ったまま連続加撃したものと考えられる。これは砸撃剝離そのものであり、所謂台形石器の調整技術の中核をなすものである。底辺部の剝離は細かいものであるので、あるいは、石砧からの反作用に起因するものであるかもしれない。いずれにせよ、この尖頭器は台形石器の製作技術の系譜の上に位置づけられ、極めて重要な意味を持つことになろう。

34. 台形石器様の石器。礫面付きの横長剥片の打面部が折り取られているが、その過程は前例に等しく、砸撃調整によるものである。刃部は水平で前例と異なるが、明らかに同一の技術的応用を看取することができよう。なお、33、34は珪質頁岩の同一母岩である。

35. 盤状連続横打石核(35b)に調整段階の礫面付き剥片(35a)が接合する。石核は素材の円礫を輪切りするように分割した部厚い剥片で、打面は2面構成、底面であるポジ面を切り取るように横長の剥片を連続的に剝離している。粘板岩質のホルンフェルス製である。

以上32個体の資料について補足的な観察を行ってきたが、これらの資料によっても芋窪遺跡の石器群の概要を知ることは可能である。芋窪遺跡の石器群の技術形態学的構成は、次のよう

なシステムとして抽象化することができる。以下番号は付節の項の資料番号とする。

構成Ⅰ 諸種の一般的剥片剥離手法に規定された石器群である。打面位置が固定されず、比較的大型の剥片を生産している。剥片の一部は、刃器(1)として機能しているが、大半は構成Ⅱのブランクに転化したものと推定している。

構成Ⅱ 楔形石器の生産・消費過程である。楔形石器は、

a. 両極石核 (5・7・8・10・11・12・15・20)

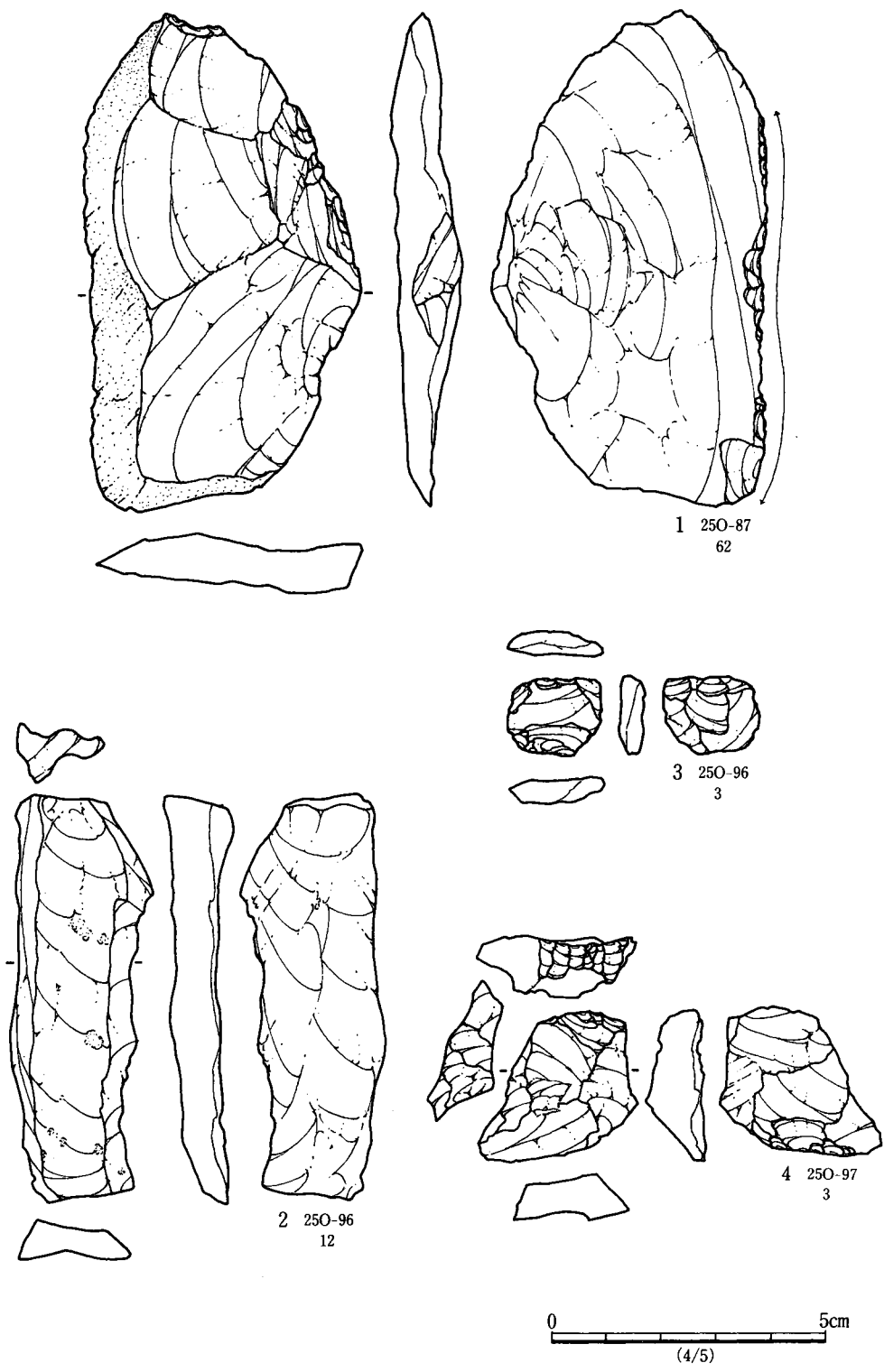
b. ピエスエスキーユ (3・9・16・26・27)

の両者に分離するのが一般的であるが、両者は明確に二分しうるものではない。それは、個別資料の分類が単に困難であるというばかりではなく、a類とb類とが必ずしも別個の範疇として固定されていないことによるものと考えられる。すなわち、構成Ⅱとは両極技法による連続的な剥片生産過程にほかならず、石核か楔かという機能的問題に限定する以前に、阿部の指摘のとおり(阿部 1983)、バイポーラーテクニックの有効性を多面的に考慮しつつ、個々の石器群の脈絡のなかで、バイポーラーテクニックによって生産された石器、すなわち楔形石器の位置づけを行う要があろう。

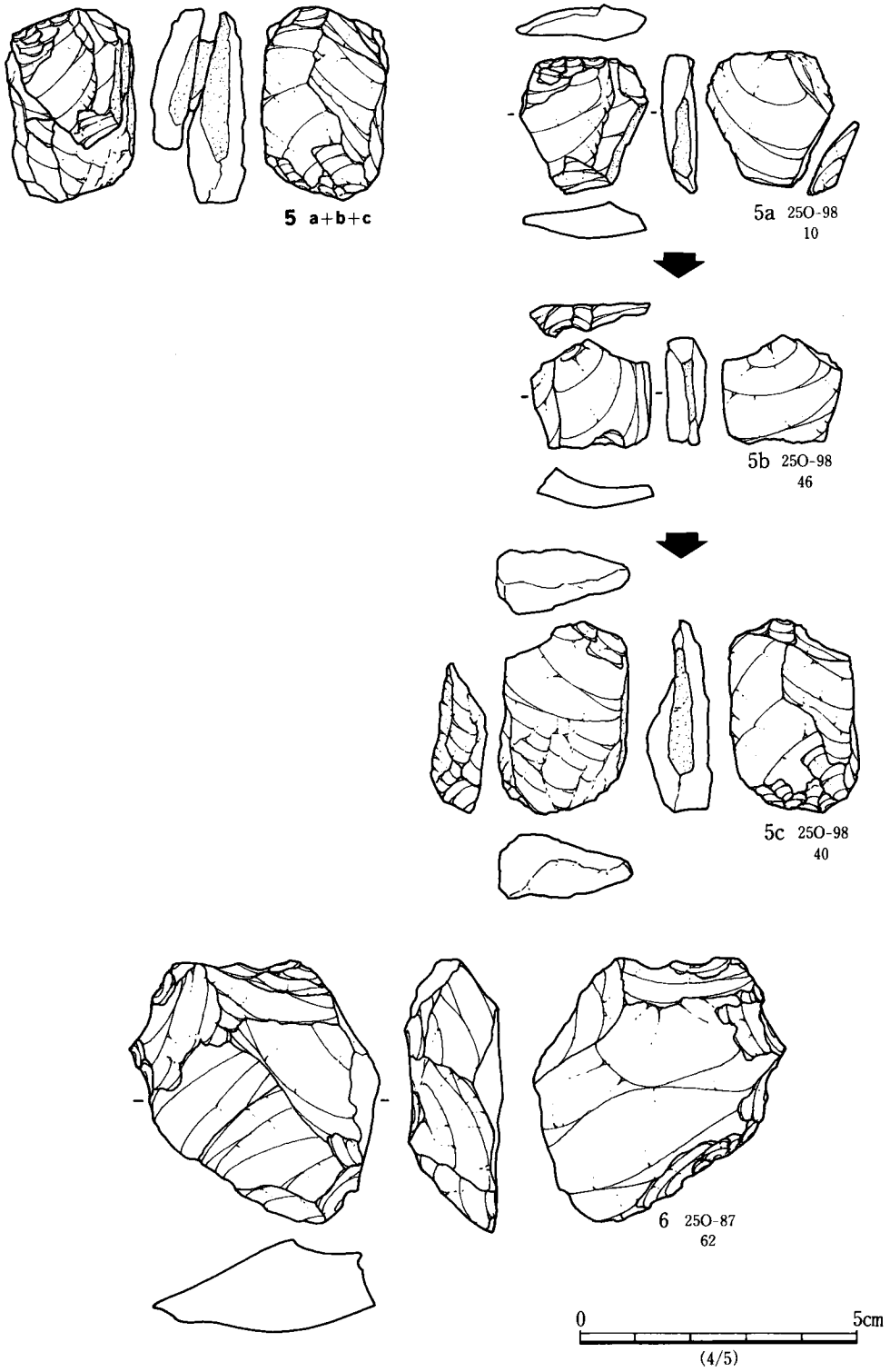
このような視点にたつて、芋窪遺跡の石器群を瞥見すると、多量に搬入された母岩の過半のものに両極技法による剥離過程が適用されており、更に、楔形石器以外にほとんど石器を含んでいないという状況を考慮すると、楔を多く消費する活動形態を反映するものとの見解を採るよりも、むしろ、各種の機能を負担する石製装備の製作に両極技法が駆使されたものと理解するのが妥当であろう。この見解は、本地域における第2黒色帯上部石器群に楔形石器が卓越するという事実によって更に補強されるが、たとえば、本報告書に収録されている、大林遺跡第41ブロック・大堀遺跡等の石器群の内容と比較されねばならない。

大林遺跡第41ブロックの石器群は、芋窪遺跡ほど極端とはいえないが、27点の楔形石器とそれから落とされた多量の剥片類を保有していた。楔形石器以外にはほとんど定型的な石器を含んでおらず、芋窪遺跡と同様の構成を示していると判断した。ここでは、同一母岩の資料を対象として楔形石器の生産・消費のプロセスを検討したが、両極技法が細部調整技術として定着していること、楔形石器から剥離された剥片(OEF)が小刃器としてさかんに利用されていること、そして、その機能が細石刃と同様に軸に嵌挿された植刃であった可能性をも推定した。

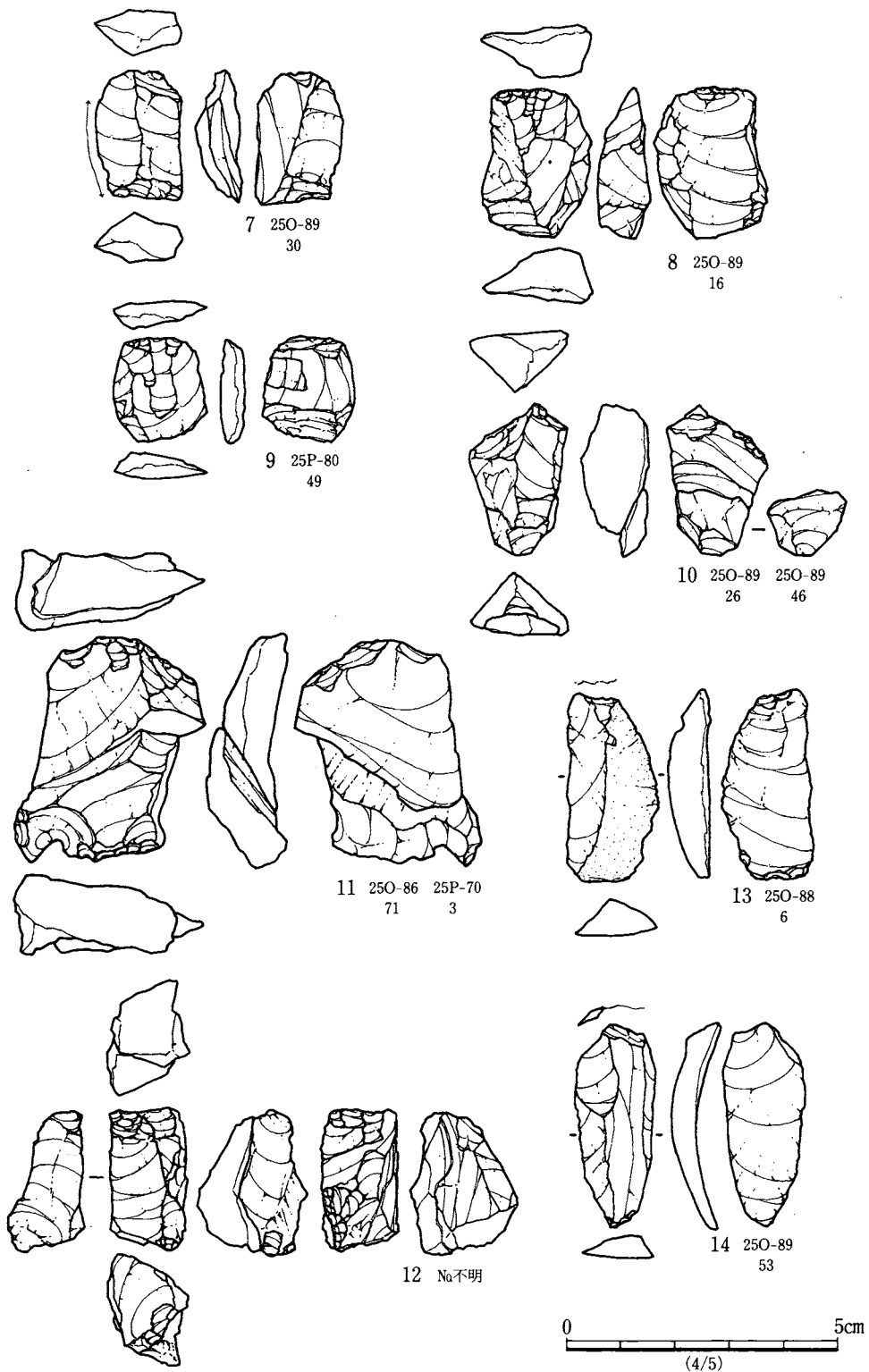
以上のごとく、芋窪遺跡を巡る諸問題は極めて多岐にわたっており、今後の詳細な分析が必要である。また、その編年的な位置づけに関連した問題に関しては、なんら言及できなかったが、台形石器との関連性に関しては十分な議論を要すると思われる。(田村)



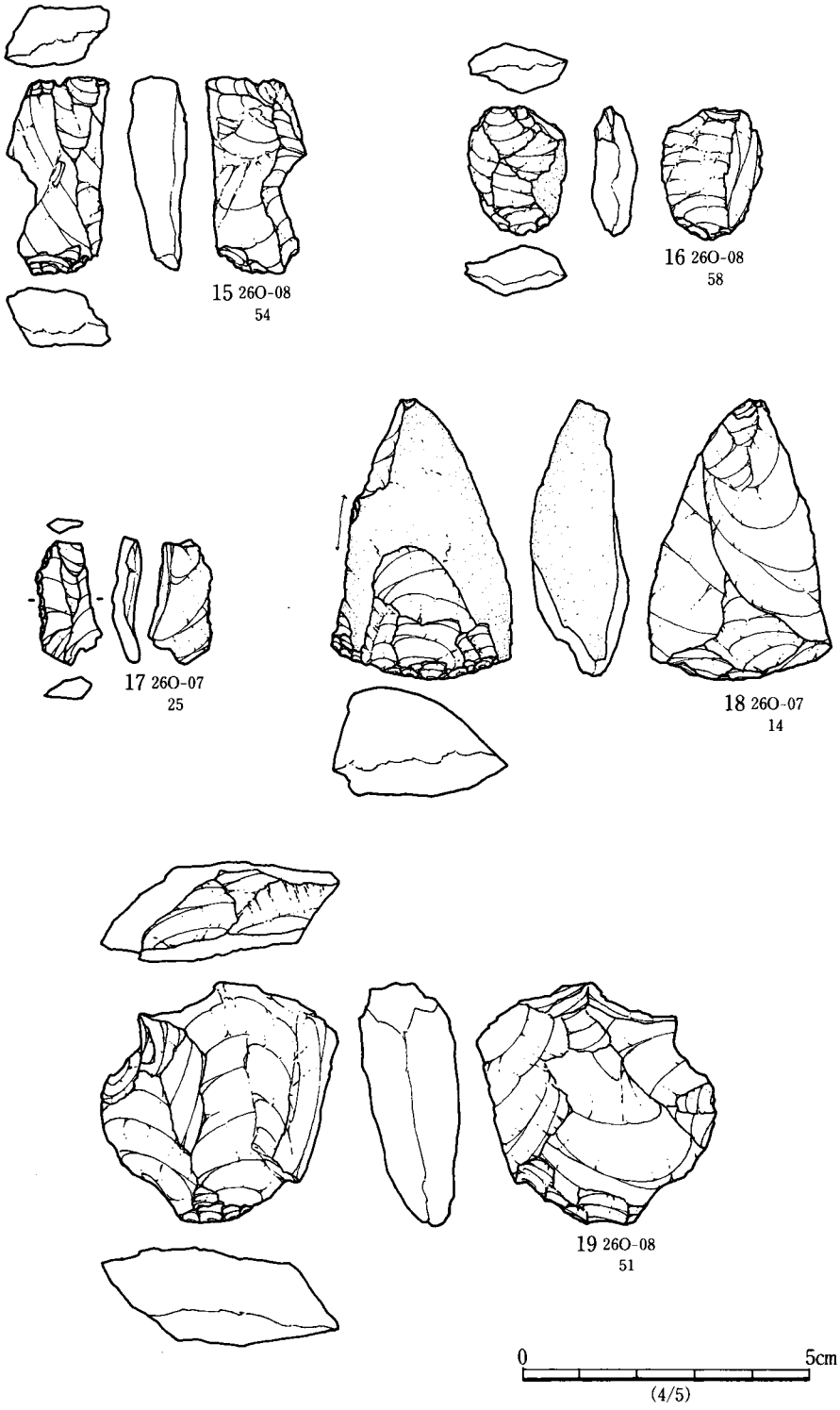
第473図 A₁ブロック石器実測図(1)



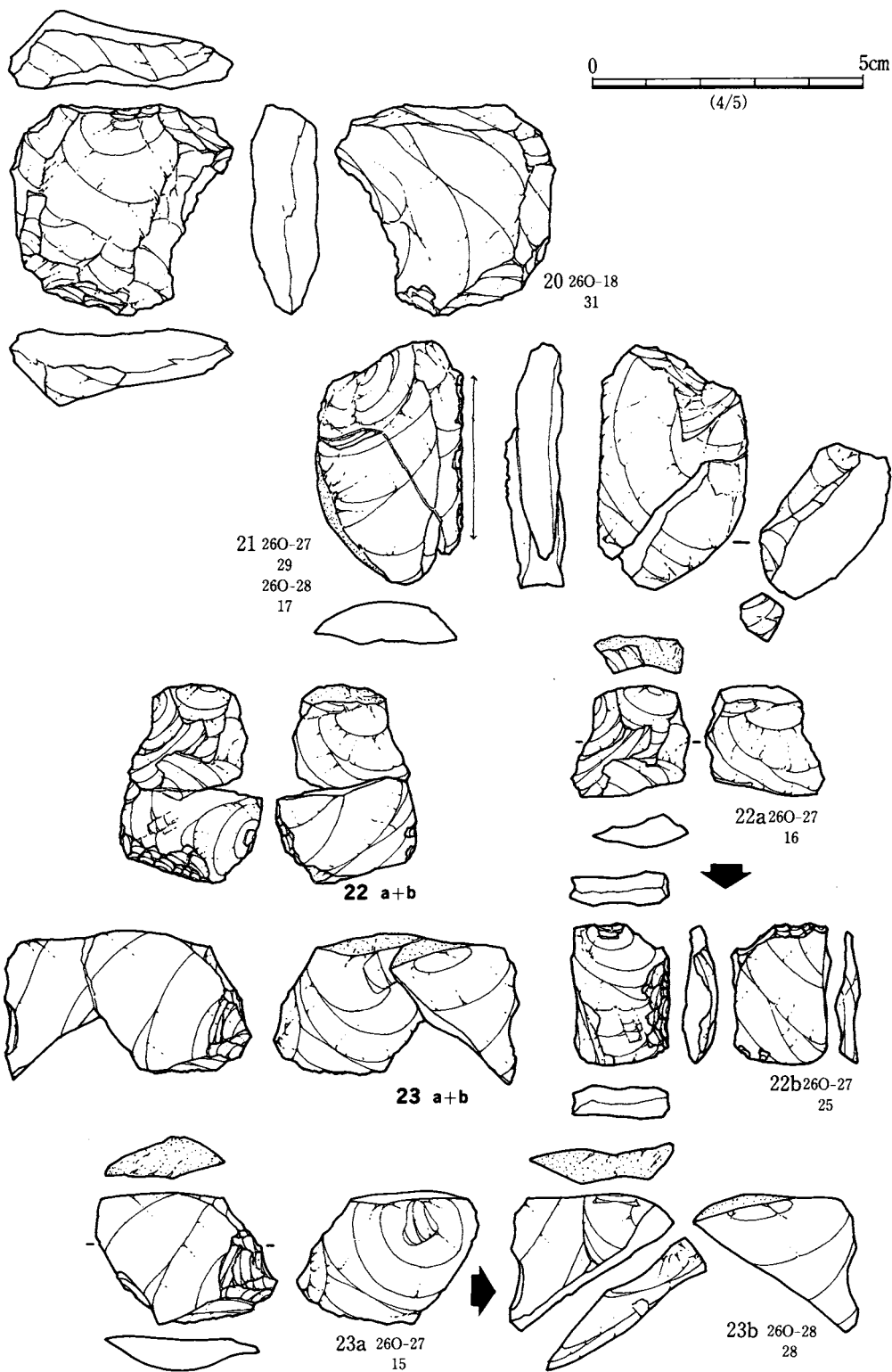
第474図 A₂ブロック石器実測図(2)



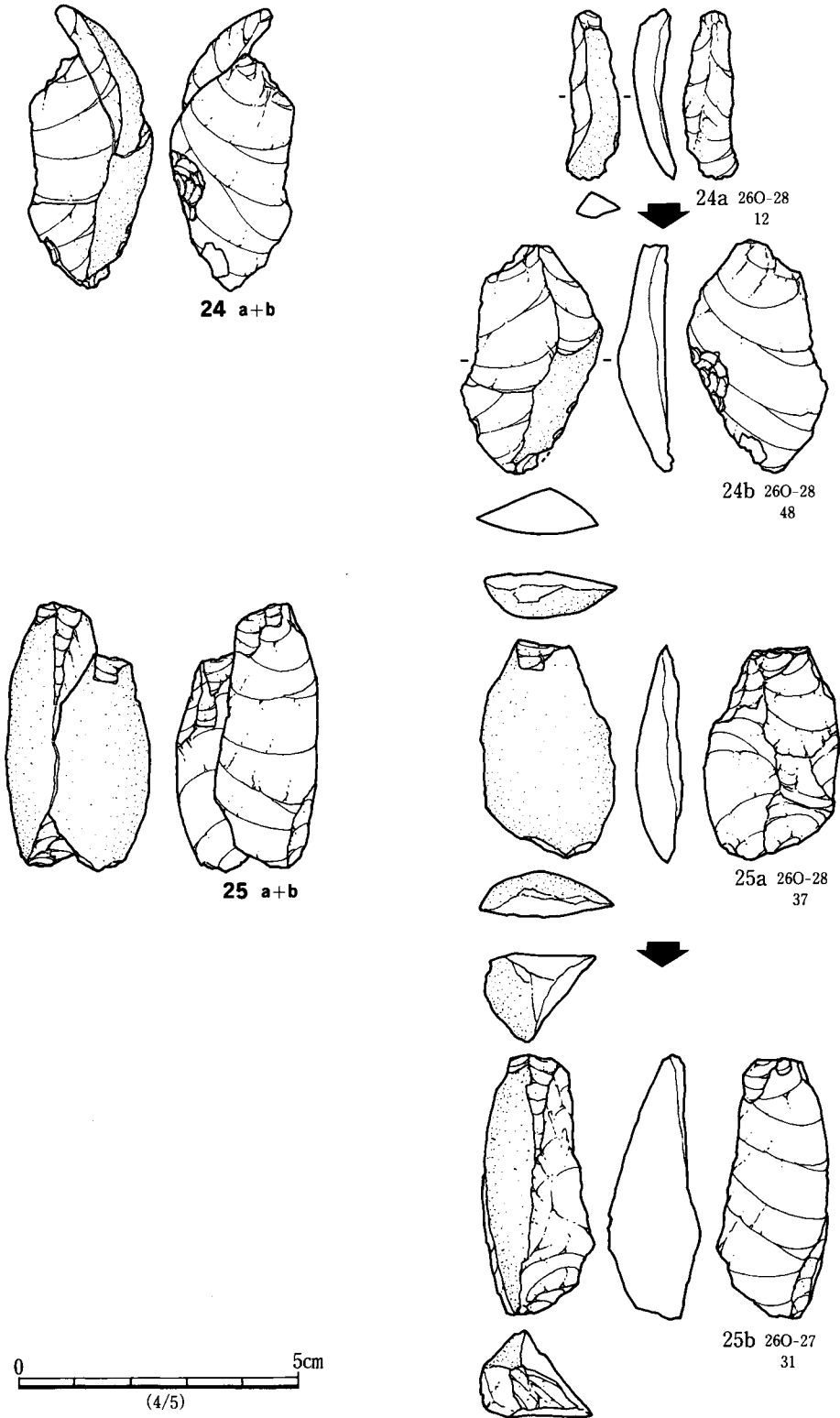
第475図 B₁ブロック石器実測図



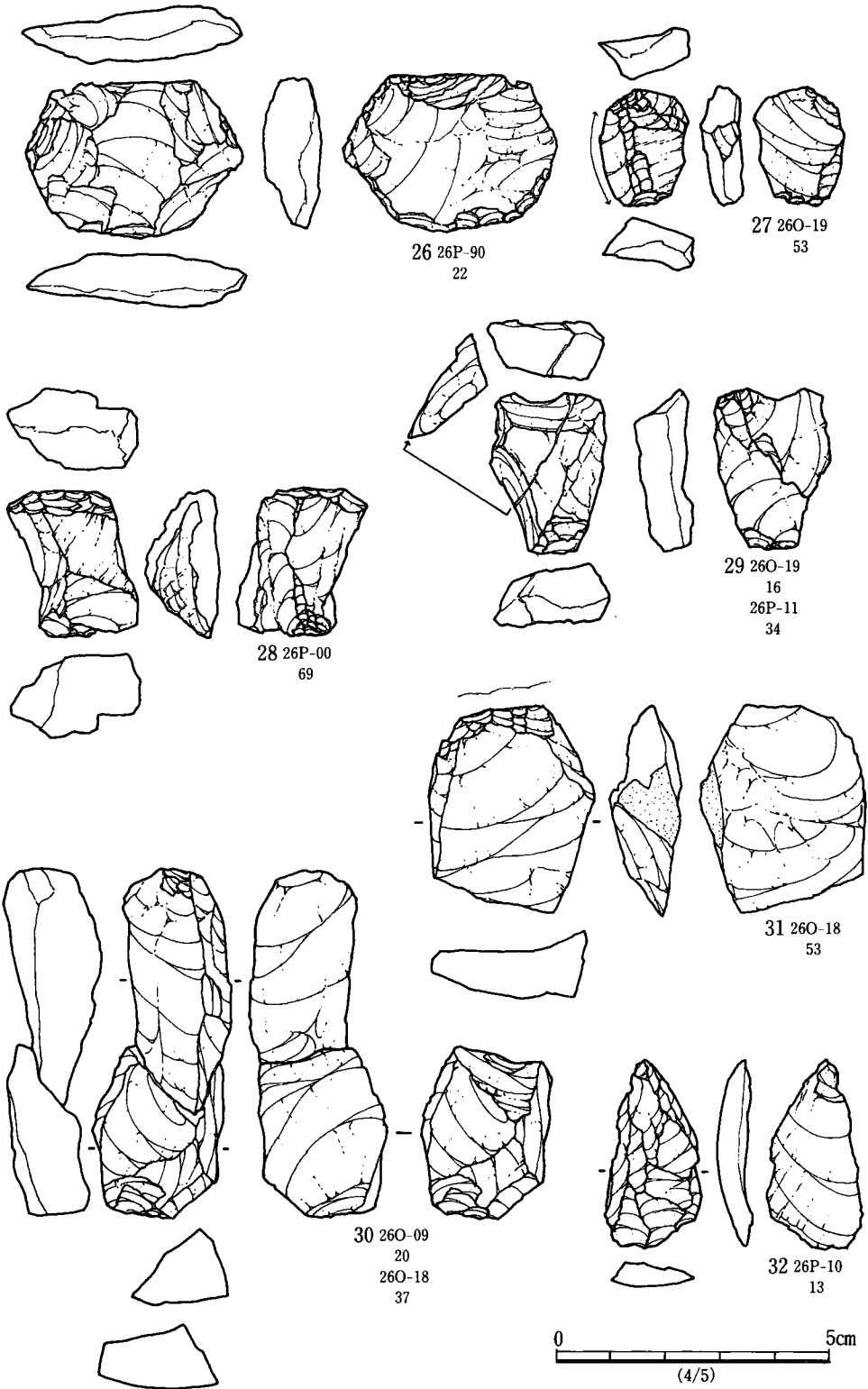
第476図 Cブロック石器実測図



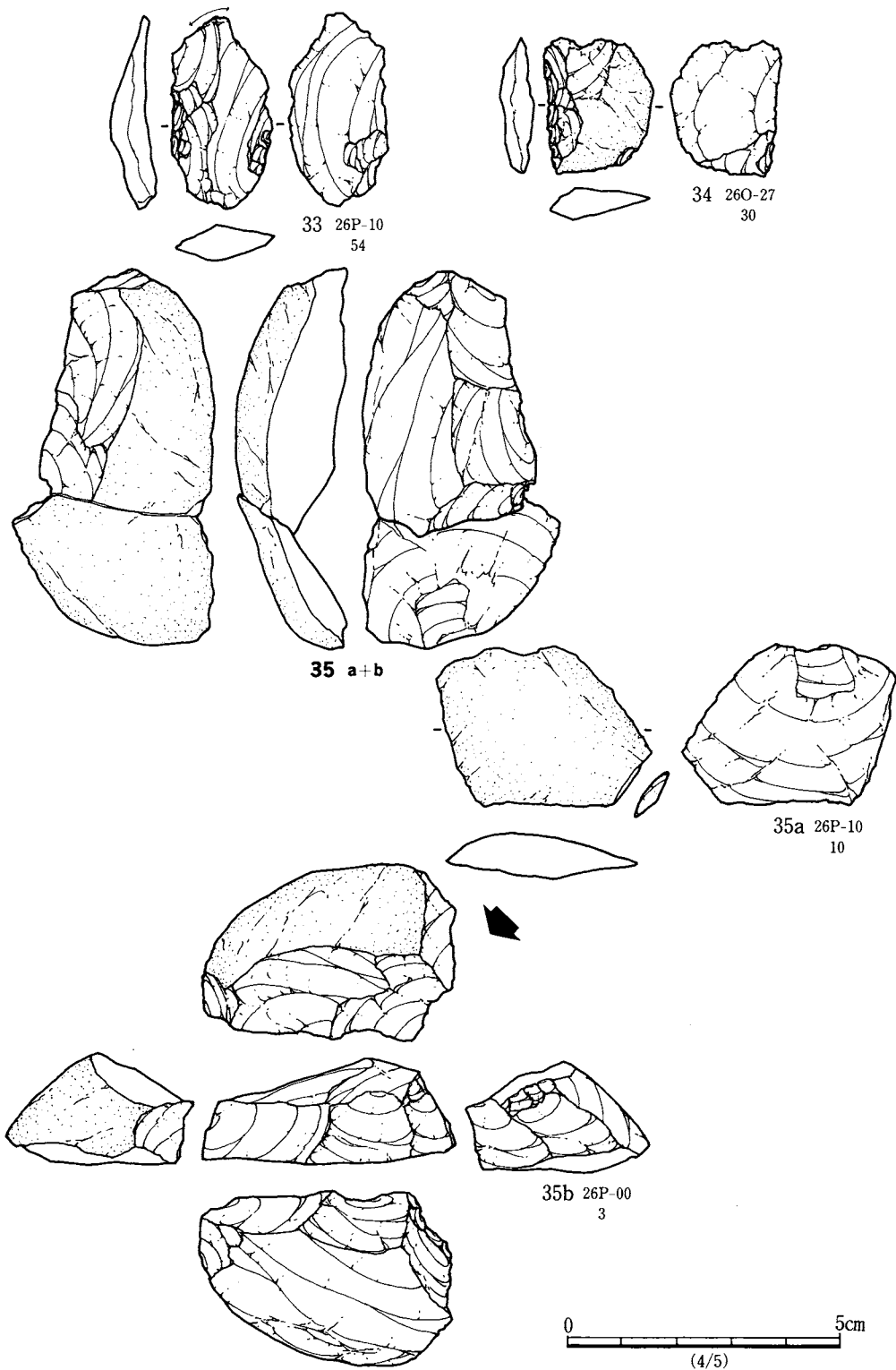
第477図 D₁ブロック石器実測図(1)



第478図 D₂ブロック石器実測図(2)



第479図 E₁ブロック石器実測図(1)



第480図 E₂ブロック石器実測図(2)

第6章 収 束

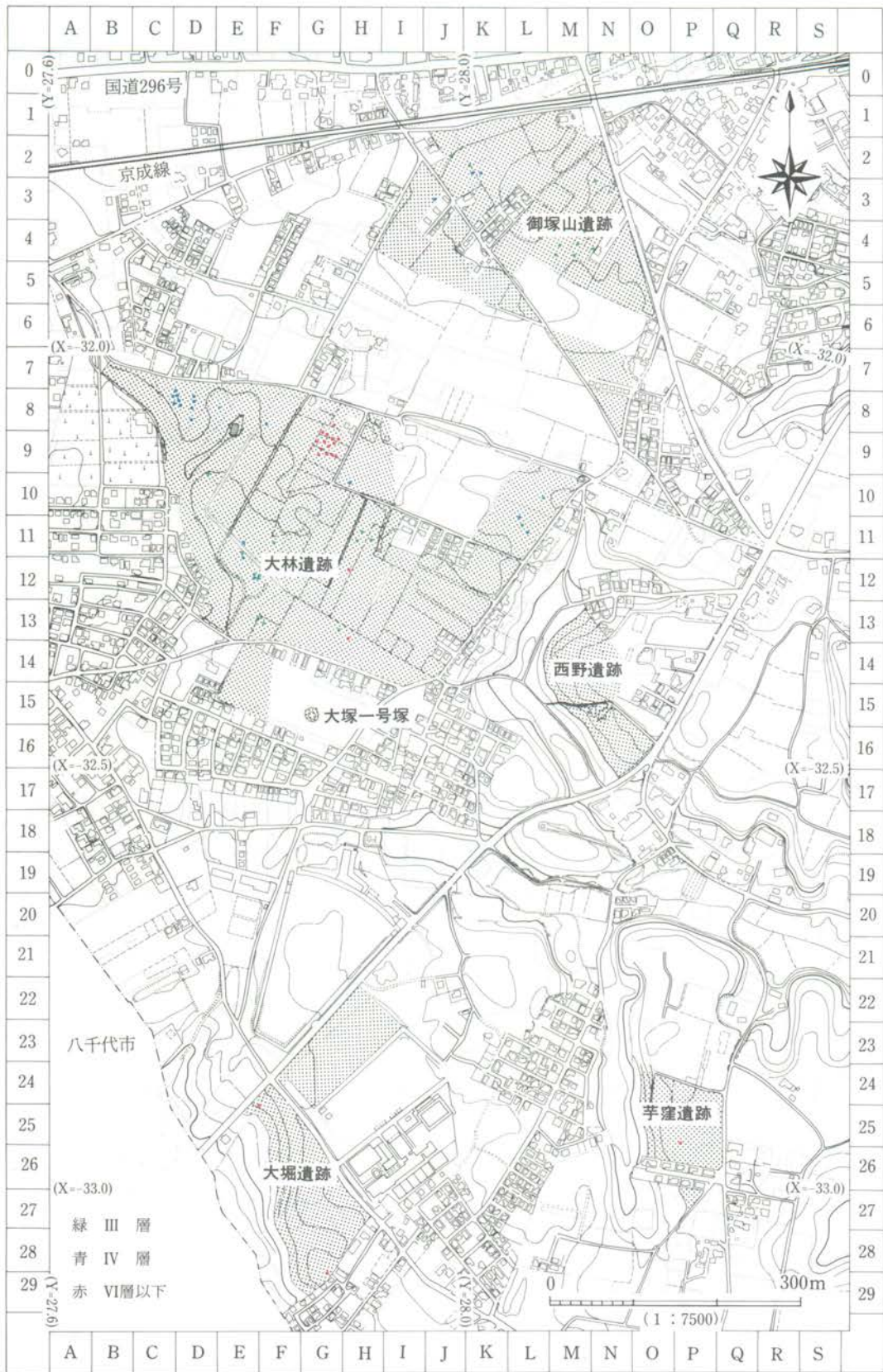
昭和57年以来、7か年を費した発掘調査と、整理作業の成果は、既に前章までに報告したとおりである。本章ではそれを要約し、あわせて問題点を指摘しておきたい。各遺跡とも先土器時代の遺物が主体を占めているので、おもにこの時代に焦点を絞りを絞込むことにしたい。第481図に南志津地区の先土器時代ブロックの層位別の位置を、また、第482図に、石器群の変遷概要図をまとめた。縄文時代以降に関しては、該当する記載をもって収束に代えることにする。

A. 第2 黒色帯中の石器群

御塚山遺跡第Ⅲ文化層、大林遺跡第Ⅳ文化層、大堀遺跡第1・第2地点、芋窪遺跡から第2黒色帯を産出層準とする石器群が検出された。各地点の分布を第481図を示した。これらのうち、大林遺跡第41ブロックからは498点、大堀遺跡からは213点、そして芋窪遺跡では1055点というまとまった資料が得られている。特に芋窪遺跡の資料は、質量共に極めて良好なものであった。これらの石器群の第2黒色帯中での上下関係を求めると、大きくIX層段階と、VII層段階に分けることができる。IX層段階には、大林遺跡第41ブロック、大堀遺跡第1・第2地点が、VII層段階には芋窪遺跡が位置しよう。大林遺跡と大堀遺跡については、その産出層準から、先後関係を決定することはできなかつた。

大林遺跡第41ブロックは、浅い沢地に臨んだ小舌状台地上にあり、東西45m、南北45mの範囲内に累積的に廃棄された石器群が検出された。石器群は、諸種の一般的剥片剥離手法に基礎づけられ、石刃、あるいは石刃素材の石器を伴っていない。27点もの楔形石器が遺存しており、仮に、楔形石器が使い捨て的な遺存可能性の高い器種であることを考慮しても、他に目立つ石器が存在しないことから、本石器群の主体をなす器種であることを指摘してもよいであろう。この視点に立って石器群全体を見直してみると、楔形石器の生産・消費に係る資料群と、一般的剥片剥離技術に依拠する一群との一体化した構造が明らかになるであろう。第2章第1節で考察したように、楔形石器の生産は、楔形石器自体の生産過程であると同時に、小石刃とも言える細小剥片の組織的生産の過程でもある、という二重性によって規定されている。細小剥片の多くが、細石刃と同様の機能の荷担者であった可能性が高く、また、楔形石器自体が、単に楔としての機能的枠組を離脱し、刃器や削器としての種々の機能を帯びていたであろうことも、この間の観察によって得られた一つの重要な結論であった。

大堀遺跡第1地点の石器群に関しては第3章で分類が行なわれているが、再検討の結果、楔形石器とその剥片が多数含まれていることが明らかになった。野口による集計では4点のピエスキューが摘出されている。これらはいずれも典型的な例を選んでおり、分類の一つのあ



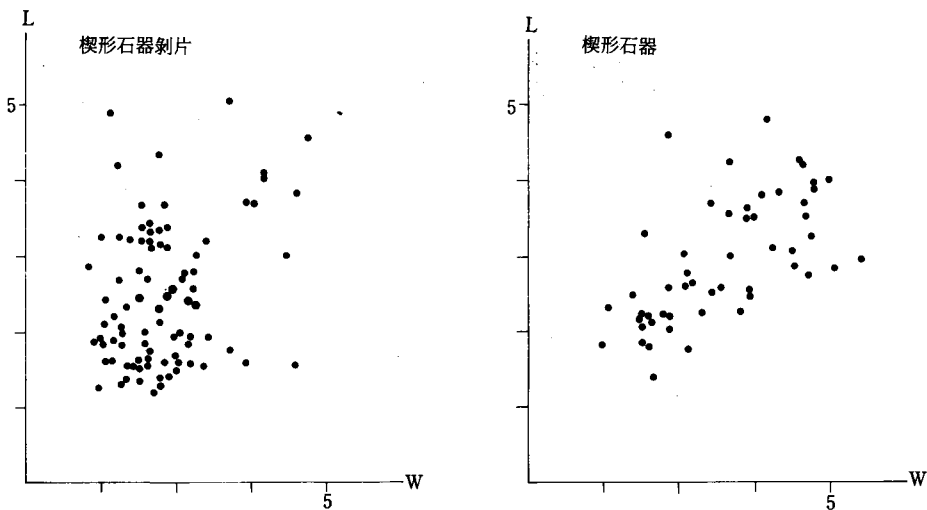
第481図 南志津地区先土器時代ブロックの時期別分布状況

り方を示すものと評価したいが、別な視点からの分類では、Aブロックに4点、Bブロックに9点、合計13点の楔形石器が指摘されることになった。また、楔形石器から剝離された細小剝片(OEF)は、Aブロックに12点、Bブロック点では実に48点もあり、Bブロック自体が、楔形石器の生産・消費過程を強く反映していることは明らかであるように見える。

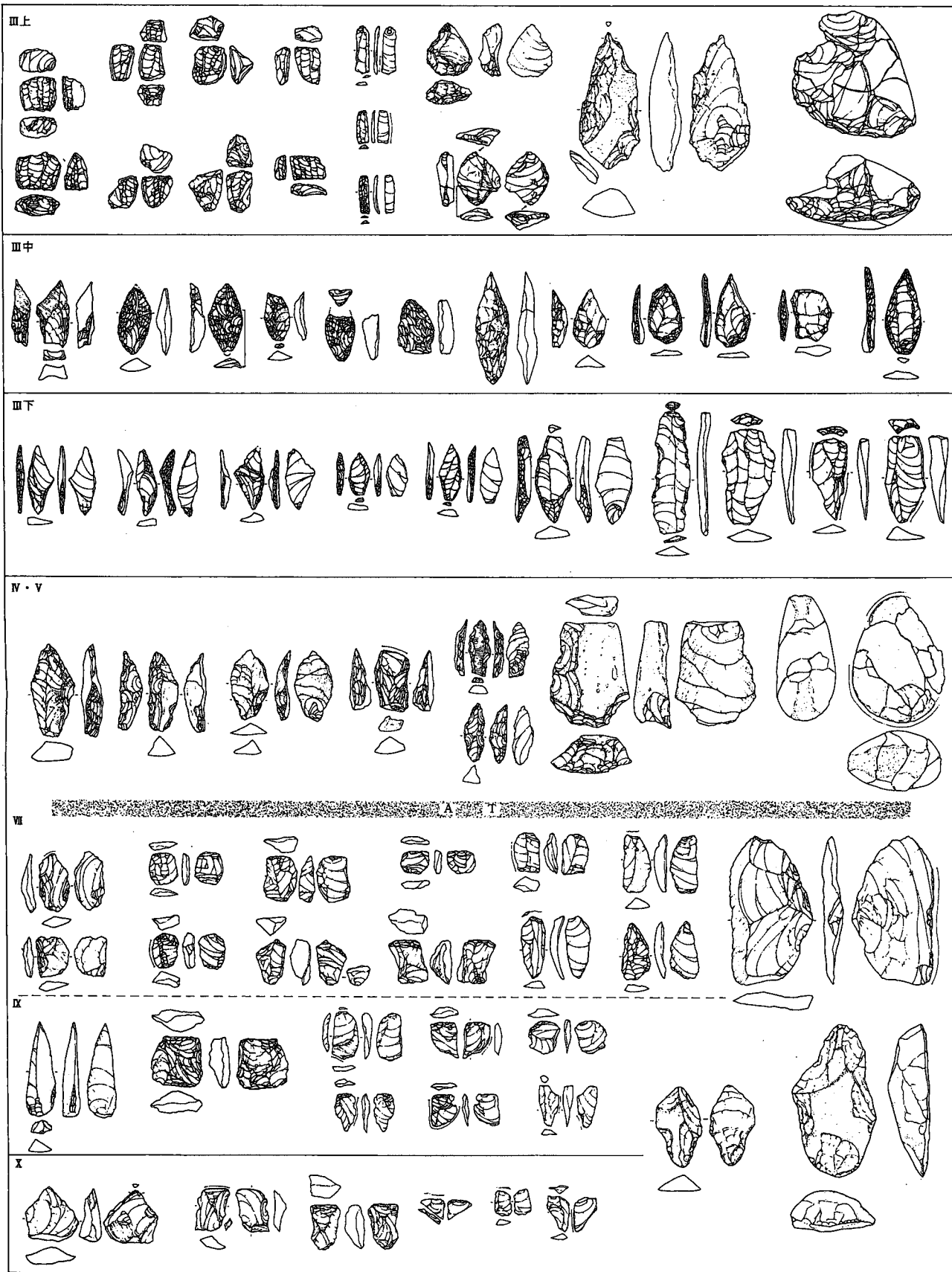
以上の見解を補強することとなったのが芋窪遺跡の調査であった。芋窪遺跡の石器群については、別な機会にもう一度十分な検討を加える必要性を痛感しているのが、第5章の記載もあるのでここでは概要を述べるに留めたい。なお、以後の記述においては、野口による分類とは、全く異なった基準を設定したため、集計表の数値とは異なった内容を記述しているように思われるかもしれない。しかし、これは野口の分類が誤っている訳では決してなく、あくまで、分類の基準がちがうためであることを付言しておきたい。また、第5章では、遺跡を5箇所のブロックに分類して処理しているが、ここでは全ブロックの資料を一括した。

石器群は東西23m、南北24m位の範囲に分布している。10箇所程度の石片集中地点をその内部に含んでおり、地点をかえて石材の消費が行なわれている状況を窺わせるが、母岩単位の分布状況は検討されていない。石器組成は48点に達する楔形石器を中心とし、2次加工の著明な石器は極めて少ない。また、多量の剝片を見直し、102点の確実に楔形石器から剝離されたと思われる剝片(OEF)を検出した。しかし、これらには他に同一母岩の削片が多数あるので、実数としては、これを大きく上回るものであることが推定される。従って、この両者によって石器群が構成されていると評価してもよいと思われる。

楔形石器は明らかに石核と判定される小型角柱状のものと、幅広く偏平、縦断面が紡錘形になるものとの2分される。これらの長幅分布(第483図)から窺われるように、幅20mm前後の小型品と、30mm前後の大型品とがあるが、小型・偏平なものの一部が石核とは考えられないこと

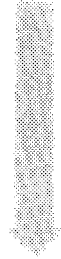
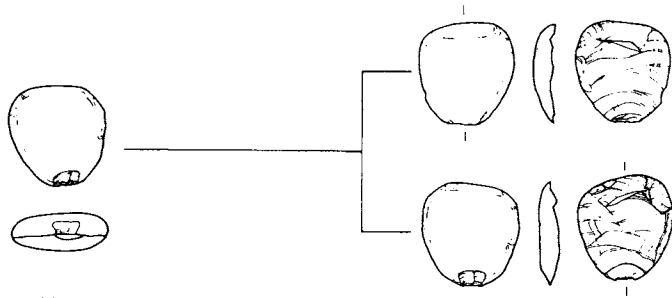


第483図 芋窪遺跡の楔形石器(右)と楔形石器剝片(左)の長幅分布(単位cm)

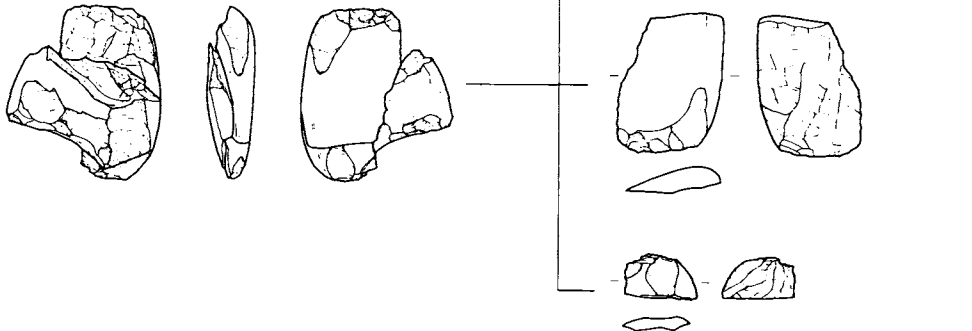


第482図 南志津地区各遺跡先土器時代石器群の変遷

段階 I



段階 II



第484図 遠山天ノ作遺跡における楔形石器の製作過程

は、第6章（付節）の項で述べたとおりである。また、同一母岩から複数の楔形石器が作られている場合があり、さらに、楔形石器から剥離された剥片に砸撃剥離痕の看取されるものがある点とあわせ考えると、第2章で指摘した楔形石器のシステムが本遺跡においても機能していることが窺われる。

以上のように、楔形石器を主体とする石器群が、IX層上半からVII層にかけて確認されたことは重要な成果であったが、各石器群の内容に関しては、未だ推測の域を出ていない。楔形石器を中心とする石器群としては、遠山天ノ作遺跡（高橋・奥田 1986）が知られているが、産出層準は上記の諸遺跡に近い。遠山天ノ作遺跡の楔形石器の製作方法を見ると(1)扁平な小円礫を台石上に立位に固定し、これを石槌で加撃して2～3枚に削ぎ落とす、(2)分割された楕円形の小礫片を横に寝せて立て、この一側縁を加撃することによって、楔形石器を共に多量の細石片を生産する、という工程が原則的にとられている（第484図）。この手法をとることによって、通常の方法ではとても不可能な、小円礫からの組織的な石器製作が可能となっている。仮に、

この手法を遠山技法と呼ぶことにする。

遠山技法の成立する与件として、まず在地石材の限定性という自然的制約が考えられるが、芋窪遺跡に代表されるように、第2黒色帯上部には、楔形石器を主体とする石器群が、時間的な幅をもちながら存続しているので、この状況と無関係ではあるまい。この時期には、比較的規模の小さいブロック、例えば、ヲサル山遺跡第29ブロック（藤岡 1986）や井戸向遺跡S-7ブロック（田村 1987）など、楔形石器を主体とするものが知られている。また、茨城県鹿野場遺跡（館野 1979）、福島県輪山遺跡（山内 1977）でも関連しそうな石器群が注意されている。今回の南志津地区の調査を機に、この段階の楔形石器について、いろいろな問題があることが判明したが、なお、将来に亘って考察すべき問題は多いようである。

B. ソフトローム層中の石器群(1)

もう一つの成果として、御塚山遺跡第I文化層、大林遺跡第II文化層、第III文化層の発見が挙げられる。特に、大林遺跡第9地点においては、僅かに時期を異にする3つの石器群が並存するという、またとない良好な条件に恵まれた地点の調査があり、東内野型尖頭器にまつわる若干の編年的問題に見通しが与えられた。一方、御塚山遺跡第1・第2地点や、大林遺跡第1、第2、第3、第17地点などからは、大林遺跡第9地点とは別種のナイフ形石器をもつ石器群が検出されている。これらの石器群の産出層準は、第9地点における東内野型尖頭器の産出層準と大体一致し、堆積の薄いソフトローム層内で両者の上下関係を判定することは困難であった。しかし、これらの石器群の発見は、従来の資料的制約を補い、ようやく本地域においてもナイフ形石器群終末期の編年的な見通しが得られるに至った。

大林遺跡第9地点の層位的出土状況を再確認すると、ソフトローム層の下部に、石刃と石刃ナイフを特徴的に含む石器群があり、これを第III文化層とした。ソフトローム層の上部には、片面打製を主とする小型の東内野型尖頭器の製作址があり、これを第II文化層bとした。両者は近接しており、明らかに産出層準に差が認められた。第II文化層bの上部に、野辺山型細石核を含む文化層が重なり、これを第I文化層とした。以上の層位別の出土状況から、石刃ナイフ→東内野型尖頭器→野辺山型細石核という変遷が明らかにされた。石刃ナイフの上部には、東内野型尖頭器のある段階が位置することが判明したが、これと共に、別種のナイフ形石器を含む文化層が存在している。この段階の好資料は、御塚山遺跡第1・第2地点にあり（第I文化層a）、その詳細は既に第1章D項で考察したとおりである。

御塚山遺跡第I文化層aは、既に復山谷遺跡III層上部に対応資料が知られていた。ところで、復山谷遺跡E区の調査に際しては、III層中にもう1枚の文化層の存在が注意されていた。それは、WIII₁ブロックと呼んだブロックの資料を中心としており、ソフトローム層の中頃を産出層準としている。石器群の特徴としては、準石刃とも言える縦長剝片生産技術を基調としており、

小型の2側縁加工のナイフ形石器を多数含んでいた。この石器群は従来、下総台地ではほとんど検出例のなかった石器群として、月見野の諸例と比較された。この頃、大規模な調査が行われていた八千代市萱田地区では、坊山遺跡のソフトローム層中から、やはり月見野併行期と見られる多量の石器群が検出されていた(田村・橋本 1984 図版12)。その後、市原市瀬又北遺跡(横山 1984)、新東京国際空港No.2遺跡(雨宮 1985)、同No.10遺跡(川島 1985)などの類例が追加されたが、これらの石器群の位置づけに関しては、資料的な制約もあって、あまり積極的に議論されたことはなかったようである。

この問題に関してもう一つ逸するこのできないのは、船橋市西の台遺跡の第2次調査であろう(道沢 1985)。西の台遺跡では、III層の上部から49点に達する小型石槍を含む石器群が検出され、III層の下部には石刃ナイフを主体とする石器群が包含されていた。III層の下部の石器群は、明らかに大林遺跡第III文化層と対比される。III層上部の石槍については、今のところ下総には対応する石器群は知られていないが、両面打製の大型品を含み、かつ形態的分化が著しいところから、相模野V期の石器群との関連が深いように思われる。

以上の如く、下総台地のソフトローム層中に包含される石器群の様相は次第に明らかにされつつあるが、おおよそ相模野台地と平行な変遷過程が推定されるに至った。しかし、相模野IV期前半の様相は、東内野型尖頭器と石刃石器群とが交叉しており、清楚な理解は困難であるように見える。今後の資料的増加を踏まえた詳細な検討が必要であろう。

C. ソフトローム層中の石器群(2)

大林遺跡の第4、第6、第9、第16地点からは細石刃を特徴的に含む石器群が検出された。これらを一括して、第I文化層を設定した。特に、第4地点から検出された第1ブロックの資料は、各種の石器を網羅し、かつ量的な保証をもって石器群の構成を明らかにし得た点で重要なものであった。

千葉県における細石器文化の探索は、旧富里村七栄(篠原 1967)を嚆矢とし、新東京国際空港用地内No.14遺跡(西野・中山 1971)、同No.52遺跡(杉山・中山 1971)、南大溜袋遺跡(戸田 1973)、夷隅群大原町No.244遺跡、No.251遺跡(立教大学考古学研究会 1974)等から断片的な資料が報告され、下総から安房に及ぶ広い地域に該期の遺跡の点在する可能性が指摘された。しかし、いずれも採集品に近い状況で、細石器を含む石器群の様相を具体的に知ることはできなかった。

昭和45年9月以降発掘調査の継続されている千葉ニュータウンでは、調査開始と共に、向原遺跡(千葉・高木 1974)、地国穴台遺跡(天野 1974)、木苅峠遺跡(鈴木 1975)、船尾白幡遺跡(古内 1976)、復山谷遺跡(鈴木 1978、田村・古内 1982)等の調査があり、細石器石器群の内容が次第に鮮明にされてきた。また、昭和50年代には、県内各地での調査事例の拡大

に伴って、星谷津遺跡（鈴木・大原 9178）、新東京国際空港内No.5遺跡（古内 1981）、三里塚馬場遺跡（小林 1982）、清水川台遺跡（佐久間 1983）、木戸場遺跡（鈴木 1987）等の報告が相継ぎ、野辺山型（佐藤 1974 a・b）を主体とする細石核を主体とし、僅かに札滑型が加わる石器群の様相が明らかになった。

札滑型細石核は今のところ木戸場例しか知られていない。これを東北地方からの直接的影響と見ることは常識に属するが、今のところ、野辺山型との明確な共伴例はないので、両者の関係は良く分からない。しかし、野辺山型近似の細石核は、角二山にあるので、その一部は併行するものと見られる。神奈川県上草柳第1地点第I文化層（堤 1984）や、下鶴間長堀遺跡第I文化層（堤 1985）などに著明な船型石核については、北方系と見る説（加藤1984）と、船野型の西からの波及と見る説（堤 1987）とがあるが、下総からの検出例は報告されていない。これに関しては詳述する立場にないが、いずれの系統の影響を重視するにせよ、あるいは無関係と考えるにせよ、東海地方の地域的特色（鈴木 1979 a・b）の裡に位置づけ得るものと考えられ、東京湾以東への波及は今後も認められないかもしれない。

一方、野辺山型に関しては、今回の調査によってたいへん豊富な資料が得られた。細石刃の生産工程に関しては矢出川技法（安蒜 1979）の範疇にあり、これに加えるべき内容はない。矢出川技法において特に注意したいのは「細石核原形への整形が主として刃器用石核にも似た一連の剥片剥離の過程のなかでおこなわれている」（安蒜 1984）という指摘である。相模野台地の細石核を詳細に検討した堤の論文（堤 1987）に従って細石刃の生産過程を再構成してみると、(1)ブランクの製作には、1個の原礫をそのままあてる場合と、分割礫を用いる場合のあること、(2)精細な打面調整や打面再生、打面転位の存在が多くの石核について観察されること、(3)稜上加撃によって得られた作業面端の稜線を切りとるように細石刃剥離が開始されること、(4)産出層準の変化に従って、黒曜石を主とする石材構成から、在地の石材を多く用いる構成に転じること、等を要点として挙げるができる。このうち(1)~(3)は、所謂砂川型刃器技法と本質的に一致しているので、関東・中部地方南半に長く伝習されてきた石刃生産システムが直接に変容したものと理解するのが自然であろう。近年、細石器石器群にナイフ形石器や小型石槍の明確な伴出例のないことを根拠に、これを旧来の石器群と分離する見解が散見されるが、槍の系譜としては一系のものであり、その生産技術も伝統的な石刃生産システムを踏襲するものであるという、基本的視座が欠落してはいないか。従って、関東・中部の細石器石器群が「先行するナイフ形石器文化の中から発展してきた可能性が大きい」とする加藤の見解（加藤 1984）に聴くべきところが大きいように思われる。

次に、細石器石器群の石器組成についても、大林遺跡の調査の寄与するところは大きかった。大林遺跡の石器製作技術を大きく3つの構成に分離したが、この構成は石材の選択、剥片剥離、細部加工の各項において相対的に独自の属性群を保有し、総体として細石器石器群を構成す

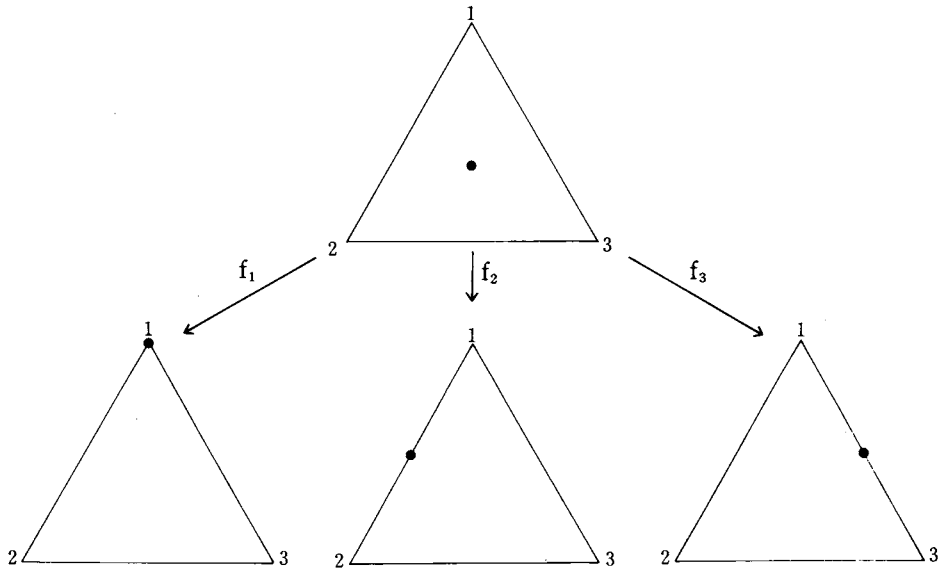
るものであった。この構成差に従って種々の石器群を典型的に把握することができる。

例えば、従来本地域において最も良好な細石器石器群とされていた向原、船尾白幡、星谷津遺跡他の石器群を、その報告書の記載に準じて考察してみよう。向原遺跡の石器群は、A44地点とD00地点に分かれて出土している。A44地点からは、細石核7点、細石刃25点、搔器1点、使用痕を有する剥片13点、礫器2点、刃器状剥片1点、石鏃1点が検出されている。この地点には夏島式の土器を包含する地層が重複しているので、若干の資料的混乱があるかもしれないが、大半は細石器段階のものと見られる。剥片の多くが黒曜石とチャートであり、細石核の石材と一致するので、構成1b（第2章第2節Aを参照）に属するものと判断される。その他の剥片は構成2か構成3に属するがはっきりしない。搔器とされたものは、構成1bである。礫器は石核状のもので、やはり構成2か構成3かはっきりしない。全体としては構成1が主体となり、構成2あるいは構成3を僅かに伴っている。D00地点は、細石核8点、細石刃34点、尖頭器1点、使用痕を有する剥片7点、礫器2点、石鏃1点がある。剥片は構成1bであるので、A44地点と全く同一の構成を示している。

船尾白幡遺跡の石器組成は、細石核7点、細石刃20点以上、彫器1点、スクレイパー1点、ドリル1点、剥片等約150点からなるが、剥片、彫器、スクレイパー、ドリルの4者は石材や形状から見て構成1bである。全体的には、向原遺跡と同様に構成1に偏った構造であると考えられる。一方、星谷津遺跡第1ユニットでは、ポイント1点、ナイフ形石器1点、細石刃39点、細石刃核3点（うち1点は剥片化しており、作業面の更新剥片の可能性がある）、石核1点、剥片・碎片96点という構成となっている。ナイフ形石器とポイントの共伴関係については否定的見解もある（織笠 1984）。剥片のうち、不定形のものでされた粘板岩製の剥片には、盤状横打の石核が含まれ（報文第13図67）、剥片のうち25点は構成2に帰属する可能性が高い。そうすると、このユニットでの石器構成は、構成1+構成2ということになる。

これと比較される石器群としては、三里塚馬場遺跡Aブロックがある。遺物としては細石刃核1点、細石刃21点、ナイフ形石器2点、スクレイパー1点、剥片類26点、残核4点、礫片1点、合計して56点が報告されている。ただし、ナイフ形石器とされたものは、調整が不十分で、器種としての認定に多少の不安が残る。石材はチャートと安山岩とに2分されるが、チャート製のものには、細石核や細石刃があり、安山岩製のものには横打剥片や、それを素材としたナイフ形石器？スクレイパーなどがある。従って、石器群としては構成1と構成2による複合的構造の抽出が可能である。資料数は少ないが、清水川台遺跡もこれと同様の構造を示している。

極めて少数の例しか対象としていないため、全般的な傾向を窺うのは難しいが、下総台地の細石器石器群の構成は、構成1、構成1+構成2の両者が一般的であり、構成3の存在は従来あまり知られていなかったが、今回の大林遺跡の調査によって、構成1+構成2+構成3という類型の存在が初めて明らかにされた。



第485図 南関東細石器石器群の構成とその変換

良好な石器群の多く報告されている相模野台地でも、同様の類型が報告されている。例えば、構成1を主体とするものとして、栗原中丸遺跡第II文化層第1～第11号ブロック（大上・鈴木 1984）、上草柳第1地点遺跡Aブロック（堤 1984）、上野遺跡第III文化層I群、II群（堤1986）、代官山遺跡第III文化層（砂田 1986）がある。構成1＋構成2の例としては、下鶴間長堀遺跡第I文化層aブロック（堤 1985）、上草柳第3地点中央遺跡（堤 1984）、相模野第149遺跡（中村 1986）が、構成1＋構成2＋構成3という大林遺跡第1ブロックと同様の構成を見せるものとしては、報恩寺遺跡（鈴木・矢島1979）、上草柳第1地点遺跡Bブロック（堤 1984）、中村遺跡第II文化層（中三川・萩上 1987）が挙げられる。また、やや特殊なものかもしれないが、栗原中丸遺跡第II文化層第12号ブロック（大上・鈴木 1984）や、上野遺跡第III文化層III群（堤 1986）などでは3群主体の石器組成が知られている。しかし、これら2遺跡共に、同一文化層に構成1を主体とするブロックをもち、構成1＋構成3という構造が異所的に立ち現れたものと理解することも可能である。

以上の状況から明らかのように、南関東地方の細石器石器群は、基本的に3つの構成要素を共時性として保有し、各構成要素を必要に応じて選択的に使用していることが推察される（第485図）。この選択性をもった技術的体系は、この地域においては、石刃技法と横打打法という二項的構造として、ナイフ形石器群成立期以降、常に保持され、累積されてきた構造に他ならず、野辺山型細石器石器群の出自が、まさしくこの二項的構造内にあることを物語るものと評価し得よう。

（田村）

引用参考文献

- 阿部朝衛 1983 バイポーラーテクニックの技術的有效性について(考古学論叢Ⅰ)
- 天野 努 1974 地岡穴台遺跡(千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ)
- 安蒜政雄 1979 日本の細石核(駿台史学47)
- 安蒜政雄 1984 日本の細石器文化(駿台史学60)
- 雨宮龍太郎 1985 No.2遺跡(新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅴ)
- 伊藤恒彦 1987 第Ⅳ文化層・第Ⅴ文化層(中村遺跡)
- 大上周三・鈴木次郎 1984 栗原中丸遺跡(神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告3)
- 岡村道雄 1983 ビエスエスキュー楔形石器(縄文文化の研究7)
- 織笠 明 1984 細石器文化組成論(駿台史学60)
- 加藤晋平 1984 日本細石器文化の出現(駿台史学60)
- 加藤 稔 1963 山形県平林の石器文化(考古学集刊2-1)
- 川島利道 1985 No.10遺跡(新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅴ)
- 小林清隆 1982 成田市三里塚馬場遺跡
- 小林清隆・田村 隆 1987 松戸市彦八山遺跡(北総開発鉄道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ)
- 佐久間豊 1983 清水川台遺跡発掘調査報告書
- 佐倉市史編さん委員会 1973 佐倉市史巻二
- 佐藤達夫 1974 a 黎明期の日本(図説日本の歴史)集英社 佐藤達夫 1974 b 旧石器・無土器(先土器)時代(日本考古学の視点上)日本書籍
- 篠原 正 1967 富里村七栄で見つかった細石器(成田史談13)
- 杉山晋作・中山吉秀 1971 No.52遺跡(三里塚-新東京国際空港用地内における考古学的調査)
- 鈴木定明 1978 復山谷遺跡(千葉ニュータウン埋蔵文化財報告書Ⅵ)
- 鈴木定明 1987 木戸場遺跡(佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡)
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978 先土器時代石器群とその編年(日本考古学を学ぶ1)
- 鈴木次郎・矢島國雄 1979 神奈川県綾瀬市報恩寺の細石刃石器群(神奈川考古6)
- 鈴木忠司 1979 a 東海地方の細石刃文化について(日本古代学論集)
- 鈴木忠司 1979 b 中部地方南部の細石器文化(駿台史学47)
- 鈴木道之助 1975 a 木苅峠遺跡(千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ)
- 鈴木道之助 1975 b 千葉県の遺跡(日本の旧石器文化2)
- 鈴木道之助 1976 概説-房総における先土器文化の概要と変遷-(千葉県文化財センター研究紀要1)
- 鈴木道之助・大原正義 1978 佐倉市星谷津遺跡
- 砂田佳弘 1986 代官山遺跡(神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告11)
- 諏訪間順・堤 隆 1985 神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第Ⅳ文化層の石器群について(旧石器考古学30)

- 芹沢長介・岡村道雄・戸田正勝・小林博明 1974 碁石遺跡
- 高木博彦・千葉健造 1974 向原遺跡（千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ）
- 高橋博文・奥田正彦 1986 遠山天ノ作遺跡（主要地方道成田松尾線Ⅲ）
- 館野 孝 1979 日立市鹿野場遺跡発掘調査報告書（日立市埋蔵文化財調査報告 6）
- 田村 隆・古内茂 1982 復山谷遺跡（千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ）
- 田村 隆・原田昌幸 1986 常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
- 田村 隆 1987 八千代市井戸向遺跡（萱田地区埋蔵文化財調査報告Ⅳ）
- 田村 隆・澤野 弘ほか 1987 先土器時代の石器石材の研究（千葉県文化財センター研究紀要11）
- 堤 隆 1984 上草柳第1地点遺跡（一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅱ）
- 堤 隆 1984 上草柳第3地点中央遺跡（一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅱ）
- 堤 隆 1985 下鶴間長堀遺跡（一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告書Ⅲ）
- 堤 隆 1986 第Ⅲ文化層（月見野遺跡群上野遺跡第1地点）
- 堤 隆 1987 相模野台地の細石刃石核（大和市史研究13）
- 戸田哲也 1973 千葉県南大溜袋遺跡の調査（考古学ジャーナル78）
- 戸田哲也・篠原正・並木忠良 1977 千葉県印旛郡富里村東内野遺跡発掘調査概報
- 中三川昇・萩上由美子 1987 第Ⅱ文化層（中村遺跡）
- 中村喜代重 1986 相模野第149遺跡（大和市史 7）
- 西村正衛 1972 阿玉台式土器編年の研究の概要－利根川下流域を中心として－（早稲田大学大学院文学研究科紀要18）
- 原田昌幸 1986 阿玉台式土器前半期の一様相－常磐道柏地区の成果から－（千葉県文化財センター研究紀要10）
- 藤岡孝司 1986 八千代市ヲサル山遺跡（萱田地区埋蔵文化財調査報告Ⅲ）
- 古内 茂 1976 船尾白幡遺跡（千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅴ）
- 古内 茂 1981 No.5 遺跡（木の根）
- 道沢 明 1985 a 先土器時代（西の台第2次）
- 道沢 明 1985 b 一の台遺跡先土器時代（平賀）
- 明治大学考古学研究室月見野遺跡群調査団 1969 概報月見野遺跡群
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976 相模野台地における先土器時代研究の現状（神奈川考古 1）
- 山田晃弘 1986 石器（梨久保遺跡）
- 山内幹夫 1977 輪山遺跡（いわき市埋蔵文化財調査報告 4）
- 横山 仁 1984 市原市瀬又北・瀬又南・千葉市大木戸・板倉町遺跡
- 立教大学考古学研究会 1974 千葉県夷隅川流域分布調査報告書（埋蔵及び石造文化財資料）

平成元年 3 月 21 日 印刷

平成元年 3 月 31 日 発行

千葉県文化財センター調査報告第152集

佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書 1

発行 住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部

東京都新宿区新宿 4 丁目 3 番 17 号

財団法人 千葉県文化財センター

千葉県千葉市葛城 2 丁目 10 番 1 号

印刷 株式会社 弘 文 社

千葉県市川市市川南 2 丁目 7 番 2 号

佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書 1

— 佐倉市御塚山・大林・大堀・西野・芋窪遺跡 —

図 版

1 9 8 9

住宅・都市整備公団 首都圏都市開発本部
財団法人 千葉県文化財センター

図 版 目 次

- 図版 1 南志津地区空中写真
図版 2 御塚山遺跡空中写真
図版 3 御塚山遺跡 遺跡の景観(1) 遺跡の景観(2) 近世の溝
図版 4 御塚山遺跡 土坑 1 (1) 土坑 1 (2) 陥し穴 1
図版 5 御塚山遺跡 陥し穴 2 陥し穴 3
図版 6 御塚山遺跡 土層断面(1) 土層断面(2) 第 1 地点
図版 7 御塚山遺跡 第 2 地点(1) 第 2 地点(2) 第 3 地点
図版 8 御塚山遺跡 第 4 地点(1) 第 4 地点(2) 第 5 地点
図版 9 御塚山遺跡 第 1 ブロックの石器 第 2 ブロックの石器
図版 10 御塚山遺跡 第 3 ブロックの石器 第 4 ブロックの石器
図版 11 御塚山遺跡 第 5 ブロックの石器 第 6 ブロックの石器
図版 12 御塚山遺跡 第 7 ブロック・第 8 ブロックの石器 第 4 地点の石器
図版 13 大林遺跡空中写真
図版 14 大林遺跡 遺跡の景観(1) 遺跡の景観(2) 第 3 地点
図版 15 大林遺跡 第 4 地点 第 6 地点(1) 第 6 地点(2)
図版 16 大林遺跡 第 6 地点(3) 第 6 地点(4) 第 6 地点(5)
図版 17 大林遺跡 第 10 地点 第 11 地点 2 号塚の周溝 第 11 地点 2 号塚周溝の土層断面
図版 18 大林遺跡 第 14 地点 第 16 地点(1) 第 16 地点(2)
図版 19 大林遺跡 大塚 1 号塚
図版 20 大林遺跡 第 1 地点陥し穴群全景 陥し穴 1 陥し穴 2
図版 21 大林遺跡 陥し穴 3 陥し穴 4 陥し穴 5
図版 22 大林遺跡 陥し穴 6 陥し穴 7 陥し穴 8
図版 23 大林遺跡 陥し穴 9 陥し穴 10 第 3 地点陥し穴 土坑群全景
図版 24 大林遺跡 陥し穴 11 土坑 1 土坑 2
図版 25 大林遺跡 陥し穴 12(1) 陥し穴 12(2) 陥し穴 14
図版 26 大林遺跡 陥し穴 15 陥し穴 16 陥し穴 17
図版 27 大林遺跡 陥し穴 18 陥し穴 19 陥し穴 20
図版 28 大林遺跡 第 2 地点 第 3 地点第 II 文化層(1) 第 3 地点第 II 文化層(2)
図版 29 大林遺跡 第 4 地点(1) 第 4 地点(2) 第 5 地点
図版 30 第 3 地点第 VI・第 VII 文化層 第 3 地点第 VII 文化層貝の出土状況
図版 31 大林遺跡 第 6 地点(1) 第 6 地点(2) 第 6 地点(3)
図版 32 大林遺跡 第 8 地点 第 9 地点(西側) 第 9 地点(東側)

- 図版33 大林遺跡 第12地点 第14地点 第16地点(1) (8)
- 図版34 大林遺跡 第16地点(2) 第16地点(3) 第17地点 図版58 大林遺跡 第1ブロックの石器(9)・(10)
- 図版35 大林遺跡 第18地点(1) 第18地点(2) 第18地点(3)・(4) 図版59 大林遺跡 第1ブロックの石器(11)
- 図版36 大林遺跡 第18地点(5) 第18地点(6) 第18地点(7)・(8) 図版60 大林遺跡 第1ブロックの石器(12)
- 図版37 大林遺跡 縄文土器 図版61 大林遺跡 第1ブロックの石器(13) 第2ブロックの石器 第4ブロックの石器
- 図版38 大林遺跡 縄文土器 図版62 大林遺跡 第3ブロックの石器 第5ブロックの石器
- 図版39 大林遺跡 縄文土器 図版63 大林遺跡 第7ブロックの石器 第9ブロックの石器
- 図版40 大林遺跡 縄文土器 図版64 大林遺跡 第8ブロックの石器 第10ブロックの石器 第11ブロックの石器
- 図版41 大林遺跡 縄文土器 図版65 大林遺跡 第11・第18ブロックの石器 単独出土の石器
- 図版42 大林遺跡 縄文土器 図版66 大林遺跡 第12ブロックの石器 第14ブロックの石器 第15ブロックの石器
- 図版43 大林遺跡 縄文土器 図版67 大林遺跡 第16ブロックの石器 第9地点の石器 第17ブロックの石器 第18ブロックの石器
- 図版44 大林遺跡 縄文土器 図版68 大林遺跡 第21ブロックの石器 第22ブロックの石器 第19ブロックの石器 第20ブロックの石器
- 図版45 大林遺跡 縄文土器 図版69 大林遺跡 第30ブロックの石器 第29ブロックの石器 第31ブロックの石器(1)
- 図版46 大林遺跡 縄文土器 図版70 大林遺跡 第31ブロックの石器(2)
- 図版47 大林遺跡 縄文土器 図版71 大林遺跡 第32ブロックの石器 第33ブロックの石器 第35ブロックの石器 第36ブロックの石器 第37ブ
- 図版48 大林遺跡 縄文土器
- 図版49 大林遺跡 縄文土器
- 図版50 大林遺跡 縄文土器
- 図版51 大林遺跡 縄文土器
- 図版52 大林遺跡 縄文土器 第6地点縄文草創期の石器
- 図版53 大林遺跡 縄文時代の石器
- 図版54 大林遺跡 第1ブロックの石器(1)・(2)
- 図版55 大林遺跡 第1ブロックの石器(3)・(4)
- 図版56 大林遺跡 第1ブロックの石器(5)・(6)
- 図版57 大林遺跡 第1ブロックの石器(7)・

ロックの石器

- 図版72 大林遺跡 第41ブロックの石器(1)・
(2)
- 図版73 大林遺跡 第41ブロックの石器(3)・
(4)
- 図版74 大林遺跡 第41ブロックの石器(5)・
(6)
- 図版75 大林遺跡 第41ブロックの石器(7)
第38ブロックの石器 第40ブロック
の石器 第39ブロックの石器
- 図版76 大林遺跡 遺跡の景観 1号陥し穴
状土坑(1) 1号陥し穴状土坑(2)
- 図版77 大堀遺跡 2号陥し穴状遺構 第1
地点先土器時代遺物出土状況(1) 第
1地点先土器時代遺物出土状況(2)
第2地点先土器時代遺物出土状況
- 図版78 大堀遺跡 第1地点Aブロック 第
1地点Bブロック
- 図版79 大堀遺跡 第1地点Aブロック 第
2地点 第2地点接合資料
- 図版80 大堀遺跡 第2地点接合資料
- 図版81 西野遺跡 遺跡の景観 土層断面溝
状遺構
- 図版82 芋窪遺跡 遺跡の景観 調査状況
住居跡
- 図版83 芋窪遺跡 陥し穴状の土坑 先土器
時代遺物出土状況(1)・(2)
- 図版84 芋窪遺跡 Aブロックの石器(1)・(2)
- 図版85 芋窪遺跡 Bブロックの石器(1)・(2)
- 図版86 芋窪遺跡 Cブロックの石器(1)・(2)
- 図版87 芋窪遺跡 Dブロックの石器 Eブ
ロックの石器(1)
- 図版88 芋窪遺跡 Eブロックの石器(2) E

ブロックの石器(3)

- 図版89 芋窪遺跡 接合資料(1)
- 図版90 芋窪遺跡 接合資料(2)
- 図版91 芋窪遺跡 接合資料(3)

写 真 图 版



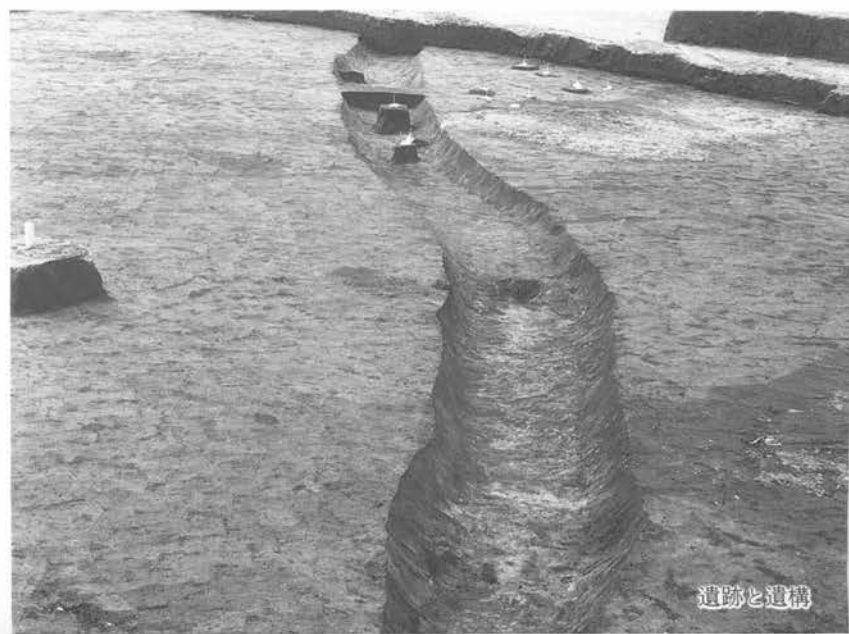




遺跡の景観(1)



遺跡の景観(2)

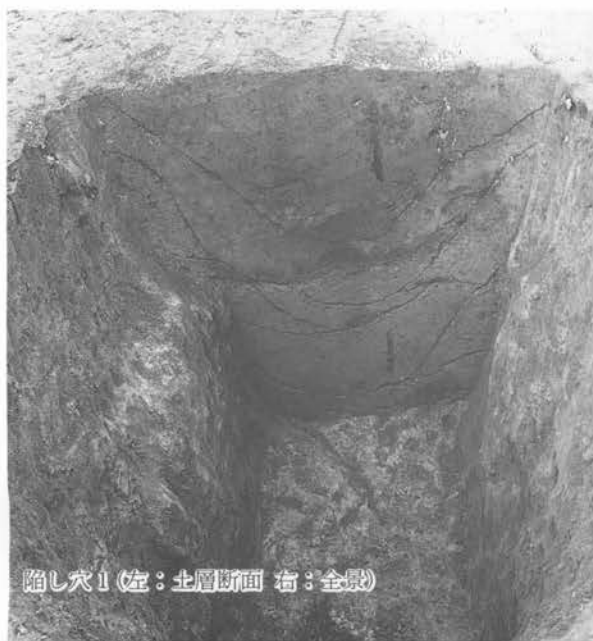


近世の溝

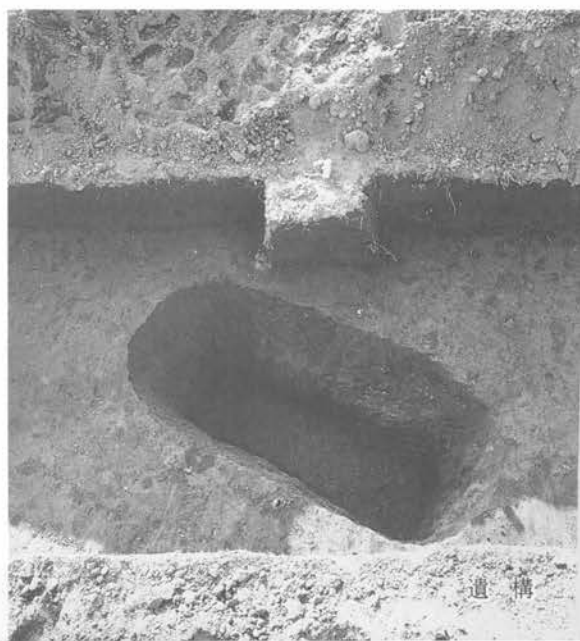
土坑1(1)

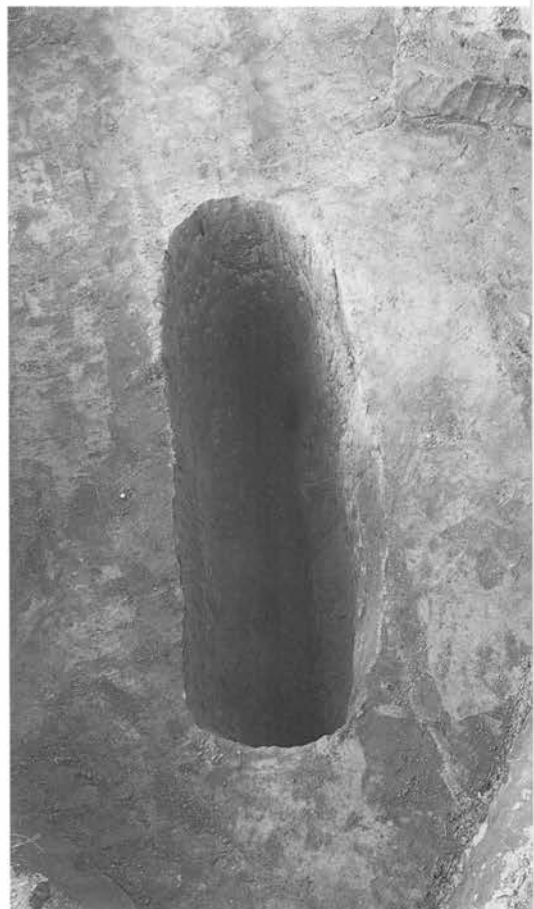


土坑1(2)



陥し穴1(左:土層断面 右:全景)





陥し穴2 (左：土層断面、右：全景)



陥し穴3

土層断面(1)

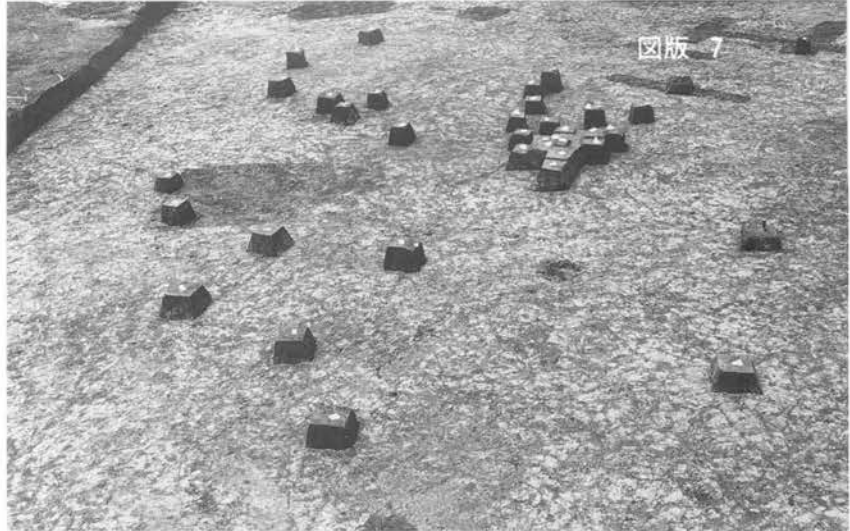


土層断面(2)



第1地点





第2地点(1)



第2地点(2)



第3地点



第4地点(1)

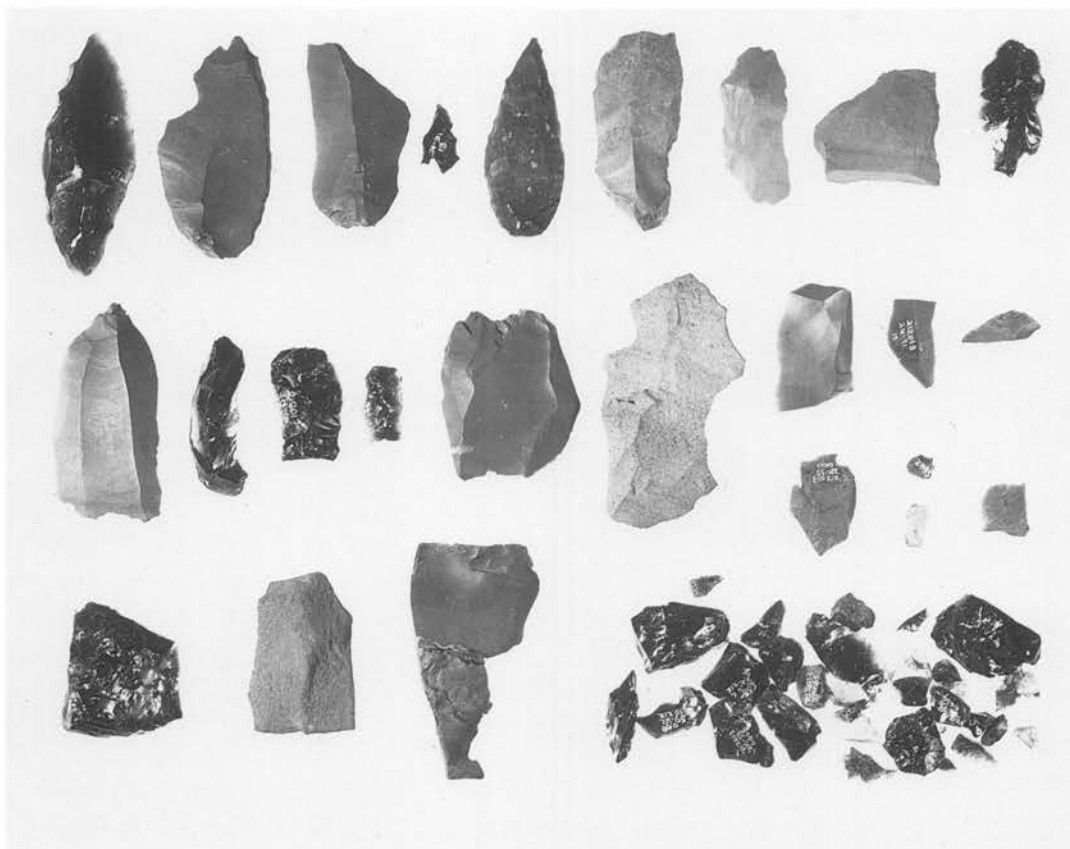


第4地点(2)
炭化物片の集中
と焼土の分布

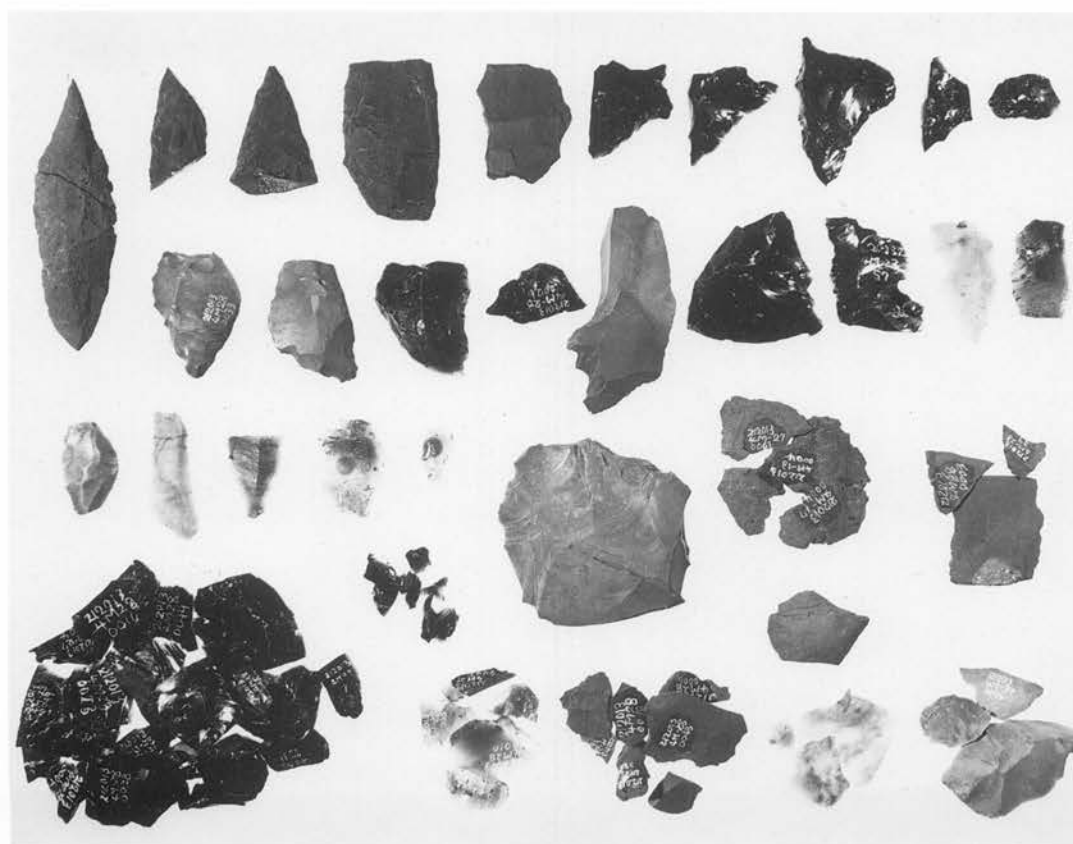


第5地点

先土器時代



第1ブロックの石器



第2ブロックの石器



第3ブロックの石器



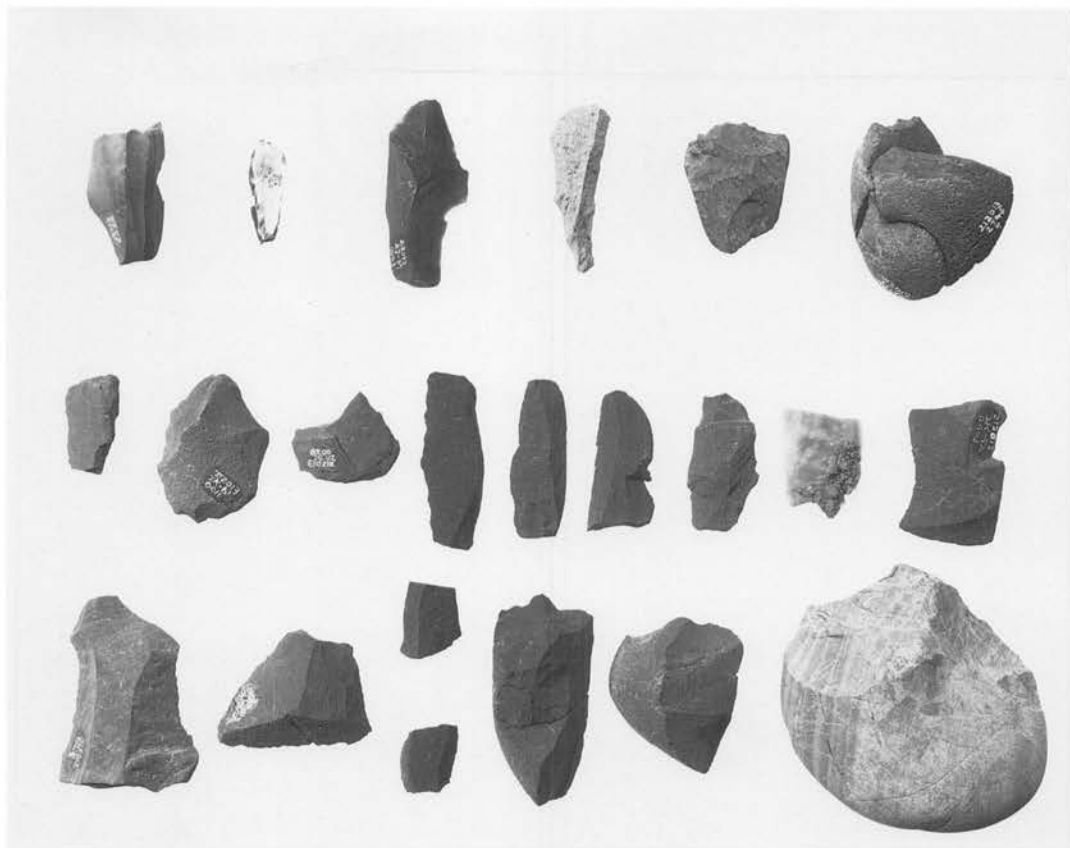
第4ブロックの石器



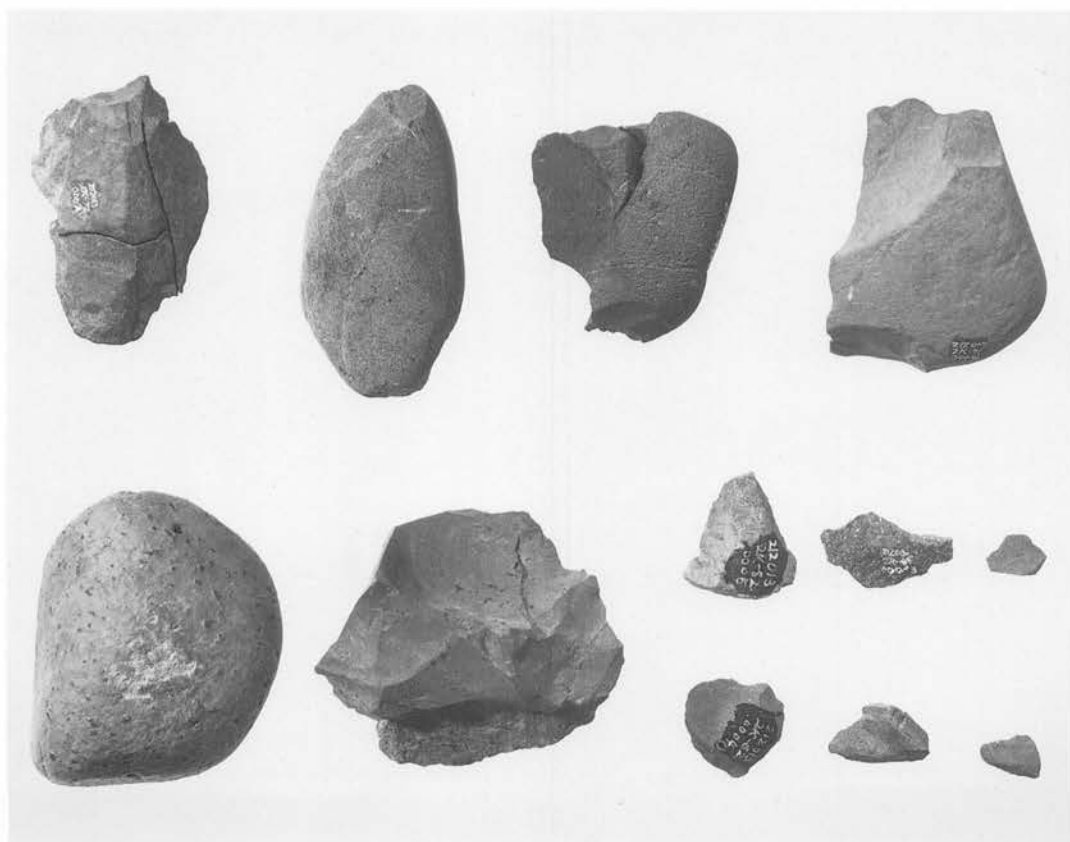
第5ブロックの石器



第6ブロックの石器



第7ブロック(上段)・第8ブロック(下2段)の石器



第4地点の石器



大塚1号塚

遺跡の景観(1)



遺跡の景観(2)



第3地点



遺跡

第4地点



第6地点(1)
土塁



第6地点(2)
土坑列





第6地点(3)



第6地点(4)
谷部の土層



第6地点(5)
遺物の出土



第10地点



第11地点
2号塚の周溝



第11地点
2号塚周溝の土層断面



第14地点溝内の獣骨



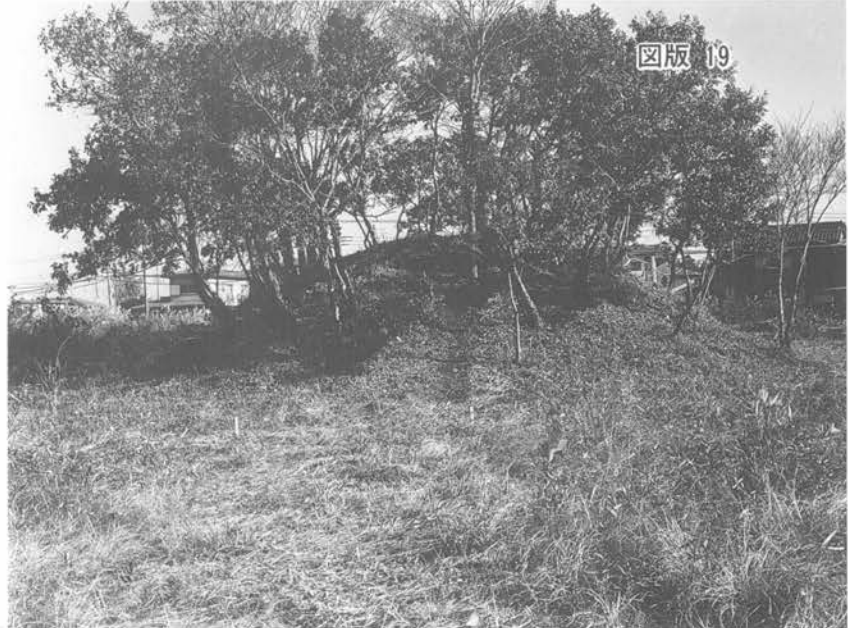
第16地点(1)
土塁の土層断面



第16地点(2)
溝と土坑列



大塚1号塚



周溝(1)



周溝(2)



主層断面(1)

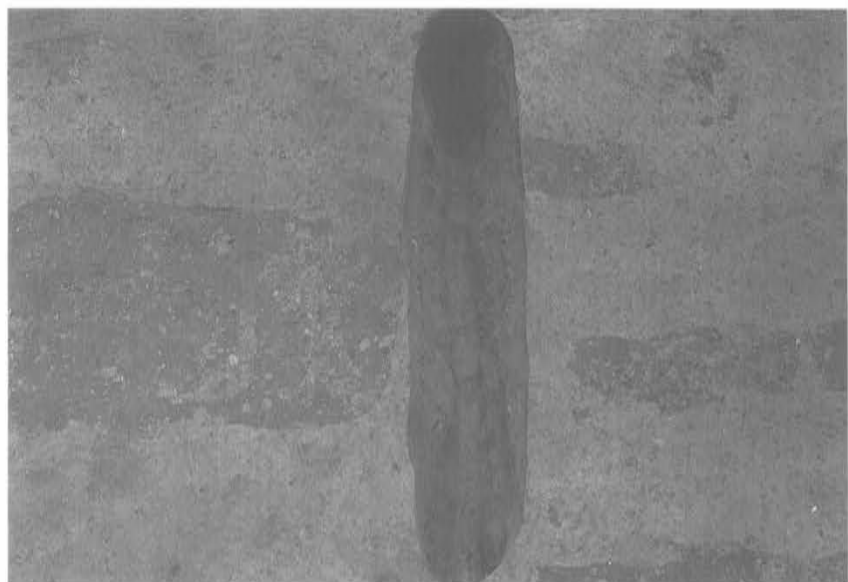


主層断面(2)

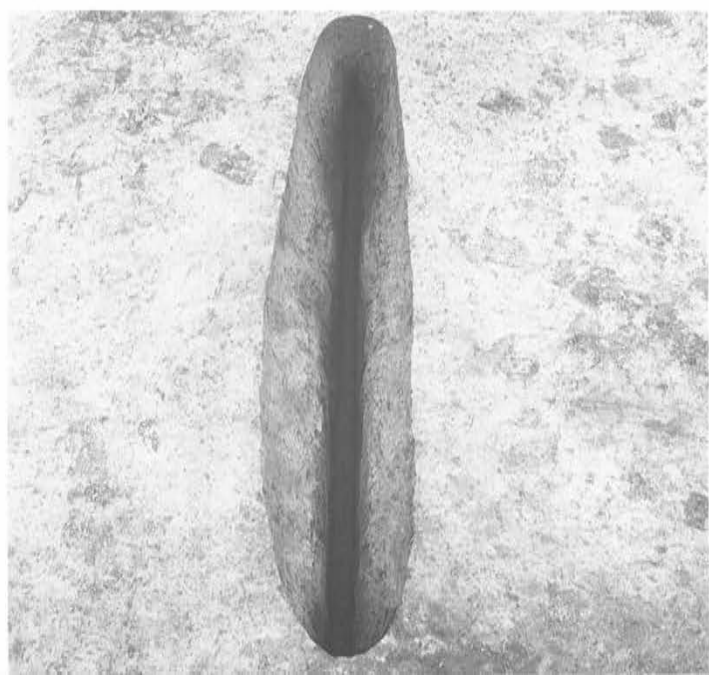
第1地点
陥し穴群全景



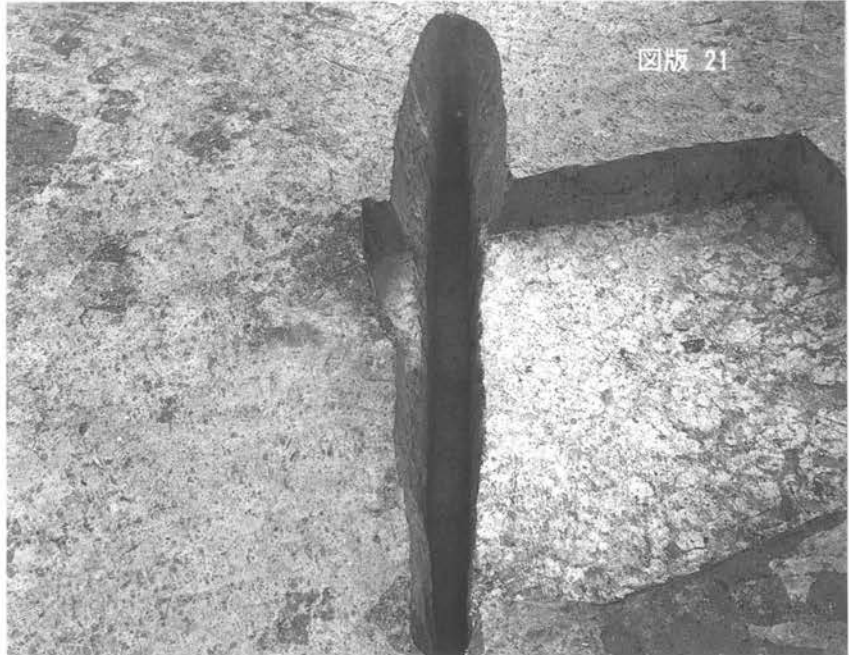
陥し穴1



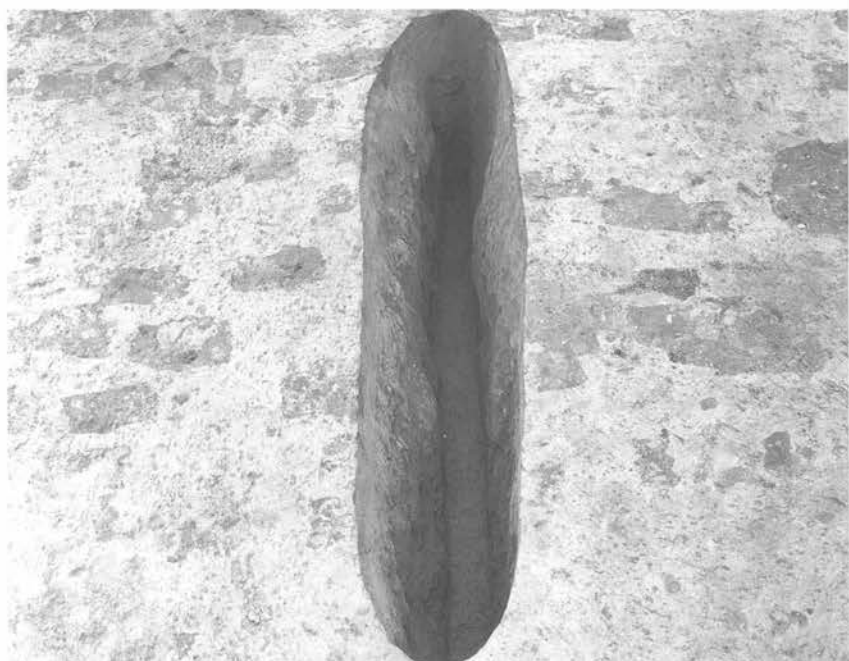
陥し穴2



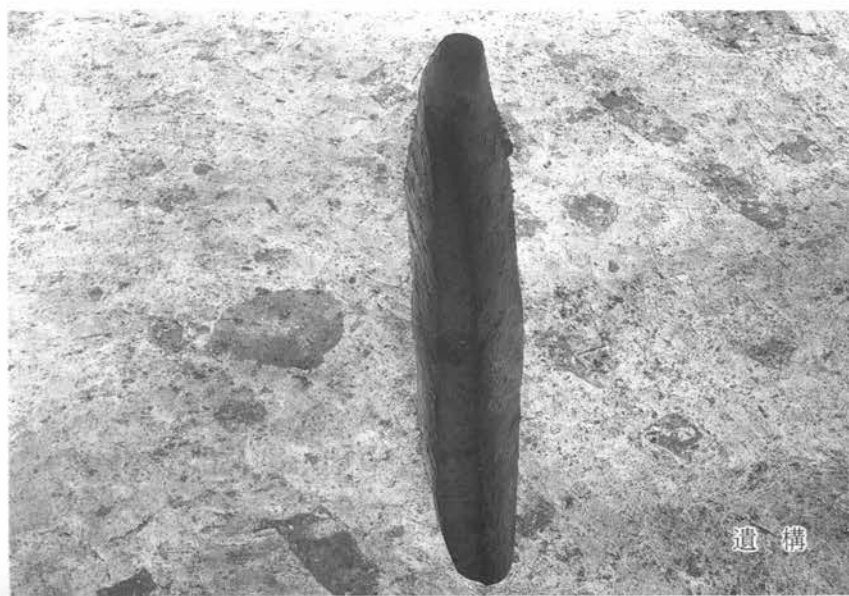
陥し穴 3



陥し穴 4



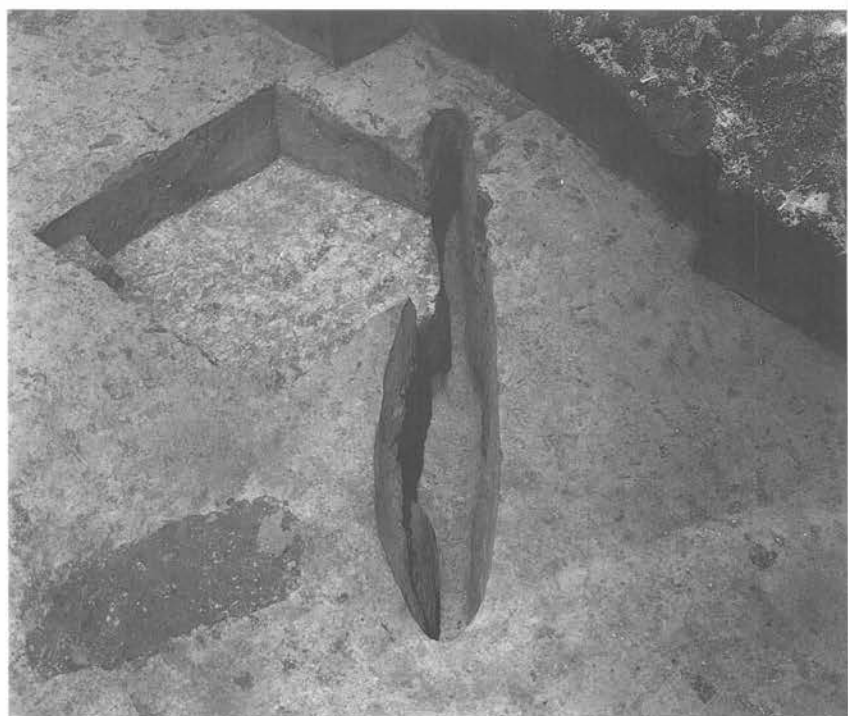
陥し穴 5



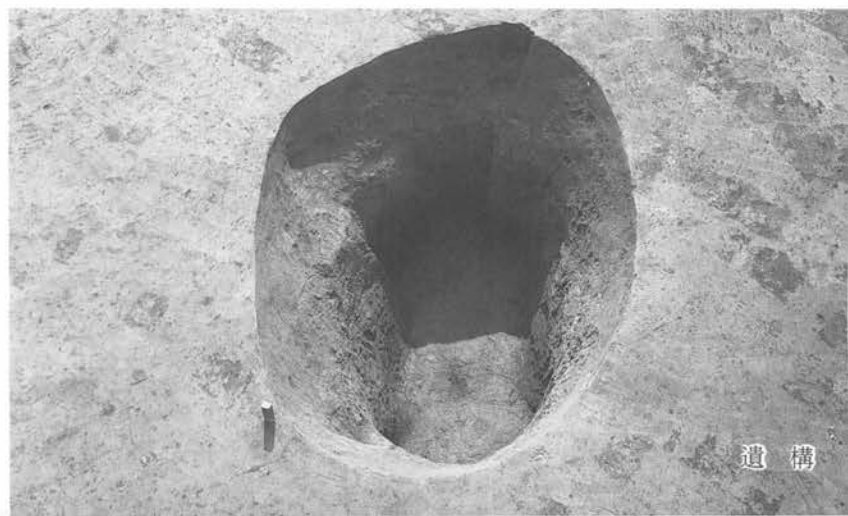
陥し穴 6

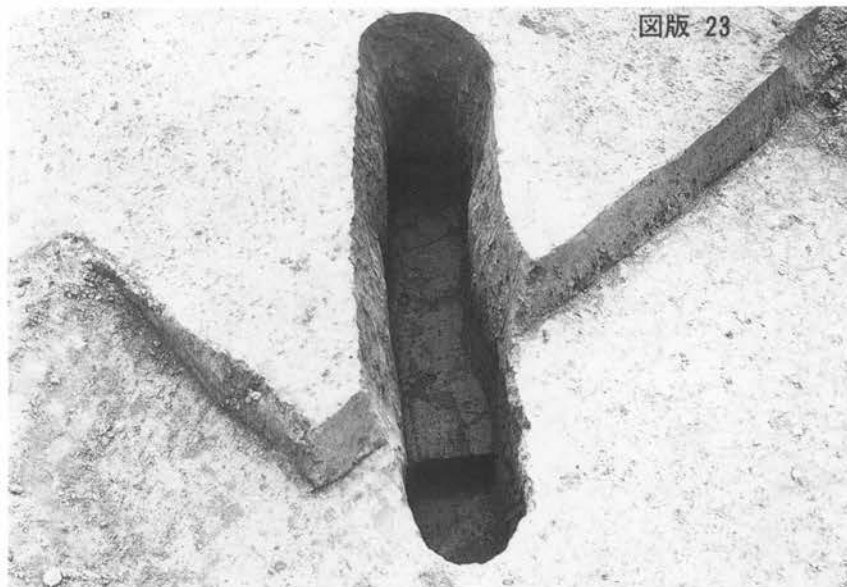


陥し穴 7



陥し穴 8





陥し穴 9



陥し穴10

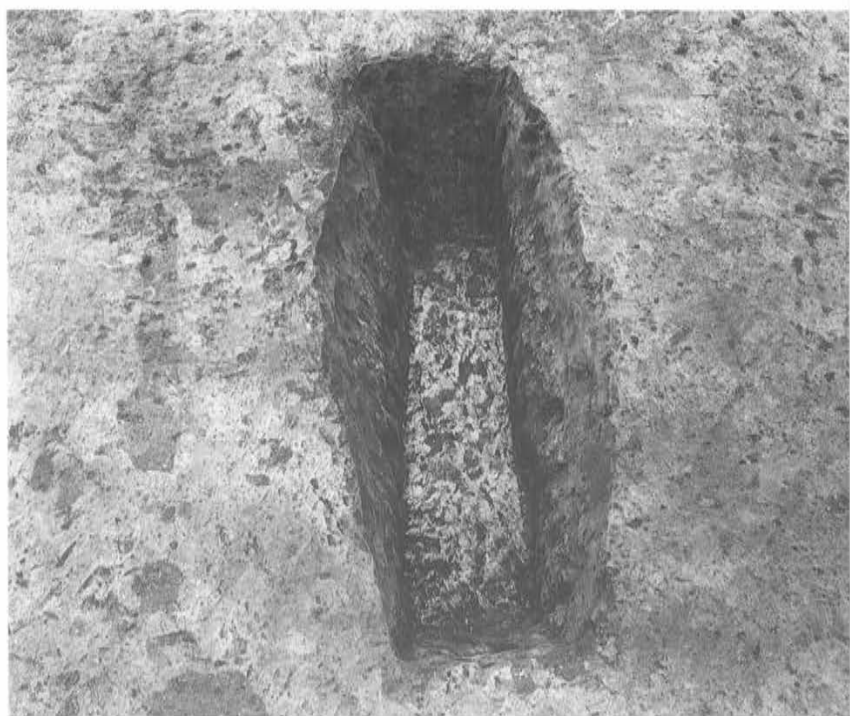


第3地点陥し穴
土坑群全景

陥し穴11



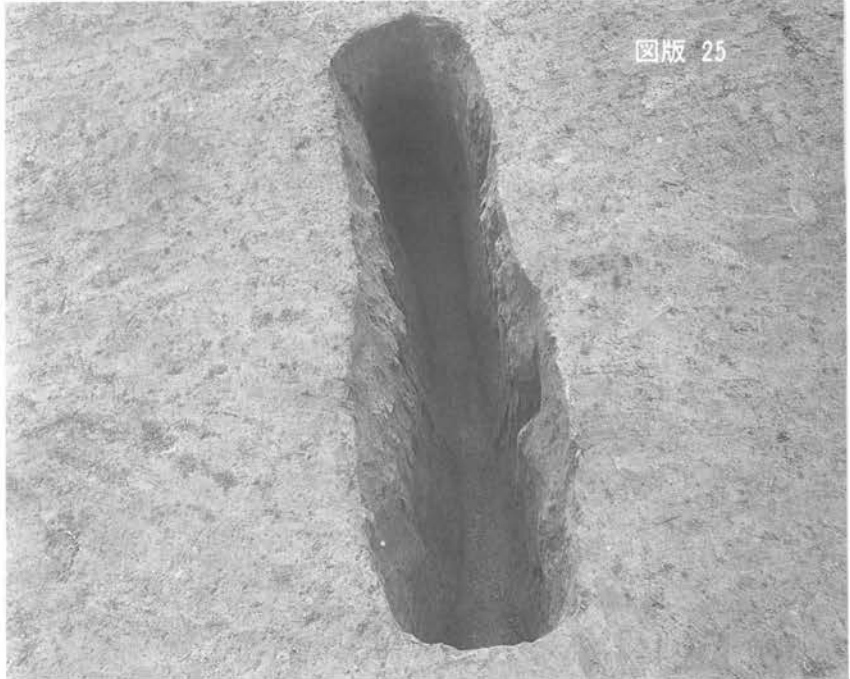
土坑1



土坑2



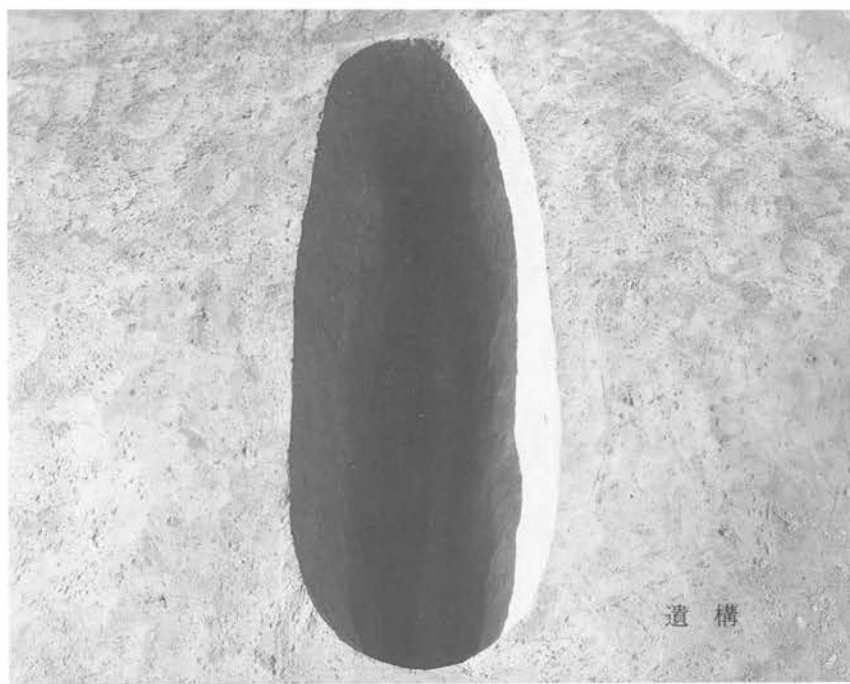
陥し穴12(1)



陥し穴12(2)
埋土の状態



陥し穴14



遺構

陥し穴15



陥し穴16



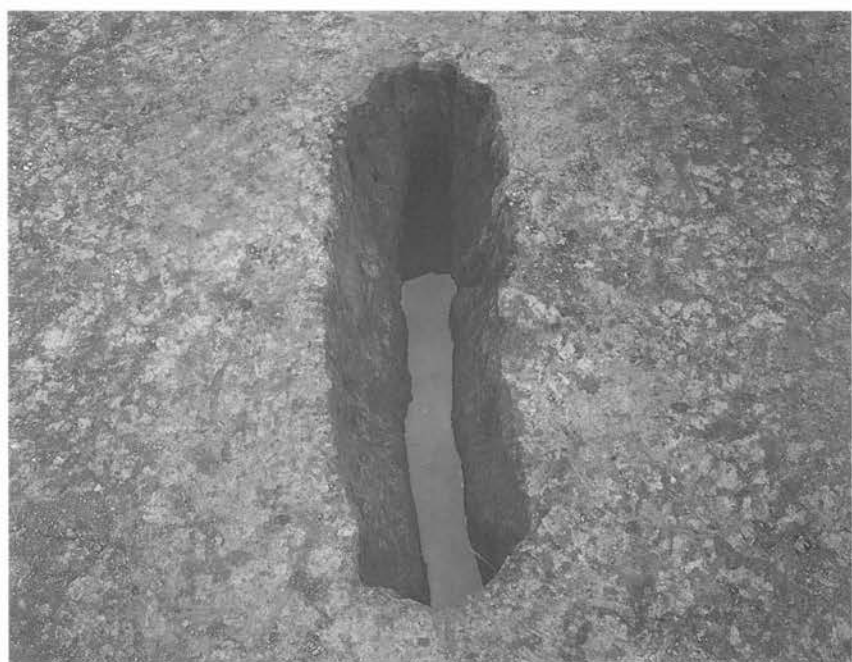
陥し穴17



陥し穴18



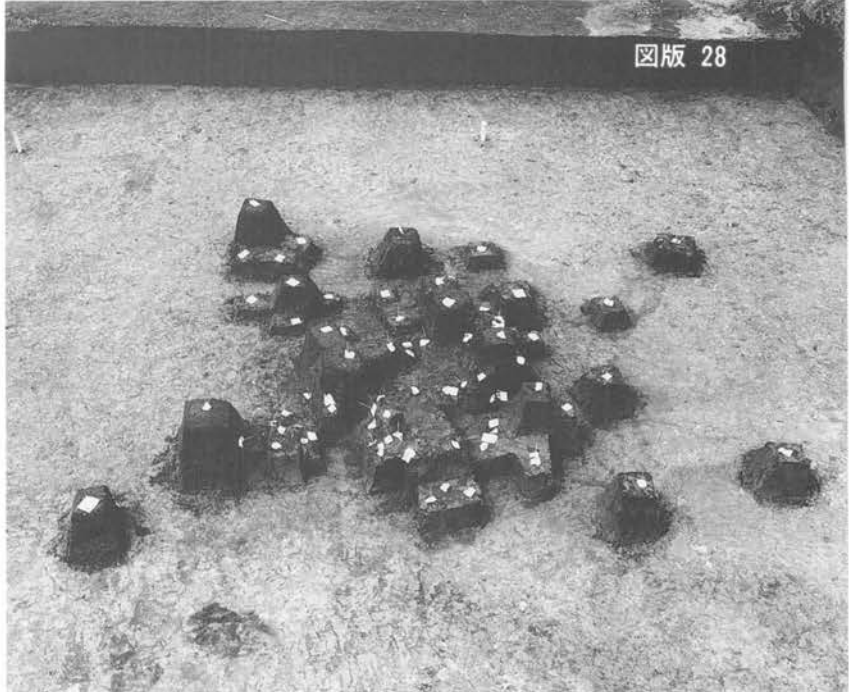
陥し穴19



陥し穴20



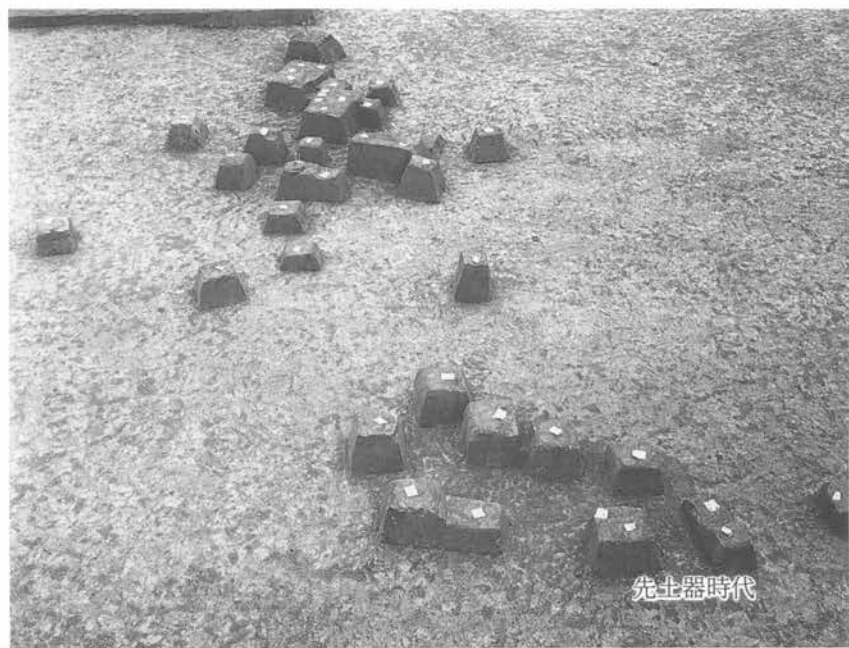
第2地点



第3地点
第II文化層(1)



第3地点
第II文化層(2)

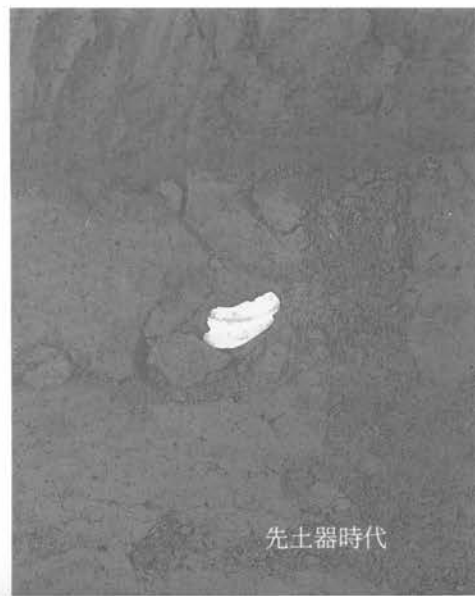




第3地点
第Ⅵ・第Ⅶ文化層



第3地点
第Ⅶ文化層貝の
出土状況



第4地点(1)



第4地点(2)



第5地点



先土器時代



第 6 地点(1)



第 6 地点(2)



第 6 地点(3)



第8地点



第9地点(西側)



第9地点(東側)

第12地点



第14地点



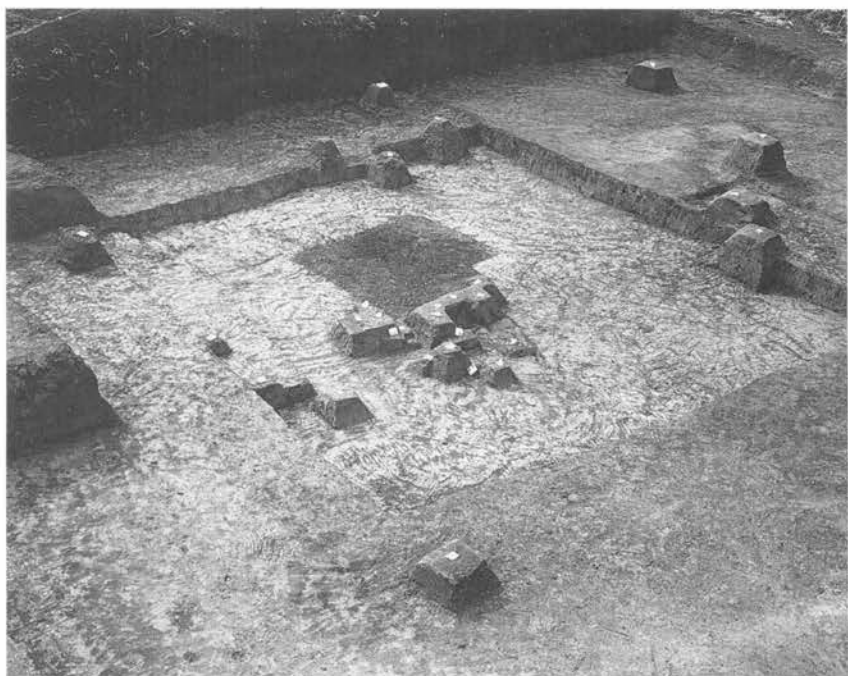
第16地点(1)



第16地点(2)



第16地点(3)



第17地点

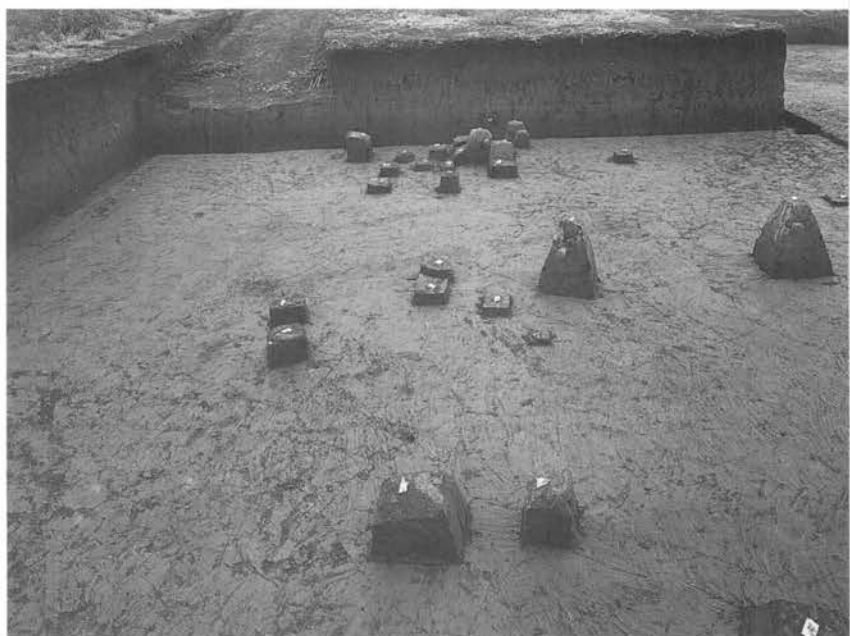


先土器時代

第18地点(1)



第18地点(2)



第18地点(3)・(4)





第18地点(5)



第18地点(6)

第18地点(7)



第19地点





1-1



1-3



1-4



1-5



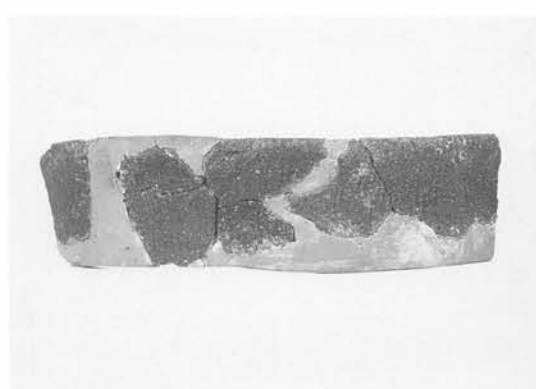
1-6



1-7



1-8



1-9



1-12



1-11



1-13



8-2



8-1



8-4



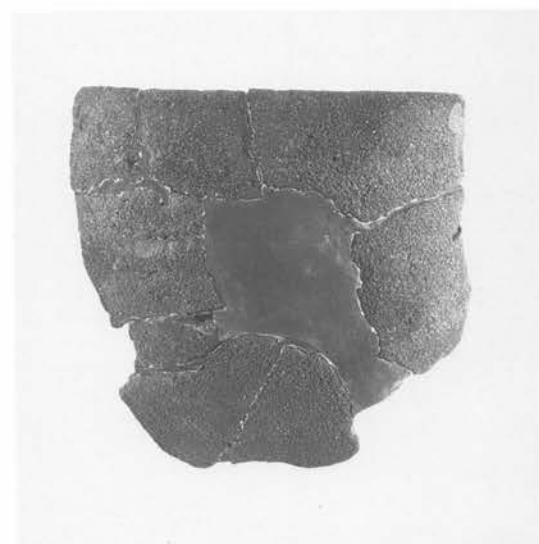
8-3



8-5



8-6



8-9



8-8



8-7

大林遺跡



16-14



16-15

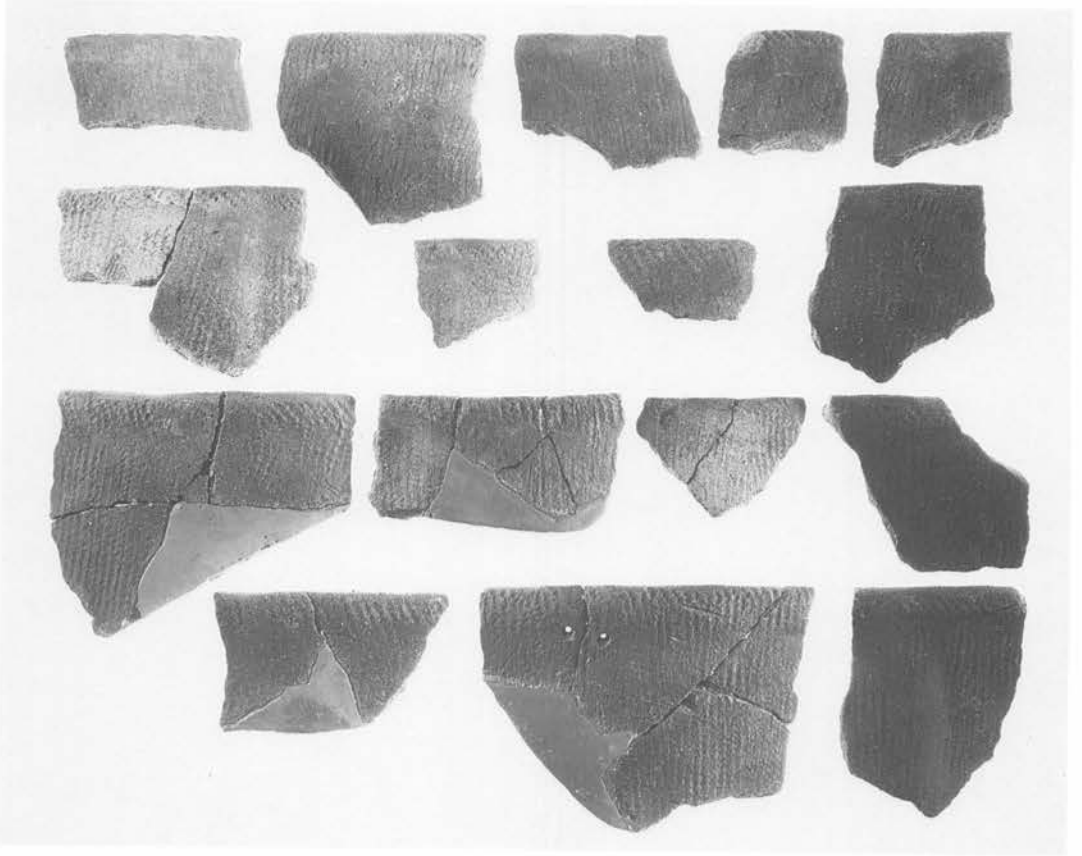


16-16

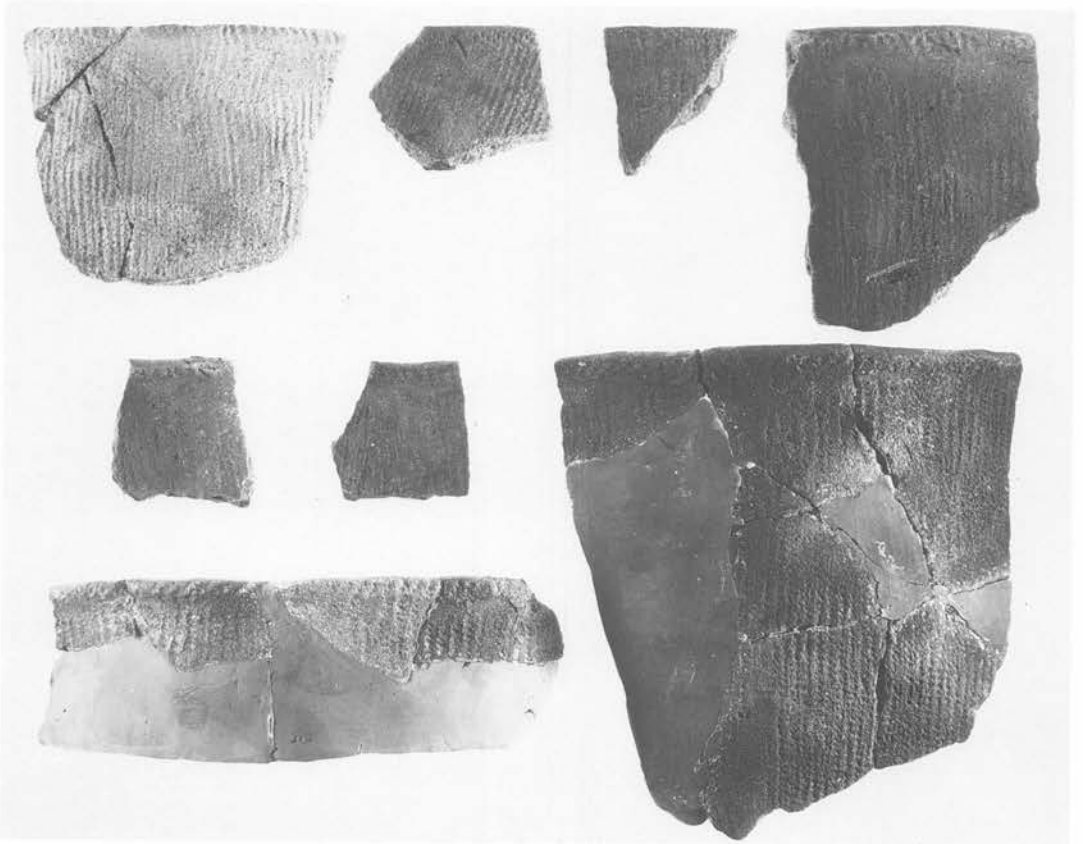


第20地点の土器

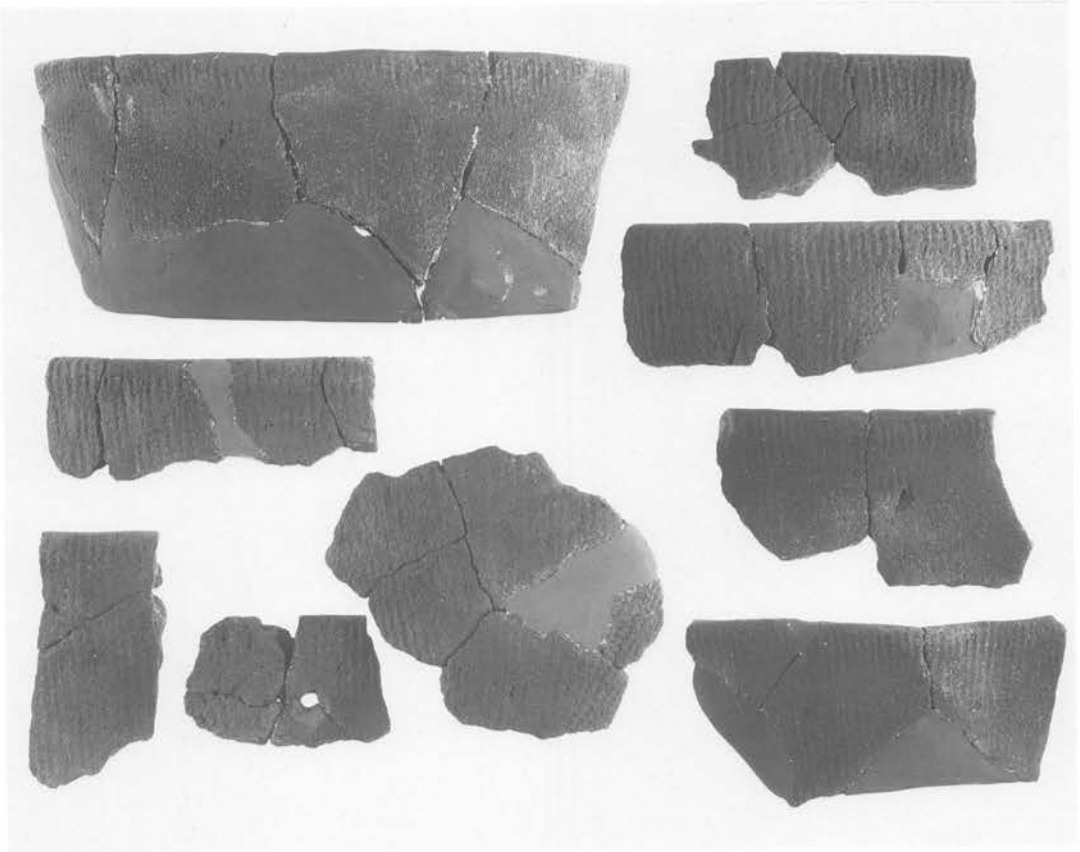
縄文土器



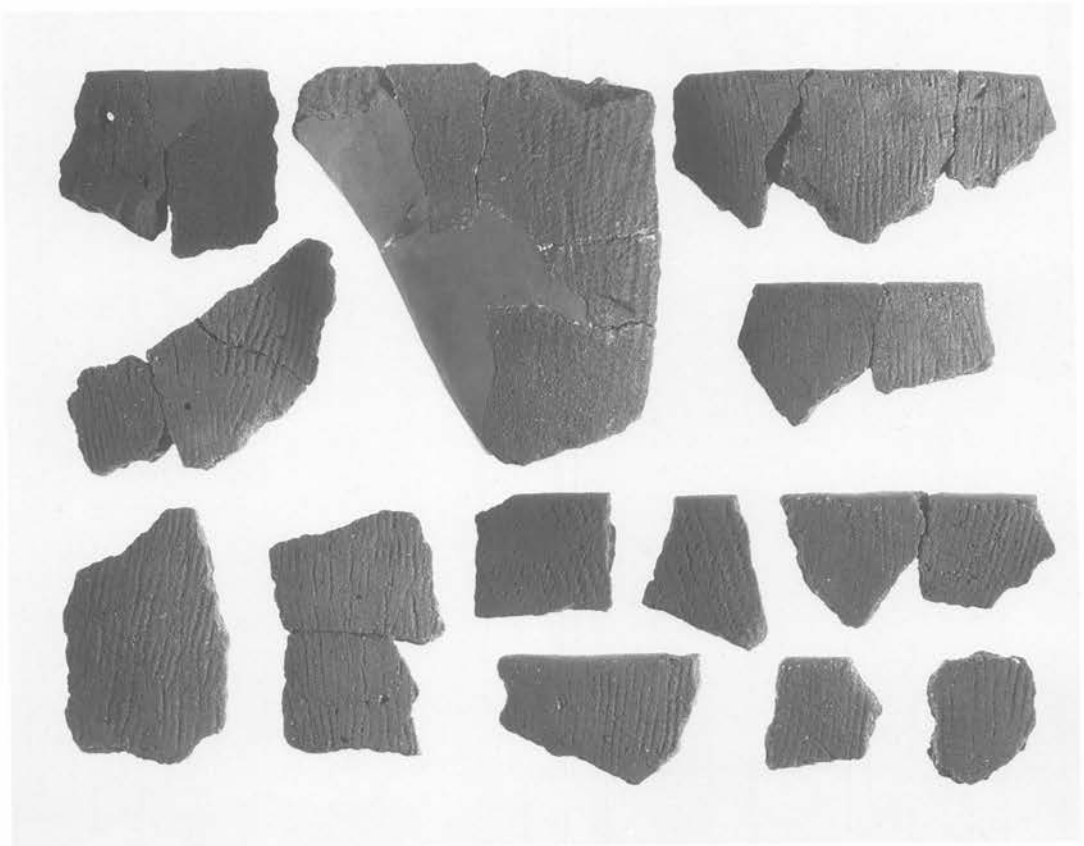
2(1)



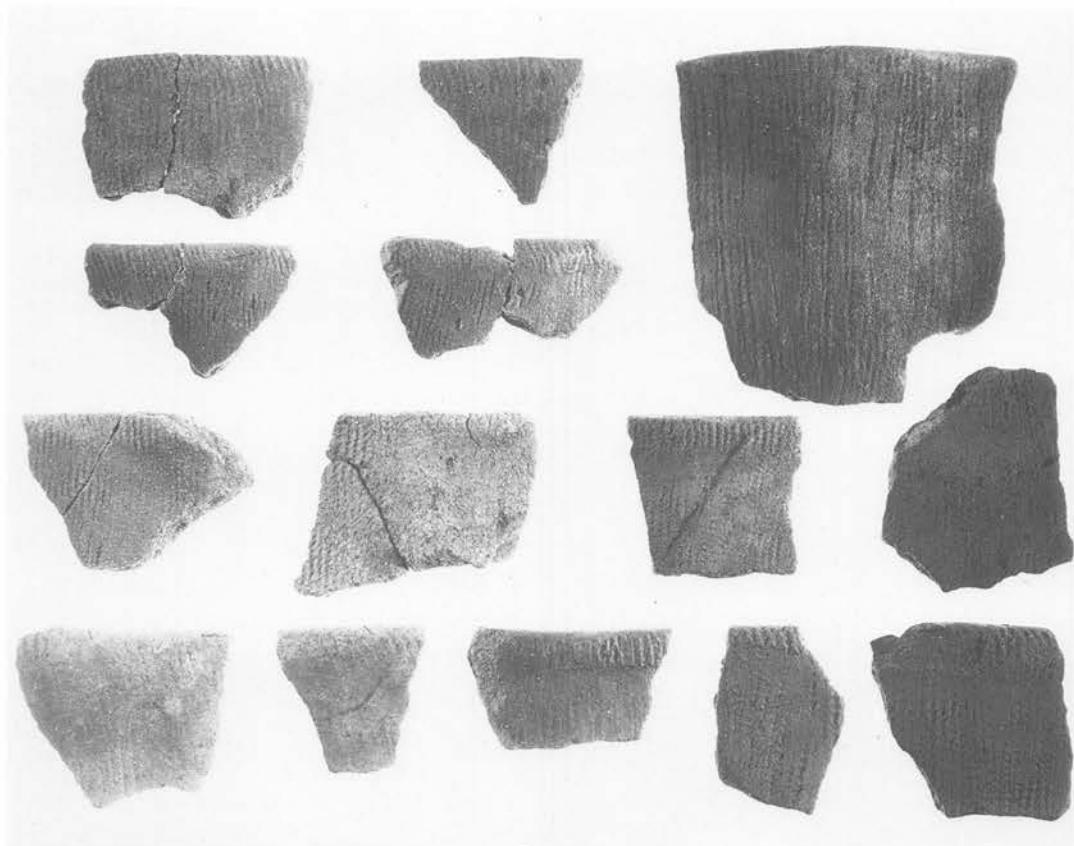
2(2)



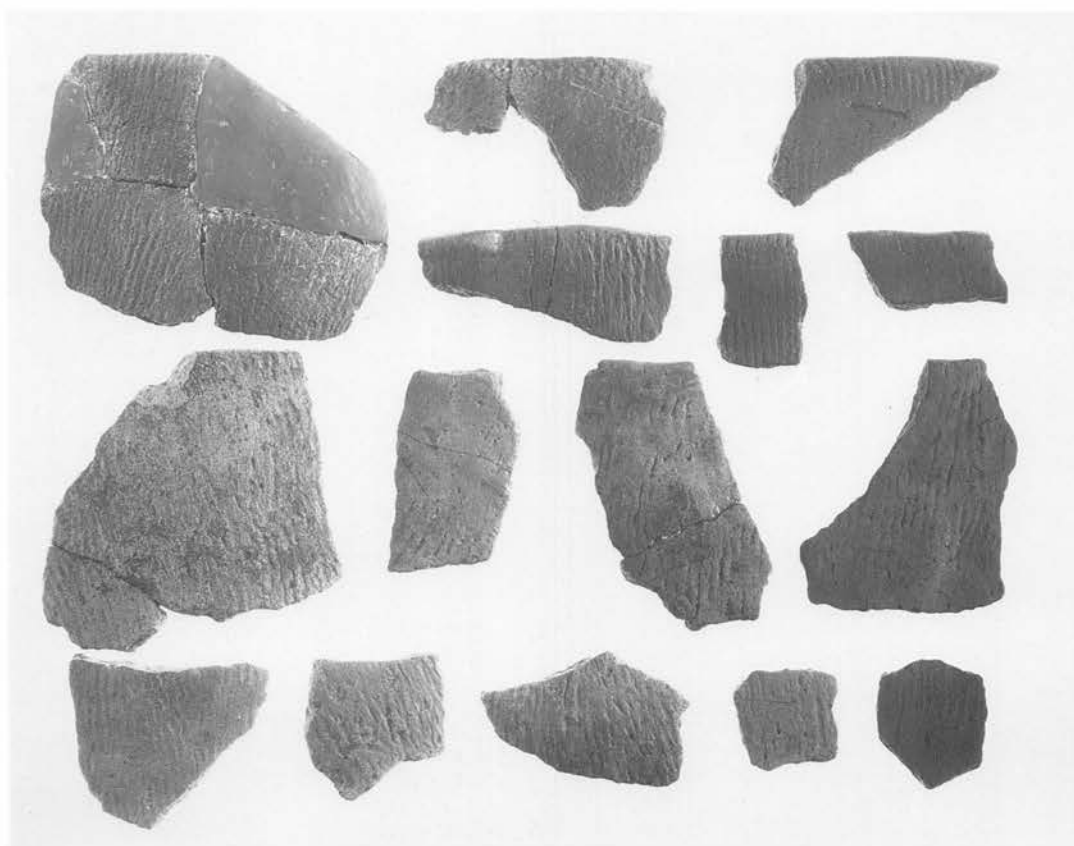
3(1)



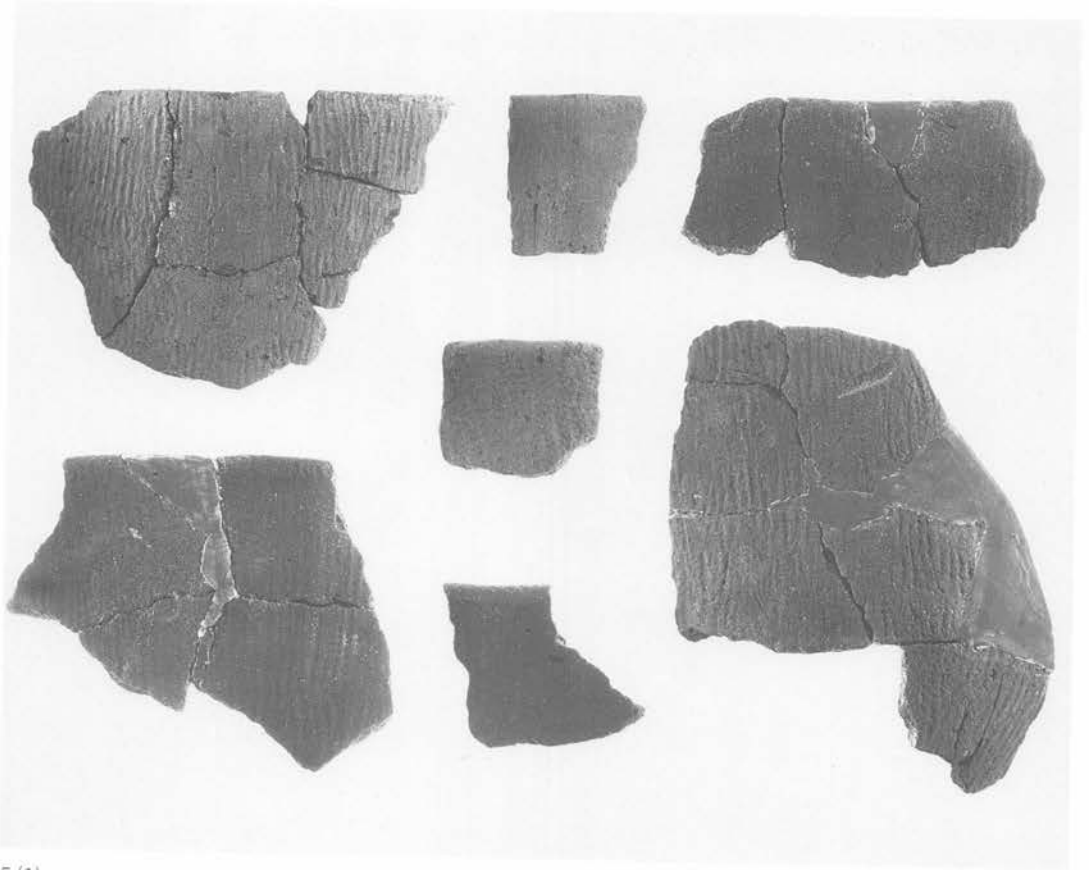
3(2)



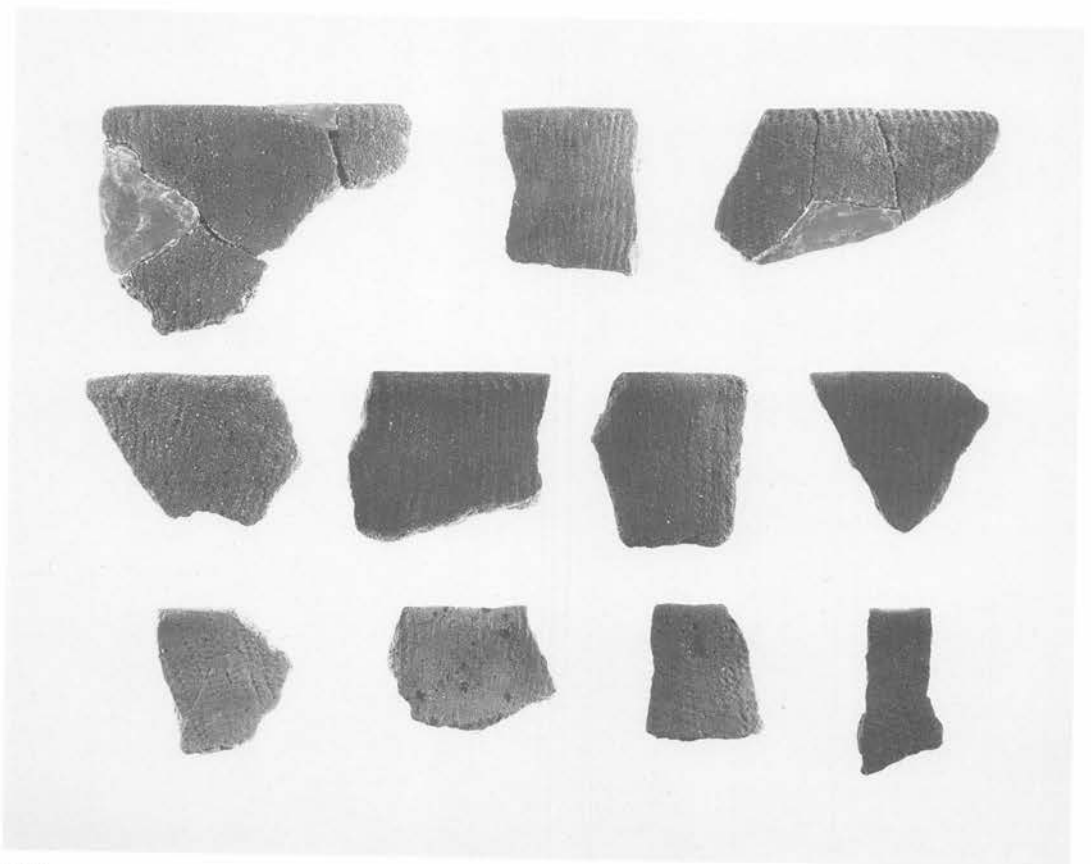
4(1)



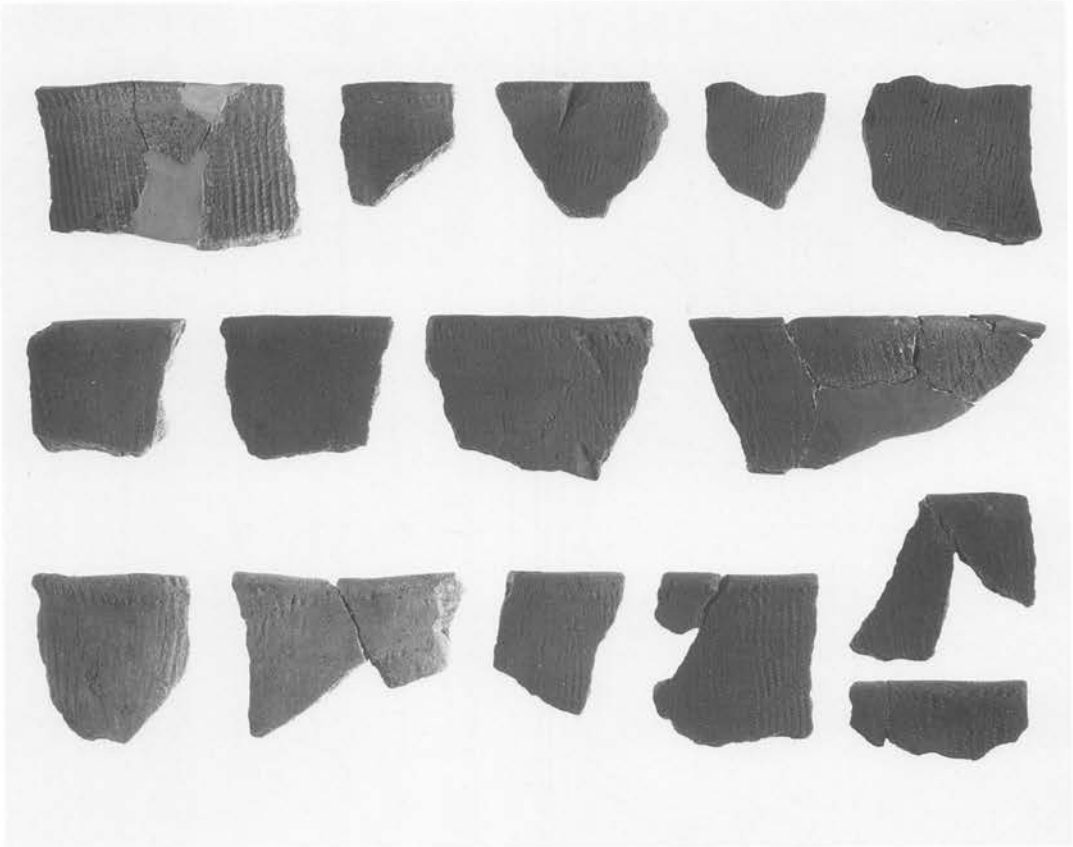
4(2)



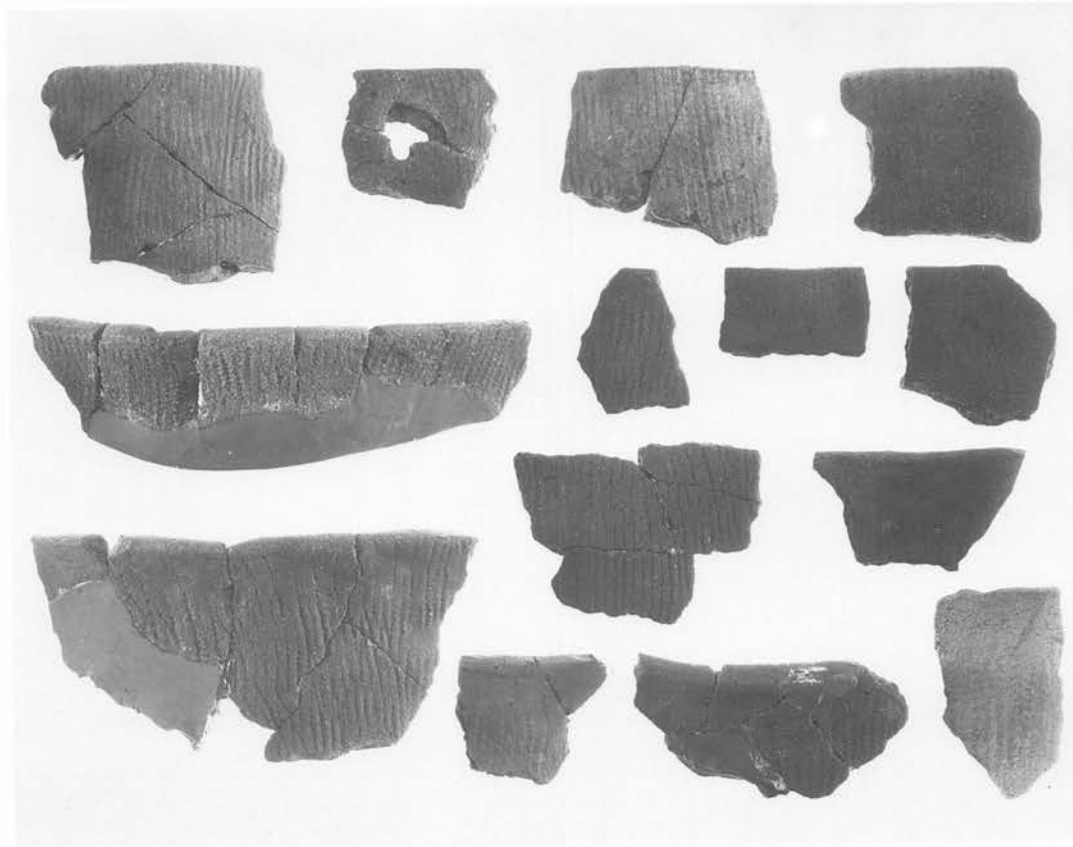
5(1)



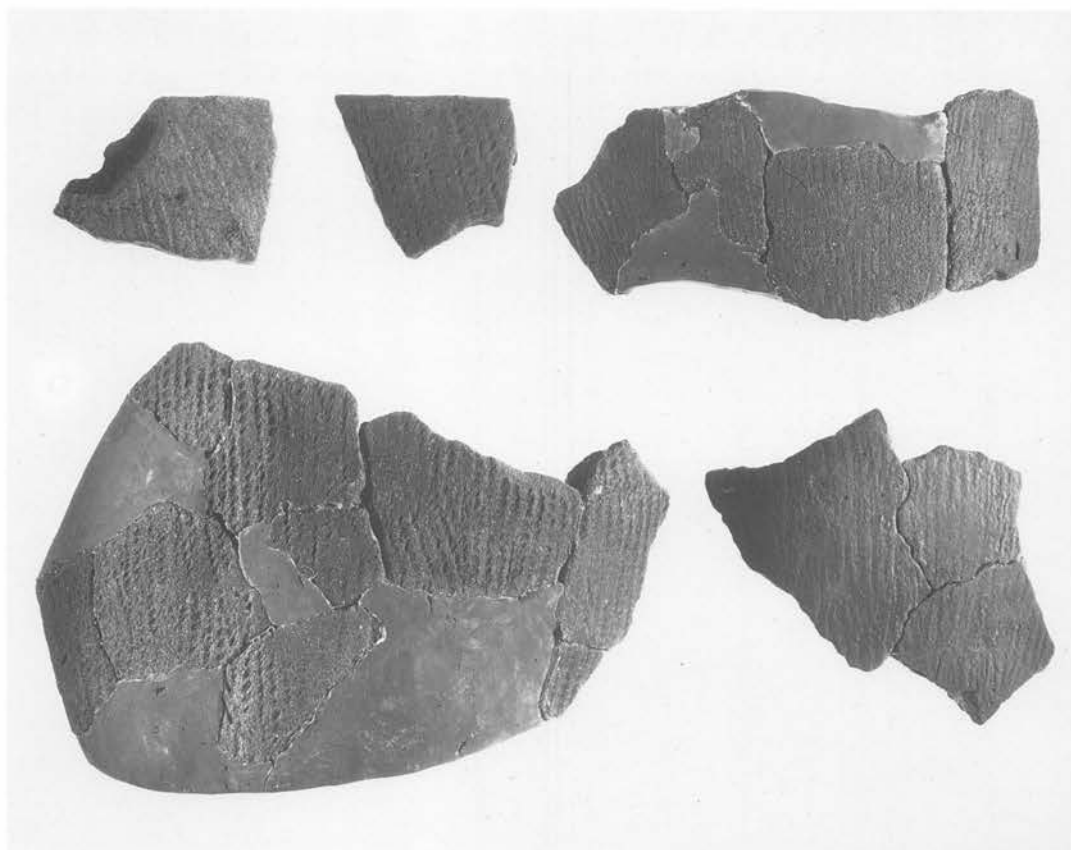
5(2)



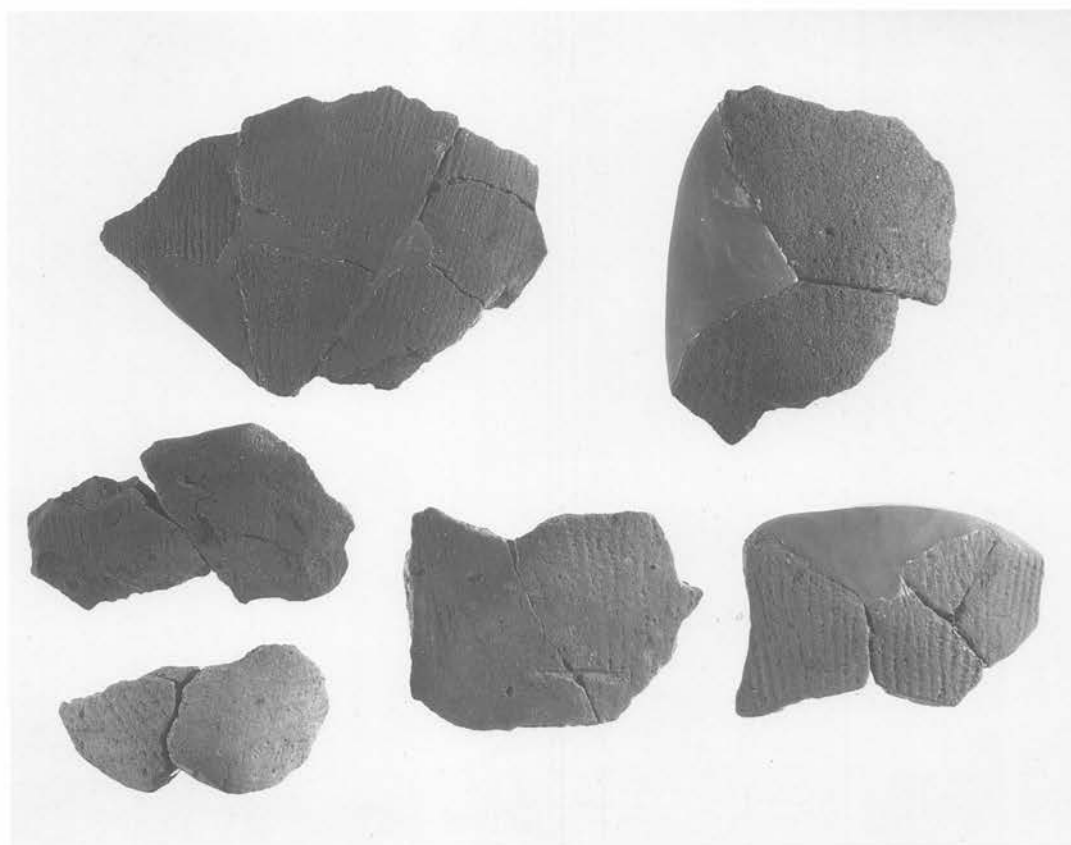
6(1)



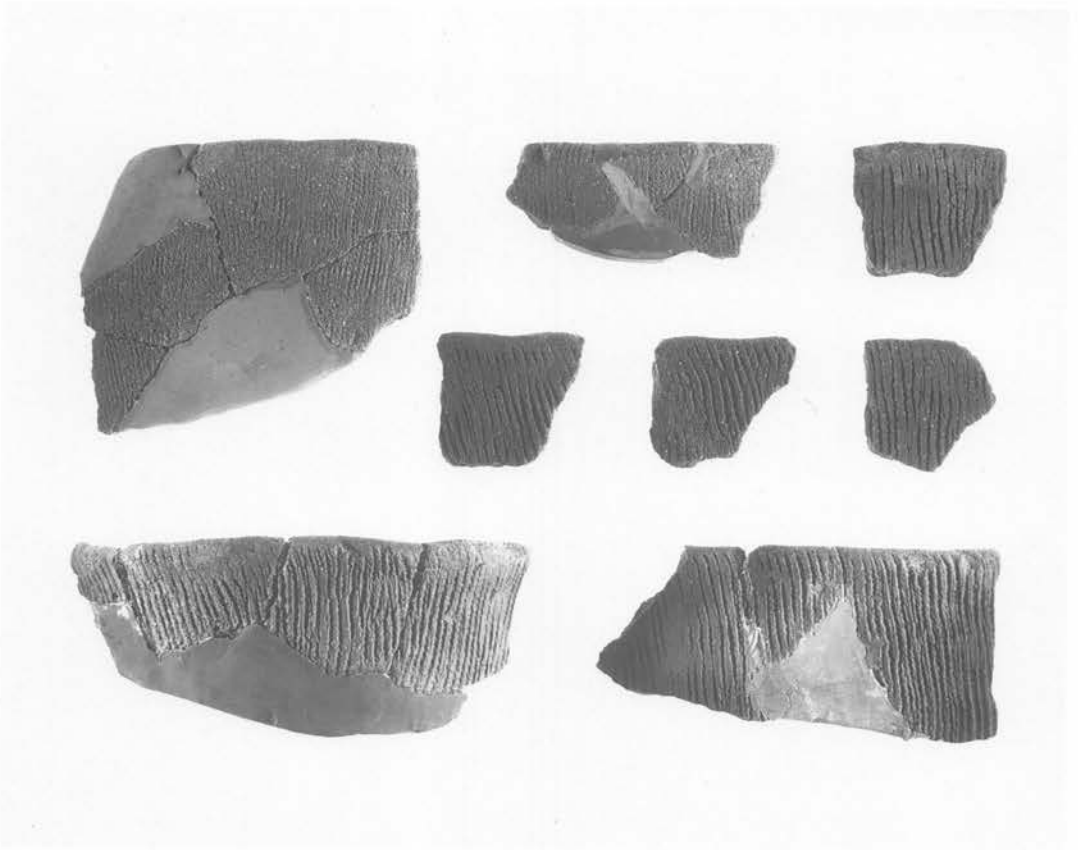
6(2)



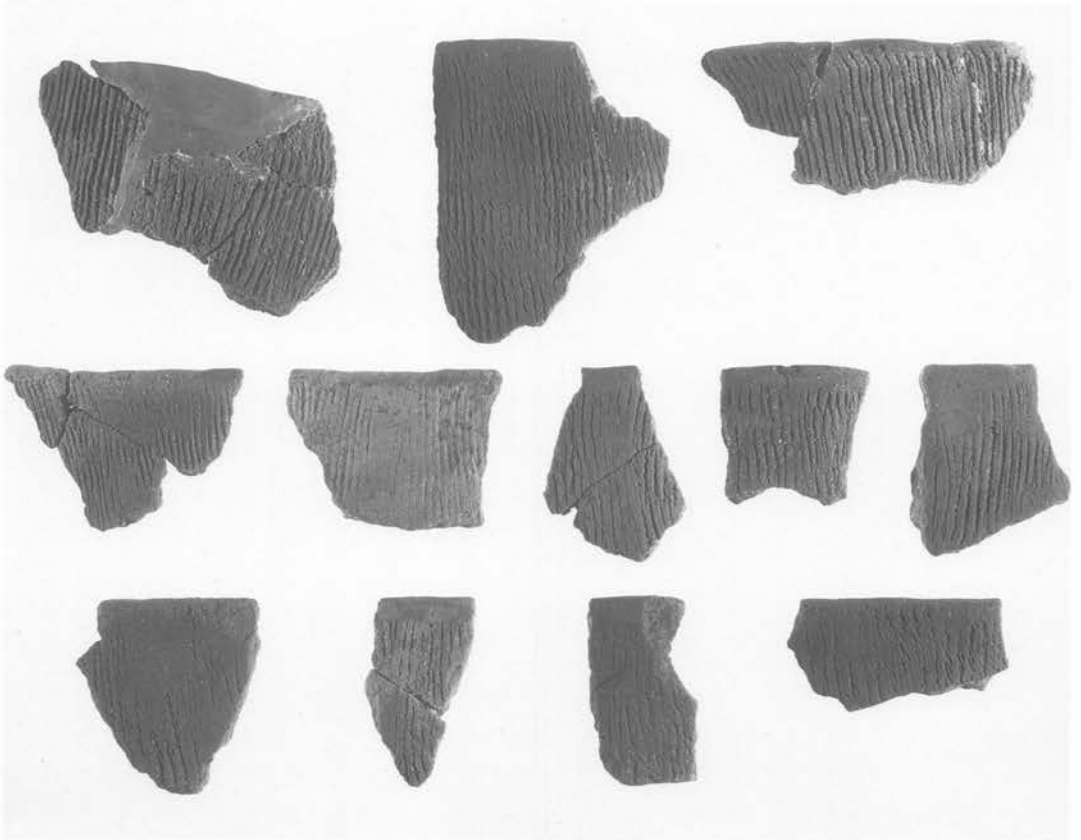
7(1)



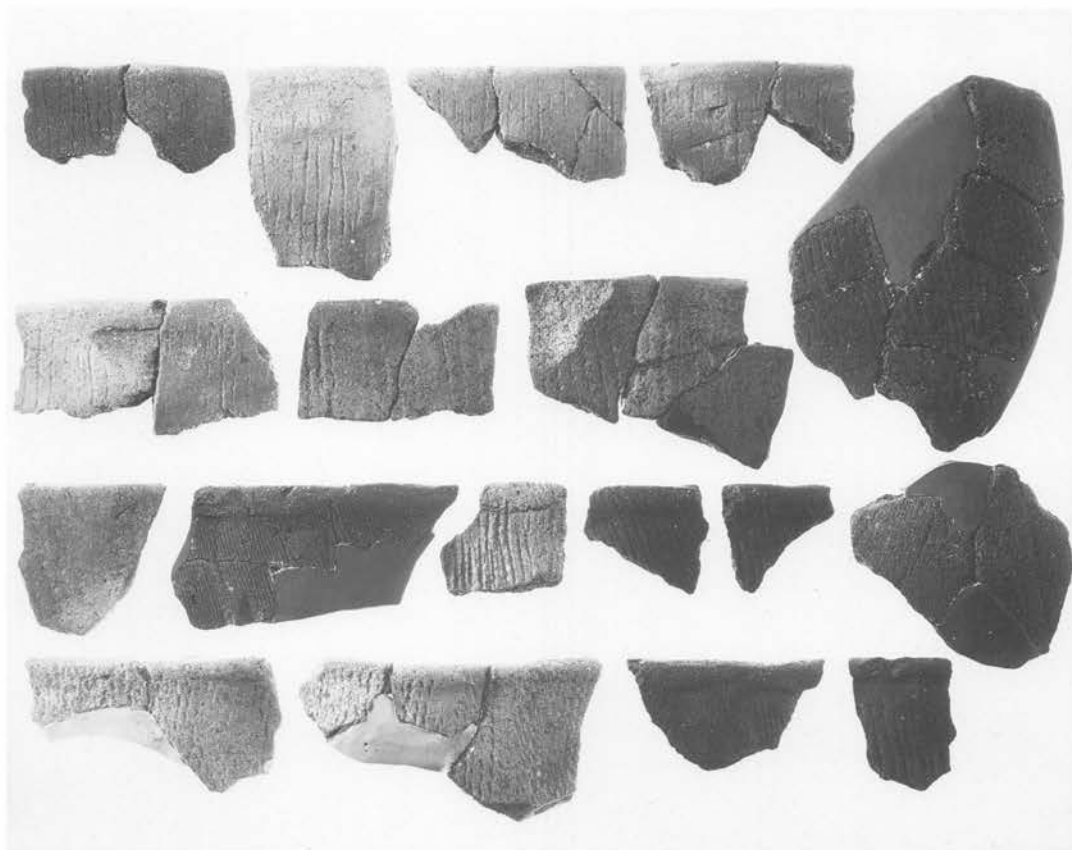
7(2)



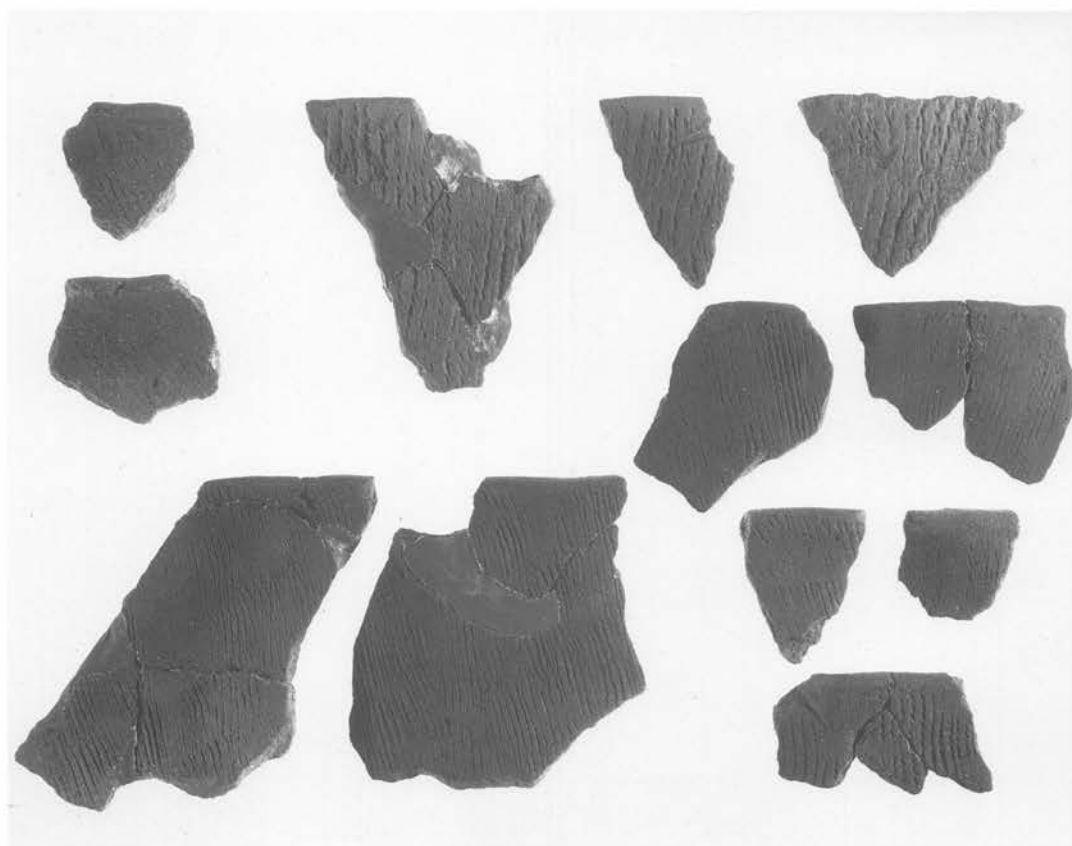
9(1)



9(2)

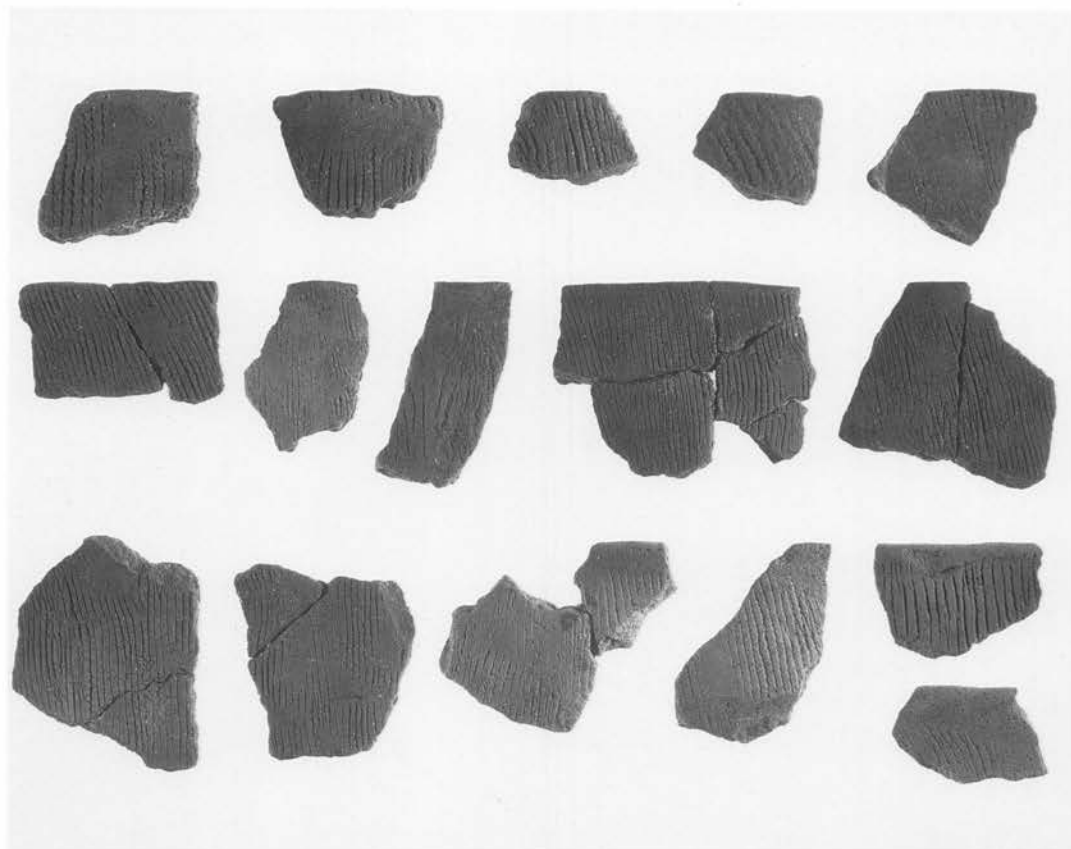


10

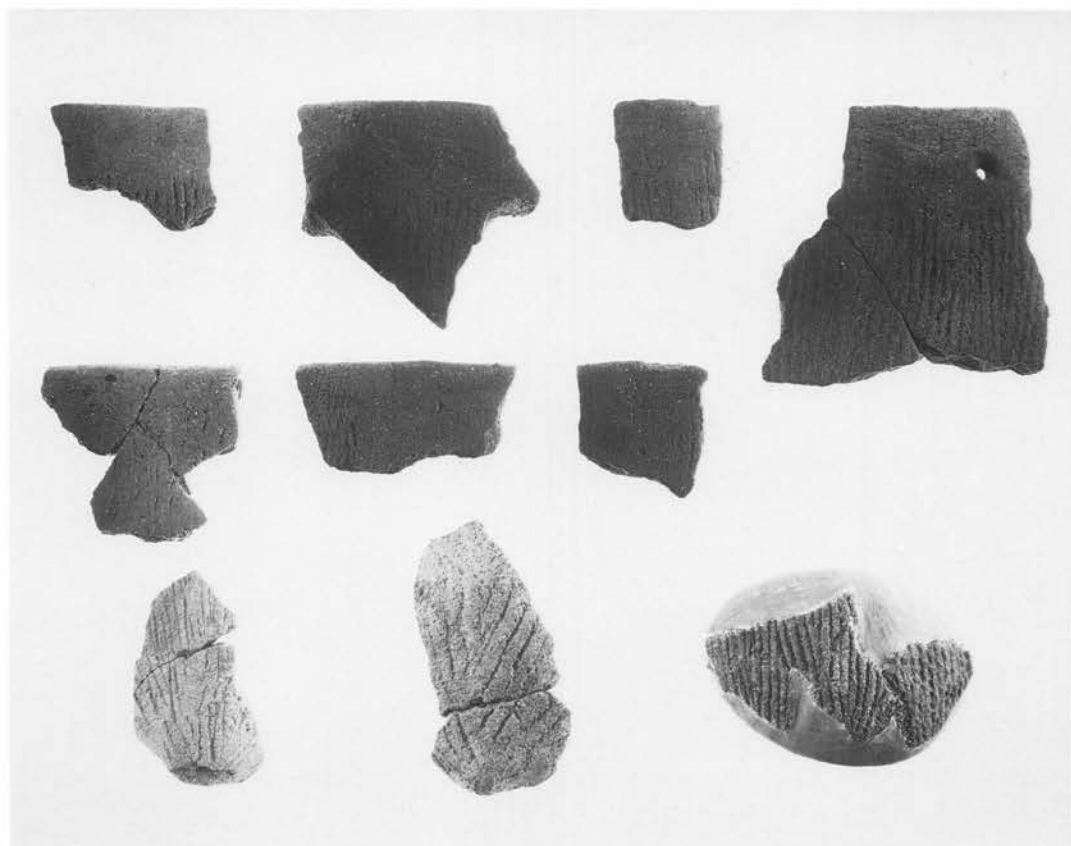


11(1)

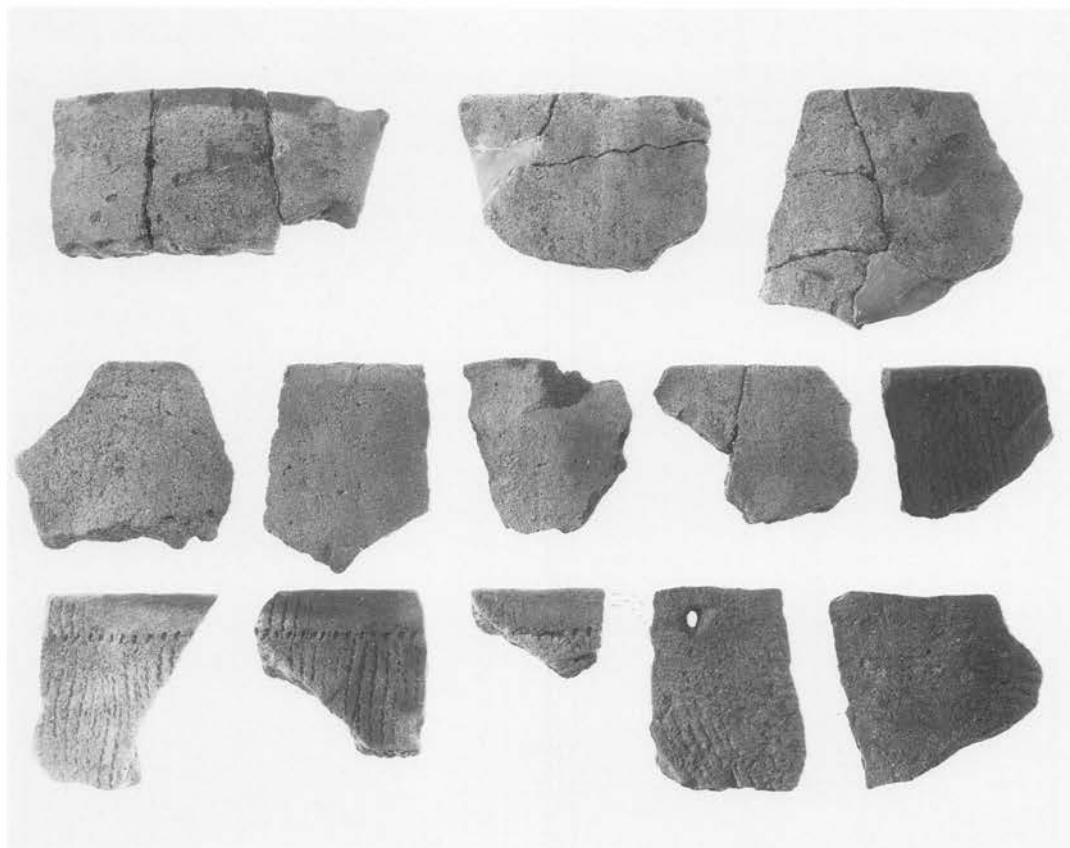
縄文土器



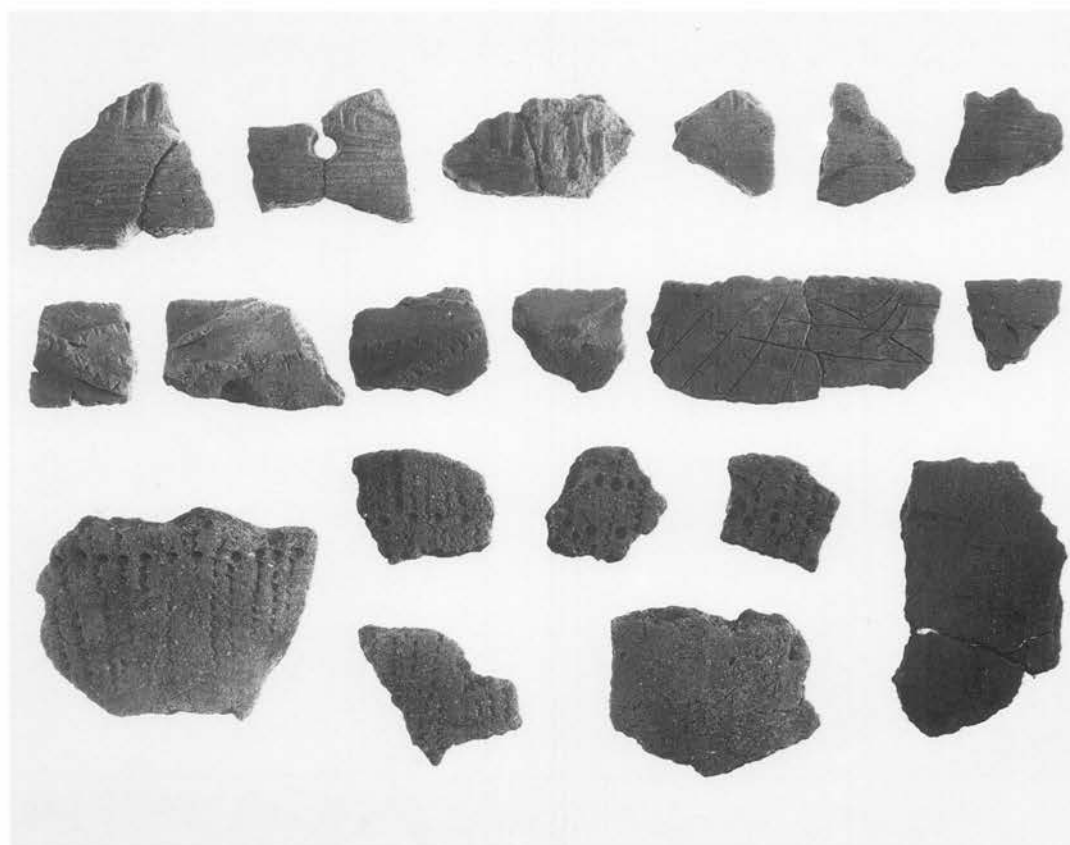
11(2)



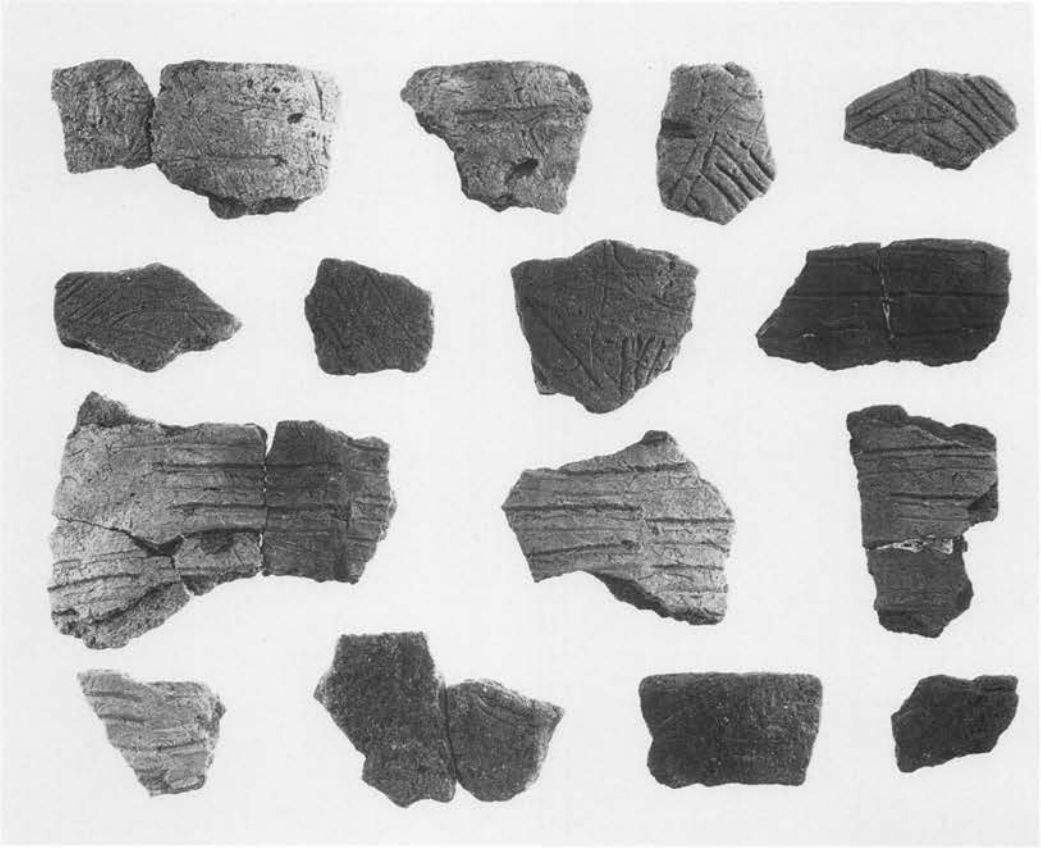
12(1)



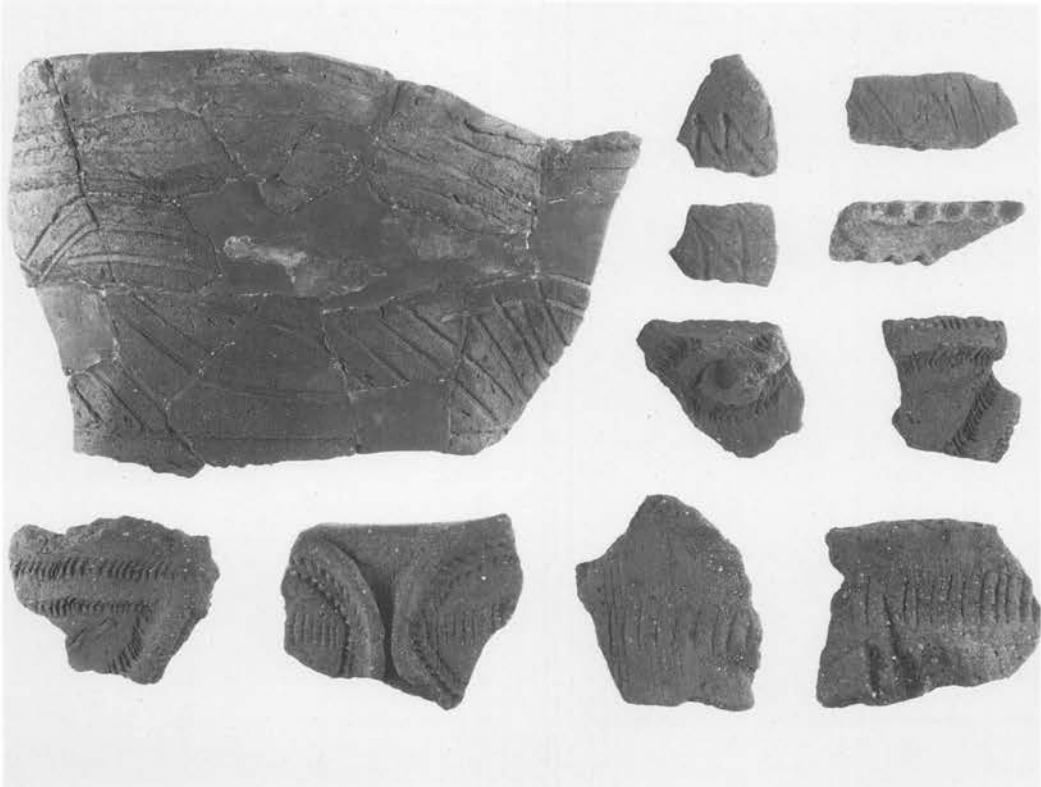
12(2)



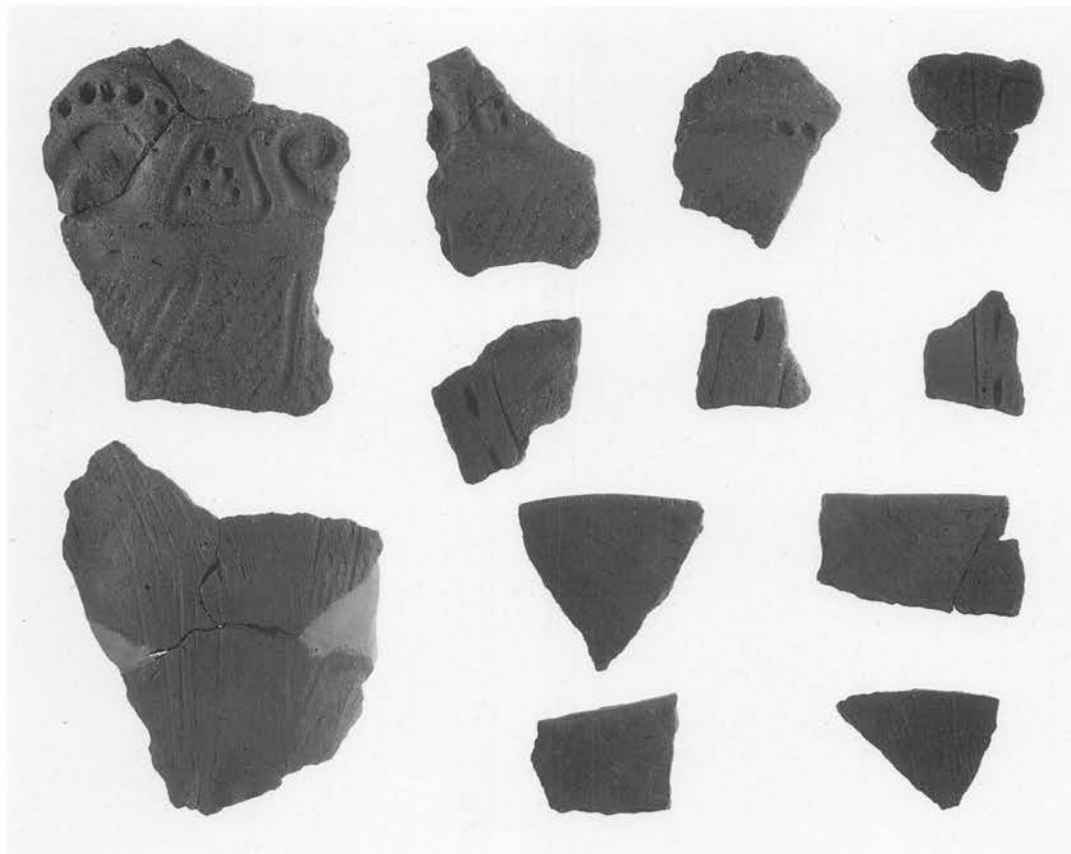
13



14(1)

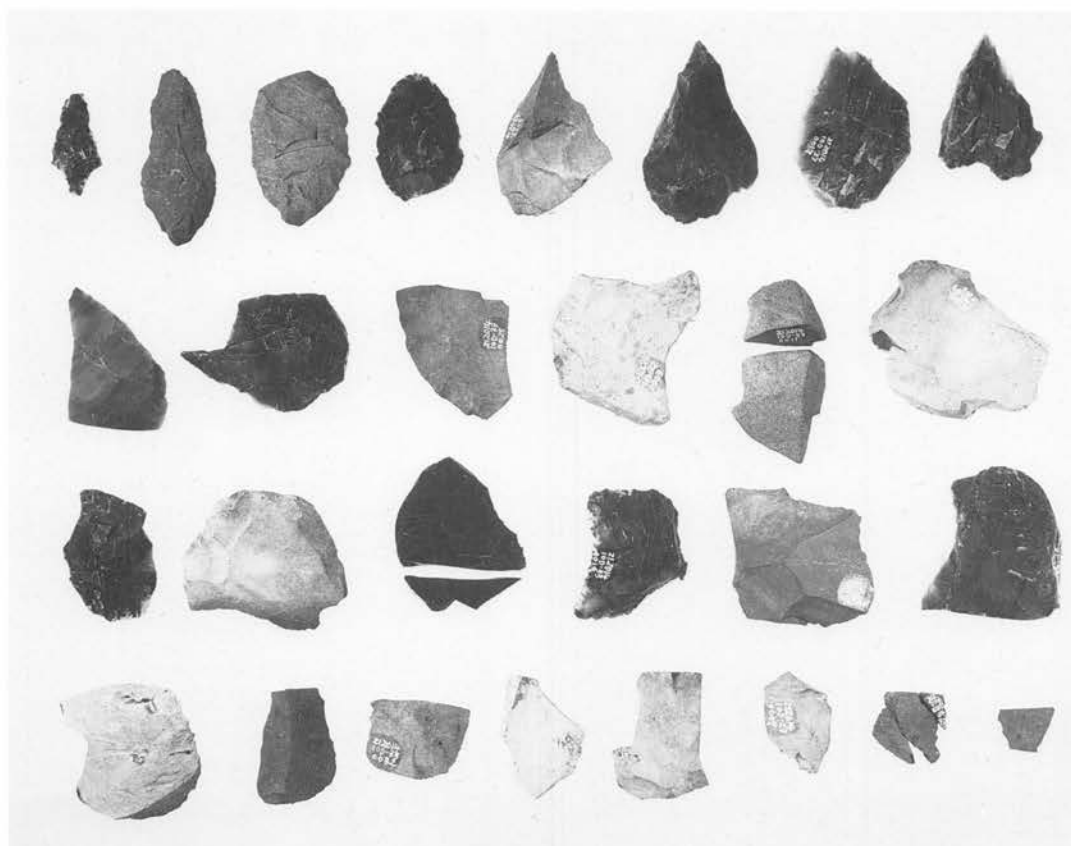


14(2)

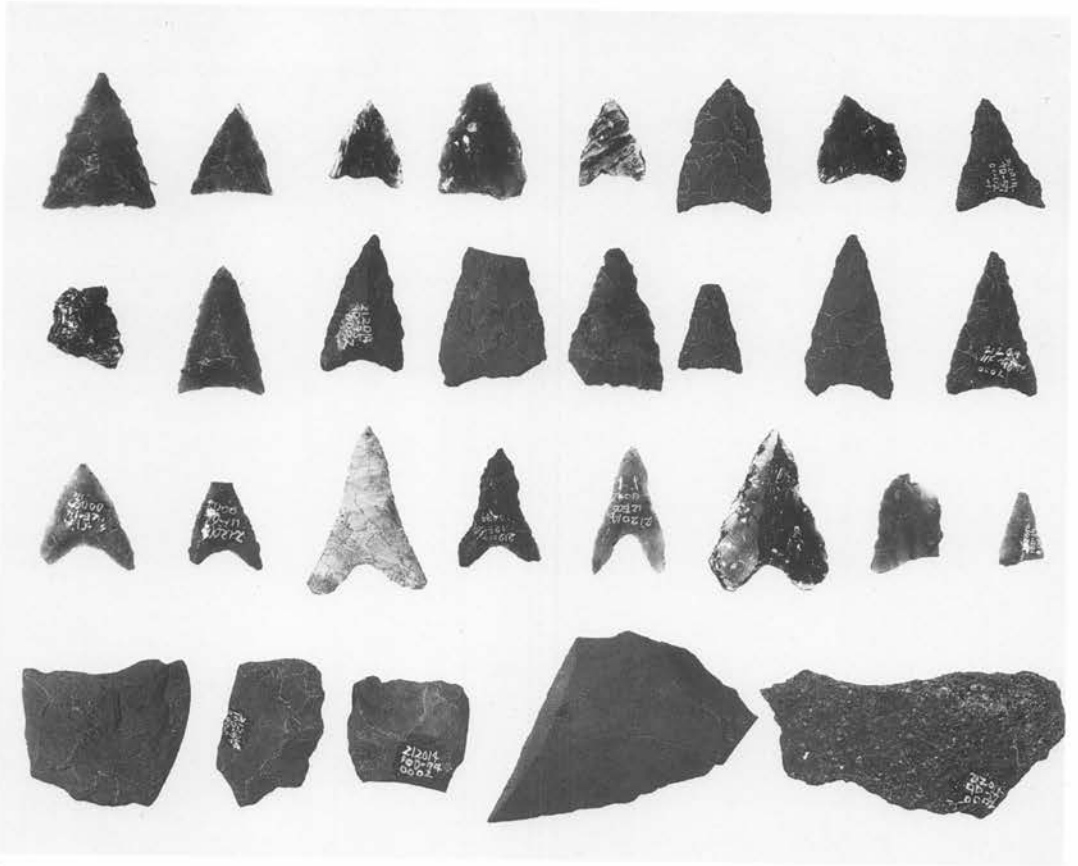


15

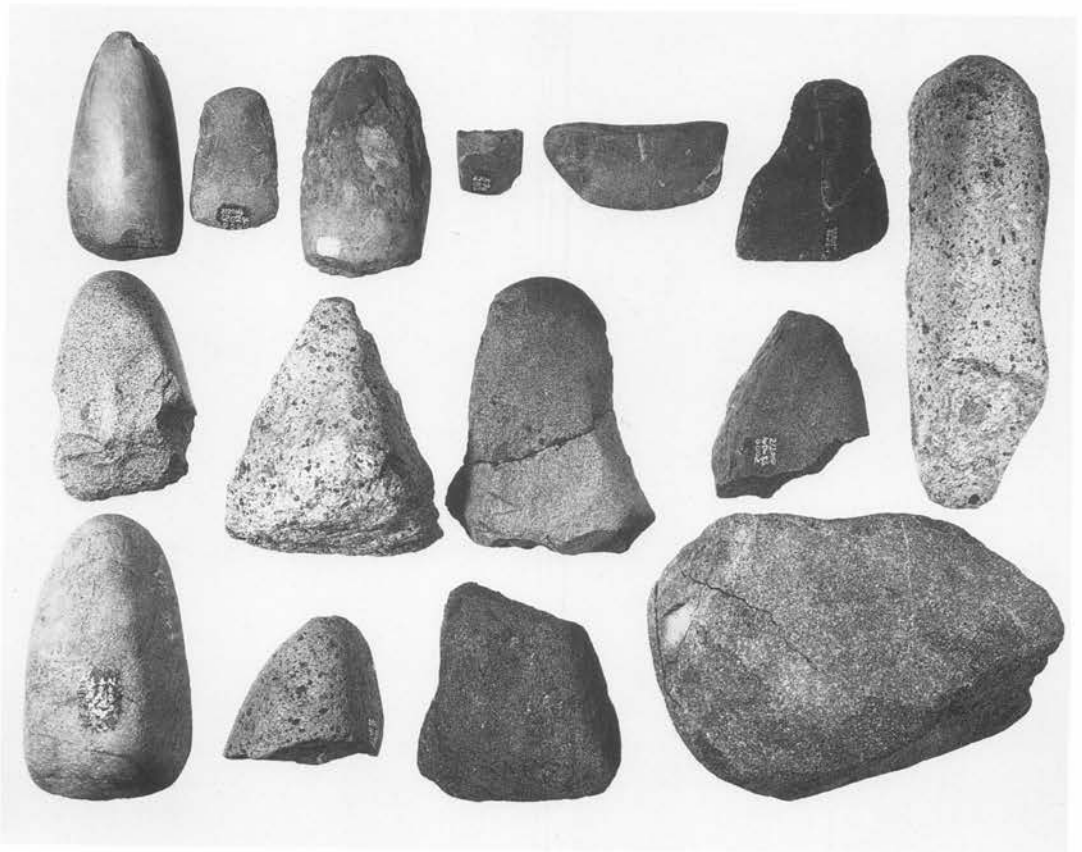
縄文土器



第6地点縄文草創期の石器



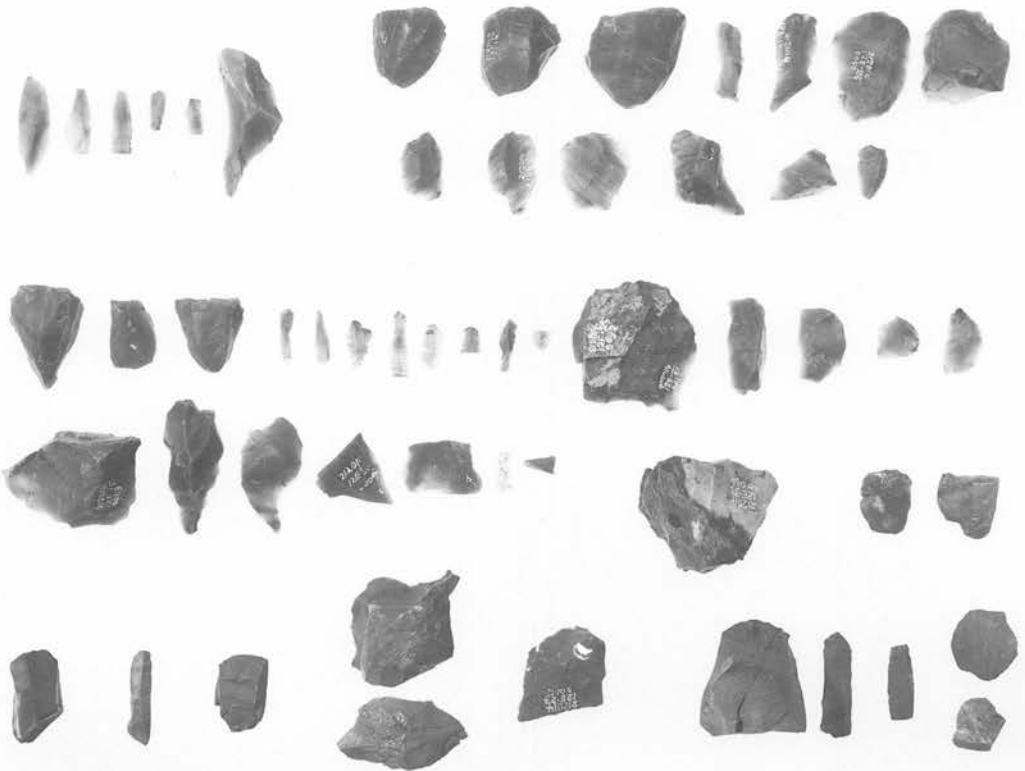
1



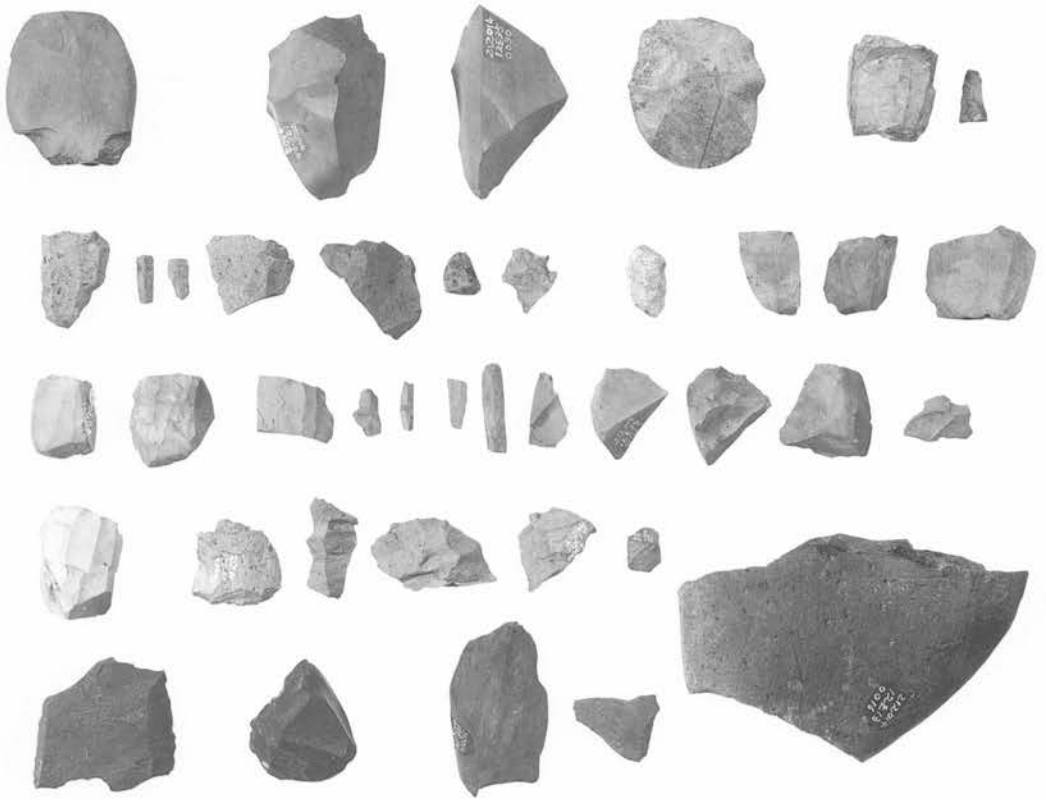
2



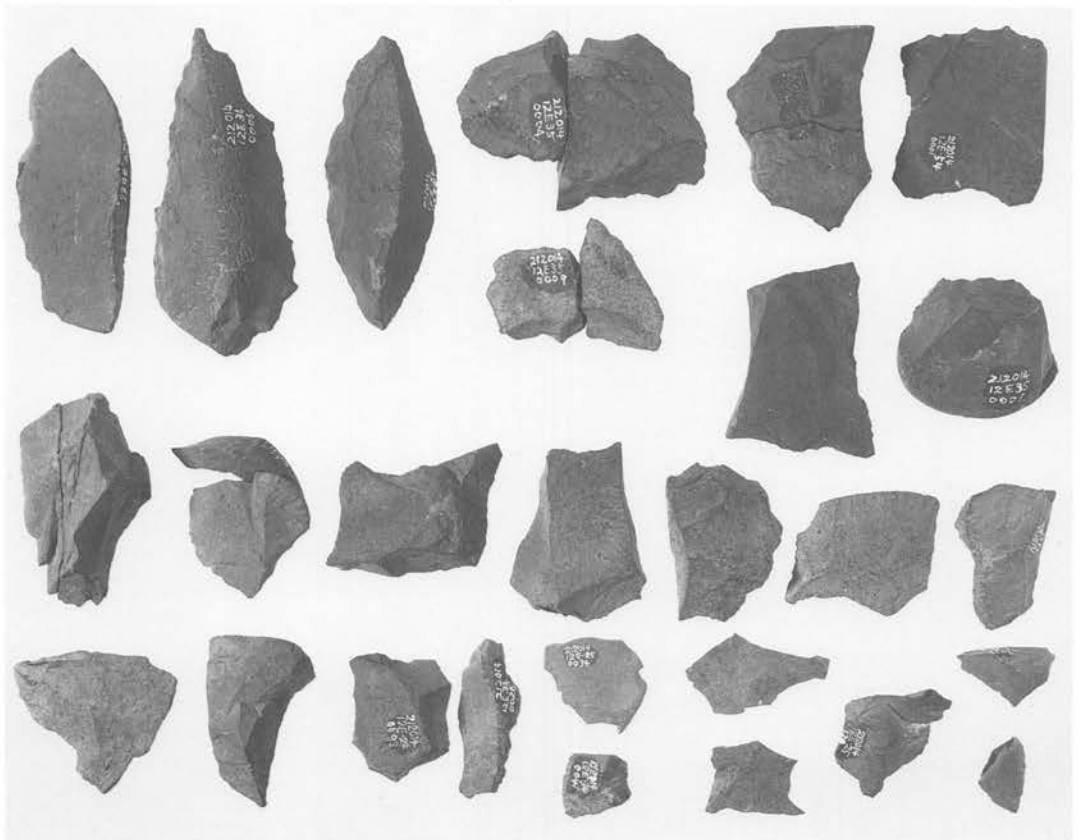
第1ブロックの石器(1)



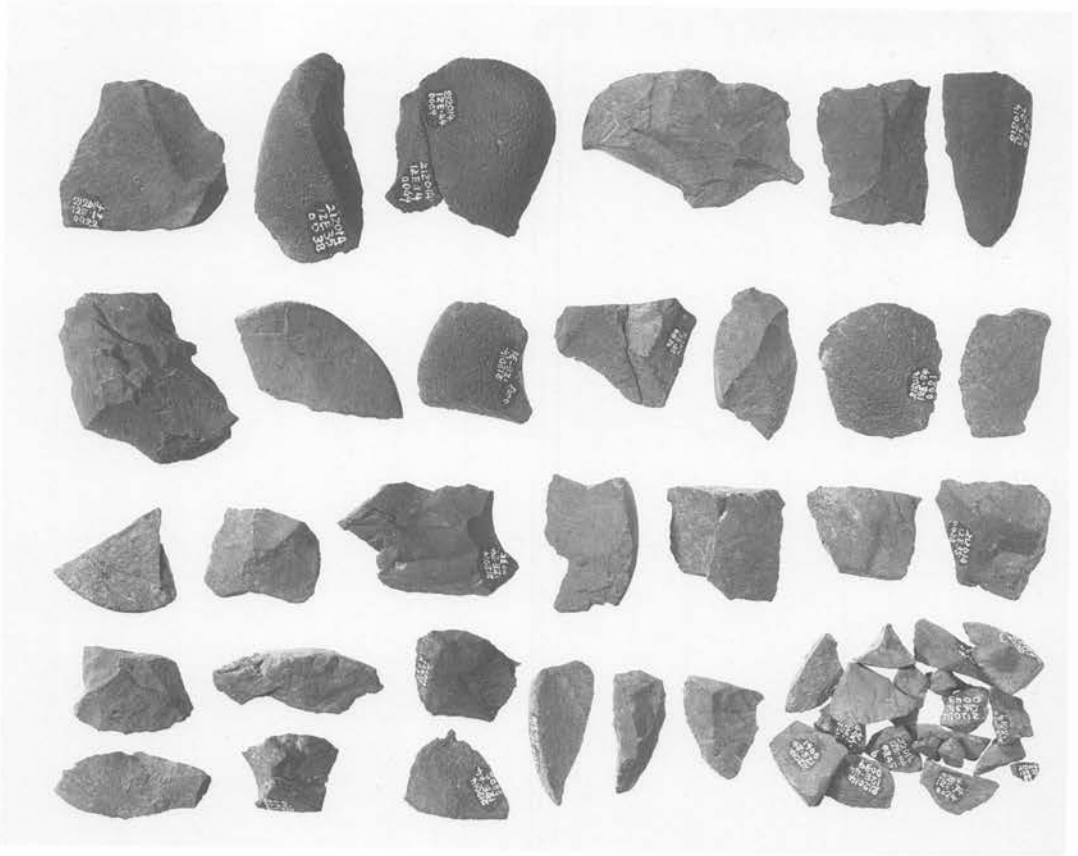
第1ブロックの石器(2)



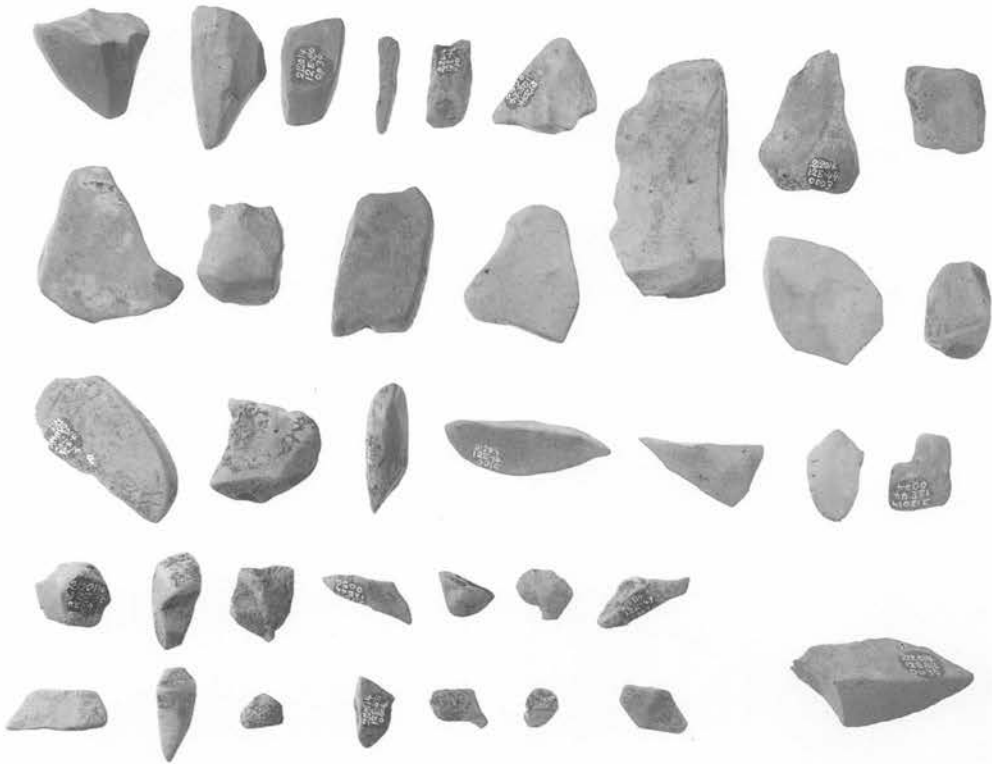
第1ブロックの石器(3)



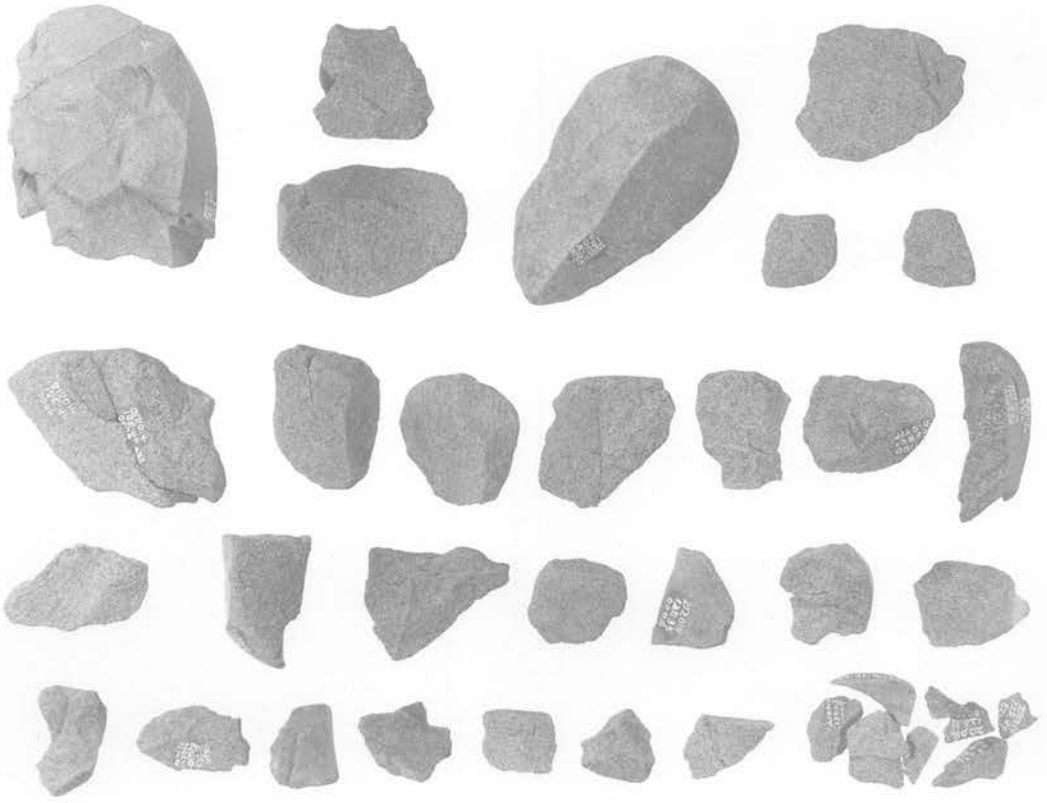
第1ブロックの石器(4)



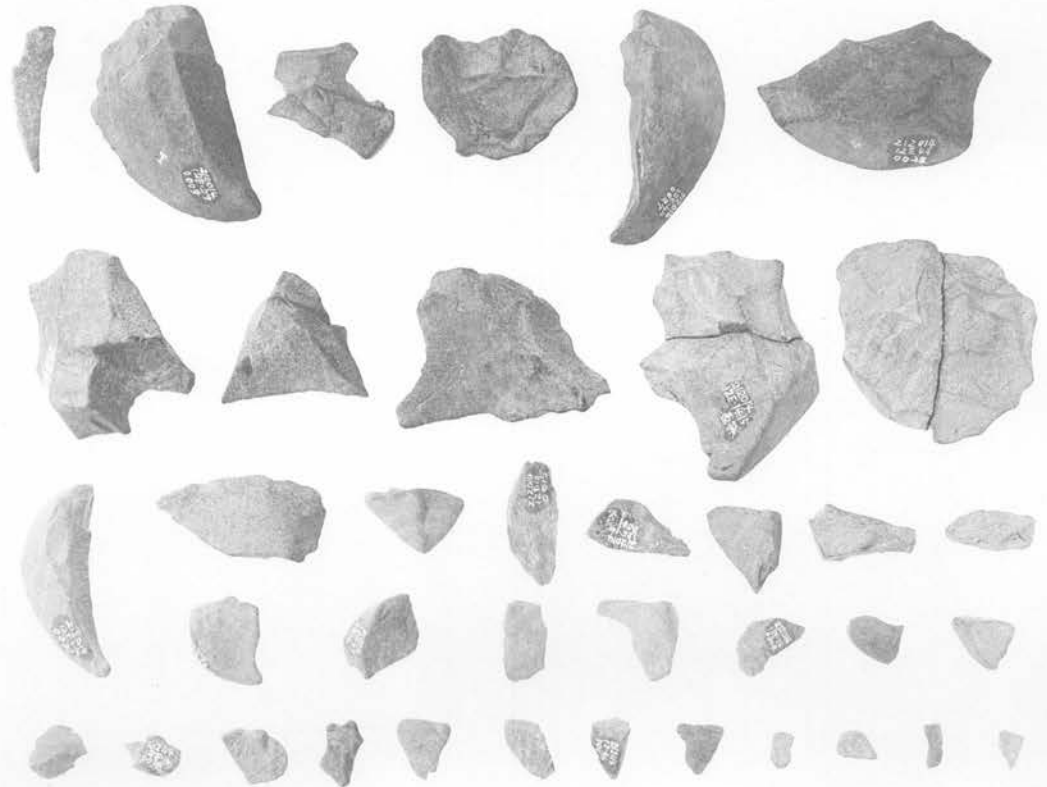
第1ブロックの石器(7)



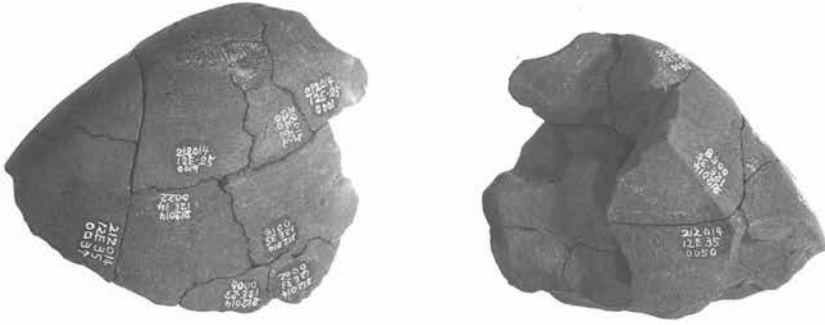
第1ブロックの石器(8)



第1ブロックの石器(9)



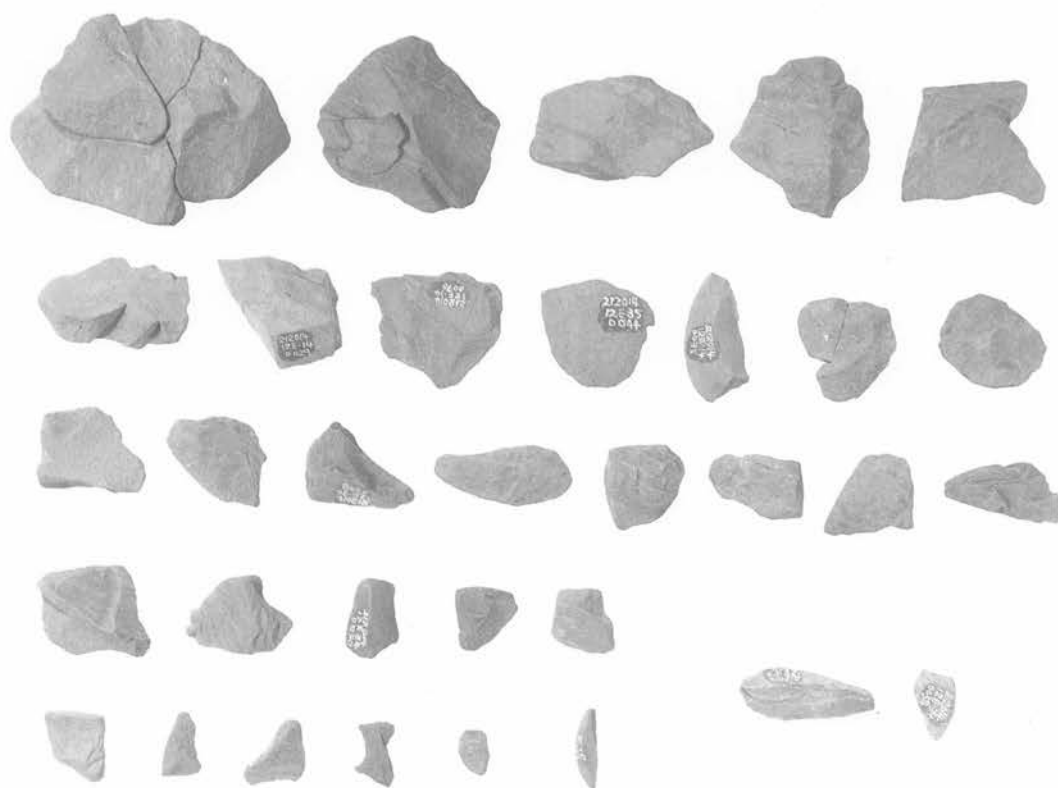
第1ブロックの石器(10)



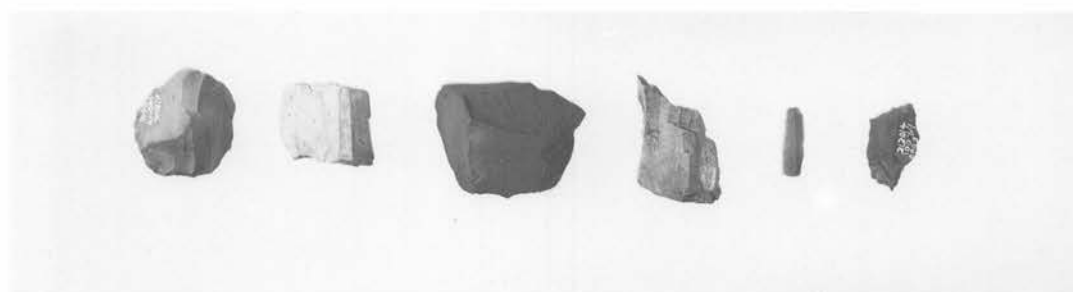
第1ブロックの石器(1)



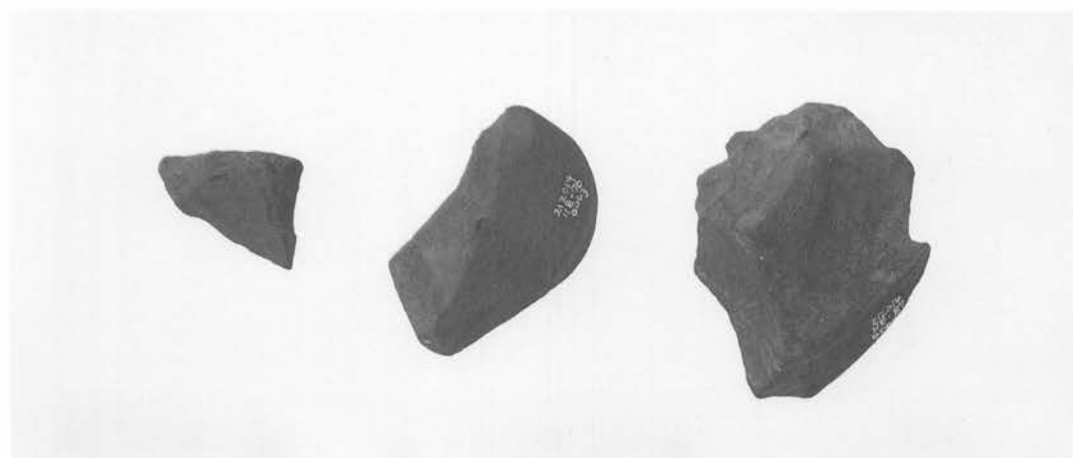
第1ブロックの石器(12)



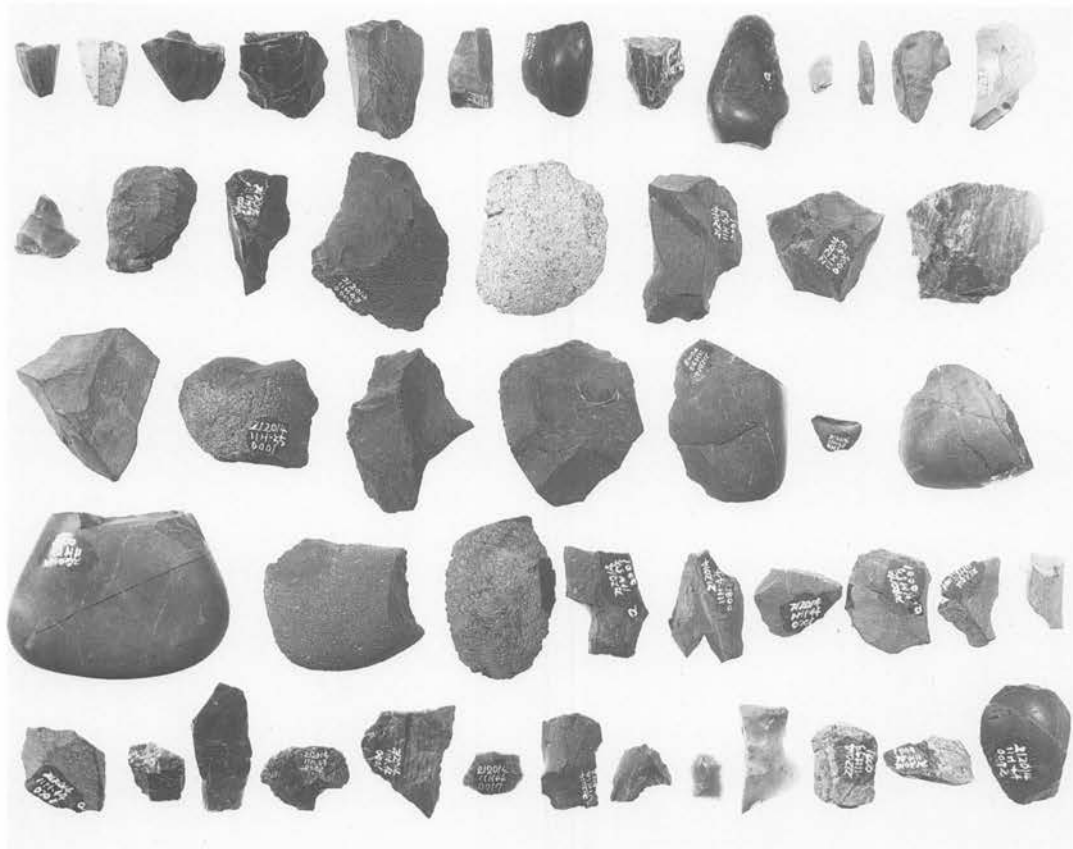
第1ブロックの石器(3)



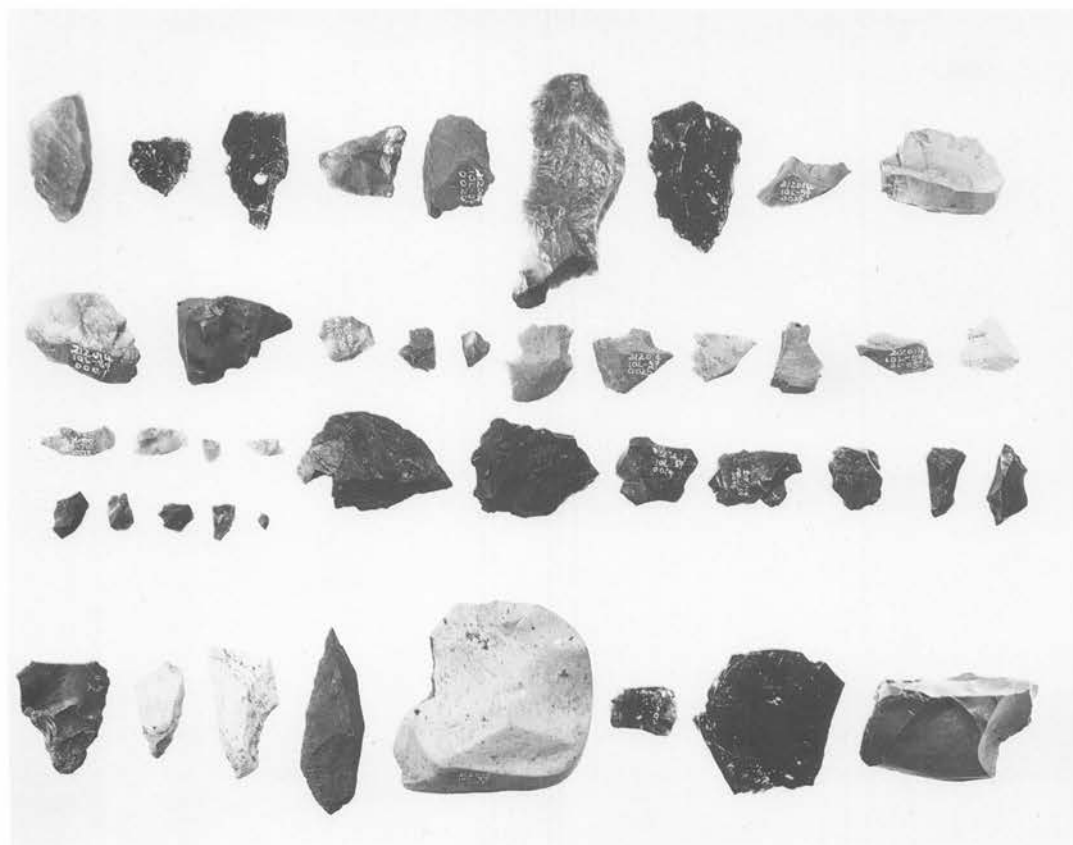
第2ブロックの石器



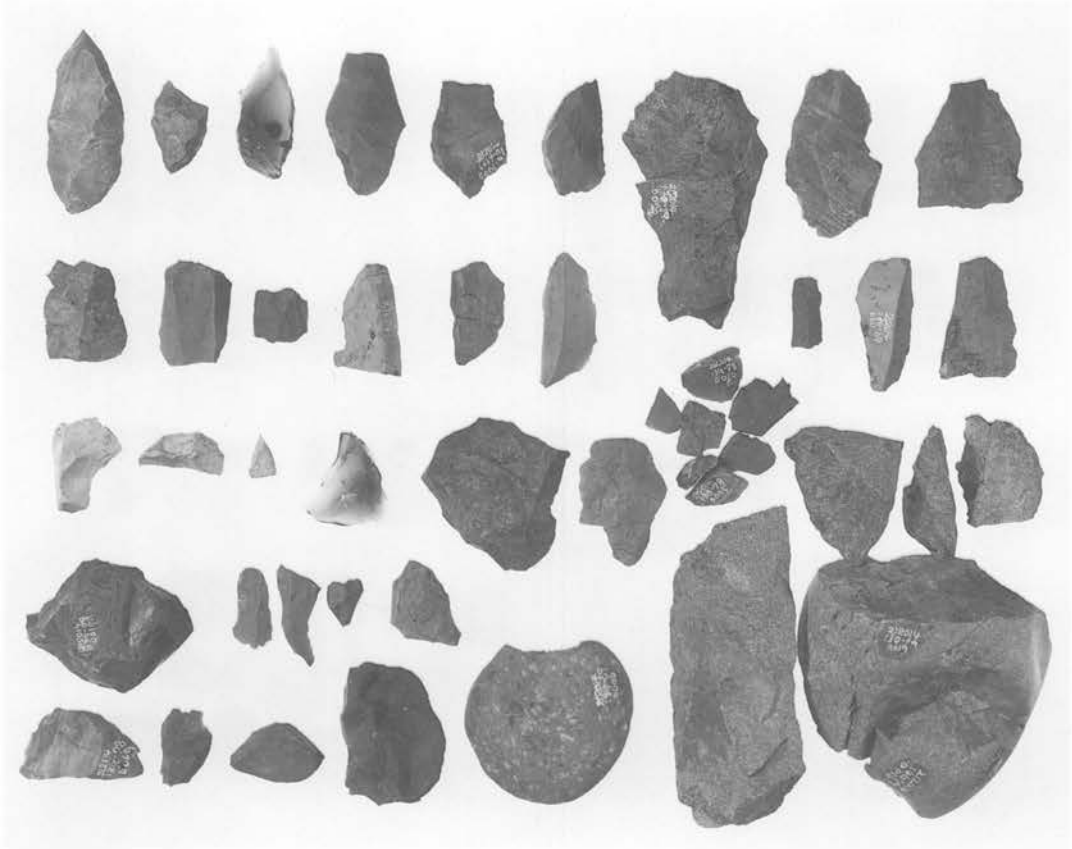
第4ブロックの石器



第3ブロックの石器



第5ブロックの石器



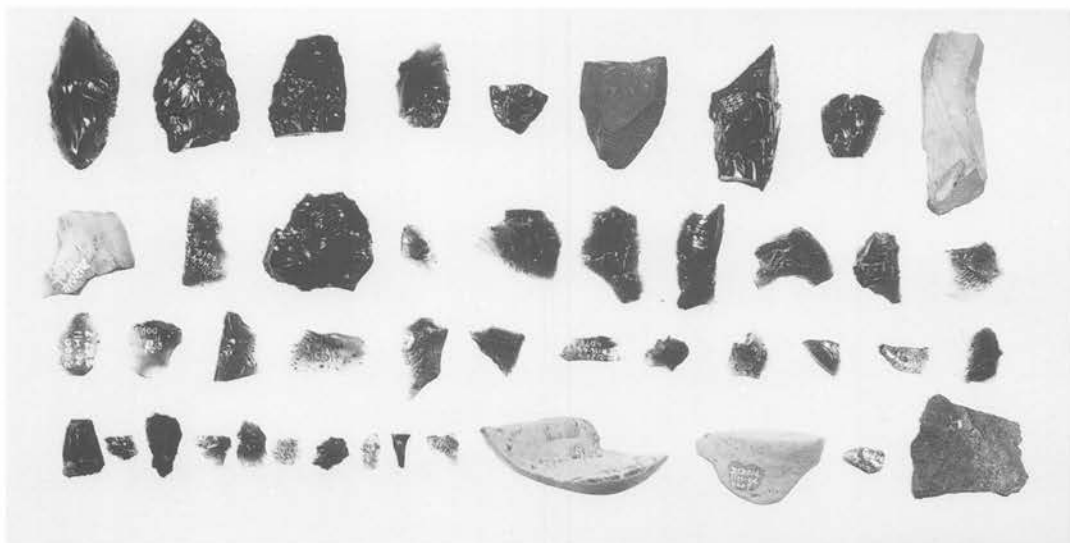
第7ブロックの石器



第9ブロックの石器



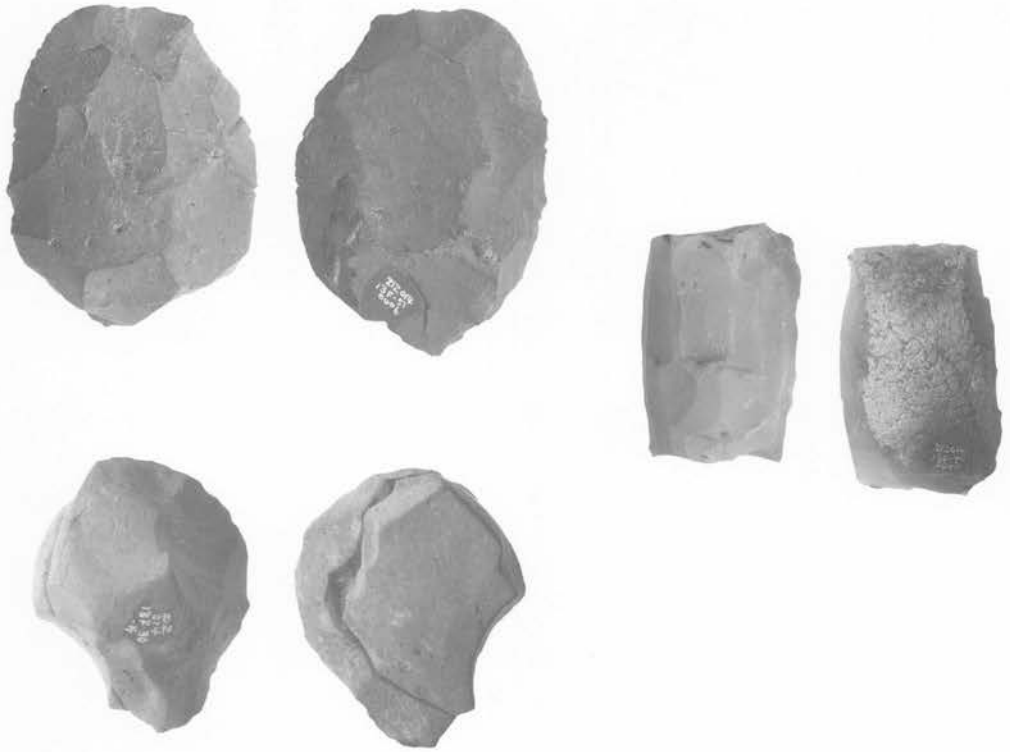
第8ブロックの石器



第10ブロックの石器



第11ブロックの石器



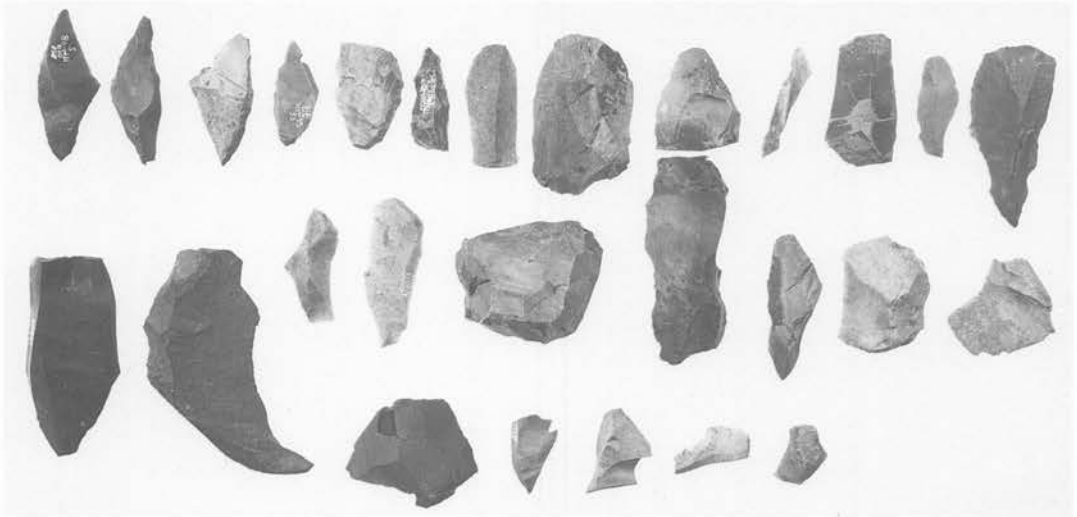
第11・第18ブロックの石器



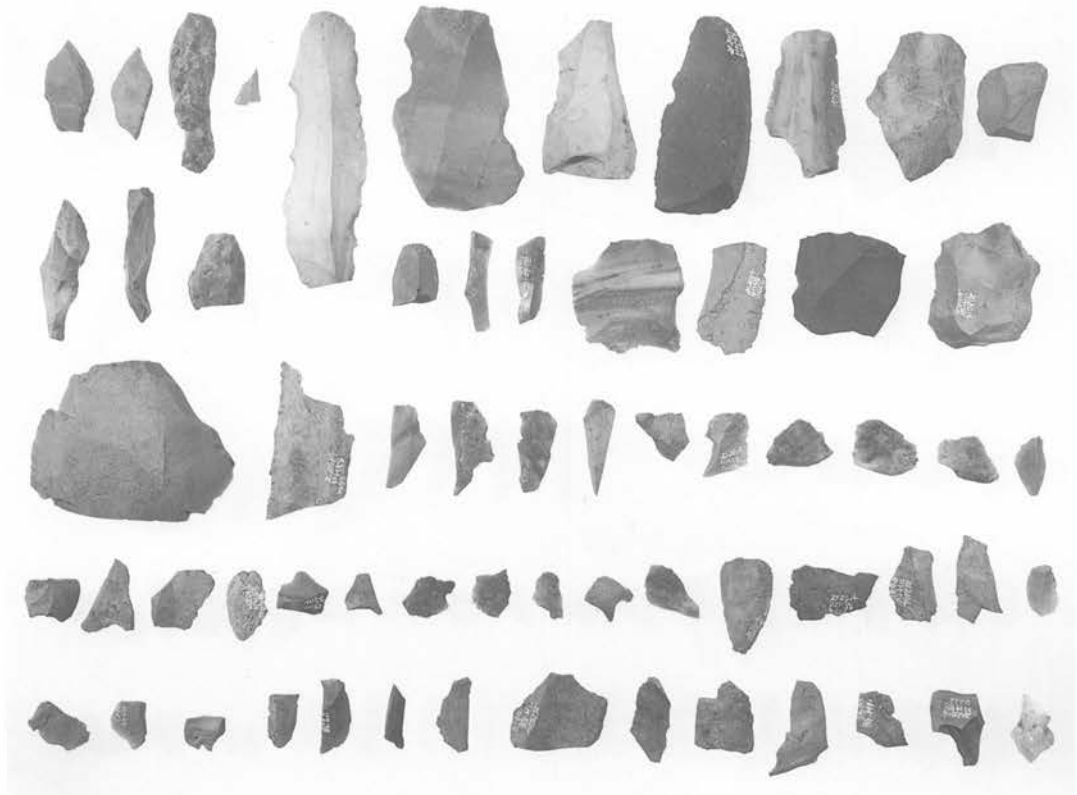
単独出土の石器



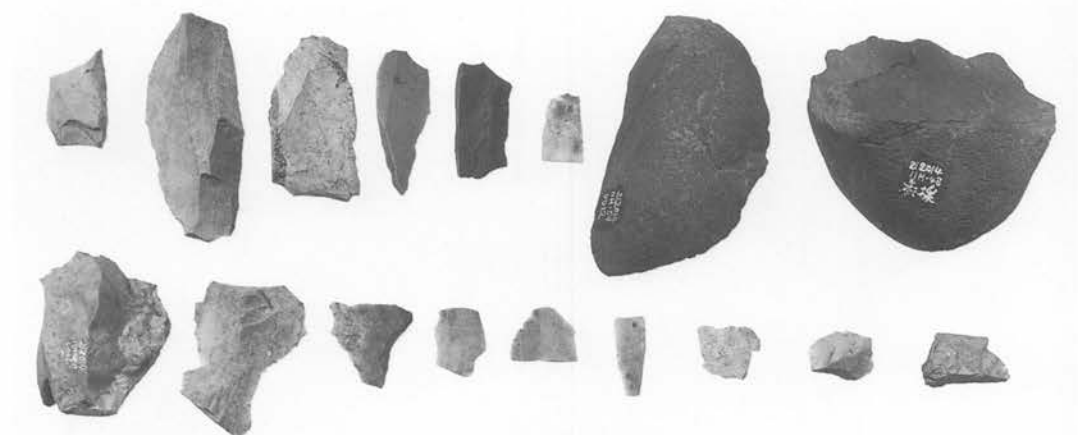
第12ブロックの石器



第14ブロックの石器



第15ブロックの石器



第16ブロックの石器



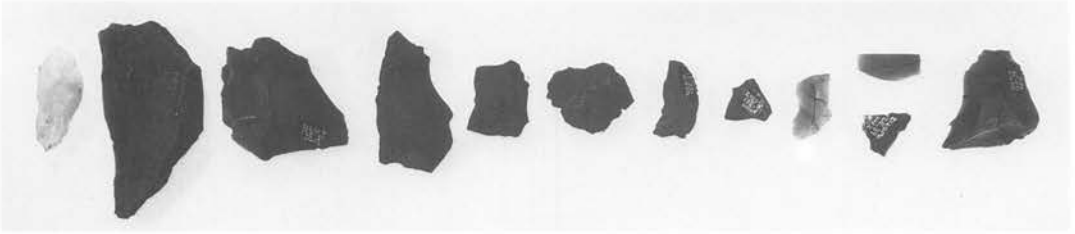
第9地点の石器



第17ブロックの石器



第18ブロックの石器



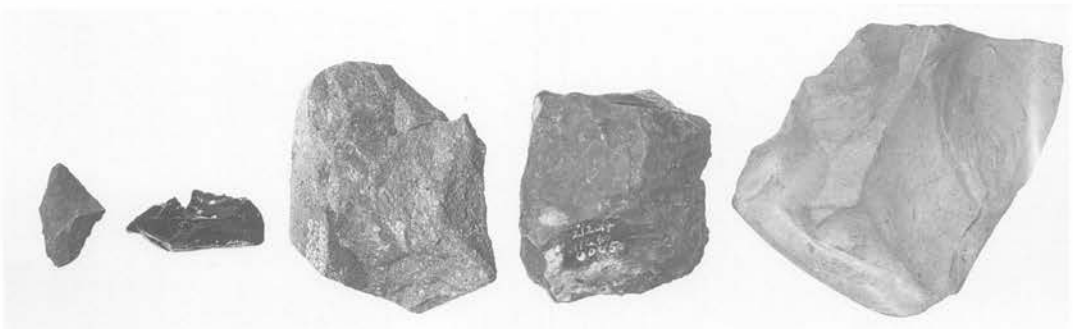
第19ブロックの石器



第20ブロックの石器



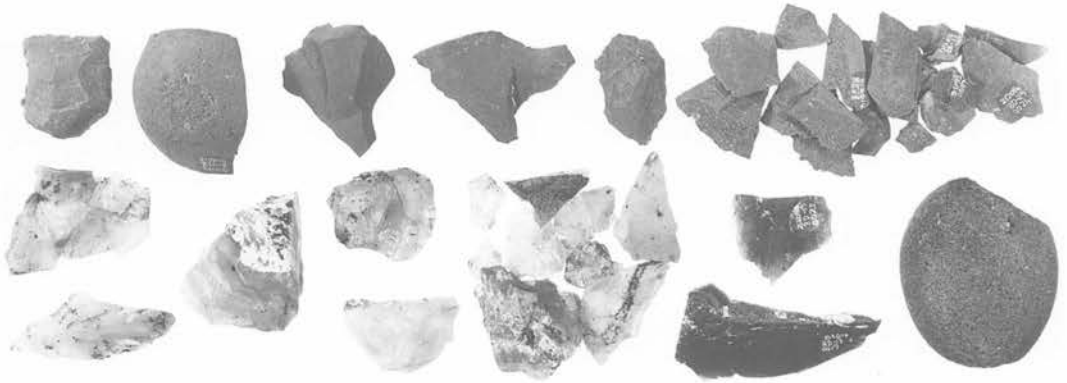
第21ブロックの石器



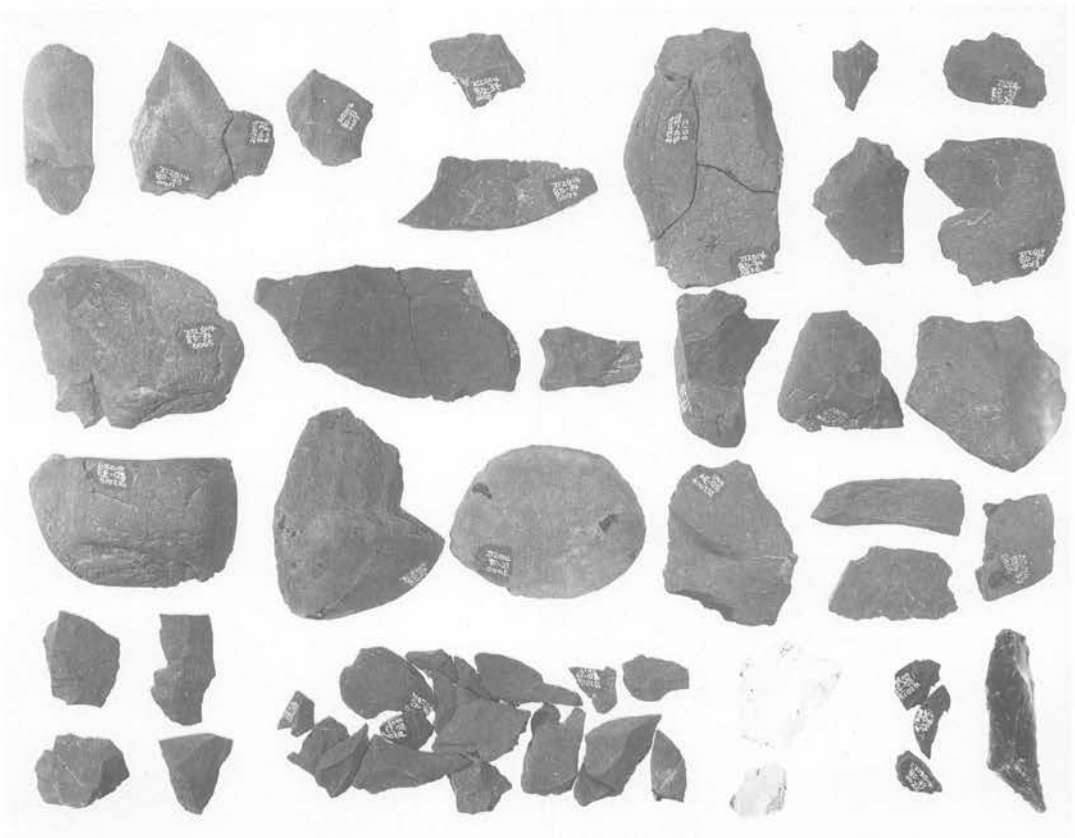
第22ブロックの石器



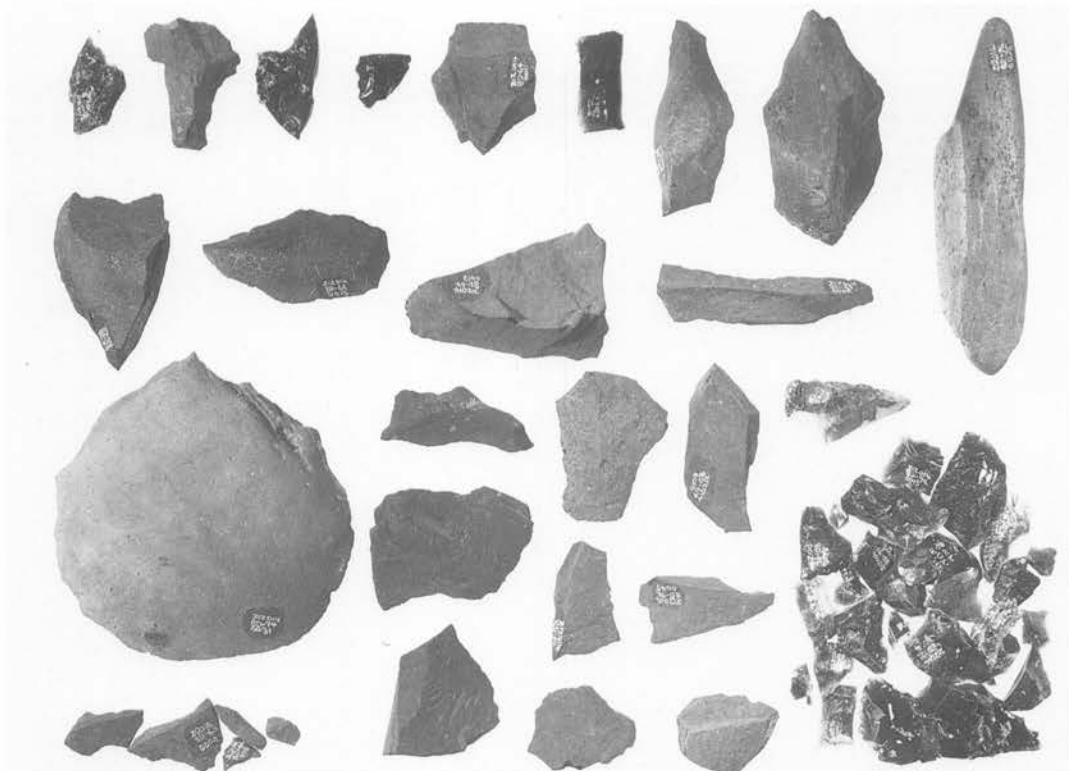
第29ブロックの石器



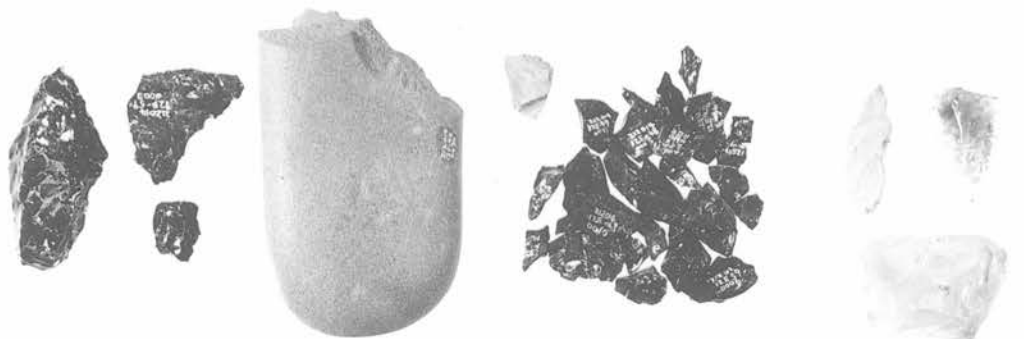
第30ブロックの石器



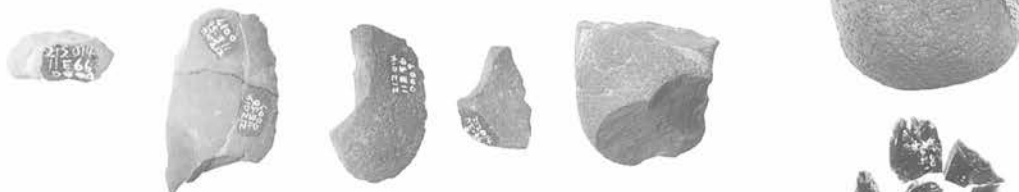
第31ブロックの石器(1)



第32ブロックの石器



第33ブロックの石器

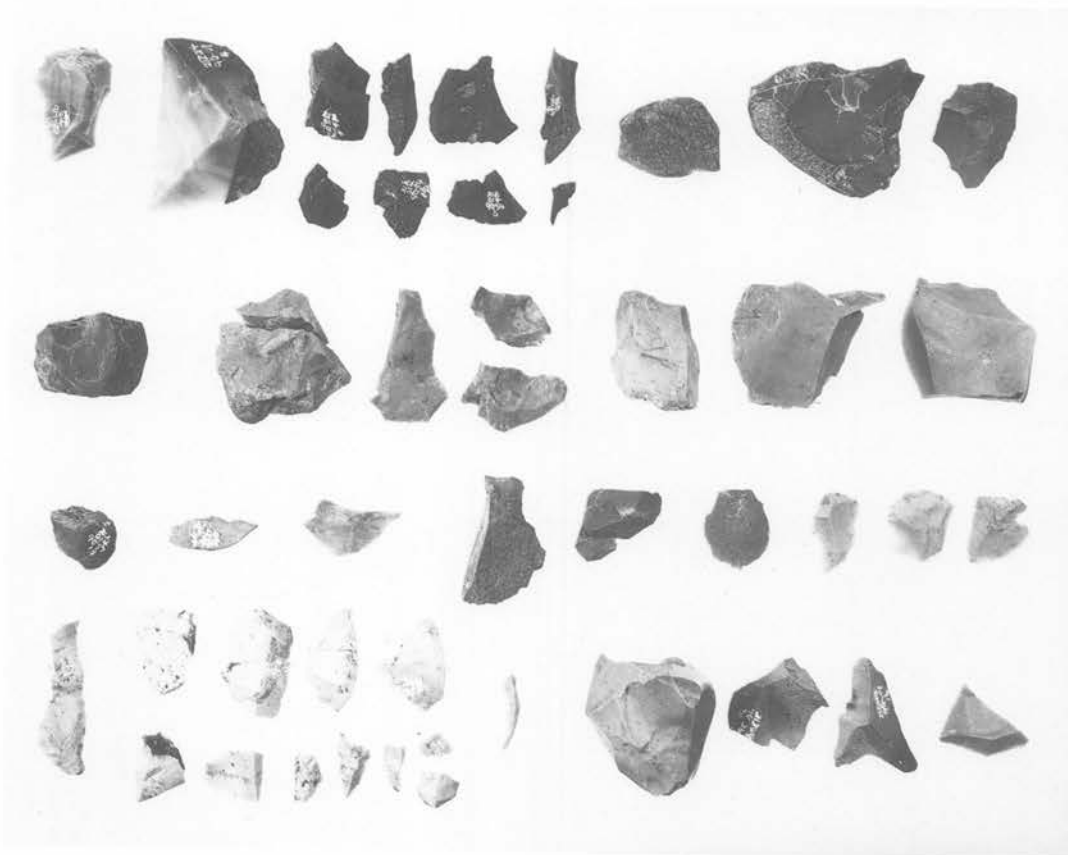


第35ブロックの石器

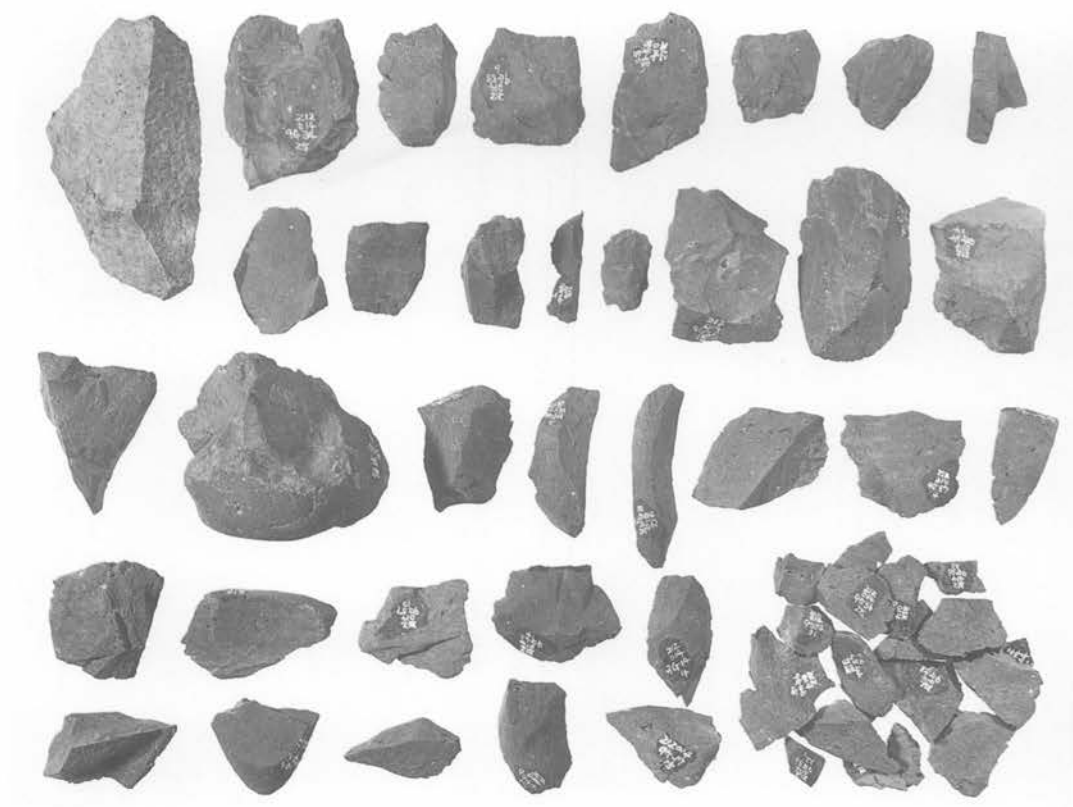


第36ブロックの石器

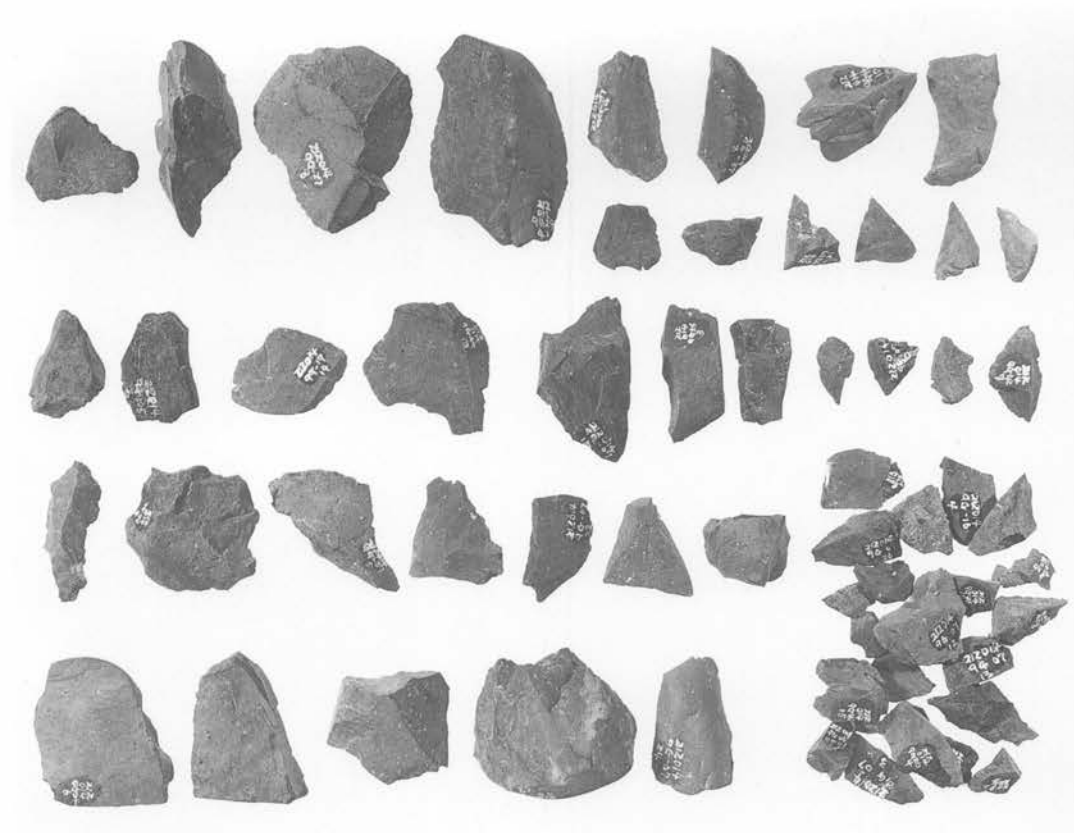
第37ブロックの石器



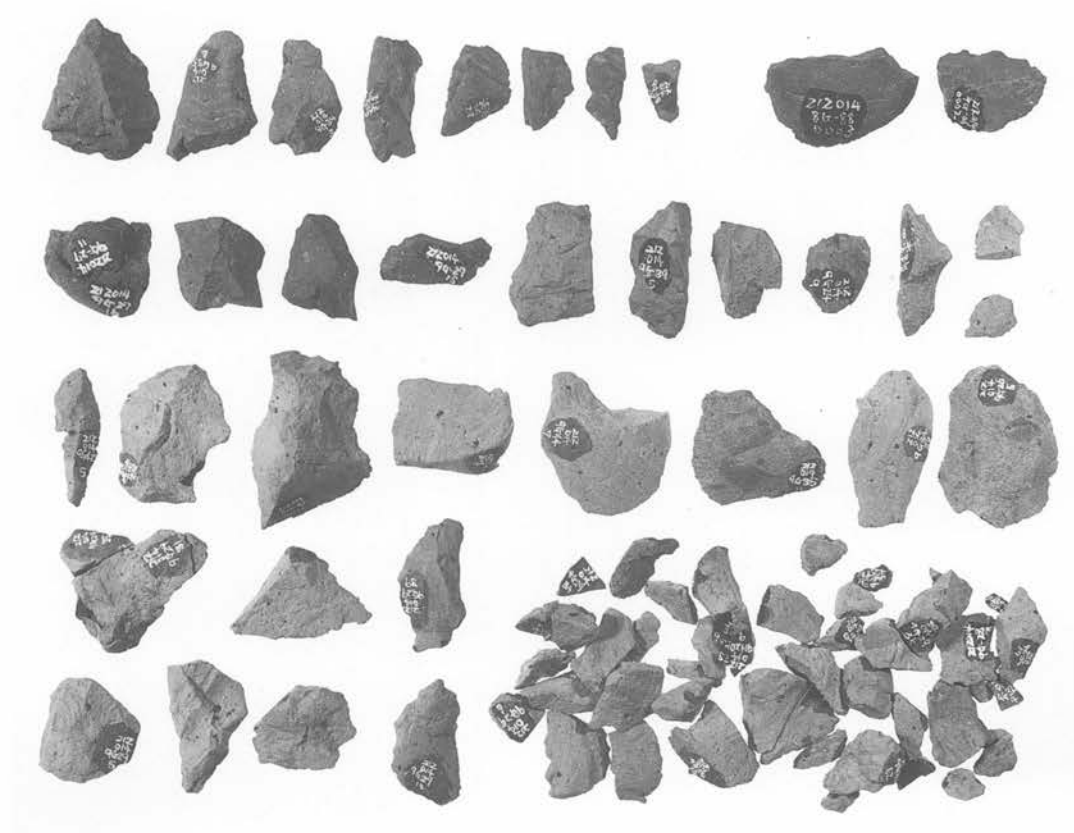
第41ブロックの石器(1)



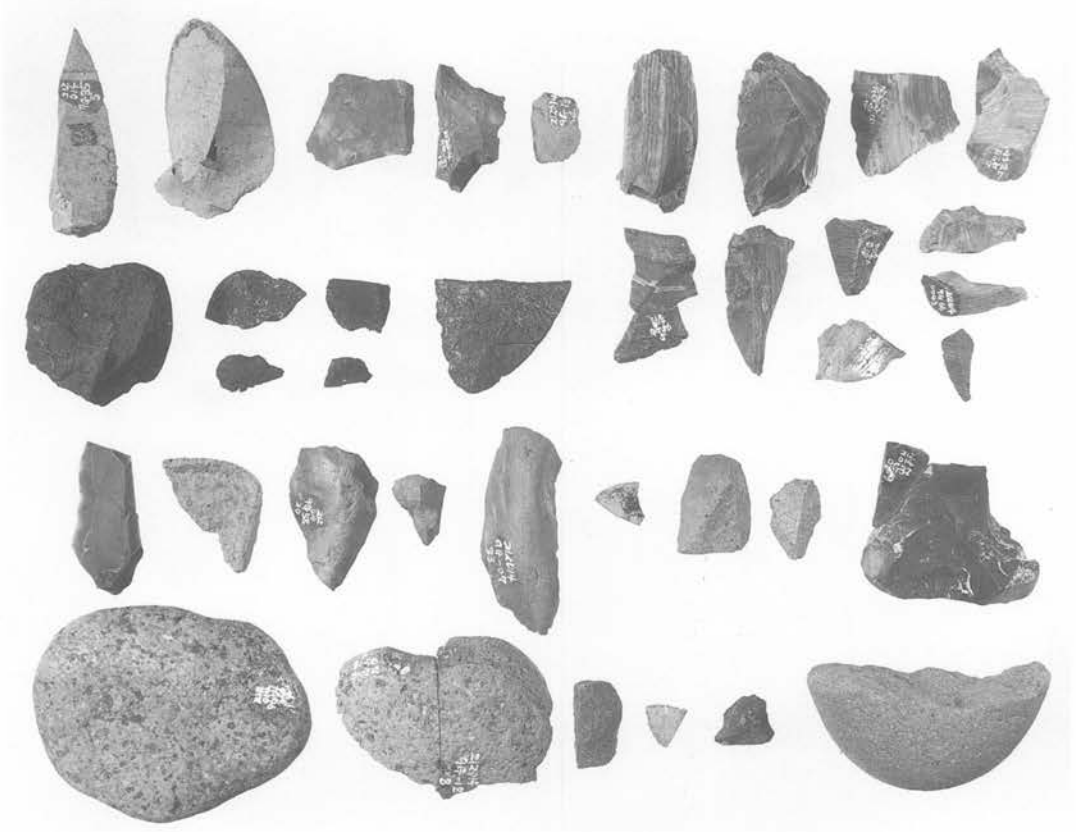
第41ブロックの石器(2)



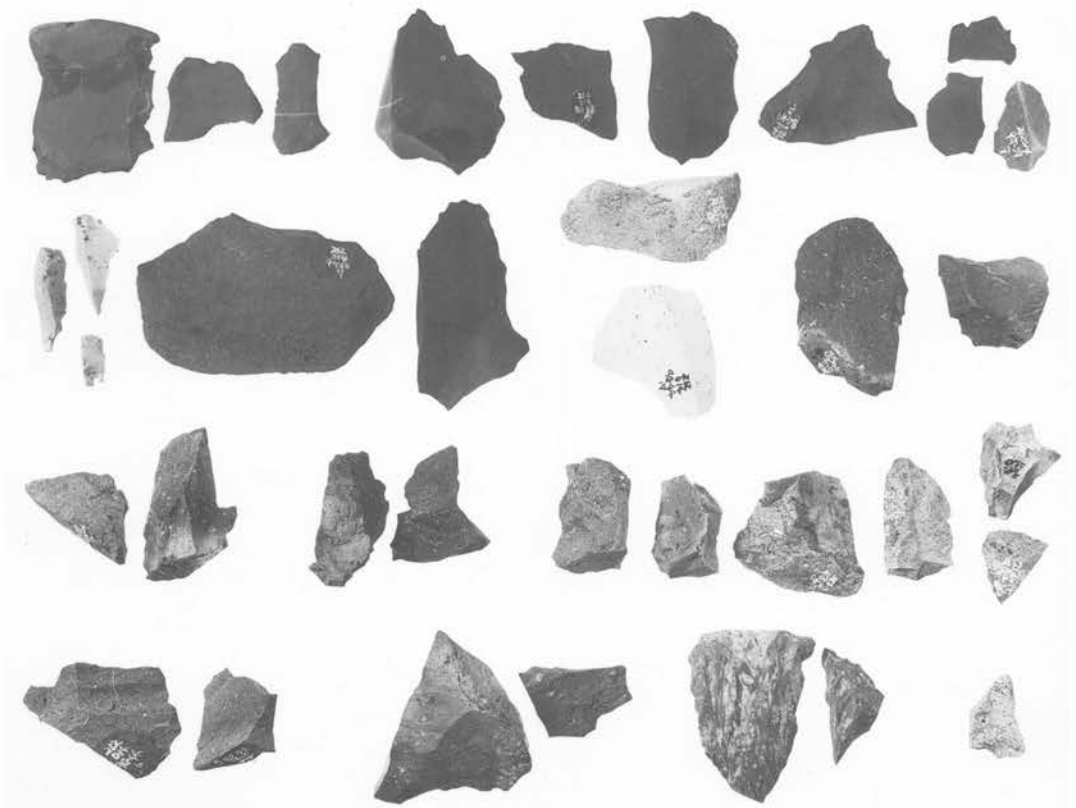
第41ブロックの石器(3)



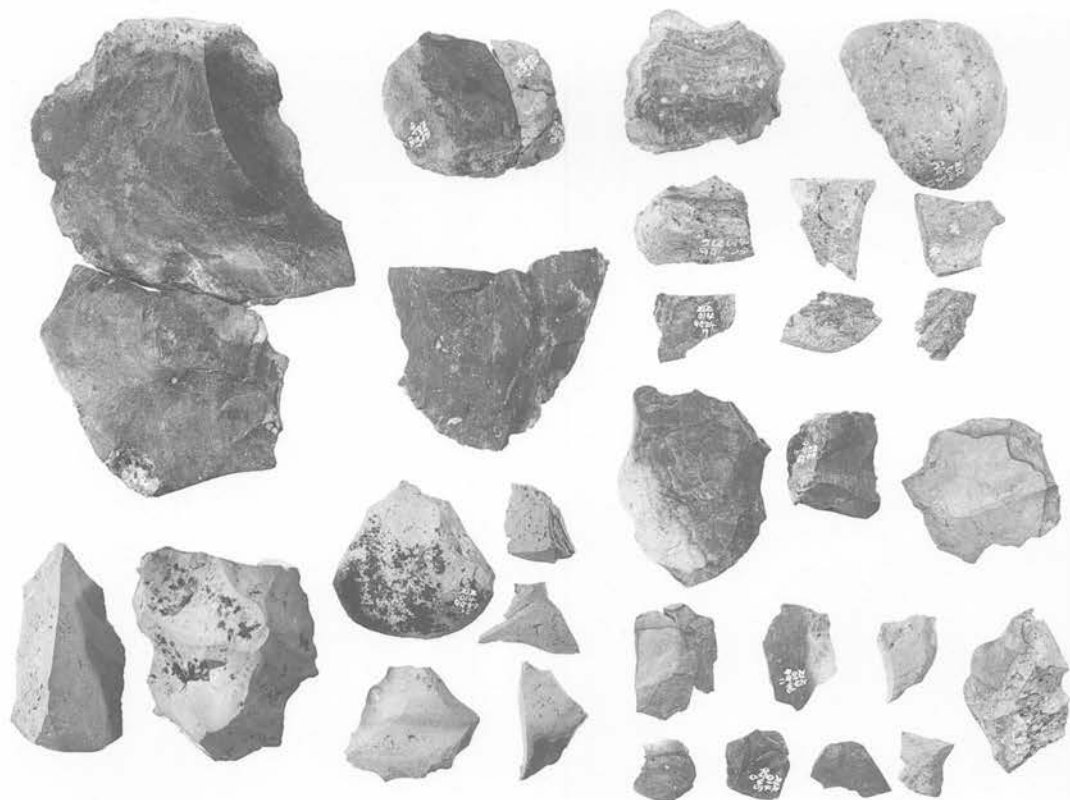
第41ブロックの石器(4)



第41ブロックの石器(5)



第41ブロックの石器(6)



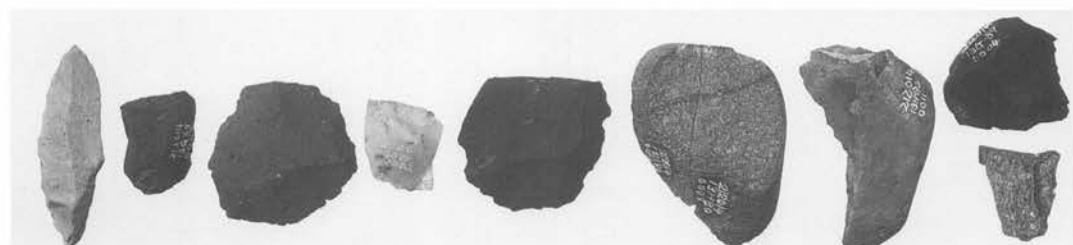
第41ブロックの石器(7)



第38ブロックの石器



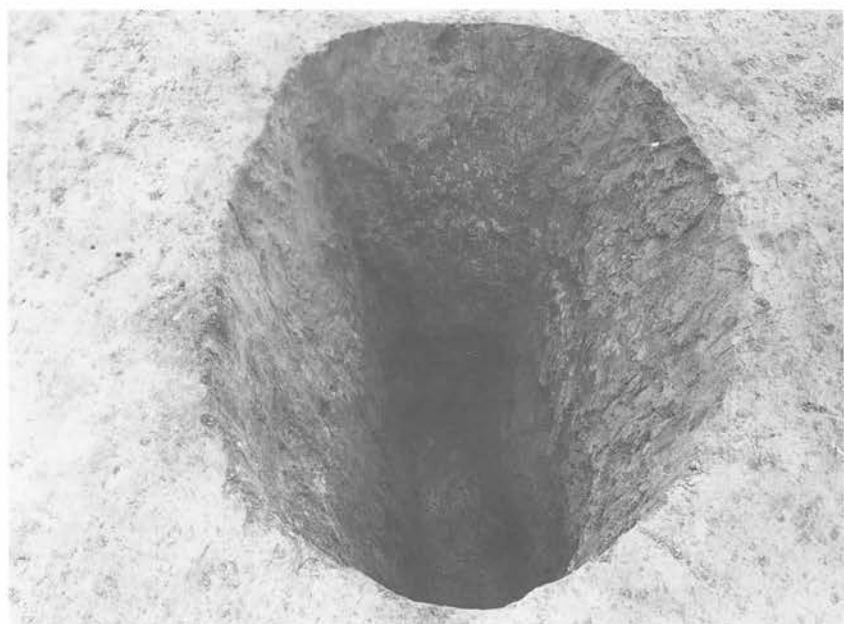
第40ブロックの石器



第39・第42ブロックの石器



遺跡の景観



1号陥し穴状土坑(1)



1号陥し穴状土坑(2)
土層断面

遺跡と遺構



2号陥し穴状遺構



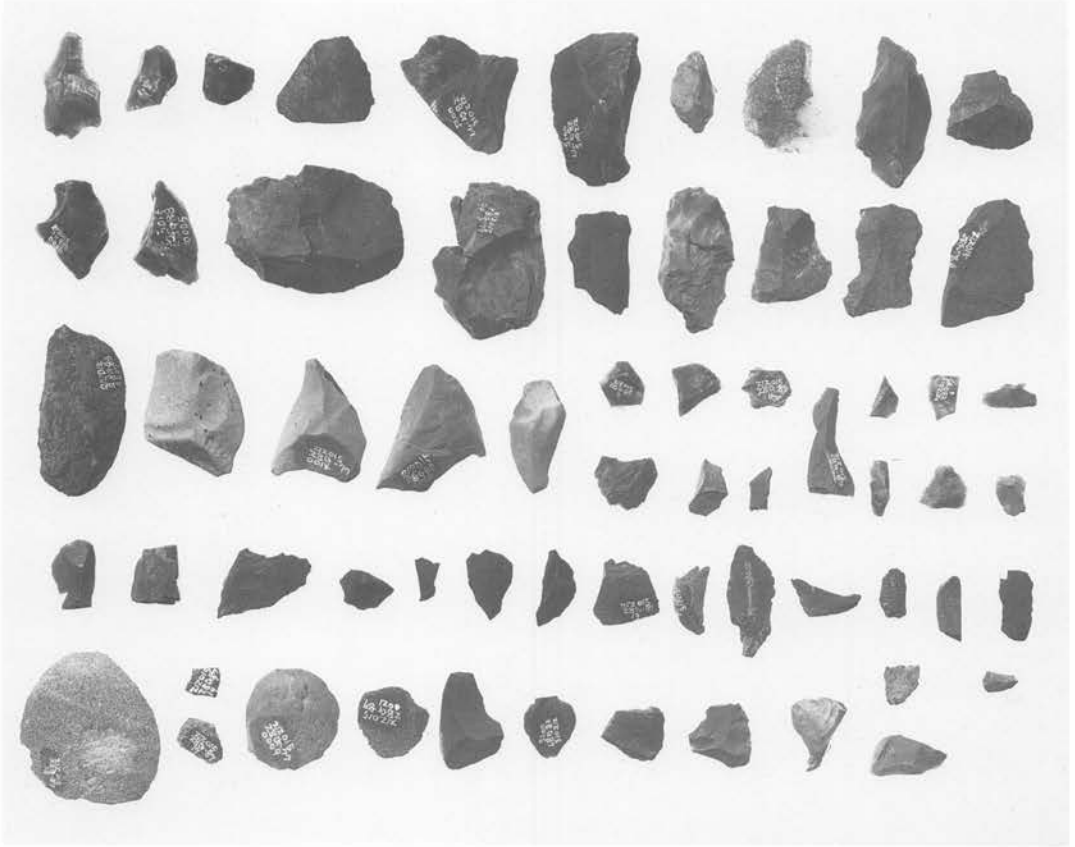
第1地点先土器時代
遺物出土状況(1)



第1地点先土器時代
遺物出土状況(2)
石斧の出土



第2地点先土器時代
遺物出土状況

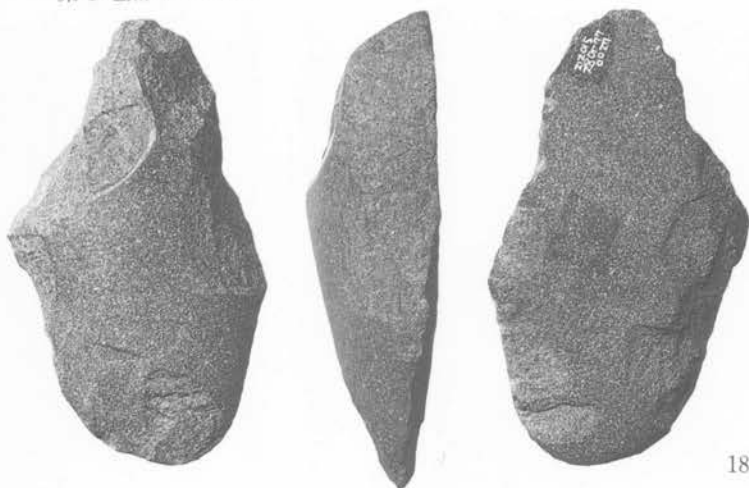


第1地点Aブロック



第1地点Bブロック

第1地点Aブロック



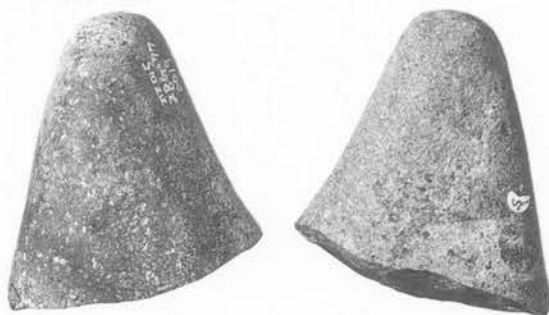
18

第2地点



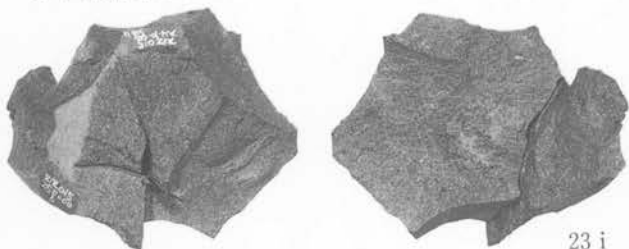
1

第1地点Aブロック



15

第2地点接合資料



23 i

第2地点



2

第2地点接合資料



23 i



23 i



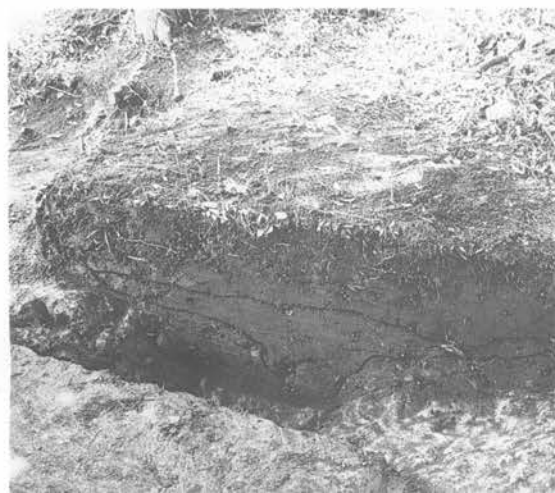
第2地点
接合資料



遺跡の景観



土層断面



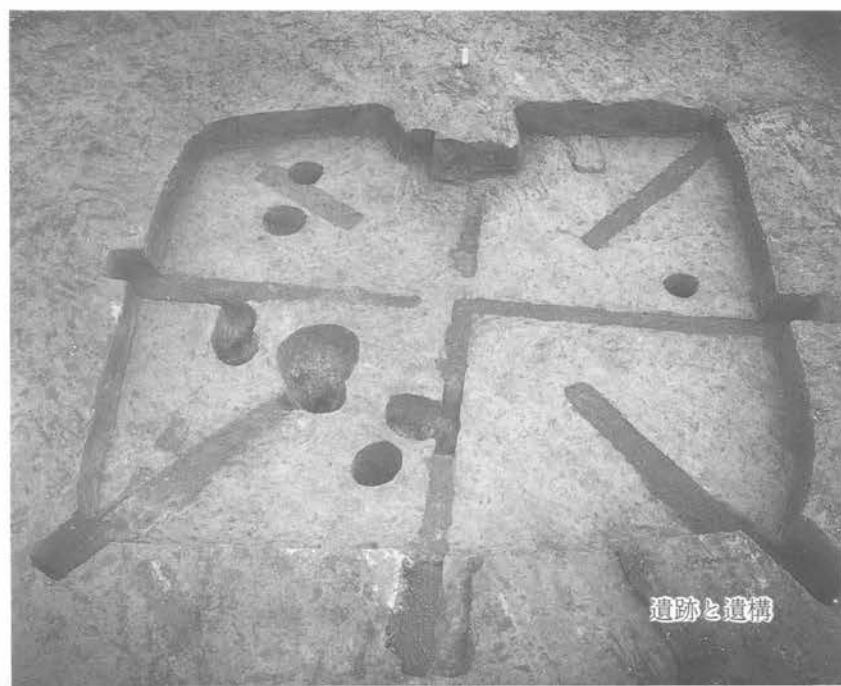
遺跡の景観



調査状況



住居跡

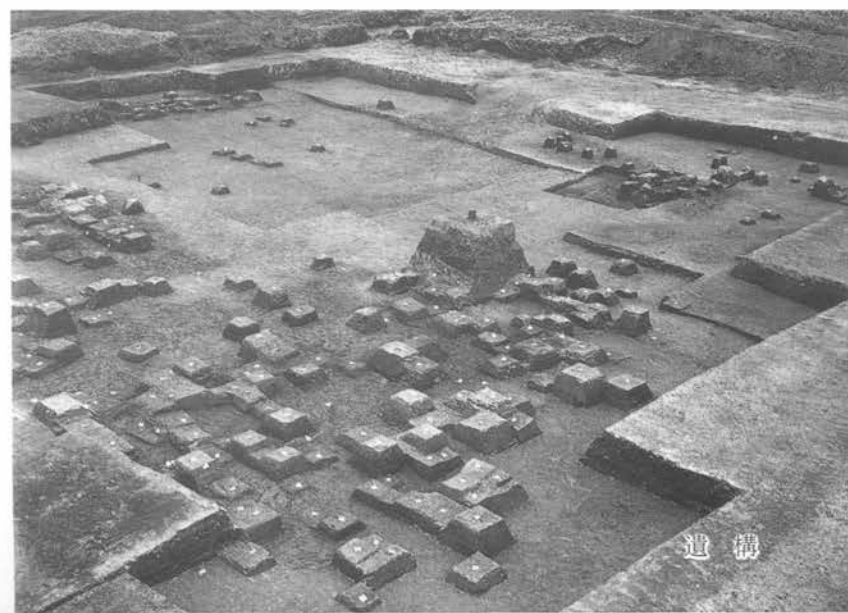




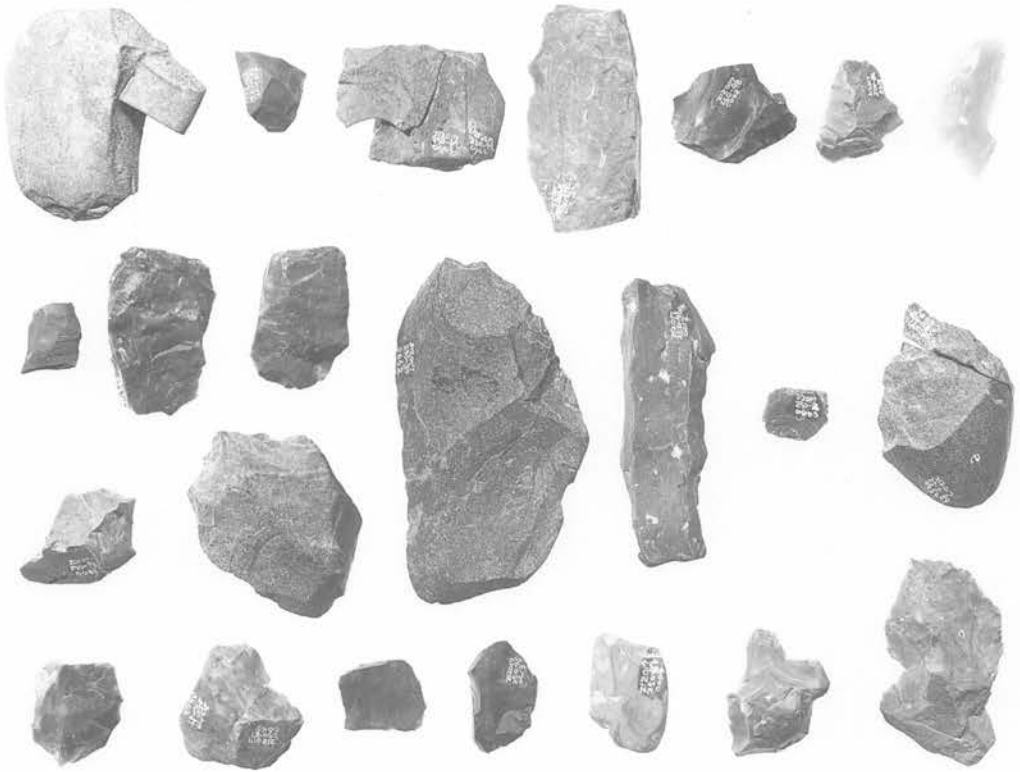
陥し穴状の土坑



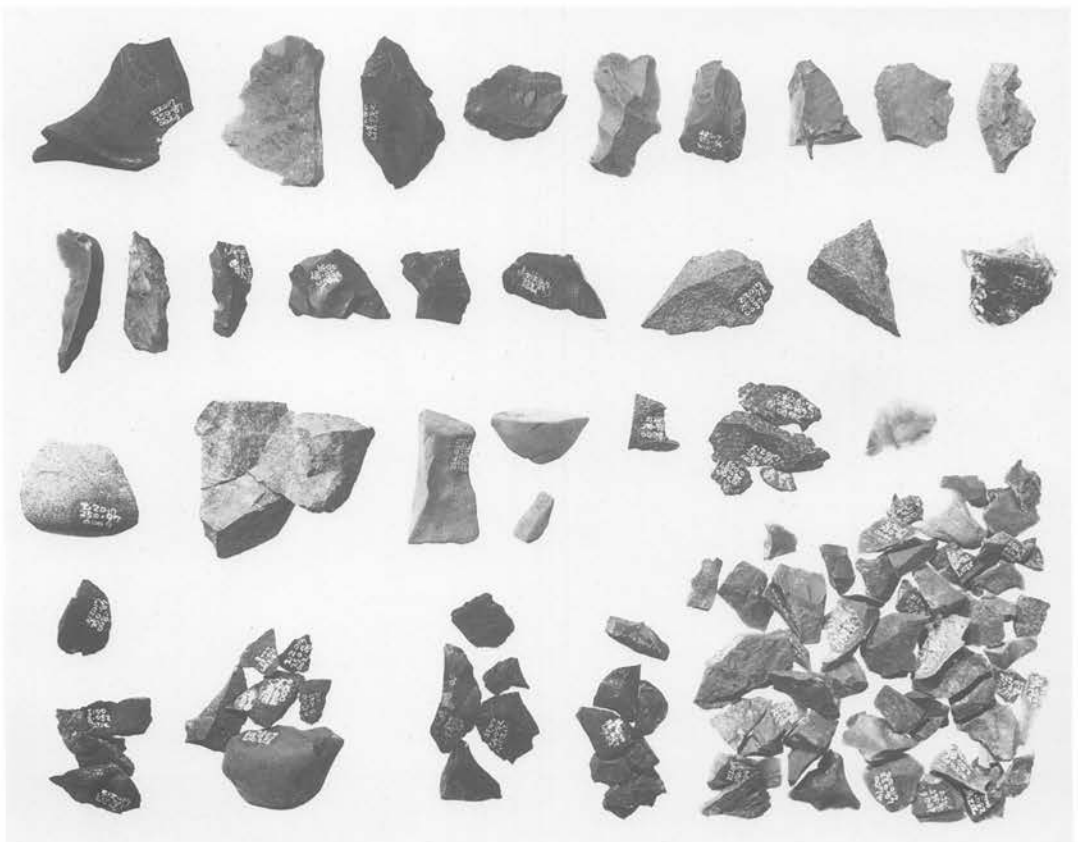
先土器時代遺物出土状況(1)



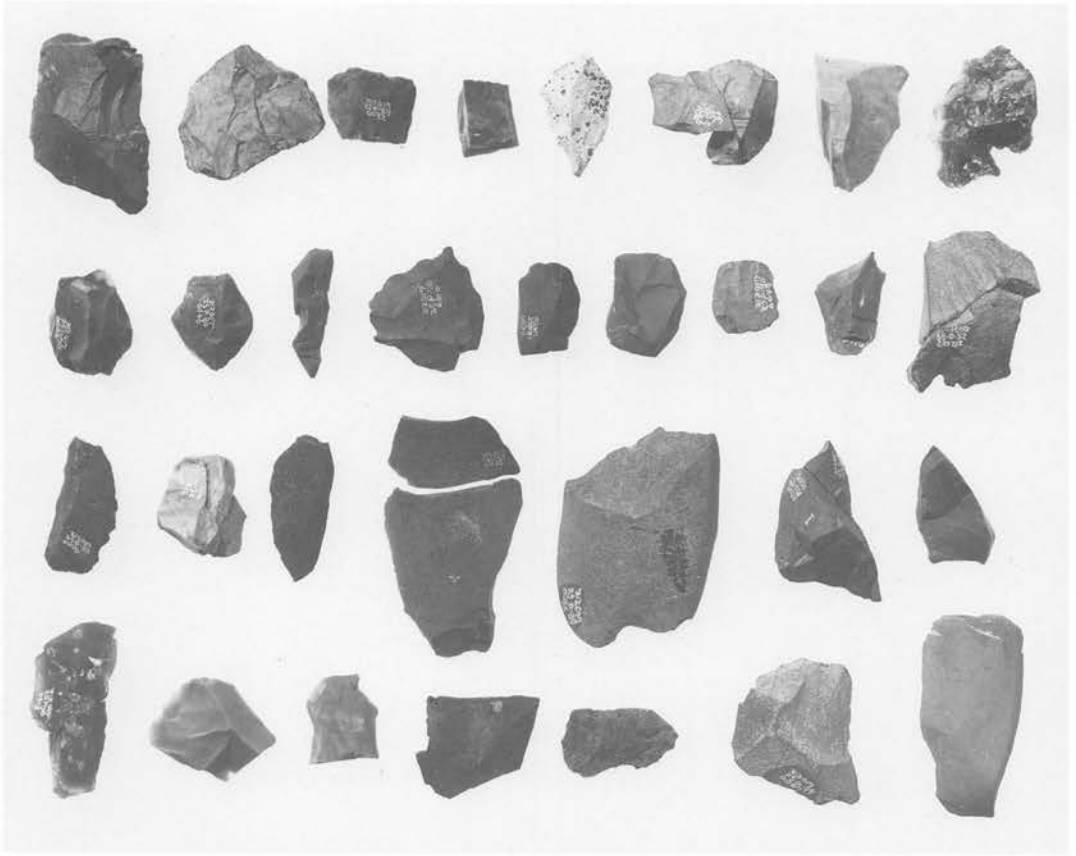
先土器時代遺物出土状況(2)



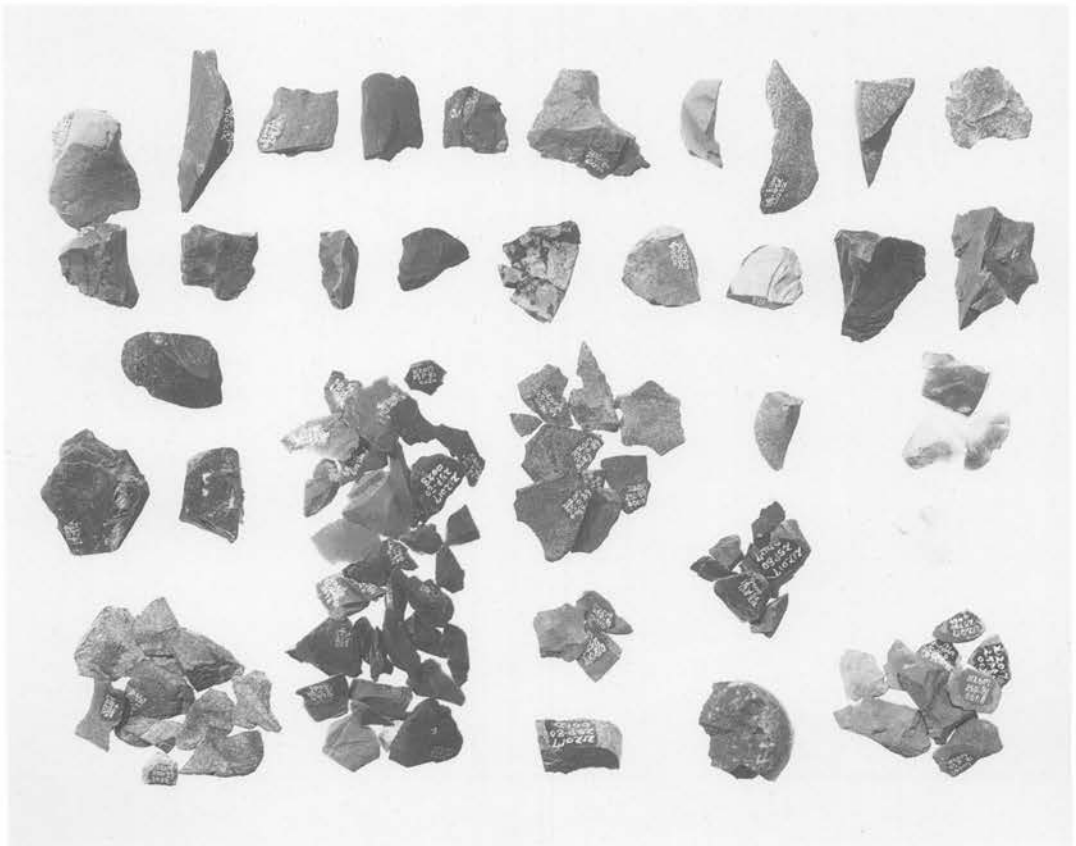
Aブロックの石器(1)



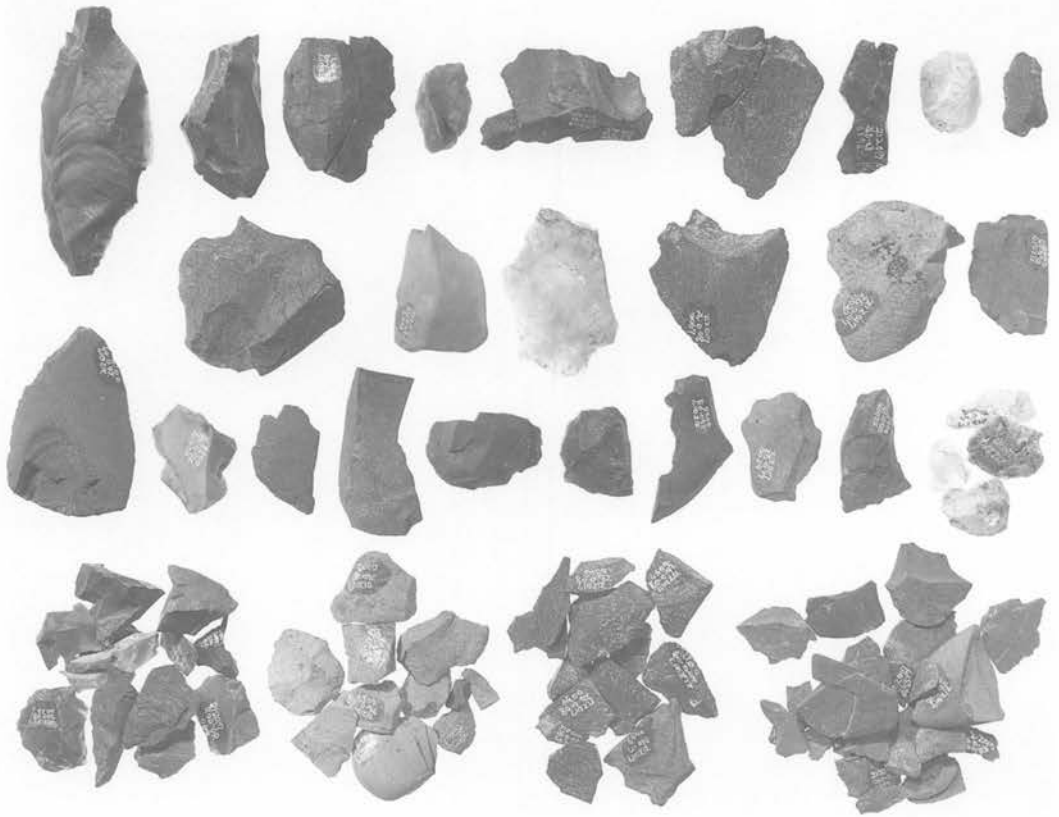
Aブロックの石器(2)



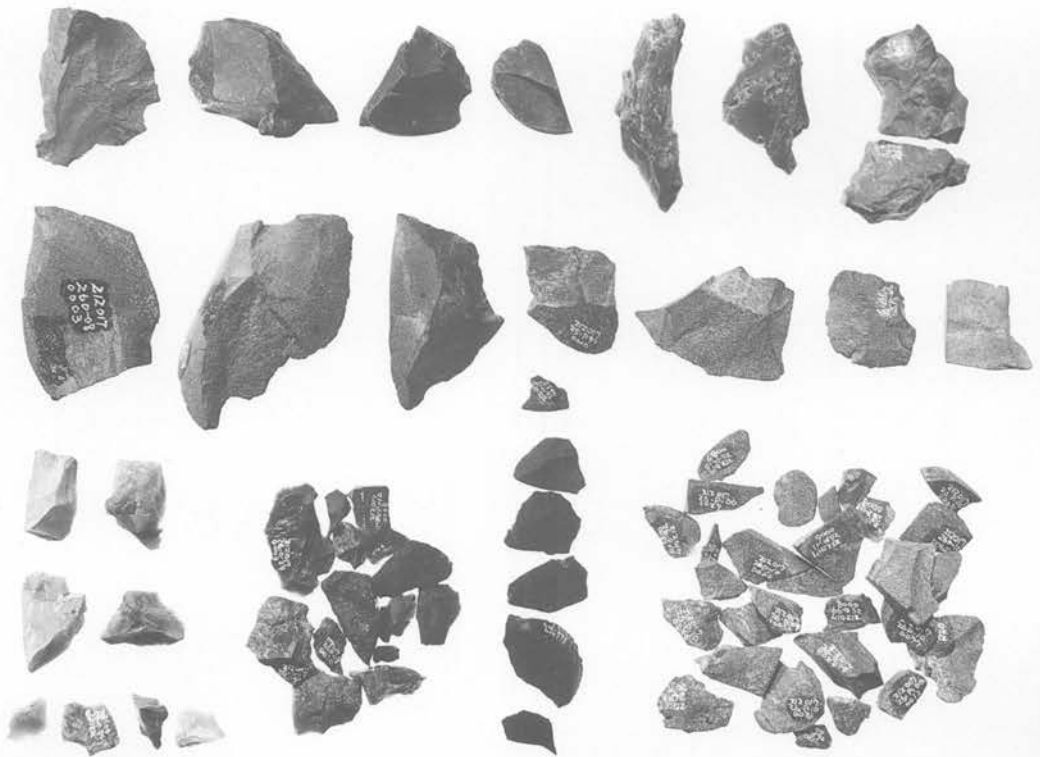
Bブロックの石器(1)



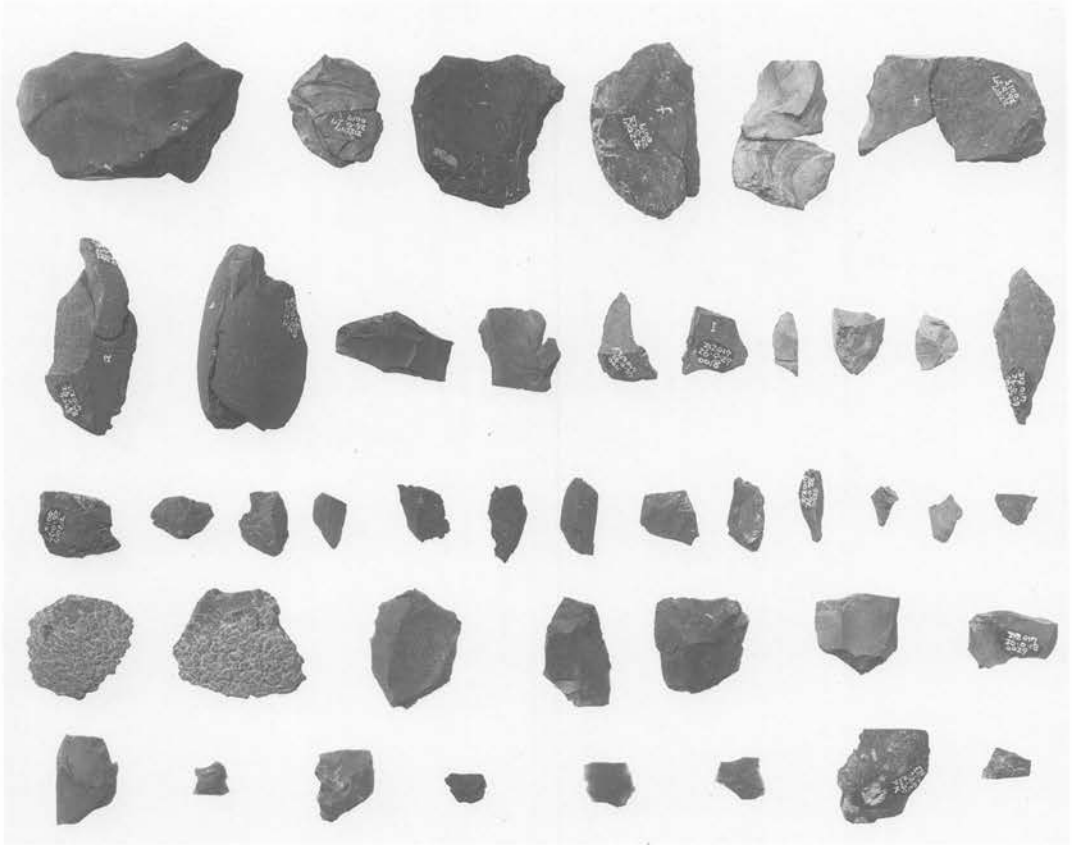
Bブロックの石器(2)



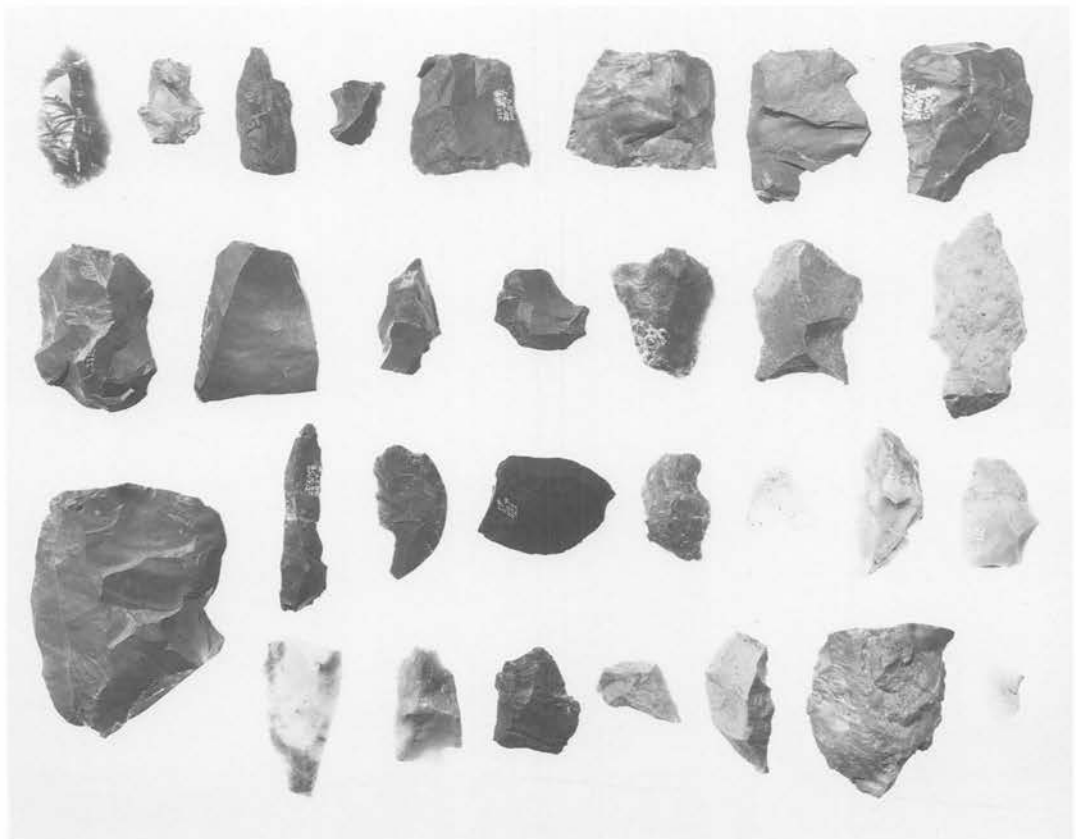
Cブロックの石器(1)



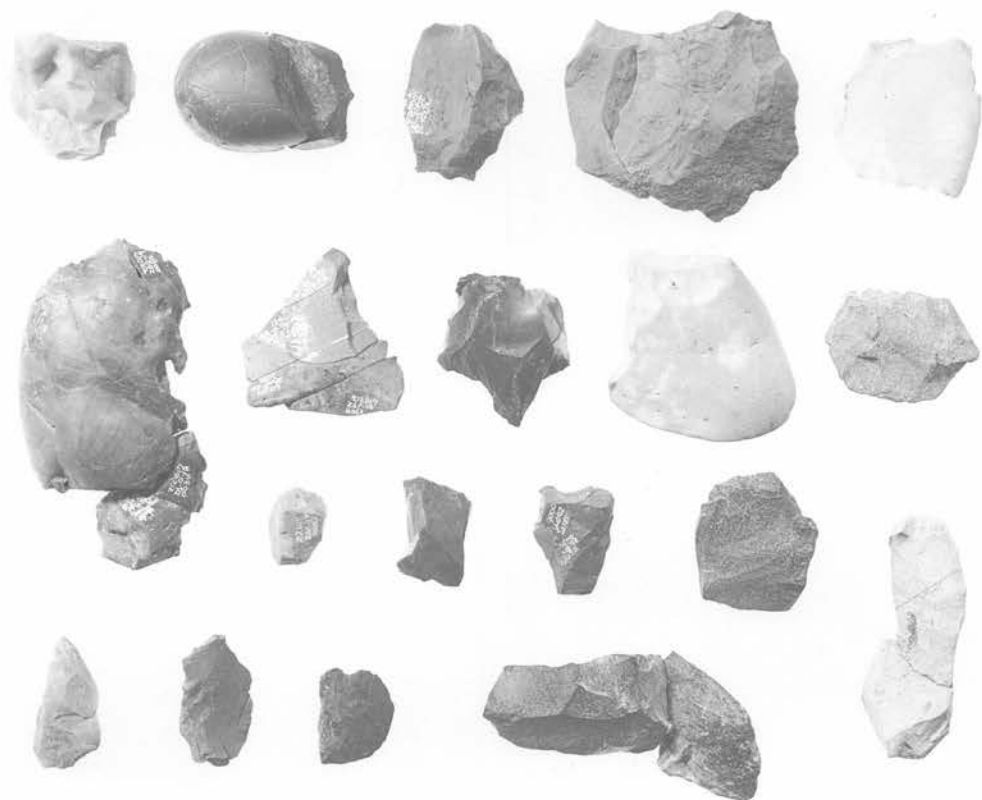
Cブロックの石器(2)



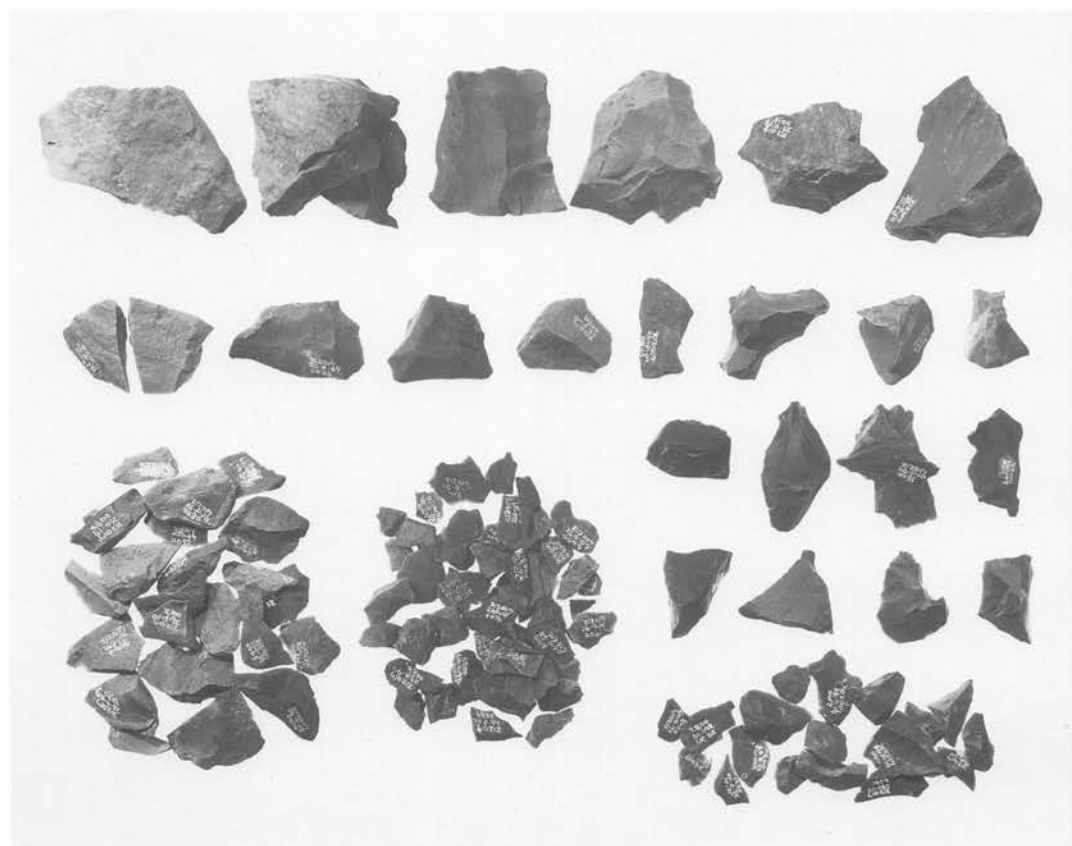
Dブロックの石器



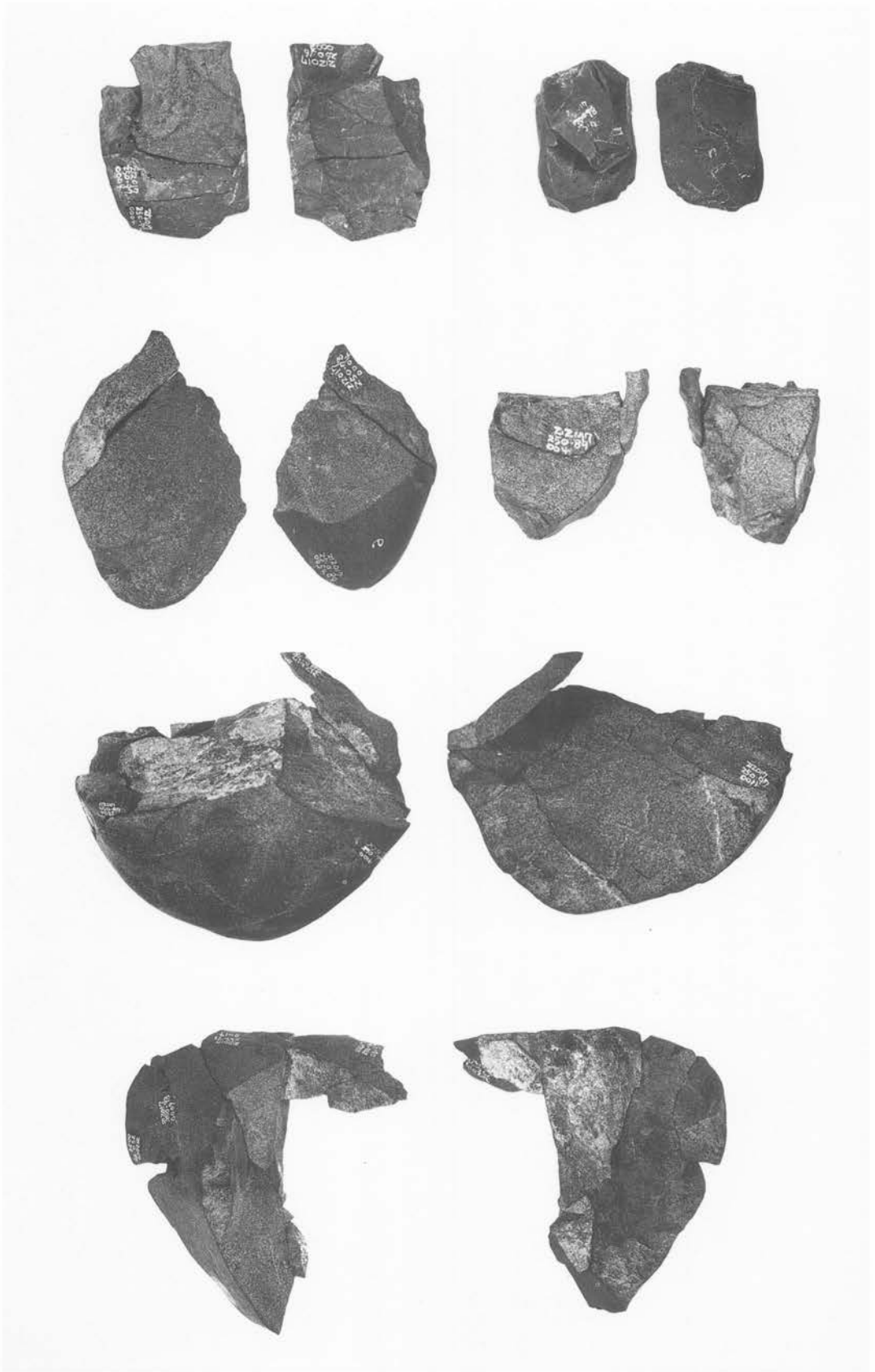
Eブロックの石器(1)



Eブロックの石器(2)

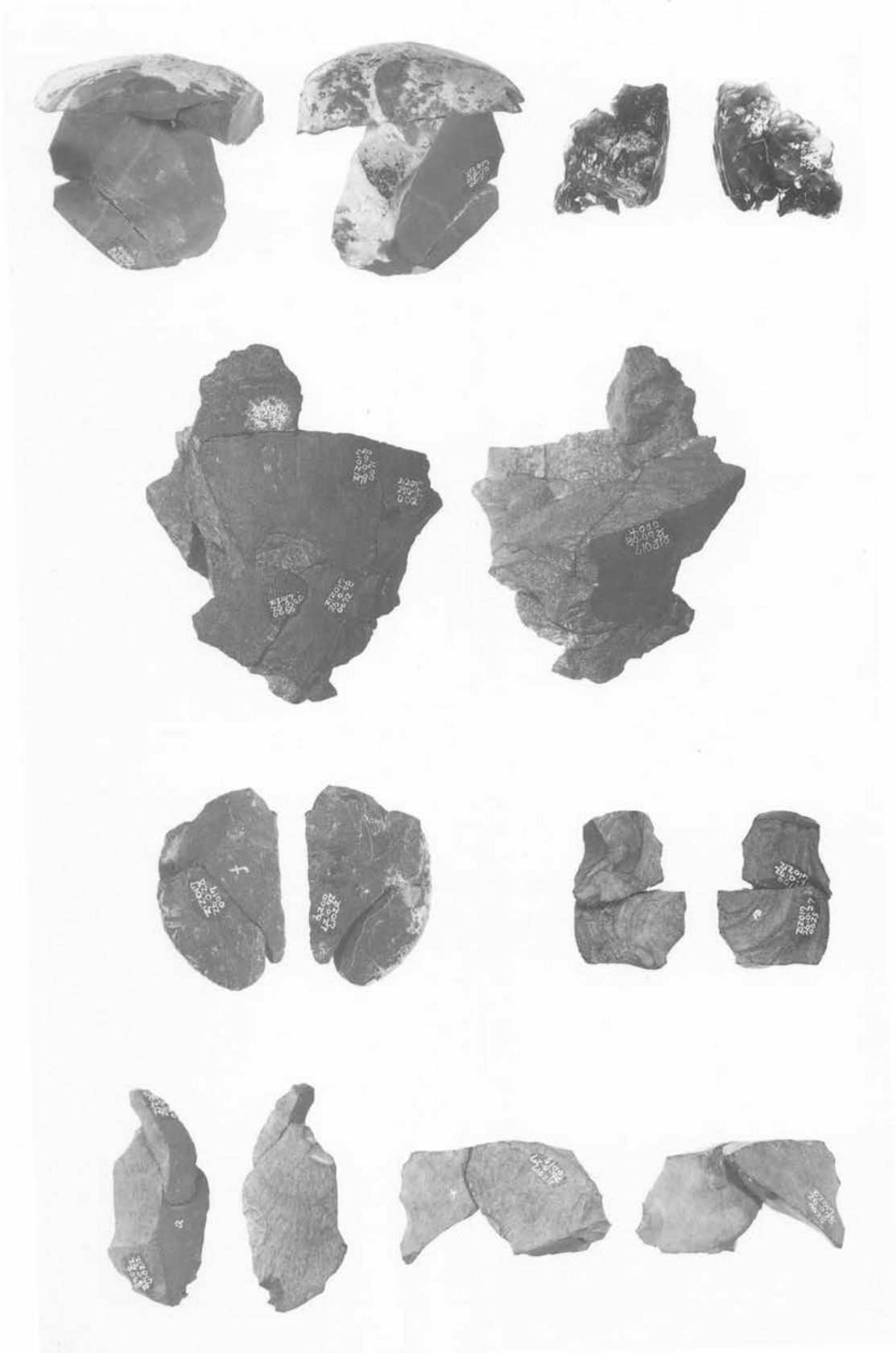


Eブロックの石器(3)



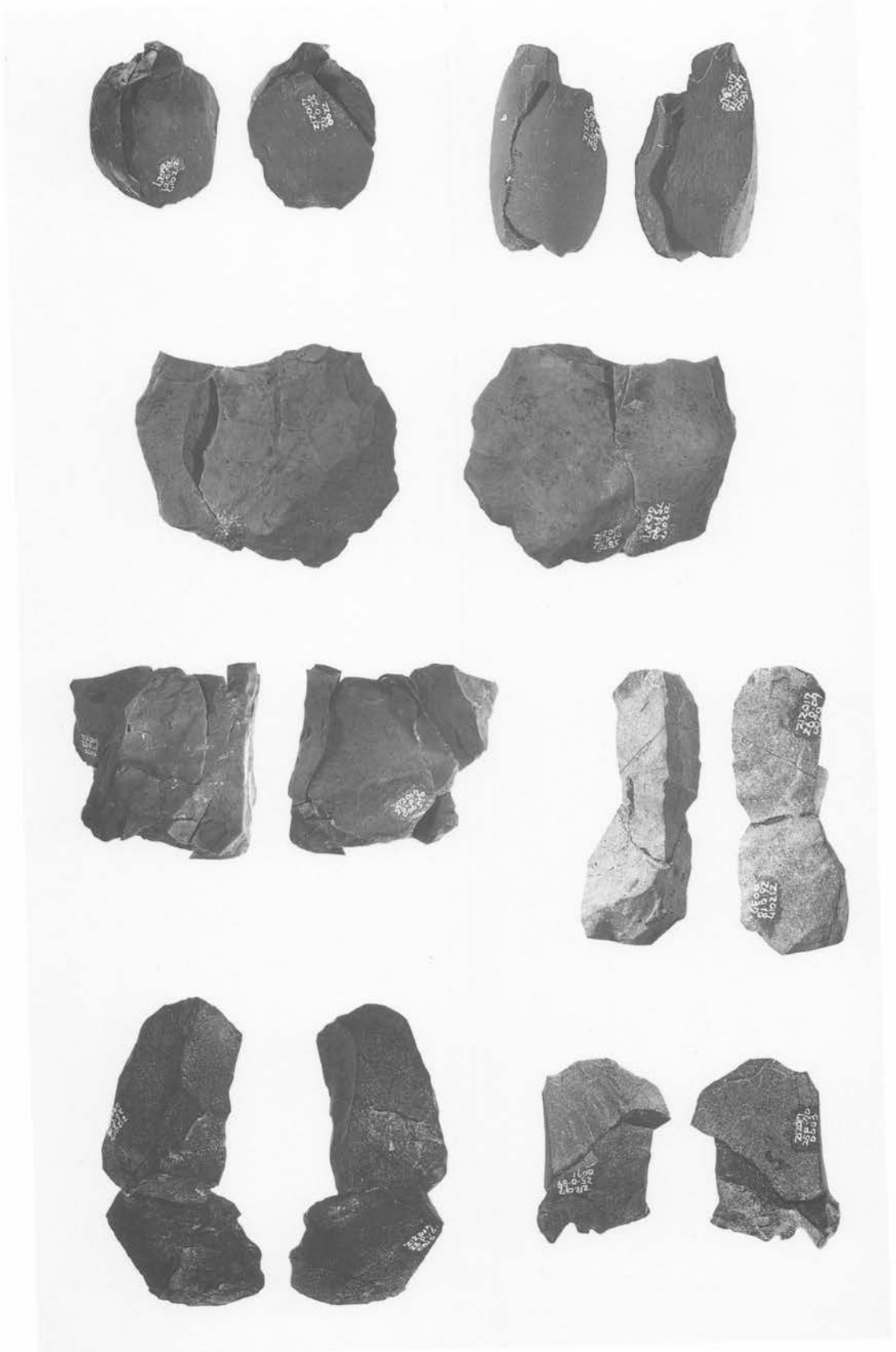
接合資料(1)

芋窪遺跡



接合資料(2)

芋窪遺跡



接合資料(3)